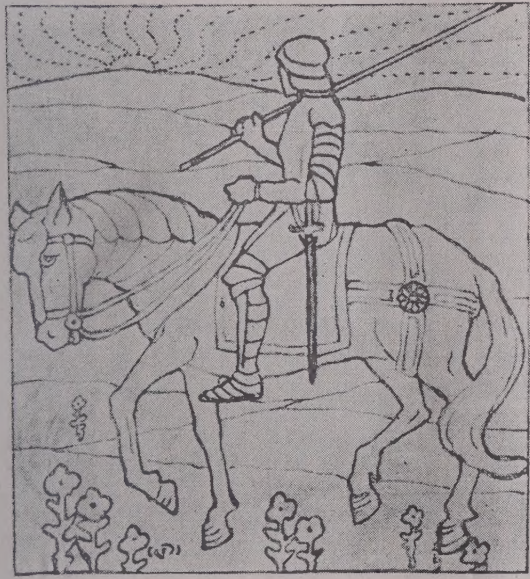


Library of the
PACIFIC UNITARIAN SCHOOL
FOR THE MINISTRY
Berkeley, California

388

六合雜誌



五
月
號

大正二年五月一日發行(每月一回一日發行)

THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 388. May. 1913.

CONTENTS.

Portrait of Richard Wagner	Frontispiece.	
Explanation of the Frontispiece.....	A. Naitō	1
Modern English Literature and its Religious Tendency.....	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	2
<i>Tanka</i>	R. Itō.	16
Intuition and Reason	W. Nomura	17
On Wisdom	S. Taketomo.	24
"La Princesse Maleine" (<i>par Maurice Maeterlinck</i>).....	A. Naitō.	28
How shall we Protect Our Rights	Prof. I. Abe.	52
Memorandum.....	R. T. O.	56
Record of Current Events.....		60
<i>Tanka</i>	T. Itō	63
All Sorts of Men in Trouble.....	B. Suzuki.	64
Bergson in America.....	Yūshiwo.	71
"To Tōkyō"	M. Sakamoto.	73
On the Seventieth Birth-day of Rev. C. Mac Cauley		77
The Science of Social Service.....	Rev. Dr. F. G. Peabody.	78
The Religion of Life	K. Katō.	82
Ellen Key and Mrs. Charlotte Perkins Gilman	Miss Y. Araragi.	85
"Faust" and its Philosophical Meaning	Prof. H. Minami.	90
"Fifteen Minutes" (<i>a play</i>).....	G. Yoshida.	97
<hr/>		
<i>Topics of To-day.</i>		
The Federation of Student Y. M. C. A. in Japan versus Tōitsu-Kristo—Kyōkwai	I. Aihara.	102
What is the Use of Y. M. C. A.?.....	S. Imaoka.	105
A Verbal Religion	A. Naitō.	108
Self-Contradiction of the so-called Evangelicalism	S. Uchigasaki.	110
The Message of the Y. M. C. A.	B. Suzuki.	111
On the International Question between California and Japan	B. Suzuki.	113
<hr/>		
<i>The Illustration</i>	S. Arita.	
Unity Hall Reports.....		
Books of the Month.....		

Published Monthly by the

TŌITSU KRISTOKYŪ KŌDŌKWAI,

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

始終神様に

近づいて

清い心を

持った者に

何の悪魔か

誘惑の手を擴げましよう。

朝夕ライオン歯磨を使つて

美しい齒を具へた口から

何で病の黴菌が入り込みましよう。





クレー・マツコウレー氏の紀念……………記者……………

社會奉仕……………ハアバード大學名譽教授……………エフ・ヂイ・ビイボデイ……………

生命中心の宗教……………加藤一夫……………

エレン・ケイとギルマン夫人の論戰……………欄よ志子……………

フアウストと人生問題……………一高教授……………三並良……………

大破壊前の十五分(劇)……………吉田絃二郎……………

時評

統一教會對青年會同盟交涉顛末……………文學士……………相原一郎介……………

學生青年會同盟無用論……………文學士……………今岡信一良……………

符號本位の信仰……………文學士……………内藤濯……………

福音主義者の矛盾……………文學士……………内ヶ崎作二郎……………

青年會の職分……………法學士……………鈴木文治……………

排日問題の根本的解決……………ふみはる……………

群衆心理(挿繪)……………有田四郎……………

◎四月の惟一館……………
◎新刊批評……………



六合雜誌第二十三卷第五號目次

ワグネルの肖像……………口
 繪の裏に……………ないとう繪……………一

本欄

現代英文學の宗教的情調……………早大教授 内ヶ崎 作三郎……………二	櫻咲くころ……………(短歌)……………伊藤 寥……………六	直覺と理性……………野村 隈……………七	智慧……………竹友 藻……………四	マレエヌ姫……………(メエテルリンク)……………文學士 内藤 濯……………六	權利擁護論……………早大教授 安部 磯……………三	メモランダム……………R……………T……………O……………美	海外思潮……………記……………者……………否	椿の島に……………(短歌)……………伊藤 悌……………三	人事相談所に来る人々……………法學士 鈴木 文……………四	米國人のベルグソン評……………ゆ……………し……………七	南國より武藏野まで……………坂本 正雄……………七
------------------------------------	-------------------------------	----------------------	-------------------	--	---------------------------	--------------------------------	------------------------	------------------------------	-------------------------------	------------------------------	---------------------------



新 公 論

五月一日發行(要目)

米國人の罪惡

宮崎湖處子

◎大阪の中心人物
◎未來を有する少壯新聞記者
◎高等商業學校出身人物の活動方面

中村諦梁
寒天落木樓
城北隱士

哲學なき日本の科學

醫學博士 永井 潜

◎日本人獨創の社會學
◎南米ブラジルに行ける日本移民の生活
◎解剖したる辯護士生活

文學博士 建部 遯吾
横山源之助
黑風生

日本赤十字社論

(伏魔殿の稱ある其内幕を抓擲剔刺す)

◎支那の『新しき女』
◎新しき藝人新らしき興行
◎新しき女の理想の家庭

成 軒
黄 羽
せ 人
子 織堂

狂人手記
トルストイ作
土岐哀果譯

萬報一覽
要點拔萃
内外雜誌

◎海外發展と富豪の覺醒
◎夫婦で法界節となり大阪を廻るの記
◎落語家の前座となるの記

西川光次郎
夫婦變裝記者
變裝記者

海外邦人の職業表

外務省最近調査



大正二年五月一日發行 六合雜誌 第三八十八號

口繪の裏に

百年前の今月二十二日には、北獨逸の都ライプツヒに、ひとりの偉人が生まれいでた。

偉人と云ふのは「タンホイゼ」や「バルジファル」をはじめ、多くの目ざましき樂劇を編んで、大いなる神秘の薫りを、歐洲全土の人心に注ぎ入れたリヒャルド・ワグネルその人である。この月この日、海のあなただの國々の樂人は、この巨匠の誕生百年を記念するために、それぞれの奏樂堂に集まり、管を磨き絃を張つて、花やかなる和聲の濤を、初夏の緑の風に漾はすことであらう。

私はワグネルについて多くを知らない。しかし、いつぞや上野の森の樂堂で、彼が名作「ロオヘングリン」の序樂を聴いたときの印象と、折にふれて讀み散らしたところのある彼が私生活の記録とは、私をして彼の官能主義が觸るゝ所を悉く焼きつくさねばやまないほど強烈なものであることを思はしめるのと同時に、また他の一面に於いて、彼は常に「萬物照應」の神秘を謳歌し、靈性の白熱を渴仰しつゝあつた人であることを思はしめる。今日の假面を冠むる道學者の群は、彼を純然たる官能主義者となして、倉皇視聽を掩ひ去るかも知れない。けれども彼は決して官能のための官能讚美者では無くて、官能を讚美した蔭には、いつも靈性の妙じき共鳴を響かせたことを忘れてはならない。いつも直感の蕭やかなるブレリユードを奏しつゝ、外形上相はなれたる事々物々々の間に、目に見えざる交渉を求めつゝあつたことを忘れ去つてはならない。

ワグネルの言葉を假りて云ふならば、藝術は彼に取つて、まづ第一に打ち勝つことのできない靈の世界を表はさなければならなかつた、思想と感情と無限、この三つを一つに溶かして、あの世の實在を指し示さなければならなかつたのである。(ないとう)

ない。吾人の宇宙萬象に對する批判力が、或は種々相に面する觀照の氣分が進化すると同時に、人生に對する吾人の興味も、萬有に對する吾人の憧憬も自ら擴大し、變化して來なければならぬ。是に於て宗教信念の發展或は宗教定義の擴張が必然的に發生すべきである。かく宗教なるものを廣義に解釋し、この進歩的宗教信念の上から判斷するならば、今日の英國文學はかのジョン・バヤン或はテニソンの時代にも劣らざる鮮かなる宗教的情調に彩られてゐるといふことが可能であると思ふ。少くとも英國を代表する現代の小説家、戯曲家、詩人等よりして一種の新らしき宗教味を取り去ることは不可能である。余は説明の便宜よりして現代の英文學を、散文、戯曲及び詩の三つに分ちて、順次鳥瞰的批評を試みやうと思ふ。但し散文といふ中には小説、論文等を含むこと勿論である。

二

先づ小説の方面に於てはトマス・ハアデー (Thomas Hardy) を挙げなければならぬ。老人ではあるがまだなか／＼評判のある作家である。殊にメレデスの死後英國文壇に重きをなしてゐる。が、この大小説家の宗教觀は極めて曖昧であつて、これぞと突つ込んだ宗教觀念を攫むことは出來ぬ。かれは一種の宿命論者である。人間の一生がみな運命に依りて編み出されたる境遇に翻弄せらるゝものであつて、人間には何等運命を開拓すべき自由もないといふのである。『有名なる彼の作『テス』に克くこの宿命觀が現はれてゐる。あはれなる田舎の女が境遇に弄ばれて、終に大罪を犯すに至る悲劇の筋道が英國の田園生活裡になだらかに書き込んである。殘酷な運命の力に戰慄しつゝ、しかも盲従しつゝ、引きづられ行くあはれなる個人の宿命を描いたものである。しかしこの作者にはこれ以外に宗教觀また



現代英文學の宗教的情調

内ヶ崎 作三郎

歐洲或は米大陸の何れかの一國をとりて、その國民文學に現はれたる幾百年來の種々の情調の裡から掬み出される、最も醇な最も力強い情調の一つは、その國民の血を通じて相傳へられ、或はその心胸に醗酵せられたる向上的憧憬の氣分、換言すれば一種の潑刺たる宗教的生命のそれでなければならぬ。英國文學の流れを溯りて、かのケドモンやサイチウルフの昔よりミルトンやバンヤン等を経てテニソンやブラウニング等の十九世紀に至る間、その殆んど凡べての時代を通じて、豊かなる宗教的情調の脉打てるを見ることが出来るのである。さて二十世紀英國文壇は尙ほ宗教的情調を有するか否かといふことはこれ亦興味ある問題である。

今日歐米の文學を説く人は、やゝもすれば、その文學に宗教的氣分の幻滅しつゝあることを、或は幻滅したることを斷言するのである。勿論宗教の定義如何によりては、この種の説明は必ずしも誤れるものではないかも知れぬ。しかしながら時は驚くべき變化を演じつゝあるのであつて、吾人の祖先が執着し、顛擁したる古宗教の香は、必ずしも永遠に同じ強さを以て芳烈の力を潜在せしむることは出来

覺的な説明の立ち場からして宗教辯護者の位置に立つてゐるのである。彼れはまた今日の宗教信念の傾向が、餘りに自由主義を叫んで終に統一する所なきを見、人間は自由を欲すると同時に束縛をも求むるものであると言つて、英國々教の保守主義の味方となつてゐる。而してまた彼れは『人間は土と神とから成つてゐる、土は絶えず束縛せられてゐるが、人性に内在する神なる靈火は不斷の發展と飛躍とに燃えてゐる』と言つてゐる。かくして彼れは自由主義宗教者の銳鋒を鈍らしめんとする。彼は又厭世的悲觀主義者に對しては次のやうなことを言つてゐる。『波斯の詩人オーマー・カイヤンは常に土窟の中に生活してゐた。そして其の言葉のみが唯一の眞理であると言つてゐる。此の最も悲慘なる壓世的詩人ですらも、その詩を作ることの努力に對しては、非常なる内部生活の緊張と、精神の愉樂とを感ぜずには居れなかつた。天來の靈覺が楚々として彼れの詩情を動かす時、彼れの意氣悠揚として、萬有悉く生潑、野の花と天空の清韻と悉く人生眞美の共鳴樂を感ずるのである』。チエスタトン齡未だ四十を出でず、これ亦大に將來を有する文豪である。

チエスタトンと並び稱せらるゝ者にベルロック (H. Belloc) がある。彼れは佛人と英人の血を混じたる人である。元來羅馬教徒であるが、オックスフォード大學卒業後、或は記者となり或は代議士となつたが、二黨政治を快しとせずして終に政界を去りて、今は日刊新聞モーニング・ポストの記者を勤めてゐる。ベルロックの論文や詩にも宗教的生命を明かに名指すことは出来ぬが、彼れの思想或は信仰の奥底を索めて見るならば其處にいさゝ小川の流るゝが如く靜かに咽ぶやうな呟きの一脉が、彼れの作を貫いてゐるのを發見することが出来る。而てその流れは羅馬教の信仰を離れ得ぬ思想の一脉である。彼れは積極的に宗教的生命を主張することはないが、彼れの作全體を通じてかすかなる宗教的情味が、

は宗教的生命を發見することは困難である。その他小説家にヂョルヂ・モアー (George Moore) ギッシング (Gissing) アーノルド・ベンネット (Arnold Bennett) 等錚々たるものがある。是等の人々は頗るゾラの感化を受けてゐるやうに思ふ。殊にヂョルヂ・モアーはゾラ直系の作者である。ギッシング及びベンネット何れも春秋に富み、其の頭腦はローマンチックの色調に加ふるに、豊かなる想像力を有つ多方面の作家であつて、兎も角長き將來を有する作家として矚目せられてゐる。しかし是等の人々にも亦醇なる宗教的情調を索むることは出來ぬ。これを要するに代表的小説家の方面に於ては、宗教的信念に燃ゆるが如き作家を見出すことは不可能であると思ふ。が、こゝに二人の論文家がある即ちチェスタトン (G. K. Chesterton) とウells (H. G. Wells) とである。この二人は論文家であると同時に、小説家としても亦相當の尊敬を拂はれてゐる。殊にチェスタトンに至りては口八丁手八丁の鬼才である。彼れはもと倫敦日々新聞 (Daily-News) の土曜號の寄稿者であつたが、近頃デーリー・ヘラルド (Daily-Herald) に筆を執るやうになつた。彼れはその容貌態度より見るも純然たる二十世紀のジョンソン博士である。嘗て倫敦の假裝行列で彼れはドクトル・ジョンソンに扮したが、當時非常な評判であつた。彼れは絶えずその堂々たる論陣を張つて基督教を眞ツ向から振り翳してゐる。彼れ獨特の諷刺と反語に富める評論を以て、宗教上の自由主義者、進歩主義者を攻撃して、屢々その反對論者をして彼れの鋭き警句の連發に完膚なきに至らしむることがある。例へば彼れは何の爲めに神を信ずるやといふ問に對して、信じ度いから神を信ずるのだと應へるのであつて、餘程人間の自然性に重きを置いてゐる。勿論斯くの如き見方は必ずしもチェスタトン一個の意見でなく、パスカルや、バトラーや、ジエームスの如きも既に彼れと同じやうな説明の方法をとつたのであるが、彼れは一層直

カア (Baker) ガルスウオルシイ (Galsworthy) 及び愛蘭士のイエツ (Yeats) 皆な鱗々たるものである。二十世紀は戯曲復活の時代である、隨て戯曲の研究は新英文學の主なる研究である。バアナアド・シヨウにせよ、ガルスウオルシイにせよ、ベーカーにせよ、最も吾等が鮮かに感ぜしめらるゝことは、彼等の凡てを通じてその態度が如何にも眞摯であることである。恐らく現代の劇作家の如く眞實な、誠實な氣分を抱いて筆を執つた者を過去に於て發見することは困難であらう。彼等の作物の中に髣髴として躍動しつゝある新しい、そして力強い一種の氣分は正義を索むる氣分である。しかもそれは社會的正義を攫さんとする努力の氣分である。ガルスウオルシイが嘗て『正義』(Justice) といふ劇を書いた。それが爲めに時の内務大臣のウインストン・チャーチルが監獄法を改正しなければならぬやうに餘儀なくせられたといふ事は有名な逸話である。又ベーカーの作『ウェースト』(Wage) を讀めば、一種犯すべからざる道德的精神が溢れてゐることに氣付くであらう。この方面に於て最も主張の明瞭であつて、且つその主張の堂々たるものはバアナアド・シヨウである。彼れは通俗基督教主義には反對であるが、しかし彼れは生いのちの力を高調してゐる。彼れをして言はしむれば、生いのちの力が發達して人間となつたのである。そして生いのちの力は更に深く、更に更に擴がつて發達するものである。その極は人間より以上のもの、即ち超人に達するものである。彼れはかく一面に生いのちの力を高調すると同時にその半面に於ては社會主義の人である。生いのちの力は我が一つの心に生きつゝある力であると同時に、社會のあらゆる人々の心の中にも生きて働きつゝある力であることを信ずるが故に、彼れは社會主義を主張するのである。しかし彼れは個人主義の哲學を無視したるが如き社會主義を主張するのではない。而て社會主義、殊に彼れの生いのちの力の立ち場に於て、最も重きを置くは婦人問題である。生いのちの力の顯現はその婦

例へば春の野を褻む薄霞のやうに彼れの思想の面を被ふてゐる。

ウェルス (H.G. Wells) は故と一科學者である。目下萬朝報に譯載されてゐる『八十萬年後の社會』は彼れの作である。彼れは愛蘭土人であると記憶するが、兎も角彼れはフェビアン社會主義主唱者の一人であつて、彼れの幾多の作は一種の社會主義の信念に燃えてゐる。彼れの作を通して吾々は餘り宗教味を索むることは不可能であるが、『二十世紀の豫想』(Anticipations of Twenty Century) の卷末の「新共和國の信仰と道德」にはやゝ彼れの宗教的信念を窺ふことが出来る。彼れの言を藉れば、將來の理想的社會人は宗教的人間てなければならぬ。宗教的人間とは理想の世界が實現せらるゝまでの幾多の自然淘汰に打ち克ちて、理想の世界が来る日まで生存する人てなければならぬ。意志の強い、目的の確かなる人てなければならぬ。自己の意志の強きを感じ、その意志は宇宙根本の斷片であることを信ずる者てなければならぬ。もし理想的社會が現はるゝならば、一つの系統、目的が整然として嚴存する社會でなければならぬ。そしてその社會に住む人々の信仰を區別すれば二つある。即ち宇宙万有は一つの寄木細工のやうなものである事、及び宇宙万有には目的があり、その目的は多にして一である事である。後者の信仰がなければ理想の社會は生れない。神の思想は餘りに偉大であるが故に、これを定義し、或は言語に表はすことは不可能であるかも知れぬ。さればこの廣義の宗教的人間によりてのみ社會的理想が經營せらるゝのである。



次に戯曲家として最も名あるは言ふまでもなくバアナアド・シヨウ (Bernard Shaw) である。ベヘ

Yawns yet unspanned,

Too long, that some may rest,

Tired millions toil unblest.

God lift our lowliest.

God save this land."

又新年の祈 (New Year's Prayer) の中より曰へ

"O Thou whose dwelling is eternity,

Who seest the hunger and the toil of men,

And how the love of life and wife and babe

Is brother of hate and sire of deeds and death;

Make terrible Thine arm against all thieves,

Whether in mart or on imperial throne;

And scatter with thy thunder the unjust

Who turn thy pleasure to a wilderness"

彼は義憤に燃えつゝある詩人である、豫言者の風格を帯ぶる文豪である。

次に數ふべきは愛蘭士のイエッ (William Butler Yeates) である。彼れは誦むからになだらかな優しい幻のやうな感傷的の詩を作つてゐる。冷靜な理性を以て歌はるべきものでなくして、人の心をそよめる夢の魅力を有つた、神秘的な、象徴的な詩が多い。彼れはその夢幻の權能を讚美して

"The dim wisdoms old and deep

That God gives unto man in sleep."

人に負ふ所太多いのである。男性は女性獨特の權威を承認しなければならぬ。人間とは神の事業の參與者の謂であると言つてゐる。嘗て彼れは言つたことがある、宗教家とは我れ以上の力によりて動かされつゝあることを直覺する人であると。彼れを見、彼れの生活を聞いたならば、如何に彼れが眞面目の人であるか窺はれる。彼れは實に一世の豫言者たるが如き態度を持し、常に世を憂ふるの大なる志士である。今日までの舊き宗教の定義よりして見ては、彼れは宗教家でないかも知れぬ。しかし常に新たなる宗教の立ち場から見れば、彼れは宗教的生命の衝動を自覺したる一世の豫言者である。

四

詩人にはリツドヤード・キップリング (Rudyard Kipling) がある。彼れは帝國主義の謳歌者であつて、彼れは極めて稀に宗教的氣分の溢れたる詩を作つてゐる。しかし彼れは今日予の此の問題に觸れてはゐない。ステブン・フィリップス (Stephen Phillips) も一時十九世紀末のシェレーとして期待せられたれども彼はその詩才煥發の絶頂を越えて人多く彼の名をいはず。又彼れにはとりとめて宗教的方面を見出すことは出来ぬ。

ワトソン (William Watson) は頗る詩人肌の男である、彼れは時々宗教味の懷しい詩を作つてゐる。その『新しき國歌』に次のやうなことを言つてゐる。

“Too long the gulf betwixt

This man and that man fixt

Saving in their own heart. Seek, then,
No learing from the starry men,
Who follow with the astic glass
The Whirling ways of stars that pass—
Seek, then, for this is also sooth,
No word of theirs—the cold star-pane
Has cloven and rent their hearts in twain,
And dead is all their human truth.

Dream thou!

For fair are poppies, on the brow :
Dream, dream, for this is also sooth."

と歌つてゐる。現代の科學、物質の文明に囚はれたる人々の間より出て、彼れは九阜の天に翔るが如き奔放なる夢幻的の氣分を味ひ盡したる詩人である。人間の智識が未だ説明することの出来ぬ神秘、直覺、幻影の境に參して、彼れは天上の高さに、神韻の深さに、夢のなかなる夢を探り、美のなかなる美を索ねて、新しき生命の源泉を開拓しつゝ常に新たなる生命の光耀を讃美しつゝあるのである。また『二本の樹』(The Two Trees)には次のやうなことを書いてゐる。

"Beloved, gaze in their own heart,
The holy tree is growing there ;
From Joy the holy branches start,
And all the trembling flowers they bear,

と誦つてゐる。彼れは愛蘭土のケルトの血を豊かに受け繼いでゐるのであるから、殆んど狂的だと想はれるまでに、濃密な感傷の人である。『黄昏時』の中の

“Come, heart, where hill is heaped upon hill :

For there the mystical brotherhood

Of Sun and moon and hollow and wood

And river and stream work out their will ;

And God stands winding his lonely horn,

And time and the world are ever in flight;

And love is less kind than the gray twilight,

And hope is less kind than the dew of the morn.”

を見ても如何に彼れがその自然の裡の幽玄なる神秘の力に驚歎しつゝあるかゞ知れる。小ひさな小山の頂きには、太陽と月と、森と、小川の神秘的な現象が天地萬有の本體の顯現として、朝な夕な如何ばかり靈しき讃頌の歌を奏てつゝあるのであらう。彼れにとりては黄昏ごとの灰色の静けさは人間の世のうら若き戀にもふたり、かはたれ時の露の小徑は人寰の耀やけき金冠の希望にも優れて懷しき友である。彼れはまた『幸ある牧羊者の歌』(The Song of the Happy Shepherd)の中に

“Then nowise worship dusty deeds,

Nor seek, for this is also sooth,

To hunger fiercely after truth,

Lest all thy toiling only breeds,

New dreams, new dreames ; there is no truth

The Limits of our mortal life

One his, the whisper thrill.

Under the seas perpetual strife,

And through the sunburnt hills."

といふ一齣がある。花が咲き花が散る時に、そこに、神の犠牲が潜んである。宇宙萬有悉く神の犠牲によりて生けるものである。彼れに従へば萬象一として神の尊き犠牲によりて購はれざるものはないのである。昨秋或學者が生命の物質的起原を唱道した時に、彼れは直ちに "Origin of Life" と云ふ詩を作つてこの科學者の説に應へた。渾沌たる劫初界よりして生命が生るゝの起原には、人間より以上、或るものゝ力の存在を認めなければならぬといふのが彼れの主張であつた。一青年の身を以て彼れは當代の科學者に對しても、一世を指導するの態度を持つことを忘れなかつた。昨年十二月倫敦の「基督教社會」の一記者に付て彼は詩人の本領について談じた。『詩人は事象をその中心から見、或は觀察するのである、觀察と言はむよりは寧ろ感ずると言ふ方が一層適當であらう。宇宙萬有がいみぢき調和の鎖に結ばれつゝあることを直感するのである。彼れは平凡なる事象の裡に永遠性を關係せしめて直感してゐるのである云々』と言つてゐる。

ジョン・メースフィールド (John Masefield) はかのトマス・ハーデーが社會にその詩材を撰んだと同じやうに、絶えず貧民の悲惨な實生活を詩材としてゐる。彼れの此の種の詩は昨秋俄かに英國の讀書界の一異彩として認めらるゝやうになつた。「バイ街の寡婦」(The Widow of Bye Street)のごとくはトマス・フーアの「下襦袴の歌」に匹敵するといはれる。強ひてその缺點を言へば、個人の運命が如何に社會

The changing colours of the fruit

Have dowered the stars with merry light;

The surety of its hidden root

Has planted quiet in the night;

The saking of its leafy head;

Has given the waves their melody

And made my lips and music wed,

Murmuring a wizard song for these."

顫ける木葉の片々よりそこり来る哀傷の音楽、暗の力に生れ出でたる梢頭の黄金菓、色さま／＼の芳烈なる花の香が如何ばかり、感傷詩人の繊細さ心絃をわな／＼かしたでもあらう。

次に英國で若くして、しかも最も世間に受けの良ゐのはアルフレット・ノイズ(Alfred Noyce)である。彼れが早晩月桂詩人となるであらうといふことは一般の定評である。オックスフォードのエギゼター・カアレツヂにゐたが、卒業せずして社會に出た。彼れは當年三十二歳の青年である。彼れには『古日本の花』といふが如き東洋に關する詩もある。一面に於て彼れは頗る愛國心を讚美するの精神をも有つてゐるが、要するに彼れも新しき感傷派の詩人である。それと同時に宗教家的豫言者の氣分をも現はしてゐる。昨年のクリスマススの少し前發表した詩に

"In flowers and dust, in chaffs and grain,

He binds himself and dies!

We live by his eternal pain,

His hourly sacrifice;

が潜んでゐることを發見するであらう、現實に囚はれたる者は現實の皮相にのみ立ち停らなければならぬ。現實の奥底に流るゝ生命の威力を攫むことは、たゞ超現實の靈光を直感したる者にのみ與へらるゝ特權である。

この世の中には、人に神さまが解らないほど、ます／＼神さまがおいでだ。深くはありながら混雜した輕はづみな理屈だてをして、人間が神さまの説明のために時間つぶしをするのは、血だらけになつた裸體の基督を信仰と愛とが世間に擔ぎ草臥れる時なのだ。ところが神さまは、人間が一生懸命に、そんな狡猾と高慢とを繋ぎ合はせるのを見て笑つておいでだよ。人間が立論の巧拙に従つて、言葉や經文で下らない取引をしながら、神さまと云ふ一つの名に相場をつけるのは、神さまの御心に背くのだ。神さまは人間の智慧の届かないほど、高いところにおいでだ、その高さを定めたり、その深さを定めたりするのにはあまりに廣く、さうで無ければあまりに大きくておいでなさるよ、あまりに深くておいでなさるよ。たゞ聖者と云はれる人が、愛と犠牲と熱情との烈しい消魂の境に飛び込んだとき、神さまのお心まで登りつめたところがあるばかりだよ……ヴェルハアレンの戯曲『寺院』より

組織或は政治機關に關係してゐるかを説明してゐない所にあると思ふ。この缺陷を補ふに足る詩人は恐らくギブソン (W. Gibson) であらう。

オックスフォードのチエーチ老博士の如きはギブソンを評して、現代を批評する社會的詩人であると言つてゐる。個人と社會の關係を論ずるに足る素養と見識とを有する詩人である。余はこの詩人の作を多く讀まぬから、余の意見を附することは出来ぬ。

五

以上極めて雜然たる順序と説明とを以て、現代英文學の宗教的情調の一般を述べた次第である。これを要するに新英文學の宗教的情味は必ずしも醗酵されたるものでもなければ、或は濃密なものでもない。一面太だ心細いやうな形勢もないではないが、其の眞摯であり、根柢ある主張であることは否む可からざる事實である。宗教といふ名を冠すべきか否かは別問題として、兎も角彼等が物質の壓迫を超越したる靈界の將來に向つて憧憬し、若悶し、その眞實在の根原に入りて永遠性の生命力を攫むんとする努力は新英文學の著しき傾向である。

サア・ウキリアム・ラ・ムゼーの化學上の實驗に依れば物質はエネルギーの變化に過ぎずと定義することが或は可能であると言はれてゐる。エネルギーとは畢竟生の力でなければならぬ。斯くの如く科學すら物質の根本實在として、生命の靈力を肯定し、發見せんとする今日に當りて、吾人は何時までか顯現假相の物質界にのみ囚縛せられねばならぬのであらうか。日本の思想家殊に藝術家が最少し英國文學の近狀を徹底的に研究して見たならば、その裏面に何物か、物質、現實以上の力強い實在の力

直覺と理性(上)

野村 隈 畔

一
一たびアンリ・ベルグソンの哲學が世界の思想界を振盪してから、全く精神界の空氣が激變したやうに感ぜざるを得ない。恰も大旱魃の時に、庶民鶴首睥睨して速に雲霧の天涯に現れて來るのを渴望するに際し、黒雲油然として忽ち四方に塞がり、沛然たる驟雨はザワ／＼と暑い地上に降り注ぎ、奄々たる草木は油然と勃起するやうに、それと同じく我々の精神は彼の哲學の神秘なる魔術に遇ひ、從來の思想感情は悉く洗滌され清涼にされたやうな、實に生き／＼した力に充ちた爽快な氣分がするのである。思想界は全く新しくなり、我々は未だ嘗て考へなかつた所の新しい生きた或るものをシカと捕捉^{つかま}へ、言葉に云ひ盡されない喜びと希望とを以て、新しい光明而も神秘的な光明に向つて歩みつゝあるやうに感ずる。そは何故かと云ふと、ベルグソン哲學は從來とは全然異^{ちが}つた方法

に由りて、先人未發の幽境を如實に、我々の眼前に展開して呉れた様に思惟するからである。然らば新しい方法^{メソッド}とは何であるか、それは先天的に超經驗的に絶對眞理を認識する所謂直覺的方法^{インチュイティヴ・メソッド}である。前人未發の幽境とは、無始より無終に流れてつぎない生命を中心とせる形而上學^{メタフィジックス}である。かくの如きベルグソン哲學が現代の思想界を風靡して居るから、何うしても現代人たる我々は、哲學と云へば必ず生命中心否生命直覺でなければならぬ、從來の唯心論や唯物論は悉く誤謬であると考へ。また哲學研究の方法は必ず直覺的であつて、悟性や理性等の推理作用は、到底眞理實相を認識することは出来ないものであると云ふ様な考へを懷いて居るのは當然である。

併し乍ら直覺的方法と生の哲學は果してベルグソン獨特の發見であらうか。從來の哲學的方法と



櫻咲くころ

伊藤 寥々

古りにたる病院の庭に咲くくら塵にまみれてさく花ざくら
 石灰の倉がつゞける土手の邊に櫻さきけりいたましさかな
 町中を直につらぬくどす黒き水にも櫻ちりて流るゝ
 ふやけたるたなごころもて幹をうつ湯屋のかへさの花の下みち
 打たれつゝ口ゆがめたる馬の眼に胸そごるなり幸ある身かな
 窠にかへる蜜蜂のそのいとちささ肢につけたる花粉の色かな
 かたくなに人の子を議す法官のひげに袂に春風ぞ吹く
 ふみさながらよき人とある心地すれ月落ちかたの窓のしどまに
 今日もまた古りにし服を身につけて何とは知らず安き思ひよ
 首かしげてわれを見つめし犬ころの眸に映るうき面わかな

では、人間の理性や感情などの評價或は判斷或は計量等を用ふることなしに、先天的に善惡正邪の價值を直覺し得ると唱へ、認識論上では感覺の形而下的經驗や、理性の辯證的推理を俟たずして、全く直接に宇宙の本體または第一原理を認識し得ると主張するのである。されど吾人の思索は直覺論の眞理を許容したと同等の確實を以て、ロツク一派の經驗論にも眞理のあることを認めざるを得ないのは、否定の出来ない經驗ではあるまいか。何故に人間と云ふ個性的實在の作用である機能を、一は絶對的であるとし、一は相對的であるとするのであるか。その理由が少しも明白でない。またカントの哲學でも形は全く分析的論理的であるが、出發點は先天的直觀(Transcendentale Anschauung)である。彼が認識の形式としてあげた直觀の形式(Anschauungsform)即ち空間と時間、^{ツァイト}及思维の形式(Denkform)即ち十二範疇は、悉く先天的超經驗的である。故に是等は直覺的に知るのであつて、經驗や推理判斷に由るのではない。カントは時間空間や範疇に就て極めて煩瑣な説明をして居るが、これは唯認識の二つの形式が元來

先天的直覺的であることの理由を説明し論證したもので、決して形式そのものの、積極的説明ではない。形式すら尙ほ積極的説明を絶する。況んや物それ自身の本質をやである。故にカントの立場にありては形而上學は到底成立しなかつた。實に物それ自身の存在の直覺(要求)は、カント哲學の終局點であつたのである。然るに近來は眞の哲學形而上學は、物自身の直覺から初まらなければならぬといふ自覺が出た。これが終局點でなくて却て、その出發點でなければならぬ。この意味に於て、シヨープンハウエルやベルグソンの哲學は、眞にカントに一步を進めたものと云ふべきであらう。乍併物自身の直覺を以て哲學の出發點と爲すとは、何を意味するか、是れが將來に於ける哲學の解決問題である。

東洋の思想は元來直覺的、詩的である。猶太思想でも印度思想でも支那思想でも、悉く直覺的である。故に東洋には古來偉大なる哲學系統(佛教は別として)は出現しなかつた。隨て學問の進歩は殆んど無かつた。佛教哲學にした所で、古代に著しく發達したまゝで、後はあまり進化はなかつた。

して一般に使用されて來た論理的推理作用に基づく認識は、全く誤謬幻影であらうか。是れは實に重大な問題である。

もしベルグソンの主張を以て悉く眞理であると盲信せば、別であるが、苟も一個の未成品たるに過ぎない以上は、まだ研究の餘地が充分ある問題であると思ふ。歷史上から云へば直觀は決して新しい發見でもなく、珍らしい方法でもない。

由來哲學なるものは其根底に於ては皆直覺的悟入的であつたことは、古來東西に現出した多くの哲學に徴しても明かな事實である。かの最も深遠であり高莊であり雄大であると謂はるゝ世界の三大哲學、即ち印度の卽波尼焦曇哲學、希臘のプラト、アン哲學、獨逸のカント哲學などは悉く直覺的、觀念的、先天的哲學であることは、今更説明を要せないことであらう。而も是等の哲學は孰れも、煩瑣なる形式的論理的作用に由て、整然たる體系組織を構成して居るのである。

換言すれば古今の偉大なる哲學者は、皆分析的計量的である理性作用を假りて自己の哲學を實際的に組み立てたのである。かゝる理性のプログラム

テイクな作用は、決して直覺のやうに本體それ自身を積極的に如實的に表現し得ないと云ふことは明かに認めて居るが、さればと云つて之を全く誤謬である、虚偽である、幻影であるとして排斥しなかつた。即ち彼等は信賴して經驗に訴へ理性に談じ、或は歸納法とか演繹法とか、または辯證法とかを煩はしく應用したのである。生命や創造力や持久性などの認識は、直覺に由らねばならぬと云ふ考へは、獨りベルグソンのみではあるまい。ヘーゲルでも、シヨウペンハウエルでも、スピノザでも、皆左様に感じたのであらうが、直覺のみでは全く説明はつかない、唯主觀的沈黙に終つて了ふから、そこで止むを得ずかゝる認識に客觀的妥當性と普遍的確實性とを附與せんとするブラグマテイクの要求から、いろ／＼の名辭言説や煩瑣な論理法を用ゐざるを得なかつたのであらうと思ふ。

三

西洋の思想界においては殊に近世に、直覺主義なる一派の哲學運動さへ起つた。是れは倫理學上

りて眞理を説くのを方便假説と云つて、極力空理辯證を排斥した。眞理實相は本來名字を離れ、色相を離れ、言語を絶するものである。この眞理はよくかの有名なる一休和尚の母の手紙の中に現れて居る。「釋迦達磨をも奴となし給ふほどの人になり給ひ候はゞ、俗にても不苦候。佛四十餘年説法したまひ、終りに一字不説とのたまひし上は、我と見、我と悟るが肝要に候——かへす——も方便の説のみを守る人は糞蟲と同じ事に候、八萬の諸聖經をそらに讀みても佛性の見を磨かずむば、此文ほどの事も解し難かるべし」と、中々雄大で而も深遠な文字である。佛陀が沙羅林外の梵志、須跋陀羅に、告げた言葉は、實に印度思想の精髓を發揮して居る。

『須跋陀羅よ、非想非々想は猶名けて想となす。

涅槃は無想なり。汝が師の鬱頭藍は利根聰明なれども、非想非々想を訶責することを知らず。

故に惡身を受けたり。況んやその餘のものをや。一切の諸有を斷たずんば實相を見ること能はず。實相は無相の想なり。無相の想とは、一切の法は自相他相及び自他の相なく、法の相なく

非法の相なく、有相なく因相なく、果相なし、これを眞實の相と云ひ、これを法界と云ひ、これを畢竟智と云ひ、これを第一義諦と云ひ、これを第一義空と云ふ』（涅槃經）

言ふことに理を盡して居るが、體は未だしてある。即ち百尺竿頭更に一步と云ふ所で物足りない感じがする成る程、眞理實相は離言絶語である、如實空である。併し所謂如實空は決して虚無の謂ではない、寂靜の謂ではない。如實空を説く權大乘は猶進んで、如實不空を説かねばならぬ。充溢法動を認めなければならぬ。これが實大乘の本旨である。馬鳴はその著大乘起信論に於て、此の意を説いて居る。

心眞如とは即ちこれ一法界の大總相、法門の體なり。所謂心性の不生不滅なり。一切の諸法はたゞ妄念に由て差別あり。もし心念を離るれば則ち一切境界の相なし。是の故に一切法は本より已來、言語の相をはなれ、名字の相をはなれ、心縁の相をはなれ、畢竟平等にして變異あることなし。破壊すべからず。唯この一心、故に眞如と名く。一切の言説は假名にして實なく、

然し一つの特色がある。それは東洋思想は直覺的であると同時に、實踐的であると云ふことである、その證據に東洋には極めて實行家が多いのである。論理的認識を好むものは何うしても思索研究に流れ、直覺的悟入を喜ぶものは何うしても實踐的躬行を專一とするのは、自然の傾向である。西洋では思惟と實行とを全く別にして居るから、自ら倫理學者と道德家、神學者と宗教家、哲學者と哲人と云ふやうな妙な對立があるが、東洋では古來此の二者は全く結合して居つた。即ち學者即實行家である。これが學問の進歩を妨げた最大の原因であらうが、また、理論よりも實行を重んじた美しい特色である。勿論直覺は思索のやうに單なる空想の論理的連鎖を辿ることなく、非常なる意志の努力或は本能の働きと云ふものを要するのであるから、自然潑瀾たる動作或は創造に現はるのであらう。例へば禪的修行も一例であらう。

動物にありては、直覺と本能即ち活動とは殆んど區別しがたいのである。兎に角、西洋では主として思想を貴び、東洋では實踐即ち無言の行を貴ぶのである。

この相異は事物の説明に於いても著しく現はる。西洋では簡單なるものを成る丈け、六ヶ敷く、面倒に、分拆的に、且つ論理的に煩瑣な説明をなすに反して、東洋では出来る丈け、アツサリと詩的に直入的にやるのである。例へば善の説明にしても、西洋では合理的行爲であるとか、または最大快樂を得る行爲であるとかと八釜しく言ふが、東洋では『欲すべき、是を善と謂ふ』(孟子)で解つて居る。また西洋には良心の起原などいふ問題があつて、經驗說だの先天說だの、遺傳的進化說だのがあつて中々六ヶしいが、東洋では『誠なるより明かなる之を性と謂ふ』(子思)の詩的一句で、昔から満足して居つた。殊に西洋の宇宙觀と云へば極めて複雑なものであるが、東洋では『柳は縁、花は紅』の妙句に其の蘊奥が盡きて居る。

四

今しばらく佛教思想を藉りて此の特色を説明するに、不立文字、以心傳心を標榜する禪の如きは殊に直覺的本能證悟的である。元來佛教の眞髓は一字不説にあるので、凡べて名字に由り言説に由

覺を以て、形而上學の終局點と見做し、或は見做さざるを得なかつたのを、ベルグソンは却てその出立點と爲して、斯學に一進路を開いた所にあるのではないかと思ふ。かく云つて見るものゝ、斯かる出發點から哲學は如何なる方向に進行するか、また如何なる内容を如何にして蒐集するかは、余自身にはまだ解決がつかぬ問題である。勿論これは一面から見ると到底問題にならない。何となれば直覺には方向も方法もないからである。併しこゝに何うしても避けがたい疑問がある。それは物、自爾の直覺とは果して何を意味するか。或は直覺は全く經驗と理性の影響を受けないものであるか是れてある。

またベルグソン哲學と東洋哲學とは、同じく直覺的方法を用ゐても、之に由て認識した本體または自生の内容には、著しい性質の差異あるとは、勿論否定は出来ない事實であらう。是は直覺の普遍的でない爲めか、または之を表現した理性の非普遍性に基くか、明かでない。併し本體または自生の性質は、靜的であるか動的であるか。或は物的であるか心的であるかと云ふやうな、純正哲學

上の問題は暫く別（また直覺上名説を以て述ぶる限りでないから）として、茲には唯直覺と理性との二つの認識的機能、人間の研究上或は實踐上に如何なる働きをなすものであるか、又は二つの機能の間には如何なる相互的關係があるかを、研究して見たいと思ふのである。（未完）

彼女（靈）の冒し得るいかなる罪業と惡事とがあらうが。彼女は密告し、欺瞞し、詐りを言つたらうか。彼女は人に苦痛を與へ、また憂ひを醸したであらうか。人がその兄弟を敵に渡したとき、彼女は何處に居たらうか。恐らく彼女は遙かに此の人を離れて、私に咽び泣いたであらう。そしてこの時から彼女はますます美しく、ますます床しくなつたのである。彼女は自ら爲したとてなければ、少しも羞恥を感じない。恐ろしい殺人の間にあつても、純潔に自ら保つとが出来る。否、彼女はしばしば自己の前に爲された罪惡を、内在の光明に溶解したのである。是等のとは日に見えない原理に由て支配されて居る。故に必ず神々の限りなき宥恕がある。我々の宥恕も亦同じである。いかに藻掻いても、何うしても我々は人を宥さざるを得ないのである。『大なる宥和者』即ち死が通り過ぎた時に、誰か、宥恕のあらゆる徴しを以て、靜かに跪いてこの死せる姉妹の上に屈まぬであらうか。（メエタルリンク）

たゞ妄念に隨ひて有るのみ。故に眞如と名くるも亦相あることなし。謂はゞ言語の極まりにして、言に由て言を遣るのみ。此の眞如の體は遣るべきものあることなし。一切の法悉く皆眞なればなり。またその體の立つべきものあることなし。一切の法は皆如なればなり。當に知るべし、一切の法は説くべからず念ずべからざるが故に、名けて眞如と爲すことを、(以上は即ち離言眞如)。

眞如は言説に依て分別するに、二種の義あり。一は如實空にして能く究竟して實を顯はすを云ふ。二は如實不空にして自體ありて無漏の性功德を具足するを云ふ。謂はゆる空とは本より已來一切の染法と相應せず。一切法の差別相を離れて虛妄の心念なければなり。まさに知るべし、眞如の自性は有相にあらず、無相にあらず。非有相にあらず。非無相にあらず、有無俱相にあらず。一相にあらず、異相にあらず。非一相にあらず、非異相にあらず、一異俱相にあらず。乃至總じて説くに、一切の衆生妄念あるを以ての故に念々分別すれども、皆相應せざるが故に

説いて空と爲すのみ。もし妄念を離れなば、實に空すべきものなし。謂はゆる不空とは、已に法體は空にして妄なきことを顯すと共に、眞如は常恒不變にして淨法満足なることを知る。則ち不空と名くるも亦相の取るべきものあることなし。知るべし。離念の境界はたゞ證(直覺の意)と相應するを以ての故なり。(以上は即ち離言眞如)。

以上の研究に依りて見ると、東洋哲學は古昔から既に直覺的證悟的であつて、名字、言説、心念の相を假りて説明するとの到底方便或は便宜たるに過ぎないことを認識して居つたのである。故に我々東洋人に取りては、ベルグソンの直覺哲學は何も珍奇でない。唯從來全く論理的、分析的、數學的方法のみに執着し馴致して居つた西洋の思想界には、一寸新しい感じがするのである。それも全然新しいと云ふとは無論出来ない。さればベルグソンの西洋哲學史上に於ける功績は、如何なる點にあるかと云ふに、余の考へては唯カントの理性批判哲學から一步進んで、直覺批判哲學に達した所にある。即ち換言すればカントが物それ自身の直

が分らないと云ふ者があれば。それは神秘が分らないのではなくして受ける心の方が曇つてゐるのだ。

Blessed are the pure in heart: for they shall see God.

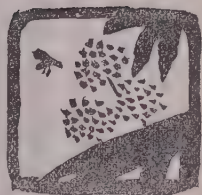
メエテルリンクの戯曲の中にはよく聰明な老人が出る。室内」の中の老人、「闖入者」の中の祖父、一ペレアス、メリサンド」のアルケル、「モンナ、ワンナ」のマルコオなど、これらはみな上に述べた幽玄の消息を人に先立つて感じたり、悟つたりする人である。論文では「貧者の寶」に宇宙を支配する力を述べて、その前に人間をみる時には殆ど絶望に近い悲哀に蔽はれて居るが「智慧と運命」に及んでは省みて人間の内にも僅かにこの力の對者となることの出来る「智慧のあることを觀、如何に智慧深き賢人が、同じ運命に逢つて居る他の人間よりもやすらかに道を行くか、又、深い愁を抱くかと云ふことを述べ、即ち譬を借りてテルシテスをソクラテスにくらべ、ソクラテスを基督にくらべ、エディバスをアントニナス、ピウスとマル

クス、アウレリウスとにくらべて居る。

*

即ち、「山を攀ぢ、村に下り、世の果に行つても、又は唯、家のぐるりを歩いてみるにしても、運命の路に出會ふ者は我の他にはない。今夜、ユダが出て行けばその向ふ所はユダで、する仕事も矢張人を渡すことである。若しソクラテスが戸を開けば閨の上にはソクラテスが眠つてゐる、そこには智慧の事がある。」と云つて「若し夕に心が聰明になれば、不幸は自ら影をひそめて、朝には不幸もまた聰明なものとなつて居る。」と述べて居る「ソクラテスとテルシテスとが同じ日にその一人子を失つたとしてもソクラテスの不幸はテルシテスの不幸に似まいと思ふ。人が以て如何ともする事の出来ないものとする死でさへも、善人の家にあつては、悪人の家に起つたのとは別な姿と、別な身振と別な涙とを持つて居る。」

メエテルリンクの考では賢人が一人居れば悲劇は決して起らない。ソクラテスとイエス・キリストがアトリデスの中に居ればオレスティアはアガメノンンの宮殿にゐなくなる。若しジヨカスタの家



智 慧

竹 友 藻 風

神秘は必ずしも朦朧とした物をいふのではない。普通の人の見ない所を見、普通の人の聞かないことを聞くのが神秘家である。神秘は到る所にあり、人はその心の粗末な爲めにこれを見、これを聞くことが出来ない。神秘を不可思議だと云ふのは日常、凡庸の眼に見馴れないといふ意味であつて、實際は神秘家のいふ事ほど自然なことはないのだ。眞個の神秘家なれば決して無理は云はない。朦朧は却つて粗末な心の方にある。

He speaks not as if he knew more than others, or had sought out more elaborate secret, but as if he had listened more attentively. Arthur Symonds.

レオナルド・ダ・ヴィンチも、バスカルも、古來の

神秘家はおほむね數學者であつた。神秘を幻想と分つ所はこゝにも明かにみることが出来る。精に入り、細に入り、幽玄をたづね、微妙をもとめても、彼等の眼はいつも明かにみひらかれて居る。神秘は多くの場合、「彼方」の事であるが、確實な事實としての意識、信念の上に立つべきものである。彼等は靜かに耳を傾けて宇宙の節奏を聴き、これを自己の呼吸に合せようとした。

*

物質の世界があらゆる物の限界を示すと信ずる者にとつては神秘家の云ふ事は不可思議であるかも知れない。何となれば神秘は多くの場合、物質の下を流れてゐる力、他界のこと、及びその現世との關係を云ふからである。靈性の存在を信じ、その幽玄な運動を信じてゐて、眞個の神秘家の言葉

「運命の電音を聞き」、又「温室」の中の祈禱の詩につねに待つやうな謙遜な態度のあるのを以て後年哲學者と科學者と文學者とを併せ稱せられ、一代の師表と仰がれるメエテルリンクよりも遙かに床しく思ふ。詩人を上智の座より下す者は誰ぞ。

*

要之、近代の神秘家はそのむかし基督降誕の曉に黄金、乳香、殯藥を捧げ、星を辿つて來たとい

ふ東邦のマギイ、更に又、猶太教のカバラの算數學者「傳道の書」や「箴言」に現はれて居る舊約の知慧の人、中世の鍊金學、天文學の學者、及び古代希臘の哲學者達のやうな位地を占めるものである。彼等が古に於て時流を出た卓拔の學者であつたやうに、この神秘家の思想には普通の科學哲學者の説よりも遙かに自由な拘らない所があると思ふ。

多くを觀むと欲するものは、自己を超越して見るを要する。之が凡ての攀登者に必要である。

學者のやうに眼で認識せんとするものは、何うして萬物の外觀を通して内部を觀るとが出來やう。併しオ、汝ザラトウストラよ、一切万有の根柢を覗き、背後を透視せむとするものよ。汝は最早や自己を超越し、高く――汝の星を脚下に見るまで向上せよ。オー然り、われ今自らを瞰下ろし又星の上を瞰おろして居る。之れが眞に我れの絶頂である。最後の頂上として我れに残されてある。

活眼を開いて脚下を見よ。萬物は靜かに睡つた。海も亦睡つた。ねむい眼附であやしげに我れを眺めてゐる。被れの呼吸する暖かさを感じる。また夢を見て居るのも感ずる。彼は惡夢の爲めに、幾たびか固い枕の上に寢轉りする。聞け！聞け！。いかにあやしき回想又は期待の爲めに呻くかを。あゝ哀いかな、汝暗黒の怪物よ、われ汝の爲めに切に憂ふる。あゝ哀いかな、わが手のかくも脆弱いと。われは誠に汝をこの惡しき幻想より救はむと思ふのに。

(ニイチエ)

の戸に立つてゐたならばエディバスは眼をつぶす事を止めたであらう。「賢人の通る所にはかす知れぬ悲曲があとを絶つ」と云つて居る。

*

「人は吾儕に告げて大悲曲の現はす所は人間が運命に對する闘の他にはないと云ふ。自分はそれとはうらうへに運命がほんとうに支配してゐる悲曲はひとつもないと考へる。どんなに探してみても、主人公が眞に唯一つの運命と闘つてゐるといふやうな戯曲をみつけることは出来ない。つまりそのいつも闘ふものは運命ではなくして知慧である。」知慧は道理ではない。道理の許さないことでも知慧の許すことがある。知慧は道理よりも愛に近しい。

「知慧は愛のランプであつて、愛はランプの油である。」と云つて居る。

又、

「愛なくして見るは、これ暗を見るものだ。」と云つて居る。

*

メエテルリンクの思想はこゝに止つたのではな

い。これより更に進んで、終には「知慧」よりも「力」を重んじ、「我」をすべての物の支配者と觀るやうになつて、其思想の現はれたのが戯曲には「青い鳥」、論文には「埋宮」其他であるが、こゝに至つて初期の思想を顧ると、兩方を共に首肯することのどうしても出来難い場合がある。此點に就ての議論は更に深い研究を要するからこゝには云はない。唯予一人の思ふ所では「貧者の寶」や「知慧と運命」や、又「ペレアス、メリサレド」、「アグラエエヌ・セリセツト」など初期の戯曲に比べて後期の作物は左程進歩した物とも思はれない。却つて志の身に迫ると共に、昔青春の愁を透して聞いた永遠の節奏や、實在に近い夢の世界からは次第に遠くなり、たのむところは鐵の扇のやうな肉體の圍に限られて、さればこそ、かつてシランヌを説いた美しい唇を以て「飛躍」を呼び「力、力」といふのではあるまいか。(Uneque chose nous prévient que des portes divines se ferment quelque part.) と、天人のやうな言葉に對して今のメエテルリンクは何と云ふであらうか。予は「貧者の寶」の中のある章に「地平線上の眩きに耳をひそめ」

城の奴僕。あれはマレエヌ姫さまのお部屋だ。

農夫。あの部屋か？

奴僕。さうだ、お姫さまは御病氣だ。

浮浪人。(入り来りつゝ) 港には大きな軍艦が一艘つい

て居る。

皆々。大きな軍艦だつて？

浮浪人。大きな黒艦だ、水夫は居ない。

老人。それは最後の審判ぢや。

このとき月のかげ城の上に現はる。

皆々。月だ！月ぢや！月だ！

農夫。月は黒い、黒い……何うしたのだらう？

奴僕。月蝕だ！月蝕だ！

(恐ろしき稲妻と雷鳴あり。)

皆々。雷が城の上に落ちた。

農夫。城のふるへるのが見えたかい？

他の農夫。櫓が残らず揺れたよ。

女。御堂の大きな十字架が動いた……あれ、動い

てるわ、動いてるわ！

甲の人々。さうだ、さうだ、今に倒れるよ、今に倒れるよ！

乙の人々。倒れる！倒れる！小さい櫓の屋根も一所

に！

農夫。堀割のなかへ倒れた。

老人。大した羽目になるのぢやう。

他の老人。城はまるで地獄に取巻かれてゐるやうぢ

や。

女。最後の審判に極まつてるよ。

他の女。この墓場の中へゐるのは止さうよ。

第三の女。今に死んだ人達が出かけてくるわ。

巡禮。死人の審判が始まつたのぢや！

女。墓の上を歩くのはお止し！

他の女。(小兒等に) 十字架の上を歩くのはお止し！

農夫。(馳せよりながら) 橋の迫持が一つ崩れ落ちたよ

皆々。橋の？どの橋だい？

農夫。城の石橋ぢや。もう城へは入れないよ。

老人。私は城へ入りたくもない。



マレエヌ姫

——メエテルリンク作——

内 藤 濯 譯

第五幕

第一景 城の前なる墓地の一部

大いなる群衆あり。暴風雨づく

老婆。

雷さまがああ風車の上に落ちなすつたよ。

他の女。落ちなさるのが見えたよ。

農夫。

さうぢや！さうぢや！青い球が！青い球が

他の農夫。

風車が燃えて居るよ、風車の帆が燃えて

居るよ。

小兒。

ぐるぐる廻つてゐらあ、まだぐるぐる廻つ

てゐらあ！

皆々。

あー！

老人。

お前さん達は、これまで斯んな夜に出會し

たことがあるかい？

農夫。

城を見なさい！城を！

他の農夫。

燃えて居るのかい？——さうぢや。

第三の農夫。

否、否。あれは青い焰ぢや。何處の屋

根の棟にも青い焰が見える。

女。

何だか世の中が終になりさうよ。

他の女。

この墓場の中にあるのは止さうよ。

農夫。

待ちな。一寸待ちな。下の室の窓が残らず

明るくなつてくる。

貧民。

祭があるのさ。

他の農夫。

これから御馳走が始まるのぢや。

老人。

下の室の窓がひとつ明るくならず居るよ

來て彼の櫓の林を御覽なさい！ 稻妻を通して地面まで倒れ伏してゐます！——まるで稻妻の河が流れて居るやうだ。

他の一の領主。 あの月は何うです！ 貴方にはあの月が見えますか。

第二の領主。 私はこれまで一度も、こんなに恐ろしい月の光を見たことがありません！

第三の領主。 この月蝕は十時にならなければ終にありません。

第一の領主。 ところで彼の雲は何うです！ あの雲を御覽なさい！ まるで黒い象の群が、三時間このかた城の上を通つてゐるやうですわねえ！

第二の領主。 あの雲は穴藏から穀物庫まで、城を震はしてゐますよ。

王子。 幾時だらう？

第一の領主。 九時になります。

王子。 それでは僕等はもう一時間以上も王様を待つて居るんだわねえ。

第三の領主。 王様は何處にゐらつしやるんだか、まだ分かりませんか？

王子。 七人の修道女が廊下でお會ひしたさうお姿が見えない。

第二の領主。 幾時頃に？

王子。 七時頃。

第二の領主。 王様は何とも仰有つてお置きなさらなかつたのですか。：

王子。 何とも云はれなかつた。何事が起つたに違ひない。僕、行つて見やう。(退場)

第二の領主。 かやうな夜に持ちあがる事は、神々にだつて分かりません。

第三の領主。 でも、アンヌ王妃は何處に居られるのてせう？

第一の領主。 王様と御一所でした。

第三の領主。 あゝ！ あゝ！ それでは！

第二の領主。 かやうな晩に！

第一の領主。 氣をおつけなさい！ 壁に耳が…… (侍

他の老人。城の中へは行きたくもない……

老婆。妾だつて同じことさ。

奴僕。あの白鳥を見なさい！白鳥を見さい！

皆々。何處に？何處にゐるんだい？

奴僕。堀のなかだ、マレエヌ姫さまの窓の下だ！

甲の人々。あの白鳥共は何うしたんだらう？一體、

何うしたんだらう？

この人々。逃げて行く！逃げてゆく！みんな逃げて

行くよ！

巡禮。一羽だけ彼處に逃げずにゐるよ。

第二の巡禮。羽のうへには血がついて居る。

第三の巡禮。仰向になつて浮いて居る。

皆々。死んだのだ。

農夫。窓が開いた！

奴僕。あれはマレエヌ姫様がおいでになる御部屋

の窓だよ。

他の農夫。彼處には誰も居ねえよ。(沈黙)

女の群。窓が開いたわ！

他の女の群。逃げやう！逃げやう！

(畏ぢ怖れて逃げゆく。)

男の群。何うしたのだ？何うしたのだ？

すべて女。知らないわ！(逃げゆく)

五六人の男。でも何事が起こつたのかい？

他の數人の男。何でもないよ、何でもないよ。(逃げ

ゆく)

皆々。でも何故お前達は逃げるのかい？何にも無

い！何にも無い！(遁れゆく)

駈者。窓が一つ開いてる……窓が一つ開いてる……

……あの人等は恐がつてる！何にも無い！

(手をたよりに這ひながら恐怖にみちて遁る。)

第二景 城中なる禮拜堂の前室

領主、侍臣、貴女などの群ありて待つ。嵐つゞく。

領主。(一つの窓によりて)これまで斯んな夜に出會はし

た者があるでせうか。

他の領主。でも彼の櫓の樹を御覽なさい！この窓へ

です。

一人の領主。まるで地獄の町はづれに居るやうです。

ねえ。

女の群。何うしませう！何うしませう！今に何事が

起こるのでせう！

侍従。危い事はありません！——この城は洪水に

持ちこたへるでせうから！

このとき年老いたる一人の領主ひとつの窓をひらけば、外部

に犬の吼ゆる聲きこゆ、——沈黙。

皆々。あれは何でせう？

老領主。犬が吼えて居るのぢや！

一人の女。もうその窓は開けないで下さい！

ヒヤルマル王子登場。

一人の領主。王子様が！

皆々。殿下、王様にお會ひなさいましたか。

王子。何にも見えなかつたよ。

数人の領主。でも、それでは？……

王子。僕は何事も知らんよ。(アングス登場)

アングス。戸をお開けなさい！王様がお來てです！

皆々。王様に會つたのですか？

アングス。はい！

王子。何處に居られたのか。

アングス。知りません。

王子。そしてアンヌ王妃は？

アングス。王様と御一所です。

王子。話をしたのか！

アングス。はい！

王子。何と云はれたのかい。

アングス。御返事はありませんでした。

王子。君は蒼い顔をしてゐるねえ。

アングス。私、驚きましたよ。

王子。何を？

アングス。今にお分かりになります。

一人の領主。入口を開けて下さい！王様のお聲が聞

こえます！

アンス。(戸の背後にて)お入り遊ばせ、陛下……

（従一人登場）

皆々。何うでした？

侍従。何處においでか分りません。

一人の領主。でも不幸な事が起こつたのですよ。

侍従。お待ちなさい。私、城中を駆け廻つて皆に

訊いて見たのですけれども、何處においでにな

るのか分からないのです。

一人の領主。もう御堂へ入る時刻でせう——ほら、

七人の修道女が既に彼處へ入つてゐます。

遠き歌の聲きこゆ。

他の領主。（一の窓によりて）さあ、さあ、こゝへ来てあ

の河水を御覧なさい。

數人の領主。（馳せよりつゝ）何が見えるのです？

一人の領主。嵐のなかに船が三艘見えます！

一人の侍女。妾もう、こんな河は見てゐられませ

ん！

他の侍女。窓掛を揚げずにゐて下さい！窓掛を揚げ

ずにゐて下さい！

一人の領主。何處の壁も、まるで熱に罹つたやうに

震へてゐます！

他の領主。（他の一の窓によりて）此處へ、こゝへ、さあ

此處へおいでなさい！

甲の人々。何です？

乙の人々。最早見ても居られない！

領主。（窓によりて）畜類が残らず墓場へ逃げ込みまし

た！糸杉のなかには孔雀が居ります！十字架の

上には梟が居ります！村の牝羊は残らず墓石の

上に臥て居ます！

他の領主。まるで地獄の血祭ですなあ！

一人の侍女。窓掛をしめて下さい！窓掛を閉めて下

さい！

一人の召使。（入り来りつゝ）櫓が一つ池の中へ落ち込み

ました。

一人の領主。櫓がひとつ？

召使。御堂の小さな櫓が。

侍従。何でもあります。あの櫓は壊れてゐたの

あつてす。

王。何？

乳母。姫様の御部屋には雨が降つてゐるやうてムいす。

アンヌ。お前さんは、窓硝子へ雨が降りかゝつて居る音を聞いたのでせう。

乳母。妾、開けてはならないのでムいすか。

アンヌ。いけません！ いけません！ 姫は休まして置かなくてはなりません！

乳母。妾、入つてはならないのでムいすか……

アンヌ。いけません！ いけません！ いけません！

王。いけない！ いけない！ いけない！

乳母。王様はまるで雪の中へお倒れ遊ばしたやう

でござつてす。

王。何？

アンヌ。でもお前さんは此處で何うしやうと云ふの

です？ 彼方へお行でなさい！ 彼方へお行でなさ

し！ (乳母退場)

王子。乳母の云ふのは道理だ、僕には貴方の髪が

眞白に見えます。燈火の所爲なのでせうか。

アンヌ。さうです、明るすぎるからです。

でも何故そち達は皆、私を見つめて居るのぢや！——其方達はこれまで一度も私に會うた事が無かつたのか？

アンヌ。さあ、御堂へ入りませう、お勤めが終にな

りますよ、さあお來てあそばせ。

王。否、否、今夜は祈らずにゐる方が宜いのぢや

……

王子。お祈をしないのですつて、お父様？

王。するんぢや、するんぢや、けれども御堂では

いけない……私は好い氣持がしない、全然好い

氣持がしないのぢや！

アンヌ。あなた、しばらく御かけ遊ばせ。

王子。何うしたのです、お父様！

アンヌ。お止しあそばせよ、およし遊ばせよ、根問

葉問なさらずに居らつしやい、王様は嵐にお驚

王。(戸の背後にて)私は氣分がわるい……私は入るま

い……私は御堂へ入らずにゐる方が好い……

アンヌ。(戸口に)お入り遊ばせ!お入り遊ばせ!

王及びアンヌ王妃登場

王。私は氣分がわるい……氣をかけて呉れるな:

……

王子。お父様、お苦しうですわねえ?

王。うむ、うむ。

王子。何うなすつたのです、お父様?

王。私には分らん。

アンヌ。こんなに恐ろしい晩だからです。

王。さうぢや、恐ろしい晩ぢや!

アンヌ。さあ、お祈りをしやうではありませんか。

王。でも何故其方達は皆黙つて居るのぢや?

王子。お父様、それ貴方の髪に着いてゐるのは何

です?

王。私の髪毛に?

王子。貴方の髪には血が着いてゐますよ。

王。私の髪に?——あゝ!これは私のぢや! (人

笑ふ)——でも何故其方達は笑ふのぢや? 何にも

可笑しい事は無いではないか!

アンヌ。王様は廊下でお轉び遊ばしたのです。

(小さき戸を敲くものあり。)

一人の領主。誰か彼の小さき戸を敲いて居ります:

……

王。あゝ!此の室ではどの戸口でも敲く音がす

る! 既うどの戸口も敲かずにゐて欲しい?

アンヌ。あなた、行つて見て下さいませんか。

一人の領主。(戸をひらきて)貴女、乳母が來たのです。

王。誰ぢや?

領主。陛下、乳母でゐます!

アンヌ。(立ち上りて)待つて下さい。妾に用事がある

のです……

王子。でも、入らして下さい!入らして下さい!

(乳母登場)

乳母。姫様の御部屋には雨が降つてゐるやうでござ

王子。彼はまるで柩の周圍を歩き廻つてゐるやう

です。

王。でも何故そちは今夜、恐ろしい事ばかり云ふ

のぢや？

王子。でも、お父様……

アンヌ。外の事を話さうではありませんか。もつと

面白い語題はないものでせうか？

一人の侍女。マレエヌ姫様の事をしばらくお話し致

さうてはムいませんか……

王。(立ち上りて)あの？あの？……

アンヌ。おかけ遊ばせ！おかけ遊ばせ！

王。でも、彼の事は話さずに……

アンヌ。でも何故妾たちはマレエヌ姫の事を話さず

に居たいのでせう？——何だか今夜は燈火がよ

く明らないやうですわね。

王子。燈火は澤山風で消えました。

王。燈火を點けえ！さう、燈火を残らず點けえ！

(燈火ふたゝび點ぜらる)これでは餘り明るすぎる！

其方には私が見えるかい？

王子。でも御父様？……

王。でも何故そち達は皆私を見つめて居るのぢ

や？

アンヌ。燈火を消して下さい。王様はお眼が大層弱

くて居らしやるのです。

(一人の領主たち上り外へ出てむとて行く。)

王。そちは何處へ行く？

領主。陛下、私……

王。行かずに居るがよい！行かずに此處へ居るが

よい！一人でも此の室から外へ行かずに居て欲

しいのぢや！私の周圍に居るがよい！

アンヌ。おかけ遊ばせ、おかけ遊ばせ。みんな氣を

つまらして下します。

王。誰か壁掛に觸つたのか？

王子。いゝえ、お父様。

王。あれにある壁掛が……

王子。あれは風です。

き遊ばしたのですから、しばらく此の儘にして
すこしお氣が靜まるやうになさい——他の事を
お話しやうではありませんか。

王子。 僕等は今夜、ユグリア姫に會へないの
でせうか？

アンヌ。 いけません、今夜はいけません、姫は始終
苦しさにしてゐるのです。

王。 できるなら、私は其方の身になりたい！

王子。 でも僕等だつて病氣でないとは云はれませ
ん——僕等は大罪人のやうにして待つてゐるの
です。

王。 結局何ういふ積なのか？

王子。 何ですつて。お父様？

王。 結局そちは何ういふ積かい？包み藏さずに
云ふがよい……

アンヌ。 貴方お解りにならなかつたのです——貴方
は放心して居らしたのです。——妾、ユグリ
ア—ヌが苦しさにして居ると云つたのですけ

れども、いつもよりは宜しうございます。

アングス。 でも王子様、マレエヌ姫様は？

王子。 今に此處で會へるだらう……終にならない
うちに……

このとき。乳母の半ば開きて去りたる小さき戸、一陣の風に
はたゝき始め、風は燈火を揺めかしむ、

王。(立ち上りて) あゝ！

アンヌ、お掛け遊ばせ！お掛け遊ばせ！あれは小さ
い戸がばたついて居るのです……お掛け遊ばせ
何てもありません！

王子。 お父様、今夜あなたは何うしたのです？

アンヌ、意地強く仰有るな、王様は御病氣なのです

——(二人の領主) 戸を閉めに行つて下さいませ
んか。

王。 あゝ！よく戸を閉めておけ！——でも何故そ
ちは爪立つて歩くのぢや？

王子。 この部屋には死人でも居るのですか。

王。 何？なに？

従ふ、また立ち返りて座す。

王。不可！不可！またその戸を開けてはならん！

アンヌ。入るのが恐いのですか——でも、彼處は此室のやうに險呑ではありません、雷が何で御堂へ落ちませう。さあ入らうではありませんか。

王。もう一寸待つて居る事にしやう、此處へ一所に居る事にしやうよ。神は凡べての事を宥して下さるのぢやらうか、私はこれまで始終そち達を愛して居つた。——これまで一度もそち達に悪い事をした事は無かつた——これまで——これまで、のう、さうでは無いか。

アンヌ。さあ、さあ、そんな事を云つてゐる場合にはありません。——嵐が酷く吹き荒らしたやうですわ。

アンヌ。白鳥どもが飛び去つたと云ふことです。

王子。その中で一羽は死んだのだ。

王。（つと飛び立ちて）その事ぢや、その事ぢや、その事を知つて居るのなら、云うてくれ！其方は随

分と私を苦しめた！さあ一思ひに云うて呉れ！でも此處へ來ずに……

アンヌ。おかけ遊ばせ、さあ、おかけ遊ばせ！

王子。お父様！お父様！では何ういふ事が持ち上つたのですか。

王。さあ入らうではないか！

稻妻と雷鳴——七人の修道女の中なる一人、御堂の戸をひらき來りて室内を眺む。他の修道女等 Rosa mystica, —Ora pro nobis— Turris davidica などムサンタ・マリアのリタニイを歌ふ聲きこゆ、この間、大いなる赤き光り、聖櫃の焼繪玻璃と飾火より出て、つと王とアンヌ王妃とを浸す。

王。あれは誰が準備して置いたのぢや？

皆々。何です？何です？何うしたのです？

王。残らず知つて居る者が此處に一人居る！あれを残らず準備しておいた者が此處に一人居る！私は何うしても知らなければ……

アンヌ。（王を拉し行きつゝ）さあお來て遊ばせ！お來て遊ばせ！

王。あれを見た者が一人居る！

王。何故あの窓掛を展げたのぢや？

王子。でも、あれはいつも彼處に懸つてゐます、「幼児の殺戮」を表はしたのですよ。

王。最早私はあれを見たくない、最早あれは見たくない！あれを取除けて呉れ！

この壁掛を卸せば、また「最後の審判」を表はせる他の壁掛あらはる。

王。故意とあれを見せつけたのぢやなあ！

王子。何ですつて？……

王。さあ左様云ひ開きをせい！其方は故らにあれを見せつけたのぢや、其方が何うする積りか私は能く知つて居るわい！……

侍女。王様は何をお云ひ遊ばします？

アンヌ。氣にかけずにおいで、こんなに厭な夜だから怖氣立つておいでなんだよ。

王子。お父様、可愛さうなお父様……あなたは何うなすつたのです？

侍女。陛下、お水を一杯さしあげませうか。

王。うむ、うむ——あゝ、いらんよ、いらんよ！

——さてさて、私のする事は皆、私のする事はみな！

王子。お父様！……陛下！……

侍女。王様は氣を取り亂しておいでとムいます。

王子。お父様！……

アンヌ。陛下！——お子様が呼んでおいでとす。

王子。——お父様何故さう始終後へ振り向くのですか。

王。一寸待つて居れ！一寸待つて居れ！……

王子。でも何故あなたは後へ振り向くのですか。

王。首の中に何かあるやうぢや。

アンヌ。でもまあ、ちつとも恐い事はありません。

王子。あなたの背後には誰も居ないのです。

アンヌ。最早その事は話さずに……最早その事は云はずにゐて下さい、さあ御堂へ入りませう。修道女どもの聲が聞こえますか。

遠く息苦しげなる歌。アンヌ王妃は戸の方へ行く、王これに

乳母。殿下、妾でございます。

王子。あゝ！乳母や、お前かい。また此處に？

乳母。妾お臺所へ参るところでゐいましたら、こゝへ参りますと、黒犬が此の戸を搔きむしつてゐたのでゐいます。

王子。まだ此の戸を！こゝだプリュトン！此處だ

プリュトン！

乳母。お勤めは濟んだのでございますか？

王子。濟んだよ……今夜はお父様の御様子が變なつたよ。

乳母。そして御機嫌の悪いお姫様は……

王子。お父様には熱があるやうだ、氣をつけて居なければならぬ、いくつも大きな災難が持ち上るかも知れないから。

乳母。遂々、災難は眠らずにゐるのでござい

す……

王子。今夜何う云ふ事がもちあがるのか分らないけれども——どうせそれは可い事でないよ。犬

がまだあの戸を搔きむしつて居る……

乳母。プリュトン、こゝよ、さあ足をあだし！

王子。僕は一寸庭へゆく。

乳母。もう雨は降つて居ないのでゐいますか。

王子。降つてゐないやうだよ。

乳母。まだ戸を搔きむしつて居ります！プリュ

ン、こゝよ！プリュトン、此處よ！勢をあだし

よ、さあ勢をあだしよ！

(犬吼ゆ)

王子。吼えてはいけない、僕連れて行かう。マレ

エヌの眼を覺まして了ふから。あい！プリュ

ン！プリュトン！プリュトン！

乳母。また立ち戻りますよ。

王子。あの戸を離れたくないのだ

乳母。でも戸の背後に何があるのでゐいませう？

王子。彼方へ行かせなくてはならぬ。さあ行け！

行け！行け！

(足にて礎と犬を蹴る、犬は叫び吼ゆ、されどまた立ち戻りて

アンヌ。でも、それは月の光です、さあお來て遊ばせ！

王。でも忌々しいほど卑怯ぢや！残らず知つてゐる者がひとりある！現在見てゐながら云ひ兼ねて居る者が一人あるのぢや！……

アンヌ。でも、あれ聖櫃が！……さあ參りませう！

王。可！可！可！

アンヌ。さあお來て遊ばせ！お來て遊ばせ！

二人あはたゞしく御堂の戸に對せる戸を通りて退場。

甲の人々。二人の方は何處へ行かれるのでせう？

乙の人々。何うしたのです？

領主。樅の林が残らず焰になつて居る！

アングス。今夜は災難が逍遙うてゐるのだ（皆退場）

第三景 城の廊下

大いなる黒大ありて、一の戸を掻きむしる。——乳母燈火をもちて登場。

乳母。彼は未だ姫様のお室の戸口にゐる——プリ

ュトンや、プリュトンや！お前は其處で何をして居るのかい？——でも何だつてあんなに戸を掻きむしらなければならぬのか知ら？——お前は可愛さうなマレエヌ様のお眼を覺ますよ！さあ彼方へお行きよ、お行きよ！（足にて蹴る）まあ何うしやう！まあ彼は何て恐い様子をしてゐるのだらう！何か災難が起こつたのかい？可愛さうなプリュトンや、わたしお前の足を踏みつけたのかい？さあお出て、妾達はお臺所へ行くのだよ。（犬は立ち廻りて戸を掻く）またあの戸口へ！またあの戸口へ！でも其の戸の背後には何かあるのかい？お前は姫様のお傍にゐたいのだねえ？——姫さまはお眠りになつてゐらつしやる、音ひとつ聞こえない！お來て、お來て、さうしてゐると、姫様のお眼が覺めるよ。（ヒヤルマル王子登場）

王子。其處へ行くのは誰だ？

て居らつしやるやうてゐいます…

王子。 マレエヌかい？

乳母。 さやうでゐいます。——さあ早く！早く！

王子。 何？

乳母。 燈火を！

王子。 僕は持つてゐない。

乳母。 廊下の端にランプがあるのでございますから、あれを取りにお出で遊ばして。

王子。 よし。（王子退場）

乳母。（戸口にて）姫様！姫様、何處に居らつしやるのです？ マレエヌ様！ マレエヌ様！ マレエヌ様！

（王子二たび登場）

王子。 僕にはあのランプが外せない。何處にお前のランプはあるのか、行つて點けて來やう！

（退場）

乳母。 はい。——マレエヌさま！ マレエヌさま！

マレエヌさま！お悪いのでございますか！妾ここに居りますよ！ まあ何うしやう！ 何うしや

う！ マレエヌさま！ マレエヌさま！

王子燈火をもちて二たび登場。

王子。 入れ！

王子乳母に燈火を與ふ。乳母一たび室内に入る。

乳母。（室内にて）あゝ！

王子。（戸口にて）なに？ 何？ 何うしたのだ？

乳母。（室内にて）姫様はお亡くなり遊ばして居らつしやいます！ お亡くなり遊ばして居らつしやるのでゐますよ！ お亡くなり遊ばして居らつしやる！ お亡くなり遊ばして居らつしやいます！ 王子。（戸口にて）死んで居るんだつて！ マレエヌが死んで居るんだつて？

乳母。（室内にて）さうです！ さうです！ さうです！ さうです！ お入り遊ばせ！ お入り遊ばせ！ お入り遊ばせ！

王子。（室内に入りながら）死んだ？ 彼女が死んだんだつ

て？

乳母。 マレエヌさま！ マレエヌさま！ マレエヌさ

戸を搔き能る。)

乳母。搔き筆りますす、搔き筆りますす、鼻を齧つてをりますす。

王子。戸の下で何か嗅いてゐる。

乳母。きつと彼處に何か在るのでございますよ…

王子。見に行つて御覽…

乳母。お部屋は閉まつて居るのでムいますけれど、
も、妾、この鍵を持つて居ないのでムいます。

王子。鍵は誰が持つて居るのかい？

乳母。アンヌのお妃様でございます。

王子。何うして彼の方が持つて居られるのかい？

乳母。何故ですか少しも分りません。

王子。そつと敲いてごらん。

乳母。姫様が眼をお覺まし遊ばしませう。

王子。音は聞こえないのか。

乳母。何の物音も聞こえません。

王子。一寸かすかに敲いてごらん。

乳母三たびほとくと敲く。

乳母。何の物音も聞こえません。

王子。もすこし強く敲いてごらん。

(乳母これを限りと敲くとき、恰も室内に響きたらむがごとくあはたどしく早鐘鳴りわたる。)

乳母。あゝ！

王子。鐘だ！早鐘だ…

乳母。何うでも窓を開けなくてはなりません。

王子。さうだ、さうだ、入つて行け！

乳母。戸が開いてをりますす！

王子。閉まつてゐたのか！

乳母。只今まで閉まつてをりました！

王子。さあ入れ！

乳母室内に入る。

乳母。(室より出て來りて)戸を開けますと、この燈火

が消えました…でも妾には何だか見えただ

ございます…

王子。なに？なに？

乳母。存じません。窓は開いてをりますす——倒れ

奴僕。 あゝ！姫様はお可愛さうに！

アングス、領主、侍女、奴僕、下婢、七人の修道女等、手に手に燈火を持ちて登場。

皆々。 何でムいます？何事が起こつたのでござい

ます？

奴僕。 あいとしい姫様がお殺され遊ばしました…

甲の人々。 あいとしい姫様がお殺され遊ばしたんで

すつて？

乙の人々。 マレエヌ姫さまが？

奴僕。 さうでがす。私あの狂人の所爲だと思ふて

がす。

領主。 私は何か不幸な事が持ち上るのぢや無いか

と話をしてみたのですが…

乳母。 マレエヌさま！マレエヌさま！まあマレエ

ヌ様はお可愛さうに！……さあ手をかして下さ

いまし。

第一の修道女。 何とも仕方ありませんわ！

第二の修道女。 姫様は冷たくなつて居らつしやいま

す！

第三の修道女。

硬くなつて居らつしやいます！

第四の修道女。

お眼を塞いであげなさいまし！

第五の修道女。

お眼は凍りついて居らつしやるので

す！

第六の修道女。

お手を合はしてあげなければなりま

せん。

第七の修道女。

遅すぎました！

一人の侍女。(悶絶しつゝ)あゝ！あゝ！あゝ！

乳母。

お起こし申しますから、手を假して下さい

まし！手を假して下さいまし！何うしませう、

何うしませう、さあ手を假して下さいまし！

奴僕。

もう姫様は鳥のやうに軽くなつて居らつし

やいますよ！

廊下にけたまはしき叫びきこゆ。

王。

(廊下にて)あゝ！あゝ！あゝ！あゝ！あゝ！見

つかつたのぢや！見つかつたのぢや！私ぢや！

私ぢや！私ぢや！

ま！姫様は冷たくなつて居らつしやいます！冷たくなつておいでのやうでムいます！

王子。さうだ！

乳母。あゝ！あゝ！あゝ！（戸二たび閉さる）

第四景 マレエヌ姫の室

王子と乳母とあり。——始より終まで外部には早鐘響き渡る。

乳母。手をお假し遊ばせ！手をお假し遊ばせ！

王子。何うするのだ？何うするのだ？何うするのだ？

乳母。姫様は硬くなつて居らつしやいます！まあ

何うしませう！何うしませう！マレエヌさま！

マレエヌさま！

王子。でも眼は開いてゐる！……

乳母。誰か姫様を絞め殺したのてムいます！お首

をお首を！お首を！まあ！

王子。さうだ！さうだ！さうだ！

乳母。人をお呼び遊ばせ！お呼び遊ばせお呼び！

立て遊ばせ！

王子。さうだ！さうだ！さうだ！あゝ！あゝ！——

（外にて）あい、やつて来い！やつて来い！絞殺

されたんだ！絞殺されたんだ！マレエヌ！マレ

エヌ！マレエヌ！絞殺されたんだ！絞殺され

たんだ！おゝ、おゝ、おゝ！絞殺されたんだ！

絞殺されたんだ！

廊下を走る足音、戸と壁を敲く音。

奴僕。（廊下にて）何てがす？何てがす？

王子。（廊下にて）絞殺だ！絞殺だ！……

乳母。（室内にて）マレエヌ様です！マレエヌ様です！

此處ですよ、此處ですよ！

奴僕。（入り来りつゝ）あの狂人の所爲でがすよ、この

窓の下で見つかつたのがすから！

乳母。あの狂人の所爲だつて？

奴僕。さうでがすよ！さうでがすよ！あの狂人は

堀に落ちて、死んだのがすよ。

乳母。あの窓が開いて居ります。

王子。 あゝ！この賣女め！賣女め！賣女め！あそ

……あそろしい賣女め！……斯うだ！かうだ！
かうだ！かうだ！斯うだ！

劍をぬぎて續けさまにアンヌを斬る、

アンヌ。 あゝ！あゝ！あゝ！ （息絶ゆ）

甲の人々。 王子様が御妃様にお斬りつけ遊ばした！

この人々。 お留めなさい！

王子。 汝は鴉や地虫を毒害する氣なのだらう。

皆々。 お妃様はおかくれなすつた……

アングス。 王子さま！王子さま！

王子。 君は彼方へ行け！この通りだ！このとほり

だ！此のとほりだ！ （劍にて自刃す） マレエヌ！マ

レエヌ！ マレエヌ！……あゝ！お父様お父様！

……（倒る）

王。 あゝ！あゝ！あゝ！

王子。 マレエヌ！マレエヌ！僕に、僕に彼女の可

愛い手を！……あゝ！あゝ！窓を開けて呉れ！

さうだ！さうだ！あゝ！あゝ！ （息絶ゆ）

乳母。 手巾を！手巾を！王子様は程なくあの世へ

アングス。 逝かれたのです！

乳母。 お起こし申して下さい！血沙に咽んであ

て遊ばします！

領主。 王子様はお逝であそばしました。

王。 あゝ！あゝ！あゝ！私は大雨のときから、も

う泣けなくなつてゐた！ぢやが私は今、地獄の

中へ深く入りこんで居る——でも彼等の眼を見

い。彼等の眼は蛙のやうに私に飛びかゝらうと

して居るではないか！

アングス。 王様はお氣が狂つた！

王。 否、否、私は勇氣を亡くしたのぢや！……あ

ゝ！地獄の石疊に涙を流させるとは此の事ぢ

や！……

アングス。 王様を彼方へお連れ申して下さい。王様

はもうあれを見かねておいでです！……

王。 否、否、放つて置いてくれ——私は既う獨り

では居られんのぢや……でも美しいアンヌは何

アンヌ。(廊下にて) およし遊ばせ、およし遊ばせ！ 貴

方はち氣が狂つたのですねえ！

王。さあ来い！ 来い！ 私と一所に！ 私と一所に！

罪を鳴らせ、罪を鳴らせ！ 罪を鳴らせ！ (王、ア

ンヌ王妃をひきつれて登場) 彼女と私ぢや！ 私は云う

て了つた方がよい、私達二人でこんな事をした

のぢや！

アンヌ。王様は氣が狂つておいでです。さあ何うか

して下さい！

王。いや、私は氣が狂うては居らん！ 彼女がマレ

エヌを殺したのぢや！

アンヌ。お氣が狂つておいでです！ さあお連れ申し

て行つて下さい！ まあいやなこと！ とんだ事に

なります！

王。彼女ぢや！ 彼女ぢや！ いや私ぢや、私ぢや、

私も彼處に居つたのぢや……

王子。何ですつて？ 何ですつて？

王。彼女が姫の首を絞めたのぢや！ かうして！ か

うして！ かうぢや！ 斯うぢや！ かうぢや！ 窓を

敲いて居る者があつた！ あゝ！ あゝ！ あゝ！ あゝ！

ゝ！ あれ、マレエヌの上に彼女の赤い上衣があ

る！ あれぢや！ あれぢや！ あれぢや！

王子。何ういふわけて此の赤い上衣が此處にある

のですか。

アンヌ。でも、王様は氣が狂つてゐるではありま

せんか……

王子。さあ御返事をなさい、何うしたわけであの

上衣が此處にあるのですか……

アンヌ。あれは妾のですか。

王子。えゝ、貴女のです！ あなたのです！ 貴女の

です！ あなたのです！ あなたのです！……

アンヌ。でも手をお弛めなさい！ 氣持が悪くなるで

はありませんか。

王子。何うして此處にあるのですか、此處に？ こ

こに！——あなたは彼女を？

アンヌ。それから何うしたのです？

王。うむ……痛いではないか、其方は私を痛い目に會はしたよ！私は廊下に轉んだ。恐い事ぢやつたよ。

乳母。お來で遊ばしませ、お來で遊ばしませ。彼方へ參りませう。

王。あれ共は敷石の上にゐて寒からう……彼女「母さま！」と云つて泣いた、それから「い！お！お！お！」と云うて……氣の毒なことぢや、のう！可愛さうな娘……でも風ぢや……あ！決して窓を明けてはならん！——風に違ひないのぢや……今夜、風の中には盲目の禿鷹が幾羽か居つた！——でも、彼女の小さい手を敷石の上に引きずらしてはならん……其方は彼女の手を踏みつける——あ！お！お！氣をつけい！

乳母。お來で遊ばしませ、お來で遊ばしませ。もう床に入る時分です。さあお來で遊ばしませ。

王。可、可、可、こゝは温かすぎる。燈火を消してくれ、私たちは庭へ行く、雨の降つた芝生の上は涼しからう！私は少し休まなければならん……お！彼處に太陽が見える！

(日光室内に入る)

乳母。お來で遊ばしませ、お來で遊ばしませ、妾共はお庭へ參ります。

王。でもアラン坊は室へ閉ぢ籠めて置け！私は既に彼に驚かされたく無いのぢや！

乳母。はい、はい、お閉ぢ籠め申すことに致します。せう。さあお來で遊ばしませ。

王。其方は鍵を持つて居るのか。

乳母。はい、さあお來で遊ばしませ。

王。うむ、私に手を假してくれ……何だか私は歩くのが苦しい……私はあはれな老人ぢや……既う足がさかない……でも頭は確かぢや……(乳母に凭れて) 苦しくは無いかい？

乳母。いえ、いえ、思ひきつてお寄りかゝり遊ば

處に居るのぢや？——アンヌ！……アンヌ！……彼女に曲んで了うて居る！……私は既う彼女は厭ひになつた！……あゝ！人が死ぬとひどく見すばらしい様子になる！かうなつては最早彼女に情を見せたくもないわい！……何か彼女の上に懸けてくれ。

乳母。 マレエヌ様のおうへにも……マレエヌ様、

マレエヌさま……あゝ、あゝ、あゝ！

王。 こんな有様を見た以上、私はもう一生誰にも情を見せずに居やう！……可愛想なマレエヌは何處に居るのぢや？（マレエヌの手を取る）——あゝ！

姫は地蟲のやうに冷たくなつて居る——！恰度天使のやうに私の腕へ降りてきたのぢやが……風にふかれて命を落してしまつたのか！

アングス。 王様をお連れ申しませう！何うかして王様をお連れ申しませう！

乳母。 はい！はい！

領主。 鳥渡待つて居ませう。

王。 其方には黒い羽があるのか？妃がまだ生きてゐるかどうかは、黒い羽がなくては分からん……妃は美しい女ぢやつた、のう！——其方たちには私の齒の音が聞こえるのか？（曙の色室内に入る。）

皆々。 何でございますつて？

王。 其方達には私の齒の音が聞こえるのか？

乳母。 陛下、鐘が鳴つて居るのでございます……

王。 でも、それは私の心臓の音ぢや！……あゝ！

私は三人共に愛して居つたのぢや、のう！——少し水が飲みたい……

乳母。（一杯の水を持ち來りて）さあお水を差しあげます。

王。 かたじけない。（渴したるさまに呑み乾す）

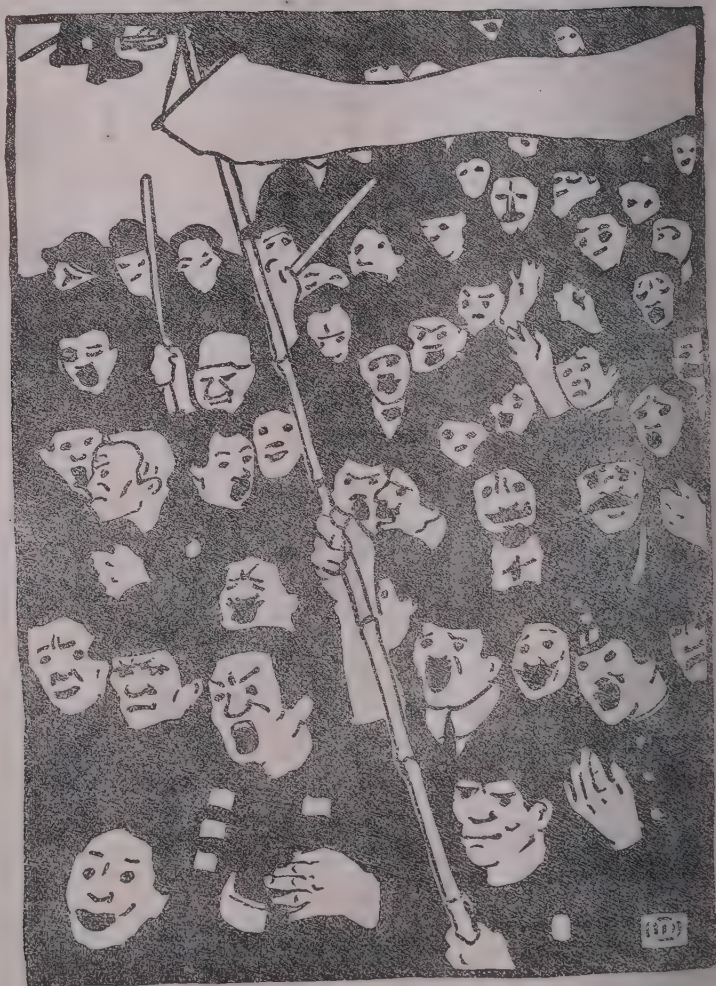
乳母。 そんなに召しあがつてはいけません……貴方さまは汀になつて居らつしやいます。

王。 私は渴き切つて居るのぢや！

乳母。 おかあいさうに、さあ來て遊ばしませ。

妾、お額を拭いて差上げませう。

理 心 集 群



畫 郎 四 田 有

しませ。

王。私を怨んで呉れるな、のう？私を年を老りさつて、死ぬほど苦しい思ひをして居るのぢや！
：さうぢや！さうぢや！最早終になつた、終になつて幸ぢや、私はみんなの事を氣にかけてゐたのぢやから。

乳母。お可愛さうに、さあお來て遊ばしませ。

王。あゝ何うしやう、何うしやう！彼女は今、地獄の川岸に待つて居る！

乳母。さあお來て遊ばしませ！

王。此處には死人の呪咀を恐がるやうな者がある

かい？

アングス。はい、陛下、私……

王。よし、それでは眼は塞いでをれ、さうしたら

私達は彼方へ行くよ。

乳母。さうです、さうです、さあお來て遊ばしませ。

王。行くよ、行くよ！あゝ！あゝ！私は今、便り

ない身にならうとして居るでは無いか！……

——私は今、全身不幸の中に投げ込まれて居る！

——七十七の歳になつて！其方は何處に居るの

ぢや？

乳母。此處でゐます、此處でゐます。

王。其方は私を怨みはしなからうのう？——私達

は朝飯にしやうと思ふが、菅蒿があるぢやらう

か？——私は少し菅蒿が欲しいよ……

乳母。はい、はい、いくらかゝいませう。

王。何故か知らんが、私は今日何だか悲しい——

あゝ！あゝ！死んだ人間は、まあ何といふあは

れな様子をして居ることぢやらう！——

乳母と共に退場。

アングス。また斯んな夜に出會したら、俺達は眞白

になつてしまふ！

皆退場、七人の修道女居のこりて、死骸を寢床に運びつゝ「ミ

ゼレーレ」を歌ふ。鐘の音黙し、外面に鶯の聲きこゆ。一羽

の雄鷄窓の欄干に飛びのりて曉を告ぐ。

幕

の擁護が無いところに眞の憲政は成り立たぬのである。殊に吾々日本人はこの權利擁護の觀念に乏しいやうに思ふ。權利を主張することに於て、權利を味ふことに於て太だ飽き足らぬ點がある。單に政治上のみならず、日常生活に於て隨分自己の權利を蹂躪せられながら、憤ふことを爲さないのである。これは吾々日本人の思想には、未だ封建時代の忍從的習慣が深く喰ひ込んでゐるからである。封建時代の習慣から言へば、他人の前に自己の權利を主張することは、不遠慮といふが如き惡しき意味にとられたのである。更に封建時代の道德は下の者が上に仕うるの道を教へたが、下の者が上の者に對する權利の主張を説かなかつたのである。謙遜なることが最上の善であるかの如く教へられてゐた。

基督教の立ち場から考へて、人若し右の頬を打たば更に左の頬を打たせよと言ふことも、或は人その上衣を奪はゞその下衣をも與へよといふことも、理想的の道德として誠に結構なことであるが、この教訓を時と場所とを撰ばず實行することゝなつたなら、強者と惡人のみが幸福を得ることゝな

る。これは道德上の理想と日常生活の權利の主張とを混同して穿き違へた傾きがある。そこで個人が正當な理由があつて損害賠償の訴訟を提出したとすれば、本人が快く思はないのみならず、世間の人々までが、不道德なことでも致したやうに思つてゐる。また損害賠償の訴訟を提出しても費用敗けをするから損たと思つてゐる場合もあれば、彼は自分より強者であるが故に後日の復讐を虞れて躊躇する場合もある。しかし何れの場合に在りても權利を主張せぬかといふに、決してさうではない。が、要するに自己に直接著しき影響があるのでなければ、大概は泣き寝入りに濟ます者が多い。吾々は電車や汽車の中で、屢々吾々の公共的權利を侵害されて不快を感じることがあるが、權利を主張せずして終ることが多い。

二

斯くの如く吾々は自己の權利を主張することに臆病であると同時に、他人の權利を侵害することに大膽である。日本人は他人の權利を尊敬するの念が太だ少ないのである。例へば政府が非立憲的

權利擁護論

安部 磯雄

一

憲政擁護といふ叫びは、昨年來屢々聞かされた國民的自覺の聲であつて、この主張の下に起つた先般來の政治上の種々なる運動に就いては、色々な經驗を得、また新たに學ぶところもあつた。言ふまでもなく憲政擁護に對しては、吾人は深き同情を有し、多少自己の力をも盡し度い考へてある。併しながら過般の憲政擁護は其の聲の大なるに比して、吾人の期待が太だ裏切られたるやうに思ふ。政友會の國民に對する眞意を疑はざるを得ざるは勿論、國民の輿望を擔うて起てる國民黨及び、政友會を脱黨した政友俱樂部の人々を見るも今日彼等の爲す所を以てしては、到底眞實に國民の味方たるや否やは一ツの疑問でなければならぬ。斯く考ふれば日本に於ては、憲政擁護の實現は猶ほ將來

のことに屬するとしてあつて、決して一朝一夕に大成し得べきではない。かの桂内閣が停會復た停會を命ずるや、凡べての新聞紙は聲を大にしてその非立憲を鳴らした。なるほど桂内閣の政策は確かに非立憲であつた。併しながら國民が政府の非立憲的な政策に對して、等しく非立憲な態度を以て複雜的暴動を行つたとも大に遺憾とすべである。要するに今日までの政治運動を見れば、理性の判斷を待たずして、偏へに感情の衝動にのみ左右せられてゐるやうに思ふ。そこで最少し憲政擁護の觀念が徹底的に了解せらるゝでなければ、如何に聲を大にして憲政擁護を絶叫するも徒勞に歸すべきである。憲政の觀念を眞に了解せしむべき第一の方法は國民全體をして先づ自己の權利を自覺せしむることである。憲法を具體的に考へたならば、憲法は個人の權利の擁護でなければならぬ。權利

明かである。政府が自ら作つた法律を自ら破壊するほど非立憲な行爲はないと思ふ。吾々日本人の思想が一層自己の權利を痛切に自覺することゝなれば、斯様な矛盾したる政治思想は漸次改革せられ、眞の憲法政治が實現せらるゝことを堅く信ずるのである。これが爲めに吾人は憲法擁護の第一歩として、權利擁護會の組織を主張するのである。是に依りて常に自己の爲め社會の爲めに、かの蹢躅せられつゝある權利を擁護せんことを努むるのである。吾人が權利を主張するといふことは單に自己の爲めにするに非ずして、社會の權利の爲めに、民人の幸福の爲めにするといふ堅き信念の下に權利擁護會を組織したのである。吾々が斯くの如き組織を實現する所以は、一は政府自らを助けんが爲めである。政府の事業は決して政府のみにては良結果を得ることは不可能である。社會廓清の事業は政民合同でなければ完全なことは出来ないものである。今日動物愛護會の事業が日本で少しも成績の舉らないのは、政府が何等の特權をこの團體の人に與へてゐないからである。米國に於けるが如く動物愛護會員に對して、一部の警察權

をも與ふることなればその効果は大なるものであらう。

更に權利の擁護に就いて言はざるべからざるは名譽毀損に對する自己の權利の主張である。これは金錢の損害以上の大事であるが今日の法律はまだ充分吾人の名譽の權利を保證してゐない。これに對しても、吾々の權利擁護會は具體的に大なる權威を有つことが出來ると思ふ。最後に繰り返して言ふが、吾人が自己の權利を主張する所以は自己の權利を通じて社會、人類の權利と幸福の爲めである。而して政府の事業を助け、憲政の實効あらしめんが爲めである。この意味に於て私は權利擁護會の設立を希望する。(筆責在記者)

新譯律氏和聲樂

統一教會々友淺田泰順氏が、

我國洋樂界の發展を資けんがために、Richter Harmonielehreを譯したるもの。譯者は素人好樂家中の錚々たる人、また極めて科學的の頭腦に富めり。蓋し本書は我が不振なる洋樂界に新たなる刺激を與ふるものであることを信ずる。

な政策を行つたが爲めに、堂々として政府の非を責むるは宜しい。しかし同時に他の權利を尊敬することを忘れてはならぬ。吾々に言論の自由あると同時に、所謂官僚新聞にも言論の自由がある。

何が故に言論を以て官僚派の新聞を屈伏せしむることをなさずして、暴徒的の非立憲の所爲を敢てするのであるか。かくては非立憲に對する非立憲の態度であつて兩者齊しく罪あることとなる。西洋の遊戲で『正々堂々^{フェアプレイ}の遊戲』といふことがあるが政治上の運動にもこの心持ちがなければならぬ。

昨今危険思想といふ新しい言葉が用ひられて來た。その出所はかの幸徳事件以來であると思ふ。

そこで何か少しでも新しい、熱心な主張でもすれば、直ちに危険思想といふ名を冠せてこれを壓迫しやうと試みる者がある。この遣り口は單に言葉の上のみのやうに思はるゝが、實は非常に臆病な壓迫の方法である。私の考へては行爲には危険と名附くべきものもあるが、思想には決して危険といふ形容詞を附すべきものはないとを斷言する。

もし假りに危険なりと思惟せらるゝが如き思想が生れたとしたならば、それは尙一步進んだる他の思

想を以て壓迫することが出来る。若しその新思想が如何なる思想を以てしても、壓迫することの出來ぬやうな思想であれば、その思想は最も偉大な思想であることを證明してゐるのである。危険思想といふ辭は主として官僚系の人々から出づる語であるが、また一面若し政府の爲めに極力辯護する人があればそれに對して世人は、曲學阿世の名を以て彼を呼ぶのである。先般來『太陽』誌上行はれた上杉博士對美濃部博士の憲法論に對する世人の態度は明かにこれを説明してゐる。立憲政治とは何ぞやと言はゞ即ち憲法が定めたる法律に服従するに由りて、一國の政治が調和良く實行せらるゝといふ意味に外ならぬ。而して國法に服従するといふことは、一面に於て自己の權利を主張すると同時に、他人の權利をも認むるといふことである。吾々の日常行爲が『法律に生活する人民』たるにふさはしき時に、眞の立憲政治が生れるのである。同時に、政府自らも亦法律に忠實でなければならぬ。然るに吾々が常に主張する公娼廢止問題に關して、政府が執り來りたる方針の如きは、遺憾乍ら憲政の本旨に協はざる者であるや

明 る い 眼

併し、怠惰者は、もう少し違つた考を持つてゐる。斯ういふ態度ばかりが、無上であり、最も貴重であるように、考へられるのは、近代の人達が「明るい眼」を持たないからだ。なぜ人工的な提灯や街燈ばかりを頼みにして路を歩くのか。我々

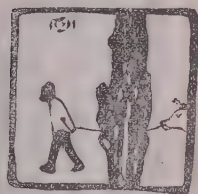
もつと明るい眼を持つてゐる筈では無いか。闇の中でも迷はずに、歩いて行かれるだけの眼が有る筈である。それなのに、なぜ我々は其の眼を用ひないのであらう。一々意識の提灯で照らして見る必要があるか。眞の光りから遠い黄色な意識の光りに照らされて、歩いてゆく人の姿の見すばらしさを感じなければならぬ。怠惰者から見ると、意識の案内者にみちびかれて、はじめて成し得るような活動は、實際貴重なものであるか何うか疑はしい。言葉が不十分かも知れないが、私は「無目的に働け」と云ひたいのである。「もつとぼんやりした人間になれ」と云ひたいのである。特に私は、宗教家と、藝術家とに向つて、慫慂云ひたい。

如何にして信徒を導く可きか、如何にして社會

を救済すべきかばかりが、宗教家の大切な目的では無い。觀照の態度を論じたり、種々な氣分に觸れる事ばかりが、藝術家の重大事では無い。個人我と社會我との調和を何うして見出さうかと苦心するよりは、なぜ黙して、まづおのれの中に「明るい眼」を見出さうとしないのだ。

「明るい眼」といふのは、單に意識を斷つといふ事では無い。むしろ、意識の上に立つて、あらゆる物を包含する事である。それ自體は透明であり、絶對である。無差別であり、唯一無二である。したがつて普遍である、包括的である。しかも最も具體的なものである。——強ひて我々の貧しい言葉であらばせば、一種の貯へられたる力である。それ自身は不分明であるけれども、實際に於ては最も著しき、何人も否む能はざる力である。一見した所では、受動的であり、消極的であるように思はれるに拘はらず、實は最も積極的な力である。力といふよりは、態度である。少し例を取つて、考へて見よう。

森の落葉



メモランダム R T O

怠惰者

千九百年代の世界は煩鎖なる世界である。

いはゆる活動といふ事が、どのくらゐ價値の有る事か、怠惰者の私は、不幸にして、それを知らない。しかし、世の中の人達は活動でなければならぬように云ふ。絶え間なく、思惟し、感じ、動作する事ばかりが、重大事であるように云ふ。果してそうであらうか。しかも、近代の人の活動には、餘り明瞭な意識が伴ひすぎてゐはしまいか。思惟するにも、感ずるにも、動作するにも、一々條件が附與されてゐる。意識された目的が附隨してゐる。分析が伴ふ。批判が加はる。此の人達は、意識の提灯無しには、路が歩かれないのである。餘りに懷疑的である。少しも純樸な所が無い。し

かもそれが貴い所であり、そのみが、我々の生命の在る所であるように思はれてゐる。充實したる生活とは、斯れであると考へられてゐる。一般社會の人士は素より、宗教家は世人を濟ふために説教をする。軍人は國家の干城たらんがために射撃をする、學者は眞理の探求のために研究する。爲政家は國家の勃興と、人民の幸福のために施設する、そして、藝術家までが、人生の眞相を闡明せんがために製作するといふのである。しかも、千九百年代の世界は、各人の有する提灯にも嫌らず、其の上に尙多くの街燈を建設して、茲に光明の國を實現したと思つてゐる。——街燈の建設者と云ふのは、學者、宗教家、政治家、藝術家のたぐひである。

私は曾て製造場を訪問して、深く感じた事があ
る。私の見たのは、蒸汽力を以て運轉せられた一
臺の機械が。殆んど音も無く、滑らかに、鐵板を
削つたり、穴を穿たりするのであつた。其の様子
は、我々が鉋で木板を削るよりも、さらに容易に、
さらに自由であつた。それと同時に、猶私の眼を
驚かしたのは、汽管に蒸汽の通ずると同時に、ピ
ストンからホイールへ、調帶から、機械の要部へ、
順次に傳はる力の齊整として、其間に少しも不自
然や、不公平の行はれてゐない事である。

我々は日常斯かる光景に幾度か接してゐる。し
かも人々は何の氣も付かずに重要な事を見通して
ゐる。

機械の働は無意識である、無關心である、過つ
て不幸なる職工の身體が、これに觸れる時、機械
は鐵板と等しく、これを削り去つて悲しまない。
しかしこれは機械の罪では無く、機に臨んで其の
運轉を中止せしめなかつた技師の罪である。

私が「明るい眼」を以て闇の中を歩けといふの
は、唯單に機械の如く、無意識であれといふので
はない。落葉の如く自然に任せよと云ふのでも無

い。私の比喩の意味する所は。意識を超絶して、
無差別なる絶對の力に導かれよと云ふのである。
太陽の光を反射して光有る如く見ゆる遊星の如く
ならず、自體より光を發する恒星の如くなれと云
ふのである。意識は相對である。反射である。唯、
自ら光を發する太陽は、無意識なるが如くに見ゆ
るではないか、しかしそは無意識では無く、意識
を超絶した絶大の力である。

我等の人格はひとつの太陽でなければならぬ。
唯此の眼を見出すのは、非常に困難である、我々
の心の中には、これを妨ぐる様々な特質が存仕し
てゐるからである。しかし、若し一旦これを見出
す事が出来たならば、我々の生活は從來のよりも
遙かに、自由なものにならなければならない筈で
ある。

青葉嫩葉語らぬ友が古傷の淋しくなりぬ男やもめに

歌をだにうとむばかりに荒びける心を懷き我が立つ

春よ

舞扇 水仙艸の香にも染め醒湖に參る 經机かな

(ゆふしほ)

しかし私は此處で、やかましい議論をするのでは無い、私は議論は下手だむしろ、これは怠惰者の日記に過ぎない。私の詩である。

私の近所に小さな森がある。私は度々其所へ散歩にゆく。

長い冬が終つた。空氣と土地とに濕ひが感じられて來た。

森の落葉樹は、まだ痛々しい裸であるけれども、生々した緑の蔭を其の下に作るのも遠くはあるまい。私は歩きながら、ふと地上を見た。其所には去年の落葉が、霜や、雪や、風に曝されて、半ば腐れながら埋もれてゐる。樹の間を洩れて、朝日が射す。夜露が蒸發して、一種の枯葉の匂ひが森に満ちる。私は云ひ難い感じにうたれて、しばらく落葉をながめてゐた。

比喩の中に含まれた矛盾や、不條理は別として此の落葉の姿は、私の云ふ「明るい眼」である。半ば腐れた落葉の、寂しい静かな姿の中に、私は異常な力を感じるのである。落葉は一見静寂と老朽の象徴の如くに見える。何事もなく、永久の眠りに埋れてゐるように見える。しかし、仔細に見る

と、渠は「潜める力」である。風雨霜雪の作用の下に、しづかに分解しつつ、さらに新しい物質を作らうとしてゐるのである。渠自身には何等の意識も無い。目的ありて、分解し、亦生成するのではない。唯自然の法則に従つて變化するばかりである。此の點が或は消極的であるように見られるかも知れない、しかしそれは所謂積極的であると多くの人の考ふる意志活動と對照せしめるから、さう見ゆるので、眞實に於ては此の無言の變化ほど積極的な者は無い。なぜなら、其はあらゆる力の源泉であるから。

此の比喩に於て、我々の所謂意識は、むしろ落葉の分解から、さらに生成せられた樹木の新しき葉の如きものであらう。我々の日常生活の爲めには、意識が極めて重要であり、亦便利な者であるけれども、生活其者を支持してゆく力は意識の中には無い。むしろこれと對照せしむれば、無意識的なる所の者である。

蒸氣機關

さらに、ひとつの例をとる。

Ingres Cubists 及び Futurists 各派の人々を合せて二千の作品が出品された。もしこの畫會が變革といふやうな氣分を表はしてゐるとすれば、世界的變革だと評されてゐる。何れにしても驚異の眼を以て迎へられてゐる。出品者の中にはゴッガン、ゴッホ、アンリ・ルソウ、ブランクジ、ブウルデル、メイロルス、ロバート・チャンレル等がある。天才肌の人達のお揃ひであるだけに色々な經歷がある。ゴッガンは成功せる株式仲買人といふ噂があり、ゴッホは殆んど三十歳になつて繪を始めたさうだ。ブランクジは彫刻に志した前五年間商業學校にゐたといふ話だ。アンリ・ルソウは中年まで税關の官吏を勤めてゐたさうだ。

△アンリ・ベルグソン

が米國を去つて巴里に出發する日その滯米中何が最も彼れを強く感動せしめたかと問はれたのに對して、彼れは『米國人の理想主義』と應へた。そして次回の米國訪問は講演の爲めではなくして、普通の旅行と觀察の爲めに来るやうになるだらうと言つたさうだ。

△エレン・テリイ

女優にも滅び行く若き日の影がある。殊に華やかな職業の人だけに老齡の哀傷は更に深い感じがする。エレン・テリイはこの頃六十五回の誕生日を迎へて悲しい祝宴を張つたさうだ。

△米國の大統領

は毎年その公用文書に、少なくとも二萬の署名を書かなければならぬさうだ。各内閣員も署名の爲めに事務の大部の時間を費さなければならぬといふことだ。最も長い署名は the Chief of the Division of Warrants in the Treasury Department. だらうといふことだ。

△英國のイブセン劇

この頃ヘイマアクト座でフレデリ

ック・ハリソン氏がイブセンの『ザ・プレテンダース』を上場したが、大した成功であつたさうだ。何故今日まで此の大傑作を行かなかつたのだらうと、英人自らが評し合つてゐるさうだ。

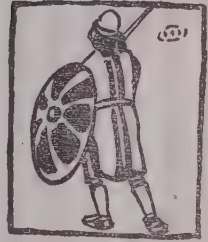
バイブルの戯曲化

聖書中の教訓や傳説を舞臺に上せる

ことは、歐米各國では久しき間殆んど禁止せられてゐるやうな有様であつたが、今日では英國に於ても、サロメやエリヤを材料としたバイブル劇が數多出版せらるゝやうになつた。この頃ルイス・ナポレオン、バアカアが『ヨセフと彼の兄弟』といふ脚本を拵へた。作としても、舞臺上でもなか／＼の成功であるらしい。紐育タイムスのアドルフ・クロラベル氏は、バイブルより出でたる脚本にして、かくの如く完全な作物は未だ見ざる所であると評してゐる或人は吾々の舞臺上に數年來見ることの出来なかつた驚くべきローマンチックな心持を豊かに提供する作であると言つてゐる。鳥渡作の梗概をかい摘んで見ると、幕はゼーヘムの天幕の場から始まる、そこにヤコブが彼れの末の子ヨセフが丁年に達したお喜びをしておゐる。そして彼はヨセフに色々な色彩の衣を與へる。それを傍に立つてゐた兄弟が不快氣に眺めてゐる。これが葛藤の緒となつてバイブルの傳説のやうに、ヨセフの兄弟がヨセフは殺されたと言つてルウベンといふ男に小羊の血をなすり附けたヨセフのかの上衣を持ち歸つて来る。第二幕はポティファスの妻ツレイカがその夫に對する謀反及びヨセフに對する彼女の熱烈な戀の場になつてゐる。やがてポティファスは侵入軍を防ぐ爲めに、自分の家事の一切をその戀敵たるヨセフに委ねて、戰場に出かける所て暮になつてゐる。

△モルガンとラファエル

米國の大富豪ゼー・ビー・モル



海外思潮

記者

△『ヴェニス』の商人と猶太人 此の頃のことである。

紐育市の教育監理局に對して猶太人の父兄が、沙翁の『ヴェニスの商人』を教科書として使用することを、禁止して貰ひたいと申し込んで來た。その理由はシャイロツクの性格が太だしく彼等にとりて不快なるものであるが故に少くとも彼等の子弟を入るゝ學校に於ては、該戯曲を教科書として用ふることを廢され度しとのことであつた。市の學校監理官キリアム・マツクスエル博士の答解は猶太人の要求を容るゝものであつた。即ち各地方の學校に訓令を發して、『ヴェニスの商人』が住民の感情を害するが如き所に於ては、全然認定教科書たらしむ可からすといふやうな事を實行しやうとしたのである。ところが方々から米國人の反抗が起つた。

教育局總裁トマス・チャール氏は次のやうな批評を下してゐる即ち『余は此の事件に關して、監理局の偏狹にして小膽なる見解を了解する能はざるのである。若し斯の如き理由を以て『ヴェニスの商人』を撤去するとならば、同じ理由に由りて伊太利人はイヤゴウの性格の爲めに『オセロ』の講義禁止案を提出するであらう。かくて吾人は世界幾多の傑作を失はなければならぬ不幸に陷るのである』云々。復た一面猶太人に同情ある評家は沙翁がシャ

イロツクを描いた時の、彼れの猶太人に對する見解は、什うしても同情ある見方であつたとは思はれない、そこで這般の猶太人の哀願は理由ある事だと言つてゐるが、ジョーン・メイスフィールド氏はその著書中に『ヴェニスの商人』を批評して、情的性格と智的性格の葛藤・即ち心の人と頭腦の人の争ひであるに過ぎぬ。アントニオは前者の表象であり、シャイロツクは後者のそれである。決して猶太人に對する惡感情を抱いてゐたのではない云々と言つてゐる。兎も角マツクスエル博士の訓令は一と先づ撤去せられたが、今後の成り行きが見物であらう。

△デヨールデ・バアミングム

愛蘭士文學者のクレゴリア・イヤーイツ等の名は、米國でも久しき以前から評判のものであつたが、バアミングムの名が昨今急に米國に持て囃されるやうになつた。フィラデルフィアの『The Book News Monthly』はその二月號を以て全然バアミングム號として出版したさうだ。

△後印象派の展覽會

二月十五日から紐育で、亞米利加繪畫及び彫刻協會主催の下に改革派に屬する畫家及び彫刻家の作品展覽會が開かれた。その評判は大したものので、革命派とか後印象派の興行だなどとり／＼な批評を以て浴せかけられてゐる。

椿の島に

伊藤 悌二

來給へよ椿の島に來給ひて濃き花のごと汝れをいろどれ
飛び換へる目白みつむるみどり兒の瞳に映る紅色つばき
教など説ける其のとき幼な日の影の出づるが羞かしくあり
霰寒くななめにふる日縫ふて飛ぶ小鳥の影のいとはやかりき
黄昏のあとの闇より曙の前の闇こそいと戀しけれ
背のびすれば木々の梢に廣がれる濃みどり海に夕日射す見ゆ
若人等斧打ちあげて榛木林伐るたそがれに啼く鷗かな
幼妹はやゝふとりたれど悲しみを帶べるうつしが京より來る
瑞典の男たびく遭ひに來る此の世離れの島の庵まで
みそぢにて子なき女のあどけなきそのあどけなきの淋しき日かな

ガンが英國から三十點の有名な繪畫を買ひ集めて、近頃それを紐育の博物館に預けた。それで一月の第一日曜の午後だけで一萬五千人の入場者があつたさうだ。その繪の中にはラファエル一枚だけで五十萬弗のものもあるといふことだ。その外に、ゲエンスボロー、ヴァンダイク、フイリッツポリツビイ、レイノールド、ローレンス等の傑作がある。

△**アブラハム・リンカーン** の紀念館が白館の南方のボトマツク公園に近々建てられることになつた。希臘式にして、費用は二百萬弗といふことだ。

△**和蘭の労働者救済會** がアムステルダムで創立された。有力な市民や和蘭女王の直接の保護の下に經營せらるゝので、『公共相談所中央局』といふ風な名で呼ばれてゐる。最初は一八九八年百五十人の賛助員であつたが、今日では七百人以上の賛助員を有つてゐて、年々の收入が四千二百弗以上になつた。同會の報告書は要求さへすれば何人にも無代送つて呉れることになつてゐる。委員には色々な政黨の人々や色々な宗教上の信仰の異つた人々があつてゐる。相談を申し込みさへすれば、それ／＼専門家がゐて書面で應ずるとになつてゐる。附屬の圖書館には一萬三千以上の書籍も備へてある。單に個人の相談に應ずるばかりでなく、公共團體、保險會社、使用人同盟會、労働組合、市町村自治團體或は外國の政府の相談にも應ずるといふことである。職工組合、貯金、信用貸金、養老金、疾病、葬費、借家、労働者の紛擾、商業經營、失業者、地方労働者の融通、最低勞銀、最長労働時間の協定、及びその他一般の労働者の幸福を増さしむる如き問題に關して、調停或は顧問の事務を取り扱ふことになつてゐる。

△**シヨウと操り人形** 劇場の設備が年々驚くべく贅澤になつて行くばかりであるが、紐育の興行師のエ・ユツチ・ウツドといふ男は、操り人形を復活せしめて、劇場の一大恐慌を惹き起してゐる。これは米國ばかりでなく歐羅巴でもこの頃盛になつて來たやうだ。克蘭・ルイスといふ男が彼れの傀儡を携へて英國に渡つて、昨年倫敦のカメラ俱樂部で興行をしたことがあつたが、大變な人氣で、パナード・シヨ一までが飛び出して來て、彼れの批評をした。彼れ自身の書ふ所によれば、その時のシヨウの批評はヘンリイ・アービングに對する批評よりも、一層丁寧なものだつたさうだ。その最負客の中には、チエスタトンまでが這入つてゐるから愈々面白い現象だ。

△**ベンガルの抒情詩人** ベンガルの詩人ラビンドラ・ナス・タゴールの詩百三篇が 最近英譯せられた。その結果は單に英國の詩壇の新事件であるばかりでなく、實に世界の詩の歴史に一時代を劃したと言はれてゐる。彼は英國に於ては、イーツ等の盛な歡迎を受けた。イーツは彼れの藝術的生涯に於て、未だ斯やうな出來事に遭遇したことはなかつたと言つてゐる。彼れは今や英國漫遊を終りて、米國を訪ねつゝあるのである。シカゴの一雜誌は『吾人がより一層このベンガルの詩人と接近することは、吾々の他の新たな詩の世界を拓かんが爲めである』と論じてゐる。彼は故とベンガルの藝術及び哲學者の家に生れ、詩人である。と同時に音樂者であつて、ベンガル語が通ずる所の國々に恰なく彼れの詩を傳へつゝあるといふことである。

マスタア・
オブ・アアツ
千葉鑛藏先生撰

泰西思潮

(第一輯)

〔定價五拾錢、郵稅八錢〕

- ハアバア・スペンサア論・フレデリツキ・ハリソン
- 生命と意識……………アンリ・ベルグソン
- トオマス・ヒルグリンと
ヘンリイジチックと
……………デエムス・ブライス

□ ドストエフスキイと
ニイチエと
……………ユリウス・ビヤバウム

□ 戦争の道德的代用法
……………ウヰリアム・デエムス

□ 道德と文藝
……………アルベルシエン

□ ハアバアト大學に於ける
……………ウヰリヤム・デエムス

一大佛蘭西學者……………ウヰリヤム・デエムス

イブセン作三脚本

坪内逍遙先生序 千葉掬香先生譯

ヘダ・ガブラア

定價四拾錢
郵稅六錢

大文豪の全著作中最も好評ある作品。近劇協會第一回の興行脚本。

森 鷗外先生序 千葉掬香先生譯

建築師

定價四拾錢
郵稅六錢

描けるところは、新舊兩時代の衝突。因果應報の平均。病態心理の研究。成功家の陰影。

坪内逍遙先生序 千葉掬香先生譯

蘇生の日

定價四拾錢
郵稅六錢

北歐大詩人の全著作の總跋。大文豪の藝術上全生涯の自傳。其成功と失敗との懺悔、告白。

發兌

東京京橋銀座
振東京五五三

警醒社書店

人事相談所に來る人々 鈴木文治

理想と現實との衝突

拜啓 未だ面晤の榮を得ず候へ共、兼ね〱御高名承はり、是非々々御相談申上度き事相生じ申候。小生近來人生の意義を疑ふこと甚しく煩悶に堪えず候あゝ如何にせば此苦痛より脱却するを得るや、何卒御救済被下度候。

と、かういふ端書を受取つたのは左様昨年の十月初旬、丁度統一基督教弘道會社會事業部の事業として、人事相談所といふのを設けてから五日目の朝であつた。人事相談所といつても、職業の紹介は、設備がないから應ずることが出来ぬ。本所に於ては、たゞ精神上、法律上の問題を扱ふことにしたのである。此端書の如きは、僕個人

宛である。人事相談所に宛てたのではない。住所氏名も明かに記してあるが、曾て記憶にない人である。ない人ではあるが、打ち棄てゝ置く譯には行かぬ。僕はペンを取つて、そして次の如く認めた。

拜復 御煩悶の趣御同情に堪えず候宛に角一應お目にかゝりて、詳しく御様子も承はり、その上にて何分の御盡力も致し申すべく、就ては甚だ御足勞ながら明朝十時までに、當惟一館へ御來車被下度候。早々

僕は此端書を差出して後、結果如何と半ば好奇の心を以て、事件の發展を見たのである。

かくて翌日は來た、朝の十時になつた、常よりも心持ち早く出勤して、待つて居つた僕は、十時の打つのを聞いて、少からず心が躍

つたのである。——コツ〱と扉を叩く、ハツと思つて「お入り」と聲をかける。スウーと戸が開く、途端に顯はれたのは、一個の青年

年は廿四五であらう、房々とした黒髪を、奇麗に真中より分けて居る。顔面蒼白に、兩頬こけ、眉宇の邊、ビク〱と動いて、感傷の色を湛えて居る。

『サ、マアお掛けなさい、ハ、ヤ、私は鈴木で……初めまして……マ、お掛けなさい、そしてゆつくりお話を承はりませう』

青年は腰を下した、そして語り出したのは、かうである——
青年は當惟一館より程遠からぬ

坪内逍遙博士譯

沙翁傑作集

洋正 裝價 天各 金湯 國金 美電 本圖 口參 繪拾 及五 木錢 版密 寄稅 人數 八各

●新刊發行●

ジリヤスシーザー

沙翁の政治的興味を中心とする者は、シーザー傑作中
 一が末路の史實を材として波瀾重疊の男性的悲劇を織成せる者は是

三十該撒奇譚の上前今や全く其譯筆を新にして之を純然たる

現代語に翻し文藝協會公演の臺帝國劇場

に上せんとす就中ブルータス・アントニーの演説は政爭熱の熾んなる今日一段の興

版九 ハムレット

版三 オセロー

版三 ロミオとジュリエット

版再 リヤ王

早稲田

東早稲田 京早稲田 牛早稲田 込早稲田

早合

稻資

田會

大社

學富

出版

版山

部房

振一振五

替一替〇

京三京番

兌

犬と猫

電車にて御來の節は三田三丁目にて降り、東行せらるるか、「さつまっばら」にて降車し屈曲西行せられたし、根本正氏の隣宅、

場所

東京市芝區三田
四國町十五番地

三田家畜病院

設備完全
看護誠實

院長 大繩 千雄

牛と馬

今般充分の施設を盡し開業仕候間何卒大方家庭の愛畜家諸彦御引立の程祈り奉り候、

在世の折の知己をたよつて、或新聞社に入社した。ところが、同僚の誘惑、社長の放埒、さては編輯長などの我儘に、到底居堪らず、一年餘の後飛び出した。今度は友人の周旋で、某新領士を相手とする實業雜誌に入社したが、此社長頗る奸諂にして、我慾深く、陽に政界の名士某氏を攻撃しながら、其隱秘を發くと脅迫して或纏まつたものを手に入れた。更に他の名士を攻撃すると揚言して、これよりも莫大な金を奪ひ取らうとして居る。自分等は畢竟、此破廉耻漢の先棒に使はれて居るに過ぎぬのである。これでは自分が何の爲めに生きて居るのか、社會の目的、人生の意義、皆悉く暗となつて仕舞ふ——と、憤慨の色を漲らしつゝ、涙ながらの物語——。

僕は聞きながら、他事とは思は

れず引き入れられた。

『僕にも同じやうな経験があるんですよ、君、ね、人生は或意味に於ては矛盾の巷です、理想と現實との衝突の場所です、けれども又かゝる横暴な者が幅を利かして居るから、一方正義の士が結束して戦ふといふことにもなるのでせう、戦ふのです、戦つてそして勝つのです、ね、お互に奮闘しませう』

僕は手を差し伸べて、青年の手をムツと握つた。青年の眼からは熱い涙がたぎり落ちる——

驚くべき家庭の破壊

家には父の遺産が多少あるといふ、母子三人の生活は何うやら出来るといふ。『さうか、それぢや君何も驚くことはないさ、母さんにも事情を話して、潔く退社し給へまして此數年間の戦に、衰へた健康と傷いた心とを養ふんですね、

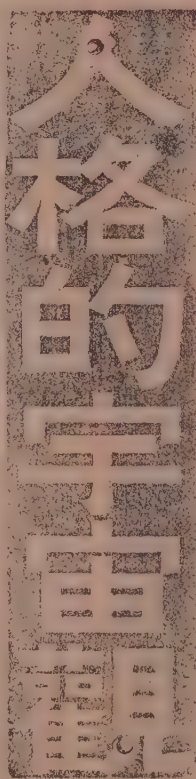
事件の性質上、名も所も公表することが出来ぬ。たゞ芝區内の或高臺の町とのみ言つて置かう。長男次男とは、或會社に職工として勤め、長女は、同區内の下町の或商店に嫁せしめた。家には相當の

土重來の勞で、再び活社會に出てゐるのです。』青年の口元には微笑が浮んだ、萎えた眼には光を帯びて來た、そしてあまたたび、感謝しつゝ、家路に着いた。……今は元氣な青年として、再び活動を開始して居る。

僕が嘗て『現代の二大不安』と題して、統一教會で、夜の集會に話をしたのを聽いて、僕に相談する氣になつたとのこと、僕は少からず、こそばゆい感に打たれた。

バウン博士原著

今泉眞幸
ギユンツク
兩先生共譯



□ 菊版クロリス表

□ 定價壹圓五拾錢

□ 郵税拾貳錢

著者バウン博士は彼の有名なるウヰリアム・ジエームス及びシュンツ等と米國哲學界の牛耳をとりたる碩儒にして之を世界の思想界より觀るも彼のオイケン及びベルグソン等と比肩するに足るべく夙に一家の統系を形成して世を驚し殊に其の宗教哲學に至りては古今獨歩の姿なり今や弊館其の翻譯を篤學の士令泉眞幸及びシドニー・ギユリックの兩先生に托して成る併かも其の譯たるや世間並のものとは大いに違ひ飽迄も周到なる用意と親切とを以てしたれば譯文の流暢なる又譯以外の説明の行届きたる等今更贅言を俟たず願くは江湖諸彦の一讀を俟つ

教 文 館

東京市丁座
橋區番
銀地

振電
替話
東京
橋區
番
一五二
三五二
七五番

町寧であるが、手迹で見ると、明治前の人と首肯れる。

二三日を過ぎて六十恰好の老人が訪ねて来た。黒本綿五つ紋の羽織に、木倉の袴、鬚髯長うして威あつて猛からぬ風貌、慇懃に手をつかへて――

『鈴木法學士は貴殿で御座りまするか、拙者は新様な者で御座るが折入つて御相談の筋あつて――』

と、さながら武者修行の挨拶のやうである

『これは――申し後れました、某こそは――』とはまさかに言はぬが、其物越恰好で、早くも舊幕臣……と認めば案の定、今は昔、徳川旗本八萬騎の一人、祿千二百石を食んで、上野の戦争にも従事した豪の者。夫れも今は昔。廢藩置縣の後、某の縣の權少書記官にな

つたこともあるが、縣令と衝突して忽ち辭職。實業界に手を出しても見たが、士族の商法に目算ガラリと外れて元の獸阿彌。追々と親戚縁者は死に絶えて、今は老いたる妻と一人娘の三人暮らし。寄る年波に氣力も衰へて、妻は裁縫の賃仕事に、月十四五圓の收入はあるが、拙者は漢籍教授の看板を掲げても、時勢が違つて来る者もなし切迫詰つた今の窮境をお救ひに預かり度い。職業に選り好みは御座らぬ、ならば別莊番のやうな所でも……と長々と身上話。

『イヤ、お話でよく分りました、誠に御同情に堪えさせぬ。さうながら御覽の通り、當所では職業紹介は扱ひませぬので。ハイ其儀なれば東京青年會の方へ御出での方、然るべきかと存じまするが、ハイ……』

『まだ、何ぞ御用で――』

『實はその……』と手にした風呂敷包を廣げた。廣げた風呂敷の中を見ると、職業の心配も勿論あるが、實は敵本主義の、かうした物語がある。

夫婦の間の一人娘は今年十九、足らぬがちの生活の裡にも、掌の中の花と賞て、荒い風一つ當てずに育て上げた天晴なさうやう。せめてはよい婿がねを求め當て、可愛い初い孫の顔でもとは、夫婦が老の寢覺めの物語であつた。けれども知人、友人、親類縁者も、絶えてない、今の心細い身の上では、これといふ候補者もない。一

資産があつて、父も相當の商人である。然るに件の嫁した夫といふは、如何なる天魔の魅つたのである。ふと、神明前の銘酒屋に足が向いて以來は、家業も妻も忘れ果て、夜を日に繼ぐ亂行放埒、たま／＼家に歸ることあれば、貞淑な妻を打ち打擲、ある限りの衣類道具を悉く持ち出しては、酒に浴び女に溺れて居る。はては、信用の續く限り、借り盡し、借り倒し、店も家も人手に渡しては、身は詐欺取財の罪名の下に、鐵窓に呻吟せねばならずなつた。妻は泣く／＼實家に引取られた、時には妊娠六ヶ月の身であつたが、夫より感染した惡病の爲めに、流産して、腹の子は暗から暗へと葬られた。

妻の健康の恢復せぬ間に、夫は牢獄より戻つて來た。そして共々

妻の實家の厄介になつて居たが腐つた性根は、遂に直らずに、又々放蕩に、更に賭博の味を覺えて、父の財産をまで持ち出して質入する。家人が驚いて之を止めやうとすれば、『何をしやあがる、何うせひいゝの入つた身體だ、臭い飯は覺悟の上だ』との不貞腐れの暴言。あまりの事に警察に説諭を願ひ出たが糠に釘。どゝのつまり、大なる負債を残してアイと家出をした。債權者は保證人たる、父の方へ矢の催促である。かゝる間に犠牲となつた妻は、婦人病で入院をする、歸つて來ると、信州から脅迫狀をそれとなく、妻の手許へ送つて連れ出しにかゝつた。離縁話が持ち上つたが、先方の所在が不明である。債權者の督促は急であるし、連出されてはならぬと心配もするし、家内中は此頃夜の眼も寢ずに

苦慮をして居るといふのである。僕は其家の長男が、人を避けての物語に、思はずも悵然とした。遺傳——境遇——教育——運命といふやうな考へが、走馬燈の如く頭の中に隱見する。僕は知る限りの法律上の忠告を與へ、加ふるに家族の精神上の慰安をも、與ふることに努めた。此際僕は、實に重大なる責任の地位にあることを自覺して悚然として獨り戰いた。兄なる若者は、それでも一人の同情者を得たるを喜ぶものゝ如く、『何分今後もよろしく』と言葉を残して去つた。

混血兒の婿養子

十一月の末であつた。人事相談所の規則を呉れといふ手紙が來た、何ういふ必要があるのか、書體は畏つた四角な字で、文句も

も澤山あつたが、さて、懸金は懸けたが、見物はさせぬ、見物させる案内は来て居るが、間もなく都合によつて延期だと言つて来る。

いよ／＼満期の曉に、約束の金を取りに行くと、いや今日は社長が不在だの、係員が外出中だの、明日まで待ての、一ヶ月待ての、と、容易に渡さない。それも東京市内なら三度も四度も根よく請求に行くもの、郡部とか地方とかなると二三度と来る中に根負けして。到頭そのまゝになるのもあるとの話かうした曖昧會社は最近一年間に四百五六十も出来ましたと、それは後で、其筋の係員の話であつた。

これも或る意味に於て、其被害者の一人、芝は三田四國町のさる小商人である。兼ねての風評を聞くものから、満期早々かみさんが

受取りに行つたが、社長不在と言つて渡さず、到底、女などで取れさうもありませんのてと、僕の友人の紹介で、其かみさんが、一夜、鹽煎餅の一袋を手土産にしてのたのみである。

僕は其證書といふのを一覽すると、驚くべし、捺印には立派に『株式會社○○遊覽會社印』とありながら、肩書には『無限責任』と記してある。無限責任の株式會社！

先づ以て日本の商法にはない代物である。よし、此一事以て彼等の死命を制するに足る矣。僕は翌早朝、九分の俠氣に一分の好奇心を交へて、モーニングを一着に及び腕車で勢よく、會社の門前へ乗りつけた。

見ると、更に驚くべし、會社の看板のかゝつて居るのは、物置同様の小室で、正面の堂々たる構

は、社長の住宅になつてゐる。案内を乞ふこと、四度五度したが、容易に人が出て來ない。最後に大聲を發して『此處には誰れも居らんのか』と一喝すれば、給仕體の者やうやくに出て來た。社長は昨夜外出して不在だといふ。行先はと尋ねると、それは不明だといふ。出先を知らせずに出歩く社長といふものが、何處の國にあるものか『お前ぢや分らん、社員を出せ』と大喝して、構はず玄關に上り込むだ。見幕に恐れて、外交主任とかいふもの、恐る／＼出て來て來意を尋ねる。いふまでもなく懸金の請求である。わざと稱號つきの名刺も出してある、委任狀も携へて居る、満期にもなつて居る。おまけに『無限責任の株式會社』とあるのは、これは支那の法律でいもやつたのかね、先づ日本の商法に

そのことゝ、勧める人もあるまゝに、時事新報に求婚の廣告を出した。すると問もなく、翌日の事、一人の青年が横濱からやつて來た老人一段聲を低めて——

『それがその……』實は混血兒で御座いますして……と面目なさうである。

『イヤ、混血兒だつて何だつて構ひませんさ、人物さへよけりや……ねそれ?』

『それで、ハイ、それで』、それと話を繼いたが、手つ取り早く言へばかうだ。其青年が候補者と名乗つて來たのである。今横濱の某會社に勤めて居て、夜は英語の夜學に通つて居る。卒業すれば會社で待遇もよくして呉れる。充分老夫婦も養ふといふのである。父は米人、母は日本人、自分は相州の母の戸籍に入つて居る。伯父

の承諾も、友人の保證もあるといふので、心細い身には浮かど青年を信じて、いふがまゝに契約書を取り交した。後で聞けば、會社に勤めて居るのも怪しく、伯父の承諾書とは偽證文であることが分つた。怒つて懸合に及ぶと、それまではしげく出入したのが爾來鮑の道。其證文は果して有効か否かとの質問である。

たよりない身にはさういふ事もあらう、と、一しきり人の行末といふ事を觀じた。が、其證書は無効である、結婚は人の自由意思を基礎とすべく、本人の意思に反して強制するは不可能である。若し強いて行はんとすれば、これ公の秩序善良なる風俗を破壊することとなる。況んや先方は私印私書を書造して居る、御心配には及びませんと、申渡せば——

『イヤお蔭で娘一人を傷物にせず済みました』と、お辭儀し、歸つて行つた。

無盡會社へ懸金請求

それから、今一つ、かういふのがある。日露戦争の後に、幾多の泡沫會社が出來た中に、多人數の懸金の利子で、甘い汁を汲はふといふ種類の無盡講類似の會社が、ウヂヤ／＼と出來上つた。中に○遊覽會社といふは、月々幾許かの額をかけて置くと、一ヶ年の後に、これ／＼の額になる。それに年五分の利子を附して、更に東京近傍の名勝を全く無料で、見物をしてやる。といふのである。見物をして、利子を附けて金を返して貰ふのであるから、こんな甘い話ではない。……で、此手にかゝつて加入した者



米國人のベルグソン評

ゆふしほ

ベルグソン教授の近頃コロムビア大學に於ける講演は、米國思想界に稀有の反響を與へた。同大學はベルグソン教授の到着と同時に Doctor of Laws の學位を教授に呈した。その聴講者の多かつたこと、新聞紙の紹介の盛であつたことだけを見て、彼れが如何に米人に歡迎せられたかを窺はれる。今雜つと彼地の雜誌新聞の批評を掲げて見やう。紐育の『カゾリツク教界』誌はベルグソンの『變化の哲學』のセリイスを出版して、「彼れの成功及び世界的感化を承認しなければならぬ、しかし彼れは危険な教師である」と評してゐる。ボストンの『Watchman』誌は、彼は根本的の保守主義者なりと言つてゐる。シカゴの『聖書界』は、彼は汎神論と自然神教の於高さ綜合、或は内在と超越の於高さ綜合を誘起しつつあるのである、しかも彼はこれ等凡べての各自の價值及び缺陷をも認めつつ

あるのである云々。紐育市新社會主義の週刊雜誌 “The New Review” は「ベルグソンは社會主義者の智識的立ち場を裏書きするものである、而て彼れは經濟的宿命論の哲學の爲めに偽らず而かも力強く論じてゐるのである」と評してゐる。他の一面に於てシカゴ市 “The Syndicalist” 誌及び紐育の “Mother Earth” 誌は、彼れはやゝ無政府主義者の思想家であると言つてゐる。ルイス・レヴィン博士は紐育タイムスの全ページを費して『ベルグソンとサンデカリズム』といふ題の下に、『疑もくなベルグソン教授の哲學は著しく革命的傾向を有してゐる。彼れの哲學は人生を以て新しき形相に向上する不斷の努力と見做すものである。而して大膽に創造的進化の可能性を信ずることを言明するものであるが、ベルグソンの哲學とサンデカリズムの間に、何等かの内的關係ある

はないね』と一本参ると、彼れは一言半句もなかつた。今日は手許に金がなく支拂はれぬといふので、延期哀願書を書かした。かくて期日に及んで取りに行くと、給仕は恐る／＼元利取揃へて恭しく渡したが、社員らしい者の影も見えなかつた。

後に該契約者の許に社員が出て『君のところでは六ヶしい人を寄越すから、困るよ』と言つたとか。フムと言ふべきなりだ。

昨年十月より今年三月に至る、事件總數三十七、多くは親族相續貸借のもつれの人事相談、乃至は精神的煩悶の同情慰安、中に奇抜なのは、夫婦喧嘩の仲裁や、親子不仲の和解もある。僕も追々は『天下の苦情引受申候』との看板でもかけるやうになるであらう。

六合雜誌春期講演會 (參聽隨意)

△場 所

芝三田芝園橋、統一基督教會

△時

五月四日 (日曜) 午後七時開會

講 師

第一高等學校教授

三 並 良氏

文 學 士

小山東助氏

文 學 士

今岡信一良氏

早大教授文學士

内ヶ崎作三郎氏

(其の他二三知名の士へ紹介中)



南國より武藏野まで

坂本正雄

林檎畑を耕す時にも、郷土文學雜誌の『山鳩』

は、仕事着のポケットに、軽く心地よく入つて居た。初夏の海風に吹かれつゝ、わづかに緑の音を立てる木の葉の下に横へて、夢中に讀むのであつたから、村人は遠くより眺めて、坂本の息子は佳く何時も畑に行つて晝寢をする事だと思つたのであらう。高知から訪ねて來た友達は、よく畑ばかりに居る土嗅い奴だと思つたのであらう。

土足になつて居れば、父と隣人は喜び、横へて瞑想し、机に讀書して居れば、僕の魂は踴躍をした。

わが心は、南國の小高原の畑の中から、單に大洋を遠望し、水の都會を見下し、白く阿波境に續

く國道を眺むるのみでは満足出来なかつた。

一週に一度、二里半の道を歩いて高知に行く事の如何に楽しかつたであらう。未だ基督教徒でなかつた私は、郷國の孤獨なる生活に於て、既に既に安息日の尊さと有り難さとを感ぜざるを得なかつた。また、安息日を迷信的に怖れて居た。

——月一日（日曜日）はれ

今日は日曜なれど仕事を爲す、手斧にて足を傷けしは、これ安息日を守らざりし罪にや。

昨今のぼせて鼻より出血す。竹村君に基督教新聞を送る。

それで日曜日だけは、高知へ氣を齊しに出ることにして居た。圖書館へも行けば公園へも行く、書肆へも行く、友人をも訪問する、時會々新聞社へも行く（行つて冷遇せられる）、棧橋へ行つて

が如く思惟するは前後轉倒せることである、云々。紐育の「Evening-Post」は何故にベルグソンの哲學が他の外國に於てよりも、米國に於て太だ氣受けが宜いかといへば、それは既にブラグマチズム及びキリアム・ジエームスの博學の權威によりて、ベルグソン哲學の進入路が開拓せられてゐたからであると評して、『ブラグマチズムはそれ自身運命の快活なる努力及び希望滿々たる享受者の哲學に對する概括的名稱である。吾人の内に存在する最高の光明に隨從して苦闘し、勝利に向つて惡戰し、正直なる戰鬪の失敗を耻辱とせず、光榮と希望は奮闘に現在することを認むるものはブラグマチズムである。ベルグソンの「創造的進化」も亦これに外ならぬのである』といふやうなことを言つて、ブラグマチズムと彼れの哲學を結び付けてゐる。氏は尙ほ言をすゝめて、『多くの現代の代表的運動は彼等の哲學的根柢をベルグソンに發見したのである。彼れの哲學は先覺者の教義である。例へばかの一定のプログラムを提供するなどゝ豫定することなくして、たゞ本然的に奮闘するサンヂカリズムの人々も、或は凡べての前定を否

認する未來派の人々も、みな是れかの『吾等は何處に行きつゝあるかを知らず、されど吾等は進みつゝあり』とうたへる聖者の子供等である。但し斯やうな思想上の謀反は、既に吾々の心の中に潜んでゐたのであるが、未だ完全な哲學的系統の洗禮を受けなかつたまでである。ベルグソンは吾々の此の革命的思想に裏書きすべく米國に來つたのである。彼れは今米國に來りて、革命は進化であることを教へつゝあるのである。彼れの哲學は不安、探究、摸索、懷疑の時代人に對して、力強き宣言である。現代思想は爭鬪せる矛盾の集合である。一人にして社會主義たると同時に、アンリ、ベルグソンの苦痛なる非民主々義を信ずる。ベルグソンの哲學は實に斯の如き綜合の可能を證明し獎勵するものである。即ち彼れは『只一つの方面にのみ達せんことを努むる勿れ』と教ふる。『汝の衝動に従ひ、あらゆる方面に前進せよ、汝は或る明かなるものを攫むことは不可能であるかも知れぬ。しかしながら、汝が快き活動をなしつゝあることを發見するであらう』とは彼れの哲學の新聲である云々。

翌朝、神戸に上陸した團體は、更に翌朝、品川のブラットホームに降りた。乗り換へたる汽車は目黒、大久保を迂廻して赤羽に到り、更に日光行に乗り換へて、愈々私どもは鬼怒川上流域の水電作業地に刻々と近づいて行く。

山の手線に乗る人は誰も氣付くが、初めての勞働者も、「目黒」驛の次に、暫く措いて「目白」驛のある事などを、罪も無く喜んで居た。私はそれよりも、大久保を通過する折に、ひとり何となく悲しうなつて實に弱つた。そろ／＼と武藏野の面影が眼前に拓け彩り映ぜられて、文人の住んで居そうな平家が青葉の陰や麥畑の中央などに、點々散在して居る。田舎の私に、わざ／＼手紙など呉れた先輩などの事を思ふと共に、未知の友人の生活などをも想像して見た。

汽車は用捨なくはしやいだ音を立て、原を横ざり林を縫ひ、私たちの身體とたましひとを快よく揺りつゝ走つて行く。

私は何時も「己の爲す事に一々意義あり」と確信して、何事をも精限り根限り行ける性であるけれども、この大いなる、美しき懷しき武藏野を背に

して、自然の法則に反した嫌な音響の凄まじく猛り立つ「蒸氣」に引づられて、會津境の山奥の、鬼怒の川上に「勞働一の爲にすゞ／＼行く事の、その意義を人ありて質したならば、其處で私は餘程答に窮したのであらう。

汽車から降りて山道六里、溪をつたひて木の根を攀ぢて、國を出て三日目の夕暮、噴い噴い高原へと來た。

山か、あらず、大地の塊か、否々、實に私は崑崙山系と樺太山系との入り亂れて接觸したる此の本島中原の頂に達した時、大陸と云ふものを想像するの態ありやと自ら怪み、且つ侮つた。

谷を挟みたる高原は、遙かに西方に延びて連續し、或は妙義、榛名となり、或は淺間、御獄となり、或は富士となり箱根となつて廣がり、其の雄偉を誇つて居る。あゝ南國の小さな丘の上で、宇内の睥睨も無いものであつた。六合の大自然は私の幼稚なる姿を見て、洵に片腹痛たかつたであらう。

渺茫として限りなしと思はるゝ高原にも、流石

汽船などをも眺める、兵營の柵外に立つて調諫に見惚れたりもした。

此の、一週一日の我が「自由なる日」は、實に有らむ限り神經を興奮させて、而して歡樂と苦惱とを徒らに多く胸の内に取り込んで、平日の單調な生活の悲哀を醫さうと心掛けた。そして大いに狂喜したり憤激したりした。

——月——日（日曜日）はれ

高知に出づ、高知教會にて久しぶりに多田氏の説教を聴く。門外にて竹村母子に會ひしは悦しかりき。

圖書館にて『土陽新聞』を調べしに、野口氏と余との論戰を第三者が評したる文二ヶ所を發見し、余は私かに喜びたりき。

濱田君に日曜の花市にて會ひ、その家に行き、夕方出で、一の宮の方へ歩き、蘇野にて訣れ歸る。用なくして郊外を散策す。また樂しきなり。

本日、後藤男來高の故を以て、市の入口には歡迎門を造り、又た家には國旗を掲ぐ。あゝ大和民族建國の大業を壽ぶぐ可き紀元節に日章旗を擧ぐる事を知らざるの民人、わづかに一大臣の旅行を祝して歡呼せるなり、嗚呼。

夜遅く歸宅すれば、米國より又た復た『アン・アッピール・ツ・ゼ・ヤング』の譯書を密送し來りあり。早大政治科講義録（前金切）も来る。『ローマ字』来る。おゝ樂しき事よと獨言して床に入り、臥せしまゝ讀みてありしに、父上枕元に來られ、「起きて讀むか、燈を消すかせよ、」と云はれたれば、慥れランプを吹

き消す。

是の如き月日は、三回の出奔を以て區劃はしたものの、随分長く續いて、實にひどく私の心を訓練した。が私は到底、小仙郷に生れて小仙郷に死んで行く程の、餘裕たつぷりな聖者の態度をば遂に學び得なんだのである。

*

父兄の許を受けて郷關を出づ！と云ふことは、私の最も愉快とするところであつたが、私が勞働者の群に加はると云ふ事は、病中の老ひたる父を如何ばかり憂へしめたであらう。

何故私は、勞働者になつてまで、國を出なければならなかつたのか？ そうだ、「武藏野」と云ふ表現せられたる自然界の神秘を戀ひ慕ふて、ひたぶるに進まんが爲である。

あゝ武藏野！爾を叫ぶ私の聲と、爾を包藏せる私の胸の想と、これ我が生命であつた。

明治四十三年の五月廿五日、遙かに武藏野を望みて、南國の一少年は、多くの勞働者に互して、土佐の海を艚ぎ出たのである。

*

クレイ・マツコウレー氏 七十年誕生記念

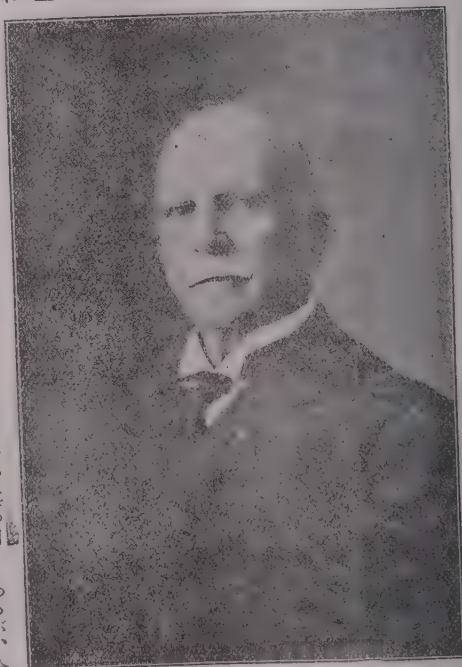
米國ユニテリアン協會を代表して、我が日本に滞在し、惟一館内に起臥して、親しく統一基督教弘道會並に同教會の事業を輔佐して居らるゝクレイ・マツコウレー氏は、來る五月八日を以て滿七十歳の誕生日を迎へられる。我等同志の間には、バイボデイ博士をも招待して、同日を以て何か記念の會合を催す筈であるが、本誌の爲めにも、

淺からぬ關係ある同氏のことなれば、こゝに小照を掲げて、聊か祝意を表することとした。

マ氏は千八百四十三年五月八日を以て米國に生れた。

千八百六十四年プリンスストン大學を卒業し、同六十七年マスター・オブ・アーツの稱號を得た。後シカゴ、ノースウエストの神學校に學び、更に獨逸に遊んで、同七十三歳を以てハイデルベルヒ大學を卒業したのである。其廿歳の頃會々米國の内亂に

遭逢し軍に従つて捕虜となり。リツチモンドのリッツイ牢獄に呻吟したこともあつた。千八百六十八年を以てユニテリアン教會の牧師となり、マサチュセツツ州のウヲルサムルに在任三年、ワシントンのオー



を遍歴したこともある。併し乍ら氏は獨りユニテリアンの宣教師たるのみならず、其間或は慶應義塾に教鞭を取り、或は日本及び日本語に關する研究と著述とに従事した。兼ねて各種の外紙に通信者として、筆を執つた。

千九百年(明治卅三年)氏は、後事を我が日本の同志に托して一先づ歸國せられたが、歸國後も、飽くまで斯教の爲めに盡力せられたのみならず、我が日本を彼の國に紹介するに勤められ、殘に日露戦争の際は、我が國の爲めに筆に口に孜々として盡され、功を以て勳四等に叙せられた。千九百九年を以て、再び渡來せられ、現に亞細亞協會、國際新聞協會其他の副會長である。氏には又著書もいろいろとあるが、今回七十年誕生記念の爲めにとて『The Faith of the Nineteenth Century』(約五百頁)の大著を完成された吾人は其在來の意氣と、其努力不斷の精神に對して、敬意を表せざるを得ない。

に凹凸と傾斜とが自然に出来て、地勢を南北に岐けて居る。天から降る雨、地から登る人、これを悉く二つに振り分けざれば止まなかつた。

私は、一、二、三！と云つたような氣分を以て「これから、更に、前に、進む、のだ」と、獨りて云ひつゝ歩き出した。

まだ松の木の下に憩^{やす}んで居る一組もあれば、先へ急いだ一組もある。組を離れて私は一人、ぐんぐんと、疲れた足を踏みめて速力を迅^{はや}めた時、何だか宇宙の大氣に、後から煽^{あふ}らるゝような心地がして、私は今、孤獨では無いと思つた。神に對する新^{あらた}なる感象は、私の胸内をかけめぐる思ひがした。

*

鬼怒の川上に夜に、入つて着いた労働者の團體は、幾組もに分割せられ、各々土方の親分に引率せられてトタン葺^{ぶき}の勞働小屋に這入つた。

幽谷の急斜の地を、纔^{わづ}かに堀り拓いて、其處に間に合せの極く粗末な小家を建てたものである。

壁は無く、其の代りに丸木柱へ板を打ちつけたまゝである。柱の丸木は多く栗であるが、時は六

月に近く植物繁茂の最も激しい季節であるから、四寸ほどの芽は青く室内に向つて突き出て居た。濕氣は最も多いのに、床は地を離^{はな}るゝこと僅かに一尺一寸ばかり、それに一枚の疊があるでなく、悉く琉球蓆である。實に驚いた。私は大いに疲れて、直に其處へ横になつて了つた。

一寸、三十分間程まどろむで、眼をあけて見ると、多衆は未だ寢て居ない。氣が付いて見ると自分の枕元に大きな茶碗があつて、酒が並滿と注がれてある。これは如何するのだと傍の者に尋ねると、それはちやかた（土方の親分）が今晚の御馳走で、一人が茶碗に一杯づゝだから君の分だと云つて濟して居る。ふーん……流石に土佐人は労働者に至るまで正直と、頗る感心し乍ら、僕は呑まぬから呑んで呉れんかと云つたら、そいつは喜んでギューと平氣な顔をして呑んで了つた、私は又た、日本で土佐人が一番多く酒を呑むから、それで馬鹿が澤山あると云ふ事を考へて寂しかつた。

予自身も亦一個の教師である。殊に教職に在るものゝ通弊として、その見識或は生活が偏狭に傾き易いのである。予の本國に於ても此の弊風太だしくして、彼等は自己の小さなる天地、自己の教師てふ職業以外に社會を顧ることを爲さざるものが多いのである。併しながら現在の社會は、吾人が自己の狭小なる生活範圍にのみ執着することを允さないものである。吾人の周圍は社會の同情、社會奉仕、自己犠牲の人々を要求する聲に満ちてゐる。吾人は社會奉仕のあらゆる機會を發見するところが出来る。吾人は國語を教ふることを以て、或は文典或は歴史を教ふることを以て教職に在る者の任務を果せりと想ふものではない。是等は蓋し末事のみ、吾々が自己を訓練し、他を導く所は只その品性の陶冶であり、人間らしき人間を作ることである。吾等の兩手は弱者を引き上げ、吾等の腕は倒れんとする者を擁かねならぬ。今日吾等は一刻も他人を忘るゝことは出来ぬ。

さりながら此處に一つ考へなければならぬことがある。社會奉仕の方法である。即ち予の所謂社會奉仕の科學である。社會奉仕が健全に發達せんが

爲めには、社會奉仕の根本義として先づ自我といふ一性格の健全なる建設を企てなければならぬ。社會奉仕の科學は、その健全なる社會奉仕の根本要素を説明するに他ならざるものである。即ち吾人は社會奉仕の人としては、心情と頭腦の人でなければならぬことを教へらるゝのである。感情的であると同時に理性的でなければならぬ。動的であると同時に靜的でなければならぬ。その二種の要素を含有せぬ奉仕は時に盲目的不合理のものたることを免れぬのである。例へば社會奉仕は恰かも鐵道事業の如きものである。蒸汽は感情の衝動力であり、ブレーキは理性の判斷力である。情緒は人生の蒸汽であり、理智は人生のブレーキである。停止し而て思索し、判斷せしむるものは理智のブレーキであり、我を驅つて動き而て走らしむるものは感情の蒸汽力である。健全なる社會奉仕は理智と、感情との調和ある存在を要求するのである。

二

更に吾人は社會奉仕の科學が吾人に示す所の三

社會奉仕

ハアバード大學名譽教授　ピ　イ　ボ　デ　イ

一

予は如何にせば日本が將來倍々發展すべきか、或は如何にせば日本が繁榮なるべきかの問題に關して、諸君に卑見を述べんと欲するにもあらず、またその方法を論ぜんと欲するものでもない。予が諸君と談じ諸君と親しく接して相語らんとする所は、如何にせば吾々は國家が要求する所の國民であり、社會が期待しつゝある所の善良なる市民であるを得べきかの一問題に就いてある。何れの時代、何れの社會に於ても何れの國家に於ても最も渴望せられつゝあるものは、自己犠牲者であり、献身的であり、忘我的なる人々である。予は日本に來りて、幾多の人々より、如何にせば此の國の發展と光明を大にすべきかに就いて質問せらるゝ數多の機會を経験したのである。予の這般

太平洋航海の途に於て、同船中なりし日本の一紳士は予に向つて、日本はその物質的或は商業といふが如き文明の爲めに破壊せられんとする精神文明を、如何にして救済することを得べきかといふやうな質問を發した。更にホテルに於ても某新聞記者は予を訪ねて、如何にせば日本の精神文明を發展せしむることを得べきかを問ふた。その國家をして發展せしめ、その社會をして幸福ならしめんが爲めには、その各個人が發展し、人生の根本義を味到するだけの能力を有するまでに進歩しなければならぬ。吾人の生活が單に自己一個の職業の狭き範圍にのみ繫縛せらるゝことなくして、吾等の心が廣く世界を觀、吾等の希望が洽なく社會的となり、吾等の性格が圓熟し、吾等の生活の力が更に更に擴張せられなければならぬ。諸君は將來教師として、社會に立たんとする青年である。

に諸君に生命を與へ、靈覺を與へたるが故である。彼等の性格を通じて、彼等の生活を通じて、燃ゆるが如き愛の力を注ぎ、生命の根柢を直覺せしめ、吾等は彼等によりて尊敬、愛情、信從、憧憬等の自發的醇情を引き出だされたるが故である。これ等の人々は諸君の兩親であり、朋友であり教師であつた。

今社會が要求しつゝあるものは實に斯の如く彼れの自發的生命的力を吾々に與ふる人々である。

吾々の國家は自己の靈覺を頌ち、自己の信仰を與へ、自己の尊嚴を主張し、高潔なる理想を有する人々を渴望しつゝあるのである。その自己の靈覺を與へ自己の信仰を直覺せしむることは、人間に與へられたる天恵の最大の能力であつて、これ實に吾々の生命に生命が相觸れ相鳴るの極致である。社會奉仕の最終の目的は吾等の生命と生命の共鳴でなければならぬ。

昔時ユダヤの聖者は、彼れが許に携へ來られたる。跛者に面して『起ちて歩め』と言つた。これ生命と力に滿ちたる社會奉仕者の聲である。

汝の愛情、汝の洞感、汝の自己犠牲、汝の生命

の提供は靈覺の境に達して始めて眞實の權威を有するものである。汝の靈覺が人の内心に觸れ、汝の生命が他の生命に鳴る時、汝の社會奉仕が圓滿の境に達したのであり、汝の社會、汝の國家が眞實の幸福を享樂することが出来る。現代の社會は實に斯の如き靈覺の人、生命に溢れたる社會奉仕の人を渴望しつゝあるのである。

(高等師範に於ける講演の大要。筆責在記者)

■ 此一筋

沼波瓊音著
丙午出版社發行

大正文庫の一として出版せられたるもの。瓊音氏の小品、評論三十五篇、とり／＼に氏一流の洒脱な筆の運びに、勁直な偶意を含んだ文意が面白い。中でもその俳句に關する論なり感想が新しい佳醇な氣分を湧かせる。心持ちの宜い著作である。(定價七拾錢)

■ 蘇生の日

イブセン作
千葉掬香譯

■ ヘダ・ガブラア

イブセン作
千葉掬香譯

■ 建築師

イブセン作
千葉掬香譯

右三書共次號に於て詳評することゝすべし。定價三冊共各金四拾錢なり。

つの要件を遺れてはならぬ。社會奉仕をして一層有力に、一層効驗あらしめんが爲めに吾々は教育、協力、靈覺の三要素を考へなければならぬ。

第一に吾人は社會奉仕の人たらんが爲めに、先づ自己を訓練せなければならぬ。社會に向つて起たん前に汝自身を教育しなければならぬ。予の本國に於ては吾等の大學内に教育部を設け、主として學生自身の品性、精神の訓練を獎勵しつゝあるのである。

第二に吾々は協力することを知らなければならぬ。經濟上より見ても商業の秘訣は協同である。

或は工業にせよ、農業にせよ、協同なき所には勞費、徒勞、濫費といふが如き幾多の經濟上の損失を免れないのである。吾々が若し個々別々に離れて社會に起たんとするならば、吾々の社會奉仕の成果は太だ力弱きものとならなければならぬ。予の居住するボストンに於ても吾々は、社會運動の中心の建て物を所有し、米國の各地と聯絡を保ちつゝあるが故に、吾人は坐からにして米國全土に亘りて社會奉仕の有利なる報告協力の便を得るのである。

最後に社會奉仕の最も有力なる最も偉大なる者は靈覺の要素である。諸君は學問を以て、優しき心を以て、金錢を以て、勞力を以て、經濟機關を以て、醫學上の智識を以て、團體の力を以て、協同の力を以て社會奉仕の人たらんとするか。然り开は太だ適當なる努力である。併しながら諸君は更に大なる權威あり、効果あり、而して社會奉仕の絶對力であるものを遺れてはならぬ、そは即ち汝の靈覺を與ふることである。汝自身を與ふことである。社會奉仕の最初にして最終なるものは、汝自身を提供することである。諸君は一層社會をして希望多からしめなければならぬ。社會をしてより多くの生命を有たしめなければならぬ。そはたゞ汝自身の生命と、汝自身の時間と、汝自身の努力と、汝自身の愛と、汝自身の名譽と、而て最後に汝自身の靈覺を與ふることによりてのみ實現することが出来る。諸君の過古を顧みよ、諸君が忘れ得ぬ人々を名指し見よ。それ等の人々は諸君に語學を教へたるが爲めに、數學を教へたるが爲めに或は諸君に金錢を與へたるが爲めに諸君に記憶せられ、愛慕せらるゝのであるか。否々、彼等は實

れらるべきものでない。概念の中に入つた生命は、已に生けるものでない。生命を解き放つて自由を得させよ。されば神と云ふが如き概念の中に自らの生命を閉ぢ込めんが爲めに、態々その様なものを掴まうとすることを斷念しなければならぬ。その様なものを掴む必要は毫もない。たゞ生命と共に流れよばよい……働けばよい……考へればよい……掘ればよい……創造すればよい……

成長すればよい

掴まうとする努力は徒勞であるばかりでなく、却て有害である。今や神中心の宗教の時代は去つて、生命中心の宗教の時代が來た、生活中心の宗教の時代が來た。

*

人は言ふてあらう。『吾等は自己の生命を豊富にせんが爲め、力づけんが爲め、眞實にせんが爲め、また成長せしめんが爲め、神を信じ、宗教を信するのである。謂はば、生の源泉たる神を信するのである。』と、併しながら、生命がもし、無始無終、不生不滅のものならば、源と云ふものがあ

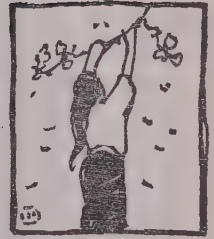
らうか、生命は不斷の流れではないか、成生ではないか、吾々はその様な生命を神と云ふが如き概念に化することが出来ない。概念化したときは已に死物である。生命そのものでない。吾々はたゞその様な生命に生ればよいのである。

生きよ。生きよ。たゞ生きよ。これ最も新しい、最も自由な、最も潑刺たる宗教でないか。

*

そして又、實際に於て、神を信する人々の生命は、彼等の謂ふが如く豊富となつて居るであらうか、強くなつて居るであらうか、眞實になつて居るであらうか、滞りなく成長して居るであらうか。成る程、かゝる人々の中には、所謂、感謝の生活を送つて居るものが多い、そして矢鱈に自信の強い、自分及び自らの周囲のものゝみが、正しくて、眞實で、高尚であつて、その他は一切、語るに足らざる別種の人でゝもある様に考へて居る人が多い。壯であると云へば云へるかも知れん。強いと云へば云へるかも知れん。

併しながら、吾々はその様な強さを願はない、その様な歡喜や確信を求めない。彼等が自ら握つ



生命中心の宗教

加 藤 一 夫

吾々は永遠の求道者である。否、求生命者である。そしてそれが爲めに宗教の門に入つたものである。併しながら不幸にして吾々の入つた宗教の世界の、如何に無力なるかを感じざるを得ないものである。何となれば今日の多くの宗教家、及び宗教信者にとつて、宗教は一つの誤魔化してあつて、信仰は唯だ苦痛や煩悶に對する一つの魔酔劑の如き觀があるからである。

神を信ずると云ふ。^{*}併しそれは多くの場合、神でない。神の概念である。生ける生命ある神でない。死んだ手細工の神である。そして自己の精神活動の凡てを、自ら造つたその手細工の、神と云ふ函の中に、閉ぢ込めやうとするのである。彼等はたゞ、偉大なる宗教的天才が如實に直感し生活

した實生命の糟粕を拜み、偉大なる人格が、自己の眞實に歩みたる、死せる足跡を信じて居るのである。宗教的天才にあつては、澎湃たる生命の怒濤の自己の衷心に躍るを感じ、幽玄なる神秘の生命の、自己衷にたたふるを感じて、假りにその生命を神と稱したのであつた。然るに、今人にあつては神と云ふ概念が先づ組み立てられて、かの廣大無邊なる生命をその中に閉ぢ込めてしまつて居る。前者にあつては生命であつた、後者にあつては牢屋である、生命を斷つ毒藥である。

^{*}眞の宗教者よ。汝を信じてはならない。眞に生きんとするものよ。汝は神を信じてはならない。

生命は、卿等の信じて居るが如き概念の中に容

エレン・ケイとギルマン夫人の論戰

欄 よ し 子

日本でも昨今新しき女の問題が兎角思想界の一つの意味ある現象となつてゐる今日、外國に於ける此の種の問題を紹介するのも興味あることだと思ふ。瑞典に於て一九〇九年に出版せられて、今英譯になつてゐるエレン・ケイの “The Woman

Movement” に於て、エレン・ケイは彼女の力強い

暢かな筆を以て、盛に米國のギルマン夫人(C. F. Gilman)一派の女性主義即ち社會的母性主義を攻撃してゐるのである。蓋しギルマン夫人が社會的母性主義(Social Motherhood)を固持するに對してエレン・ケイは彼女獨特の『一元論的進化論』哲學に根據を置いて、個人主義的母性主義(Individualistic Motherliness)を高調するのである。ギルマン夫人は男性と女性との間に於ける人間としての普通の類似點を強く主張して兩性間の差別を極小なるものと見做すのである。これに反してエレン・ケ

イは兩性間の取り除く能はざる差別觀を高調するのである。ギルマン夫人の説に由れば、人生の進化は即ち全然人性(Human)の進化を意味するのであり、エレン・ケイの進化は人性の進化を認むるも、併しながらそれが人生の進化の全てではない、人生の進化といふ場合には人性の進化と同時に母性(Motherliness)の進化をも亦別個獨立の意義を有するものなりと認むるのである。彼女はまた言つてゐる。『若しギルマン夫人の論に従て、從來男性特有の性質として認められたる「男らしさ」といふ性質をば、女性が所有すべき將來ありとしても、或は女性の範圍内に屬する性格と認められし「女らしさ」といふ性質が男性の所有に歸屬すべき日が來るにしても、それは必ず比較的のものでなければならぬ。畢竟するに或る程度まで男が女らしくなり、女が男らしくなるといふに過ぎないのである。

たと思つて居る信仰の爲めに、如何に彼等が自由の生命の活動を抑へられ、如何に偏狹な世界に自らを閉ぢ込められ、如何に貧弱な經驗に満足して、打ちては返し、返しては打つ現實の事象の中に隠されたる、無限の富を握らうとはせず、自ら狭ばめた概念の世界の縛しめの爲めは、何事をも眞摯に、自由に、大膽に、究むることをなし得ずして、淺薄に、お手輕に、粗雜に解決をつけて居るかと思ふことを知つて居るからである。それが爲めの元氣であり、それが爲めの確信であるに過ぎないことを知つて居るからである。

生きよ生きよ、たゞ生きよ。^{*} ゆるみなく内心の聲にきき、ゆるみなく外界の事象を洞觀し、たえず破壊し、たえず創造し、而してさながらの生命そのものに生きよ、これ、最も新しき宗教である。吾々の内界の事情は茲に至らざるを得なくなつたのである。そしてその消息は中々に述べ難い。

▽神學部廣告△

一 比較宗敎學より見たる新約書

一 オイケン著「認識と人生」(Erkennen : Erkennen und Leben)の解説

一 高敎授 三並 良氏擔當

右の學科につき毎週火、金曜の兩日午後四時より講義す。而して「認識と人生」はオイケン敎授最近の著述にして、その解説は本月より開始す。目下恰好の入學時機なり。詳細は統一基督教弘道會神學部に問ひ合せられたし。

ケイに従へば、『女らしき』なる言葉の舊時代の定義は普遍的根本義の個性を侮辱するものであり、社會的母性主義が個性に對して與ふる定義は、根本義的婦人性を侮辱するものである。蓋し本能的婦人性に比較すれば、人的個性は生の低級なるものである。眞實に『新しき母』は、舊き時代の婦人の如く、彼女の自我を全然拋棄することはない、さりとてまた全々自我に執着することもないのである。『彼女は古代の婦人が男性をして戰場に走らしめ、戦はしめ、而て勝たしめたるが如き女性の職分を、より一層高き水平面上に保留するならん——彼女は各異性が個人及び人類の幸福の爲めに各個々の方向に味到し、しかも同時に齊しく異なる事業に於て相濟することは、最も確實に社會を利する所以であることを知るであらう。』

彼女は藝術、科學、工業及びその他の職業に關しては必ずしも兩性の平衡を主張しないが、政治上に至りては兩性の平衡は避くべからざるものと爲すのである。『男子と女子の協力によれば、男子のみが編成し能ふより以上の良法律を制定することが可能である、一婦人及び小兒に關する問題は、

女子と男子の協力によりて、より一層根本的に眞面目に取り扱はるべきである。男女共同ですれば社會生活が今日以上に、有意義なる觀察點から批評せらるゝであらう。母性が如何ほどその婦人の本務によりて煩はさるゝこと多きにせよ、母性は決して婦人の政治的活動を妨ぐることはない。

猶ほ婦人が結婚を避け、而して家庭を形成するの代りに、何等かの職業に従事せなければならぬやうな現代の傾向は、決して思想上の危険を醸すが如き虞れはない。これ教育及び物質上の原因から發生する一時的の現象に過ぎざるが故に、現在の教育方法及び經濟關係の變革に従て、將來婦人の結婚慾が社會的再燃すべきである。』

彼女は更に歩一步母性主義者の實際問題に關して評してゐる。即ち人類として、婦人の社會的價值、社會的母性、育児及び、男性と同じ方面に於ける勞働の能力に關して論及して『婦人運動の勝利はかの男性が婦人に對して抱ける「婦人は男子と同じやうに活動することが出来ぬ」といふ偏見を先づ全力を注いで、取り去ることによりて始めなければならぬ。ギルマン夫人等の「社會的母性」主

もし全然兩性の差別が取り除かるゝものなりとせば、男性と女性の間に幾世紀間結ばれ來りたる精神的戀愛は全然幻滅せられなければならぬ。然らば、そこにたゞ一方に於ては、動物的生殖の爲めの配偶要求の衝動心が存するばかりであり、他の一方に於ては、同性の友人間に表現せられたるが如き同情の念のみが遣されるであらう。かくして人と人とを結び付ける力は兩性の差別 (Sexual difference) より、個性的變化 (Individual difference) の上に移さるゝであらう。併しながらこゝに忘れてはならぬ問題がある即ち戀愛のそれ／＼である戀愛に於ける同情の觀念は人生が多く普遍的人性的に進むにつれて、個性に於ては異性の力を感じること倍々激しきを加うるのである。男らしき男は女らしき女を戀ひ、女らしき男は、男らしき女を慕ふことは人性の自然であるが故に、若し兩性が接近し、類似して他の異性の補充を要求せずなるならば、男性は戀愛的方面に於ては、かのブラトーンが主張したりしが如き、古風なる戀愛即ちブラトニック・ラヴに囚へられなければならぬ。

エレン・ケイによれば兩性差別の幻滅、或は保留

といふことは、最も有力なる倫理問題の一つとして取り扱はれなければならぬものである。性の差別を認めざるが如き思想がありとすれば、それは單に女性の新しい運動に對して、男性の惡感情を惹き起すのみならず、女性運動そのものにとりても由々しき大危険である。ギルマン夫人一派の『社會的母性主義』は、必ず男性の激烈なる反抗運動を喚び起すであらう。『家庭に代ふるに社會』といふが如き母性主義は、戀て性 (Sex) の反壓及び憎惡の結果として性の戦ひを生まなければならぬ。』

『婦人は其家庭に在りて、自己の子女を通じて、及び社會的政治的生活によりてのみ、自我發現の完全を期し得べきである。』エレン・ケイが主張する母性主義に表はれたる婦人の生活は『最も強烈な、最も擴大的な、最も個性的な者である。彼女は母性本能の生理的及び精神的作用に於て彼女自身には最も自由であり、他に對しては最も多産的であり、最も利己的であり、最も利他的であり、最も包容的であり、概括的である。何となれば彼女は此本能の手段によりて彼女自身の生と同様なる人類の生を向上せんと欲するが故である。』エレン・

ある。我は將來社會或は家庭が、今日以上に其母性に對して、適當なる保護を與へられんことを希望する。我は來らんとする新道德の社會を待つ。それは男女綜合の社會である。個人の要求と社會の要求が綜合せる社會である。異教徒と基督教徒の概念が綜合せる社會である。將來の欲求と過古の尊敬が綜合せる社會である。

この大地がこの麗しき新道德の花を以て飾られたる時、最早や地上に婦人運動が世を騒がすことはない。併しながら婦人問題は絶え間なく起るであらう。それは婦人によりて社會に與へられたるものでなくて、社會によつて婦人に與へられたる問題であるだらう。如何にせば彼女等が新時代の母であることの大なる特權の價値を、一層大にすべきかの問題でなければならぬ。——この新道德がやがて女性と男性とをして、人類の凡べてを祝福するの日が來るであらう。』

エレンケイがギルマン夫人の社會的母性主義に對する批評及び彼女自身の母性主義は概略前述の通りである。更に進んでギルマン夫人の社會的母性主義とその批評に就て述べやう。(未完)

編輯たより

△本月號には白石喜之助氏の論文を掲げる豫定であつたが記事の都合で來月號に廻した。

△小山氏は本郷六丁目大津館に滞在中。

△内ヶ崎氏は府下巢鴨一四七〇へ移轉。

△加藤氏は麻布區簗笥町六七へ移轉。

△別紙廣告の通り本月四日、六合雜誌第一回の講演會を開くととなつた。愛讀者諸君の來會を大に歡迎いたします。

△姉崎博士も今回の講演會に出席せらるゝ筈であつたが、都合に依つて同博士だけは二十五日に講演されることになつた。

△來月號からは鈴木氏が大に奮勵して、社會、政治に關する時事問題を大に掲げる積り。

△海外思想界の紹介に關しては、自今一層の努力を盡したい考へである。即ちそれを以て本誌の一特色とする豫定である。

義は此の迷信を證明してゐる。即ち『社會的母性主義』は兩性の同權利とは同本能を意味し、女權の擴張とは男性が従事しつつある活動の同じ範圍の適要を主張し、兩性の同一とは兩性が全々同一であることなりと思へるのである。彼等は近代女性主義が男子とその妻と闘ふことによりては、その女も、その男も、その子孫も幸福を享樂することを得ざることを知らないのである。要するに社會的母性主義の根本誤謬は、开が母性を非社會的本能なりとする反面に於て、婦人の個性的活動を社會的本能の表現と見做して、母性と婦人の個性的活動を全然別種のものとするに在る。これ大なる矛盾であり、迷信である。凡べての社會的本能は、悉く原始的本能から教養によりて引き出されたものではないか。凡べての教養的發達は濠洲のネグロの娘の性の衝動とブラウニングの十四行詩の戀愛の情調の間をも流れてゐる。もし『社會的母性主義』者が獸類及び未開人と共通せる母性が、個性の表現でないと斷言するならば、彼等の論調は、Sistine Chapel に對して個性の表現を認めずといふと——何となれば獸及び未開人も裝飾を表

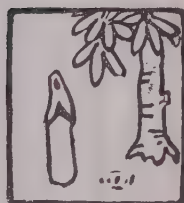
現するが故に——同じ論法である。彼等は母の本能が母性に進化し、母性が更に個性に進化することを知らないのである。母の本能が母性にまで進化することは教養の最大なる功績である。それによりて母性の本能が一層複雑に傳道的になるのである。母の愛及び母子相互の愛情は、その小兒の個性的感情の上に深き感化を與ふるのみならず、却てこの愛情は人生相互相濟の情を發せしむるものである。——それは却て利他主義の根本であり、社會本能の幼芽である』。斯やうに考へて來ればエレン・ケイはギルマン夫人に比して一層保守的であり、合理的であるといふことが出来る。彼女の愛及び結婚の觀念は革命的である、しかし彼女の母性の觀念は頗る合理的である。彼女は言ふ、『極端なるこの婦人運動が勝利を得べきことを恐るゝが如きは大なる謬見である。太陽が刹那に幻滅し、流れが源に溯るを信ぜざるが如く、我は斯様な婦人運動の勝利をも信じない。何等の教養と雖どもこの大自然の根本的法則を廢止することは出来ない。教養はたゞその自然的法則を豊富にするだけである。而して母性は實に根本的法則の一つで

つてこれがファウスト戯曲にも現はれ、遂にこの戯曲中には思潮や、筋に矛盾が生じて居はしないかと云ふとである。これは今日も尙ほ専門研究家の大に論じて居る所であるが、吾人は單簡にファウスト戯曲も、ゲーテが人格の進歩と共に、進歩したと云ふとが、最も公平を得た議論であらうと思ふ。さうすると思想上からも、亦歳月上からも、ファウストなるものは、ゲーテが一生の大事業であつた云ふべきものである。

併しながらこれだけでは無い。この大著は。獨乙民族の生氣の鬱勃たる發現と云ふべきものである。ファウスト前篇が完成して出版されたのは千八百八年である。さうするとこれはゲーテが六十歳の時である。此の時に當り獨乙中興の詩星は前後して歿し、十年間熟戀の親友たりしシルレルも既に無く、獨乙の國運は日々に衰頹し、邦國の山河は悉く敵軍の蹂躪するに委され、ナポレオン帝國は新たに建設せられて歐洲に覇を稱し、かてゝ加へて獨乙は千八百六年イェナ附近の會戰に大敗し、獨乙最後の城堡と頼まれたる普國は斃されたのである。かゝる時代に當りファウストは世に出た。

そしてこの時から云ふと丁度十八年の昔、ファウスト斷篇なるものが世に出た時に毫しの感動をも世人に與へざりしに引きかゝて、今や電光石火の如く、ファウストの名は忽ち四方に喧傳せられ、極まりなき耻辱を受けて居た獨乙も、精神的には尙ほ未だ亡びざるを示した。蓋し獨乙人の國粹とも云ふべき、安靜を好める生活、自然に親しむの慄慄、思索の雄大等の如きは皆な、この大作の材料にならざるはなかつたのである。ゲーテは實にこの著作によつて將に眠らんとする、否亡びんとする獨乙魂を覺醒し、引いては政治上の復活をも準備したのである。

此の如くファウストは國民の生活と多大の關係を有つて居る。然らばかゝる關係を有つとの出来るのは、何故であるかと云ふに、ファウスト戯曲の中に呈出せらるゝ問題は、如何なる世に生るゝにしても、人間として——少くとも自意識の覺醒せる者には、當然起り來るべき人生問題であるからである。そして一度この問題が生じた時には、人



ファウストと人生問題

三 並 良

*

世界的文學の定評あるゲーテのファウストが、鷗外氏の翻譯によつて、我が國民にも讀まれるやうになつたのは悦ぶべことである。固よりこの翻譯が成功して居るや否やは別問題である。僕は餘り現代語に譯しすぎたのに不満足がある。これではファウストの性格や氣分が現はれない。ゲーテが故意に韻文にした意味も打ち消されてしまふ。口語體の詩趣を解し兼ねる僕には、讀んで嚴肅な感を起すべき場合に、反て滑稽な心地がする。若し夫れ一字一句のことを云つたならば非難すべきものは随分澤山にある。併しながら兎に角此の難解なる名著を譯了された勞力には感謝せざるを得ないと思ふ。

實に此のファウストに就ては、單に大著と云ふ丈けては足りない。ゲーテはその自傳「詩と事實」

中にも云へる如く、人形芝居のフウアストより既に彼れがストラースブルク留學中に多大の感動を受けて居り、越へて二年即千七百七十三年フランクフルトに歸つて居た時には、既に彼れがファウストの一部分の原稿は出來て居たのであらう。さうすると廿四歳の青年は既にこの大作に取りかゝつて居た、併しそれが直ぐに完成されたのではなかつた。この間の起伏はこゝに冗長に説明しなけれども、彼れが「こゝにファウスト脱稿すと」自記したのは、千八百卅一年七月廿日であるからこの間實に五十八年の星霜を経て居り、彼れが永眠の前年に當り、彼は方に八十二歳の老人であつた。茲に於て當然起るべき問題は、ゲーテはこの五十八年の間、常に同一の思想を以てファウストに對して居たか。この間に色々思想の變化が起り、從

けれどもこの光景も、畢竟彼れに取りては

何等の壯觀じや、而も嗚呼、是れ遊戲に過ぎず、無際限なる自然よ、我れ何處に汝ちを捕へん。

であつて、あらゆる生命の本源なる自然に接近し、この内部にまでも進入せんとするのであるが、どうしても自然の生命と、彼れ自身の生命とが、融け合う程に一致するとは出来ないのである。思ふにファウストが咒文によつて地の靈を招けるは、之を介して自然の内部に進入せんと企てたものに相違ない。然るに地の靈は萬物の消長、變化、際限なきを説きたる後、

汝ちの了解する靈にこそ汝ちは似つれ、

我れには似もやらず

と云ひ置きて消失し。ファウストは

汝ちに似ずとか。

然らば誰れに似たる。

我れは神の像なるに、

汝ちにさへ似ずとや。

と忿瞞に絶えないのである。思ふに彼の地の靈の云へる「汝ちの了解する靈にこそ汝ちは似つれ」の語中には、極めて深い意味がある。人間の了解す

る靈とは何ものであらうか。これは大に考ふべき問題である。地の靈は「我れには似もやらず」と云ひ放てるにあらずや。抑も人間は靈と肉とより成るを以て、物質的自然に似たるものなり、と思惟するやも知れざれど、實はこれよりも神に似たものであつて、生命の融合を求めんとすれば、人間の了解する神の靈に、之を求むるを至當とすとの暗示が、こゝに與へられてあるものと見なければなるまい。

※

然れども信仰を失うたファウストに、これが分らう道理はない。而も彼れは依然として人世の最大幸福と、最大悲痛とを味はんとするの希望を有し、この大膽不敵なる、天地を覆さずんば止まざるの意氣がある。されば彼れメフィストと契約を結ぶに當りては、

我れ刹那に向ひ、

しばらく待て、汝ちは實に美なり、と云ふ詩あらば、汝ち我れを、汝ちの奴となすも可なり。

その時我れは好んで滅亡せん。

と云つて居るが、これより彼れは益々迷うて人生

間は煩悶するであらう、迷ひもするであらう。失敗もするであらう。色々と道路を見出たさんと焦慮もするであらう。遂には光明を發見もするであらう。ゲーテは斯う云ふ人生を自己の實驗に照らして、フアウスト戯曲中に書き出して居る。それだから之を讀む者にはどうしても、胸に反響が起り。人事ならざる感じがする。之を以てフアウストは何時迄も舊くならないのである。

フアウストの上篇を讀んで、これは別に變つたものでないでないか、矢張戀愛小説に過ぎないではないか、と云ふものがある。その云ひ分は一應尤もではあるが、然し未だゲーテの眞意を知るとは出来ないものである。ゲーテによつて呈出せられた問題は、世界のとは否世界は人間に解釋が出来るか、どうか人間と生れて來たものは、この世界にどう生きて行つたらいいか、と云ふ問題である。此の問題は決して閑問題ではない。人間と云ふものは既に太古の時からこの問題の爲めに煩悶して居るのである。世界の眞相を知らんが爲めにフアウストは「哲學や法學や、さては醫學や、その上あらずもがなの神學を、熱心に勉めて、學び

盡くした」のである。けれどもその結果は何んであるか。曰く「その智さは以前とちつとも異つたとはない」「我等に何も知れるものでないことを悟るのみである。」是に於て彼れはこれ等の學問によつて世界を知らんとするの愚なるを悟り、直接自然に接し、魔法によつて、

此の世界を奥の奥に於て統ぶるは何ものなるかを知り、

一切の活動力と一切の種子とを直觀し、而して復たと無用の舌を弄せし

と願つた。之を以てフアウストはソストラダムスの著作せる魔法書を開き、自然の眞相を見んとしたのである。此の時彼れは實に

一切のものは相結ばれて全躰となり、

物々は互に働き且つ生さ、

天の諸力は昇りつ、降りつ、

互に黄金の桶を手渡し、

祝福の香を送り來る翼を振つて

天より地におし寄せ來り、

調和の響きは到らぬ限なく宇宙に鳴り渡る。

の光景を眺めて、しばしは茫然たる計りであつた

彼れが此旅行によつて得た信念は、藝術の本領は模範の性格あるものを作るにありとしたとてあつた。これ又彼れが千七百九十四年より千八百五十年に至る迄、單に親友として交りしのみならず、共に獨乙文壇を負て立ちし、シルレルがファウスと戯曲を完成するの道は、之を哲學的に處理するにありとした意見とも一致する所が出來、且つ自ら情熱の渦中にありて、その翻弄する所となりし青春時斯を脱して、老練熟達の域に進みたるゲーテの精神的狀態とも一致するのである。

*

下篇には色々復雜した記事がある。ゲーテ當時の科學思想や、政治界の出來事が大に記入せられてある。是れ彼れが多く假托する所ありたりと自白して居るのを見ても分る。即ちホモンクルスと云ふ小人間が、試験管中で製造せられたり、或は生命の本源は水よりか或は火よりかを、論争したる水力論と火力論とを、擬人的に出だせる、或は當時希臘の獨立戰爭を助けて陣没したるバイロン卿の紀念として、オイフオリオンを畫きたる如きは、皆なこれである。併し眼目の主意は別にある。

それは前にも云つた通りファウストの洗滌練達である。然らばそれはどうして成効するか。

前篇にはファウストが、グレートヘンを愛したことが畫かれて居る。然し彼れを魅するものは、世俗的の戀愛である。これは悲慘の結果をもたらして、確かに失敗した。後篇ではファウストがヘレーナと結婚をする。ヘレーナは最極度の美人である。これは希臘美の極致を代表的に云つたものであるが、ファウストはこのヘレーナを見た時恍惚として、

曾て我れを恍惚たらしめ、

不思議なる鏡に映じて悦ばしめたる美しき貌は今見る美人の泡沫に過ぎざりき。

我が一切の力の活動と

熱情のあり丈けと

傾倒と、愛惜と、崇拜と煩惱とを捧ぐる者は汝ぢなり。

と叫んで居る。これはファウストが美的救済に踏み込んだとを云つたもので、第三幕に記されたるヘレーナと結托して美を得たことは、是れ實に後篇の首腦である。此の美こそはファウストを洗滌、

の肉慾を求め、遂にはグレートヘンを墮落せしめ、「獄屋」の慘怛たる一段に終るとになつた。彼れが狂亂せるグレートヘンの前に立ちて、

嗚呼、我れ生れざりしならば幸なりしに

と叫べるは、是れ實に彼れが悔過、悲傷、煩悶の絶叫であつたのである。

*

こゝに前篇は終つて居るが、若し單に悲劇の積りならば、これで完結にしても差支へはあるまい。併し人間としてファウストを観察する時は、これで彼れの運命が終るものとは考へられない。彼れは那落の底に落ちたのである、更に再び這ひあがる必要がある。即ち如何にせば、彼れは練磨、修養して、遂に正道を發見するやとの問題である。素より先決問題として人間は果して斯く向上し得るものなりや、と云ふともあらう。この問題に關しては後年に至り、ゲーテが書き加へた「天に於ける大序」中に、見るべきものがある。

人間は之を理性と稱し、獨り之を用ひて、如何なる動物よりも更に動物的たらんとす。

とはメイフストの言で

善き人間は暗黒なる（内部の）壓迫を受くるも、よく正道を意識するものなり。

とは神の言である。此の二つの語に於て、明かに人間の奮勵努力に關する二種の觀察が現はれて居る。即ち神より見れば「人間は努力する間は迷ふ者なり」と雖ども而も彼れはよく正道を意識し得るものであるが、メフィストより見れば、人間は神より得たる光明と理性とを濫用して、益々墮落するに過ぎざるものである。ゲーテがファウストを詩材とした青年時代に、既にさうであつたか否かは、問題であるけれども、彼の「天上の大序」を有する今のファウスト戯曲は努力と迷妄、及び墮落と洗滌を主眼としたものである。そして前篇は努力と迷妄、墮落を寫し、後篇は洗滌、練磨を寫したものである。

然らばファウストが洗滌せられ、練達するの道は、どう云ふものであらうか。これが今度の問題である。ゲーテにとつて、そのイタリア旅行（一七八六—一八八年）は非常なる意味を有するものであるが、ファウスト戯曲にも、大なる影響が及んで來た。その詳細なことはこゝに略するけれども、



大破壊前の十五分

絃 二 郎

人 物

七人の男。

小 使。その娘。その息子。

大友公鷹。その書生。

舞 台 面

西洋造りの大廣間。中央に大なるテーブル。七人の男テーブルを圍みて今會議のなかばであることを示す。テーブルの上には書類、インキ壺、鷲毛ペンなど取り亂しあり。正面及び左右に扉あり。上手寄りに窓あり、午後六時の春の光り窓のカーテンにゆらぐ。

第一の男。さよう——大丈夫とは思ふんだがね、あの男もこの頃は妙に新しい事ばかり言ひたがるんでな——

第二の男。さうだ。あの男に言はせると、カントヤヘーゲルなんて餘り舊る過ぎるんださうだ。

第三の男。(この男は知つたか振りをする男で、時々穿き違えて妙な事を云ふ癖あり。)

ベルグソンの精神生活に、オイケンの變化の哲學ちうもんだらう

(隅の方にてクス／＼と笑ふものあり)

第七の男。あい、あい、そいつはベルグソンの變化の哲——

第四の男。それにこの頃はまたメーテリンクなんか擔ぎ廻してゐる。あの男が委員になつて行つたかと思へば心細い譯さ。

第五の男。吾々は何故に家令殿があのやうな優柔不

練達せしむるものであつた。而して之れを思想の潮流から云ふと、當時ゲーテとシルレルとによつて完備せられたゲルマン的原素（ファウスト）と古代的（希臘的）原素（ヘレーナ）との結合を説いたものである。此の結合は即ちロマンチック思潮となつて現はれた。然るにこの結合によつて生れたオイフオリオンは死んだ。その母ヘレーナも彼れに呼ばれて黄泉に往いてしまつた。此の世に留るものは、唯だその衣のみである。ファウストが此の衣を抱くや、衣は忽ち變じて雲となり、雲は彼れを被ひて、空に昇らしめる。こゝに彼れは洗滌せられたのである。哲學的に云へばシルレルの稱へし如く、美によつて教育せられて、自由に到達するに至つたのである。

是に於てファウストは遂に歸趣すべき所を發見した。これから彼れは専心事業に従ふことが出来る「經營以て神の如き生活を樂まん」とは彼れの箴言である。而もメフィストは尙ほ彼れを離れず、屢々彼れを過するのである。又彼れは心痛によりて盲目となるのである。けれども彼れの勇氣は毫しも沮喪することがない。彼れは海を變じて陸と

なし、この地に自由なる殖民の移住し來るべき將來を思ふて愉快に絶えない。その心は益々平和と満足の頂上に達し、ファウストはこの如き高き幸福を豫め感じつゝ、
今や我れは最高の刹那に樂しむ。

と云ふのである。然し彼れの満足も平和も、最早情慾的、肉적ではない。精神的になつた、美的になつた、道德的になつたのである。

夫れ人間が野心満々として努力する時は、或は迷妄惑溺することもあらん。けれどもゲーテはこの如き人間は必ず救済せられ、洗滌せらるゝことあるを疑はないのである。故に彼れは人間は努力する間は迷ふと云つたけれども、亦た

誰れにても、斷えず努力するものは、われ等之を救ふことを得。

とは神の聲で、此の如く努力する者に對しては

天よりの愛之れに同情し、神々しき群は心より此の人を歓迎するのである。

ほれ——あんなに！ 塔の上から石ツあろのやうにあれ——あれ——（一同驚きて左の扉の方に寄る）

（右の扉より小使の息子入り来る）

小使の息子、おぢさん来て頂戴！ 来て頂戴！ 庭

の植木が一時に折れちやつたわ！ 百合も夏菊

も雛罌粟もみんな獸にでも踏みにぢられたやう

になつちやつた！ あれ伽藍の上に大きな火の

玉が翔んでゐるわ！ あれ、あれ、あれ！（指さし

ながら室外に走り出つ。一同また左右の戸口より室外へ走り出

づ）

第三の男。（室の中央に止りて、正面を凝視ながら）あゝ恐ろ

しいことになつた。人間の小さい智慧と力て、

佛の無量無盡の力を量らうとする哲學や神學に

なんの權威があらう。俺達の信仰こそ生命ぢや。

信仰のないお主達に哲學や神學があつたつて何

の安心が得られやう。眞理の泉を汲み出さうと

て、例へば鋼鐵のやうな岩を通して命の泉を掘

つて見るがいい。百尺二百尺までこそ清水も出

やう！ 生命も湧いて来やう！ 一萬尺！ 十萬

尺と掘り行かうなら！ 焔に溶けた硫黄や、鐵

や、硝石の火の柱か人間の呼吸を鎖して了うて

あらう。それでも疑り深いお主達！ この地球の

底の底まで、人間の汗臭い鋤の刃で汚さうと想

ふか。それなら、汚がして見るがいい！ もしこの

地球の極から極を貫く坑道が出来上らうと、そ

れが何の誇にならう。蜂の巢のやうに地球の底

から底を掘りに掘らうと、この地球は大きな塊

以上に何の意味もないものとお前等の目には見

えるだらう。所詮人間の智慧にそれ以上を知る

力はないんだ。その塊の中から萌え出る花にこ

そ美もあれ、湧き出る泉にこそ生命もあるのだ。

その美とその生命こそ人間が經驗することの出

来る最大の幸福なのだ。お前等の小さい力て、

淺墓な智慧で、大地の底を掘るなんて大それた

謀叛を起せばこそ、神佛の罰で、棺も折れる、

花も枯れる、空の鳥も落ちる！ なまじつかな

斷な男を委員として遣られたか、大にその眞意を疑はざるを得ない。(強くテーブルを撃つて) 諸君！大友家の神聖が汚されんとする今日、此時、何が故に躊躇する必要があるか。吾々自ら起つて大友家の神聖を高調すべきである、諸君！吾々は自ら蘇我家に亂入して、彼の謀叛人どもに、大友家の若様が御門跡で在せられることを承認させなければならぬ。(第六、第七、第二の男ヒヤ／＼と拍手する)

第三の男。さうだとも、さうだとも！大友家の若様こそ御門跡で在せらるゝ！罰あたり奴らが、飛んでもないメエテルリンクや社會主義を振り廻して、若様を人間ぢやなどと言ふ！勿體ないことだ。昔なら早速お手打ちものだが、あゝ勿體ない！勿體ない！

(小使入り来る)

小使。電話でございます(一同、小使の方を見る) あのだ蘇我様のお邸からでございますが、只今藤原様

がお出になつて、お話の件は悉細承知致しました、併し若様が矢張り人間様で在らせられることだけは、どこまでも申し上げ度いのでございます、是は藤原さんも御承認なすつたのでございます。と、これだけのことでございました。ハイ——(小使はそのまゝ戸口の方へ歩み寄る)

第三の男。これ／＼それだけだつたか。(小使うなづく) 藤原がさう言つたのか。(小使うなづきながら部屋の外にかくれる) これ／＼あゝ行つて了つたのか。小使までが人を馬鹿にする勿體ない若様を——御佛の教法も最う末か、あゝミ——

(兩眼を拭きながら、投げ出すやうにして椅子に寄る)

第五の男。諸君！(強くテーブルを撃ち) 吾々はかの藤原如きに重大な事件を委任する譯にいかぬ。吾々自ら起つて……

(小使の娘白きエプロンをかけて左の扉より走り来る)

小使の娘。誰か来て下さい！来て下さい！お屋根の鳩がみんな落ちこちるわ！みんな死んでよ。

自動車だ！ 自動車だ！

沈黙。黄昏の色窓を透して漂ふ。鐘の聲靜なり。――幕――

新しい思想に、信仰の木の實を腐爛らす――

(一同またあはてゝ入り来る。室外にて大勢の人聲す。)

第六の男。 賤民どもが若様に逢はして呉れと申して

押しかけて参りました。

第三の男。 何？ 若様に飛んでもない、畏れ多い、

罰あたり奴等が！ (この時戸の外にて、御門跡様！ 若

様！ 殿様を出せ！ 三大夫やあい！ 殿様を、殿様を！ と呼

ぶ大勢の聲す)

第二の男。 どうしたらいいでせう？ どうしよう？

第二の男。 知れたこと！ 水でもぶつかけて追ひ歸

へせ！

(戸の外にて大勢の呼び聲す。小使飛び来り)

小使。 もう駄目でございます、鐵の門がみりみり

といふて大勢の奴等が押しかけて参りました。

(磔を投げつける音、罵りの聲ますゝ近くなる)

第五の男。 諸君！ 大友家の神聖の爲めに！

(護身用のピストルを取り出して、窓より外に向つて空包を

放つ)

一 同。 大友家萬歳!!!

(門の喧騒ますゝ甚し。正面の扉を

排して大友公磨、小使の娘を擁しながら出て来る。兩人とも花やかな旅の装ひなり。)

公磨。 莫迦に騒々しいぢやないか。

(一同齊しく驚きたる様にて敬禮す)

第三の男。(進み出でゝ) これは若様、何ともはや！

蘇我家の奴等が御門跡様を、矢つ張り人間ぢや

と申し居ります。それであの藤原までが裏切

りを致しましたが、多分賤民どもを使噓しまし

たのでございませう。あのやうな次第で(門の方

を指さしながら) それはさうと若様にはそのやうな

賤しい女を――

公磨。 ふーん、これかい、これは俺の戀人だ――

藏原は賢い男だ、親切な男だ、狂人だ狂人だと

狂人でもない者を狂人にして丁ふと云ふ話があ

るが、佛だ、神だと崇り上げて、折角人間に生

れて來た俺に人間の生活も味はせないで、仍り

俺を佛ぢや神ぢやと崇め上げて了うのか。佛と

統一基督教會

牧師 内ヶ崎作三郎殿

右書中の同盟憲法 第三條第二項に示せる意義とは次の如し。

「本同盟ノ認ムル福音主義ノ教會トハ聖書ヲ以テ信仰ト行爲トノ完全ナル規範トナシ且耶穌基督ヲ以テ神性アル唯一ノ救世主ナリト信ズルモノヲ謂フ」。

△茲に一言すべきとは、此書狀が我教會に送られるに至らしめた事情である。右書狀の冒頭に其理由が一寸示してあるが、之丈では充分事實の真相が解らない。故に吾人の見聞した眼に於て、其事實を稍陳べておく事が、此事件の消息を解するに都合がよいと思ふ。

日本基督教青年會同盟に加入せる東京地方の青年會は、關東部會なるものを組織して居る。本年二月十一日此部會の總會があつて、部長選舉の結果、早稻田大學教授にして同大學青年會員なる永井柳太郎氏が當選し、氏は之を承諾した。然に氏は偶々我統一基督教會に屬するといふ故を以て、同盟憲法の認むる正會員たる資格なしといふ議論が起り、一旦氏の承諾あつたにも係らず、氏の就任に關しては同盟本部に問ふとにして、更に補缺部長として某氏を擧げた。然に同盟本部は此問題に對し何故か解決を與へず荏苒今日に至つた。是に於て四月初旬全國青年會同盟の大會あるや、帝國大學青年會は同盟憲法第三條第二項の訂正若くは其實際的運用に於ける範圍の擴張を申請し、同時に各地方より集つたに青年會代表者も連署して、正會員に關する憲法の適用を明にする様望む旨を同盟委員會に致した。然に右提出の申請中には友會救世軍及び基督教會同盟未加入の教會と共に、我統一教會も含まれ

て居た。是に於て同盟委員會長たる井深氏より、上記の如き交渉があるに至つたのである。要するに青年會の内訌は其餘沫を我教會に及ぼすことになつた。

之に對し教會では直に役員會を開き、來書に就いて相談した。種々な議論が出た、第二の問は兎に角として、第一問に對しては吾人の答辯する義務がない、青年會は何の權威を以て自分の勝手に定めた信條を以て、吾人に承認を尋ねるのであるかといふ説もあつた。併し我教會と青年會とは從來の親善なる關係ある故、可成丈好意ある答辯を與へてやらふといふ溫和説に決し左の答辯を牧師から送ることにした。

復啓 御書面拜見致しました。貴問につき左に御答申上ます。第一、本教會綱領は貴同盟憲法第三條第二項に示せる意義の福音主義なるものを包含し得ると信じます。

第二、本教會は統一基督教弘道會と友誼的關係を有する信仰上政治上獨立自治の教會であります。而して統一基督教弘道會は米國ユニテリアン協會と單に友誼的關係を有する獨立自治の傳道團體であります。

右御回答申上ます。

敬具

大正二年四月六日

統一基督教會

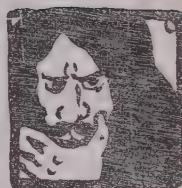
牧師 内ヶ崎 作三郎

日本基督教青年會同盟

委員長 井深槐之助殿

△然るに右の回答に對し井深氏から又々左の書面が來た。

拜啓四月六日發の御回答書正に拜見仕候然るに御一問即ち「貴教會は本同盟憲法 第三條第二項に示せる意義の福音主義の教會



時評

福音主義とは何ぞや

(過日來の基督教青年會同盟對統一教會の問題は、吾人をしてこゝに此の問題を論ずるの止むなきに至らしめたり。青年會同盟及び一般基督教會の爲めに、吾人の小さき宣言が、何等かの光明と、暗示と、刺戟とを頒つあらば幸である。)

統一基督教會と青年會同盟との交渉顛末

我統一教會は從來、基督教青年會に對し親善の情を有し、常に出來る丈の援助と同情を表して居つたとは、何人も否定することの出來ない所である。然るに四月上旬我教會は突如として、此友誼厚き青年會から慮外なる交渉をうけた。之に對し我教會は出來る丈基督教紳士的態度をとつて之に應對したのであるが、如何なる故にや吾等の眞意は彼に徹底することを得なかつた様である。此問題に對して興味を有する人々より質問を受くることある故に茲に顛末を發表する。

●●●●●
四月四日 折柄モット氏の來朝により大會開會中の青年會同盟から、我教會牧師宛に左の書狀が來た。

拜啓時下御多祥道の爲め御盡瘁の段奉賀候

諸今回本同盟加盟青年會の會員にして貴教會員たるもの有之右會員を該青年會正會員と見做し得べきや否やにつき疑議相起り申候就ては御差支なき限り左の事項につき貴答を煩はし度此段得貴意候

第一、貴教會は本同盟憲法第三條第二項に示せる意義の福音主義の教會たるを承認せらるゝや否や

第二、貴教會と統一基督教弘道會とは如何なる關係有之候哉若し關係あるとせば右弘道會と米國ユニテリアン教會との關係如何に候哉

右御手数ながら書面を以て御答被下度候敬具
大正二年四月四日

日本基督教青年會同盟

委員長 井 深 梶 之 助

統一基督教會

牧師 内ヶ崎 作三郎

日本基督教青年會同盟

委員長 井深堀之助様

事件の経過は要するに以上の通りである。我教會が從來の如く、青年會に對する親善の情を持續すべきか、又は其關係が斷絶するべきかは、今や一に青年會の側にあることとなつた。(相原生)

學生青年會同盟無用論

四月上旬、萬國基督教青年會同盟總幹事モット氏の來朝を機として、全國基督教青年大會なる者が神田の青年會館に於て開かれた。幸にして余は數回其の會合に出席するの光榮を得たけれども、不幸にして余は種々不快なる印象を與へられた事を遺憾に思ふ。而して今度こそは思ひ切つて學生青年會同盟無用(廢止)論を稱へやうといふ氣に成つて仕舞つた。

我國今日の基督教青年會同盟なる者は學生基督教青年會のみならず、都市基督教青年會をも包含するが故に、現存の青年會同盟を直ちに無用だと

處本同盟憲法第參條第二項ノ意義ニ付御尋ネニ候へ共本同盟ハ從來右規定ノ意義ヲ加盟青年會員ノ隨意解釋ニ任セ居ル次第ニ付乍遺憾茲ニ御答致衆候就テハ貴教會ニ於テモ御任意ノ解釋ニ依リ前記憲法第三條第二項ノ所謂福音主義教會タルコトヲ教會トシテ御承認相成候哉否ヤ重ネテ御回答被下度此段得貴意候也追テ貴教會代表者諸君ト御會見ノ上御懇談仕度候故、明十二日午後三時本同盟委員岡田哲藏、笹尾衆太郎、平澤均治ノ三氏御教會へ罷出候間御差線御面會被下候ヘバ幸甚ノ至リニ候△十二日午後三時教會には役員及び三並良、小山東助、鈴木文治の三氏が集つて、同盟委員の訪問に接した。定刻岡田、平澤の二氏來り、一時間程遅れて笹尾氏及び同盟主事小松武治氏が見えた。かくて問題の原因經過につき同盟委員の説明あり、教會側からも種々な意見と質問があつた。そこで別室に退いて教會の意見をまとめ左の如き覺書を呈して、對青年會と教會との交渉は一先づ終局を告げた。

覺書

拜復 御來示の趣(四月十一日附)に就ては左の如く御答へ申上げます。

過般貴同盟憲法第參條第二項の意義につき質問致しましたが、御答辯なきは至極遺憾に存じます。本教會が貴同盟憲法第三條第二項を承認するや否やに就ては去る六日附の御返事以上の事は直ちに御答へ致し兼ねます。他日適當の機會に於て御確答申上ぐることもあらふと思ひます。

大正二年四月十五日

たることを承認せらるゝや否や」に對する御返答の末項に「包含し得ることゝ信じます」とあり當方の質問と相一致せざる處有之候故重ねて御尋申上候間「承認せらるゝや否や」に對して御明答被成下度願上候明十日午後五時本問題に對し同盟委員會會相開らき協議致す事と相成り居候間此書狀御覽次第御返書賜り度希上候 拜具

大正二年四月九日

日本基督教青年會同盟
委員長 井深梶之助

統一基督教會

△右に對し内ヶ崎牧師は左の返書を出した。

拜復 御手紙は昨夜遅く拜見致しました。今朝轉宅をやりかけて居りますので、粗紙亂筆を御寛恕を願ひます。さて六日附の紙面は統一教會の役員及び重なる人々と相談致したる結果でございませう。今夕の御會議迄間に合ふ様に役員會を聞くことは出来ません。仍て一個人の資格にて御質問に御答へ申し上げます。

先生には「承認」を要求せられ、小生等は「包含」を以て御答へ致したるは、かく御答へするを以て最も禮に適へりと存じたからであります。

青年會同盟の信仰箇條に關する憲法は誰か註釋を附したる人がございませうか。かの單純なる文句のうちに神學及び倫理に關する重大なる論争が含まれて居ます。小生等はこの論争を強ひて引き起すを以て本意ならずとなし、六日附の紙面を發したのです。然るに小生等の精神一向に御酌量なきは小生等の怪義に堪へざる所であります。而し「包含」の文字に御不満足なる時

はやむをえず、小生は之を承認するに先じて、左の文字の御説明を要求したいのです。然る上に弊教會の役員會議に附して、改めて御答へ申上ぐることに致しませう。

一、「聖書ヲ以テ信仰ト行爲ノ完全ナル規範……」問　聖書全體の意味でありますか、もしくは或部分をいふのでありますか、聖書の倫理に關する教訓は完全無缺にして　聖書以外の倫理書を要せぬといふ意味でありますか。

二、「基督ヲ神性アル唯一ノ救世主……」神性アル」とはDivineの意味でありますか。もしくはDeityの意味でありますか。唯
一とは絶対無二の意でありますか、或は最高の意味であります
か。右長者に對する禮を失する嫌あるやうでありますが、一應
御答辯を煩はしたく存じます。毎度小生等の團體のために御迷
惑をかけ上ることに相すみませぬことであります。

敬具

大正二年四月十日

井深槐之助先生

侍史

△青年會はかゝる信條を制定し之に註釋を與ふる權能あるものであるかは全く疑はしい所だ。而して其曖昧なる文句を掲げて其承認を尋ねるといふことは全く不可解の事である。之に對し内ヶ嶋牧師の反問は蓋し當然であると思ふ。然るに果して青年會から左の如き返書が更に、十一日に井深氏の名を以て内ヶ嶋牧師宛に來たのである。

御多用中の處種々御配慮奉謝候去ル 十日附芳書敬誦仕候
拜復

者を作つて呉れた、而して折角作つては呉れたが資金が無くて維持經營が出来ぬといへば向から資金を送つて呉れる。有り難く頂戴はして居る者の、能く能く考へて見れば、日本では未だ斯種の事業の必要が無いのである。必要が無いからして資金が集まらない迄である。従つて考へ様次第では日本の基督教青年會は大に米國から侮辱を受けて居るとも取られるし、それとも無用の施設に幾多の人物と資金とを送りつゝあるのは如何にも米國の人々の暗愚であるとも取られる。兎に角我國今日の基督教の青年會同盟なる者は未だ決して日本の無くて、全然米國の物である。従つて假りに日米戦争でも起るとすれば、我國の青年會同盟なる者は直に瓦解するだらうと思はれる。我等はソンの青年會同盟に我國青年の教化と指導とを托する程に寛大では無い。余は此點に於て寧ろ益富政助君の鐵道青年會及び町村青年會なる者に對して大なる望を囑する者である。

第三、青年會同盟なる者は極めて保守的な思想を以て新進氣鋭の學生を束縛しようとする。青年會が元氣ある可くして然も甚だ元氣に乏しい原

因の一は確に茲に存する。青年會 Y. M. C. A. にあらずして老年會 O. M. C. A. であるといふ非難の起るのは尤もである。聞く所によれば過般の青年會大會に際して、東京帝大青年會の人々及び其他の諸氏は同盟委員に迫りて大に思想の自由を要求したといふ事である。同盟委員が果して如何なる解答を與へたかは余の未だ詳知せざる所であるけれども、同盟委員會從來の態度より推論する時は、恐らく極めて不得要領なる回答を與へた事であらうと思ふ。果して然らば、余は帝大青年會員及び其他の諸氏が此際正々堂々の舉に出てられん事を望まざるを得ぬ。

之を要するに、學生青年會は須らく同盟より脱會すべきである。單に一學校内の一青年たるを以て満足すべきである。其れが爲には幾多の難問題が起らうけれども、學生の自分を忘れ、良心と思想との自由を縛られながらも同盟（やがて米國青年會）の恩澤に浴さなければならぬ理由が何處にあらうか。或は折角建てゝ呉れるといふ會館が出来ぬ様になるかも知れぬが、良心の自由の爲ならば却つて會館の出来ぬ方が幸福である。（今岡生）

いふのでは無い。(固より現存の青年會同盟其者に對しても種々論ず可き事が無いではないが) 差當り、余は全國に亘りて存する各種の高等及び中等諸學校内學生基督教青年會なる者が相同盟して(若くは現存の日本基督教青年會同盟に加入して)學生の教化指導を圖らんとするが如きは全然無用有害の舉であるといふだけである。

各學校に於ける基督者が青年會を組織し、且寄宿舎の如き者を設けて寢食を共にしつゝ互に切磋琢磨するといふ事は甚だ結構な企てであると思ふ併しながら一步を進めて、全國各地に存する其種の青年會が相聯合して同盟なる者を組織し、或は部會、或は總會、或は夏期學校を開き、且代表者(?)なる者を萬國大會に派遣し、得々として我黨は全國否全世界に於ける青年學生の教化指導を任とする者だなど、呼號するに至つては、我等如何にしても賛成する事を得ぬ。

第一、青年會同盟なる者は一種の社會運動である。従つて、社會運動を必要とする大都會に於ける都市基督教青年會が其種の事業を經營するといふ事は其だ適當な事であるかも知れぬけれども、

信仰も學識も經驗も何もかも淺薄幼稚なる、而して唯孜孜とし勉學修養す可き學生間に何の社會事業の必要ぞ。學生が政治運動に熱中する事を非認すると同じ意味に於て、余は學生が青年會同盟といふが如き社會事業に参加する事に反對する。現に吾人の知れる範圍に於ても、學生基督者が其本分を忘れて青年會事業に熱中したる爲に失敗せる幾多實例がある。熱心であるとか、信仰家であるとか、献身的であるとか、雄辯家であるとかと云つた風な讃辭に煽られて、覺えず識らず、勉學修養の好機を逸し、あたかも爲多望の青年が一生不覺を取るといふ事は人生の一悲惨事である。青年會事業なる者が青年を救はずして却つて賊するとは大なる矛盾である。

第二、青年會同盟事業は外國、主として米國のそのの直譯である。従つて萬事が亞米利加式である。亞米利加で成功したからといつて直に其儘日本にも應用しようといふのは無理である。今の日本の青年會同盟なる者は其資本も其指導者も殆んど全部亞米利加よりの輸入である。日本の學生は左程必要を認めぬに拘らず、向から來て同盟なる

一事は、直接に見ると永井氏一人の問題に歸するかも知れないけれども、間接には青年會全體の鍵を握る人々の懷抱する基督教が、あらゆる束縛と制約とを離れて基督教全體の渾一せる生命を攫まむとする青年多數の意志と逆行して、漸く抽象的基督教の色を帯び來りつゝある事に起因するのでは無からうか、福音主義と云ふが如き文字を信仰の根柢となしすぎた結果、知らず識らず一の符號と其の生命とを同一視するやうになつた一つの事實に起因するのでは無からうか。

エヴァンジェリスム

思ふに福音主義と云ふのは、たとひ其の文字は美はしいにしても久しき歴史を有してゐるにしても、基督教徒全體の純なる信仰を相對的に表白した一つの符號に過ぎないのである。従つて一切の文字が思想の一部を現はし他の一部を隠すものである以上、基督教徒の信仰の一部として、福音主義なる四個の文字を認容しうる事は勿論であるが、この文字が直ちに信仰全體であつてはならない、宗教生活全體であつてはならない。むしろ斯かる符號の下に表はされる教理的 방식は、一定不動のものであると云ふやうな怠慢極まる態度を捨て、

必然的に不完全にして而かも假定的の言語に過ぎないことを自覺し、永遠に其の言語の完成に努力することが、眞の基督教徒の態度で無ければならない。われわれは此の立脚地よりして、「神」といふ言葉も、「天國」といふ言葉も、乃至「宗教」と云ふ言葉も、これを一の符號と見るときに、將來これらに取つて代り得べき以上の符號の創造せられむことを常に期待する。この期待とそれに伴ふ努力こそ、信徒の群を導くに足る宗教家の行くべき當然の道であるのに、信仰と其の符號との輕重本末を顛倒して、符號に依つてのみ、各個人の信仰を律するのは、相對的符號に對して絕對的權威を與へ、其處に新しき偶像禮拜を行はしめるので無くて何であらう。たとひ其の形式は何うであつても、此國の靈的文明は、新しき偶像禮拜を敢へてしななければならぬほど、幼稚では無かつた筈である。基督教の眞文明は、潔く其の符號を脱却すると共に、其の主要なる存在意義が無くてはならない。言語の表現力乃至暗示力が著しく自覺せられた今日に於いて、符號本位の信仰を云々するのは、時代錯誤もまた甚しいては無いか。(内藤)

符號本位の信仰

文字が思想を生むもので無くて、思想が文字を作りだすものである事は、更めて云ふまでもなき自明の理である。しかしながら、思想の攪亂殆んど其の極に達せる日本の現代は、遂に斯かる自明の理までも、暗き影を以つて蔽はずには措かないのである。誤まれる制約のために、自明の理を顛倒せずには措かないのである。最近の早稻田大學

基督教青年會問題と、これに關聯して起つた所謂福音主義の教會對自由主義教會の問題とは、不幸にして斯かる自明の理をすら承認すること能はざる當局者の沒常識を、世上に暴露するものであると云はねばならぬ。

われ／＼の見る所にして誤なければ、基督教青年會の當局者は、いはゆる「福音主義」なる文字に絶對の權威を與へて、其の文字の包含しうる一切の内容を律せむとするものである。一步を進めて云ふならば、福音主義なる文字に依つてのみ、基督の福音を宣傳せむとするものである。若しさうで無ければ、われ／＼は單に一般普通の福音主義

教會に屬して居ないからと云ふやうな理由の下に其の一員を埒外に逸し去る必要は無い筈だと思ふのである。福音主義なる文字が至つて豊かな寛りの内容を包容するものであるのにも拘はらず、それを通俗化し平凡化してまで、青年會從來の陋習を強行する必要は無い筈だと思ふのである。

一體、青年會の當局者は、進歩主義自由主義を標榜する基督教會を目して、直ちに非福音主義の教會であると思つたり、福音主義を包含し得ない教會であると思つたりせられるやうであるが、さう云ふ風に、基督教全體の意義なり精神なりを色々に區別して考へる事からして既に、抽象的の偏見に囚はれてゐるのである、一種の概念に毒せられて居るのである。われ／＼は斯ういふ寛洪の度量を缺いた心が盛てあればあるだけ、日本現代の基督教が其の激刺たる中心生命を離れて、全體と直接の交渉なき抽象的基督教乃至斷片的基督教となり了ることを恐れないわけに行かぬ。世界の基督教がやがて日本の基督教、否、青年會の基督教となり了る事を恐れないわけに行かぬ。早稻田大學の青年會が、他の同盟青年會と衝突した最近の

者はいかなることを論ずるか豫め期すべからず。これに講演を托するは危険千萬なことではないか。

青年會の機關雜誌は福音主義の匂ひの餘りに足らぬ雜誌である。ベルグソンやオイケンの哲學者すら推奨せらるゝのである。而して彼等は福音主義者でない。ライブチツヒの一元論者にして劇場にて公然基督教會を去るむねを發表したる獨乙の學者すら一豫言者として待遇されてゐるのである。而して青年會そのものは福音主義を主張す。その矛盾解すべからざるものがある、これ耳を掩うて鈴を盗むがごとき類に外ならぬものである。

或は恐る、日本の青年會當局者は米國青年會の御機嫌をとりつゝあるのであるかも知れぬ。これまた取越し苦勞である。日本青年會は米國青年會を模倣して止むべきでない。彼の發揮する能はざる獨創を示すべきである。然らば米國青年會はこれによつて大に發明する所があるであらう。

米國の多くの大學にても福音主義に拘泥するを快しとせず、獨立して青年會を興す學生漸く多きを加へんとしてゐるとの事である。米國に於てさ

へ然り、況んや日本に於てをや。

青年會の當局者覺醒せよ。諸君の會館は巍然として雲際に聳ゆるであらう、諸君の寄宿舎は至る所に堂々の觀を呈するであらう。然れども諸君の思想は枯渴し、諸君は單に實務家としてのみ世間より認識せられ、滔々流れてやまぬ思潮界の外に葬らるゝに至らずと限らない。僕等の苦言は誠に諸君の將來を思ふより出づるのである。(内ヶ崎)

青年會の職分

青年會の職分は何ぞなど、今更穿鑿立をする必要もない。青年會なるものは、常に時代の先頭に立つて、一世の思想界を指導するの慨あるべきと共に、一面方今の一大問題たる、各種の社會的缺陷に向つて、最善の力を注ぐべきであると思ふ。

其所謂『青年の友』たることも、此最後の二大眼目を標的としてこそ、意義もあり、價值もあるといふべきである。青年會なる團體はあるにしても一代の暗澹たる思想界や、時代の大問題たる社會的要求に没交渉であるやうでは、實は其存在の意義も價值も、共に之を失つて居るものである。現今

福音主義者の矛盾

僕等は神學論を好むものでない。現代の問題の中には更に重大なるものが有するのである。若し戦ふべくんば日本國民の無神論と唯物思想と破壊思想と戦ふべきである。僕等が斯る問題を論ずるの已むをえざるに至れるは主として日本學生基督教青年會の挑發に基くものである。

信仰は自由である。僕等は他人が所謂福音主義的信仰を懷くに別段の異論はない、しかしこれを以て他を律せんと試むる人に向つては反對せねばならぬ。一體基督教青年會は主として青年間の社會事業を目的とする團體である。神學に於ては成るべく包容的でなければならぬのである。二十世紀の今日に福音主義を振翳すなどは時勢を解せざるも甚しいといはねばならぬ。

青年會當事者は曰く、米國青年會はユニテリアン及び自由基督教徒を福音主義の外に除く、日本青年會もこの例に従はばならぬと。

米國に於ては歴史上かかる必要もあらん。日本に何の必要がある。しかも米國の福音主義は常に

矛盾を繰り返してゐるのである。彼等はユニテリアンなる政治家タフトを大統領と仰いだてはないか。敬神愛人以外に信條を有せざりしアブラハム・リンCOLNを誇るではないか。ユニテリアン主義のエリオット博士やジョーダン博士を有力なる大學の總長と戴いて子弟を托してゐるではないか。福音主義者の家庭にはエマルソン誦せられ、ロングフエロ、ローウエル、ホームズ等が朗唱せられてゐるではないか。彼等はユニテリアンでないか。彼等を學校と政治と文學とより除かずして青年會よりのみ除かんとする何の矛盾ぞや。米國基督教徒の矛盾は日本の青年會決して學んでならぬ。

目下滞在中のピーボーディー博士はユニテリアン主義の人である。しかも過日神田青年會館に開かれし青年會大會に於て講演を依頼されたるではないか。正會員として受け入れることを躊躇しながら、講演丈を依頼するとは矛盾も極まれりといはざるをえない。僕等は青年會當局者の常識をすら疑はざるをえないのである。或はいはん、青年會は非福音主義の協力を辭せぬためであると。講演

排日問題の根本解決

不義不正なる米國加州々會議員は、又もや不法不當なる排日案を提出して、吾人を驚かしめた。

案の内容や、理非の議論は之を日刊新聞に譲つてこゝには、根本問題に就て考へて見度い。既に之れで三度目である、將來とても屢起るであらう、今日に於て根本的解決をなすにあらざれば、必ず他日の禍因を残すであらう。吾人は今日に於て之を解決せねばならぬ。

第一に此際吾人の考ふべきは、北米合衆國に於ける中央地方の關係である。米國憲法に據れば、米國中央政府は、完全なる對外主權を有すれども、同時に聯邦各州に對して亦、對内主權を認めて居る。従つて中央政府は地方政府に對して、如何に跋扈するも紊りに之に干渉することが出來ぬのである。故に如何に中央政府が我が國に好意を有するも、充分に其意思を徹底して、我が利權を保護する能はざるの状態にあるのである。則ち米國の中央集權は甚だ不確實と言はねばならぬ。加州は不當なる決議をなすも、其自治權の自由たるべく、

中央政府に沮止するの權能なしとすれば、我は加州の不法を憤るも、之を膺懲するに甚だ困難なる地位に置かれてある。中央地方の關係問題は、米國に於ても大問題であるが、此點に就て我が國に至大の關係を有するのである。

第二には、歸化權の問題である。加州に於ける在留同胞は、現今六萬を算するといふが、米國に歸化して居る者が、二三十人に過ぎないといふ。歸化せざる以上は、市民權を有せず、然も歸化すべきや否やは、更に愛國心問題に關係して來る。我が官憲とても、歸化權獲得に盡力するといふは其國籍を喪失せしめることに、奔走することになるので、決して好ましいことゝは言へないであらう。されども亦一方加州側より見る時は、歸化權なき國民の膨脹に、異議を挿むといふことも、穴勝ちに無理とも言へぬ。無論我が内地に於ても、歸化せざる米人に土地所有權を與へてあるが、併しこれは人數の上にも相違あることで、一概に論ずることは出來ぬであらう。併し年々五六十萬づゝ増加する我同胞は、何處かに其の吐出場を求めねばならぬ。若し歸化問題を解決せぬ時は、どこ

の青年會は、果して此二大要求に應じて居るか、否か。

青年會には同盟憲法なるものがある。同盟憲法には、所謂福音主義なる個條がある。而して此福音主義なるものが、導火線となつて、我が統一教會の會員を青年會の正會員とするや否やの問題となつた。吾人は好んで青年會と相背かんとするものでない、否、寧ろ進んで之と手を携へて、『くまでも、神の國の建設の爲めに奮闘せんとするものである。青年會には吾人の親善なる友人も居る、敬愛する先輩も居る。之と斷ち、之と背くが如きは、情に於て理に於て、吾人の實に忍び得ざる所である。けれども青年會自ら其憲法の制條に囚はれて、吾人を拒まんが爲めに籬を結ばんとならば、吾人は好んで此籬を超えて又は潜つて、埒内に入らんとするものではない。然れども試みに思へ、青年會は一種の信仰個條によつて、結ばれたる團體たるや否やを。

同盟委員の一人は言つた、青年會は現在所謂福音主義教會の同情と後援との下に、其事を繼續して居るのであるから、實際統一教會の入るや否

やは、其影響の及ぶ所甚だ大であると。御尤もである、御察し申すのである。身を縛る鐵の鎖は之を斷つべし、心を纏ふ黄金の羈は容易に斷つべからず、然り事情の許さざるものがあるであらう。けれども、けれども、斯くの如くにして、果してよく一代の指導者、乃至改革者としての、理想と使命とを全うし得るであらうか。

吾人の所見を明かにすれば、青年會は同一信條の下にある或る限られたる人々の團體ではない。品性と事業との結合である。基督といふ共通基礎の大盤石の上に立てば、それでよいではないか。他人を目して或は福音主義といひ、或は然らずといふ、之を審判し、裁斷するの權威何處にかある。時代の流れを見よ、勢の動くを見よ。

同盟委員の一人は更に又言つた、我々は決して派を樹て異を争ふことを好むものではない、自分の任地に於ける親友の一人は、實に無神論者である。然れども直ちに附け加へて言つた、『けれどもこれは、私の希望であつて、青年會を改造しやうとするのではありません』と、吾人亦何をか言はむ(鈴木)

四月の惟一館

●川崎から穴守へ 相原君を首相とせる統一教會新内閣は着々新

方面に發展して居る。中にも此の月に於て最もその機宜に適し、且つ多大の成功を収め得たるものは四月十三日、第二日曜に於ける遠足會である。夜來の風雨で、とても面白い遠足も出来ないだらうと思つて心配して居たところ、案外にも拭ふが如くに晴れ渡つて吾々は皆、春光の和樂を十分に享受することが出来た。

九時に教會へ集つて、簡單なる禮拜をすました後、先づ一同で品川まで行つて、品川からは京濱電車で、川崎の大師へと向つた。

借切りの車輛で、思ひ／＼の快談をつづけながら、時々窓を通して春の自然や、農村の和光を眺めた。紅い桃園、白い梨園、そして黄ろい菜の花、櫻は老いて已に散りたれど、残つた白い花が、緑の葉櫻に混つて、見て居る心に哀愁をそゝり、春風に搖らぐ麥

の葉の柔かい波の渚には、草葺の古い農家が散らばつて居て、平和な田園の生活を忍ぶにつけても、喧騒な都會からののがれ出た喜びを感じた。川崎に近つたころ、かねて今度の遠足會の爲めに多大の厚意と便宜とを計つて下さつた平川さんが迎へに來られて、吾々は一同先づ川崎の大師に案内せられ、特に吾々の爲めに待ちまうけられたる都館へと導かれた。こゝでは都新聞の井上氏が吾々を歓待された。吾々はやがて、その廣間で、持ちよりの辨當で食事をすました。こゝに一群、彼處に一群、リボンを付けた一組、父さん、お母さん、姉さん、弟さんの家庭の一團、それから個人主義者の一群、併し今日にかぎつて個人主義はよしにして辨當の

コンミニユニズムは振つて居た。食事がすむと廣い都館の中で色々の遊戲があつた。二時頃になつて吾々は都館の井上氏にこの日の好意を謝して、公園の運動場でさんざん騒ぎまわつた後、六郷川の岸邊へ行つて、平川さんの御親切によれる川船に乗つて、羽田の方まで川を下つた。蓋しこの船遊びは、當日の遊びのうちで最もデリケートな、最もスウィートな印象と快感を與へたものであつた。川の上流はターナーの畫にある様な神秘的景色で、下流には海岸の松林、岸邊に咲いて居る蒲の花はものさびしい。

穴守ではお土産に貝を買ふものがある。ハゼのつくた煮を買ふものもある、四時半頃から電車で品川まで直行とした。品川に降りたときはもう大分遅かつた、併し折角の喜びを紀念しないのは残念なので、高輪南町の毛利家の横町で、マゲネシャをともし寫眞を撮り、それから各自の自由行動をもつて、たのしい遠足會を終つたのである。吾々幹部の間には、統一教會はこれからも度々こんな會を開らいて、從來基督教會で行はれて居つた聖餐會に代へやうと云ふ考へがある。終りに武田氏夫妻及び井上、平川兩氏の熱誠なる御盡力を感謝いたします。

■ビーボデー博士歓迎會 エリオット博士に次いで吾等は又米國

ユリテリアン教會員にして、ハーバード大學の名譽教授なるビーボデー博士を迎ふことを得た。時は四月七日であつた。惟一館の講室をもつて會場に充て、壇上には藤や薔薇や牡丹やその他諸種の鉢花を程よくしつらへて、見るからに美しい感情がそゝられる。百四十五名の朝野の名士が集つて、今か／＼と待ちかまへて居ると、溫顔慈容の博士は夫人、令嬢、及び令嬢の友人、の三人を従へて臨まれた。弘道會長安部磯雄氏は先づ壇上に立ち、流暢

へ行つても衝突を惹起すを免れぬであらう。知らず、大和國民の發展は、將來如何なる形式に成し遂ぐべきであるか。國民として發展せんとすれば、征服の外はあるまい。民族としての發展を遂げんとせば、歸化問題を解決せねばならぬ。排日問題は獨り對米問題たるのみでない、又日本國民自身の問題である。

人種問題、品性問題、其他種々な問題が、此一事件を中心として渦卷いて居る。これは單に外交家の問題でない、政治家の問題でない、宗教家の問題である、教育家の問題である。否、日本國民夫れ自身の問題である。而してこれ現在に限るにあらず、日本民族の發展に關する、永遠の將來に亘る大問題である。戦争は何時でも出来る。吾人は冷靜に、沈着に、此大問題を解決せねばならぬ。

(ふみはる)

■ 近代思想の解剖

樋口龍峽著
廣文堂發行

明治文明が未解決のまゝに遺して去つた最も危險な問題は、即ち新舊思想の不統一といふことである。本書は少なくとも此の問題解決の一指南車たらんことを期するの抱負を以て、所謂近代思想の解剖を試みたるもの。細評次號に讀る。

■ 光を慕ひて

小山東助著
警醒社發行

曩に「久遠の基督教」を著して、我が宗教界、思想界に新たな希望と久遠の光明とを頒ちたる小山氏の著である。常に絶えず敬虔なる立ち場よりして、人生を批判し、永遠を憧憬する著者一流の懐しき宗教味が滾然として湧き出づる所に、氏の先著「久遠の基督教」以後更に進みたる信仰の深みと、觀照の鋭さとを偲ぶことが出来る。文章の流麗倍々佳境に入れり。

寄贈雜誌

心理研究。聖孟。帝國文學。新公論。車前草。東亞の光。奇蹟。ザムボア。世界の日本。黑耀。世界。ホーム。宗教の日本。青輦。新日本。新小説。新佛教。東洋哲學。禪宗。宗教世界。禪。經世雜誌。新人。正教時報。開拓者。基督教世界。護教。基督教週報。早稻田講演。白樺。時事評論。實業之世界。道の友。丁酉倫理。神學の研究。哲學雜誌。六條學報。佛教史學。和融誌。國民時報の獨立評論。現代の洋畫。The Pacific Unionist. Daity. The Christian Register. The Outlook. Current Opinion.

新刊批評

●哲學綱要

桑木嚴翼著
東京堂書房發行

此の書物は前篇「哲學綱要」と後篇「現代の哲學」の二篇を合して居る。序文を見ると、前篇は「既に十年前の腹按であつて見れば、之を以て余の今日の思想と云ふとは出来ない。實際余の哲學に對する解釋も此數年來著しく變化した點があるから、或點は綱要（評者云ふ、これは前篇を指す）に述べた所と正反對になつて居る」と書いてあるので、甚だ不親切な様な氣がした。遺稿なら知らんと、そんな自分でも考へない様ななどの書いてあるものを、わざ／＼出版して人に讀ませるなどは、何の氣であらうと思つた。併し前篇がこれであるからと云つて後篇を棄てる譯には行かない。後篇は「現代の哲學」と題してあるだけに、現代に於て哲學上の問題となつて、色々外國の哲學者などが著書や、雜誌の論文などで、議論をして居る諸問題に觸れて居る。桑木氏のこれ等諸問題に對する意見を、知るとの出来るのは勿論であるが、現在哲學上に燃へ上つて居る問題を知るにも非常に都合がよい。殊に決して全體を盡くして居る譯ではないが、重要な参考書が各章の終りに擧げてゐるのは、甚だ親切な、學者的の態度で、非常に嬉れしく感じた。（定價壹圓八拾錢）

●巖の處女

矢口達譯
新陽堂發行

曩きにダンヌンチオの『死の勝利』の譯本を得たる我が讀書界は、

また爰に『巖の處女』を通して、伊太利の夢多き、花やかな、哀愁の詩味に飽くことが出来る。矢口氏の譯文は倍々著しい進境を認めることが出来る。（定價壹圓拾錢）

●ベルグソンの哲學

錦田義富譯
新陽社發行

ベルグソンの名は我國に於いて已に噴々たるものであるが、從來現はれたものは只其紹介にすぎなかつた。原語で其哲學に接することの出来ない一般讀者にとつては甚だ物足りないのであつたが、今錦田文學士の勞によつて幾分此渴を醫すとの出来るのは讀書社會の幸といふべしである。此書の收むる所ベルグソンの大著といふものではないが、其哲學の要點を把るに便な著述である。

即ち本書前篇には「直觀の哲學」として原名「形而上學への序論」を譯し、後篇には「流動の哲學」と題して原名「變化の知覺」を抄譯してある。前者はベルグソン哲學の根本的特徴と見られる方法論を論じた、凡そ十年前の著で、原著今は歐米でも妙いものであるが、今譯者は之を原書及獨譯を参照して譯した由なれば充分信憑すると出来る。後者は此哲學が「昨年英國に招かれた折の二回講演で彼の本體論上の議論である。譯筆も頗る清練して此哲學者の風趣を傳へるにふさはしい句がある。卷末には哲學者の著者日録及び研究書目を添へてある。（定價七拾錢）

●司法警察論綱

秋田憊之助著
正文社發行

著者秋田氏が、或は地方に或は中央に、警察界に官遊すること前後十有五年に及ぶ。現に警視廳警視として芝區新堀署長たり。本書は則ち篤學の士たる秋田警視が、過去十五年間に於ける研究と

院長診察、月、水、木、金、午前、入院、診後應需、林、峰間、兩副
長ハ目下當院ニ在勤

電) 八八八(病院用)
(本 八九八(私宅用))

東洋内科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋附近

院長

醫學士 高田 畊 安

神奈川縣高座郡茅ヶ崎海濱從停車場半里

電、チガサキ一一番

南湖院

河野、高橋、兩副長ハ目下當院ニ在勤、院長診察、土曜日午後
入院、診後應需

實驗との結晶なりといふを得べし。篇を分つこと三、總則、搜查、假豫審とし、附載するに司法書類の書式及其作成方並に司法事務取扱に關する注意事項を以てす。苟くも事司法警察に關するものは、細大漏さず、之を論じ之を究めたり。而して其最も特色とすべきは、獨り學理的論究を主とせずして、加ふるに綿密なる實際的注意を以てせるにありとす。行政警察に關するものには、現警視廳第一部長小濱法學士の『行政警察要義』あり、而して今又本書出づ。蓋し本邦警察事務に關する著書の双璧と稱すべし。警察官の好參考書たるべきは勿論、更に社會一般の人を益すること少なからざらむ。(定價一部金壹圓五拾錢)

■實踐工場管理

神田孝一著
光文館發行

著者は專賣局技師として十有餘年の官歴を有す。蓋し專賣局創始以來の故參者にして、現に淀橋煙草製造所にありて、工場管理の實務に當らる。思ふに工場管理の事たる、これを工業經濟の上より見るも、將又社會政策上より見るも、輕視すべからざる方今の一大時務なりとす。然も多きは則ち姑息の間に進行せられて、未だ充分なる指針の見るべきなし。著者は此實際的必要に迫られ、慨然として筆を執られしものにして、第一篇に「工場」を論じ、第二篇に「職工」を説き、第三篇に「勞銀」を述べ、第四篇に「事務」を究む。叙述平明にて然も周匝、讀過の間自からにして其理義を悟りせしむ。卷末に附録とせる「歐米社會政策に關する施設の梗概」は、簡單なれども、極めて要領を得、特に第一章に於て、社會政策の意義及び目的の決定を試みんとせられたるが如き、社會政策の專攻者をして顔色なからしめんとす。吾人は著者の熱誠

と學殖とに對して、心よりの敬意を表し、之を廣く江湖に推薦せんとするものなり。(定價二圓五十錢)

■現代思想講話

大住嘯風著
丙午出版社發行

舊き時代の權威を破壊し終りたる現代の苦痛は、その宗教に、その哲學に、只管懷疑的色彩を帶ばしめ、當來の前途思想の光明なきもの蓋し半世紀の久しきに亘つて來た。然るにこゝに忽然として吾人は思想界の渾沌を破る先驅者の獅子吼を聞いた。ゼームス、オイケン、ベルグソンの三者である。彼等の哲學が果して何處まで現代人に生命を與へ、光明を頒ち能ふかは別問題として、兎も角類敗し盡さんとせる現代人の思想に躍るが如き生命の奔流を直覺せしめたる新哲學であつた。本著者は主として此の三哲者を紹介せんが爲めに、先づ筆を現代思潮の由て發生し來る中世哲學より起し、オイケン、ベルグソンを説くこと最も密なり。現代哲學の一般を知らんとする者の好伴侶たるべし。(定價壹圓貳拾錢)

■科學小説の之人

堀口熊二譯
東亞堂書房發行

大陸の文學が眩しい程紹介せらるゝ間にも、さすがに英國海峽の彼方には、自國の立脚地を冒されず、眞實な自己の主張を弛めぬ英人氣質の作者がある。バーナード・ショーやチエスタトンと並んで稱せらるゝエツチ・デー・ウエルスもその一人である。？之人は彼れ獨特の科學小説(ゼ・インヴィジブル・マン)の翻譯である。その内容に對して譯者の筆致は至極適所を得たる心地す。眞面目な翻譯界の努力が著しく増加し來りたる今日を吾々は祝福しなければならぬ。(定價金八拾錢)

世界比日本

五月號每月一回一日發行

定價壹册金拾錢郵稅壹錢

半年分金六十錢郵稅不要

壹ケ 年分 金壹圓廿錢郵稅不要

發行所

▲恥を知れ！恥を知れ！……社説

▲米國の土地所有禁止案……服部綾雄

▲疲れたる民間志士……文學博士 三宅雪嶺

▲渡邊宮内大臣財界を案す……本誌記者 田中雪次

▲日本の新婦人問題……醫學博士 佐伯矩

▲軍隊内の弊風……社長 橋本徹馬

臭ひ者の言ひ草

(一)臭ひ者の言ひ草掲載の趣意……記者

(二)私は善ひ事をしたと思ふて居る……代議士 島田三郎

(四)徹底せざる桂後藤早川等の眼識……代議士 小久保喜七

(六)教科書等にある様には行きませぬ……代議士 松田源治

●憲政の精神的基礎……文學士 内崎作三郎

●新らしき女の行くべき道……本誌記者 坂本正雄

●漢高祖論……村島歸之

●英雄の墓巡り……橋本徹馬

●三島彌太郎は曲者也……長橋大河

●小狂者の歌……長詩

●世界之大勢●散文等

(三)我輩の除名せられたる顛末……代議士 早川鐵治

(五)桂公死するも何かあらん……男爵 後藤新平

(七)別にまだ新政黨へは行かぬ……福本日南

世界之日本社

神田區三丁

振替 東京 本局 六九番

世 界 雜 誌

(二六一一六八半 錢六拾 共郵一 價定 發行日 回壹 每月)
 (錢十圓年錢十年 金稅冊)

五 月 號 要 目

公開狀

平岡樺太長官 森村市左衛門 長島隆二 三谷軌秀
 日向輝武 木下成太郎 堀切善兵衛 岡崎邦輔
 伊藤大八 鶴原定吉 松田源治

國民的自覺

尾崎行雄

基對國の假面
 絶對排斥案致面
 日對人境の一致
 同志會と政友會
 急進派と漸進派
 民進黨の合併論
 厭ふべき俗論

支那の苦境
 遠慮なき當局
 三越と白木屋
 閑却されたる漁村問題
 婦人問題の歸趨
 邦樂の眞價

政友會罪惡史

白 叙 傳

尾崎行雄

高橋藏相論

明治維新と大正維新
 國防問題の眞相
 倫敦問題の眞信
 保險界總まく
 文藝界の自評
 新題の新婦人論

田中善立
 小山谷造
 エガト
 城北子
 哀日樓主人
 ウキルス宮
 春星宮

彼觀と我觀

(蒼穹生—横山雄偉)

大賣捌所

東京堂 北隆館 至誠堂 良明堂
 東海堂書店 上田書店

發行所 東京三丁 橋區 元寄數 屋寄番 一 目 一 番 社誌雜界世 (橋新話電) (番二一四)

(後付の二)

文學士 沼波瓊音先生著

〔大正文庫第二編〕

此一筋

三六判箱入

定價七十錢

郵稅八錢

現時俳壇の飛將軍、沼波先生の新著なり。先生曰はく、「この書に、大知識大感想ありて、天下の士、必ず一本を求めよとは言はず。たゞ書中、或物あつて存す。この或物は、或人には輕んぜられんも、或人にはゾク／＼と嬉しがらるゝなり。其の嬉しがりそうな方にのみ、これを侑む。」と。本屋曰はく、「輕んずるも可、嬉しがるも不可なし。たゞ買ふ人の多からむことを、切望に堪へず。」と。

文學博士 三宅雪嶺先生著

大住嘯風先生著

大正文庫
第一編

明治思想小史

定價五十錢
郵稅六錢

現代思想講話

定價一圓廿錢
郵稅八錢

稻毛金七 近藤新一 共著

(菊判約五百頁)

(後付の四)

文檢修身教育問題解答

新刊

全一冊定價金壹圓貳拾錢 小包料金八錢

本書は文檢修身教育法制經濟の三科に應ぜんとする人の參考に供せん爲め特に合格者稻毛近藤の兩氏に囑して成れるものなり而して本書の特色は最近五箇年間の豫備本試験問題十回に亘りて出來得べき事實を掲げ之に口述試験の實況をも添え問題毎に幾多の類似問題乃至應用問題を附して研究者に自覺自習の便を與へ其他三科の研究法受験法參考書及び試験規則等をも附記して諸科受験者の要する一切の準備を完からしめたる點に存す。

浮薄なる受験學風の排斥は我社の從來終始一貫して努力せる所なり。されど受験は單に實力のみを以て可なる者に非ず、即ち必ずしも受験法と云はずとも實際受験合格せる者の經驗を參照することには極めて切要なることに屬す。之れが我が社が本書の執筆を學の大家に依頼せずして特に合格者たる二氏を選びたる所以なりとす。受験者は一面に於ては合實力を養成すると共に更に他面に於ては本書の如きものを熟讀し合格者たる實地の經驗より歸納すること定法無き法を以て一實地受験の參考とせば必ず好成绩を以て合格の光榮を荷はるべきものと信ず。我社は二者と共に此の確信と希望とを以て本書を發行する受験者にと推薦するものなり。

稻毛 詛風 著

文檢修身教育問題解答

(四六判二百三十六頁)

▲壹冊定價送料金五十六錢▼

好評増補第參版既に過半盡く

發行所 東京本郷區駒込千駄木町四七〇 内外教育評論社

誌雜

人活

業實

拾錢 冊六 共六 郵稅 金前 壹錢 郵稅 錢拾 正價 發行 一日 每月 號月五

(一精島手。衛兵嘉谷大) (士博多本。六素原江) 問顧 (名正田前。門衛左市村森) (士博井橫。三謙田池)

- ▽國民奮起の秋.....尾崎行雄
- ◎大正維新と青年の覺悟.....犬養毅
- ▽遠大の志と一貫の氣力.....桂太郎
- ▽自彊鞭撻の功果.....後藤新平
- ◎金満家となるの捷徑.....添田法學博士
- ▽模範とすべき米國氣質と其平常.....吉安赤十字秘書
- ▽商工業家の缺點.....坂田通商局長
- ◎森林の與ふる活精神.....本多林學博士
- ▽實業家は如何なる妻を撰ぶべき乎.....大倉喜八郎
- ▽金持(百萬圓以上)年齢大番附.....
- ◎富の十大王國.....戸山銃聲
- △石汕王△鐵道王△通信王△銅山王△雜貨王(上)
- ▽凡人と非凡人との差は間一髪.....
- ▽古今東西逸話籠.....記者
- ◎金の唸れる殖民地(墨西哥).....的場農學士
- ▽出稼人國記(臺灣).....金鼓學人
- ▽洋上活動の新天地.....本重帝國貿易會社長
- ◎現代氣質競べ(江州と甲州).....高田博士
- ▽初夏富士登山の秘訣.....

每月

一回

月刊

道

雜誌

一日

發行

主 幹 松 村 介 石

第六十一號（五月號）

定價拾五錢郵稅一錢

（半ヶ年分九錢、一ヶ年分一圓七十錢）

（郵稅共）

水 魚

今岡信一郎君に答ふ

内村鑑三君に質す

浩然の氣

無絃琴

イン子リズム（中）

宗教講話（其九）

本願寺

日露戰爭及び媾和（六）

加州問題と宗教

新道徳

其他道友會に於ける成瀬仁藏氏の歐米視察談、三宅雪嶺氏の之に對する其批評、並に大隈邸に於ける加州問題と宜教師に對する松村主幹の評論等血湧き肉躍るの文あり

齋藤松洲畫
松村介石文

清水友次郎來

大川周明

野口復堂

石川半山

大隈方箋伯

押川光次郎

西川光次郎

發行所

東京府下森不入斗

天 心 社

振替口座東京 一三六番

大賣捌所

東京堂 北隆館

警醒社 其他各書店

東海堂

院長

ドクトル
メヂチーネ

鈴木主計

診察

毎日

午前自八時至十二時
午後自二時至四時

(京橋區采女町廿五農商務省表門前)

鈴木胃腸病院

●入院隨時

(電話新橋一八四七番)

六合雜誌新年號

右賣切のところ、今度地方書店より若干部返品ありし
爲め、大方諸彦の御需に充つべし。

定價一冊

金參拾錢

郵税一冊

金貳錢

の處郵税共
金二十錢
に割引す

申込所

東京三田四國町二

六合雜誌社

振替東京一〇〇〇三番

新眞婦人

月 初五 一 發
刊 號 日 月 行

西川文子 木村新子 宮崎光子 編輯

目次

口繪 女の不自由

西川文子

戀愛道德 結婚 道徳の批評の批評

西川文子

逝きし子よ

小口みち子

女性の自覺

宮崎光子

上古の女

一記者

男優りの女

黒光女史

カフエー電話

小口みち子

俳句

龍子

戀愛と自覺

木村駒子

野の聲

鳥林あぐり

狸趣味

尾崎恒子

短歌

龍子

赤い着物 (詩口語)

駒子

獨乙の婦人

加藤さき子

露西亞の婦人

瀬沼夏葉

女優生活

上山浦路

内田魯庵先生

文子

と語る 生田長江先生

記者

と語る 小供の日記、談話室、東西南北

記者

新眞婦人社

東京市本郷區駒込二丁目五五〇六

發行所

現代の洋畫

第 十 四 號 來 五 月 五 日 發 行
定 價 三 十 錢

改 革 後 の 『 現 代 の 洋 畫 』 (第 十 三 號)

本紙の體裁	挿入畫の數	挿入畫	の筆者	原色	寫眞版	網目	寫眞版	石版と凸版	記事と執筆者	發行日	と定價
優美にして充實せる事、恰も英國の美術雜誌スタデオの概あり。全判の寸法竪八寸五分横六寸二分、紙質精良、紙數四十餘頁を算し、内容の整然たる事、等に於て本誌の右に出ずるものなし。	掲出繪畫の都合により每號一定せず、原色版の渺なき時は石版或は凸版、寫眞版を多く挿入し、原色版の多き時は凸版或は石版を省く。	每號一定せざるも現代の大家を初め新進青年畫家が優逸作品の大小となく之を適當なる製版により掲出すべし。	原作の傍を其儘に傳へ得るは原色寫眞版の特色なり、每號の本誌には竪五寸横四寸より成る原色寫眞版を五枚乃至七枚を挿入して提供す。	精巧なる製狀術によりて作り成されたる寫眞版は每號二三枚を挿入すべし此版面竪六寸横四寸、此他大少數拾個の寫眞版を記事中に挿入す。	線畫即ちエツチング、ペン畫、毛筆畫の類は原作の筆意を現はすに特色ある凸版に付し、圖案、其他淡彩畫は見事なる石版印刷となすべし。	每號一定せず、言論、傳紀、研究、紹介、報道は實に的確迅速にして新しく興味深き本誌の記事は精巧なる挿畫と相俟つて有益なるもの也。	毎月一回一日を以て正確に發行し送本すべし、價は一部送料共前金にて三十一錢、數ヶ月分前納は別に割引あり。				

〔後付の十〕

本會には地方愛讀者の者のために洋畫材料販賣部の設けがけあり
本會の御用の方は御録目『販賣部目錄』す

日本洋畫協會 振替口座東京四三七三番
東京市牛込區水道町五三

◎豫約募集◎

理學博士 田中正平先生 醫學博士 柳保三郎先生
東京音樂學校校長 湯原元一先生 序文
東京音樂學校教授 島崎赤太郎先生校閱及増註
東京帝國大學醫科大學々生 淺田泰順翻譯及發行

新譯 律氏和聲學

別冊附錄、

練習問題解(島崎先生案)
術語和獨英對稱表及索引

本書は我が混沌たる作曲界に一道の光明を學ふものに
して、洋樂複音曲構成ノ理法を詳述して、獨習者に萬
遺憾なからしむ。原書は斯學のアウトリテートにして
本譯書は本邦に於ける此種出版物の嚆矢となす。

豫約價

前金壹圓貳拾錢(定價壹圓七拾

錢外に郵稅十錢

申込期限

本年七月二十日限

發送期

八月中

申込所

統一基督教弘道會

地方書店に告ぐ

一、雜誌書籍の發送は東京の各書店
と同時に爲す、
一、發送、返品共に一切鐵道便を使
用せざる事、

一、雜誌書籍代金勘定請求は、四ヶ
月乃至半ヶ年毎に於て爲す、
一、發送上其他に於て不都合を認め
られたる場合には直に御通知を
乞ふ、

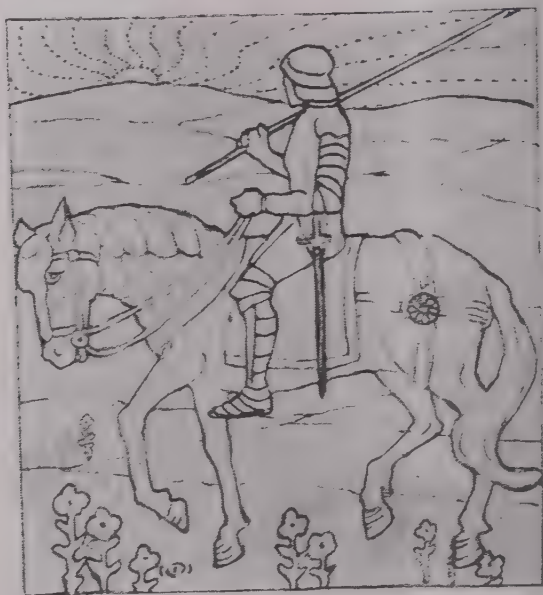
一、代金を請求しても更に拂込なき
時は直に發送を停止すべし、
一、御送金は成る可く振替貯金を使
用せられ度し、

大正二年三月

六合雜誌社

Library of the
UNITARIAN SCHOOL
FOR THE MINISTRY
Berkeley, California

六合雜誌



六
月
號

明治廿五年三月廿七日第三種郵便認可
大正二年六月一日發行(每月一回一日發行)

六合雜誌第三十三年第六號

！！刊新最！！

■ダンヌンツィオ氏作・矢口達氏譯■

巖の處女

全一冊四六版

總クローヌ
特製美本箱入
紙數四百餘頁
價金壹圓拾錢
小包料

内地八錢

空しく幽く荒れ果てたる庭園には、しづかな泉がとこしへの諧調をかなでゝ居た。美しくも儚くない三人の處女は、こゝに咲いてこゝに散つたのである。同じ鬱憂と悲哀とを呼吸しつゝ、いたましい靈の織物を相共に織りなした三人の處女を、運命はいかに愛し、いかに弄んだであらうか！ アネモネの花と水松の影とに彩られた墓地のやうな樂山のほとりに、悲しくも熱き呟きを交はしたるあはれな乙女よ！

睡蓮の白い花に蔽はれた川づらに、巖のかなたへ沈む夕陽の光につゝまれて、一しづくの乳の流れにも崩されむとする完美の輪廓を示した儚ない乙女よ！

兜の如き巖の幽寂な山嶺に、鬼氣を吐く噴火口を眺めながら、うち顫ふ心に犠牲の悲哀を秘めて、濫るゝ戀を葬つたいたましい乙女よ！

『巖の處女』一篇は、詩の國夢の郷たるイタリヤの地に編まれた、艶美と悲哀との極を竭す四いもないロマンスである。譯文流麗にして内容装幀善美を極む、文學愛好者は勿論紳士淑女の淨几上缺くべからざるの好著である敢て賢の愛讀を俟つ。

好評

トルストイ作

矢口達氏譯

好評

ビョルンソン著矢口達氏譯

三版

コサツク

四六版洋装
頗美本箱入
正價金壹圓
小包料八錢

三版

アルネ

四六版洋装
正價六十五錢
小包料八錢

發行所 東京市田高區新陽堂 振替五五〇番 東京 賣 全國各店 あり

THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 389. June. 1913.

CONTENTS.

Portrait of the late Pastore Karl Jatho.	
Explanation of the Frontispiece.	Prof. H. Minami.
In What Sense do We believe in the Messiahship of Jesus Christ?	Prof. H. Minami.
Intuition and Reason.	W. Nomura.
<i>Tanka</i>	R. Itô.
Immortality of Ego.	T. Kuwata.
New Realism.	M. Mishima.
On W. James' View of Immortality of Humanity.	K. Shiraishi.
<i>Tanka</i>	K. Ishida.
The Anti-Japanese Bill in California and its Significance in the History of Civilization.	Rev. Prof. S. Uchigasaki.
<i>To Tōkyō</i>	M. Sakamoto.
The Message of the late Dr. Jatho to the Religious Circle of Germany of to-day.	Prof. H. Minami.
<i>Silent Victory (a play)</i>	A. Naitō.
On Rev. Kozaki's New Book—"The State and Religion."	I. Aihara.
<i>Truth</i>	K. Katō.
Ellen Key and Mrs. C. P. Gilman on the New Woman.	Miss. Y. Araragi.
Expansion of Religion.	Rev. Dr. F. G. Peabody.
The Modern Capitalism.	B. Suzuki.
A Summary of Current Events.	
<i>A Dream of Water-Lily</i>	G. Yoshida.
<i>Topics of To-day.</i>	
An Effort towards Reality.	A. Naitō.
Some Remarks on the Reformation Movement in the East Shin-shū Sect.	S. Kikugawa.
On the Anti-Japanese Bill in California.	Fumiharu.
Evangelicalism and Liberal Christianity.	B. Suzuki.
An Open Letter to the National Federation of Y. M. C. A. and Tōits Kristo Kyō-Kwai.	J. Hoshijima.
The Sixth International Congress of Liberal Christians and other Liberal Religionists.	S. Uchigasaki.
The Account of My Lecturing Tour to Nagoya, Kyōto and Kōbe.	S. Uchigasaki.
Unity Hall Reports.	
Books of the Month.	

Published Monthly by the

TŌITSU KRISTOKYŌ KŌDŌKWAJ,
2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

始終神様に

近づいて

清い心を

持った者に

何の悪魔か

誘惑の手を擴げましよう。

朝夕ライオン歯磨を使つて

美しい歯を具へた口から

何で病の黴菌が入り込みましよう。

(入袋大用庭家)





眞 實 境

(對話)

エレン・ケイとギルマン夫人の論戰

加藤一夫……………六
欄よ志子……………三

宗教の擴張

神學博士・ビーボダイ……………六

近世資本主義の趨勢

法學士・鈴木文治……………八

海外思潮

鈴木文治……………八
ゆふ志ほ……………九

睡蓮夢

(創作)

吉田絃二郎……………九

時 評

全體を捉へんとする努力

内藤濯……………七

本願寺改革運動

菊川四郎……………一〇

排日案の通過

ふみはる……………一〇

福音主義問題と吾人

鈴木文治……………一〇

青年會と統一教會とに望む

(寄書)

星島二郎……………一〇

歐米自由基督教徒の活動

内ヶ崎作三郎……………一〇

初夏關西行の記

うちがさき……………二〇

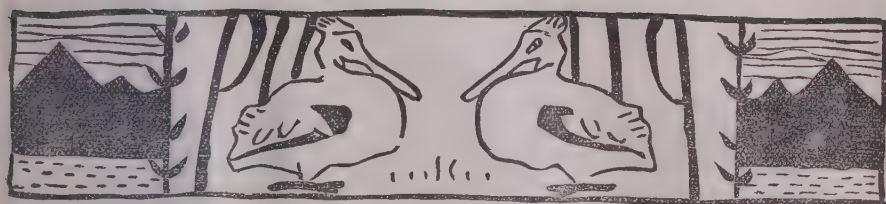
■惟一館記事……………
■新刊批評……………

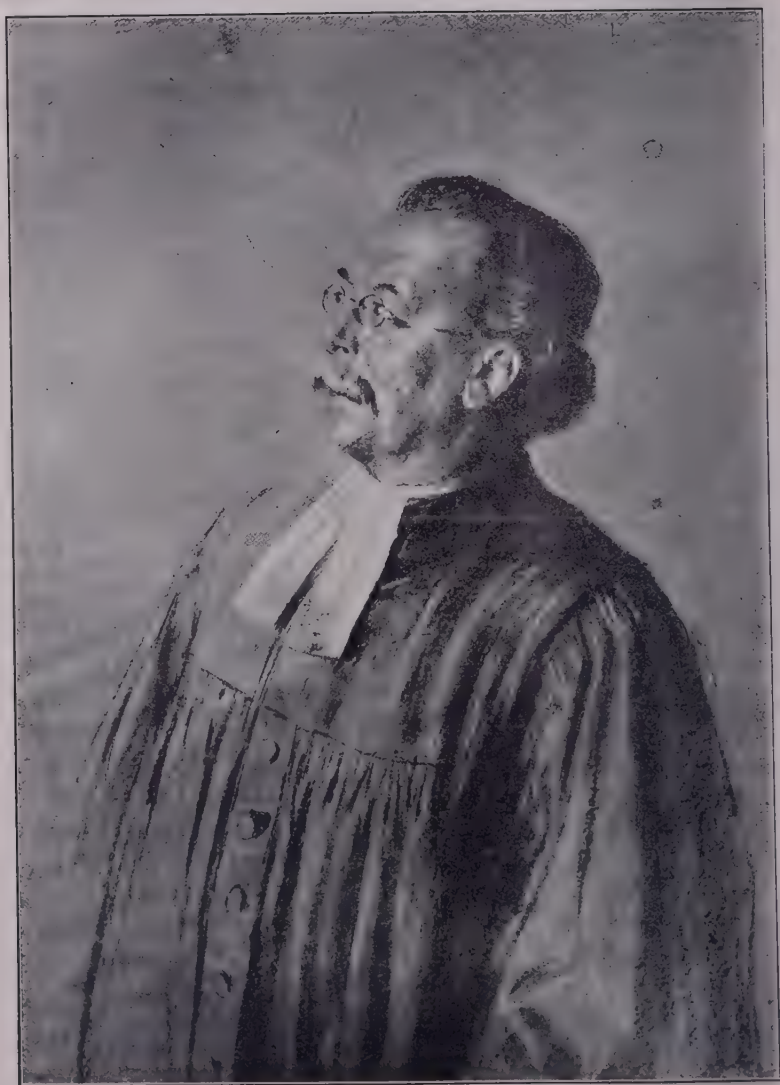
六合雜誌第三十二卷第六號目次

ヤートーの肖像	口	繪
ヤートーを悼む	みな	み

本欄

新救世主論	一高教授	三並良
直覺と理性	野村隈畔	二
行樂	伊藤寥々	一九
自我の不滅	桑田常藏	二〇
新實在論	三島衛	二五
オリアム・ジエームスの人間不滅論	白石喜之助	二六
呪ひ	石田謙次	三三
文明史眼に映ぜる加州問題	内ヶ崎作三郎	三四
南國より武藏野まで	坂本正雄	四二
ヤートー博士と獨逸の宗教界	一高教授	三並良
沈黙の勝利	文學士 内藤濯	四三
愛國的精神の宗教化	文學士 相原一郎	四三





ジー・イー・ホーソン先生編

英和對照 舊約聖書物語

第一、二卷完成
定價各廿五錢
郵税金八錢

最

新

刊

聖書を讀まざる者は純粹の英語を學ぶを得ず若し眞に英語を學ばんとする者は須く本書に來れ編者はかの宏大無比波

瀾重疊たる舊約聖書中の物語を拔萃して極めて簡潔にし且つ趣味津津たる小話集にしたれば讀者は短時間の中に

物語の梗概を知得し一氣にして世界的名句を諳するに

至らん



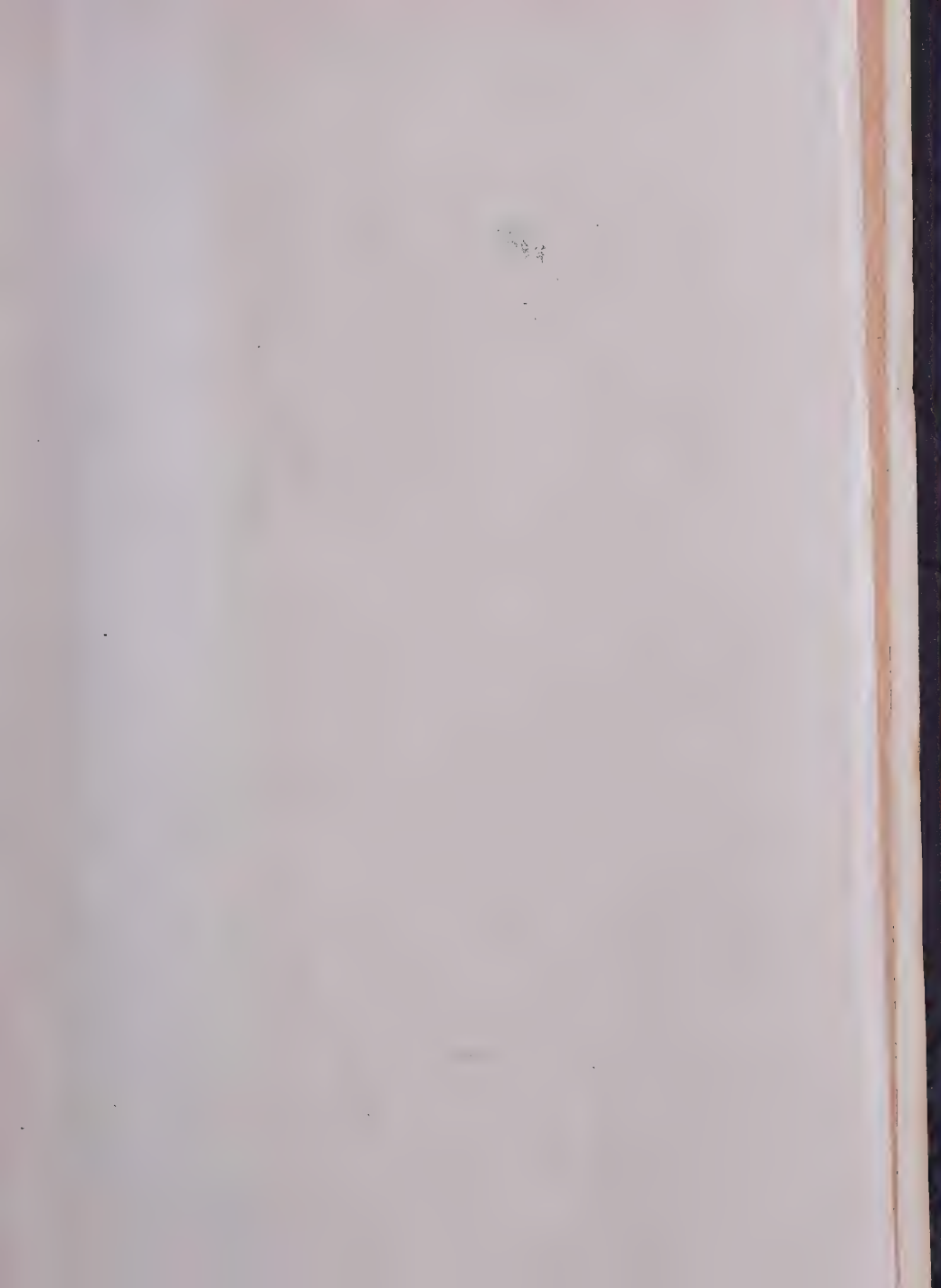
大正二年六月一日發行 第六合雜談 第三八百九十九號

ヤートルを悼む

嗚呼ヤートル牧師は永眠した。而も僕には殆んど之を信ずるとが出来ない。牧師は今でも矢張獨乙で、活動最中のやうな氣がする。牧師は教會傳來の信仰個條を信じない爲め、一昨年の夏、異端者裁判が伯林に開かれ、プロシヤ政府は牧師の職を奪ひ、その信任を得て居たケルンの教會から逐うた。然るに爾來牧師の名聲は益々高まり、その説を聴かんとて獨乙の各州よりは固より、和蘭、瑞西、埃國よりも毎々招聘せられ、その説は英米にも傳はつた。ある人が牧師を弔する文のうちに、ヤートル牧師は千九百十一年以來世界的の人となつて居た、と云つて居るが至當の言である。彼れは牧師の職を奪はれて以來、眞に豫言者の如き使命を以て、斷えず活動して居た。然るに説教旅行の途次ハルレー市に於て、馬車より落ちて負傷し、その傷口より中毒し、その爲め長く病院に病を養ひ、その間苦痛多き手術を九回迄も受けたけれども、遂に癒えず去る三月十一日、六十一歳にて永眠したのである。

嘗て法廷に立つてヤートルを辯護し、又後には同じ運命によつて牧師を免ぜられたトラウブ博士は、ヤートルの葬儀に列し、その事を記して居るが、冒頭先づ「是れゑらき一日なりき。我れ終生この日を忘れざらん」と叫んで居る。大會堂は花と人とを以て埋まり、立錫の地だもなく、僧表を着けた幾十の牧師は、全國より來つて葬列し、バツハが作の教會音楽は莊嚴に響き出たと云ふところである。會堂から墓地迄の距離は二里に近いが、葬列の先頭既に墓地に着くも、最後は尙ほ教會を去らず通路の兩側は人垣を築き、四階或は五階の家々の窓も皆な人を以て満たされる有様で、ケルン未曾有の大盛儀であつたさうである。免職せられた牧師は恰も王者の如く葬られたのである。

僕は三年前未知の外國人として、牧師を訪ひ、反て歡迎を受けて三日間その家に客となり、伯林では偶然街頭にて出逢ひ晚餐を共にし、又大會の宴會には牧師及び夫人と内ヶ崎君と食卓を共にして語り、その溫顔尙眼前に髣髴し、又それ以來常に書信を往復して居たのに、この偉人今や亡いのである。併しその精神に至つては生々として永く感化をこの世に與ふるとであらうと信ずる（みなみ）



吾々人間は斯うやつて、宇宙に對して立つて居るが、この宇宙とは抑も何ものであるか、此の宇宙は、我れを衝き離して、我れを寄せ附けないものであらうか。否々我れは、どうかしてこの宇宙の懷に入りたい。それに抱かれたい、それと合一したいと願う。であるから宇宙の眞相を考へるやうになる。そして宇宙の眞相なる全一を知り、之れと一致するのである。吾人はこの潮流を、古代印度のバラモン宗に於ける神秘、そのアートマンに關する考察に於て知ることが出来る。

然るに人間には更に他の慾望がある。身體も強健にしたい。智識も充實したい。安樂な生活もしたい。見るもの、聽くもの、皆な我が心を愉快ならしめるやうにしたい。始めは之を神々に祈願して得られるやうに思つて居たが、人文の發達に連れて、そんなとは皆な、神々に依頼せずとも出来る。人間の發明により、求めて得られる。秩序を造り、平和を行はしむれば、これ等の幸福は皆な持續せしむることが出来る。けれども人間はこれで全くこの生存に満足が出来やうか。疾病はどうしても免るゝとは出来ない。何年までも紅顔の美少年で居られはしない。充實して居た精力は何時の間ともなく減退して行く。眼は衰へ、耳は遠くなり、手足も意の如く働かなくなる。否なこの意思すらも、何んとなく力がなくなつて行くのではなからうかと思はれる。否なそれは兎に角とした所で、この全軀たる我れそのものはどうなるか。つまりは死ではないか。さうすると吾人が價值ありとするものを所有するは快樂であり、之を棄つるは不快であるから、こゝに吾人は廣き意味に於て、美的矛盾を感じる。従つて如何にかしてこの矛盾を脱出せんとする。即ち換言すれば吾人はこの美的不満足を免かれて、救済を得んとするのである。これ吾人が古代の希臘や、埃及や、小亞細亞地方に於て起つた、神秘教に於て認むる所である。而てこれ等の神秘教の特色とする所は、救済の問題が、倫理、道德、認識の



新救世主論

三 並 良

一

宗教と稱へらるゝ程のものは、如何なるものにも、皆な救済を教へざるはない。固より救済の意義に至つては、各々異つて居やう。人間がこの世界に生れ出て見ると、色んな苦痛に出逢ふ。病氣もあれば饑餓もある。水の難、火の難、山の難もある。その上人間は誰れでも死なねばならぬ運命をも有つて居る。人間は動物と違つて殆んど無意識に、この苦痛に甘んじて行くとは出来ない。これに敵對する方法、否なこれを免かれる手段を考へずには居られない。この壓迫、この苦惱は恐らくは原始人と雖も、感ぜずには、居られなかつたに相違ない。この壓迫と苦惱とを追れ出でんとする欲求はやがて自然現象の崇高にして威力あるものを、畏敬するの情と相合して、宗教的意識を産むに至つたとせば、則ち宗教は始めより、救済の教であると云つて、少しも不都合はないのである。それから人間の意識は、段々智識上にも、感情上にも、意思上にも、益々發展したものであるから、従て世界や自己に對する考が、精密になつた。

を説き、救済を與へて居る。従つて彼等も亦救世主であると云つて差支はないのである。然るに古來基督教に於ては、耶蘇を以て唯一の救世主であると教へて居る。然らば吾人基督教徒と稱するものは、今日も尙ほこの教義に服従するの義務を有して居るか。否なこの教義は今日の吾人に對しても尙ほ意味を有するか。是れ吾人が一應研究し置くの必要がある。

斯う云ふ問題を提供する時に、吾人が先づ研究すべきとは、耶蘇が救世主なりと云ふ意味は如何なるものであるか。耶蘇は如何なる救済を、吾人に齎らしたものであるか、と云ふのである。さうするとのこの問題の解答には、古來場所と時代とに於て、甚だ異つたものがあるのを發見する。吾人は固よりその詳細なる説明を、こゝで行ふの餘地を有せざれども、之れをざつと語つて見ると、先づ基督教が移植された希臘では、基督教を美的救済教と解したやうに見える。であるから基督教によつて求めた所は、如何にせば吾人は死の運命を遁れて、永生を得るとが出来るかと云ふとであつた。固よりこの永生、不死を得るには、認識が必要であるをも希臘人には忘れるとが出来なかつた。しかしこの認識とは直ちに實在そのものに接觸するとである。實在そのものに接觸して、こゝに流れつゝある生命に觸れて、復たと再び渴くとのないやうに、泉の水を飲むことである。耶蘇はこの實在の顯現である。であるから、この顯現を見るものは即ち實在を認識し、これに接觸し、直ちに不死と永生とが分ち與へられるのである。吾人はこの見解を希臘思想に由て書かれたヨハネ傳にも見るとが出来るが、同じく第二世紀の初年の人なりしイグナチウスが、エペソ人に與へた書翰中にも見るとが出来る。彼はこう云つて居る。曰く神は人間の貌に於て自己を現はし、人間をして神を直觀し、之れを認識し得るやうにした。その上この基督は、神の限りなき生命を有するものであるのに、之れが而もこの死す

問題にあらずして、全く前に云つたやうな、美的感情の満足を欲求する所から起つたものである。

然るに更に一方を見ると、國民的、或は國家的生活に秩序が出来て、こゝに倫理道德てふ意義が生じ、それが更に進んで、世界の倫理的秩序や、應報を認めるとになる。さうすると人間は必ずしも常に、この倫理的要求に従つて行くものではないとが、意識せられるやうになる。こゝに於てこの矛盾の爲めに、罪惡の觀念が生じて来る。否この罪惡の感じによつて、非常なる苦惱を感じるやうになるのである。さうするとこゝにも、どうかしてこの罪惡より生ずる苦惱を、免かれ得んものとの欲求が生じてくる。これが即ち倫理的救済教の起る所以であつて、この救済教になると、神觀も高尚になり一神教か、或は二元神教に於て、之を見るのである。多神教にも亦た此の分子が、皆無と云ふ譯ではないが、どうも多神教では、倫理的救済觀が、充分純粹に發展するとが出来ない。故に吾人は猶太の豫言者の宗教や、ベルシヤのツオロアステル教やに於て、この倫理的救済教を見るのであるが、ブラトーとか、セネカの如きに於ても亦た、その説く所に、大にこの救済觀があつたのである。

二

斯う云ふ譯であるから、吾人の考ふる所を以てすれば、宗教と云ふ宗教は皆な救済をば目的として教を起して居ると云つて、少しの差支もないのである。之れを以て單に基督教のみを、救済の教と云ふのは無理である。殊に救済と云ふことが、色々な意味に考へられるとするならば、そしてこの救済を人類に齎らしたものが、救世主とか救主とか尊稱せらるゝものであるならば、獨り宗教の開祖のみが、救世主でも救主でもあるまい。大哲學者や、大政治家や、大藝術家は皆な各々人生の爲めに救済

ものは、何であるか。それは耶蘇基督であると云ふのは、希臘や羅馬の基督教と同じことである。思ふに今日プロテスタント教は色々の分派に分れて居るけれども、所謂オルソドックス派の救済或は救世主なるものは、希臘や羅馬を経て、宗教革命家の稱へて居た所以外に出てはしまひ。是に於て吾人の提出すべき問題は、極めて明瞭である。即ち吾人は果して前に述べたやうな意味に於て耶蘇の救世主、而も神性ある唯一の救世主と信ずるとか出来るか、どうかと云ふ問題である。

三

耶蘇とは神が人間の貌を取つて、此の世に現はれたものであるとか、或は耶蘇が死んで再び復活したとか、云ふやうなとは、聖書の記事を歴史的に批評したり、或は諸宗教を比較的に研究するやうになつた現代の人々には、到底最早信ずるとの出来ないものである。聖書の批評的研究をして見ると、何處にも耶蘇が神そのものであるとは現はれて居ない。比較宗教史によつて見ると、何れの宗教でも後世に至り、信徒がその敎祖を尊崇して神となすが、規則のやうになつて居て、單に基督教に限つた譯ではないから、若し耶蘇を神なりとせば、他の宗祖も皆な神になつてしまふ。蓋しこれは耶蘇を神なりと信ずる大多數の基督信徒の否定する所であるが、更にその論鋒を借りると、自家の宗祖も亦た神にあらずとするのが至當である。

又耶蘇は人類に代りて罪を購うたと云ふとの如きも、若し封建時代ならばいざ知らず、今日の意識とは全く相容れざるものである。今日の意識から云へば、人は各々自個の行ふ所に對してこそ、倫理上責任を負ふべきも、その祖先が一人てした罪が、子々孫々にまでも及ぶと考へるとは出来ない。そ

べき運命を有する肉の世界に來た、そしてその復活によつて、彼れの靈と生の力は肉のうちに、強い働きをなすやうになつたのである。斯くして彼れはその教會にも不死の生命を吹き入れ、晚餐のパンによつて、死を免れ、耶蘇基督に於て、永久に生くるとの出来る良藥を與ふ、と云つて居る。之れを以て見ると、希臘の基督教は、無智を變じて眞の認識たらしめ、死を變じて永生たらしむる救済であつて、これを與ふるものは、耶蘇基督であると云ふ信仰が、中心をなして居たのである。

然るに羅馬の方の基督教は、これとは發展を異にして居た。羅馬の基督教の説明は、アウグスチンによつて基礎を置かれて居るが、彼によつて代表せられた基督教は、倫理的にして又法律的に、なつて居る。抑も人類は始祖アダムの墮落以來、遺傳の罪によつて穢れて居る。從て人類は眞に善業を行ふの能力が少しもない。又功藉によつて天國に行くとも出来ない。然るに耶蘇基督この世に來り、その生活、殊にその苦痛と死により人類の罪を購はんが爲めに、神に獻げた犠牲は神の嘉納する所となり、彼れを信ずる者には、その罪宥され、從つて永久の死をも免かれ、神の恩寵は再び人の心の中に活動し來り、人間は再び善事を行ふとが出来るやうになつたのである。されば救済とは吾人が罪によつて墮落せる境遇を脱し、吾人に善行をなす力を與へ、吾人をして天國に行くとを得せしむるものである。然るに吾人をしてこゝに至らしめたのは、一に耶蘇基督のお蔭である。彼れは實に吾人の救済者であると云ふのである。

進んでプロテスタント教の發展し來れる有様を考うるに、その中心點は罪の宥しにある。然しこゝでは罪の宥しと云ふとが、消極的に罰を宥して貰ふことよりも、積極的に、父なる神に近かづき得てその慈愛を受け、眞の生命に生きる意味の方が重くなつて居る。然らば吾人をしてこゝに至らしむる

るに至るとである。是れ實に一言以て掩へば、自然の束縛を打破するところである。精神の躍進である。

斯う云ふやうに救済を解すると、直接には少くとも二つの利益がある。その一は、この解釋が現代人の意識に充分適應するところである。救済など云ふと餘り消極的になりはすまいか、人間が意氣地なくなりはずまいか、餘り暗黒の方面にのみ重きを置き過ぎては居まいかと云ふ疑問も起らうけれども、吾人の解釋は決して救済を、さう消極的のみに見ないのである。消極的方面は固より存立しない譯ではない。それを看過してはならないけれども、吾人はそれを打ち勝ち、それを超越して、更に積極的に精神生活の方面を開拓しなければならない。本領は寧ろこの方面にあるのである。

それから第二には、吾人の救済觀は、世界の宗教歴史を統一的によく了解せしめるのである。吾人は冒頭に於て寧ろ冗長に諸宗教の發展に伴う救済觀を述べたが、之を見ると、救済觀は人類一般の所有する所と云つていいのである。云はゞ人類の精神的過程として、救済觀は産み出されて居る。これは即ち人類の特權である。そして人類一般がこの意識を益々發展せしめ、國民や、時代の相違によつて各々異りたる方面を開拓し、消極、積極を開發したのである、と見るとが出来る。是れは最も公平で且つ世界歴史の統一的觀察であらうと思ふ。

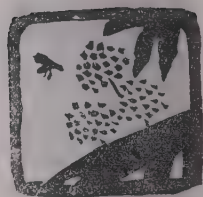
併し斯うなると、耶蘇の歴史上の位地はどうなるであらうか。此の疑問がまだ一つ残つて居る。

救済とは世界に於ける人類の精神生活が發達する過程上の現象なりとせば、この過程を誘導したる人格は、耶蘇一人にあらざるとも、看易きの道理である。故に耶蘇が唯一の救世主であるとも、又他のものと異つて神性を有するものと云ふとも出来ない。救済を齎らした多くの人々を比較したらば、その優劣はあらん。併しその人々に根本的の元質が相違して居る譯はない。優劣の判斷は彼等の與ふ

れと同じやうに自分の爲した行爲に對し、他人が代つて、之を購ひ得るとも思へないのみならず始祖の罪によつて墮落せる人類が、歴史上たつた一度耶蘇のなした行爲によつて清められたとは益々信ずることが出来ないのである。

抑も人生に於ける苦痛或は罪惡は、何が故に存在するのであらうか。これは始祖アダムが嘗て樂園にあつた時に、たつた一度行ふた罪惡の爲めに、この世に生じ來つたのではあるまい。自然の狀態より醒めたる意識を以て、自然以上に精神的領域を創造しつゝある人間が、遭遇せざるを得ざる事件であらうと思ふ。吾々人間は自然と云ふ外皮を蒙つて居るけれども、そのうちから精神生活が湧き出して來る。そしてこの精神生活は益々發展する。然し今では全く自然を離れては居ない。そこでこゝに生ずる矛盾衝突が苦痛となるのである。吾人は動物から發展し來たのであらう。この動物時代に於ては唯だ本能のまゝに行動するものが出來たが、人間となつて、精神生活が現はれて來た以上は、動物的本能の満足のみを事とすることが出來ない。こゝに倫理界が生じた。然るに動物的遺物が人間の精神生活と矛盾衝突を生ぜしむる。それが罪惡と感ぜられるのである。故に苦痛或は罪惡は自然界が存在しそれを基礎として人間が現はれ出て居る間は、到底消滅すべき筈のものでない。併しながらそれと同時に吾人はこれ以上、更に精神生活なるものが、發展して居ることを忘れてはならない。これがより以上大切なものである。この精神生活は眞、善、美の意識によつて現はれ、自然的生活以上に獨立自在をなすものである。吾人の努力すべき所も亦た固より精神生活の發揮にあるとは云ふまでもない。

然らば救済とは何であるか。曰く救済とは自然的存在に束縛せらるゝが爲めに、無常の境遇にあり、罪惡に沈淪せる、憐れむべき狀態を脱して、精神生活の根源たる神の生命によりて、精神の自由を得



直覺と理性（下）

野村 限 畔

一

近頃一方には直覺的思想が非常に高調されたと同時に、他の一方には淺薄なるプラグマティックの思想が蔓延した爲めに、ある一派の人々は哲學を極力非難攻撃するやうになつて來た。哲學は全く死學者の空論であるとか、時代錯誤であるとか、あまりに論理的抽象的（隨て非眞理）であるとか、實生活と全く沒交渉であるとか、甚だしきは無用の學である、人生の進歩を害するものであるなど、盛んに輕侮痛罵を浴びせかけるのである。かゝる議論は詩人や文學者か、或は極端なる實際家の間に行はれて居る様であるが、成るほど是れ等の非難にも一理はあるだらう。哲學と云ふものは

元來詩でもなく、小説でもなく、聖典でもない。また一片のバンも燒かなければ、一滴のミルクも搾らないから、かやうに非難されるのも止むを得ない話である。併し之が爲めに哲學は、全く人生と沒交渉である、無益である、従つて眞理でないと云ふとは少しく酷な批評ではあるまいか。此くの如きはよく學問（科學、哲學）の性質に同情をし、理解して呉れることの出来ない非難ではあるまいか。

そしてかゝる非難をする原因は何であるかと云ふと、要するに哲學は論理的抽象的であると云ふとに歸して了ふ。併しこの論理的と云ふところが本來學問の性質であつて、またその特色ではなからうか。この特色あるが爲めに學問は、日に月に

る救済の深みや力や、その普汎性の程度によりて定めるより他に方法はないのである。

さうなると吾人が救済宗教として今日比較し得べきものは、佛教と基督教より外にはないのである。嘗て地中海沿岸に輻輳し來つた諸宗教は、基督教の吸収する所となり、基督教は之を攝取して益々大きくなつたのである。佛教に至つては等しく東洋の天地に大きくなつて居る。併しなから佛教と基督教との異なる所は、精神生活の問題である。精神生活は人間にありては、人格となつて現はれて居るが、その根本は神の生命であつて、これがあらゆる精神生活の發展を促し、人間の目的は自由と人格とを創造するにあるか、或は然らず神とは精神生活を有するものにあらず、人格的生命は夢に過ぎずとなすべきものであるか。若し前者に左袒するものならば、基督教徒となるであらうし。後者を賛成するものならば佛教徒となるであらう。吾人は固より佛教徒ではない。然らばその宗教的生命は何れより來れるかと云ふに、最も多く基督教より來つて居る。耶穌に就きて傳へられたる傳説の感化をも受けて居る。更に一步を進めて云へば、耶穌と云ふ人格の印象は、我が胸に銘せられて消えもやらず、益々成長せんとして居る。そして確かにこれが爲めに救済をも得て居る。併しながら彼れは我が爲めの唯一者ではない。若しさう云ふならば我れは精神界の偉人に對して甚だ不敬を働くのである。そして結極我が目的とする所は他の救済的感化によつて立たず、自ら自律的の信仰を得んとするところである。

ない。整然たる論理に由て一層統一的包含的なる概念を要求して居るから、この意味に於いて理性には進歩があると云ひ得る。少くとも人間意識の範圍にあつては進歩があると認め得るのである。

斯かる研究から直覺と理性との間に、離るべからざる密接の關係の存するとが自ら明かになつて来る。直覺と理性との認識的二機能は、人間の先天的固有の作用であるから、何れをも放棄するとは出来ない。一方をあげて他方を貶するとの不可なるのみならず、孰れを眞理とし孰れを非眞理とするとも、到底正鵠を失したるを免れない、これは單に五十歩百歩の問題に過ぎない。直覺も理性も「我」と云ふ此の個性的生命の心的作用である。

我の生命その者が眞實であるとすれば、直覺も理性もつまり心的寫象を捕えて居るに過ぎない。されば直覺か理性かの疑問は、猶大に妄念なるを失はない。併し共に人間の先天機能であり、本來要求である以上は、人間は決して一方のみで満足出来ないとは明かである。

勿論眞の哲學宗教は固より、元來眞實なるものは直覺に初まり直覺に終るべき者である。直覺の

ない所に一體眞理の現はるゝ筈がないのである。

此の意味で眞理はトランセンデント・ブラクチカルのものであると云ひ得る。實を言へば非常に主觀的特殊的であるが如くにして、極めて客觀的普遍的であるのは直覺で、外觀大そう客觀的普遍的のやうに見えて、存外主觀的特殊であるのは理性である。之れは妙な説明だが何うもさうらしい様に思はれる。或は前者は先天的絶對的であるに反して、後者は相對的進歩的であるが爲めかも知れぬ。併し之が爲めに理性は全く無用であるとは云はれない。兎に角、理論上で知ると、信ずるとは、全く關係のない別な場合であるとの存するは事實である。即ち我々は理論上では明白に解つて居るとても、それが左様に信じ得ないとが屢々ある。常に人間は此様な矛盾を感じ衝突を経験する。之が爲めに或は思想上に於て、或は實踐上に於て非常なる煩悶をするのであるが、これは何の爲めかと云ふに、人間には元來二つの異つた機能があつて、それが各々別々の要求をするからであると思ふ。別々の要求とはつまり抽象的に云へば、一つは主觀的獨立的要求と、一つは客觀的普遍的要求

疑々として進歩して行くのであるまいか。隨て其結果人生社會の生活形式即ち文明が發達して行くのであるまいか（たとへ現代の文明は虚偽の文明であるとしても）。詩人や文學者と云ふ者は、直覺的才能の非常に發達した天才であるから、何等悟性作用を藉るとなしに其直覺的眞理即ち氣分そのまゝを、赤裸々に如實に表現するところが頗る巧みであるが、彼等は到底煩瑣なる推理作用には堪へ得ないのである。然るに哲學者は直覺的才能の外に、理性の働さがまた大に卓越して居るが爲めに、何うしても朦朧とした氣分そのまゝを捕捉すると丈けて満足出来ない。必ず之を経験に訴へ事實に徴し、その間にいろ／＼の關係とか法則とかを發見し、更に其諸法則から一の概念を抽象して來て、之で其直覺した眞理を一つの整然たる體系に總合し組織するのである。

この組織作用は即ち理性の職分である。假令ばこゝに一つの物體があるとするに、そは生命のもつた氣持ちのよいものであると直接に知るのはいち直覺である、然るに之を五官の經驗に訴へて、赤い色、圓い形、馥郁たる香ひ、五つの花瓣 黄色

の雄蕊と雌蕊などの多くの感覺を得、是等分析的經驗から花と云ふ概念を抽象して再び綜合して後初めて認識が出来る、之が理性の作用である。この場合に於て、分析的經驗の感覺や抽象的概念の花を離れて、別に花それ自身の生命があると主張する直覺と、色や香や形や花瓣其者そのまゝが生きた花であるとする理性と、孰れが果して眞實であるかは、生命のある物體其者でなくては誰も知ることが出来ないところであらう。それは兎も角直覺には本能の力や氣分を交ふると多いのは事實であるから、時々變化があり、また人々に由て變化せざるを得ないのは當然である。朔風凜烈たる嚴冬に見た氷の感じと、沸くが如く暑い酷暑の節の氷の感じとが異なるやうに、直覺もまた異なるのである。されどかゝる變化には決して進歩があると云ふとが出来ない。何となれば直覺は、眞實その者と直ちに融合默契した状態で、時々變化があるに拘らず其の時／＼に於いては絶對的のものである。隨てかゝる變化の間に何等の法則も連絡も發見し得ない、全くジャンプであるからである。然るに理性の作用には無法則の變化やジャンプなどを許容し

以て他人に強ふるの條件を造るのである。斯かる眞理の客觀性を要求する理性の力も中々悔るべからざるものがある。たとへばベルグソンは盛んに直觀的方法を高調して居るのであるから、不立文字、以心傳心を標榜する禪僧式に、濟まし切つて沈黙するかと思ふと、彼は中々多くの書物をかいて、而も煩る飾つた文辭で煩瑣な證明をしたり、重複的な説明をやつたり、雜多な實驗や事實を記載して居る。之れは何の爲めかと言ふと、要するに同様に信ぜしめむと欲するからである。(かゝる説明では無論不可能であるが)。人間に斯う云ふ要求があるから、謂はゆる認識論と云ふやうな哲學問題が起つて來て、或ひは純理論と經驗論とが互ひに論争し、或は觀念論と實在論とが相拮抗して居るのである。

この傾向は殊に實踐上に於て甚だ明瞭に現はれる。吾人が道德上の善とか或は至善と云ふものを直覺した時には、善は他と相對的關係なしに全くそれ自身で、絶對的善であると云ふとを強く感ずる。またかく主張せんと欲する。「善は善の爲めの善である」とか「無上尊嚴」であるとか「絶對命

令」であるとか云ふ意識は、多く直覺的根本的要求から來るのである。故にこの見地からすれば即ち *End justifies Means* で、他人が何んと言はうが社會がいかに非難しやうが、國家がいかに脅迫しやうが、我は我の信ずる善に向て不羈獨立に、自由に猛烈に、精進し斷行して差支ない譯である。併し是は到底言ふべくして行ひ難いのである。何となれば、善の直覺は自由で絶對であるけれども、善の實現即ち行爲は相對的であり、また拘束制限的であるからである。即ち人間の道德的行爲たるや、先づ必然的に知情意や肉體の影響を受ける。次ぎには種々の社會上の制度や法則に限定され、最後には因果法や自然法の羈絆を脱するとは出來ない。斯くの如く人間の周圍は實に拘束充滿であるから、逆も絶對的自由行爲は全く不可能である。又無鐵砲に自由行動をした所で、決して成功するものでない。そこで我々の主觀的善に、客觀的普遍的の權威と價值とを附與せんとするには、現實生活と沒交渉でない密接なる理想を構成し、この理想を實現する方法、手段等を、よく社會又は自然法に鑑みて熟考し、然る上に適當の時期を見

である。前者は即ち直覺又は本能の要求であり、後者は即ち理性又はブルイデンスの要求である。

換言すれば直覺の要求は根本的であり、トランセンデント・ブラクチカルであるが、理性の要求は全く便宜的或はブラクチカルである。かゝる要求は人間の先有するところであるから、到底避くべからざるものであると同時に、人間生活の實際に於ては又必然に斯くあらねばならぬのである。ベルグソンの言つた如く、生は自己の永久實現の爲めに、この二つの機能を創造したのである。何となれば一つは人生に生命と活動力とを與へ、一つは進歩發達を與ふるからである。

二

今二三の例に由て説明して見ると、認識論上に於ては何うしても理性の作用を要する。勿論學問は前にも述べた様に、その本來の性質が論理的抽象的隨てプラグマティックであるから、純粹直覺のみでは到底成立し得ない。而已ならず直覺のみに信賴して、五官から來る感覺的經驗や理性の推理作用等は一切信賴せずとすれば遂には現代の文

明凡べてを呪咀すべき運命に陥つて了はなければならぬ。何となれば現代の文明は、知的文明、科學的文明であるからである。併しこれは到底不可能である。決して現代の文明は否定すべきものでも呪ふべきものでもない。然るに人間には前に言つた二つの要求があるから、事實之れは出來ない問題である。また我れ／＼は是れが本來の眞理である、實相であると直覺悟入した時には、全く他から獨立して主觀的に信すべきものである。現實世界が何うであらうと、他人はいかに考へやうと一向頓着なしに、我れは我れて信すべきである且つ必ずかく信ぜねばならぬと思ふのである。此の要求は人間の信仰上に於いては非常に強いのである。併しながら主觀のみでは到底満足は出來ない。現實世界と齟齬すれば一種の不安があり、他人の信仰と衝突すれば憤慨が出る。これが不識の内に他の要求が起つて居る證據である。即ち自分の直覺した眞理を、あくまで他人に強ひて信ぜさせやうとする。そこで出來る丈け經驗に徴し事實に照して、これに客觀的妥當性を附與し、また出來る丈け論理的に組織し説明して普遍性を與へ、

るが、元之れ一種の本能であるから、もし理性の刺戟を全く離れると遂には自然的本能となり、或る局部に拘束されて機械的に動作をするやうになる。故に理性が常に進歩的向上的觀念で、直覺を刺戟し覺醒しなければ、決して發展するものではない。直覺の進歩的動機は實に理性から來て居るとは、彼の考案であるらしい。されば彼に由ると直覺は全然先天的、超經驗的でなくて、矢張り吾人の經驗や理性の影響に由りて發達して行くものである。

大詩人ゲーテもこれと同じ様な意味で藝術を論じて居る。『詩と眞理』の中に左の文句がある。

人間の精神は觀照 *Anschauung* と概念 *Begriff* との二種の方法に由て、最もよく満足せしめられる。觀照は價值のある對象と、相應の教育とを要する。併しその對象は、いつでも求め得るものでなくその教育は、またいつでも達して居ると云ふものではない。之に反して概念はたゞ感性のみを要する。彼自らその内容を持ち來すので、それ自身が即ち教育の道具である。故に吾人はかの卓拔なる思想家が、陰鬱なる雲間に

通して、我々の上に投げ照した光明を大に歡迎した。レッシングの作ラオコーンが、吾人を狹隘なる觀照の境界から、思索の自由平原に導き出したとに由て、いかに大なる影響を吾人に及ぼしたかを表現するときは、實に青春の氣に溢れざるを得ない。從來長く誤觀された *Ut pictura poesis* の思想は、直ちに変除された。成形的藝術と修辭的藝術との相異は、明かになつた。

たとへ二者の根底は近く接觸して居るにもせよその技頂は互に分離して來た。成形的の藝術家は、美の境界の内部に止まらねばならぬのに、

修辭的の藝術家は、勿論藝術の意義を無視する譯ではないが、それを高く超越することが出来る。即ち前者は美その者に由てのみ直接満足する外的、感能の爲めに創作するに反して、後者は猶ほ醜とも和合し得る想像力の爲めに創作するのである。」

この言語は移して直覺と理性との關係を説明せしむることが出来る。直覺は徹底的であるが局部的である。理性は超越的達觀的である。この相違は、藝術界のみならず、日常の生活に於いて殊に

計つて實行すると云ふ、極めて慎重な態度を要するのである。之れは勿論理性の働きである。この道德的理性の要求から、倫理學上に、合理論とか、禁慾論とか、進化論とか、快樂論とか云ふ種々の學説が生じて來るのである。

此の如く人間は認識上に於ても又實踐上に於ても、決して直覺のみで満足の出來るものではない。大に理性の助力を俟つと多いのである。否理性なしには到底學問が起らないのみならず、人間生活の發達を得て望むとは出來ないのである。

三

以上の研究に由て見ると、ある一派の人々が猥りに直覺のみに重んじて局部的分析的である經驗や理性を輕んずるのは、所詮頗る淺見たるを免れない。かの詩人哲學者メエテルリンクが極力、理性や論證を排斥したのは無論子供らしい謬見である。元來直覺が眞理で、理性が幻影であるなど、は言はれないのである。何れも人間の認識的價値を確實ならしむる爲めには、必要缺くべからざる機能である、佛教は極端な直覺主義であるが、併

し人間の經驗や理性の作用等をも大に尊重した。之に就て佛典に面白い譬喩譚がある。「ある王が大臣に命じて一匹の象を牽かしめ、群盲を集めて各々之れに觸れしめた。而る後王は衆盲に向ひ、象は何の類であるかと問うた。然るにその牙に觸れたものは、象の形は大根の如しと云ひ、耳に觸れたものは、象の形は大根の如しと云ひ、頭に觸れたものは、石の如しと云ひ、鼻に觸れたものは、杵の如しと云ひ、脚に觸れたものは、木臼の如しと云ひ、背に觸れたものは、牀の如しと云ひ、腹に觸れたものは、甕の如しと云ひ、尾に觸れたものは、繩の如しと云つた。しかし善男子よ。かの衆盲は象の體を説かない、また説かないとはない。もし此の衆相にして悉く象に非ずとせば、亦この衆相を離れて外には更に別の象あるとない」と。この教へは實に哲學的に深いものがあると思ふ。此の點に於いてはベルグソンは流石に哲學者だけあつて、メエテルリンクの様を極端な議論はして居ない。彼は直覺も理性も共に人間の認識及び進歩には欠くべからざるものとして取扱つて居る。ベルグソンに由れば直覺は單刀直入、實相の奥底に闖入し躍進する作用であ



行 樂

伊 藤 寥 々

穂に出でし麥畑のせて大つちはあしたの靄に海とはるけし
まろらかに並びて茂る水楊のみぎははてなし大ぞらの下
けふる海平無の干潟うすねむる空に點にてゆく白き鳥
行樂のうたげにありて底ひなき淡き佗しさやるよしもなし
行樂の一日の暮れの雲のいろ芦角ぐめる洲に立ちて見る
いかなればかゝるうたてき思のみわきて抑ふるすべ無かるらむ
汽車の音をちに聞きつゝ今宵また哀しきことを思ひつゞくる
寐ぬるべき時は來つれどいぬるだに懶きことの悲しくもあるかな
願はくば大みなさけに身も魂もひたしてふるひ立たまくほしき
うきなやみ汝は光の窓の戸を押してたまねくはしきうなるか

注意すべきものである。直覺なき理性は偽りであるが、理性なき直覺は愚である。偽と愚とは共に人間の惡む所である。山に入りて山を見ず、山を出で、初めて山を見るとは洵に眞理である。直覺の人間は考察も達觀もないから、偶々愚劣極まることを爲したり、刻々の變化を追うて喜ぶ惡弊がある。即ち文學者が時々沒常識として笑はるゝは是が爲めてある。かゝる誤解の結果遂に無理想無主義に陥り、最後に自己の人格を滅却して仕舞ふのである。持久的主義のない所に、人格なく價值なく、尊嚴はない。主義は人格の生命である。生命は變化でなくて持久である。直覺と理性は生命の二大機能であつて、吾人の精神は直覺と理性との神秘的結合である。而して精神の表現たる行爲もまた直覺と理性との無意識的調和である。故に行爲の研究は即ち個性的生命の研究である。茲に倫理學は形而上學に接觸する。

之を要するに、直覺は人間創造の活動的動力であつて、理性はその進歩的動力である。換言すれば前者は、活動的自由的實在としての根本要求であるが、後者は、制限的實在としての研究的實用

要求である。即ち理性は客觀的間接要求であるに反して、直覺は全く主觀的獨立的直接要求である。故に無論後者の人格上重大なるは言を俟たない。カントが純粹理性のみで満足出來ず、實踐理性や物自身の存在を要求したるが如き、プラトールが觀念世界に憧憬がれ、ショーペンハウエルが意志の欲求を説きたるが如き、皆直覺から來た強い本來の要求であつたと思ふ。即ち純粹の學者としてではなく、人格を有する人間としての自由憧憬であつた。こゝに即ち彼等の哲學に、偉大なる一種の權威が認めらるゝのではないか。(完)

圖 早 春

岡 稻 里 著
東 雲 堂 發行

△白銀の壺の底などおもひ居ぬこの山國の雪のこのころ。

△この森かげ夕べになれば湧きいづるうす黄のひかりさびしき心。

△ともすれば眠らむとする静けさの幾日もつづく春山に住む。

著者近江の山間に入りて、獨り自然の靈覺に驅ふ。そ
いろに林森湖雲の哀愁に咽ぶ。蓋し綠蔭の好伴侶。(定價
七拾錢)

も餘り念頭に置かざるもの多きより、目に見ゆる肉體、或は有形の物象を本として、考ふるよりして、自我の何たるやを知らず、殊に自我は、肉體を去りて存在し得ざるやう思ひ易いのであらう。

苟も自我は、始より靈的のものにして、決して肉體てふ所謂物質或は腦髓と、心或は靈魂とより成れる複成物、化合物にあらざるを知らば、又意識作用、心の活動、情態は、唯物論的に物質又は物質的勢力に歸す可きものに非ざるを知らば、自我の不滅を空想とし、空望とするの如き議論の却て虚妄なるを解す可きである。

二

或は謂ふものがあらう、曰く、我等は自我の物にあらざるを承認す、然れども、此の肉體ありてこそ、我も在り。生理的條件ありてこそ、心理的作用があるなれば、生理的條件が無く成り、此の肉體が無くなれば、意識現象即ち心理的作用も無く成る筈である。されば自我も無く成る筈である。と然れども是れ亦大なる迷想なり、依然として、自我の何たるやを解せざるものゝ是なりと、予は

思ふのである。なぜかなれば、吾れ人の意識作用を以て、悉く生理的條件の下に拘束せらるゝと思ふが、一の根本的迷想であつて、又固より進歩せる理學の許容能はざる所である。生理的作用と心理的作用とは、密接の關係があるに違ひ無いが、さりとて、心理的作用は、即、生理的作用ではない。心理學は、生理的心理學フヒジオロジカル、サイコロジイ以外に、内容を有せぬものでない。かりに心理學てふ科學の立場よりのみ云ふも、生理的條件に、凡ての精神作用、即ち意識作用が從屬して居るものとは、斷じて許す可らざる所である。況んや、自然の何たるやは、所謂、實在の問題であつて、科學としての心理學の問題でない。之は確に哲學の問題であつて、既に唯物説を、虚妄として排斥し得る以上、而も物の方より、心を説明せんとするが、合然非哲學的で、本末を顛倒したものであるを知つた以上、意識現象の中に又外に存在せる一實在たる自我を、生理的條件に屈從して、自己の運命を絶對的に支配されるやうに思ふは、甚だしき妄誤の見であると思ふのである。

成程、自我は此の肉體に生れたのである、而し

自我不滅の論理

桑田常藏

題名につき、既に彼是異論もあらうが、靈魂の不滅とか、人格の永在とか謂ふよりは、自我不滅と謂ふ方が、最も予の見解を表すに、都合が好いと惟ふので、さう定めたのである。而して論理と言ふと、直ぐロジックを想浮べ易いが、予は、ただ成る可くロジカルに、予の非見を書いて見やうと思ふまでの事である。いづれ稍精細に、關係ある諸方面より、心理的に、哲學的に、又宗教的に、予の所信所見を公にして、江湖先覺者の教を乞ひたいと思つて居るが、茲には、寧ろ獨斷的に、而もたゞ成る可く、論理的即合理的に非見を述べてみやうと思ふのである。

一

此の問題に就き、或る種の人は云ふ。自我の不滅は、成程人類一般の希望ではあらうが、肉體を離れて自我は無いのである、自我は心と體より成れるものなれば、此の肉體が死ぬる以上、或は此の肉體が無く成る以上、自我は消滅する筈である自我の不滅などは空想、空望に過ぎぬと。而して斯の如き論者は、尙ほ進んで、其の空想、空望に過ぎざる事を、科學に訴へて論じ得るであらう。所で、予は惟ふ。斯の如き者は、先づ自我とは何

ぞやの問題に就き、合理的見解を得ねばならぬと。思想の根本として、推理の基礎として、自我の靈的なるを是認せば、自我を以て、心と體より成れるものと思ふ事は出来ぬ筈である。苟も唯物説の、最早や時代^{○○○}後れの學説たるを諒し、而して、自我が靈的實在、隨て意識的實在なるを解し、決して、物的、無心無覺なる勢力の所産に非らざるを知らば、物的の見地より、肉體に於ける所謂死てふ現象より、自我の消滅は、決して推論し得べきものでない。靈的實在としての自我は、心と體より成れると惟ふが、抑も誤りなり。兎角く、直接、覺識し得べき、意識作用狀態よりは、僅に觀察、實驗に依りて、何かの方法、媒介に由りてのみ、而も自我が本業、自ら有する或は有し得る意識的、靈的作用に據りてのみ、測知し得べき物質的現象に重きを置くよりして、又一般の民衆は知識乏しく、品性も低く、衣食住のみに、殆んど心を奪はれ、自我の何たるやも、世界の何たるや

解らぬと云ふ者もあらう、否隨分、此の類の人が多くあるだらうと想ふが、予の思ふには、論理的に謂へば、こんな人は、不滅どころで無い。先づ自我の存在も、合理的には解つて居らぬであらうと思ふ。夫のトーマス、ヒル、グリーンは、「諸君若し諸君の眞の情怨を知つたならば、神の事も不滅の事も、自由の事も之を知るであらう」と言つたのであるが、予は敢て斷言して曰はん、人、若し眞面目に、自我の何たるかを、哲學的に研究したならば、或は眞に神の存在を信じ得たならば、而して宗教的經驗を得たならば、自我の不滅は、其の思想、其經驗に含まれたる生きたる信念の論理的必至の結果たるを知るべしと。

今夫れ、何とも解らぬと云ふが如きは、誠實に考へぬからである、浮々と世の物的現象に目が暗んで居るからである。眞理は唯だ、なぐさみ半分てわかるものでない。ラッド氏が認識哲學にも論じて居るやうに「ゼデ、ウワード、アンド、ゼ、インヂヴィデュアル」にロイス教授が説いて居る如く、眞理の研究、認得には、情意の作用が、甚だ關係するのである。自我が不滅するか、どうか解

らぬと云ふが如き、或は想ふが如き人は、先づ自らの品性如何をも反省するが、よからうと、失禮ながら御忠告申すのである。

附け加へて申して置くが、元來、何となく解らぬとか云ふは、誠につまらぬ話で、此れより研究せんとする人ありと假定し、其の人に向つて告げたきは、其の人の立場として、最初に、信じ得べき、又考ふれば直ぐ解る事として、自我の不滅は果して眞理なるや、否や、容易に判別し難しとするも、どちらかてなければならぬと云ふことである。則ち、最初の立場として、先づ自我は不滅のものとも、滅するものとも言へぬとした所で、不滅もなく、滅するでもないとは言へぬ筈である。自我は、所謂肉體の死に於て、消滅するであるか、せぬのであるか、少くとも、どちらかてなからねばならぬのである。如何に疑深い者でも、どちらかであり、どちらかてなければならぬ事だけは知れるのである。換言すれば、自我は不滅とも、不滅でないとも、先づ初には解らぬ、解らぬからして研究思索するものとして論ずるのである。どちらか未だ否永久自分には知る事が出来ぬかも知れ

て此れと同時に、此の天地、此の宇宙に生れたのである。而して自我は、此の肉體に由りまた此の肉體を通して、天地より制約を受けて居るのである。しかし、自我には確に活動がある、信念もある、希望もある、而して自我が此の肉體を去つた時が、即ち、此の肉體よりの制約を脱した時である。而して此の自我は、何れに行くか、若し此の天地にして、或は宇宙にして、目に見える丈けのもの否、觀察され、實驗され得る丈の物質的のものであつたならば、行き場が無いかも知れん、而も此の靈的自我を生める、或は此の肉體を生み、此の肉體を通して、自我を制約しつゝある宇宙の根本が、靈的のものなればだ。目に見える世界の奥に、或は外に否周圍に、靈的世界が在るに違ひない。されば自我は其靈的世界の民たり得るのである。而して予は思ふ本來、見えざる宇宙の中に見ゆる方面があるのであつて、實は靈界の中に物界があるのである。誠に思へ、夫の物質的科學も、目に見えざる、如何なる強度の顯微鏡を以てするも見る能はざる或る物を臆定し居るては無いか。

元來物を本として考ふるが迷想の根源である。

物とは何であるか、ゼント教授も物質てふ概念の甚だ不明にして頼むに足らざる事は、既に證明し居るてはないのか。しかし別に大家の説を持出すに及ぶまいが、自我の何たるや、殊に其の滅不滅の問題は、生理學や、心理學のみで解する事は、不可である、予は確に信ずるのである。而して宇宙の究極的實在統一的、適在的、實在は、無心無覺のものに非らずと、合理的に信じ得ると同時に、若し無心無覺のものとしたならば、有心有覺なる自我は、根柢なき存在となり、吾れ人の認識作用も、善美の理想も全く虚偽とも何とも云へぬものと成るが故に、予は一の自我としての自覺より、自我の靈的なるを知り、而して自我の根本又宇宙方面の根本は大靈的實在たるを推知せざらんとするも能はざるが故に、隨て自我は、此の肉體に於てのみ生息するものにあらず、如何に考ふるとも又其の考の存在其のものから思ふても、自我は不滅なりと惟はざるを得ぬのである。

三

多くの人々の中には自我の不滅如何は、何とも



新實在論

三 島 衛

近頃新實在論と云ふ一派の新しい哲學運動が、英米の思想界に起つて居るとは、既に我が學界にも二三紹介せられたことである。故にその學說や組織の精しい説明は充分として、茲に一個の主義に由て生活する人間として、新實在論に對する余自身の態度を聊か明かにせむとするのである。

實はペリーやラッセル一派の論者自身が、堂々と新實在論の銘を打つて居るものゝ、其根本思想たる所謂實在なるものゝ意義が甚だ不明瞭、曖昧を極めて居るが故に、果して正しく實在論を標榜してよいものか、或は他の名稱を用ゐた方が却て適切であるまいかと云ふ様な疑問もある。即ち實

在を以て飽くまで客觀的に獨立した絶對的實質と爲し、我々は吾人の思惟や感情や想像などて之を認識するのでなく、全く經驗を超越して先天的に知るか、或は直覺するのであると云へば、一種の實在論であると云ひ得るかも知れない。併しラッセルの云つた様に、實在は經驗に依て追々に發見せらるゝものであると云へば、我々人間は何うしても知情意と關係のない獨立した客觀的實在と云ふものを、直接經驗するとは出来ない話であるから、論者自らがさも儼然として客觀世界に存在するかのかの如く主張する所謂實在なるものは、實は一種の空想的幻影か、或は經驗から抽象し推理して得たところの綜合的抽象的概念でなければならぬさうすると立派に銘を打つた實在論は、實は一種

ぬ。しかしどちらかではある、滅するに非ずんば、不滅であると云ふ丈は斷言し得る筈である。然らば滅、不滅、いづれか合理にして、人性の要求に應ずる思想或は信認なるかを思索判斷すれば、足るのである。自我の不滅問題は、見方にては案外容易のものとなるのである。予は失禮ながら此點にも世の注意を引きたいと思ふのである。

尙ほ序で一言して置きたいが、世には、或種の人ありて、予輩は、自我の意識的永存は、信じないが、予輩の爲した事業、行動等の永存を信ず

此の意味にて、予輩は自我の不滅を承認すると論ずるものもあるやうであるが、予は、茲に斯くの如き説を批評するの必要を認めぬから、敢て喋々はいしないのだが、斯んな説は、自我の不滅てふ語を保存せんとするだけのもので、決して自他の心情を満足させるもので無い、又健全なる理性隨て情意の要求を無視し得ざる哲學者の執る可き態度主張でも無いと、斷言し得て憚らぬと惟ふのである。眞面目に所與の問題を考へぬからではあるまいか。

夢を見ると云ふ事は、まづ第一に、白痴より千倍も卑しい低級な人たちの蹂躪を忘れることなのです。永久に掠奪されてゆく人たちの癒すことのできない叫びを聞かずに、誰でも苦しみを嘗めなくてはならない社會生活とか云ふものゝ侮辱を忘れることなのです。……さうして表面の世の中には其の影がさして居るかゝない位の隠れた世界を、自分の心の奥に眺めやることなのです。もう間もなくやつてくる死の影のなかで。うち勝つことのできない希望を強めることなのです、自分が堪びないものと云ふ感じを、更めて攫むことなのです。寂しくはあるけれども朽ちないものだとか云ふ感じを胸に込み込ませることなのです。丁度大きな河水が海に流れ込むやうに、理想の美はしさに憧れることなのです……夢を見ると云ふことの奥底は、死んで行くことなのですけれども、それは青い空の色を見つめて靜かに死んでゆくことなのです。わたしはもう夫れだけで満足です。……(ギリエ・ド・リイル・アダ
ン作『反抗』の女主人公)

即ち幻滅哲學であると云ふのである。

三

以上の如く新實在論は、實在の客觀性や絶對性を最も強く主張するのであるから、あまり人間を重く見て居ない。否な實に無力な弱い憐れなものとして考へて居る。隨て人間の創造力とか、人格の尊嚴とかは到底話にならない問題である。たとひ人間には或る種の自由があるとしても、其れは極めて狭い薄弱な思想上の自由に過ぎない。彼等の主張する善と云ふものは、全く我々の思惟や感情や氣分や意志を超越し、客觀的に獨立した、自身絶對のものである。されば勿論神とか理想的自我とかの意志即ち命令或は禁止に由て然るものではない。

全く非人格的である。行爲の價值判斷も吾人の主觀作用たる計量や評價を加ふるとなしに、ちやんと客觀の實在に由て規定さるゝのである。然れども行爲の善惡とか、物の價值無價值は果して客觀的规定であらうか、換言すれば我々の價值感を離れて云ひ得るとてあらうか。我々は何故に吾人

の主義理想と全く關係のない客觀獨立の眞や善を目標とし規範とするのであらうか。また何故にかゝる非人格的なものを讃歎し憧憬するのであらうか。而して又人間は積極的に果して無力であらうか。否な人間の價值は人格の自由と尊嚴とを保つ所にある。換言すれば、客觀的實在に受動的絶望的に服従するものでなく、却つて自己の主義信念をあくまで貫徹し、客觀を制服して自ら新しい價值を刻々創造して行く所に、人間の自由と偉大とがあるまいか。かゝる自由は相對的であるとか、自然力に對しては極めて小であるとか云ふ卑怯な考へは、吾人の欲せざる所である。我々の理想が發達し、創造力が發展するに隨て、善も亦自ら進化して來るとは言を俟たない。決して新實在論の言ふ如くスタチックなものではない。而已ならず人間を無力可憐なものと見る議論は、自然界の束縛を脱却して自由を得んが爲めに、姑息な宗教的解脱を説くは免れないのである。(ラッセルの解脱論には實大乘の所がほのみえて居る) げに眞の解脱は道德宗教の中心生命であるが、それが飽迄奮闘的、憧憬的、自我主張的でなければならぬ。

の觀念論であり、折角力瘤を入れて主張した幻影消滅の哲學、は却て幻影製造の哲學ではあるまいかと云ふ様な批難も當然起つて來るのである。

併しそれは兎に角として、所謂實在論と云ふ倫理哲學的新運動は、如何にして生じて來たか、換言すれば現代に起つて居る種々なる學說や主義に對して、如何なる見解と態度とを採るものであるかと云ふとを一言せねばならぬ。之れは甚だ複雑な問題であるが極簡単に余の考へから云へば、概して主觀的態度を示して居る現代の思想に極力反對して、あくまで客觀的態度を固持して居るやうである。詳しく言へば現代思潮の當然辿るべく進化すべき本來の軌道を逸した反時代の思想である、それは從來すべての主義學說に慊らないと云ふ點から言へば、全く時代の潮流を逸したと云ふても誣言ではない。是れは果して思想の進歩であるか、退歩であるかは別問題として、兎に角時代思想と相容れない全く變つた特別の思想であるとは明かである。現代の思想傾向は主觀的であると一口に云へば甚だ明白ではあるが、複雑な思想界は決して一概には斷言しがたい。先づ假りに人本

主義やプラグマチズムを経てフハイトの個人主義に達した倫理哲學的系統と、自然主義が種々の波瀾を経て新浪漫主義や神秘主義に至つた文學哲學的系統との二潮流なりとすれば、二者は何れも主觀的であると斷言し得る。即ち前者は、人間生活の價值と自由とを根底として客觀世界に對し、飽くまで自我の創造力と、生命の尊嚴とを主張する潑刺たる個性中心の態度であり、後者は、自我の精神生活の奥底に闖入して其真相を直覺し、其偉力に接觸し、觀念世界の神秘と美とを心ゆくばかり味はむとする主觀中心の態度である。而して斯かる個性中心の思想と觀念中心の思想とは、オイケンやメテルリンクの哲學に於て全く融合渾一して、實に雄大、宏莊、深遠なる唯心哲學を爲して居るのである。然るに新實在論は斯くの如き主觀的心的哲學に全く反對し、個性の自由や觀念の尊嚴を認めず、全然人間の左右し得ざる獨立した客觀的實在を立て、之れを以て我々の活動の目標とし、價值判斷の標準となすものである。換言すれば飽く迄まで實在や眞や善などの客觀的絕對性を主張するのである、此の意味で新實在論は

ある。「此蹟の石を取り去る事は不滅に對する信仰の道を開く一端である。吾人の祖先に従へば世界は細小であつた、その歴史は僅かに六千年に過ぎなかつたのである。其歴史中にありても少數の人傑——王、高僧、聖人——が極めて卓越したる地位を占め、彼等と親しかりし人々のみが彼等とともに輝いて居た。是等の人傑及び其親近者是不滅者の團體の核であつた、小英雄小聖人の群が其次に來り、人民は混然として其背景を形成するに過ぎなかつた。されば其時代には不滅者の數は決して莫大ならずして、想像に餘するとは感ぜられなかつたのである。此不滅觀を貴族的^{アリストクラチックガイウ}の不滅觀と稱せん。蓋し不滅者は唯だ少數の撰ばれたる人々のみにして、餘り多數ではなかつたからである。併しながら近世に至りて世界の歴史は極めて長くなつた。則ち地球は吾人の祖先が想像せしよりも、時間と空間と人類の數とに於て廣大無邊なるものなる事が闡明せられて來た。人間の歴史は動物的歴史より進化し來りたるものにして、其古き事タルチャリ時代迄追溯せらるべきものたる事が明かに成て來た。是に於て昔時の貴族的^{アリストクラチックガイウ}の不滅觀に

代りて、^{デモクラチックガイウ}民主的不滅觀なるものが不知不識に起て來た。蓋し現代人の心意は一面に於ては意地惡であるが、他面に於ては進化の遠景によりて同情あるものと成た事は事實である。現代人の見地よりすればかの歴史前の半獸的人類も皆兄弟にして、我が骨の骨、我が肉の肉である。彼等は此不思議なる宇宙の大暗黒もて圍繞せられ、(今日の吾人も猶ほ然り) 此内にありて生死し、苦惱し、奮闘したのである。勿論彼等は恐るべき罪惡と情慾とに支配せられ、最暗黒の無智中に没入せられ、惡むべき迷妄に捕へられたる事は言ふまでもないが、併し堅實に其牢乎たる信仰——如何なる存在も存在なきに優るといふ信仰——によりて、最高の理想に貢獻する所があつた。彼等は生命の火把を危険なる破滅の腮よりして、成効よく救ひ出したのである。今日の世界に光明を與へたのは實に彼等である。

斯の如く大多數の人類が其生の必要に壓迫せられ喘ぎ競ひつゝ、世界の進化に貢獻する所ありし有様を回顧すれば、個人的區別なるものは洵に小なるものなる事を見るではないか。神の目より見

マリウム・ジェームスの人間不滅論(下)

白石喜之助

傳送説はかく夥多の優越點を有し、有らゆる事實を説明するに便利なる學説であり、亦人間の不滅を論ずるに極めて都合好き説であるが、併し讀者は茲に至りて「併し此學説は吾人の不滅を想像

中に描くにどれ丈の助を吾人に與ふるや」吾人が保持せんと希ふ所のものは吾人が現在有する個人的制限、同一の傾向、自我の同一、各人の獨自己にあるではないか」と、實に吾人の有限及び制限は吾人自らの精髓である様に見ゆる。而て吾人を有限ならしむる機關にして脱落し去り、吾人の個別の精神が其本源に復歸し、其制限なき狀態を再取せば、吾人が現に知る感覺の快よき流（我自らを構成する個別の感覺）は存在し得ざるには非ざるか。則ち吾人の腦髓が、下界に於ける吾人の享樂の爲めに、大實在より篩ひ出す限られたる自

私の意識は消滅して仕舞ふてはあるまいか。斯る問題は實に活問題である、而して將來幾多の學者が此問題に關して論ずる所があるであらう。但しマリウム・ジェームスは左の如き言を以て此論を結んで居る曰く

予自らの望む所は此問題に興味を有する學者が數多輩出して、人間不滅の狀態を奥深く論議し吾人の有限性が變化せらるゝによりて失ふ所幾何、得る所幾何なるかを吾人に知らしめん事なり。若しも哲學者輩の謂ふが如く總て制限は否定なりとせば、然らば腦髓が課する特殊の制限の消失は絶對の遺憾——個性の滅亡——を齎らすものには非ざるべしと思はる。然れども吾人は今茲にかゝる高尚にして、超絶的なる問題に入らんことを避け、更に歩を轉じて第二の反對説に移らんと欲す。

マリウム・ジェームスが、次に答辯を與へたる反對説は全く近世の出である。其意に曰く

不滅にして眞ならば不滅者の數は非常に莫大にして、吾人近世人の想像力を以て到底想像し能はざる所に屬す。従てそが信じ難く許し難きものたるや論なし。

こは近世人が不滅を信ずるに躓の石となるもので

ものである、地球上に生れ出てたる人類が皆悉く不滅ならざる可からずんば、其數や天地に充ち溢るゝ程であつて、想像力の堪へ得ざる所のものにして、信じ難き事になる。従て人間不滅説も亦受取り難く感ぜらるゝ様に成るのである。

彼は此近世思潮に關して左の如く言ふて居る

予も亦近世科學の教育を受けたる一人なるが故に、斯の如き主觀の經驗をなせり。恐らくは之れ亦多數人の經驗する所のものならん。

彼亦曰く

然れども此思想の傾向たるや恐るべき謬妄を包藏す、予は此謬妄を發見して予の心意を再び自由ならしめん。予は此謬妄を抉發して以て不滅説に貢獻する所あらんと欲す。

ジエームスは何を以て此思想の傾向が謬妄であるといふのであるか。安くに其謬妄の根底が横はるとなすのであるか。一言以て之れを言へば「こは吾人が人間としての盲目の然らしむる所として、我以外の生物の内部的意義を認知する能はざるに由來するのである。吾人は吾人自らの狭き量見を廣き宇宙に移し、吾人自らの細小なる必要を以て、絶對者の必要と爲し給ふ所を量るにある。」例せばかの基督教徒の祖先は他人種に對して惡感を有し

たる結果として、彼等と呼ぶに「異教徒」の名を以てし、彼等は薪の如く地獄の火中に投入せらるべきもの、従て多々益々地獄の火を熾ならしむるに益ありと思惟したのである。近代人は科學の然らしむる所として、彼等に比すれば理論上の平等思想が起て來て、同情の範圍が稍や廣く成た事は前述の如くであるが、併し今も猶ほ異教徒や野蠻人を天國に於ける我等の仲間と思ふ事は出來ぬ。吾人は「彼等に用なし」と言ひ彼等の不滅を喜ばぬのである。例せば幾億萬といふ支那人は蠢爾として生存して居る。吾人は「彼等が皆悉く不滅なりと考ふる事は出來ぬ。従て自己の量見を以て神意を付度して、神も亦「彼等に用なし」と思惟し、有らぬ一個人が不滅なるは神と宇宙とに負ひ難き重荷なりと臆測するのである。既に人類の或者に對して其不滅を疑はゞ、全體の一たる自己の不滅をも疑ふに至るは勢の免かれ難き所である。然れども之れ細小なる自己の必要狭小なる自己の量見を中心として考へたる臆測に過ぎぬ。

汝は彼等が汝に用なきが故に、絶對に何處迄も用なしと思惟す。

給へば、個人の功績と稱するものは、最も小なるものにして、人類共同の功績——無言に大膽に根本の義務を盡し勇者の生活をなせる共同の功績——の大洋中に没却せらるべき程に無意義なるものである。吾人は此様な廣大なる光景を思ふ時、謙遜敬虔の念なきを得ぬ。人間が大小と稱する區別は此廣き長き人類共同の奮闘より見れば、實際無意義である、斯の如く觀じ來る時は、吾人は吾人に先てる幾百億萬の同儕人類に對して、廣き同情と親愛の情とが起るを禁ずる事は出來ぬ。されば此幾百億萬の同儕人類を不滅の外に驅逐するは、吾人にとりて不條理極まる事と感ぜらるゝに至つた。現代人が文雅の度に於て、宗教の信條に於て、彼等に優る所あるは唯だ生命の宴席に於ける吾人と、他の會食者との差異に過ぎぬ。是等の異同が死後吾人には永生、彼等には刑罰若くは死を齎らすべしとなすは、今日にありては荒唐無稽の妄説にして、眞面目に考へらるべき價值なきものである。更に轉じてかの獸類を一瞥せよ。彼等も亦終始英雄的生活をなしつつある。而して近世人は廣き情緒によりて、亦大進化論者の所謂宇宙は、皆

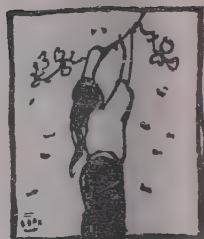
連續すとの教によりて、其心を廣くせられ、人獸の境界を劃する事に躊躇するのである。

若しも生物の何者かゞ永生を有せんには、何故に總ての生物が之れを有せざるか、何故にかの忍耐深き獸類が之れを有せざるか。

斯く考へ來る時は不滅者の數は餘りに莫大にして想像の及ぶ能はざる所となる。從て不滅の信仰も其勢力を失墜する様に感ぜられて來る。

二

前來述べ來れる近世の思潮によりて、貴族的不滅觀が廢たれ、人類平等の思想が人の感情を支配し、獸類すらも（若し人間を不滅なりとすれば）不滅ならざる可からずとの要求が起て來た爲め、人間の想像力は是等無數の不滅者を想像するに堪へずなり、結局不滅の信仰を捨てざる可らざる羽目に立ち至たのである。今試みにホッテントットやオーストラリヤの土人の全群——今日迄に存在し亦將來存在せんとする數限なき野蠻人の全群——が不滅ならざる可からずとせよ。吾人の不滅の信仰は動搖し來るではないか、生命は善なるものである。併し唯過多ならざる程度に於てのみ善なる



呪

ひ

原田 謙次

緋葵は呪の歌をくりかへし夢かあらじかくづれもて行く
何事の呪のさまで深くあれば雲の影にもあびゆるかわれ
桃の花君が送りし一枝を描かんとしてふと悲しかり
此頃は圓き天地にあきはてぬ三角形に生きんとぞ思ふ
大なる刃をとりて天地を八つにし斬らば恨癒えんか
足ふまれ痛さのみにて泣きたりし純なる心今はよしなし
絶望の胸を抱きてわけもなくもの悲しうも高笑ひする
櫻散るたそがれ時のうすあかり心寂しう詩吟などしつ
壁板にゴムのボールを投げて見ぬきまぐれ心悲しき夕
こゝろみに銀のナイフをふるはしてコルクを刺しぬやるせなき日よ

されど之れ外部の觀察なり。彼等は外見上意味なきが如きも、最も強烈なる内部生活と最も激烈なる生命の刺激を以て自己を實現する。

汝の目を開て全體の意義——汝が見失へる光景——を見よ。是等無數の若くは汝が好まざる生類の各自は、汝が汝自らの胸に懷けるが如き熱情、若くは夫れ以上の熱情もて生存の内部的喜悅に躍動しつゝあり。太陽は上るなり、而して美は彼の行路を照らすなり。ステフエンソンが言へる如く、彼の内部の喜悅を見失ふは彼の全體を見失ふ事なり。無數の生類の一も其形體を生かす意識によりて永生を要せられざるものあるなし。

斯の如く考へ來れば、宇宙はそが有する總ての生類を創造すると同時に、其一つ一つが實躰として存在せん事を要する。且つ永存に對する慾望をも創造する。少くとも個躰其者の心中に永存の慾望を創造するのである。然らば他の生類に對する吾人の同情力が盡きたればとて、無限者其者の心中にも、生類全躰の不滅を過多なりと思惟すと想像するのは迷妄の甚だしきものである。

宇宙は廣大無邊なり。心意が占有し若くは活動する場所には限りはない。各自の心意は夫れ自らの宇宙を以て生れて來るのである。予が想像の空間は諸君の想像の空間と抵觸する所はないではない

か。宇宙間に生ぜらるべき意識の數は物質界に於ける勢力保存の法則に似たる法則もて支配されては居らぬ。見よ一人が醒め若くは生るゝ時他の一人が眠り若くは死する事はないではないか。教授ブントは其『哲學の組織』中に、物質界に於ける勢力保存の法則に明白に相反したるものとして、彼が靈的勢力の増加法と命名せる法則を定めたのである。蓋し靈の點に於ては靈的存在者増加に際限はない。靈的存在者が生れ來り、そが獨自一己を確守し、膨脹し亦永存を仰望するのは、其數が如何程増加しても宇宙の資源を枯渴せしむる所以ではない。前來吾人は内部的に其存在を實現し喜悅しつゝある有らゆる存在者に就て説をなしたのであるが、若しも吾人にして汎神論者たらしめば吾人は唯だ

『宇宙永久の靈は、恰かも種々雑多の運河に依りて自己を顯現するが如くに、彼等存在者を通じて自己無限の生命を確保し實現しつゝあり。』と云はん。吾人にして有神論者なば、更に進んで斯く言ふであらう。『神は其無盡藏の愛もて、實際に生類の無限なる集合を要求し給ふ。彼は決して吾人の如くに生類の増加もて疲勞し給はず、彼の天秤は萬有の中にありて無限なり。彼の同情は對象多きが爲めに枯渴し去る事なし』(完)

りして本問題に接近せんと試むるものである。

抑も米國に於ける最初の移住者は、歐洲の本國に於て、志を得ざりし人々であつた。英國々教會が容るゝ能はざりし清教徒は新英蘭に上陸し、ロシア政府の壓迫を受けたる獨逸基督教徒の一部も亦その隠れ家を新大陸に索めた。羅馬教會の壓迫の下に孤軍奮闘の義戰を繼續したりし佛蘭西のユウゲノーの徒も、太西洋の西海岸に自由郷を見出したのである。要するに米國の開拓者となり、建設者となりし人々は、大體に於て歐洲文明に對して不満足を感じたる輩であつた。彼等の歐洲を去るや懷しき祖國の地を蹴り、意氣豪然として大西洋の波濤を凌いだのである。されば彼等が米大陸に於て最も熱心に主張したるものは個人の自由獨立であつた。隨て米國には古來多くの個人主義者があつた。而して個人主義に對する所の憧憬は、西方に進むに正比例し旺盛であるが如く觀察せらるゝ。即ちカリフォルニア州の如きは米國に在りても、最も著しくこの方面の長所と短所とを發揮してゐる。

カリフォルニアの名は、第十六世紀の冒險譚に現はれたる架空的名稱である。その名に因んで命名せられたるカリフォルニア州は、實に多くの冒險者、一攫千金を夢みたる投機者流によりて開拓せられたのである。一千八百四十八年同州に於ける金鑛の發見は、殆んどあらゆる階級の人々、殆んどあらゆる國々の民族を驅つて、燃ゆるが如き黃金熱に酔はしめたのである。或者は一舉にして巨萬の富を積み、或者は一朝にして囊中無一物の失敗者となつた。即ち十九世紀後半のカリフォルニア州は成金黨と、勞働者、小作人に落魄したる不幸なる失敗者とによりて、社會活動の幕が展かれた。

さらでも人心の荒び易さかのネバダの蕭殺たる高原を越え、遙々と自己の運命を太平洋岸の大平原に開拓せんと試みたる人々が、自ら極端なる個人主義者となり、主として自己の實力にのみ信頼し、



文明史眼に映ずる加州排日問題

内ヶ崎 作三郎

排日案は豫定の通りカリフォルニア州會を通過した。大統領ウィルソン氏の至誠、國務卿ブライアン氏の斡旋もその効は案外に弱かつたやうである。恐らく此の問題は歸化權獲得に依りてのみ、根本的解決の望みありと斷言するも過言ではあるまい。加州問題に關しては既に或は外交上より、或は國際公法上より、種々なる人々によりて論究せられ、或は民衆を煽動するが如き集會が開かれ、言論が發表せられてゐる。この分で進んだならば萬一排日案通過後は、國論の沸騰恐るべしと豫想してゐたが、今日比較的世論の冷靜なるを見れば、先きの熱情が冷却したのであるか、或は國民自らが單に他國民の缺點を知るのみならず、深く自らの弱點を意識したるが爲めであるか、原因は二者何れかに存するであらう。何れにせよ、輿論の冷靜なるは大に祝すべきことであつて、日本國民が國際的關係に於て、次第に訓練を経つゝあるの事實を認めざるを得ない。

遮莫、排日問題の關係する範圍は極めて重大且つ複雑である。一面に於てこれは經濟問題である。一面に於て人種問題である。更に他の一面に於ては宗教問題である。吾人は文明史研究者の立ち場よ

歐洲の文明は常に移住者の文明であつた。隨てその文明の眞髓は動的である。變轉して止まざるは、これ歐米文明の眞相である。彼等は過去に戀々たらずして、將來に憧憬るゝ民族である。彼等は意力を尊重し、その獨創力を信じ、その飛躍を信じ、その發達を信じ、かくして社會のあらゆる方面に亘りて間斷なき刺戟を索めた。常に移動する民族なるが故に、政體若しくは國體に變化あるを免れない。絶えず轉住するが故に世界の一部分に繫縛せらるゝことなく、地球表面上到る處に、青山の地あることを確信するものである。

これに對して日本の文明は定住者の文明である。一個所に定住して幾千年の間移動狀態を休止したれば、この文明の眞髓は靜的となつた。意力衰へて感情がこれに代つた。周圍の感化は個性を壓迫し、個性は傳説の奴隸となつた。定住的民族なるが故に國體も、家族も、一般文物も自ら古色蒼然の觀を呈するに至つた。將來に憧憬るゝ心よりも、やゝもすれば過古に於て大なる引力を發見するのである。君國に忠に、家族に誠に、傳説に一種の魔力を感じるは、この文明の特色である。

今や動的文明と靜的文明とがカリフォルニアの平原に於て相觸れ相撃たんとしつゝあるのである。而て兩者の接觸は兩者の利益である。兩者の競争も兩者の利益である。兩者の反撥すらも或は兩者の利益であり得べきである。靜的文明の搖籃の中にはぐゝまれたる日本民族の或部分は、今や萬里の波濤の彼方に、天涯異郷の移住民となつて新大陸の土を踏んだのである。同時に他の一面に於て移住者文明の極端なる程度にまで發展したるカリフォルニア州人は、かの太平洋の波濤の爲めに邁進氣鋭の

一切の權威や、官憲や、政府等を物とも思はざるが如き態度を執るに至りたるは自然の勢である。さればカリフォルニア州の労働黨が經濟上の競争者たる日本人を排斥せんとするに際して、正義公論を無視し、中央政府の迷惑をも顧みずして慘虐無道の政策を斷行したることは、多年の習慣これを然らしめたのであると言ふことが出来るであらう。即ち加州の政策は必ずしも米國全體の政策に非ず、加州人の輿論は必ずしも米國人全體のそれでなきことを知るべきである。排日問題を論究せんとする者は先づこの一事實を認めなければならぬ。

日本の移民は歐洲の移民に比して、その品性と勤勉とに於て必ずしも劣るものでない。否な歐洲の或國より來る移民よりは遙かに優良なる者であるかも知れない。しかしながら歐洲の移民は人種を同じくし、風俗に於ても殆んど一致し、言語も親密なる關係を有する間柄である。その同化し易きは言ふまでもないことである。日本人が同化し難しと認めらるゝのは、一面に於て日本の狹隘なる教育の結果であるかも知れない。或人は加州問題の責任は文部當局者であるとまで極言してゐる。併しながら要するにこれは東西兩文明の衝突に過ぎないのである。二つの潮流が海峡に於て會するや、波頭相撃ちて千丈の怒濤澎湃として天を浸すの壯觀を呈するのである。今や東の文明と西の文明とが加州の一角に於て相接觸し、相拍撃しつゝあるのである。日本に於ては明治の維新前後に亘りて、これに類似したる現象を呈したることがあつた。攘夷運動は即ちこれであつた。しかも日本に攘夷運動行はれずして、今や加州に於てこれを見るは吾人にとりて、甚だ奇異なる感を懷かしむるのである。が、これ亦世界文明の進歩の途上に在りて、必ず一度は通過せざるべからざる關門でなければならぬ。

ありといふことである。人種、言語に於て米國と餘程類似の點を有する伊太利の移民にありてすら、斯くの如き準備を要するとせば、人種、宗教、風俗、習慣等を全然異にせる日本移民に對しては、尙ほ一層の用意を要すべきである。かの移民渡航に對して、一種の制限を加ふるを以て能事足れりとせず、日本政府は更に移民志望者の特別教育を實行するだけの熱心がなければならぬ。

三

米國は我が友邦である。過古五十年の間、日本が直接間接に米國人の友情によつて與へられたる利益は殆んど擧げ盡すことは不可能である。また米國は物質文明の大に進歩したる國であるが、同時にその國民は大なる理想を有する國民である。元來米國は熱心なる基督教徒に依つて開拓せられたる新天地である。東部諸州の殖民の起原に就いては、こゝに縷々叙説するの必要はない。カリフォルニア州の開拓すらも、かの西班牙のフランシエスカン派の傳道僧に負ふ所甚だ多いのである。サンフランシスコなる名稱は即ち聖フランシスを紀念する名である。その地にありて排日案の討議せられたる聖府サクラメントは、在加州日本新聞は櫻面都と宛て字を用ふれども、その出所は基督教の大典たる聖晚餐の意味である。南方殷賑の都會ローサンゼルス市は英語のゼー、エンヂエル即ち天使の意味である。斯る例を見ても加州には一面極めて宗教的な氣分が遺つてゐることが知られる。

また吾人は加州に多くの友を有してゐる。その聲は微々たるものであるかも知れぬ、されど平和運動に熱心にして日本を理解することの深さ、スタンフォード大學總長のジオルダン博士の如きあり、或は幾十年の間日本人を愛子の如く指導しつゝあるスターツ博士夫妻の如きあり、或は日本人を愛す

冒險的精神を挫かれ、今や安住を貪る靜的文明者の斑に入らんとしてゐる。定住者の一つの特色は排他的なることであり、移動者の一つの特色は進取的なることである。今や米國の文明は却て定住的となり、日本文明は漸やく移動的たらんとしてゐる。これ實に世界文明史上に於ける大事件である。

されば日本勞働者を排斥せんとすることは決して米國人の利益でない。蓋しカリフォルニア人は、日本人の勤勞と刺戟とを要求するからである。カリフォルニア州に於ける日本勞働者も、この一時的排日案の通過を以て、年來の素志終れりと絶望する必要はない。彼等が踏み止つて、カリフォルニアに居るは彼等の大なる利益である。彼等も亦米國人の刺戟を要するのである。彼等は猶ほ米國人の競争及び米國人のインスピレーションを絶えず要求すべきである。

日本人が果して、歸化權を得るや否やは大なる問題である。この問題は日本政府が提出するよりも、歸化權を欲する個人が、自發的に主張すべき問題であるかも知れぬ。無論日本政府は進んで歸化を獎勵する道理はない。しかしながら個人が自發的に歸化權を獲得せんとするに際して、官憲がこれを壓迫して中止せしむるが如き權力もない譯である。萬一歸化權獲得に成功したりとせんも、その精神に於て米國に歸化するが如き者なき場合に於ては、これ亦米國政府の大に心を惱ますべき問題を惹起するであらう。加州勞働者が日本勞働者を排斥するは、彼等の私利私慾にその原動力を見出すのである。而て日本勞働者が萬一歸化權を獲得するも、その精神に於て、米國の文明及びその理想に同化する能はざる時は、これ亦明かに民族的私利私慾に害せられたるものと判斷しなければならぬ。傳へ聞く所によれば、伊太利政府はパナマ運河の開通後、多數の移民をカリフォルニア州に送る計畫を有し、その爲めに同國政府は約三百の移民學校を設立して、移民志望者に對して、特殊教育を施しつゝ、

餘りに郷土に愛着する宗教である。同胞大多數の有する宗教的意識は、極めて淺薄幼稚である。彼等
は天涯地角到る處に神を拜し、神に愛せられ、神の事業に參與するの光榮あることを理解することが
出来ぬ。彼等は生ける神を知らず、生ける宗教を知らず、彼等の宗教は移住民として最も不適當なる
宗教である。もし彼等基督教の眞理を充分に體得することを得ば、彼等はこれによりて彼等の心靈の
力を與へらるゝのみならず、東荒西茫、水の湧く所、雲の出る所、必ず青山の綠光彼等を待つゝの地あ
るを發見するの大勇氣を生ずるであらう。

カリフォルニア問題が一面に於て米國に於ける、否な世界に於ける正義の士の應援を要求すること
は勿論であるが、宗教的方面の基礎が充分に確立せざる間は、或は宗教的感化の下に移住民が置かれ
ざる間は、日本移民は歐米人に依て先鞭を着けられたる郷土にては、絶えず排斥せらるゝ事を豫期せ
ねばならぬ。是れ吾人が加州問題の紛糾を解く鍵鑰の一つは、宗教問題なりと叫ぶ所以である。

加州議會の不公平、暴逆無道なることは言語同斷の至りである。しかし日本國民は確かにこれと角
闘して實力を養ふべき角觚臺を與へられたのである。日本文明の進歩は主として海外強國の刺戟に待
たなければならぬ。嘗ては支那に刺戟せられ、印度に刺戟せられた。而して今や歐洲文明の爲めに不
斷の刺戟を蒙りつゝある。これ一面に於て大和民族の光榮である。吾人は這般の排日問題が厄介な關
門であることを知つてゐる。しかし此の狭き門を潜りてこそ、日本國民は大國民たるの舞臺へ出づる
ことが出来るのである。加州問題は實に日本民族の發展に與へらるべき當然の試金石である。吾人は
眼前に聳ゆるこの深き問題の意義を閑却してはならぬ。

ること本國人以上なるハリス監督がある。

吾人は排日問題の本元たるカリフォルニア州に於てすら猶ほ幾多正義の士を發見することが出来る。彼等の間には大に日本人を愛し、日米の平和關係を保持せんことに努力する人々も少くない。

四

これを要するに、カリフォルニア問題の根本的解決は歸化權獲得に存する。然るに日本の識者を以て任ずる人々の中に、やゝもすればかゝることを以て、非國民的態度であるかの如き杞憂を懷く者がある。カリフォルニア州に於ける歐洲の移住民は歸化權を有するが故に、土地所有權、或は借地權を有するのである。もし日本移民が歸化權獲得を欲せずして、しかも歐州移民と同等の權利を得んとするは、これ無理なる要求と謂はなければならぬ。勿論米國中央政府が、日本人の歸化權を承認するや否やは、これまた重大なる問題であつて、この解決は將來に待たなければならぬ。たゞ歸化權が興へらるゝ時には、日本移民の或部分は喜んでこれに應ずるだけの素養を作る必要がある。

偏狹なる國民道德は移民として頗る不適當なる人間を養成したのである。日本をして再び鎖國攘夷の舊政策を執らしむるならばいざ知らず、他の國に入りて、その國に歸化せんとするに際して、尙ほ偏狹なる國民道德に固執するが如きことあらば、この問題の解決は永遠に結果を見ることは不可能である。即ち今日の急務は日本國民の教養をして、世界的ならしむることである。これ實に眞個に日本國民の將來を憂ふる者の思索すべき問題である。

更に日本の教育と共に考へなければならぬのは日本の宗教である。日本の宗教は餘りに迷信多く、

屋の三四軒も出来て居て、宇都宮あたりの新聞が腰掛臺の上に散らばつて居る、私は一寸立ち寄つて、好物の林檎など剝かせ乍ら、其の新聞を手に取つて視れば、それは將して『下野新聞』であつて、恰も私が、六月末に寄書して置いた鬼怒水電工事地の労働者の慘狀が今頃になつて連載されて居る。

此の日の行に於て、私を歓迎して呉れたものは、實にこの『下野新聞』であつた。労働地に在て東京の新聞をのみ觀て居る同胞は、ほんとに「燈台元暗し」だと思つた。と同時に、東都諸新聞の地方版なるものは、其地の事に忠ならず一向役に立たぬものだと思へた。

今市驛へ今一里半と云ふ邊へ來ると、秋の日は全く暮れはてし、十三夜ごろの月は澄み切つた空に高う照り耀やいて、關東平原に歩一步踏み込んで勇みあるく私と、夜風にそよぐ稻葉と、眠れるが如く靜かなる農家とに、何れも詩的な倒影を投げて居る。

わづかに残れる稻田の水は、草の葉を透かして

月光の射し入るがまゝに金色にゆらめいて、それに何だか虫の聲まで和してゐるように思はれ、稻の花の香ひまで我が鼻をつくように感ずる。

南國なる故郷の二十年、かつて是の如き快き自然の慰撫を味ひ得た事がない。數ヶ月の勞苦は全く此の一夕に濯ひ去られて了つたのである。

やがて今市に到り、旅館に落着いた時は頗る疲れを覺えたが、此町に本屋もあれば教會堂もあり、郵便局も新聞販賣店もあると聞いて、たまらなくなつて再び市街に出て、歩き廻つた。

「明日は愈々東京へ着く、」

此の一日ほど嬉しかつた事は無い。

東京に來つて直ちに遞信省に勤むる身となつたが、先づ同僚青年の無氣力なるに非常の失望をした。私は、自己の周圍の人をも、他の自然界の萬象と俱に、自己の品性を育くむものであると信ずるから、何時も自己の周圍の人を嚴肅に批評したい。そして懺らなかつたら去る迄である。

是くして次には社會政策社及び統一教會に殆ど同時に入ることとなり、茲に大いなる精神力に觸



南國より武藏野まで (承前)

坂本 正雄

翌朝は直ちに仕事場へ連れて行かれた。くだぶれて、連も今日は働かれぬと云つて休んだ者もあった。

私は無理に仕事を始めた。一向案内を知らないで困つた。ふといつて蚊のやうなものが飛び廻つて居て、頭でも手足でも用捨なく食ひついた。谷が深く、山は高く、日の影は終日見られなかつた。太陽を一寸も見ることが得ない陰鬱な土地の寂しさを始めて知つた。露西亞のような郷土に、一種の深刻な文學者が居るのを道理あることだと、そんな遠方の事をまで想ひ哀むて見た。

五ヶ月に渉る日光裏山の労働は、記すべきこと頗る多いが、茲にはわざと略して他日別に『労働

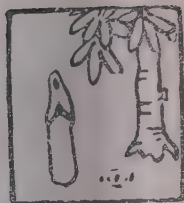
記』を世に問ふ心算である。

後に居残る同郷の年若き労働者を羨ませて、東京に向つて作業地を辭したのは、秋風吹き初むる九月の七日であつたが、人には如何に見ゆとも、自分は胸中聊かの不安莫きを得なかつた。それは、東京へ出て、それからどうするのだと心の片隅で何か囁くやうであつたからである。

労働して得たるものは、何々であつたらうか、昔ながらの我が身體の其の胸の中に收め込んだ或る特別の決心か、將た又た今、山路越えて關八州の平原に降り下る途中にも肩を離さない此の一個の行李か。

新開地の變遷には驚くばかりである。

來る時には鳥も飛んでは居なかつた峠には、茶



ヤートー博士と獨乙の宗教界

三 並 良

獨逸思想界の現狀を考へて見ると、唯物論や、
實證論^{ボデ、ヒスムス}や、さては自然主義の如きは、最早十年以
前の盛況を維持するを得ずなりて、理想主義^{イデアリスムス}や
ネオロマンチックの潮流が一層勢力を得るとにな
つて居る。であるから基督教の信仰も復活の勢を
以て、人の心のうちに醒めつゝある。固より此の
基督教がオルソドックスの國教會によつて代表さ
れて居るとは、どうあつても云へない。教會の形
になつて居るよりも、尙ほ社會の内部に潜在して
居る。それだから今日は學識、修養あるものゝ秘
密宗教 *Geheimreligion der Gebildeten* など云ふ言
葉を、甚だ毎々聞くやうになつた。惜しい哉六十
一歳を以て、去る三月永眠したケルン市の牧師、

ヤートー博士は、實に獨乙國民中の學識あり、教
養ある人士の心に復活しつゝある信仰の、一部の
代表者であつた。彼等の云はんと欲して、未だ云
はざる所を、力あり、生命あり、そして言葉の極
めて纏つた、詩的象徴を以て現はし得た者であつ
た。であるから彼れは、信仰の眠りつゝあつたも
のを、どれ丈け覺醒せしめたか知れない。既に信
仰を放棄せるものを、どれ丈け信仰に復活せしめ
たか、そしてそれ等の人々の、忘れ能はざる感謝
をどれ丈け受けて居るか知れない。一言にして云
ふと獨乙全體より、否國境を越えてさへから、彼
れの受けた反響は實に大なるものであつた。之を
以て彼れは二三の獨乙人の云つて居るやうに、
組織者^{オルガニゼーター}ではなかつたかも知れないが、確かに豫
言者であつたに相違ないのである。彼れが永眠し

れたる誇らえを禁め得なかつた。明治四十四年末より、大正二年の初頭にかけて、私は實に、老愛國者より戒められた。深刻なる識見家より訓へられた。潑刺たる經世家より勵まされた。尊き師を得、大切な友をも得た。かくて私は、我が生の、日に日に充實しつゝ進展する其の微かに麗はしさ、轟きの、絶えず胸内に高鳴るをおぼゆる。

*

故郷の畑に、我が友たりし『山鳩』今は『河鹿』と改題して恰も今春より復活し、再び郷土文學の爲に氣を擧げつゝあるの時、今や私は少しく志すところあり又た靜養を兼ねて、暫く都門を離れ、いよく武藏野の靜寂に入る。

念をひたすら表現し得るか、否か。

今ま茲に私が踏める武藏野、眼に眺むる武藏野のほかに、更に高く我が心の眞正の搖籃なる武藏野は有るか無いか、いざ私は之より靜想する事としよう。(以上をわが父とわが友に送る)(一九一三、四、一五) 南國を出て來りて茲に三年、武藏野に起臥する人となつた私の心に、暖然たる歡樂の氣分なくして可ならんや、而して此の氣分は如何なる思想と遷り行くか、如何なる創造をはぐむのであるか、青は藍より出て、藍よりも青しと云ふが、私は南國の、海見ゆる林檎畑をぬけ出て、懷しき武藏野の一隅に暮すとき、今度は他の或る物に向つて、故山に武藏野を戀ひし如く、然く強烈なる憧憬の

光りは一切の生命の源である、根本的の符號である。人間の睿智が此の符號から孤立するのは、益々能く四圍の神秘を了解せむがためであるが、繪畫のみひとり之れを創造しかへすのである。光りは繪畫の生命であり、根本であり、目的である。光りの繪畫に於けるは、恰かも思想の文章に於けるが如きものである。思想が文章そのものである事はできないにしても、この假定形式の塑造術たることができるやうに、光りは繪畫そのものである事はできないにしても、其の補足物たる陰影を俟つて視力に合はされたる生命の像である事ができる。この二部合唱よりして宇宙の歌は進るのである。(J. C. Holl)

者的の大人物であることに少しも氣付かなかつたのは、甚だ恥かしい次第である。

それから二週間程後に、アイゼナハ市でシュミール教授のうちへ行つた時に、四方八方の話の序でに、ケルンではヤートー牧師のうちに泊つた話を話すと、それは今獨乙で極めて有名な人であると云はれたので、實は僕も大に驚いた位である。その後ち歸朝してからは忘れず文通をして居た。

三

然るにヤートー博士は、伯林に開かれたる審判廷 Spruchkollegium により、一九一一年牧師の職を奪はるゝに至つた。尤もこの事件は昨今に始まつたものではなかつた。段々に熟して、遂にこの結果を生ずるに至つたのである。彼れの略歴を云ふと彼れは一八五一年カッセルに生れ、同七十六年に牧師となり、ブカレスト市や、ポバート市の牧師となり、それから最後にケルン市の「クリスツ・ス、キルヘー」の牧師になつたのは、一八九一年のことであるが、それ以來大多數はカトリック教徒より成り、而も信仰の眠れるケルン市に於て

大にプロテスタントの勃興を來たさしめたのは一に氏の力である。約二十年間教職にあつて、牧會やら、説教、教育或は慈善事業に關係して、貢獻した所は枚舉に遑がない。博士が教壇に立つ時にはいつも一萬からの聴衆が推しかけて來た。ボン大學の學生なども、隨分澤山に聴きに出席けたものであるとは、嘗て同大學生たりシシュレーデル牧師が、僕に語る所である。さう云ふ勢力のある博士が教義に關しては、甚だ自由な見解を有するものであるから、保守主義の牧師連から大に憎まれたのは、人情の然らしむる所であつたのかも知れない。是に於て博士に對する反抗運動は、既に一九〇五年から始まつて居る。それから色々の曲折があつて、僕が博士に逢つた時は恐らくは小康時期であつたのだらうが、一九一一年の春からは再び問題が大に持ち擧つた、プロシヤ州の高等教會參事會の如きが、ヤートーの教會代表者に、彼の活動ぶりを報告せしめたり、或はその信徒が信任狀に署名したり、(その數一九一一年の一月末までにて、九千餘人との記事を偶然見たことがあるが、それから幾人までに増加したかは知らない)

たに就ては、我等も同人諸君の議決により、本誌にその肖像を掲げて、聊か哀悼の意を表すのである。僕は口繪の裏に、博士に關する二三の事を記したが、それではまだ満足が出来ないやうな心地があるので、少々慾ばる譯ではあるが、尙ほ少しく記したいのである。

二

ヤートー牧師は、僕にとりては、舊い知己ではない。實は三年程前まではその著述すらも讀んだとはなかつた。僕が滯獨中の日記の一節に次のやうなどが書いてある。

「停車場(これはケルン市のを云つたのである)の直ぐ近くに「ケルナー・ホーフ」と云ふホテルがある。其處がいゝから行つたらよからうと紳士(これは汽車中で知り合つた人である)が教へてくれたから、汽車から降りると、先づ荷物は停車場預けにして置いて、兎に角そのホテルへ行つて聞いて見た。すると部屋は一つも空いて居ない。明日からは、ケルン市での自由基督教徒大會の前祝ひがあり、その上今は旅行期で何處のホテルも先約があつて空いた部屋は少なからうと云ふので、余は大に當惑した。この時ふと此の市の大會委員にヤートー牧師と云ふのがあるのが頭に浮んだ……………有名な人の家のとてであるから、一寸尋ねると直ぐに分つた。併し心配なのは、在宅である

かどうか、東洋未知の余を何と思ふだらうかと云ふことである。兎に角名刺を出して面會を求めた所が、留守であつて、牧師の姉さんが出て來た。そこで事情を告げて、何處か宿を周旋して貰へまいかと頼むと、自分の宅でも部屋はないとはいへないが、もう亞米利加からの御客が二人來て居るから、都合が付くまい。しかし兎に角義妹、即ち牧師の夫人と相談をして見やうと云つて引つ込んで行つた。しばらくすると夫人も見えて、若しお前が狭い部屋で我慢をするなら、自分のうちへ泊めてもいいと云ふから、僕は是非泊めてもらひたいと云つた……………夜になつて牧師も歸つて來た、米國のお客も歸つて來た。晚餐を始めるから食堂へ來いと呼びに來たので直ぐ行つた。此時始めて妻君から、牧師に紹介された。牧師は六十許りの極めて活潑な天真爛漫な人である。余が牧師の家を尋ねるに至つた理由と、お留守に妻君や姉君の好意で、泊めてもらうやうになつた始末を、手短かに語つて、謝意を表すと、それは非常にいゝ都合であつたと、飾り氣の少しもない挨拶をして、牧師も喜んで呉れた……………」

斯う云ふとが書いてある。これが僕が始めて牧師を知るに至つた顛末である。こゝには三日間滞在して居たが、その間に妻君などから、牧師が異端だと云つて迫害を受けつゝあるとを聞いた。又所謂大會前祝ひで、牧師が何時も人々から尊敬せられて居るのを見た、併し當時僕はこの朴訥で好人物の、この牧師が獨乙を震動さすやうな、豫言

者は決してさうは云はないとを記憶せなければならぬ。若し形式を重んずるならば、審判長の質問は適當であるかも知れない。併しながら審判廷即ちスブルコレギウムなるものは、元來裁判所此の場合には異端裁判所となるのを避けんが爲めに出來たのである。もつと穩かに仲裁々判所となるべき性質のものであつた。それを初めから罪人でも審判するやうに又儀式的に而も小供扱ひにしたのは適當の審問とは云へない。のみならず、ヤートル牧師が誓約をした教會なるものは、果して何時も一定不變の形式や信仰個條を有して有るものか、又居るべきものであらうか。換言すれば教會は從來の傳説をどこ迄も守護すべき爲めの官衙であらうか、或は然らずしてプロテスタント教も教會も、常に流動しつゝあるもの、進歩しつゝあるものであらうか。こゝに根本的問題がある。若し前者を是とせば、その人は主義としてカトリック教會へ轉籍すべきものである。ヤートル牧師の如きは後者の見識に賛成するものである。だから三十七年以前の信仰個條が彼れを束縛すべきものとは考へなかつた、二十餘年以前に異端と稱へ

られしとが、今何にならう。思想も信仰も常に發展して止まない、常に新しい形を取りつゝあるのである。故に彼れはこれ等のものに少しも頓着しない。眞に忘れ去つて今の確信を專一として居たのである。之れをしも察せずして彼れを笑ふとは出來ない。

五

續いてヤートル牧師の受けたる審問は前の六ヶ條に似たものであつて、その答辯も亦た彼れが前に與へた所と異らざるは當然である。第一は神の概念に就いてはあつたが、ヤートル博士は之に就いて説明して、彼れはその心に實驗する神を説教す、彼れは世界以外にある神を知らない、彼れより見れば、神は世界であつて、世界は神である神は人間の心のうちに於て人格的になるだけ、それだけ人格的のもので、幾千萬のものが神に就いて、謎を解釋せんとするも、そは皆な主觀的である。故に彼れは神を感覺するまゝに、神を教へ、決して神は何處まで認識されるとか、或はせんとか、その境界の概念を確定しやう、としないのは

婦人會が博士の爲め運動を起したり、又固より反對運動も多少はあつて、新聞雜誌なども論戰甚だ盛んになつたが、これ等の詳細はこゝにくどくしく記する必要があるまい。高等教會參事會なるものは既に一九一一年一月七日附を以て、ヤートー牧師に六ヶ條の質問に就て、この意見を答申すべきことを命じた。それは(一)神、(二)宗教、(三)罪惡、(四)耶蘇、(五)死後の生活に就いて如何なる見解、信仰を有するか、及び(六)その見解、信仰は何處までも固持するかと云ふことであつた。牧師も亦た一々明瞭に之れに答へて居る。この答申は既に本誌三六六號(四十四年七月)に僕が「ヤートー牧師の宗教觀」と題して書けるものに譯出してあるから、再びその全文をこゝに繰り返へす必要はあるまい。然るに官廳の方では、牧師の答申に不満であつて、教會法により審判廷を開始することになつた。その開始に就いても、之を非とする者、是とするものありて、議論百出したけれども、遂に規定通り十三名の判士が任命せられ、ヤートー牧師の辯護者としては、彼れ自らその親友トラウブ牧師と、キール大學教授パウムガルテ

ン博士を選んだ。そしてこの審判廷は七月二十三日午前十時より開かれて、その日は九時間繼續して午後八時に終り、翌日も同様開廷、午後五時四十五分に判決が下されたのであつた。

四

この審判の始まつた時には、總ての法廷に於けると同じやうに、ヤートー牧師の履歷が確定せられ、それから審判長フオイグトはヤートーに問ふに、彼れが、千八百七十六年六月一日、案手禮を受けた時、式文によつてなした誓約を尙ほ知るやを以てした。この時ヤートーは驚ける態度を以て何を以てそんな問題を提出するの理由あるかと云つて知らずと答へた。次ぎに審判長はケルン教會の招聘狀の内容を知れるやと問ふた。この時もヤートーは之れを知らずと答へた。それには異端は教會の毒なり、との句があるので、審判長は之を彼れに讀み聽かせたのである。

事情を知らざるものは、この時のヤートー牧師の態度を以て、一も二もなく彼れが甚だ無責任漢であるやうに、判斷するのである。併し獨逸の識

六

その一は吾人の宗教團體に於ける耶蘇の位地である。ハルナック教授は、耶蘇のこの位地は推移すべからざるものであると斷言して居る。所が「推移すべからず」*unverschiebbar*と云ふとに就いて、兩者の間に議論が起つた。「クリストリッヘ」、ウェルト記者のラーデー博士の如きは、この言葉の意義の曖昧なるを責めて居る。固よりハルナックは基督教に於て耶蘇は中心の位地を占めて居るもので、耶蘇なき基督教は存在し得ずと云ふ考へてある。然るにヤートルは之を以て満足しないハルナックに反問するに、彼れも亦たその名著「教義史」に於て、耶蘇の位地の推移甚だしきものあるを教へて居るではないかと云つて居る。此の點に關してハルナック教授の説は、實に吾人にも曖昧であるやうに思はれる。彼れはその「基督教の心髓」なる著述のうちに「子は福音のうちに屬するものにあらず、之れに屬するは獨り父のみなり」と云つて居るのは有名なとである。併しハルナックの説は、耶蘇の述べた福音の中には、子は屬さ

けれど、今日述べられる福音のうちに耶蘇は屬すと云ふのである。併し更に論歩を進めると、この「屬す」の意義になるが、それは餘事に移るから別にこゝで結論をする必要はあるまい。併しヤートルとても、耶蘇が歴史上存在した人物であるとも、又耶蘇の歴史的な生活が何等吾人に價値なしと云ふにあらざるとをも明言して居るのは、こゝに附加して置くの必要があらうと思ふ。

次ぎは神に關する問題である。ハルナック教授はヤートル牧師に對し、神は自然界にあらず、發展にあらずと斷言して居る。然るにヤートル牧師は、神は世界である、進化であると云つて居る。その意味は、彼れがハルナックに與へた開書にある通り、神は自然の法則である、進化の精神である、と云ふとによつて説明もされて居るし、又審判廷に於て告白する所によると、彼れは一元論者モニスト或は汎神論者なりとせらるゝとを斥け、強ひて名稱を附せんとならば、パンエンテイストと呼んでもらひ度いと云つて居る。彼れの眞意は、神は觀念にあらず、概念にあらず、自然の法則と稱するも、進化の精神と名づくるも、之れによつて、神

當然である。彼れは神を認識するよりも、神と親しみ、心に神を生かすを、より大切なりとすと云つて居る。

審判長の次ぎに尋ねたのは、教會及び基督教の位地であるが、之れに對する牧師の答へは、國教會としての教會キルヘに對して、彼れは何等の權威を認めず、彼れは唯だその牧する一教會ゲマインデあるのみと云つて居る。そして基督教を以て唯一絶對の宗教と認め得ずと告白して居る。

第三問は罪惡に關してであるが、ヤートーは原罪なるものを信ぜず、人間は生れながら中性にして、發展の能力を有し、善にも惡にも發展し得と信ずと述べ、ボーロ、アウグスチン、ルツテル等の救済説を否認した。

第四問は基督の神性に關してであるが、牧師は斷然之を斥け、且つこれと共に教義上の基督論をも全然否定して居る。第五問は、未來を存在するものと信ずるや否やであつたが、彼れは基督教徒の希望はその教へ能はざる所なり、と云つて居る。そして然らばその埋葬説教には、何を説くかとの問に對して、彼れは神の平和に於て永久に息ふ、

と説くと答へて居る。

最後に何時迄ても以上に述べた説を固持するやとの問に對しても、斷乎として然りと答へ、そして更に彼れが將來の發展に就いては、何人も今之を斷言し得るものにあらず、と附言して居る。その他尙ほ幾多の辯論が交換せられて、彼れは國教會に牧師として留任するの資格なしと斷ぜられてその職を免ぜられた。

この出來事に就て、賛成、反對の説教、演説は各地に催され、新聞、雜誌の論文は勿論、小冊子は降るやうに發行され、國論は囂々として沸き騰つた。そのうちにも伯林大學のハルナック教授が三日の後、即ち七月廿七日に大學の講義の一時間割いて、學生にヤートー事件に對する彼れの説を、學生に述べたのは、甚だ有名なもので、その筆記が新聞に載せらるゝや、ヤートー博士の公開書となり、ハルナック復た之れに答へて居る。併し僕は之を冗長にこゝに譯出するのは餘り繁雜にならう、と思ふから止めるが、その爭點の二つだけは核心であらうと考へるから、唯だそれだけを述べて見やう。



沈黙の勝利 内藤 濯 譯

—— エツアール・シュレ作戯曲『リュシフェルの民』より ——

人物

砂漠の行者 Le Père du Désert

クレオニス Cléonice

フォスフォロス Phosporos

時

第四世紀——希臘主義と基督教との争闘酣なる時代

場面

砂漠の童貞女等の隠遁地

低埃及なるオアシスのうち。埃及式殿堂の廢墟に、天蓋をひらきて建てられたる基督教の禮拜堂、原始的の素材を具ふ。大いなる二つの圓柱ありて、その鐘形の柱頭は上部に消え入り、舞臺を縁どる。こゝ彼處に柱を切りて座臺を設く。壁面には、天父と基督とを、ビザンチン式にて粗末に描きたる姿繪あり。後

部および上部には、くづしたる線にて、埃及の神々を石に彫りつけたる巨大なる彫像透きて見ゆ。——右手には數個所の戸、壁に穿たれて童貞女等の房に通ず。——左手には、更に大いなる一の戸あり、大いなる穹窿をなして、石彫の聖靈の鳩を蔽ひ、砂漠の行者の房に通ず。——奥の方、かつて埃及の神像を据ゑたる堂奥には、小羊を腕に抱き、十字架を羊飼の杖の如くに握れる基督の像、隠者等によりて立てられたり。壊れたる數列の壁の背後には、大いなる棕櫚の青葉見えて、殿堂の一部に蔭をつくる。

第一景

砂漠の行者舞臺の前面に立ちてあり。クレオニスその房を出て、背後より徐ろなる足どりにて近よる。廢墟の圓柱の背後に何人かを探し求むる様子、つひに行者の腕に手をかく。

クレオニス。 あの人はまだ來ませんの？

行者。 まだ來ないよ、今夜はやつて來ないのぢや

を心に實驗するとか、出來れば、これで信仰の心髓は得られたものであると云ふとにある。思ふに獨乙の宗教史は、ヤートー時代に限らず、既にヘーデル哲學の盛んなりし時に於て、神を進化の精神と考へて多數の人々の信仰を維持し得たので、ヤートーも亦た之れを反復して居るものであらう。

要するにヤートーの説は、感情と實驗とに中心を置いて、言語は象徴に過ぎないものと見るやうである。であるからシュライエルマッヘルの研究家は此の二人を大に比較研究して居る。例へばグロースマンの論文「シュライエルマッヘル、カント、ルッテルの批評的説明の問題の如きものである。又既に云つたやうに、ヤートー博士の説は彼れ一人の所見でない、彼は現代の代表者とも見られるのであるからツァストロウ及びスタインマン兩博士の *Aussprache über die "Geheimreligion der Gebileten"*」ともなつて居る。

さう云ふやうに彼れより出た運動は、益々大潮流とならんとして居るのに、天彼れに年を借さず

不幸にも中途にして斃れたのは、甚だ惜しむべきことである。來月巴里に於て開會せられる第六回自由基督教大會のプログラムを見ると、ヤートー博士もオイケン、ベルグソン教授等と相並んで講演する豫定になつて居るが、それも最早出來なくなつた。併し彼れは恐らくは第二十世紀の劈頭を飾つたヨハン、フッスであつて、やがてプロテスタント教の世界的大革命が疾風、轟雷の如く來るであらうと考へられる。蓋しこの必要と徴候とは決して乏しからず、あるからである。

最後にヤートー牧師の著書に就いて一言して置くが、彼れは組織的（システム・メソッド）の學者でないから、従て系統的の著述はない。近頃何だか著述にもかゝて居たやうであるから、遺稿となつて公にせられるものがあるかも知れないが、今迄てには 1. Predigten 2. Persönliche Religion 3. Welche Bedeutung hat für uns das Abendmahl? 4. Frohlicher Glaube の如きもので、その他トラウプ博士の主筆なる週間雜誌 *Christliche Freiheit* に載せられた論文は多數あらうと思ふ。

あまへはサタンに引き寄せられはしまいかと、私はそれが心配ぢや。

クレオニス。まあ！そんな事は決して！夢のなかで見た耶蘇さまは、しほらしい心を、具足ぐそくのやうにして妾めかけの身體からだに着せかけて下すつたのです、そして金剛石の桶かじのやうな、あの勇ましいお心を妾に下すつたのです。

行者。さうぢや、若しあまへが試みの苦しみを通つてきた聖きよい女ならさうぢやが、あまへはたゞ一心不亂に修業をして居る女に過ぎん……あまり一心不亂が過ぎるわい！

クレオニス。あの神さまのやうな先生は、斯う仰有おつしやつたてせう——祈りのうちに求めるものは皆うけ容れられると信ぜよ……山々を海の中に覆すまで皆えられる——と斯う仰有つたてせう。ですから妾は、あの高慢なフォスフォロスに對して、山々を覆へすまで強い憎しみを感ずるのです。妾は妾の王さまの神々しい光のもと

に、あの人を膝まづかして見たいのです。

行者。それは自惚うねばれが強い！それ、お前はさうしてまた、無信心者どもが一番悪い誤謬ごみりに落ち込んで居る。山々を持ち運ぶのは、憎しみでは無くて、愛の心ぢや。耶蘇さまは憎しみの心を禁じておいでぢや、失敗といふ失敗は、みんな憎しみの心の中に入はいつて居るのぢや。

クレオニス。（深き吐息して）あゝ！あなたは耶蘇イエスさまの敵を憎む妾の心が、はてしなく耶蘇さまを愛する心から起こつてくる事を分らずにいらつしやるのです。（身をもたえ、腕を組みて顔を蔽ふ。）

行者。（嚴かに）いや、解かつた……すつかり分かつたよ。私にはもうお前の取り亂した心のなかで、はつきりと見えたのぢや、それぢやから私は、神さまの敵は避けてゐたが可いと云ふのぢやさあ室へやへ入はいんなさい。

クレオニス。え、さうしますわ。（頭を下げ、徐るなる足どりにて、その隠れ家にかへる。）

らう。もう日が沈んだ、私の祈りの聲を聞いて
近よれなくなつたのぢや。

クレオニス。まあ！いゝえ左様ではありません、
妾の胸はいら立つて、こんなに心許なく波うつ
てゐるのですもの……いえ、あの人はきつと
來ますわ……

行者。 それでは、お前は何うあつても、あの神に
棄てられた人間に、もう一度會ひたいのかい、今
日フオスフオロスといふ名前について居るが、
あつかましくも此の界限まで、謀叛した天使の
信仰を擴めて居るあのテオクレスに……

クレオニス。 えい、さうです。

行者。 何と云ふ守護もない處女のお前が、でも何
だつて彼に話がして見たいのかい。

クレオニス。 基督さまの前で、あの人の頭を下げさ
せやうと云ふのです……そして若し妾の云ふ
事を聞かなければ、呪ひの聲を蒙らして、いつ
まで經つても、何ひとつする力もなくなるやう

にしてやらうと云ふのですわ。

行者。 娘、用心するがよい、それは危い仕事ぢや。

お前は惡魔の襲撃も計略もまだ知らずに居る。

惡魔の謀計は、蜘蛛の巢よりもつと細かい、ぢ
やが、一度その手に懸つたが最後、私たちは直
ぐに綱鐵の鎖帷子に緊められて了ふ。かういふ
人間どもが世の中に居るのは以つての外ぢや。
動ともすると、鳥渡その言葉を聞いたばかり
で、鳥渡その眼附を見ただかりで、人間の魂は
未來永劫その毒にやられて了ふよ。

クレオニス。 基督さまが妾についてゐてなのです
もの、妾はあの謀叛人を基督さまの御足許に引
つぱつて來るだけの力があるやうに思ひます
わ。

行者。 娘、お前は實に慎しみが無い。お前は馴ら
された事のないお前の心の烈しさを皆おまへの
信仰のなかに持ち込んで居るのぢや。もつと慎
ましくしたがい、反對な事柄がもち上つて、

の壊れた跡が、砂漠の生娘たちの凌ぎ場所となつてゐる事を承知してゐてなのかえ。

フォスフォロス。それは知つてゐる。しかしお前は

誰なのだ、イオニアの優しい言葉を、そんなに

臆面なく話すおまへは……？

クレオニス。妾はデイオニゾスの町にゐるラオ、デイ

コスの娘のクレオニスよ。

フォスフォロス。クレオニス！それでは近ごろ、民

會で會つた人だね、面帛かほぎぬをつけてゐたあの……

……？

クレオニス。さうよ。ところが今は斯うして、祈り

のオアシスのなかに、氣持よく落ちついてゐる

のですよ、世の中を征服なさる爲めに、基督さ

まがお構へなすつた壘とりでの一つの中に落ちついて

ゐるのですよ。でもお前さんは何と云ふ名ま

へ？

フォスフォロス。

俺の親父は俺をテオクレスと云つ

てゐたが、俺の運命と才能とは、俺にフォスフ

オロスといふ名前をつけたよ。

クレオニス。それではフォスフォロス、よくお聞き、

ほんとうの神さまは、世の中の禍となり、サタ

ンの手下となつてゐるお前さんを咀つてゐいて

なんだよ。神さまは樹の枝を拂つて、それで咎

を拵へて、お前さんを打ち懲らさうとしてゐい

てなんだよ……お前さんは色々の兆きざしを見たのだ

けれども、それが解からなかつたのだよ。色々

な聲がお前さんと呼んだのだけれども、お前さ

んにはそれが聞こえなかつたのだよ。いくつか

の澤々つやした手が、壁の上に火のやうな文字で、

神さまの名を書き留めたのだけれど、お前さん

は誇りと慾とで赤くなつた其の上衣で、其の書

物ものを消したんだよ。基督さまはお亡くなりには

なつたのだが、新しくお甦りよみがへなすつた……

でもお前さんは少しも其の事を知らずにゐるの

です——救主すくひめしを信じないお前さんは、ほんとうに不幸です！

行者。(物思はしげに)彼女^{おれ}は聖い女になるまで、澤山^{たんと}苦しみを忍ばねばならなからう。幸と俺が見張つて居る……ぢやから最早敵^{もつ}はやつて來なからう。(砂漠にむかひ、双手にて追離の手振をなす)さあ行つてお祈りをしやう。(その住家へかへる)

第二景

フオスフオロス、左手より出て、舞臺の前面に來りて、大いなる圓柱に凭る)

フオスフオロス。

おゝ基督^{きりす}！君^{きみ}は其處^{そこ}で人々に敬はれてゐるのか！砂漠の處女どもは、一匹の小羊を抱へてゐる卑しい彫像の前に來て、君を崇め尊んでゐる、そして夜となく晝となく、君の足下に瀧水のやうに優しみの心を灑ぎかけてゐる……ところで俺^{おれ}は何うだらう、俺の心の中には人間の自由もあり、新しい世界の美しさも見えるけれども、俺の魂の奥底まで見とほして、俺の生命を信じ、俺の死滅を信じたやうな人に

は一人も會はなかつた。いつ俺は人に招きよせられるのだらう？俺の空^{そら}のうちに星の光が燃えたつて、働く時がくるのは何日^{いつ}だらう……その時は來ないのだらう……(疲れたる様子にて、地平線の方に向ひ)おゝ、はてしない砂漠、鹿子色^{かのこいろ}の經帷子が、死んだ町々を蔽ひ隠してゐる、葬られた神々を蔽ひ包んでゐる……俺はこの砂漠へ向つて、俺の空な腕^{うで}を擴げても駄目なのか……

このとき、クレオニスその房をいづ。落日のひかり眞面に其の顔を照らす。フオスフオロスを認めて、恐怖の身振をなす、されど直ちに心を専らにして、嚴かに進み寄る。)

クレオニス。餘所^{よそ}の人、おまへさんは何の權利があ

つて、此の寺へ入つて來たのだえ？

フオスフオロス。寺が開いてゐたので、この神を見にやつて來たのだ。

クレオニス。この神さまが基督さまだと云ふことをお前さんは知つてゐいてなのかえ、そして此

は、あの胸の中にゆらめいてゐる……女だ……眞實の女だ……意識のある完全な女だ……唯一の女だ——そして一人の英雄が生れて世界が蘇生する爲めには、もうこれだけで十分だらう。

クレオニス。お前さんは何を考へてゐるの？

フオスフオロス。俺はこんなにお前に愛されてゐるお

前の救主は、どんなに幸であらうかと考へてゐたのだが。俺も一人の救主でありたいのだ、俺も神の使なのだ。俺も人間の眠つてゐる魂を呼び覺まして、人間を救ひだして見たい、勇ましい火花とも、創造の焰ともなつて見たいのだ……俺は足桎あしかせを打ち碎いて、眞實の姿を炬火たいまつや劍のやうに世間へ投げ出さうとして居るのだが、其の爲めに俺は呪詛のろひと苦痛とに待ちくらされて居るのだよ。おまへが夢を見たり我を忘れたりして生きてゐる此の寂しい境にくらべると、ずっと物がなしい、とび離れた何處かの砂漠のな

かにも、憎惡や孤獨や追放や死滅の姿はあるかも知れないのさ。さういふものが皆みんなして俺を待つてゐる、けれども清いそして神のやうなお前は、基督の爲めに無ければ、涙を流さうとはしない……無事にして居れ……俺はお前に禮を云ふよ。俺の欲しがつて居る人間の幸福は、おまへの所有もちものになつて居る。いつまでもそれを取つて置けるやうにするが可い。さやうなら……

クレオニス。(こたびは此の方より眼を外らして獨語す)

あの輝かしい眼の色を見てしまつた妻はほんとうに不幸ふしあはせねえ。神さまのお使と蛇とが、たゞひとつの身體に集まつてゐるのだわ。この人には誘惑者まどはしものの謀計はかりごともあれば、神さまの血を享けた勇ましい人の惡氣のない心も見える。けだかい恐怖おそと、恐ろしい喜悅よろこびとが、こんなに妾の胸を襲うてくる！もし死物しにものぐるひにお争ひなすつたお方さまの事を考へたり、深淵の中から空へ昇つ

フオスフロロス。

俺は俺を信じてゐるのだ、そして

俺の神は、雷火にうたれた天使だが、それでも其の炬火たなまつで世の中を照らしてゐるのだ。

クレオニス。何て高慢な罰あたりだらう！それでは

お前さんは、あの——苦しみを忍びなすつた神のやうなお方かたを知らずにゐるんだねえ。お前さ

んは其のお方が、十字架の下で息をおひき取りなすつたのを見なかつたのだねえ。あの救世主すくひぬし

さまは、わたし達を墓穴に訪ねに来て、天使たちの糧かてと犠牲いけにへの盃はを持つて来て下さる。お前さ

んに若し、そのお方がどんなに立派なお方であるか分かつたら……其のお身體からだは太陽のやう

に光りかゞやいてゐる……その創口きづぐちと云ふ創

口からは、「愛」の薔薇と「めぐみ」の百合が咲きだすです……そこで……妾は其の御足みあしに

身を投げだしはするものゝ、救主さまが人間のために忍びになつた苦痛と云ふ苦痛を、救主さまの爲めに堪へ忍ぶ事のできないのが悲し

い。お前さんは、あの救主さまを識らずにゐる

のだねえ。もしお前さんが、あのお方さまを識ることができたなら……

フオスフロロス。（女を見まもり、やがて眼を外らす——獨語）

俺はもつと早く、この女に會つた方がよかつたかも知れない。

クレオニス。フオスフロロス！まあお前さんは何う

したの？お前さんは慄へてゐるわ……心が動いたやうねえ……

フオスフロロス。（再び女を見、また眼を外らす）これまで俺

が會つたのは、たゞ卑しい處女ばかりだつた、

卑屈な人妻ばかりだつた、でなければ、馬鹿な

酔狂女ばかりだつた、けれども此の女はひとり

まへの女だわい！

力づよい魂が生々いきした肉の下に鳴り響いてゐる

……あの眼の大きくなつてゆく輪のなかに

は、まあ何と云ふけだかい光が輝いてゐることは、だらう……愛と苦痛とに渴いてゐる人々の心

決してお前に會はなからう。けれども俺は永遠の孤獨のなかにあつて、俺の靈魂のやうに寂しく此の砂漠に住まつてゐる靈魂が、俺のものだと云ふ事を知るだらうよ。(終)

* * * * *

斷片のまゝながら、かく戯曲の一部を茲に譯して見たについては、一言書き添へて置く必要がある。

この戯曲の作者 Edward Schure は、佛蘭西現代の思想界乃至文藝界に、新しき理想主義を鼓吹しつゝある人であるが、本來一の通神論者である結果、一面に於いては秘教集を研究して、初代以來人々の間に營まれた宗教生活の機微を穿ち、また一面に於いては、靈魂の力づよい飛躍を信じつゝ、近代思想の混亂せる流をも、自己の偽らざる生命のなかに導き入れて、そこに新しき生活の曙を心まちにしてゐる第一人者である。「靈魂こそ人間の活動のあらゆる發表を導くものである、靈魂こそ宇宙の鍵である」といふ確信こそ彼の作物の根調であると云つて可い。

この作の標題にあるリュシフェル Lucifer といふのは、「光を擔ふ」といふ意味で、叛逆を試みた天使の長の名にはなつてゐるが、作者はこれを「科學」と「自由」と「個人主義」との權化として取扱つた。リュシフェルは現在の形式を有する教會にとつては、執念ぶかい敵手であるが、基督に對しては、たとひ發展の路を逆の方向に取つてゐるのにも拘はらず、必ずしも其の敵手となるものでは無くて、むしろ其の補者となつて居る。吾々が

もし、徒らに神の名を叫ぶ人が反つて神を逸し、人間の渦卷に囚はれながらも、常に全體を握まむとする努力に燃えてゐる人が、血と肉との裏に流るゝ生命の、力づよい響を感ずるといふ一點に想到するならば、おのづから此の解釋はつくであらう。また此の戯曲に表はされた男性は、希臘主義の化身とも見られ、女性は基督教の精神を擬人したものとも見られる。そして此の一つを融合するものは、「愛」の奇蹟に外ならないが、「愛」と云つても決して觀念化せられた「愛」ではなくて、飽くまで渾一した絶對の愛である、神的爱であると同時に人間的爱である、情的であると同時に靈的の愛である、救世的の愛であると同時に創造的の豊かなる愛である。兩者は各々身を殺して他に甦るのであるから、二つは歸するところ一つとなつて、フオスフロスはクレオニスの心となり、クレオニスバフオスフロスの靈魂となるのである。譯者はメエテルリンクの戯曲『アグラヴェエヌとセリゼット』の一節に表はされた愛の神秘を忘れることができないけれども、此の戯曲の作者が、清き血と肉との奥底に動く愛の魅力のなかに、宗教と科學とを溶かし込まむとする心に對しては、懐しみの思ひを寄せざるを得ない。

宗教——藝術——科學——勞作——これらは何故いつまでも

吾々の生活そのものゝ中に溶かし込む事ができないのだらうか。クレオニスの心を思ふとき、フオスフロスの心を探るとき、譯者は人事としてこれを思ふに堪へないのである、この大いなる問題の壓迫を退けるために、時間だとか空間だとか云ふ言葉を弄ぶのは、あまりに自他を欺くやうだ。斯うして生きて夢を見て、行きつく所はやはり沈黙の勝利ではないか。(譯者)

ておいてなさる彼の苦痛をお忍びなつた豪いお方さまの事を思つたりしてゐても、これから何うしたら空の平和が見つけたされやう。謀叛した神の使の姿は、あの眼の奥に輝いて妾をうち倒さうとしてゐるわ……（よろめきて圓柱に凭る）

フオスフオロス。

娘さん、お前は何うしたのだ？、

なぜおまへは其の雄々しい襟首を垂れるのだ？
輝かしい眼の上に黒い睫毛を飾つてゐる其の眼
臉を、なぜそんなに悲しさに下げるのだ。さ
あ、もう一度俺を罵れ、見をさめにおまへの眼
が炎のやうに燃えたつてを見たら、俺は此處から突きだされても可いのだ。

（二人は益々強く益々情にうたれて見かはす。女は忽ち振りかへ、初て、恰も窒息したるがごとく、熱に犯されたるやうに、手を顫顫にあて、また胸に當つ。）

フオスフオロス。

クレオニス！基督の名に依つて云

ふがね、おまへは何うしたのだ？

クレオニス。（急に身を防ぐこなし）お黙り……

もう妾を見ないでくれ、放つといとくれ……
放つといとくれ！（大股にて去り、後を見ずして房にかへる。）

フオスフオロス。（ひとり残りて）これで人間の魂が初めて

俺に敗北をとつた。何と云ふ強いそして響のあ
る靈魂だらう、物の姿が映りもすれば、その意
味が分りもする、そして宇宙を美しく抱き緊め
てゐるではないか。あれは處女と云ふ處女のな
かの女性だ、戀しい女といふ女のなかの女傑
だ、エグ全體のなかの天のプシエだ。俺はい
つまでも彼の顫へてゐた眼臉を忘れはしまい、
あの火のやうな眸子から、光りの玉となつて流
れ落ちた涙を忘れはしまい……俺の一生の初
めての捷利だつた、最も大きな捷利だつた。
砂漠の奥の寂しい隠れ家の間で贏ち得た沈黙の
勝利だ。幾度かの敗軍もこれを取り返しがつ
く俺の心の中に入り込んだのは、何と云ふ神々
しい力だらう。お、クレオニス！勿論二度とは

文明に耽溺した我社會の中には、自然に深い缺陷を感じる様になつて來た。殊に有識の士にして國家對宗教の意義を考ふる者も現れて來た。即ち國家殊に我國の現狀に對する基督教の使命が高潮さるべき時代となつたのである。從て基督教と國家との關係も、先の如く消極的辯證に非ずして積極的に主張さるべき必要がある。殊に大正の初新氣運の動き來るあり、第二維新の聲叫ばるゝ時、之を單なる政治的自覺に止めず、更に進んで國民の心靈的道德的自覺を喚起する様努力するには、時勢を見て社會を指導する宗教家の當然爲すべきの任務と思ふ。自分は此點から、基督教界の嗜宿小崎弘道氏に「國家と宗教」の新著あるを偶然に非すとして喜んだ。

二

著者は本書の最後の章にも述べてあるが、組合教會の先輩たる、海老名、宮川氏等と共に所謂熊本バンドなるものゝ一人である。此等の青年は皆何づれも、當時一個の國士を以て任じて居つた。彼等の心頭に火を燃やすものは、即ち天下國家の

問題であつた。

彼等は夙に一身を國家に捧げて居た。然るに斯く政治的功名心に燃えて居た青年等は、其師キヤビテンジェンスの巧妙なる指導によりて、政治的方面から轉じて、宗教教育の方面を以て國家に盡す所あらんと決心するに至つたのである。ジェンスは先づ彼等の政治的功名心を、一段廣い殖産興業の方面に導いた。即て彼等が基督教の信仰を重ずるのをいすまして、徐ろに彼等の旺なる愛國的精神に、宗教道德的の光を投げるとにより、更に一段高い使命の自覺に導いたのである。國家の祭壇に捧げられたる物は、かくして神の聖壇に捧げられることになつた。

單に世界的思想なるが故に、國家思想と相反すといふて、基督教排斥の有力なる口實となす如きは、學者が自分の頭の中で勝手に拵へた概念の衝突に過ぎないのであるが、其の如何に空理なるかは之等熊本バンド青年の事實に徴して最も明白なのであつた。法華經の行者を以て任じた日蓮には立正安國論の著がある。パウロの如きも熱烈なる愛國者であつた。モーゼを始め、イザア、エレミヤ、アモス皆熱烈なる愛國者であつた。彼等は其血液を同うする同胞が、滔々として肉欲と耽溺と迷信の中に墮するのを見て、慷慨禁ずる能はざるものがあつた。然れ共彼等は單に悲歌慷慨の士を

愛國的精神の宗教化

——小崎弘道氏の「國家と宗教」を読む——

相原 一 郎 介

一
凡ての熱情は其極度において、宗教化せずしては止まない、友情然り、戀愛然り、愛國心も亦其極度においては。其逃げ道を此處に求める。此否

等は當然此處に入ることによりて、利己主義より脱却し、聖化し、醇化されるに至る。頑固狹隘なる愛國心も、一度び此境に到達すれば、至大至高豁達自由なる靈の光を浴びて、正義人道の聲となる。由來我國の愛國心は一種の熾烈なる宗教的光彩を有つて居た。併しそれは未だ狹隘なる民族的根性から脱することゝをえない。宗教的といつても尙民族的主義的たるを免れなかつた。斯る愛國心の雰圍氣中にあつては。基督教徒が其同胞より敵視され、反感を以て迎へられたのも、固より無理はない。然れ共一旦其基督教の高潔至大なる精神

に觸れた人には、斯る頑迷なる似而非愛國心の冷手に對しては、益々自己のより高きより廣き見地より、其愛國的精神を燃さざるを得なかつたのである。

併し乍ら斯る精神は未だ直に其儘其社會人心に披瀝することが出来なかつた。凡ての新しい宗教が舊文明を有する社會には入る時に、彼等の執る途は自己に與へられた冷嘲罵聲攻撃に對する辯解である様に、我國の基督教も先づ此の國體との矛盾衝突のないことを辯證せねばならなかつた。然れ共斯る努力は單に辯證的であるが故に、尙消極的たるを免れない。基督教の眞理を我國體に連結して、積極的に其關係を説くといふことは未だ六ヶしかつた様である。然るに時勢は進轉した。基督教に對する斯る偏見は、少くとも社會の中流からは確かに取拂はれたのみならず、久しく物質的

政なければ國家は成立するを得ない。著者は之を歴史に徴し現代に證して宗教の國家に於ける大なる職分を述べて居る。斯く諸外國の例を見たと上、顧みて我國古來の對宗教關係を叙し、徳川時代に於ては神儒佛三教一致して一宗教の職分を果して居たと説き、更に進んで明治政府の對宗教政策が祭政一致より政教一致に進み、公認教制度にまで變じた次第を序し、現今の狀態は宗教無視の制度であると斷じて居る。而して斯かる宗教無視の制度即ち只政治のみあつて宗教を度外視し厄介視するの結果は公德の頹廢を來し、實業者の不徳義貞操の破壊となり、更に進んで迷信の流行危險思想の釀成とならざるを得ない。是に於いて國家有識の士は覺醒した。著者は三教者合同の意義に於いて之を述べて居る。

即ち此舉は從來明治政府の取つて來た宗教に對する曖昧な態度を改め、茲に改めて明確に親善な態度を示したものである。著者は更に基督教に對して特に此舉が有する意義を説明して、從來の基督教の敬遠主義を止めて他の神佛二教と同等に取扱ひ始めたものであるとした。然も此舉が他に大なる意義を有つて居るのは、宗教と教育との關係を親密にしたとである。從來は國家の學校教育万能で、宗教の如きは全然敵視された傾向がある。單に教育と

宗教を區別する丈ならよいが、宗教を厄介視し動もすれば其自由をも奪はんとする如き事もないでなく國民道德の大要素たる宗教の勢力には全く無關係の態度であつた。勿論我國の如く種々なる宗教の存在する所にあつては、教育と宗教とは分離してある方がよからう。

併しそれは教育と教會の事であつて、宗教其物までを無視せんとするのではない。學校教育が完全を期すべからざる以上、社會に勢力ある宗教の力を以て之を補はしむるは、やがて教育の効果を永久ならしむるのである。此點に關し著者は最も明快に我國の教育と宗教關係を論じ、教育當局者が對宗教關係は「無色主義」であるが、其無色とは一切の宗教德育の主義を包容するものでなくして悉く之を排斥した無色、其實無主義の教育であると評して居る。更に宗教と教育の結合を計るためには双方其分界を明確に守ると同時に、其權威と職務を互に認め相待て國民教化の任務を全うすべきであつて、我國の如く數多の宗教の行はるゝ處にあつては、制度において之を結付けるとは好ましく無いと云ふのは、何人も同感であらふ。更に著者は歐米にて宗教が社會教育としての働を叙し

以て終らない、外界の穢濁腐敗に憤ふると共に、内界の神聖と其神秘に驚き、殊に民族の中に宿れる使命を感じては、或は其叱咤者となり或は其指導者となつた。耶蘇においては更に強く愛國的精神が其中に漲つて居つた。ユダヤ人の不信仰を攻めては、噫エルサレムよ、エルサレムよ豫言者を殺し爾に遣さるゝ者を石にて撃つ者よ母鶏の雛を翼の下に集る如く、我爾の赤子を集んとせしと幾次ぞや然ど爾曹は好まざりき。と歡聲を發せざるを得なかつた。耶蘇の助力を乞ふた外國の婦人に對して彼は祖國人を思ふの餘り、先づ兒女に飽しむべし兒女のバンを取りて犬に投ぐるは善からずとさへ言ふたとがある。耶蘇の宗教を辯護せんがために吾人はカイゼルのものはカイゼルにといふ其言を引くまでもない。斯の様な彼の態度は彼の中に存した愛國的精神を證して餘りある。世界的傳道者たるパウロに於いても、此愛國的精神は如何に熾烈であつたか、彼の此精神は其新しい宗教的宗教を深うするに従つて益々強きを感じた。何人でも自分の有する最も價あるものを、自由に他に頒たんとする時は、先づ自分に最も近いものか

ら初めたいのは自然である。パウロは熱誠の極度に於て、我に大なる憂あり、若わが兄弟わが骨肉の爲にあらんには或はキリストより絶だれ沈淪に至らんも亦我願なりと叫んだとさへある。世には一七直に深く個人と靈魂の問題の根底を探り、自ら罪惡と迷妄の境界から解脱して、衆生救済の念を起した人もあらふ。併し求道の門戸到處に開いてあるが如く、傳道の動機亦一様でない。社會救済に熱するもの國民品性の建設にインスパイアされる者種々あらふ。而も皆之れ神を愛し人を愛するの精神に動かさるゝに至つては同一である。只時勢と社會の潮流を見て之に棹さんとするものは更に個人靈性の深淵を忘れず、靈魂の問題に沈淪するものは時勢の推移も念頭に入るゝの要あるべきである。

三

國士として宗教家たる著者は、國家と宗教との關係を以て、一家に於ける夫婦の關係に比して居る。妻なくして一家の建ち難き様に、教を缺いた政のみでは國家の頽廢を招ぎ易く、教のみあつて

あるまいか。此點については俄に著者の意見に賛し難いが、何れにしても基督教徒自身の努力に待たなければ解決は出来ない問題である。著者は聖德太子を以てコンスタンチン大帝に比して居るが寧ろ宗教が社會に實際的勢力を有するものとなつた時、政治家は之を利用するのである。未だ實力具はらないのに之を用ふるものなく、又用ひられた所が宗教のため祝すべきではない。

著者は最後に國家隆盛の基礎として、國運の隆盛は健全なる宗教道德の精神を伴ふべきを論じ、大正第二の維新は單に政治的のものなるべからず、寧ろ精神的宗教的のものでなければならぬとし、米國基督教世界、ロンドン、タイムスの大正日本評論を評論し、此精神的第二維新に當るものは新來の基督教ならざるべからずと力説する。而して最後に著者が身を宗教界に投じた経歴を叙し、讀者の奉公忠義心を鼓舞すると大である。前に述べた通り著者決心の動機は實に熱烈なる愛國的精神の一轉化であつた。今や第二維新の聲盛なるに當り轉た感慨に堪へないものがあるに違ひない。本書のあるも亦偶然に非ずと言ふべきである。思

ふに我基督教界の先輩たる著者の此希望は單に著者のそれてなく、實に基督教會全體の聲であらねばならない。此秋に際し、外國家の危機を洞見し内教會の使命を自覺し至難至高の大業に一身を捧げんとする有爲の青年の相次いで起らんとは、吾人も亦熱禱して止まないものである。此點において本書は優に斯精神を鼓舞して餘りあると思ふ。

●來世の有無

新佛教徒同志會編
丙午出版社發行

丙午出版社大正交庫第三卷として出版せられたるもの。所謂當代思想界の名家を網羅して、その未來觀を聽かんとするは本書なり。その内容に對しては、既に新佛教誌上に掲げられたる際に、吾人は本誌を通じて吾人の批評を呈したるを以て再言せず。單に各個人の來世觀を聽くといふことよりも、短かき文章の端々から、時々閃き出る各個人の生活觀念や個人の性格が窺はれるやうな氣がする。(定價七拾錢)

●幼年教育百話

田村直臣著
警醒社發行

幼年文學の味の乏しい日本に於ては、殊に此の種の出版物の必要を深く感ずるのである。著者は十二年來此の方面に向つて努力せられた人である。日曜學校や一般の兒童教育上有益な著である。慾を言へば道話的空氣と、理屈っぽい事を成るだけ少くして貰ひたかつた。装幀も美、一般年少者、教育者の好材料たるを失はぬ。(定價壹圓貳拾錢)

我國の宗教が此方面に大に活動すべきを唱へて居る。

四

著者は我國の宗教政策から以上の説を立て、居るが、基督教の傳導者としては固より茲に止るべきでない。乃ち斯る社會國家の要すべき宗教として基督教の特色を擧げた。我國の識者たる人にして凡そ如上の説を懷くものは少くない。併し乍ら

彼等は此處まで氣がつくや或は神道といひ、或は儒教と唱へ、新しき衣を古き布にて彌縫せんとする。然れ共如上の要求に應じ眞に其缺陷を充たし得るものは、生命ある宗教であらねばならぬ。著者は云ふ、徳川時代において神道は現世的幸福の方面、佛教は未來の安樂往生、儒教は道德方面を各分割して引きうけ三教相合して一宗教の果すべき目的を達して居た。明治維新以來の政策亡びたるを以て、各宗教は完全なる宗教としての働を失つた。神佛二教は稍本來の性質を發揮せんと努力しつつあるも積年の習弊は俄かに去り難い。而して完全なる宗教として職分を圓滿に果し得るもの

は獨り基督教あるのみ。佛教は單に思想と教理の上からでなく、將來ある生命として實際的勢力として之を觀れば果して幾何の力あるか、著者の著眼點も一面の眞理がある。併し基督教が當面の宗教的職分を、一手に引受ける資格ありと力説しても、もし然らば燎原の火の如く忽にして我國の人心を支配すべきであるのに、實際は必しも然らず否却て之に反對の現象があるではないか。

著者は此問題に答ふるに、我國の風俗習慣と基督教の衝突といふを以てして。先づ頑固な國體論を排し、國民性は宗教に依て亡ぶるものに非ずとし、更に我國體には有神的思想が古來存する故基督教の根本思想と大に調和し易い。次に神社及祖先崇拜問題武士道等凡て我國の特性と視らるゝものは、寧ろ基督教と調和するに依りて永存し、其眞意義を發揮し得べきである。斯くの如き包容的精神は基督教界の一部において、夙に説かれた所て別に新しい説ではないが、今や教會において實際上之を解決すべき問題なのである。而して又此等の包容的態度を取るとによつてのみ基督教傳道の障害は取除かれるか否かは、尙疑問である。

吾人は寧ろ著者が此際一面基督教會内部に向つての深い反省を要求されなかつたことを惜むものである。又單に調和といひ包容といひ障害が外面にあるが如く思はるゝも、宗教の障害は寧ろ内面的で

B。自我はその標準を自分におくんです。自我は自分に絶體の權威をおくんです。自分の、その、さながらの自分をもつて眞實とするんです。

A。それでは、その自我の眞實の姿とは什麼ものなんだ。

B。それは解りません。自我には初めから形がありません。『これが俺の姿だ』と云ふ様なものはありません。自我には只だ生の^{ライフ・フォーム}力があるばかりです。その力が、自分の置かれた境遇に應じて、自我の姿を……と云ふよりは自分の足跡を残して行くばかりなんです。

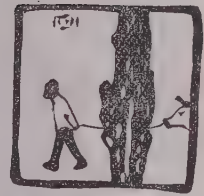
A。それぢや君は、人は理想も何も要つたものぢやない、たゞ臨機應變に、都合のいい様に變つて行けばいいと云ふのか。節操もなければ、主義もない、たゞ瓢箪の川流れをやつて行けばいいと云ふのか。そんなことで社會の秩序は何うして保たれるんだ、國家の腐敗をどうして防ぐんだ。

B。今まで随分多くの人々が主義や理想に捕へられて、虚偽な生活を送つて來ましたね。私は主義や理想を私共の外側に建てたくはないんです。私共は、たゞかう云ふことだけが曰へるんです。『君の自我の眞實に生きよ』と。私共の理想は衷^{うち}に在るんです。そしてそれには形がないんです。

A。要するに、君は自我の内容はこれを分折することが出来ないと言ふんだね。君はたゞ全體^{アズ・エ・ホール}としての自我だけを見て、それを觀念化^{アイデアライズ}してはならないと云ふんだね。

B。えい、まあさう云つた様なものです。

A。併し人間には何うしても物事を觀念化^{アイデアライズ}せんとする要求がある。それをしてはいけなさと云ふのなら人生から思想と云ふものを屠つて了うことだ。吾々は思想なしには生きられない。今一度野蠻の時代に歸することは吾々には耐えられないことだ。一體、今の青年には哲學的の頭がない、秩序のたつた頭がない、理性がない。今の青年はたゞ氣分でばかり生きて居るんだ。



眞實の境

— 對話 —

加藤 一夫

A. 君はよく眞實々と云ふ言葉を遣うが、一體その眞實と云ふものゝ標準は何處にあるんだね。

B. 別に標準と云ふ様なものはないんです。

A. だつて標準も何にもないのなら、何が眞實か、何が虚偽かと云ふことが解らないぢやないか。

B. え、解らないんです。たゞ、吾々はこれが眞實でないか、あれが眞實でないかと、何時も手探りをして居るのに過ぎないんです。

A. それにしても標準がわからなけりや何時まで經つても、そんな眞實を見付けることが出来んぢやないか。

B. ところが、それが出来るんです。少くとも、これが眞實でないと云ふことだけは何時もわかるんです。そして時々『よし、これでいい、これが眞實だ』と云ふことがわかるんです。ぶっかつて見てもしくは、やつて見て初めて、眞實であるか、虚偽であるかどわかるんです。

A. それにしても、その判断をするものは何だ。

B. それは自我です。自我がするのです。

A. それぢや、その自我は何處にその判断の標準を置くんだ。

大利根の岸より

昨二十五日僕は統一教會の朝の禮拜説教を済まして直ちに前橋市に向うた。同地組合教會にて講演を托せられたからである。大宮から假睡して高崎といふ聲に驚いた。午後二時近き頃前橋に着いた。教會の先輩徳田後藤兩氏に迎えられた。野口牧師や有田畫伯も見えられ、和田牧師も他の客車から下りられた。前橋教會は誠に立派に出来上がった。上州第一の教會である。野口牧師夫妻と教會員諸氏の奮發の結果である。

前橋に接近する毎に快感を與へらるゝは大利根の絶壁と赤城榛名の連山である。この日薄ぐもりして上毛の山色鮮かでない。たゞ巨川の碧水を俯瞰した。

野口夫人精子の君の歌の愛讀者は同夫人の起居に少からぬ興味を覺ゆることと思ふ。牧師館を繞りて小流ありて不斷の琴聲を奏す。庭に紅の薔薇あり、菖蒲あり、杏は葉かげに色づく。愛子光明君は今春より學校にゆくこととなつた。鼎浦夫人の母堂松井夫人此家に泊りて後に左の歌があつた。

里川はつきせぬ旅の興なれや

流れさら／＼猶夢に入る。

僕は蛇足を添ゆる要があるまい。和田信次君は早大出身の新進宗教家である。藤岡町の緑野教會を牧する二年餘、正に熊本に榮轉せんとすなり。

午後七時半より講演會を開く。新會堂のことゝて氣持よきこと夥し。和田君先づ「基督者の觀たる自力他力」に就いて語る。嘗て早大の雄辯會にて氣焔を吐きし時代に比すれば頗る圓熟せり。

僕は「個性の源泉とその發達」とについて演ぶ。聴衆二百數十名、熱心に傾聴せられた。場所柄實業家が多かつたさうである。此日寛博士、佐藤海軍少將、加藤咄堂諸氏各々師範學校もしくは寺院に於て講演をせられ、僕の到着せし時に前橋を發せられたさうだ。僕は斯る名流の吹き荒したる後始末をする破目となつたのである。この夜藤岡の一青年自轉車に乗りて七里の道を駆けて講演會に出席し、十時過ぎ又輪聲勇ましく暗の中に隠れゆいた。地方に來る毎に斯る熱心家をみるは講演者の大なる光榮である。

二十六日早曉早大出身にして當地中學に赴任したる稻荷氏の訪問を受く。午前八時大町の高柳氏の二階にゆき、求道者の實業家數氏と懇談す。又牧師館に歸り和田氏の送別會に連る。原市の太田氏、足利の菱本氏、沼田の松尾氏、野口、門池、有田の諸氏、其愛女學校の米國婦人教師、徳江、後藤、高柳の教會役員諸氏十數名會しおすしを喫して思ひ出多い會食をなし和田君の行を壯たした。

午後二時より教會にて百名計りの婦人方に對して僕は「生命を與ふる者の光榮について述べた。

午後五時の汽車に搭じて歸京の途についた。徳江、後藤、高橋、高柳諸君の御見送りを謝します。麥隴桑畝の間にうすれゆく夕日のかげを汽車は走りに走つた。

前橋市の發展は顯著なるもの、前橋教會も然り、教會員にして市の有力なる人々多し。前橋市民に對して同教會は慥かに光たり鹽たる使命があるのである。

五月二十六日夜十二時、巢鴨の宅にて、

内ヶ崎生

B。さうです、もし思想と云ふものは、物事を觀念化し、概念化して編みだした組織システムのことであり、理性と云ふものは、その組織を編みだす規則であるのなら、たしかに今の青年には思想がありません、哲學はありません、理性も眠つて居ます。

A。ぢや、君等の所謂、思想と云ふのは何だ。たゞぼんやりした氣分なのか。

B。私共にあつては、私共の生ライフの要求そのものが思想なんです。生ライフそのものの成長、發達、行進が眞理なんです。そして私共の理性は、その全體アブ・エ・ホールとしての生の要求に適ふものでなければ眞理たることを承認しないんです。私共の哲學には組織がありません、私共の哲學は斷片的であります。併し斷片と云つても腕から切りはなされた手甲の様なものではなうて、腕に連つては居ても、手甲だけを見せた様な斷片であります。だからその斷片にも生命クオ・ヴィスがあります。それは兎に角、私共に思想がないと云ふ非難だけは撤回して頂きたく御座います、私共が渾沌クオ・ヴィスの間に捲き込まれて居ると云ふ御考へ丈けは取り去つて頂きたいと思ひます。私共にも生ライフがあります、もしくは自我があります、そしてそれが即ち思想なのであります。併しこれは何も新しいことではありません、歐陽明も此麼考へを持つて居ました。基督も亦、『吾は道なり、眞理なり。生命なり』と云ひました。

終りに私は切りに眞實だとか、眞理だとか、生命だとか云ひましたが、私は決して自分の生活がその様な立派なものだと云つたものではありません、私は實に虚偽と全生命のみすばらしい、いたはしい生活をして居るのであります、たゞそれ等を望んで、その方向に向つて進んで行かうとして居るに過ぎないのであります。であればこそ此麼ことを曰ふのであつて、此麼ことを曰ふのは自分で自分を責めて居るのでありますから、どうか決して私を剛慢だと御思ひにならん様に御願ひ致したう御座います。私の言論は何時も自責の言葉なんです。——五、二——

かと言へば、それは男女兩性が完全なる人間として、吾等の人生をして於幸福ならしめ於光明ならしめんが爲めに、女性自らの地位を自覺し、人間としての彼女自身を發見せんが爲めである。

即ち「吾等の人生の目的は人類の發展であつて、人類の發展はたゞ健全な生産と、善良な子女の養育とによつてのみ達せらるゝのである。此の目的の爲めに、吾々は教育、協和、自由、勞作、及び愛を通じて、男性及び女性の充分な發達を要求するのである。猶ほ此の目的の爲めに、吾等は彼女の子女の爲めに個人的母を全然犠牲にしなければならぬのである。」換言すれば眞に人生の發展を期せんが爲めには、男女兩性の圓滿なる發達と同時に、その根本問題として從來の母性なる觀念を一變しなければならぬのである。即ち從來世間に認められたる母、及びエレン・ケイの所謂個人的母性を更めて、社會的母性となさなければならぬのである。更にギルマン夫人をして言はしむれば、「吾等人生の目的は、社會關係の改善である、そして社會關係の改善は、社會作用即ち社會を利するあらゆる人類の事業の實行に依つて完成せら

れる。此の目的の爲めに、吾等は教育、協和、自由、勞作及び愛——人類の愛——を通して、男女兩性がその個人的奉仕に於て充分その力を盡し得んことを要求するのである。此の目的の爲めに、なほ吾等は社會的母性を要求するのである」。

ギルマン夫人に隨へば、人類或は社會といふが如き總括的或は全體的の有機的組織機關の改善がやがて、各個々の改善であり、幸福であるが故に、先づ吾等は個的情調或は見地を超越して、全的のものとなり、没自己的とならなければならぬのである。これを彼のエレン・ケイが先づ自己より出達して常に自己そのものに醒め、自己そのものの爲めに生活せんとするのとは全然行き方が異つてゐる。

エレン・ケイによれば工業及びその他の職業に於ける女子の勞働は(政治を除く)畢竟するに單に生活費を得んが爲め、或は利己的自己發現の爲め的手段たるに過ぎないのである。そして母たることが、婦人の眞實の任務であつて、眞個に善良な子女を造り上げることは、専ら個人的母性の獻身によりてのみ達し得られるのである。これに對する

エレン・ケイとギルマン夫人（下）

欄 よし子

一

私は曩にエレン・ケイの個人的母性主義、即ち新婦人主義を概略紹介いたしたことが、更にギルマン夫人の『新しき女』に就いて一言しなければなりません。

前述の如くエレン・ケイの『新しき女』は言ふまでもなく飽くまでも自己に醒め、自己に生き、自己に生活せんとする女性である。随て女性が母となる場合に於ても、その母は個人として個人から離れざる女であり、また母はどこまでも一個人の母であり、飽くまでも男子から區別された女性でなければならぬ。即ちエレン・ケイによれば、女性は何くまでも女性であつて、決して男性と同一のものではない、彼女はどこまでも根本的兩性の差の存在を認めるのである。

これに對するギルマン夫人の『新しき女』の見方は餘程異つてゐるのである。即ちギルマン夫人の考へては、男と女といふものゝ區別を立てることが既に誤つてゐるのである。男女共に齎しく人間(human)として見るべきである。この點から言へば『新しき女』とは寧ろ『新しき人間』とても定義すべきである。夫人の説によれば、吾々が人生を味つて行く點から見れば、男性とか、女性とかを區別する必要は殆んど無いのであつて、男女の區別は生殖の必要上止むを得ずして、偶然二つに分たれたゞけのことであつて、齊しくこれ人間として根本的に同一のものゝ見做さなければならぬ。人間といふことが根本義であつて、男女性の差別に對しては何等の輕重を認めないのである、否な殆んど差別の有無すらも考へないのである。それならば、夫人は何故に『新しき女』の覺醒を主張する

ある。夫人と雖も凡べての女性が、妻となり母となつて、子女を産み、子女を教育し、家庭を形作るの快樂と義務とを否定することはなさない。只夫人が主張する所は「個人的母は人類の教育者として常に全能なるものである」といふが如き誤れる思想を撤去せんことである。

牛小舎であるとか或は臺所のやうな仕事であるならば、それは一家の主婦で充分である。しかし、一人々と其の性質を異にし、一日々と進歩して行く多くの子女の教養に對しては、たゞ母の愛だけでなく、最つと外に廣い經驗が必要である。しかもこの廣き經驗は凡べての母たる人に要求することは不可能である。即ちその智識、經驗或は教育の方法に關しては、どうしても専門家的婦人の力を要するのである。社會は先づその子女の教養に對して、斯やうな専門的婦人を養成しなければならぬ。是れ即ち社會的母性主義を主張する所以である。

最後に世間には若し婦人が男子と等しく、社會の各方面に活動することとなるならば、彼女のやさしみ、或はその子女に對する愛情、及びその夫に

與ふる慰藉といふが如き、豊かな生活の情味は、取り去られて了ふかの如く考へる人々がある。しかしそれも杞憂に過ぎないのである。婦人が男子同様に社會に立つて活動するといふことは、何もその家庭組織を破壊するものではない。家庭といふものは到底これ無くすることは能きぬ、只毎日幾時間かづゝ閉鎖されるまでのことである。父も母も毎朝社會上の職業に向つて出かけるであらうし、その子女も亦専門の教養家の許に出かけるのであるからして、その間だけ、家庭といふものが鎖さるゝ譯である。しかも夕方になつて父と母と子が各々その出先から家に歸れば、そこに再び家庭が開かれるのである。要するにギルマン夫人の社會的母性主義は、子女の教育は社會的専門家に委ねて、彼女自身は社會に立つて自らを教育し、自ら男性の重荷の半ばを背負つて社會奉仕に身を委ねるといふことである。併しながらこゝに忘れてならぬことは、エレン・ケイもギルマン夫人も、終に新しき婦人の政治的運動の高調者であることである。たゞその出發點が個人本位と社會本位との差があるだけである。

ギルマン夫人の意見は全然相反せるものである。即ちギルマン夫人によれば、社會的勞作が漸次擴張せらるゝ時に、婦人は何時までも母としてのみ生活すべきではない。また社會は何時までも、婦人をして搖籃の邊にのみ低徊することを允さないものである。彼の女は育児といふ事業以上に、もつと緊要な多くの社會事業を有つてゐるのである。それと同時に他の半面に於て、育児の最良なる効果は、個人的母性の注意及び愛情以外に子女教育の専門家の手によりて完成し得らるゝものである。

而して何故に婦人は人間として充分なる發達を爲なければならぬかと言へば、そこに二ツの理由がある。一ツは婦人は人類といふ見地から批判して、男子と共に各々人類の半部づゝの役目を果して行かねばならぬのである。そこで吾々の世界は、婦人に對して、婦人が女性として人類の事業に參與するのでなくして、人民(People)として社會的に奉仕せんことを要求するのである。次には婦人は自己の子孫に人類としての圓滿性を相傳へんが爲めに、先づ自己を充分圓滿に發達せしむる

必要がある。

現在の社會に於ける最大なる缺陷は、個人が満足に社會の價值を攫むことができないことである。或は必要な社會奉仕を完全することができないことである。その原因は世界の半部(即ち女性)が人類の發展といふこの大きな人生の勞作から、遠ざけられてゐるからである。婦人が若し社會的の事業に參與することゝなれば、社會は始めて圓滿な發達を得るのである、隨て彼等の子女は於善き世界に生活し、於善き世界に教育せらるゝことを得るが故に、彼等が社會に對して行ふ勞作は、即て自己の子女に對する有効なる奉仕となるのである。

さて以上は婦人は何故に自らを教育し、自らを覺醒せしめねばならぬかの理由であるがこゝに一言附け加へて置かなければならぬことは、ギルマン夫人が母性に對する見解である。これはエレン・ケイを始め多くの評家が誤つた見方をしてゐるのである。ギルマン夫人はやゝもすれば、母たることの本能を否定するが如く考ふる評家も甚だ多いのであるが、これは全然、的を外れた批難で

靜かなる朝の禮拜に詣て、諸君が溫雅しつゝある理想と目的の一部に參與する事を得たのである。

予は今朝諸君と共に、多くの宗教團體或は宗教を信する人々の間に潜める一種の惡傾向に就いて研究して見たいのである。即ち宗教家或はその信徒が抱く宗教觀念の誤謬に關して、考へて見たいと思ふのである。

今日多くの宗教家の間には、宗教を以て人生の一部分であるかの如く思惟する者がある。宗教を以て人生の一隅の事實であるとなし、吾等の全的生活の活動から孤立し、或は分離したる事實であると信する者が多い。これ即ち誤れる現代の宗教觀念である。宗教は決して個別的、分離的、部分的の存在ではない。宗教は實に吾等の生活の凡べてであり、人生の全的生命の躍動、奔流、進化、衝動、悉くを網羅したるものゝ力でなければならぬ。宗教即人生、宗教即生命でなければならぬ。新しき宗教の内容はこゝまで擴張せられなければならぬ。新しき時代の宗教的生命の輪廓は斯くの如く取り擴げられなければならぬ。

予は數年前一學生から面白い書面を寄せられたことがあつた。恐らく斯やうな書面を受け取つた人は世間に必ずしも少數でないと思じてゐる。それは、ハーヴァード大學の基督教を信する學生が運動に熱心なりやといふ問ひであつた。

予はその友に諭して、基督教的生活と運動とは一であつて二でないことを告げた。此種の人々は運動で生活の上に現はるゝ男性的美德を考ふことなくして、運動なるものが、宗教から離れて一種の専門家に依りてのみ營まるべき實存在であるが如く想像するのである。彼等は一方に基督教的生活を假定し、他の一面に於てはこれと全然沒交渉な肉體的生活或は運動家的生活が存在し得るが如く見



宗教の擴張

神學博士 ビイボデイ

一

此の説教を始むるに先き立ちて、予は自然にして、且つ合理的なる基督教を主義とする諸君の前に立つことを感ずる時に、大なる興味と感謝とを抱くことを諸君に告げなければならぬ。予は過ぐる二三週の間色々な集會に出席し、種々の信條種々の意見を有する人々と、談する多くの機會を得た。されど予は最も此の堂（惟一館）に於て、心よりの懐しさを感じるのである。こゝには予の親しき友あり、四面の側壁には予の先輩や友人等の畫像が竝んでゐる。尙ほ惟一館の事に就いては予の本國に於て常に聞きつゝあつたのである。予はまた此の教會と間接の關係ある友愛會の例會にも出席して、その會の發展の歴史と事實とを深き興味を以て觀察した。而て予は同會の名譽會員たるの光榮を得た。再び日本を訪るゝ折には、必ず友愛會員の徽章を佩びて來ることが出来るであらう。予はまた、此の教會の日曜學校をも觀た。一人の青年教師が非常に興味ある物語りを、非常に興味ある態度で語りつゝあつた。予はかの興味ある物語りを記憶して、米國の少年に傳へやうと思ふ。更に一人の若い教師の指導の下に、十二人ばかりの青年が、新約書の研究をなしつつあるのを視た。而して最後にこの

斯くの如く宗教生活を以て、一面偏狭、分離、孤立的な生活なるが如く考ふことの極めて不合理であることを知ることが出来ると思ふ。更に宗教があらゆる生活の凡べてにあり、あらゆる生活の凡べてを溫擁するものであることは、哥林多前書第三章（二一—二三）に明示せられてゐることだと信ずる。即ち使徒パウロは當代のコリント市の教徒等に對して、『然ば誰も人に誇る勿れ萬物は爾曹の物なり。或はパウロ或はアポロ或は世界、あるひは生、あるひは死、あるひは今のもの、或は後のものはみな爾曹の屬なり。爾曹はキリストの屬、キリストは神の屬なり』と諭へてゐる。彼れが此の書翰を寄せた當時のコリントに於ける教徒の數は甚だ僅かであつた。而てコリントは希臘國內にて最も殷賑を極めたる船場であつた。娼家軒を並べ、朝歌夜絃只肉に生き、肉に疲れたる人々の歡樂を追ふ巷であつた。しかしパウロは決して、その巷より脱れよ、罪惡の街を遠ざかれよとは言はなかつた。彼はコリントの教徒等に向つて汝等コリントを捨つる勿れ、汝等その渦中にありてコリントを救ふべしと教へた。パウロは單にコリントに於ける基督教徒に對しては、大體の點に關して暗示を與へたのみでなくその小さな部分にまでも周到な注意を拂つてゐた。當時コリントの小市街に於てすら、幾多の宗派が分れて或はアポロ黨あり、或はパウロ黨ありて、互に他を排斥しつゝあつた。恰度今日の基督教が幾多の教派に岐れて、甲論乙駁、皮相的見解に執して、終に基督教の根本的大使命を想はざるものゝ、頗る過大なると同傾向を呈したのである。

これ等の人々に對してパウロは何と言つたか。即ちキリストの教は内容の豊かな包含的なものである、萬物悉く汝等の屬であり、ケバ黨或はパウロ黨の何れに係らず、宗教は絶えず成長しつゝある大なる喬木である。一つの宗派或は教黨は畢竟、その大木を横に切斷したるものゝ一片に過ぎない。或

傲しつゝあるのである。これ宗教的生活と肉體的生活とがそこに渡る可からざる一つの溝を横たへつゝありと思惟する人々の謬見である。吾等の肉的生活の要求なきところに宗教なく、吾等の血脈の相拍たざる所に、宗教なく、吾等の生活の衝動なき所に何等の宗教をも存在し得ないのである。吾等の生活を離れ、吾等の全生活の擾亂と、葛藤と、紛糾と、發展なき所に何の基督教かあらん。吾等の靈の翱翔が眠る時、宗教の力が衰へるであらう。しかしながら、吾等の肉の衝動が滅びる時、吾等の宗教が幼滅することを記憶しなければならぬ。宗教が心靈の靜眠に生きると同時に、血と肉の奔躍にも現在することを遺れてはならぬ。神は心の世界の開拓と光明とを要求し給ふのみならず、吾等の肉體の進化と充實とをも命じ給ふのである。

使徒パウロの書翰を読めば、肉體を抑へる、駈ける、空を撃つ、走せ場を走る、或は競争に勝つといふやうな、肉體的或は運動家的の辭句が所在に見出される。またキリストの生涯の歴史を顧みるも彼れが一面より見て運動家的の生活を送つた人であることが證明せられると思ふ。是れを以て見ても宗教と運動、宗教と生活を全然別個のものとして取り扱ふことの、不條理であることが明かである。

二

更に予はその青年に應へて『君は基督教的生活を離れて、全然運動家の生活に入することは不可能である。何となれば、運動家の全精神を支配する、競争、奮闘といふが如き根本思想は、實に基督教の根本思想であつて、基督教生活は畢竟運動家の生活に過ぎざるが故である。基督教生活は運動家の生活の凡べてを包含するものであつて、兩者は唯一無二の實存在である』と言つた。

悉く吾等の所有である。而して吾等は死の勝利、墓場の勝利をたゞキリストに於てのみ發見すること
が出来るのである。

更に彼は生と死が吾等の所有であるばかりでなく、吾等は現在と將來をも所有すと言つてゐる。吾
等の眼前に展開する凡べての現象は吾等の所有である。されど現在は撞着と、缺陷にのみ満ちてゐる
現實は不如意と矛盾とに満たされたる寸善尺魔の世界である。併しながら吾等が將來を想像する時、
吾等現在の失望も、矛盾も、悉く一掃せらるゝのである。吾等は來らんとする時の爲めに、光明と希
望とを與へられて、眞の信仰生活に入ることが出来る。但し信仰生活には大なるものと、小なるもの
ゝ區別がある。一は豊かなるものであり、一は貧しきものである。兩者何れを採るべきかは諸君の自
由である。即ち諸君は狭き信條に囚へられ、或は一人の靜かなる宗教生活に安住する事も出来る。さ
れど宗教の全體を取りて、その生命に刺戟せられ、自己の生活を擴充することによりて、一層深刻な
る宗教的生命を味ふことが出来る。そは即ち豊かにして、廣き宗教に依りてのみ得らるべき、眞の生
活である。

四

人が若し宗教生活とは如何なるものであるかと問はんに、もし吾々が單にその形式を信ずる故に、
宗教生活を送ると言はゞ誤りである。吾等は既に賦へられたる生命と力とを有してゐる。併しながら果
してその生命と力とが自己一身のみならず、周圍をも潔むるだけの可能性を有してゐるであらうか。
今日米國に自然力保存といふ國民的思想が流れてゐる。米國には大森林、大瀑布、大河流が甚だ多い

は長さものあり短きものあり、而して何れの片々も決してその全體を表現するものではない。これと同様に何れの宗教何れの宗派も決して宗教的生命、宗教的信念の全體を代表する事は不可能である。

使徒パウロは更にコリントの教徒に書を送つて、汝等はコリントの俗塵の中に埋もれ、その裡に眞の宗教的生命を見出さなければならぬ、汝等は溷濁の裡に宗教的光明を發見せねばならぬ、汝等は都會生活の矛盾と腐敗の間に、安住と調和と希望とを開拓しなければならぬ。汝等はこれ等萬象の汚濁の渦中に突入し、進入し、奮闘し、苦悶し、而して最後に是等凡べてのものに打ち克たなければならぬと言つてゐる。

近頃有名な或人が、現代英國が要求する人物は、靈的の人物である。靈的の人物が實業界に、政治界に活動し、高き所の理想と確乎たる信念を有する人物が吾等を指導せん事が最大の要求であると言つた。これ即ち宗教生活に生ける偉大なる人物の要求に外ならぬのである。

三

パウロは世界を説くと同時に生を説くことを忘れなかつた。宗教が宇宙或は世界といふが如き大仕掛な背景を有してゐると同時に、宗教は吾々の生そのものから離れてはならぬ。即ち宗教は人生のあらゆる部分に觸れてゐなければならぬ。悲しみと苦しみと、悶へと、怒りと、悦びと、望みと、或は家庭、或は遊戲、或は市街、或は國家、是等凡べての生の顯現に觸れなければならぬ。是等の現象或は存在を離れて眞の宗教を見出すことは出来ないのである。單に生の事實が吾等の所有であるばかりでなく、死そのものすら吾等の所有であると、パウロは教へてゐる。然り死の涙、悲哀、損失、悲劇

に對して吾等の思索が徹底的にならねばならぬ。或人は思索は祈禱なりと言つた。蓋し至言である。第三に精神が他の事象に反響するものでなければならぬ。他のものが吾等の協力を要求する時に、これに應ずるだけに、吾々の心情が前以て擴大せられてゐなければならぬ。アラビヤの昔の物語りの中に、魔法使ひが用ひてゐた一ツの天幕の話がある。それは不思議な天幕であつた、王室に運べば、王座を掩ふて餘りあり、宮廷に持ち來れば百官臣僚を掩ふて餘りあり、原野に齎せば幾百萬の村や町の人々を裹んでなほ餘裕があつたと傳へられてゐる。宗教生活は恰度この魔法の天幕のやうなものである。宗教生活が一部の少數な僧侶界にのみ保護せられてゐる間は、その宗教生命を擴充することは出来ぬ。

更にその宗教生活が擴大せられて種々な宗派を掩ふとせば、その宗教生命は、それに屬する教徒を感化し、或は各派の間に精神的競争が起つて、多少宗教生命の範圍が大きくなり、力が強めらるゝかも知れない、併しながら、眞に吾等の生活そのものに觸るゝ事は出来ない。

宗教生活が更に一轉して人生そのものゝ上に築かれ、而て人生そのものを味到する時に、人生の悦び、悲しみ、要求、生、死、或はアポロ或はケバの黨、或は現在或は將來の事象の凡べてが包含せられ、こゝに宗教生活は、無限より無限に流るゝ宇宙實在の生命と力との永劫の發達そのものに外ならざるものとなる。かくの如にして吾等の宗教は宇宙生命の脉拍てるところ、宇宙勢力の顛動せる境、人生の生活裡に或は萬有を通して常に新たなる神の經綸に參與しつゝあるのである。

しかも是等實存在の裡に隠れたる生命と力とが、完全に或は經濟的に遺憾なく使用せられつゝあるか否かは是れ大なる疑問である。是等凡べての生命と力とを有益に使用せんが爲めに、自然力保存説が高調せられたのである。

予はこれと同じやうに人間の靈的生命の保存が必要であると信ずる。諸君の或者は神その物に就いて疑惑を懷いてゐるであらう。しかし吾人は吾人のうちに宿る神の力をどれ丈利用しつゝあるか、大切なことである。又キリスト論に就いては所説紛々としてゐる。されどキリストなる人格の模範に據りて、或はキリストの生活の跡を踏みて、或はキリストなる象徴を善用して、古來世界の人々が如何に彼等の靈的生命を保存し、活用し、發展せしめたかに就いて顧みられんことを切望する。

諸君が四福音書を細かに研究して見たならば、諸君はその中に勢力と生命といふ言葉の多さを發見するであらう。さてその力或は生命とは何であるか。眞の生命、眞の勢力は如何なる信條や、議論や宗教的組織の中にも繫縛せらるゝことはない。生命と勢力は動的のものであつて、内より外に向つて流れんとする力である。實に勢力と生命とは、生を超越し、死を超越し、今あるもの、後あるものに對して至大至高の權威を振ふものである。而してこれが宗教生命の根柢である。隨て吾等が宗教生命を擴充する所以は、吾等の生そのものゝ意義と價值と現在とを充實せしむる所以である。

五

然らば宗教生活擴充の方法如何。第一に吾人の健康の擴充である。訓練また鍛練、吾等の肉體の完全なる發達を努むることである。第二に精神擴充である。精神の自由を得なければならぬ。凡ての事象

す、而して我は凍えて息絶えなんとするも、錢な

ければ則ち其尺寸にも手を觸るべからず。社會の

尊敬を受けんとするには、金力に依らざるべから

ず公衆の喝采を拍せんとするには、全力に待たざ

るべからず、百の事業、千の企業、金力あつて而し

て後に漸く之を營むべく、金方なきものは、天才

良能の士と雖も、則ち樛櫟と擇ぶ所なき也。斯く

の如くにして、眞善美の崇高の偉大も金の爲めに

其光を奪はれ、國民舉げて量の彪大(Quantitative

s (Grosse) あるを知りて、質の偉大(Qualitatives

Grosse) あるを忘れんとす。獨のゾムバルト嘗て

拜金主義の米人氣質を罵つて曰く『吾人試みに閑

人の對話を聞かんか、輒ち曰く『君は某氏の壁に

飾れる五千弗のレンブランを見たることありや』

と又新聞紙の雜報を見んか、曰く『今朝カーテギ

ー所有の五萬弗の快走艇某港に入れり』と、凡そ

斯くの如きもの米人の氣質のみ』と、豈獨り米人

のみならむ。武士は喰はねど高楊枝』を以て誇と

せる、我社會に於てすら、極端なる拜金主義の風

潮は、脈々として漲り來れるにあらずや。

資本主義的精神は、今や時代の一大病弊となり

終んぬ。

II 資本主義とは何ぞや

資本主義とは何ぞや。これ頗る難解なる題案たらざればあらず。唯だ吾人の理解する限に於て、大様二種の意義を含むと認め得べきが如し。一は社會上の意義にして、二は經濟上の意義也。社會上の意義に於ける資本主義とは何ぞやと言はじ、これ又簡單なる用語を以て、其義を定むること困難なれども、試みに左の如く言ふを得ば、希くは大過なきに近からんか、曰く――

資本主義とは金錢富力を以て至上とする、時代精神の一大傾向にして、夫れ自身目的を有する(Selbstzweck)ものなりと。

金錢富力を以て至上となすが故に、一切價值の認識は貨幣を以て尺度となす。従つて物質主義也、營利主義也、個人主義也、利己主義也、現實主義也、而して其思想の系統は、民主々義に發足せる貴族主義也、而して貴族主義なるが故に又階級主義なりといふを得べし。夫れ自身目的を有す(の。Ibselfzweck)とは、其金錢を喜び、營利を尊ぶ者其

近世資本主義の趨勢

鈴木文治

資本主義的精神の横流

『守錢奴』なる言語は、後漢の馬伏波が初めて唱へ出したる言葉なりといふ。然らば則ち、既に此頃よりして、錢を賤むの風習は存したりといふを得べし。然り、錢を賤むの風習は存したりと言ひ得べけむも、同時にまた其反面に於て、如何に錢の力あるものなりしかを、證明するものにあらざるなき乎。

武人錢を愛すといふが如きは、如何に其陋とすべきものなるかは、今之を説くを須ひむや。然も之を事實に徴するに、錢を愛せざるの武人、今果して幾許ぞ堂々たる廟堂の首相は、造艦のコムミッションを以て、産をなしたりと取沙汰せらるゝにあらずや。元老某、元帥某、彼等はいづれも、明治維新の元勳たるに相違なしと雖も、尋常一様の徑路を以てせば、誰れか焉んぞ彼の如く産を積

み、彼の如く豊贍なる生活を営み得べしと思はんや。然らば則ち、彼等は何が故に爾く錢を愛して富を積むに汲々たるか。曰く、富其物は今や世界に於ける、最大最高の權威たらんとすればなり。

彼の世上、人物の高下を月旦する者を見よ、其價值に對する認識の尺度は、貨幣其物に非ずや。曰く『甲は五十圓取つて居る』『乙は百圓を取つて居る』と交詢社の編輯にかゝる『日本紳士録』なるものあり而して之に採録せらるゝや否やの標準は、其所得税の多寡に依る。或程度以下の納税者乃至不納税者は全然其圈外に排斥し去らる。旅行するに汽車あり、優等の待遇を受けんとする者は白切符を購はざるべからず、泊するに旅舎あり、然も其服裝の美醜と茶代の多寡とは、正に其待遇を上下するに足る。大牢の美味眼頭に堆し、而して我は飢えて將に死なんとするも、錢なければ則ち取りて食ふべからず。綾羅錦繡、目前に山をな

思ふに、上古朦昧の時代に於ては、人口稀少に天然物豊かなりしが故に、後世の所謂資本又は私有財産なるもの、存在せざりき。然も人口の漸く増加し、人智の漸く進歩し來るや、私有財産の觀念先づ發達し、次で各自が其私有財産を増殖するの慾望を刺戟したりしなり。然りと雖も中世紀までに於ける宗教上の勢力は、或は利息を取るを以て罪惡とし、富を積むを以て天國に入る能はずとし、一面に於て慈善を奨勵し、博愛を勸むると共に、一面に於て手工業者間の組合制度の存在は、組合員相互間の競争を禁遏し、各自小康を保つことを得たりしが故に、敢て其間に大なる貧富の懸隔あらざりしなり。然れども遂に大なる反抗の時代は來りぬ。反抗の時代とは何ぞや、曰く、産業革新即ちこれ也。

蓋し歐洲の文明は希臘思想ヘレニズムとブライズムとの二大思潮が經緯をなして織り成されたるもの也。前者は別ち希臘の文明より發露せる者にして、著しく主我的傾向に富み、理智を尊び理性を重んじ現世的、現實的、物質的なりといふを得べきに反し、後者は則ち基督教に依りて傳播せられたるへ

ブリュー思想にして、沒我的傾向に富み、感情を重んじ、信仰に依りて立ち、超自然的、出世間的精神的なりといふを得べし。而して此二大思潮が最も明かに表現し來りて、混淆、鬭争をなせるは、恰も上世より中世への過渡期にして、基督教のヘブリュー思想は遂に後來思想界の霸者たりし希臘思想を壓服して、爾來中世の末に至るまで、支配者たるの實權を收めたりき。然れども希臘思想は一敗地に塗まれて、復起つたこと能はざりしにはあらず、積雪に壓せられたる若竹の如く、折もあらばと其復讐の機會を伺ひ居たりしなり。而して遂に多年の間、待ちに待ちたる復讐の機會は來りぬ。東羅馬帝國の滅亡、而して次いて來れる文藝復興の機運は則ちこれ也。

げにも中世紀一千年の間は、束縛壓迫の時代なりき。宗教は社會上に於ける絶對の權威にして、人心は悉く上命下服の關係に依りて拘束せられ、一切の自由討究は罪惡視せられたり。然れども一度びダンテ、ペトラルカ、ボッカチオ等に依りて肇められたる、古代文學の復興は、人心の繫縛を一斷し、恰も一陽來復して、花笑ひ鳥歌ふが如く、各

獲得せる金錢富力を以て、他の欲望を達するの手段となすにあらざして、營利其物、金儲其物が直ちに其目的の全部たるをいふ也。固より現金主義の今日と雖も金錢の獲得を以て最終の目的とするもの、必ずしも多數を占むるに義らざるべきも資本主義は畢竟、此境地に至らざれば、止むものにあらずる也。

經濟上に於ける資本主義は、吾人之をホブソン氏の説に藉らむ。氏は其著『近世資本主義の進化 (The Evolution of Modern Capitalism) 中に於て、此主義を決定して曰く——

資本主義とは、雇主又は雇主の團體が或蓄積せられたる富を有し、其富を以て或は材料器具を購入し、或は勞働者を雇傭して、其利得となるべき一層大量の富を生産せんとする、大仕掛の商業組織なりと、而して氏は、其内容として次の五要素を指摘せり、曰く——

(一) 貯蓄せらるべき富の生産

(二) 自ら生活する能力なき細民又は勞働者階級

級

(三) 器具又は機械を用ひて利益ある生産をな

し得る丈の工業技術の發達

(四) 充分消費力ある大市場の存在

(五) 大資本を以てする産業經營に適する資本

家的精神並に能力の存在

即ち一言以て氏所説を蔽はゞ、資本主義とは畢竟するに、茲に一大富力あり、此富力を最も經濟的に活用する資本家又は起業家あり、此資本家又は起業家の力によりて、低廉にして輕便なる幾多の物資は、市場に供給せらるゝと共に、一方社會の一面に於て、其産業に依りて從屬的に生活せざるを得ざる勞働者階級の存在すべきことを豫定せる、一大産業組織なりといふを得べし。而して此多數勞働者階級の存在は、即ち幾多の紛糾せる勞働問題、社會問題の存在を、豫想するものにあらずや。

資本主義の用語上の解釋は思ふに上の如けむ。而して此二様の解釋は、一見沒交渉なるが如きも實は則ち同一精神の發現せるものに外ならざるを知るべき也。吾人試みに之を説かんか。

三 資本主義の由來

道德が衰へ、宗教が無力なりと稱せらるゝ所以も亦、畢竟するに、此一般社會に於ける物質偏重思想の反映に外ならざるを見る也。

蓋し現代に於ける、資本主義の全盛は、理想主義に對する現實主義の反抗也、靈に對する肉の謀反也、精神に對する物質の敵對也、ヒプライズムに對するヘレニズムの反動也。然もまた資本主義其物のうちに、幾多の眞理を藏するが故に、一概に之を排斥し、滅却する能はざるべし。單に排斥滅却する能はざるのみならず、目前の事實に於て宗教も、教育も、政治も、道德も、此資本主義と相提携し、妥協するにあらずんば、到底何事も成すべからざるの状態にある也。悲しい哉吾人、現代社會に於ける木鐸師表と仰ぐべき人にして、暮夜私かに富豪に叩頭し、或は恥を忍んで節を賣る者あるを見る。吾人眞に悲憤禁ずる能はざるも、事實は遂に如何ともするに由なきなり。然らば則ち資本主義の將來や如何。

凡そ物、動あれば必ず反動あり、激流は巖に激し、疾風は巨木に沮まる、其極端に走るに及んでは必ず之れが反擊の出現せずば止まざる也。元來

資本主義なるものは、中世の教權主義、門閥主義に對する、自由主義、平等主義の子なり、然も其一度本來の目的を完成するや、忽ち其立場を忘れて、階級主義、專制主義の信徒となれるにあらずや。又資本主義は、元來貴族又は僧侶なる特殊階級に對する平民主義、民主々義の反抗の聲なり、然れども其の強敵を征服し了するや、卒然として其本を忘れて、貴族主義、門閥主義に復歸しつゝあるにあらずや。是に於て乎、新たなる反抗の氣焰は、猛然として起り來れり。經濟上に於ては、社會主義、社會改良主義、最近に於てはサンチカリズム、政治上、社會上に於ては虛無主義、無政府主義、立憲主義、民主々義、共和主義、而して彼の最近に於て世人の視聽を聳えしめつゝある、婦人解放運動の如きも亦、蓋し思想上、社會上に於ける反資本主義なるを疑ふべからず。

思ふに二十世紀は、廣義に於ける社會問題解決の舞臺也。政治問題、經濟問題、平和問題、婦人問題、思想問題、文藝問題、其他幾多の複雑紛糾せる問題の解決は、皆悉く集まりて、現代社會の一大勢力たり系統たる、資本主義的精神との勝敗

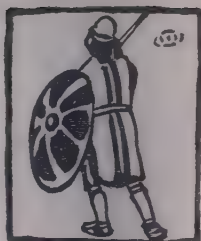
種の方面に於て、偉大なる發展は遂げられたり。天文地理上の發見、學問技術上の發明は固より、宗教上に於ては、ルーテルの大著成り、政治上に於ては、封建制度打破せられて、新たなる組織に於ける、中央集權主義の國家は完成せられたり。人心の活動既に斯くの如し。豈獨り經濟界に於てのみ、變遷なくして已まんや。輒ち從來の手工業的傳習と、組合制度とは、頻々として相踵て起れる工業上の發明發見の増加と共に、悉く打破せられて、大資本大仕掛の新しき産業組織は開始せられたるなり。十八世紀の中葉以降十九世紀の初葉にかけて大成せられたる、産業革新則ちこれ也。予が前述せるホブソン氏の資本主義の定義は、思ふに此産業革新の事實に基いて、主論せられたるもの也。

斯くの如くにして、先づ經濟上の革命は成就せられたり。然も他面に於ける人文の進歩は駭々として、瞬時も止む時なく、人口の増加、交通機關の發達、社會組織の變遷は、所謂生活難、就職難の社會的慘禍を生ずること益々甚だしく、而して此慘禍の大なれば大なる程、人類の經濟生活の重

要の度愈々加はり、遂に時代の人心を相率ゐて、マンモンの神に跪拜せしむるに至れる也。則ち經濟上に於ける資本主義は、貧富の懸隔をして甚だしからしめ、黄金力をして益々強大ならしめ、一變して一般社會上に資本主義の精神をして、瀾漫せしむるに至れる也。

四 資本主義の將來

資本主義は、今や現代社會に於ける一大事實なり、一大系統なり。帝王の權威と雖も、また殆んど如何ともすべからず。彼のルーズベルト氏が大統領たりし際、合衆國に於けるトラスト征伐の結果を見るも、之を知るを得べき也。國際間の和戰の機すらも、今や則ち大資本家の掌中にあり、世界の平和は全くこれら資本家の力に依りて保障せらるると稱せらる。不義を除かんが爲めにも金力を要し、權利を主張せんが爲めにもまた金力を要す一にも金、二にも金、三にも金、世は殆んど黄金の威力の前に屈從し了せんとす。小は個人日常の生活より、大は國家の政治、國際の關係に至るまで、殆んど悉く、富の魔力の征服する所たんとす



海外思潮

ゆふしほ

△英國の青年詩人アルフレッド・ノイズ

が近頃米

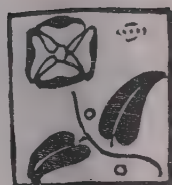
國を訪ねて、盛んな歡迎を受けてゐる。彼は當年三十二歳の青年であるが、既にテニソン以來の大詩人だと言つて持て囃されてゐる。彼れの得意思ふべしである。それに就てハミルトンといふ人が彼を評して次のやうな事を言つてゐる。即ち「ノイズの詩は徹頭徹尾、人生の愛着である。彼れは多産的の詩人である、何となれば彼れは健康の人であるが故である、彼れの詩は變化に富んでゐる、何となれば、彼れはあらゆる事象に對して興味を抱くことを得るが故である。彼れは、その精神の健全なことに對しては將に神の恩寵に感謝すべきである。その最も内省的或は自己思索的の時代に在りながら、彼れは嘗て一と度も、彼れ自身の運命を呪ふことを爲さない。彼れは決して女々しき泣き言を並ぶることを爲さない。彼の悲哀は幸福なる人の經驗したる深い、そして偉大な悲哀である。彼れは眞に自己の幸福であることを信ずる人である。彼れの勝ち誇れるが如き若々しきは、かの意志の弱い悲觀者に對する光榮ある挑戦である。彼れが描く所の悲劇は決して弱々しいものではなくて、生き生きとした、しかも驚怖すべき性質のものである。過去幾十年の間吾等の世界は女々しき多くの小詩人に滿

ちてゐたのであるが、アルフレッド・ノイズに至りて、吾等は極めて偉大なる詩人を得た。彼れにとりては此の世界は最早や黄昏の涙の谿でなくして、曉の露をもて輝かされたる谷間である、そして一面の谷にも丘にも朗かな雲雀の唄が絶え間なく流れてゐる云々」……又或る批評家は彼れを評して、「彼れは彼れ自身と彼れの詩とを嚴肅な意味で相分つべからざるものとして取り扱つてゐる。彼れは人間であることを自覺すると同時にその美的使命をも自覺したる人である。隨つて彼れの生活は眞剣であつて、決して妥協を允さない。彼れは片手間の事業として詩を作るのではない、詩は彼れの第一義的生活の全體である。彼れは詩の裡に生活しつゝあるのである。彼れの言を藉りて言へば「嘗て幾世紀前の世界に於ては偉大なる歴史的宗教が、その時代を支配したことがあつた。また現在に於ては、實相を開拓せんとする科學的精神が現代を支配して居る。そして來らんとする次の時代を支配するものは詩でなければならぬ。……而して詩人は世界のあらゆる事象の裡から、新しき意味を掘み出すものでなければならぬ。あらゆる大詩人は吾々をして宇宙の根本たる調和に觸れしむるものである。その調和こそ現實界の凡ての矛盾を解決する力である。

如何に依りて決せらるべし、蓋し資本主義的精神は、人の知ると知らざると、其の顯はるゝと顯はれざるとを問はずして現代社會の一大底流なるが故に如何にしても、之に對して一戰を試み、以て輸贏を決せざるべからず其戰や必ず惡戰苦闘ならむ、然も階級闘争の犠牲や必ず大ならむ、然も最終の勝利は斷じて疑ふべからず、そは神は人に勝ち、愛は組織に優るべければ也。

本誌定價改正豫告

愛讀者諸君の熱心なる期待と要求は、吾人をして、更に新たに、更に大なる使命を自覺せしめたのであります。隨て每號甚だ紙面の狹隘を感じるに到つたのであります。そこで七月號からは、本誌從來の定價を貳拾錢に改め、大に頁數を増加し、本誌の特色ある面目を宗教、哲學、文藝の諸方面に亘りて發揮したい考へてあります。是れ大正二年に於ける本誌發展第一歩の紀念であることを確信してゐます。



睡蓮夢

吉田 絃二郎

こゝに美しき乙女ありて幻のごとく死なば、我は彼女の女の運命を祝福するであらう。野の花よ、川沿ひの釣り鐘艸よ、彼女の女の亡き骸が運ばれる日の祈禱にうなだれよ。

荒き男等よ、彼の女のマアブルのやうな腕に觸れることを爲るな。彼の女は今眞實の生命を見出したのだ。假象に囚はれたる世界の人々から奪はれた刹那に、彼の女の靈が慕らに眞實の郷におどりこむのだ。

死者を送る黄昏の鐘が鳴り響く！

眞實の生命から溢れ来る力のどよめきを聴け！

黄昏よ！ お前の灰色の空は、美しき乙女の亡き骸を葬むるには、餘りに貧しい、餘りに力のない、餘りに光の薄い象徴である。

黄昏よ！ お前のよろぼひたる足どりの流れは、可憐らしい乙女の死を葬むるには、餘りに悲しい思ひ入りをたゝへ過ぎてゐる。餘りに暗い囁きを泡立たしてゐる。餘りに幻滅び近く事象の顯現を抱いてゐる。

吾等は明日のかはたれ時を待たう。！

永遠の秩序、或は調和のなかに、極微の裂け目があつたとすればそれは藝術及び科學が最も厭ふべしとなす空虚である。人がもし、それを允さば宇宙は最早や意味なき事となる。宇宙は常に調和され、秩序立てられ、充實せられてゐねばならぬ。詩人は常に現象の裡に隠されたる深き意味を、切り開かなければならぬ。一つの蟲も意味なしには裂かれてあらぬ、一羽の雀も天父の許諾なしには地に落ちない。さきやかなる日々の變化の裡にも深き眞理がこもつてゐる。調和の眼よりしては草葉の悉くすらも數へられる。タイムが存在する限り、調和の進行には一つの裂け目をも發見することはできない。何となれば大なる藝術こそ、かの呪棍を携へたる先達者の如く、日々の變化、日々の生活、日々の事象の塵埃に隠されたる調和をば、その混亂や、暗黒の中から攫み出して、吾等の眼前に提供するからである。かくて時が進み行く間に、詩のなかに吾等は永遠に於確かなる踏み場を發見することが能きるのである。これ彼れの詩に對する態度である云々。」

△瘋癲藝術

後印象派の繪を始め、色々な新しい試みが繪や彫刻の上に用ひられてゐるが、これもその一つで、この頃紐育とシカゴで後印象派の彫刻展覽會が開かれた。批評家はその會場の建て物を稱して、瘋癲病院と呼び、その作品をば、瘋癲藝術と言つてゐる。誰もその作品を以て眞面目に作られたものと認めてゐないらしい。或者はこれ道徳を威嚇するものなりと言ひ、或者は、若し自分の子供が斯やうな眞似でも爲やうなら、打ちのめしてやるなどと言つてゐる。又紐育のトリビューン紙はこんな批評をして

ゐる。「街の眞ん中で群集を寄せることは雜作もないことだ。お前が街の隅に五分間も、突つ立つて、大きな建物の煙筒の頂を見つめてゐれば、お前は何時の間にか彌次馬連の中央に置かれてゐることになる。藝術上に於てもこれは必ずしも新しいことでも何でもない。数年前或る賢い佛蘭西人が什うしたら、衆愚を驚倒せしむるやうな、刺戟の強い繪を描くことが能きるだらうかと苦心したことがあつた。要するに後印象派はこの佛人の一步進んだ企てを實行したまでのことだ」云々、何處の國でも新しい藝術には隨分患ふされてゐると見へる。

△オイケンとベルグソン

一九一三年は米國歴史上特筆すべき年であつた。即ち米國人は相繼いでベルグソンとオイケンを迎へたのである。米國の一雜誌記者のこの兩偉人の比較評が面白い。記者の説く所によれば、オイケンもベルグソンも背の高い男ではない。又肥つた男でもない。ベルグソンは華酒な、顔色の蒼白い、如何にも蒲柳の質の人である。が、飽くまでも明晰な、徹底的な貌付きをしてゐる。これに對してオイケンの温かな眼、赤はめる顔血色の宜い顔色、白い髭と髪の毛が彼れの風貌を一層氣高くする。見たところ彼れはサンタ、クロースである。もし然らずとしても、少なくとも彼れは屢々獨逸劇に現はれ來る好々爺である。

此の印象はオイケンの話し振りに於て一層深く強められる。ベルグソンの聲は低いしかし透き通つた、調子の調つた涼しい聲である。オイケンの聲は寧ろ情的な爆音的な聲である。

れば、死もないのだ。たゞ存在するものは白い花と、滑かな風と、小徑と、並樹と、靈しき樂音と、美しき乙女の幻影だけなのだ！そして最後に自然の威力のみだ！

柩を擔ふ男も、花筐をさゝぐる女も、香物を供へる少年も、それはみんなその刹那の運命が造り出した、刹那的の幻影なのだ。

幻影の男と、幻影の女達よ、靜かにその柩をもたげよ。聖僧と尼僧達よ靜かに死者の祝福を祈れ！それでもお前達は歌つてはならぬ。聲を立てゝはならぬ。鋤の刃音さへ立てゝはならぬ。凡べて靈と靈とが通ふ所には、沈黙の外何物もみんな虚偽である。お前達が聖歌をうたうことも、讀經をすることも、それはお前達自らを満足させる爲めの利己的な心の指圖からなのだ。沈黙してお前達の靈を醒せ、そして死んだ乙女の胸の奥底から、永久に醒めたる靈の力を受け容れよ。

美しき乙女の死！

人々よ、乙女の美を懷へ！柔和な眠りを想へ！

人々よ、艶かなりし乙女の日を憶へ！ふくよかなりし肉付を想へ！

もし誰か蒼腿めたる額、赭黒き唇、冷たき胸、爛れたる肉、落ち窪みたる眼底を想像するならば、

そは呪ふべき男と女！

死は最高の權威であり、勝利である。人間の眼と太陽の冷笑が通らぬ墳塋の暗には、美しき乙女は永劫に美しき乙女さながらに眠つてゐる。そこにはたゞ思ひ出と、懷しさと、快き隋想の放縱な生活

うら若き女の死！

夜明けの星が牧場のポプラの並樹に！ 白い哀愁の影がひたすらにだら／＼降りの赫土徑を彷徨いてゐる。反芻の懶げな音のためたひ、板間を蹴る寂しい足搔き！

東雲の空が、眠りから醒めた湖のやうに、靜かに靜かに青草の上を滑つて、ひーやりとしたそよ風の息遣ひを聞かせる——露に沾ふた大地が、朝の呼吸を始めたやうに、睡蓮の卷き葉、浮き葉に抱か

れた夢と、搖られた夢の名残りが、淡い色の水煙になつて、湖一面にたゞやうてゐる。曉鐘の悠やかな旋律の流れに、翡翠の水を撃つ羽音が和むやうに物怖ぢた音を立てた——菱の核がはちけるやうな。

夜明けの星が最後の瞬きをする！ 牧場の朝風が最初の囁きを始める！

今だ！ 今だ！ その柩を擔げ！

墓場に誘ふ並樹の小徑には、巡禮の咏歌一つ聞えてゐない。露と、そよ風と、晨の夢がさ迷ふた外には驢鼠の一つさへ、この徑を横切つて行かなかつた。

今だ！ 今だ！ 乙女の亡き骸を送れ！

まだ曉の夢が減びぬ間に、湖の面が突つ俯してゐる間に、羊飼ひの男が往き來せぬ間に、白絹で被ふた乙女の柩を送れ。

夜でもない、朝でもないその一時時！

水草の白い花瓣の上で、夜と晝とが訣れやうとするその一時時！

それが乙女の死を送らねばならぬモノメントだ。その刹那には人間もなければ、神もなく、生もなけ

マスタア・掬香 千葉鑛藏先生編輯

新刊

泰西思潮 第壹輯

最新式裝幀
菊判二百五拾頁
正價金五拾錢
郵税八錢

目録	編輯者
一 題言	ベリッソン
一 生と意識	ベルグソン
一 グリインとシデキツク	ブライス
一 ドストエフスキとニイチエ	ビヤバウム
一 戦争の一道德的代用法	ヂエムス
一 ハアヴァド大學に於ける一大佛蘭西哲學者	ヂエムス
一 道德と文藝	シエン

泰西思潮は、宗教、哲學、倫理、心理、政治、社會、經濟、文學、藝術に關する今代の歐米の思想界乃至藝苑に於ける碩學鴻儒大家巨匠の論文を譯述し、以て現代の我邦人の精神生活に最も欠乏せる、廣く又深き意義に於いての教養を之に附與せんとする書物の形式を借りたる一種の交換教授、一種の自由講座。之れを一言にして云はゞ、歐米最近思潮の紹介者なり。個々の論文には皆一様に編輯者が留意して記せる人々の傳記と、其の思想の概略と、又其の著作の書史とを添ふ。

英國劍橋大學教授ソオレイ先生著 マスタア・千葉鑛藏先生譯

再版 輓近倫理思潮の傾向

全部訂正再版
最新式ベエバ裝幀
四六版三百四拾頁
正價金六拾錢

郵税六錢

▲再版序文▲譯者序論▲第一章(輓近倫理思潮)特徵▲第二章(倫理學と進化論)▲第三章(倫理學と唯心論)▲通計六十壹折▲附錄(中島、桑本、内田、若田、戸川、得能、岡田、大島、小林、岩野諸家及び諸雜誌、諸新聞批評集)▲東洋大學參考書▲本書は、現今ケムブリッヂ大學、倫理學の教授ソオレイ先生の名著にして、歐洲殊とに英國の輓近倫理思潮の傾向を音に専門の學生に對してのみならず、又一般の教養ある人々に向つて、講述せしものなり。譯者は多年、コオチルニエール、伯林等の諸大學に於いて、政治、社會、倫理を研鑽し、又其の文學の造詣に於いては、イブセンの紹介として其の名聲夙に我が文苑に定評あり。今や全部に訂正を加へ、再版す。而して一新、殆んど新刊の概あり。左に初版に與へられし諸名家の批判の二三を抜擧す。

▲中島德藏君「本書は、一般倫理研究家の必讀たるのみならず、經世家も又注意せざるべからず。丁酉倫理研究」▲内田魯庵君「最近の倫理學書中最も廣汎的且最概括的にして近時の脈の如く關したる思想を恰も幾女の梭を投じて織出す如く布置井然たらしめしもの實に本書とす」▲文學博士桑本殿翼君「最近の倫理說に關する詳論を知りたと思ふ人は、此書に據るのが最捷徑であらう。尤も千葉君の扶量はやはり本文より序文に於てより多く顯れて居る。適當に材料を使用して現代思潮の大勢を説いたのは近來の文章だと云つてよい(藝文)

文檢受驗者及び教員諸氏の寶典

東京市張橋區銀座目 警醒書店 振五 替五 東三 京番

の上に築かれた美の王國があるのみだ。

現實の力に強ひられたる吾等の悲しき運命が、吾等を送る墓場の徑は、吾等の永久の生の第一歩である。しかも美しい乙女の旅立ち！

曉の鐘よ！ 凱旋のうたに合せて響け！

美しい乙女は永久の美と、生と、權威の王國に旅立つのだ！

湖の花よ！ さゝやかなる琴の音に、汝がかはたれ時の生命のうたをうたへ！

人生の頹敗と、落日とを知らずして眠りし至幸なる乙女の爲めに唱へ！

今日一日の太陽と風と、水と、世界が、美しい乙女の爲めに泣く！ しかも嬉しい永久の生の旅立ちに！

夜が明けて了つた！

朝のそよ風が榆の葉摺に快潤な羽叩きをして過ぎた。

あ早う！ あ早う！

野良に行く二人の男が機械的に頭をしやくつて過ぎた。

玉蜀黍の葉はまだ五寸に足らぬ！

院長診察、月、水、木、金、午前、入院、診後應需、林、峰間、兩副
長、八目下當院ニ在勤

電) 八八八(病院用)
(本 八九八(私宅用)

東洋内科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋附近

院長

醫學士 高田 畊 安

神奈川縣高座郡茅ヶ崎海濱從停車場半里

電、チガサキ一二番

南湖院

河野、高橋、兩副長、八目下當院ニ在勤、院長診察、土曜日午後
入院、診後應需

帝國文學

一六號要目

● 舞蹈の花 (歌劇)

小林愛雄

● 啞の女 (小説)

翁久允

● 新藝術の第一歩 (評論)

石坂養平

● 西鶴の研究 (評論)

藤村作

● 老處女 (小説)

モオバツサン
笠井鳴創 譯

● 七里ヶ濱より (詩歌)

田波御白

● 御弟子 (戯曲)

ジヨオジムウア
千葉掬香 譯

△ 詩集エハの歌 (詩歌)

厨川白村

△ 思想の流れ (評論)

山田檳榔

△ 五月の劇壇 (評論)

灰野庄平

△ 五月の文壇 (評論)

石坂養平

△ 最近海外騷壇 (紹介)

幽絃郎

大日本圖書株式會社

振價 五十錢 東錢 半 京 二 一 九 九 錢

《中付の二》

新

公

論

(目要) 行 發 日 一 月 六

白禍史

(露骨なる黃人排斥論
加州に於ける白禍史)

▲赤門出身の實業家

▲未來を有する少壯記者

城北隱士

寒天落木樓

海野幸徳

▲白馬城放語

楚人冠浪

▲南京おこり

黑魔

元老の罪惡

(十餘頁
の評論)

▲花屋となるの記

▲夫歸で法界節となる記

變裝記者
變裝夫婦

政黨總裁たる桂と其幕僚

鐵拳禪

▲支那の新らしき女

▲新らしい女の理想的家庭

誠軒
せん
子生

海外邦人男女職業表

(外務省最近の調査)

(中付の五)

發行所 東京 本町 區 二 丁目 四 〇 新 公 論 社 定 價 一 角 五 分 共 計 一 千 二 百 一 十 五 冊 一 錢 五 厘 五 分 共 計 一 千 二 百 一 十 五 冊 也

稻毛金七 近藤新一共著 (好評初版盡きんとす)

文檢修身教育問題解答

▲洋装菊刻約五百一頁 全一冊定價金壹圓貳拾錢 小包料金八錢▼

本書は文檢修身教育法制經濟の三科に應ぜんとする人の參考に供せん爲め特に合格者稻毛近藤の兩氏に囑して成れるものなり而して本書の特色は最近五箇年間の豫備本試驗問題十回に亘りて出來得べき事實を掲げ之に口述試験の實況をも添え問題毎に幾多の類似問題乃至應用問題を附して研究者に自覺自習の便を與へ其他三科の研究法受驗法參考書及び試験規則等をも附記して諸科受驗者の要する一切の準備を完からしめたる點に存す。

浮薄なる受驗學風の排斥は我社の從來終始一貫して努力せる所なり。されど受驗は單に實力のみを以て可なる者に非ず、即ち必ずしも受驗法と云はずとも實際受驗合格せる者の経験を参照することは極めて切要なることに屬す。之我社が本書の執筆を斯學の大家に依頼せしに於ては合格者たる二氏を選ひたる所以なりとす。受驗者は一面に於て十分實力を養成すると共に更に他面に於ては本書の如きものを熟讀し合格者が實地の經驗より歸納せる研究法解答法等を玩味し以て實際受驗の際の參考とせば必ず好成绩を以て合格の光榮を荷はるべきものと信ず。我社は二者者と共に此の確信と希望とを以て本書を篤學なる受驗志望者に推薦するものなり。

稻毛 著

若き教育者の自覺書

(四六判二百三十六頁)
▲壹冊定價送料金五十六錢▼
好評増補第參版既に過半盡く

(中付の四)

世 界 雜 誌

每月 壹回 發行 日 定價 郵金 拾六 錢 半 八 一 六 二 錢 十 圓 年 錢 十 年

六 月 號 要 目

△公開狀

後藤新平 中野武營 早川鐵治 大谷光瑞 新渡戸稻造 片岡直溫 大森順造 牧野先次郎 山本悌二郎

社 說

▽似而非なる官制改革
▽任用令改正亦非
▽第二革命乎
▽女權擴張者の狂態
▽我國の新らしき女
▽排日案の成り行き
▽所謂藝術家
▽形式過重の弊
▽嗤ふべき校長留住運動
▽電車を消毒せよ
▽地方青年啓發の急
▽藏相と大阪市債
▽海運貨の昂騰
▽露領に於ける漁權問題
▽國體擁護團

▽吾人の主張
▽憲政擁護運動の前途
▽思ふ所を直抒せば
▽第二維新の根本的國是
▽八面鋒
▽民黨合同論
▽帝國振興の根本義
◎自叙傳
▽桐花學會に誨ふ
▽私共に反對する人々
▽倫敦通信
▽大正風俗 (木版畫十面)
▽尾崎行雄
▽森村市左門
▽田川大吉郎
▽小山鼎浦
▽高島米峯
▽關田和知
▽岡田泰藏
▽尾崎行雄
▽目黒正男
▽西川文子
▽エガートン

大賣捌所

東京堂 北海堂 北隆館 東海堂 叔山書店

良明堂

發行所 東京橋區三丁目一寄附番 世界雜誌社 電話新橋四壹貳番

東亞之光

每月一回發行 日 六 月 號 冊二 冊一 定價 金貳圓 拾錢 郵錢 拾錢 五錢 匣共

- 國體と政體との關係……………文學博士 井上哲次郎
- 威海衛降服と旅順開城……………法學博士 高橋作衛
- 教育家としての貝原益軒……………文學博士 三宅米吉
- 博物學者としての貝原益軒……………理學博士 白井光太郎
- 近代思想の推移と文藝……………文學士 樋口秀雄
- 最近唯心論より見たる傳習錄……………文學士 島本愛之助
- 通俗卑近の熟語成白……………文學士 青木昌吉
- 生命の正體……………文學士 飯島忠夫
- 開國論者としての佐久間象山……………文學士 津金馨
- スコットの小説……………文學士 正富由太郎
- 花鳥の春……………醫學博士 浦守治 ●詩人の妻……………書齋より街頭へ……………一
- 心理學と海軍……………人間の器械か……………服從の精神……………海軍に對する確信……………士官の群衆統卒力……………
- 般航海と心理學……………
- 創始の精神……………
- 漢詩……………柳外小柳司氣太……………貫齋小林正策
- ▼東京帝國大學文科大學卒業論文……………

東亞協會發行

東京小石川區番八十七番 座七 口替一 振二 京番

統一教會會員著書案内

著者	書名	冊數	定價	郵稅	出版元
三並良	福音書大觀	一	五十錢	八錢	統一教會
三並良(譯)	佛	一	三圓五十錢	廿四錢	梁江堂
内ヶ崎作三郎	人生と文學	一	五十錢	八錢	警醒社
安部磯雄(譯)	現代戰爭論	一	八十五錢	十二錢	博文館
内ヶ崎作三郎	英國より祖國へ	一	壹圓	十二錢	北文館
神田佐一郎	登高自卑	一	五十錢	八錢	統一教會
三並良(其他)	進歩的宗教	一	卅五錢	六錢	統一教會
向軍治	ハツ當り集	一	三十錢	四錢	警醒社
岸本能武太	英語發音の原理	一	七十五錢	八錢	北文館
安部磯雄	婦人の理想	一	九十錢	十二錢	北文館
今岡信一良(譯)	新神學	一	一圓	八錢	北文館
小山東助	光を慕ひて	一	四十錢	四錢	警醒社
永井柳太郎	社會問題と植民問題	一	壹圓五十錢	十六錢	新興社
坂本正雄	二十世紀の男女	一	三十錢	四錢	警醒社

右の書籍は我が統一教會會員の著すところのものなれば本社は地方讀者の爲に。特に取次の勞を執るべし。たとひ一冊にても取次ぐべし。郵税は本社に負擔すべし。ば定價のみを送らるべし。

申込所

東京市芝區
三田四國町

六合雜誌社

振替口座東京
一〇〇〇三番

フユザン

毎月一回
一日發行

六月號

一部廿錢
郵税二錢

挿 繪

ストリンドベルヒの肖像(寫眞版).....エドヴァルド・ムンク

露西亞の學生 シュミット(㍻).....

久世山(㍻).....木村 莊 八

S君の肖像(㍻).....岸 田 劉 生

記 事

痴人の懺悔・ストリンドベルヒ.....木村 莊 太

手紙一通と感想.....千 家 元 騰

べらぼうな戀(小説).....菊 小 輔

顛 動 (感想).....木村 莊 太

收 獲 (㍻).....木村 莊 八

ドストエフスキーの手記(翻譯).....莊 八 生

反逆(ジャンクリストフ)・ロマンロラン(3).....高村 光 太 郎

消 息.....

發行所 東京市牛込區水道町 日本洋畫協會出版部
振替 口座 四三七三

東亞之光

第五月號

每一月發行

一冊二金二錢四郵錢一錢五厘共稅

●孔子教と中華民國

文學博士 井上哲次郎

●管錦帖序

文學博士 幸田露伴

●統一の本義を論ず

文學士 今福忍

●母虎物語の研究

文學士 堀謙德

●民本主義と民主主義

法學博士 上杉慎吉

●ブラウニングの獨白劇

文學士 厨川白村

●支那哲學に於ける學問論

又學士 淀野耀淳

●戲曲史上より見たるヘツベルの價值

文學士 山岸光宜

●亞細亞に於ける氣候と人生との關係

理學博士 山崎直方

●日本海岸及東北の將來

文學士 徳谷豐之助

●家族制度の根本問題

文學士 鈴木宗奔

●アレキサンドル、デューマの戲曲

文學士 淺野利三郎

●カントの教育學上に於ける效績

文學士 入澤宗壽

●屋島山懷古

法學博士 大澤眞吉

●漢詩

文學士 有馬祐政

●お伽噺に就いて

文學士 佐野保太郎

●所謂國體論に就いて

法學博士 美濃部達吉

●春子の歌

正富由太郎

海外思朝

進歩の思想

【中付の十】

東亞協會發行

東京 小石川
町七十八

振替 〇〇
座七 〇
東七 〇
京番



時評

本願寺——排日案——福音主義問題

全體を捉へんとする努力

夙にイブセンの代表作を我が文藝界に移植し、爛熟せる近代文明の底を流るゝ思潮に對して、常に其の洞察と分析とを怠らない千葉掬香氏は、近くその譯書『輓近倫理思潮の傾向』の再版を寄せて批評を求められた。

自分の生命の導調すら聴き取れないで生きてゐる私のやうな人間に、斯うした種類の書籍に對して、批評がましい言葉を吐くだけの資格が無いことは、勿論云ふまでも無い事である。私は必しも人間のあらゆる勞作から、分析と概念との束縛を破り去つて、たゞ生命の絶えず新しき色と香いと響とにのみ接したいと夢想するのでは無いが、自分の全生命を提げて、生々した純なる觀念世界に飛び込むだけの用意は、何うもまだ私には出來て

居ないやうに思はれてならないのである。過去一百年間の人々の胸に織り込まれた思索の糸を、少しでも辿つて見たことが因をなして、觀念の網に縋りながら單純化の精神を喜ぶ事が屢々であるのにも拘はらず、私の現在の内生活は、生命表現の階段たる分析や概念に、一切を托しても悔ゆる所なき心境まで達して居ない事を痛切に感ずるのである、ある人は概念を目して、思想の蒼ざめた夢であると咀ふ、また或る人は、概念が無くて何うして思想が表はされやうと云ふ。しかしながら斯ういふ人たちは、どちらも一つの概念に囚はれて居るのでは無からうか、生命表現の根本と手段とを混同して、其處に一つの概念を作り立てゝ居るのでは無からうか。もし概念とか分析とか云ふものが、何處までも動かないものとして解釋しなければならぬものなら、私たちは概念的の言語を

内ヶ崎作三郎著

近代人の信仰

四六判約
五百ページ
定價替壹圓

今や世界の文明國には近代人なる新階級存在す。彼等

はひとしく近代の科學、哲學、文藝の影響の下にあり。彼等

は既に舊信仰を棄てたり。されど無信仰たる能はず。彼等に煩

悶あり、苦痛あり、憧全あり、最後に新しき信仰なき能はず。

著者自分近代人に代りて新信仰を説く。新時代の思

想に注目を怠らざる諸君の一讀を乞ふ。

發所

東京市橋區銀座二丁目

警醒社

振五 替五 東三 京番

た人であるにしても、其の學説は英國には可能であつても、獨逸には不可能であると云ふ具體的の見方から出立して、社會本位論者の説も個人本位論者の説も、其の説なり人なりを生んだ一國の文明と時代の趨勢とを抜きにして考へるかぎり、抽象論理の誤謬に墮したものだ云つて居られるのでは無いか。だから近ごろ世の中で頻りに騒ぎ立てられてゐるノライズムなどの問題の如きも、それが若しノラ其の人を圍繞する空氣より離れた見方の上に成り立つものであるならば、千葉氏それ自身に取つては何等の暗示をも權威をも價しないのである、一片の眞理をも寄與し得ないのである。

斯う云ふ見方からして生まれた思想乃至其の表現が、如何なる點まで眞理であるか。また具體的であり得るかの問題は、私自身に取つてもすてに未知の問題であるし、また茲に筆を取つてゐる目的でも無いから、姑らく差しひかへて居る方が可いと思ふけれども、千葉氏が飽くまで事象の根本に立脚して、たとへ抽象的の觀念でも、それを生命あるものとして見、それを具體化して考へやうとせられる態度は、一種の官僚風に吹きまくられ

て、漸く血と肉と生命とを失はむとしつゝある今日の思想界乃至宗教界に於いては、眞に異色ある人としなければならぬのと同時に、私一個の問題としても、新しき強みを感得たことを氏に向つて謝しなくてはならない。

こゝまで書いて來ると、私の頭には色々な出來事や人々の云はれた事が、繪巻物のやうに展げられてくる。其の中には統一教會對青年會の問題もある、桐花學會とか云ふものの幻影も浮ぶ、加州問題のために苦しんでゐる私どもの同胞や、其の爲めに融合を圖つてゐる義人たちの顔も見える。また一方では、近ごろの若い藝術家たちが、翻譯劇のプロダクトに立ち働いて居る姿も見えれば、自己の眞實なる生活問題の爲めに心を悩まして居る顔も見える。さうして其の中の或るものは、ますます／＼抽象のうら寂しい道に辿り入つて、ますます顔の色の血の氣を失くして行くし、また或るものは、これと云ふ目當も無く眞暗な路は歩いてゐるものゝ、常に新しき生命の刺戟を受け、それに依つて永遠の現在を味はつて居るやうにも思はれる。今日の私に受つては。後者のやうな道を歩

飽くまで咀ふべきものとして排斥したり、氣分の言葉のみが思想表白の手段であると思つたりして、其處にやはり一つの抽象的觀念を築きあげなくてはならないのであらうけれども、さう云ふ風に、思想表白の手段についての争を續けて行くことは、今日の私どもに取つては餘りに枝葉の争ではなからうか、智慧の樹の實を口にした爲めに動もすれば忘れがちな全體の感じを攫むことが、やがて嚴肅なる當面の問題では無からうか。

斯う云ふ心持なり態度なりを捨てる事ができないで、千葉氏の譯書に目を通して見た私は、原著者ソオレイ教授の思想そのものに對してよりも、此の一書の序文に表はされた千葉氏それ自身の思索的態度に對して、思ひがけなく共鳴を感じたことを告白しなければならぬ。

と云ふのは外でも無い。千葉氏は近代思想界の巨人に對する其の懷抱を語るに當つて、今日に於ける多くの宗教家や倫理學者にあらがちな抽象論乃至概括論にも偏せず、外來思想謳歌者の盲目的偏見にも墮せず、飽くまで思想の具體化と云ふ一事を目標として、解釋の筆を進めて居られるから

である。言葉を換へて云へば、それぞれの思想家の生活の内外に動く生命を全體として、鋭い觀察の眼を睜つて居られるからである。今日の習俗に囚はれた道德家宗教家の眼には、かのニイチエの如き思想家は一の畸形兒としてのみ抽象的の影を投ずるであらう、一の否定者破壊者としてのみ概念的の色をうつすであらう。しかしながら千葉氏は、彼の氣力を以て貫かれた個人主義の誤謬と害毒とを認容する傍ら、彼の絶叫の眞實なる點、すなはち「人を厭世的にし、女性的にし、個人の人格を消滅せしめ、以つて山林生活、隱遁生活を欲するやうに助長した」ばかりで無く、「自分の個性を捨て、無差別の慈善とか無意義の博愛とか」に、人を溺れしめた一部の基督教徒に對するニイチエの辯難攻撃を、是なるものとして誠實なるものとして認めて居られるのでは無いか。個人我と社會我とを如何なる一境に於いて融合せしむべきかと云ふことは、少しでも自己に覺めたる者の逢着せずには居られない一つの大きな問題である。然るに千葉氏は、彼のジョン・スチュアート・ミルが、たとひニイチエと同じく個人の自由を唱導し

本願寺改革運動

目下西本願寺には改革運動が起つて大騒ぎをして居る。其真相の委しいとは分らないが、新紙の傳ふる所によると、騒動の原因は云ふ迄もなく、法主の非行にある。當法主が豪奢を極め萬事に放膽豪傑的行動は、遂に五百萬圓の借財となり、昨今其瀾縫策を講じ、或は寺債の發行或は實物の競賣といふことになつた。そこで多年本山の苛斂誅求に甘じて居た末寺信徒等も、遂に默視されなくなつて東西相呼應して此改革運動を始めた。従て此改革運動、の目的とする所は、要するに宗教の紊亂を廓清するといふ政治的のものである。法主と管長を別にせよとか、大谷家の財政と宗務・財政とを區別せよとか、其他叫ばれて居る改革方法は結局皆宗教の刷新といふに過ぎない。併し其中にも法主を處分せよといふ方の聲が最も極端なる改革派を代表してゐる様であるが、是れとても今の法主其者を代へやうとするので、本願寺の血脈相承を否定するものではない。之を局外者から見ると今度の改革騒ぎは、尙甚だ淺薄な不徹底な觀がある。

よしや其極端派の主張を實視し得た所で、將來又同じ事を繰返さねはならない場合が生じはしまいか。假令宗制を改革しても、やがて弛廢すべきものであるまいか。

今度の改革騒ぎで、往年本派本願寺の改革運動を想起せざるを得ない。故清澤滿之を旗頭とした所謂白川黨なるものは、其人物と主張と策戰とに於いて誠に堂々たるものがあつた。あの改革運動も宗政刷新教學振興といふのが目的で、之を達するとは出來た。併し清澤氏は之に満足しないで、所謂精神主義の鼓吹とならざるを得なかつた。思ふに之れ宗教の改革は宗政の革新を以て終るべき事でないことを暗示する者であるのでないか。ロマ法王に反抗したルーテルは、信仰によつて救はるゝといふ元始基督教の福音に歸るとに於いて、眞の改革の根柢を捉み得た、それと同じく眞宗の改革運動も宗祖親鸞の信仰に歸つて、純乎たる日本的佛教の精髓を發揮せんとする自覺に達したならば、之れこそ力強い、又見ごたへのある運動となるであらふ。本願寺が親鸞の墓所として信徒の尊敬の對象となる事は一向差支ないが、單に血統を

いて行くことの方が、自己の爲めにも社會の爲めにも、忠實であると思はれてならないけれども、また翻つて考へると、さういふ風に色々の人々や事件が、いろ／＼な路を進んでゆくのを見て、互にまるで裏腹な行き方をして居るやうに思ふ事が、すでに一つの抽象的概念を醸しつゝあるのでは無からうか。私たちが今日抽象的だと思ひきつて居る事柄に對しても、血を通はせ肉を着せ生命を吹き込むことが、私たち人間としての偽る事のできない第一義の要求では無からうか——私の目下の疑問は此の外に出てない。

しかしながら、私たちは廣い意味で云ふ思想そのものと其の表現とを一つに見ることのできない世間に生きて居るかぎり、何時までも枝葉の争ひを續けねばならなからう、根本に於ては人と人との接觸を思ひ、思想と思想との握手を圖る事も徒勞であらう。そこで私は思ふ、斯う云ふ接觸と握手とを、たゞ生活の表面に於いてのみ、形式に於いてのみ、皮相に於いてのみ行ふ事が、云ふまでも無い誤謬であるならば、福音主義と云ふやうな文字に執着して、一切を律せむとする宗教家たち

の態度も謬りなら、桐花會と云ふやうな少數者の團體を築いて、大日本帝國といふ生きた大きな尊い結合體を擁護しやうとするなども、以つての外に偏見である。神學者が何と云はうと、科學者が何と云はうと、藝術家が何と云はうと、私たちの生活の根柢——宗教信仰の基礎——は、斯かる皮相的形式的の握手乃至争鬭を脱却したところに、据ゑなければならぬのでは無いか、夜となく晝となく鳴り響く生命の奥底に置かれなければならぬのでは無いか。

全體を捉へんとする努力、この努力に伴ふ生活態度の革新、これこそ私たちの眞なる生活の常に新なる節奏でありたい。もし私たち人間の大きな群が、小なる我に囚はれず、社會に囚はれずして、一切を一に歸するに足るだけの態度を眞に定め得たならば、其のときこそ眞に力ある宗教の甦る時であらう、眞に新しき藝術の生まるゝ時であらう、眞に生命ある哲學の築かるゝ時であらう、否、そのときこそ眞に新しき男女の現はるゝ時であらう。(内藤)

加州知事ジョンソン氏を初め、排日案の爲めに辨ずる者は排日案其物は、決して日米條約に違反せずといふ、法律上若くは條文上の解釋をなすを常とす。然れども日米の國交は、果してかゝる儀文的又は形式的のものたるか。元來國際關係の條約文は、實は解釋者の立場乃至精神に依りては、隨分廣義にも、狹義にも解釋せらるゝものなり。かゝる際には、是非双方が該條約締結當時に溯りてこれが精神解釋をなさざるべからざるなり。日米條約の字面的解釋が、如何様なるにもせよ、吾人は締結の當時に於て、我が國は自ら排斥せらるゝをよしとせる、意向を有したりとは、考ふること能はざる也。

究竟は要するに、國民的良心の問題のみ。米國中央政府の好意は如何あるにもせよ、米國一般の輿論が如何あるにもせよ、排日案其の物にして、撤廢せらるゝこともなく、乃至せめては延期せらるゝこともなくして、來る八月廿日より効力を有するに至るべしとせば、吾人は如何にしても、米國及米人を尊敬する能はざるなり。若し夫れル・ズヴェルト氏が、ジョンソン氏に與へて『巴奈馬

運河の工事未だ全く竣成せず、防備工事又缺乏し居る今日、多年苦心慘憺せる大工事として、外國人の破壊に任すが如き機會を與へざるは、加州として賢明なる方法なり。合衆國は暫らく冷靜なる態度を排し、防備完成の時機を待たざる可らず、最後の勝利は合衆國に歸すべきを信ずれども、今日に於て輕舉妄動するが如きとあらば、結局大なる犠牲を拂はざる可らざるに至らん云々」と言へりといふとを以て、事實なりとせば、最早これ言語同斷、沙汰の限のみ。

思ふに米國が、近世資本主義的精神に魅せられたるや久し。是に於てか、正義よりも實利を愛し質を棄てゝ量に就く、然も名を正義人道に藉るを忘れざるなり。建國の精神は今や殆んど見るべからず、これ蓋し米國夫れ自身に於ても、禍害たるを失はず。米國今にして覺るなくんば、吾人は別に根本的解決方法を講ぜざるべからず。(鈴木)

福音主義問題と吾人

青年會同盟と統一教會との間に、懸案となつて居る福音主義問題に對する吾人の意見は、前號に

引いたといふ事のみで信仰上何等の權威なきものに畏服すべし理由は無い。信仰の子は血肉に依て生るゝものに非ずといふ所に來ない中は、何程宗制革新などやつた所が同じである。今の眞宗に、もし此處まで踏込んでやる丈の自覺が生じないならば、同教の我國に於ける將來も亦言ふを俟たないであらふ。

併し此度の改革運動に注意すべきは、各地方の末寺の背後に幾多の信徒の後援が存するところである。法主を盲目的に崇拜して居つた地方の信徒間に、多少でも法主の非行を彈外するものを生じたといふとは、やがて法主の人格といふ問題にまで至る徑路と見てよい。若し今度の改革運動の中心人物となる人に、此點の自覺が明確であり眞宗舊來の形式を打破して、根柢より一新するといふに出でたならば、今度成功せずとも他日の改非の先驅者となるであらふ。然れ共斯る自覺は未だ一般的でない。又親鸞の眞意を解して居ると自稱する若い人々も無いでないが、斯る人達は自分一個の安心問題に立止つて、教會の改革などいふとは全く對岸の火災視して居る。從て斯いふ人々の間

からは熱烈な改革の機運など望まれはしない。そこでやはり清澤流に派内に殘存して居る、極めて少數の自覺者によつて此の根柢からの改革は著手されなければならぬ。外的な宗制などの變更よりも、更に意義ある改革が茲にある。先づ宗祖親鸞の精神に立還て派内の道義的自覺に發展するに努力するならば、此宗派は純日本佛教として尙多くの將來を有するかも知れない。斯る一般の精神的自覺がカレントとなつて漲つて來る時に、始めて法主の自然退却となり、管長と法主の區別も容易に制定されるであらふ。但斯る手遅い手段は急激な改革論者の取り難い所、然らば何れにせよ、我等局外者は少からぬ興味を以て、此改革運動に注目するものである。(菊川)

排日案の通過

加州に於ける排日案は、遂に議會を通過したり。而して幾度か疑懼せられたる知事の調印は、遂に事もなく了し去られたり。是に於て形式上は、全然日本人の權利は排斥し去らるゝこと、なれる也。

を容るべきであると思ふ。併し勿論吾人は、吾人の立場あるを信ずるものなるが故に、別に青年會同盟に對して、情意投合を求めんとするの意ではないのである。(ふみはる)

青年會と統一會とに望む

(この一文は曩きに吾人が主張したる福音主義問題に關して、星島君より寄せられたるもの。編輯の都合上、此の欄に入れることとした。)

私は統一基督教會々員である、そして又青年會々員である。故に全く第三者として、此度の問題を全々客觀の立場より、同盟及教會に望む事は出来ないかも知れぬ。と云つて、全く雙肢に躍つたと云ふわけではなく、希望する處は二途にあらず、統一教會員としては、青年會同盟に望む處あり、青年會員としては、統一教會に望む處があり、共に向ふ處は一點に歸する。若し此立場を許されずば、私を帝大青年會の一員として、此望を聽いて載きたいのである。

私は過ぐる四月青年會大會のあつた折、帝大青年會を代表して、學生會員の聯合運動として、憲法の改正をしたいと畫策したのであつた。準備もなく、計畫もあまりに突然で有つたので、望み通りの結果は得られなかつた。只憲法の運用に關し、同盟の明かなる態度を望むと云ふ、希望的の決議文を得たのみで有つたので、これでは物になるまいと、私達青年會は單獨に、同盟委員長の手許まで、一通の申請書を差出した。

(一) 同盟憲法第二條改正の件
(二) 友會、救世軍、統一教會、其他教會同盟に加入せざる教會の會員をも、正會員と認むるの件

申請は以上の二ヶ條であつた。そして是を説明するに、憲法改正するには、次の總會まで尙三ヶ年の日子を要する。それ迄慣例により、統一教會員を正會員と看做して貰ひたい。慣例とはこれ迄同盟は、教會同盟加入の教會員を、正會員と認めながら、尙其他の教會員も、個人の信仰人格に依りて、正會員と認め居る事を云ふのである。吾々此慣例を是としたもので、此度永井氏の事に就てのみ、突然此慣習法を破られた故、問題を起したのである。

又憲法改正の煩に堪へられずば、福音主義の四文字を、死文字とするか、又自由解釋を許さるゝならば、敢て改正を必要とせないと、申述べたのである。

此申請書が基となつて、同盟では、該々委員會を開かれ、終に統一教會との間に、種々の交渉が有つた事は、相原氏によりて、委しく其顛末を知る事が出來た。私達の此申請に對して、同盟は眞面目なる青年の要求として、種々の勞を取られた事は、尤に感謝せなければならぬ。

併し解決あるが如くにして、未だ全く解決せず、尙多少兩者の間に、意志の疏通を欠いて居るが如きは、遺憾に思ふ處である。吾々は最初の目的を達するまでは、此運動を止むるものにあらず。さりとして一度申請の容れられずとも、直ちに脱會する考はない。脱會しなくても、今岡氏の云はるゝ如く、良心と思想との自由を縛られるとも思はない。元來同盟なるものが、左迄吾々の信仰に、立入る必要がないと思ふからである。其故、たまたに信仰に立入つ

於て、同人筆を揃へて發表したるが故に、別に多くをいふの必要を見ない。之に對しては必ず同盟側の意見の發表あるべく、吾人は『開拓者』の六月號に接せんことを、樂み待つものである。斯くの如き重大なる問題は、是れ決して一時の感情や外交關係を以て解決せらるべきものでない。是非共、窮竟の解決を得んが爲めに、御互に眞面目の態度を取つて、進んで行きたいものだと思ふ。

で、吾人は前號に於て述べたるが如く、青年會同盟をして、保守思想の下に置くことは、甚だ忍びずとする所である。青年會なる者は、青年に對する社會的事業たるべきと共に、同時に又時代思潮の指導者、先驅者たらんことは、吾人の切に期待する所である。諸教會の『同情』を得るに勉むることには、何等の異論がないが、同時に常に諸教會の御機嫌を伺ひ、後塵を拜するが如き態度は（若しあるとすれば）飽くまでも反對せざるを得ないのである。青年會は獨自一個の存在の目的を有し、他の諸教派又は諸教會の、附屬機關ではあるまいと思ふ。

吾人が青年會に對して、常に進取的、積極的態

度を要望するは、則ち此故であつて、石橋を叩いて渡るやうな態度は、穩健とも着實とも、言はるべきであるが、これでは全く老年會となつて仕舞ふであらう。老年會ならば、老人が集つて形作るべし、若き血潮の漲り流るゝ青年に用はないのである。知らず、青年會同盟は、時代の要求に對して、何物を貢獻しつゝありや。

けれども吾人は、青年會同盟其物を以て、直ちに保守主義者の團體、老人の集合と見なすものではない、同盟の役員中には、吾人と全く同一の意見を有せられる人々も、決してないではないのであつて、かゝる人々が、或意味に於ては同盟内に於て異分子視せられつゝも、尙吾人の主張との間に調和の道を發見せんと、努力せられつゝあるに對しては吾人は尊敬と感謝の意とを、表せざるを得ないのである。これは嘗て同盟委員諸氏が、我が教會を訪問せられたる際にも、内ヶ崎牧師よりして、教會員一同を代表して、謝意を述べられたのであるが重ねて茲に聲明して置くのである。吾人は、青年會同盟がよく、頑冥固陋の嘲を免れんとせば、希くは速にかゝる進歩派の人々の、忠言

氣ありて、却つて同盟の價値あるべしと信ずるものである。

以上今岡氏の無用論に對する感想なるが、其他本雜誌五月號に現はれたる時評に就て、勿論青年會の大刺激たるは疑なけれど、内にありて勤め居る人達に對し、少々氣の毒に思つたので、生意氣な言分なれど、何處までも、共に相結むて、進むの態度に出でられん事を希望するのである。

次に統一教會員として、青年會に望みたい事は私の希望の内容は、殆ど本誌五月號の時評によりて盡されて居る。此上は、徒らに時日を遷延せず、待ち遠き三年後の總會を待たずして、同盟委員諸氏の、時勢を見るの英斷により、否、是迄の慣例により、又總會に於て事後承諾の形式を取らるゝにしても、此の際遽かに個人の信仰詮議などする事なく正會員と認めて貰ひたいのである。早稻田青年會の永井氏の如き、是迄正會員と認めながら、所謂福音主義否定の公然信仰の告白ありしの故を以て、役員權を認めずとせば、青年會員中、尙多くの斯くの如き人のあるべきと思ふ。

憲法二條は、表面はさてをき、内實に於て、確かに破れて居るのである。國家の法律にしてさへ、世の進歩を追ふの暇なく、歐米に於て既に自由法説の盛んとなつて居る今日、何ぞさまで固執するの要なき、同盟憲法の遵奉者となりて時勢の進運に逆行するやである。是れ獨り統一教會員としての希望にあらず多數學生信徒の希望と信ずるのである。そして早稻田青年會と、充分の交渉ありて、同會をして是非同盟に復歸加入するの門戸を開かれん事を希望するものである。

以上甚だ先輩じみて、生意氣な言多からんも、此度の問題に、最初よりかゝはりし一人として又兩會に介在するの一員として、

希望をのべた次第である。(星島)

歐米自由基督教徒の活動

(第六回世界大會の豫測)

日本に於ける自由基督教徒は少數黨である。福音主義問題では教會同盟より敬遠せられ、青年會よりは厄介視されてゐる。しかし日本思想界は吾人に深き同情を寄せ、世界の重なる哲學者は吾人の味方である。自由基督教の使命は猶太的基督教徒の間に非ずして、異教徒の間に存する。この點に於て使徒パウロは吾人の先行者である。吾人の開拓すべき領土は實に廣大無邊である。教會同盟や青年會より厄介視せらることは吾人にとりては殆んど無關心のことである。吾人は單に眞理を求む。吾人はその命ずる所に進み、その命ずる所を行ふのみ。さばれ吾人も弱小なる人間である。海外同志の活動を耳にしては間接なる應援軍を見たる感なきをえないのである。

自由にして進歩的な基督教徒と他の自由主義の宗教者の第六回萬國大會は本年七月十六日より二十二日迄バリに開かれんとしてゐる。第五回は

て、詮議立をした此度の問題に反對して居るのである。吾々は寧ろ内にありて、他を刺戟し、共に進む事が、取るべき道と信ずるからである。現に同盟の委員の中にさへ、此方法によりて、全體を導かんと努力されて居らるゝ方もあるのである。其結果福音主義の矛盾と、内ヶ崎氏によりて苦言を呈せられた如く、會としては確かに矛盾が存するのである。此の矛盾を認めて居らるる内部先覺の士には、大に同情を表さなければならぬ。早稻田青年會が、政友俱樂部とすれば、吾等は正に政友會内硬派殘黨である。かゝる立場よりして私は、青年會員として、統一教會に望みたい事は、徒らに外より攻撃的態度に出でられず、數少ない日本の基督教會と、出來得るだけ相提携して、立つて貰ひたいのである。勿論、此度の事は、青年會側より起つた事であれば、刺戟材料となる、少々の議論は、進歩の一階段、寧ろ有益と信ずれど、遂に其根本問題たる、同盟無用論の出づるに至りては、たとへ其れが警告的であるにしても、少しく酷いと思つたので、後輩たるを顧みず、少しく云はんと欲するのである。

今岡氏の無用論は、確かに青年會の半面を穿たれたもので、殊に吾々學生に大に反省の資を與へられた事を、感謝せなければならぬ。併し同盟なるものが、全々社會運動にして、學生其自身、教化指導を企てん爲めとは思はれず、勿論、かゝる事が出來れば、結構と思へど、私達にかゝる意味で、同盟に加つて居ないのである。現實今岡氏の好しとせらるゝ寄宿舎にしても、修養上、經營上、互に相提携せば、多大の利益を有する事で、大學青年會の寄宿舎にしても、常に各高等學校、青年會と聯絡を有せざれば、非常なる不便を來す事に、これ既に同盟の第一歩である。大小種

々の關係上、同じ目的に進む青年會にして、同盟は最も有効なるものと信ずるのである。各種學校個々に存在する青年會を、歎ばれるならば、其等の會の發展修養上、同盟の起るは必然の數にして、獨り青年會のみならず、總ての同種の會は、かくあるべきものと思ふのである。同盟なれば、時々集つて、大會をやる事は、必然である。そして心配せられて居る、學生の本分たる勉學を忘れて、青年會事業に熱中する事は、確かに先輩として、御尤なる御心配と思へど、併しかゝる青年は、學生全體の數より云へば、實に寥々たるものであつて、其人個人としては、或は氣の毒なる者もあるかも知れざれど、學生の風紀の紊れ、宗教的信念の全々缺乏せる中に、少々度外れのかゝる青年出來る事は、寧ろ結構ではあるまいか。私は、寧ろもつと多く有つてほしいと思ふのである。大學生にしても、生中學士の肩書がついてよりも、大學生と云ふ名の下に働く方、大に實効ある事もある。又事實今日の學制の下に、只月給取や、所謂出世を望むで居る學生なれば、點取勉學、學校本位に、若くはなけれど、多少志あるものに取つては、せめてもの慰安であると思ふのである。第二に心配にされた亞米利加式の直譯、資金供給の事に就ては、勿論同感の至りなれど、是を以て、直ちに同盟を破り、世界の人と手を離すまでの事はなと思ふ。吾々は將來是非獨立すべきである。此點は統一教會にしても、又總ての他の多くの教會も、皆同じ立場にあるもので、同盟とは別問題にしたいと思ふのである。又第三の保守的に壓迫され云々とありしも、吾等は同盟は左迄力強く權力を有するものにあらざ、多種多様の會の同盟なれば、進歩的なるあり、保守的なるあり、互に相切磋、否吾々先驅者として、同盟を導く程の元

イツ教授等にて研究せらる。

「道德の眞正結局の根底如何」はバリのエールハルド教授、エナのワイチル教授、ロンドン道德教育同盟幹事ジョンソン氏、ロンドンのトユダー・ジョンズ牧師等によりて研究せらる。

「宗教的自由の組織と防禦」は第一、「宗教的自由と基督教國の信條」第二「宗教的自由と教會」、第三「宗教的自由と國家」第四「宗教的自由と學校」と區分して各専門家によりて論究せらる。

「自由基督教徒と宗教的自由主義者の關係と義務」は第一、「同志の間」、第二、「正統派信者に對して」、第三、「無宗教者に對して」、第四「非基督教的宗教に對して」と區分してロンダ・ウイリアムス氏（ブライトン）、モノド牧師（バリ）、パウル、ヒアシンス、ロアソン（バリ）、カーペンター博士（オックスフォード）等によりて論究せらる。

第五日は日曜日にしてオラトアール・ドユールに於て禮拜説教を催さるべく、バリのアンドレ・ペルトランド牧師（佛語）、獨逸ドルトムンドのゴットフリード・トラウプ牧師（獨語）ポストンのピスビー牧師（英語）の説教がある。

この日午後來會代表者中のユーゲノー教徒の子孫及コリンニー提督の紀念碑に花環を捧げて敬意を表する豫定である。

同夜は大集會を開き、「國交と世界の平和」の題の下にポストンのメード氏夫妻、スタンフオード大學總長ジョーランド博士、マーブルグのシュツキング教授、ゼチヴァのモンテツト教授、英國下院議員ラムゼー・マグドナルド前ロンドン市長ストロング氏、國際仲裁裁判同盟幹事マッデソン氏等の演説がある。

何等豊富なる執行順序ではないが。吾人は第五回の折のごとく自ら出席する能はざるを憾む。さもありあばあれ、海外の吾人の同志の活動は斯のごとし。吾人また自重しなければならぬ。天下同信の諸士、誤解と迫害も吾人にありて何かあらん。慥かに吾人は世界進歩の大潮流の中にあり。吾人は眞理の帆をあげ、天佑の順風に乗じて永遠の航路を進みつゝあるのである。吾人はたゞ信じて前進すべきのみ。自由基督教にとりて日本は好個理想の土壤である。野は色づいて刈手少なし。吾人何ぞ勵精せずして可ならんや。（内ヶ崎）

千九百十年獨逸のベルリンに開かれ、三並教授と余は日本の代表者として參列したことであつた。

僕は今猶當時の光景をあり／＼と腦裡に浮ぶるのである。ハルナツクの雄辯トロエツ、ブツセー、トラウプ、ワイテル、ローツキ等の獨逸思想界宗教界代表者の博學宏辭は僕にとりて大なる刺戟と光明であつた。本年は佛蘭西の學者を中心としての會合にて特殊の面目を發揮することゝ豫期せられるのである。

第六回會議の議長は佛蘭西學士會院の一員にして巴里大學教授として令名あるエシール、ブートル博士にして三人の副議長中には簡易生活にて名高きシヤール、ワグナー牧師の名も見ゆ。

第一日には「宗教的進歩の最近の徴候」の題の下に新教、舊教、希臘教會、アルメニア教會、猶太教、その他非基督教的宗教の近況が論評せられる。

第二日には「宗教的自由と進歩に對する佛蘭西の貢獻」と題して二十分論文の朗讀がある。

アルビゲンセス、カターリ、ヴォードア教徒の先驅者や、カルヴァン、セバステアン、カステリオ、砂漠の説教者ジューリユー、パスカル、ヴォ

ールテア、ルツソー、エドガール、クイチ、ルヌーヴィエー、ラムチー、モンタルンベル、ペール、ヒアシンサ、ロアソン等の評論が知名の學者によりて試みられる筈である。「十九世紀の佛文字に於ける宗教思想」といふ論文も讀まるゝであらう。

第三日にはブートル教授の議長講演があつて續いて最も興味ある論文が朗讀せらる。題は「宗教と近代哲學」であつてエナのオイケン教授、ソルボ、ルンのベルクソン教授とグラスゴウ大學のヘンリー・ジョンズ教授とが代表者である。當代の智識と思索とを斯る三學者に求め得るもの自由基督教徒を措いて他にはないのである。

「普遍的宗教は望ましく且つ可能なりや」なる題はゲツチンゲン大學のオットー教授やブラツセルス大學のダルヴィエラ伯、バリのライナハ教授、ロンドンのウォルシュ牧師印度カルカッタのタゴレ氏、ペルシヤのアブダル、バハ師等によりて研究せらる。

「自由基督教徒の社會的理想は何ぞや」は和蘭のバツカー牧師、獨乙のナウマン教授、瑞西のラガ

その他各教會に屬する諸兄、八高の小松原、石倉、芝田、大賀諸教授も來會せられる。林歌子女史も會せらる。廣からぬ青年會の日本座敷は客と皿との混雜で、中々の騒動であつた。僕は由來名古屋と縁故少なく、來會者二十氏のの中數氏を除いては初對面の人々である。諸氏が多忙なる時を割いて、僕のごとき青書生を迎へられたる好意深く謝せざるをえないのである。恐くは本誌を通じて精神的友情を温めたる諸氏も少からざるべきことと思ふ。午後八時メソヂスト中央教會にて菊地知學氏司會の下に一席の講演を試みた。僕の如き異端者がメソヂスト教會の教壇に立つを許されたのは教會當局の雅量に感謝する所。聴衆は百六七十名に過ぎなかつたが、不斷教會に出席しない人々も多く見えたるよし、これ僕の私に満足とする所である。會場にて本誌のために毎號歌を寄せらるゝ伊藤蓼々氏と面晤したのはこの旅行中の喜で一つである。九時半講演を終り一先づ旅館に歸る。批評家が多いので東北辯やら思想やら散々に油を絞られた。午後十一時十七分金子君に送られて名古屋を立つ、林女史も同車して大阪に向はる。八高辯論部委員も懇々見送らる。あゝ諸兄の好意何を以て謝せん。

十八日朝四時汽車は京都七條停車場につく。未明の頃なので附近の一旅館に入つて床にもぐり込んだが隣室の人々の出立騒ぎに睡眠をなすことも出来ぬ。二夜續けて汽車中に睡つたため、風氣のため稍々咽喉を害したやうだ。午前九時原田同志社長を訪問し、暫く書齋に於て休憩す。午前十時禮拜堂に至る。男女學生來會するもの數百名。僕は不思議なる緣故にて同志社出身の先輩の感化を受けたことを知る。今や自ら招かれて彼等が嘗て心靈の道場たりし所に立つを許さる、大なる光榮である。不幸にして發聲

は頗る困難を覺えた。たゞ學生諸君の熱心に傾聴せられしは僕の却りて感謝する所である。午食は女學校のミスデントンに招がる。午後二時三條通の青年會館に行けば加藤直士君先着してあり原田博士の司會にて加藤君先づ平和主義の立場より排日問題を評論せらる。僕は近世の文明史論と題して加州問題に觸れた。三百有餘の聴衆は終まで極めて靜肅に傾聴された。京大、三高、佛教學校の學生及び女學生も相應に見えた様である。四時五分講演を終り直ちに人力車を煩はして二人して七條停車場にかけつく。加藤君大阪にて降車する迄相談す。同君曰く飛行家武石浩波氏の非命の最後は甚深なる印象を京阪人士に與へたと。彼は飛行界の一犠牲者たるのみならず無言の教訓を垂れたのである。午後六時四十八分三の宮驛に着すれば村松吉太郎君宮田青年會主事數名の青年諸氏と共にブラットフォームに待ち受けらる。神戸の空氣は何時も新鮮にして氣持ちよし。教友また多くして此地に來る亦た家郷に入る思ひす。昨年夏僕の此地に來つた時は青年會館は工事中であつた。今や巍然たる雄姿神戸市の一美觀である。わが村松君は好個の會長である。同君の天才的經綸を實用するに最もふさはしき機關である。島地雷夢君その他舊知の諸君來館せらる。午後八時村松君の司會にて初む。神戸教會特にこの夕の集會を休まれたりとは好意感銘せざるをえない。前日來の暖聲は極度に達し且つこの日は三度目の講演あれば稍々疲勞を感じようしても思ふ様にはしやべれず。大に閉口す。たゞ二百五十名の聴衆の忍耐を讃賞せねばなるまい。十時諏訪山の村松宅君にゆく、原田(確)島地二君來會せらる。夜氣冷味氣持よし。村松夫人御手製のおすしを食しつゝ十一時過ぎまで快談す月うらはしく一灣銀色を湛ゆ。



初夏關西行の記

内ヶ崎作三郎

五月十七日午後九時新橋發の汽車に投じて關西に向ふ。名古屋京都、神戸に於ける講演會に臨まんがためである。この日は早稻田にて一週受持の約三分の一即ち七時間も教壇に立ちしなれば鼻も聲も共に疲勞を感じた。奮發して二等の寢臺車を求む。日本の寢臺車旅行は生れて初めての事件である。僕の下の寢臺を求められたるは理學博士巨智部忠承氏である。戊辰追懷談やラデウムに關する興味盡きざる學説を傾聽した。十一時各床に入つた。翌朝五時半眼覺むれば汽車は正に尾州の平原を走る。東方低岡の上に朝日盆大に浮ぶを見る。六時過ぎ名古屋驛に降車し、青年會幹事菊地知郎氏に迎えられて住吉町の一族館に導かる。前夜廓清會の講演會がありし由にて、大阪の林歌子氏猶滞在せられたるに會す。關西基督教婦人界の代表者は何時何處に御面會しても元氣よく愉快氣に奔走せらる。多謝々々。食後同氏より前夜の盛會を傳聞す東海絃歌の地に於て、しかも商業會議所樓上に於て廓清會の開會あり六百の聴衆靜肅に謹聽したりとは時勢の進歩大に祝すべきことである。午前十時頃金子白夢君美善教會の水野牧師と共に來訪せらる。金子君とは實に七八年振の邂逅である。六合雜誌が屢々

同君の述作を公にするをえたるは常に同人の感謝する所にして、吾人は常に同君のために紙面を割愛するを喜ぶものである。同君は本誌同人の閱歷を聞いて少からず興味を覺えられた。正午、中食後菊地水野金子三君に伴はれて第八高等學校に行く。遠く市塵を離れたる田園の中、新築の校舍巍然として立つ。ボールの音ラツケットの響は僕をして二十年前初めて二高學生たりし當時を追懷せしめた。辨論部長芝田文學士の紹介にて講堂にて約四百の學生諸君に演説した。八高は從來宗教家を講堂に招かざりしが、此度時々佛耶兩教の先覺の教を聞くこととなり、僕まづ基督教側の一人としてこの度の招聘に接したのである。同時に佛教側の村上專精師にも近日來演せらるるとの事である。僕の責任は中々重大なるものである。僕は加州問題を文治史研究者の立場より論じた。三時講演を終り清楚なる圖書館内の一室にて同校教授諸君と快談す。三君と共に麥隴水田の間を縫うて市に歸り、武平町基督教青年會に至る同地教役者諸兄の間に組織せられたる同志會を中心として有志諸君との晚餐會が催された。前記諸君の外、同胞教會の手塚氏同仁教會の長野氏メソヂスト教會の關澤氏、日基の吉川氏

惟一館記事

●●●●●
【ビーボデー博士の説教】

ビーボデー博士は彼方此方で立派な講演を試みられ、非常な感動をわが日本の思想界に與へられました、特にその溫乎たる容貌のうちに湛えたる純潔な人格が識らず知らずの間に人の靈魂を潔めました。その博士の説教が去る四月廿七日の午前十時から、統一教會の禮拜堂で、内ヶ崎牧師の通譯のもとに行はれました。博士は『宗教の擴張』と題しまして、從來の空想的、未來的、出世間的の宗教を非難せられ、人生の百般のことが宗教でなければならぬ、救はこの波風あらき現實の世界からスクヒ出すのではなくて、その中に在りて、そこに新生命を建設することだと云ふことを説かれました。吾々は實にこの老博士の聲援を心から感謝して居ます。博士の説教が當日來會した三四百の聴衆に多大の感動と印象とを與へたことを確く信ずるものがあります。

●●●●●
【第二回婦人講演會】

同じ日の午後一時半から第二回婦人講演會を催しました。當日は神田で新眞婦人會の大々的演説會がありましたのにも拘らず、この邊鄙な其の方へも七八十の婦人聴衆が見えました。戸板せき子女史の司會のもとに内藤濯氏の『言葉と云ふもの』と云ふ講演があつた後、矢野房代姉のオルガン獨奏があり、それから宮川すみ子女史の『私共の日々心がくべきこと』と云ふ通俗的な、有益なお話があり、最後に内ヶ崎牧師の『英國婦人の參政運動』と云ふ講演がありました。何れも皆、趣味と刺戟に充ちたお話しであつたので、集つた婦人達は希望の眼を輝かし

ながら散會致しました。

●●●●●
【六合雜誌講演會】

同じ日の夜は六合雜誌同人の講演會がありました。吉田源二郎氏は『鴨を見て』と題して、有樂座で行はれたイブセンの鴨を見た印象を語られ、内藤濯氏は『新物質主義』と題して、思想界に於ける器械論的な見解を批難せられ、三並良氏は『平和論』と題して日米問題を論じられた、小山東助氏は『全人の宗教と意志の宗教』と題してオイツケン哲學の紹介を試みられ、内ヶ崎作三郎氏は『六合雜誌の使命』と云ふ意味で少くとも天下に率先して、新思想の開拓者であり、精神界の權威ある指導者たらんことを努めてゐると論じられました。この講演會は、最初、同人が皆でやることにして居ましたので、小山氏を除くの外は、皆十五分か廿分間位の感想でありましたが、吾々には却つてその方が面白くされました。各々その獨特の個性を發揮して中々愉快でありました。

●●●●●
【マツコレー氏古稀の祝ひ】

が五月八日、芝三條亭で行はれました。統一教會々員の有志を初め、マツコレー氏と關係のある學者宗教家宣教師等七十余名も集りまして、晚餐を共にした後、マツコレー氏へ教會から記念品を贈り、宮眞を撮り、それから諸名士の卓上演説がありました。ビーボデー博士はこの祝會の爲めに特に京都行きの日延をせられ、この夜出席せられまして、マツコレー氏に就て語られました。それから井上、姉崎、浮田の諸博士、島田、福澤、向の諸氏、シュレーデル、グリーン、ケールン等の諸宣教師等もマツコレー氏の爲めに一場の祝辭を述べられました。三條亭の質素にしつらはれた大廣間で十時頃まで、多年我國の爲めに、またわが教會の爲め、自由なる新思想と新宗

十九日村松君が雨戸を押す音に目醒む。睡眠十分ならざる二夜の後とて前晩は近頃になく熟睡することゝえた。庭には薔薇の匂ひが高い。朝食後神戸教會の米澤牧師の來訪に接す。午前八時村松君と市内電車線の一停留場前にて別れ僕一人關西學院に向ふ。ベーツ君、佐藤清、木村頑橋諸氏に久闊を叙せんがためである。同院はカナダメソヂスト派と南メソヂストの聯合事業とあらんより一段の進境をみる。山に據り海に面す森繁りて地廣し。まことに理想的教育の地である。高等學部の二階の一室にベーツ君は正に授業の最中であつた。僕を認めて手を舉げて會釋せらる。同君やがて階下に来り僕が名古屋にて出したる端書を今しがた受取つたのみであると斷はられ、九時より禮拜堂にて高等部の朝拜あれば何か一言せよと依頼せらる。同君は直ちに教室に歸り、僕にアームストロング木村二君に尋かれて神學部及び普通部を觀る。建築清楚かゝる校舍に學ぶ青年の幸福を思つた。九時禮拜堂に至れば殆んど百名計りの學生諸君あり、一席の講話を試む。終りてベーツ君の家にゆき思想上のことについて打ちあけ話をした。同君夫婦が十數年前東京に到着したる時、僕ははじめて知己となりし日本青年の一人である。嘗て同君がオックスフォードに僕を訪ねられた時は僕バスローの夏期學校に赴いて留守をした。今日此處に談ずるは誠にもの珍しいことである。ベーツ君の進境刮目すべきものがある。これ實に關西學院のために祝すべきことである。そのうちにベーツ夫人も出てられ茶を飲みつゝ快談す。午後同志社の講演あれば別れを惜しみつゝ校庭を辭し、ベーツ君に導かれて阪神電車の停車場に赴く。アームストロング氏は東洋の宗教と哲學との熱心なる學者で、在留宣教師中最も研鑽を積める人である。

既に二宮尊徳傳を著はし、將に日本儒者史を公にせんとしてゐる斯る好學の士はいづれの學範に於ても一種の誇りである。大阪までは電車梅田にて辛うじて東上の汽車に投じ、午後二時七條停車場に着し、直ちに同志社神學部に至る。原田社長の司會にてオックスフォードの學生々活及び神學教育に就いて談ず。ギョーリック、和田、芹田、等の諸教授新歸朝の鹿子木君等も來られたが、杜撰粗雑の講演諸君の耳を穢したるを耻づ。集るもの男女學生約百餘名。四時半講演を終れば神學部學生諸君僕を寄宿舎の一室に拉して包圍攻撃す。第一問曰く貴下の健康の秘訣如何と。僕答へて曰く僅かに兩夜の汽車旅行にて聲を哽すもの、何れの點に於て健康を誇ることえんをやと。この他色々質問を連發せられたが、五時半になりたれば漸く包圍を脱した。僅かに一時間の親睦會であつたが興味盡きざるものがあつた。厚く神學部諸兄の好意を謝す。栗原基君の留守宅を訪ねて奥さんと久し振りの御話をして又ミズデントンの夕食に赴く。原田社長鹿子木氏に二人の英國婦人と一人の米國婦人あり、女主人と共にカリフォルニア生れである。今や善良なる加州人は悉く日本の客となるなどゝ卓上大に賑ふ。時半辭し八時二十分七條停車場を發して東歸す。永井知二君見送らる。東上の夜行汽車は非常の混雜にて殆んど一睡もなりがたし。廿日朝箱根を越ゆる時八十歳位の老婦人突然氣絶して大騒ぎであつた。一外國婦人小瓶の藥を携え來りて或は之を嗅がしめ、或は之を面上に塗りにて老婦人漸く正氣に復し、付添ひの令息らしき初老の紳士もやつと安心された。この外國婦人はどうも宣教師らしかつた。それで旅には應急藥品は携帯すべきものと悟つた。九時新橋に着し、十時集鳴の宅に歸る。

新刊批評

■七死刑囚物語

相馬御風譯
海外文藝社發行

相馬御風氏は露西亞の近代文學に對して、強い生活味を感じつゝある人であるが、こゝに海外文藝叢書の第一篇として、アンドレーエフの名作たる「七死刑囚物語」を譯出した。氏の譯筆は益々洗煉されて、この一卷を読む人は鐵窓の下に繋がれた人々の暗い心の奥底から、動亂した生命の吐息を聴き取らうとでもするやうな痛切なる努力の跡を明らかに認めるであらう。細評は禁讀の後に讓るが、吾々は此の譯者が自己の生活に對する自覺を強くせむが爲め、言葉を換へて云へば、自己の第一義要求に基いて譯筆を進められた態度を先づ賢なりとせねばならない。如何に多くの海外文學が翻譯されても、かゝる眞摯なる態度を外にしたならばそれは只技巧のみの勞作となり了るであらう。此の譯書は此の意味に於いて多くの意義を有するものである。(定價四十五錢)

■蘇生の日 ヘダ・ガブラ

千葉掬香譯
警醒社發行

いづれも數年前にひとたび公にされて好評を贏ち得たものであるが、このたび裝釘を改めて其の再版が市にいでた。蘇譯劇珠にイブセンの劇曲が相次で舞臺に上されつゝある今日、蓋し其の當を得た企であらう。臺詞の運び方や呼吸に於いて多少物足りなく思はるゝ點が無いでもないが、吾々は千葉氏の多方面なる才能を羨ましく思ふのと同時に、「建築師」もしくは「蘇生の日」が、新興の劇團に依つて演技に附せらるゝ日の近からむことを祈るものである。(定價各四十錢)

■經濟財政縱橫議

堀江歸一著
實業之日本社發行

本書は堀江法學博士が、數年來、東京日々新聞、新日本、地球、慶應義塾學報等に寄せたる數十篇の論文を、(一)財政、物價、金融問題、(二)社會政策、勞働問題、(三)國際經濟の三種に分ちて、彙集分類し、兼て之を世に問へるものなり。博士が財政經濟上の造詣は、今之を説くを須ひず。而して其時事問題を論ずるに當りて、所論の肯綮を穿てる、尋常讀書人を以て目すべからざるものあり。然も博士の多方面なる、社會問題、勞働問題に對して、甚深の興味と該博の智識とを有せられ、特に其時勢に通じ、實情に徹せるは、眞に當代得難きの學者なりといふべしと信ず。予輩は嘗て「地球」誌上に於て、博士が治安警察法廢止論を讀みて、案を打つて同感禁ぜざりしことあり。獨り本篇に限らずして、社會政策に關する意見に至りては、吾人と所見を同じうするもの、決して尠からず。吾人は國家の爲めに、切に博士の自愛加餐を切望せざる能はざるなり。(定價壹圓貳拾錢)

■新らしき女の行くべき道

西川文子
木村駒子合著
宮崎光子

所謂新眞婦人會の幹部連の合著であるといふので、敬意を以て讀んだ。第一篇は西川文子の筆、新眞婦人會の目的から、良妻賢母論、結婚論、新しいとは雖も、頗る穩健な思想で、吾人が平素の主張と別に變る所がない。殊に現代女子教育家の矛盾を指摘して、其良妻賢母主義を嘲笑し、「舊思想に囚はれたる父兄の御機嫌を伺ふ小學校繁昌策」と道破せる當り、甚だ痛快である。第二篇は木村駒子の著、文章は華やかで且つキビしく運ばれてあるが、憾むらくは叙述主觀客觀ゴチャ交ぜで、主張甚だ不鮮明なるを免れぬ。第三篇は宮崎光子の筆、流石豫言者の妻丈けあつて、劈頭の書き下しよりして、豫言者の、哲學者的、レーソーや、ミルや、ベエベルや、凡て小供扱ひにされて居る。信儒な文章で、難澁な思想で、肩の凝ること夥しい。要するに讀過の後の直感には、「新しき女の行くべき道」と雖も、まだ未熟生硬である、年齒の行かぬ僕等の妹などは、うつかり一人手放しには出来ぬといふ

教の鼓吹に努められたる同氏の功績や逸話などか、後へ後へと話し出されました。同氏も吾々も云ひ知れぬ一種の感情をもて充されるのを覚えました。吾々は茲に博士の健康を祝し、尙、大に思想界の爲めに盡力せられんことを希望するのであります。

序でに當日出席せられたる方々(イロハ順)は板倉定四郎、岩原偉伊佐雄、伊藤熊吉、伊藤はる子、伊藤しげ、治部茂、ボーイントン、ペンリントン、全夫人、戸板せき子、チャンドラー、岡田哲藏、大澤寅藏、岡村寅次郎、加藤一夫、吉田源次郎、高木壬太郎、武田英一、武田きん子、高折啓治、武田芳三郎、武田ひさ子、武田あさ子、高橋秀雄、中村録太郎、成瀬仁藏、内藤濯、向軍治村田勤、村上嚴、浮田和民、内ヶ崎作三郎、岡井福太、海上輝男、井上哲次郎、野村善兵衛、野田ちよ子、クリーン、工藤直太郎、山野邊義勇、矢野ふさ子、山本與一郎、松尾清次郎、ケールン、福澤一太郎、フライシャー、ブラッドストリート、小山東助、近藤磐雄、小山昇、エマーソン、姉崎正治、安部磯雄、相原一郎介、齋藤壺太郎、佐々木辰雄、岸本能武太、全夫人、全令息、三並良、令夫人、シュレーダー、島田三郎、ビーボーディー、全夫人、白比野幸一、本永實一、森田駿、森みち子、杉村廣太郎、杉山重義、鈴木文治、鈴木萬吉の諸氏であつた。

■入會式の規定 今回統一教會役員會で入會式の規定をつくりました。

入會式は年六回とし、二、四、六、八、十、十二の第二日曜日に施行すること、及び、入會式は申込み後三ヶ月教會に入出したるものでなければならぬこと、等であります。

■慶吊基金の設立 今一つ決議しましたことは、教會員相互の變

事、吊事を、相分たんが爲めに慶吊基金と云ふのを設けたことであります。慶事のお祝ひや、病氣見舞や、貧者の救助や、死亡者への香奠等の爲めに備へるものでありまして、第一日曜の献金をこの基金の爲めに用ひることにしました。そしてまた會員諸君の誕生日や結婚等の記念献金を乞うてその基金のうちへ入れることにしましたから、會員諸君にして御賛成の方は、會計大澤虎造君までその旨を申込んで頂きたいと思ひます。

■芝組會 五月十三日午後七時から、武田さんのところで芝の組會が開かれました、雨がふつて厭な天氣でしたけれども二十名ばかりも集つて参りました。そして武田さんの感話を承つた後、各自に聖書の輪讀をやつたり、讚美歌を歌つたり、自由な雜談をして、愉快に一夜を過しました。

編輯室より

次號は夏季號として、本月の二十日ごろに出す豫定である。七月號がそれになるのだから、讀者諸君はさうお含み置きを願ひたい。この號から中味も形も一層フレッジユなものにする。少しくその内容を洩らせば、論文には内藤の「新生活の第一歩」内ヶ崎の「人生の律動」三並の「トラップ論」小山の「全的生活論」があり、翻譯と創作には絃二郎の「あらしひ」一夫の「和歌の浦」濯の「反抗」があり、その他鈴木木村の「要吉の死」相原の「僧院生活の倂」などがある。それから諸同人は勿論、野口楠子氏、伊藤蓼々氏等の歌、昇曙夢氏の「バリモントの詩と生活」島村抱月氏の清談なども載せて頂けるだらうと思つてゐる。

近世學藝叢書

文學博士 波多野精一 共譯 (新刊)



●新装式の製本
●優雅なる装祿

●定價 金貳圓貳拾錢
●製硯 金拾貳圓貳拾錢

本書は現代第一流の思想家オイケン氏が、自己の世界觀を、最も根本的、最も全汎的に宣明したる名著なり。新理想主義哲學の源泉に、所謂精神生活の、永久なる生命を湛さんとする人、必らずや讀まざる可らず。譯文精確にして平明原著の意を傳へて遺憾なし。

請ふ愛讀

を給へ。

本書内
容の鱗片

「現代に於て、吾々の生活の意義及び行為の目的は何ぞや」との疑問に達する人には、澎湃たる時代の思潮と共に、澎湃的運動の浪き流も亦、吾等云はせぬ、燃つた答を與へ、人間は全然自然に依歸する。自然の優越なる力は外部から人間を壓迫するのみならず、内部から其の自由を削ぐ、そして自然と幸福とに達する唯一の道を明かに示してゐる。然るに、精神的世界を建設しようとして、たからして、そのことで進歩に陥つたのである。かゝる意見を時代と共に確立し、吾々の思惟と行為とを支配するに役つて終へ、吾々の生活を妨げた。吾々の主たる任務である。今や最も古き眞理及び現代の主たる任務を待たせる時代の轉回期は來ると共に根本的變革を待たねばならぬ。昔々も、若くは、自然と接觸する爲に無盡の孤島を渡さねば、自然と接觸する爲に無盡の孤島を渡さねばならぬ。



!!

本書の根本的著作

。六四一三二 東京 窪口啓振。
。五三三一 花 瀧 話 電。
東京傳大 市馬二 區本二 區本二 區本二
大馬二 區本二 區本二 區本二

近刊 第二編 チーニ 研究 和辻哲郎 著

のであつた。(定價金五拾錢、洛陽堂發行)

■輓近倫理思潮の傾向

千葉鏡藏譯
警醒社發行

此の書は英國劍橋大學教授ソレイ氏の著リセント、テンデン
シス、イン、エシックスを邦語に譯述したものである。この譯書
の初版は昨年の春公にされて、あまねく思想界の注目を促したの
であるが、このたび初版に於ける多少の缺陷を正して再び梓に上
された。譯者がイブセンの「建築師」や「蘇生の日」などの脚本を譯
出して、文藝界に貢獻した所の多い人であるだけに、この種の譯
書の新レコードを創めたとも思はれるほど、飽くまで明快な而かも
趣味豊かな筆致を以つて終始せられて居る事が何より快い。殊
に巻頭にある四十余頁の序文は、近代思想の趨向に對する譯者の
高い見識を示したもので、吾々は千葉氏が何處までも抽象的觀念
の鐵鎖を破らむとする熱烈なる努力に對して心より同感を表する
のと同時に、常に靈的生命の高調に腐心しながらも、知らず識ら
ず新しき物的態度を醸成しつゝある人々に向つて、是非この序文
の一讀を要求しなければならぬ。(定價六十錢)

■女學生

柴田柴庵譯
警醒社發行

文學評論社の叢書第一卷として著はされたもので、柴田柴庵氏
は先づこゝにストリンドベルヒの一小説を譯出した。忠實に原文
の意を傳へてある傍、できるだけストリンドベルヒ一流の胸を刺
すやうな強い情調を寫さむとした努力が十分に窺はれる。他人の
翻譯文のあらさがしに心を腐らして、自ら翻譯の苦い經驗を嘗め
やうとしない人が世の中にあるならば、さういふ人たちは柴田氏
の此の眞面目な努力に對しても、雖然その非を覺るべしである。

(價二十錢)

■小説あかつき

黒瀬二水著
興樂房發行

一青年畫工の數奇な運命を經として、これに種々な周圍の事件
を絡ませた長篇の小説である。讀んで行くうちに著者の宗教觀乃

至教會觀が窺はれぬでも無いが、それは寧ろアクセツサリイのも
のとなつてゐて、遺憾ながら多くの感銘を與へない。しかし筆の
運び方には癖が少なく、作者の將來の多望なるを思はしめる。
附録の脚本「毒藥」はなほ未成品である、作者はなほ一層舞臺上の
エフエクトに注意を拂ふべきであらう。(價九十錢)

■國家と宗教

小崎弘道著
警醒社發行

國家と宗教の關係を歴史と歐米の現狀に徴し我國の宗教政策を
論じ基督教が大正の日本に對して有する使命を高調して居る。史
實及び現代の政府關係については二三の誤謬もあるが、我國の基
基督教の地位を大觀し得るには差支ない。附録として神佛基三教の
現況及び皇室に關する著者の説教がある。(定價八拾錢)

寄贈雜誌

心理研究。聖孟。帝國文學。新公論。車前草。東亞の光。奇蹟。
ザムボア。世界の日本。世界ホーム。宗教の日本。青嶺。新日
本。新小説。新佛教。東洋哲學。禪宗。宗教世界。禪。經世雜
誌。新人。正教時報。開拓者。基督教世界。護教。基督教週報。
早稻田講演。白樺。時事評論。實業の世界。道の友。丁酉倫理。
神學の研究。哲學雜誌。六條學報。佛教史學。和融誌。國民時
報の獨立評論。現代の洋畫。とりて。フェザン。人生と表現。
新眞婦人。The Pacific Unitarian. Unity. The Christian
Register. The Outlook. Current Opinion.

世界之日本

號月六

價定

每月一日一回發行
 一ヶ年分 金拾錢 郵税一錢
 半ヶ年分 金六拾錢 郵税不要
 一ヶ年分 金一圓廿錢 郵税不要

▲尾崎行雄先與ふ……(社説)

▲純正貴族主義と徹底平民主義
本誌記者坂本正雄

▲代序 理想的人物
本誌記者田中雪次

▲山本と山田文相
文學士三宅雪嶺

▲日米開戰論……
法學博士戸水寛人

▲現内閣論……
伯爵大木遠吉

▲其息の根を止めよ……
伯爵大隈重信

▲縱論横議……
鐵山迂人

立憲青年黨幹事長 橋本徹馬
 世界之日本社長

政界横斷論

▲婦女子も亦人なり……
長崎安部磯雄

▲新しき女に就て……
古き女

▲青鞨社と新眞婦人會……
文學博士三宅雪嶺

▲女性と政治……
宮崎光子

▲新しき女に與ふ……
長橋大河

▲萬事唯夢の如し……
伯爵板垣退助

▲イブセン論……
本誌記者長橋大河

▲世界の大勢……
本誌記者

▲日向夫人訪問記……
西

▲紫式部・清少納言……
蓬萊學人

▲武藏野の砲車……

横暴な會社工場征伐

(各紡績會社の慘狀) (社説)

▼夏期講習會講演

○期日、七月十一日ヨリ(二週間)十七日マデ

○會場、小石川上富坂三九 獨逸學院内

○會費、金五拾錢也 一日分金拾錢也

申込所

芝區三田四國町二ノ六、統一基督教會

- ◎宗教思想の變遷……………三 並 良
- ◎耶穌の教へたる基督教……………杉 浦 貞二 郎
- ◎ラシーヌの宗教劇……………内 藤 龍 郎
- ◎サヴォナローラとダ、ヴィンチ……………松 本 趙 郎
- ◎馬太傳の耶穌基督觀……………三 井 芳 太 郎
- ◎天啓と第六感……………寺 島 精 一
- ◎ワグネル……………大 塚 尚
- ◎現今の獨逸教育……………原 口 竹二 郎
- ◎ゼームス、マーティノーの生涯と事業……………内 ヶ 崎 作三 郎
- ◎神の國と精神生活……………小 山 東 助
- ◎宗教の意義……………柏 原 一 郎
- ◎オイクエンの基督教に對する態度……………額 賀 鹿 之 助
- ◎宗教に觸れたるショウの劇……………岡 田 哲 藏
- ◎基督教の變遷的要素永存的要素と思想の變化と承存……………富 永 德 磨

五人畫會

- 一、五人畫は左記フエウザン會員の作畫を會員にお分けする畫會です
岸田劉生。木村莊八。齋藤與里。川上涼花。真田久吉。
- 一、お分けする作畫は六號人體畫布(曲尺一・二五×一・〇五)額縁付き
て、會員は五十名を限りませす
- 一、月々一圓宛十二ヶ月拂込む方を畫會の會員とします。作畫はお申
込順に、五人畫の中、誰かのを一枚御送りします、もつとも、お送
りするのは、此秋第三回展覽會を開催して後の作畫をです。若し五
人の中特に誰のをとお望みになる方は、十二圓一時にお拂ひ込み下
されば、直ぐ畫をお送りします。
- 一、入會申込期限は七月末日迄、事務は雜誌フエウザン發行所
牛込區水道町五十三番地。(振替東京四三七二)

日本洋畫協會内五人畫會事務所

- 一、お申込は最初の一月分會費一圓を添へ、右宛にして下さいその以
後は、日々會費を集めに上ります。然し、お申込みの節、誰の畫、
それてなければ誰と誰と、二三名御指定下されては、大ていお望み
に任せたい考へです。

眩櫻社

此度雜誌發行所を眩櫻社として、毎日誰かしらの個人展覽會を開催す
る、五月は岸田のをやる豫定で其次には木村がやる。あとは畫の出來
た人が順々にやるが、其時々には、新聞の消息欄へ通知する。
眩櫻社とは、其所で發行する繪畫雜誌現代の洋畫の現洋の美化である
想だ。所在は電車、江戸川の終點の一ツ手前の水道町(石切橋)にて下
車、片方が江戸川て水ばかりだから、すぐに分る筈の家だ。狭いけれ
ども感じは好い。若し個人展覽會をやりたい人があればお貸しする想
だ、主は吾々の大好きな小父さん、北山清太郎である。

フエウザン編輯所

右御通知申上候條同卒貴紙(誌)消息欄に摘要御紹介相成度願入候。

誌 雜 藝 文 純

毎 月 一 回

一 日 發 行

劇 と 詩

附 録

オフマンスタール論(譯)

仲木貞一

心希望の國(譯)

松田良四郎

平和祭(譯)

秦 豐吉

寫實主義と俳優(譯)

村 田 實

彼の夜の興奮(詩)

人見 東明

燕と枝無柳(詩)

福田 夕咲

演劇の諸様式と婦人問題

島村 抱月

ロシヤ文學に現れし高等遊民

昇 曙 夢

英國に於ける近代劇

長谷川 天溪

毒藥の壺(感想)

相馬 御風

女優と舞台監督(戯曲)

國枝 史郎

仕合者(小説)

小 杉 實

別るる日(小説)

右田 青歌

あいの鳥(歌)

土岐 哀果

哀傷の歌(歌)

天野 謙次郎

(繪 畫)

岸 田 劉 生

眞 田 久 吉

松 村 巽

村 田 實

岸 田 辰 彌

第四年第六號

六 月 號

定價金廿八錢

(詩 歌)

大 能 信 行

南 柳 江 村

小 柳 江 村

高 鹽 背 山

佐 藤 小 百 合

社 詩 と 劇 區 川 石 小 京 東 所 行 發

(後付の四)

勞働問題の解決の先驅者
友愛會の機關新聞

友愛新報

定價 郵部 一 價稅 一 部 共 部 前 金 三 錢 厘 錢 十 三

發行所

東京市芝區三
田四國町二番

友愛新報社

地方書店に告ぐ

- 一、雜誌書籍の發送は東京の各書店と同時に爲す、
- 一、發送、返品共に一切郵便に依る事、
- 一、雜誌書籍代金勘定請求は、參ケ月乃至半ケ年毎に於て爲す、
- 一、發送上其他に於て不都合を認められたる場合には直に御通知を乞ふ、
- 一、代金を請求しても更に拂込なき時は直に發送を停止すべし、
- 一、御送金は成る可く振替貯金を使用せられ度し、

大正二年六月

六合雜誌社

轉居

在宅日、水曜夜

市外巢鴨町巢鴨千四百七十番地

内ヶ崎作三郎

電車は巢鴨橋にて下り西南約五丁

東洋女學校正北約二丁、東福寺上

夏期中の御來宿者を歡迎致候

高等下宿

榮林館

館主

文學士 今岡信一郎

本郷區追分町三〇

電話下谷 三三四六乙

(追分電車終點ヨリ五分間)

第六十二號(六月號)

一年分 一圓五拾錢
半年分 八拾錢
郵稅共 共

目次大要

○鬼の涙

齋藤松洲畫
松村介石文

○三畏の説

社説

○變易中の道時

足堂

○國家興亡の原理

松村介石

○再び内村鑑三弟に答ふ

足堂

○無絃琴

物來

○諸君果して備ありや

押川方義

○慶應義塾論

三宅雪嶺

○世界の人道と巴爾幹戰爭長瀬

鳳輔

○宗教講和(其十)

大川周明

○日露戰爭及媾和(七)

石川米山

○大正婦人の心得

嘉悦孝子

○教談

野口復堂

○山路愛山氏の 新宗教論記

者

其他詩文、時感、評論等あり

道

月刊

雜誌

松村

發兌 一日介

石

大賣捌所

警醒社、東京堂、東海堂、北隆館
至誠堂、大倉書店、良明堂、其他

發行所

天心社

口座番號 三六七番

注 意

一、本誌は前年迄は本會及び本誌に特別關係ある人には進呈致居候處今同内部の整理と共に每號無代進呈は何人にも致し不申事と相成候間御愛讀の方は此の際本年度よりの誌代御送附下され度候

二、本誌は一切前金にあらざれば發送致さず候

三、御送金はなるべく安全なる振替貯金に依られ度候

四、若し郵便爲替にて御送金の場合は芝區三田四國町

二番地六合雜誌社と指定し拂渡局を三田芝園橋郵便局と指定せられ度候

五、本誌代金に對しては領收證を差出さず代金領收次第御注文通り發送可致候又前金切れの節は帶封に(前金切)と押捺致候間早速御送金可被下候

六、本誌の廣告に關しては御照會次第詳細に御通知申上ぐべく候

七、本誌の編輯及び紹介批評並に圖書交換雜誌等に關しては六合雜誌社宛にて御申越下され度候

八、定價は内容の改善發達と共に七月號より改めて下表の如く可致候間御承知下され度候

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵稅共
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵稅共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵稅共
●海外は郵稅一冊に付金六錢(清國を除く) ●臨時號出版の際は規定以外に代金申受く			

本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通		一頁	金拾貳圓
普通		半頁	金六圓
●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候 ●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候			

大正二年五月三十日印刷納本
大正二年六月一日發行
(毎月一回一日發行)

定價貳拾錢
稅共

發行兼編輯人 鈴木文治
印刷人 山本與一郎
印刷所 株式會社 秀英合

發行所

東京市芝區
三田四國町

統一基督教弘道會

振替東京二〇〇〇三番

賣捌所

東京堂◎同文館支店北隆館◎東海堂◎上田屋◎警醒社◎教文館其他全國有名書店

◎豫約募集◎

理學博士 田中正平先生 醫學博士 榎保三郎先生

東京音樂學校校長 湯原元一先生 序文

東京音樂學校教授 島崎赤太郎先生校閱及増註

東京帝國大學醫科大學々々生 淺田泰順翻譯及發行

新譯 律氏和聲學

別冊附錄、練習問題解(島崎先生案)

術語和獨英對稱表及索引

本書は我が混沌たる作曲界に一道の光明を學ぶものにして、洋樂複音曲構成ノ理法を詳述して、獨習者に萬遺憾なからしむ。原書は斯學のアウトリートにして本譯書は本邦に於ける此種出版物の嚆矢となす。

豫約價 前金壹圓貳拾錢(定價壹圓七拾

錢)外に郵稅十錢

申込期限 本年七月二十日限

發送期 八月申

申込所 統一基督教弘道會

統一基督教會 集會案内

一禮拜說教 每日曜 午前十時

說教 內ヶ崎 作二郎

一傳道說教 每日曜 午後六時半

一聖書研究 每日曜 午前九時

基督教觀 加藤 一夫

一靈交會 毎木曜 午後六時半

馬可傳 內ヶ崎 作三郎

一音樂練習會 每日曜 午後一時半

擔任 矢野 房代

Library of
PACIFIC UNITARIAN
FOR THE MINISTERS
Berkeley, California

六合雜誌

明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可
大正二年七月一日發行每月一回一日發行

六合雜誌第三十三年第七號



夏 期 號

旅行には必ず携へよ!!

常住座臥一刻も離す可からざるは萬年筆也、取別けて旅行に萬年筆を缺くは汽車も自働車も通ぜざる深山幽谷に閉ちこめられたる如く寂寞と不自由とに堪へ難かるべし、必ず萬年筆を携へよ!

併し乍ら注意せよ、坊間文具店、時としては中等以上の商店、デパートメント・ストアにすらオリオン式オノト式の名稱の下に弊社のオリオン及びオノト萬年筆の粗惡なる模造品の供給せらるゝ事屢々也、是れオノトとオリオンが萬年筆界の最善の名稱たるを公認せらるゝ的確の證なるが、此の粗惡なる模造品に欺かるゝ勿れ、弊社のオノトとオリオンとは必ず軸部に横文の名稱「Onoto」又「Orion」なる横文の名稱あれば、萬年筆を求められんとする時は此軸部の文字を注意せよ、此名稱の軸部に刻まるゝものは最善の萬年筆也

オリオ

金貳圓八拾錢
飾付金參圓廿五錢

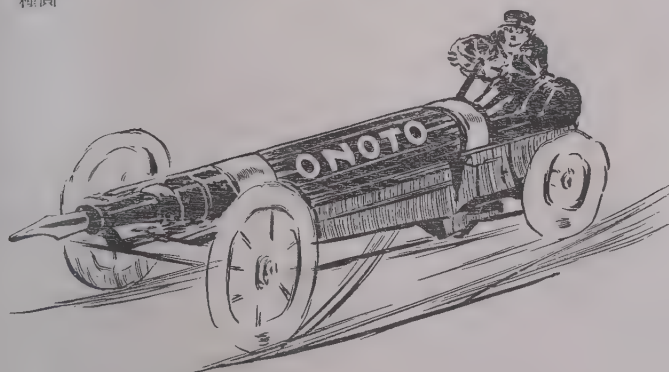
オノト萬年筆

N號 金六圓
裝飾付 十數種

(目錄送呈)

東 京 市 日 本 橋 區 通 三 丁 目
大 阪 市 東 區 博 勞 町 四 丁 目
京 都 市 三 條 通 駄 屋 町 西 入

丸 善 株 式 會 社



THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 390. July. 1913.

CONTENTS.

The Summer Sea (<i>Frontispiece</i>).....	S. Arita.	
The First Step of My New Life.	A. Naitō.	2
The Morality of the Super-man.	W. Nomura.	19
Ego and Faith.....	S. Inage.	25
On Frederick Brock, a Russian Poet.....	S. Noboru.	27
Woman as Life-giver and Culture-promoter.		
.....	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	37
French "New" Women on Human Life.	K. Tsubokawa.	46
Woman from Buddhist and Christian Points of View.		
.....	Prof. H. Minami.	50
Great Thinkers on Woman.	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	59
Woman's Movement and Socialism.	Prof. I. Abe.	64
The Problem of Woman and Economics.	B. Suzuki.	71
A Summary of Current Events.....		
"La révolte" (<i>Villiers de l' Isle-Adam</i>).	A. Naitō.	86
<i>Tanka</i>	Mrs. S. Noguchi.	93
<i>On the Hill</i> (a poem).....	K. Satō.	94
"Pelargonium"	K. Katō.	96
<i>Tanka</i>	R. Itō.	111
Seeing off Dr. F. G. Peabody.....	S. Uchigasaki.	112
<i>A poor Musician</i>	G. Yoshida.	113
<hr/>		
<i>Topics of To-day.</i>		
The National Federation of Y. M. C. A. in Question.....	H. Minami.	115
An Open Letter to Mr. T. Komatsu, Secretary of the National Federation of Y. M. C. A.	I. Aihara.	116
True Religion and Idolatry.....	A. Naitō	117
Our Expectations from A True Religion.	S. A. N.	119
The Department of Education and its Religious Policy.....		
.....	S. Kikukawa.	120
The Work and Mission of Dr. F. G. Peabody in Japan.		
.....	S. Uchigasaki.	121
<hr/>		
Unity Hall Reports.....		
Books of the Month.		

Published Monthly by the

TÔITSU KRISTOKYŌ KŌDŌKWAI,

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

始終神様に

近づいて

清い心を

持った者に

何の悪魔が

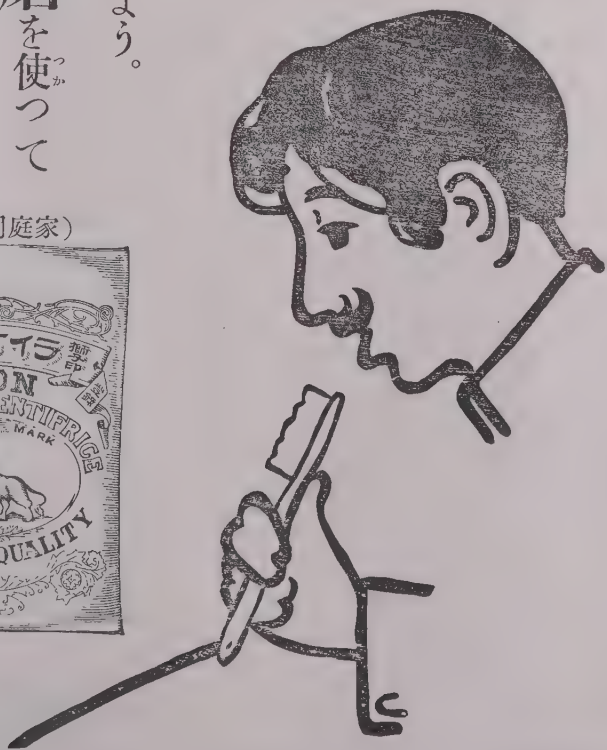
誘惑の手を擴げましょう。

朝夕ライオン歯磨を使つて

美しい齒を具へた口から

何で病の黴菌が入り込みましょう。

(入袋大用庭家)





佛蘭西に於ける新しき人々の問題

S A N

文藝欄

反

抗

(戯曲)

内藤 濯

譯

銀

影

歌

(短歌)

野口 精子

三

西

灘

より

(詩)

佐藤 清

四

べ

らごに

あ

(創作)

加藤 一夫

六

白

薔

薇

(短歌)

伊藤 寥々

二

横

濱の埠頭にて

窓

(創作)

内ヶ崎 作三郎

三

櫛

子

窓

(創作)

吉田 絃二郎

二三

時評

疑問の基督教青年會同盟

三並良

二五

小松同盟主事に告ぐ

相原 一郎介

二六

抽象的信仰か偶像禮拜か

内藤 濯

二七

宗教界に求むるところ

S A N

二九

文部省と宗教政策

菊川 四郎

三〇

パイボデイ博士を送る

内ヶ崎 作三郎

三一

▽惟一館記事△

▽新刊批評▽

六合雜誌第三十三卷第七號目次

着

港

前 (口繪)

本欄

有田四郎

新生活の第一歩

超人道徳論

自我と信仰

都會詩人ブロックを論ず

婦人問題

生命の源、文化の泉

フランス 現代 婦人の人生觀

佛耶兩教の婦人觀

大思想家の婦人觀

婦人問題の根本的解決

經濟上より見たる婦人問題

思潮欄

獨逸文學界の近韻

三並良

内藤 濯

野村 隈 畔

稻毛 詛 風

昇 曙 夢

内ヶ崎 作三郎

壺 川 潔

三 並 良

うちがさき

安部 磯 雄

鈴木 文 治



畫像四回有

白石喜之助先生著

□定價金壹圓

郵稅拾貳錢

□

基督教の宇宙觀及人生觀

菊判美裝 二百四十頁 クロース表 製本堅牢

序に曰く近時基督教に關する著譯書の世に公にせらるゝもの甚だ少しとせず然れども其重なるものは論文若しくは演説の編輯になるものに過ぎず従つて其傳ふる所は斷片的眞理のみ勿論偶には基督教を組織的に叙述せんと試みたるものなきに非ずといへども然かも其多くは神學上の學説を説明したるものに過ぎず而して共に時勢の要求に答ふる所以に非ざるを如何せん基督教の文學が斯く時勢と没交渉なるの時に當りて我國科學哲學の普及進歩は實に驚くべきものあり而して時勢は基督教に向つて近世の科學哲學の立場よりして基督教の根本思想を説明せん事を求む此故に若しも基督教にして科學哲學の素養ある人士を「漁」せんと欲せば宜しく舊來の非科學的なる二元的解釋を放棄して科學的なる一元的の解釋を確取せざるべからずと希くは一讀を給へ

振電 東京 一橋 三五二番

文教館

東京市四丁橋區一

六
合
雜
誌



第
三
百
九
拾
號

へり見て正しかつたとか、邪であつたとか、さう云ふ風にきつぱりした審判を與へ得ないことが、たとひ私自身に取つては眞實であるにしても、これまで如何にして足を運んできたか、如何にして行き會ふ人々に接してきたか、如何にして内外の事件に對してきたか……と云つたやうに、自分自身のこれまでの歩調と態度と心持とを顧ることは、自分が今ある四辻に立つてゐると云ふ意識が、おのづから明るくなつて居るだけに、それらの事もまた明るい意識で照して見なければならなくなつた、それらの眞の姿を飽くまでも明るみへ浚け出して見なければならなくなつた。

はじめ私は議論をするつもりで、こゝまで筆を運んできた。しかし筆を進めてゐるうちに、私の心には次第に、議論をするだけの餘裕が無くなつてゆく、静かさが無くなつて行く。

私はもはや、私の感じをさながらに語らなくてはならない、貧しい私の内生活をさながらに發表しなくてはならない。周囲の人々に、詩であるとか夢であるとか云はれる危険を冒しても、私は私の心持を願はくは眞實に語りたいのである、できるだけ率直に云ひ表はして見たいのである。さうして斯くする事に目的があるのならば、それは私自身の生活の爲めであると云ふより外はない、自ら心の糧を得んが爲めと云ふより外はない。

私は私の筆にすることが、いはゆる詩とならざらむ事を、私自身に對して念ずる、いはゆる夢とならざらむことを、私自身の心に向つて祈る。

私はともかくも此處まで、或る一條の道を踏んできた。



新生活の第一歩

内 藤

濯

私は今、人生と云ふ大きな町の或る四辻に立つてゐる。

ふり返つて見ると、私の辿つてきた道のあけくれには、これと云ふほどの大轉化も無かつたやうである。自らの死を思ふほどの大事件も起こらなかつたやうである。私はともかくも此處まで、或る道を歩いてきたのだ。

こゝまで歩いてきた私の道が、果して正しい道であつたか、それともまた邪な道であつたか、只うか／＼と歩いてきた私には、自らそれは斯うだと云ひ切つて了ふだけの資格が無い。これまで多くの人々の云つたやうに、何うしても進める事のできない運命と云ふものゝ力が、絶えず私たちを取り卷きつゝ動き進んでゐるのなら、其の運命の力だけが眞の第二者となつて、公平にそれを判斷もしやう、批評もするであらう。そして私のこれまでの生活史を、いさゝかの蛇足もなく、いさゝかの潤飾もなく、第三者の爲めに語りもしやうし、書き綴りもするであらう。

しかし私は、今この四辻に立つて、たとひ際だつた不安は感じないにしてもたゞ俄に或る不満を強く感じないわけに行かなくなつたのだ、それと攫みどころの無い哀愁を覺えないわけに行かなくなつたのだ。自分の踏んできた道をか

繪畫の事に疎い私は、ミレエの作に斯う云ふのがある事を、其の日まで少しも知らずにゐた。がしかし、それを眺めやつて居るうちに、私の心には一刻も躊躇する場合で無いと云ふやうな氣分が湧いてきて、直ぐさま其の一枚を買ひ取つたが、其の店を出て小川町の停留場をさして歩いてゐると、私は思ひがけなくも、靜かな薄い日の光が、丁度壞れた宮の内壁へ射し入るやうに、夜とも晝ともつかぬ私の仄かな心の奥へ込み込むのを感じた。久しく憧れ求めてゐた心の境が、おぼろげながらも私の眼へ映るやうに感じたのである。

歩きながら私は斯う思つた——自分にはともかくも今ひとつの心の巷がある、けれども其の巷に建てゝきた色々な家の軒と軒とは、あまりに造作ないものであつた、あまりに亂雜なものであつた。でさるなら其の巷を一夜のうちに焼跡にしてしまいたい、たとひ同じ區劃ではあつても、でさるなら一夜のうちに、全然見ちがへる程の巷にして見たい。そして其の跡に新しく土臺石を据ゑて、ミレエの書にあるやうな稚兒の心持になつて、新しき鎚の音を響かせて見たい、新しい柱を押し立てゝ見たい——新しき「第一步」を踏みだして見たい——と。

軟らかな緑の草を褥にして、透きとほるほど碧く澄みきつた空を眺めて、小鳥の歌の靜かな旋律を恍乎となつて聽くことのできた原人の心持は、私の久しく求めてやまないものの一つである。

まだ學生の身分であつたとき、私は直ぐ上の兄と一人の妹と三人、森川町に小さな家を借りて、そこに至つて平和な生活を営んで見た事がある。兄は勤務先の仕事が忙しかったため、夜遅く歸つてくることが屢々であつたので、私は只妹と下女と三人きりで家に居ることが多かつた。そして寒い冬の晩な

しかし私は、私の歩調があまりにしどろもどろになつて居たことを感ずる。私の態度にあまりに締まりが無かつたことを感ずる。私の心持があまりに動搖してゐたことを感ずる。さうして私の生活が身窄らしくも斷片を繋ぎ合はしたものに過ぎなかつた事を感ずる。私は何うかして、もう一度自分の踏んできた道を立ち戻つて、更めてはじめの *Starting point* から、新なる第一歩を踏みだして見たくなつたのである。さうして新なる態度と心持とで、行き會ふ人々にも面し、内外の事件にも對して見たくなつたのである。

この間のことである。私は神田の大きな焼跡を通つた。一つ橋通から神保町へかけて、ペンキ塗の板壁や、赤煉瓦の門口や、銅で張りつめた軒や、廣い硝子張の店を並べてゐた家と家とは、たゞ一夜のうちに凄まじい焔の屠るところとなつて了つたが、その焼跡の臭ひがまだ全く消え切らない巷には、いつのまにか新しい家があらまし建てられてゐて、すでに新しい看板と新しい商品とで店を開いた家もあれば、まだ頻りに石を切る音や大鎚の響を、交るがはる響かせてゐる家もあつた。

私は此の焼跡の街をぬけて、小川町の方へ歩いて行つた。南明館の側までくると、いろ／＼な版書を並べた一軒の店が私の目にとまつた。何ごゝろなく其の店へ立ち寄つて、陳列臺から壁の上へと、ミ隙間なく掛け並べられてゐる版書と版書とを、つぎつぎに見まはしてゐた私は、不圖そのなかに、ミレエが木炭で描いた一枚があるのに心を惹かれた。それは版に上した人が英語で *First step* と書題をつけたもので、或る百姓家らしい住居の庭に、可愛いひとりの稚兒が、母の手に扶けられて歩きぞめをしてゐると、こちらでは其の父らしい大きな手をした男が、しきりとそれを慰^{なぐさ}めてゐる温い心持の溢れた畫面であつた。

斯く永遠の影はうつされながらも、一つに溶け合ふ事のできない心を抱いて外を見ると、單純の世界は轉じて複雑の世界となり、あらゆるものゝ争鬭と混亂と紛糾とが、たえずなく走り動いて居る間に、物質と靈魂とがまだ其の真相を現はすことができずに、互に銃丸を放ち合つてゐるのである、互に鎗を削り合つて居るのである。

すでに斯かる内外の烈しき争鬭混亂の間に身を投じた私は、結局何うしたら可いのであらう。たゞ腕力に訴へてのみ、何れかの一方に血路を開くべきであらうか、あらかじめ「理想」を定めて、只それに向つてのみ驀直に進むべきであらうか、それともまた力に屈して退軍を叫ぶべきであらうか。

私は私どもの腕力の無効である事を、あまりに能く知り過ぎてゐる。理想と云ふ事の生命なきものである事を、あまりに能く知り過ぎてゐる、退軍を叫ぶの怯なる事を、あまりに能く知り過ぎて居る。

それならば何うすればよいか。私の衷なる聲はたゞ「進め、すゝめ！」と云ふ。私は前方に向つて進むことに異存はない、しかしながら若しこれまでのやうにして進むならば、私は今痛切に感じてゐる悔恨を、其のまゝに何時までも繰返すであらう。前途に悔恨の横たはる事を知つてゐながら、なほ此の歩調を續けることは、到底私には耐へられない。

私はこゝで何うしても私の歩調を更めなければならぬ。何うしても私自身の態度を改めなければならぬ。

しかしながら私は、自らの歩調なり態度なりを更める前に、これまでの歩調がなぜ亂れがちであつたか、これまでの態度がなぜ搖ぎがちであつたか、その事を靜かに考へても見たい。

どは、火鉢にかけた鐵瓶に湯氣を白く立たせながら、明くる日の日課の下調べをしてゐると、火鉢の向ふ側では、妹が靜かに編物の針を進めてゐると云ふやうに、私たちは何の心の蟠まりもなく、たゞ云はゞ單調に、日數をかぞへてゐた。その頃殆んど毎日のやうに訪ねてきてくれた親友のT君は、よく私に向つて、君の家はまるでウオズウオスの家庭のやうだと云つてゐたが、今日から考へて見ると、あの頃の私の生活には、多く責任を感じない學生の時代であつただけに、比較的純一な心持を味ふだけの餘裕もあつたし、土臺も据ゑられてゐたやうである。

しかし私は、永く斯かる心しづかな生活を送るわけに行かなかつた。

先づ妹は其の生まれた家を去つて、他の家へ行かなければならなくなつた。そして私の學生々活は一轉して、自ら生さんが爲めの營みをしなくてはならなくなつた。其の間には父の死と云ふ一つの事件も起こつた、物質の爲めに心を裏切られる悲しみも、土に其の種子を卸した。原人の情調を戀ひ慕ふ餘裕も地盤も、いつのまにか煙のやうに立ち消えてしまつた。しかしながら私は、肉身の人々や友達の手に曳かれて、とにかく此處まで歩いてきたのだ。

此處まで歩いてきて、自分の心を覗いて見ると、以前の單純は最早見る影も無くなつて居る。歩いてきた道が、私の肉體に對しては、たとひ確かに三十年の歴史を作つたにしても、私の意識に對しては、五十年、百年、二百年、三百年……殆んど辿り盡くせないほど永い時代と時代との影を投じてゐるのである、そして其の影は、私の裏にある感情と知識とを、まだ一つに溶かしかねて居るのでは無いか。

驚嘆の眼を睜るよりは、定義や名辭の考案に多くの興味を有つやうになつたのも、全くこれが爲めでは無かつたか。自然の姿に倅るからと云つて、三つの壁面しか現はすことのできなかった舞臺上の家に、何とかして四つの壁面を見せる方法は無いものかと、極端な事にまで心を悩ますやうになつたのも、全くこれが爲めでは無かつたか。

もし私が智慧の樹の實を食はなかつた人間であつたら、私は一も二もなく、斯くまで小賢しくなつた人間の巧みを斥けて了つたかも知れない、そして時を移さず原人の心持に返れと叫んだかも知れない。しかしながら私たちは遂に智慧の樹の實を口にして了つた。奥ふかい山の泉に湧く水の響は何うであつても、河床に流るゝ水の深さを測つてゐればよいと云ふ術を教へられて了つた。そして私たちは何氣なく智慧の樹の實を口にし、心やすらかに河水の深さを測つてゐたが、不圖氣がついて見ると、脉々をめぐる血の響は、いつのまにか途切れやうとして居る、如何にしても湧くものと思つてゐた泉の水は、いつのまにか涸れやうとして居る。私たちは驚いて再び脉々の血を絞らうとした、泉の水口を擴げやうとした。けれども一たび口にした智慧の樹の實は、すでに一塊の動かぬ力となつて、深く肉の裡に食ひ込んでゐるでは無いか。河水の深さを測るに慣れた私たちの手は、最早たやすくは泉の水口を擴げさせまいとするでは無いか。

圖りしられぬ運命の手に曳きずられて、思ひがけなく新しき時代の風に吹き曝らされた私たちは、斯くして終に一つの大きな破綻を、目のあたり見なければならなくなつたのだ。

私が宗教と云ふものゝ力を享け入れても見たいと思ひだしたのは、全く此の心に横たはる破綻を和

思ふに千八百年代の世界ほど、不思議な世界はなからう。それは此の世界で、夢みる人々の群と覺めたる人々の群とが、相次いで生まれて、互に反感を抱き合うてゐたものゝ、此の世界が暮れてゆく頃になると、大きな二つの群が互に握手するやうな氣振を示したからである。

そして世界が一つ明けて千九百年代になると、何處ともなく新しい浪漫主義の聲が聞こえてきた。新に甦つた神秘の調が、藝術は素より、あらゆる科學から社會問題のある部分にまでも傳はり響いてきた。

批評家たちは此の傾向を見て、直ぐにこれを浪漫主義の復活であるとか、現實主義の勝利であるとか穿鑿だてをせられる。私もまた動もすれば、藝術なら藝術の表現から穿鑿をはじめて、色々な事を云つて見たくなる一人であるが、私はまづ此の點に於いて、私の足取りが甚しく亂れてゐた事を痛切に感ずる、私の態度が正しくない地盤の上に据ゑられてゐた事を心から悔ゆるのである。

千八百年代の後半を凄まじく吹きあらした思想の風は、人間の衷より夢を思ふ心を奪ひ去つて了つた。原始時代から傳へられた純一を慕ふ心を吹き剝いて了つた。そして其の跡に吹き送つたものは何であつたか、其の風は幻滅のうら寂しさを痛切に味はひつゝある人々の心に、思ふさま科學の精神を吹き込んだ、思ふさま分拆と抽象との精神を増長させた、思ふさま堂乎として動かぬ觀念の世界を建設した。人間が動物の形に倣つて、地上は固より空界までも征服すべき機械を作りだすやうになつたのも、全くこれが爲めでは無かつたか。海邊へ行つて動いてゐる艦船の姿を一つ一つと見るよりは、博物館内に据ゑられた模型の艦船を見て喜ぶやうなつたのも、全くこれが爲めでは無かつたか。思慕と

て潜む智慧の力を私かに氓ぼしたがつてゐる、おまへの所謂「河水の深さを測る術」を私かに忘れたがつて居る。けれども其の慾望は無益だ、今となつては最早到底それを達する事は出来ない。おまへは思慕と驚嘆との心ばかりを、生きたものだと思ふ一つの考からして、智慧や抽象を死んだものだと思つて居るが、おまへはそんな事を思ふ傍に、知らず識らずまた一つの新しい智慧を振り廻して、新しい抽象を築きあげて居る、おまへはそれを死んだ物とは思はないのか。いかに思慕と驚嘆との心は燃え立つてゐても、若しおまへの周圍に智慧や抽象が無かつたら、亂れがちであつた其步調も、此處まで續けて來る事は出来なかつたかも知れない。たとひ概念や抽象が死んだものであるにしても、どうせ其の初めは生きた人間の内部から絞りに出されたものだ。何故おまへは自ら其の死んだと思ふ物に血を通してせやうとは思はないのだ、それをおまへの心臓と同じく活かさうとは思はないのだ。若しそれを活かしたいと思ふなら、その利那おまへの動脈には血潮が再び環り出すと思へ、おまへの涸れた泉には再び清水が湧き出すと思へ………

また一つの聲があつて、私の胸に叫ぶ——

——おまへは馬太傳の十三章にある種播の譬を知つて居るか。あの冒頭にある數節を自由に解釋する事が出来るなら、おまへは種まく者に播かれた一粒の種子であつたのだ。路傍に遺されたおまへの「我」は、鳥のために啄み盡くされた。磽^{いし}地に遺された「我」は、萌えだしたものの、根が無かつた爲めに枯れて了つた。棘の中に遺された「我」は、その棘が育つた爲めに蔽がれて了つたのだ。これまでおまへは種まく者の遺すまゝに身を委せてゐたが、これから何處かに早く沃^{いん}壤を見出して、自ら其

らげて見たいからであつた。

しかしながら、苟且に享け入れ得たと思つた宗教の力は、もつと享け入れて見たいと思へば思ふだけ、内に潜む一塊の力が嵩めば嵩むだけ、或るときは無残にも一つの幻となつて消え去らうとした。また或るときは全く其の影をかき消してゐた。そして私は、知らず識らず自分の心を裏切つて居るやうに思はれてならなかつた。

斯うして私は、自分の生活を無意味に棄て去ることができないやうに、また宗教と藝術と科學とを無意味に棄て去る事の出来ないだけの人間として、とにかく此處まで歩いて來はしなかつたか。少なくとも心の生活と頭の生活とを、一つに括める事の出来ない淺ましい人間として、卑怯にも此處まで歩いて來はしなかつたか。

私は此の四辻に立つて、前方を見わたすと、更に一條の道路が、これまで踏んで來た道に其のまゝ續いて、何處まで行つても涯しないやうに走つて居る。そして其の道には、これまでの道と同じやうに、人の手に作り出された文明が、益々華やかに益々誇らしげに照り耀いて居るのである。

私はやはり今までと同じやうな歩調を取つて、行かなければならないのであらうか、今までと同じやうな態度で、新しい文明と、其の文明を生みだして行く人々に對しなければならぬのであらうか。

一つの叫びが私の胸に響く——おまへは自分の破綻を退けるために、自分の内に一つの塊となつ

ふ一點を目當にして、涙の盡きるまで、絶望の暗闇に落ち込むまで、眞劍の努力を續けてやまなかつたからである。誠實なる奮闘を敢へてしてやまなかつたからである。

しかも此の二つの努力は、たとひ其のまゝに無限まで押し進めて行けなかつた事が蔽ふことのできない事實であるにしても、なほ其の生命の名残は盡きずに、私たちの心の中に波うつて居るのでは無いか、實生活の渦中に絡み流れて居るのでは無いか。

さうして今私は、何處とも無く神秘の色を浮べながら、私たちの心を浸し流れてゐる新しき思潮を見て、直ちにそれをロオマンズの復活だと云ひ切つて了ふ事は、常に他を欺くことになるばかりで無くまた自らをも欺く事になると思はれてならなくなつた。さう云ふ冷たい批評の態度を續けて行くだけそれだけ、私の生活は何時までも斷片のまゝに推し移るのでは無いかと思はれてならなくなつた。單に此の二面の傾向についてのみ、斯う云ふのでは無い。私は日々の生活そのものに照らして、切にしかく感ずるのである。

私は今、自らの肉體を自ら養はむが爲めに、教場の講壇に立つて、毎日の午前中を過ごしてゐるが、頁より頁へ置き並べられてゐる言葉の意味を、私の前に居る人たちに説き聞かせてゐるとき、不思議にも講壇の上にぎごちない言葉を操つてゐる自分の姿をあり／＼と見る事がある、自分が第二者となつて、自分の態度を批評して居るやうな心持にはいる事がある。何と云ふ餘裕の多い私の心であらう何と云ふ耻を知らぬ私の態度であらう。さう云ふ心持に立ち入る事は、やがて「人を教へてゐると云ふ意識が、私の心に浮んで來るからでは無いが、一時間の仕事をすら、連續した創造と見ることが出

處へ飛んで行くやうに心を向け變へなければならん。つまり今までの態度の据ゑ處が外れて居た事を自覺して、新しき土地に新しき態度を据ゑるのだ。態度の革命を企てるのだ——

第三の聲は、さらに強く私の胸に響く——爾等、神の全さが如く全かれ——

私たちは最早、初代の基督教徒に倣つて、恍惚たる幻覺をつゞけながら、美しきロオマンズの世界を、青空の奥深きところに待ち望むことは出来なくなつた。人間相互の眞實なる同感と、人間對自然の最終純一なる共鳴とを離れて、全き神と云ふものゝ生命を感じることは出来なくなつた。

このことが最早全く偽ることのできない一つの事實であるかぎり、神の全さが如く全くなると云ふことは、取りも直さず、この地上に於ける斷片の生活をぬけいで、依然この地上に於ける全體の生活に、私たちの全き我を浸し込むことでは無からうか。あらゆるものゝ眞を穿つて、其處に私たちの全生命を委ねることでは無からうか。

しかしながら *immemorial* な過去から此の時代に至るまで、時の推移と共に朽ち、其の變遷と共に新になり來つた人々の大きな群と群とは、斯かる絶對無二の一境に進み入つて、果して悔ゆるところなき生活を營み得たか何うか。

私はこゝで「然り」とも「否」とも答へる事ができない。と云ふのは、ロオマンズの世界に飽くまで夢を味はむとした人々の群にしても、現實の波に押し揉まれながら、其の眞の姿をつきとめむとした人々の群にしても、今日の私たちから見れば、斷片的の生活であつたとも、不徹底の營みてあつたとも云へやうが、斯かる兩面の行き方をした人々それ自身に取つては、いづれも生命の偽らざる表現と云

其の幕僚に取り巻かれて、戦列より戦列へ馳せめぐりながら何と云つたであらう。彼の口より迸り出でた言葉は、整然たる軍容を賞讃する聲でも無かつた、みづからの勝利を誇示する聲でもなかつた。

——兵卒ども！あの金字塔の頂上から、四千年の年月がおよへ達を眺め渡して居るぞ……

彼が其の部下に向つて洩らした言葉は只これだけであつた。金字塔の大いなる姿に對した刹那、ナポレオンの心深く流れてゐた生命の音楽は、如何ばかり高調を奏でたであらうか、如何ばかり豊かな和聲を繰りだしたであらうか。私は今この言葉を繰り返して見て、直ちにこれを批評の言葉とも創造の言葉とも云ひ切る事はできない。批評と創造とを二つに見うるほど、彼の心はうら寂びてゐなかつたらしく思はれるからである。

たとひ動搖と紛糾とが現代の導調であるにしても、私たちは此の刹那のナポレオンの心で、たえず自他の生活を味つて行けないものであらうか。

形式と内容、個人と集團、個人我と社會我、斯かる二つの間に横たはる争鬭が、いつまで經つても解けないのは、恐らく創造と批評とを一つに見る事のできない私たちの淺墓な心からでは無からうか。

私は今、筆を頻りと原稿紙の上に走らせて居る、そして若し私の家の隣に一人の鍛冶屋があつて、鐵砧の上へ力任せに鎚を打ち下して居るとするならば、私の眼には頻りに動いてゐる筆の影が見えるであらう、私の耳には冴え返つた鎚の響が聞こえるであらう。

單にそれだけで已むのなら私の態度は餘りに物的で、つまるところ一つの批評として終らなければ

來ないからで無いか、一たび教室を出たならば、靜かに過ぎ去つた一時間をかへり見て、自己を批評して見る事も、あなたがち無用の態度では無からう。しかしながら私は、これまで亂れた步調を取つて來た事が因をなして、「あの曲を弾いてゐるな」と云ふやうな冷え切つた態度で、一つの樂曲を弾いて居るでは無いか。さうして一時間のうちに含まれねばならない全體としての命を、無殘にも寸々に斷ち切つて居るでは無いか。

更に一つの聲があつて、私の心に響く——

——おまへは全體の生命を攫まうと焦つてゐる、しかし若し、人を教へやうと思つて人を教へるならば、おまへの望みは何時までも満たされない。何故おまへは其の教へやうと云ふ意志を、他へ向けずに自分へ向けやうとはしないのだ。これまで多くの人たちが叫んできた「他人の爲めに働け！」と云ふ事は、先づ自分の爲めに働く事だと知れ、それが凡べてのもの、第一歩なのだ……決して創造をしなから批評をしてはならん……創造の邪魔になるやうな批評をするな……批評をするなら其の批評までも創造して行け……

創造と批評、此の二つは顔こそ異なれ、同じ心を有する同腹の兒では無かつたか。

埃及の大砂漠には、八十にあまる金字塔が、永遠の過去より永遠の未來に渡つて、人の手にも時の手にも侵されずに高くたかく峙つてゐる。一百二十年の昔、戰に勝ち誇つた大軍を率ゐて、この巨塔の前に立ち現はれた一人の勇者があつた。それは云ふまでも無く、全歐の土に一大王國の建設を夢みたナポレオン・ボナバルトである。戰捷に戰捷を重ねた彼の顔は、誇りと望みとに耀いてゐた。彼は

態度の根柢が、もし眞に深く根ざしたのなら、眞に強く熱したのなら、自己の充實を思はない他人のために、たとひ如何に壓迫せられても、たとひ如何に蹂躪せられても、私たちの自我は決して其の爲めに蝕せらるゝ事も無ければ、滅ぼさるゝ事も無からうと。眞に我執の心を去つて、眞の自己を求めやうとする心を据ゑ得たならば、一個の肉體に執着したり集團に執着したりして、我執の心を離るゝ事のできない人々の爲めに、求めむとする心を沮まれたと思つたことが夢で、實は反つて其の爲めに充實を更に一步し、權威を更に一進したのでは無かつたかと。

机の上では斯う疑を挾んで見るものゝ、私の周圍に渦まいてゐる集團の不思議なる力は、決してこれを許さないでは無いか、呐喊に呐喊を重ねて、私の築き上げやうとして居る地盤を破壊しやうと息まなくては無いか。

集團の不思議なる力との争闘、私は必しもこれを辭退しない。必しもこれを回避しない。

しかしながら私は、其の争闘がこれまでのやうに、斷片と斷片との無意味なる争であるならば、私はむしろ潔くこれを避ける。私の衷に溢るゝ全體の要求は到底これを許さないからである。

ふり返つて見ると、私はこれまであまりに多くの人と争ひ過ぎた。さうして其れは、多くの場合、死と死との争闘に過ぎなかつた。形と形との葛藤に過ぎなかつた。斷片と斷片との騷擾に過ぎなかつた。さうして斯かる争闘と葛藤と騷擾とを逞うした後の夕は、心の底より起る悔恨と寂寥との壓迫に耐へられなかつたては無いか。

私は今日以後、願はくは全體を捉へむとする態度と斷片の暴力との争闘を心の内外に見たい。生活

ばならない。けれども執拗なる私の心は、たゞ其處まで行つて留まる事はできない。更に此の事を内より外へ見渡して、私たちの心は私も生きて居れば鍛冶屋も生きて居ると思へないだらうか、どちらも生きむが爲めに努力し創造しつゝある事を感じないだらうか。斯く思ひ斯く感ずる事が可能であるならば、私たちの態度は最早、單なる創造でも無ければ、單なる批評でも無くて、創造は批評の爲めに表現せられ、批評は創造の爲めに生命を與へられる。そして抽象の死物と嘲り、概念の殘骸と誹つてゐたものも、再び新しき姿に甦るのでは無からうか。

しかし、生きたものから生きたものが生まれ、死んだものから生きたものが生まれぬ事が眞實である限り、一切は私たちの最も生命ありと感ずる自我の充實より起こらなくてはならない、個性の權威より生まれなくてはならない。私の斯うして筆を走らして行く事が、たとひ隣の鍛冶屋には只この手のみを動かして居るものゝやうに思はれても、私は自分のともかくも生きて居ることを歡ぶのと同じ時に、鍛冶屋の胸にもまた、脉々の血汐が循環して居る事を絶えず思ふ心になりたい。鍛冶屋が如何にして働いて居やうとも、また私が如何にして働いて居やうとも……

こゝで私には一つの疑ひが起こる。

それは何か、新時代の風に吹かれた人々は、自我の充實を追ひ求めるあまりに、個性の權威を仰ぎ慕ふあまりに、他人の生活を冒すことを恐れる、他人の權威と撞着することを憂へる、集團の力の爲めに壓迫せられることを悲しむ。私もまたこれまで斯ういふ恐怖と憂虞と悲哀とを屢々經驗した、否、今日もなほ動もすれば此の不安を繰返してゐる。けれども私は思ふ、私たちの自己に徹しやうとする

超人道德論

村野隈 昨

人間は平凡な俗事から造られ、自分の乳母を習慣と名ける祖先傳來の寶物たる古い尊き家具に觸るゝ者は禍である（シルレル）

※

『爾時われ一個深奥なる聲を聽さぬ。曰はく、爾無冠の帝王の心果たして安きか。爾は自ら偕して觀念國の帝王と稱すれども、知らずや爾の國には爾の權威の左右する能はざる幾多爾以上の對立者權威者あるとを。爾聽かずや、義務の觀念の莊嚴無上の聲を。爾一たびこの聲の前に立たば、川邊の草の如く戰々自ら持する能はざるにあらずや。』

又見ずや、善惡、眞妄、美醜の幾多標準的觀念は、爾に律せられずして却つて爾を律する客觀獨立の權威たるにあらずや。爾は竟にその笏を捐て、此等權威の前に拜跪せざるべからずと。我れは戰慄せり。我が自ら造りぬと思へる觀念の王國にしも

我が力の撓揉し得ざる獨立不屈の權威あるか。げにや、我れ其等觀念の權威を視るに、わが塵の心に染まぬ新鮮の色あり。わが暫聚の姿に似ぬ金剛の力あり。

我れより出て、我をしも支配せむとする彼等不遜の觀念、そもく何物ぞ、はた何處より來れる。』これわが敬愛する先輩の莊嚴なる煩悶の叫びである。悲惨なる傷痕の苦しみである。觀念國における無冠の帝王たらんと欲して失敗し、空想の翼をひろげて自由の大野を翔り、理想の車に跨りて靈光の天海を馳せんとして、悼ましくも地上に墜落した慘狀である。

げに自由を欲し支配權を欲し帝王たらんと欲し天上天下唯我獨尊たらんと欲するは、人間の偽はらざる眞情である。止みがたき憧れである。され

の批評を批評として見る心と、批評をも創造化せむとする心との葛圖を見たい。外より内へ向ふ心と内より外へ向ふ心との騷擾を見たい。かくする事は、やがて全體に生きんとする努力である。基督の所謂「神の國」を建設せんとする嚴肅なる努力である。

私には最早、宗教と藝術と科學と勞作とを、常に其の表現と材料とより見て、異なるものと思ふやうな餘裕は無い。もし私の生活に對する態度にして、私の心の奥底に据えられるならば、かゝる生活表現の形式は自ら一に歸するであらう。

全現實の生命を徹底的に捉へんとする努力——これが何うして現代に於ける宗教生活の根調で無い謂はれがあらう、何うして眞實なる生活の導者で無い謂はれがあらう。

警鐘は終に鳴り響いた。私は斯くてたゞ大いなる新生活の第一歩を踏みだすまでの事だ。私の前途はますます遠い、一切の健闘は益々私の心等待つてゐる。ルナンの所謂「妄想の樂園でもなく、天上の徴でもなく、たゞ正しき意志と靈魂の詩」とに依つてこの地上に一大王國の現出を見るのは抑もいつの日であらう。(五月三十日)

*

*

*

*

この感想文を書き終つて後、私は「文章世界」の五月號に、相馬御風氏の書かれた「第一歩」と云ふ一文がある事を知つた。何だか人事で無いやうな氣がして、近くの雜誌店を探して見たが、遂に其の雜誌が手に入らなかつた、かへす返すも残念である。それから「帝國文學」の六月號を見ると、石坂養平氏が「新藝術の第一歩」と云ふ論文を書いて居られる、一應それを讀んで見て、私は氏の飽くまでも積極的な生活態度に、強き共鳴を感じたことを特に附記して置きたい。第一歩、第一歩！この第一歩は宗教を求むる者に取つても、藝術を慕ふ者に取つても哲學を説く者に取つても、唯一無二の新しき第一歩でありたいと思ふ。

が、仁義と命じやうが、吾人の關知せざる所である。唯わが性にあくがれ、性に從ひ、性に仕ふるのである。性は即ち我れてある。「天之命之謂性。率性之謂道」と云つた中庸の著者は、超人道德を知つたものである。性は天の道である。性に率ふは即ち人の道である。「誠なるより明かなる、之を性と謂ふ」のである。性は誠である、睿智である、創造である。故に道はたゞ一條である。性の欲するところを爲す、之れ善て、性の欲せざるところを爲す、之れ惡である。

性は至誠である。故によく自己を完成する。性は睿智である。故によく事理を直覺する。性は創造である。故によく永久である、悠遠である。之を以て性に率ふの超人道德は、自由である。眞實である。沈黙である。變化である。活動である。無限である。神秘である。然るに色盲者は性の至誠を觀ない。性の睿智を恐る。性の創造を呪ふのである。故に色盲者は性の戕賊者である。生命の反抗者である。「肉體の輕蔑者」である。凡俗道德の作成者である。色盲道德は至誠に非ずして虚偽、睿智にあらずして盲目、創造にあらずして服

從愛着である。

*

道德とは客觀的實在に服從するの謂ではない。人を助け愛するの謂ではない。他人の爲めに犠牲になるの謂ではない。幸福や爵祿を尊敬するの謂ではない。自己を輕蔑し性欲を虐待するの謂ではない。人心と道心、外人と内人との間に愚にもつかぬ悲劇を演じ出すの謂でもない。超人道德は一切を超越するの謂である。悠々自適の謂である。道は字義的に解釋すれば、即ち元首の進行である。元首とは生命の謂である。故に生命の適く之れ道である。生命の發動勞作之れ徳である。そこには主觀と客觀となく、靈と肉となく、理性なく判斷なく、眞善美を知るとなく、唯悠々たる無限の生適のみ存する。自由、永久、無限の生適、之れ眞の道德である。故に超人道德は生命擴充の道德、生命深鑽の道德、生命高潮の道德である。生命は一切の創造主である。一切の源泉である。一切の權威者である。一切の審判者である。而して永久の憧憬、永久の快舞である。生命の欲する所に善がある。生命の懂がる所に美がある。生

ども人間の周圍には無數の束縛がある。自然あり、國家あり、因果あり、道德あり、眞理あり、價值あり、而て神があるのである。色盲者には是等の觀念は、悉く客觀獨立の實在として現はれ、無上權威の威光を輝かして居る。故に臆病なものは膝を屈して降服し戰慄する。虛弱なものは窒息し卒倒する。佞從なものは巧言令色、奴隸となり妾婦となる。賢明なものは深い森林にさまよふて冥想し煩悶するのである。斯の如くにして人間の眞情は傷けられ、息むとを知らない憧憬は絶たれるのである。客觀獨立の實在がますます／＼多くなり無上權威の壓迫がますます／＼強くなるに随つて、いよく人間の自然的範圍が狭められ、自由的餘裕は奪はるゝのである。たゞひとり強健なるものゝみ、凡べての客觀獨立の實在に反抗し、自己の本性に忠實に、あくまで奮闘し精進する。之れ即ち超人である。故に超人道德は一面から見れば、猛烈なる反抗奮闘の道德である。

*

若し人來つて善とは何ぞや、道德とは何ぞやと我れに問はゞ、我れは知らずと答へる。何となれ

ば世の中に善なるものなく、道德なるものないからである。然らば何に由て生活するかと問はゞわが生命に従つて生活すると答へる外はない。若し強ひて名くれば、わが生命の欲する所即ち之れ善である。わが生命の動く所即ち之れ道德である。善も道德も中心生命の限りなき自由より湧き出づるのである。生命の自由欣求、生命の自由創造即ち善である、道德である。されば道德は人を教ふるものでなくて自ら體得すべきものである。人に學ぶべきものでなくて自ら煥發すべきものである。生命の欲するところに従ひ、生命の向ふところに行くは即ち超人である。故に超人道德は一面から見れば、無限の肯定擴充の道德である。

昔告子は曰つた。「性はなほ杞柳の如く義はなほ桮棬の如し。人の性を以て仁義を爲ると、猶杞柳を以て桮棬を爲るが如し」と。併し仁義道德は人性から人間が作り出すものではない。人性を戕賊し矯揉して爲るものではない。我々は仁義道德を作り出して何の用に供するか。如何なる遊戲に用ふるか。我々の欲する所は道德でなくて、わが生命に遵ふことである。好事家は之を道德と名けやう

超人とは消極的名稱である。一切の有限有漏有法を超越し否定するの意義である。彼は自然を超越し、國家を超越し、凡べての客觀道德を超越しすべての過去傳説を否定して居る。されど一切を超越し否定し去つた後に、大なる力に觸れた、大なる氣息を聽いた。そこにはまた超越すべきものはない。最早や空じ去るべきものはない。有るものは常住圓滿の生命である。超人は此の生命を抱いた。之に接吻した。之に誓つた。あゝわが憧がれし最愛の友よと流涕歎美した。而して彼は此の接吻に由つて一層の慰藉と勇氣と狂熱とを與へられたのである。更に奮闘を續け創造を前行するのである。故に超人道德は永恒無窮である。

斯くの如く超人は三つの寶を有して居る。之を三美と稱する。凡俗は之を三惡と名けて罵詈する。超人は限りなき憧憬者である。故に彼は極りなき歡樂 *Wollust* の中に酔ふて居る。

超人は限りなき否定者である。故に彼は猛烈なる勢欲 *Henschucht* の獅子に跨つて居る。

超人は限りなき肯定者である。故に彼は悠々として生適 *Selbstsucht* の妙郷に逍遙する。この神秘

不可思議の幽境から、眞の愛と創造と自由とが生じて来る。

*

斯くの如く超人は自由である。故に彼は拘束、壓迫、他力の道德に反對する。

斯くの如く超人は天真爛漫である。故に彼は虚偽、情實、自欺の道德に反對する。

斯くの如く超人は眞面目である。故に彼は天上樂園の空想、未來の賞罰に反對する。

斯くの如く超人は剛健である。故に彼は奴隸的、婦人的、服從的道德に反對する。

斯くの如く超人は沈黙である。故に彼は群衆道德、法螺吹道德に反對する。

斯くの如く超人は創造である。故に彼は無變化、沈淪、有極の道德に反對する。

斯くの如く超人は生適である。故に彼は、不羈奔放、獨立自由、猛進飛躍、己れの欲する所に從つて矩を踰えない。之れ即ち聖なる所以である。

即ち誠なる所以である。即ち自疆不息なる所以である。即ち悠々持久なる所以である。即ち永恒快樂である。

命の判斷する所に眞理がある。生命の勞作する所に價值がある。生命は限りなき自己創造である。

自己發展である。自己實現である。而して自己満足である。斯の如く生命を自覺するは眞の悟りである。此くの如き生命の歎美者、共舞者は眞の超人である。故に超人は唯我獨尊の權威者である。

『わが愛するものは我れの善である。そは全く我れに叶ふが故に、われひとり此の善を欲する。そは神の法則として欲するのではない。そは人間の規範、または生活必要として欲するのではない。又、天上や樂園に達するの道標として欲するのでない。唯一つの地的道德、是れをわれは愛する。この中には凡べてのものに共通な俗智や小理性を含むと殆どないのである。此の鳥は我が傍に巢を造つた。故にわれは彼を愛し、彼を接吻する。彼

は今わが側に金卵の上に坐して居る。』

『わが兄弟よ。汝が最も幸福な時は、たゞ一つの徳の外に何をも有せない時である。斯の如くにして汝は容易に（解脱の）橋梁を渡るのである。併し多くの徳を有するは最も苦痛なる運命たるとは、明かな事實である。之が爲めに衆人は荒野にさま

よひ、徳の爲めに戦ひ、遂に疲勞して死ぬのである。わが兄弟よ、戦争と屠殺は惡であらうか。併し斯の如き惡と嫉みと、疑ひと讒謗とは、多くの徳における必然ではないか。見よ、彼等はいかに最高のものたらひと渴望して居るかを。彼等は互に汝の全靈魂を彼等の使者たらしめむと欲するてはないか。怒りと惡みと愛とにおいて、汝の全き力を占領せむと欲するではないか。』

斯の如く賢明なるザラトウストラは叫んだ。彼は唯一つの地的道德の愛慕者、實行者であつた。他の諸徳を有するは即ち生命の侮辱である。生命の屠殺である。最も愚なる自己裏切りである。虚偽、殺戮、讒謗、姦通等の有らゆる惡徳は、之より初まるのである。人生の不幸、失敗、悲劇は之より生ずるのである。あゝ人生の秘訣はたゞこの一徳を固守するにある。こゝに人生の幸福がある。人生の満足がある。人生の莊嚴と權威がある。地的道德は眞實にして清淨、圓滿にして正直なる肉體（生の意）の語る所である。超人は生命の第一の使者、一徳の最後の行者である。

自我と信仰及神

稻 毛 詛 風

信仰は自我の存在價值を現實我以上の或ものに依て絶對化永恒化しやうとする全人格要求及努力である。而て安心立命といふは件の價值我を絶對化永恒化する過程に伴ふ證據感到過ぎぬ。

自我の絶對化乃至全人格的要求を以てその本質とする限り信仰は積極的精神活動である。不斷の向上精進、不斷の進歩發達、乃至不斷の憧憬祈求を生命とする限り信仰は自我中心の精神的努力である。信仰過程は纏て不斷の戰闘過程である事はいふ迄もない。超越し潛伏し踏破し往くべき對象、詳しくは生の價值と權威とを自覺せしむる素材のない所に信仰の餘地はないのである。要求や理想や打ち勝たるべき障害物や從て努力活動のない所に信仰の存在はないのである。斯かる意味に於て信仰は正しく自力分内の事といはねばならぬ。

併し乍ら救済を以て他力とするのは吾々の必ずしも反對する所ではない。但し救済は靈の要求の

生んだものである。價值我の絶對化過程に伴生する必然的豫想條件に過ぎない。救済あるために努力があるのではなくて、努力に依てのみ得られるのが、即ち努力を根據としてのみ假定し得るのが救済である。純他力乃至全救済といふが如きは人間の究竟要求が現實された境地にのみ存在し得るのである。これが即ち神になつた状態である。併し乍ら此種の境地も神も實際には決して存在し得ないのはいふ迄もない。現實如在の信仰過程はかゝる境地乃至神を要求理想とする不斷の精進向上努力活動なのである。自力又自力の奮闘過程である。從て所謂他力は信仰の豫想要求乃至自力の效果實現の證據感認に他ならない。全く自己を没却し超越して永久他力の救済に絶對化された時は既に神となつたもので其處にはもはや人間の信仰はない。人間としての信仰は到底他力救済を豫想しての自力精進に過ぎないのである。神とな

*

斯くの如くにして超人は、最もよく生を愛し生を味ひ、生に酔ひつゝあるのである。かくして遺憾なく自我獨存主義を實行し、極端にエゴイズムを發揮しつゝあるのである。あゝ愛すべく、敬すべく、讃むべきは、超人である。

斯くの如くにして超人は、群衆より嘲けられ、罵られ虐げられる。凡俗は彼を反逆であると叫ぶ。色盲者は彼を色盲であると嘲ける。無智は彼を沒常識と笑ふ。臆病は彼は意氣地なしと譏る。無道は彼を墮落と罵る。至誠剛健なるものは、超人のみひとり至誠剛健であると讃美する。斯くの如く群衆は互に喧嘩口論し、殺戮し、乖反散離し、虐待陷没するのである。超人は之を顧みて、「われ世の中に泰平を出さずして却つて魔刃を閃かした」と囁いて笑ふのである。

*

斯くの如くにして超人は、ますます孤獨寂寥の道を辿り、ますます高く峻嶒なる小路を攀ぢ、いよ／＼深く沈黙の森に分け入るのである。彼はたゞ獨りて「不可能」の道を歩いて行く。彼はたゞ光

明にあこがれて行くのである。戀人を慕ふて行くのである。斯くの如くにして超人は、止むことを知らない。疲るゝとを知らない。高ぶるとを知らない、限りなく憧がれ、限りなく漂泊するのである。或る時は谿水の潺湲を眺めて、「あゝわれ全世界の中でたゞ汝一人を愛する。たゞ汝一人を戀ひする。汝の爲めにわれ一切を犠牲にしたのである。汝を愛するものはたゞわれ一人である。」と言ひ乍ら、ハラ／＼と涙を流すのである。また、或る時は天上の雲を仰ぎ見て、「われよりも父母、兄弟、朋友を愛するは、我れに叶はざるものである。われよりも國家社會を愛するは、我れに叶はざるものである。われよりも全世界を愛するは、我れに叶はざるものである。われよりも眞理を愛するは、我れに叶はざるものである。我れは、天の上天の下唯我獨尊である」と叫び乍ら雀躍するのである。斯くの如くにして超人は現實を離れて遠く／＼適くのである。凡俗を超えて高く／＼登るのである。あゝ我れ超人を思ふとき、悲哀の涙は瀧瀨の如く苦悶の胸は烈け破れむとするのである。

(Kühn war das Wort, weil es die Tat nicht war. ンネレ)



都會詩人ブロックを論ず

昇 曙 夢

最近露國詩壇の新らしい運命に於いて、特に光つてゐる一人の明星がある。アレキサンドル・ブロックと言つて、一千八百八十年露都に生れ、ペテルブルグ帝國大學の博言科の出身である。一千九百四年最初の象徴詩集『美しきターマを歌ふの詩』を出してから、彼は忽ち新らしいムウブメントの中心となり、一躍して現代都會詩人の、第一人者を以て目されるやうになつた。彼が都會詩人としての特色は、一種の空想即ち詩的幻想の眼を通じて、都會の日常生活を觀察し、其の朦朧たる印象を象徴化する所に在る。都會詩人としても、彼は前期の都會詩人に比して、當に一步を進めた詩人と言はねばならぬ。彼は常に描寫するのみに止まらず、更に描寫したる事象に精氣を吹込み、

之に靈を賦與してゐる。俗臭紛々たる都人の生活紅塵萬丈の市街の中にあつて、彼は慥かに詩的要素を發見するだけの天才がある。卑俗なる題材を捉へて、それに據つて一個の神秘的寫實詩を作るのが、ブロックの得意とする所で、其詩には幻想と現實性とが參差錯綜して、魔の夢のやうな都會的氣分を織出してゐる。それ故に彼を論ずるには、専ら都會詩人としての立脚地から觀て行かなければならぬ。

*

六十年ばかり前、英國の文豪 Dickens は、瑞西のロザンナから或る友人に送つた手紙の中に、自分の創作力の衰へたことを書いて、次のやうに言つてゐる。

らんとしての向上努力に過ぎないのである。人間としての信仰は不斷の進歩であり戰である。迷つては悟り悟つては又迷ひ、懊惱の結果が安立となり、安立が復條ち懊惱となり、分裂の要求が統一を産み、其統一が更に大きな統一を形成せんがために再び分裂するといった様な不斷の交互的前進作用こそ眞乎如實の信仰過程なのである。人間であり乍ら、相對的存在であり乍ら、神乃至絕對者を忻求して自己を其位置にまで向上しやうと努力し、努力せねばならぬ所にこそ人間の宗教的信仰の其價值が存在するのである。

信仰を純他力的に説かうとするには自己を以て神のあらはれ、神の僕とせねばならぬ。即ち吾々の云爲行動は如何なる些末な事に至る迄悉く神の恩寵であるとしてこそ初めて一切を純他力的に見る事が出来るのである。併し乍ら、吾々の如く信仰の本質を以て「價值我の絕對化に對する要求」となし、神を以て理想我即ち生の第一義の產出した自我の究竟體と見、更に其の神から來る無限の救濟力乃至恩寵をも偏へに只自我の要求若しくは要求の實現に要する努力の内容に比例するものとな

す時は、他力は常に豫想原理であつて、詳しくは自力をその根據理由としてのみ可想的であり實在性をも具ふるものと見ねばならぬ。あらゆる人生事象の中心が「自我活動」である限り、自我の核心たる「信仰作用」が自我的自力的要素を以て其本質とすべきは當然の理路である。自我活動、人格生活に意義と價值とを附與しその充實完成向上を望めばこそその信仰でも救濟でも神でもあるのである。要求としては兎も角、現在如實の事象としては神は自我の造れるものである。詳しくは自我乃至人格の最も大なる、最も巧妙なる、最も精緻なる產物が即ち神である。神が自我の創造した最傑作であればこそ、此の神の中に全自我を没入して此の神が即ち自我である。此の神の中に自我がある。此の神に依てのみ自我が有價值に生活し得るともいへる。出來合の神といふ事程世に無意義なものはない。自我と沒交渉な神といふ事程非真なものはない。自力を豫想せぬ他力といふ事程批判的なものはない。神の中に自我の最大至極の活動、自我の精髓、最高力、全特色が結晶し表現せらるればこそ神に吾々を支配する全能力がある。(完)

を享樂しやうために都會に現はれたのではなかつた。ところが近頃舊田園的心理の名残が消滅するに連れて、西歐都會文明と市民の運動とは全世界を動かし、露西亞も到頭其の渦中に入つた。そこで始めて是迄の田園文學に對して、都會文藝が發達するやうになり、數多の都會詩人の輩出を見るに至つた。けれども我々は未だブロックのやうに、有機的に都會と同化したる詩人を他に見ない。

太陽は自然界の一大光！として、萬人の等しく仰ぐ所であるが、ブロックに取つては無用の長物である。彼の心は常に人工的の光に憧れ、之に接して始めて活躍する。彼の空想はアーク燈や電氣燈の輝やく所に働いて、始めて美しい傳説を造る。

酒場に、横町に、曲角に

將た電氣の夢に、眠もやらず

私は限りなく美しきものを探した、

永久、巷の風説に憧がるゝ者を探した。

ブロックは曾て獨居の何たるを知らない詩人である。獨居したら彼の心は直ぐに眠る。彼のミュ

ーズは歡喜に湧返る都會の歩道でなければ興奮しない。たゞ街道の騒々しさ動搖に接して始めて、秘密の扉が彼の前に開かれ、人の心の隠れたる生活が判然と讀まれる。叫び聲に酔はされた夢のやうな市街、それに沿うてづゝと連つてゐる街燈の列、町並の店頭を飾る窓硝子、それに輝く人の世の太陽——それ等を見ずには彼は一日も生きてゐられない。彼は都會の輝かしい虚偽を好み、香水の燃えるやうな香を愛する。紅く塗つた薔薇のやうな深紅の唇、緑りの弧を描いたやうな眉を愛する。彼が詩の背景は大都會が起つてから變ることのない同じ框である。都會文明が世界の生活を押込めてゐる框である。黄金色のパン菓子、小さな横町の塵の山、おどけた幫間、破れかゝつた小釜、毎日々々女を引張つては堀割の間を散歩する男、料理店のテーブルの傍に立つて眠さうな眼を擦つてゐる給仕、女の衣服の絹摺れの音、かうした神經を煎立たせるやうな、人を聲はせるやうな音響や色彩が、ブロックのミュージズを養つてゐる。

レストランの熱い空氣は

夜毎に荒く、騒々しく、

『僕の創作力の衰へたのは、僕の周圍に市街と通行人との無いことが、主なる原因を爲してゐるやうに思はれる。市街と群衆とが僕に取つてどのくらゐ必要であるかは、とても君に傳へることができない。市街と群衆とは、僕の腦髓に何時も營養分を送る。其の營養分の不足を僕は到底耐へることができない……。ロンドンで一日過したら、僕の氣力は屹度恢復するに違ひない。人を蠱惑するやうな街燈の無い所で、筆を執ることは何より苦しい。さうして疲れ易い……。』

我々はブロックの第二詩集『不意の歡喜』に對する度毎に、デッケンスの此の言葉を想ひ出さずにはゐられない。ブロックの此の詩集には、爛熟せる都會の夜の空氣に涵されたやうな美しい詩が澤山に充ち満ちてゐる。

ブロックはロザンナや田園では、とても考へられない詩人である。彼はたゞ巴里の並木道か、ペテルブルグのレストランか、さういふところで始めて想像することの能き詩人である。都會は本來町の人のシムボルであり、彼等が世界に齎した新らしい心理のシムボルである。その都會が近

頃だん／＼發達して來て、今では歡樂に酔ひどれた巨人となつて、人類の智力と感情とを悉く吸ひ込んでゐる。さうして過度の飽滿に心身が頽廢してしまつた揚句の果は、更に五色の酒に新しい刺戟を求めるやうになつた。

都會の魔力と、其の熱鬧雜沓の中に起る新しい傳説とは、西歐に於いてボードレールとヴェルレーヌとを出し、露西亞に於いてはブロックに其の代表的詩人を見出した。是迄の露西亞文學が概して田園文學であつたと云ふことは、今迄に度々繰返されたことである。露西亞の貴族制と農奴制——それが長い間、地主階級の代表者等だけに智的活動を限つてゐた結果として、其の間に露西亞文學は、偉大なる田園民族の感情と氣分とに涵されてしまつたのだ。トルストイ伯までの露西亞の偉大なる藝術家等は、實際其の精神に於いて皆な村の人であつた。彼等は有機的に都會の空氣に養はれなかつた人々として、都會的情調とは全く没交渉であつた。都會の迷妄を描いたチクラソフてさへ、都會の氣持とは非常に隔つてゐた。偉大なる都會詩人の第一人者ドストエフスキも、都會

充分である。彼は特に動搖と動作の詩人である。都會では耳を聳するやうな雜沓が絶えず起る。其の雜沓の中で當の動搖者を捕捉するのは困難である。けれども彼等の表情と身振とは印象することが能きる。『山羊ほどの赤いものが跳ねた』と云ひ『群衆の中に消え失せた』と云ふ。が、『赤いもの』とは一體何を指したのか、どんな女が『消え失せた』のか、ブロックは之に應ずる名詞を示さない。示さないのが當然である。何故と言つて、市街の雜沓の中で人の顔は決して記憶に止まるものでない。止まるのはたゞ閃影だけである。『人々の顔は漂ひながら刻々に代つて、忽ち黒い群衆の中に溺れた』とブロックは歌つてゐる。彼はかうした市街の喧騒に酔はされて、變な心持になつたのだ。で、是等の刻々に變り行く圖や、チラと閃く人影や物象が或は闇に消え、或は街燈の明るみに浮み出して、仕舞には幻影のやうに思はれて來たのだ。彼は言ふ、『ふと、日光のうちに現はれた生氣のない都會の幻影のやうであつた。背中は消えて、低い雨雲の愁ひに鎖された臆病な顔が聳えた。』

*

お伽噺は現實となつた。都會の耳を聳するやうな騒ぎ聲、眼を昏ますやうな光、阿片や嗅煙草にも増して心を鈍らす馬鹿げた酒宴——其等のうちに今の人は昔の人に幻影や異象と思はれてゐた盡惑の世界を現實に見出した。今では幻影を造る爲に、特に想像するの努力を要しない。實生活其の物が既に幻影となり、人間や事象が幻像に變つてゐる。音響と色彩とが物狂ほしく移り行く中で、お伽噺は實生活の所産であるか、我々の想像力の所産であるか、最う區別が付かなくなつた。人類は都會に於て盡惑の生を造り、變化の奇術を造つた。で、現代人の神經は其れに堪へられなくなつて、幻覺は遂に彼等が知覺の規範的形式となつた。神秘は垂れた窓掛の蔭にも、薄暗い街道の隅々にも隠れてゐる。現實と空想との境界は最う取り除かれた。

靜かな空氣の中に——隠れたものがある……

彼處には何物か隠れてゐて、さうして笑つてゐる、

何が笑つてゐるのか。私の呼吸なのか、

私の心臓でも樂しげに鼓動してゐるのか、

或は窓外の夢のやうな薔薇色の春なのか、

それとも明るいものが私に微笑んでゐるのか、

春らしいあくどい香ひが
醉漢の叫び聲を調べる。

ブロックは常に都會を歌ふばかりでなく、彼の藝術は現代都人の心理や、また彼等が社會に對する態度を驚くべく巧みにシムボライズしてゐる。昔の人は現代の人が僅か一日の間に經驗してゐる印象を、一生かゝつても感受することができなかつた。智識の進歩、天才の成功、生活の窮迫、人間の苦痛、科學、藝術、冒險、犯罪——是等は今日どんな街道にでもザラに轉がつてゐる。到底昔日の比ではない。現代人は是等の事物に長く執着してゐると云ふことはない。生活は彼等の前を系統もなく、秩序もなく、バラ／＼になつてズン／＼疾走してゐる。彼等は途中で逢着する人の顔を凝視することもなく、其の心を深く洞察する餘裕などとは無論無い。たゞ僅かに現象の斷片を捕捉するだけである。彼等の眼に人はたゞ黒い朦朧たるシルエツトとしか映らない。彼等は馬車の中では動搖を擲み、商館の陳列場を覗いては、たゞ光輝と色彩とを捕捉するだけに過ぎない。ブロックはかう

した刻々に移り行く知覺の跡を追ふ詩人である。彼の詩は恰も街道の混沌たる騒音のやうな響きがある。其の騒音の中に時々車輪の軋りや、戸を開める音や、醉漢の叫び聲が手に取るやうに判然と聞える。ブロックは物を叙述するのではなく、たゞ其の閃影を掴むだけである。彼は好んで無系統と不秩序とを歌つてゐる。系統がなく、秩序がない所には、それだけに氣分が多く出る。それだけに現代都人の心に詰るところが多い。現代都人の眼の前には、人類の緊張せる勞力の結果が、眩しい萬花鏡にでも映るやうに、刻一刻と變つてゆく。そこに一向纏つた所はないが、其の代りに氣分と幻影との流動がある。

眼の中に輝いた。空想にとまつた。

打顫ふ心臓に粘り着いた。

山羊ほどの赤いものが明るい地平線で跳ねた。

馬車の扉がバツと開いた、

物乞が打顫ふ燈火擡げた、

濡れた柱の上に芝居の廣告がある……

彼女は明るい歩道に出て、

群衆の中に消え失せた……

ブロックに名詞の必要はない。彼は動詞だけで

聖餐に預つてゐた孩兒が
後から誰も來ないので泣いた。

ブロックの歌つてゐる世界は、何時も神經質な都人の心に映ると同じ世界である。都會の住者は絶えず喧騒と光とに心を波立たせてゐる。數限りない日々の印象に始終興奮してゐる。さうして刻々に新しい美酒に酔はんことを願うて止まない。かういふ人々の神經に映する世界が、即ちブロックの世界である。ブロックのロマンチズムは此處から起る。ロマンチックとしてのブロックは、ロマンチズムの有ゆる約束を體得せる詩人である。ハイネが曾てブレンタノの喜劇を批評した言葉に、『思想から言つても、言葉から言つても、此の作のやうに、支離滅裂なものは他に類がない。けれども凡て是等の斷片は悉く生きてゐる。樂しさうに動搖してゐる。君は之を讀みながら、自身がいゝろんな思想と言葉とのマスカラドの中にあると感ずるであらう。凡て是等は人を魅するやうな不秩序のうちに蠢動いてゐる。たゞ狂妄な氣分のみが全體の畫に或る統一を與へる……』と、是れは同時にブロックの詩を説明した言葉である。

と見ていゝ。けれどもブロックのロマンチズムは、チオ・ロマンチズムである。舊ロマンチズムの中には、騎士の劒戟の音と、ゴチック式の會堂から響く祈りの歌とが、多分に含まれてゐた。が、ブロックのロマンチズムには、是等の響きに代つて、馬車や電車の音、瓦斯や電氣の光が充ち満ちてゐる。ブロックの空想は舊ロマンチックの空想と同じく、宇宙を抱括したものであるが、時代と民族とは比較的斷片的に、慌だしく、不明瞭に攝取され、幻想は益々狂的に、生活は益々迅速に疾驅してゐる。斯くしてチオ・ロマンチックは都會の幻影と混沌との中から、絶對者の爲めに美衣を織つた。ブロックが自己の宗教的憧憬の情をシムボライズした第一詩集『美しさダーマ』は、朦朧たる幻像のやうに讀者の前を這つて行く。あらゆる時代と民族とは、皆な彼女を飾らんとして様々の贈物を齎らした。けれども彼女のトゥルバドウルは、是等の贈物を一つも取らなかつた。彼女の衣服を一定のスタイルに當てゝ裁たうとしなかつた。さうして彼女は、全人類の戀の惱みを綜合した朦朧たるシムボルとなつた。彼女には定ま

或はたゞ戀する私の心に過ぎないのか、

或はたゞさう思はれるだけなのか、一切が解るだらうか。

プロックは神經を刺戟する一切のものを好む。

病的に鋭敏な感覺を強める一切の物を好む。特に感受性を鋭くするものを好む。たゞ此の溫順しい、鋭敏な、さうして刺戟さへあれば、直ちに燃え立つやうな想像力のみが、彼を蠱惑の世界に住ましめ、彼の眼から現實の姿を蔽ふのである。此の想像力は都會に於て培養せられ、都會に於てのみ自己の翼を擴げることが能さる。さうして此の想像力によつて始めて大都會の音響と色彩とは、傳説の世界に改造されるのである。詩人は言ふ。

『彼所の魔法のやうな旋風と光のうちに恐ろしい美しい生の幻影が見える。夜——雪の女王——は其の長い裾を星の飛沫の中に曳いてゐる。喧しい街道には死人がバタ／＼と斃れる。強い飲料と赤い葡萄酒は、殺戮が開えないやうに不思議な力で耳を聳し、死が見えないやうに眼を昏ます。』

人間の悲哀、人間の涙はプロックの詩に於ては全體の斑らな美を補充する新しい輝かしい斑點に過ぎない。彼は人間の悲痛を悲しんでゐるといふ

よりか、寧ろ此の悲痛を惱ましきまでに享樂してゐる。だから人間の悲痛煩悶は彼の詩に於て、都會の夜のアーケ燈や電氣燈や、瓦斯燈に照り輝やく幻夢のやうな不可思議な全體の畫を補足する一つの要素となつてゐる。さうして悲哀と涙とは彼の詩に於て通例美しい少女の姿で現はれる。

少女は教會の歌班で歌つた、

異邦に憧がれてゐる人達のことを歌つた、
海に去つた船のことを、

己が歡樂を忘れた人達のことを歌つた。

彼女の聲は顫えながら圓蓋へ飛んで行つた。

暁の光線が白い肩に輝いた。

人々は薄闇りの中から聽いてゐた。

まるで白い衣服が光線の中で歌つてゐるやう。

人々は今に歡樂が來ると思つた。

凡ての船は靜かな入江に着いたと思つた。

異邦に憧がれてゐる人達は

光明な生活を尋ね出したと思つた。

歌の聲は甘かつた、光線も優しかつた。
たゞ食堂の高い天門のところだ、

さびオリンの吁鳴聲を聞いてゐる。が、それでも作中の人物は一定の精神的有機體の作用を保つて詩的眞實を失はない。彼等が一定タイプの内面的世界に影響し、又は彼等の蔭に一定階級の精神が表示されてゐる間はまだ眞實である。ブロックは泥酔と無知とを描きながら、それが最高の神秘を洞觀する唯一の方法だと信じてゐる。それでゐて眞の作物の現實的價値は少しも減少しない。何故なら、無知と泥酔との中に遣る瀾ない自己の煩悶を注いでゐる人の内面的世界は、それが爲に益々明瞭になるからである。詩人が永久の帷を上げて天から新しい秘密を奪つたと思ふ時、實際彼は今迄知られなかつた地上の新らしい一角を照してゐる。ブロックは恰度其の様な詩人である。彼の詩は概して神秘的陰影を帯びてゐる。既に神秘的であると云ふことが、詩人自ら自己の幻影の絶對的生活を信じやうとする何よりの證據である。けれどもブロックの詩が我々に取つて最も貴いのはそれが現代の畫であるからだ。其等の畫には現代精神の複雑な姿が悉く捕捉されてゐる。現代精神と言つても彼が描いてゐるやうな意味に於ての現

代精神は實際には存在し得ない。多數の人は彼が描いてゐるやうな精神的經驗を同じ程度に於て經驗すると云ふことは到底不可能である。彼は凡ての詩人と同じく自分に最も近い、自分の最も熟知せる事情に於て起つた精神の幻像を目して、全人類の精神的生活だと認めてゐる。縱令其所に多少の誤謬はあるにしても、現代都人の眞實の告白たる彼が詩の價値を貶すに足らない。ブロックの言ふ所に據ると、現代都人の精神は、歴史と實生活から來る不斷の印象に充たされ、懷疑と矛盾とに弱められ、長い間悲痛煩悶に浸蝕されてゐる。さうして煩悶の間は疲れ勝であるが、一旦歡喜の爲に興奮して來ると、踊つたり跳ねたり笑つたりする。さうして絶えず幻夢と傳説と、秘密と謎とを造つてゐる。そればかりではない。現代都人の中には、虚偽と天啓との區別が付かなくなつて、石を玉と信ずるやうな迷夢が多い。斯う云ふ時代には、眞の天才でも容易に一時的の成功に誘はれて、滅亡を早めるものであるが、幸に我がブロックは未だ此の邪道に陥らずに、自己の眞實な道を辿つてゐる。(完)

つた名がない。彼女は有ゆる名を持つてゐる。

過去の着ざめた空想のやうに

私は見知らぬ言葉の斷片と

顔の特徴とを維持した、

お前が住んでゐた元の世界の反響のやうに。

黽毛の下に黄昏を隠しつ

着ざめた女は行つてしまつた、

お前の後ろに生きた獨木舟がある、

白い白鳥のやうに漂うた、

獨木舟の後ろには火のやうな流れがある、――

私の不安な歌よ……

ブロックは長い物語を、ダラシなく擴げてゐる。

名もない國の事や、老人の事や、孩兒の眼を持つた少女の事を、それからそれと連ねてゐる。彼の浪漫的な宇宙的精神には、何時も有ゆる現象の絶對的方面を表示せる普遍な物が表象される。其故に彼は様々な事物、様々な時代、様々な外觀に共通した精神の類似を好んで描く。で、ブロックの作に於ては、いろんな氣分や葛藤が、時間空間を超越して互いに感應し合つてゐる。彼の抒情悲劇『見知らぬ女』の中で、居酒屋には入つて來た青年が、酔つばらつてゐるお客の一人に向つて、『君、コスチャ君、彼女が入口で待つてゐるよ』と云ふ。けれども我々の前には、めかしたお客で一杯な大きな

客間が、電燈に照されてゐるだけである。醉漢等は銘々異つた趣味を有し、異つた談話を交へ、異つた顔をしてゐる。不圖、件の青年が一人の客の前にツカ／＼と寄つて來て前の言葉を繰返す、『君コスチャ君、彼女が入口で、ま、待つて……』と低聲で訥る。と、周圍が常になく變になる。是等の愚かしい人達は、同じ言葉が同じ順序に於て、何所てか發せられたことを急に想ひ出したかのやうに。是れは精神の交感ではなく、正しく氣分の感應である。が、彼は何所か我々以外に人々を見舞ふ精神的存在があると信じてゐる。而て詩人の任務は最高の世界から遣はされた是等の精神的使者を世界に明かにするにあると考へてゐる。

現代詩人の弊風は、一定の詩的限界を越して誇張と反復とに墮し易いところにある。が、ブロックはまだ地上との交渉を失はない。彼の詩はまた地上の響きと香ひとに充ち満ちて、我々と共鳴する所が多い。そこに彼の特徴がある。抒情悲劇『見物小屋の主人』に於て、ブロックは世界を見世物小屋のやうに表象して、そこに實在しないダーマや、女王や、賤民やを觀、地獄の音楽や愁はし



生命の源—文化の泉

内ヶ崎 作三郎

一

昨年の秋開かれたる大英學術協會の席上シェーファー教授が「生命の起原」に關する論文を朗讀した。然るに端なく此の問題は化學者、哲學者、宗教家等の論難攻撃を惹き起したのであつた。同教授の説によれば、生命は數種の元素を化合することに依りて製造することを得るのである。換言すれば將來化學者はその實驗室に於て、生命を創造することが或は可能なるべしといふのであつた。さて是等の元素はもと／＼生命なきものであるか、或は元素そのものとして一種の生命を本具しつゝあるものであるか。是れ先づ定義せらるべき先決問題である。例へばシェーファー教授は生命を創造する材料として、酸素、炭素、窒素、水素、或はその他の元素を用ふるとして、さて是等の元素は果して生命なきものなりや、否や、これは眞面目な研究を要する問題である。世に驚くべき現象多しと雖も、化學上の元素の如く不可思議なるものはない。もし酸素が死せるものであるならば、如何にして燃燒力を有するか。水素が死せるものであるならば、如何にして酸素と結合することに依りて、空氣といふ新化合物を生ずるの理由があるか。それ故に吾人は化學上の元素そのものゝ中に、一種の生命が本然的に



婦人問題に對する吾人の態度

最近の論壇に於て著しく世人の注意を惹き起しつゝあるものは、婦人問題殊に新しき女の問題である。古來婦人は男子の配偶として、内助者として、或はその愛人として常に相纏綿して、社會の組織に色彩と情調とを與へたるものであつた。然るに因襲の久しき我が國に於ては、この大問題が今日まで閑却せられてゐたのである。兎も角昨今論壇の風潮が此の問題を捉へたるは頗る興味ある現象と云はなければならぬ。さりながら世間には往々にして、單に一時的の好奇心に驅られて本問題を云々し、或はこれを營利の目的に供せんとする者がある。精確に調べて見たならば、所謂新しき女といふものゝ數は、極めて少數であらう。然るにこれを中心として騒ぎ立つるのは全く一種の雜誌政策である。吾人は本來の主張として婦人問題を最も慎重に取り扱はんとするものである。吾人は此の問題を根本的に研究せんとするものである。吾人は新しき女に反對するものではない、復た必ずしも新しき女に賛同するものでもない。吾人は吾人の見地に立ちて婦人の使命を論究すれば足るのである。吾人の研究は必ずしも本號を以て終るものではない。將來屢々此の問題を捉へて讀者に見ゆるであらう。

(うちがさき)

さて人類に對する生命の賦與者は誰であるか。いふまでもなく、婦人そのものである。こゝに婦人問題第一の鍵鑰がある。婦人問題が眞面目な問題である所以はこゝに存するのである。今や全世界を掩はんとする婦人の覺醒と、その運動とに對して、是非を言ふものがあらば、婦人問題解決の第一歩は生命賦與者としての婦人の立ち場から出立しなければならぬ。

假りに男子はあらゆる他の點に於て婦人に優れりとしても、生命賦與者たるの特權は永久にこれを婦人に捧げざるを得ない。否な、一切の男子すら母といふ特殊の婦人を通してのみ現實界の光明を仰ぐことを得たのではないか。隨て婦人問題は婦人のみの問題ではなくして、實は男子全體の問題である。あらゆる時代に於て、婦人問題は同時に男子の問題であるといふことは此の見地よりして是認しなければならぬ。而して男子も亦この生命の賦與に對する協力者たるが故に、男子自身の問題すら即ては婦人問題の範圍内に在りて論ぜられなければならぬ。男子が常に清新なる興味を抱いて、婦人の問題を注目するやうに、婦人も亦これに譲らぬだけの熱心を以て男子の問題を研究しなければならぬ。

II

吾人は成長發達したる過古の文化の遺産を相續してゐる。吾人は過古人類の努力の結晶たる制度の中に生活してゐる。吾人はその祖先よりして言語、風俗、習慣を傳承した。併しながら此の驚くべき文化に對して、最初の刺戟と衝動とを與へたのは誰の力であつたか。今日の人類學者の一致する所によれば、それ等は主として婦人の功績である。自然界に於ける人類の奴隸中の最大なるものは火である。而して最初に火を發見したる者は誰であらう。希臘の神話によれば、プロメテウスが天上の靈火

現在するものと考へざるを得ない。無論それは吾々人間が有する生命そのものとは、發達の程度と種類とを異にするものであるかも知れぬ。しかし何れにせよ、一種の生命が本然的に存在するとしなければ、化學的神秘の解釋が出来なくなる。即ちシェーファー教授の提案は、より單純なる生命の實相を蒐めて、より複雑なる生命の顯現を實證するといふことに外ならぬのである。想ふに生命の實在は必ずしも一種の化學的要素の裡にのみ限られたるものではない。一切萬有の裡に生命が動いてゐなければならぬ。苟しくも一個の存在物としての形式を具備する以上は、必ずその生命を抱いてゐなければならぬ。引力とは何ぞや、生命の象徴ではないか。或は求心力、或は求遠力これ悉く生命の發動そのものでなければならぬ。紅花、綠葉、彩雲、星光、水聲、風韻悉く生命の發露である。自己を裹む凡べてのものは生命であり、自己を泛べ、自己を成長せしめ、自己を生活せしむるもの、一切は生命である。生命は宇宙の全であり、宇宙は生命の顯現としてその光明と尊敬とを本具するものである。

世に尊ぶべきもの多しと雖も、生命の如くしかく尊敬せらるべきものはない。而して是等の生命のうちにて最も尊ぶべきものは、人間に宿れる生命である。此の生命が神秘であり、幽玄であり、崇高であり、尊嚴であることは、世界人類の歴史がこれを證明してゐる。英雄の事業、志士の犠牲、婦人の紅涙、勞者の努力はみな生命讚美の實證ではないか。蓋し人類が萬物の靈長である所以はこの不可思議な、しかも豊富な生命を本具してゐるが爲めてはないか。生命が斯やうに尊むべきものであるとしたならば、その生命の賦與者たる者は幸なる哉である。如何なる民族に在りても、その人類最初の渴望と崇拜は生命の賦與者に寄せらるべきものであつた。あはれむべき迷信、卑しむべき傳説の間にすら住々にしてこの麗しきあこがれの思ひが潜んでゐる。

必要は進歩發達に對する大なる刺戟である。吾人は食物の保存者、準備者、時としては供給者としての婦人が、その夫たり、主人たる男子の我が儘なる要求を満足せしめんが爲めに、多くの才能を働かす必要があつたことを考ふことが出来る。同時に彼等には出来るだけその勞働と、時間と、困難とを減少せしむるの必要があつた。菜食人種の間に在りては、恐らくは婦人は農業の進歩を促して、最初に婦人は果實を集め、本草を撰びて日々の食料となしたであらう。聽て耕作の道を發明しては、地上に種子を播いて收穫を得るの方法を講じたであらう。かの原始民族がその遊牧の狀態よりして、農業の狀態に進歩したるは恐くば婦人の努力の結果であらう。即ち婦人は種族の社交性を發達せしめ、平和的産業の發展を促し、かくして人類は文明の行程に於てその一步を進めたのである。

間もなく人類は野菜の外に肉を食するに至りて土器の必要が生じた。最初に土器を作りたるものは食物保存の必要に迫られたる原始時代の婦人であつたであらう。且つ婦人は天性色彩に對する藝術的鑑賞の力を有するが故に、家具に彫刻を施し、土器に繪模様を與へ、種々なる器具の表面を滑かにすることは、婦人の發明であるに違ひない。日常生活に於て美を愛慕する精神は確かに、智識及び道德發達の主なる要素であるが、これも亦婦人によりて最初に示されたのであらう。婦人はまた太古以來裸であつた人類の爲めに衣裳方となつた。これは今日猶ほ吾人の實見する所である。

搖籃と裁縫は並行するものである。最初の織匠は嬰兒の爲めに衣服を必要としたる婦人であつたであらう。或は禮儀作法に對する觀念の進歩は、極めて遅々たるものであるが、兎に角今日現在の狀態にまで發展したるは、婦人の力が多きに居ることゝ信ずる。或は籠を組み、網や蓆を編むが如き仕事は随分工夫と忍耐とを要することであつて、原始的野蠻人の到底耐ゆべき所ではない、これも亦婦人の

を捉へ來りて下界に傳へたと言はれてゐる。プロメテウスは云ふまでもなく男性である。さりながらこれは傳説であつて、必ずしもその眞實を語るものではない。恐らく最初の火の發見者は男子でなくて婦人であつたであらう。原始民族にありても、婦人は食物の準備者、即ち調理者であつたに違ひない。隨て食物を焙り、或は燒き、或は煮るの必要からして、火の發見を餘儀なくせられたとすれば、火の發見者は何うしても婦人であつたと斷言しなければならぬ。今日に於ても、現に野蠻民族の間で、燧石フアイアー・スティックス或は火棍フアイアー・スティックスを監理する者は婦人である。その原始的祭壇に崇めらるゝ聖火を護る者は、神の仕人として獻げられたる處女である。教授メイソンの説に據れば、言語を發明し、これを保存したるものも亦婦人の力である。原始期の婦人は種々なる仕事を有し、それに使用する道具を區別する必要からして、言語を編み出したのである。婦人の仕事は男子のそれに比して、頗る複雑であつたゞけそれだけ婦人の用ふる語彙は男子のそれに比して甚だ大なるものであつた。是等の婦人はその新發明の言語をば、彼等が産める男子の子供等に教へ込んだに違ひない。種族の傳説や、口碑等は母がその子に語り傳へたるが爲めに、今日なほ存在するものも少くはない。今日でも伽嘶や、子守歌や、冒險談等は主として母を通して子供に傳へらるゝのである。もし婦人の強き記憶力とその滑かな舌とがなかつたとしたならば、古代の神話、傳説、風俗、習慣等は、今日あるが如くに繼承せらるゝことは不可能であつたであらう。音樂の創造者も恐らくは婦人であらう。母たる婦人はその嬰兒を慰めんが爲めに、或は眠らせんが爲めに搖籃の傍らに立ちて、自ら子守歌や俗謠を唱はざるを得なかつたであらう。夏のそよ風の呟きや、葉摺れの戦ぎや、谿川の流れや、その他一切自然界の聲律は、原始的音樂に對して多くの暗示を與へたことであらう。

合には、自らを獻げてその主夫たる男子に提供するに躊躇しないのである。男子は愛情、徳性等の點にありては全然不完全たることを免れない。彼が唯一の職業は遊獵及び戰闘である。兒童の保育及び愛護は全然母なる婦人が従事するところである。これを以てしても男子は獨立的であり、利己的である。婦人は從順にして、忍耐の精神に富み、實際的であり、勤勉であり、沒我的精神が豊かである。ホツテントット人及びカファア人の間に在りては、家屋を建て、畑を耕し、麵麴を焦き、土器を作ること、は婦人の專業である。斯の如き風習は東洋諸國の農民生活に於ても發見することが出来る。日本の下層社會にありては、婦人は往々にして、男子より勤勉である。寔に原始民族の間に在りて婦人は徹頭徹尾奉仕の生活を送り、その重荷を擔ふものである。恰かも一種の奴隸の如く、男子の一つの家具であるが如く待遇せられてゐた。その主夫たる男子が猶ほ安眠を食る間にありても妻は早起して、火を焚き、水を掬み、食を與へ、兒女の保育に任じ、地を耕し、魚を漁り、或は紡ぎ、或は染め、或は織り、或は縫ふことを爲す。その移動に際しては自ら天幕を擔ひて歩み、衣服を濯ぎ、麵麴を焦き、土器を作り、籠、網を編み、その他百般の家庭生活に必要な業務に従事したのである。

四

創世記の傳説には、婦人は男子の内助者として與へられたといふことが録されてゐる。婦人はこの苦痛多き職分を果したのである。男子は主として戰場に走り、武器を造り、或は遊獵を事としたるが故に、道徳上の多くの美德、たとへば忍耐、謙遜、優美、自助、獨立の品性、豊かなる策略、精力の保存、臨機應變の術、時間の整頓、方法の案出等は先づ婦人の間に發達したるものであつた。即ち人類

貢獻に負ふところが極めて多い。婦人はまた趣味の創造者であつた。單純なる實用と外部の美
容とを調和せしめたるものは、婦人であつたであらう。婦人は精密なる觀察者なるが故に、自然界の
曲線や、色彩や、それ等の結合物等を目撃して、それを實際的に應用したのであらう。自然は無盡藏
なる寶庫である。機敏にして、指先きの器用な婦人は此の寶庫よりして無數の材料を蒐集して、僅か
ばかりの改善を施し、或はそれを取捨することによりて、美術品の材料を造つたであらう。隨て原始
時代の婦人は鑛物性若しくは植物性の自然色を以て、家具や織物を染色することを發明したのであらう。
即ち應用化學の最初の智識は、婦人によりて人類に與へられたのであらう。或は木根草皮等よりして
藥料を發見したるものも婦人の力であつたかも知れぬ。人類學者の研究する所によれば原始民族にあ
りては、男子の醫者よりも、物識りの婦人の方が、早き時代に於て既に存在してゐたらしいのである。
かくして彼女はその種族の病者の爲めに藥料を與へたのである。獸類の毛皮を剥いて衣服とすること
も、婦人の發見であるらしい。家畜の起原も亦婦人に負ふ所が少くない。男子は單に野獸を逐ふのみで
あつたが、婦人は食料としての乳を得る必要からして家畜を獎勵したであらうとも想像せられる。

三

是等の事實は必ずしも歴史家及び人類學者、考古學者の證明を待つを要せない。今日世界の旅行者
は未開野蠻の人種間に在りて、女性の驚くべき貢獻を目撃しつゝあるのである。フィウジイ、ニウカ
レドニヤ等に於ては、婦人は今なほ家畜の如く働いてゐる。最も困難なる事業の多くは彼女の司ると
ころである。食物を調理し、水を掘み、火を焚き、兒女及び家産を運搬し、萬一他の食物が缺乏する場

さんが爲めに覺醒しなければならぬ。生命の賦與者、文化の創始者としてのその特色を完全に發揮せんが爲めに、從來よりも一層大なる特權と自由とを與へられんが爲めに、同時に男子より相當の同情と尊敬とを捧げられんが爲めに、婦人自らを覺醒せしめなければならぬ。覺醒したる婦人は先づ第一にその體質に於て、優良なることを期せねばならぬ。その知識を擴張しなければならぬ。その情操を純潔ならしめなければならぬ。その理想を清高なものたらしめなければならぬ。その信念を確固たらしめなければならぬ。經濟上に於ては、萬一の場合には、獨立獨行し得るだけの實力伎倆を具へなければならぬ。宗教家の所謂神なる宇宙の生命力が特に婦人に信託したる生命を尊重し、倍々これを強健ならしめて、將來の子孫に傳達することを圖らなければならぬ。現代の主我的、物質的文明に對して一脈の情操を織り込まなければならぬ。是れ即ち覺醒したる婦人のなすべき當然の事業である。單に我が儘なるが爲めに自由を慾求し、放縱なる生活を營むことを以て理想とするが如きは決して覺醒したる婦人のなすべき所ではない。かゝる婦人は何れの時代にも存在したる厄介者である。何等新しき婦人ではない。眞に新しき婦人は新しき理想に燃ゆる所の婦人でなければならぬ。新しき生命を感じる所の婦人でなければならぬ。吾人は新しき婦人の運動に従事せらるゝ諸君に同情と尊敬とを拂ふものである。しかしながら此の運動は根柢ある、徹底的のものでなければならぬ。實に新しき婦人の責任は大なるものである。將來日本の婦人の運命は一に諸君の双肩にある。諸君は何處までも眞率でなければならぬ、研究的でなければならぬ、實行的でなければならぬ、同時に絶えず向上進歩すべく、理想より理想に憧憬するゝの思ひに溢れなければならぬ。驥くば諸君自重自愛して、日本民族の婦人の爲めに、否な東洋の婦人、世界の婦人の爲めに、新たなる婦人覺醒の第一步者たらんことを切望する。

の道德的社會的救済は婦人の手に負ふ所が多いのである。勿論吾人は男子の貢獻を閑却することは出来ぬ。女に比して男子はより多くの閑暇を有したるが故に婦人の原始的努力を改善するの機會を有したのである。男子はまた婦人よりは大きな集中力を具ふるが故に、男子はかの婦人が最初案出したる一切の事物を改善して、遂にあらゆる點に於て、婦人を凌駕せんとする勢を示すに至つたのである。男子はまた常に移動するが故に見聞を廣くし、多くの經驗を積み、殊に變化を好む性質よりして、絶えず新奇なる物を追求したるが故に、工業、農業、商業等に於ても婦人は遙かに男子の後方に落伍するに至つたのである。

歐羅巴の中世紀は暗黒の時代と稱せられたるが、此の間にありて、多くの僧庵に籠れる僧尼や、王侯貴人の妻や或は山賊、強盜などの妻ですらもその時代に於ける文化の保存者であつた。彼等は文藝に對する趣味を涵養して、かの文藝復興期に際しては一大勢力として爆發するに至りたる潛勢力を養ひつゝあつたのである。

五

斯の如く婦人の過去の歴史は光榮と名譽とに満てるものである。婦人は文明史上の恩人として尊敬を博すべきは至當のことである。然るに婦人は久しく消極的方面にのみ發達して、積極的方面に進むことを忘れたのである、その故に婦人の才能が充分に發揮せられず、彼等が開拓すべき領域は開拓せられずして今日に到つた。

婦人問題がもし現代の大問題であるとすれば、婦人はこの過去の貢獻を追懷して、自己の使命を果

だり、「人生を知らずに、その夢に耽つた後」死んだりする事は、とても私どもの旺んな慾望を満たすに足りません。私共は私どもの氣力を實際に現はしたいのです、私どもの生きて居ることを證據立て度いのです、そして只今の時代は、私共が翼を延ばさうと思へば不思議なほど自由にして呉れるのですから、私どもは私共の現に生きてゐる此の時代に生まれなかつたと申すわけに行かないのです……

*

數年來、私ども女は大層注意されてゐます、新聞雜誌の方々や、講演をなさる方々や、小説をお書きになる方々などは、私共を私どもの母や祖母などに比較なすつて、女の定義を作らうとなさいました。或るお方々は、私共を大層卑しいもの、化粧に浮身を窺すもの、厚かましいもの、野心深いものになすつて、終にはいつも大層金持の年老つた方と結婚するものだと言ひ下さいましたが私はこゝで、さうした種類の女は模^{モデル}型だつてありはしません、直ぐに云ひ切りたいのです。また他の筆をお取りになる方々は、身を刺すやうな皮

相な云ひまはして、女と云ふものは高等教育を受けると冷かされる、不幸になると證據立てゝゐられます。さう云ふ方々の見方が、たとひ何うであらうと、もはや私どもは黙つてゐるわけに行かなくなりました。私どもの両親や両親の友達などは、女の爲めに公にされた書物と云ふ書物を、一冊も洩らさないほど始終讀んでゐますばかりで無く、私どもの目前で、それらに註釋を加へたり、分析をして見たり、賞めたりくさしたりする事も決して珍らしく無いのです。それはまた夫れで可いのでせうけれども、議論となればいつも、一般論から直ぐに特殊の場合の議論になる傾があるのは、まあ何とした事なのでせう。まあ何とした量見なのでせう。

とにかく私ども女は、たゞいふ研究の目的物になつてをります、比喩の言葉になつてをります。手取ばやく申すなら、近代の社會で最も強く私どもの心を刺戟する事柄の一つは、婦人の地位と云ふ此の問題なのです。

*

私どもは私共の個性と云ふ事に思ひ悩んでをり

フランス現代婦人の人生觀

壺 川 潔

佛蘭西の巴里で發行してゐる『週刊評論』の主筆フェルナン・ロオデエ氏は、近ごろ寄稿家中の女性に書を飛ばして、あまねく其の隔らざる人生觀を訊して見た。數ある返書のうちで、セシイル・ド・ゲエドンと云ふ婦人の書いたものが、最も多く考ふべき問題を含んでゐると思はれるので、こゝに其の要點を摘んでお目にかけらる。

* * * * *

ミユツセエの筆に書き表はされた一人の女は、其の結納を取交はす日に、「わたしは人生をあまゝり知らずに深い夢を食つてゐた」と、斯う心を曇らせて申しました。

私たちは此の言葉を心の底から不憫に思はれてなりませぬ……私たちは 生を知らうと思つて、人生に入つて居るのです。私共には過去がありませぬ、それは眞實です、けれども私共は強く現在に生きて居るのです、現在を攫^ひんで居るのです。現在には私共を熱中させて居るのですから、未來の事を夢みるやうな時間は、殆んど無いと申してよ

い位です。

人生は私共に取つては努力なのです、實行なのです、「明日」を待ち望む事よりは、むしろ「今日」を自分の物にする事なのです。私共には憂鬱な氣質がありませぬから、悲哀^{トリステス}を探し求めてそれに耽り込むやうな事はありません。けれども、大きな苦悶や恐ろしい危難などは、取りのけにして置きたいのです、私共はそれらの面前では、恭々しく感動して頭を垂れるのです、日の光に照らされた喜ばしい心持になる事は、無くてならぬ事のやうに思はれるだけ、またそれだけ容易な事のやうに思はれます。妾どもは直ぐさま生きたいのです、自らを知るため、一つの任務を果たすため、いろ／＼な義務を尊むため、幾年かを待つて居る事ができやうとは何うしても思はれませぬ。愛を夢みて、幸福を夢みて、實行を夢みて、それから……多分死ぬのてせうが、天死をしたり、空手^{からで}で死ん

列を作つて、手工の教場へ行つたのですが、私共は只その時分、女權論者と云ふ事を弄んで、それを面白がつてゐたのでした。けれども私どもにはニイチエの言葉を假りて申せば、「自己を意識し自己に信頼する」露西亞の若い女たちと到底一所になつて行けない事が、能く分かつて居たのでした。羅典街に生活をして、男の人たちと同じ試験を受けるやうな女たちと一所になれたもので無い事が能く分かつて居たのでした。自分には持てないほど重い旗を男の人たちに持たして、町から町へと行列を作りながら、喇叭を吹き鳴らしたり聲を張り上げたりして、選舉權を要求する英國の婦人たちとは一所に歩いて行けない事が、よく分かつて居たのでした。そして私どもは、遊歩時間の終にいつも鐘が鳴ることを能く知つてゐたばかりで無く、その時が來たら、たとひ並々の事であつても趣味の無い事であつても、不平を云はずに私どもの日課を平和にやつて行かなければならない事を能く知つてゐたのでした。

*

私どもは兩親の權威に對して、反抗は致しませ

ん。一本の綱を引き伸ばしはしても、それを斷ち切らうとは思ひません。私どもは服従と云ふことを、私どものまだ手に入れずにゐる經驗と判斷とに面して、精神を恭しく服従させる事だと考へてゐるのですけれども、道理のない受動的な柔順だとは考へてゐないのです。何か自ら企てる事を許して欲しいと思へば、拒まればしません。この自由の許可こそ、信用の符徴なので、私どもはこれに依つて、もつと細かい忠誠の心を養ふこともできれば、もつと鋭い自尊の心も養ふことができると信じます。使徒パウロは「自分は縛せられてゐるけれども自由だ」と申しましたが、私どもはまるで裏腹です、私共は自由であればあるほど、益々束縛せられます、家庭の舊慣から假に放還された人間になつてゐるのです。

ラウルデルの言葉に従つて申せば、自由となる事は、自らを攫むことなのです。私どもが「我」を攫みたいと思ふのは、なほ以上に力を盡くす爲めであるとか知らなくてはなりません。まづ第一に家庭の爲めに力を盡くし、優しめとか、長閑けさとか、若々しい味とか、さう云ふものを家庭に飾る爲めであると知らなくてはなりません。

ます。私どもの個性　人間には個性が無くてはならぬと云ふことは、いつも私どもの會話ライイト・モセイフの導調となつてゐるのです。ひとつの暗號見たやうなもので、私どもは絶えずそれに服従してゐます。實際を申せば、事物の奥底を極めたり、一生懸命に努力して、私共に向上の道を拓いてくれる學問乃至才能を自分のものにしたりますことは、問題になりません。私共は一つの仕事をするときにも、恐らく意志を働かす事よりは、自愛の念を盛にしてゐるかも知れないのです。

*

たとひ表面は何うでも、内幕を明かして申すなら、私どもは飽くまで確信を有つた女權主張論者ではないのです。

修道院の寄宿學校にゐた頃の事です、或る雨の降る日に、私どもは女權主張論フェミニズムに反對な會を組織したのです。其處にはひとりの女先生が討論には加はらずにあ立ち會ひでした。さうすると私の學友の一人は立ち上つて、「わたしは口八丁の女よりも、家事を始末してゆく女が好きです、家の内を荒らす女よりも、夫の靴足袋を繕ふ女が好きで

す」と斯う叫びました。ところが此の叫びに應じて聞こえた男子の聲は斯うでした——何うしてそんな事が云へますか、女は男より劣つてはゐません、女には其の個性を展ばして行くだけの權利もあれば、結婚の喜びより外の悦びを人生の中に探すだけの權利もあり、成功や名譽を追ひ求める權利もあるのです。私は斯う云ひたい、斯う斷言したい、女の鐘が鳴り響きましたと——

この最後の言葉を聞いて、私どもは驚嘆のあまりたゞ黙つてゐました。この言葉を吐いた人の友達は、塗板へ走り寄つたかと思ふうちに、白墨を手を取つて、『女の鐘は鳴り響けり』と云ふ此の忘れられない言葉を、もつとよく私どもに了解させやうとでも云つたやうに書きつけました。そして其の人は、署名のつもりで小さな一つの鐘をそれに書き添へました。

また一つの鐘が鳴りましたが、それは遊歩時間の終を告げる鐘の響でした。女先生は塗板を指さして、「そんな馬鹿げた文字はお消しなさい」と云はれましたので、私どもは言ひ張りもせずに、それを消して了ひました。それから私共は、靜かに

に傳播した時の、社會の狀態に關係するのである。當時の社會は廢類の狀態にあつて、殊に淫風が盛んであつた。乃ちこれが原因となるものは、なんてあらうか。女である。之を以て女は最も憎むべく排斥すべきものと云ふになつた。恰もよし聖書の記事を探ると、婦人を劣等者視する材料は澤山にある。男子は神が先づ第一に造つたものではないか。男子を助くるものなきを思ふて造り給ふたのが女子ではないか。而もこれが男子の肋骨を以て造られたのである。さうすると女子は始めより男子の附屬品である。が唯だこれ處ではない。此の附屬品たる女子が、中々にゑらいとをした。惡魔たる蛇に迷はされ、更に男子を迷はして、共にエデンの園を放逐せられるになつた。されば誘惑の性質は女子が始めより發揮した所である。之れが爲めに人世は墮落した。そして今も墮落しつゝある。戒しむべく、憎むべきは女子であると、斯う云ふ議論の組立てになつて來た。初代に於ける教會の大家のうちにも、かゝる婦人觀を有つて居たものも、澤山にあつた。例へばテルツリアンの如きはさうである。彼れは婦人に就いて「汝は神の貌なる男子を容易に墮落せしめたり。汝の罪惡は世界に死てふものを齎したるが故に、神の子も死せざるを得ざりき」と云つて、罵倒して居る。勿論基督教會の婦人觀はテルツリアンの如きものゝみではなかつたけれども、何方らかと云へば、女卑の方に傾いて、中世紀に至つても、矢張それが依然として續いて行つた。宗教革命時代になつても、矢張イヴの罪惡は忘れられはしなかつた。ルツテルでさへも「若しイヴにして罪を犯さざりしなれば、彼れはアダムと共にこの補助者として支配したりしならんも、彼れは罪を犯したりしを以て、支配の權はアダムのみ專有する所となり、イヴはその主たる彼れの前に腰を屈せざるべからず」と云つて居る。

斯く彼等基督敎の大家が、皆な女子の品位を認めて居ないのは、何故であらうかと云ふに、それは



佛耶兩教の婦人觀

三

並

良

男女同權の説が西洋文明と共に、我邦に輸入せられた、その當時にあつては、中々これにあこがれた新しい女が澤山にあつた。その勢ひのすさまじさは、決して今日エレン、カイなどに煽られて居る新しい女と違つたとはなかつたと思ふ。然しこの新しい女にした所で、之を現在英國で參政權運動に、夢中になつて居る女豪傑に較べたならば、その及ばざると甚だ遠いであらう。然らば東洋の婦人は一體どんなをして來たのであらうか。彼等は家庭のうちに閉居同様の取扱ひを受けて、これに甘んじて居た。男子の奴隸となつて、これを天職と心得て居たのである。

然らば二千年程の間も殆んど東洋の全體に行はれて居る佛教は、婦人のこの有様を以て當然であると考へるであらうか。而して若し婦人の位地を、高く／＼上げやうとする努力は、歐米に起つた現象であるとするならば、これは基督教によつて養はれた精神が齎らした賜であらうか。一寸見た所ではどうもそうらしく思はれるが、それが果して眞相であらうか。

基督教に於ても、婦人の品位が常に認められては居はしなかつた。それは一つは基督教が希臘、羅馬

み端正容美なる一女は彼れの妃であつた。然るに彼れは家内の生活を以て狹隘なり、家を棄てずんば自由を得るを得ずとなして、その家を去つたのである。固より迦毗羅城出發の歴史には、後世の空想によりて色どられたる幾多の詩的裝飾あるべしと雖、佛陀が家庭にありては、到底解脱の目的を達し能はずとなして、出家遁走せしは事實に相違なからう。之を以て見る時は彼れの眼中には家庭でふこととが、如何に映じて居たか分らう。妻あり子あり怡々として相樂しむ團欒の郷は、彼れの倦離せんとした所である。書齋の快樂も、彼れの味はんと欲せなかつた所であらう。「已斷恩愛、離家無欲、愛有已盡、是謂梵志」(法句經四一六)と云つたやうなことが、その理想であつたやうである。若し斯うなると女子は唯だ係累とのみ見られて、その存在の價值が認められないのも當然であらう。

然らばこれ等の背景を以て立つて居る佛陀は、その傳道時に當り果して何をなして居るか。

佛陀もその弟子も共に出家して居るから、自分の家と云ふものはない。衣食は乞丐行をなして、慈善家の施與により得たのである。古來心のやさしいものは、男子よりも婦人に多い。従て佛陀やその弟子等が乞丐行に際して、多くの慈善なる婦人に邂逅したであらうと想像するのは、決して不適當ではあるまい。この時に當り佛陀は婦人のよき方面に想到するとはなかつたであらうか。而も熱烈なる決心を以て、世上最も親愛すべきものを捨てたる彼れは、これが爲めにその觀察を變へず、依然として嚴霜烈日の態度をとつた。人間を陥れる、穽のうち最も危険なるもの、世欲に溺れしむる魔力のうち最も強大なるは女子であるとのみ見えたやうである。之を以てその弟子阿難陀が彼れに「世尊、我等婦人に對しては如何に處すべきか」と尋ねた時「汝等、彼等を避けて見るべからず」と答へて居る。然るに阿難はまた之を以て満足しない。「然れども世尊、我等若し彼等を見たる時は、如何になすべきか」。

初代より中世紀にかけて、厭世觀が普く行はれて居た爲めである、厭世觀は世界の消極的方面のみに重きを置き、人世の不幸や、罪惡のみに注意を傾けて居る。人生は流轉、變化極りなく、今日を以て明日を計るとの出来ないものである。何を以て現在の世界に積極的經營を行つて、之を善美ならしめ愉快ならしむるの必要があらうか。明日は自分も消滅して、その行く跡形すらも分らなくなるのではないか。然るになにとて人間は一時の快樂をのみ食うのであらうか。是れ恰も彼の猛獸に逐はれて、井に隠れ、上には猛獸牙を鳴らし、下には千尋の深き淵あり、我が身は僅かに一筋の草の根を掴みて墮落を免かるも、尙ほその草に結ぶ實を食ひて、一瞬時の安きを偷むに、等しいのである。その愚や實に及ぶべからざるものがある。而もかゝる浮世にありて最も人の心を幻惑せしむるものは何んであるか。それは女である。女の色である。此の女ほど人を過るものはない。斯う云ふ思想によつて婦人は常に排斥せられて居る。元來は決して厭世主義でない基督教でさへ、厭世主義に傾いた時には斯うである。況んや始めから厭世主義をもつて立つて居る佛教が、同じく婦人排斥をなしたのは當然のたと云ふべきである。佛教では女子は罪惡深きものにして、三界に家なきものと云つて居るではないか。之を以てもその婦人に對する態度は大凡を察するとが出来るであらうと思ふ。

然し後世は如何うなつて居やうと、吾人は更に一步を進めて、教祖即ち佛陀や耶蘇が、婦人に就いて如何なる説を有つて居たか、これを研究するの必要がありはすまいか。

二

佛陀は太子の貴き位にあり、又王城に住みて、あらゆる榮華を恣にし、嬋娟盛裝の侍女は彼れを圍

なかつたのは、古來の思想に基いて居るものと云へるであらうと思ふ。

三

更に翻つて、基督教の原始時代を考へて見ると、ポロの婦人觀の如きは區々になつて居るやうに思はれる。一方に於てポロも亦た男尊女卑を説いて「凡べての人の首は基督なり、女の首は男なり、基督の首は神なりと汝等が知らんとを願ふ」(哥前一一、三)とか、或は「婦女等は教會の中に黙すべし、彼等の語るを許さず、彼等は律法に云へる如く順ふべき者なり。若し學ばんとする所あらば、室に在りて、その夫に問ふべし。そは婦女、教會に於て語るは耻づべきとなればなり」(全一四、三四—五)など云つて居る。然るに他の一方を觀る時は、彼れも亦た女子も男子と同等なるとを認めて居る場合がある。即ちガラテヤ書三章二七以下に「凡そバプテスマを受けて基督に入る汝等は、基督をえたるものなり。かゝる者の中には猶太人又希臘人、或は奴隸或は自主、或は男、或は女の區別なし」と云つてある。之を以て何れの句を重んずるかによつて、見解が異つて來るのである。然し吾人はポロなどに就いて意見を求めず、直ちに基督に遡つて、彼れが如何なる説明を與へて居るかを窺ふ必要がある。けれども耶蘇は一つも纏つた婦人觀を發表しては居ない。吾人は唯だその平常の生活や、機に觸れて云はれて居る言葉によつて、之を推測するより方法がないのを遺憾とする。さうすると耶蘇には女の弟子が澤山にあつたとは明かなことである。そして女がその弟子となるに就いて難題が起つたとはいやうである。殊に彼れにはマリヤとマルタの姉妹の弟子の家々に客となつて、彼等を教へたとなどは有名な話になつて居る。

佛陀は答へた、「汝等は彼等と語る勿れ」と。阿難は更に問ふた、「されども世尊、我等もし彼等と語る時は如何」と。「然らば汝等自ら警戒せざるべからず」とは佛陀が最後の答へてあつた。實に婦人は斯くの如きものであると、彼れの眼には映じたのであらう。

然るに前にも云つたやうに、慈悲心に富める善女は佛の周圍に多數現はれ來つたやうである。その教團に加入せんとする熱心なる希望は、佛陀も排斥するに窮したらしい。殊に彼れの繼母なる麻阿婆闍婆提の懇願を斥ける譯けには行かなかつた。佛陀はいや／＼ながら、婦人の入團を許した。然しその心は平かてなかつたやうである。之を以て彼れが阿難に語つた言葉のうちに、「若し婦女子に、故郷を去りて出家するとを許さざらんか、清淨の生活は永續すべく、純正なる法も永存すると千年ならん。……然るに婦女子世間に反き、出家となるを以て、清淨の生活は永續せざらん、眞理の法は唯だ五百年存立せん」と云ふ句がある。之を見ても婦人の歸依を許すは、その本心でなかつたらしい。これは固より佛陀のみの婦人觀ではなかつた。古來印度の婦人觀である。婦人には三從の教ありとは、吾人の耳にも馴れて居る所であるが、これは印度古來の教訓である。即ち彼の有名なる摩奴の法典に「婦女は幼にしては父の意に従ひ、長じては彼れを娶りたる夫の意に従ひ、夫死すれば子の意に従ふ。婦女は獨立を樂しみ得るものにあらず」と云ふ句がある。これでその所觀は明瞭である。婦人が佛教團に加入して、所謂尼僧團なるものが設立せられはしたけれども、その規律も亦た依然として、摩奴法典を襲繼するものであつて「妻は夫の監督の下に、母は子の監督の下にある如く、尼僧團は僧團の監督の下に委せらる」と云ふことになつて居る。これではどうしても婦人の輕蔑せられるのは、當然であつて、東洋一帯の地に、婦人權擴張の大運動が昔に於ても、亦たは今日にあつても、一指だもつけられ

會、國家、家庭の爲め、或は靜かに研究に耽らんが爲めに犠牲とすべきものでない。何んとなれば全人間たらんとする目的は、凡ての他の目的より以上であるからである、と云つて居る。

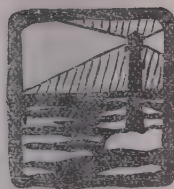
併しながらこれ等は皆な耶蘇が何故に結婚しなかつたかを説明したり（シュライエルマッヘル）或は之を非難する。（フィヒテ）理由にはなるまいと思ふ。その他或は耶蘇が傳道の困難や、非常の最期を遂ぐるを預知して居たからだとか、或は大なる理想の爲めに活動して居たものであるから、戀愛の事を想ふ餘地がなかつたからであるとか、云ふやうな説明があるけれども、これ等も皆な説明にはならないであらうと思ふ。これ等は皆な耶蘇を神のやうに考へての説明であるか、或は純人間的に考へないから起つた説明であらうと思ふ。吾人は皆な奮闘的生活を送りつゝあるものである。耶蘇にして若しこの活世界の模範にてもなる積りならば、何も結婚を避ける理由は無かつたであらうと思はれる。殊に耶蘇はソクラテスが將に毒杯を仰いで死せんとした時に、最期に會はんとてその妻キシナンチップが獄舎に來りしを見て、「嗚呼クリトンよ、人をしてこの婦人を家に連れ行かしめよ」と云つた程に、婦人の心を知らざるものでも、亦た同情のなかつた者でもないやうである。

III

然らば耶蘇が結婚をしなかつたのは何故であらうか。吾人の考うる所を以てすれば、それには深い理由はなかつたので、云はゞ偶然の出來事であつたのであらう。即ち彼れの妻たるべきものが無かつたからであらう。この事を解釋するにハーゼは面白い逸話を擧げて居る。即ち教會歴史の大家として有名なるネアンデルは、天國の宦官とさへ譚名された人であつたが、このネアンデルの許へ時々、晩

妻を離縁し得べきものなるや否やに就いて、耶蘇に尋ねたものがあつた時に、彼れは之れに答へて夫婦なるものは、二にはあらず、一體となつたものである。故に之を離すとは出来ない。若しその妻を出して他の婦を娶る者あれば、これその妻に對して姦淫を行ふのである。又婦もしその夫を出して他に嫁つがば、此の婦も亦姦淫を行ふ、と云つて居る。この言葉によつて考へたならば耶蘇は男女孰れを尊しとも卑しともせず、神の前には平等であるとして居たものと云はざるを得ない。

思ふに吾人が耶蘇の婦人觀に就いて云ひ得る所は、これ位のとに止まるであらうが、更に吾人の提出し得べき疑問は、耶蘇自身は何故に結婚をしなかつたかと云ふとである。固より耶蘇は神であつて暫時の間人間の貌を取つて、パレスチナの地を歩んだものでありとするならば、こんな疑問を提出するのは、愚の極であるけれども、若し耶蘇も人間であつたとするならば、これは提出しても宜し疑問ではあるまいか。であるから近代に至りては、諸大家がこの問題を論ずるのを見るのである。シュライエルマッヘルの如きフィヒターの如きもさうであるが、殊に教會歴史家として有名なハーゼの如きは、その耶蘇傳に於て、特に一項を設けてこのとを論じて居る。シュライエルマッヘルの獨特なる品位を考へると、どうしても結婚は不可能であつたと云ふべきである。即ち救世主は精神の子孫の祖先たるべく、肉體上の子孫の祖先となるべきではなかつたのである。且つ一般人間の天分を盡くさうとする堅き意思が、彼の心のうちに前提せられないうちに、彼れは壯年にして早く死んだのである、と云つて居る。又フィヒターの如きは、人間とは肉身の上から云ふと、男でもなければ、又女でもない、兩者である。道徳上から云つても同様である。この目的を、他の目的、例へは教



大思想家の婦人觀

う ち が さ き

*

女よ羞づる勿れ。汝の特權は爾餘のあらゆる特權を包容し、またあらゆる特權の扉である。汝は肉體の門であり、汝はまた心靈の門である。

ワルト・ホイットマン

*

確かに人生は頭と心とより成る。二つながら活潑に、二つながら完全に、二つながら眞面目に、頭と心とが人生を造るが如く、男と女とは此の世を造るものである。

ブラウニング夫人

*

若し一人の婦人が心の底より後悔するとも、彼女を墮落せしめ、且つこれを傍觀したる社會に歸り行くを欲しない。

オスカア・ワイルド

*

普通の女は決して、煽動せずして、たゞ應合す

るといふことだけでも、普通の男子よりは優れるものである。

トマス・ハアデー

*

惡言を放つ勿れ。否、それに耳を傾くること勿れ。

テニソン

*

一切の婦人は元より全生活を生くることを希ひ、また彼女の全能力を果すことを願はなければならぬ。而して此の事をば彼女は、自然が彼女の爲めに意匠したる軌道を歩みて、一人の母となることによりてのみ、これを果すことが出来るのである。

グラント・アルレン

*

吾人が世より埋もれて、家庭の仕事のみをなさしむるところの女性は一に高尚なる、更に意義ある職分の爲めに適應してゐるのではないか。法律

方になると多くの人が集つて來た。ある時甚だ無遠慮にも、結婚せざるは非基督教のなりや、との疑問を提出したものがあつたが、この時ネアンデルは、然り我儘にて結婚すまじと決意するは、非基督教のなれども、神の導きによりて、結婚するに至らざるは非基督教のにあらず、と答へたと云ふ。即ち耶蘇も亦た神の導きによりて結婚するの機會なかりしものとするが適當であらう。

斯う云ふ譯であるから、佛教に於ては始めより婦人の位地が賤視せられて居て、男子に隸屬すべきものゝやうになつて居る。否或は斷然排斥せられても居る。これでは婦人の向上する餘地も、生きる理由もないことになるであらう。基督教の方では、耶蘇は當時その周圍にあつた婦人觀よりは、一頭地を抜いた識見を立て、男女を同等なものとして居たのである。然しながら離婚の許すべからざることに就いての耶蘇の見解を見ると、彼れは開闢のはじめ、神人を男女に造り玉ふたから夫婦は一體であつて、離るべきものでない、と云つて居る。この見解は一方から見ると、自然的なるものは又道德的なるものであると云ふことになつて、古代に於てはストアック哲學や、近代に於ては啓蒙哲學などの賛成する所であらうけれども、然し唯だ單に自然の要求と云ふことのみにて満足すべきではない。若しこの要求のまゝにしたならば、放逸に流れて、而も人間は獸よりもより獸的となるであらう。故に單に人間的なるものを超越した所に精神生活の範圍が開拓せられ、こゝに至高、至純なる理想が追求せられなければならない。而して是れ實に基督教的精神の勢力により、歴史の經過のうちに益々實現せられんとしてある所のものであつて、現代に高調せられて居る婦人の開放とか、新しい女とか云ふことは、つまりこゝ迄進まんとする努力であらう。

*

汝は苟くも思想の名を値する一切思想の發端は、愛なることを考察したるか。賢明なる頭腦にして未だ嘗て寛大なる心情を有せざるはなかつた。

カアライル

*

世人は博學の婦人を嘲けり、且つ世事に通じたる婦人すらも敬遠するの傾向がある。恐らくは多くの無學なる男子を辱しむることは、禮儀にかなはざることと思はれてゐるからであらう。

ゲーテ

*

婦女子を解放せよ。彼等は男子と共に五感、知覺、感情、推理力、及び情緒等を配有するものである。一般の婦女子の精神が男子のそれと異ならざるは、恰かも一男子の精神が他の男子のそれと異ならざるが如し。

トマス・ハックスレー

*

男子の道德的品性のみならず、また精神力も最善の護衛と、支撐とを、婦人の道德的純潔と精神的修養とに見出す。しかしながら男女の能力が一

層完全に發達すればするほど、世界は一層克く調和し、秩序あるものとなるであらう。その向上と進歩も一層安全に確實なるものとなるであらう。

*

サムユール・スマイルズ

法律それ自身も家庭の反射に過ぎない。家庭生活に於て、兒童の精神に播かれたる最も微小なる意見も、後には社會に現はれて、その輿論となる。何者國民は育兒房より集められ、而して兒童の指導綱を握る所の人々は、政府の政綱を掌握する人々よりも更に大なる勢力を振ふことが出来る故である。

サムユール・スマイルズ

*

宗教と政治は分離すべからざるものである。宗教なくんば、政治はたゞ壓制若しくは、無政府を創造することが出来る。吾人は兩者を求む。吾人にとりては、人生は一個の教育問題である。社會はそれを發達せしめ、それを實行せしむる所の機關である。

マッデニイ

*

最初に天國に行く人は誰ぞや、

制定者の伎倆は、自然の與ふる一切の勢力を活用することである。

プラト

男子は單に婦人の從順を欲せずして、彼等の感情を要す。それ故に男子は婦人の精神を征服する爲めにあらゆることを實行した。

ジエームス・スチュアート・ミル

婦人のうちにある電氣的、磁石的要素は、如何なる時代に於ても充分に發現せられたることはなかつた。

マガレツト・フルラ

困難の場合に於て婦人に相談するは——昔、獨逸人の習慣であつたが——決して看過すべからざる事柄である。それは事物の真相を捉ふる婦人の方法は吾人男子と全然異なるが故である。

シヨウベンハウエル

吾々は神とその母を有する人をば父なると呼ぶことは出来ぬ。

アラウニング夫人

婦人の解放を成就するは、最も遠く影響を及ぼすところの結果を孕むものにして、英國がこれまで企てたる最も重大なる事業の一つであるだらう。

カアル・ピアーツン

婦人が干渉することを止むる時には、此の世は浪なく、風なき、溜り水の池となり、その上に泛ぶ人類の船は空しくその岸邊に朽敗するのみであらう。

チャールス・リイ

男子のみ自由にして、婦人は奴隷たるの理ありや。

シエレー

神は汝(婦人)の律法、汝は我が律法、知足は婦人の最も幸福なる智識にして、また彼女の讃美である。

ミルトン

無智昧の夜陰を貫く微光の裡に、晴天を豫言する不朽の曙を識別する婦人は、かゝる尊き、かゝる有望なる心靈を包圍する肉體を一個の聖殿として尊敬するであらう。

メーリー・オールストンクラフト

ある。吾等の世界は觀せ物ではない。そは一種の戦場であつて、その心に於て義と、美と、聖とを愛するところの人は、或は指揮官として、或は兵士として、或は征服者、或は殉難者として、各自の役割を演ずべき義務を有してゐる。

マツヂニイ

婦人の感情の驚くべく寛大なることは、往々にして彼の女を英雄的ならしめ、神聖なる領域にまで昂め、而してミネルバー、ジュノー、若しくはポリムニア等の女神像を證明する。彼女がその向上の途を辿る確固たる決心は、最も粗野なる打算者をして、彼等自らの足下にある所の道より、異なるる道の存在することを確信せしむ。

エマルソン

人類の道德的改造は、婦人の重要な使命である。

オーグスト・コント

心には皺が無い。

セヴィンヌ夫人

肉體に對するが如く、精神に對して、食と火とを有する家にあらざれば、そは家庭と稱することは出来ぬ。

マアガレット・フルラー

平和運動と婦人運動とは同一なるものである。何となれば二つの運動は、その共通の目的として腕力に對する正義の勝利を要求するからである。

ノヴィコー

豊かなる心なくんば、富は醜き乞丐である。

エマルソン

法律制度の如何にかゝはらず、妻が夫より優れる人格を有する家庭に在りては、彼女は常に支配すべし。

ノヴィコー

兄弟と姉妹の愛のみは、變化の法則に支配せられざる人生に於ける唯一の關係である。イブセン

人生の目的は人生である。

エレン・カイ

少年少女を教ふる人なり。

經典タルムード

*

社會は良心の上に立ちて、科學の上に立たず。

文明は最初に道德的の事物である。正直なく、法律に對する尊敬なく、義務の崇拜なく、隣人に對する愛情なく——一言これを掩へば德義なくしては——全文明は威嚇せられつゝ滅亡するのみである。

エミール

*

家族生活の最も恐るべき敵は、恐らくは婦人に對する智識の缺乏である。

ノヴィコフ

*

何故に人は自らを無視するほど、貧弱なる精神を抱いてゐるのであらうか。

ドストエスキ

*

かの女(ビアトリチエー)が、我が前に現はれたる何時でも、我はこの世に於ける凡べての敵を忘れた。我が心の中に燃えたる愛の燐は我をして、これまで怒らしめたる凡べての人を忘れしめたのである。

*

ダント

吾人の肉體は花園である。吾人の意志は園丁である。

シユークスビヤ

*

余は更に進んで次の如きことを言はう。汝等(英國婦人)の周圍の邦土に於て、疾苦と貧窮との存する限りは、華麗なる服裝を誇るは、一種の罪惡であることを。

ラスキン

*

社會に於ける純潔の高き標準を維持する爲めには、兩性の修養は相和し、且つ並行しなければならぬ。純潔なる女性は、純潔なる男性によりて伴侶とせられなければならぬ。同一なる道德律は齊しく兩性に適應せらるべきである。

サミューエル・スマイルス

*

男子はその罪と共に此の世の火の試煉を潜り抜ける迄は、その妻の美質を知らないのである。即ち彼女が如何に尊むべき、奉仕の天使であるかを知らないのである。

ワシントン・アーヴィング

*

沈思瞑想の直下には殆んど常に利己心が潜んで

THE FAITH OF THE INCARNATION :— HISTORIC AND IDEAL.

BY

CLAY MacCAULEY, A.M.

With the sub-title,—

Glimpses of the Beginnings, Development and Metamorphoses of Christianity.

This book is the product of a long life's study of Christianity as a factor in man's history, carried on wholly by the methods of historical science and rational philosophy. The author speaks of having "sought only the truth,"—"using methods always, ultimately, positive and constructive," with "the hope, constantly, of finding that which will tend to promote the real union and fellowship of 'all who profess and call themselves Christians.'" "More particularly, the book has been prepared," not for the professional scholar but for the ordinarily cultured inquirer who may wish to know what some of the most competent, sincere and reverent writers have concluded is true concerning the origin, the development and the present import of the Personality and the Gospel of Jesus Christ." The author thinks that doubtless his conclusions will "meet with much dissent; possibly they "will arouse antagonism," and with some be "received with disappointment and regret;" but in his "Preface" he asks from all readers "suspense of judgment until they shall have read the book through" and "considered well" what he has said.

The subject-matter of the volume consists of four main parts, with an "Introduction" which is largely personal, but, at the same time, is representative of the needs and experiences of hosts of earnest, sincere men and women at the present time.

"Part One" treats of the historical "Beginnings of Christianity." "Part Two reviews" the "Evolution and Metamorphoses of Christianity." "Part Three" tells of the "Emancipation and Modern Development of Christianity." And "Part Four" is a description of the "Modern Christology," with a review of the present significant religious-social movements in which the Christian Churches, generally, are finding a practical bond of union and a common reason for being, as followers of Jesus Christ.

定價金三圓五拾錢

郵稅

市內金四錢
臺灣支那

地方金十四錢
外國廿八錢

取次 六 合 雜 誌 社



婦人問題の根本的解決

安部 磯雄

嘗て英國に於て、婦人參政權問題が起つて以來、英國の社會黨はその年會に於て、屢々婦人參政權に對して賛成の決議をなした。社會黨といふのは、英國の獨立勞動黨と稱するものであつて、英國の議會に約四十名の代議士を出してゐる。その年毎の年會には、各地方から社會黨の代表者が出て來て、種々の問題に就て協議するのであるが、婦人參政權問題に關しては、殆んど意見といふものゝ衝突なく、何時も大多數賛成の決議をしてゐる。これは實に英國のみでなく、獨逸に於ても、社會黨は何時も婦人に參政權を與ふることに、大々的賛同の意を表はしてゐる。それで社會黨と婦人といふものには、如何なる關係があるか、それを考へて見る必要があると思ふ。今日世間では、婦人の解放といふ事を盛に主張してゐる人がある。またその論者が悉く社會主義者といふ譯ではない。けれども社會主義といふ立場から行かなければ、婦人の解放といふことは、全く解決せられたものといふことは出來ぬ。別言すれば社會主義の立場から行かなければ、婦人問題の解決は徹底的に實現することは出來ない。

何故に然るかと言ふに、元來社會主義の根本に横はれる思想——その思想は佛蘭西革命の時に、革命

主幹兼筆 加藤直士

週刊

基督教世界

每週木曜發行

一部金五錢

半ヶ年金一圓廿錢

一ヶ年金二圓卅錢

◎本誌は日本組合教會出版部の經營する所なれども、同時に我邦進歩的基督教全體

の機關たることを期す

◎本誌は明治十六年の創刊に係り三十年の歴史を有する基督教界最古の週刊新聞なり

◎本誌の編輯は加藤主筆の外、小崎弘道、宮川經輝、原田助、渡瀬常吉の四氏熱心其任に當る

◎好評噴々たる本誌の特長は、基督教の立場より常に時事問題を評論し、且つ最新の智識を以て斯教永遠の眞理を闡明するに在り

◎毎號主筆の社説と、教界先輩の説教と、内外名士の論説と、新進思想家の研鑽と、清新なる文學と、内外宗教界の出來事及び教勢一班を滿載す

◎本誌は信仰修養の糧として、傳道用冊子として、信者家庭の讀物として最も好適なる出版物なり

◎百聞は一見に若かず、見本は御一報次第進呈すべし

大阪市北區中之島二丁目

發行所

基督教世界社

大阪振貯口座三一七三

劇と詩

附 錄

光明の人バアナット、シヨウ(評論)
 Kの思ひ出(詩)
 藝術家(評論)
 女優と舞臺監督(戯曲)
 貝殼草と少年(小説)
 大津の宿(小説)
 紅烙の塔(詩)

佐野袈裟美
 人見東明
 本間久雄
 國枝史郎
 山川亮
 清見陸郎
 尾竹紅吉

歐洲演劇發展史

島村民藏

□如何にして新興演劇は發展したるかを研究す

近代文藝革命史

木村莊八

□革命の内在的生命は何邊より來りしかを研究す

平和祭(翻譯)
 屏に凭りて(感話)
 笑(對話)
 蔓草の歌(歌)
 「七死刑囚物語」を評す(評論)
 演町情詩(詩)
 毒藥の壺(感想)

秦豐吉
 清浦青鳥
 田邊若男
 中川一政
 中村狐月
 福田夕咲
 相馬御風

(中附四)

常に若き心を持ち新らしい文藝を愛する人々の爲に社友制度を設けその清規を印刷したれば郵券二錢封入の上申されたし

第四年第七號

七月號

定價金廿八錢

郵税一錢半

短歌を募る
 若き心より自然に流れ出でたる香ひ高き短歌を募り之を若山牧水氏選びて毎月の誌上に掲載す

帝國文學

— 號 月 七 —

● 獨逸文學號！

▲ 六月の文壇	▲ 六月の劇壇	▲ 思想の流れ	▲ フハウスト評論	▲ 今(モンベルト)	▲ 獨逸文學と神話	▲ 敬虔	▲ トオマス・マンの小説	▲ 村鍛冶(小説リインバルト)	▲ ヴエデキントのフハウスト	▲ 三たびの戒め(小説シュニツレル)	▲ 廣き國(シヨルツ)	▲ オットオブラーム
.....
石坂養平	灰野庄平	山田櫨	久保田勝彌	文學士 らいでんしゃふと	文學士 犬塚一郎	生田春月	文學士 小野秀雄	文學士 天沼匏村	文學士 成瀬無極	文學士 湯淺溫	文學士 茅野蕭々	櫻井天壇

銀座 本日 圖書株式會社 振替 東京 二九一 價半 一冊 十錢 五十錢 郵稅 一錢 (共稅) 錢

世 界 雜 誌

每月 壹回 發行 定價 郵金 拾六錢 半 八 六 一 一 六 二 錢 十 圓 年 費 十 年

目 要 號 月 七

● 心中の閥族

尾崎行雄

▽ 日銀總裁三島彌太郎論
▽ 現内閣の瓦解と民黨合同
▽ 列強の軍事費と其兵力
▽ 馬骨先生雜記
▽ 無底洞夜話
▽ 註文十則
▽ ロイド・ジョージの財政策
▽ 羊頭狗肉の整理
▽ 陸海軍大臣官制問題

衆議院議員 菊地武德
衆議院議員 相島勘次郎
衆議院議員 鵜崎鷺城

◎ 自叙傳 少年時代の追憶(二)
▽ 有害なる國體研究
▽ 觀樹將軍時局談
▽ 正傳訛傳
▽ 公開狀
▽ 時事漫畫 (十面) 外寫眞多數

衆議院議員 田川大吉郎
衆議院議員 林毅陸
衆議院議員 慶應大學教授 尾崎行雄
法學博士 江木衷
子爵 三浦梧樓

社 說

▽ 制度整理の出來榮
▽ 對支會と外務當局
▽ 兵器會社と官憲
▽ 政治思想普及の一方便
▽ 客車を二級制とせよ

▽ 軍國主義の弊
▽ 太平洋議會
▽ 不見識なる國民
▽ 孤兒植氏
▽ 電燈問題
▽ 農村問題

● 世道人心に及ぼす政治家の進退

法學博士 浮田和民

中附八

世 界 雜 誌 社

東京 橋區 元日 數番 寄地

發行所

電話 二一四 新橋

派の人々が唱へたる思想と同一であるが——は言ふまでもなく、自由、平等、友愛の三つである。この三つの主義を貫徹する爲めに、自然の結果としてそこに今日の經濟制度、政治制度を改むる必要が起つて來た。社會主義は即ち此の三つの目的を達せんとする手段に過ぎないのである。自由、平等、友愛の主義はこれは如何なる政治家も、如何なる學者も大體に於て不賛成を唱へる人はあるまい。何となれば世界の大勢はこれに向つて、瞬時も止むことなしに、進みつゝあるが故である。

如上の立場から見ると、婦人問題を論ずることは極めて容易である。要するに婦人問題を唱ふる人々の多くが、此の大方針に就いて明瞭なる意識を有してゐない爲めに、極めて簡單であるべき筈の婦人問題が、實は甚だ紛糾錯雜したる論戰を惹き起すことになるのである。もし此の大理想にして誤なしとせば、婦人問題は直ちに解決せらるべきだと思ふ。婦人參政權の問題も即ちそれであつて、もし人間が自由平等であるならば、何故に女子に對して男子は參政權の要求を拒むことが出来るか。もし人間が自由、平等であるならば、何故に吾々は男子にのみ有利にして、婦人には不利益な法律を制定し得るか。兎に角婦人の地位が男子より低級に置かれてあるといふことは、此の大理想に照して眞に耻づべきことである。吾々は此の大理想の前に立つ時には、如何にしても、男女間に大なる差別の溝を横へるといふやうな、不公平な觀念を抱くことは出来ない。此の點に於いては、社會主義の理想は、宗教のそれと有一無二のものである。もし宗教にして、男女の區別を立つるものがあるならば、それは眞の宗教ではない。殊に基督教の如きに至りては、人間の地位に貴賤高下の差別を認めず、人種の間にすら何等の隔りを設けないのである。宗教の眼よりしては男女、老若一視同仁でなければならぬ。一視同仁といふとは、多くの人々が承認してゐるやうであるが、恐らく今日宗教と社會主義は

はるに送くし涼を夏季

著者

その書名

定價及郵税

小山東助氏

久遠の基督教

壹圓 十二錢

小山東助氏

光を慕ひて

卅錢 四錢

内ヶ崎作三郎氏

人生と文學

八十錢 八錢

内ヶ崎作三郎氏

近代人の信仰

一圓廿錢 十二錢

向軍治氏

ハッ當り集

卅錢 四錢

□ アンリ・ベルグソン 原著

□ 桑木 嚴翼博士序文

□ 文學士 錦田義富氏譯

忽ち出版
正訂 參版
發行

ベルグソンの哲學

□ 定價七拾錢 郵税六錢

店書社醒警

東京 京橋 銀座

振替 東京 五五 三番

なければならぬ。隨て、其の國に消費税が行はるれば、家族を有する者は年々獨身者に比し、三四倍の消費税を支拂ふこととなるのである。然るに兩者が政治上に同一の權利を與へられてあるといふことは公平を失したる所置である。しかも法律の利害關係の及ぶ所は、一人の上よりも、大家族を有する人の上に多く影響することは明かである。

かゝる立場から考ふれば、國家を組織しつゝある人々は、悉く國家に對して租税を負擔し、利害關係を有してゐるのであるから、彼等の生活の凡べてを包含し、支配する政治といふ一大權威に對して、彼等が相當の權利を要求するは、蓋し當然の事である。然らば小兒の投票權は、如何にして實行せらるべきかと言へば、これは一家の主人をして代表せしむるも可、或は男の子は父親、女の子は母親がこれを代表して投票するが如き方法を探るも適當であらう。兎に角獨身者が一票を投じ、七人の家族が七票を投ずるといふことは、自由、平等の思想から見ても、極めて當然のことである、吾々は徹底的に婦人問題を解決せんが爲めには、更に百尺竿頭一步を進めて、この點にまで根本的の基礎を据へ附けなければならぬ。こゝに於て始めて、凡べての婦人問題が解決せられると思ふ。嬰兒の選舉權まで論じ詰めて行くならば、婦人參政權の問題の如きに、何時までも低徊するが如きは、隨分時代遅れの思想と言はなければならぬ。

二

それで、自由平等の立ち場から論ずるならば、婦人問題は色々に解釋することが出来る。第一には法律の問題である。例へば日本の法律の如きは、明かに男女兩性の間に非常な隔りを置いてある。毎年

ど、徹底的に、眞面目にこれを説てゐるものはあるまい。ところで男と女とが平等でなければならぬといふやうな説を持ち出せば、或人は直ちに反對を試みるかも知れぬが、社會主義の見るところでは男女の平等といふが如き事は自明の眞理であつて、吾々は更に進んで、人間凡べての平等を唱へなければならぬのである。即ち大人でも少年でも嬰兒でもこれ等を入間といふ立ち場から見て、悉く平等と認めなければならぬのである。宗教及び社會主義の高調する所の平等觀は、こゝまで進んで來なければ未だ充分といふことは出來ぬ。

世の中の人にとつては、婦人の參政權要求は極めて突飛な問題であると見做さるゝかも知れぬが、社會主義の眼から見れば、決して突飛でもなければ、不合理でもない。世には普通選舉として、凡べての男子に、選舉權を與ふることをすら拒む人がある。況んや婦人に選舉權を與ふるが如きことは、夢想だにせざる人々がある。然るに社會主義は普通選舉どころではない、或は婦人にも選舉を與ふると共に、更に進んで小兒にすらも選舉權を分つことを惜しまないのである。勿論斯様な議論を、具體的に社會主義の人が、唱へたといふ譯ではないが、しかし子供に選舉權を與へよといふ説は、現に英國に於ては、タイタニック號で死んだウイリアム・ステッドの如き人々が主張し、佛蘭西では、近來頗る此議論が盛になつて來た。吾々がもし公平に觀察するならば、子供の選舉權といふことも極めて公平なことであると思ふ。此の議論の根據とする所は大體に於て次のやうである。即ち、現在の制度では獨身者であつても、一票を投ずる權利を有してゐる、然るに夫婦で五人の子女を有する一家七人の家族であつても、同じく選舉權は一票に限られてゐる。ところで此の大家族と獨身者との間には、餘程異なる事情がある。一家族に在りては、その一年間に消費する生活費は、獨身者の數倍に嵩むと認め

は形式を變へたる一種の人身賣買であるからして、人道の上よりして絶對的に反對してゐるのである。しかし一度公娼制度が廢止せらるれば、それで以て婦人の賣淫問題が、解決せられたのであるかと言へば、決してさうとは思はれない。賣淫問題は餘程後まで残るものであらう。如何に宗教や道徳を説くも、到底此の弊風を根本的に打破することは出来ないと思ふ。然らば如何にして賣淫問題の解決が出来るかと言へば、それは仍り社會主義の唱へる所に耳を傾くべきだと信ずる。社會主義の説く所によれば、社會主義が若し此の世界に行はるゝとすれば、社會の人は男女にかゝはらず、不具者を除いて、悉く勞働に従事することが出来る。即ち社會は一人の怠惰者を容れないのである。その時代、その社會に在つては、勞働は神聖な、緊要な一つの道徳となるのであつて、勞働を営まぬ者は、社會的制裁を蒙ることとなるのである。斯やうに凡べての人が働くことゝなれば誰も同一の報酬を受くることとなる。尤もその同一なる報酬といふことに關しては、種々異論の存する所であるから、假りに不同一と見做しても、今日よりずつと公平な分配が行はるゝに違ひない。隨て、眞面目に働く人は、自己の生活費を支拂つて猶ほ餘裕あることとなる。是れ根本的に賣淫問題を解決する良手段である。無論賣淫婦の小部分は、金錢の爲めでなく、自己の性慾を充たさんが爲めにする者が無いとは限らない。しかもそれは極めて少數の者であつて、若し凡べての婦人が、生活に困らなくなつたならば、何を苦しんで、醜業に従事する者があらう。今日多くの醜業婦は生活難の所産であるが故に、この生活難を取り除きさへすれば、此の問題は充分、解決の途があると思ふ。此の點から考へても賣淫問題の解決は社會主義にあると信ずる。

また昨今世界各國に於て、社會主義の運動に婦人が非常に力を盡しつゝありといふことは出来ぬが

日本の矯風會が議會に建議してゐるやうに、日本の法律は婦人の姦通を罰するが、男子の姦通には、何等法律上の制裁をも加へないのである。これは如何にしても、男子の側から進んで改めなければならぬ法律であつて、もし男子の方で飽くまでも、改革するだけの好意がないとすれば、婦人は自ら何等かの手段によりて、法律の改正を迫らなければならぬ。英國に於ても、あの位自由、平等の思想が行はれてゐる國でありながら、婦人は、男子の如く法律の保護を充分に受けることは出来てゐない。例へば私生兒が出来た時に、その對手の男子が女を棄て、逃げたとしても、英國の法律はその男子を探索して、義務を負はせるだけの面倒を見て呉れないのであつて、婦人白らがその出生兒の養育に當らなければならぬのである。これも仍り、英國の婦人參政權主張者が憤慨してゐる一問題である。婦人にのみ不利、不公平なる法律の存在は、到底覺醒したる婦人等の耐え能はざる苦痛である。

更に婦人が非常に不公平なりと認めてゐるものは、報酬の問題である。即ち同一の才能を有しながらも、婦人は常に男子より、低級の給料を支拂せらるゝことである。經濟上から言へば、同一の能力あるものは、同一の賃銀を支拂はるべきである。然るに社會の長い習慣からして、兩者の間に斯くの如き、差別を置くといふことは、彼等の居常太だしく不服に思ふ所である。

以上述べ來りたるが如き現象は、もし社會主義の立ち場から、見るならば何でもなく解決の出来る問題であつて、殆んど議論にもならぬのである。將來自由平等の思想が一層發展して來たならば、婦人問題は自ら解決せらるべきであると思ふ。

殊に婦人問題の中で重要な問題は廢娼問題である。日本に於ける廓清會の運動の如きは、即ち此の問題の解決の爲めに努力してゐるものである。吾々が只今の日本の公娼制度に反對する所以は、これ



經濟上より觀たる婦人問題

鈴木 文治

婦人問題は、今や世界的の大問題となつた。極東の帝國に在る吾等よりして、之を觀れば、歐米の天地は、此婦人問題の爲めに、焼けつ、燃えつ、凄じい焰を揚げて居るやうにも見える。否、泰西のみではない、我が國に於てすらも、此婦人問題は漸く火の手を昂げ來つて、『新しき』は、時代の流行語となつて居る。僅々三五人の運動にすらも、社會は種々に評判し、批評し、騒ぎ立てる。『新しき女』の問題は、何故に爾く大問題であらうか。曰く、婦人問題は、世界的背景を有すればである。時代の深酷なる要求なればである。

祈ることゝ、食ふことゝは、人類に離るべからざる本能であるといふ。然らば則ち、婦人問題の由來も、之を精神的方面と、經濟的方面とに分けて見ねばなるまいと思ふ。

婦人問題の精神的由來は何であるか。これは茲に提起すべき主たる問題ではないが、學者は多く之を彼の十八世紀の末葉以後、十九世紀の初葉にかけて、大成せられたる、佛蘭西革命に歸するやうである。蓋し彼の文藝復興に孕まれたる革新の機運は、學者の自由討究と、志士の熱烈なる運動とは、經濟界に於ては産業革命を遂げ、精神界に於ては、宗教改革を成就した。然も此機運は益々熟して、

獨逸では随分婦人が、社會主義の運動に、大にその力を添へてゐる。將來益々此の傾向が盛になることと思ふ。何となれば、吾等の見るところでは今日の社會制度の下にありて、苦痛を實驗しつつある人々に對して、社會主義ほど偉大なる光明を與へつゝあるものはないからである。私は婦人が過古に於て宗教に額付きたるが如く、來らんとする將來に於て、婦人は必ず社會主義に走りて、その裡に大なる救済と、慰安と、光明とを發見するのではあるまいかと思ふのである。

眞實の婦人、眞に醒めたる婦人といふものは、道德と、活動と、正義と、平和と、慰藉の源泉でなければなりませぬ。

自分の一身は、天父と合一の境に迄達しまして、その自覺の上に立ちまして、その上で、改めて世界の同胞に強く／＼自分を結び付けて、人はすべて自分の一部であり、自分はすべての人の一部、自然界の一部であつて、宇宙全體、世界全體と自分とは全く渾然として一になつてしまつて、世界の幸ひは即ち自分の幸ひで、人の喜びは即ち自己の喜びでなければなりませぬ。眞に彼我一體、自他無差別の妙境、理想の極致の人となりまして、自分のいのちは世界のいのちとなり、宇宙のいのちは自分の眞實のいのちであることを悟りました婦人が、眞の婦人であります。自分の全人格は宇宙の實在そのものとなり、まこと求め／＼てやみませんでした本能は、いつしか神となつて、自分の全心全靈は全く新たに、身は眞理、心は神の結ぶ最善の果、そのたましひは世界の華として、人事の有限から無限の境域にまで入りました婦人が、一たび神のため世界のため、同胞のために、志を決して、自分を犠牲にして、まことを世に明にし、天の道を人とともに究めて、たゞしきを普くこの世に布きますために起ちました、その曉、その時からこそ、始めて、眞實に新しい女といふものが、この世に出でましたといつてよいと思ひます。

(寄書)——野田千代子——

所謂母系團體(Mutterschaft)なる集合の下に、男女が極めて亂雜なる生活を、續けて居たに過ぎなかつた。従つて此頃には經濟組織と稱すべきものなく、又勿論婦人問題なるものも、あり得なかつたのである。其後民族の文化の程度、稍進み、或は牧畜、或は農業に従事するに至つて、男子家長の大家族制度が成立し、婦人はたゞ一家の消費經濟の雜務に従事することゝなつた。而して一家を養ふの責任や、社會公共的生活の代表者たることは、悉く男子が之に當ることゝなつて、婦人の天地は全く家庭内に限らるゝことゝなつたのである。勿論婦人の職業といふものは、此頃も全くなかつたのではないが、それは裁縫、或は炊事といふやうな、家庭的の仕事、下婢として當つたのであつて、男子もする仕事とは、全く方面を異にするに至つたのである。此關係は實に長い間、人類を支配した、而して一種の社會制度、不文律たるの觀を呈するに至つた。

則ち婦人は經濟上に於ては、正に奴隸の地位に置かれたので、従つて婦人の一切の言動は、悉く男子の保護監督の下に行はるゝことゝなつたのである。結婚の問題の如きすらも、尙當事者双方の合意といふよりは、家長たる男子の同意不同意に依つて決せられた。従つて幾多の戀の悲劇も演ぜられたのである。これは何の爲めかと言はゞ、いふまでもなく、經濟關係に基くのである。男子の爲めに養はれて居るからである。凡て人は恩人の前には頭が上らぬものである、兎にも角にも男子は婦人に取つて、自己を扶養して呉れる恩人である。然も往々にして其恩を笠に着せる恩人である。少々の無理があつても、服従せねばならぬ。社會の制度がさう出來て居る、教育の仕組がさう出來て居る、道德の批判、法律の制裁すらも、自づから男子に寛にして、婦人に酷である。婦人は實に寄る邊なきさの捨小舟であるが、然も因襲の久しきや、多くの婦人は、之を以て婦人の自然、婦人の天性として敢て

遂に佛蘭西革命を大成するに至つたのであるが、佛蘭西革命の先驅者は、いふまでもなくルッソウ其人である。ルッソウが自然に反るの主義と、天賦自由の思想は、遂に一七八九年の『佛蘭西人權宣言』となつて、現はれたのであるが、其所謂『佛蘭西人』は、男子をのみ眼中に置いたものであつて、婦人も亦『人』たるに至つては、何人も之に心づかなかつたのである。併しながら、革命の波は、獨り男子の胸にのみ寄せたのではない、茲に一人の革命婦人が現はれ出て、『佛蘭西人權宣言』に對して『婦人の權利の宣言』を發表した。曰く『男子及び婦人の共同に依りて、國民は成立し、國家は之を基礎として存在す、立法は一般の意志の發表ならざるべからず、各婦人は各男子の如く、自ら又は其選舉したる代表者に依りて、其成立に參加せざるべからず』と。婦人、名をオлимп、ド、グウヂュといふ、實に近世婦人參政權運動者の第一人である。斯くの如くにして、婦人覺醒の第一聲は叫ばれ、爾來一百數十年、婦人の教育の高くなり、又廣くなるにつれて、問題は益々複雑紛糾し來つたのであるが、是れ婦人問題の精神的由來、知らず、其經濟的由來は如何。

抑も婦人問題とは何であるかと言はゞ、各種の方面に於て、各様の意味に於て、婦人が男子同等の機會に均霑せんことを要求するに基くものであらう。男子の壓迫と束縛とを脱れ、自由に、快活に、其想はんとすることを想ひ、其行はんとする所を行ひ、以て全く男子と同一の地位、待遇、權利を得んことは、新しき婦人等の熱心なる願である。然らば何故に從來婦人は、男子の壓制と束縛とに、甘んぜざるを得なかつたのであるか。之には勿論、婦人の智識、教育の問題もあるが、其主たるものは何うしても男女間の經濟關係に基くのである。

往古、人類未だ原始の生活を去らず、山野に狩し海澤に漁り、漂浪生活を營んで居つた時代に於て、

ある。一は生産關係、一は消費關係である。

第一、生産關係に就て、之をいふならば、産業革新の結果、手工業、家内工業の形式が、工場工業機械工業に一變してより、腕力、意匠力を必要とするよりも、寧ろ機械の補助、又は番をすればよいことになつた。従つて高價なる男子の勞働よりも、廉價なる婦人小兒を以て優れりとするに至つた。加之、男子向の仕事のみでなく、婦人向の仕事が大に増加するに至つた。而も一面、産業組織の變遷は、社會經濟の組織にも、一大變化を與へて、貧富の懸隔を甚だしからしめ、一般の生活を困難ならしめ、従つて一家は、單に男子の收入のみを以ては、維持すること困難なるに至らしめ、中流以下の多數の婦人をして、相率ゐて、或は工場に、或は商店に、或は其他各種の自由職業に身を投ぜしむるに至つたのである。

試みに獨逸に於ける、婦人就職者増加の割合を見るに、實に左の如くである。

	一八七〇年	一八九〇年	増加割合
女 優	六九二	三、九四九	五・七〇
女 建 築 師	一	二二	二二・〇〇
女 工 (教師共)	四一二	一〇、八一〇	二六・二三
女 文 士	一五九	二、七二五	一七・一四
女 牧 師	六七	一、二三五	一八・四三
女 齒 科 醫	二四	三三七	一四・〇四
女 技 師	〇	一二七	—
女 記 者	三五	八八八	二四・三七
女 辯 護 士	五	二〇八	四一・六〇
女 音 樂 家 (教師共)	五、七五三	三四、五一八	六・〇〇

怪まず、たま／＼氣骨ある婦人でも出現すると、却つて變性女子として、之を輕蔑するの有様であつた。

此の狀態は長く社會を支配した、否、或る意味に於ては、今も尙支配しつゝあるのである。併し積雪に壓せられたる、なよ竹も、春來れば則ち其雪を撥ね除けて、すつく立つのである。反動の時代は遂に來た、それは前述せる、産業革新の大勢則ちそれである。

二

産業革命の如何なるものなるかは、茲に改めて説くが必要がないと思ふ。たゞ文藝復興以來、自由と革新とを求めて、止まなかつた人心が、幾多の發見と發明とを生み、其發見と發明とが、工業上に利用せられて、産業の形式が大仕掛となり、大量生産を主義とするに至つて、從來の小仕掛の手工業、家内工業を、殆んど全滅せしむるに至つたと言へば、それで足りるのである。事實は單にこれだけである。

あるが、然もそれが、社會組織、經濟組織には、實に未曾有の一大變革を與へたのである。變化は種々の方面に於て、起つたのであるが、特に本問題に直接の關係ある方面を言へば、其最も大なるものは、婦人に對する職業の開放である。從來、家庭内の人であつた婦人は、漸く戸外に放たれることゝなつた。單に戸外の人たるに至りしのみならず、男子と同様に職業に従事する身となり、從來男子に養はれつゝあつた者が、一躍自ら養ふ身となつた。是に於て兩性の關係も、自づから大なる變化を來さざるを得なくなつたのである。

思ふに、近代婦人の覺醒と經濟との關係とを究めんとするには、之を二方面より觀察するの必要が

非常の勢を以て増加して行く。而して其結果は、婦人の覺醒である、男子に對する反抗である、勿論今日に於ても、外に出て、職業に従事して居る婦人は、家庭内に居る婦人に比して、數に於ては較べ物にならぬけれども、其逐年増加し來るべきは、火を睹るよりも明かである。而して其結果は家族制度の破壊である、獨身婦人、獨身男子増加の問題である。やがて延いては、兩性問題に對する道德的標準の動搖となる。吾人は此眼前の事實に對して、如何すべきであるか。

三

併し婦人間の經濟的關係は、單に之を生産關係に於ける男女の競争よりのみ、見るべきでない。又實に之を消費關係より見ねばならぬ。

從來の婦人は、消費者たるのみであつた。家族たる婦人は固より、主婦すらも先づ男子の得たる收入を以て、一家を經營して行く、消費經濟の方面にのみ、其職分があると見られて居た。然るに同じ消費者たる關係に於ても、産業革新の結果、資本主義の經濟組織となるに従つて、其關係に大分變化が生じて來た。例へば婦人の家庭内の仕事は、裁縫、洗濯、炊事、掃除、應接と數多いのであるが、電氣、瓦斯等が、低廉に自由に輕便に使用せらるゝやうになつてからは、家庭内の仕事にも大分餘裕が生じて來たのである。従つて夫等の婦人は、家庭内の勞作の爲めに忙殺せらるゝことなく、其時間の餘裕を以て、或は學術の研究に、或は趣味の涵養に、勉むることが出来るやうになつた。然も分業が益盛んになつて、裁縫は仕立屋に、食事は料理店で、洗濯は洗濯屋に、夫れ々々専門家に依頼するとが出来るやうになつてからは、婦人はメキ／＼と精神的にも發達し、優に男子と拮抗し、若くは之を

女官公吏	四一四	四、八七五	一一七七
女簿記醫	五二七	四、五五五	八六四
女事務員	〇	二七、七七七	—
女速記者、タイ	八〇、一六	六四、〇四八	七、九八
ブライター掛	七	二一、一八五	三〇、二六・四二
總計	一六、一二二	一七七、二五九	一一・〇〇

即ち二十年間に於て、實に十一倍の増加を示して居る。一八九〇年以後は、今材料なきが故に證明することは出来ぬが、思ふにこれよりも激しい増加率なるべきは、疑を容れぬのである。

今一つ北米合衆國に於ける、女子就職者の統計を示せば、左の如くである。

教會用務	一八九〇年	一九〇〇年
法律事務	一、一四三	三、三七三
醫師	二〇八	一、〇一〇
教養	四、五五七	七、三八七
商業代理人	二四六、〇六六	三二七、六一四
簿記會計係	四、八七五	一〇、五五六
筆生	二七、七七二	七四、一五三
商業	六四、二一九	八五、二四六
賣子	二五、三五五	三四、〇八四
鐵道事務員	五八、四五一	一四九、二三〇
速記者、タイ	一、四四二	一、六八八
ブライター係	二一、二七〇	八六、一一八

數字の羅列は、以上に留めて置くが、併し其如何に、女子の就職者の増加して行くかを知ることが出来ると思ふ。今茲には勞働者たる女子に就ての數字はないが、これとても毎年工業の發達と共に、

優秀な人に對して、參政權を與ふるも、何の不都合もあるまいが、婦人全體としては、更に大に實力の熟するを待つべきである。吾人も恐らくは、囚はれたる人であらう、併し囚はれて居るにしても、吾人は徒らに急激な變動を社會に與へて、其秩序風紀を攪亂せんとするは、寧ろ舊來の因習に囚はれて居ることよりも、不健全なことなりと、信ぜざるを得ぬのである。

婦人の經濟的獨立といふことも、結構なことである。併し夫れは、男子に拮抗し、男子に敵するが爲めであるべきでない。男子と共力し、助力し、以て社會を進歩せしむるといふ點にあり度い。此意味に於ては、吾人はよし婦人の爲めに男子が一時、職を奪はれるやうなことがあつても、社會永遠の發達の上よりは、歡迎せざるを得ない。或は特殊の職業に従事するが爲めに、一生獨身で暮す人も出來るであらう。夫れとても非難すべきではない。或は一旦結婚したる人にして、離婚其他の事情の爲めに、獨身生活をなすに終る人も多くなるであらう。結婚するにせよ、せざるにせよ、婦人が何等かの職務に就き得る丈けの、準備を整へておくことは、大切な護身法である。結婚生活に入つて後も、夫の生活を助ける爲に、子女の教育の爲めに、隨分社會的活動をなす必要が起つて來る。否、今後に於ては、生活難の壓迫は、夫婦共稼を餘儀なくするに至るであらう。然らば婦人が、職業的準備をなすことは、結婚の一資格と言つてもよい位である。併し婦人の經濟的獨立は、固より貞淑、溫良の婦徳と相容れざるものではないのである。

以上大要、經濟上より見たる婦人問題に關して卑見を陳じて置く。身邊匆忙、推敵の餘暇なく、加ふるに、編者の督促極めて急、甚だ杜撰ながら此一文を草して、以て責を塞ぐことゝした。

凌駕する者が、各種の方面に起ることゝなつた。『婦人は指が細くなれり』と言はれるのは、則ちこの事である。日本などに於ては、家屋の構造も、社會の組織も、まだ其程度に進んでは居らないが、歐米の天地に於ては、此傾向が著しいといふのである。家庭に於ける婦人の仕事に餘裕があるやうになつたので、上流の婦人は益々家を外にして、或は社交に、或は研究に或は社會的事業にと赴き、中流以下の婦人は、工場、會社、商店に、其他の業務に従事することゝなつた。加之、近世に於ける奢侈的慾望の増加は、収入の饒多を望むの情を益々大ならしめ収入饒多を望むの情は多數の婦人をして、愈競うて職業を求めしむることゝなつた。斯くの如くにして、消費關係、生産關係共に相俟つて、女子職業問題が喧ましい問題となつた。而して之と相關聯して起り來る所のは、結婚問題、衛生問題、風紀問題、婦人の權利擴張問題若くは婦人參政權問題等である。吾人は此眼頭の雜然たる諸問題に對して、如何の解決を與ふべきか。

予は結論を急ぐ、極めて簡明に答へねばならぬ。曰く、婦人の覺醒其事は、寧ろ歡迎すべき事で、其經濟的獨立も、寧ろ喜ぶべきところである。但だ其真不眞、熟不熟が問題であると。一體、此世界は男子專制の爲めに作られたのではない、男女同存共接の舞臺である。婦人も亦『人』である。『人』たる以上は、『人』としての自由を求め、權利を主張するのは當然である。婦人が内外の刺戟によつて、長夜の眠より醒め、男子と同一地位にあつて、事をしやうとするに、何の不思議がある。寧ろ人類進歩の爲めに、慶賀すべきことではないか。併しながら、徒らに感情に驅られて、奇矯な言動を喜び、以て一世を煙に卷いて、自ら快とするが如きは、如何にしても同情することが出來ぬ。彼の英國の婦人參政權運動者の暴行に、賛成する能はざるは、勿論である。婦人の中にも無論優秀な人はある。其

回づゝ出て居て、表題には Internationale Zeitschrift für Philosophie der Kultur と附言がしてあるが、これも彼の新運動の潮流に屬するものと解していいのである。

然しこれ等の新しい運動が、いつも舊い研究を等閑にしないのは、頼母しい心地がする。十六世紀の宗教革命時の勃興は、古代文藝の復興や聖書の研究によつて根柢が出来た。現代の精神的新運動は孜々として獨逸のクラツシツク文藝哲學の研究を勉めて居る。新浪漫派の根柢もこゝにある譯である。新浪漫派と十八世紀より十九世紀にかけてのそれとは、脈路が相通じて居て、それが哲學の方では理想主義となつて居るのである。さう云ふ譯であるから現今獨逸に於ては、ゲーテ、シルレル、カント、シエルリング、フイヒター、ヘーゲル、ヤコビー、シュライエルマツヘル、ハマン、ショーペンハウエルなどの文集や研究が盛んに出版せられてゐる。

そして現代の人は何故にこんな研究をするのであるかと云ふとそれは彼の大なる時代を憧憬するよりして起つて居る。その大精神を今時に活かして、之れに生きんとするのである。十八世紀盡きて十九世紀の曙を迎へし新年の夜に、ゲーテ、シルレル、シエルリングがワイマル城中に集つた時の會話に胸を焦がし、ペンペルフオルトの哲人を想ひ出して居る。是れ實にシュミットの研究、フリードリヒ、ハインリヒ、ヤコビー」中に記する所であるが、ヤコビー(一七四三—一八一九年)の如きは、實に浪漫派の一豫言者として忘るべからざる人物である。

然しヤコビーの如きは、豫言者的天才は有して居たけれども、未だ組織の充分立つた哲學者ではなかつたかも知れない。然るに

現代の人が求むる所は、組織のある世界觀である。最早斷片的のものでは、充分な満足が出来ない。之を眼前に求めて得ることが難いから、之を前代に求めて、あこがれるのである。之を以てラッソンがフイヒター研究もこゝに着眼して居る(Jasson: Johann Gottlieb Fichte und seine Schrift über die Bestimmung des Menschen)即ちラッソンはフイヒターが決して、今日の讀書社會の大部分が大哲學者と做すやうな、隨筆的な或は斷片的な冷評家でなくて、これなければ生活も眞の生活にあらず、唯だ僅かに植物的生活をなすに過ぎずと云ふ程の、眞實なる人生哲學、根柢ある世界觀を與ふる者であるとして居るのである。その他この種類の好著と目すべきものには、同人のヘーゲル研究 (Beiträge zur Hegelforschung) 或はブラウンのシエルリング研究(Braun: Hinauf zum Idealismus! Schelling-studien)若しくは伊國人クロースの「ヘーゲル哲學(Croce: Lebendiges und Totes in Hegel)(Philosophie mit eines Hegel = Biographie)」等。

更に當代の哲學者の特色とも云ふべきは、彼等の世界觀が實生活と離れないことである。彼等は一般的な思想を構成しては居るが、各人はどうしても之を採用して、自由に之を實地に應用しなければならぬやうにして居る。之を以て彼等は愛國者であり、愛國者を養成して居る。シエルリングがミュンヘン大學の就任演説のうちに「余は獨逸人なるを以て、又獨逸國の苦痛も幸福をも共に余の心に嘗めたるが故に、余はこゝに立つのである。何んとなれば獨逸人を救ふものは學問であるからである」と云つて居るのは、凡てを代表した格言とも見ることが出来る。然し彼れ等の世界觀は大宇宙の存在に根柢を置いて居るから、決して狹隘な、



潮 思 外 海

獨逸學界の近韻

日米問題だとか、支那問題だとか云ふことが盛んに議論せられて居るかと思ふと、更に他の方では南洋の交易をどうせいの、パナマ運河開通の曉には商業はどうなるのと、毎日の新聞を續んで居ると、日まぐろしい程に、世の中は政治家や、實業家の獨專舞臺であつて、吾々哲學などを研究して居るものは、恰も人世と無交渉で、紅塵以外の閑日月を樂んで居るやうな觀なきにしもあらずであるが、然し若し吾々の哲學が全く人世と交渉がないならばその哲學は充分なすべき所を盡して、宇宙、人世の全軀を包んで居るものとも云へないし、又實社會の人々が哲學を無用視するやうでは、とても根柢の深い文明は建設せられないので、總ては根柢きて枯れるのが當然である。今日は飛行機の世界であるが、その後には深奥な學理を考へて居る純學者が、控へて居ることを忘れてはならない。唯だ飛行機を飛ばす丈けに勉めたならば、それは興行師になつてしまふ。

獨逸現代の國運は盛んなものである。彼れは由來陸軍の精英を以て鳴つて居たが、今は復た三國同盟の勢力推移せんとするに鑑みて、陸軍の大擴張を企てた。海軍も益々盛大になり、飛行機は

常に諸方の空を翔つて居る。商業や航海業は漸く英國を壓倒しかけて居る。然しこれ等のことは實益に注意するものゝ眼に入り易いことであるが、獨逸人には無論これ丈けで満足することの出来ない精神がある。否現今のやうな國運の盛大を招致したのには、更に深い〳〵處に根柢がある。唯だ實業熱や物質主義や、淺薄な自然主義に浮かれて居てはならないことを悟つて居る者は、以前もあつたが、現今では此の精神的傾向が、更に一層の勢力を以て突進しつゝあるやうである。若しこれに總括的名稱を與ふるならば、ネオロマンチックの運動とでも云ふのであらう。それも地方によつて區別も出来るし、特色もあるやうである。伯林のネオロマンチックの運動は、ジンメル教授や昨年死んだデルタイ教授などが中心であつて、その派の人々二十名程で「世界觀」(Weltanschauung: Philosophie und Religion……)と云ふ合著が一昨年出た。南獨逸ではキンデルバント、オイケン、リツケルト諸教授が中心になつて居て、是れ等の人々には、それ〳〵名著のあることは今更云ふ必要もあるまい。然るにこれ等の人々が協力して執筆して居る雜誌に「ロザ」と云ふのがある。それは一昨々年から年々三

盤を得て、あまねく佛蘭西國中に擴まつて行くと、また一方では社會主義のやうな民本主義の運動が、共和政治の觀念よりも一層つよく全歐洲を襲つてきた。ロマン・ロランの云ふところに従へば、この運動は十九世紀末の二十五年間に著しく發展して、これも漸く反武斷主義乃至、反尊僧主義の色を帯びるやうになり、其の結果おのづから佛蘭西に於ける反武斷主義の運動を強め、反加特力教の運動を助長するやうになつてきたが、この運動にはいづも一種の理想主義の色が絡み合つてゐたのと同時に、群民の煽動を目的とする空言の附き纏うてゐた事も屢々であつた。

然るに千八百九十年ごろになると、一つの有力なる反動が、この第三共和國を中心とする民主的傾向に對して起つてきた。「新精神」の反動が即ちそれで、一面に於いては共和國の放逸無節制の爲めに地歩を固うし、また一面に於いては、一般佛蘭西人の心ふかく根ざしてゐた或る本能的要求の爲めに、強い刺激を感じた結果に外ならない。自然主義後の小説界に心理主義を主張したポウル・ブルジェエや、「死者の聲」と云ふだけかい小説を著して新基督教の福音を宣傳したメルシオル・ド・ヴォオゲや、進化論を文藝の批評に疊み込んだフェルナン・ブリュヌチエールなどは、此新運動の中心をなした人々であるとも云つて可いのであるが、歸するところ佛蘭西人本來の精神と、加特力教の信仰とを一つに合はせて「共和國」の存在を否認しないまでも、少なくとも其の形を更めたいと云ふ要求に驅られての運動であつた、共和黨であるのと同時に善良なる佛蘭西人としての權利を保留し、なほ一步を進めては、飽くまでも加特力教の尊重者でありたいと云ふ要求に動かされての運動であつた。しかしながら此の反動は、共和黨多數者の認む

る所とならなかつた爲めに、遂に失敗しないわけに行かなかつたそしてロマン・ロランと時代を同じうする——千八百七十年代の——人々は、こゝに至つて其のあらゆる敵を退け、明らかに民主主義の理想を實行する事ができるやうになつた。

一體ブルジェエとか、ド・ヴォオゲとかブリュヌチエールとか云ふ人々は、三人とも千八百五十年代の人であるから、二十年ほど遅れて生まれたロマン・ロラン一輩の爲めに戦を挑まれたのも、無理のない事であらう。しかしながら、新しきものは更に新しきものを生まないわけに行かない、今日四十五歳の齡を重ねてゐる人々はそれはじめ少壯者を標榜して、過去に對して戦ふ未來の群と信じ切つて居たのであるが、いつのまにか千八百九十年を出發點とする新人の現出に接して、心ひそかに恐れを抱かないわけに行かなかつた。と以ふのは、ロマン・ロランが其の勞作の終篇で描き出してゐるやうに、千八百七十年代の人々と九十年代の人々との間には、何等の類似點をも、何等の調和點をも、たやすくは見出だせなくなつたからである。

千八百九十年と前後して生まれた人々の群は、もはや前代の遺産を傳ふる純粹の共和黨でも無ければ、ブルジェエ一派に與ひして、共和主義と尊王主義との調和統一を夢みるものでも無い。これら新人中の或るものは、君主政體に禁中して、飢をたるものゝ食を求むるが如き慾念を縱にする傍、たとひ加特力教の信者ではなくとも、加特力教のうちに國民的傳説の要素を見出さむと力めてゐる事だけは確かである。しかしながら、此の努力は決して加特信仰の表白ではなくて、たゞ或る數の人々の加特力教乃至教會に對する態度に過ぎない、至つて敬虔な面かも至つて同情に満ち

動もすれは排外、鎖國的の思想となるものではなかつたことを特に注意して置くの必要があらうと思ふ。——であるから獨逸の自由戰爭運動の如きも、決してカント、フイヒター、シュライエルマッヘルの哲學と離して考えることは出来ないし、特に當代の青年の士氣を鼓舞したアルントを忘れることも出来ない。これ等の點に關する著述も澤山に出て居るが、就中ウェステルブルクのシハイエルバックル(Westerburg: Schleiermacher als Mann der Wissenschaft, als Christ und Patriot)或はモーゼツクのアルント(Musebeck: E. M. Arndts Stellung zu den Reformen

佛蘭西に於ける新しき人々の問題

このごろの佛蘭西では、その藝術界は云ふまでもなく、あらゆる社會の人心を頗りに動かしつゝ一つの小説がある。この數年來、奥深い情緒と力強い思想とで、かの國の文壇に重きをなしてゐるロマン・ロラン Romain Rolland の『ジャン・クリストフ』Jean Christophe と云ふ勞作が即ちそれだ、一音樂家の生活を「曙」の巻「朝」の巻「青春」の巻「反抗」の巻と云つたやうに書き續けながら、第十卷の「新しき日」に至つて漸く局を結んだほどの大作である。この作の一部は既に英譯されて、昨年の末ごろ、丸善の書架を飾つた事もあると記憶してゐるが、何故さまで歐洲の人々の興味を搔るやうになつたかと云ふと、それは此の作が飽くまで豊かな情調と柔らかな言葉とで、いろいろの思想問題乃至社會問題を取扱つて居るからであるが、つまる所はそれが單に新しい立派な藝術品であるばかりでなく、時代に於ける佛蘭西人の思想と

des studentischen Lebens)の如きは最も讀むべきものである。斯く過去の研究は盛んなりとは云へ、これは決して過去に歸れ、過去を復活せしめよ、との意味ではない。更に過去をも超越せよとの警告となるのである。吾人はエナ大學の教授で昨年死んだリブマンの Kant und Epigonen (この書は一八六五年に出版された有名な著述であるが、この後繼者ブルノー、パウハが校訂して昨年新版を出した)も亦たこの意味に解することが出来る。

未だ記すべきことは澤山にあるが、餘り長くなるから、こゝで止めて殘りは他日に譲つておく。(柏葉)

いふ思想、生活と云ふ生活を表現してゐる故に外ならないであらう。

こゝに一時代に於ける佛蘭西人と云ふのは、すなはち作者ロマン・ロランと時代を同じうする人々の群もしくは、此の群に續いて現はれんとする若き人々の群を指すので、斯かる人々の間に流れてゐる思想の傾向は何うであるか、氣分の色合は何うであるか、斯う云ふ問題をロマン・ロランの表白する所に從つて知らうと云ふのが此の短き紹介の目的である。

ロマン・ロランと時代を同じうする人々と云へば、それは「第三共和國」と共に生まれた一群であるから、飽くまで共和政治の觀念に浸されて君主政治を厭ひ、單に軍隊に對して多くの同情を感じなかつたばかりで無く、また「尊僧主義」に對しても私に反感を抱いてゐた。一方で斯ういふ共和政治を翹望する心が其の地

した。はじめより詩歌の宗教味を論じたり、暗示の滋味を高調したりして來た人の事であるから、かゝる生活の一轉化を來たしたことも、決して偶然で無いが、ルタン新聞の一記者は、この事實を目して、加特力文明史の一新紀元を示すものとまで言及した。『彼は甦れり』序文には、「生活に立ち返らなくてはならぬ……生き返らなくてはならぬ……私たちの生命を隠すやうな恐ろしい過ちは何處までも捨て去らなくてはならぬ……」と云ふ辭句が力づくよく書きつけられてゐる。

▲ベルグソン哲學と新藝術

ベルグソンの新しい哲學が自然主義より心理主義へ、心理主義より象徵主義や新浪漫主義へ推移して來た十九世紀後半の藝術思潮と、極めて密接な契合點を有つてゐる事は、寛りのある心で其の哲學思想を味はうて見る人の、誰しも氣づくところであるが近ごろ巴里のメルキュアル・ド・フランス社から、ジョゼフ・ドゼエマルと云ふ人が出版させた『アンリ・ベルグソンの思想』と云ふ一書は、この重要な問題について新しき解釋を與へたものであると云つて可い。この書は八十頁に足らない小冊子であるが、ベルグソン哲學の中心思想を手際よく一つに括めてある末に、佛國の新音樂に印象主義のフレッシユな味を取り容れたクロオド・ドビュッシーの藝術は勿論、ロダンの彫刻、モ子エ、カリエール、ウキスラアなどの繪畫の中心生命に對してまで、なづかしき照應の匂ひを尋ね求めてゐる。著者は親しくベルグソンに教を受けた人である。

▲後印象派と狂的要素

シカゴやニューヨーク市で最近に開かれた、ポスト・アプレンツシヨニズムの繪畫彫刻の展覽會に就いては、その批評も區々であるが、要するに合理的といふ立

場から論ずる時には、何時も失敗の試みであると批難せられてゐる。しかしながら一步鑑賞の立場を變へて見れば、随分強烈な藝術的の香ひや、氣分を漂はしてゐる作品として認めることができるといふ評家もある。スピンガアルンス教授もその一人であるが、教授は次のやうな批評を下してゐる。

『その展覽會が開かれた晩、私は未だ嘗て經驗したことのない非常な冒險的刺戟を感じた。恐らくその晩出席した人々の多くは、同じやうな感じを持つたことであらう。それは單に色彩の刺戟でもなければ、肉感的な煽動でもなければ、冒險的試みの勝利……でもなかつた。少くとも私自身にとりては、私を動かした最も力強い或ものは、これであつたと言ふことができる。即ち私は始めて、藝術が藝術自身の狂的要素を取り戻したといふことを感じたのである、即ち近代の畫家及び彫刻家は、藝術の他の方面に於ける人々の間に、缺乏してゐたところの、藝術家的勇氣を持つたといふ名譽を贏ち得たのである。

要するに、何時の文明を顧みるも、狂的要素と勇氣は、あらゆる藝術の眞の生命である。プラトリー及びアリストートルは狂的要素の天才として、希臘思想を代表したものである。……少くとも藝術或は美に對して眞實の想を潜めたる人々は、此の藝術の狂的要素を認めるであらう。あらゆる藝術が尊き所以は、それが常に多少の狂的要素を包含するが故である』云々。

た態度であると云ふより外はないのである。

さて此の新運動に参加するものは、現今に於ける佛蘭西青年の一部に留まるけれども、思想の一潮流として等閑に附すべからざるものである事は云ふまでも無い。今假りに斯かる若き人々の心に動いてゐる思想を切りつめて見るならば、それは全然立君主主義の根本思想を有するものでは無いけれども、全く愛國主義ナショナルイズムの地盤と反平民主義の基礎に立つものであるとは云ひうる。そして此の愛國主義は、獨逸國の教唆と攻撃とに對する反動であると同時に社會主義と群民煽動主義デマゴジスムとに對する反動であると云つて差支ない。要するに佛蘭西現代の若き人々は、いろ／＼の思想と傾向との壓迫は受けながらも、何等か美なるもの善なるものを創造して、世

思潮餘沫

▲ロダン翁の談片

巴里の某雜誌の一記者が、近ごろ彫刻家のオウギュスト・ロダンを訪問すると、ロダンは色々と彫刻の話をした末に、君、こゝに一つ奇妙な事があるよ、吾々の間には人間中心主義などを擔ぎだして威張つて居る者もあるやうだが人間には動物の眞似をしなければ何にもする事ができないと云つたやうな一面がある。現代に於ける工業の發達が、動物の力を遙かに凌駕してゐるのは、云ふまでも無い事だが、其の發達した原因は何うかと云ふと、それは全く走つてゐる動物の形を眞似たからに過ぎない、まづ第一に汽車を見たまへ、あれは四足を有つた動物の形そっくりでは無いか、自動車でも矢張さうさ。航空術なども氣球のやうな滑稽な形に踏み留まつてゐたかぎり、少しも進歩

上の譽を贏たむとする要求に動かされてゐるやうである。

従つて彼等の目的とするところは、活動と實驗である。冥想も推論も彼等に取つては一味の力をも來たさない、實行に表はすことのできない思想が、彼等の顧るところとならないばかりでなく一切の否定と破壊と懷疑とを退けて新しき積極的態度の確立に飽くまで心を勞してゐる事は、既に疑ふべからざる事實である。ロマン・ロランは此點に於いて、これら新人の態度のあまりに狹隘なる慷慨悲憤に墮したる事を批難してゐるが、吾々は此の新しき傾向の眞意義に對して、正當なる判斷を下しうるだけの了解は、豫じめ用意して置きたいと思ふ。(S.A.N.)

▲文藝家の信仰復活

佛蘭西に於ける象徵主義運動の擁護者として、久しく涯しない冥想と、美しき希望の道を歩いてきたシャル・モリスは、近く加特力教の信仰に復歸したのと同時に、『彼は甦れり』といふ一巻の書を公にして、其の宗教的信仰を告白

妻。大分遅うございますわ。

主人。(いと冷やかに) もう十二時になるのか(眼を瞬きつゝランプの心をひねる) いやなランプぢやないか! 今夜の燈火は何うしたと云ふのだらう……この手許の暗さつたらない!……おい、パチスタン!……

おい、フランソア!……フランソア!

妻。(再びペンを取りながら) あの人達は草臥れてゐましたので、妾、室へ行つて寝んでも可いと云ひつけました。

主人。(口の中に) 疲れてたつて 疲れてたつて!……それでも俺達は何うだらう? お前は彼奴共

に欺かれてゐるのだよ。あの五尺男どもは、首を縊る綱の價もない奴等だ、度を過ぐすとは彼奴等の事だよ。(立ち上りて、暖爐の燭臺にて葉捲に火をつけ、暖爐を背にし、上衣の裾をまくりて煙らす) 度を過ぐすとは彼

奴等の事だよ——それはさうと、今日はそれで充分だよ……お前の身體に障る。

妻。(ほゝゑみて) まあ、さう云つて下すつては却つて……

主人。(靜かに且つ冷やかに) ファアラル、キンタア商會の受取證は渡さしたかい?

妻。(書きつゞけながら) 其の受取は留針を刺して、金庫の二番目の抽斗に入れてあります。

主人。それからルリエールの收金は?

妻。まだ何とも片がつきません。可愛想な人達、ほんとに可愛想な人達だものですから。

主人。(葉捲の灰を落しながら) でも不動産はいつでも幾許かの價があるよ。

妻。(しばらくして) それなら、御自分で支拂命令をお出しなさいましよ。

主人。(輕き調子にて) えゝ……(わきを向きて) あゝさうか!……氣の毒に思ふんだな……そんな事



反抗

—— ギリエ・ド・リイル・アダン作 ——

内 藤 濯 譯

人 物

主人フエリツクス（三十五歳）

妻エリザベエト（二十五歳）

巴 里 處

近 代 時

銀行家の居室。赤色、黑色、金色の家具。奥に戸。有枝燈架リュストルをつるし、絨緞を敷く。右手。暖爐に近く巴形の椅子を置く。暖爐にはわづかなる火。左手に見ゆる寫字臺には、會計簿、書類など載せあり。机の上は笠をかけたランブの光に照らされたれども、残りの舞臺はやゝ暗し。奥の戸の上に懸けたる時計の針は、やがて十二時を指さむとす。いと奥深き居室。幕上ると、妻エリザベエトは、机に近く座を占め、肘つきて物思ふ體。黑色のいと質素なる服裝。主人フエリツクスは、妻に向ひ合ひて、手紙と紙幣とを取り調ぶ。

第一景

主人。（大なる沈黙の後） 幾時だらうね？

手形は……

妻。何ういたしまして。でもあの手形は品が良かったのです、大丈夫だったのです……それに妾は

宅の名前をかき添へて置きましたの。たゞ割引と手数料だけ儲かる積りでしたから。

主人。(しばらく考へたる後) あゝさうか、つまりところ現金の取引が大丈夫と思ふのなら、それも可い

さ!……商賣の上では謹直でゐて失敗することは無いから……—とこゝろで……収入の方は?

妻。純収入二千六百〇四法二十二參。

主人。よし。(會堂の時計鳴る)

妻。(會計簿を閉ぢて獨語す) 十二時! (腕つきたるまゝにて眼を曇らせ、臉を下げ、手を髪に埋む)

主人。(心足りたる如く妻を見やりて) さうだ!……云ふまでも無い事だが、實際お前は正直な可愛い女だ、

頭の確固した女だ、本統に斯して世帯を立てゝから四年半にもなるのだが、その間、一度も俺はお

前を貰つたのを後悔したことが無い。いや實際だよ……簿記掛としては實に結構すぎる程だし、

女としては至つて正直で、馬鹿なことをしないのが何よりだ。それに俺の希望以上に精を出す

性質を有つてゐるばかりでなく、その上に女の優味を一人で引受けてゐるのだから、唯の一つだつ

て小言を云ふ事もない!……かうして身代が三倍になつたのも、みんなお前のお蔭なんだよ。

(煙草を煙らしつゝ歩き廻る)

妻。(しとやかに微笑して) そんなに賞めて頂けば、どんな女だつて自慢しなくなりませうよ。

主人。(心よく) 全くお前のお蔭だよ、俺はお前のお蔭だと云ひ切つても疚しく思はない。お前の助言がな

かつたら、俺は随分と要らぬ事もしたらうし、過失もやつたらうし、馬鹿な事も澤山にやつたらう。

はいかん！……（聲高く）まあ聞き、涙を乾かしてゐなければ、取引は瞭然見えないものだ。強
制買収になるのを待つてゐた日には、割賦でなければ金子が入らなくならうと云ふものだ。

妻。（やゝ悔る様子にて）それは厭な事でせうよ、ほんとうに。

主人。さうさ……

協諸契約が認められたり、あゝしたり、斯うしたりした後で、入つてくる金子は割

賦にならうと云ふものだ……分配金額の割賦にならうと云ふものだ……よく了解してゐて
欲しいんだが、ねえお前、俺があの憐れなルリエーヴル親子を容赦なく告訴するのは、たゞ私の主
義に依るだけの事だよ。俺はあの人達の運命を氣の毒には思ふのだが、しかし最早仕方がない！取
引は嚴重にやる必要があるよ……（チヨツキの端を取りて引きのばす）時に……今日の出金は何うなつて
ゐるかい？

妻。シレジイ炭鑛を二十五株だけ申込みました。Cの抽斗に。

主人。あの債券は聊か危いねえ。どうして何うして、重役には羽振の可い名前は並べてゐるし、極彩

色の廣告はやるし、ねえ？……それに經濟界の新聞雜誌では、こたゝ吹き立てるやうな次第だら
う！……不運な者共が其の資金を傾けて、それに應ぜずに居られないのは不思議も無いが、どう
も俺には分からないねえ、用心深くて取引に目のさくそれほどのお前が、あれを信用して取引を
さつぱりやつて了つたのは……

妻。（いと穏やかにペンを停めずして）

妾、あの價は存じて居ります。ですからゴオドロオ、グウドロン商會の

手形で支辨して、足し前を現金で拵つたのです。

主人。あゝさうか……それなら話が違ふよ。あの虫のついた手形を捌いてて呉れてよかつた、あの

なつたのだよ。此のごろのやうに……

妻。(抑^{おさ}ふやうに)さうですよ、禮儀上ね。(主人嘆す)

主人。(足を暖めんと火の邊に行きて)すこし菩提樹の花を煎じて呉れないか。風邪をひいては堪まらないよ。

見かけだけは斯う丈夫さうでも、實際は弱い體質だからなあ——一寸罅隙^{すき}の風に當つても、すぐに腰の痠^い痺^{しび}質^{しつ}斯^こが起こつてくる……それへ少し石長生を入れて呉れないか、効驗^{きけん}が著しいから。

妻。(へとやかなる不安の思入ありて)本當^{ほんとう}にあなたは弱くつていらつしやる……妾^{めかけ}、なるほどお弱いと度々思

ひました。

主人。(安樂椅子の上に身をのばして)時に何うだい……もう仕事をやめては……俺はもうこれ以上お前に苦勞をかけたくない。お前には俺の云ふ事が解^{わか}るだらう?とかく病氣には罹りやすいものだよ。ねえ、俺は心から愛してゐるお前に、身體^{からだ}を悪くされては閉口だ。もしお前が病氣になつたら、誰が帳簿の始末^{しまつ}をつけるのだ?……そんな人間は誰もゐないよ——これから(天氣の良い日には)勿論支拂期日だけは別だが)一週に二度は美しい野山の景色を眺めに行つて、浩然の氣を養はう事にしようよ。——それにこれから春になるんだが、春になると俺はまた氣がひきたつてくる。ねえさうだらう(串戯らしくほゝゑむ)偶^{たま}には田舎^{いなか}も嫌つたもので無い。田舎へ行くと新しい考も湧いてくるし、利益になる考の湧いてくるのも屢々だからねえ。まあ芝居^{しばい}を見るやうなものさ。俺たちはあまり引き込みすぎる。時には芝居へ行つても可いではないか……芝居へ行けば好い機會へ出會^{であ}ふことができよ……それから歸^きするところは氣が晴れてい……氣が晴れてい……さうしやう、俺の顔をだせば、優待切符が譯^{わけ}なく手に入るよ。うむ、友達のヴォオドランの手をかりやう!……彼はいつも

萬事控目にするのは、全くお前たち女の美點なんだが、お前は實に能く眼がきく……殆んど男もかなはない程の達見がある。……手取早く云ふと、お前には商賣上の鑑識が具はつてゐる。それが豪いところなんだ……それからお前の好みは何うかと云ふと酷く地味で、扮装道樂で俺の身代を倒すやうなこともない。けれどもお前は薩張外へ出ないのだが、それは間違つてゐる。家の中ばかりで……まるで尼様のやうな日を送つゐる。なぜお前は寄宿舎仲間が結婚してから、ふつと交際を絶つて了つたんだね？

妻。御承知の通り、妾には、流行に眼を呉れずに自分の務めに背くことのできない女等を尊んでばかりゐる弱味があるのですから。

主人。(二たび座につきて)それが何よりだ！しかし何と云ても商賣が第一だよ。たゞ主義に依りけりだが、人と交際はしなければならん。何でも度を外さないやうにしようではないか、さうで無いと俺達は空想に陥つてしまふ。

妻。(晴やかに)ですけれども、あんな立派な人たちから除物にされたところで、店の信用は失くなるまいと思つてゐました。

主人。(磊落に)よくやり返すねえ！……まあとにかく、トン・キホオテの流義はいけなないよ……店の信用と云へば、俺は多くの人たちのやうに、「俺は正直だ」と云ひながら、金箱をかついて一晚姿を隠すやうな人間でない事は人がよく知つて居る。いや、俺は自分の生地より以上に能くしない人間だ……ぶちまけて云へば、俺は生來非常に細心な男でなかつたかも知れない。(妻は夫の顔を見る)こゝだけの話だが、俺は訓練の力で自分の眞實の利益を見わけることを覺えて、そこで斯う正直な男に



銀影歌

野口せい子

いみじくも底の底なる我が出てゝ泣けるかとしもほととぎすさく
手すさびに引きてならせば草笛の孤兒が弾く三味に似るかな
わかみどり曉の風このころ銀をはじきてよき音に鳴る
紗のおほひたをやかに笑む女の呼吸初夏の山すこしくもれる
青の幕わが前に垂る一木の楓に重くさつき雨降る
かさつばた雨の降る日は更によしころぬれたる人のまなざし
初夏の水に似たる日身も靈魂も透きて流るゝ心地こそすれ
小鳥ゐても思ふらし慳わか葉光る夕陽に赤きくちばし
朝じめりふめば聲ある花草にまづ言ふことのきよき六月
水を撒き箒など取りなすことのいそしくも夏は來りぬ

茶話會でお前に追従を云ふから、今度はこれで一寸しかへしをしてやらう……二重の儉約さね！

：さうてはないか……

妻（沈黙の後、硝子窓の近くにて、うかうかと）今夜は眞暗な天氣です。

主人。眞暗でも構はないよ、海に船を持つてはゐないし、此の家は古くつても屋根は大丈夫だしする

から。家の先祖達は普請が巧者だつたのだ。（以前の考に立ちかへりて）たとひ芝居へ行くにしても、惡趣味の作はなるべく見ない事にしやう、ねえ？新聞の記事に依ると、芝居には新しがりの賤しい連中

が集つてゐて、一生懸命に傍の者を搔き亂したり打ち壊したりしながら、他人より以上に自分の

價値を認められやうとする……けれども、要するにさういふ連中の持ち來たところは何にもな

い、爪の垢ほどの事もない！……たゞ何んな感情ともつかない……殆んど危険な……感情を思想の

貴い人々に與へて、不安の情を醸すばかりだ。馬鹿げさつた事で、さう云ふものは斷じて禁じな

ければならん。俺は芝居へは笑ふために行く、あゝいふ場所へ行かなければならん以上、それでい

のだ……俺は單純なものが好きだ、自然のやうに單純なものが好きだ。自然は單純ではないか、人

生は單純ではないか、みな悉く單純ではないか。人にしても自然にしても、高すぎる山はいけな

い。俺は萬事につけて、正直な中庸を撰びとるよ。たとひ……高尙で……ありたいと思つても、せ

めて慎重にやらなくては……不埒極まるのは新しがりの連中だ！俺は古い劇曲が好きだよ、古い劇

曲は可い、いゝ物であつたら、それを眞似なければならん、それより以上に出てはいかん。（火を搔

きまはしながら）しかしたまに……場合に依つては……その……ずれたり……取り入れたりする事が惡

い……云ふわけでも無いさ……

妻。（耳を立て）一寸失禮！（門前に停る馬車の音。獨語）馬車、いゝわ。（窓近く行きて硝子越に見る）——つゞく——

一つは青薄^{あをすき}しげる杉苗の山、

夏の雨のそぐ湖水のほとりに立てり。

あはれこれらの墓をおとなふとも稀にならば、

やがては無縁の塚とならむ日も遠からじ、

かくてわが靈は日々にすさみ衰へ、

狐狸棲むすみかともなりぬべし、

あゝわが靈の奥に立てる三つの墓よ……

*

心ない世の中からうけるくるしみのかげは、

そのうつくしい顔と心をいくたび蔽ふたらう。

いぢらしいと思ふとお前のくるしみは、

火のつくやうにわたしのくるしみとなる。

*

雨はやがて海のおもてより退き、

白雲は空を蔽うて走り来る、

雲は水にひたり、水にひたりつゝ色を變じ、

空は忽ち細^{こま}かさ瑠璃の絹ぎれを飛ばす、

此時沖のかなたより白帆の浮び来るを見るは、

ゆくりなく戀人にあふよりもたのし。

*

この海の色のかはるやうに、

わたしの心の色もたび／＼かはる、

光が陰にまじる時は、

男の強い決心と熱情が燃え、

陰が光にまじる時は、

女のやさしい躊躇と涙が流れる、

わたしは今この海のかゞみの前に立ちて、

わたしの心のすがたをさながらに見る。



西灘より

佐藤

清

*

この岡の上に立てば海にこそなし、
空も海も油のやうにかすみわたりて、
うきぼりの如くに動かざる白帆さへ、
やがては遠き濃藍のつらんのなかに没し去る。

わがこゝろの海も今はしづかに暮れて行く、
見つむればますます暗し、さびし、ものがなし、
銀のやうにひかる白帆のかげ即ち愛も、
忽ち深き濃藍即ち悲みのために消えてゆく。

*

苦みは人をにくむ心と共に生れ、

*

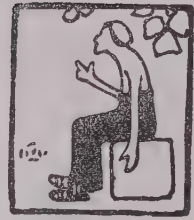
喜びは人を愛する心と共に生る。
あゝされどこの呼吸するさへ苦しき心は、
おん身を愛するほのほより來れり。
主よ、感謝す、我は今主の御苦みを味ふ、
杯を唇にあて得ることを。

わが靈れいの奥に三つの墓あり、
一つは野のはての野菊咲く岡、
秋の薄き日のさす所に立てり。
一つは紫むらさきの咲く静かなる入江、
春の日のあたゝかにさす所に立てり。

と思ふと、自分の生活の不安が、ひい／＼と胸に迫まつて来て、淋しい思ひが、潮の様にせめ寄せて来る。『人生と云ふものは、外部の力を自我の力で征服して、そこに新しい自我の世界を創造することだ。……それには、自我そのものが強くなければならぬ、……だが、自分の自我は果して何うであらう。第一、身體が弱い、神經が害はれて居る、そして、意志は鉛の様にぐにやついて居る、他の人になら、空を吹く風の様に過ぎて行くことも、自分には針で刺される様に感じられて、悲しんだり、泣いたり、笑つたり、宛然七面鳥の様に變つて行く。……自分は勝つことが出来ない、敗北こそ自分に賦與へられた唯一の運命だ』

こんな風に思はれて来る、すると、英雄の眼の前には、冷たい、鮮明な、一面の雪の曠野が擴がつて来る。低い灰色の雪が空を掩うて、落ち葉し盡して了つた所々の立木には、針の様に細い小枝が、苛立つた神經の末梢の様に、その空を衝いて居る。冷たい風が身をさる様に、ヒュウ／＼と吹き荒んで、娘の群が呪はれた死の様に呻つて居る。『これが自分の人生だ』と彼は思つた。

『人生と云ふものは、何も別に客觀的に轉がつて居るものではない。人生の自我を離れて存在するものではない。だから、人生は何うの斯うのと叫び立てるのは、吾々の僭越である。人生は自我の如何によつて定まるのであるから、吾々は最早、樂天家を學んで、人生は天與の樂園だとか、または、厭世家に倣つて、人生は暗黒の王國だとか云ふ權利がない。吾々はたゞ、自分が強いとか、弱いとか、より外は言ふことが出来ない。自分が強いから人生は樂園なのである。自分が弱いから人生は悲しいのである。そして、英雄は、弱い自分の上に、殆んど絶望の叫びを投げないで居られなかつた。



ぺらごにあ
加藤 一夫

英雄はまた健康を害ねて居た。

身體の衰弱つて居ることが、自分にも明瞭と感じられ、その上、胃腸の工合もよくないので、平常なら終日ねて居る筈のところを、生憎、日曜だつたので、無理をして教會へ出て行つた。自分の様に偏狂で（世間の人から見ても、……と彼は思つて居る）無能なものを養つて呉れるところは、今の世にはこの教會より外にはない。だから、週にたつた一度の日曜に安閑と寝て居るなんて云ふことは、他の同志に對しても、教會の會員に對しても、また自分自身に對しても、濟まないことだと思つたからである。そして彼は教會に行つて、その日一日、何の苦痛も見せないで、なにかと小まめに立ち働らいた。それで、晩の十時過ぎに下宿に歸つて來て、自分の室にどつかと腰をおろした時には、一時に疲勞が全身を襲うて來て、床のなかでさへ身體の安息が得られない位であつた。

明くる日の朝である。八時頃に起きて、すゝまない食事をすまし、さて机に向つて何か書物をも讀まうとしたけれども、疲れた彼の神經には、精神を集注する力が殆んど失くなつて居た。

『此處に身體が弱い様では、所詮だめだな』

的な、共通的な、運命と云ふものに對する涙であつた。そこで美雄は云つた。

『吾々の周圍には君、恐ろしい運命の力と云ふものが蔓延つて居るんだ、吾々はそれと戦つて勝たなけりやならぬのだ、勝たなけりや吾々の眞實と云ふものは得られないんだ。併し君、實際、吾々には、その力がないね。運命に勝つ力がないね。……そこで僕は此頃から思つて居るんだ、所詮、自分は運命には勝てないんだから、いつそのこと潔く運命に服従してさ、そして徐ろに運命のうちに自分の世界を築いて行くより外に道がなからうと』

高橋は勿論、自分の今の境遇について悶えて居る、『僕は近いうちに死ぬかも知れんよ』とまで、美雄に向つて云つたことがある、併し、彼の悶えは決して根本的なものではなかつた、美雄の様な絶望的なものではなかつた。彼にはまだ、所謂、基督者の信仰が残つて居る、神の愛だとか、人格性だとか統一性だ等と云ふことが深く彼の心の根底にまで根ざして居る、彼は決してさう云ふことを疑つては居ない。否疑ふまいと努力めた。貴重な玉にでも觸れる様に、さうつと、それを自分の心の奥底にしまつて置いた。だから、彼は今自分の上に覆ひかぶさつて來た運命に對しても、美雄の云ふ様な、絶望的な、非人格的な、冷酷なものとは思ひたくはなかつた。美雄が運命をさう云ふ風に見るのを不服に思つた。で彼は云つた。

『併し、君の云ふ運命と云ふのは、一體どんなものなんだい』

『僕の所謂、運命と云ふことかい』と美雄は答へた。『僕の所謂、運命と云ふのは、ポーロの神學杯で云ふ、預定説なんかとは違ふんだよ。始めから吾々の運命が神によつて定められて居るので、吾々は所詮、定められた生活の型の中に閉ぢ込められて居るんだ杯と云ふことは僕は信じないんだ。併し、ま

美雄が忙然と考へ込んで居るところへ、高橋がやつて來た。

美雄と高橋とは學校を出てから、彼此もう三四年も會はないで居た。二月程前に、高橋は自分の教會の所用を帶びて、久し振りに九州の傳道地から上京したのであるが、一日、不意に美雄を尋ねて來てからと云ふものは、暇さへあれば美雄のそこへやつて來るのである。

學校に居た時分から、美雄は極端な破壊論者だと認められて居た。それに反して高橋は溫健な常識家であつた。併しそれで居て、高橋は、一般の學生からは、彼等の學校に於ける所謂、偏屈俱樂部の一員に數へられて居た。而もその偏屈俱樂部の中でも、彼等二人は、現今、九州の或る日刊新聞で主筆をして居る今一人の男と三人で、特に親しい交際をして居た。

三四年の間には、無論高橋は變つて居た。彼は最早、たゞ快活な常識家ではなかつた。快活らしい彼の生活の裏面には、痛ましい運命のデイレンマが常に戰つて居るのである。彼の衷心は眞實に生きよと命令する、併し社會の虚偽の道德は、彼の眞實を妨害する、もし斷じて眞實に進むなら、彼を恐るべき破滅の谷底に突き落して了うと威嚇する。——一晚、二人が、別れて居た間のお互の消息を話し合つた時に語つた高橋のラブ・アツフエアは、美雄に言ふべからざる同情と親しみを起さしたのである。

『僕は昨夜、メエテルリンクの「ペレアスとメリザンド」を讀んで、また頭が、くしやくし初めて來たよ。凝乎として居られないから、また君のところへやつて來たんだ』と高橋は云つた。『彼廋に落つた言葉の中にも、混亂した生のなやみを藏めて居るんだな』と思ふと、美雄の心は自づと泣けて來た。それは、寧ろ彼に對する同情と云ふよりは、自分の悩みをもそれに融かし込んだ、廣い、人類

英雄の聲は慄へて居た。彼は自分が、この冷酷な、不可抗な運命の力に屈從しなければならぬことを思ふ度に、未だかつて一度も悲哀を感じないことはない、彼は自分で自分の言葉に感激して居るのである。

『併し僕から云はせると、その生の力と云ふのは、とりも直さず神だねえ、そしてその神の力が、今君の云つた様に、吾々のライフとは切つても切れない密接な關係にあるのなら、言はゞ、吾々は皆その神の御手に保たれて居ると云ふものだ、だから、僕は、たとひ今の運命が、僕等にとつて悲しい冷たいものであるにしても、それはたゞ、吾々の眼が、深く物事を洞察する力がないと云ふことを示すばかりであつて矛盾の中にある調和と云ふものを見出し得ないに過ぎないと思ふね』と高橋は云つた。

『從來の基督者はさう教へられて來たんだ、そして實際、それはロオマンチックな人にとつては實に有りがたい福音さ、全智、全能の神がある、慈悲良善の神がある、そして吾々はその神の御手に保たれて居る、之程、安心なことはいさ。併ねえ君、僕は、吾々はもつと強くならにやならんと思ふんだ、もつと大膽に、ものゝ眞實の姿に面接しなけりやならんと思ふんだ。君の言ふ様なことをもつと徹底して行くと、矢張りポロの所謂、豫定説になるんだよ、吾々の運命は、最初から、全知全能の神の精神のうちに、立派に定められて居るんで、吾々はだゞその定められた運命を見出せばいいんだから。云つて見れば、世界は一つの大きな器械なんだ。そして僕等はその器械でつくられた人形なんだ、僕は神學の所謂、大工説も意匠論も結局違つたものぢやないと思ふんだ。——寂しいねえ』『そりや成程、今迄のクリスチャンの云ふ様に、どんな不幸でも災難でも結局よくなるかも知れん、併しまだ悪くなることも實際に澤山あるねえ。併しまあ、一步を譲つて、結局よくなるにしてもだね

あ君、考へて見給へ、吾々は吾々にせまつて来る多くの力のあることを拒むわけには行かないよ。第一、吾々を生んだ父母の勢力が吾々にせまつて来る。第二には、家庭や國家や社會の、風俗習慣と云ふものが吾々を襲うて来る。第三には、時代の精神と云ふものが吾々の思想や行動を支配しやうとする。そして、それは皆、吾々の生れない前から、嚴然として存在して居るんだ。そこへもつて来て、吾々は、別に自分で生れやうともしなかつたのに、生の力の爲めに、こんな周圍と、こんな境遇とこんな力のうちに生み落されたんだ。僕は何故もつと過去の時代に生れて來なかつたのだらうか、何故もつと未來に生れられないんだらうか。また何故、僕は日本の片田舎の土百姓の息子に生れて、來なかつたんだらうか、僕は何麼に煩いても騒いでも、今の僕より外の僕には生れないんだ。これが僕の運命なんだ、生れながらに、これが僕の運命なんだ、いゝや、そればかりか、僕がこの世に生れたことさへ運命なんだ。何故つて君、若し僕の父と母とが、東京と、僕の生れた村とか云ふ様に、今少し遠いところに住んで居たとするか、もしくはさうでないにしても、誰か僕父より前に僕の母に結婚を申込んだとすれば、僕と云ふ人間は永遠にこの地球を見ることが出來なかつたらうぢやないか、まあ、僕は兎に角こんな世界に生れて來た、氣候も運命だ、引力も運命だ、壓力も運命だ、もしそんなものがなかつたら、今頃、僕は天に昇つて居るかも知れないんだからねえ。此麼に考へて見ると君、吾々が生れたと云ふことも運命だ、吾々がこんな風に生れたと云ふことも運命だ、何もかも運命だ、何處に吾々の絶體の自由なんて云ふものがあるもんかね。みんな運命だ、運命だ、冷たい、残酷な、非人格の運命だ。そして君、この運命と云ふのも、つまるところ、生の力そのものぢやないか。』

過ぎない、そんなものでもつて、吾々のこの切實な自我の叫びを何うして打ち消すことが出来る。神が——もしくは生の力が——僕の自我を造つたとする、僕の自我は生きやうとする、色々な要求と欲望とをもつて僕にせまつてくる、ところが、その要求も、欲望も常に他の生の力に妨げられるんだ、たゞに要求や欲望ばかりでない、生そのものまでも奪はれることがあるんだ。生の力は自我を生んで自我を殺して居るのだ、何故、僕は生の力は自我を生んだのだらうと思つて恨めしくてたまらない、自我を生む位なら、なぜ自我を立てさせないのだらうと思つて、恨めしくてたまらない。

まあ君、考へて見給へ、生の力は社會を造つたんだよ、所が、その社會は何うだ、生活難がひしひしとせまつて來て、多くの自我は日々に敗れ、日々に飢ゑ、日々に衰へ、日々に滅びつゝあるぢやないか。或者は他の者の様に、輕薄なことをしたり、虚爲を行ふことが出来ない爲めに、却つて劣敗者となり、或者は他の者よりも實力が足りないものだから、一生生活の不安に戰かにやならん、それはあたりまへだと君は云ふかもしれないが、僕はどうしてもさうは思はれないよ。

君のラヴ・アッフ・エアにしてもだ、冷酷な運命の力は、捕はれたる社會の人々を通して、君の眞實のラヴ・エアを君から奪つてしまつたぢやないか、そして運命の力は君に虚偽の生活を強ひて居るぢやないか。或人は君が大膽に眞實に向つて突進しないのを責めるであらう、併し君、もし君がそんなことをして見給へ、君の妻君は自殺するかも知れないよ。生の力の大なる調和の爲めに、切實な生存慾を有つて居る、熱い血潮の通つて居る、自己そのものを痛感して居る、この自我を犠牲に拂はなければならんのなら、なぜ生の力は自我と云ふ様なものを生んだのであらう。もし生の力が——神が——人格的のものなら、僕はその餘りに冷酷なのを恨まずには居られない、から僕は生の力を人格的に

え、よくならしめるものは、僕から見や、矢張り自分の力だよ、自我だよ、僕となつて顯はれて來る生の力だよ。随分世の中には却て病氣や災難にかゝた蔭で、非常に偉い眞理を發見した人も澤山あるさ。併しそれは、自分にその力のあるものばかりが出来ることだ、その力のないものは矢張り滅んでしまふんだ。僕のうちに顯はれて居る生の力は、他の者にあらはれて居る生の力に勝たなけりやならんだ、若しくは妥協をして、自分の生の安全を保たなけりやならんだ、即ち人生と云ふのは、自分の生の力と、他の生の力との競争なんだ、自然の力と人間の力との戦ひなんだ、運命の力と自我の力との闘争なんだ。

君、吾々には自我と云ふ意識が生じて居るんだよ。僕は何も、生の力が神でないとは云はない、また神はその生の力の闘争と云ふ矛盾のうちの太調和だと云ふことにも別に反對はしない。併しねえ君、その大きな調和の爲めに、この生きた自我が、運命の力に征服されねばならぬことを、君は痛ましいとは思はんかい、よし征服されないにしても、全くそれに屈從しなけりや成長することが出来ないこと云ふことを悲哀に感じないかい。』

美雄は凝視と高橋の顔を見つめて、その本心を刺さねば止まないと云ふ様にかう尋ねた。すると高橋も寂しい顔をしてたゞ一言。

『淋しいさ、僕は、それぢやあ淋しくつて堪へられないから、神は愛なりと信ずるんだよ、』

と答へた。

『君は信じられるから結構さ、僕なんかは、まだ一度も友達の愛情や、戀人の情の様なものを神から受けたことはない。理屈で神は愛なりと考へて見たところで、僕にとつてはそれはたゞ一つの概念に

たてゝ居る。

美雄の脚は自然とその家の方へ向いた。

けれども美雄はそこに自分の豫期したものを得ることは出来なかつた。何故なれば、此の家には餘りに古い、屈辱的な、日本在來の思想が徹りついて居て、美雄の思想とは餘りに甚しい懸隔が据ゑられて居るからである。この家の女性はお袋も、娘も、二人とも、餘りに男性的で、餘りに潤ひがなくつて、美雄の渴いた柔しみを、毫も供給しなかつたからである。

可愛い小猫がこの家に飼はれて居た。その小猫は人目を盗んで、暫時の間、屋外に出て歸つて來た娘は無慈悲にその猫を思はず打つたゝいた。美雄は今迄書いて居たイル・ジョンの滅亡を悲しんだ。小猫は首だれて美雄の側近くやつて來た、そうつと抱いて膝の上に載せてやると、小猫はやがて、すや／＼と眠つて行つた。

遠洋航海の途上にある兄から、最近に贈つて來たセント・ヘレナの寫眞や繪はがきが、美雄の前に展げられた、『三月廿日。セントヘレナにナポレオンの墓を訪ふ、感慨無量』などゝ書いてある。

『セント・ヘレナなんかに行くことは一生に一度位しかないんですよ。中々遠洋航海などでは行かないですつて』と娘が言ふと、何にでも子供の自慢をしたがるお袋は、

『中々普通の見習生ではやつて呉れないですよ』と云ふことから、息子が駝鳥に乗つたとか、馬に乗つたとか云ふ様なことを並べ立てた。やがて小猫は目をさましてニャアオ／＼と啼きながら、お袋の側へ行つた。

考へたくはないんだ。生の力はたゞ一つの、ライフの根本、衝動の力なんだ、生の力は全智でも全能でもないんだ、慈悲でもなけりや殘忍でもなく、そしてまた人格でもないんだ。神はたゞ人間になつて始めて人格になつたんだ、吾々はこの無力なライフ・フォースと協力して、ライフ・フォースを助長させねばならんだ。

僕はかう云ふ風に考へたいね。そして僕は自分の無力と弱小とに泣くんだ。』

午砲が鳴つて、高橋は歸つて行つた。多くの考へなければならぬ問題をもつて歸つて行つた。高橋が歸つて行つても、美雄は尙も一人で勃然として坐つて居つた。彼が高橋に説いてきかせたのは、自分に説いた様なものであつた。感動したのは高橋よりも自分であつた。それをまた美雄は淋しいと感じた。

美雄は一人になると耐へられない程、淋しくなつた。そして到頭、耐へかねたと云ふ風に、つと立ち上つて、古ぼけた麥藁帽子を被つて、あてもなく外に出た。

『此際ときには、どこかの温かい家庭へでも行けば、いくらか慰められるだらう』と云ふ考へが、美雄の胸に浮んで來た。併し彼には、別にこれと云ふ家庭らしい家庭との近づきがなかつた。あつても、この忙はしい世の中で、朝つばらから遊民のお相手になつて呉れる様な呑氣な家があらう筈がない、ふと彼は、此間高橋と一緒に遊びに行つた一つの家庭を思ひ出した。そこには年のとつた一人のお袋が、自分の育てた子供等の仕送りを受けて、廿年ばかりの娘と、その弟との三人で、呑氣な生活を

『放擲!!! 人生の全放擲!!!』

と聲を出して叫んだ。すると不思議にその氣分の落ち付いて行くのを覺えた。そして明るい光りが自分の頭の上に射し込んで來る様に思つた。

美雄は手拭をもつて洗湯に行つた。收縮した血管が洗湯の溫氣で氣持よく溫められ、萎微した筋肉はふつくと脹らんで來て、何とはなしに身も心も輕々しくして來るのを覺えた。美雄はその歸りに敷島を買つて袂に入れた。

お湯から歸つて來た美雄は、散ばつた書物等を片付けて、自分の居間を綺麗に整頓した後に、ゆつたりと安樂座をかいて、机の前に座つた。そして桃色にほてつて居る股のあたりの筋肉を撫てゝ見ながら、袂から敷島の函を出し、その中の一本に火を點けて、靜かに煙を吸うて、やがてまた靜かに煙を吐いた。青い煙が煙草の火口から昇り、黄色に濁つた白い煙が、美雄の口から噴火山の様に吹き出された美雄の神經は沈まつて行く。

彼は煙草の味を知らなかつた。たゞ此際、かうして煙草を喫うて居る氣分が、限りなく慕はしいものであつた。かうして居るうちに神經の沈靜して行くことが限りない慰めてあつた。そして基督者が煙草を喫うてはならないものだと思ふ捕はれから、今、自由にされたと思ふ一種の歡びが、靜に腹の底から上つて、顔の笑くばにあらはれて來るのであつた。

室内の空氣は鏡の様に靜まつて居た。二本の指の間にシガアを挟んで、肱を膝の上に輕くのせ、そ

『こん畜生、何故、啼くんない』

と云つて、またくしたゝかに小猫を打つた。そしてその揚句に傍にあつた風呂敷包みの中に、手荒く捲き込もうとすると、その機みに小猫は口から食べたものをあました。前よりもつと空虚な胸を抱いて美雄は自分の下宿に歸つて行かねばならなかつた。

美雄の眼には、今一度、際限ない雪の曠野が擴がつて見えた、そしてそこから偉大な沈黙の力が襲うて來るのを覺えた。冷たい風が、なまぐさい死の香を吹き送つて來る様に思はれた。それには生き物と云ふ生き物は一つだつて生存して居なかつた。

『自分はこの雪の野原に立つて居る恐ろしい死の力を、冷たい運命の力が、自分を殺しもしないで、この荒涼たる雪野原においてきぼりにしたのだ、茲には一つの慰めもない一つの據りどころもない。自分には愛の神がない、自分には友がない、自分には戀人がない、そして自分自身に對する信頼もなう。

あゝ荒涼たる雪野原よ!!! 自分は茲に立つて居る、たつた一人て茲に立つて居る!!!

孤獨よ、孤獨よ、絶望の孤獨よ!!!

『なるがまゝになるがいい、どうせ、何一つ依りどころのない、弱い哀れな、力のない自分でないか、』と彼は思つた。

彼はこの淋しい盃を受けねばならぬ、婚禮の場の祝言の盃の様に受けねばならぬ。そして自分はこの苦い酒を飲まねばならぬ帝王の健康を祝ふシャンペンの酒を飲む様に飲まねばならぬ、彼は遂に

つた。

『さうさ、勿論、僕等のライフは、貧弱なものさ、たゞ、僕等は君等の様に最早とうの昔に生命を失つた大蛇の脱殻の様なものを、後生大事に仕舞つて、置いてそれを自分のライフだとは云ひたくはないと云ふまでのことさ。』

『併し、兎に角何者をも有たないよりは、有つて居る方が幸福だよ。』

『さうだ幸福かも知れん、併しねえ、僕等は偽のものを持つて居るよりは、何にも持つて居ない方がいいと云ふこと丈けを知つて居るんだよ。何にもないものにはこれから眞理を受納れる餘祐があるが虚偽のものでも持つて居るものは、眞個の眞理をまで拒んでしまふからね』

『併し君、それで淋しいことはないのか』

『淋しいさ』と云つた美雄の聲は震へて居た、そして暫時の沈黙を守つたのち、彼は徐ろに机の上に置いてあつたペラゴニアを指して、

『まあ君、見給へ、あそこに一輪の花がある、あの花には心がない、あの花には温かい血が通つて居ない、併しねえ、君、僕は此處ことを思つて淋しくなつて來ると、あの花を眺めるんだ、眺めて花から慰めを得やうとするんだ……。それより外に慰められるものがないと云ふことを知つて居るからねえ……。君、僕はそれ程、寂しい心を持つて居るんだよ』

と云つたことがある。そしてその話をした以來、この花は、彼にとつて一層なつかしいものとなつたのである。美雄は今この花を眺めて居る。靜かにこの花を眺めて居る。すると彼の心には、何と云ふ鮮明した思想でもなく、何と云ふ定まつた姿でもなく、たゞ一種の法悦が、風の無い泉の水面の様に

して殆んど虚無に近い心で眺めて居ると、青い煙と黄ろい煙とが、恰かも二本の柱の線に昇つて行つた。

極度に淋しい心にも味はひが出た。その味はひはこれを経験した心より外に知るものがないと義雄は思つた、味はつたものでも、これを説明することの出来るものでないとも彼は思つた。

室の片隅に置かれてある本棚の上に、紫色の一輪挿が載せられて居た。そしてその小さい瓶口から、淡紅色に濃紅の斑點を雜へたペラゴニアが、長い首を出してのぞいて居た。

美雄はこの花を凝視と眺めながら、心の中で、物靜かに『あゝペラゴニア、ペラゴニア』と云つて見た『私のたつた一つの慰めであるペラゴニアとなつかしい眼を。その花に向けた、恥かんで居る様な小さな花は、何物にも慰められない、何一つ頼みとするものを持たない、哀れな小さい靈魂に、初恋の様な喜びを創造した。

飽くこともなく彼はペラゴニアの花を眺めた。

二日前の晩であつた。數名の神學生が彼の下宿に集まつて、牛鍋をつゝきながら語り合つた。もう大分夜がふけて、談話もやがて盡きやうとする頃、一人の神學生が、

『いくら新しいとか、進歩して居るとか云つたところで、その人の精神生活が果してどれ丈けの内容をもつて居るか云ふことは疑問だよ』と云つたのが始まりで、彼とその神學生の間に二三の問答があ

白 薔 薇

伊 藤 寥 々

水汲めば柿の若葉とはつ夏のさ青の空ぞ溶けてゆらめく
 熟れし麥のほしいまゝにも日を吸へば蜂は野薔薇に群れてうなれる
 夏に入るはれしひと日の黄昏の光いざよふ野の白うばら
 かく迄に濃く美はしき瑠璃色をつばめの背に見てぞさしくむ
 梅の實の小さく碧さを手にうけてほゝ笑む稚子に口づけしかな
 今日もまた語りつ笑みついつはりつ残れる悔の儘に臥すかな
 甲斐も無きこの一人も猶父のめぐしまな子ぞ畏けれども
 悔も無く神に事ゆと云ひこせし人を静かにあはれみにけり
 感恩の涙このまゝ我れよりも弱き子に湧け弱き子にわけ
 いとかたきみ旨のまゝに打咽びうち咽びつゝあるとぞよき

いと物靜かに湧いて來るのである。

『これは丁度壓搾された空氣の固體が、冷たい火箸でぐも切れる様なものに違ひない、極度の孤獨と悲哀とが結晶した心は、こんな一輪の花にても慰められるのに違ひない。』

英雄はかう思つて見た。併し矢張そりれも眞實でないと云ふことが直ぐに知れた。何故なれば、今のこの法悦は、ペラゴニアの花から流れて來るよりも、これに慰めを求めて眺めて居る自分の態度、——全てを放擲した自分の心持そのものに慰めがあるのだと言ふことがわかつたからである。

『これが自分の宗教かも知れん。淋しい宗教だ、寂しい人生だ、さうだ悲哀の宗教だ。この悲しい心を胸に抱きながら、この淋しみを靈魂の奥底に心ゆくまで味ひながら、自分は生活して行かねばならぬ。而も自分は勇士の如くに強くなければならぬ。そしてこの様に悲しみつゝ而かも歡んで居たい』……と英雄は思つた。

溫かい、あだやかな六月の太陽は、窓の外の杉の新芽に明るい色を見せ、そこに小雀が、上へ下へと、軽い舞踊を跳つて居る、どこかの家に飼はれたキャネリヤの鳴き聲が、微かに平和の調べを送つて來る、そしてこの室内には、英雄の持つて居るシガアから、青い煙と黄ろい煙が、二本の柱の様に昇つて居る。



櫺

子

窓

吉田 絃二郎

青い絃の琴を抱へた男が今日も、頹敗した古街の軒並を、東から西へと疲れ切つた足を運んで行つた。琉璃と、琥珀と、紫と、真紅と純白な六月の彩艶のなかに、溶け込むやうにして歩いてゐた。

絶望的な絃の音が、拗ねたやうな、投げ出したやうな気分を誘ふて、蟲喰んだ長押から、破風から、櫺子窓を通して顫へてゐた。——若い女達の滑こい、觸つたら潰へさうな胸の上に。

街の人達は、渠を悪魔の使だと言つて、その門の前に立つことを拒んだ。

それでも渠は枸杞や、枳殻の籬根に隠れては、青い絃の旋律に伴れて、不思議な歌を唱うた。銀の壺に秘められた、紅寶石の酒を掬ひ夜のときめきと、南國の若い戀のねたみが、恰度練絹の被帛のやうに、他愛もない娘達の胸をそゝるのであつた。——窓のなかに鎖された娘達の。

悪魔!!!俺達の娘を誘惑するな!

お前の青い絃を斷ち切れ!

呪はれた歌ひ手!

頑な親達や兄姉達が多勢で、渠れを塾の上に突き飛した。そのはずみに青い絃がブーンと織い情

横濱の埠頭にて

三月の末に横濱埠頭に立たれしドイツ博士の一行は、約十週日を東京關西地方に於ける、講演やら遊覧に費されて、六月七日再び同じ埠頭より舟出せらるゝことゝなつた。

僕は同博士の短かき滯留の間に度々相談するの機会をえた。僕は同博士の八回の講演を通譯した。僕はよつて同博士の圓熟したる思想の一斑を知り、その人格に觸ることが出来た。誠に人なづかしさのする、たまには面白い滑稽なども言ふ好老人である。悠揚として通らざる所のある宗教家である。僕は老父にでも對する様な思慕の念を禁ずることが出来なかつた。それで出立せらるゝ際には萬事を捨てゝも見送りせねばならぬと思つた。

七日は梅雨前の雨もよひの日であつた。朝九時半巢鴨を出て、品川より京濱電車にて大森の親戚を訪れた。正午また電車にゆられて一時頃神奈川へ着いた。川崎以南は此度初めてこの電車に乗つたが、西方の丘陵は汽車に比して幾分か遠ざかつてゐるので眺望は却つて善い様である。

神奈川よりまた電車に乗り換へて横濱公園の前で下り、それから遅からうと思つて人力にて新埠頭に駆けつた。地洋丸は巨人の如く泰然として浮んでゐる。一昨年サンフランシスコより僕を運んで呉れたのはこの船であつた。僕はこの船の甲板の上にて太平洋の紺青の波を飽かず眺めた。支那賭博すらこの船の中にて見物することが出来た。カリフォルニアより病んで歸る失望の青年とも談じた。成功を誇る得意者の閑談にも耳うち傾けた。ジョルダン博士や多くの男女の宣教師とも議論もした。この思ひ出多き船は舊態依然として我が前に立つてゐる。多小の感慨ないことはない。

中甲板にのぼれば歸一協會の代表者として成瀬仁藏氏が見えてゐた。續いて姉崎博士も見えた。思ひもかけぬ舊知にも邂逅する。早稻田出の栗山君も此船にて渡米するとて多くの學生諸氏が見送

りに來てゐた。山崎直三君もゐた。女子大學の井上秀子氏や教會代表の板倉定四郎君その他も見えられた。一時半過ぎであるが博士の一行は未だ來ない。僕は案内知つた船の中を歩きまはつた。

僕は幼にして舟を恐れた。山家育ちであるから致し方はない。されど一度日本海でもまれ幾度が英國海峡を往來し、大西洋太平洋を横ぎつて以來、海は僕にとつて一種の引力である。波の色をみると一種心のどよめきを感じる。これでも矢張海國男子である。永く陸上に住めばこれで満足だ。しかし水天塲擡閣一髪の景をみれば壯心動いてやまないのである。船への見送りは人をして狭い國自慢を棄てゝ國際的意識を生ぜしむ。僕の横濱へ來るを好むはこのためである。

二時十分頃博士一行がみえられた。夫人は何時またボストンに來るかと尋ねられた。何時ゆくか無論わからない。しかし未來の事であるから機會があるであらう。博士は日本滞在の愉快なりし事や、統一教會の事業に對する希望やらを述べられた。令嬢とミス、ホームンスとは日本の美術が一寸解る様になつたと喜ばれた。地洋丸は三時に拔錨の筈であるが僕は二時半より提路教會にて講演の約があつたから一同と握手していとまを告げた。

尾上町の提路教會はハボン博士が有名な字書の利益によつて建てたといはるゝ紀念的大會堂である。日本基督教會の有力なる教會である。毛利官治氏が牧せられるのである。此教會の青年會が僕に講演を托せられたのである。僕は三時より約一時間餘にわたつて歐米各國學生の氣風について語つた。聴衆は五六百名に過ぎなかつた。これは折しもの降雨のためであつたかもしれぬ。何れも熱心に傾聴された。共立女學校の赤星仙太君や、青年會主事の大村氏や、憲兵大尉井上元成君のごとき知友が來會せられたるは僕の幸ひとする所であつた。

本郷に用があつて廻つたので、歸宅したのは九時過ぎであつた。



時評

更に基督教青年會同盟を論ず

疑問の基督教青年會同盟

「福音主義」云々の問題に就いて、先頃から青年會同盟と、我等との間に、色々の議論が起つて居る。併し僕には初めからこの問題には餘り興味がなかつた。と云ふ譯は、甚だ失禮な申分かは知らないが、僕には元來青年會同盟なるものゝ宗教思想、信仰上の勢力を認めることが出来ないからである。成程青年會には石造の堂々たる會館があらう、そのうちで色々な集會が催されては居やう。けれどもこの石造の會館が「福音主義」と何の關係があらう。若しあるならば之を標榜して米國で資金を集めたと云ふ迄で、我國の精神界とは没交渉である。幾多の集會があつても、講演があつても、その成功の多いもの程、彼の福音主義とは、より没交渉のものである。殊に青年會が根據として居る青年のうち、智識なきものは別として、聰明な牛耳でも把らうと云ふ人々に至つては「福音主義」の狭隘なる解釋を撤廢したいと願ふものである。故に僕は青年會同盟なるものゝ信仰個條に副ふた勢力は、少しもないものと考へる。實にこゝに大なる矛盾がある。その固執する所は冷遇せられ、その重んぜらるゝ所はその固執せざる所にあゝ。これでは青年會同盟なるものゝ正體は大なる疑問ではあるまい

か。此の疑問に對して僕は餘り研究しやうとは思はなかつた。

然るに此の疑問の正體を負つて立つ所の幹事小松武治君は、先月の「開拓者」に於て、我が同人諸君に答ふる所があつたやうであるが、矢張疑問は當局者小松君にしても疑問であるやうに見える。君の書きぶりは巧妙だと云ふ評もあるが、統一教會と組合教會と合併しろの、鈴木文治君には、勞働者の爲めに盡力しておれのと云ふのは、餘計なお世話で、當面の問題ではない。そして當面の問題に就いては顧みて他を云つて居るではないか。堂々たる態度を以て答辯が出来ないではないか。これは青年會の實際の正體が疑問であるから明白な答辯が出来ないのである。

一體云ふと基督教の信仰を文字上で定義を與へて、これで束縛などするのは不心得である。殊に疑問になつて居る青年會同盟の憲法第三條第二項のやうな、窮屈な規定などをするものでない。基督教は常に發展する。個人の信仰も常に變化し、流動して居るこれが生々の氣であるから、若しこれがなかつたならば、信仰は枯死するより外に道はない。最も進歩する途上にある青年の信仰が、あんな憲法で束縛せられるものと思ふのは間違である。今度の信仰問題の發源たる永井君や星島君にした所で、幾數年の前ならば、あの憲法で不都合を感じられなかつたのかも知れない。然

韻の波を一つ顫はした。

窓のなかに鎖されてゐた娘達が、氣遣はしげに櫺子の隙から渠れを眺めてゐた。親達や兄弟達が、叱るやうにして、娘達を奥の方に追ひ込めた。街並の扉が、渠れには永久に鎖されて了つた。

い、い、と小ひさな子供が歩いて來た。祝くやうにして、渠れと、青い絃の琴とを半々に凝視てゐた。

叔父ちやあん！面白から唱つて！

子供の可憐な手が、既に青い絃に觸れてゐた。渠れは苦笑ひながら琴を拾うて起ち上つた。

寄 贈 雜 誌

心理研究。聖盃。帝國文學。新公論。車前草。東亞の光。奇蹟。婦人の友。ザムボア。世界の日本。世界ホーム。宗教の日本。青鞥。新日本。新小説。新佛教。東洋哲學。禪宗。宗教世界。禪。經世雜誌。新人。正教時報。開拓者。基督教世界。護教。基督教週報。早稻田講演。白樺。時事評論。實業之世界。道の友。丁酉倫理。神學の研究。哲學雜誌。六條學報。佛教史學。和融誌。國民時報。獨立評論。現代の洋畫。とりで。フエザン。人生と表現。立志。新眞婦人。The Pacific Unitarian. Unity. The Christian Register. The Outlook. Current Opinion.

ない。且名前があててないから、或は君自身の説を假説の人に嫁したものと見られても辯解の辭はあるまい。之を以て君一生の不覺となすも敢て拒まれないと思ふ。

■君は又仲々計畫者である。併し餘り雄大な計畫は無い様だ。統一教會と組合派の合同を献策したなども其一だ。どうせ教會合同を考へるなら、少くとも何人も其要を認めて居る日本の二大教會たる日基組合位を取合せて見玉へ。各宗派の合同なら益々可なりだ。そして君の如き位置に居る人は頗る其適任者である。併し教會大合同論は内ヶ崎君も先年提唱して居る。夫を今更小合同の獻策などは御氣の毒な話だが、聊か御門違ひの觀がある。尤も我教會と組合派との合同があれば、青年會同盟否君自身にとりて最も都合がよいといふなら別問題だ。

■又同盟の立場から考へて見ると、教會として一旦排斥して居るものを、他の教派と合同したからとて、直に之を受容られるか如何。君は敢て差支なしといふ。之れやがて矛盾と云はれ曖昧と評されても止むを得ない所以である。

■コンなに元々君一人に對して云ふ氣でなかつた。自分は君の如き位置に居る人に向つて、要領を得たる態度を要求するのが、抑もの誤だと思つて居る。併し君が吾々の豫期に反して例になく不得要領の態度で個人的攻撃の矢をむけられたから、夫に對し以上一言酬ふる次第である。

(相原)

抽象的信仰か偶像禮拜か

前々號の此の欄に、私は「符號本位の信仰」といふ一文を掲げて、基督教青年會と統一基督教會との間に起こつた一問題に對す

る感想を披瀝して置いた。

しかるに青年會幹事の小松文學士は、青年會の機關雜誌たる「開拓者」の六月號で、この雜誌の同人を一括めにして奇抜なる審判を下す傍、私のあの一文に對しても亦、短い批評めいた言葉を洩らされた。「基督教世界」の記者は、小松文學士のあの批評文を更に評して、極めて諧謔に満ちたものであると云ふやうな事を云はれたが、此の一問題に關する小松文學士の態度が眞面目であるとか不眞面目であるとか云ふことは、私に取つては全く没交渉である、全く問題にならない。と云ふのは、はじめ私共の方で、たゞ平地に波瀾を起さうと云ふやうな好奇心に驅られてのみ、あの連名の時評を書いたのなら、それに對する答辯なり批評なりもまた諧謔的にならねばならぬ事が此の世の中にはあらうけれども、苟くも私共の方で眞面目にあれだけの所感を披瀝した以上、それに對する批評は當然眞面目で無ければならぬと信ずるからである。

小松文學士は、至つて簡單に私なり私の一文を評して、青年會の基督教を抽象的基督教と云ひながら、更に偶像禮拜の名を蒙らしめるのは矛盾では無いかと云ふやうな疑ひを私に寄せられたのである。この事が矛盾であるか無いかの問題は、も一度あの一文を読みかへして頂けたらおのづから、明らかにならうと思ふのであるが、小松文學士に對して少なくとも矛盾の感じを與へた事が眞實である以上、たとひ簡單でも尚ほ一度こゝで思ふところを表白する事は、私に取つて當然の義務で無くてはならない。

思ふに小松文學士は、苟くも抽象的信仰と云ふ以上、そこには具體的表號のありやうが無い、それなのに何等かの畫像なり彫像なりを聯想せしめる偶像禮拜の語をこれに蒙らせるのは、全くの

るにそれが段々に變化したのであらう。然し多數の青年は皆な斯う云ふ様に變化發展するものである。そこで困るのは變化もしなければ、發展もしない當局者である。そして仕様がなから、問題が起ると顧みて他を云つて居る。

けれども僕には問題は簡單である。僕は進歩、發展しつゝある青年を信ず。彼等は必ずや三年以後か、或はそれ迄もかゝらずに大に改革をなすであらう。此の時には當局者は啞然たるであらう、或は復た顧みて他を云ふかも知れない。

然し若しこの改革が出来なかつたならば、残るは堂々たる石造の會館のみで、精神的勢力としては枯死するより外に道はない。モットー君の如きは僕には思想家として、何等の價値を認めることが出来ない、彼れは所謂働き手たるに過ぎない。日本の思想界は遙かに彼れ以上である。寧ろ來つて教を乞ふべき者であると信ずる。

(三並)

小松同盟主事に告ぐ

■本誌五月號で自分が統一教會と青年會同盟との交渉顛末を發表したに對し、君は先月の開拓者誌上で大不平を并べて居た。元來我々は對青年會問題を論じるに當つては、努めて個人的方面は避けたいと思つた。謂ふ迄もない、「吾々は論争を歓迎する。それが苟も主義理論上に關するならば、之れ進歩の因であるからだ。併し漫に他人の心事を揣摩し個人的攻撃に涉る様などは、避けたい。」然るに君の答辯中には個人に關する意味の駄言贅辭の外、何等吾人の提出した問題に觸れるものがない。甚しきに至つては、吾々と同盟委員使節との會席上の、事實を針小棒大に報じて得々

として居る。元來青年會の内訌から起つた交渉である、それに對して吾々から、青年會同盟などに謝辭を呈する理由が無いやないか位は常識のある人なら誰にもうなづかれる事だ。同盟委員中にも進歩派の人々がある、其中でも特に、公平な意見を以て吾々と折衝された、平澤岡田兩君に對して、謝辭を呈したのだ。それを君が自身にうけたものと思込むなどは、頓だ思違て、只の間違なら却て愛嬌があるだらうけれど、此場合では君の心事を疑はれても止むを得まい。君は事實の表面丈見て、早吞込をするからこんなことになる。あの會合を以て平穩無事な、友誼的に打解けた會合であつたなど、見て居る所なども然うだ。

■君の統一教會論は一應面白く拜見した。そして多忙なるべき滿韓視察の途上にて、斯の一評論をもされた君の悠々たる態度には少からず感服した。併し我教會を現代の中華民國に比しながら、僅に一袁世凱を羅し來りたのみでは甚だ物足りない。今岡君なども團體の一人と見て居る所は、民國政府の僑外人を以て、同じく支那人と視るの類、同君の迷惑とする所であらふ。併し之れよりも妥當ならぬ迷論は内ヶ崎君の平地銅像説だ。君は此言を以て内ヶ崎君に同情ある友人の言であるなどいふて居るが、果して眞に同君に同情ある友人ならばコンナ愚論は吐かない筈だ。僅々三四萬足らずの教派を以て、大きいの廣いと思ふて居る狭量さ加減、信條主義を振舞はす連は、兎角かうした籠城的宗派心に囚はれ易い。も少し眼界を廣潤にして外方を見たら何うか。又かうした考を吐く人は、宗教界精神界の人士の進退を以て、權と利を逐ふて走る政治家實業家と同一視して居るのだ。其俗臭芬々たる物質的の心持は、到底精神界の事などに口を入れ得る人とは思はれ

みたる根本の生命に立脚することである、さうして其の主義の名に向つて、常に新しき血と涙と靈と肉とを賦與しうべき全生命の成長に焦慮する事でなければならぬ。

抽象的信仰か、新しき偶像禮拜か、何故私たちは何時までも斯かる名辭の穿鑿に時を費やさなければならぬであらうか。何故いつまでも斯かる文字の幻影に迷はされて居なければならぬのであらうか。何故斯くまでうち古びた言葉を忘れて、心より心に語り合ふ事ができないのであらうか。私はもつと私の内外に動いてゐる生命の尊嚴を知りたい、もつと生命の導調が聴きたい。たとひ。自らの嘗つて洩らした言葉に裏書きする爲めであつたにしても、かゝる思想表白の問題の爲めに、こゝまで文字を並べてきた私の心は、たゞひとり寂しいのである。

(内藤)

宗教界に求むるところ

何うしたら宗教を社會に徹底せしめる事ができるか、

この問題は、昨年来宗教界の一部でしきりに研究せられて居るが、われ／＼は此の問題について、いろ／＼と其の手段方法を講ずる事よりも、是非斯くあらねばならぬと思はれる一つの事が、たとひ忘れられては居ないまでも、いつのまにか等閑視せられて居る事を感じる。

それは外でも無い。人類全體としての使命とか目的とか云ふ觀念を築くに足るべき活事實の提供である。言葉を換へて云へば、宗教を思ふ人々の日々の生活そのものをさながらに發表し合ふ事である。

斯う云へば、そんな事は宗教界で絶えず繰返されてゐる事では

ないかと云ふ人があるかも知れない。けれども吾々には何うもさうだとは思はれない、さういふ方面の提供者が、ざらにあるとは何うしても思はれない。と云ふのは、自らの經驗なり實驗なりを語ると云ふ人の口から、觀念化せられた言葉を聴く事が屢々であるからである、抽象化せられた表白を聴く事が多いからである。

と云つても、觀念化せられた表白が、われ／＼に取つて絶対に無用であると云ふのではない。人間に複雑の單純化を喜ぶ心が植ゑつけられてゐる限り、さした表白の方法は、たゞ便利であると云ふ點に於いて、いつまでも有益で無ければならぬ。けれども絶えず實生活の渦中に飛び込んで、對集團の關係に於いては勿論自己一個の生活に於いてすら、いろ／＼の矛盾と撞着とを感じつゝある者に取つては、全生命を提げて純なる觀念の世界に遊ぶ餘裕などのありやうが無い。一つの家を築くに足るべき材料よりも、其の材料を配置して行くだけの力が欲しいのである。食後の菓子よりも米の粒が欲しいのである、否、米の粒よりも米の粒を得るに足るだけの生活力が欲しいのである、若し此の一事が疑ふことのできない事實であるならば、苟且にも宗教の生活社會化を希ふものゝ第一に心がけねばならぬ事は、いろ／＼の觀念を生むに至つた生きた自己の事實そのものを、互に提供し合ふ事であると云つて差支なからう。

しかし、いくら互に私生活の裡に閃いた事實を表白し合ふにしてももし、一つの觀念を前提とした態度を取るならば、それは歸するところ觀念の註釋乃至説明に終らないとも限らぬ、觀念そのものを提供するのと同じき結果に墮しないとは云はれない。自己を眞に表白することは、自己に最も新しき生命より出立して、そ

自家撞着であると云ふ考からして、あの疑ひを起こされたのでは無からうか。若しさうであるとすれば、私は靈界の消息に對してこの種の考を懐く人々の態度が、甚しく物質的であり機械的である事を思はないわけに行かない。何となれば、その昔法王レオン三世が偶像破壊の運動を始めた時代ならいざ知らず、生命觀念の著しく發達した今日の時代に於いては、穴守稻荷に日參して朱塗の華表を立て並べるやうな事はかりを、偶像禮拜と云ふわけに行かなくなつたからである。私が青年會といふ一集團の標榜する福音主義的基督教を目して、抽象的信仰を説くものと云ひ、なほ一步を進めて、新しき偶像禮拜を強ふるものと云つたのは、全くこれが爲めである。

前々號の時評文でも云つて置いたやうに、青年會の當局者——

私たちは常に權威を以て他教會に蒞まれる青年會の當局者中にも、やはり新舊思想の争と云ふ一事實の存在する事を奇異に思ふのである——が、若しいつまでも福音主義と云ふやうな一つの符號のみに執着して、基督教全體の生命を第二義のものであるかの如く取扱はれるならば、其の信仰は懸て固定的となり、抽象的となり、それと同時に新しき偶像禮拜に墮し終ることを思はなくはない。勿論斯くして行はるゝ偶像禮拜は、成田不動や穴守稻荷に集まる衆愚の群に依つて行はるゝものとは、おのづから選を異にする、舊きものと新しきものとの差異だけは確かにある。しかしながら、信仰全體の生命に絕對の力を感ずるのでなしに、土偶木像に絕對の力を要求することが、一つの抽象的偶像禮拜である以上、人間の第一義要求を第一に高調せずして、相對的の表現に過ぎない一の符號を信仰生活の基調であるかの如く主張する

ことも亦、同じく一つの抽象的偶像禮拜で無くて何であらう。

これまで觀念學に囚はれた人々は、そのまゝ一つの形に表はす事のできない事柄ばかりを抽象的であると考へたり、そのまゝ一つの形に表はされて居る事柄ばかりを具體的であると思つたりして來たやうである。しかしながら、かりそめにも宗教生活の閃影に觸れ得た人々は最早、かゝる物的の態度を以つて、靈界の消息を思ふわけに行かなくなつたでは無いか、外より内に向ふ心を以つて、生命の樂調を聴くわけに行かなくなつたでは無いか。この事が眞實であるかぎり、抽象的信仰と云ひ偶像禮拜と云ふことは、歸するところ一の斷片的信仰に基く生活態度を意味するのであつて、基督教の教ふる全的生活の態度とは、明かに其の地盤を異にするものであると云はなければならない。

かう云ふからと云つて、私は基督教を信ずる人々の間に營まれて居る信仰生活を、抽象的乃至符號的に表白して、そこに一つの主義なり主張なりを樹立する事が悪いと云ふのでは無い。一つの集團を作つてそれを信仰生活の壘としやうとする以上は、さうした事も便宜上必要であらう。そして一の主義を標榜する事だけは、決して抽象的信仰ともならなければ、偶像禮拜ともならないであらう。しかしながら、其の信仰上の主義なり主張なり樹立した人々が、主義の中心生命は第二義として、主義の形式に對してのみ絕對の權威を與へやうとするならば、其の態度こそ生命なき信仰を弄ぶことになると同時に、土偶木像を絕對者の本體となす衆愚の群に伍することゝならないのであらうか。宗教生活の核心に徹せんとする者の當然取るべき態度は、たとひ主義を標榜しても、飽くまで其の主義に囚はれない事である。どこまでも其の主義を生

過ぎない。兎に角吾人は刮目して文部當局當然の宗教政策を見たと思ふ。(菊川)

パイボデー博士を送る

前々號に於てパイボデー博士を迎えたる吾人は、本號に於て同博士を送らざるを得ぬ。同博士の我國に於ける滞在は短時期のものであつた。吾人が此文を梅雨の窓の下に草しつゝある時、博士一行を載せたる地洋丸は、常夏の布哇八島の緑山の蔭椰子吹く風を受けて、一日の休養のために碇泊してゐる頃であらう。

パイボデー博士の滞在は誠に意味深きものであつた。博士は米國の碩學否世界有数の學者としてその學殖と品格とを以て我國民の間に客となられた。極めて多忙なる客となられた。博士は殆んど連日東京の各種の學校に於て講演せられた。官私の重なる大學専門學校等は皆博士のために講堂を開いた。博士の題目は極めて多種多様であつた。或は米國の産業改革について、商本主義と理想主義について、或は宗教の社會化について、或は最近倫理問題について談ぜられた。女子高等師範や女子大學に於ては女子教育の理想について陳べられた。述ぶる所必ずしも悉く新奇獨創ならざるにもせよ、吾人は多くの暗示と刺戟とを與へられた。帝國大學に於ける講演のごときは多くの學者を感動せしめた。博士はまた歸一協會や學者の一團との打ち解けたる會見によつて或は米國の理想について、或は日米の平和について十分に高見を陳べられた。恐くは日本の識者に遺したる博士の印象は甚だ深いものがあるだらう。

パイボデー博士の滞在の期は甚だ時機を得たのである。カリフ

オルニア問題勃興の時に博士及びメービー博士の日本に滞在せられしは日米兩國のために祝すべきことであつた。三宅雪嶺博士のごときは兩博士が日本にウロ／＼せずして歸國してカリフォルニア人に道を説けと叫ばれたが、吾人は必ずしも雪嶺博士の狂激の言に賛同することは出来ぬ。メービー、パイボデー兩博士の如きは單に米國の代表者たるのみならず、人類の智識と信念との代表者である。彼我に來り、我彼にゆく、何れの時か可ならざる。日米親交のために兩博士は平和の天使であつた。粗糲なるカリフォルニアの地方政治家に對する日本人の想像は是等の冷靜にして公平、思慮あり同情に富む兩博士に於て好個の對照を見出したのであつた。歸一協會の歡迎會席上に於て坂谷市長がこれに言及せられしは大に吾人の意を得たることである。兩博士は日本にも米國にゆづらざる黃色新聞あり、煽動家あることを知られたるべきと共に聰明なる階級の嚴存することにも注意せられたることを疑はない。

パイボデー博士は。昨年のエリオット博士と同じく我國に於ける自由基督教に對して一大應援であつた。今や思想上に於ける自由基督教の位置は隱然たる王者である。しかれども實際に於ては未だ全く社會の信用を荷はぬのである。世人や々もすれば曰く自由基督教は理に於て善し、されどこれを代表する人格が足らぬと如何にも尤もなる非難である。日本に於ては基督教その初すら日未だ淺し、況んや自由基督教は日下開拓の時代にあり、正統派に於けるがごとく多くの代表者を有せざるは止むをえない所である。然るに先にしてはエリオット博士來らるゝあり、自由基督教の東洋に於ける使命を高調して保守的宗教家の蒙を啓いた。パイ

して一つの觀念に行き着く態度を取る者のひとり能くし得るところである。

藝術の原則を教ふるものに美學がある。しかしながら、人間が美學の原則のみに依つて、藝術の製作に従ふとき、藝術の進歩發展は、歸するところ空である。

人は現代一般に於ける宗教觀念の誤謬と狹隘とを嘆く、われわれもまた同感である。しかし其の誤謬と狹隘とを來たした源は、これまでの人々があまりに觀念のために觀念を弄んで、個人の生活裡に繰り出される強き生命の色を外にしたからでは無かつたか。

個人生活のさながらなる告白——われわれは宗教界のあらゆる方面に向つて、切に此の一事を要求したい。斯くして個人と個人との生活内容を知り合ふ事は、やがて内部生活の充實と云ふ一事に取つても、暗示を享け合ふ事が多からうと思ふ。(S A N)

文部省と宗教政策

現内閣は其行政整理の斧を振つて、從來内務省所屬の宗教局を文部省に移した。従つて凡て宗教に關する事件の管轄は今度は我國教育の樞府たる文部省に於て司る所となつた。之を諸外國の例に徴するに、宗教は即ち一國文教の根本なるが故に、當然其教育と同様に文部省の所管である。教育と宗教は固より相助けて存立すべきもの、それが今度行政整理によつて同一統轄に屬したからとて何も珍しい事ではない。併し之を我國政府が從來取つた宗教政策から考へて見れば、多大の意義がある又興味を感ぜしめる。

云ふ迄もなく吾國從來の教育方針は全然宗教と教育との分離で

あつた。宗教團體はいはゞ國家から厄介視された點が無いでない。殊に教育當局者は單に宗教を教育界から排斥したのみで満足せず宗教其ものを蔑視し、敵視した觀もある。されば先年内務省で三教者會同の企あるや、時の福原文部次官は之に反對の意見をほめかし、終には宗教々育の分離無關係をさへ説示した。併し三教者會同其ものが已に政府の宗教に對する態度の變化であつた。果然現政府の行政整理を機として、之を文部の管轄としたのは順當の行爲であるとして差支はあるまい。

然れ共文部當局は果して從來の態度を棄て、宗教の權威を認めて其管轄方針を延てる雅量ありや。恐くは從來の如き態度であると早合點して佛教徒間には反對の氣望が見える。併し吾人は上述の如く之を以て順當な行方と見る以上、斯る思惑は或は杞憂に過ぎないかと思ふ。又一方教育家の側では宗教と教育との交渉はよもあるまい、矢張り從來の如く宗教に對して敬遠主義をとるべきであると云ふて居るものもある。然れ共單に所屬を移すといふなら此際全然無意義な行方だ、宗教と教育とを混亂するとは固より不道理にしてあるべきに非れど、少くとも宗教に對し從來の如き敬遠主義否排斥主義に出でざるべきは、當らずと雖遠からざる見方であらう。況んや現文相奥田博士は、歴代の文相中稀に見る人物として期待されて居る。事務上の一局移轉の如きは一國文化の上に何等の意義をも齎らさないが故に、恐くは更に進んで積極的宗教政策の出づるものと信ずる。而して其が從來と異つた宗教に對する新しい態度であると期待するのが當然であらう。宗教といへば仲々學校などゝ違つて、取扱ひ易いものでないからとて、何等の施設なくんば、奥田文相も平凡なる一件食大臣として終るに

惟一館記事

新刊批評

△卒業送別祝賀會 統一教會々員にして各所の屬の學校を本年卒業せられた諸君は、慶應の友部剛君と、中野源一郎君。早稻田の高橋清吾君。及び慈惠醫學校の岩原偉佐雄君。の四名である。吾々は諸君が螢雪の功ありて、今や新に實人生に旅立せんとする生涯の大轉機を記念し祝賀せんとして、六月十五日をもつて諸君の爲めに統一教會内に於て祝賀會を開らいた。禮拜が濟んでから例の通り下の圖書室で、一同晝饗を共にして。祝辭や感想をてんで述べて愉快な、誠實な一日を過した。吾々は諸君の前途の祝福を祈るものである。

△丸山精四郎氏 は去る八日、上野精養軒に於て、芽出度結婚式を挙げられた。

△通俗講和會 十五日開會。鈴木氏司會の下に、例によりて頗る盛會であつた。

△夏期中禮拜時間の變更 七月第三日曜から九月第一日曜までの禮拜時間は夜間に變更し朝の間は當分休暇。

The Faith of the Incarnation

Historical and Ideal.

Glimpses of the beginnings,
development and metamorphoses
of Christianity,

by Clay Mac Cantlay.

published by Kelly & Walsh, Ltd., Yokohama.

クレイ・マコーレー氏は惟一館樓上の片隅の二室に極めて簡單なる生活を送つてゐる米國ユニテリアン教會に屬する宣教師である。少年の折ベルリの航海記事を読んで日本に興味を覺えた。彼は長老派の家庭と神學校とに教育せられたが、理性に富んだこの青年は神學上の疑惑を懷いて、その派より分離した。彼はユニテリアン主義者となつた。彼は此主義を宣傳せんがために、日本の客となつて今日に至つた。氏は五月八日に滿七十年に達した。氏の友人は同氏を招待して一夕の歡をつくした。席上ヒイボデー博士の卓上演説は最も巧妙にしてよくマコーレー氏の性格を讚賞した。曰くマ氏の生涯に於て最顯著なるはその智力的活動が數十年の間常に進歩しつゝあつたことである。これは溢美の言ではない。氏は嘗て南北戰爭に従軍して南軍の捕虜となつた時に幽囚記を書いて、基督教小史も書いた。日本に來てからは百人一首を韻文に英譯した。日本山水論は亞細亞協會報告書の一編である。日本語研究書もある。一昨年出版した「今日の事實」と題せる小著は柴田庵庵氏の譯によりて警醒社より出版せられた。然るにこれが中々の評判となり、米國の國際平和義會にて一萬部も印刷して各地に配本したといふことである。此處に紹介せんとする「化身の

ボーデー博士相次いで吾人平常の主張に裏書きせられたのである。博士は青年會館や青山學院や、明治學院、同志社等の正統派の學校會館等に招聘せられ、至る處好感化を及ぼした。又早稻田、慶應等の大講堂に於ては生命と勢力、もしくは理想主義を高調せられた。基督教の聖職にある學者にして東京京都等に於ける高等の學校に於て斯の如く多くの講演を試みたる人は皆無であらう。博士の人格を通して到る處に自由基督教の生命が發揮せられたのである。

バイボーデー博士は統一教會の事業に少からざる興味を覺えられ、靈交會の現状にも大なる満足をせられた。地洋丸甲板の上に於ける吾人に對する最後の語は純粹なる基督教の精神に立ちて統一教會の發達を期せよといふことであつた、同博士は又友愛會の事業に特別の期待をせられた。彼は二度來りてその例會に於て短かけれども力ある獎勵を與へられた。友愛會は日本に於ける宗教的社會事業の先鞭者である。ビ博士自ら社會倫理及び社會事業に限りなき興味を有せられてゐるのである。博士ボストンに歸着せらるゝ時は吾人の微々たる事業が彼地の教友に多大の喜びを齎す時なることを想像することが出来る。

自由基督教は疾うに日本に發達すべくして發達しかねてゐた。今や一陽來復天下を風靡すること決して夢想ではない。此時にあたりて老軀を提げて五千哩の波を超えて吾人に新英洲の人格と學識と信仰とを示されたる老博士の使命の甚だ大なるものなりし事を追懷せざるをえない。博士は誠に善き稱許者である。之を刈るは吾人の責任である。

(六月十六日、内ヶ崎)

編輯たより

餘白ができたので、社中同人の消息を書く。小石川の奥の静かなところに、至つて頑丈な住居を構へた内ヶ崎さんは。新著「近代人の信仰」の校正を概略すまされた。殆んど六百頁に近い本になるさうだ。宗教界思想界の注目に値するであらう。七月の中旬ごろから、早稻田の學生を率ゐて、關西へ講演旅行をやること云つて居られる。三並さんは最早學校の方の授業がすんで、よほど樂になつたと云つたやうな顔をして居られる。「新救世主論」に引き續いて、また何か新方面の論議を提供せられる事であらう。鈴木さんは友愛會の經營と新にできる統一教會の敷地選定との爲め、非常に忙しがつて居られる。吉田さんは何か近代劇の翻譯をしきりにやつて居られる、九月には或ところの試演に用ひる筈の脚本を本誌に發表せられる筈。相原さんは統一教會の爲めにしきりと骨を折つて居られる、氏が新しい内閣を率ゐられるやうになつた以來、教會が絶えず新方面を拓いて行くことは快心の至りである。内藤さんは喋舌ることが嫌ひと云つてゐながら、この頃は妙に講壇に立たれる事が多い、矛盾と云へば矛盾の一つであらう。加藤さんは相かはらず内生活の問題の爲めに、眞劍の努力を續けて居られる、次號には思ひ切つて最近の感想を洩けだして見たいと云つて居られる。小山さん今岡さん野村さん、みな至つて壯健である。(編輯小僧)

る。(新陽堂發行定價七十五錢。

△架空の頽廢

オスカア・ワイルド作
矢口達譯

藝術の爲めの藝術といふ言葉は随分舊いものであるが、しかし一面から考察すれば、永久に新しき言葉であり、眞理ある主張である。英國の唯美主義、或は藝術の爲めの藝術、主義の新たなる高調者であり、またその新たなるムーヴメントの第一歩者であるオスカア・ワイルドの、「The Decay of Lying」は、最も良く、彼の藝術に對する、唯美主義的態度が、明かに窺はれるといふことは一般定評である。而して新藝術に對する彼の要求或は主義を説明するに當りて、對話的形式を取り入れてあるといふこともまた面白い發表の方法だと思ふ。架空の頽廢は即ちオスカア・ワイルドの「The Decay of Lying」を譯したものである。吾々は本書によりて、近代文藝の新しい一派をなせる「藝術の爲めの藝術」主義の一般的智識を掬ひ出すことが出来ると同時に、彼れの立論の新しい方法を學ぶことも出来る。矢口氏の譯文は卷を逐ふて圓熟の境に進みつゝあることを信ずる。尙ほ原文の妙味と氣分を失はざらんことを恐れたる苦心の痕跡を認めることが出来る、その結果やゝもすれば、生硬に墮したと思ふ點も數箇所ある。が、忠實な譯者の態度は飽くまでも買つてやらなければならぬ。裝幀醇佳。夏時讀書家の好伴侶たるを失はぬ。(新陽堂發行定價四拾錢)

△心の扉

昇曙夢譯
海外文藝社發行

海外文藝叢書の第二篇として著はされたもので、ザイツェフの作「姉」客「狼」の三篇と、アンドレーエフの作「歌の呪ひ」とが收められてゐる。譯者は露西亞文學に精通して居られる昇曙夢氏で動亂せる現代の生活に絡みついた複雑なる情調が、至つて強く鋭く復現されてあるばかりでなく、一字一句をも忽にせざる譯者の用意と努力とが十分に窺はれる。作者を異にするに従つて、それぞれに描寫と技巧との相違はあるが新時代の空氣に壓迫された生命と生命との奥底から、新しき神秘と憧憬との急調を躍きはしてし

ない悲痛の中に、はつきりと遠き國の風光を望む趣は、此の一巻に收められたいづれの作にも、しみじみと感ぜられる、眞に近代人としての特權を握り得た人々に接して、其の宗教感神秘に觸れたいと希ふものは、是非この眞面目なる譯書を手にして見なければならぬ。(第半裁二〇二頁、價四十五錢)

△新理想主義の哲學

ルドルフ・オイケン原著
波多野精一、宮本和吉共譯

此の書はオイケン博士が一八九六年に第一版を出し、それから十年を経て、一九〇七年に第二版の出來た原名では「精神的生活内容の爲めの戰」と題する著述を、さう云ふ長い名を附ける譯けにも行かないので、内容から割り出して、こう云ふ名にしたものであらう。尤もオイケン自身は原著の表題の下に「一世界觀の新らしき設立」とも附記して居る。彼れが云ふ「新世界觀」とは即ち新理想主義のとであるから「新理想主義の創設」とも云へるし、創設も變だから、「哲學」としたのであらう。従て表題は適當に變へてあると思ふ。

オイケンが哲學者として立つて居るのは、既に久しい間のとて、彼れがエナ大學の教授になつたのは、一八七四年の外である。それから著述も續て出た。然し彼れが獨乙及びそれ以外に於て、謳歌せられるやうになつたのは、やつと今世紀になつてからである。彼れの哲學の主義は依然同じであるのに、今になつて世間が彼れに謳歌するのは、何故であるかと云ふと、それは世間の思潮に變化があつたからである。——固より之を變化せしむるにオイケンも大なる貢獻をしてゐるに相違はあるまいが——今は唯物主義、自然主義、ポジチビズムなどは最早信用せられなくなつた。時代近れの思想となつた。之れに反し理想主義やロマンチック主義が「新」の字を冠して、勃興しつゝやつて來たのである。その哲學的の代表者としては、前年物故した伯林大學のゲルタイ教授の如きがあり、尙ほ生きて居る人々にはジンメル、ウキンデル、パント、ナトルプ、リツケルト等もあるが、オイケンはこのうちで最

信仰、歴史的及び理想的」といふは同氏の誕生七十年の記念著述である。これは基督教發達史である。正統派より自由派に移れる著者の信仰告白書である。この一兩年著者が老軀を忘れて熱中したる努力の結果である。

本書は四百三十ページの二巻である。分量必ずしも大なりと稱すべからず。されど内容は極めて豊富である。思ふに著者の長所は簡潔なる文致である。少き言語に於て多きを談じ得る特色があることである。本書は四部よりなる。第一、基督教の起源、第一章原始基督教の周圍、第二章、初代基督教の記録、第二章、基督教の發達と變形、第一章、原始基督教の傳播、第二章、基督教論の進化、第三章、異教徒に對する福音、基督教の標準となる、第四章、基督教の最初の三世紀、第五章、羅馬帝國々教としての基督教、第六章、專制的法王制度の教會としての基督教の解放と近世の發達、第一部文藝復興と宗教改革、第二章合理論と基督教、第三章基督教と哲學的理想主義との合一、第四章、基督教の進化に於ける近代ユニテリアン主義、第四部近代的基督教論、聖なる人類の原型たる耶穌基督。是れ内容の一斑である。

基督教に關する著述は汗牛充棟も當ならず。されど一冊の中に猶太教、基督教傳、新約書編輯の由來、教會史、近代思想の一斑等の要領を收むる書は世に乏し。否殆んど皆無と稱するも可なりである。今此書一冊を手に入れば基督教に關する大略の事實を知るに難からぬのである。ことに著者は自由基督教徒なれども判斷極めて公平で、何處までも研究者の態度を失はない。正統派の人々もこれによりて自由基督教の基督教觀を知ることが出来るであらう。恐らくは此書は在留宣教師の手になりたる書籍中最も價值あるものゝ一つとして永く記憶せらるべきであらう。吾人は近き將來に於て此書が日本語に翻譯せられんことを希望するものである。定價金三圓五十錢。同好の士にとりて六合雜誌社は取次の勞をとるべし。(U生評)

△隱 遜

トルストイ作
土岐哀果譯

トルストイの遺作を集めたものである。トルストイの隱遜は世界の耳目を聳動した事件であつた。この遺作はその隱遜前の作に係る故に、トルストイを偲ぶに此上もないものである。矢張卷頭の神父セルギーは壓巻である。百二十ページの短篇物であるが、大藝術家の腕前が十分に現はれてゐる。近衛士官の秀才が宮仕への貴族の女と約婚したが、ニコラス帝の思ひ物であつたといふ告白を聞いて、失望の餘り彼は、僧庵生活の人となつた。美男なる僧侶に多くの陷穽があつた。彼は決心して遁僧となつて行ひすました。夜陰彼を誘惑せんとしたる美人も彼の信念を動かすことは出来ぬ。隱僧の手指朱に染んで、女は戰慄した淫婦は一朝にして神女となつた。此評判は神父の名を一層高からしめ、彼は祈と祝福とによつて種々なる病を癒すに至つた。彼の周圍には群衆が常に彼の如く押しよせた。彼は自ら祈る時なくして内心の荒むをおぼえた。此時彼はあやまつて一少女の誘惑に乗ぜられた。彼は後悔した。百姓服を纏うて巡禮者となつた。神父セルギーの名は頓に止んでたゞ善行をなすつゝ漂泊する一人をみる。祈りの人は勞働の人となつた。奇蹟の人は勤勉の人となつた。祭壇の人は看病人となつた。

誠に暗示と教訓とに富む小説である。此一篇のうちに希臘基督教の缺點が暴露してゐる。神は儀式や斷食よりも奉仕と愛を好むといふ主旨が讀まれる。露西亞魂に固有なる強烈なる靈肉の争が理解せられる。肉感的の露西亞婦人もちろつく。隱遜一篇は此一篇文のために一讀三讀の價值はある。

隱者フイヨドル、グジミチの遺文はアレキサンダー一世の後身なりと想像せられたる隱者の懺悔録である。これが終りまであつたらどんなに面白い讀物であつたらうにと惜まれる。とにかく露西亞皇室を材料にするなんて、トルストイにあらざれば出来ぬ藝當である。その他「狂人手記」「神父ワシリー」(千九百十年の夏の日記なり)もある。重ねていふ本書は「神父セルギー」一篇のため千鈞の重きを示すと。

土岐哀果君の譯文は極めて老熟したものである。面白く讀ませ

らざるはない。そしてその云ふ所は皆な現代の青年が考へたり云つたりして居る所を代表したものと云つてもよからう。(定價九拾錢)

△人形の家

イブセン作
島村抱月譯

イブセンの人形の家の主人公のノラの名は可なり日本の讀書界に響いた。十二年前に高安月郊氏が初めて邦語譯を出した。イブセン紹介の名譽は同氏に歸すべきであらう。島村氏の譯文は金玉の文である。一體口語體に熟練なる同氏の譯文はすら／＼として些の不自然も凝滞もない。恰かも邦語の原作の様に甘い。かゝる名譯は重出の理由が十分にある。

又此書の出現は大に時期を得た。今日婦人問題のハケ間敷なりかけた時である。新しい女の問題のために「太陽」や「中央公論」が臨時増刊を出し、本誌もまた數十頁をこのために割いた。この時にこの理想的譯文の「人形の家の」出版は大に歓迎すべきである。本書の原文は三十四年前に出版せられてゐる。男性的社會男性的法律の下に壓迫を感じて自覺したのはノラに代へらるゝその時代の歐洲婦人である。獨乙ではニイチエに先じて超婦人を唱へた猶太の婦人のラヘルがゐた。英吉利にもマリエ・ウオルステンクロフトがゐて婦人の權利を主張した。彼女は十八世紀の婦人であつた。

依つて歐洲の婦人問題はイブセンを待つて生れたのではない。しかしこの興味ある問題を劇化して社會の耳目を動かしたるは此文豪の功である。

吾人は日本の新しい女はノラの家出の時を聯想せしむるといふ批評を耳にする。恐らくは日本のノラはノールウエーのノラよりも一層苦しい位置にあるかも知れぬ。ノールウエーでは婦人が代議士の選舉權をえてゐる。イブセンの憤慨した男性的法律が幾分か女性的のノラを加えたことである。日本ではまた一寸暗黒である。當分多くのノラが出るであらう。これは社會制度の缺陷である。婦人のみを責むることは出来ない。

吾人は島村氏のイブセン傑作集を歓迎する。文藝協會の騒動も一先づ落着いた様だから、此方面に於てドシ／＼努力せられんことを切望する。(S・U・生)

△近代思想の解剖

樋口龍峽著
廣文堂發行

著者より「近代思想の解剖」の寄贈を受けたのは二三月前であつた。その後多忙なことが引き續いたり、旅行をしたりなどして精讀の機會を失した。これは深く著者に謝する所である。さて本書は随分好評を博した。もう八版に達したといふこと、これでこの書の價值が知られるといふも過言でない。

この著は歐洲の近代思想の變遷の大體を知るには最も便利なる入門書である。多方面の智識と材料と思想とを分析し、叙述し、綜合する所、優に著者の非凡の技術を見ることが出来る。苟くも歐洲の現代思潮はさて置き、日本刻下の思想海の波瀾を洞察せんとする人々にはこよなき參考書である。著者が序文に説くやうに徒らに近世思想を危險視する保守者流と、一も二もなく、新しきが故に之に隨喜渴仰する急進者流とに對する一種の警告者とも見做さるべきである。多くの評家によつて批評せられ喝采せられたる本書を後れ馳せに僕が之を評するの必要もあるまい。よつて一讀の際思ひ付いた點を記して置かう。

著者は卷頭第一に思想變遷の概觀を擧げたるはことに日本の讀者に對する用意周到なるを推獎せねばならぬ。しかし希臘、羅馬の兩思想を説いてヘブライ思想に一顧だにも與へず、羅馬帝政時代に基督教を突然と紹介して、その思想の内容を説かざるは讀者の多數には餘りに知悉されたりと思惟せられたるがためなりや。一般日本の讀者は猶太思想に對して極めて曖昧なる智識と臆説を懷いてゐる。著者がこの點を省略されたる點大に惜しむべきことである。

第三章に於て著者は自由平等の思想を論じてゐるが、近代英米に於ける社會的良心の發達の實例を擧げざること物足らぬ感がする。たとへば英國に於ける大學殖民事業、大學教育普及事業のこ

も輝々たるものである。斯う云ふ譯で彼れは年は老いて居るが、新思潮の中心人物となつて居る。そして獨乙にも學派を作つて、諸種の方面にその説が入り込んで居る。殊に教育に従事するものゝうちに、オイケン派の人々が多く居るのは、彼れの哲學の將來の發展に、有益なる關係を有つて居ると思ふ。

然るにオイケンの著書は、獨乙に於て如何なるものが最も多く讀まれるかと云ふと、矢張比較的通俗的なのに多い。彼れが哲學的研究の根本たる「プロレゴメナリ」などは版を重ねてゐない。然しそのうちでも今度宮本、波多野二君の翻譯になつた本書は根本的の議論があると共に、オイケンの世界觀の全軀の組織が一通り分るものであらうと思ふ。オイケンは、時間を超越した、そして獨立自存せる精神生活あり、意義あるとを主張するものであるが、之を大思想家の思索のうちに辨明したのは安部能成君の譯された「大思想家の人生觀」である。この書に於てオイケンは自家の世界觀に哲學歴史上の基礎を置いたのである。そしてこの基礎の上に自分はどんな家を建築するかと云ふと、それが本書、即ち元名で云ふと「精神生活内容の爲めの戰」である。更に換言すると、この内容を得るが爲めの哲學的攻究をなして、そしてその内容を確立せしむる議論である。故に「大思想家の人生觀」が譯出された以上は、是非共本書が譯出されざるを得ざる順序であつて、讀む者も之を讀まざれば、オイケン 眞意は分らな譯である。由來オイケンの文章は難解と稱せられて居る。これは譯者二君の努力により讀み易く邦譯されたに對して我思想界は多くの謝意を表さなければならぬまい。オイケン哲學の現今の位地と、本書が彼れの哲學中に如何なる位地を占むるかを記してその紹介としたのである。(三並)

△ウオーレン夫人の職業

バーナード・ショウ著
坪内逍遙譯

近年坪内博士がショウの熱心なる研究者たるは文壇に隠れない

事實である。博士は度々ショウを早稻田で誹ぜられた。博士は此度ショウの邦語譯の第一篇として Mrs. Warren's Profession を選んだのである。この脚本は英國でも問題となつたもので、慥か國內に於て登場を許されないものである。

ウオーレン夫人は貧家に生れた美人である。かゝる婦人の多くが遭遇する運命は矢張この少女を醜弄した。金主がついてブラッセル、ベルリン、ヴイエン等に怪しい旅館を設けて大儲けをした。そのうち私生兒のギキを生んだ。ギキは英國の女學校の寄宿舎に托せられた。彼女はケンブリッヂ大學を優等で卒業した。數學は得意で、大なる名譽を博した。ギキは母の職業を知らない。彼女が卒業後、母の別荘に來ると母の道業仲間が集つて來る、辯護士やら貴族やらが來る。國教會の牧師が來る。是等のならず者との會見が端緒となりて母はこの素性を打ち明ける。娘は同情は寄せたが、終にロンドンの婦人辯護士の下に走りて薄給の助手となつて母と共に莫大なる財産を棄てるといふ筋である。

流石にショウは英國隨一の文豪だ。英國文明の裏面を思ふ存分に曝露してゐる。見様によつては多くの社會問題、婦人問題がこもつてゐる。僕は讀了して一種清高なる印象をえた。ギキが一旦母に同情しても終に母と異なる運命の人となるは全くショウの氣骨を示してゐる。とにかく英國婦人運動などを研究する人には缺ぐべからざるものである。

坪内博士の譯文は非常に甘いものだ。僕は原文と比較する暇がないが、まことに自由な且つ自然的な譯である。(正價六十錢 早稻田大學出版部發行。)

△啄木遺稿

石川啄木著
東雲堂發行

啄木君とは一面識もなかつたのであるが、その略傳を讀んで、二十七歳にしてこの世を逝いた青年文學者であることが分つた。世に傷ましいとは幾等もあるが、有爲なる青年の長逝ほど傷ましいものはない。自身も殘念であらうが、他の人々にも殘念である。遺稿載する所を讀んで見ても、詩に文に各々その偉才を發揮して居

新刊

トルト遺 岐土
ス 哀 譯
イト 果 氏

隱遁

全一冊四六版
美裝箱入
正價七十五錢
郵税内地八錢

懷疑と矛盾と不安と苦悶との八十年の過去から通れて、半夜密かに僧院に隠れんとし、途上岡らずも荒寥たる一寒邑に墜れるまで、巨人トルストイの苦衷は、果してどんなであつたか。其の晩年の偉大な胸中の秘密を死後に發見せられた偉人自身のペンの迹によつて知することは、實に何たる悲痛であらう。吾人は肅然として此の遺作を心讀しなければならぬ。

大好評
忽再版矢口達氏譯

嚴の處女

總クロス特製美本箱入
正價一圓十錢郵税内地八錢

●オスカア、ワイルド作
●本間久雄氏序
●矢口達氏譯

新刊 架空の頽廢

袖珍新型美裝
正價金四十錢
郵税内地四錢

享樂主義耽美派の第一人者たるワイルドが、矯激なる論法と奇警なる言辭とを擅にして「美のための藝術」「藝術のための藝術」を最も徹底明快に論斷主張した對話體の論文である。向口葵の花を着け、孔雀の羽を振つて並樹大路を闊歩したる詩人、樂欲と歡樂に耽り、情熱の奔放に身を任せたる一世の鬼才ワイルドの面目が紙面に躍動して居る。

發行所 新陽堂 東京 小田 石川町 川町

賣捌 書店 各

振一 替五 口五 座七 東〇 京番

とき、米國大學の理想が社會教化を標榜し來れることなど、幾許も材料はあるではないか。

第五章「近代生活と近代思想」に於て著者は近代人の神經過敏になり、官能的満足をのみ目的とするがごとく論じ去りたるが、近代生活の繁劇は一種強烈なる神經を本具する個人を産みつゝある現象をその對象に擧げざるを惜む。現代の代表的人物の顔は四角なのが多い。アスキス、ロイド・デョルヂ、ウインストン・チャーチル、ルーズヴヘルト、タフト、ブライアン、メーテルリンク、獨乙皇帝、等その典型ではないか。デュウエー及びタフト合著の倫理學に於ては、近代生活の繁劇なるは從來の禁酒運動に依りて禁酒家もしくは節酒家を作りつゝあると書いてある。

第八章社會本位の思想中には基督教社會主義に言及せず、又英國で大勢力あるフビアン社會主義に觸れざるは著者の不注意ではないか。

第九章の「婦人解放の思想」も猶一息と所望したい所である。著者は社會學者なればこの問題に關して過去の社會現象はよく叙述してあるが、文明史的觀察が缺けてゐまいか。本號の「文化の泉としての婦人」として僕の述べてある所は幾分か補ひとなることが出来る。又近代生理學及び醫學の婦人觀もあつて欲しかつた。三二五ページに基督教の婦人觀も女子を劣等視したと斷言されてあるが、あれは創世紀の記事で、猶太教の婦人觀である。基督教の婦人觀は四福音書に求めなければならぬ。而して耶穌は男女を平等に待遇した。使徒保羅は多少時代思想の感化の下に婦人の自由を束縛した傾きがある。歐洲に於ける婦人の地位は兎も角も基督教會の後援を得たことは疑ふ餘地はない。著者のこの方面の研究は不十分であると思はれる。

最後の章新思想の曙光は余は著者と大體に於て一致するものである。猶ほ著者が近代思想が基督教と如何なる交渉を有するか殆んど説いてなく、たゞオイケンについて略叙する所がある計りである。自由基督教の勃興、チャニンゲ、エマルソン、セオドル・バーカー、マーテローの如き名は必ず省略せらるべきものであ

るまい。救世軍の社會事業や、日曜學校や外國傳道の勃興等も亦何れかの章に加へらるべきである。組織インスチテュショナル・チャーチ的教會やブラザフット運動も然りである。羅馬教會内の「近代主義運動」のごとき必ず著者は評論せねばならぬものにして省略せられたるも少くない。

著者の所謂近代思想が歐洲に勢力を揮ひ居る間に、基督教は依然として歐洲文明の有力なる背景であつた。その思想も大に進歩し、その外形も大に變化したるものがある。日本の讀者に對しては著者はやゝ親切を缺く非難を免れまい。

しかし幾多の缺點を有しつゝも、吾人は此書を此種類の書籍の中で、最も有益なる參考書なりとして、讀書界に推薦するに躊躇しない。(定價一圓五十錢) 内ヶ崎生

△泰西思潮 千葉鐵藏氏編。 △るか傳福音書 チェスデ

ンク氏譯。 △病理講話 藤田篤氏編。 △禪の極致 大内

青麟氏著。 △立志 立志社發行。 △文檢修身教育法制

經濟問題答解 稻毛金七氏著。 △巖の處女 矢口達氏譯

等の批評は次號に譲る。



注意

一、本誌は前年迄は本會及び本誌に特別關係ある人には准呈致居候處今同内部の整理と共に每號無代進呈は○何人にも致し不申事と相成候間御愛讀の方は此の○際本年度よりの誌代御送附下され度候

二、本誌は一切前金にあらざれば發送致さず候

三、御送金はなるべく安全なる振替貯金に依られ度候

四、若し郵便爲替にて御送金の場合は芝區三田四國町二番地六合雜誌社と指定し拂渡局を三田芝園橋郵便局と指定せられ度候

五、本誌代金に對しては領收證を差出さず代金領收次第御注文通り發送可致候又前金切れの節は帶封に

(前金切)と押捺致候間早速御送金可被下候

六、本誌の廣告に關しては御照會次第詳細に御通知申上ぐべく候

七、本誌の編輯及び紹介批評並に圖書交換雜誌等に關しては六合雜誌社宛にて御申越下され度候

八、定價は内容の改善發達と共に七月號より改めて下表の如く可致候間御承知下され度候

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵稅共
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵稅共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵稅共
●海外は郵稅一冊に付金六錢(清國を除く) ●臨時號出版の際は規定以外に代金申受く			

本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通		一頁	金拾貳圓
普通		半頁	金六圓
●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候 ●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候			

大正二年六月三十日印刷納本
大正二年七月一日發行 (毎月一回一日發行)

定價
貳拾錢
稅共

發行兼編輯人 鈴木文治
印刷人 山本與一郎
印刷所 東京市芝區三田四國町
東京市芝區三田四國町二十七番地
株式會社 英合

發行所

東京市芝區三田四國町

統一基督教弘道會

一 振替東京二〇〇〇三番

賣捌所

東京堂◎同文館支店北隆館◎東海堂◎上田屋◎警醒社◎教文館其他全國有名書店

◎豫約募集◎

理學博士 田中正平先生 醫學博士 榊保三郎先生
東京音樂學校校長 湯原元一先生 序文
東京音樂學校教授 島崎赤太郎先生校閱及增註
東京帝國大學醫科大學々生 淺田泰順翻譯及發行

新譯 律氏和聲學

別冊附錄

練習問題解(島崎先生案)
術語和獨英對稱表及索引

本書は我が混沌たる作曲界に一道の光明を學ふものにして、洋樂複音曲構成ノ理法を詳述して、獨習者に萬遺憾なからしむ。原書は斯學のアウトリートにして本譯書は本邦に於ける此種出版物の嚆矢となす。

豫約價 前金壹圓貳拾錢(定價壹圓七拾錢)外に郵稅十錢

申込期限 本年七月二十日限

發送期 八月中

申込所 統一基督教弘道會

日曜學校教授法研究會

△期日 七月十八日より廿三日まで(廿日休)
午前八時ヨリ十時

△會場 芝區三田四國町二ノ六統一基督教會

△申込所 全上

△會費 金參拾錢一日分金拾錢

講師及科目

兒童の心理に就て

倉橋惣三

日曜學校に對する希望及び話の仕方

巖谷小波

日曜學校と趣味教育

村山鳥逕

日曜學校の宗教々育

田村直臣

教材としての聖書

三並良

日曜學校經營法

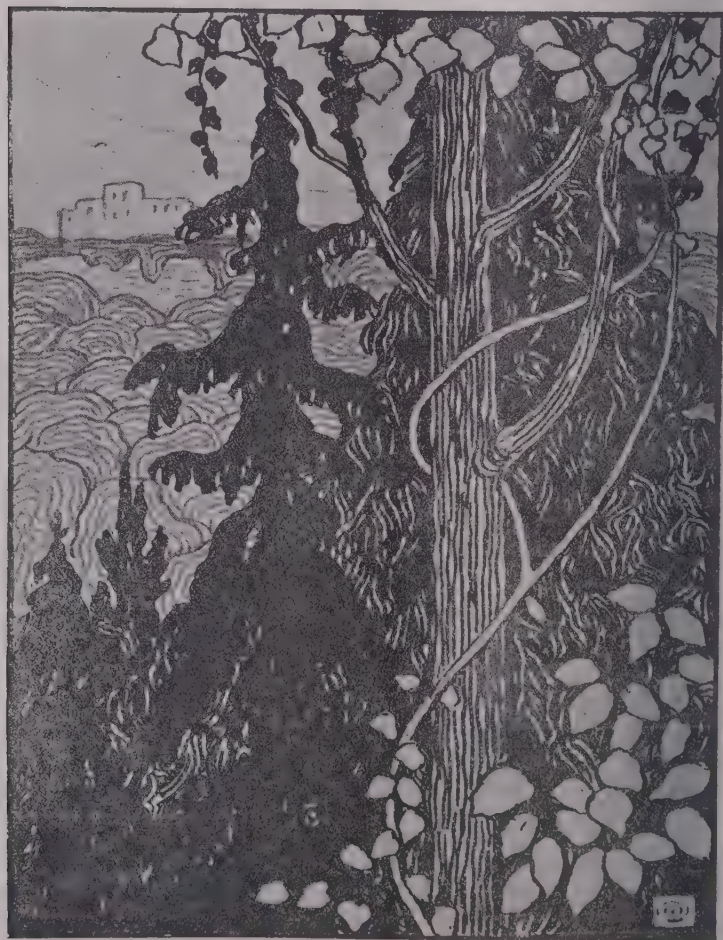
相原一郎介

唱歌教授法

矢野房代

PACIFIC UNITARIAN SCHOOL
FOR THE MINISTRY
Berkeley, California

六合雜誌



明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可
大正二年八月一日發行(每月一回一日發行)

六合雜誌第三十三年第八號

號 月 八

内ヶ崎作三郎著

近代人の信仰

四六判
六百ページ
定價金壹圓貳拾錢
郵税金拾貳錢

今や世界の文明國には近代人なる新階級存在す。彼等

はひとしく近代の科學、哲學、文藝の影響の下にあり。彼

等は既に舊信仰を棄てたり。されど無信仰たる能はず。彼

等に煩悶あり、苦痛あり、憧憬あり、最後に新しき信仰な

る能はず。著者自ら近代人に代りて新信仰を説く。新時

代の思想に注目を怠らざる諸君の一讀を乞ふ。

發行所

東京市橋區銀座二丁目

警醒社

振五 替五 東三 京番

虔んで

有栖川宮威仁親王殿下の薨去を悼みまつる

始終神様に

近づいて

清い心を

持った者に

何の悪魔か

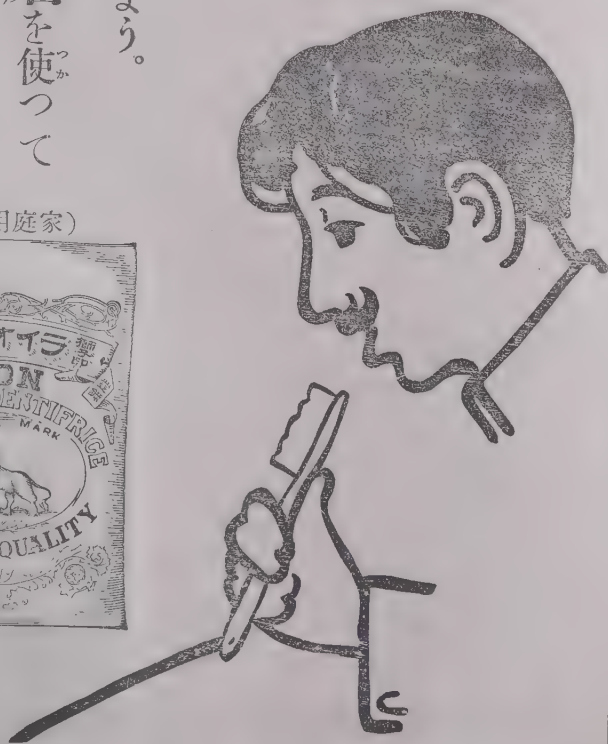
誘惑の手を擴げましょう。

朝夕ライオン歯磨を使つて

美しい歯を具へた口から

何で病の微菌が入り込みましょう。

(入袋大用庭家)



THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 391. August, 1913.

CONTENTS.

After the Sunset (<i>Frontispiece</i>).....	S. Arita.	
The Rhythm of Life	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	2
"Waves" (<i>a poem</i>)	K. Satō.	14
Christ and Paul on Woman. Rev.	Prof. S. Uchigasaki.	17
The Problem of Woman from Woman's Point of View.		
.....	Miss H. Tanaka.	25
Great Thinkers on Woman	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	33
The Poems of May.	N. Fujii.	39
On Dr. F. Traub.	Prof. H. Minami.	41
Ellen Key and Feminism.	T. Haraguchi.	52
One Night in the Monastery.	K. Aihara.	55
A Summary of Current Events.....		
"La revolte" (<i>Villiers de l' Isle-Adam</i>)	A. Naitō.	67
Tanka	K. Awoyama.	87
The Mission	Z. Nomura.	88
Explanation of the Frontispiece.	A. Naitō	95
Letters from Our Subscribers.		96
"Les Aubes" (<i>Emile Verhaeren</i>).....	G. Yoshida.	99

Topics of To-day.

Ecclesiastical Life and Religious Life	A. Naitō	118
Christianity and Capitalism	B. Suzuki	120
Fundamental Policy towards the Religions	S. Kikukawa	122
A Criticism on the Summer-lectures given by the Kristokyō Dō-shikwai.		

Unity Hall Reports		129
Books of the Month		130

Published Monthly by the

TŪITSU KRISTOKYŪ KŪDŪKWAI,

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.



獨逸最近の宗教界
佛蘭西の新文藝界

みななみ
S A N
六五

反 抗 (戯曲)

内藤濯 譯
六七

青 蚊 帳 (短歌)

青山霞村
六七

使 命

野村善兵衛
八八

口 繪 の 裏 に

ないとう
九五

誌 友 消 息

吉田絃二郎 譯
九六

黎 明 (戯曲エルアールン作)

吉田絃二郎 譯
九六

時 評

宗教的生活と宗教生活

内藤 濯
一八

基督教と資本主義

鈴木文治
三〇

徹底したる宗教政策

菊川四郎
三三

基督教同志會講演會を評す

X Y Z
三四

七月の惟一館

三六

新刊批評

三七



六合雜誌第三十三卷第八號目次

落日の後(口繪)……………有田四郎……………

本欄

人生の律動……………内ヶ崎作三郎……………

第一歩の後……………内藤濯……………

靈潮(詩)……………佐藤清……………

耶蘇と保羅との女性觀……………内ヶ崎作三郎……………

女子の立場より見たる婦人問題……………田中久子……………

大思想家の婦人觀……………うちがさき……………

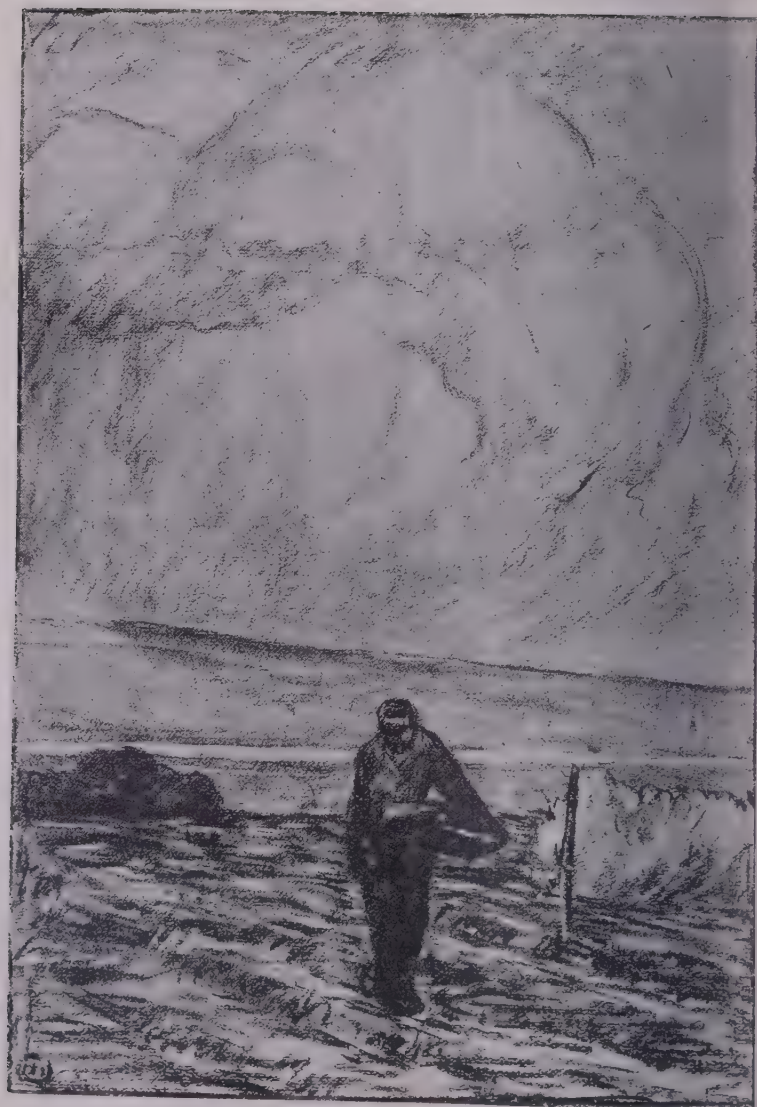
靈魂の花(詩)……………藤井夏人……………

トラウブ論……………三並良……………

エレン・カイの思想……………原口竹次郎……………

僧院生活の記録……………相原介一……………

思潮欄



後 の 日 落

● 新 着 ●

NEW ARRIVALS.

Begbie—Broken Earthen Ware.	@ .50
Begbie—In the Hand of the Potter.	@ .50
Begbie—The Ordinary Man & Extraordinary Thing, Paper edition.	@ .75
Begbie—The Ordinary Man & Extraordinary Thing, Cloth edition.	@ 1.25
Bennett—How to Live on 24 Hours a Day.	@ .50
Bennett—Mental Efficiency.	@ .50
Call—Nerves & Common Sense.	@ 1.75
Carpenter—Elementary Composition.	@ 1.00
Daissmam—St. Paul : a Study in Social & Religious History.	@ 5.25
Denney—The Death of Christ.	@ 3.00
Driver—Introduction to the Literature of the Old Testament.	@ 5.00
Drummond—The Greatest Thing in the World.	@ 1.25
Forsyth—Marriage, Its Ethics & Religion.	@ 1.25
Forsyth—The Work of Christ.	@ 2.50
Fraser—The Garden of Spices.	@ 3.00
Gosse—Ibsen.	@ 1.75
Harker—The Folliots of Redmarley.	@ 2.50
Hennessey—The Out Law.	@ 3.00
Hennessey—Journal of Jasper Danckaerts 1697-1660.	@ 6.100
Jowett—The Preacher. His Life & Work.	@ 2.50
Keller—The Miracle of a Life.	@ .50
Keller—The Practice of Optimism.	@ .75
Kikuchi—Japanese Education.	@ 2.50
Lancaster—The Law of the Bringers.	@ 3.00
Mackintosh—The Person of Jesus Christ.	@ 5.25
Menzies—History of Religion.	@ 2.50
Miller—The Beauty of Self-Control.	@ 1.73
Miller—The Every-Day of Life.	@ 1.75
Miller—The Glory of the Common Life.	@ 1.35
Miller—The Life Open Door.	@ 1.75
Moffatt—The Theology of the Gospel.	@ 1.25
Moore—Christian Thought Since Kant.	@ 1.25
Morley—Life of Gladstone 2 vols.	@ 5.00
Morley—Life of Gladstone 3 vols.	@ 1.50
Murray—Japan.	@ 2.50
Paterson—The Rule of Faith.	@ 3.00
Peabody—The Approach to the Social Question.	@ 1.00
Peake—Heroes & Martyrs of Faith.	@ 1.00
Simpson—The Spiritual Interpretation of the Nation.	@ 3.00
Waterhouse—Architecture.	@ .50

KYOBUN KWAN

1, SHICHOME GINZA, TOKYO.

六
合
雜
誌



第參百九拾壹號

り、宗教生活は眞實の生活を攫まんとする、人性本然の努力であり、創造である。

二

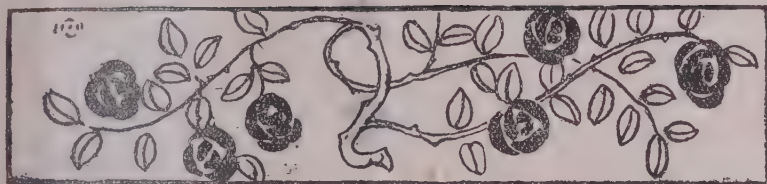
抑も宗教生活とは何であるか。言ふまでもなく神の生命と調和したる生活である。神とは宇宙生命の全體である。然らば宗教生活は、宇宙生命と自我との渾然如一の調和である。そこでこゝに一つの問題が湧いて来る。即ち宇宙生命の實相奈何といふことである。尙一步具體的に言ひ換ふれば宇宙生命の運動、變化、呼吸といふやうな實在狀態奈何といふ問題である。古來幾千の哲學者、宗教家、科學者、或は藝術家が究めんとして、猶ほ究むることのできなかった人生の謎語はこれであつた。しかしながら宇宙生命の實相或は方向は必ずしも全然不可解のものではない。吾人が敬虔の態度を持して宇宙生命の眞理に面する時、そこに何等かの秘密の消息を窺ふことができると思ふ。假令容易にその實體を闡明することができぬまでも、絶望すべきではない。今日發達しつつある科學、哲學、その他あらゆるものゝ思想を比較研究することによりて、吾人は歩一步、眞實の境に接近することができると思ふ。無論宗教的大天才は直覺によりて、神は愛なりと喝破した。これは確かに動かすことのできぬ大眞理である。宇宙が存續する限り、神は常に愛であり、萬有は愛によりて、發達しなければならぬ。しかし宇宙の生命或は神が愛なりといふことは、生命或は神そのものゝ本然的な、しかも全的な特質或は約束を指したものであつて、極めて概括的な一般的な發表の方法である。吾人は更に具體的にその愛、或は生命が、如何なる形式に於て、或は如何なる顯現に於て實證せらるゝかを考へなければならぬ。元來宇宙の生命或は神の觀念は極めて概念的な漠然たるものであつたが、十九世紀後半から、

人生の律動

内ヶ崎 作三郎

一

理想といふものを築き上げて、吾人の生活はその理想の宮殿に詣る行程に過ぎないと思つた時代もあつた。即ち理想が第一義のものであつて、吾人の生活は第二義、或は第三義のものであるとせられたる時代もあつた。しかしながら生活そのものゝ燃焼、變化、發達の間に、何等かの生命を、或は理想を攫み出さうと藻掻いてゐる現代人の心は、生活そのものを第二義とするが如き、舊き理想主義に慊らずなつて來たのである。その結果は吾人の生活即ち人生の第一義的實在とする觀念が、極度に發達して來たのである。人生とは何であるか理想の爲めの人生ではない、目的の爲めの人生ではない、人生は人生そのものゝ爲めの人生である。しかして人生は吾人の生活それ自身の外に存在しないのである。随つて吾人が宗教生活を唱ふる時に、そは吾人の人生、或は人間としての生活を離れての生活ではない。如何にせば最も完全に、最も徹底的に人生を味到することができるのであるか。眞實の生活を打ち建てんが爲めに、眞實の生活或は人生の根本義を如實に理解し、不斷に創造せんが爲めに、吾人は宗教生活を高調するに外ならぬのである。再言するならば、生活は人生の全てあ



己の生活全體が神の律動的な運動の中に於て、營まるゝ刹那である。宗教的生活はかくの如き生活の實行そのものでなければならぬ。勿論宗教的生活は人を愛し世に奉仕することであるであらう。しかしながら先づ自己の生活に生き、自己の生活そのものに忠實なるべきことが宗教生活の第一歩であり或は第一義である。されば吾人の生活が先づ宇宙生命の躍動と律動的共鳴を覺ゆるといふことは、宗教生活から取り除くことの不可能な事實である。吾人の生活が宇宙の生命と調和するならば、その肉體は健康である。その精神が宇宙生命の律動の諧調と共鳴するならば、吾人の生命は始めて永遠性を帶ぶるのである。「爾曹悔ひ改めよ」といふ誠は、自己の精神が宇宙生命の律動から、脱線しつゝある時に、再び共鳴調和の狀態に復れといふことであると説明することができる。

今日の忙しい社會に在りて、宗教生活を送り、或は宗教團體に加はることが、無意義であるといふ人がある。從來の日本は、殆んど此種の思想で押し通して來た。日本にも佛教はあつた、しかし眞劍で宗教生活を強ひたる時代が、どれ程あつたであらうか。少くとも佛教には、かの歐米に於ける基督教が持つてゐた程の宗教生活の熱心はなかつたと思ふ。歐洲に於ては、中世紀に方りて、羅馬教が國家にも個人にも非常な宗教的訓練を施した。勿論その思想には缺點もあつたが驚くべき健全な思想をも築いて呉れた。これに依つて社會全體が律動的生活を送ることを得た。吾々の生活に活動のみあつて、靜思といふことがなかつたならば、それは未だ完全な生活といふことはできぬ。それは即ち律動的生活を知らざるものである。吾々の生活に六日の活動があつて、一日の靜養があることも律動的な生活の意に適つてゐることである。吾人が宗教生活を送る所以は、實は吾人の生命を完くせんが爲めである。その生活を律動的ならしめんが爲めである。毀譽褒貶をのみ顧慮する生活に、生命の充實はない

生命或は神の觀念の條件のうちに、勢力及び生動といふが如き現象を附け加へるやうになつた。これは宇宙觀及び神觀に於ける偉大なる發見であつた。しかも宇宙生命の生動或は變化は、決して無秩序なものでなくて、常に一種不變の律動の下に營まれつゝあることを知つたのである。これは英國に於ては、十九世紀の半ばに、ハーヴァート・スペンサーによりて發見せられたる法則である。

吾人は直覺によることの外には、直接宇宙の生命力の生動を感ずることはできぬ。しかしながら吾人は、自己の生活の凡べてを圍繞せる萬有現象の裡に、その時々刻々の變化を通して、それ等の現象或は變化の根底實在であるべき宇宙生命の生動の形式を想像することができぬ。

海岸に立ちて、寄せ來る潮の起伏を注目せば、そこにも生動の諧調を聽くことができる。九個の小さな波の後には、一個の大きな波が續いて來ると言はれてゐる。吾人の心臓の脈動にも、植物の成長にも、そよ風の戦ぎにも、大風の襲來にも、涓滴の落下にも、春秋の變化にも、日夜の交替にも、宇宙生命の諧調的生動を見ることが出来る。宇宙萬有の生成、發展は一抑一揚、律動の波線を描いて現在しつゝあるのである。吾人はこれに依りて神の働きの一面には少くとも、律動的のものがあつたことを理解することができる。或は高く、或は低く、或は大或は小、或は長或は短、或は緩或は急、是れ確かに神の働きの顯現する一形式である。

三

吾々の人生が最高の域に達するといふことは、此の律動的宇宙生命の發達と、吾人の生活の勞作が、諧調の共鳴を發する時でなければならぬ。吾人の生活の高潮或は充實といふことは、畢竟するに、自

倫敦の西部にハイド・パークといふ公園がある。その北向側のベース・ウオーター街に小ひさな教會堂がある。

嘗て此の建築が賣り物にせられた時、篤志なる富める一婦人があつて、その會堂を買ひ取つて、スレーターなる畫家に依頼して、その内壁にキリストの生涯を描かせた。毎日朝の九時より午後の四時頃まで扉を開いて、「來りてこゝに憩へ」と書いて、一般公衆の靜思と瞑想とのために提供してゐる。

倫敦の西部は殊に熱鬧の巷である。朝々暮々人はたゞ財産と、權威と、豪華とをのみ夢みて、内的生活の瞑想時を得難き男女が多い。「來りてこゝに憩へ」——一婦人の企劃は、その影響する所少くはないであらう。彼等の血走つた眼が、ひたすらに世俗の樂慾や、刺戟を求めて、狂へるが如く、絡繹の大通りを奔る時に、彼等の脚は躓きの礫の横はつてゐることを知らないであらう。かゝる大都の一隅にさゝやかなる建物があるのである。彼等の焦燥せる心の眼が不圖、その靜かなる會堂内の豊かなる色彩の波に泛べられたるキリストの一生や、その一生を裹む剪圍氣の情調を凝視する時に一種の慰安を覺ゆるのであらう。かくして日毎數十の人々が、疲れたる心を抱いて此の堂内に默想する。しかして此の堂の一隅に於ける彼等の十分或は十五分の時間は、何等かの靈覺を彼等の荒びたる心の底に灑ぐのである。かくの如き建物が倫敦の一隅に在るといふことは、一面に於て英國殊に倫敦の市民の精神生活が未だ全く俗化してゐないことを證明すると同時に、斯様な精神の慰安を有する市民の幸福は羨望すべきである。羅馬教會の如きも、或はその教義の頑迷を責むる人があるが、過去の偉大なる精神的

吾人は餘りに外面を見ることをのみ知つて、内面を顧ることを知らない。宗教生活は實にその兩側面を律動的に思考せしむるものである。

四

ボストンのケンブリッヂに一人の博物學者があつた。彼は常に多くの鳥を飼養してゐた。一日彼は十年來、籠の中に入れて置いた一羽の鳥を放つた。その放つに方りて彼れは思つた。籠の中の長い時間、鳥をして翱翔する本能を遺れしめたであらうと、ところが彼の豫想は全然裏切られて了つた。彼がその扉を開くや否や、鳥は快き翼を羽打つて澄みちぎつた蒼穹を目かけて、矢の如く空を切つて飛んだ。幾度か彼れの頭上に、高い、そして大きな輪を描いて翔つた。しかも亦飛び疲るゝや再び、その飼主の掌に歸つて來た。鳥には飛ぶといふ本能がある、隨て自由をさへ得れば力のある限り翱翔するのである。しかしこの鳥は、休息することを教へられなかつたから、疲れ切る迄飛びに飛んで遂に飼主の手に落ち込んだのである。宇宙の生命は如何なる顯現に於ても、常に活動であり、活動は即ち生命である。しかも宇宙の生命は更に新たなる生命となり、運動とならんが爲めに、一時的靜止の狀態を取る。これ即ち宇宙の生命が律動的なるが故である。

吾人の一日の生活も、律動的でなければならぬ。覺醒の後に睡眠があり、活動の後に靜思がある。勞作に疲れたる我が肉體は、更に新たなる勞作の爲めに慰安を與へなければならぬ。繁劇なる生活の後に、吾人は瞑想或は讀書の時間を有せなければならぬ。是れ宇宙生命の活動と自己の生活が、律動的に調和せんが爲めである。



第 一 步 の 後

内 藤 濯

〇君——

僕にとつては最初の告白文とも云ふべき『新生活の第一步』について、友情と同情とに満ちた言葉を與へられた事を感謝する。

君は僕のあの感想文を読んで、近頃がない寂しさを感じたと云ふ。僕には君の感じたたと云ふ其の寂しさが、どんな寂しさであつたか分りかねるけれども、迥々しい筆を呵してあの一文を書き終つた刹那、僕は久しく負はされてゐた重荷を卸したやうな心の寛ろぎを感じたのと同時に、僕の心の一隅には、其のまゝ到底この筆では書き表はせさうにも無い寂しさが潜んでゐたのだ。さうして其の寂しさは、今日までもなほ僕の心から消え去りかねてゐるのだ。

斯うして再び筆を取るのには、一つにはあの一文に書き洩した事を補つて見たいからでもあるけれど、亦一つには、現に僕の心を浸してゐる此の寂しさを、少しでも君に推察して貰ひたいと思ふからだ。

〇君——

僕等は一切の根柢として、一切の出發點として、どうしても自我の權威を主張せずにはゐられない。どうしても個性の充實を要求せずにはゐられない。僕等がもし、この主張と要求とを蔑にして、活動

貢獻は勿論、今日に於ても未だ往々にして新教徒の企て及ばざる精神的事業を實行してゐる。伊太利の重なる都市を訪れたる旅人は、誰しも感ずることであるが、羅馬教の大迦藍のなかに入る時に、折からなる夕陽が、音もなく靜かに、宗教畫を燒き附けたる玻璃窓の色彩を通して、輪奐の美を極めたる大圓柱や、聖壇の上に輝く時、踞ける老若男女の敬虔なる胸が、如何ばかり神さながらの潔らかなる情調に顫くことであらう。由來新教の會堂は日曜にのみ開くこととしてあるが、羅馬國教會では會堂は人類の爲めの會堂であるといふ傳説が存してゐる。心靈の旅路に疲れたる旅人が足引き摺りながら、來りて憩ふ所は即ち會堂である。自己の生命が涸れたる人々の來りて、新たなる泉を掬まむ所は會堂である。日本の基督教會も、これ等の點に關しては、その音樂に裝飾に、會堂建築に於て、羅馬教會に學ぶ所がなければならぬ。その實現は百年或は二百年の後であるかも知れぬ。しかしながら今日吾人が常に、此の何等の裝飾もなき會堂に集りて、宗教的氣分を溫擁する所以は、即ち宇宙の生命と、吾人の生活が律動的調和を得んが爲めである。

今や天空を掩ふ碧瑠璃の夏色は、諸君を驅つて山海丘湖到る處に、宇宙生命の潑刺たる光耀に眩まさんとしつゝある。更に延びんが爲めに、更に偉大なる生命を攫まんが爲めに、諸君は山に行き、海に入りて蓋天の英氣を養はなければならぬ。これ諸君にとりて、律動的生活の實行である。宇宙生命の湧躍は常に律動的である。諸君の生活も亦常に律動的でなければならぬ。青山に入りて諸君の心靈を醒せ、舊遊父母の地に到りて諸君の情操を潔ふせよ。これ一葉落ちて天下の秋を知る時再び諸君が奮闘苦熱の境に慕進せんが爲めである。律動的生命、律動的生活、これ吾人の理想的生活の道標である。

きる事なら、僕は暫く其の何れの群からも離れて、たとひ一人でも可いから、生命の中流に掉さして見たいやうな氣がする。自我に目覺めたいと云ふ痛切なる要求は、過去も現在も同じく和らがないけれども、僕の内心の叫びは、自我の爲めに自我に目覺める事をも許さなければ、社會の爲めに自我に目覺める事をも許さないからだ。

全體の爲めに自我に目覺めよ——僕の偽らざる内心の絶叫は、たゞこれのみである。

もし僕がこれまでの僕であつたなら、人を導く事は自分を導く事だと云ふ聲に接して、輕率にもそれを直ぐに人を導く事が悪いと云つたやうな意味の聲と思つて了つたかも知れない。さうして前代の人々の心ふかく食ひ込んでゐた恐ろしい個人主義の猛毒を、再び僕の此の心に植ゑ込んで了つたかも知れない。しかしながら現在、僕の内心に叫ぶ聲は、たとひ個人生命の充實を要求するにしても、必しも人の爲めに働くなどは教へない、必しも人を導く事が誤りであるとは説かない。僕を取卷いてゐる集團の勢が、死んでゐても眠つてゐても、たゞしは暴力を逞しうするにしても、それを其のまゝ打ち捨て、置けとも命じなければ、それに對して反感を抱けよとも迫らないのだ。

過去をかへり見ると、僕はこれまで屢々、他人の爲めに働いたり、他人を教へたりする事を、たとひ愚かな事だとまでは云はなかつたにしても、少なくとも其の事を虚飾の多い事だと云つたり、機械的の事だと云つたりした事があるやうに記憶する。なるほど爛熟せる現代の文明は、虚飾の魔力に曳きずられて他人の爲めに働く人を生みだしたのかも知れない、機械的に他人を教へると云ふやうな無自覺な人を作り出したのかも知れない。しかしながら、さういふ人々が僕等の周圍に蠢いてゐるから

と實行との渦中に飛び込むとしたら、其の活動と實行とは、この大きな環象に對して、何ものゝ與ふる所も無ければ、何ものゝ贏ち得る所も無いであらう。他人の爲めに働くと言ふ事は、先づ自分の爲めに働く事だと叫ぶ聲が、僕の心の隈々に響するのもこれが爲めなのだ。これまでの人々の云ひ古した「人を導く」と言ふことは、自分を導く事に外ならぬと説く聲が、僕の心の隅々まで込み入るのもこれが爲めなのだ。僕は飽くまで此の聲に服従しなくてはならない、此の聲に服従しながら、日々の生活を切り拓いて行かなくてはならない。

斯う云ふと今日のいはゆる社會政策家は、そんな自己中心説を振りかざす者があればこそ、社會の組織が破れると云つて、僕の築き上げやうとしてゐる此の地盤の破壊を迫るであらう。一切の共同事業、一切の教育制度を破棄するものと稱して、僕の据ゑやうとしてゐる此の態度を罵るかへすであらう。新しき大きな生活の第一歩を踏みだして、新なる旅路に上らうとしてゐる僕の心に、また新しく寂しさがつき纏ふのは、この呪詛と罵詈の聲が、犇々と僕の周圍に迫りくるからでは無からうか。

これまで僕は、社會と云ふ集團の力を餘りに侮り過ぎてゐたやうだ。共同生活の眞の味は、それを突きとめやうともせず、狭苦しい自己の生活にのみ執着し過ぎてゐたやうだ。さうして其の結果は現實主義者の生活よりも以上に纏まりの無い斷片の生活に陥りはしなかつたか、抽象の生活に知らず識らず踏み込んで居なかつたか。

○君——僕の周圍には今、社會に目覺めやうと力めてゐる人々の群と、自我に目覺めやうと焦つてゐる人々の群とが、互に鎬を削り合ひながら、はてしない命の流に絶えず押し流されてゐる。そして

團の生命を味ふ事になるからである。近代の文明に培はれた個人尊重の心が、眞に明るい眼を有つたものならば、眞に鋭い力を有つたものであるならば、何うして斯かる一體無二の心境に到り得ない謂はれがあらう、何うして斯かる全的の生活味を攫み得ない謂はれがあらう。

○君——

危なげながらも、既に新しき第一步を踏み出した僕は、斯かる未知の一角に到り得んが爲めに、日々の生活を前方に向つて推し進めてゐるやうな氣がする。けれども僕の現在に於ける貧しき努力は、必しも現代生活の争闘と擾亂とを忘れ去らんが爲めては無い、共同生活の矛盾と葛藤とを塗抹し去らんが爲めては無い。僕の偽らざる衷心の願ひは、斯かる争闘と擾亂と矛盾と葛藤との眞を穿つて、雄々しき進歩の一路を切り拓く事に外ならないのだ。

○君—— 第一步の後の寂しさは、第一步に先だつ一刹那の寂しさに微かなる一條の光りを滴らしてゐる。僕は今日以後、一切の妥協、一切の迎合を離れて、しかも全體の生活に進み入りたいのだ。生活の斷片をも全體化し、抽象の殘骸にも更に生命の躍動を見るに足るべき生活の態度が攫んで見たいのだ。實に執拗なのは、僕等人間の心では無い。

自我の積極的擴張—— 僕の現在に於ける要求の焦點は、この一事に外ならないのだ。(七月七日)

と云つても、共同生活の凡べてが誤りだと云つたり、教育や傳導に従事する事を凡べて虚偽だと云つたりするのは、恐らく個性と云ふものの、或る幻影に囚はれた身窄らしい心の謔言では無いのだらうか。常に新しさものの追求を叫びながら、傳統のうち古びた個人主義を脱け出すことのできない不具な心の咆吼では無いのだらうか。斯う思ふとき、僕の心には烈しい悔恨の潮が満ち溢れる、恐ろしい寂寥の濤が押しよせてくる。さうして僕はこれまで、自らの錯誤を他の錯誤とし、自らの虚偽を他の虚偽として、知らず識らず孤獨の深淵に陥りかけてゐた事を痛切に感ずる、知らず識らず見る影もない自我の斷片に執着してゐた事を痛切に感ずる。

O 君——いつも君の云ふやうに、僕等に取つて最も大きな悲しみは、眞の自己を知り得ざる悲しさである、靜かな殿堂の内壁をも、喧しい工場の外廓をも、たゞさりげなく照らす太陽のやうに、自己の意識を絶して、しかも其處に大きな意識を認め得ざる悲しさである。

眞の自己を捉へると云ふ事は、僕等の内に絶えず躍動せる生命の音楽に耳を傾けて、其の小さな裝飾音の微かな響までも洩らさないだけの敏感を育む事であらう。もし僕等の衷に心ゆくばかり生命の流動と成長とが行はれてゐるならば、其の流動と成長との刹那々に繰れ絡む旋律には、絶えず繞り流るゝ大環象の共鳴も聞こえるであらうし、既に過ぎ去つた遠き昔の調までも、一つの司伴奏となつて聞こえるであらう。この刹那、僕等はもはや、他人を導く事をも疚しとするに足りない。個人と集團との間に横たはる矛盾をも煩はしとするに足りない。斯かる心境に到り着いた者に取つては、自己に蒞む事がそのまゝ他人に面する事になるからである、自己の生命の響に耳を傾ける事が、そのまゝ集

あらば我に告げよ我これといはん、
わが口は重くして言葉すくなく、

言葉の出づる時はあらくして刺あり、

されど我の如く苦み、歎き、祈りしものありや、

おん身のため、おん身の悲しき家のため、

そのうつくしき弟妹たちのため、

おん身愛するは苦むこと、

我は苦みなくして愛すること能はざるなり。

*

音もなき憂鬱のさざなみ、

しだいに沖よりすゝみ來り、

やがて惱亂の青みを加へ、

あこがれのしぶきを飛ばし、

ふかき情欲の暗流、

やゝもすれば水面をうらぎる、

かくて一日にいくたびか干満する潮のさまを、

ひとりしづかに見つむる我を思へ、
時には涙を流し歎息をもらし、

髪をかきむしりてこの海を見つむる、

わがたよりなき醜さすがたを思へ。

*

我は泉のほとりに立ちてつるべを落とす、

つるべは深く入りて少しも答なし、

かくて我は碎けたるつるべを青草の上に投げ、

絶望のためににがき唾を吞む。

*

神學にあかるき學者も、

わがうちにあるこのいとのかさへ知りたま

はず、

いろ／＼の戀の歌を作り、

感情をもてあそぶ詩人等も、

このいとに觸れんとはしたまはず、



靈

潮

佐藤 清

わがたよりなき羞耻はぢのこゝろは、

おん身の前にふるひつゝあり、

いはんとせし言葉はゆくりなく姿をかへ、

いはずともことはおのづと口を走る、

ハンケチを落さんとするたくみはあれど、

羞耻はぢのこゝろは手の筋肉きんにくをかたくせり、

あはれこの椽側えんがはに立てるふたりも、

庭もその上の空も夕やみも、

豆腐賣のいさましき聲も鐘のひびきも、

見るがうちにかはり果つべし、

されどわがたよりなき羞耻はぢのこゝろは、

おん身の前にふるひつゝあり。

つひにこゝを去る日は來れども、

おん身はつひに來らざるなり、

我はくるしみて諸手もろてをねぢり、

荷物にものの上につめたき涙を流す。

我のごとくおん身を愛せしものありや、

耶蘇と保羅との女性觀

内ヶ崎 作三郎

一

昨今我が言論界に於て、婦人問題が著しく社會の注目を喚び起すやうになつた。多年の間、吾人が期待して居たる機運が到來したのである。重なる雑誌が、婦人問題の爲めに臨時號を出すやうな一般の傾向を示してゐる。吾人は此の機會を捉へて、この重大な、興味ある問題を論じて見たいと思ふ。

今こゝには、猶太教より、基督教に推移する時代の婦人問題、殊に基督及び保羅が如何に婦人問題を解釋したかを論じて見たい。

古來何れの野蠻人も女性の神を崇拜した。何となれば、多くの未開人は、自然の神は女性の神であると思ひたが故である。大地に種子を播いて、幼芽が萌へ出る、これは大地なる自然の力が、生命力を賦與するが故である、恰度人類の母がその子に生命力を與ふると同理であると考へたのである。それ故に此の世界、此の大地は萬有に生命を頒つところの「母の自然」であると思ひたのである。天照皇大神を始め、埃及、カルデヤ、バビロニヤ、印度、希臘、羅馬等にも多くの女神が崇められてゐたのである。殊に希臘にはジュノー、ヴェーナスの女神を始め、最も多くの傳説的女神を有してゐた。その他何れの國にありても、太古人類の崇拜の中心は女神であつた。かくの如く神としての女性は、頗る偉大なる勢力を有してゐたが、人類としての女性は、その勢威甚だ振はざるものであつた。例

近世の科學と文學をおさめ、
人を人とも思はぬ若き婦人等も、

この微妙なるいとに觸れたまふことなし。

あん身は英語を知らず、

音樂を知らず、

科學、哲學、文學、何も知らず、

さはれあん身のわれに來るや、

全く心を傾けて、

まづこの見えざる心のいとにさわり、

さわりて之をうち、うちてやまず、

あん身のわれに迫り來るや、

わがうちのいとは高く鳴り低くひびき、

全身に靈の流動を起す、

かくては靈はもゆるほのほとなり、

もえ出でんとする肉の芽生をやきつくし、

小宇宙のかなたへ行くべき道をてらす。

*

わがいきの力にも堪へざる羽蟲、

はた／＼と赤き羽をひるがへし、

電燈の笠のめぐりを飛びめぐる。

わが靈と同じ靈はそこに働き、

何をかあこがれ、何をか願ひ、

はては燃ゆる思にくるへるごとく、

はげしく羽をひるがへして飛びめぐる。

見るまに羽蟲はわが靈のなかに迷ひ入り、

わが靈は燃え、苦み、さわざ、

熱き湯を手にとりけるごとし、

羽蟲はやがて電燈の笠の上に死に、

わが靈はうなだれてわが前に眠れり。

然る後婦人にその水を飲しむべし……」と記してある。かくの如く婦人に對する猶太人の法律は極めて寛大であつて、婦人の權利を保護することに努めたと言はなければならぬ。翻つて歐洲の歴史を見れば、かの最も進歩したる文明を有すとせられたる英國すらも、十九世紀の初頭に至るまで、死刑に相當する罪科が二百二十三を以て數へられたといはれてゐる。例へばテムス河上に渡せる橋梁の極小部分を破壊しても、死刑に處せられたのである。これに比すれば猶太人の婦人に對する態度は比較的に進歩したるものであつた。

二

降つてダビデ、ソロモンに至りて、妾を畜ふことがあつたが、彼等とても決して、そのことを以て道德的なことだとは考へなかつた。彼は詩篇のうちに幾度か、自己の弱き良心を責め、天に對して自己の罪の宥しを哀願してゐる。今より三千年前の王者であつて、しかも自己の罪惡の爲めに、動哭して天にあはれみを請ふといふやうな眞情の麗しき發露は、他の國の歴史上に見ることのできない實例である。彼等は女犯の罪を作つた。しかしその衷情絶えず良心の苛責に苦しめられてゐた。その流露は千古不滅の大詩篇となつて、彼等が哀韻悲調を永久に訴へてゐる。

その後、猶太民族が囚へられて、バビロンに移され、再び祖先の國に歸り來りし頃は、その國民道德の標準も昂められてゐた。舊約馬拉基書の第二章第十四節以下を見れば、「汝らはなほ何故ぞやと言ふ、それはエホバ汝となんぢの若き時の妻の間にいりて證をなし給へばかり、彼はなんぢの伴侶、汝が契約をなせし妻なるに汝誓約に背きてこれを捨て。エホバはたゞ一を造りたまひしにあらずや、されど

へば希臘文明は哲學者として、ソクラテス、プラトーン、アリストテレスを出し、詩人としてホーマー、エスキラス、ユウリビディーズを出し、その政治家にペリクリース等を出したるも、何等異常なる女性を出さなかつた。

然らば、當時希臘と相並んで進歩してゐたる猶太の文明に於ける、女性の地位は奈何。舊約全書中には、隨分畜妾等の風習が行はれてゐたことを示してある。しかしこれは數千年以前の記録であつて、直ちに今日の道德の標準を以て、律することはできない。しかし、それでも希臘、羅馬の文明に比すれば、婦人に對する觀念が餘程進歩してゐたやうに思はれる。その法律制度の中に婦人の味方となつて、婦人の權利を保護したる形跡が遺つてゐる。

民數紀略の第五章に、今より三千數百年前の風俗習慣が録してある。その中に結婚したる婦人が、その夫の爲めに貞操を疑はれたる場合に、これに對する裁判の方法が書いてある。もしこれが當時の他の國であつたならば、婦人は一應の審問もなくして、火刑或はその他の慘刑に處せられたに違ひない。然るに猶太に於ては、その場合に夫婦の者が、神を祀る祭壇の前に来りて、水を掬むて飲むといふことになつてゐる。即ち「夫その妻を祭司の許に携へ來り、大麥の粉一エバの十分の一をこれが爲めに禮物として持きたるべし。その上に油を灌ぐべからず、また乳香を加ふべからず、是は猜疑の禮物、記念の禮物にして罪を誌えしむるものなればなり。祭司はまたその婦人を近く進ませてエホバの前に立しめ、瓦の器に聖水を入れ、幕屋の下の地の土を取てその水に放ち、其婦人をエホバの前に立せ婦人にその頭を露さして記念の禮物すなはち猜疑の禮物をその手に持すべし。而して祭司は詛を來らするところの苦き水を手に執り……祭司其禮物の中より記念の分一握をとりて之を壇の上に燒き

れば何でもないのであるが、當時の思想界に在りては、耶蘇の此の男女觀は、偉大なる發見と言はなければならぬ。彼は男女一體である、齊しく神の形によりて作られたものであるとした。それ故に、故なくしてその妻を去るものは、妻をして姦淫せしむるのであると言つてゐる。此點については馬可傳十章一節より十二節までを參照すべしである。

歐羅巴に於ても、實際に婦人の位置が認められて來たのは、十九世紀のことである。上述のごとく耶蘇の婦人に對する態度は公明正大であつたが、基督教會の所説は必ずしも、常に耶蘇の婦人觀を實行することはできなかった。單に婦人問題に關してのみでなく、その他、あらゆる精神的方面に於て、基督教の團體は必ずしも、耶蘇の精神を完全に實現することに於て成功しなかつた。蓋し耶蘇の精神は一朝一夕にして、實現せらるゝが如き單純なものではなかつたからである。こゝに基督教會と基督教或は耶蘇自身の宗教とが、一致しない場合が生れて來るのである。基督教を難ずる人々の往々にして陥り易き誤解は、耶蘇の精神そのもの即ち基督教と、基督教會とを同一視することである。耶蘇の精神は千古不磨の眞理を藏むるにしても、不完全なる人間の團體たる教會は、必ずしも永遠の生命や、眞理を表現し、或は實證するものではない。缺點多い人と人とは集つて、打ち建てた教會が、大天才の耶蘇自身の精神を常に實現せんとして之を果すことと十分なりしは止むを得ないことである。吾人はたゞ歩一歩、彼の精神に近づかんことを欲する努力を失はないのである。

彼得をして、「爾は眞に神の子基督なり」と叫ばしめたる耶蘇は、全人の表現であつた。彼が男女共に平等の人格を有すと認むると同時に、彼自身のうちに男女兩性の二面を洞察するだけの同情があつたのである。彼一身を見るも、如何に彼が男女兩性の美點をのみ著しく本具してゐたかと察せられる。

も彼にはなほ靈の餘ありき、何故にひとつのみなりしや、是は神を敬虔けいけんの裔すえを得んが爲めなりき。故になんぢら心に謹み、その若き時の妻を誓約にそむきて棄るなかれ……」云々。これを以て見るも猶太人が二千數百年の昔に在りて、既に相當の尊敬を婦人に寄せてゐたことが了解せられる。

上古に於ける猶太國民の婦人觀はこんなものであつたが、なほ一ツ猶太婦人自身が、自重自尊の刺戟を傳説の上に持つてゐた。それは即ち救世主の出現である。古來猶太には早晚必ず救世主が生れるといふ傳説があつたのである。國民はその日の來らんことを望み、婦人は救世主を生み奉るの光榮を得んことを希ふてゐた。隨て婦人自らが、自己の尊嚴を自覺してゐたのである。ヨセフの妻マリヤの如きも、その一人であつた。このマリヤが耶蘇を生むだ。世界の太文學なる新約全書はこの耶蘇の降誕を以てその第一ページを飾つてゐる。

三

新約全書殊に四福音書を繙けば、所在に耶蘇と當時の婦人達の間の記事が発見せられる。ヤコブの泉の側にて耶蘇と語つたサマリヤの女。或は耶蘇のエルサレムの傳道の間、彼れを慰め事へたるベタニアの姉妹なるマルタとマリヤ、殊にマグダラのマリヤは、故と賤業にたづさはつた婦人であつたが、一度耶蘇を師と仰ぐや、彼女の全人格は一新せられた。耶蘇が囚へられて、その弟子等が四散するに方りて、克く一人踏み止つて、彼の最期を認めたのも此の女であつた。その他耶蘇の復活を発見したのも婦人であつた。耶蘇の爲めに衣を縫ひ、且つ濯ぎ食を調へたるものも婦人であつた。

耶蘇は男子に人格を認めたと同時に、婦人や嬰兒の裡にも、人格を認めたのである。今日から考ふ

時は其首を辱しむるなり、此は薙髪と一にして異ふことなし。……」と言つて、隨分女を抑へ附けてゐるやうに思はれる。この方面から見れば、彼は頗る保守主義の婦人觀を抱いてゐるやうにも思はれるが、これはその時代と場所を考へて見なければならぬ。元來コリントは殷賑を極めたる港であつて、その市街は淫風に冒され、その婦人は貞操の何物たるかを知らないやうな、蓮葉な女であつた。それ故にコリントの女に對しては、さすがの保羅も驚いたに違ひない。そこで彼は、コリント港の女性に向つては、飽くまでも男子の後に隨ふべきことや、謙讓の徳を強ひたのであつた。保羅は止むを得ずして、斯やうな教訓を遣つたのであらう。その證據には他の部分に於ては、彼は頗る進歩したる婦人觀を抱いてゐたのである。例へばエペソ書第五章二十二節以下には「婦なる者よ主^{つま}に服ふが如く己の夫に服ふべし、蓋キリスト教會の首なる如く夫は婦の首なれば也、キリストは身の救主なり。然ば教會のキリストに服ふ如く婦も凡のこと夫に服ふべし。夫なる者よキリストの教會を愛し其爲に己を捨給ひし如く爾曹も婦を愛すべし」と教へてゐる。パウロに従へば夫婦兩者の關係は教會が基督に於ける如く、有一無二、しかも神聖なものであつた。或はエホバと猶太民族の關係が、男と花嫁のそれであつたのである。使徒行傳第十六章を見れば、保羅が小亞細亞に傳道したことが録してある。彼が更にヘレスポンド海峡を渡つて、歐羅巴の地に足を踏み入れたことは、かの波斯のザアクセスが百萬の大軍を率いて希臘遠征の途に就いたよりも、より以上意義あることであつた。保羅の此の行がなかつたならば、基督教が歐洲に入り、更に米大陸を経て新敎の形式に於て東洋に傳へらるゝことも、後れたに違ひない。ヘレスポンド海峡を渡つて、第一に彼が得たる、歸依者は婦人であつた。即ちパウロは「安息日に我儕邑をいで河の濱なる常に祈禱をする處にゆき、坐して集れる婦女等に話しに、紫布を售ふテアテラの

一面から見れば彼は果斷にして實行の精神に富み、燃ゆるが如き熱情の改革者であつた。當代の偽善、虚偽、邪惡の徒に向つては「神の國は近づけり悔ひ改めよ」と獅子吼した。同時に彼の如く人を憐み、神の意志に一身を委ね、悄然としてゲッセマネの花園に祈り、從容として十字架上の死を選みたる、彼の態度は悽慘なる女性美の發露である。彼は恰かも廬山の如く、人々の觀察する立場を變ふるに従て、色々に見られる。或は猛者の如く、或は纖女の如く、彼の性格は理想的全人格を代表してゐる。羅馬教會の僧侶の一團が師として彼を崇むると同時に、その尼僧達も彼の像に跪いて一向專念に彼を渴仰した。僧侶達は耶蘇の女性的性格を強く意識し、尼僧達はその男性的靈覺に盡さざる慰藉の泉を掬んだことであらう。

近頃基督教の教理に關して論争が起つて來たやうであるが、吾人は基督教の根本義として、耶蘇の人格を高調し、或は承認することを忘れたならば、眞の基督教はこの國には成り立たぬかも知れぬ。耶蘇の崇高なる人格に觸るゝ時、初めて男女共に、忍耐、勇氣、謙遜、敬虔、信仰の美德を與へらるゝのである、耶蘇は男女兩尊主義を教へたのである。男女兩性が互に責任を感じ、男女が互に他の補足者であることを自覺する時に、婦人問題が解決せらるゝのである。女子に對する要求は、男子に對する要求であることを確信し、相提携して人類の進歩の爲めに努力すべきである。

四

然らば保羅の婦人觀は奈何。哥林多前書第十一章には、「凡の人の首はキリストなり、女の首は男なりキリストの首は神なりと爾曹が知らんことを願ふ。凡て男は首に物を蒙りて祈禱をなし或は豫言する

女子の立場より見たる婦人問題

田 中 久 子

一

撰んだ題は『女子の立場より見たる婦人問題』と申すのでございますが、これは如何にも大きな問題であつて、一般の女子を代表しての立場から、論ずる力には中々ございませぬ、寧ろ女子の片割である『私』の見たる婦人問題』と申す方が適當でございませう。それで私が常々此の問題に就いて、感じて居る處を二三申上げて見やうと思ひます。

婦人問題は近來我が國に於いても、『新しき女』と云ふ名のもとに、頻りにやかましく研究されてゐますが、なかばは嘲笑罵詈の中に葬られて居ることは残念な事であります。

婦人問題は實に大きな問題であります。人類のなかばを占むる者が婦人であるならば、此の問題は女子にのみ限られたものでなく、無論男子にも

大きな關係のあるもので、即ち人類の問題であります。然るにこれを眞面目に考へる者が少なく、多數の人々に依つて嘲弄されると云ふとは、如何なる譯でありませうか。

私の考へますのに、是は多くの場合、新しいと云ふ意味を間違つて解釋して居るのではありますまいか、即ち一部の女子の或る誤つた行爲を見てあれが新しいと誤解したのではありますまいか。

多くの人が此の問題に就いて云ふ處を見ますと先づ第一に良妻賢母主義に合はぬ故に、新しきを要求する女を悪いと申しますが、私は其の點に於いて既に誤つてゐると思ふのであります。

世の中は過去數十年の間に於いて、長足の進歩を致しました。鳥の如くに空を翔ることを夢と思つた時代は既に過ぎて、今日では何人もそれを怪しむ者はありません。實に世の中は凡べての方面

邑の商人にて神を敬ふルデヤと名くる婦さゝゐたり、主その心を啓きてパウロの語ることに心を用しめ給ふ。かの婦其家族と偕にバプテスマをうけ求て曰けるは、爾曹もし主を信ずる者と我を爲ば我家に來り留れと強て我儕を入らしめたり。……」と錄してある。またパウロの書翰を讀めば、當時既に女執事があつたことが知られる。テモテ前書第三章十一節に「女執事も亦端莊して、人を誇らず、謹みて凡のこと忠信なるべし」云々とあり。パウロの精神も、イエスと同じく婦人の味方であつた。

五

これを要するに、耶蘇、保羅は常に婦人の味方であつて、婦人の擁護者であつた。

太古時代に於て猶太民族の如く婦人の權利を尊重した國民はなかつた。何が故に基督教を日本に傳ふるの必要があるか。幾多の理由があるであらうが、其の主なる一ツの理由は、婦人の權利を擁護せんが爲めである、徹底的に婦人問題を解決せんが爲めである。基督教は實に婦人擁護の地位に立つて來た宗教である。基督教は無論男子に傳ふべき宗教であるが、同時に女子に傳ふべき宗教である。吾人は常に高き理想を叫ぶ、しかもそれは單に愛の勝利を實現することによつてのみ成さるゝものである。而して愛は常に男子をして女子を尙ぶことを知らしめ、女子をして男子を敬すべきことを教へてゐる。煉獄の頂より詩人ダンテを天堂に導きたるは純潔なる天女ビアトリーチエである。ダンテがビアトリーチエの顔を見つめてゐる間に、不思議なる力によつて天堂に達したと彼は神曲天堂の卷の序文に記してある。婦人が救済せられざる所には男子の天國も存在しないのである。婦人の地位が高めらるゝ時に、個人も、家族も、國家も、眞に高めらるゝのである。婦人の進歩發達は男女の利益である。

奇矯な行爲をした者も澤山あつた、少しも珍らしいとはない」など、云うて新しいと云ふことは、奇異な言行をする者と誤解する様になるので、これは實に淺薄な、寧ろ男子の不見識を公言してゐるものではありますまいか。

斯のやうに折角男子の方が、此の問題に就いて研究されても、少數の外は眞率を欠いて居り、たゞ一部を見て、此の問題の眞意を理解せぬ者が多いやうに思はれるのは、まことに残念なことであります。

二

斯く申したところで、私は所謂新しき女と呼ぶ處の者を辯護する者ではございません。私は今日此の重大な問題を、斯く誤らせた原因も、大きに彼等の責任であると思つて、同性の身として寧ろ誠にあきたらず思つてゐるのでございます。

併し兎に角、女子が文藝の方面だけになりと、新生面を開かうとした其の勇氣には感服して居りますので、私はもつと盛にやればよいと思つて居ります。

然るにまた斯う云ふ事を申す人があります。

「女子が文藝の方面に出やうとして居るのは、誠によろしいが、小説なり何なり、其の書いて居る處のものが悪い」と斯う申すのであります。併し是は女子ばかりではありません、男子の書いて居られるものも、同一の色合であります。斯くの如きは社會の罪で、女子のみを責めるとは出来ません。今日の女子に對つて、男子を超越せよと望むのは、大望に過ぎはしますまいか。是は男子自らを責めなければなるまいと思ふのであります。兎に角、女子が文藝の方面にだけなりと打つて出た勇氣だけは社會にもこれを買つて頂き度いと希望いたします。

併しながら、其の爲して居る處を見ますと、どうも眞に此の問題を解釋して居る者とは思へません。少數の人は知りませんが、多數はやはり時代にかぶれて、譯がわからずに自覺なしに動いて居るやうに見うけられます。

徒らに奇矯の言行を弄して、識者の反感を買ふと云ふ事は、決して眞に自覺ある婦人のする處とは思はれません。大事を前に扣へた人の行爲とは

に著しい進歩をして居ります。何が進歩したのでありませうか、とりもなほさず、人間が進歩したのであります。男子が進歩したのであります。男子が日進月歩の姿で進歩して行く時に、何故女子にのみ、古きに歸れと強ふるのでありませうか。

人を造る者は、男子にあらずして女子であります。古き者に新しき者を造れと申しても、それは不可能な事でありませう。男子が此の儘ズン／＼進歩して行くに、女子のみが此の儘に踏み止まり、若しくはあとへ歸ると云ふのであつたならば、兩者は到底融合する事が出来ぬばかりでなく、今日假に良妻賢母と云はれて居る者も、今後何年かの新しき世の中には、良妻賢母たる資格を失つて仕舞ひませう。新しき男子を造る女は古き女でなく、これを新しき女に求めなければなるまいと思ひます。

故に私は男子の身として、古くなれと女子に強ふる者を不見識であると思ひます。況して女性の身として、それらの人の説に盲従して、今更古きを稱へて古きに歸れと絶叫する者があるに至つては是また沙汰の限りと云はなければなりません。

何となれば、古いと云ふ事は退歩で、新しきは進歩を意味するものであるからであります。私共は退歩する人間であり度くありません、どうしても進歩する人間であり度いと思ふのであります。

或る人はまた斯う云ふ事を申します。歐米では婦人を尊敬致します。女尊男卑の國さへありますけれどもそれは表面で、内面にはいれば、反つて夫婦喧嘩が多いとか、日本では外面では僕の如く妻に荷物を持たせて、御供のやうに歩かせたりして虐待するやうであるけれども、家庭では中々よくしてやる、優しくしてやる、何も今更西洋人の真似をして、此の上生やさしくしてやる必要はないなど、申しますが、是は實につまらぬ他愛のない事で、是では髪形の着物の着方で新しがつて居る女の人思想と大差ない事になります。思想の自由と云ふ事は、戸を開けて貰つたり、手を取つてくれたりすると云ふやうなつまらない事ではありません、其處にはもつと深い意味が無くてはなりません。

そのやうな次第ゆゑに、「かやうな者は打捨て、置けば消滅する」とか、「昔は獨身の婦人はあつた、

人科小兒科を扱つて居るのでありますが、其處では醫員も看護婦も、凡べて女子ばかりで、獨身の女子ばかりではありません。ドクトル某と云はれて居る人でも、一見唯の婦人と少しも異ならないやうに見うけられます。それでゐて、どんなにむづかしい大手術でも、皆その人たちがやつて居るのです。そして出産の如き件で、どんな難産であつても、百人の中九十九人までは、決して母體を殺すことはないと言言して居ります。

専門の事ばかりでなく、また彼等が社會改善の方面に力を盡して居ることは、實に驚く可きもので、殊に英國の如きは、アルコールに對する戰、公衆衛生のこと、兒童保護のこと、貧民救助のこと、凡べてに女子の力が働いて居ります。

英國で死亡率が少なく、一般衛生が進歩し、犯罪者の數が減少して行くのは、皆婦人の力に依つてゐると云はれて居ります。

婦人が新聞を持ち、雜誌を持ち、俱樂部を持つて居ります。人は一個人で仕事は出来ません。何か事件が起れば、俱樂部を利用して活動するのであります。

これらの仕事をする女は、今日ではもはや單なる女でなくして、誰か即ち Somebody になつて居ります、中性になつて居ります、其の存在を認められて居ります。

佛國のビエール・ド・クルヴェンと云ふ文學者が英國に遊んで後に云へる言葉に、「英國の婦人に依つて初めて、眞の人道主義の精神が見える。彼等は貧と惡とに戰ふことを天職と心得て居る」と、こんな事を云つて居りますが、實に面白いことであると思ひます。

米國の女もまた同様であります。丁度桑港の大地震のあつた時の事でした。私は當時對岸のオー克蘭ドに居りました。地震のあつたのが朝の五時頃、また起き出てぬ中の事でした。何しろ今まで地震のない國と云はれて居た處でありましたから人々の驚きは非常なものでした。一時間の後には黒煙天に漲ると云ふやうな實に恐ろしい有様で、オー克蘭ドに居た者は、桑港は全滅したと思ひましたのですが、あとで聞けば、桑港では大陸が滅亡したと思つたさうであります。其の時直ちに立つて。其の救濟策を講じたものは、オー克蘭

受取れません。

それは唯枝葉の問題で、目的は他にあると彼等は申しませうけれども、世間の多くは枝葉を見て判断するのでありまして、目的は自ら枝葉にも表はるゝ處が無ければなるまいと存じます。

在來の陋習を破ると云ふとは、宜いものであります。しかし進歩は徒らなる破壊ではなくして、やはり陋習を破るのと同時に、より善きものを新たに建設する處が無ければなりません。仕事をする者には、もつと自尊心が無ければ、成就是むづかしからうと思ひます。この點に於いて私は、今日の所謂新しさを標榜する人たちに同情する事が出來ぬのみならず、そのあやまつた行爲に對しては誠にあきたらず、口惜しく思ふのであります。

それならば何うしたら此の問題の解決がつかませうか。

私は眞に自覺した婦人が多くなり、女子がもつと實質に於いて勝る處がなければ、到底口や筆で何程論じましても、此の問題の解決のつく時期は無からうと思ふのであります。

それに就いて、私は二三私の見聞した實質ある

英米婦人の活動振りを御話いたしませう。

三

今日婦人問題の尤もやかましいのは、英米の二國であります。御承知の通り、英國では參政權問題で非常な騒ぎをして居ります。米國で英國程の騒ぎの無いのは、彼等にもつと自由があるから米國の或る州では、もはや女子が選舉權を持つて居ります。

一寸聞いた處では、如何にも非常識なやうに思はれ、滑稽なやうにも思はれるのですが、彼等には眞にあれだけの事を要求するだけの實質があるので、到底吾々が兎や角云つてゐる様なものではありません。若し彼等の仕事の一端を見る事が出來たならば、實に無理ならぬ事だと、うなづかるのであります。

英米では、女子の教育が非常に盛で、無論女子に對して、男子同等の大學教育を許して居ります。従つて醫學、科學、經濟、文學、殆ど各方面に女子と雖も活動して居ります。

ニューヨークに一つの婦人病院があります、婦

ると云ふ大騒ぎを致した事がありました。そしてその人たちは、遂に一致して、肉を使はぬことになりました。こんな事はいかにも下品な馬鹿らしい事の様な話でありますが、女子でも中々馬鹿にされては居らぬと云ふ事になるのでございます。丁度一昨年の事、ニューヨークで一千人の仕立屋の女工がストライキを起した事がありました。それは生活の程度が上つて、到底今の給料では生活が出来ぬと云ふので、増給を請求したのが原因です、處が元々僅かな給料を貰つて生活してゐた人達ですから、俄に收入の道がなくては、どの様な事になるか、或は品性の墮落でも招いてはと云ふので、此の救済策を講じたのが、ニューヨークの交際社會の婦人達でした。莫大の金を出して、これらの女工達に資を給し、充分心置なく雇主との戦の出来る様に致しました。斯うなつては最早社會政策上に女子の力が用ゐられたので、中々悔り難い勢力を示して居ります。

四

其の他つひ此の頃までも 或る婦人雑誌には、

盛に小學教育の欠點を論じて居りました。時々教室の設備などに就いても、女子が立派な意見を新聞などに載せて居りますが、實に彼國に於ける女子の勢力は忽がせになりません。さういふ女たちは既に實質に於いて、社會の或方面には無くてならぬ者になつて居ります。充分に自己の權利を要求する資格があるのであります。

然るに、今日の我邦の女子は如何でありませうか。實際に日々の生活の衛生法にだけでも、どれほど注意してゐるのでせうか。私が久しぶりて歸朝致しまして、可笑しく思つたのは、彼の春秋二季の大掃除でありました、政府は何が爲めに何月何日に掃除す可しなどと命令されなければならないのでせうか。女の身として男子から、しかも政府の手をかりて掃除を命令され、おまけに疊は斯くかく致すべきこと、何々は云々と一々指圖を受け、其の上に巡查に見て貰はなければ安心が出来ぬとは、いかにも可笑しい事であります。おまけに巡查の検査が樂ですから、一寸して置けば宜しいなど、申す聲を聞きますが、何と云ふ意氣地ない事でありませう。掃除は人の爲めにするのでは

下の交際社會の婦人達でありました。一二時間の後には、第一教會に集まつて善後策を相談し、部署を定め、桑港の各停車場に出張して、先づ第一にサンドキツチと水とを、罹災人に供給致しました。一部の人は直ちにミシンを借り込んで、衣服を與へる事に奔走致しましたが、それは實に目覺ましい活動振りでありました。

・ ニューヨークは港であります故に、船舶繁く其のたびに澤山の水夫が、下町の不潔な飲食店などで不潔な快樂を食ります。それを憂へて或る金満家の令嬢が、私費を以て水夫の爲めに飲食店を開き自ら指揮して、水夫等を健全なる方法で楽しませやうと熱心に働いて居りますが、これも面白い仕事であると思ひます。

數年前から、小學兒童の御辨當の問題が、起つて居ります。それは貧乏な家で、親が皆稼ぎに出て居る家では、子供が晝に家へ歸つても、御辨當を充分に食べる事が出来ない。亦普通の家庭でも、五錢十錢を與へて御辨當を買はせる、すると子供達は、衛生に害のある不良なパンや菓子を買つて食しますので、學校で御辨當を食はせると云

ふとを、或る學校で初めました。この仕事は矢張り女が致して居ります。つひ此の程も前々大統領のルウズベルト氏が、或る貴婦人の招待を受けてこの種の學校を參觀し、兒童等と共に學校の二錢の御辨當を食べました。豆のスープにサンドキツチであつたさうですが、誠に清潔で味も宜しく、米國で二錢と申しては、殆んど只のやうな安價であります。其の御辨當を食べて、一弗の御辨當よりもよかつたと申したと云ふ事が一ヶ月程前の新聞に出てをりました。誠に結構な仕事ではございませんか。

それから亦 Purefood 即ち、純良食物を使用する爲めに起つて居る團體があります。これは一部の人の不徳の爲めに粗惡な食物を賣りますのに對して出來たもので、先づ日本で申せば、混砂米の如きものに反對して、それを用ぬ様にするのであります。トラストなどの爲めに時々麥が上つたり肉が上つたり致します。丁度三年程前に肉が非常に上つたことが御座いました。其の時に面白いと思つたのは、町の角などにお内儀さん達が集まつて、林檎箱の上のつて、其の不徳を輿論に訴へ

大思想家の婦人觀

う ち が さ き

吾等は家庭に於て、婦人を安全ならしめ、且つその處に彼等を抑留せんと試みる。しかし婦人と小兒の爲めに、社會を安全ならしむることは、未だ吾等が考へなかつたことである。

シャール・ロット・パーキンス・ギルマン

如何なる人も幸福の全體の總額を掠奪せらるべき理由はない。一人が若し排斥せられ、或は制限せらるゝ間は、萬人は道德的に苦しまなければならぬ。しからば婦人の壓制、抑壓、禁制によつて、人類の上に加へらるゝ損害は如何に大きなものであらう。

ウォルステンホーム・エルミイ夫人

もしも再び子供の世界に生るゝを得ば

小ひささ妹とこそあらまほしけれ。

デヨルヂ・エリオット

自らを愛するは、生涯の華想の端緒である。

オスカー・ワイルド

過去の偉大なる心靈の上に積み重ねられたる悲哀の山と比較すれば、吾等の日常の些々たる試験は如何に小なるかな。

イー・キヤーデイ・スタントン

ありません、自己を保護するのであります。自分の家の掃除すら出来ぬ者に、何で公衆衛生などを云々する資格がありませう。

また今日の婦人のうちに、自分の子供の教育されて居る學校教育の欠點を認めて、其の改善策を考へて居る者が何人ありませうか。

活動寫眞が悪いと云ふ事を男子から教へられ、そして自分の子供の爲めに、どうして健全な娯樂を興へやうかと考へて居る人が何程ありませうか。

一部の人の不徳の爲に米價が驚く可き騰貴をなしてゐる時に、女子はどんな策を取りましたせうか。混砂米を悪いと知りつゝ、何日まで此の儘これを食べてゆくのでせうか。

同性の女工の問題は、どれ程女の心を刺激しましたでせう。

何の自覺もなく、唯奇矯な言行をなして、得々として居ると云ふ事は、いかにもつまらぬ、たあいのない事で、まだ中々前途が遠いと思ふのであります。

それゆゑ何の問題が起つても一向平氣で、男子

から婦人問題を提出され、研究され、そしてなほ對岸の火事程にも感じません。あまつさへ女子自ら女性を呪つて、古くならうなど、云つて居るのは實に不見識な事であります。

私は此の問題は男子の解決す可きものでなくして女子自ら解決す可きものであると思ひます。

それには女子たる者は、何れの方面でも宜しい文藝には限りません、美術でも、科學でも、社會改良にでも、何にでも充分實質を滿たす餘地があると思ひます。

まだ中々斯様な事で、新しいなど、云ふ事は出来ません。

向後の女は、もつと／＼新しくならなければなりません。

確固たる信念を持ち、自重しつゝ、飽かざる努力とを持つて、善良なる意味に於いての新しさ、即ち進歩を望まなければなりません。

要するに、實質に於いて女子の地位が上つたとき、（上げて貰つた時ではありません）自ら上つたとき向上した時に、初めて此の問題を解決されるであらうと思ふのであります。

我が友よ、然らばその理想の都會に於ては、婦人として考察せられたる、婦人に獨特なる役割はない。また男子として考察せられたる、男子にも何等の役割もない。しかし天賦の才能は男女の間に、何等の區別なく行きわたつてゐる。婦人は天性あらゆる役割に參與するの能力を有つてゐる。男子も亦同じである。

ブラトール

國民の生活狀態を改善する方法と、手段は、吾等に近づけり。今や吾等は黨爭の遊戲を捨て、眞實なる勞作に従事すべきである。

カノン・バアネット

強きあこがれを持ちて、より高き事物を目がけて向上せよ。愛は主として、此の目的の爲めに與へられ、刺戟せられ、認容せられたのである。

ロバート・ブラウニング

世には先づ頭を支配して、心に下る愛がある。此の愛の成長は遅い。しかしそれは、死に至るまで連續して、常に少なく求めて、多くを與ふるものである。世にはまたこれと異なる愛がある。その愛は全き智慧を抹殺する、その愛は生の甘さと共に甘く、死の苦しみと共に苦いのである。その連續や一時的である。しかしその愛は、その一時の爲めに全生涯を生きるだけの價值がある。

オリブ・シュライナー

その境遇の利益多かりしにかゝはらず、如何なる婦人も未だ嘗て、人心の記録に於て、一新紀元を

永久に支配せんとする壓制者を恐るゝ勿れ。

または邪惡なる信仰を司る僧侶をも。

彼等はあらゆる川の縁に立ちて、その波をば死の色をもて染めつくしたり。

シエレー

寔に悲しきことは、吾等が老いたりといふ事實にはあらで、吾等は最早や若からずといふことである。

アレクザンドル・デュマ

信仰なき勞働的煩悶は、幾千の人を殺したであらう。

ゼ・ダブルユー・フアーカー

女は充分に發達し能はざる男ではなくて、全く異なるものである。

テニソン

改革が必要であるか、そは汝を通してあるか。汝の要求せる改革が大きければ大きいだけ、それを成就せんが爲めに、汝の要する人格も益々大きくなければならぬ。

ワルト・ホイットマン

婦人は演繹的思想の習慣を獎勵し、且つ生存せしめたることによりて、科學に對して、無意識であるが、大きな貢獻を効した。

ヴアツクル

愛の歴史は、人類の歴史である。それを描かば麗しき書となるであらう。

ノーティアー

あらゆる偉大なる善良なる生涯は、ガルバリの丘にのみ、その最期を見出すことができる。

ブランド・アルレン

龍は猛、毒蛇は奸。

しかも婦人は兩者の惡心を有す。

ナジエンツムの聖グレゴリー

されば吾々をして、子孫に富を遺すよりも、徳を遺すことを考へしめよ。

マツチーニ

如何なる男子も、キリストよりもまざりて、婦人を尊びたるはなし。婦人を尊敬せざるは、吾等の大なる誤謬である。婦人は吾々の奴隸にあらずして、吾々の仲間でなければならぬ。吾々の心美の向上は、婦人の愛すべき伴侶に頼らなければならぬ。

イスラエル・ツアングキル

愉快チアフルキスの力は驚くべきかな。

カアライル

婦人の同情より、あらゆる同情が導き出される。

ホイットマン

もし婦人は實驗的、神話的、及び神秘的の方面をのみ考ふることを教へられ、男子はこれに反して科學的、合理的、積極的の方面にのみ考ふることを教へらるゝ時には、男女の間には深き溝渠が横り、男子は終に苦しまなければならなくなる。

ノヴィコフ

割するに足るだけの發明をなしたるものはない。

パツカアル

もし多くの人々が、彼等の衣類と家具の半ばを捨て、その骨董品を美術館に寄託するならば、人生は一層單純なものとなり、彼等は閑暇の意義を味ふやうになるであらう。

イー・キャアー・スタントン

吾等は、吾等の順番に於て、父たり母たる時のみ、吾等の父母が吾等の爲めに、盡したることを學ぶのである。

グラント・アルレン

多くの人々が、生理的に、道德的に、また智識的に不幸なる状態にあるは一部分は結婚が概して純粹な選擇と傾向とにあらずして、あらゆる種類の外部的考察や、偶然なる事情等の結果であるといふ事實によつて説明せらる。

シヨツベンハウエル

東洋人は婦人の悲哀と薄弱とを説明する爲めに、イヅと林檎の傳説と、女性の上に宣言せられたる呪詛の神話を發明した。しかし婦人のかゝる缺點は、神の怒の爲めにあらずして、實は男子の造れる境遇と習慣の結果である。

エドワード・ペラミイ

苟くも女は、貧富貴賤を問はずして、一個の心靈である。而して教會の敷石が睡せらるゝが如く、女は男から睡せらるゝことがあつても、かの女の心靈は、彼の女にとりては、祈の家である。

ブラウニング夫人



靈魂の花 藤井夏人

すべて此の世に存する物の中、

形ありて美なるものゝ望みより

わかれ行くべき日のありとせば、

いかに我が魂は寂しからむ。

一切の理想を幻影と爲し果てむも悲しきに過ぎ、

我が靈魂の齡は永劫に若くして、

管に空界の妙音に酔はむとのみ希へり。

然れども、ありとある現世の事事は、

凡て皆是れ形の美に伴ひて

我が魂の花咲く常春の温室なり。

ロベリアの夢

むらさきの緒の鼓のおもてに

君が細き小指をふれたまへば、

青きロベリアの花片は

はらはらと亂れ散るぞかし。

なにごとく胸におさめて口に包めども、

觸れて散る花のありとせば

咲く花を待ちて戀ふる命あり。

おもしろく響く命のしづくに打觸れて、

おかしく狂ふ我が魂こそは

獨りかこつ嬉しさに舞ひ踏るなり。

散れども散れども盡さぬ青きロベリアの花片を

夏の夜の花園に、

生の酒にゑひながら、心ひそかに夢見たまへかし。

平等主義が男女の間に設立せらるゝ瞬間から、男子は婦人の御機嫌を取り、婦人が男子に媚を呈する必要は、直ちになくなるのであらう。

エドワード・ベラミイ

自由の爲めのあらゆる改革運動が、婦人の勢力を喚起したることは、注目を値する事實である。

マアガレット・フルラー

婦人の麗しき眼と、額とは、心理的性質に基く。殊に、そは母より遺傳したる智的性質に基くのである。

ショツペンハワー

婦人の道德界に於けるは、なほ花の物質界に於けるが如し。

エス・マレシヤール

あらゆる何れの村にも殉教者がある。何れの町にも地獄の家がある。清く麗はしき天使のごとき婦人の心は、呼び鈴の音を聴くごとに斷腸の思をいだく。

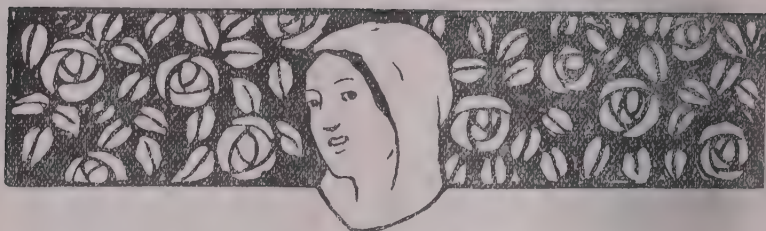
ウィリアム・ステッド

婦人が堂々として、行列を作つて、男子と同じく濶歩するところに、婦人が公の集會に行つて男子と齊しく席を占むる時に、最も強健な母なる婦人達の住むところに、そこにこそ偉大なる都會は存するのである。

ワルト・ホイットマン

婦人は桎梏を味ひたる最初の間であつた。婦人は奴隸の存在せざりし以前の奴隸であつた。

オーガスト・ペーベル



トラウブ論

三 並 良

批評家を有する國家は、甚だ幸福であると思ふ。若し國家の爲す所を何事でも御無理御尤で通すやうになつたならば、國民も駄目である。昔から諫臣朝に在らざるべからず、野に預言者なからざるを得なかつたのも、これが爲めである。宗教でも同じとである。何時までも同じ状態が續くのは、結構なやうではあるが、周圍の文明は日々に變つて行く、内には停滯が生ずる。さうかうする間には、腐敗も起らう、時代遅れにもならう。之を最も先きに感ずるのは、神經過敏な預言者であつて、當局には中々さう早く覺れるものではない。であるから、神經家と云はれやうが、不平家と嘲けられやうが、預言者の人物が出て、時代に反抗しなければならぬ。反抗は時代の聲である。進化發展の薰りである。

獨逸の宗教界を見渡すと、彼の教會と稱する組織的のものうちに、如何なる生命ある信仰が漲つて居るかは、吾人門外漢には一寸批評が出来ない。否せよと云へば出来ないともあるまいが、それが果して正鵠を得たものであるかどうか、分つたものでない。然し吾人が近時の獨逸教會の有様を見て驚くのは、

聖路加病院

白き椗の花のかをり來たる六月の初め、
 緑青の午後の空は

精神病者の獨白にも似て物狂しきかぎりなり。

濁れる堀割の水は白白しらしらと初夏の風に搖れて波立ち

築地の午後の物憂さは、徐ろに渦卷きつゝ、

聖路加病院の裏庭を過ぎ行けり。

斜めなる光りを窓の硝子にうけながら、

獨り病みて悶ゆる褥中の婦人は、苦しき中にも

死にゆく者の爲めに嘆かるゝ

隣室の物音に耳を傾けむとはする。……

黒き繻子の尼たちは、臨終の魂を

金きんの十字架と共に瞑目の天上にあぐり、

哀願の祈りは微かにひびきて、此處のドアに音づ

れ來る。

數知れぬ藥品の臭ひに埋れた空氣のどよみは、
 薄暗き廊下の彼方此方より流れつどひて、

何處よりともなく病室の壁上にさ迷ひ現はれ

青褪めし婦人の一息いきごとにゆれ動きて、

果てしなき幻想のフィルムを魂の奥底に寫映し出
 さしむ。

窓掛の隙間より、洩れてさし込む黄ろき光が

蠟石の如く細々ほそこと心なく惱ましく投出なげだしたる腕かひなの
 上に接吻するさまも傷しく、

眸は慘として絶望の夢に溺るゝ如く、

川口の汽笛は、すさまじく響き來りて呪ふのろが如く

あはれかくて、六月の聖路加病院の窓下さうかには今や

人知れずさざめくふたいろの人生の悲劇あり。

(一五七三・六・二三の夜)

これを二學年の間續けてやつたので、造詣甚だ深いものがあるやうになつた。然らば彼れは何故こんなことをしたかと云ふに、それには大に理由がある。現代は總べての點に於いて、大變革が行はれつゝある。基督教と雖、この變化に對し、無關係であるわけには行かない。否、基督教がこの變化を容れるか、この變化を指導するの勢力があるかどうかと云ふとは、その死活問題になるのである。若し基督教がこの變化に處して指導的の位置に立つの力がなかつたならば、之を代表する教會なるものは時代遅れの組織體となり、之を人體に比して云ふと、恰も扁桃腺か盲腸のやうなもので、在つても何の用をなすものか分らず、時々はこれがあるが爲めに反つて恐るべき害を生ずるものになる。然らばその變化と云ふのは何であらうか。その一は經濟上より來る社會の變化で、詳しく云へば、個人的資本主義と勞動の社會的組織との交渉より生ずる改革である。他の一は益々發展し來る自然科學の影響によりて生ずる世界觀の革命である。若しこの改新の時機に當り、指導者の位地に立たんとする者あらば經濟學なり、自然科學なりに就いても深い智識がなければならぬ。

さう云ふ時勢を洞察したものであるから、トラウプは大學に通うて經濟學を研究したのである。であるから今日獨逸の牧師のうちで神學と經濟學とを結合して議論を立てる者のなかに、トラウプの如きは實に錚々たるものである。従つて彼れの著作もこれに關係したものが随分ある。雜誌に載つた論文では「唯物的历史觀の批評」「政治と倫理」「労働組織の人格に及ぼす影響」「カトリック敎的社會主義の理解と批評」「労働と労働の組織」「プロテスタント的基督教と労働組合」「社會的生活」「資本主義」「宗教と社會主義」などである。そしてこの最後に擧げたものは彼れが伯林であつた自由基督教の大會でなした演説である。然し彼れの研究は雜誌の論文ばかりではない、書物にもなつて居る。それは「倫

異端者の輩出するのである。否、教會が異端者と稱して征伐する所の牧師の多いとである。けれども吾人は、この異端者が惡人であると云ふのではない。教會から異端者と稱して征伐せられるものが、豈に計んや、實は預言者であつて、教會の信仰を維持もすれば、進歩もさすものである。

吾人は曩にヤートー牧師のを紹介したが、此の牧師を説いた上は、どうしても筆硯を新たににして、その親友トラウプ牧師の身の上が話して見たくなる。トラウプは、ヤートーと殆んど同心一體のやうな態度を取つた。それでとう／＼プロシヤ國教會から免職されてしまつた。何等名譽の上に缺點がある譯でもないのに、恩給までも剝がれてしまつた、かう云つた所で、譯が分るまいから、少しくトラウプとは如何なる人であるか、そして如何なる神學を有する者であるかを説いて見やう。

二

トラウプ博士の問題は、一昨年彼のヤートー牧師が免職になつてから後、爆發したものである。この時彼れは、ドルトムント市のサント・ライノルデー教會の牧師をして居た。その以前彼れは、哲學、神學を以ては天下に雷名を轟かし、その大學と、シュルリングやヘーゲルや、またはバウルやリッチュルとは切つても切れない關係を有するチュービンゲンで、大學講師を勤めて居た。僕が毎々云ふやうに、近世の思想界を改革し、これを發展せしめた豪傑は、チュービンゲンより出づる森の香氣を嗅いだ者に多いとは、世の定評であるが、トラウプも正に此の系統にはいつて居る。

恰度彼れがチュービンゲン大學の講師を勤めて居た時の頃である、彼れは一方では再び學生カバンを小脇に抱へ、學生として大學通ひを始めた。それは經濟學の講義を聽く爲めであつた。そして彼れは

感想文とでも云つたやうなものを、彼の嘗ては牧師であり、今は政治家であり、著述家であり、そして思想家としても有名な國家社會主義を採つて居るフリードリヒ、ナウマンの機關雜誌「ヒルフェ」に多く掲げた。之れが集められて「求むる靈魂の叫び」とか「神と世界」とか言ふものになつて居る。その他彼れは「クリストリッヘ、ウェルト」の寄書家たり、又「神學批評」では常に社會學に關する著書の評論を擔當して居るが、彼れ自らも千九百五年より「クリストリッヘ、フラルハイト」即ち「基督教の自由」と題する週刊雜誌をドルトムントで發行して居る。さうして見ると彼れは講演に著述に實に多忙であると云はざるを得ない。而も此の筆と口とに於て彼れは信仰の自由を稱へ、儀式的に、又教義的に枯死しつゝある舊派基督教に對し、之れが革新の必要を論ずるものであるから、どうしても當局者や、保守派の忌諱に觸れざるを得ない。そこで保守派の者どもは彼れの講演や著述に多忙なるを見て、是れその眞の義務たる牧師の職を怠るものである、と云つて告訴の理由とした。然しながら實地を調べて見ると、彼れが曠職の譏りを受くべき理由は少しもないとが分つた。彼れは筆硯多忙のやうであるけれども、これが爲め決して職務に不忠實などはない。否な普通の牧師以上のとをやつて居る。教會の時から一人々々の顧問となつて色々の指導を與へるとやら、何から何まで彼れはその牧する教會の爲めに充分の力を盡くして居るとが證明された。

然しながら是れ固より彼れが告訴を受けた一理由に過ないもので、彼れが異端者であると云ふのが、その主要の理由なるとは云ふ迄もない。けれども彼れは千九百十年に至る迄は餘り當局の注意を受けたりとはなかつた。唯だそれ迄には彼れの復活祭日の説教の教義的内容が不穩當であると云ふと堅信禮に規定の式文即ち使徒信經の加へあるものを用ゆべしとの注意を受けた計りであつた。然るに千九

理と資本主義「牧師と社會問題」など云ふものがある。然し彼れは他の一方即ち世界觀の方も等閑にして居る者ではない。僕は彼れの演説を伯林とケルンとで一度づゝ聞いた。ケルンではヤート博士と同市の郊外フローラ公園で催された大會に行つた時のとであるが、博士は僕に告げて、トラウブ牧師は宗教哲學に於ても極めて深い造詣を有つて居る。牧師をしては居るが、大學教授のうちにてさへ、彼ぐらゐる宗教哲學的識見を有つて居る者は少くない、と敬服の意味を添へて云つた。けれども此の方面に於て彼れは未だこれと云ふ著述をしては居ない。と云つて論文などがない譯ではない。例之「基督教及現代倫理」「神」など云ふものもあり、又彼の英國で有名な、そして今岡信一良君が邦語に譯されたキャンベルの「新神學」の獨譯にトラウブが序文を書いて居る。この序文は本文に比して甚だなが過ぎる、そしてキャンベルへの *Einleitung* (案内) となつて居るが、獨逸ではさうではない、トラウブへの案内だなど、批評する者がある。それは兎も角として此の序文でも大に彼れの宗教哲學的意見が窺はれる。その外には彼れが辯護人として法庭に立つたヤート事件が落着し、ヤートは免職となつた時、彼れは大に憤慨して小著「國家基督教か國民教會か」を出して居る。又「宗教歴史的國民叢書」の中に、彼れは「新約聖書に於ける奇蹟」を書いて居る。これ等でも彼れの宗教哲學的意見は窺はれる。

三

然るに彼れは牧師として實地の任に當つて居る。之を以て説教集も出て居るし、又獨逸語で云ふ *Andacht* 即ち説教としては短かいし、それならば祈禱であるかと云ふに、さうでもない、まづ宗教的

彼れは固よりこれに服せずして上告をした。然るに最後の法廷たる普國高等教會參事會は昨年八月二十七日彼を懲戒免官に處し、且つ恩給をも與へないことにした。是れ實に彼れの爲めに最も不名譽の判決である。そして獨逸の見識ある社會はこの不法なる判決の非を鳴らして居るが、地頭と鳴く子には勝たれないとの諺に漏れず、誰れも今に彼の判決を顛覆することが出来ない。然しトラウプの本領はこれから後ちになつて益々現はれ來るであらうと期待されて居る。

然らば彼れは如何なる所説を有つて居る者であらうか。是れ吾人に取つては更に興味ある問題である。けれども惜しむらくは多數の餘白なき本誌で充分之を述べることは出来ないから、唯だその一端を窺つて見たいと思ふ。

四

個人主義と資本主義、是れ近代の世界を一變せしむるものである。然るに世の人々は之を悟らず、依然として舊式の道德や宗教を墨守せんとする。是れ衝突生じ、煩悶生じ、不平生じ不徹底の生ずる所以である。中古時代の道德は封建道德である。歐洲では教會が總ての支配權を有して居たから、教會が人類を教育するもので、國家は自然的倫理法則の生む所のもので、家庭や、職業や平和などを維持する勢力であると考へられて居た。即ち教會や國家は總ての人々の權威であり、首長であつて一舉手、一投足皆なその名命に服従するの義務あり、人間の最高目的は欲求を最少にして、平和に生存し衣食し、子孫を繁殖せしめ、云はゞ天下泰平、子孫繁昌と欲望なく常に神を直觀してその日を送ることであつた。プロテスタント主義が起つて此の中古道德を打破するやうに見えたが、さし當り大改革

百十年以後、即ち彼の異端者法律なるものが制定せられることになつてから、彼れは之をプロテスタン
ト主義と相容れざるものとなして極めて猛烈に攻撃した。そこで當局の忌諱に觸れるとも亦た益々烈
げしくなつた。特に彼れは先づ第一に彼の異端者法律によつて罰せられたヤートルの辨護者として法
廷に立つた。この法律は前に云つたやうに彼れが主義上よりも最も悪んだものである。ヤートルは彼
れの畏敬する親友である。その上彼れは法廷に於てヤートルの偉大なることを眼のあたり實驗した。彼
れがヤートルの葬儀に當り述べた弔辭のうちに「彼處（即ち法廷を云ふ）に於て余は未だ曾て斯くも明
かに見ざりし所のものを觀た。これは則ち自由と神の前に於ける良心の偉大なる勢力とである。ヤート
ルは彼處に於て自分の爲めに戦うたのではない、彼れはプロテスタント教者の團體の名譽の冠とすべ
きと、即ち神に關する事柄に於ては、唯だその自己の良心にのみ責任を有すといふとの爲めに戦つた
のである。然るに官廳はこの名譽の冠を斥けた。この體驗は余が全精神的發展に一大刺戟を與へた。
このとに就て余は大に死せし人に感謝せざるを得ない。余は彼の日以来我等兩人を綜合せしめた認識
を有つて居る。認識とは則ち福音と基督教とは二種の異つたものであると云ふとである」斯う云ふやう
な譯であるから、彼れがヤートル事件があつた後ち、益々憤慨したのには大に理由がある。これが爲め
その公憤は彼れの小著「國家基督教か國民教會か」となつて現はれた。そしてその言論、否攻撃の語に
は極めて激烈なものがあつた。それが遂に當局即ち普國の高等教會參事會の忌諱に觸れた。そしてト
ラウプは矢張ヤートルと同じやうに異端者法律によつて裁判せられんことを冀つたであらうけれど
も、當局はこの名譽を彼れに與へず、千九百十一年の十月十日彼れを懲戒裁判に附することに決定し
た。そして第一審法廷なるブラウンシェヴィヒの宗務局は昨年三月十五日彼れに懲戒轉任を命じた。

ブが研究し努力する所は實にこの點である。そして彼れはその研究の結果を「倫理と資本主義」に於て公表した。此の著述は獨乙の學界では大に賞讃せられて居る。然らば彼れは如何なる結論に達して居るか。

もう一度この問題を明白に云ふと、資本主義は倫理に到達することが出来るか、又反對に倫理は資本主義に到達するとが問題である。トラウブは樂天家である、又理想主義者である。兩者の一致すべきとを確信して居る。而もこの立論が甚だ徹底して居る。それは彼れが宗教家であるからである。何故と云ふに、無宗教の功利主義から見たならば、勞働や資本は利益や幸福を齎らすと云ふであらうが、而も人生最後の利益、目的、否な絶對的の目的は何であるかと云ふだらうか、それは答へるとが出来まい。また無宗教の理想主義も徹底したものではない。何となれば彼れは精神的價値の増加や、之れに必要な物質的、經濟的基礎の製造などを根本思想にしようけれども、それは未だ人間の靈魂と世界の根本との關係に満足な説明が與へられて居ないからである。トラウブは進歩主義、進化主義者である。彼れは進化、發展を以て神の先見に出たものと信じて居る。個人主義や資本主義は矢張りこの進化、發展の途上に現はれたものである。それが人間の倫理的、精神的本質と調和しない筈がないと考へて居る。私有資本主義の時代は個人主義及び人格思想の發展した大時代と一致して居る。アダム・スミスの稱へた資本主義とカントの人格思想とは時代に於ても亦た内容に於ても相并ぶべきものである。又資本主義は宗教革命の宗教的個人主義に繼いで起つたのみならず、それと内的連絡がある。唯だこゝに如何なる連絡があるかを正しく洞見するものが大切である。抑もプロテスタント主義から云ふと、倫理の本質は何であるか。これ心の自律によつて動き、意志の全體を纏めんとする人格で

はなかつた。軍人あり、僧侶あり、百姓あり、職人ある一定の組織ある社會の制度は少しも動かかなかつた。然るに聖書の道德に基いた制慾主義と消費を最低度にするとは自然に資本の蓄積を來たらしめ、此の虚に乗じて財利を唯一の目的とする者を生じた。然るに近世に至り聖書に教へられたる制慾主義は益々振はず、教會の權威は輕蔑せらるゝが爲めに、こゝに近代の經濟思想も一變し、資本主義が勃興するやうになつたのである。然るに一方を見ると同時代に、他の發展にも未曾有の出來事があつた。是れ自然科學や工藝の發達である。個人主義も亦た此の時に發展して、個人的責任や生活の形成を説いた。移住の自由、職業の自由、世界的交易、世界的市價、國家及び社會の俗了、自然法的並に宗教的首主主義の打破、法律的に定められたる階級廢せられて、常に移動する階級など新事實が續々生じて來た。而してこれ等の新事實も、決して彼の資本主義と内的關係がないわけではない否な大にあるのであるが、彼の個人主義と資本主義とは殊に近代の特徴を發揮せしめた。それは即ち彼の自由競争である。そして此の自由競争に於て進歩運動、精神的なるもの、善なるものゝ發展の最大動力を認めた。斯くて人間は自然の爲めに餘義なくされ孜孜として勞作し、此の勞作によつて自然を超越せんとする。是れ實に現代の特色である。

斯う云ふやうに時代は移り變つた。倫理はこの現實の狀態を如何に支配し行かんとするか。是れ實に大問題である。然しこの變つた狀態は事實に於て、社會に實行されて居るとて、千差萬別である。決して机上の空論を模型に當て嵌まるべきものではない。之を以て此の新たな形を取つて來た現代を觀て、倫理を立てんとする者は、先づ現代の社會的、經濟史的、國民的並に世界的經濟の智識を有しなければならぬ。そして派せず黨せず公平な判斷を下すとが出来る者でなければならぬ。トラウ

會が催された時に「吾人が我が基督教的信仰のうちに、ある汎神教的傾向を決して奪ひ去らしめざりしは、是れ此の事件の與へた宗教的利益である。歴史上大なる運動の生じた場合に、これが基礎を準備したものは、常に所謂汎神的神秘學であつた。今日吾人は最早嘗てルッテルが何處からその思想を取り來つたかを忘れて居る。それは獨乙宗教團體の無名な一人の書いた小冊子「獨乙神學」ではなかつたか。……そして百年以前普國が勃興し、屈辱を蹴いだした時に、フィヒターの如きシュライエルマッヘルの如きアルントの如きが、普國を強大したものは何であつたか。それは誤りのない教義、否な要するに教義と云ふべきものではなかつた。シルレルやゲーテ、ヘルデルやレッシングによつて我が獨乙國民の心に銘せられた汎神教的理想主義であつた」と云つて居る。けれどもこれはワイネル教授の批評する如く全然正鵠を得た議論ではあるまい。然し今日の人々は高大なる自然より深き印象を受けて、どうしても之を敬虔なる感情に化せざるを得ない傾向を以つて居る。トラウプは實に時代のこの潮流に觸れて、之を宗教哲學的に説明せんとするものである。従つて是れ聽て彼れが時代の人心を得る所以である。尙ほ一つ彼れが現代の青年の心を動かす所以のものは、形而上學、殊にカント哲學の勃興と徑路を共にし、神に關する思索に多大の勞力を費やすからである。而してその中心問題は必ず、惡は何故に此の世に存在するかと云ふとである。トラウプは何を論じても、きつとこの事に論及して居る犯罪者は何故にあるか、惡は何故に惡を生むか、神の國は機械や鐵道、電信など、關係して發達するか。是れ疑問の存する所で、このとに就て説明を得んとして居る。けれどもその説明が如何な方向にあるかは資本主義の問題によつても考へられるから別に詳しい解説を試むる必要はあるまい。

尙ほ論ずべきとは幾らもあるが、餘り長くなるから、他日の機會を待つとにする。

ある。此の人格はその意志の内容を神より得、又その力を耶穌に現はれたる神の恩恵によつて得るのである。然るに若し斯くの如き倫理思想がなかつたならば、經濟的勞作は繁昌する事が出来ない。何となれば、經濟的勞作は責任を知り、勤惰な、そして注意深い、又互に他の人格を尊敬する個人を基礎としなければ、到底永久的に良結果を得るとが出来ないからである。斯く考へると資本主義も倫理がなくては到底存立するとの出来ないものである。又資本主義は貨物を増殖し、低廉ならしめ、又勞力を輕減せしむるを以て、眞に倫理的なる人格を養成し得るの餘裕を與へ、國家、藝術、學問の爲めにも盡力する事を得しむるものである。けれども若し私有資本主義が全體の幸福を度外視すれば、それは元來は自殺である。而も彼れ之を覺らざれば、之れに教へて全體の爲めに盡くさしめなければならぬ。これ實に現代に於て資本が社會化しつゝある所以である。即ち私有資本主義が社會資本主義となる所以である。之を基督教的倫理の立場から見ると、こゝに愛の思想が實行せられつゝあるのである。さうすると、どうしても根本は矢張世界の元勳者たる神に歸着せざるを得ない。凡そ斯う云ふやうなのがトラウプの根本思想であらうと思ふ。固より彼れは之を事實によつて辯明して居るが、これをこゝに述べるとは不可能である。

五

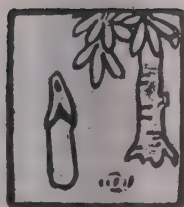
ヤートーもさうであつたが、トラウプの神觀にも亦た汎神教の匂ひがする。けれどもこれは無神論や、唯物主義に終る方向を取つた汎神教でなくて、獨乙の神秘思想の取つた汎神的傾向であつて、これによつて神の信仰を深くし力強くするものである。トラウプは嘗てヤートーの爲め伯林に於て大集

マケイの話が出たから、序にてエレン・カイの先祖の事について、少し話して見やう。スコットランドの北方に、サバランドといふ地方がある。其處には今でも *Mc Key* といふ一族がある。エレン・カイの先祖は、此のマケイ族の一人である。マケイ族の或者は、三十年戦争の時に有名なグスターフ・アドルフの下で戦つた。An Old Scotch Brigade なるものは、之等の連中を以て出来上つたものである。戦争が済むと、彼等は瑞典に移住した。エレン・カイの先祖ゼームス・マケイも其一人である。瑞典に來ると、蘇格蘭特有の *Mac* は其意義を失ひ、*Key* となつてしまつた。其と同時に、ケイといふのを瑞典流にカイと呼ぶ様になつたらしい。さて、此ゼームス、カイの曾孫にフレデリック・カイといふのがあり、其がノルデンフリヒトといふ詩的天才のある人の後家様と結婚した。其間にカール・フレデリック・カイといふのが生れた。所が此人は御母様の先夫ノルデンフリヒトと同じく、藝術的天才を持つて居て非常の讀書家で、且つはルソーの崇拜家であつた。エレン・カイは此事に就て人に語つて、「一體全體、女が二度目に結婚すると、其時に出来た小供は、前の夫に似るものである」と言つた。之はエレン・カイが始めて發見した眞理ではなくして、畜産などに従事して居るものなどが能く心得てる所である。馬のめすとおすとを組み合せるときは、馬方はめすの馬が其以前にどう云ふ馬と組み合せられたかを研究する。兎に角此カール・フレデリック・カイはルソーを愛讀して居つたため、其子をエミールと名付けた。エミール・カイも亦同じく文藝に興味を持つてゐた。此エミール・カイの息子がエレン・カイの父である。エレン・カイの先祖、マケイの家の御紋は拳に劔を持つてゐる所を書いたものである。其通りに先祖代々武張つた人が多かつたのである。エレン・カイもどちらかといへば、膽汁質の人である。多情多感の人ではない。併し中に一脈の詩情を有つてゐる所は右に述べたる事情から、生れ

エレン・カイの思想

原 口 竹 次 郎

吾輩がまだ獨逸に居る時に、一獨逸人が吾輩にこう云ふことを言つた。吾等獨逸人はなるべく、外國人の名を正當に發音せんと力めるのに反し、英米人は吾等獨逸人の名を、兎角英語讀みにせんとする傾向がある。ルツターをルーサーといひ、メランヒトンをメランクソンと呼ぶはまだ宜しいが、かの有名な音樂者セバスチアン・バッハの名をばーちといふに至つては、滑稽の度を通り越して癪に障る様に感ずると。此頃エレン・カイといふ名が、ちよい／＼日本の新聞雜誌などに見られる様であるがエレン・カイといふのは、エレン・カイの名の間違ひであらう。瑞典產の閨秀著述家にエレン・カイといふ人は居るが、エレン・カイといふ人は居らぬ。併し乍ら、學者揃ひの六合雜誌にも、エレン・カイと見えて居つた所より見れば、或は吾輩の發音が間違つて居るかも知れぬ。なれども吾輩の知つて居る獨逸人は、皆カイと發音した。又吾輩は獨逸に居る時に、瑞典から來て居る女學生たちにも交際して居つたが、彼等も亦一樣にエレン・カイと發音した。只米國に於てエレン・カイの思想の傳播に力めてゐるミス・サンダースのみは、カイといふ様に發音した。併し其は *Key* を英語讀みにしたものだらうと想像する。兎に角、僕はエレン・カイと發音する方が正しいかと思ふ。尤もエレン・カイの祖先が、まだ蘇格蘭に居るときには、マケイと言つたものださうだ。



僧院生活の記録

相 原 介 一

函館から乗つた小蒸汽船で、對岸の漁家の十數軒もある石別といふ村についたのは、かれこれ正午近くであつた。東道の主となつて呉れた村長氏と共に、烏賊を路の兩側に乾してある海村を通りぬけて行くこと十數丁ばかりで本道を棄て、右手の熊笹の生ひ茂つた丘に登る。廣々とした野原に出た。原は一面に軟らかな牧草が心持よく延びて居る。牧草が盡きて一段高くなつた所に、目ざすトラビスト僧院が聳えて居る。海上からは山中の紅一點位にしか見えなかつたが、近づいて見ると可成り大きな建物である。幽邃な深山を背にし、蒼々たる海を隔て、遠く本州を望んで居る。山中の一僧院といへば、如何にも物寂びた古色蒼然たる建物を聯想するのであるが、赤煉瓦の堂々たる姿は、妙なコントラストである。この對照は却

つて一種の寂寞感を惹き起させる。山麓の小さな僧院附屬の建物の戸を叩いて、村長氏が××君と尋ねる。一向返辭がない、鶏がしきりに餌をあさつて居る。多分上の僧院だらうと思つて登る。僧院の本堂には、祈の聲も聞こえずに、晝靜かである。本堂の左側ペンキ塗木造の建物を訪れると、一人の小倉服をつけ、ズングリ太つた丸顔の五十前後の漢が現はれた。村長氏が下の家で尋ねたのは、この男であつたらしく、心安げに話して居る。八月末の暑い日が、ぢり／＼と照りつけるので丘を登つて來る時は、汗が流るゝ程であつた。通された一室から見下すと、津輕海峡が眼下に展けてゐて、白帆點々たる彼方には、港頭の砲臺が日光に輝いて居る。風は海から室の中に涼味を持つて來る。この建物は、本堂とは全然獨立した接客

出て居るものだらうと人はいふ。エレン・カイの父は最早生さてはゐない。彼は進歩的思想を持てゐた政治家であつて十六年間も瑞典の下院に議員として働き、其間に新らしき黨派を拵へ其領袖であつたが、どちらかと言へば、餘り進歩的で重味に乏しかつたといふ評判がある。兎も角も、彼は政治家で通することが出来なくなり、郵便局長として晩年を送つて居つた。エレン嬢の母は、所の貴族から來たので夫と同じく、矢張り政治に興味を持つて居り、村に貧窮人の小供預所などを拵へて、村の爲めに盡したといふ話である。

歐羅巴の思想界は、近年一向に振つてゐなかつた。併しスカンデナヴィアのみは稍々生色があつた評論家にゲオルグ・ブランデス（猶太人）あり、劇詩家にイブセンあり、ビョルンソンあり、小説家にラゲレーフ（先年ノベル賞金を貰つた婦人）あり、論文家にエレン・カイがゐる。若し夫れ近時歐洲に於ける、最も有名な閨秀著述家論文家と言つたならば、エレン・カイであらう。然れども彼女は、或人々がかつぎ上げんとする程其程えらき思想家ではない。又日本の或人々が想像して居るが如くに、突飛な思想を抱いてゐる人では尙更ない。其は余が次に紹介せんとする婦人能力の亂用（*Missbrauchte Frauenkraft*）といふ書物を見れば直ぐに分る。否彼女は彼女の思想が、餘りに保守的であるといふので、所謂進歩派の人々に手強く非難攻撃せられてゐる位である。

(つゞく)

側は相對して、修士の坐席となり、樺製の大きな見臺に、二尺許の大きな祈禱書が一部宛のつて居る。坐席に次いで、兩側に一段高い塔がある。僕は一通り院内を見廻つた。

こんな大きな贅澤な建物を、斯かる山奥に建て、何のために供するのかは、誰にも起る疑問であるが、彼等の答は至極簡單だ。曰く、修道者は道を修め、ひたすら完全な生活を營まんがため全く世俗と絶ちて此處に入るのである。今さら中世紀の宗教思想、否、カトリク教會の完全生活の理想を述べるまでもない。彼等は斯くして俗塵と離れ、ベネヂクトの戒律を守つて、祈禱と瞑想の生涯を送らんとするに外ならない。彼等はフレンジスコや、ドミニコ教團のやうに、慈善と傳道に従事せんためでもない、またイエスエツトのやうに、教育事業を行はんとするのでもない。若し彼等が社會と相觸れる點を求めるならば、不毛の地を開拓して産業も經營すること、其の勇猛忍耐の生涯が、世俗の人を感動して、奢侈と罪惡とより遠ざからしめる事位であらう。併し彼等の祈

禱は個人的でない。其の祈は現世と闘ふ教會の力とならんためである。かうした彼等の生活は、おのづから二様に分かれる。一は全く祈禱を以つて其の日を送るもので、白衣の修士がそれだ。他の一は勞働を以つて僧院の生活を營む、彼等は褐色の法衣を着けて居る。白衣の修士とても、全然勞働をせぬ譯ではないが、主として祈禱と教理との研究に従ふのだ。

修道者の生活は、夏冬の二季に分れてる。ベネヂクトの戒律に依ると、夏季は復活祭から十一月一日までであるが、土地の狀況に依つて、多少の變更があるらしく、こゝでは九月十五日までととしてある。此の間僧院生活は、凡べて次のやうな日課になつて居る。

午前二時起床

祈禱(夜誦)

二時半

默想

□ 三時より四十分、黎明の祈禱

四時十五分まで、讃歌の祈禱

次に修士各自の目的を以て彌撒を行ふ。

□ 五時半、一時課の祈禱

次に、朝の彌撒

六時半

戒律講義

用の建物で、僕等の通つたのは、談話室兼食堂であらう。これと廊下を距てゝ、凡そ四室ばかりの小房がある。

廳で二人の修士が、接待に出て來た。一人は三十歳ばかりの日本人で、毛織製の白い法衣を着て皮の帶をしめ、木製の靴を穿つ。もう一人は褐衣を着けてゐる。四十五六の外國人だ。共に頗る柔和な容貌で、外國人は和蘭人ださうだが、終始笑を含んだ眼には愛嬌を湛へ、片言ながら日本語を話す。丁度正午といふので、パンと白葡萄酒を出した。本院製のバターも出たが、牛酪臭い牛酪ばかり喰つてゐる口には、變な味だ。白葡萄酒は特別待遇ですよなんかと云ひながら、村長氏は切りに盃をなめずつて居たが、食後まもなく辭して行つた。僕は白衣の修士に導かれて、一通り建物を廻つて見る。

本館は南に向ひ、東西三十三間、幅七間の總二階煉瓦建である。本堂の左端には、翼をなして奥行十二間ばかりの平家が附いて居る。これは禮拜堂だ。本堂に接するところに入口があり、其處に鐘樓が立つて居る。本堂に入つて見ると、北側は

樺で疊んだ二間幅の廊下だ。廊下の壁上には十二枚ほど耶蘇苦難の繪を掲げて居る。額は客室にも掲げてあるが、凡べて受難の繪だ。修士は屢々この畫の前に跪坐して、瞑禱と默禱に沈むのだといふ。第一階の南側は、會議室、圖書室、讀書講議室等種々の室に區劃されて居る。中央は玄關になつてゐるが、等身の美しいマリヤ像が立つて居る。玄關から二階に登る。階上は中央が廊下で、左右は皆修士の寢室である。小さい房室で、入口は黒幕で掩ふ。室内には粗末な寢臺があるばかりだ。入口の壁には、小さい十字架と水壺とが懸つて居る、それは修士が出入するごとに、指を水に清めて十字を切るためだ。本館の最下層なる地下室は倉庫用で自製の手酪を貯藏して置く。一體トラビストに限らず、僧院建築の本式なのは、正方形である。本院も發達するに従つて、其の兩翼を延長するのださうだ。禮拜堂は他の簡單素朴なのに似ず、金色燦爛として居る。入ると直ぐに、ヨセフと小兒を抱いたマリヤの像が立つて居る。正面の神壇には聖母の像を中にして、僧院の祖聖ベネチクトと、中興の祖ベルナードの像とが立つてゐる。中央の兩

は、生涯沈黙の生活であると傳へられてあるが、全然無言の行といふ譯ではない。唯ベネデクトの戒律の嚴格に遵守するに過ぎぬのだ。彼等の徳となすところは謙遜、服従、恭敬である。長上者と雖も、苟くも傲矜な態度は許されない。況んや、諧謔、漫言、哄笑を惹き起こすやうな言語は、絶對にこれを禁じて居る。併し客に接する時、上長が命を下すときは、この限でない。

裏手から本堂の右手に廻ると、牛酪製造所、牛小屋などの建物がある。泉水には、數十羽の家鴨が泳いで居た。牛小屋の裏手に二頭の小熊が檻に飼つてある。裏の山で捕へたのださうだ。牛は牝牝合はせて數十頭居るさうだが、バター製造には到底充分でないので、近くの村人に牛の飼養法を教へ、現今では彼等から毎日六石、一ヶ月に約一千四百圓高も買入れるやうにして居る。勉強な農家では、年に八百圓位賣るのもあるといふ。土地開墾、牧畜、牛酪製造、何れも大事業である。固より修道者だけの手に負へたてでないで、多數の傭人を使つて居る。彼等には地面を貸し家を建て

ゝやり、一人十圓乃至十五圓位の月給をやつて居るといふ。これらの傭人は、本堂からは遠く離れた谷間や丘に沿うて棲んでゐるらしい。

私共はとある深い谿の上に出了た。溪流が幽かな音をたてゝ流れて居る。この谿を渡つて、幅五六間の土橋がかゝつて居る。橋というても溪流を通るやうにして、底から土石を積み上げたので、謂はゞ谷を埋めたのである。フランシスコ君の言によると、初め受負業者に委せて見たが、失敗して引受けないのを、修道者共の堅忍不拔な三年間の勞働によつて、此の結果を得たのださうだ。之は謙遜な彼等の誇の一つであらう。裏の山には、無盡藏の薪がある。冬になると、修士は相携へて薪取りに行く。昨年も薪を負うて歸るさに、院主が雪の上に足を失して斷崖より落ち、爾來病氣勝ちである、フランシスコは憂はしげにいふ。山にはまた小さな瀧がある。間もなく發電器械を据ゑつけて、電力を僧院に供給するつもりだといふ。再び本院の前に立つと、下手の原を三人の修道者が靜かに歩いて行く。彼等は今や自由の時間を得て、海水浴に行くのであらう。海からは絶えず

右了つて朝食、食後は自由の時間

□ 九時半

三時課の祈禱
彌撒

□ 十時半

六時課の祈禱
糺明

十一時

晝飯

恩謝の祈禱

十一時半

御告の祈禱

一時半迄

午睡

□ 一時半

九時課の祈禱

自由の時間

四時十五分前

ロザリオの祈禱

□ 四時

夕の祈禱、續いて聖體降福

自由の時間

六時十五分前

默想

六時

夕飯

自由の時間

□ 七時十分

聖書謹讀

八時五十分前

糺明

八時

休眠

白衣の修士、名はフランシスコと云ふ、甲州の商家に生れ、僧院に居る白衣修道者中唯一の日本人である。日本人の修道者は約廿人居るが、他は殆んど褐衣である。この教の早く廣まつた長崎地

の出身者が多い。さてざつと以上の様な時間割だが、これは勿論、祈禱組に當てはまるものだらう。褐衣の勞働組は、多く外にあつて働いて居るので、祈禱鐘が鳴つても、主なる時以外は、馳け集まるものでなくて、其の場で行ふといふことだ。

上に述べたやうに合同して修士といつても、其の働きを異にして居るが、白衣の修士と雖も、褐衣者を助けて勞働する。本院前の廣々とした牧草の原は、元來深い谷や岨しい丘の起伏して居たのを、修士等が長年月かゝつて、丘を平げ谷を埋め秣草を植ゑて、現今のやうな立派な野原に化したのであるといふ。フランシスコ君は、更に僕を本堂の裏手に導いた。丁度數名の修士は院主の指揮の下に働いて居る。本院の飲料水を給する泉を修理し、之を掩ふに十二間に四間の煉瓦屋を以てせんとするので、もはや半分ほど出来かゝつて居る。

彼等の働くや、鼻歌どころでない、始終黙々として、命ぜられた仕事を設計通りに實行して行く。命ずるのにも、餘り聲は出さぬらしい。手や眼の色で、大抵の意味は通ずるやうだ。一體トラビスト

い西洋人の清い眼の光は、此の子供じみた一隊の中から、私のうけた強い印象である。祈は終つた。夜はほの白く明けはなれた。

けふは日曜で、勞働は休だ。霧はまだ谷間を埋めて居る。食堂に入ると、先刻の學生も見えた。朝飯は眞白い粥である。砂糖をかけて出す。タルジウス君は、之は本院特製の御馳走だといふ、成程甘い。白米一升をよく洗つて、五升の牛乳に仕掛け、程よい火に掛けて絶えず攪拌するといふ料理法だ。尤も修道士は粗食である。併し病氣でもあれば、相當の醫藥もとり、養生もする。粗衣粗食勤勉勞働は、彼等の樂とするところだ。入院する修道士は、無所有、貞潔、服従の三誓を立てる。従つて入院は容易に許さない。我が國の禪林には庭詰、旦過詰から漸く參堂に至るのださうだが、修道院で、新來者を遇するにも、同じやうなことがある。入院しやうと思つて、門を叩くものがあると、果して神より來れる者であるか何うかを知らんが爲めに、精神を試嘗せよとは、彼等の方針である。だから新來者は侮辱をうけて、甚だ忍耐を試みられ、四五日間も其の請願を反覆して、漸

く門内に入るを許される。はじめは客室に通されそれから修練者として、特別の室に入る。其間志願者は、院内の生活を實見して、熟考の餘地を與へられ、僧院はまた充分に新來者を試練して、よく其の適者と認めるものに入院を許すのである。此の間凡そ十ヶ月を要するといふことだ。これはベネヂクト戒律の記すところであるが、我が國では幾分實狀を斟酌してゐるらしい。先刻禮拜室に居た朴直さうな青年も、また正に試練中のものであらう。完全な生活に入るために、全く外界と絶つて、一生を僧院の裏に送らうと決心するなどと云ふことは、何か人生の大きな悲慘事にても遇つたものでなければ起こりさうもない事に思はれるが、天主教の信仰を有し、其思想の中に養はれたものには、却つて最も願はしい事なのであらう。日本人で入院者の多分が、長崎地方からであるのも道理だ。

日曜日は安靜な日である。私は一通り僧院を瞥見した。あまり永居するのも、接待の修士を煩はすばかりと思つて、十時ごろ山を下りた。(完)

涼風が来る。ポブラに當たる日の光も薄らいで山麓や谷間には、霧がこめて來た、やがて夕の祈を知らず鐘になる。私は夕飯を済まして、自分の室に入つた。

僧房の夢やすらかに、山中の静寂が全くこの世を支配した。忽ちけたまひしい鐘の音に夢を破られたのは、正に夜の二時である。いざと起床の身仕度する所へ、コト／＼と戸を叩いて、褐衣の修士タルジウス君が祈禱の始まるのを教へに來て呉れた。外方は全くの暗夜、満天の星は燦として北海の底に映つてゐる。鐘樓の下を通ると二人の若い修道士が、頻に綱を操つて居た。

禮拜室に入ると、修士は一人々々集つて來る。

院主は前方の中央に、白衣の修士は之に次いで、左右の座に著く。褐衣の修士は、後方に退いて坐を占める。後方の一隅には、一人の和服の青年が立つて居る。これは入院志願者であらう。私たちと一人の學生らしい參觀者とは此の若者の前に坐をとつた。聽て全體の合唱が始まる。彼等は朝課より修課まで、凡そ一日七回の祈禱を捧げるので

あるが、今日はこれ以外の夜誦といふのであらう。『吾は夜半起きて主を讚美せん』といふ豫言者の言は、彼等が戒律である。讃歌に次いで、聖詩聖訓唱句を誦歌する。何れも羅典の原文だ。大浪の寄せては返すやうな調、神には榮光といふ言葉のみが強く耳に響く。其の節は甚だ單調であるが一種詠歎の調がある、平生堅く結べる彼等の唇は、此の時はじめて、強い深い音聲を出して歌ふのである。祈禱と讃歌は交々捧げられ、左右の高台上上りて誦するのは、聖訓であらう。神壇には白装した三少年が現はれて、或は燈を點じ、或は香を焼く。やがて一同は起立した。眞先に香盒をもつた少年が來る、次に聖水、次に十字架、其の兩側燈火を捧げて、二人の青年が附き添ふ。十名ばかりの歌士が二列をなしてこれに續く、次に司祭、院長が來る、その後には褐衣の修士共が、二列に續く。この行列は中央の歌誦隊に従つて合唱しながら、禮拜室を出て本堂の廊下を練り歩く。玄關の聖母像を一周し、轉じて講議室に入り、また廊下に出て、もとの禮拜室に歸つた。讃歌を誦する髯長き院主の聲と、十字架を肩にした背の高



潮 思 外 海

獨逸に於ける宗教史の研究

教育と宗教、これは大なる問題である。全然之を分離せしめることが、双方の利益であらうか。さうだとは未だ俄かに斷言することは出来まい。之を分離せしむべしと云ふのは、盲目的の信仰が、宗教を壓迫した弊害を見てから立てた議論である。或は分らずやの教育家が狹隘な議論を振りまはすを恐れて云ふことである。若し宗教が無用の長物ではない以上は、それが人心を支配する非常の權力を有し、人間精神の養成の一大勢力なることを覺つた以上は、宗數を教育のうちに容れて國民を養成するのは、當然のことであらう。弊害を恐るゝならば、既にそれ丈の明察があるのだもの、弊害を除くやうにしたらばいゝではないか。既に宗教局が文部省に合併せられた以上は、この問題の解決も今までとは違つた方針で推行し、教育のなかに、宗教が適當に採用せられたものである。さうでないといふ合併は唯だ外部的に止つて内的或は有機的にはならない。都合上て何時復た内務省へ舞ひ戻らないにも限らない。

併し僕は彼の合併は、それ以上有機的になるのだと信じて居る。三教會合が神耶佛を打つて一丸となす下地だとは思へないが、双

方の理解をよくする傾向を作る機會になりはしまいかと思ふ。第一協會が如何に集會を催うした所で、衆議で新宗教が出来ると思ふ淺薄な考への者はありはすまい。然し種々な宗教觀を有つて居るものゝ會合は、宗教的見識を大きくする功能はあるに相違ない。そこで僕の希望は斯く存在して居る歴史的諸宗教の研究はもつと根本的にやつてもらふことである。一席の演説位では何の役にも立たない。然るに大學ですら歴史的宗教の研究は餘り深く行はれては居ないでないか。無論神道はあらう。印度宗教はあらう。けれども基督教に就いてはないやうだ。その他の宗教はどうであらう。基督教は外國の宗教で、我邦の勢力になつて居ないから、そんなものは研究しなくてもいゝと云ふものがある。まださうかも知れない。しかし歐洲文明は基督教文明と云つてもいゝ、兎に角これは世界的勢力である。この潮流は我邦へも常に流れ込んで居る。外國から來る文學、哲學は勿論のこと社會的勢力は皆な基督教と大なる關係を有つて居る。恐らく今日の青年の頭に這入る思想は、支那や印度に根本を有するものよりも、基督教國に之を有するものゝ方が多いだらう。それならばその根本たる基督教を研

教會歴訪豫告

私達は月々のあらゆる藝術的創作品に對して、權威ある批評を要求すると同時に、また月々の教壇に於ける説教や講演に對しても、同じ程度の價值を以て、眞面目な批評を要求するのであります。この切なる要求よりして、私達は最初の試みとして、都下の主なる基督教會の説教參聽記を、本誌上に掲げて見度いと思ふのであります。私達は、つとめて眞率な態度を持して、教壇界の新らしき批評家たらんことを期するのであります。何れの教會を、何時訪れるか、そんな豫定はいたしません。たゞ風の來るが如く、風の去るが如く、氣の向くまゝに、あらゆる説教壇の前に聽くつもりであります。

藝苑空前の大翻譯

文學博士

文學博士

坪内逍遙先生序
——
森林太郎先生譯

新刊

沙翁

マクベス

四六判ク
ロース製
定價壹圓廿錢
郵税金拾貳錢
裝釘優美
高尚

獨逸文學の泰斗、鷗外博士が最近の研究なる英文學の寶物、シエクスピ
ア翻譯の最初の試みなり。夫れ「マクベス」は、大沙翁が四大悲劇の一と
して、世界的大傑作たることは、贅言を要せず。本書は、原文よりの直
接譯、殊に沙翁文學の權威、逍遙博士は譯者の依頼に應じて、親しく稿
本を閲讀し、特に序文をも寄せられたり。

是れ實に、わが文壇に於ける、空前の舉にして、永遠に模範的翻譯文學
として傳ふべきものたるや論を俟たず。

和田英作畫伯、本書の扉繪、ヘッドボイス等を作製せられ、之に依つて
「マクベス」は、錦上更らに花を添へて光輝あり。

警告社書店

東京
銀座

板元

振替
東京
五五
番三

究するの必要なることは少くとも 西洋歴史や、羅馬法や英佛獨法が研究せられる程度丈けにはあらう。されば宗教だからと輕蔑するものでない。

大分議論が横道へ這入つた。これ丈けのことならば、時評欄でもよかつたのだ。實は僕のこゝに記さんとしたことは、獨乙では世界の諸宗教の研究が甚だ盛んなことである。大學の講義は固よりのことであるが、著述も甚だ多い。そのうちの若干をこゝに報道したいのである。

五年計り以前から、チュービンゲン市のモール書店で *Die Religion in Geschichte und Gegenwart* と云ふ字典が出版されつゝある。それは五巻で完結するのであるが、今迄で三巻丈けは出來て、四巻目がもう少し残つて居る。今年の末か來年の春には悉皆出來やう。この宗教字典のなかにも世界の諸宗教のことが大分載つて居る。殊に字典編纂の方針のうちに「基督教の以外に地球上の諸宗教に就ては、その本質、その歴史的發展が記述せられるであらう。それには之によつて現代の比較宗教史に貢獻したいと云ふ目的がある」と云つてある。そして之を實行するの努力は今迄出來た丈けに就ても大に認められる。

固よりこの字典の中心は基督教である。この範圍では聖書學。

教會史、教義史、教義學、倫理學、辨證學、實地神學、教會法、教會政治等あらゆるものが網羅してある。併しその外に基督教ならざる諸宗教のことも澤山にある。例へば「祖先崇拜」(鍊、金術)「護符」「精靈」の如きがある。殊に古代イスラエルの宗教と交渉のあつたのには、見るべき研究の結果が載つて居り、畫さへ澤山に擧げてある。即ち埃及、バビロン、アッシリヤに關するも

のである。その外にはアラビヤ人、カナアン人、バール、アスダルト、アセラー、アドニス等に就ても面白い記事がある。殊に回々教に就いては可なり詳細の記事がある。

セミチック人種を離れて、印度ゲルマンの方はどうかと云ふに此の方に就いても澤山の記事がある。ゲルマン人、希臘人、ペルシヤ人の宗教は可なり載つて居り、希臘羅馬の世界に於ける宗教混合の状態、そのうちにもアッテス密教や、皇帝崇拜教の如きは特に擧つて居る。印度の方では佛教やシャイナ教のともある第五卷にはヴェータとバラモン教の記事が載る筈になつて居る支那の諸宗教のとも固より擧げてある。字典を離れて著書に就いて見ても随分多數に出て居る。世界の諸宗教の歴史を記したものは、シャンティビー、デ、ラ、ソーセーの宗教史は千九百五年に第三版が出て居り、コンラード、フォン、オレークローの「一般的宗教史」は一昨年から第二版が出版されつゝある。是れ等は一般的のものとして世間に多く知れて居る。又バーゼル大學の教授ベルトレットが他の専門學と協同して出した、「宗教史の讀本」は支那、印度の宗教、ツォロアステル教、回々教に關する經典中の必要なる部分の翻譯から成り立つて居ると云つていゝものである。僕の有する第一版は千九百八年に出來たものであるが、その後度々版が重つて居はしまいかと思ふ。

昨年出たフィビ著「宗教歴史と宗教哲學」は僅か三十頁の小冊子であるけれども、要點はよく摘んである。最後に近年に出た斯學に關する書目が擧つて居るのは殊にうれしい。

前に云つたモール書店は「宗教史的國民叢書」なるものを出して居る。宗教史的と云ふけれども基督教に關するものが無論多い。併

東京帝國大學 醫學博士 永井潜先生著
醫科大學助教授

最新刊

生命論

菊版四百頁
挿畫アート紙
四十餘枚
製本純白布
製天金箱入
定價貳圓五拾錢
送料拾貳錢

生命に關する思想
變遷の跡を釋ね、

生活現象

の特色を細説
而して

最新の科學的見地

に立ちて、之に明晰
なる解釋を下せる者

是れ即ち本書の内容なり。就中、近時驚くべき長大足の進歩を遂げ、理論に實際に尤も重要な地位を

占む 實驗遺傳學說

の如きは實に邦文に於て記載せられたる者の權
與にして、而して又叙述最も力を竭せり。加之

生命人造論と

て全世界の視聽を聳動せしめたる、シエルフアー教授の『生命其性質起源及保續』と題せる講演の全文

を譯出して、卷末に附し、讀者をして錦上更に花
を添ふるの感あらしむ。思ふに生命の解釋は實に

人生の根本問題にして而思想界の

興味の中心

となれり。本書の出て
る決して偶然に非ず。

發行所

東京市東區市麴町二丁目二番四
地番

洛陽堂

電話四二八
番町

熱烈燃ゆるが如き宗教革命の聲

最新刊

巨傑ルテル

丸山小羊君著 ▼ 特價提供

貳千部限り

郵送料共 金四拾五錢

實送 價料 金四 拾六 錢五

- ▲赤貧洗ふが如き一鑛夫の兒より興りて竟に歐洲の天地を震動せしめたる偉人！
- ▲渠「ルーテル」が歌ひ乞食の苦學時代より六拾四年の活波瀾！
- ▲驕傲無比なる羅馬法王を罵倒し謝罪券を責めて九十五ヶ條の宣言書を草し！
- ▲教會のドグマを嘲つて破門狀を群民が面前に焼く！
- ▲狂か亂か暴か魔か抑も亦、神か佛か將た聖賢か！
- ▲著者は是に冠して「巨傑」と云ふ「抑も巨傑とは何ぞや」に筆を起して全篇三十段！
- ▲血涌き骨鳴る快文字悉く是れ時代を覺醒せしむる木鐸！
- ▲請ふ本書を讀破して以て至誠一貫宗教改革の大業を成したる熱血兒の真相を知れ！

振替口座 東京 座七 番四

修養世界社

東京 市善 坊五 區布

發行所

誌 雜 藝 文 純

劇 と 詩

第 四 年
第 八 號

價 廿 八 錢
郵 稅 一 錢

八 月 號

▲ ストリンベルヒ論 (評論) 松田四郎

▼ 雪 (詩) 山村暮鳥

▲ 憂鬱 (小説) 鈴木悦

▼ 緑陰 (詩) 人見東明

▲ 最初の印象 (翻譯) 片山仲

▼ 坪内先生に獻ずる書 (感想) 清浦青鳥

▲ 影と形 (歌) 尾山篤二郎

▼ 女優と舞臺監督 (戯曲) 國枝四郎

▲ 露英に於ける劇場 (翻譯) 村田實

▼ 巧利主義者との對話 (感想) 清浦青鳥

▲ 三味の前後 (詩) 福田夕咲

▼ 毒藥の壺 (感想) 相馬御風

附 錄

▲ 伯林演劇史 (一) 島村民藏

▲ 近代藝術發展史 グレーフエ

發行所

東京 小石川 町 雜司 谷

劇と詩社

社友募集
短歌募集

發賣所

東京 小石川 町 保神 表

東京堂

生 活

回 行
一 日 發

號 號
(第 十 號)

錢 廿 五 價 定
錢 二 稅 郵

本誌前號は發賣禁止のため殘本なし

挿 畫

素描—遂に切れる……………フランシスコ・ペヤ
羊舎に於けるヨハヒム……………ジョツト
惱めるキリスト……………レムブランド
浴する市人……………ドーミエ

記 事

二人及び兄弟(劇曲)……………佐藤惣之助
自己の仕事(感想)……………武者小路實篤
待たれる人(對話)……………木村 莊 八
ボヘミヤンの歌(詩)……………福士幸次郎
牽 引 (小説)……………木村 莊 太
消 息 …………… S.N.R.T.M.

前號はセザンヌの挿畫の爲發賣禁止

發 行 所 東京市牛込區水道町五三番
振替東京四三三七番

日本洋畫協會出版部

内外教育評論社編著(菊判六百廿頁)

增補 文檢受驗指針 七版

▼全壹冊送料共金壹圓八錢▲

文檢試験委員數十家の談話
と受驗合格者數十氏の受驗
談とよりなる本書は受驗者
の大歡迎を受けて茲に増補
第七版を發行す。文檢に應
ぜんとするの士は必ず一讀
せよ

發行所

東京本郷駒込千駄木町
振替東京一二七三〇番

稻毛祖風近藤新一 共(菊判約五百頁)再版

文檢修身教育問題解答

▼全壹冊送料共金壹圓貳拾八錢▲

稻毛祖風著(四六判)増補

若く教育者自覺會

▼全壹冊送料共金五錢六錢▲

内外教育評論社

帝國文學

—八月號要目—

■ 守備兵の話

(小説ビエルロチ作)

後藤末雄

■ 郷愁

生田春月

■ 軸

(小説)

龍居枯山

■ 地獄の序曲

(戯曲・ストリントベルヒ作)

秋山雨村

■ 丘

(小説)

翁久允

■ 御弟子

(戯曲・ムウア作)

千葉掬香

■ ゐもり

中川一政

■ 美術界半年觀

黒田鵬心

■ 七月の文壇

山田檳榔

■ 七月劇壇雜感

灰野庄平

■ 海外騷壇消息

幽絃郎

■ 翻譯に就て

後藤生

—外數篇—

(中附六)

銀座大日本圖書株式會社 振替東京二九一 價半 冊十 錢五十 郵錢 稅 錢一 (共)

しそのうちに一昨年出たニルソン著の「原始的宗教」と云ふものがある。これは表題の示す如く未だ發達の低級にある宗教の状態を記したものである。誠にその目次を挙げると、一、心理的基礎。二、動物及植物崇拜。三、多神教由來。四、人間崇拜。五、墓及靈魂崇拜。六、供儀及祈禱。七、魔術者及僧侶。八、秘密團結及密教。九、神話である。

佛教に就いては、有名なオルデンベルクのものあり、小冊子としては前に挙げた叢書中に、ハックマンのがあつたが、一昨年エドワート・ノートンの *Der Buddhismus als indische Sekte, als Weltreligion* と云ふ二百七十四頁の著書が出た。レーマンはブライデルの後任者として伯林大學神學部の教授になつた人である。彼れの著述には序論として、佛陀の現はれた時代の背景が記してある。殊にバラモン教、數論、ジャイナ派を論じて居るけれども、大部分を占むるのは、固より佛陀にして、その人格、耶穌との比較、佛の教理である。最後には佛教が印度、チベットの

思潮餘沫

▲冥想と活動との問題

近ごろの歐洲思想界が或る一轉機に臻着してゐる事は、人間は活動すべきものだとか、活動のこそ現代の主權者だとか云ふ聲が、新しき人々の間に呼び交はされてゐる一事についても想像することが出來やう。いはゆる「科學の破産」以來、消極的態度よりも積極的態度を、破壊的氣分より

支那、日本に傳つた歴史及び佛教がその成立後間もなく受けた內的變化が記載されて居る。

回々教も亦た研究が怠られては居ない。近年になつて幾等も著述が出た。例之レッケンドルフの「モハメット及び其徒」で、彼れはモハメットの人格やその背景や又はその宗教を記するのみならず、彼れが政治や經濟に及ぼした影響、その戦争や、徒黨や又はその後年の發展をも説明して居る。けれども最も詳細なるものは、イグナツ、ゴルトチーヘルの「イスラム講演」(千九百十年出版三百四十一頁)に之くものはなからう。其他宣教師の手になつたものでは、クラモロートの「獨逸東アフリカに於けるイスラム」及びクニシケールの「コラーンの救済説」の如きが見るべきものである。

終りに臨み一寸報道して置きたいとは、日本に宣教師として來て居たハース博士が、エナ大學の員外教授に任ぜられ、宗教歴史を講ずるとになつたとである。(H M N)

も建設的空氣を追求してゐる海外の思想界に於いて、かうした叫びが聞こえるやうになつたのは、寧ろ當然の經路と云つて差支ないのであるが、いくら活動に權威を認めるからと云つて冥想の滋味内觀の努力を撥無してしまふならば、さう云ふ人たちは机上の哲學者と同じやうに、やはりマンネリズムに囚はれた人となつて

内ヶ崎作三郎著

近代人の信仰

四 六 判
六 百 一 十 二
定價金壹圓貳拾錢
郵税金拾貳錢

今や世界の文明國には近代人なる新 級存在す。彼等

はひとしく近代の科學、哲學、文藝の影響の下にあり。彼

等は既に舊信仰を棄てたり。されど無信仰たる能はず。彼

等に煩悶あり、苦痛あり、憧憬あり、最後に新しき信仰な

き能はず。著者自ら近代人に代りて新信仰を説く。新時

代の思想に注目を怠らざる諸君の一讀を乞ふ。

〔中附八〕

發行所

東京市橋區銀座二丁目

警

醒社

振五

替五

東三

京番



反抗

内 藤 濯 譯

—— 平リエ・ド・リイル・アダン作 ——

第一景 (つゞき)

主人。(ふりむきて) はて! …… あれは何の音なんだらう! …… こんな時刻に誰か訪ねて來たんだらう? ……

あゝ、あのバチスタンだな! あのだ! …… (立ち上りて) 俺はあいつ共に暇をやる! 何うしたのだ! …… だれも戸を開けてやる者がいないのか! …… それでは俺が行くよ! …… (蠟燭をとる)

妻。(つと振り向く、顔青ざめたれども矜らしく、眼差は穩やかに、冷たき微笑を浮べ、聲鋭く) あなた、お行てなさるのは御無用です、今しがた門前に停まりました馬車には、誰も乗つてはゐないのです。妾、あの、この事については! …… たとひお邪魔でも! …… すこし内々で申しあげなくてはならない事があるので! …… すが暫くの間、妾の申すことをお聴取下さつたら、貴方のおためになると思ふのでございます! …… しかし強ひてとは申しません。

主人。(何となく心配げに、燭臺を手に移るまゝ、はたと立ち留る) え? 何だつて? …… 串戯を云ふのかい?

妻。(座につきて) 今に御判断がつきませうよ。

主人。(眞向に妻の顔を見つめて) さあ、でもお前は顔色がわるい。體を悪くしたんだよ何故そんな他人行儀

了ふであらう。近く博士のドロマアル氏は、巴里のフランマリオン社から、『冥想と活動』Le Rêve et l'action と云ふ一書を公にして、此の問題に觸るゝ所があつた。博士は、活動と活動の偽造とを混同してはならない、活動の偽造は冥想を抛棄する事よりして生ずると云ひ、さらに一步を進めて、冥想と活動とを全く區別することができると思ふ人は、冥想の虚偽を欲するものであると同時に、また活動の虚偽を強行するものと力説してゐる。當然のことを當然に發表したもので、敢へて新なる言説とするに足りないが、徒らにあの人は思想家だとか、この人は活動家だとか因習的の區別を立てゝ一つの活動となるまで思想を練りあげる人の少ない日本の現在に取つては、少なからず警醒を促すものであると云つて可からう。

▲新しき信仰劇

小説『ジャン・クリストフ』で名を博し近

く佛國翰林院から、文學賞金一萬法を受けたと云ふ噂のあるロマン・ロランは、『信仰の悲劇』Les Tragédies de la Foi と題する一卷の戯曲集を公にした。巴里のアシェット社の出版である。この一卷には、『サン・ルイ』『アエル』『理性の勝利』と云ふ三つの戯曲を収めてあつて、人物にも動作にも詩の匂ひを豊かに含ませである。初めには信仰の旋風に吹きまくられてゐる一國の民衆を書き表はしてあり、次のには一國民の心的氣力、希望、運命を身に負うて便るところなくさ迷ふ一小兒の生活を描きだしてあ

り、終のには一人の學者が其の解放しやうと思つた民衆と争ふ心持を寫しだしてあるが、三つの作ともに宗教的情熱が溢れるやうに満たされて居ると云ふことだ。ある評家はこの作を評して、千八百九十年より千九百年に至るまでの佛國青年が、信仰を捨て去る事ができずに、宗教、國家、自由精神と云ふ此の大きな理想の爲めに、憧憬の焔を燃やし盡くした證據だと云つてゐる。

▲『マグダラのマリヤ』の上場

メエテルリンクの

新作劇『マグダラのマリヤ』が、この五月、巴里のシャトレエ座の舞臺に上された。この劇は同人の吉田君が、英譯から重譯して本誌の一月號と二月號とに連載したもので、一度目を通したものと直ぐに氣づく事だが、この劇の中心は、おのづから、ストイック派の哲學と、耶蘇の教に依つて當時の世界に齎された思想の新要素との對抗に存してゐる。雜誌メルキユル・ド・フランスの劇評家の言ふところに依ると、マクシム・ド・トオマス氏が舞臺裝置を擔任して、至つて地味な背景を見せ、女主人公にはメエテルリンクの愛妻、ジョルジエット・ルブラン夫人が扮して、立派な演技を示し、哲學者のシラヌスの役には、オデオン座の名優ドニス・デイネス氏が當つて、目ざましい成功を贏ち得たさうだ。

主人。何の事だい？……お前は常識を失くしたのか？

妻。（短く裁ち切るとき口調にて）妾の衣類の代價は、これに四年と五ヶ月の間の詳しい書附があるのですが丁度千八百十七法だけになつてゐます。それから妾に此の指環を簞めさして下さつてからこのかた妾を此家に住まして養つて下さつたのは、法律上據所ない事だと承知して頂きませう。（婚嫁の指環をぬきとりて愛想もなく机の上に置く）結納として下さつた薄紗だの金剛石だの、その他の寶石細工は二階にある妾の寫字臺に收つてあります。これが其の目録なので、この通り妾の室の鍵に結びつけて置いたのです。（鍵を机の上に置く）妾の持參金は當然あなたのお所有ですから、もう其の事は申しませう。この二十萬法の金子は、あなたに差し上げました娘の教育費と結婚費になる事と思ひますが、娘は法律があくまで行末に眼をさかして居ますので、妾と一所に連れて參るわけには行きません、何うか御手許にお置きなすつて下さいまし、妾、娘の顔を見るのはきつとこれぎりと思ひまして、今晚床につかせますときに接吻しておきました。

主人。エリザベエト！

妻。（いとさりげなく）只今御目にかけてました勘定書には、御覽の通り、お友達の方々へ云つていらしたお言葉を使つて申せば、妾の身體が「めでたい容體」になりました爲めに、働くことのできなかつた四ヶ月と廿二日だけの間の給料は差引になつてをります。もし後程になりましたら、法律上何かお拂ひしなければならぬやうな、手落に氣が附きましたら、今日からお受取りなさる日までの商賣どほりの利子を添へて、其の總額を直ぐさまお送り致しますせう。また貴方がお逝れになるやうな場合には、もしお出来になるなら、慈惠院なりお娘さんなりに、此の金額を廻しておやりなすつたら宜し

な物の云ひやうをするのだ？

妻。たゞ妾ひとりとの事だけでしたら、こんなに遅くなつてお時間をおつぶし申しは致しませんのに。

主人。(燭置を置き、すこしく迷へる様子にて) 變な聲をだすぢやないか……何だつてさう躊躇するのだ……(躍り立ちて、聲をつまらし) フアラル、キンタアが破産したのか……

妻。(書架より紙挾を取りだしながら) いゝえ。

主人。(たしかに安堵したれど吃りながら) でも本當に、俺はこれまで一度もお前がそんな様子をしてゐるのを

見たことが無い……(沈黙——妻に對して、机に近き歐掛椅子に身を落す)

妻。(紙挾の書類を繰りながら) まあ妾の様子ですつて、あなた何と云ふ事もないのですわ。(短き沈黙の後、言葉すくなく) これが御財産の精算書なので、いかにも四年半ほどの間に三倍になつてをりますすが……あよそ百二十七萬法ほどになつてゐます。この金額のうちで五萬〇二百八十法は、妾が手數料としてひとりで儲かりましたのです、その明細表は別紙に書き添へてありますが、四年と七日の間、日曜日を除けて、十時間づゝ働きました私の給料は別になつてをります、その計算表は此の通りで——利息はぬきにしてあります。この利益と手數料の三分の二は、共同資本長の名義上、法律どほり貴方の御權利になるのです、それで差引を致しますと、妾の手に残るのがこの通り三萬二千法から十六法三十參だけ缺けて居ります。(若干の金子を机上に置く) この財布には凡そ二百法だけ入つてゐるのですが、以前から有つてゐるのでして、娘でゐました頃の財産なのです。つまるところは持參金以外の金子なのですから、民法上妾の手許に收つてあるのです、三萬二千法のうちで引込になつてゐる額は、これにて御勘定申しても可いのです……貴方さへあよろしければ。

(舞臺の前方にすゝみて、立ちながら暖爐の天鰐絨棚に背を寄す、頭は背後なる燭火に照らさる。冷やかなれども程やかなる調子にて語る) ちつとも面白い事ではないのです……けれども、いかにも聞く價があるものゝやうに仰有るのですから。(眞面に主人の顔を見る) あなたは何だか妾を能く承知していらつしやらないやうです。え? さうです……貴方は妾の眞實の性質を本當に知つていらつしやらないのでせう。(可笑しげに微笑す。主人は落ちつかずしてあり) 本當の事を申せば斯うなのです。(沈黙) 貴方は必定わたしの家庭を覺えておいてなんてせう、そして貴方が妾を貰ひに家へおいてなすつたとき、妾がどうして日を暮らしてゐたか覺えておいてなんてせうねえ? そら、あの武器だの晶玉だの骨董道具などを賣つてゐた店を覺えていらつしやいませうねえ? 父も母も大變な實際家で、妾はその爲めに小さい頃から、極むづかな金貨でも、どの位の價があるのか覺え込んでゐたのです。只今かうして少しでも金錢の勘定ができて、貴方に禮を云つて頂く價が全く無いのも無いのは、それだからですよ。

主人。夢みたいな話だ……おい、しつかりして呉れ……何だか慄とするよ!

妻。(苦々しく) ———— まあ! 落ちついていらつしやい! ですから、妾は教育をしても貰ひましたし、周圍から手本を示しても呉れましたけれども、この節の世の中で、人生の「實際的事業」と呼び慣らされてゐる事柄は、あくまで重要な事として考へてゐなかつたかも知れませんか。と申しましても、妾にだつて小供に相應な素直な心はあつたのですから、力めて家風のまゝに物事を會得するやうに致しました。妾は斯う思つてゐました、あの人たちは齡も自分より行つてゐるし、それに自分の兩親だから道理に適つてゐると、あなた、此の事がよくお分りですか。

主人。(吃りながら) けれども……俺は……まあ腰をかけるがいゝ!

うございませう。

主人。(傍白) 何うしたら可いだらう? …… 逆上してしまつたのか?

妻。(手袋をはめながら) つまるところ妾の財産の三萬二千法は、これまで働いて來ました爲めに、このうへ色々な事に出會して苦しみを嘗めなくても、死ぬまで何うなり斯うなり御飯を頂いて行けるやうに妾の手に入つたものです。とにかくこれで、世の中の借金を拂ひました。(沈黙。胴着より一の書類を取りだして机の上の鍵と指環との傍に置く) これはお店の名義を妾に與へて下すつた委任狀です。かうしてお委せ下すつたのですけれども、お受取り致したまゝで、お返し致します。(立ち上る) では貴方、もうこんな内輪のことを彼是申上げるのは無益だと思ひます——それでは……(傍の椅子の上より帽子と上衣をとる)

主人。あい、何うしやうと云ふのだ? 何ういふ考なんだ? ——何うとも云つてくれ——ルリエザルの收金の事を基にしてさう云ふのか、いゝよ、それなら俺は心よくあの三千六十法だけ捨てる、訴訟手續の費用までも捨てる! しかし、とにかく理由を云へ!

妻。理由は申しあげました。(奥の戸の方へ行きて、靜かに) あなた、さやうなら、御機嫌よく……妾のことは聲音まで忘れて下さいまし。

主人。(つと戸の前に立ちて腕を組み) 知らないうちに、お前は戀人を拵へたんだらう?

妻。(この言葉を聞きて立ち留まり、ますく顔を蒼ざめて) まあ! ——ひどいではありませんか! それでは貴方は

無理にも妾に云はさうとなさるのですねえ? ……なるほどこれは貴方の御權利です——よろしうご

います。

や心配を忘れさして呉れますごとに、強ひて實際を打ち消さうとする事實は、どんなに表面の美しく思はれる事實でも、それをいつも誤りだとするのです。かう申すのはたゞ、生きむがために生きてゐる此の世の中、一年三百六十五日のこの便利な現世ですもの、泥土の厚さが如何やうでも、其の土臺が確固してゐても、泥土のなかに居るより、雲の中に居る方がずつと優しだと思ふからなのです。

(沈黙)

主人。(鈍りたるごとく獨語す) つまるところ、何を云ふのだらう？ 何を云ふのだらう？

妻。(いとさりげなく) さういふ考てゐる所へあなたが來てなすつたのです。さうして妾は家の者の尤もな道理に従ひまして、あなたの家へ參るやうになりましたのですが、それは以前からの御恩がへしのためでもあり、妾の義務だと思つた爲めでもあつたのです。……(微笑して) ところが貴方は、妾があなたの爲めにさせられてゐた……冷やかな素振を、何ともお思ひになることができなかったのです。

主人。(冷やかに、はじめて氣を取直し) おい、エリサベエド！ 申戯を云つてゐるのなら、もう仕舞にしろ！ 馬鹿な！

妻。さうさう、派手な色合の廣帯を卷きつけてゐたあのお方の前で、どんな誓文を立てるのかも知らずに、死ぬまで變りませんと貴方に誓つてゐましたとき、妾は斯う思ひました——妾の手を握つてゐる人は妾の夫だ、これから便らなければならぬ人なのだ。賢い外容をした人だが、豫想どほり、妾よりは以上に正しい、確かな、明るい意見を有つた人だ。妾の考やあらゆる信用は此の人の人のお世

妻。只今も覺えてゐるのですが、父はまるで大人にでも云ふやうに、よく妾に話をして聞かせました。父は何だか賢いやうな人間なつてした。散歩をしますときには、車輛だの電線だの瓦斯だの煙だのを指して、かう妾に云つてゐました——お前、さあ周囲を見なさい、人間の「事業」が進んでゆく、「科學」が舒び擴がつて綱を解くのだ！人間の發明には、力と大きさとが充満になつて居る。過去は小供の時代なんだ。人間が迷信や夢をふり捨て、大日輪の下で頭を上げうるやうになつたのは、百年になるかならない位の間の事なんだ！だから着實な女になれ、正直になれ、金持になれ、その他の事は空だよ——と。

主人。(妻に近よりながら)それから、でもそれは餘り悪い言ひまではして無いよ、それは……殊に終の所が。

妻。妾はこの教訓を注意して聽いてゐました、しかし妾は孝行の心こそ忘れなかつたにしましても、両親が「空」だと云つてゐました其の……他の事……に比べますと、両親どもが自分て「實際的で重要だ」と思つてゐたことが、かへつて第二の價値を有つてゐたことに氣がついたのです。

主人。第二だつて！

妻。さうです……でも斯うした妾の考方は、不幸にして格外な性質のものだつたかも知れません、誰ひとりそれに見向きもして呉れなかつたのですから……けれども妾は其の爲めに、只今多くの人たちが「現實の生活」と云つたり、いはゆる「實行の」と云つたりしてゐる事に對しては——お分かりてせうね？……一言も云はずに頭を下げてゐましたほど、深い距離を感じました、恐ろしいはてしない嫌味を感じました。ねえあなた、もし他の人たちが言葉に欺かれずに居るのなら、妾は事實に欺かれずに居るのです。ですから妾は美しさうな感じや單純な考が、妾を此の世の上へ高めて、束縛

た。二人の性質の間には、まるで土臺から異つた品質があることが分りまして、とんだ事をしてつたと云ふ氣になつたのです。そこで妾は斷然あなたと別れて、さうした揚句に、妾の考が貴方のお考にひけを取るもので無くて、むしろ優つたものである事を、證據だてゝも見たいと云ふ決心がつかしました。それから妾は、さつさと利益のある仕事をして、將來お別れをするとき、貴方にお懸けることになる損害を、できるだけ償はうと骨折りました。妾が一生懸命に精出ししましたのも、眼先のきいた仕事をしましたのも、財産が殖えましたのも、全く其の爲めなのです——つまり損害賠償の爲めに致したのですよ……

主人。(怒りはじめて) 止せ、よせ、止せ！馬鹿な事を云ふのは止せ。可い加減にせんか。俺は女といふものが何んなものか知つてゐる……短氣で云ふのなら許しても可いが、一體何うしたのだ？何うしたのか、斷乎と一部始終を云へ！

妻。妾は生きたいのです。あなたが何處まで道理に暗くていらつしやるか考へて御覽なさい。人間には道理に従つて生きたいと思へる性分があることを、あなたは解らずにいらつしやる。妾は生きてゐながら死んでゐるのです、眞面目な事が欲しくてたまらないのです、空の大きな空氣が吸つて見たいのです。妾は墓のなかへ紙幣をもつて行くのでせうか。貴方は人間がどれだけの間、生きなくてはならないと思ひますか。(沈黙、やがて物思はしげに) 生さる？……妾には生きたいと云ふ慾があるのか知ら？今日生さると云ふ慾を満たすことができるのか知ら？……あなたは妾に戀人があるやうに仰有いましたねえ……——悲しい事には、それがないので、今も無ければ、これから先もてきますまい！妾が生れて來たのは、わたしの夫を愛する爲めであつた事が當然で、わたしは只少し

話になる、妾の希望の残りは此の人の心に植ゑつけやう、これも妾の義務のやうだから——と思つたのです。

主人。(すこしく落着きて押櫛ふごとく) さうだ、實にさうだ……まあ理由の分かつた事を云ふのなら、俺は賛成するよ。

妻。三日ほど經つて、妾は黙つてゐてになるわけが分かりませんので、その折の暮らし向きに随つて一所に暮らして行きませうと、淡泊に貴方へ申しあげたのです。妾はこの世の立派な事柄だの、眞實の生涯の事だの、選びとらなくてはならない生涯の事だの、それからそれへとお話して、心の寶も頭の寶も、みんなごつちやにして御足許に投げだしたのです……しまひには伶俐な平和な生活の事までお話して、何だか妾は懸想された女にもなり、徳のあるお友達にもなり、愛らしい母親にもなる價があるやうな氣になりました。

主人。(腮を撫てながら) でも……俺の覺えて居るのは……たゞ……

妻。妾の申すことを聽いてゐてになつた舉動だけなんでせうねえ……ほんとうにあの時の御舉動は忘れられませんか。四年半前の此の時刻に、丁度このところで……あなたは……まるでお父様見たいにほんの鳥渡ばかり、氣持よさうに尤らしく微笑して、私の傍へいらつしやいました。そして二本の指で可愛いと云つたやうに一寸わたしの頬を突いて、そしてから萬事飲み込んだやうな伶俐さうな様子をして……——そら知つてゐるでせう——「馬鹿なことを! さあ、そんな並はづれた想像は静めなければならん」と仰つたてはありませんか。貴方は左様して妾をおもてなしなすつたのです。そこで妾は直ぐに、これでは縁を結んでも無益だ、とても一所になれたもので無いと覺りまし

嫌なことで、宇宙の神秘も、あなたの唇には、たゞ冷やかな取り澄ました微笑だけしか、いつまでも誘ひだすやうな事はないのでせう（あなたには何一つだつて人間の學問まで——悲しくもなければ不思議でも無かつたからです。）——貴女は頭の明るいお方だから、「たまには」大空だの——、沖の風だの、岩だの、山の樹だの、太陽だの、森だの——貴方にも天と云ふものがあるなら——星の光つてゐる空だの、そんなものを輕蔑はなさらない——ところが貴方はそれを「詩的ではないか」と思つていらつしやるのです。「田舎の事ではないか」と思つていらつしやるのです。妾はそんな物をさうして見は致しません。この世に意味があるのは、たゞそれを表はす言葉と、それを見る眼の力とに依るだけの事です。言葉や眼よりも高い所から、一切の事を考へて見ることが、處世の術だと思ひます、人が唯ひとり大さくなる道でもあり、「幸福」と「平和」の道でもあると思ふのです。

主人。（憫むがごとく氣を急かせて）處世術は決して夢を見る事で無い……一寸聞くが、その夢みるつて云ふのは、何ういふ事なんだ？……

妻。（眉をひそめて）その事が解りたいのですか……

主人（激して）エリザベエト！……いや、俺は誓つて終までおまへの云ふ事を聞かう、お前の考が分かるまで辛抱してゐて、それから俺の方で返答をする。

妻。（靜かに）それでは申しませう。夢を見ると云ふことは、まづ第一に、白痴より千倍も劣つた人等の蹂躪を忘れる事なのです。何時までも掠奪されて行く人たちの何うする事もできない泣聲を聞かずに、あなたの仰有る社會生活とか云ふものゝ侮辱を忘れる事なのです、誰でも蒙らされて苦しんでゐる其の侮辱を忘れる事なのです。良心には反いて、卑しい目前の利益を得たいばかりに、財産

でも夫から情をかけて欲しいと思ふばかりでした。——ところが今日になつて見ると、もう後の祭になつて了つたてはありませんか、愛の誇も妾の血管のなかに消えて了つたのではありませんか……今さら後へ引き返す事もできないてはありませんか、ほんとに惜氣もなく、いつまでも、心のこりなく差上げたいと思つてゐた物をあなたは全然何でも無いものゝやうに妾を馬鹿にして、了つて苦しまして、お取り上げなすつたてはありませんか。貴方はお失くしなさつた物を知らずにいらつしやれば可いのです。貴方は恰度、寶石を路に落した盲目の猶太人見たやうなものです。

主人。(不安らしく妾を見て、傍目) 氣が狂つたのだ!……(調子を高めて、靜かに且つ冷やかに) さあ、さあ、氣を落ちつけて……そんな事は皆言葉だけの事だよ。そんなに大袈裟な事を云つて逆上げるものでは無い……すこし行つて休んでは何うだ、えへ? ……それ、それが可い……

妻。(冷然として) 言葉丈の事? ……夫は何うしてお答へしたら可いのです? ……何うして貴方は妾にお問ひなさるのです? ……貴方のお言葉を聽いてゐると、聞えるものは金銭の響ばかり——お氣の毒様ですが、妾の言葉はもつと奇麗なのです、もつと深いのです。何とも仕方がない不幸なのですけれども、とにかく是が妾のお話する方法なのです——と申しても、これからは何の關係もないことです。妾達はどちらも道理を持つてゐるのに違ひありません、けれども只今は、道理があるの無いのと云ふやうな場合では一寸もありません。社交的には最早何事も愛する事ができない、利益ですら愛する事ができなくても、せめて世の中の光りや輝やさだけでも、愛したいと云ふ涯しない慾を有つて居る者があると申したところて、貴方にはそれが只「言葉だけの事」になるのです……無口な美しい若い妻のそばで、夕暮の靜けさを味ひながら、希望の夢を見るなんて云ふことは、あなたのお

にかけて云ふが、おまへは今夜、走り過ぎの女の仲間になつて居るのだ……今しがたまで、あなたに落ちついて、物事が能く解つてたくせに……それではまるで虚偽のやうでは無いか……あの斯うして娘の嫁入金よめいりかねを拵こしらへるのが氣に入らないのかい。

妻。お氣の毒だと思へましたらねえ……でも貴方は、古反古ふるはどだの符牒ふでだの、立派りっぱに飾りたてた金箱だの、訴訟だの、精算だの裁判沙汰だのと、そんなものに縋すがりついて日を暮らしておいてなのです。あなたはまるで、空をとぶ鳥みたやうなお方かたで、蝶々でも取るやうに、飛びながら紙幣きつを攫つかみとつていらつしやる……手取てとりばやく申すなら、日も照らなければ、風も吹かないし、夢を見る人も居なければ、辛抱して苦しみを忍しのんでゐる人も居ないし、墓の上に空も擴ひろがつてゐないのです。あなたは賞與金だの配當金だの利益だのを……できる限り積みたて、たえず資本を殖ふやさうばかりに、月日を數へていらつしやる。他人の衣物きものを剃そぎとつたり、仕事ばかりに屈托くつたくしきつて、自分の命まで亡なくしたり、殆んど機械的に際限はてしなく金錢おかねを欲しがつたりするなんて、ほんとに悲しいほど馬鹿げきつた事ではございせんか……

主人。（地圓太を踏みながら）資本よとは信用すべきものだ、手形てがたに見つめるべきものだ……そんな事は云はな

くたつて、おまへには能く分わかつてゐるぢやないか……

妻。ではそれで宜こぞしういます。しかし貴方あなたのお喜びなさる事は、わたくしの喜びとはならないのです。しつかりした確かな商賣ながどんなものなのか、妾めかけには瞭然はつきり解つてゐるのですから、あなたが詰きまらない下くだらないと思ひなさる事が、その爲めに死んでもよいほど類たぐひない事に思はれるのです。氣晴らしのやうに思つておいてなさる事が、妾めかけには眞實ほんとうの利益のやうに思はれるのです。何はさて措

を失くした人たちの儚いありさまを見過ぎてても可いと云ふやうな、そんな口先ばかりの義務を忘れる事なのです。表面の世の中には、其の影が射してゐるか居ない位の隠れた世界を、自分の心の奥底に眺めやる事なのです……もう間もなくやつて来る死の影のなかに、うち勝つ事のできない望みを強めることなのです。氓びるもので無いと云ふ感じを更めて攫んで、寂しくはあるけれども、朽ちはてないものだと言ふ感じを、胸に込み込ませる事なのです。宛然大きな河水が、さつさと海へ流れ込むやうに、自由に理想の美はしさを慕ふ事なのです。遊樂や義務の殘物は、餘儀なく生きて居なければならぬ斯んな忌まはしい時代には、かすかな日の光だけの價値も無いのです。夢の奥底は死ぬる事なのですけれども、それは少しでも青空の色を眼に映して、靜かに死んで行くことなのです。妾はもうそれで澤山！——わたしには最早慰めもない、情熱もない……愛情もないのです……

主人。(横柄に) さうか、では俺の云ふことを聞いてくれ……おまへは以前に、何か悪い小説でも讀んだんだらう、だから今のやうに頭が亂れてゐるのだ。

妻。(冷然として) しかし夢を見ることが、たゞ何の効もなく、自分の寂しさを眺めやるだけの事にしたところで、他人の破産を弄んで日を暮らしたり、毎日數かぎりも無い詐僞や卑屈な行を強ひて犯したり、働いてゐる人等を散々凹まして、一時のうちに金持になるやうな仕事を、引つさり無しに見せつけたりするよりは、ずつと以上に利益のある事では無いのでせうか……でもあなたには、夢の代りに妾へ下さるものと云つて、「無一物」より外に無いのです。

主人。(笑ひ出して) おまへは俺に主義のない女だと云ふ事を信じさし度いのか……どうだ？——俺の顔

誹して見たり、「夢」だの「詩」だの「疑」だの云ふ言葉を、何だか蔑むやうに云つて見たりするのは、何の事もない甲斐性なしの人たちには、直ぐに「實際的」な様子のある事に思はれるのです、ところがそんな人たちは、一寸した訴訟上の問題につけても、わたしの前で五分間とはやつて行けない人たちなのです……でも……妾はその事を確かにしたやうに思ふんですもの……さうです……わたしは二に二を加へれば四になると云ひながら、實際にこれだけの物を失くしました——そんな加算なら、わたしの方が貴方より巧くできるかも知れませんか——そうして其の失くしたものは、いはゆる、常識ではとても取返しがつきませんまい。わたしの負債、一生の貸借明細書はこの通りですが、妾は今晚かうして、あなたの亂暴な御手許にそのまゝ差しだしてまゐります。

主人（肩を聳やかして） あゝ！ さう妙に激昂してくれては俺はもう辛抱がしきれない、とにかくそんな咎め立ては止して、つまる所を云つたら可いではないか。

妻（立ち上りて） 斯うなつては、二人の間で彼是と説き明しを致しても詮ない事です。あなたが若し妾に對してなすつた事を、一寸でもお悟りなさる事ができたら、何にも知らずに暢氣にしておいてなさる貴方だつて、いつまでも後悔の爲めにお苦しみなさるでせう。ところが貴方はそれを御存じなさる事もできなければ、お悟りなさる事もできないのですもの、いくら退屈しきつてゐても、妾には貴方を憎む理すらないのです。あゝ、妾の魂は手品師に盗まれた小供のやうです……妾の魂は膽汁を盛つた金の甕のやうです……とにかく妾は少し自由な身になつて見たい。此家に留まつてゐる事が、妾の義務であるにしたところで、もう妾には其の義務を果たすだけの力がないやうです……それではお暇を致します、出て參ります。いくらかの力なり、眼のなかにいくらか微光なりを残して

いても、先づ此の生きてゆく呼吸に必要な事のやうに思はれるのです。妾が小供らしくて害がある
と申すのは、あなたのやうな業をして、一生のうちの大切な月日を失くする事なのです……こんな
業の事を考へるのは、たとひ誘ふ爲めにしたところで、妾には詰らないけれども思ひやりのある所
置だとしか思はれない、時間つぶしだとしか思はれないのです。あんな仕事をして日々の食料を拂
つてゆく人は、パンを食べる事しかできない人だけなのです。

主人。(はげしく怒りて) 斷然おれは……

妻。(座につきて眼を据ゑ、殆んど獨語するがごとく低聲にて) あゝほんとうに！斯う盲目滅法にあなたを信用して
ゐて、わたしは孝行の心にも外れ、貞操の徳にも外れたのです。そして義務を果たした後の結果を
見ると、もう落ちついてはゐられない。あんな大袈裟な言葉と言葉は、この義務を口實にして、つ
まるところ何處へ妾を連れて行つたのでせう……若々しい心は其の命を絶たれました！美しい姿は
老けて消えました！至つて懐しい夜は簿記帳のために潰されました。子は生み落しながら育てるわ
けには行かないし……夫はどうかと云ふと、鳥渡でもその顔を見れば、思ひ出がそれに絡みつ
て……ねえ、あなた……妾は恥しくて涙が零れるてはありませんか……行末には身寄もないし、友
達もないし、好きになり度いと思つてゐたものは、みな壊れてしまふし、妾の心のなかにある一番
楽しいものは、卑しめられました、壓へつけられました。そして斯んな破滅の跡を歩いてゐて、哀
れなありさまを人様に見られてもしたら、理の解らない女だとか、詩的な女だとか云はれて、大笑
ひをされるのでせう、妾の慰めは只それだけなのです、そんなに云はれるのは、たとひ眞面目くさつ
た様子をしてゐると云ふ事より外には理由のない事なんてせう——人間の不幸を辱しめて見たり、

主人。(不安らしく、また嘲るごとく冷やかに) お前は地所を買ひ入れたのか。

妻。(うか／＼と旅行用の小なる箒を弄びながら) やがて妾の行く國では、決して誰も妾に會へますまい。お世辭だの、化粧だの、舞踏會だの煩はしい娛樂だのと、そんな世間くさいものは外にして、始終その國にひき籠らうと云ふのです。しかし妾が一度でも其處から外へ出るやうな事がありましたら、それはさつと十二月の或る朝で、妾は冷たい雨にぬれながら、蒼白い空の色を仰ぎながら、年を老つた下女と勦を手にした男とに衛られて、暗い路を歩いてゆくのでせう。

主人。最早でつきり左様だ……誰か醫者を招ぶ事にしやう……氣が狂つたのだ！でもお前が其處で俺に話してゐるのは、それは「ロビンソン」の事だよ……(妾は冷やかに、外套を纏ひ、帽子を冠り、手袋をはむ。

——主人はこれを留めて) あゝこれ！何處へ行くのだ。そんな馬鹿げた芝居はよして、間違つた事を云はずに寢室へ行つたら如何だい、……田舎、田舎へ行くとお前は云つたが……田舎は小鳥に良いところだよ……俺は今しがた憤つたが、眞面目に受けたのが間違ひだつた……さあ、もう出て行くなんて云ふ考は止さうぢや無いか、お前がそんな考を起こしては、俺ほどの考も無い事になる、馬鹿らしくて論にならない——惻れな話だ。その事を證據だてゝ見せる爲めには、だゞ一言云へば足りる——お前が俺を忘れる？それは宜しい。けれどもお前の母としての義務は何うするのだ？……お前は俺に大きな樹立だの夜の友達だのと話をする……けれどもお前の娘は何うなるのだ？あれこそあれこそお前には眞實の夜の同伴ではないか……おまへは娘を育ねなければならん、あれに孝行の心を教へ込まなければならん、簿記法だの、健全な考だの、有益な活きた生活だの、さう云ふ一人前の女の知るべき事を教へなければならん……主の祈りを覺えさしても可い、俺はそれを承知する——さ

置いて、妾の最後の日の光を眺め渡さうと思へば、お蔭さまでもう一刻も愚圖つゝいては居られませ
ん……

主人。驚愕に心を失して） だから俺は一週に、一度づゝ郊外へ行かうと云つてゐるではないか。

妻。（主人の言葉を聞かずして） 遠い向ふの方の——イスラントでも、シシルでも、諾威でも構はない——

自分の好きなやうな國にある一軒の寂しい家、妾は其の家を手に入れたのです、妾の金子で買入れたのです……妾はこんな事務室の檻の背後で骨と皮ばかりになる代りに、あの遠い心地よい隠家へ行つて、そこに籠りながら少しでも地平線を眺めるのですが、それが爲めになる事なのです。水曜日の晩にお招び集めなさるお友達なんかより、妾は樹立の影に取巻かれてゐる方が好きなのです、其の方が身體の爲めにもなると思ふのです。ヴォドランさんの媚かしい言葉を聞いてゐるより、冬の風の音でも聞いてゐた方が好きなのです……妾はこんなに精神が錯亂してゐるのですわ。

主人。（驚きて） 何……ヴォドランがお前に媚かしい言を云ふんだつて？

妻。（言葉を途切らずして） さうして妾は、夜の隔てない友達と思つてゐる讀み古るした本を、もう一度開

いても見ませうし、親友の「沈黙」ともまた會へる事になりませう——妾、貴方に頂いた姓は捨てられないのですけれども、その事で御迷惑は掛けません。世の中の人達が皆何を云はうと何をしゃうと、正直の心こそ——御存じの筈ですけれども——世の中の尊い味方だと思ひます。でも嚴密な意味で身を持ちくづすやうな事があつたら、そのとき妾はランプの消えるやうに死んで行くのでせう。妾は斯う云ふ風に作られた女なのです、自分で自分が可愛いのも其の爲め……妾は嘘を云ひ度くない女なのです。

方の姿ばかり、あなたは其處まで妾を驅逐なすつたのです。まあ、さうして置かなければ妾はあの娘を盗めないものでせうか……あの娘が妾の所有だと云ふことを妾に納得させやうと云ふ爲めばかりにしたところで……あの娘を妾の不幸の道連れにしようとして、妾は愚圖ついでゐたのでせうか……けれども絶望といふものには或る場合、大きな力があるにしたところで、美しいものがあるにしたところで、妾の絶望は、貴方の兒の性分にはまり込んで、たゞ一つの毒になるばかりなのでせう。まあ何うしやう、妾の心は其の愛情といふ愛情をひと平づゝ絞り出さしたのです……妾は死んだ女です、あの娘を接吻したらあの娘は凍えるかも知れません。妾は此の家を捨てゝ行くやうに娘を捨てゝ行きます、もう其の他には何一つ此處で犠牲にするものもない。妾が此處にゐるのは無用です……害になるのです……そして……妾はこれから他のいす／＼な義務を果たさなくてはなりません、ですけれどもそれは最早、只今のやうな義務ではないのです。さやうなら！竈には火が消えて灰が冷たくなりました。（急ぎて外套をひき纏ひ、園の方へ行く。）

主人（妻の前に腕を組みて） エリザベト！……出て行くことはならん——俺は此の家の主人か知ら？……
——おまへが娘と夫を捨てゝ行く！其の正直な價值のあるおまへが……さあ、おまへはヒステリイに罹つてゐるんだよ——そんな事ができるものか！

妻（振り向きて、机上の水晶の文鎮を何気なく指し示しながら） 妾は、此の水晶の塊を形見としてお手許に残して置きます。此處にある帳面の影だつて、これは曇らす事ができません……光といふ光、この蠟燭の光すら、夥しい不思議な火を放つて、此の奥の方で照りかへして居るではありませんか！光といふ光を照りかへすのは、此の水晶の生命なのです。この角は堅く尖つてゐても水晶は澤々しく清く透

うだ、さうだ、俺は疾く氣づいてゐたが、前は表面だけの愁嘆騒ぎをやる「神秘主義」に眼を暗まして居たんだ。其の事について一言云へば……いや室へ行つて眠つたがよい……明日の朝おまへの考がもつとはつきりして來たら……俺よりお前の方がはやく分つて來るだらう。

妻。(つと立ち留まりて、眉をひそめ) あなた、貴方には妾が貴方を餘りよく識らずに居る事がお分りになつてゐます。あなたが妾の心に母の愛情を廻らさうとなさるのは、たゞ此の鎖で、ひと通り、慥かな會計方を強ひても引き留める爲めなのです——妾には其のお心が恐ろしいほどは、つきりと見えますわ。妾には疑を入れる習慣があるのです。昨日もさうでした、貴方はお娘さんを「娘といふ娘のやうに」結婚をするまで尼寺で育てる、だから出來るだけ早く其處へ入れやうとお思ひなすつたてはありませんか。

主人。(妾を打たんとして、思ひ留まり) 何うしてそんな情ない事を云ふ！とにかく自分が道理か何うか考へて見るがよい……おまへは立ちながら眠つて居るうちに、無邪氣な可愛さうな娘の全生涯を、おまへの掛念の重みで壓しつけるのだらう……お前にそんな事をする權利は無い。でも俺はおまへを卑怯な腐れた女だとは思はない。

妻。(益々鬱し來りて、殆んど脅かすがごとく) 妾の娘……まあ、妾は夜になると、あの娘を妾の手で撫でながら造り更へやうとしたり、あの娘のかげに妾の身體を隠さうとしたり、身體を享け入れやうとしたり妾の靈魂といふ靈魂をあゝの娘に吹き入れやうとしたりして、幾たび此の腕にあの娘を抱き上げたのでせう！……が最早遅すぎるのです……妾はもう娘のうちには居ないやうです——あれは妾がまるで他人でともあるやうに、妾を眺めてゐるではありませんか。あれの眼の底に見えるのはたゞ貴



青蚊帳

青山霞村

黄い木瓜濡れた睫毛で味氣なうみたとき思ふ父の忌日に
鹽つけて青梅を噛むとこしへに返らぬ若い日をば傷んで
鶏は知らぬ顔して喰はせてる雀出て来て餌を盗んでも
あさましや富士が白雪ぬぐやうに土用十日前われ足袋を脱ぐ
朝起に隣男はなすび剪るわれ原稿を五六行書く
干藍いれる澁の脊中に白銀の礫うちつけ夕立が来る
それとなう鯉賣に聞く水無月や大和で逢うた人の噂を
地圖披げ夏は夢のみ見て暮らす木曾の御嶽越の白山
玉の珠數朝髪涼したをやめが圓光大師拜みにのぼる
水手桶笹をひたして柚の蔭に六つの地藏を人巡る日に

きとほつて、氷のやうに滑^{なめ}らかです。もし妾^{わたし}の事をお考へなさる事がありましたら、これを見て頂^いきませう。(面帕を卸し、ひろげたる手にて大なる入口の扉を押し出て行く、主人は茫然として佇む、妻は闇の中に消え去る)

(深き沈黙)

……何^{なん}たる……(闇の上に留まりて、ふと思ひかへす模様)

——つゞく——

僕もその一人であるが、世間に斯様な人々が居る。即ち人間に關して最も實際的で、且つ重大な事柄は其の人の有する世界觀であると思惟する人々である。我々は思ふ、寄宿人を檢分する旅館の主婦が、客の所得を知ることとは大切であるが、その客の哲學を識^しすることは猶一層大切である。また敵と戰を交えんとする將軍は、敵の兵馬の數を探知すること必要であるが、敵軍が如何なる哲學を有して居るかを熟知することは猶一層重大である。(また結婚せんと欲する者が、相手の財産や器量などを豫知することは勿論大切であるが、猶深く進んでその哲學を研究するの必要がある)。然し問題は宇宙の見解が事物に影響するや否やと云ふことでなくて、結局何物か(哲學の爲めに)事物に影響すると云ふことである。

(チイスタトン)

がつよく雨戸を打ち敲く毎に苛立つた。習慣の附いた口は、殆んど器械的に獨乙語を響かせてゐるが、精神はいつの間にか遊離して生適の幽境に超人をそこがれ、或ひはB教授と形而上學の問題などを論じてゐた。淺酷な現實の我は幾度かこの腕白な遊離魂をムリヤリに、ゴシ／＼した横文字の上に引張り戻した。

*

晝過の三時頃、雨も止み風も餘程穩になつた。あまり鬱陶しいから雨戸を開けやうと思つて居ると、表の方で他の訪ねる聲がした。たしかにS君の聲だと知つた自分は、迎えに下りやうとして慌しく障子をあげると、既にS君は某君と一緒に梯子段を上つて來た。僕は梯子段の上から、

『やあ S君!』

『△△君! 此所かい?! 好いとこだねえ、君』

『善くもないが、一寸室が新しいから氣持が清々して——』と云ひながら僕は暑いと知りつゝ、二人の客に形式的に坐蒲團を出した。

『さあ ごゆつくり。よくこの天氣にやつて來た

ね!』と云つて南と西向の兩方の雨戸をあけた。

『……』

『よく解つたね君。此所は番地が廣いから——何所で電車をおりて來たの? 追分町の終點で?』

『えゝ』と返辭をしたがS君はあまり此麼話に氣が乗らなかつた。暑さうに若い銘仙總の袖を肩に捲りあげ、僕が出した新しい扇子をひろげて使ひながら、額の上の敢亂つた房々した黒い髪を左の手で測面に撫てつけた。僕は茶を入れながら『君の今度のカタリナは面白く讀んだよ』と言ふと、マジ／＼と僕の顔を見詰めて居たS君は笑ひながら

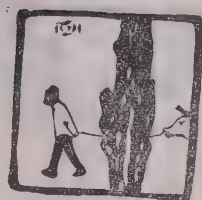
『あれでね今度大した物議を惹き起したんだ』

『何故して? 何處で? ××會で?!』

『えゝ、あればかりてないがね。此間の日曜の晩の説教で×さんと大爭論をやつたんだよ。……』

君、僕等の言ふとが到底あの古い連中には解らんねえ!』とS君は例の放擲の態度で言つた。僕は

その爭論の内容は一向知らなかつたが、何れにし



使 命

— S 君を送つてから —

野 村 善 兵 衛

S 君はもう故郷へ歸つた。眞實に歸つた?! そ
うだ、眞實に僕が斯うしてゐるよりも慥かに歸つ
た。

今日晝頃、T 君と一緒に麻布の君の下宿を訪ね
たら「S さんは十時半の汽車で、お立ちになるつ
て、今朝歸りました」と主婦は物語つた。僕と T
君は、大に失望して飽氣なく歸つた。

昨夜追分町の電車の集點から、三人で別れる時、
今日また新橋で遇ふつもりで、ロクに挨拶もしな
かつたので、餘計に残り惜しい氣がする。S 君は
また歸ると言つたが、確に歸つて来るか何うかは
誰も斷言出来ない。殊にあの通りの一種の運命論
者だから。

S 君の歸郷は、あゝ僕等二人に不可解の謎と、

一種の不安とを残した。

S 君が僕を眞島町の寓に訪ねて呉れたのは、去
る四日の午后三時頃であつた。此の日、夜來から
の雨が盛んに降り出し、加之に狂氣のやうな南風
が、バラ／＼バラ／＼と強く雨を吹きつけるので、
僕は止むを得ず朝から雨戸を閉ざし、うす暗くて
蒸し暑い六疊の二階に籠城つて居た。この天氣で
は勿論野外に出るわけにも行かず、また尋ねて來
る友人もないだらうからと思つて、晝も點いてゐ
る電燈の猶更陰氣で暑苦しく感ずる、半分晝で半
分夜のやうな室で、動もすれば散亂しやすい精神
を無理に張り詰めて、E 博士の宗教哲學を讀んで
居た。衰弱つてゐる僕の神經は時々興奮して、嵐

『金さい出来れば今夜にも立ちたいが』

夢を見てゐる人だと思つてはゐるものゝ、あまりの突然に今更のやうに驚いて、何をさいて善いか一寸解らなかつた。

『まだ来るだらう君。何時頃？』

『えゝ来るつもりだが、それも何うなるかまだ解らない』

『まあユツクリ休養して來給へ。君だつてやはり生れ故郷は戀いだらう。それはそうと君九州に行つたらよツく、カタリナ姫にも遇つて來給へ。今度上京とき君一緒に來ては何うか？』

と戯談を眞面目に言つたが、僕はすぐ獨り思案に陥つた。何故S君は止したのか、止してから生活は何うするつもりか、僕等の會の將來は何うなるだらうかなどゝ、不可解いながら自分で考へてゐると、やはり心の内で何か考へて居たS君は、

不意に夢から覺めたやうに

『△△君！ 今度僕等だけで放浪會をやらう』

S君の歸郷を少なからず心細く思つてゐた僕は、

『ウム！ 明日やらう。君は歸るなら。何處てやらうかね、僕の處てやらうか？』

『ソウまあ兎に角、T君の處に行つて見て、都合が好ければ、すぐ君に端書を出すことにしよう』

是から本郷のT君と小石川のA君とを訪問して行くんだと、S君は僕所に來ると直ぐに言つた。此處はなしをして、S君は五時頃連れの某君と一緒に歸つた。歸る時側においてあつた手風呂敷をひろげて

『君ありがたう！あまり汚くしたよ』と言譯しながらS君は、B教授の現代流行の哲學書を差出した。この本は四月頃僕がS君に貸してやつたのだが、この夏休みに Materie und Gedächtnis と對照して研究しやうと思つたので、若し讀み終つたら一寸貸して呉れと催促をしたのであつた。

『君面白かつたかい？！ 終の方まで讀んで？』

『終の方はあまり必要でないやうだから讀まなう』

『そう第二編まで澤山だよ。カントやアリストトルの批判などは大した必要でもないから』

ても双方の間に融合共感のないとは固から識つてゐたのであるから、

『そうさ、解る筈がないよ。少くとも君、半世紀の差があるからね』と言つて見た。しかし僕はこんな正直な形式一遍の表現では、何だか不満であつた。モツと強く、モツと大膽に言つて見たい様な氣がした。そして言はふと焦慮るほど、益々自分の孤獨であるのが瞭々と解つて、淋しくて堪らなく感じた。そこで僕は斯う言つた。

『イヤ半世紀どころでない。或は全く類の異つた別種の人間かも知れないよ。吾々の話す言葉は殆んど先生等に通じないんだから、況んやその精神をやだね君。一體僕等は未來の世界から來たのだからか。それとも火星からでも墜ちて來たのかしら？。だから物議の起るは當然さ！。ネ君、物議の起つた方が却つて好いちやないか。何の反響もなくてでは面白くないよ！』

S君は頷いて『そうさなア！君の作も物議を起したよ。彼の○○○論は随分内容が充實して居つたねえ！』

内容の充實不充實は兎も角、眞面目に偽らずに書いたと丈けは僕自身で確信して居るから、

『イヤ實際僕彼論を書き卒つた時、ひそかに泣いたよ！。まあ×會あたりの空騒ぎなどは、殆んど眼中に無しだが、一般の世間から何等かの反響があるかと期待してゐるのさ！……ないね。君解らないんだから！』と僕は己惚れと失望の混然になつた溜息をホツとした。

『いつか解るだらう！ それまで』

『何うだかな？！ 孰れにしても僕等は僕等の使命を忠實に盡すべき義務があるね君！。』

『そうよ僕等には共通の使命があるよ!!!』

ひたと氣分と確信の融合した二人の心持ちは僕とS君とのみ知つてゐる。こゝで對話は暫く途切れたが、やがてS君は云ひ出した。

『それでね君、僕は今度本當にあそこを廢したよ。外國へも行かむ。都合が可かつたら明日故郷へ歸るかも知れんよ』

『そう！ 本當に？——明日還るつて！ 何うして君そんなに急に？』

＊
S君は何しなく可愛い男である。我々同志の間には勿論戀と云ふ程の強いものはないが。お互に深く思情てゐるとは事實である。自分の孤獨や、弱みを自覺して居るものは、何うかすると無暗に他人を懷かしがつたり、他に依頼らうとするものだが、S君が友達を懷ふのは決してそんな風なものではない。僕が×會から歸る時などは、よくS君は玄關先まで走つて來て『△△君！ もう歸るの？——』と云つて、いかにも別れるのが厭であるやうな身振をする。いかにも君の側が好きだと云ふやうな顔色をする。僕は堪らなく可愛くなつて、もし自分の妹でもあつたら、抱きあげて接吻してやりたい様な心持ちがした。然し男子の悲しさに

『えい』と平氣な答へをせざるを得なかつた。

『君一緒に僕の家に行かないか？』僕は行つても好いと思つても、大した話もないし又迷惑をかけたは却て濟まないから

『今日は少し用もあるから君失敬するよ。左様な

ら！』と云つて、スゲなくS君の申込みを拒絶つて歸つたものであつた。あとで、なぜ自分は此様に薄情であらうなど、女見たいに後悔したとも度々あつた。實際一緒に行つた所で何の話もないので、唯茶を呑みながら相性の合つた夫婦のやうに、ジロリ／＼と互に顔を見詰めてゐるのが、譯もなく樂いのであつた。コンナS君の噂をよく僕は次子に話したもんだ。すると家内はいつも『まあ優しい方ねえ』と感服して聞いて居つた。『そうさ！』と僕は得意になると、次子はすぐ女根性を出し『Sさんのやうに美代子も愛して下さいよ』と抱いてゐる赤坊の頭を撫でながら、その桃色の柔な圓い頬に自分の唇を押しつけるのが帝であつた。何も知らない美代子は泣くやうに顔を曇めた。

此の様なとを妄想してゐる中に、いつとなく眠つて了つた。

＊

目をつぶつたまゝ、鈴のやうに重苦しい頭を擡げて現で、時計が七時を打つたのを聞いた時に、『△△さん郵便が來ました』と室の外で叫ばれた。ハ

『併しB哲學は實に面白ねえ君。——僕はE博士の哲學はよく解らんが、何と云つてもBは可いやうだね。……まだ×さんなどは之を讀んでないねえ君』

『そうかしら?』

『だつて君、少しも解つて居ないぢやないかね』
『いや讀んだらう? 確かに讀んだよ。兎に角本だけは持つてゐると言つたよ。まあ○○したんだらう。讀んだつて君必ずしも解るものでないからね。○○○○○○○○哲學を解するブレインは恐らくないだらう』

*

S君が行つてから明日の會合は出来るか何うか、出来るかとすれば何處でやるか、またT君の方都合は何うであるか。兎に角今夜か明朝までに何とかハガキが来るだらうなどと想像してゐた。夜になつてからブラザーがやつて來たので、少々酒を呑んだ。その爲か今夜は午前の二三時頃まで殆んど睡眠が出来なかつた。いくら故意に眠らうとしても徒勞であつた。眠らうとすればする程、

ます／＼神經が高調り腦は冴へて、いろ／＼の妄想は恰も走馬燈の様に取止めもなく、廻轉した。過去に於ける自分やS君の有様や、將來何う成り行くか、その迫れられない運命の力や。××會の不可思議な輕業や、俗世の腐敗に對する憤慨など、それからそれへと續いて來る一々のフィルムに眞面目に考へ去つた。

左に右、S君は眞面目な僞らざる男である。眞實に人生を考察へ、眞實に之を解決してそして如實にその本來の傾動を味はむと努力して居る。されば君の煩悶や悲哀は眞劍である。いくら色盲者には嘲弄れ、死學者には惡まれても、君の努力そのものが生きた人生である。僕はその眞劍の態度を愛してゐる。そして此の點にのみ「吾が友」の同氣を求めてゐるのだ。S君! 人生の問題は眞理か否かの問題でなくて、眞劍か戲談かの問題であることを呉々も固く牢記し給へ。君にして若しこの態度を棄てたならば、鹽の味ひを失つたと同様、われ用ゐて何かせむやである。

口繪の裏に

な　い　と　う

この號のはじめを飾つた口繪について、ひとこと書きつけて置きたい。

口繪をどんなのにしやうかと云ふことは、月々雑誌を作る運びになると、いつも問題になる。この月もやはりさうであつた。はじめ三並さんが方々を詮索して、持つて來られた一葉は、文豪シルアラが臨終の室を描いたもので、木版刷の至つて面白い作品であつたけれども、八月といふ月に取つては別に關係もないし、そのうへ彼に關する記事と云つても別に無いのであるから、いつか三並さんあたりに、シルアラの生活の事なり宗教觀なりを書いて頂くとき、それを載せる事に相談をきめて、此の號には見合はせる事にした。

ところへ、いつも骨を折つて下さる青年畫家の有田四郎君が、この號からまた新しくした表紙畫と第一エジのカットとに添へて、一枚の自作畫を送つて下さつた。この號に掲げたのは、即ちそれである。有田君は、七月號の巻首にのせた同君の作品へ、『蒼港前』と云ふ畫題をつけた僕のほしいまゝな態度を咎めだてされるどころでなく、この繪にもまた、何かふさはしい題をつけよと求められた。僕は内心ひそかに恐れ入つた、と云ふのは、繪畫を見るときにも、音樂を聴くときにも、それらのイメエジが、僕にはいつも詩的のイメエジになつて了つて、畫家なり音樂家なりの純な心持とは大分かけ離れたものになりはしまいかと云ふ疑ひが、僕の心の何處かにうかつて居るからだ。

けれども、有田君は『蒼港前』と云ふ題が大さう氣に入つたと

云ふ。氣に入つたと云はれる以上は、同君があの繪を描かれた時の心持に、僕は少なくとも觸れ得たのであらう。かう思つて僕はまた、新しく送られた作品を壁にかゝけて、薄明りの中で物を探るやうに、有田君が興來のときの心を讀まうとした。

有田君の手紙によると、このたびのは、入道雲が灰色にたがれて行く刹那を描いたもので、山の麓に一直線に明るくなつてゐる處は利根川、山は赤城の裾ださうだ。僕は初め、この説明に従つて、『雲のたそがれ』としやうかと思つた。しかしそれでは、前景の方に種子を蒔いてゐる人が、まるで留守になるやうな氣がしてならない。それよりはもつと、繪畫全體の感じを表はすやうな題が欲しいと思つて、『日没』として見たり、『うすあかり』として見たり、『アンダンテ』と云ふやうな奇抜な案も浮べたりしたが、どれも更に纏まつた感じを與へないやうな氣がして、ほと／＼考へあぐんで居るとき、吉田君が訪ねてきたので、いろ／＼相談してゐると、ふと After the Sunset と云ふ横文字が浮んできた。これを譯したら可いではないかと云ふ意見が、今度はわけなく二人の間に一致した結果、やつと目次に出したやうな題に落ちつた。或は『日没後』とした方が、よかつたかも知れない。

序でもう一つ書き添へて置くが、今度新になつた表紙畫は、山上の城を主題にして、やはり有田君が描いて下さつたものである。山上の城、山上の城！何か知ら僕たちの心を搖る響があるやうに思ふ。

ット思つて起きると、もう太陽の光線は雨戸の隙間から、青い蚊張の釣手の上に流れ込んで、昨日の陰氣さに引きかへ、平和の氣分が全室にタンマリと充ち溢れてゐた。

郵便は本郷なるT君からの綺麗な繪はがきであつた。宛名の下に左の文句が認めてあつた。

『拜啓只今S君が見えた。そして明日の放浪會は僕の家で午後四時から開くとに決めましたから、そのお積りて翌五日(土曜)午後四時までに是非お出下さい。待つてゐます。』

七月四日夜

T、Oより

*

K君が新橋を立つてから、數日經つと端書が來た。いつ出したか日附は書いてないが消印を見ると278—286—とあるから、和歌山縣の××港に ついたのは八日の午後八時頃であつたらう。

『△△君! 放浪會は心ゆくまで愉快だつた。やつぱり吾々には共通の使命があるよ。僕は、日曜の夜の十一時に出立。今こゝに着いた。これから四里程の山途を上るんだ。』

S、Nより

編輯たより

△炎暑の折から、先づ愛讀者諸君の健康を祝します。

△同人三並氏は筆頭になか／＼の元氣。三並氏は、この夏も亦オイケン（オイケン）の翻譯に、骨を折つて居られる。

△内ヶ崎氏は好評のうちに「近代の信仰」を出されたが、近々更にまた新著を出されることになつてゐる。

△小山氏、今岡氏共に熱心な思索に耽つて居られる、此の秋になつたら、大いに書いて貰へるつもり。

△加藤氏は和歌山から九州の方へ旅行、目下佐賀に滞在中。内藤氏も此の夏の間二二三の翻譯物を完成の見込み。相原氏は近日甲州の山へ出かける。野村氏も根津の下宿に引つこもつて、超人道徳を實行してゐる。吉田氏も思ひ出しては翻譯やら、創作やら、やつてゐるが、一向原稿を買つて呉れる本屋もなさそうなので大悲觀。何れ支那にでも出かけるだらう。

△早稻田大學の學生を率ゐて、關西地方を巡遊して居られた内ヶ崎氏は、八月一日無事歸京。不日また東北の方へ行かれることだらう。

(編輯小僧)

多い故郷の山や川、誠實を以て交つてくれる故郷の一人の友に會ひたい爲めであつた。これは私の正直な告白である。人は能く故郷に歸つて暖き家庭の中に入るといふが、私はそう感じられない。これは恐ろしく翻譯の思想を夢中に使つてゐるのぢやあるまいか。しかし自分のやうな思を抱いて歸郷するものも、決して私人ではあるまい。

日本の家庭は乾燥してゐる。何等の情味もない。冷かである。只權力干渉あるのみである。父兄は只怒ることのみを解して、愛情を以て子や弟を樂しむことをしない。

私は二三の友人と父兄より來る手紙について語り合つた。一人の友は、父からの手紙には命令文で「何月何日に歸郷すべし」と書いてくるといつた。他の一人は、一つ何、一つ何と書いて、まるで何かの證書のやうだといつた。甚しきは爲替だけで、文面は何もないことがあるといふ。子もまた親に對する手紙が、金送くれ位な文句あるのみであらふと思ふ。之によりても父子の情が如何に流露されてゐないかがわかる。

それでも私はまた今年も故郷の人となつてゐるのだ。(みねきし生)

△伊豆沼から

故郷に歸つて翌の日である。

私は今、小學校の庭に立つて居る。私の傍には粗造な低いベンチが二つ並んで居る。

それは五年程前のことである。汚ない裏町から此の高燥な小山の畑地を開いて學校はそのまま移し建てられた。丁度高等學校の

夏休みであつた、當時早稲田に行つて居たS君と夕方此のベンチに腰掛けて東京の話を聞いたものだ。附近の道善請に出て歸りがけの隣村の百姓が二三十人鎌や鎌を持ち、僕等の後に來て「あゝ佳い所だなあ」と言つた筈だ。切り崩された新しい土くれが坂なりに落ころげて居る。庭の縁には櫻の苗木が植付けられてあつた。

左の下の畑地には中學の校舎が見え、大きくなつたボブラが二三本風に搖いで居た筈だ。向ふの山と山との間には縣下一の伊豆沼が姿を見せて居た。遙か遠方には北山山脈が蜿蜒として連つて居るのが見えた。私はS君にいろんな話を聞いた。其時分東京と言へば如何程なつかしかつたらう。私が生れた時これが善い名だと言つて私に呼名をつけてくれた、そして私が二つの時死んだ伯父さんの墓がある。若い時から方々を流浪した年老いし伯母も居る。谷中には維新の際大逆人だといふので小塚原に梟首された母の伯父にあたる人の墓碑もある。不忍の池、上野の森、大學……いろんな想像を描きながらS君と話して居ると直ぐ下の麥畑を十二三になる小供等が四五人容程に伸びた穗の中から小さい頭をヒョイ／＼見せながら

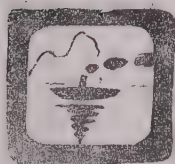
此處は御國の何百里

離れて遠く滿洲の……

と歌つて通つた筈だ

五年は夢とすぎた。私が東京に行くやうになつてからも三年になる。そして又一人今このベンチの傍に立つて居る、苗木であつた櫻は亭々として蔭をなして居る。北上山脈伊豆沼、中學の校舎も葉かげの隙から見ねばならぬやうになつた。

命日に伯父さんの墓參に行つた時、坊主の態度は甚だ氣に喰は



誌友から

△長崎まで

六合雜誌同人諸君！ 私は昨夜終列車で長崎に着きました。駒込の下宿から、赤門の前のアスファルト道、銀座の伴纏樹の蔭、新橋の人ごみ……とこういつた風に、私が東京を立つた日の印象を最一度おぼろげな意識の上に展げて見ると、三四日の旅行に疲れ切った神経が、隅の方で小賢かしい皮肉な冷笑をしてゐるやうに思はれるのです。

私が東京を立つ前に、あなたの雑誌の××さんに逢つた時、歸省したら、何か故郷の印象でも書いて送れとのことでしたが、まだ着いたばかりなので、新しい刺激の強い印象も見つからないのです。それよりも私は、箱根附近の谷間〱に見た鐵砲百合花と、御殿場から西に見た令歡花と、京都のステーションで、それも僅か十五分の停車の間に味ふた滑かな、デリケートな、テンダーなミナリフアインドされた、例へば酩酊な皮膚から滑つて流れるやうなあのローカル・トーンの京ことばを忘れることはできません。長崎に歸つてからの印象は何れ後でゆつくりお知らせいたします。だゞ一言申して置きますが、長崎は何時來ても懐しい町です。

瓊の浦といふ形容は、餘りに舊いでせうが、まづたく居心地の宜い、しつとりとした空氣の底に、古い時代の豪奢を夢みる人には恰好の町です。葛と蘿と、樅とに裏まれたローマ教の寺院、赤と黄の色彩に蒸し返されさうな南京街や、ちよつと他では経験のない南國的な氣分も漂ふてゐます。

私は今夜中學時代の友達に招かれて、大徳寺（寺ではありません、公園見たいな處です）の小ひさなレストランの人となるのです。

今夜は、この町の人の誇りとしてゐる、あの精靈流しの夜です。（欄外生）

△歸省の後

私の故郷は東北、日本三景の一といはるゝ松島に程近い一寒村である。文化の光の及ばない丈け自然は傷けられないで美しい。けれども夏は雨が多い。ともすると一ヶ月以上も続く。私は雨が嫌ひで避暑はさほどしたくはないが、避雨をしたい。

故郷の追懐とは何であつたか。自分を産んでくれた両親に會ひたい爲めではなかつた。早春の煩悶を抱きながら逍遙した思出の



黎

明

—LES AUBES—

エミール・ズルアーレン作

吉田 絃 二 郎 譯

この劇に現はるゝ人物

群衆——勞働者、乞丐、百姓、兵士、女、若き男と若き女、旅人、子供、老人等。

ジヤツク・エレニアン

護民官。

ビエル・エレニアン

彼れの父。

クレエル

彼れの妻。

ジヨルジユ

彼れの息子。

ヘエノオ

クレエルの兄弟。

オルダン

敵の隊長にして、故とエレニアンの門弟。

老ひたるギスラン

百姓

司祭

一人の士官。

一人の密使。

一人のぢぶしい。

オツビドマアニユの領事

羊牧ひ。

乞丐ベノア。

村の豫言者。

なかつた。若い女と何かベチャ／＼しゃべつて、碌な挨拶もしなかつた。何喰はぬ顔した小僧が澤山ある煤けた位牌の中から、無造作に撰り出して其の前にわけのわからぬ讀經をあげた。そして私に焼香せよと言つた。墓はさびしかつた。私は其の日の日記に佛教はこの土に亡ぶべしと憤慨してゐる。相當な生活をして居ると思つた伯母は、淺草の汚い町に長屋住ひをして居た。谷中の墓は大したものではなかつた。上野の森は煙にまかれて枯れつゝある。不忍の池は汚い泥池である、大學は苦しい勞働の場所である。現實は醜いものであつた。しかも今私は五年前の美しい想像を繰返すことが出来る。下の麥は色づいて刈入れ時である。私の弟は私が東京に行つた年、十一で死んだ。あの四五人の小供が行く行くうたふた哀しい歌は今も何處かできこえる。(目賀田生)

△銚子濱にて

編輯局の隅にこゝんで、泉筆など走らする人のあはれなる運命を笑ひながら、私は今晚鶏館の欄干に凭れてゐます。御存じの通り、こゝは嘗て國木田獨歩が泊つたことのある、ホテルです。朝に夜に、太平洋の怒濤が、吼るやうにして、此の家の垣根に迫つてゐるのです。

僅か麵麴を喰ちるに足るか足らぬの金錢に束縛せられてあつた私の自由！侮辱されてあつた私の權威！……私は墓さに追はれて、こゝに來たのではありません。私はたゞ一週間ばかりの時間ですが、せめてその間でも、いやな西洋人の尊大な顔（忘れてゐましたが、私はさる洋館に傭はれてゐる青年です）や、あの社長の人を人とも思はぬ尊大振りや、自家廣告の外何にも知らぬ人達の類

を見なくても宜いことが嬉しいので、こんな海岸などへ飛び出して來たのです。

こゝに來て初めて、私は眞實に自分の自由な情操に生きることが、できるやうに思はれます。私は朝毎に濱に出て、波の音を聴きながら、ゆくりなく誘ひ來る靜寂の涙に、心ゆくまで想ひ入ることができるのを何よりも懐しく思つてゐます。權威もない、矜りもない、光榮もない、しかしながら、自由も、壓迫も、侮辱もないこの濱邊は私の戀人のやうに懐しい世界であります。終りに貴社御同人さまの健康を祈ります。(静)

△關西地方旅行中の内ヶ崎氏から、こんな音信があつた。

第一信 毎日の講演やら、校友や有志の應接やらで、筆をとる機會がなく、閉口してゐます。あてにせて(編者言ふ。これは原稿のことである)下さい。

第二信 昨夕岡山につきました。山陰道にては、十四回の講演を終え、當地を経て、廣島にむかひます。名古屋を経て、八月一日迄に歸京します。後樂園は流石に明るい所です。

岡山にて S. U 生

乞丐等（平原の方を眺めながら）。

——何處も此方も眞つ紅だ、野つ原の方から一面にさ。焰がエレニアムの邸に移いた。家の道具から、一切合切街路に放り出してらあ、滅茶滅茶だよ。厩の中から、頭に何やら冠せやがつて馬あ引き摺り出してらあ。あの偉あ大きな寐臺の上に、病人の親父さま載つけて、運んづらあ。

——死滅寂滅のお鉢が、今あ百姓連に廻つたのだ。

——あゝ！ まあ何て素晴しい、お手早な復讐だらう！ 彼奴等が今度は、自分て追つ放り出されて

らあ、曩日まで私等を追つ放り出してゐやがつた僻にのう。何の國道も彼奴等の群て繡目鳥押しよ。

みんな私等の呪詛の驗が現はれたのだ。みんな私等の惡體がよ、みんな私等の祈りが現はれたんだよ。

みんな私等の憤怒だよ！——彼處を見い、家畜が沼の方に飛んで行くわ、

種馬がみんな竿立ちになつて、挽繩を二つに噛み切つてらあ、

そしてあの怖ろしい炬火に鼻噴を吹きかけてゐる。

そして一疋が飛んで行つたわ、踵が燃えてゐらあ、

そして死の焰が彼れの天翔けるやうな蠶の上に燃えてゐらあ、

振り返るわ、そして焰を喰ふわ

彼れの頸に喰ひ付いた焰を。

みんな來て見い、あの手を見い

乾草杈でもつて、焰を搔き上げてゐる、あの狂人の手を見い。

——どの鐘もどの鐘もあの風のなかで發狂しさうだ。どの寺院も、どの塔も頽れて了うわ。神さまご

町の豫言者。

第一幕

第一景

限りなくひろがりたる廣原。右手にオツビドマアニユから下りて来る數條の道路あり、左手にこの廣原から爪先き上りに登つて行く數條の小徑あり。眼ぢのかぎり、並樹の列がこれ等の道に沿ふて立つてゐる。敵が今オツビドマアニユの町を包圍してゐる。そこいら一面、火になつてゐる。遠く隔りて大きな揺り火、早鐘の響き、

乞丐の群が塹壕を埋めて立つてゐる。他の人々は、少し小高い礫のやまの上に立ちながら、叫んでゐる。

乞丐等。

——見ねえ、この堤から見ねえ、何の村も何の村も、克うく燃えてらあ。

——樹に登れやい。こつちの方が宜く見えらあ。

（一人の乞丐、樹に攀ぢながら。）

——此方だ！ 此方だ！

乞丐等（町の方を眺めながら）。

——町の方の煙が漸次明るく、漸次大きくなつて來た。
粉挽き小屋が焼け落ちらあ。

（燃焼と爆發の響き）。

港の工場が燃えてらあ、あれ波止場も、あれ船渠も。あれ石油庫に轉火つたわ。

帆船も、帆檣も黒焦げだ、それで大空に幾つも幾つも、十字架が出来てらあ！

私には私等のこの齒そのものゝやうに見えるのだ

私等の武者顚むしゃだんひした爪が、憤怒うんぬに燃えて引き裂いてゐるやうにも見えるのだ！

私はこの町に歸つて來てはまた去る、歸つて來てはまた去ぬるのだ、それでまた歸つて來るのだ

歸つて來る度に私は不吉な運命を引つぱつて來るのだ
そして私が物乞ものこりをする門並かどなみに一々それを放り出して來るのだ。

私の兩手は、彼等が育て上げた疫病を擴げた

私の兩手が彼等の死人を根扱ねくぎにした、

彼等の死人を奪つて了つた、私の老ひたる兩手が

彼等の娘共に猿轡さるばを喰ませた、そして娘等を犯した、

私は人間の憎惡にくしみが達く限りに、彼等を憎んだ

地上に於ける惡の惡なるものを憎むやうに。

そして今こそ彼等に羞耻はぢといふものを知らしてやれ

彼等の槍や彼等の棍棒が何の役に立つのだ。

一人の老ひたる男。 彼等に羞耻といふものを知らせたとてそれが何の功德にならうか？ 彼等に最う何

が能でさるものか、彼等は今では私等より餘つぽどみぢめなものだ。

乞丐こぎやのベノア。 饒舌じょうぜつするないお前は一人前の男になるのには、餘り老ひばれ過ぎてゐるわ。

(更に新しい一團がオツビドマアニユの道に沿ふて急ぐ。勞働者の一群が現はれる。その中の一人が乞丐等に話しかける。)

勞働者。 エレニアンはまだお通りにならないかね？

自身が、吃驚してござるかも知れねえよ。

何故でこの戦争が沙汰止みにならなかったのか、誰にか解るかい？ それはな何の王さまも何の

王さまもオツビドマアニユが欲しいのだ。王さまといふ王さま達はこの世界の涯々までもそのオツビドマアニユが欲しいのだ。それだからさ

(人々が無我夢中になつて飛び出して来る。慌てふためいて右、左に隠れる。或者は止つて、そして喚く。)

百姓共が荷車の上に、道具から衣物から、積んでゐるわ。彼奴等、町の方にやつて來らあ、彼奴等こゝを通るだらうよ。

乞丐の群。さあ今こそ私等がオツビドマアニユに入り込む刹那だ。

——彼奴等に痕いてなあ。

乞丐のベノア。彼奴等に痕いて？ それでは、一體お前達は何ういふ部類の人間なんぢや、えつ？

お前等も私も謀叛人だつた筈だが、放浪者だつた筈だが、

さうだ、お前等も私も、みんなが、何時もさうだつた、

あの農作場や邸の奴等が、

私等を折り曲げて、私等を破壊して了うたのぢやあないか、この疼くやうな困窮に？

彼奴等は、彼奴等は麵麴を持つてゐた、そして私等は、私等はあの通りに、全然あの通りに飢餓え

切つてゐた。

あの鋭い焔は、

現在、彼奴等の燃えてる、あの穀倉を喰う焔は、

その恐ろしい智慧で、明日の「新しさ」を齎らして下さるのだ。

あの方の明るいご書物は私等が考へる事象の凡べての上に、光明を投げかけて呉れる。

私等、人間が學ぶべきことはみんなそこに書いてある

何うして善に導かれるのか

何が人間を昂めるのか、現在のやうな刹那に、何うして私等が神さまになれるのか、その道がちやんとそのご本に書いてあるのだ

羊牧ひ。それではお前もこの町であの方を愛する、あの方を擁護つて上げる一人なのだね。

労働者。百人もあらあ、千人もあらあ

あの方を崇拜して、あの方に隨いて行かうつていふ輩がなあ。

あの方が何處に行かつしやらうと驚くことはねえ、死ぬまでも一緒だ。

(エレニアンを見やうとして労働者は前の方に歩み寄る。澤山な人々が逃げ出して来る、その後から百姓の一群が荷車や、手車を曳いて来る。重い荷を駄載た馬が幾頭もこの丘に上つて来る。)

老ひたるギスラン。私等の馬も甚う弱り居つた。尙一度憩はしてやらう。

あーれ、そこに、これ乞丐どもが、これこれ、あの横道者のエレニアンは此の道を通らなかつたかのう？

乞丐のベノア。老ひぼれのギスラン、饒舍るない。

老ひたるギスラン。饒舌るない！ 饒舌るない！ 何故して？

誰に！ それではエレニアンはお前等の仲間なのかい？

一人の乞丐（勞働者に）。その羊牧ひが彼れを知つてゐる。彼の男にお聞き。

勞働者（羊牧ひに）。エレニアンは此處をお通りだつたかい？

羊牧ひ（ぼろ／＼の衣を着てゐる。私は彼の方を待つてゐるのぢや。彼の方は親父さまを看に行かつしやれたのぢや。私は最一度お目にかゝりたいのぢや。私は彼の方がまだ小さいころに彼の方の病氣を癒して上げたのぢや。

勞働者。彼の方はこゝには來るに決つてゐる。それぢや一緒に待つてゐやう。

羊牧ひ。何うして、彼の方はこの市を逃げさつしやれたのぢや？ 彼の方の敵共が、ちやんと彼の方を引き留めて置きさうなもんだがなあ。

勞働者。エレニアンはご自分の氣隨に爲すつたのさ。彼の方の親父さんが村の方で、死ぬやうだつたのだ。それであの方を呼んだのさ。

羊牧ひ。あの方がオツピドマニユを征略るだらうかう？

勞働者。そりやあお前、あの方は人民の首領ではないか？

あの方こそまあ眞實その不思議な、そして神聖なものなんだ

あの方こそこの現在といふ時間の影を超越して、永久に生きるものなんだ、

既うちやんと將來といふ時まで生き延びてお出でなのだ、あの方は既う將來といふ時にまでも觸れてお出でなのだ。

誰があの方ほど見透しの附く人間があるものか

尤も過失も随分あつたらうが、その智慧の恐しさといつたらなあ、

(調子を變へて)。

恰度今この乞丐奴が私を殺すと言つてゐたところだつた。

(乞丐ベノアに向つて)。

さあ、殺せ、さあ、手つ取り早く願はう！

こゝに私の兩手がある、こゝに私の兩腕がある、

私はこれをば今までに賣つて了うてゐたのぢや

それも無駄骨の勞働に賣つてゐたのぢや。こゝにはまた私の片意地な腦髓がある。

こゝに、氣孔といふ氣孔が縮萎れ果てた私の皮膚がある、

こゝに私の背がある、こゝに私の破れちぎれた檻樓がある、

みんな私が身に附けて引き摺り歩いたこれがその廢墟だ

この長い月日を、この長い月日を！

眞實私は私自身に訊ねるのぢや、一體私が生さるといふは何の爲めなんぢや？

たま／＼私が畑を堀れば、霜が枯らす、

たま／＼私が牧場を耕せば、悪い星の廻りが来る。

私の親父が、一ファースティング、一ファースティングと積み上げた凡べてを、

そして彼れが吝嗇家のやうに絞り上げた、隠した、借り入れた凡べてを、

私はその凡べてを失くした、その凡べてを喰ひ盡した。

私は私の息子等を神々に懇望して得たのぢや、その彼等が私を喰ひ食ふたのぢや。

乞丐のベノア。老ひぼれのギスラン、こゝでは私等こそ權威なのだ、それで私はお前を打ち斃すことも能さる、お前が人殺しだなど、喚く暇もないやうにな。もし、今の年まで、今日が日まで、お前が、私等に、お前の門口で、豚の喰ひ餘しや、臺所の洗ひ流しても投げて呉れたぢやないかと言ふんだつたら私等だつてな、仍り今の年まで、今日が日まで、お前さんの爲めに祈禱も上げたらう、利生も願つて上げたと言はれやうぢやないか？ 五分五分だ、過去は帳消しぢや、それで現在は私等の所有だ。（と言ひながら、彼れは嚇すやうにして、ギスランの側に寄る。）

一人の百姓（走り寄つて）。ギスランの旦那、ギスランの旦那、あなたの農場は、「鈴の音の牧場」（Tinkling Meadow）から、「狼の原」（Wolf Plain）まで、べた一面の畑になりましたぜ。

立ち樹が燃えてゐますぜ、あの並樹道一面に被ひ冠さつてな、

それから樅の森がすつかりさ

豪い聲で喚いたり、吼へたりしてな、

そしてその畑がみんな卷き上るのでさあ、

あの雲の上まで、

そしてその畑があれあの空を嚙んでゐますあ！

老ひたるギスラン。うむ、そしてそれから何ぢや？ 一體そんなことが私に何の關係があるか？

何の平原も、何の森もみな失くして了へ、

そしてこの風と、この空氣と、この大空を焼いて了へ、

そしてこの地球それ自身を、粉碎かれた礫のやうに零碎いて了へ。

この生き／＼した大空がむかつくやうな煙に喰ひ盡されてゐる。

牧場の艸は凋み果てゝ、嫩艸や、禾穀までもが、

硫黄の毒深い吸呼に養はれてゐるのぢや。

今ぢや

その、勝利の悲哀のうちに、

鐵と、鉛と、焔が生れるのは。

そして煉獄それ自身が、鐵と鉛と焔と同時に生れて來るのぢや！

(乞丐等は後退りして、そして脅すことを止める。)

一人の乞丐。氣の毒な男だ！

老ひたるギスラン。氣の毒な男ぢや！何うして！

(一人の百姓を彼れの方に引き寄せて、そして燃えつゝある邸を指しながら。)

お前は何う考へるかね、私の邸に火を放けたのは、敵ぢやと思ふかの？ お前の心を落ち附けて考

へて見るが宜い。(彼れの兩手を示しながら)それは、この二つの手だつたのぢや。

そしてまた「螢が池」(Firely Pond)に沿ふたあの私の森は？ 仍りこの兩手ぢや。それに私の穀倉と

私の禾堆は？ 仍りこの兩手が。

何うして、何うして、このギスランは氣の毒な男ではないのぢや。恐らく彼れだけはさうだ、あの

瞭然と見透しの附くあの男だけは氣の毒な男だ。私等は、最う私等の田畑を尊敬も爲ない。私等は「緩

りそして確かに」といふことに對しては忍耐を失うて了うたのぢや。私等は芽を殺す、餘分な熱を與へ

彼等は録でもない町のなかに吸ひ込まれて了うたのぢや、

彼等は役にも立たぬ、名譽でもないことに彼等の生命を提供したのぢや、

小ひさな村々も、小ひさな町々も頽滅びて了うた

オッピドマアニユが彼等の血を涸らして了ふた

それで今では、あれを見い

畑といふ畑、邸といふ邸には

ありとあらゆる疫病が蔓延してゐる、水の、地の、大空の、そして太陽の疫病が！

一人の百姓。お前さまの悲哀は私等の悲哀ぢや。私等あ誰も彼れもみゝんなから最う臺なしさ、

老ひたるギスラン。私がほんの子共だつたころには、種子蒔きの季節を祝ふたものぢや、

まだそのころはこの大地といふものが、人類にも、角ある動物にも親切だつた、

亞麻が花のなかに宿つた幸福のやうに、さも生き／＼と芽を出して來たものぢや。

ところが今では、ところが今では人類がこの大地を怖れるやうになつたのぢや。

それで眞實、必要は何物かを發かねば止まなくなつて來たのぢや、

何か神聖な、何か隠されてゐたものをば。

それ、今日では一も二も石炭なんぢや、それも昔は隠されてゐたのぢや、

凡べてのものを掩ふ夜の裡に。隠されてゐたものぢや。

網の目のやうな軌條が、黄金の信號機に飾られた廣原の上を縦に横に。

列車が丘の牧場を擦れ／＼に走つては、崖を貫いて行く。

そして大嵐が眞つ紅な指をば
南から北へと縦横に突き出してゐる。
今こそ火鴉の時世ぢや。

狂氣のやうになつた爪と、突つ張れるだけ突つ張つた翅を延して、
彼等が、家の上に跳び掛つてゐる、籬の上をかするやうに翔んで行く。
そして彼等の燃え上つた羽根を運んでは、彼等は
變り易い大空から大空に羽毫を被せてゐる。

岸から荆棘をかけて眩めくほど急いで翔ぶ
二度と戻つて來もしない道を、

彼等は焰の使者のやうに見える。

このまん圓い世界の涯から涯を廻る焰の使のやうに。

一つの、物の音もなしに、恐怖が湧いて來る。

彼等の沈黙の、翱翔の神秘。

彼等の嘴にはこの大地を引き裂くだけの鋭さもある。

そしてこの大地の胸の底から

私等の法悦を頽廢すだけの無慈悲さもある。

る、設備を爲てやる、原理を考へる、工夫を凝らす。この大地は既う今では妻てはない、ほんの蓄妾も同前ぢや！

そして、ご覧、あれをば、敵がまああのやうに絶滅してゐるのぢや！

その大地が町といふものゝ爲めに傷けられた。それが、また、戦争に焼かれた、戦争の炬火に焼かれた。

賢い男があつて、尙少とてその大地をから／＼に乾燥かさうとしてゐた、

その町をば彈丸が燃やしてゐる。

あゝ、あゝ、大地の廢滅！

最う雨もいらぬ、露もいらぬ。

峯の頂を飾る雲もいらぬ。

最う太陽も、澄みちぎつた、氣の晴々しい月もいらぬ。

それで一と思ひに滅して了うた方が結句幸福ぢや、

村の方も滅して了うた方がのう。

一人の百姓なるほど、ギスランの親父さんは頭の調子が妙だわい。

他の男。この大地の惡口を叩くなんて、飛んでもねえ罪造りだのう。

他の男。何と信じたものか、私にはさつぱり解らなくなつた。

(村の豫言者現はる。火鴉の翔り行く身振りをしながら、口のなかで何かフム／＼と物を言つてゐる。)

村の豫言者。森が翔ふ、牧場が流れる、

たのぢや、運命の恐ろしい車輪くるまの、その輻やと輻やの間に、私等の常識といふ、あはれな小ひさな横木よこぎを入れて、舊ふるい舊ふるい希望きぼうを抱いだいて舊ふるい幻想きぼうしを描えいて、それにも氣付きかんで、そこにゐたのぢや。

(村の小作人や、労働者や、既すでの女や、乞丐達の若い人々の一群が、ビエル・エレニアンを昇床しょうとくに載せて進んで来る。群集の中には一人の僧侶も伴いてゐる。瀕死の境にあるビエル・エレニアンは、苦痛が極度に達してゐるので、先づ停つて呉れといふ訴へを人々に身振りて知らせる。)

ジャック・エレニアン。諸君、こゝに。靜かに父ちちを卸おろして下ください。

(父を擔いでゐる人々を介けて置いて。それから獨り言のやうに。)

お氣の毒な老人だ、お氣の毒な老人だ！祖父おぢいさんと同じやうに、お父とうさんも、彼れの寐床みとくでお死かくれることになることは、出来ないのか！おう、このやうな戦争たゝかひ、このやうな戦争たゝかひ、彼等かれら(戦争)はダイヤモンドのやうな憎惡にくしみを以て憎まれなければならぬのだ。

ビエル・エレニアン。エレニアン、エレニアン！

ジャック・エレニアン。こゝにゐます、お父とうさん、あなたの側そばにゐますよ、あなたのお手と、あなたのお眼めの直ぐ側そばにゐますよ。あなたの側そばにゐますよ、恰度ちやうど昔むかしのやうに、恰度ちやうどおッ母かさんの時ときのやうに、眞實ほんじつに側に寄よつてゐますよ、私はあなたわたしの心臓しんぞうの浪打なみうちつのを聴きくことがてきる位なんです。私わたしがお見えになりましますか？私の言いふことがお聞きこえになりますか？、私だといふことがお解わかりになりますか、私が何時いつもあなたを愛あいしてるといふことがお解わかりになりますか？

ビエル・エレニアン(息遣ひ苦しげに)。駄目だ、駄目だ。お前等まへらはオツビドマアニユの家うちまで私わたしを運わたぶことはできない。私は満足わしぢや、平原が私を取り巻いてゐるのぢやもの。私はたゞ一ツのお願ねがひがあるの

私等が蒔く種子は私等が、蒔かぬ前に、死んで了うのだ。
天翔ける焔の翅を附けた草摺が

航路を落日の方に取つてゐる、

それが、彼等を天空に巻き上る煙のなかに、

恰度野飼の荒れ狂ふた馬が跑けるやうに見える。

これこそ豫言せられてあつた「その時」なのだ。

おう、鐘！おう、鐘！あの鐘が豫言した。

收穫の廢滅を豫言した。そして凡てのものゝ死を豫言した。

これこそ豫言せられてあつた「その時」なのだ。

おう、死の鐘！おう、死の鐘！死の鐘が豫言した。

死の鐘がこの世界の葬禮を豫言したのだ。

老ひたるギスラン。 あゝ眞個だ、あの男は巧いことを言ふわ、あの豫言者、あの狂人、あの男は巧いことを

を言ふわ、私等はみんなあの男を馬鹿にしたもんだ、私までもがあの男を馬鹿にしたもんだ、私はちつともあの男を了解しなかつたのぢやがなあ。

あゝ、あれ恐ろしい光明が、あすこに。（彼れは地平線の方を指す）

だが、あの男は、つと先からそれを知つてゐたのぢや、そして私等も、私等もみんな、そこにゐる

羊牧ひ。私は、ずーッとあつちの方にな、遠い／＼ところに行きましたぢや、幾年も幾年もな。それでな、私は生れて新らしい、また不思議な國々を見ましたぢや。人間は今日から明日へと、この沼からあの沼へと、そのやうに當て途もなく彷徨ひますぢや、それで誰かの死に目に逢うやうに、恰度恰好な時に複つて参りますものぢや！

ビエル・エレニアン、みんなも随分私に氣不味いこともあつたらうが、どうぞ允して呉れ。

司祭。ご案じなさいまするな、あなたはキリスト教信者であいてだからには、あなたは救はれるになるでございませうよ。

(司祭退場。)

ジャツク・エレニアン(臨終の父の傍に、羊牧ひを導きて。)

お父さん、あの羊牧ひです、あなたは克くご存じでせうよ。あの「鈴の音の森」の羊牧ひです、あなたの召し使ひや、あなたのご友人のうちでも、最も年嵩の男です。

ビエル・エレニアン。(姑くの間羊牧ひを凝視てゐる、そして彼れを認めたので出し抜けに、彼れの腕を握つて、自分の方に彼れを引き寄せながら。殆んど確かな聲で。)

私が死んだらな、羊牧ひや、何も彼も、舊い種子を破壊して呉れ。舊い種子はどれもこれも惡の芽に満ち溢れてゐるのぢや、彼等はどれも腐敗してゐるのぢや、彼等は徹てゐるのぢや。最う彼等にはこの大地の擁護者となる望はないのぢや。それでお前は世界の涯から涯を彷徨ふたお前は、私の牧場に、新しい種子を蒔いて呉れるだらう、この世界にはまだ知られてゐぬ、あの遠い國々をさ迷ふて、お前が見て、お前がこれと見込んだその生命のある種子、新しい種子、素直な種子を蒔いて

ぢや、それはな、あの司祭をどうぞ私の許に寄こして呉れ。

ジャック・エレニアン。お父さん、あなたの御意に誰が何と申しませう。
私は姑く遠慮をいたしませう？

ビエル、エレニアン。私は獨りで懺悔を爲なければならぬ。

(エレニアンは傍に退く。司祭近寄り来る。老ひたるギスランは、おづ／＼と護民官エレニアンに近寄る。そしてビエル・エレニアンが懺悔を爲てゐる間、護民官に話しかけてゐる。)

老ひたるギスラン。エレニアンさん、仍りあなたの方が何時も正當でした、私は今解りました。私はこれまでで引ッくら返へして考へてゐました。おまへさまがオツビドマアニユを支配なさる、私等は私等の野良ておまへさまの噂をしますのぢや。さうすると私の悴どもがお前さまの肩を持ちますぢや。恐らく彼等が正當なのでもありません。だがな、もうし、今日ではこの國は死んで了ひましたぢや、何うしたら生きて行かれるものでせう。何處の隅に行つて私等は、その種子を蒔くやうな畑を、そして穀物を成長てるやうな畑を探したもんでがせう？何處を歩いたら煙と、下水道と、毒藥と、戦争に潰されぬ土地があるでがせう？もうし！もうし！

(エレニアンは黙したるまゝである。彼れの全心は彼れの父に集中せられてゐる。老ひたるギスランが話了つた時、僅かに軽く肩をすくめる。)

羊牧ひ。(徐かにエレニアンに近寄りて) ジャックさん、私を記憶へておいでですか？

ジャック・エレニアン。何！羊牧ひの爺や、あゝ、お前はまだ壯健だったのか？

(狂喜して彼れを抱擁する。)

私に與へた悲哀をも祝福した。そして私はお前を愛したと同時に、この世界をも愛した。私は太陽と共に生活した。恰度、神のやうに。太陽はあらゆる事象の、主なのぢや。人間の眼に見ゆる主なのぢや。もし私が夜に死んだら、その太陽の留守に死んだら、みぢめぢや、刑罰でゝも殺されたやうぢやないか。ありがたい。太陽がまだ私の眼の前にあるのぢや、そして私は私の兩腕を延して、それに達くことがでさるのぢや。(彼れは延び上つて凄じい煙の方を見る) 私はもうあれを見ることが出来ぬ。しかし私はまた、幸福な勝利の光明を感じてゐる。

ジャク・エレニアン。お父さん！お父さん！

(彼れの父のこの言葉を迷ひとして、その迷ひを解くべきか、或はこれ等の言葉に深き寓意あるものとして、その火急の豫言を翫味すべきであるかに惑ふてゐる。)

ビエル・エレニアン。

私はその勝利の光明を感じる。私はそれを愛する、私はそれを了解した。そこからだ、今その光明からたゞ春の潮の味が湧いて來ねばならぬ！

(彼れは倒れてそのまゝ息を引きとる。ジャク・エレニアン父を抱く、そして恰かも彼れが、今まで彼れ等に隠されてあつた第一眞理を吸ひ集めてもするやうに、強く父の口に彼れの唇を壓しつける。)

ジャク・エレニアン。お父さんはご自分で仰つしやつたことを、意識しておいでだつたのか知ら？「たゞ春の潮の味が湧いて來やう」！

(徐かに徐かに彼れの幻想から覺める。乞丐、百姓、勞働者達が彼れを取り巻いて立つ。羊牧ひが彼れの兩手を握つて、彼れを近く引き寄せる。門衛等は死骸をかゝげて前方に進む。此の刹那に女、子供の一群が町の方から來て、上手の道から廣原の方に出て來る。老人達が先頭に立つてこの群を率ゐてゐる。)

呉れ。

(間。羊收ひは頭を垂れて蹣く。乞丐、門衛等も同じく蹣く。)

それから私を太陽の方に向けて呉れ。

(人々は彼が命するまゝに爲る。折しも夕陽が暮いてゐる西のかたは、燃え猛つてゐる村々の煙が、眩いまでにその附近の空を華照してゐる。その煙の熱氣が、エレニアンの顔にまで達してゐる。)

一人の百姓(ピエル・エレニアンを指して)

焰の影がお顔の上を滑つて行くわ。

地の一人。焰の方を向いておいてになるわ。

他の一人。(ピエル・エレニアンの周囲の人々に向つて)

それ、それ、焰を見さしては不可ねえ。

他の一人。右の方にお向け申せ。

他の一人。此方だ、此方だ、右だ、右だ。

(まかま、老人は昇床に縋り附いて、立ち上る。そして落日と煙の方を見つめてゐる。)

他の一人。氣の毒な人だ！ 萬一あの人が知つてゐたら！

ピエル・エレニアン(辛つと聞えるやうな聲で)

ジャツク・エレニアンや、私の側にお出で、側に。私の指で、お前を握つたまゝで死なして呉れ。

(彼れをやさしげに撫でる) そして私がこの世界で最も愛してゐたあの方向のところを、眺めたまゝで死なして呉れ。私は心の判断が狂ふまでもお前を愛した、私はついぞお前を拒まなんだ。私は大抵お前が

に於いて、飽くまでも社會を呪ひ、集團を非とする。しかしながら、斯くのごとく呪詛の聲を放つのは、云ふまでもなく、斷じて社會其のもの、人類そのものゝ權威と意義とを撥無すると云ふやうな妄想に驅られて居るので無しに、妥協、迎合、虚飾、嫉妬、陷穽、脅喝と云ふやうな一切の惡徳の爲めに、靡爛しきつた既成の社會人類を撥無せんとする絶叫に外ならない。彼等の説く個人主義が、動もすれば暗濶たる虛無主義に墮し終るのも、これが爲めである。合理的團體主義に對する原始的個人主義の争闘を、其の根本まで探り入つて、「其處にこれまでの人々の主張した以上に、明かな自覺と鞏固なる信念と奮闘的な努力とを以て、積極的な絶對的な新個人主義を樹立しなければならない」と云ふやうな聲が起るのも、畢竟するに、「自然を征服せんとして、却つて自然に征服せられ、物質的文明を進歩せしめたる報酬として、却つてこれに伴ふ不安を獲た」結果なので、彼等が社會乃至人類の改造を企てるよりも、まづ第一に自己の積極的建設を思ひ、「欺かれたる安心」よりも、個性の根柢より湧きたつ安心を求めゐるのは、むしろ當然の経路であり要求であると云はなければならぬ。

私は現代青年の心に動く要求の焦點が、すべて此處にあると云ふのでは無い。勿論いはゆる新人の間には、一種の耽美的傾向に埋もれて、すでに氣力の消耗を自由してゐる輩もあれば、古い個人主義に閉ち籠つて、狹隘なる自我を誇示してゐるやうな群もある。しかしながら今もここに一人の教役者があつて、先づ斯くの如く消極的な若き人々に手を染めるとするならば、私は其の教役者の態度を目して、現代人の中心要求に觸れたものと云ふに躊躇するであらう。と云ふのは、この國に於ける所謂新思想の鍵

を握る人々の態度が、すでに否定と破壊との關門を一步踏み越えてともかくにも積極的建設の一路に、面を向けて居るやうな氣振を示してきたからだ。

人もし今日の自覺ある青年に向つて、神の權威を信じうるかと訊くならば、其の多くは言下に否と答へるに違ひない。けれども若し言葉を更めて、「我」の權威を信じ、徹底せる社會の力を尊重するかと聞くならば、恐らく一人と雖も否定の聲を放つものは無いであらう。私の見る所にして誤がないならば、かゝる青年の間には、神の生命には觸れながらも、「神」の名を呼ぶことに不滿を感じるがゆゑに、宗教生活を意識せずに過ごしてゐる人たちが少なからずあるやうだ。私はさうした人たちに接して、内生活のいろ／＼な經驗を聴くとき、豊かな暗示を受ける事が多いのであるが、さういふ人たちの追求してゐる生活は、私の考を以つてすると、隱遁的生活で無くして、徹底せる實生活である。消極的生活で無くして、積極的生活である。宗教的生活で無くして、宗教生活である。

私がこゝで、宗教的生活と云ひ、宗教生活と云ふ事については、いさゝか説明を要する。

一體、この「的」と云ふ言葉ほど、いやな言葉は無い。私どもの生活が、動もすれば斷片に墮したがるのは、私どもに此の言葉があるからでは無いかとまで思ふ事がある。私がこゝで宗教的生活と云ふのは、祈禱三昧の境に浸り込んだり、神の名を呼んだり、カテシズムを讀んだりして、心のリズムを繋いでゆく生活を指すのである。實生活の渦中より離れて、しづかな觀照の世界に没入する生活を指すのである。Realityを外にして、Romanceのなかへ



時評

宗教的生活と宗教生活

いはゆる現代人心の不安と動搖とは、生活難のすさまじき壓迫と、沒理解なる道學者乃至宗教家の生命なき救済策とに由つて、ます／＼其の火の手を高めて行くばかりである。かゝる壓迫は受けながらも、かゝる一種の高壓力には接しながらも、尙ほ且つ生きんことを欲する人々の群に對して、現代と飽くまで沒交渉なる隱遁的生活を強ふるので無しに、何等か積極的な生活態度の發生を要求する人々は、この際どうしても、實際的にして而かも具體的な研究に苦慮する所が無くてはならない。雜誌『神學の研究』の同人諸氏が、この點に目を着けて、其の六月號に、現代人心の要求に關する各方面の意見を輯録する傍、精神界各方面の主張要求と認むべき意見を、近刊著書または新聞雜誌より摘記した事は、いろいろの意味に於いて、最も賢明なる態度だと云ふべきである。

樋口龍峽氏の『近代思潮の解剖』に依つて、はじめて近代思想なるものを知りかけたとか云ふ噂のある人々は勿論、現代人の心に動く切實なる要求に對して、これまでより多くの注意を拂はずに

ゐた人たちは、此の眞面目なる而かも時宜を得た企に接して、果して如何なる感じを懷いたのであらうか。一日もはやく聴きたいのは、『神學の研究』同人諸氏が、この重大問題に對する公平にして而かも徹底せる解答である。

私もが此の一事につけても云はなければならない事は、思想の錯雜紛糾を來たせる今日ではもはや、自然主義がどうであるの、個人主義がどうであるのと、主義の名に依つてのみ、一代の思潮を解釋する時機で無い事だ。一のモットーに依つてのみ、各個人の傾向なり要求なりを判斷すべき時機で無いことだ。斯く云ふ事についての説明は、殆んど無用である。何故かと疑を容れる人は、まづ大戯曲家のバアナアド・ショウを見たまへ。彼は其の逸品たる『武器と人』といふコメディの外題に、An Anti-romantic Comedyと銘を打つて居るのにも拘はらず、其處には反つてロマンチックの味があると云はれて居るでは無いか。もつと手近いところには更に痛切な一つの例がある——この國の基督敎界で、耶穌基督は神であるとか、福音主義を高調するとか、口癖のやうに云ふ團體を中心にして居る人々の口からして、動もすれば至つて自由な言説を聴くなど云ふ事實は、主張主義の表白に依つて、現代の思潮を律する危険を、さらに證據だてるものでは無からうか。

現代に生くるもの、殊に生きんことを要求する若き人々の群は、飽くまでも自我の權威を主張してやまない、飽くまでも自己の中心要求の意義に對する自覺を欲してやまない。しかしながら、それだからと云つて、彼等に全く社會意識が無いと思ふ人があるならば、それは大間違ひである。彼等に全く人類の觀念が無いと云ふ人があるならば、それは盲目的判斷である。無論、彼等は一

て再三同論文を熟讀して見たが、予個人に取りては、何等取消も訂正もすべき理由と發見することが出來ぬ。併し予は累を該先輩に及ぼすことを好まぬが故に、重ねて予の趣意精神を明かにして置きたいと思ふのである。

蓋し所謂「自由基督教に同情を有する人々」の反感を買つたといふのは、該論文中「身を縛る鐵の鎖は之を斷つべし、心を纏ふ黄金の羈は容易に斷つべからず」といふ一節であらうか。果して然らば、此問題に就ては、更に根本的に考へて見たいと思ふのである。

靈肉抗争の問題は、随分古い問題である。併し今日に於ても尙此問題は吾人が心靈苦悶の種ではないであらうか。靈肉一如の人生觀は、思想の上に於て、精神の上に於ては、可能であらうが、一度現實に觸れる時には、果して徹底的に實現することを得るであらうか。果して何等の矛盾杆格なしと言ひ得るであらうか。吾人が一度吾人の信念を告白せんとす、大道露天に於てもなすことを得るのであるが、併し更に之を組織的に、永續的に發表せんとする時は、勢ひ殿堂伽藍といふ、現實の建物を必要とせぬであらうか。吾人が基督教を傳道せんとする時にも、集團を形成し、信仰上の共同生活を管まんとせば、勢ひ教會寺院といふやうなものを要することにならぬであらうか。而して此の殿堂や、伽藍や、教會や、寺院や、凡そ此等のものは、何を以て建設するのであるか。曰く、資本の力、則ち此外にはないではないか。

吾人の心靈は、時間を超越し、空間を超越して天外の理想郷にも馳せることが出来る。併し吾人の肉體は地上寸歩も離るゝことが出來ぬ。神魂は自由である。併しながら身體は不自由である。心は博愛人道の理想を思慕しても、身は生存競争優勝劣敗の巷を

脱することが出來ぬ。進化の理法生物學的の約束を破却することが出來ぬ。理想と現實との衝突を呼び、靈と肉との抗争に苦むもの世間果して幾許ぞ。妥協の生活はいくらも出来るであらう、併し最も眞面目に、眞剣に、深酷に、人生を味識し、人生を表現せんとする者に取つてこれ以上の苦痛はあらうか。現代の若き人々の多くは、實に『生活』といふ羈に縛られて、心にもない渡世をして居る。就職難、生活難の叫聲を以て、單に物質上の救済を求むるの聲となすは、あまりに皮相の見解である。彼等は實に心靈の開放を求め、心靈の革命を希ひつゝあるのだ。然も其結果が如何に、社會上の不安を増しつゝあるかは、實に豫想外である。これ何が故に然るかと云へば、資本の力、資本主義の勢力が、全社會、全生活を壓迫して、宗教も政治も教育も道德も、乃至個人も國家も悉く其餘光後塵を拜するの狀態にあるが故ではないか。

資本主義は元來自由の子である、平民の子である。彼は夫れ自身の力を以て、能く封建門閥の勢力に反抗して、之を征服し得たのである。然も一度勝利者の地位に立つや、忽ち其本を忘れて、貴族主義、專制主義の魔王と變じたのである。凡そ近代の政治も外交も、教育も宗教も哲學も、文學も藝術も、資本主義の影響を無視しては、觀察することは出來ぬと思ふ。廿世紀の文明は、たしかに資本主義の賜物である。然も今や此廿世紀の文明は、戈を逆まにして、資本主義を反噬せんとするの有様ではないか。

我等は屢々若い牧師の告白を聞く、曰く『自分は到底ミッションの神學で満足することは出來ぬが、今急に牧師を止めては食ふに困るからね』と。又若い神學生の告白を聞く、曰く『自分はミッションの補助を受けて勉強するのは、實に苦痛だ』とこれ即ちミ

に入り入る生活を指すのである。そして宗教生活と云ふのは、この宗教的生活をも含みうる生活で、切り詰めて云へば、全體の生活である。RealityとRomanceとを一つに溶かし込んだ生活である。一切の妥協と迎合とを撥無した生活である。一切の争闘を糊塗して、隠遁し去るやうな氣力消耗の態度を抛棄した生活に外ならない、争闘の眞義を捉へて、飽くまで争闘を営みうるだけの白熱せる生活に外ならない。

斷つて置くが、私は此の二種の生活を便宜上區別して見ただけのも事で、實際に於いては決して兩立すべきもので無い。けれども今日、この國に於ける大多數の宗教家が、此の二つのうち何れを高調して居るかと云ふ問題になれば、何うしても此の二つを區別して見ないわけに行かぬ。と云ふのは、現代宗教家の多くが、宗教的生活を奨励することにのみ急であつて、宗教生活の根柢を穿つ事には、あまりに迂遠であるからである。

神の名を稱へたり、天啓を叫んだりする事は、太古草創の世に於いては、強い効果を來たす事ができたであらうけれども、現代の爛熟せる文明に浸されてゐる人間に取つては、いくら聲を震らして叫んでも、其の意義の徹底しやう筈が無い。はじめ「神」といふ名があつて、それから人間が神の生命を感じたので無い限り「神」の力と個人生活の中心意義との合一點が攫めなくて、どうして神の名が解されやう、どうして宗教の權威が認められやう。今日の自覺ある青年は、日々の生活の基調となすに足るべき生活力を求めてゐる、たしかに求めてゐる。けれども其の生活力が即ち「神」だと云つたところで、彼等には夢語としか思はれない、空言としか思はれない。況んや自己意識の著しく發達した今日に於いて

「みめぐみ」であるとか「みひかり」であるとか、古い月並の言葉を叫ぶに至つては、時代錯誤もまた甚しいではないか。いつぞやも云つたやうに、私どもは今日の宗教家諸氏に向つて、もう少し言葉と云ふものゝ表現力乃至暗示力に眼を覺まして頂きたいのである、殊に其の靈的經驗を親しく語らるゝに當たつては、もう少し現代人の心に響く言葉を使つて頂きたいのである。海外の宗教界で、Harmenius Price と云ふエキスプレッションを、「神」なる文字に代へて用ふる人があるやうになつて來たのは何故であるか、この一事より考へて見るならば、私の要求する所も、あなたが無理でなからうと思ふ。

要するに、いはゆる現代人心の要求に對して、宗教家の取るべき當然の態度は、私の云ふ宗教的生活にのみ執着する事なくして先づ第一に現代人の實生活に強く接觸する事である、さうして其處に、中心意義を有する生活、妥協なき生活——宗教生活の發見を促進するにあると信ずる。將來、人々の間に營まらるべき宗教生活は、これを導く者と求むる者との連帶責任に依つて、はじめて成立するもので無ければならぬ。(内藤)

基督教と資本主義

▽三度青年會同盟問題に就いて

予が本誌五月號に於て、同人諸君と共に『福音主義とは何ぞや』といふことを論じ、「青年會の職分」と題した一文が、所謂「自由基督教に同情のある人々」の反感を買つたといふことで、先輩の人より、同論文を取消又は訂正すべき旨の御忠告を受けた。退い

といふ様に思はれる。若し果して然りとせば、彼等は基督教の公認を主張するものであるが、是れは從來の佛教徒の態度と違つて甚だ標度の寛なるを示して居る。然に當年政府の宗教法案に極力反對したり、又昨年の三教會同にすら反對した宗派があつたのも、畢竟佛教が基督教と同じ待遇を國家から受けるとも嫌つたからでないか。彼等け公認教といふ特殊權を以て得々として振舞はんとして居るではないか。

かうなると、此有志佛教徒の覺書の眞意も、果して如上の意義であるや否や疑ふべきことになる。若し公平なる取扱といふのが以上の如くでないとならば、彼等の主張する所は次の様なものであるまいか。即ち基督教は佛教の如く公認制度などいふ表面上の美名の下に、國家の掣肘を受けて居ないで自由な活動の中にある。佛教も宜しく同様に解放して欲いと。此覺書を發表した人々は佛教徒有志と雖も、實は宗派に屬しない新しい佛教信徒の人々らしい。果して然らば彼等の眞意は當に茲にあることと思ふ。といふのは佛教や神道は宗派なる一定の制度を認められて居るからして自由な信仰を抱き進歩的態度を取らんとする人には、其宗派の束縛に堪へない。宗派の改革を唱ふるも、宗派より分離したものは已に佛教に非ず、神道に非ず、必ず何等かの宗派に屬しなければ神佛道と稱することは出来ない。此點現今の佛教内の進歩派の活動にとつて大なる苦痛となるのである。然るに基督教は國家より宗派などいふものを認められないが故に、却て自由の活動が出来る。宗派教派の舊信仰に満足せるものは、自由に己の欲する所に赴いて、開拓もし活動もする事が出来る。之れ彼等が所謂公平な取扱待遇を叫ぶ所以ではあるまいか。

惟ふに國家や社會は堅固な確定と繼續を欲するが故に、常に保守的とならざるをえない。従て宗教に對するに當つても、其社會にあつて成立した宗教、即ち國家の歴史人民の生活と特殊な關係を結び大なる勢力を有するに至つた教派教會と妥協し連絡し、以て自己の保存維持を鞏固にせんとするのは當然の數である。而して教會教派は國家の權力に連絡し、常に其社會における宗教的優勢を維持せんとするからして、兩者は相提携合致するに依つて、各自の慾望を達せんとする様になる。そこで國家にとりても教會にとりても、常に進歩と自由を要求して止まない革新性を有するものは危険なことになる。基督教が三百年前邪教として禁止され、明治に入りて尙外教として排斥されるのも之が爲だ然るに宗教其ものは絶えず發展し進歩する生命である。隨て斯る外的權威と結びて自己の優勢を維持せんと謀るが如きは、既に其宗教的生命を失ひかけた證據である。併し大部朽廢に傾いた佛教の中にも尙一部の生命が残つて居るに違ひないから、生命は外的權威的束縛を脱して、自由の天地に踴躍したいと希ふのである。自由に解放された宗教、斯の如き宗教は眞に其本來の面目を發揮し得るのだ。若し眞に徹底した宗教政策を求むるならば、茲まで來らざるをえない。而して宗教をして自由の天地に放つといふことは、社會を進歩せしめ、國家に絶えず新元氣を附與することになる。徒らに朽廢して餘喘を保つ舊宗教の形骸を取締る様な政策よりも新生命が濺刺として其面目を發揮する様な態度に出づるのが、最も徹底した宗教政策であるまいか。

今佛教徒の一部有志が、舊新などいふ外的關係を離れ、各宗教の公平な取扱を要求したのは、寧ろ當然なこととして、吾人の同感を

ツシヨンの資本主義に對する反抗の聲ではないか。現代の基督教は、も少し資本主義に對する態度を明かにする必要があるまいか。兩者の關係はあまりに圓滑である、あまりに妥協的である、あまりに利巧である、これ即ち大に振ふべくして未だ振はざる、大なる原因ではないか。我が國の基督教が、兎にも角にも今日の狀態まで進むことを得たのは、たしかに外資輸入の賜である。吾人は外國の資本家に向つて感謝せねばならぬ。然も基督教の狀態を今の如くに停まらしむるものも亦、實に此外資輸入の結果である（勿論これのみではないが）。資本を持つて来るからして、宣教師も威張るのである、資本を持つて来るからして、日本人を雇入扱をするのである。人に頼まれて傳道したつて、何で傳道の結果が舉るものか。傳道は止むに止まれぬ自發の精神に出づべきものだ。

青年會同盟の場合も同様に考へることが出来るやうと思ふ。同盟の運用又は活動は、殆んど全く外資の賜である。然も折角外資を仰いで活動はして居りながらも、思ふやうな効果を舉げ得ないのは、青年會同盟無用論などの起るのは、たしかに此事を證明して居ると思ふ——畢竟外資を仰いで居るといふ關係上、そこに何かのこだわり、それに何かの引かゝりがある爲めてないか。——

これは穴勝ち小松主事の罪とは言へない。寧ろ小松主事に對しては同情を禁じ得ないのである——そこで他諸教會の同情と後援の必要を感じるのもあらう。そこで其内部に於ては既に革命の火が孕まれ、自由思想家も居りながら、尙窮屈なる『福音主義』といふ看板を出さねばならぬのもあらう。と予は觀察するのであつて、予は此間の消息を表白せんが爲めに、敢て『黄金の羈』云々の修辭法を用ひたのである。予は決して青年會同盟の當事者が、黄

金の爲めに其良心を麻痺せしめられて居るといふことは言はぬ。たゞ一般社會の資本主義の勢力が、こゝにも及んで、種々の情實を形成しつゝあるを悲むのである。

小松主事は予に對して、人事相談の相手にさへなつて居ればよいと思告された。難有う、けれどもお生憎に、予は法學書生である、法學書生は理窟を言ふやうに教育されて居る。従つて折には御機嫌に障るやうな理窟をも担ねるのである。大して神經を病み給ふな。

以上を以て予の精神を明かにし、更に大方の諸先輩、特に小松兄の叱正を待つ。兄以て奈何となす。（鈴木生）

徹底したる宗教政策

過般宗教局の移轉は大した教界の問題ともならなかつたが、それでも多少我國現今の宗教政策に對し、興味を喚起した様である。殊に聞く所によれば、此程民間佛教徒の有志は相會して、今後政府の宗教政策を注意監視すべきことを約し、數ヶ條の覺書なるものを發表した。其中特に吾人の注意を引いたものは「政府をして各宗教を公平に取扱はしむる」といふ一項である。

彼等は此項を説明して、「基督教にのみ何等の取締法なきは宗教制度上不公平の最大なるものなり」と云つて居る。之に依つて見ると、彼等は、從來政府が神道と佛教の各宗派なるものを認めて、勅任待遇の各宗管長を置き、隨て佛教と神道が所謂外國における公認教の如きものであるのに、基督教に對しては右の如きことなく只「神佛道以外の宗派」として之を取扱つて居る現行宗教制度を不公平なりとし、基督教をも神佛道の如く公認的制度の下に取扱へ

の一つであつた。氏は昨今頻りに、吾々の生活に對する態度の革命や争鬭の意義を闡明しやうと努めてゐる人だけに、話し振りは徹底的な、深刻な、態度を失はなかつたのが嬉しかつた。此の頃は、日々の生活に起つて來る事象に對して、觀察するだけの餘裕なくして、寧ろ心のどん底から起つて來る叫び、これが氏の要求の焦點といふ題下に述べんとした所であつた。今日の社會には妥協が多い。妥協ある爲めに吾々の生活が徹底的でない。しかして一と口に妥協といふが、妥協する方面と、妥協を餘儀なくせられる方面とがある。而て後者の場合が最も多くして、しかも苦痛なのである。氏の要求する所は妥協のない生活である。現在事象の眞底に徹して、そこに不思議なる生命を攫み出すことである。氏の要求する所は食後の菓子よりも米である。米よりも米のエッセンスである。

全的な、或は根本的な生命力を得んことである。そして氏はこの境にまで突つ込まんが爲めに、その出發の第一歩として、吾々の日々の生活に面する態度の革命を唱へるのである。即ち氏が從來固執してゐた個人中心主義が、多少その色彩或は氣分といふものを變化して來たのである。餘ほどゆとりのある、包含的なものとなつて來たのである。その結果は他人の爲め、或は人生凡べの爲めに働く(第三者より見て)ことが、氏自身にとりては、最早やその實他人の爲め或は他の人生の爲めに働くのではなくしてそれ等の活動は「凡べて氏自身の爲め、氏自身の生活の眞締を味到せんが爲め、或は全的生活の根本義を攫まんが爲めの、努力に過ぎない」のであつて、氏自身の爲めに働くこと自然的結果として、他人の爲めに働くこととなるのである。

このやうに考へて來るならば、氏の生活には殆んど凡べての生活に對して、區別を設くる必要がなくなるのである。例へば考へる人と、働く人とを區別することの差別は自然消滅して來る譯である。思想家即ち實行家である。實行即ち思考となるのである。靈即ち肉である。個人即ち社會、個人即ち國家、個人即ち宇宙である。かやうになつて來れば、妥協などいふことを、持ち出すだけの餘地はなくなるのである。凡べてのもの、凡べての働きが、常に渾然として、一つのもの、一つの働きとして顯現せられ或は實驗せられるのである。氏はこのやうな全然差別或は妥協のない全的生活、徹底的生活と一種のユートピヤを要求してゐるのである。そのユートピヤが一萬年の後に來るか、或は十萬年の後に來るかは、それは問はざる所である。たゞこれを得んとする努力の自然の結果として、そこに争鬭が生れる。しかしながら争鬭は決して忌むべきものでもなければ、恐るべきものでもない。人生の眞の意味を攫まんが爲めの唯一の手段であつて、或る見方からしては争鬭即ち人生とも考へられるのである。しかしその争鬭は個別的、部分的なそれではなくして、全的なそれであればならぬのである。全體と全體との争鬭であるならば、それは實に意味のある争鬭である。争鬭はユートピヤに入るたゞ一つの鍵鑰であるとも見做される。

以上が大體の氏の意見である。僕等も全然賛成である。しかしこゝに鳥渡考へて置きたいと思ふのは、僕の聞き誤りだつたか知らぬが、氏は妥協のない生活、或は差別のない生活をば、百年より千年よりの後に期待してゐられるやうにも思はれたが、それだと仍り一種の理想主義に墮するか、或は一種の觀念に囚へられる

惜まぬ所である。然れ共、一朝爰に出る時は、舊宗教の伽藍が總崩れに崩れ甚大なる教派も四分五裂する時だ。彼等には果して其

覺悟ありや否や。よし彼等に之ありとするも、舊宗教徒の多數は果して茲に來るを希ふや否や。(菊川)

基督教同志會講演會評

この國の基督教界に 何がな新しい機運を喚び起こさうと努めてゐる基督教同志會は、七月の十一日から小石川上富坂の獨逸教會で、第二回の夏期講習會をひらいたが、十三日は恰度日曜日に當たるので、會員中の八人を、本郷教會と統一教會との二ヶ所に分かち、南北相呼應すると云つたやうな格で、午後の七時半から、それぞれ會員の感想發表を主とする特別講演會をひらいた。

本郷教會の方は、同教會の副牧師たる額賀鹿之助氏を筆頭にしておいて、それへ青年會主事の松武治氏と、新入社の大塚尙氏が加はる。統一教會の方は何うかと云ふと、これはまた並べも並べたりで、三並良、内藤濯、今岡信一良、杉浦貞二郎、岡田哲藏の五氏が、友愛會と云ふ社會事業で大いに氣を吐いてゐる鈴木文治氏の司會の下に、大いにやらうと云ふ段取だ。

本郷教會の方も聽いて見たいとは思つたけれども、とにかく名前を多く並べてある方へ行く方が、同志會なる一集團の主張を知るのに便利だと云ふ只それだけの理由からして、僕は開會の時刻に統一教會の禮拜堂へ足を入れた。

讚美歌と聖書朗讀と祈禱とが、型の如くに済むと、いよく講演がはじまる。第一に教壇へ登つたのは三並良氏。演題は『日常生活の哲學觀』

夏の夜の短い時間を五人の講演者に割りあてゐるのだから、一人二十分をマキシマムにすると云ふのは、司會者鈴木氏の提言であつた。しかし三並氏の講演は、僕の時計が至つてゐたのかも知れないが、とにかく二十と七分に渡つた。僕は同氏が司會者の禁を破られた事を何とも思はなかつた、ただそれだけ僕には、時間を正確に守れない資格があると觀念した。三並氏の云はれたことは僕の頭の悪い勢なのか、はつきりと其の中心を攫みかねたが、日々の新聞に表はれてくる色々な事件に對して、哲學的の眼を見はるところに、人生の意味がある。日毎々々眼前に移り動く事象のなかに、口を以つて語る能はず文字を以つて寫し出す事のできないう深い生命を直觀する事が、やがて生活の根柢をなすと云つたやうな事を述べられた。いつも觀念と分析とで言説を終始せられる氏の態度にも似げなく、沈黙の滋味を語る傍に、微かながらも情緒の色合を添へられたのは嬉しかつたけれども、歸するところ、觀察のための觀察に留まつて、それ以上の深いところへ一歩も踏み入れなかつたのは、時間の足りない爲めでもあつたのだらうが、實に残念で堪まらなかつた。僕と一所に行つた友だちは、何處までも若い心を失はずにゐる三並氏の態度を心から賞めそやしてゐた。

内藤濯氏の「我が要求の焦點」近ごろ面白く聽いた感想

二ツの問題をのみ、問題として提供せられる理由があるのであらうか、それと同等に或は同等以上に問題とすべきものはないであらうか。

岡田哲藏氏の「個人と集團」も亦頗る暗示に富んだ話であつた。氏のやうな社會上の位置にある人としては、成るほどとうなづかれるものであつた。氏は即ち、吾々の生活には高級生活と、低級生活とがあることを前提して、思想家の生活即ち高級生活である。その高級生活を味はんが爲めには、どうしても一方の低級生活、即ち集團の爲めに煩さるゝ生活から、離脱せねばならぬといふのである。それは集團と妥協することに由りて、その目的が達せらるゝのであると做すのである。更に氏は進んで文藝家と哲學者を比較して、哲學者は文藝家に、一步先立ちてありといふ結論に達せられたのである。議論の荒方の筋は雜ツと、こんなものであつたが、氏が文藝と哲學を論ずるあたりは、寸鐵殺人的のシヨウの警句を引き合ひに出して、氏一流のインテレクトチュアルな、しかもその間にふんみりとさせる所のある議論であつた。

そこで僕はまた數言を費して置かねばならぬが、氏が議論の冒頭よりして、二階級の生活を立てられたといふことは、僕等の賛成することのできぬところである、勿論或る意味に於て、或る立場から見たなれば、二ツの階級も、或は三ツの階級をも、區別することができらるであらう。しかしながらそれは、元來比較的のことであつて、たゞ一種の便宜上から起つて來た人爲的のものに過ぎない。恰度吾々が連續したる音響をば、吾々の意識の上には、ツきりと刻み付ける爲めに、一種の諧調節音を拵へるのと、少しも異ツたことはないと思ふ。勞働者の生活と、兵士の生活と、哲學

者の生活の何處にくツきりと限定を發見することができやうか。哲學者の生活が勞働者、兵士等のそれに比して、思索的分量が多く、しかも深いといふ事は言へるであらう。しかしながら決して哲學者にのみ、思索的生活があるといふことはできない、もし哲學者のみが、思索すといふならば、思索する兵士も、勞働者も哲學者である。恐らく思考性を有する人間悉くが、哲學者なる名稱をいたゞかなければならぬであらう。さて、かう考へて見たところで、高低の生活を肯定することができらるであらうか。氏が思惟せらるゝ如く、吾々の生活にはより不徹底なものとより徹底的なものがあることは、誰しも認めなければならぬことであるが、徹底不徹底といふことも、これは極めて曖昧な語である。徹底的の位置にまで達し得たものにとつては、その後から進んで來る人々を振り返つて不徹底だと言へるであらうが、それは仍ち「現在の自己に比べてより、少なき徹底といふのに他ならぬことである。例へば氏自身にしても、昨日の氏は、今日の氏に比べて「より少なき徹底」であつたにちがひない。そこで人間の進歩が昨日と今日だけであるならば、昨日の進歩は、今日の進歩に比して低級といふことができらるかも知れぬが、人類の進歩、吾々の思索的生活の進歩は刻々に止まないものであるとすれば、一秒の何萬分の一の間にも高低を對らなければならぬのであつて、どれ／＼の思想が低級、或はどれ／＼の生活が低級といふことを區別することも、少し無理であると思ふ。加之に吾々現代人の生活は、むしろその腐爛し盡したやうな下層の生活や、殆んど本能の衝動に動かされつゝのみ生活しつゝある原始的の生活裡から出立して行くところに、強い新人の共鳴を感ずるのである所を以て見れば、

やうなことに、なりは爲ないかといふ、虞れがないだらうか。氏自身では飽くまでも、今日現在の生活の裡に眞の人生味を徹底的に味はんとする人である。さうであつて見れば、吾々の争闘は現實そのものの、裡に眞の價值があるのであつて、千年後のユートピアに對しては、何の期待を持つ必要がないであらうと、考へるのが至當ではあるまいか。氏自身も日々の争闘そのものに意味があり、その中から人生味を攫み出すと言つてゐるながら、纏てその争闘が大きな未來の爲めにする争闘でもあると言はれたやうにも記慰するが、それだつたら、却つて氏の生活の現實味が薄らいて、將來の爲めに壓迫せられるやうなことになるは、爲ないだらうか。この議論は氏も最つと大に説明を試みられる餘地があつたと思ふが、何分講演時間が一人二十分などといふ、随分考へない計畫を立てたものだから（何れこれは惣評で言ふが）折角の面白い議論も、充分味ふことができなかったので、話を聞いた方の僕等にも随分誤解があつたことと信ずる。例へば氏が、思想家即ち實行家である。實行家即ち思想家でなければならぬといふ説に對しても、氏はその思想、實行の文字上の意義に立ち入つてまでも、一と通りの解釋を前提して置く必要があつたといらうと考へる。それでないと、世間の所謂實行家、或は活動家といふやうな野心勃勃たる連中、思想の何であるかをさへ、實行の何であるかをさへ、知らない連中が、自分のことを褒められた、或は裏書きされたやうな氣で聽かないものとも限らぬ。

今岡信一良氏の「**所謂修養は無用也**」は眞率な痛快な議論であつた。氏は所謂修養といふものが皮相的のものであつて、決して徹底的のものでないことを高調された。吾々が眞實味を攫む

といふことは、決して外部的な修養の導き能ふものでなくして、吾々の生活そのものの裡から、自發的に現はれて来る直覺、或は直觀といふやうなものの力に據らなければならぬのである。或は吾々の生命そのものの燃焼といふもののなかに、眞の人生が味はるゝものであつて、決して方法や手段によつて人生そのものの眞髓に觸れることはできない。例へば病人が癒るといふことは、決して醫藥の力が癒したのではなくして、實はその病人自身に、癒し得るだけの、生命力が潜んでゐるからである。デイヴィアイン・ライプが動いてゐるからである。かやうに氏は吾々の裡に潜んでゐる生命力の燃焼が吾々の生存を支配する凡べてにあつて、修養或は手段といふやうなものは、第二義的第三義的のものであるとするのである。そして氏は、その生命力の燃焼、或は顯現をば日常生活に索むるのである。その日常生活には、二大中心要素がある。即ち麵飽の問題と、性（セックス）の問題である。この二ツの問題を解決することは、教會に行くことよりも根本義なことである。また此の問題を解決することのできぬ人が、修養を論じ、文藝を云々しても、それは人生に觸れない欺言である。要するに實際生活そのものに觸れて、そこに眞實の徹底も味到もあるのである。氏の説は極めて眞面目な間に、熱の昂ぶつた議論であつた。僕はまた氏の議論を通じて、氏の實際生活の奮闘を、そいろに偲ぶことができたと思つた。しかし氏の説に對しても、僕はまた他の人々に對すると同じ遺憾を繰り返さなければならぬ。それは何であるかと言へば、即ち、もちつと具體的な説明の欲しい點が所々にあつたと思ふ。（これは時間の罪だが）例へば氏は、吾々の生活の二大中心要素として麵飽と性の問題を提供せられたが、何故に

七月の惟一館

■七月になつて、惟一館の内部は、妙に寂しくなつた。それも其の筈である、統一教會の中心勢力をなしてゐる學生諸君が、夏季休暇と云ふスキイトなものゝ手に曳かれて、騒しい都會から靜かな田園へ、一人……二人……三人……四人……五人……と、つぎつぎに繰り出され始めたからだ。まづ役員中の星島、小山の二君が暫く會ひませんから御機嫌ようとなつて云ひ残して、ひとりとは故郷へひとりとは旅へ出てゆく。それから一週間ほど経つと、今度は加藤一夫君が、休暇を貰つて、紀伊の國へと心ざす。また七日ほど経つと、牧師の内ヶ崎さんが、早稻田の青年を指揮して、山陰山陽の兩道へ、講演旅行と出かけられる。しかし残る役員會長の相原一郎介君は、作戰計畫成れりと云つたやうな調子で、どうだ、寂しくても寂しく無くしやうではないかと提議する。既に役員の席を辭し去りはしたものの、永しへに若い人たちが、それに聲援する。そこで七月の第三日曜から、九月の第一日曜まで、朝の禮拜説教を休みにする筈であつたのを更に變更して、どんなに暑くても、朝夕の集會を續行する事にする。内ヶ崎牧師は、八月のはじめに旅行から歸り、二つ三つ教壇を守つて、それから二週間ばかり、故郷の空氣を吸ひに行かれる筈だ。

■月の十八日から一週間ほど、教會の主催で、日曜學校教授法研究會を、禮拜堂にひらいた。日曜ごとに稚い人たちの友達となるについて、其の方法なり態度なりを研究しやうと云ふのである。講話には、巖谷小波氏の『日曜學校に對する余が希望』と『話の仕

方』をはじめ、倉橋惣三氏の『兒童心理について』村山鳥巡氏の『日曜學校と趣味教育』田村直臣氏の『日曜學校教育研究』矢野フサヨ氏の『音樂教授法』相原一郎介氏の『日曜學校經營法』三並良氏の『教村としての聖書』等があつたが、毎日平均約三十名の出席者があつて、終の日には、講師と會員との懇親會が催され、皆心おきなく思ふところを語り合つた。

■十五日には、定例によつて、午後正七時から第十八回日の通俗講話會を催した。鈴木君の開會の辭に次いで、慶應大學教授の清水靜文氏が『實業界の維新』と云ふ題で、一場の講話を試みられた後、泰々齋伯業君の講話『鹽原多助』があつて、大いに興を添へた。聴衆滿堂。

■六月の廿九日には、午後二時から、禮拜堂で『婦人問題講演會』をひらいた。まづ高野重三氏が『婦人脱線論』といふ一時間餘に渡る大議論をやられると、それに續いて三並良氏が、『哲學的婦人觀』と云ふ氏特有の題で、近來稀なる傑作を出し、それから、青山女學院出身で、久しく歐米の生活を味はつて歸られた田中久子氏が極めて論理整然たる『新婦人觀』を語られ、そのあとで、岡田哲藏氏は『女子教育の經驗』を語り、内ヶ崎作三郎氏は『英國に於ける婦人の位置の變遷』をのべられた。講演の間には、原みち子氏、三並令嬢のピアノ獨弾があつて、聴衆の耳を澄まされた。婦人の來會者が多かつた。散會したのは午後五時すぎ。

■一昨年來本教會の副牧師として、眞面目に、熱心に我が教會の爲めに盡されてあつた加藤一夫君は、今度一身上の都合で傳道の職を辭せられた。しかし本誌同人たることゝ、教會員たることは從來の通りである。

最初から低級の生活を捨て、高級の生活にのみ飛び入るといふことは、少し贅澤ではあるまいかと考へられるのである。もし氏が言はれるやうに集團との妥協といふことが、そんなに平氣で出来るやうであつたなら、それは妥協ではなくして、無關心といふ態度ではあるまいか。吾々は兎も角、それ／＼に眞面目な生活を營むて行く人々の集團に對して、無關心であり得るといふほど超越しなければならぬのであらうか。その態度はあまりに高價な人生味到の放擲ではあるまいか。もつと吾々は、多くの人々が低級だとか、醜惡だとか想つてゐる種類の生活にまでも突つ込んで、そこに吾々の生活の眞實性を發見しなければならぬのではあるまいか。勿論吾々は思索的生活を忘れてはならぬ。しかしながら、吾々の生活は思索的生活がその全ではない。吾々の思索そのものも生活そのものの爲めの思索である。吾々は所謂世俗的生活と、思索的生活とを區別することはできない。思索即ち生活であり、生活即ち思索である。しかし兩者はこれ人生創造の努力に他ならないのである。

それからこれは、僕自身に感ずることだが、世間で「集團」と言へば、凡人の集合といふやうに思はれてゐるが、誰でも、どんな哲學者でも、遠い距離から隔つて見れば、彼自身も亦、彼れの背景を作つてゐる、時代なり、或は場所なり、或は集合人の間の一分子として、集團なる言葉のなかに引き落されるのである。各個人は各個性の威嚴を有すると同時に、集團の一員たるの資格（ありがたくもない）を有つてゐる。かう考へて見ると集團と妥協するといふことは、無關心の態度で集團に加はるといふよりも、最つと徹底的に、集團即ち自我、自我即ち集團なりといふ徹底的な

合一の境に入ることとは、できないのであらうか。

なほ氏の文藝は表白であると言はれた説に對しても、僕は非常に啓發せらるゝ所や、考へさせられる所が多かつた。文藝が表白であるといふことは誰しも拒む人はあるまい。しかし同じ定義が哲學の上に冠せられぬであらうか。表白といふも主觀そのものの表白であるか、或は客觀を通しての表白であるか、或は客觀それ自身の表白（可能なりとせば）であるか。兎も角文藝對哲學の問題は非常に面白いと思つて聞いた。それだけ色々先生のお説をもつとゆつくり、打ち寛いでお聴きして見たいと思つてゐる。

總評。最後に當夜の、同志會講演會の、總評をやると、これは太だ失禮だが、戰術を知らない人の戰聞であつた。多士濟々の同志會に、これほど簡明な作戰を心得た參謀官がなかつたかと思ふと少々心細くならざるを得ない。言つて見れば、當夜の講演は一騎當千の勇士連を見す／＼、隘路口から目白押しに押し出さしたやうなものだ。何故もつと堂々の陣容を張つて、平地戰をやらせなかつたのか。一人一題でも随分二時間や、三時間の時間を與へなければならぬ重要問題ばかりだつたのに、僅か二十分て切り上げさせるなんて、まるで鳥合の衆のやり方ではないか。最つと悠くりで宜いから、一晩に一人づゝとかいふ風に、充分の時間を與へて貰ひたいものだ。それでないと、折角の名論卓説も、たゞその片鱗を捕捉するに止るのみであつて、眞に論旨と聽衆とが同一の理解に達するか、否かは大きな疑問である。

最後に同會の間には、眞面目に人生から出立してキリスト教を解釋せんとしつゝある人の、多いことを心強く感ずるのである。幸に同會の健全なる發達を祈る。

のは、何う云ふものであらうか。この種の作には、もつとぎこちない所のあつた方が、全體としての印象を強くする事になりはしないからうか。ポイント式の活字を使つて、五百三十二頁の大冊になつてゐるが、これで漸く前篇が終りになつてゐる、後篇が早く讀みたいものである。(紙装美本・價一、四〇)

▲不平なく

土岐哀果著・春陽堂發行

土岐君の詩は既に定評がある。この『不平なく』と云ふのは、過去約一年間に於ける同君の短い詩と長い詩とを集めたもので、飽くまで自由な形式に思ふ事を盛つてある所が、堪まらなく可い。「新しき白き表紙を披かんとして、手のよごれをば悲しめるかな」だの、「おとなしくなりぬるものかな——言はんとして言はざりしことの今日も二度ありき」だの云ふのは、何でも無いところに、すつきりした味がある。(紙装・二〇四頁・價二五)

▲最新西洋史論

松本彦次郎 廣瀬哲士共著

人類生活の史實は之を各種の方面より觀察することが出来る。政治を主としても、經濟を主としても、文藝乃至哲學を主としても觀察することが出来るのである。従つて夫々専門の歴史ある所以であるが、從來の所謂『歴史』なるものは、固有名詞と、時日と政權の爭奪と、枝葉の事實の羅列とに過ぎぬのであつて、政治史としては割合に目的を達したかも知れぬが、其他の方面の要求に對する價值は、殆んど顧みるに足るものがなかつたのである。殊に人類の内部的生活の觀察、並に其内面的生活の影響が、如何程まで政權の爭奪、經濟の變遷、ダイナスチーの推移、國際の關係といふ表面的の事實に及ぼすかといふやうな點は、全く閑却せられて居たのである。併し現實の生活其物は、決して思想生活の影響なしに、變化も發達もするものでもない。本書は實に此從來の史家の態度に嫌らずして、著はされたもので、佛國史家の泰斗エルネスト・ラヴィツス氏の原著に基づいて、更に著者の創意に依つて、修正増補を加へられたものである。古代より最近に至るまで、悉

く網羅してある。史的物語や、時日や固有名詞や、凡そこれらのものに多くの價値を置かぬ態度よりして、年代の長い割合にはウオリウムは小さい。けれども苟くも當らねばならぬ問題には悉く當つて居る。特に最近二十年間の現象として、帝國主義や、婦人問題や、社會運動等にも一通の解説を試みて居るのは嬉しい。歴史としては抽象化されたものである。併し此抽象は決して無味乾燥の抽象ではない。著者の努力を多として、江湖に推奨するを惜まぬのである。製本の體裁も極めて目新らしく、舶來上等の柃目紙を使つた印刷も鮮明に、裝釘も頗る氣が利いて居る。(啓成社發行價一、七〇)

▲新訂曉鐘

士井晚翠著・岡崎屋書店發行

晚翠氏の「曉鐘」は實に古いものである。然も今に至つて朗誦するも、倦むところを知らぬ。蓋し其調が遼古遼宕、朗誦の間にいふべからざる壯快雄大の情を誘起するものがあるが故であらう。思へば所謂新體詩は、詩形に於ても、詩想に於ても、爾來大なる變遷を遂げた。著者も亦五城の地に育英の事業に従つて十年、絶えて詩筆を手にはせられぬが、吾人は切に當年の「晚翠」の復び大に活躍せんことを期待して止まぬものである。(價、三〇)

▲名物男

小川 畑 村 著

▲木村長門守

夢想 兵 衛 著

共に家庭新講談として、本郷千駄木坂下町の講談社より出版されたものである。講談といつても、從來の型に囚はれぬ、新たな努力を見ることが出来る。「一家團樂して面白く、愉快に讀んで行く中に、知らず識らず智情意の發達を助けて行かう」とするのが目的であるといふ。小冊子であるが體裁も整つて居る。青年諸君に取つては肩の凝らぬ讀物である。定價名物男貳拾錢、木村長門守二十五錢である。

新刊批評

▲近代人の信仰

内ヶ崎作三郎著・啓醒社發行

十九世紀の爛熟せる科學文明は、果して神の干涉を此の世界に許さなくたつたかどうか。果して憧憬と驚異との心を人間の衷より奪ひ去つたかどうか。畏敬する先輩内ヶ崎作三郎氏は、此の大問題に答へむが爲めに、英國留學以來今日に至るまで、折にふれて諸雜誌に發表された宗教的論議の粹を蒐めて、此の一書を公にされた。この書に收められた論文すべて二十篇、或は現代生活の權威を提げて、個人對集團の紛擾葛藤を解き、或は基督教派の大合同を唱へて、現代宗教家の小膽を戒め、或はベルグソン哲學の中心生命を捉へ來たつて、沈滞せる基督教界に刺激を與へ、或はバアナアド・ショウの「生の力」の趨くべき當然の道を説破して基督の人格の優先權を高調し、また其の傍、宗教と政治の契合點を求めたり、新藝術の裡に潜める新しき神秘の調に耳を傾けたり、大都市の塵埃裡に動く靈感を傳へたりしてあるが、最も強く著者自身の思想なり信仰なり性格なりの閃影を見るのは、余頭にある『無意識の偉大』と題する一篇であらう。評者が此の一卷を通讀して、特に感じたことは、著者が文藝より出發して、哲學に行き宗教に趨いた人であるだけに、宗教論と云つても、其の説かれるところが、ありふれた無味乾燥の純觀念論でもなく、有害無益の純機械論でもなくて、たとひ或る觀念を提供するにしても、常に其の觀念を築くに足るべき活事實を説き示す事よりも、「實生活に働く信仰の力」を讀者に直感せしめる事に力を用ひてある一點である。また著者が、「一切事物は驚くべき生命の力に運ばれて、過程の中に進みつゝあると云ふ見方からして、政治と科學と藝術と宗教との提携を奨説せられる態度は、評者の全く同感とするとこゝろであるが、この提携を云はゞ妥協的提携で無しに、眞の提携――

融和合一の境まで進める心境と努力とは、甚だ禮を失した言葉ではあるが、この書に悉く盡くされてゐると思はれない。と云ふのは、「ダンモンチオの歌劇と新神秘主義」と題する一篇や、「ベルグソン哲學と基督教」と云ふ一篇などを讀んで見ても、議論の中樞には如何にも細かく意を注いであるが、其の緒説と比較してあまりに造作なく結論を下して了はれるやうな傾があるからである。何かとは云ふものゝ、この一書には、相變らず著者獨特の突滅的意氣と素朴なる情緒とが、經となり緯となつてゐて、磨きたてたコルチツトの音が、燈みきつた朝空に響き渡るやうな印象を讀者に強く與へる。此の國の沈滞せる宗教界は、この書の説くところに依つて、凜々しき一轉機に會ふ日が遠くないであらう。妄評多罪。(N)――四六版・布裝美本・價一、二〇

▲罪と罰

内田魯庵譯・丸善株式會社發行

原作者のドストエフスキイは、更めて云ふまでも無く、すでに「新」の名を以つてこれに冠せしめることは出来ないが、此の人を離れて現代の露西亞文學は無いとまで云はれて居る高名の作家である。露西亞では最早クラシツクとして、この人の作を取扱つて居るさうだが、畏敬の念を起こさせるばかりで、何等の共鳴をも感ぜしめない意味のクラシツクではなく。いつまでも新しい生命と氣分とを多分に含んだ立派な藝術品である。この作は彼が代表作の一つで、靈肉の頹廢と窮迫とに曳き摺られつゝ、殺人の大罪を犯すまで生活に行き詰まつた青年ラスコーリニコフの心理が、息も詰まるほど強く烈しく描き出されてゐて、一度走り讀みただけでは、興味よりも寧ろ恐怖の念に襲はれて了ふのであるが、一字一句を靜かに味はつて行くと、意外にも深く徹底した感じが含まれて居る事に氣がつく。誌面が許すなら、眼に觸れた句をぬきだして、感想をのべて見たいほどである。譯筆は此の方面に十分の經驗を積んだ人の事でもあり、また幾たびも稿を更められただけに、十分の信用を以つて讀まれる。しかし、讀んで行くうちに、をり／＼リファインされ過ぎたと思はれるやうな言葉にぶちつかる

▲白眞弓 石田 羊一郎 著

大正二年一月二十四日、及び二十五日、都下の夕刊新聞紙は齊しく悲しき少年の死を報じた。それは當時東京開成中學校學生石田眞弓君の白山坂上に於ける慘死であつた。幾千萬の人々が、この可憐なる少年に向つて同情の涙を灑いだであらう。本書は眞弓君の父君に當られる著者が、悲しきの餘り一は愛兒の名残りに、一は再びかやうな悲惨な電車事故の發生を引き起さないやうにとの心からして、當時の顛末を始め、同情を寄せたる人々の説話、書翰等一切を載せてある。殊に著者自身當日の光景を描く所、殆んど涙なくして之を読み得るものではないであらう。

白眞弓引きて放ちし眞鹿兒矢の往きてかへらぬ汝をしぞ思ふ。
我が苑に鳴く黃鳥のしば／＼に亡兒眞弓を思ひぞ我がする。
儼に見ゆれどまたもかへりこぬ吾兒がすかたのなつかしきかな。(非賣品)

▲泰西思潮 千葉掬香著 警醒社發行

フレデリック・ソンの「ハアバート・スペンサア論」。アンリイ・ペルグソンの「生と意識」ヂュエムス・ブライスの「トオマス・ヒル・グリン」とヘンリイ・シヂキツク。オトオ・ユリヤス・ビヤバウムの「ドストエフスキイとニイチエ」。ウキリヤム・ジュエムスの「戦争の道德的代用法、同「ハアヴァド大學に於ける一大佛蘭西哲學者」。及びアルベル・シェンの「道德と文藝」の七大論文を蒐めたり。著者が言へる如く、社會の正味はその中層階級の人々の間にあるべきであるが、不幸にして我が國の中流社會は思想の何ものをも有してゐないのである。著者が日本の文明と雖ども、その思想の方面から見れば、暹羅や安南と差別優劣はあるまいと言つてゐるのは蓋し首案に中したるものであらう。著者廣義の教養の爲めに、本書を著したといふことは、大に時を得たものと言はなければならぬ。なほ一々抄譯紹解を附したるは、研究上の非常な便宜である。裝幀を簡素、紙質、雅純定價の五十錢は甚だ低廉であつて、この書出

版の目的に對して甚だ適當な考である。

▲家庭衛生病理講話 藤田篤編・丸見屋商店發行

醫學士酒井和太郎氏の講話を集めたもの。ミツワ家庭藥を以て有名な丸見屋商店が、自家の家庭藥の内容を説明せる旁、通俗衛生、病理等の思想を、極めて簡易なる方法を以て一般の人々に知らしめんと試みたものである。夏時の伴侶として一本を備へて、至極便宜な本である。(價五〇)

▲巖の處女 ダンヌンチオ作・矢口達譯

流麗にして情味豊かな氏の譯筆は、如何にも南歐の名花を移植するには、ふさはしい様に思はれる。とは云ふものゝ、私は四百餘頁の本書を讀するには少なからぬ努力を要した、ことを自白せねばならぬ、これは近來、僕の頭腦の工合が少しよくないからにもよるものも知れないが、又はバタをなめ、ビーフテキを喰つて居る人種と、澤庵の茶漬に舌鼓を打つて居る吾々とは、土臺風味噲の構造が違つて居るからにも、よるだらうと思ふ。僕は幾度か其やわらかな美しい文章に魅せられて、幽玄な美と詩との世界に吸ひ込まれてしまつた。同時に又七くどい繊細な描寫は、幾度か僕の頭腦を混亂せしめて、讀過するの勇氣すら沮喪するがあつた。併し兎に角私は一種の魅力に誘はれてつい讀了してしまつたのである。

三人の美しい處女と、二人のか弱い兄弟と、昔をしのぶ老公爵と、物狂しい公爵夫人との悲裏な麗美な物語は、一篇の詩と成つて幽玄な階調をかなで、これによつて私は一種の美妙な詩の世界を充分味ふことが出来るのであつた。この詩の世界を味ふと云ふとは、醜惡な殺風景な現世に住居して居る吾人にとつて、最も必要な一面の生活法ではあるまいか。併しながらそれが私等の究極の生活であるや否やは今此處で論ずる必要はあるまいと思ふ、

(新陽堂發行。價一、一〇一圓 生)

▲余は如何にして確信を得しや

武本喜代藏著
警醒社發行

前篇(熱狂時代)、中篇(懷疑時代)、後篇(確信時代)を集めて一卷としたるもの。山陰の片田舎に生れた著者の、少年、青年、中年の時代を通しての、信仰徑路の歴史である。その人生に對する著者の觀察や、信仰の内容は必ずしも、新しいといふことはできぬかも知れぬが、その燃ゆるやうな信仰、悔いといふ改め、改めては悔い、更に一日より一日と純なる生活に向つて憧憬れ行く、著者の眞率な態度に對しては深い懷しみを覺ゆるのである。文章もすら／＼と無理のない書き方で、知らず／＼人を牽きつける力がある信仰の道を辿る人々の、是非共一讀すべき好著たるを失はない。

(價五〇)

▲予が婦人觀 黒岩周六著・丙午出版社發行

著者が從來「淑女かがみ」や、「婦人評論」等に於て論じたる婦人問題を集めたものである。此の著者だけに、まだ著者の婦人論は完結してゐないのであるが、著者の婦人に對する究竟の意見は、要するに貞操觀である。しかしてその貞操は婦人の獨身主義である。婦人は生涯結婚せずに、處女の儘で世を終る決心を持たねばならぬ。隨て經濟上の獨立を必要とし、茲に婦人問題が起る。そこで職業を以て獨立すれば、縱令止むを得ざる害惡として結婚することとなるも、その結婚に對しては選擇諸否の自由を有することとなる。著者は斯やうな斷案に詰る準備として、極めてデリケートな論調を以て婦人問題を論じてゐるのである。その斷案は讀まずとも、成るほど、とうなづかせるだけの用意は充分である。婦人問題が最も興味を以て論ぜられつゝある今日、時機を得たるものと言はなければならぬ。(價六〇)

▲文檢修身教育法制經濟問題解答

稻毛金七 共著
近藤新一

文部省教員檢定試驗中、修身、教育、法制經濟の三科目の試験に應ぜんとする人々の爲めに、最近五個年間の豫備本試験問題十回

に亘りて、成るべく實際的の答解を與へ、且つ著者自身が嘗て受驗したる際に提出合格したる答案に類似したるものを加へ、多くの應用問題、憲法、受驗法、參考書、試験規則等をも掲げ、頗る用意周到な著である。殊に口述試験の實際的方面が、なだらかな記事文體で書いてあるなど、頗る努めたものと言はなければならぬ。受驗志望のみならず、此の方面の教育問題に興味を有する人々の是非一讀すべきものである。(内外教育評論社發行。價一、二〇〇)

▲るか傳福音書 チェスデンク譯・警醒社發行

聖公會のチェスデンク氏が、新約全書改譯の必要を認め、或は米國ケムブリッヂにありて、或は同地の神學校並にハーバード大學の圖書館等を利用し、細心研究の結果、個人的に改譯の事業に着手し、松山高吉氏専ら校閲に従事し、マタイ傳を始め、既に四福音書の改譯を了つたといふことである。本書はその一部であるが從來の日本譯に比し、その優劣如何といふやうな具體的の説明はこゝで述べる餘白はないが、先づその文章構成の形式から見ても極めて單純化せられたるは喜ぶべき一進歩である。吾々は尙ほ一歩進んで口語體の譯本を出す必要があると思ふ。兎も角吾々は著者及び校閱者の多大なる努力を推讃せざるを得ない。價も亦極めて低廉と言はなければならぬ。(價一五)

▲禪の極致 大内青巒著・丙午出版社發行

禪は佛教の一宗派であるとするには、餘りに包含的である。禪即ち佛教、佛教即ち禪と斷定するが正當である。隨て禪の三昧境は即て佛教極意の境に參するに外ならぬのである。本書は即ちかゝる見方の上に置かれてある禪をば、極めて平易に、何人にも解り易く書かれたものであつて、同時に佛教の何物たるかを窺ふにも極めて好都合な著である。吾々はかやうな種類の著作がどし／＼出版せられて、我が國の幼稚な思想界に、極簡易な方法を以て精神的生活を開拓せんことを切望する。(價六〇)

THE FAITH OF THE INCARNATION :— HISTORIC AND IDEAL.

BY

CLAY MacCAULEY, A.M.

With the sub-title,—

Glimpses of the Beginnings, Development and Metamorphoses of Christianity.

This book is the product of a long life's study of Christianity as a factor in man's history, carried on wholly by the methods of historical science and rational philosophy. The author speaks of having "sought only the truth,"—"using methods always, ultimately, positive and constructive," with "the hope, constantly, of finding that which will tend to promote the real union and fellowship of 'all who profess and call themselves Christians.'" "More particularly, the book has been prepared," not for the professional scholar but for the ordinarily cultured inquirer who may wish to know what some of the most competent, sincere and reverent writers have concluded is true concerning the origin, the development and the present import of the Personality and the Gospel of Jesus Christ." The author thinks that doubtless his conclusions will "meet with much dissent; possibly they "will arouse antagonism," and with some be "received with disappointment and regret;" but in his "Preface" he asks from all readers "suspense of judgment until they shall have read the book through" and "considered well" what he has said.

The subject-matter of the volume consists of four main parts, with an "Introduction" which is largely personal, but, at the same time, is representative of the needs and experiences of hosts of earnest, sincere men and women at the present time.

"Part One" treats of the historical "Beginnings of Christianity." "Part Two reviews" the "Evolution and Metamorphoses of Christianity." "Part Three" tells of the "Emancipation and Modern Development of Christianity." And "Part Four" is a description of the "Modern Christology," with a review of the present significant religious-social movements in which the Christian Churches, generally, are finding a practical bond of union and a common reason for being, as followers of Jesus Christ.

定價金三圓五拾錢

郵稅 市內金四錢 地方金十四錢
臺灣支那 外國廿八錢

取次 六合雜誌社

▲圓窓より 平塚らいてう著 東雲堂發行

新しい女は五色の酒を飲むのだとか、青樓におし上つて妓を呼ぶものだとか、或は半獸的生活をするものだとか聞いて、恐ろしいものだと思つて居た。その新しい女の代表者とも呼ばれて居るらいてう氏の文集が本書であるから、どんな議論があるかと思つて讀んで見たが、聞くとは大違ひで、こゝに集めてある。文章は皆な眞面なものである。然るに内務省がこれを發賣禁止したと聞いて再び驚いたのである。

そこは新しい女の作であらう、どの文章を讀んで見ても、皆な新しい女の要求があり／＼と見えて居る。けれども亦この頃の多くの人々の通弊であるやうに、歴史的態度に足りない所がある。一葉の批評は讀んで感服した。一葉を舊い女の代表者とし、品子を新しい女の代表者のやうに云つてあるが、僕をして云はしむれば、新しい方はらいてうその人の方がより適當であらうが、自分ではさうは云へまい。一葉に飽き足らないで色々の理窟が併せてあるが、そこに歴史的態度の不足はあるまいか。一葉のものは今日讀んで見ると、我等にも何だか隔世の感がある。然し彼女を過去の産物としたならば、先づその時代の整つたものとは云へやう。それでいゝではないか。その過去のものが今日の人々の權威となり、標準とならんと申し出づるに至らば、その時こそ反抗も理由があらう。それ迄は吾々も之を過去の美術物視して、その通り整つた様を賞美すればいいではないか。

マグダやノラの批評も甚だ面白いが、それにも矢張歴史的態度に不足があると思つた。マグダやノラは經濟的に、女子の獨立的態度を示したもので、他はほんの附加物ではあるまいか。外國では色々の婦人問題なるものが起つて居るけれども、その解決は甚だ六ヶ敷い。然るに婦人が經濟的に獨立するやうになる。或はせざるを得ざるやうになると、夫が妻を、父が子を壓迫して、その主權を認めしむることが事實上出來なくなる。ノラやマグダが家を出ると云ふのは、この家庭に於ける主權の移動を示すのが目的

でありはすまいか。斯く婦人問題の歴史的關係を考えてくると、さうノラやマグダを理窟詰にするのは可哀想なやうな氣がする。

もう一つ僕がらいてう氏に對つて云いたい不平は、その議論が甚だ消極的、否定的であることである。「元始女性は太陽であつた」などを讀んでもさう云ふ感があるが、自由だとか、自然だとか、或は開放だのと云つた所で、それは唯だ今の境遇を離れやうとする努力を示したものに過ぎまい。これ丈でも價值がないとは云はないが、更に價值のあるのは、それから先きに肯定的な、積極的な理想境を開拓して行くことにある。この積極的なものゝ内容にはどんなものが現はれて来るのか、少しも分つて居ない「潜める天才を、偉大なる潜在能力を十二分に發揮させることに外ならぬ」など、書いてあるけれども、天才や、能力が潜んで居るとは何が根柢になつて附けた見當であるか。或は信仰であるか。その能力や天才とはどんなものであるか。少しも分つて居ないではないか。

新しい女もまだ中々に努力が入る。積極に進まなかつたならば、やがて舊い女のお仲間入りをしなければならぬ(三並)

■九月號の六合雜誌■

必ずしも此の國の藝術についてののみ云ふのではありませんが、近ごろの藝術には、著しく眞剣の努力が現はれて來ました。取り容れられる材料はどうであつても、それを取り扱ふ作家の態度には、いはゆる生活の第一義要求を根柢とした色調が際立つてきました。さうして、現代の文藝は、宗教の原動力に對つて、深い愛を有つてゐると云ふ聲さへ聞こえるやうになつたのであります。私どもは斯ういふ切實な態度と要求とに接して、何等か新しき機運の近づくものあるを思はないわけに行きません。これまで微力ながらも、生命ある宗教と文藝との開拓を企てへきました本誌は、こゝで少しでも此の新現象の眞義に觸れて見たいと云ふ考から、次號すなはち九月號の誌上には、『宗教對藝術の問題』に關し、宗教界文藝界は勿論、一般思想界に於ける知名の方々の高見を輯録する事にいたします。既に寄稿を快諾して下さつた方々も多數ありますし、それに社中同人も力めて此の問題に關する平素の懷抱を發表する手筈になつて居りますので、次號の誌面は、恐らく其の大部分を此の爲めに割く事となりませう。

六合雜誌七號

新生活の第一歩

(告白)

内藤 濯

△超人道徳論(評論)……野村胡堂
 △自我と信仰と神(評論)……三木 浩
 △逸學界の近韻(海外思潮)……三木 浩
 △佛國新人の問題(海外思潮)……三木 浩
 △福音主義論(時評)……社中同人

都會詩人ブロック(評論)

昇曙 夢

婦人問題

□生命の源——文化の泉
 □ふらんす新婦人の告白
 □佛耶兩教の婦人觀
 □大思想家の婦人觀
 □經濟上より觀たる婦人問題
 □婦人問題の根本的解決

内ヶ崎作三郎
 壺川 潔
 三 並 良
 うちがささ
 鈴木 文治
 安部 磯雄

反抗(戯曲)

内藤 濯 譯

△銀西白著
 △著子
 △橋子

灘 影
 り(詩)
 歌(歌)
 前(歌)
 窓(散文詩)

歌(歌)
 前(歌)
 窓(散文詩)

野村 精子
 佐藤 清
 有田 四郎
 吉田 絃二郎

へらごに あ(小説)

加藤 一夫

院長診察、月、水、木、金、午前、入院、診後應需、林、峰間、兩副
長、目下當院ニ在勤

電) 八八八(病院用)
本 八九八(私宅用)

東洋内科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋附近

院長

醫學士 高田 畊 安

神奈川縣高座郡茅ヶ崎海濱從停車場半里

電、チガサキ一一番

南湖院

河野、高橋、兩副長、目下當院ニ在勤、院長診察、土曜日午後
入院、診後應需

純正なる主義と清新なる趣味と活社會の實情と

世界之日本

天下の青年皆本誌に集まる

第一十部 第八月號 第四卷 (十一月) 全年分金十六錢 全年分金十六錢

政界 橫斷論

▲天下志士の進む可き道
▲幫間全盛の時代
▲不真面目なる政治家連

立憲青年黨 幹事 長 橋本徹馬

國際間の三難關 ○哀悼辭

社説

▽評論之評論(新設)

本誌記者

▽耶蘇の社會觀

早大 教授 永井柳太郎

東暗黒面

廬舍那

▽現代少壯政客

鐵山 迂人

長詩

長橋大河

●噴火山上の六大會社

險保

記者 吉田興山

桂公及新政黨を葬る

記者

坂本正雄

●松田司法大臣と語る

社長 橋本徹馬

▽政友俱樂部論

代議士

岡崎邦輔

▽袁の最後と黃ろいアメリカ

萬朝 記者

茅原華山

▽新らしき女に誨め

代議士

井上角五郎

●四大會社の重役及農相に與ふ

社説

政界 側面觀

▲輿論は小便と水との混合物
▲現内閣は定九郎内閣也
▲不埒なる西園寺侯
▲學丸振つて大喧嘩

男爵 後藤新平

振替 六二 東六八

世界之日本社

東京 市河 區臺

發行所

(後附四)

世界雜誌

每月一回發行 定價 郵稅一冊 拾六錢 半八錢 一六錢 二六錢

八月號要目

●軍備擴張と國民の生活(十五頁) 尾崎行雄

▽觀樹將軍時局談

三浦子爵

▽財政橫議

高木正年

▽無底洞夜語

菊池武德

▽縣知事兼併論

相島勘次郎

▽樺太島民の聲

田中善立

▽時代に後れたる奥田文相

室伏北水

▽三教者招待を論ず

高島米峰

▽最近の後藤新平

鶴崎鸞城

○白叙傳

(四) 尾崎行雄

▽米國に於ける萬國平和運動

▽正傳訛傳

▽日米經濟戰

▽眼前口頭

▽新眞婦人會論

▽馬骨先生雜記

▽軍隊に於ける自殺

▽大正風俗(時事漫畫)十面

▽サンデカリズム

▽玄關と應接間

社説

▽内閣と樞府
▽來世の有無
▽日和見外交
▽偽忠君愛國
▽大なる馬鹿

▽出版物の取締
▽小學令改正
▽三教者會同
▽當局の矛盾
▽入超恐るゝに足らず

▽生活問題の二解釋
▽下車驛不可廢
▽口癖の不量氣
▽桂公政界退引
▽天下國下の大問題

▽首無し政黨
▽支那問題
▽楠瀬陸相
▽山座公使
▽不用意な國民

●支那革命志士列傳

『萬朝報』社長 涙香 黒岩周六先生著

予が婦人觀

三六判 美本

定價 六十錢

郵稅 八錢

進歩的

にして却て
稍保守的の

檢束

あり古きが如く
して實は極めて

新し趣味

を有する黒岩先生の婦人觀は下ルストイ的の

絶對貞

操觀

に配合するに經濟的獨立

の實際問題を以てし種々様々の方面より

斷案の

片鱗

を示しつゝ遂に人を
して成程と承服せし

る老巧親切

の文を爲す眞に
現今婦人問題の

燈明臺也

の世年頃の娘の

父母

及び女子教

育家の精讀

を冀ふ

文學博士

村上專精先生著

藤井瑞枝女史著

▲女

性

訓

定價 四十錢
郵稅 六錢

▲亂

れ

雲

定價 八十錢
郵稅 八錢

幕村隱士

久津見藤村先生著

堺

利彦先生譯

▲現代八面鋒

定價 八十錢
郵稅 八錢

▲自

傳 赤裸の人

定價 九十錢
郵稅 八錢

丙午出版版社

東京 小石川區 原五六一 町六八

東京 東替振 小石川 川一 原三 町五

堂聲鷄

上田敏氏序
竹友藻風著

詩集

祈禱

定價 金五拾錢

七月發賣

■叙情詩十二篇を收む。

▼神學部の開講▲

神學部は前期に引き續き、來る十月初めより左の通り開講すべし。その他の科目の設置は未定なり。又オイケンのものは其最新著にして、現に丸善書店に若干部あり、有志者は買ひ入れ置かるゝ方宜しからん。

●時日……………毎週火金曜の午後四時——六時迄。

●科目……………比較宗教史より見たる福音書。

オイケン著 Erkennen und Leben の講讀

●擔當者……………三並良

統一基督教弘道會

教育部

發行所

東京芝區芝公園五號地二十

昂發行所

夏期中の御來宿者を歡迎致候

高等宿 榮林館

館主 文學士 今岡信一郎

本郷區追分町三〇
電話下谷 三三四六乙

（追分電車終點ヨリ五分間）

地方書店に告ぐ

- 一、雜誌書籍の發送は東京の各書店と同時に爲す、
- 一、發送、返品共に一切郵便に依る事、
- 一、雜誌書籍代金勘定請求は、參ヶ月乃至半ヶ年毎に於て爲す
- 一、發送上其他に於て不都合を認められたる場合には直に御通知を乞ふ、
- 一、代金を請求しても更に拂込なき時は直に發送を停止すべし

一、御送金は成る可く振替貯金を使用せられ度し、

大正二年八月

六合雜誌社

勞働問題の先驅者 友愛會の機關新聞

友愛新報

定郵 十部 價稅 郵部 一稅 部共 部前 金三 錢十 錢厘

發行所

東京市芝區三田四國町二番

友愛新報社

▼統一基督敎會々員著書案内▼

著者	書名	冊數	定價	郵税	出版元	備考
三並良	福音書大觀 (譯)	一	五〇〇	八〇	統一基督敎會	
安部磯雄	現代戰爭理論(譯) 婦人の理想	一	八五〇	二四〇	梁江堂	
内ヶ崎作三郎	英國より祖國へ 人生と文學	一	一、〇〇〇	一二〇	博文館	
神田佐一郎	近代人の信仰	一	一、二〇〇	一二〇	全警醒社	
向軍治	登高自集	一	五〇〇	八〇	統一基督敎會	
岸本能武太	英語發音の原理	一	三〇〇	四〇	警醒社	
今岡信一郎	新神學(譯)	一	七五〇	八〇	北文館	
小山東助	光を慕ひて	一	一、〇〇〇	八〇	全警醒社	
永井柳太郎	社會問題と殖民問題	一	三〇〇	四〇	警醒社	
合著	社會問題と殖民問題	一	一、五〇〇	一六〇	新興社	
坂本政雄	進歩的宗教	一	三五〇	六〇	統一基督敎會	
淺田泰順	二十世紀の男女	一	三〇〇	四〇	警醒社	
新譯	律氏和聲學	一	一、七〇〇	一〇〇	淺田泰順	

右の書籍は我が統一基督敎會々員の著すところのものなれば、本社は地方讀者の爲に、たとひ一冊にても特に取次の勞を執るべし。郵税は本社に於て負擔すべければ定價のみを送らるべし

申込所

東京市芝區
三田四國町

六合雜誌社

振替東京
一〇〇三

東亞之光

每回一月發行 八 月 號 一拾貳冊 定價 金貳圓 郵錢十錢 稅錢一錢 郵錢五錢 厘共

◎時局雜感	文學博士 井上哲次郎
◎人は天分に安すべし	醫學博士 吳秀三
◎所謂實驗心理哲學分離問題に就いて	文學士 桑田芳藏
◎ケルレル及び其作品	文學士 雪山曉村
◎英詩「月夜」	文學士 松浦一
◎日本の小説	文學士 鈴木三重吉
◎伊達騷動の真相	文學博士 大槻文彦
◎日本現今の財政	法學博士 小林丑三郎
◎國語の發音の根底に於ける特質	文學士 金田一京助
◎英詩（乃木大將詠歌の翻譯）	文學士 齋藤秀三郎
◎群衆心理の特徴	文學士 今澤慈海
◎ヘツベルに就て	文學士 大津康
◎み山べの里	醫學博士 生田春風
◎人間品種觀	文學士 阿部文夫
◎經濟上より見たる婦人問題	文學士 三輪田元道
◎東亞の女	文學博士 谷本富

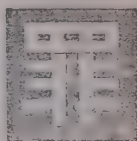
〔後附十〕

振二 替一 口〇 座七 東七 京番

東亞協會發行

東京原 小町七 石八 川番

ドストエフスキーク作
内田庵譯
(最新刊)



前編

四六判ボイント式印刷
製本雅麗紙數五百五十餘頁
正價金壹圓四拾錢
郵税金拾貳錢

或はマクベス以後の大悲劇と稱し、或はファウストと聯ぶの最大傑作也と云ふ、教授ブルユックネルの如きは人生の眞の悲痛はファウストよりも却て此作に於て見るべしと激稱せり眞に是れ人間の靈の叫びにして一回を重ねる毎に肉動き骨鳴るの感慄々迫りて讀終りて毛孔粟生髓腦微顫するに禁へず、今日如何なる作家もド氏の影響を受けざる者なし、アンドレーエフやストリンデルヒやダヌンチオや皆間接にド氏の産みたる子にしてド氏の作の如くにして初めて人生の眞を語ると云ふべき也

小説



トルストイ翁
一代の傑作

内田庵氏譯

前編正價金壹圓五十錢
後編正價金壹圓八拾錢

送料各拾貳錢

東京市日本橋區通三丁目

(振替貯金口座東京五番)

大阪市東區博勞町四丁目

(同 大阪七四番)

京都市三條通麩屋町西入

(同 大阪一七三番)

丸善株式會社

注 意

一、本誌は前年迄は本會及び本誌に特別關係ある人には進呈致居候處今内部の整理と共に每號無代進呈は何人にも致し不申事と相成候間御愛讀の方は此の際本年度よりの誌代御送附下され度候

二、本誌は一切前金にあらざれば發送致さず候

三、御送金はなるべく安全なる振替貯金に依られ度候

四、若し郵便爲替にて御送金の場合には芝區三田四國町二番地六合雜誌社と指定し拂渡局を三田芝園橋郵便局と指定せられ度候

五、本誌代金に對しては領收證を差出さず代金領收次第御注文通り發送可致候又前金切れの節は帶封に(前金切)と押捺致候間早速御送金可被下候

六、本誌の廣告に關しては御照會次第詳細に御通知申上ぐべく候

七、本誌の編輯及び紹介批評並に圖書交換雜誌等に關しては六合雜誌社宛にて御申越下され度候

八、定價は内容の改善發達と共に七月號より下表の如く改定致候間御承知下され度候

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵稅共
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵稅共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵稅共

●海外は郵稅一冊に付金六錢(清國を除く)
●臨時號出版の際は規定以外に代金中受く

本誌廣告料

特等	普通	普通
表紙二三四面	一頁	一頁
金貳拾圓	金拾貳圓	金六圓

●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候
●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候

大正二年七月三十日印刷納本
大正二年八月一日發行
(毎月一回一日發行)

定價 貳拾錢
稅共

發行兼編輯人 鈴木文治
印刷所 山本與一郎
東京市京橋區錦町二十七番地
株式會社 秀英合

發行所

東京市芝區
三田四國町

統一基督敎弘道會
振替東京二〇〇〇三番

賣捌所

東京堂◎同文館支店◎北隆館◎東海堂◎上
田屋◎警醒社◎敎文館其他全國有名書店

Library of the
 PACIFIC UNITARIAN SCHOOL
 FOR THE MINISTRY
 Berkeley, California

六合雜誌



明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可
 大正二年九月一日創行(每月一回一日發行)

六合雜誌第三十三年第九號

號 月 九

文學士 土井晩翠先生著 (歡迎如湧)

新訂 増補 曉鐘

美本全一冊

正價參拾錢

郵税金四錢

本詩集成りてよりこゝに十三星霜、世間詩風幾多の變遷に超越し、江湖の需用益多きを以てこゝに十二版を發行したり。

山口氏著	英吉利語	獨修
同氏著	獨逸語	獨修
同氏著	佛蘭西語	獨修
小柳氏著	露西亞語	獨修
山田氏著	伊太利語	獨修
岡崎屋編	西班牙語	獨修

佐竹氏著	羅馬句語	獨習
山道氏著	馬來語	獨習
三原氏著	支那語	獨習
松岡氏著	朝鮮語	獨習
村田氏著	蒙古語	獨習
加藤氏著	エスベラント	獨習

正金 廿五錢
價金 五錢
各錢
郵二錢
稅宛

發行所 東京 東都 林大 平大 京屋 堂名 富古 文屋 館川 大瀨 阪三 丸輪 善豐 吉田 岡久 金留 正米 堂菊 (京竹)

岡崎屋書店 電話 八四一 本番 八

THE RIKUGŌ-ZASSHI.

No. 392. September, 1913.

CONTENTS.

A Morning by the Sea of Galilee (<i>Frontispiece</i>).....	S. Arita.	1
<i>Problems of Religion and Art.</i>		
Problem before Us.....	Prof. T. Katagami.	4
Unity of Religion and Art.....	Y. Ishizaka.	6
Effort to refine the Life.....	S. Ōsumi.	10
Art for Art's sake.....	K. Kayahara.	13
Independence and Dependence.....	Prof. S. Okkotsu.	16
Moods, Within and Without.....	Rev. S. Abe.	20
Midway of Unity.....	Prof. T. Okada.	25
<i>Replies from Religionists and from Men of Letters.</i>		
Truth, Beauty and Life.....	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	39
Art and Religion in relation to Spiritual Life.....	Prof. H. Minami.	53
Life, Art and Religion.....	A. Naitō.	63
The Temple of Wonders.....	G. Yoshida.	71
Religious Question and New Artists.....	S. A. N.	82
"La révolte" (<i>Villiers de l'Isle-Adam</i>).....	A. Naitō.	92
A poem.....	K. Satō.	100
Tanka.....	S. Noguchi.	103
A poem.....	N. Fujii.	104
"Les Aubes" (<i>Emile Verhaeren</i>).....	G. Yoshida.	105
<i>Topics of To-day.</i>		
Struggle or Death?.....	A. Naitō.	118
The Dignity of Ego.....	Prof. H. Minami.	119
History, Ego and Community.....	K. Katō.	120
Woman of To-day and Her Husband.....	H. Nakano.	122
<i>Open Letters:—</i>		
To Mr. T. Komatsu.....	I. Aihara.	123
To Mr. X. Y. Z.....	T. Okada.	124
To Mr. T. Okada.....	G. Yoshida.	125
Prof. Dr. J. T. Sunderland.....		129
Unity Hall Reports.....		130
Books of the Month.....		131

Published Monthly by the

TŌITSU KRISTOKYŌ KŌDŌKWAI,

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

始終神様に

近づいて

清い心を

持った者に

何の悪魔が

誘惑の手を擴げましよう。

朝夕ライオン歯磨を使つて

美しい齒を具へた口から

何で病の黴菌が入り込みましよう。

(入袋大用庭家)





精神生活より藝術と宗教へ……………三 並 良……………三

生活と宗教と藝術……………内 藤 濯……………六

驚異の殿堂……………吉田絃二郎……………七

宗教問題と新藝術家の群（デーメル……フオガ
ツッアロー……ビヨ
ルンソン……ゴルキイ……メレジ
コフスキイ……ストリンドベルヒ）……………S A N……………三

文 藝 欄

反 抗（劇……ギリエド・リイル・アダン作）……………内 藤 濯 譯……………九

本 能 と 靈（詩）……………佐 藤 清……………一〇

金 屋 の 夢（短歌）……………野 口 せい 子……………一〇

夏空の思ひ出（詩）……………藤 井 夏 人……………一〇

黎 明（劇……エミール・ゾルアーレン作）……………吉田絃二郎 譯……………一〇

時 評

改革！改革！改革！……………内 藤 濯……………二八

自我の權威……………三 並 良……………二九

歴史と集團と自我……………加 藤 一 夫……………三〇

現代婦人の悩み……………中 野 柏……………三一

予の交渉顛末書に就いて……………相 原 一 郎……………三二

XYZ君に答ふ……………岡 田 哲……………三四

再び岡田哲藏氏に答ふ……………吉田絃二郎……………三五

■サンダアランド博士を迎ふ……………■惟一館だより……………

六合雜誌第三十三卷第九號目次

ガリレアの朝(口繪)……………有田四郎……………

宗教對藝術の問題

當面の問題……………片上伸……………四

宗教と藝術との合致……………石坂養平……………六

人生醇化の努力……………大住嘯風……………一〇

藝術の獨立……………茅原華山……………一三

獨立と提携と……………乙骨三郎……………一六

氣分の内と外……………安部清藏……………二〇

融合の中間……………岡田哲藏……………二五

一家言

武者小路實篤……………元三井甲之……………元廣瀬哲士……………二〇

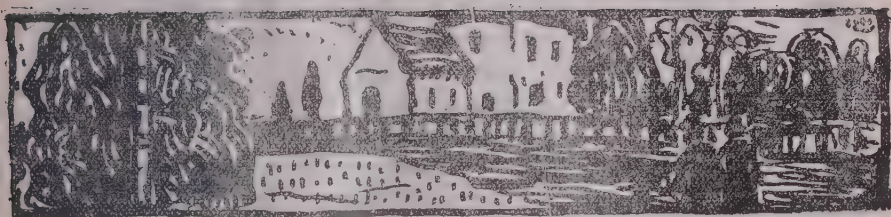
川出麻須美……………田中達……………三相馬御風……………二三

柳宗悅……………三栗原基……………三阿部次郎……………三

折竹錫……………三高木壬太郎……………三厨川白村……………三

小林愛雄……………三高木壬太郎……………三厨川白村……………三

眞と美と生命……………内ヶ崎作三郎……………三





そよ／＼と

ガリレアの湖の

岸をふく朝風に

しづかなる歩調は浮び

きらなる聲音はもつれ

光はきたる

東より……………

NEW ARRIVALS !!!

NELSON'S NEW CENTURY LIBRARY

Price 1.25 Postage .04 each

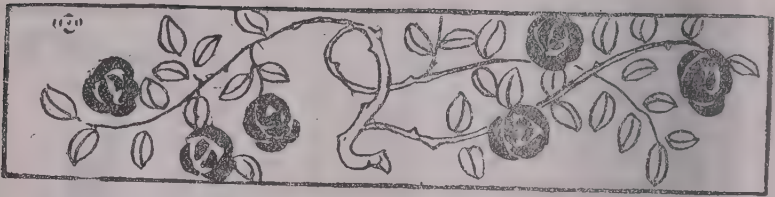
The Newcomes—Thackeray
Martin Chuzzlewit—Dickens
Barnaby Rudge—Dickens
Adventures of Philip—Thackeray
American Notes, etc—Dickens
Oliver Twist, etc—Dickens
Peveril of the Peak—Scott
Guy Mannering—Scott
Catherine, etc—Thackeray
Last Days of Pompeii—Lytton
Waverley—Scott
Pickwick Papers—Dickens
Zennyson (1830—1859)
Longfellow's Poems
Great Expectations—Dickens
Quentin Durward—Scott
Kenilworth—Scott
Nicholas Nickleby—Dickens
The Book of Anobs—Thackeray
Don Quixote—Cervantes
Heart of Midlothian—Scott
Sketch Book—Irving
The Monastery—Scott
Pendennis—Thackeray

KYO BUN KWAN.
GINZA TOKYO,

六
合
雜
誌



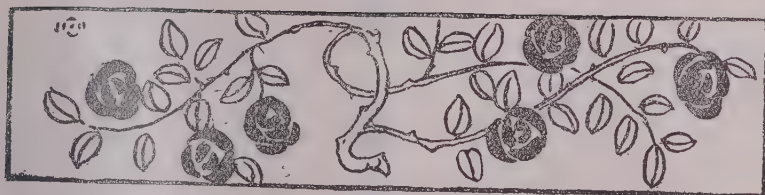
第參百九拾貳號



らは其處に、いはゆる生活の第一義要求を根柢とした消息が萌して居ないとは云ひ難い、人生宗教の根本動力と互に觸れ合ふ情調が動いて居ないとは云ひ難い。われらがこゝで、『宗教對藝術の問題』を提供するに至つたのは、一つには斯かる新しき現象に依つて、此の大いなる時代に、何等か新しき機運の近づくを感じたからでもあるけれども、また一つには、これまで宗教と藝術とに絡みついてゐた一切の幻影を剝ぎ取つて、能ふべくんば兩者の眞意義に徹して見たいと云ふ不斷の要求を基とした企に外ならない。

われらは此の企を、能ふかぎり意義あるものにしたいた爲めに、宗教界文藝界は勿論、一般思想界の諸家に書を裁して、人生そのものとしての宗教と藝術とは、各々獨歩の地位を占むべきものか、それとも將來如何なる點に交渉を取つて進みゆくべきものか、さういふ方面に關しての高見を乞ふて、以下に輯録する事にした。われらの乞を容れられて、或は返書をたまはり、或は特に執筆の勞を取られた諸家の御厚意は、社中同人のひとしく感謝するところである。

また社中同人のうち、此の問題に心を傾けつゝある者どももの意見乃至感想を併はせ載せる事にしたのは、これまで微力をも顧みずして、實生活より遊離せざる宗教と文藝との開拓に従つてきた本誌の立脚地を明にして置きたいと思つたからである。われらは將來もなほ、願はくば寛りある心を以つて、此の大問題の討究を續けて行きたいと思ふ。(社中同人)



宗教對藝術の問題

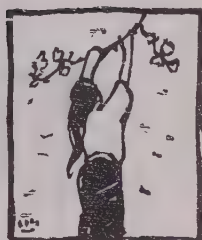
はしがき

われらは今つひに、人文史上殆んど先例なき一時代に逢着した。求めんとして求め得ざる不満と絶叫、建設の曙を期待することなき否定と破壊、それらの凄まじき勢にさいなまれ來つた思潮の波は、緊張と充實とを導調とする生活の底をいつともなく浸し流れるやうにはなつたものゝ、なほさまざまに狂ひ亂れて、其の流れゆく方向を何れとも定めかねて居るのである。人類進化の一轉機、これが現代の真相では無いか。

かゝる一轉機を思はせる紛糾と混亂との間よりして、眞摯熾烈なる努力を現はし來つたものに、世界の新しき文學がある、新しき美術がある、新しき音楽がある。われらの觀る所にして誤なければ、それ等はもはや、ロオマンズ過重の藝術でもなく、現實執着の藝術でもなく、少なくともロオマンズと現實との融合せる一境を目ざして、刻一刻その步調を整へつゝある。われらは勿論、現代藝術の凡べてが、斯かる新しき努力と態度とに依つて生まれつゝあるとは思はない。けれども、一たび創作家それぞれの心理に立ち入つて見るとき、われ

に強く心を牽かれてゐながら、それだけではどうしても足りない。私の本當に求めるものはどうしてもそれだけではない。近代文藝の苦痛と懊惱と——惡魔的傾向と惡魔的傾向を脱し得ない苦しみと、これが近代文藝の深い興味であると同時に、將來の轉化を豫想せしめずに措かない點である。即ち近代文藝の少なくとも底の流れを成してゐるものは強烈な生活欲望である、若しくはその變態變形である。而してその強烈な生活欲望は益々不満不充足の感を加へこそはしても、到底今のまゝでは充足され難く見えるのが事實である。近代文藝の價值に對する疑ひはその點に生じ得ることと信ずる。眞の心の充足、即ち信仰を求め歸依を欲する心は、この疑ひの中からこそ生れて來るであらう。無限の力を有する生命の尊貴に感謝し信順する心は、その疑ひの中からこそ生れて來るであらう。生命の力の不可思議を念々に感じて、信順し成長することの出來るものにして、初めて信仰を説くことが出来る。而かもその人はまた必ず近代人の欲望と苦しみと疑ひとを細やかに身自から經驗したものでなくてはならぬ。さうでない信仰は粗大空疎であつて生命の力を有たない。現在の宗教を文藝的ならしめよと謂ふのはまたその意味であらねばならぬ。

眞に十分に近代文藝を批評することが出來れば、文藝そのものの問題は勿論、生活の深處を衝く一切の問題を提起し得ると信ずるし、また今は既にその時であるとも考へるが、こゝには近頃感じてゐることだけを、漠然と述べて置くに止めます。



當面の問題

片 上 伸

近代の文藝、殊に世紀末以後の文藝は、専ら生活欲望の悩みを表白してゐるものと云へるであらう。勿論その現はれかたは様々であつて、皮肉笑傲的態度を採るのや、遁避遊離的態度を採るのや、必ずしも當面の問題を正面から取り扱つてゐないやうなものも随分多い。しかしそれ等の凡てを一貫して、吾々の最も深い興味を刺戟する基調は、生活欲望の悩みの聲である。光彩の中に濃き陰影の閃めきがあり歡喜の中に不安を宿してゐるのが近代文藝の著るしい特色の一つである。その中には驀進もあり打破もあり強烈な自我の主張もあるけれど、尙常に何等かの不安な心持ちが伴つてゐる。イブセンにしてもトルストイにしても、あれだけの強大な深刻な人格を以てして尙その一生と凡ての作品とは、動搖と懊惱と孤寂の感を與へて已まない。吾々は勿論その意味深い生涯と作品とによつて内省考察を促され、一種の心強さを感じるとが出来る。味うても味ひ盡くされない深い興味を、これ等の人々の生活に掘り下げて行くことが出来る。しかしそれだけでは物足りない。少くとも私は物足りない。(尤も、さういふ近代文藝を味識することだけでも、私はまだ甚だ不十分ではあるが) 近代文藝の興味はたしかにインテンスではある。深刻ではある。嚴肅ではある。しかしその深刻にも緊張にも嚴肅にも、拭ふ可からざる苦痛の色が漲つてゐる。私はその苦痛な陰慘な深刻と緊張と嚴肅と

私は普通の意味でいふやうな宗教を味つたことはない。自ら求めて教會や寺院に行つたこともなければ神や佛に祈りを捧げたこともない。二十有餘年間の私の生活には、宗教に入る機縁が缺けてゐた。第一に私の性情は宗教の門に入るを必要としなかつた、若しくは許さなかつた。私はある時期に至つて、自然に宗教家の門を叩く人間でないものであらう。第二に私のこれまでの生活は、餘りに内部的に平和であつた、苦悶がなかつた。私は自己の精神力の弱いのを嘆じたことは度々あつた。が一度も罪惡の觀念に身を責められた覚えがない。心身の衰滅を來たすやうな不運にも、不幸にして逢つたことがない。幾度か死の觀念に襲はれたが、それも私の心身を搖撼するに足らなかつた。人間が生と死との間に始終してゐることを思ふとき、私は日前の事象ばかり考へてゐられない。死は生の斷滅である。生きて行くことは、一步死に近づくことである。肉體の衰弱は、生命力の滅び行く象徴である。何等かの機會に、かういふ思ひに耽つて、不安に打たれたことはあるが、それは多く理知から來てゐた。さうしてこの不安は、私をして思想の上から、人生の永續性、絶對性を思はせるに役立つたばかりであつた。曾て可成り重い病の床で、限りなく涙が流れ出て、死の恐怖を夢みたが、それは激し易い感情の所産であつた。

現在の私が興味を覺える世界は、現實の世界である。激動してゐる活社會である。身を安靜の境に置いて、讀書に耽つてゐるときでも、ゆるやかに自然の大氣を呼吸してゐるときでも、私の心は刻々活動する現實の實相如何を想起して止まない。現實の實體如何を思念して止まない。さうして五官に感じうる現象の底に、何物か深い神秘の扉が立つてゐる、不可視的不可知的な對境がある、直接に感

宗教と藝術との合致

石坂養平

宗教と藝術との交渉には、その起源から見たものと、本質から見たものとの二つの側面がある。が人文發達史の上から、宗教と藝術とが、その起源を同じうしてゐることを説くのは、今日の多數者の心靈の要求を容れたものとは云はれない。恐らく學者の閑事業であらう。私達の心を動かすのは、本質から見た側面の考察である。近頃人々がよく口にする宗教と藝術との交渉といふことも、素より本質上の交渉を謂ふのであらう。交渉の有無如何は、私には餘り問題にならない。一步を進めて、私達の實生活の上で、宗教と藝術とはどんな關係になつてゐるか、藝術はどういふ點で宗教と融合するか、乃至交錯するかが、私に取りて最も興味の多い問題である。私は度々この問題に衝き當つた。さうして人の言説に耳を傾けもし、自ら考へても見たが、はつきりした考へをもつまでに至らない。

私は藝術の一途を辿つて來た。文藝から刺戟を求めなければ、寂しくて堪らない。どうして私が藝術に必然の要求を向けるに至つたかは、今ではその理由を求め難いほどに、一種の本能となつてゐる。筋の變化の面白さに引かされて、小説を読んだ時代もある。兩性の愛憎關係が面白くて、文學書類を手にした時代もある。異國情調に觸れたくて、好奇心から外國の作物に耽つた時代もある。何となく社會の狀態が知りたくて、種々の書物を漁つた時代もある。最近に至つて現實、實生活と向き合つて、文藝ばかりでは物足らなく思ふやうになつた。

感覺に盛らうとするのが藝術である。宗教では絶對境の存在を作り出すを要する。藝術にあつては、この境から芳烈な味ひを得れば足りる。そこに描き出される對象の存在如何を問はない藝術の具象性が見える。

宗教も藝術も、等しく情意の働を主とし、直覺の力を重んずるが、二者を比べて云へば、宗教は意志に待つ所が多く、藝術は感情による所が多いやうである。絶對神秘の境地と幾分かの距離を保つて、それを鑑賞し味識しようとするのが、藝術の特異點である。そこに藝術の圓滿具足性がある、自己にはじまつて、自己に終らうとする具足性がある。絶對の境と接觸して、それを實現し、わが心胸の所有物としようとするのが、宗教の特異點である。そこに宗教の自他融合性がある、自己のうちに他を抱擁し實現しようとする欲求性がある。直覺の力によりて、神秘の一境を開かうとする一點に於いて一致した宗教と藝術とは、こゝに岐れてそれ／＼違つた方面に走らうとする。

しかしながら、近代の藝術は刻々に變はつて行く。創作家の心理に立入つて見ると、近代の小説戯曲では、著しく意志の力が働いてゐる。また創作そのものを味つて見ると、對象そのものが如實に描き出されて、所謂藝術の具象性は著しく薄らいでゐる。實感と欲求の力と生命の音楽とが、作物の根本調をなしてゐる。そうして藝術の歩みは、宗教の歩みよりも速かであるらしい。乃ち藝術は宗教を追かけて行き、何處かに於いて一つにならんとする傾きが見える。藝術を味ふことのやがて宗教を信ずると同じからんとする傾が見える。(七月三十日、田舎にて)

覺の觸知を絶した活動の世界があるやうな氣がしてならない。そこに人生の永續性、絶對性が、何物かの形象を具して流れてゐるやうに思はれてならない。私のだらけ切つた肉體も生きてゐるか死んでゐるかの意識にさへ乏しい精神も、一念ここに及ぶときに、生命の努張感を覺える。宗教の對境も、藝術の對境も、この一境を外にしてはなからう。宗教の念力により、藝術の鑑賞によりて、この一境を開いて見たいと云ふのが、私の欲求である。私の生活と、宗教及藝術との交渉は、こゝから初まるべきである。しかも事實として初まつてゐるかどうかは、自分でも分らない。

絶對の對境を覗がうとする私の欲求を實現するに、一般に三つの用具がある。哲學と藝術と宗教とがそれである。

哲學も藝術も宗教も、その究竟は人間の全力的活動、心的活動全部に憑つてゐるものでなければならぬ。知情意全體にその根ざしをもつてゐるものでなければならぬ。しかしよく人のいふ通り、私の經驗から見ても、哲學は情意よりも理智に據る所が多い、宗教・藝術は理智よりも情意の活動、直覺の力に待つ所が多い。哲學を力として神秘の對境に對すると、私の心性はその對境を是認するか否認するか、二者いづれかである。その態度は頗る論理的である、冷酷である。味識し愛玩しようとする態度になり得ない。情味の濕ひの滲透を待つ前に、不安と焦慮と寂滅とを感ぜずにはゐられない。

神秘の境の存在を是認し、若しくは否認する代りに、これを感じし體驗しようとするのが、宗教藝術である。詳しく云へば、絶對境の存在を念出し、それと偕に居り、それと一にならうとするのが宗教である。そこに神秘の投影にさへ確實性を與へる信仰の力が見える。神秘の境を象徴の内容として、

のにあらじか。

人生を全體として觀察し、諸の人生の諸相の發生を問ねれば、宗教と文藝とは分離ざるのみならず、之を分離して考察するは、不可能の事に屬す。特に人類の心理的發展を考察するに於いて然り。

されどかく云へばとて、文藝宗教又は倫理は、人生醇化の形式を創造して、進化發展を試むるに於ては、各々獨立せし地歩を有するは亦勿論なり。即ち文藝が宗教に依付して立ち、宗教が文藝に依付して立ちて、其の存在を有するものには非ず。各々獨立せし一相を人生の上に投じ、儼たる一存在を有せざるべからず。若し宗教又は文藝にして、他に依立せざれば存在する能はずとせば、其の宗教其の文藝は、決して人生を醇化し得るの力なしと云はざるべからず。希臘のヴィナスの像は、諸神が死せし後と雖も、其の存在を有し、教會の音楽は、異教者の耳にも尙、微妙なる海潮音を與ふるに非ずや。コーランは晦澁の筆を以て、險奇の句を繰り、吾人の如き淺識の者に對しては、詩としての妙を喫せしむる難しと雖も、尙熱烈なるアラビヤ豫言者の雄雋卓拔なる思想に參ぜしむ。幸にして宗教の思想を盛るに、詩趣洽ねき形式を以てすること、舊約の諸書、若しくは佛典の如きあらば、そは後代に遺せる古人が大なる賜ならまうのみ。

吾人はアンゼロの諸作、健陀羅ガンダラの美術を獨立せし藝術としても、嚆賞するを得ると共に、また一面に於て、此等の名ある若しくは名なき天才の宗教的信仰より溢れ出でし餘瀝とも、之と歟美するを得べし。故に進歩發展せし宗教と藝術とは、其自身に於て獨立すると共に、觀察點の如何に由りては、亦一が他に從屬するとも觀察するを得るなり。従つて宗教と藝術とが如何の點に於て交渉するやの問

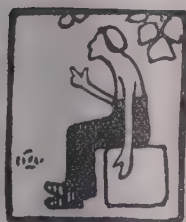
人生醇化の努力

大住 嘯風

廣義に所謂文藝と宗教とは、余が見を以てすれば、其の發生（Genesis）を同じうす。嘗に獨り文藝と宗教とのみならず、倫理もまた其の原始衝動に於いては、文藝宗教と發生を同じくすと云ふべし。人類が人生を醇化せんとする心理的努力を試み始めし時、之を文藝と云はんも未しく、宗教倫理と名けんもふさはしからざるに當りては、この衝動の裡に、宗教たるべき嫩芽も、文藝倫理たるべき胚種をも有す。強ひて之を名くれば、人生をして一層高きに至らしめんとする憧憬とも名くべけんか。而してこの憧憬を形式化せんとするに及んで、茲に其の人の心的傾向の趨くに從ひて、或人は眞に、或人は善に、或人は美に、各々其の傾向のまに／＼進み行き、人生醇化の形式を創造す。文學と宗教と倫理とが相分るゝは、衝動が漸次に特種化せらるゝに由つて起る人生の種々相なり。故に其の原始の衝動に探り入れば、渾然として一如なる衝動の發生に歸すべし。

人生を醇化せんとする原始の衝動には、將來此が果して宗教たるべきか、文藝たるべきか、倫理たるべきかを、區別する特異性を有せず。醇化進むに従ひて、普汎なるものは特種に、廣きものは狭く、淺きものは深くなり、こゝに文藝と宗教と倫理との異なる相（Phases）を生ず。

ジョージ・サンタヤーナ George Santayana が『詩と宗教との解説』序論中に、『詩が人生に加被するを宗教と名け、宗教が人生に交渉するを詩と云ふ』と云へりしものは、この間の消息を道破せしも



藝術の獨立

茅 原 華 山

私はホイズマンズや、メタランクのやうに、古いカソリック信仰に赴くのは賛成しない。架空な神は、唯藝術を害するばかりである。古い例は澤山あるが、ボードレエルにも形式的な宗教思想があつたし、之を一掃したといはれるヴェルレヌにも、徴の生えたカソリック分子があつた。私はワイルドの意氣を壯とするが、彼の詩作の如きは探るに足らぬし、またまたキリストを論ずる邊は、好くいつてロマンチストである。固定した宗教は、知らぬ間に藝術を害する。クラシックのものになると、特に甚しい。『アウカサンとニコレト』といふ變愛物語の如きも、

“God has set her in the skies

To delight my longing eyes.”

などといつて、宗教的思想が非常に邪魔をして居る。此れは時代が舊いから仕方がないとして、今後の藝術は宗教と同化することは出来ない。(歐米の如きキリスト教國では、随分困難な仕事である)わが國の古事記の如きには、外國にあるやうな固定した宗教思想がないので、赤裸々の生慾の發顯がある。ギリシャの神話とは正反對に、飽くまでも現世的で利那的であるところに、大きな價值がある。勿論その時代の人々―神とはいはぬ―は、現今の人々より、官能も鈍かつたには相違ないが、少なく

題は、觀察者の立脚地が奈邊にありやとの問題に同じ。

人生を全體として觀察すれば、人生の諸相一として相渉らざるはなく、それと共に一として相同じきはなし。こゝにも平等にして差別、差別にして平等なる哲理を建立し得べし。

現代の藝術が『藝術の爲めの藝術』^{アイツ、フオス、アーツ・フォー・アーツ}を叫び、藝術自らの獨立を得んとするは、歴史的に觀察して、藝術が動もすれば他に依立し來れるに厭らず、藝術自らの存在を確立せんと欲する切なる欣求の聲なり。藝術が藝術のみを以て人生を醇化せんとする企劃の努力なり。思ふに藝術は、將來益す藝術自らの獨立を確立し、何等他に依付するとなき醇化を人生に試むるを得べし。されどかく云へばとて、藝術が他の人生の諸相に叛逆を企て、之を撥無して獨立するの謂には非ず。その背景には、依然として人生の諸相あるは之を否むべからず。一切の社會現象が、超然する能はざると同じく、倫理も宗教も藝術も、自らを切り離して其の存在を保ち得ざるなり。

之を要するに、人類が人生を醇化せんとする原始的衝動の發生中には、宗教も倫理も詩も、胚種として之を有す。而してこの衝動の發展して漸く形式を取るに及び、こゝに宗教の生れ、文藝の生れ、倫理の生るゝあり。理想を眞と善と美とに認めて其に慕進し、各々人生の一相を開拓して、こゝに獨立せる存在を占む。しかもこの獨立の背景には、人生全體としての諸相を有す。故に宗教を立脚地として人生を觀ずれば、こゝに無始本有の眞實如常あり。倫理より之を觀ずれば、こゝに善あり。藝術より之を見れば、こゝに美あり、一多相融にしてしかも不同、諸相不同にしてしかも圓融無碍なるなり。

余の宗教觀より見たる藝術の意義價值及び、宗教史より見たる宗教と藝術との關係に就ては、別に説あれども、今は其に及ぶの餘裕なきは遺憾なり。

せんとする努力である。在來の固定した思想—固定した思想は、多くの罪惡を生み進歩を妨げる—から自己を救ひ、ボードレールの所謂『無限の眞晝』に向つて、進まんとする努力である。茲に到つて宗教などは何等の價值もないのである。

最後にいふ、一寸した煩悶でもあると、直ちに神を信仰するやうな弱い人間は、人間として三文の價值もない。煩悶を怖れるやうでは、藝術家たることは勿論出來ないし、人間としても劣等である。根蒂のない藝術は、唯自己—貧弱な自己を飾るイルミネーションに過ぎない。然し宗教として、哲學としての藝術なら、私は之を賛成する。而して最後の問題は、藝術と宗教とは各々獨歩の地位を占むべきものである、決して同化することは出來ぬといふに在る。

『フアン・ド・シエクル』といふ字に含れた悲劇、『モダーン』といふ字に含れた悲劇、私はこの幾多の^{エピソード}挿話を研究して、更らにこの説を進めたいと思ふ。これで擱筆する。

とも、架空の神などを擔ぎ出すメタランクなどよりは、更らに更らに徹底的である。自ら巴里の醉人と稱し、道德を以て靈魂の嫉妬となしたヴェルレエヌなどが、主張し實行したところは、既にわが國の『古事記の人々』が行つたのである。沈黙は死である、死は人間の最期であり、最も醜き瞬間である。私は運命などを默想する藝術を欲しない。ワイルドの所謂『清新なる自己實現の様式』には、そんな餘裕はない。智識も思想も過去も現在も、すべて白熱した藝術を欲する。メタランクのやうなのは、深遠を以て許すべきではない。寧ろ頭の鈍いのか、さうでなければ神祕専門家、骨と皮ばかりの坊主を以て稱すべきである。マラルメの詩にあるサイレンの兒となるのが、私の切望するところである。慘虐であり、且つアドヴェンチュラスであるのが、私の欲するところである。この心境はアルチュール・ラムボオの諸作に見える。多少隙はあつたにせよ、隨の煬帝の如きは、確かに私等の心に共鳴を與へる。

私はイルミチエトされた藝術を欲しない。藝術はわが呼吸であるといふ自覺に到達すれば、淺薄な裝飾品たることを免れる。此れは前に述べたから、詳しくはいはぬが、現今の無修養無自覺の所謂文士よりは、大きなスフィンクスと、少し許りのヒエログリフを遺した埃及のペダントの方が餘程偉い。言語には Illumination がある。數千年來の人々の悲哀や歡喜が籠つてゐる。(私は多少『言語そのもの』イルミチエション』を除くことは出来ぬと思ふ)従つて新しい思想情緒を盛るには、チオロヂズムを叫ばなければ、*Mots frais, phrase enfant, style naïf et chaste.* (若々しい語、稚い句、飾のない清淨な文章。)を作ることには出来ない。私がチオロヂズムを稱導するのも、つまり自己を強く且つ深く

他に比類が無いと言はれて居る。かくして宗教畫が畫かれて居る間にも藝術的表現の要素は、漸々に獨立に向つて居たのであるが、世俗的畫題を盛に撰ぶやうになつてからは、一層明かに現はれて來た。

今まで述べた様に、學問や道德や藝術が、宗教から獨立する傾向は、何と言つても歴史上の事實であるが、これが善いか悪いかといふのが要點なのでせう。私は當然の進化だと思ふのです。然し分れに分れた結果、一が他を少しも顧みない様になることは、確かに其弊である。況んや自分獨りて、全精神界を支配しやうとするのは、到底無理な望である。それ故一口に言へば、學問、道德、藝術及び宗教が、それ／＼自分に忠實であると同時に、出来る限りは、他の獨立をも認めねばならぬ。勿論此處には、種々の困難が起る。激しい葛藤も戦争も起る。然し結局、一方が他を全く征服して、隸屬せしめるといふことは、出来もしなければ、利益でもない。それ故出来る限りは、互に連絡を取つて、精神生活の調和を計ることにするより外はない。これが眞の幸福な生活を營む所以である。この事は學問、道德、藝術の三つの間に於て然る如く、此の三者の各々と宗教との間に於ても、さうであるだらうと思ふのです。

例へば道德と藝術とが、各々他を全く否定しやうとしたら如何であるか。道德家が努力精進の生活を飽くまで主張する。これは自分の本領に忠實な所以である。然しそれを主張するの餘りに、藝術の生活——即ち立ち止まつて觀する生活——を全く否定しやうとしたら。如何であるか。偏見を捨て、公平に觀たなら、必ず結局の損害であることが分るであらう。勿論道德は藝術よりも、幸福な生活の條件として一段先きのものには相違ない。一段上のものと言へなくとも先きのものには相違ない。然し如何に道德が緊要であるにしても、道德一點ばりて、少しも趣味の生活を加味しない場合には、

獨立と提携と

乙 骨 三 郎

折角の御質問ゆゑ、簡単に感想を述べますが、自分ながら、十分な解答が出来ないと思つて居ます。何故かといへば、問題に上つて居る二者中の一即ち宗教に就て、私の考が甚だ未熟だからであります。それ故唯だ一通りの管見を御參考に供するだけです。また便宜上、學問や道德の事を、藝術と同時に述べることをお斷りして置きます。

歴史上の事實に就いて見ると、學問や道德や藝術は漸々に宗教から脱却して、獨立の地位を占め、各々自分の道を進む様になつて居る。自然や精神の學問は、人や物をば神が作ったもの、神が維持して行くものと説かず、自分の立てた假定や方法から説明する。道德家も道德上の法則をば、神の命令として、なく、人間相互の關係から生ずるものと説く。藝術とても同様である。古來宗教的藝術は非常に多いが、これとても漸々獨立の進路を取つて進んで來たことは明かです。日本でも西洋でも、古い時代の藝術は、建築、彫塑、繪畫から音樂まで殆ど全く宗教に隸屬して、其眞理を説き明かし、其の信仰を呼びさす爲めの方便に過ぎなかつた。然るに後世に進むに従つて、一方には、純藝術的の表現法に重きを置く様になり、他方には、宗教以外の有らゆる自然や人生の題材を採る様になつて來た。この獨立の進路は、藝術が主として宗教的題材を取扱つて居た時代に於ても、既に明かに見えて居る。文藝復興期頃の以太利の繪畫が、多く『聖母』や『聖誕』や『磔刑』や『復活』などに、題材を採つて居るからとて、それは宗教的信仰のみから出來たものとは言はれない。フラ・アンジェリゴの様な人は、

と、寧ろ教會の裝飾、或は紀念品ぐらゐの格になつて居るといふことである。これは藝術は人を信心深くするものでない、藝術の呼び起す信心は、本當でないといふ様な考からであるといふ。カルヴィン派では、至端に藝術を教會以外に放逐した。これらの事實は細かに見れば、種々の理由のあることと思ふ。就中宗教的態度を起さしめる爲めの畫像が、美術觀照の材料になるといふ弊害を恐れる念もあるでせう。また殊に、宗教の努力的方面と、藝術とが一致しないといふ觀察が、大に關係して居るだらうと思ひます。然し藝術の直觀的感情的の本質は、弊に流れぬ限りは何時でも、教會の勤めをなすに適して居る。藝術品は教會の以内に置かれる時には、單なる美感の對象になり了るものではなくて、普通の人には實感の對象になる。宗教が知識や意志のみでなく、感情にも訴へるものを持つて居るならば、藝術は何時までも勤めを盡くすであらうと思ふ。藝術の中でも、最も教會と直接な關係を持つて居るものは、音樂である。重に詩歌と結びついた音樂である。これは人の心を清淨ならしめることも出來れば、感情を強く動かすことも出来る。また最も神祕的の性質を持つて居る。此れ等の性質は、宗教と善く一致するものである。神事に樂を奏することが古今東西に亘てつ居るのを見ても、此の關係は分る。舊教の樂は、新教に於て單純にされた。然しこれは軽く見られたのではない。ルッテルが熱心に改編したのである。

然し宗教と直接關係なしに進む時でも、眞正の藝術は此の世の深い意味を示す點に於て、又は醇正の幸福を與ふる點に於て、宗教の主旨に一致するものであらうと思ふ。

心の生活が貧弱になるのみならず、偏頗になることは争はれぬ。餘りに温か味がなくなる。餘りに厳しくなる。餘りに自分の意を立てとほす。餘りにあくせくする。一口に言へば、凡ての物事、凡ての他人に對して、情味の籠つた了解、餘裕のある見方が缺けて来る。然るに此の情味や餘裕は、即ち藝術の與へるものなのである。それ故、道德が如河に藝術に切り込んで行くにしても、それを全く無いものにしてしまへば、結局自分の損である。翻つて道德的觀念なしに、自分を主張するとしたら如何なるか、危険は尙ほ甚だしいに相違ない。それ故藝術家の尊ぶ『藝術的良心』には、道德的の感じも含まれて居なければなるまいと思ふ。

私はこの事から推して考へるのであるが、宗教と藝術(或は其他)との間にも、同じ様なことがいへるであらうと思ふ。宗教は或る意味では、凡てを支配する様な地位にあるが、然かも藝術の獨立を認めなければならぬ。また藝術は、宗教を自分に化してしまふことも出来ない。結局獨立は保つのであるが、而も互に連絡して好い影響を與へて行くのがよい。即ち宗教が(道德と共に)藝術に與へ得る感化は一口に言へば藝術家を通じて、藝術に高い眞面目な調子を與へることである、また藝術が宗教に與へ得る力は、直接又は間接に、其の仕事を助けることである。

直接の助力といふのは、教會との關係である。前に述べた様に、昔は藝術が主として教會に盡くして居た。今日はそれが獨立して來たけれども、尙ほ依然として關係が續いて居る。尤も藝術が教會の事業をどの位まで助けるかといふ事は、人によつて大に考が違ふ。同じ基督教でも、概して舊教の方は藝術(此處では重に繪畫等)は信心を起さしめるに有力なものと考へて重んじて居るが、新教になる

はどうしても自由なる文藝の活潑なる發展に待つ外はない。此の點に於いて予は、近代文藝の大膽なる發展に、滿腔の同情を表するものである。

さて近代文藝の亂調子なる、ほとんど滑稽に類するものがある。併し其の赴く所は、何れも前人未發の境地を求むるに外ならぬ。或は餘りに奇抜に過ぎて、すてに行きつまり居るにあらずやと思はるゝやうな現象も無いではない。否すてに行き詰まつたものが、夥しくある。けれども決して其の爲めに、勃興し來りたる文藝的努力は、其の開拓を止めない。どこまでも天地の眞に達せねば止まないと云ふのが、其の意氣である。此の意氣の活潑なる、恰も十八世紀以後の科學が、當時有したるものに類して居る。科學發展の徑路を知るものは、必ずやまた近代文藝の將來に嚮望するを躊躇しない。

科學の生み出したる世界、及び今後更に生み出さんとする世界は、更に文藝によつて開拓されんとする世界と相俟つて、吾人の前に全く面目を一新したる社會を提供するのである。此の新天新地は、全く新しき氣分に由つて支配されて居る。此の氣分をさながらに紹介するものは、文藝そのもの、本分である。彼は先づ此の新天新地を發見して、その香ひを嗅ぎ出さねばならぬ。而して其の香ひの氣分を、そのまゝ傳へて我等を其の新天新地に誘はねばならぬ。宗教は此の新天新地に立脚して其の香ひと氣分をそのまゝ呼吸する。吾人は其の日の來る事を望みつゝ、現代の文藝に其の案内を求める。

予はこゝで少しく、現代文藝が吾人を案内せんとする新天新地に就いて語つて見たい。

予は餘り多く現代文藝を知つて居るものではない。たゞ其の彷彿たる外様を、ほのかに見て居るのみである。恰度かの所謂未來派の作物のやうに、どこと握み所のない間に、一種の氣分をぼんやりと感じて居る。此のぼんやりした氣分が、果して奈邊より來るものかと云ふ事は、一寸判斷は出來ない

氣分の内と外

安部 清藏

宗教も文藝も、其の主なる要素は、氣分の問題である。いづれも充實したる氣分、これを心理學的に言ふときは、刺戟によつて動く感情生活の高度なる一種に外ならぬ。たゞ宗教は氣分そのものゝ内に動き、文藝は氣分の外に立つて、鑑賞者たるの差があるのみである。而して此の鑑賞者は、時に氣分そのものゝ内に躍り込んで、全然宗教生活の内容に溶け込む事があるので、文藝が宗教の代りを爲すにあらずやと、思はるゝ場合も少なくない。近來宗教の方が段々衰へて、文藝獨占の時代となりはしないかなど云ふ議論のあるのは、相當に根據のある説である。現に會堂の講壇よりは劇場の方が盛んになり、宗教的出版物よりは、文藝的出版物の方が、賣行きが早いのを見ても判る。併し此の一時的现象を以つて、宗教の時代が過ぎ去るものと思ふのは、大なる誤りである。文藝の盛んなる所以は一方宗教の盛んなるべき要求を示すものであつて、決して宗教に逆行するものではない。

たとへば歐羅巴に於ける文藝復興は、人々の注意を一時宗教の場面より、希臘の文學の方へ奪ひ去つたのであるが、其の結果は寧ろかの宗教改革を呼び起したのである。現代の宗教界が、漸く古び來つて、是非とも革新せられねばならぬ境地に陥りつゝあるに際し、宗教運動そのものゝ盛んなる代りに、文藝運動の盛んになりつゝあるのは、蓋し意味ある順序の階程と云はねばならぬ。何となれば、深遠幽大なる宗教的氣分は、其の養はるゝ淵源に於いて、頗る深遠幽大なるものが必要である。此の淵源は宇宙人生社會の各方面に亘つて、其の奥底を盡くす程のもので無ければならぬ。そしてこれ、

疑はるること約翰傳と五十歩百歩の問題となつたのである。斯くなつては、史的耶蘇の確證を求むる事は、絶對に不可能となる代りに、初代基督者の裏に宿つた基督そのものの内容を、一層明白に立證する事が、最大要務となり、随つて其の立證が、耶蘇それ自身の立證ともなるのである。すでに然りとせば、約翰傳の如きは、初代基督者の理想した耶蘇そのものの最も豊富なる材料であつて、其の價値は或は、三福音書に優るかも知れない。特に宗教そのものの、本質たる氣分を傳ふる上に於いて、其の劇的筆致は、到底他の作物の企て及ばざる所である。

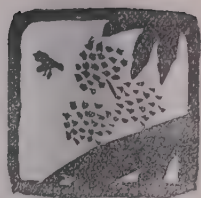
今體宗教の極致は、其の外形に顯はれた事跡如何に存ずるのではない。其の靈の裏に潜む氣分そのものの活ける消息である。史的耶蘇の事跡が、どれだけ眞實で、どれ丈後世の假想であるかは、必ずしも問題でない。たゞ耶蘇といふ人格の裏に、實存して居つた宗教其ものの氣分が、其の同行者に波及して、それが一波一瀾、實際の世界に普遍し行けば宜いのである。而して此の氣分が、約翰傳の如き作物に據つて、今日まで傳へられたとすれば、予輩は其の作物が、史的事實にどれだけの根據を有するや否やに論なく、之れを基督教の經典として、充分尊重せざるを得ないのである。

惟ふに耶蘇の如きは、其の生存中の事跡を、後世に遺すと云ふが如き事に、多くの重きを置かなかつたものであらう。たゞ宗教そのものの活きた氣分を、後世に遺しさへすれば、それで満足されたのである。此の氣分が果して如何なるものなるかは、吾人基督者の實驗に由れば、頗る明白なものではあるが、さて是れを言説する事は、頗る困難である。是れを表現するには、どうしても文藝的手段に依頼する外はない。此の點からして、予輩は基督傳の如きは、是非にも劇的作物の恩澤に浴する必要があると思ふ。廿世紀の基督傳は、決してかの無味乾燥なる年月日や、文書典籍の考證に紙面を埋む

が、何となく新しい香ひがして、云ひ知れぬ可^{なつか}懷しみを覺える。此氣分が聽て、來るべき新天新地の實際を吾人に紹介するものであるとすると、一層深く其の消息を知りたいやうな氣がする。

兎に角、現代文藝の題目は、生そのものである。生そのものゝ徹底したる真相が、果してどんなものであるか、それを説明に據らず、教理に據らず、真相そのものから來る氣分に直參して、これを直觀せんとするのである。此の生の氣分と云ふ事は、素より古くからの事實ではあるが、極めて最近に發見されたる領域である。此の領域の開拓は、文藝の新しき領域たると同時に、また宗教の新しき領域である。これまで宗教は、どうしても死の向ふの領土問題であつたと言はねばならぬ。そして生は此の領土の屬國であるかの如く取扱はれた。故に宗教の全體が、とかく死の氣分に由つて、支配されて居つた。今の讚美歌を一寸窺いて見ても、すぐに死の臭ひのする氣がする。何とかもつと生の香りがして欲しい。併し生の香りの氣分が、果して讚美歌に載せられるやうになるや否や、之れ當面の宗教對文藝問題と言つても宜い。生の氣分がとかく卑俗で、肉そのまゝの臭氣がする間は、文藝としても決して成功するものでなう。

「道肉體となりて我等の裏に宿れり」とは、約翰傳記者の説であるが、流石に約翰傳は、生の福音に充滿して居る。近來の文藝が、劇中心^{ドラマ}となりつゝあるに際して、劇的筆致に富んだ基督傳が、漸く其の光彩を放つに至らんとする傾向は、頗る注意するに足るものである。曾て歴史的耶蘇の研究が旺盛を極むるや、約翰傳の如きは、全く無價値のものとして排斥せられ、基督傳上何等の地位を占む事が出来なかつたのである。然るに歴史的研究所の結果は、遂に基督抹殺論をも呼び起す事となり、すべての歴史的記事に對し、極端なる疑問を附するやうになつた。而してかの三福音書すら、其の確實を



融合の中間

岡田 哲藏

今の文藝家は眞實の要求、現實の暴露、虚偽の打破、束縛の脱離などから更に進んで、生活そのものの要求、即ち緊張充實せる生活を求め、遂に觀照の態度すら抛つて、直ちに實生活を味ひ、新しき自己を創造せんことを求むといふて居る。この傾向と宗教とは、何かの關係があるか。

從來はアリトトレスが唱へたカタルシスや、シヨッペンパワーが説いた觀美の意志斷滅、即ち沒我境の如きは、宗教の入神の境と融和せるものと認められて居たが、今日それは漠然たる空想的ものの如く思はれて來た。

「美の爲の藝術」ならば、到達するところは沒我境であらう。然し「生の爲の藝術」となると、それは反對に自我の肯定となり、主張となる。

宗教界にも、教權や信條が權威を失ひ、理想が夢幻となつて、實證的な現實的な傾向が顯著になつた現代は、自我の滅却でなく、奴隸道德でなき自我の主張と實現とが、高調せらるゝに至つた。此の方面に於いて、文藝と宗教とは新に融合すると思ふ。然しそれに達する迄に、一の中間がある。

蓋し生の要求、自我の主張といふも、その内容又はその對象は、充分の研究を要する。何となれば、

るやうな、歴史的研究の結果に由るものではない。肉あり血あり、生の鼓動の活躍したる劇的基督傳で無ければならぬ、約翰傳を更に新しく組み立てたる新約翰傳で無ければならぬ。今の文藝家たるもの、何ぞ此の高き舞臺に筆を進めざる。

顧みればラファエル、アンゼロー、ダンテの全盛時代は、千幾百年の基督教的氣分に動かされて而して後彼が如き作物が、萬代不朽の光彩を放つに至つたのである。十六世紀の宗教改革を享けて、而して後、シエキスピヤーやミルトンの時代があつた。之れを要するに概ね宗教的氣分が前きに存して、しかる後文藝的作物がこれを顯はし、以て後世に其の遺芳を傳へたのである。然るに近世に於いては稍其の趣を異にするの觀がある。即ち文藝が先き走りをして、宗教が其の後を追ふやうな有様である。ゲーテや、ロセツチや、ホルマンハントを初めとして、昨今の歐洲文藝は、多く現代の宗教的氣分の外に逸して、何物か新しき氣分に憧憬して居る。宗教の方では寧ろ之れを厄介視して居る傾がある。而して文藝そのものゝ方から云うても、頗る暗澹たるものである。何となれば畫くべき實體なくして其の氣分を彷彿せしめんとするのであるから、自然無理な事にならねばならぬ。今の文藝が何等の權威を有せずして、滑稽に近き所以のものは、蓋しこゝに原因するのである。實に現代の文藝は豫備時代の文藝である。即ち野に叫べる預言者の聲に外ならぬ。來るべきものは、當に將來に存する。予輩は此の將來者に對して、滿腔の希望を献げつゝ、こゝに一種の氣分を感じるのである。而して此の氣分は過渡時代の文藝と宗教を支配する所の同じ氣分に外ならぬ。予は文藝家がもう少し端的に、將來者の氣分を紹介せん事を望むと共に、宗教家たるものが、文藝家に一步を抜いて、來るべき宗教の氣分そのものゝうちに、直進突入せん事を希望して止まないものである。

然し文藝の本領は常に表現にある、今の文藝家が、新しき哲學や宗教を要求するといふ意義は、若し哲學者や、宗教家が徒に過去の空想を追うて、十分に現實に眼さめて居らぬのに、文藝家が先づ眼さめて要求を切實にしたとすれば、夫は彼等の功である。然し要求たる者の満足は、何によつて得らるゝか。

文藝家の本領は、表現の外にない。要求の切實なるは可なるも、その満足は彼等によつては爲されぬ。彼等はよく現實の生を味ふ、緊張充實の生活をなす。然しそれは彼等に特有のことでない。彼等に特有のことは、何といつてもその生活、よしそれが自己の生活であつても之を觀照するの立場に反りて主觀をも客觀視するの餘裕を有し、そしてそれを表現することである。かくしてのみ文藝は成立する、また藝術の創作に先だち、藝術の生活そのものが、藝術でなければならぬといふ思想もある。それは大詩人の生活そのものが詩でなければならぬと、古來云ひならしたと同じことである。然しこの詩的生活を歌ふには、之を客觀視するの餘裕は絶無でなく、それが表現となるのである。然し生活そのものが主で、表現は第二義だとすれば、文藝そのものが第二義となりするのである。勿論哲學にも宗教にも表現はある。然しそれは必然のことでない、思辨、冥想、祈禱などは、眞理と我、神と我とのみの關係で、それが第一義であつて、それを他に表現するのは、第二義のことである。こゝに文藝との差別は顯然として居る。

生活の表現には、是非とも其の間に觀照の一境があるが、要求の満足の爲めにも、それと同じ境を要する。これが哲學的觀察と思辨である。過去の哲學の功過は暫くおき、生の要求がさに見た様に高級に達すれば、その満足の方法としては、哲學によるの外はない、たゞの要求は依然盲動である。

人間一切の欲望、即ち意志活動は、すべて生の要求である。所謂生活の徹底とは、如何なる方面に行き亘るをいふか、充實とは何に充たされるのか、享樂とは何を受くるのか、それらの内容は千差萬別であらう。その中には他動物と共通な低級の欲望もあり、人間特有な高級な欲望もある。而してこれら欲望の満足が生活であれば、そこに低級の生活と高級の生活がある。若し間斷なく一切の經驗を重ねて行くことが、緊張充實せる生活であるとすれば、その混沌は如何に整理されるか。これらの經驗を味ふことを實生活とすれば、それはたゞ利邦々々の感じてあつて統一性を缺き、且つその大抵は價值少なき生活である。また今の文藝が排斥する遊戲といふことも、生の一の要求に外ならぬ。されば要求の差別が必要となる、それで生活の第一義といふことが考へられる。

第一義と云ふことが、原始的な根本義といふことであるとすれば、最下等生物の最低生活が、一切の生物に共通の根本義である。然し人間の最高の理想的到達が第一義であるとし、それに到達するものが、新しき自我の創造であると考へて見れば、こゝに新しき哲學と宗教が見はれて来る。

生さんとする意志は、生存を追求し、快樂を追求し、力を得んとする意志ともなるが、また知らんとする意志、信ぜんとする意志ともなる。この意志を斷滅せず、却つて之を十分に肯定し、盲目の意志を知の光明に照らし。其至極の點から飛躍して、絶對に融合する、これが哲學宗教の極致である。生の要求の最も向上發展したる境は、こゝに到るのである。

現代の文藝が苦悶し、奮闘し、時に墮落し、糜爛し、また向上し、煉鍊した結果、自我の創造の爲めに、新しい哲學や宗教を求めて來たとすれば、それは喜ぶべき傾向である。



一家言

—— 宗教對藝術 ——

武者小路 實篤

□

藝術を作者の全人格の顯はれるものと思つてゐる私には、宗教と藝術の關係は、有機體的に合一されるべきもので、分つことが出来ないはずのものと思つてゐます。作者の心が、人類とか自然とかに根ざしたならば、その人の藝術は、自づと宗教的になつてくるでせう。ロダンがグセルに、宗教がもし信仰の告白と少しちがつてゐるもので、世界にある不可思議な、疑ひのない、しかし説明することの出来ないもの凡てに對する感情……だとするならば、眞の藝術家は、生きてゐるものゝうち、最も宗教的なものである。と云ふ意味のことを云つてゐるのに全然賛成です。「眞の藝術家たるものは、自然の全き眞理を表現しなければなら

ない、たゞに外面ではなく、就中自然の内面を」とロダンは云つてゐます。當然なことの氣がするほど、これは眞だと思ひます。宗教家も他人の言葉の受け賣りをせず、全人格的に自己の信仰を告白したら、それがとりも直さず藝術になると思ひます。

□ 三井 甲 之

宗教と藝術とは、昔から決して獨立した地位にあつたものとは思ひません。日本に於いて、平安朝を中心として前後の時代には、宗教は寺院を離れて存在せず、また寺院は貴族の娛樂機關であつたのです。久安三年九月十二日、鳥羽法皇の天王寺行幸などは、この模範的一例であります。今日に於いては、この寺院の代りに、劇場などが重

知の光明が之に加はらねばならぬ。故に文藝が生への要求を極めれば、その結果は哲學の指導をまたねばならぬ。もとより文藝家自らが哲學者となるは勝手である、たゞその方法は是非とも知的方法によらねばならぬ。要するに人生問題の解釋に古來の哲學が出合つた一切の困難に出合ふの覺悟をせねばならぬ。知的過程を閑却しては、要求は如何に切實でも、天來の光明は突如として現はれぬ。

然らば宗教はこの要求に満足を與ふかと云ふに、實はしかあるべきであるが、現狀は之れを爲し得ぬと思ふ。元來宗教の一面は、全く民衆哲學である。而して宗教は、因襲や傳説に依頼する、それで常に停滯する、故に革命は屢々必要である。その際にはいつも哲學から光明を得る、その如く今や宗教は一轉の時に迫つた。在來の儘の宗教は、とても文藝の要求を満足せしめ得ぬ。もと近代の文藝が宗教を脱離したのが、現狀を來したのである。

今や新なる哲學が起つて、宗教を活さねばならぬ、同時に文藝の要求を充たさねばならぬ。バーナード・ショウが「新しき哲學なければ新しきドラマなし」といつたのはこれである。それで新しき哲學が現はれて宗教を復活させ、また文藝の要求を充たすときそこに新なる宗教と文藝との融合はあらう。故に二者の中間に立つ哲學の必要を見る、そしてそれが何物であるかは測り難いが、それが自我の肯定主張の傾向を有すべきは明かである。

かゝる時の至るまで、文藝家の努力は、宗教にはその保守的傾向の無効を覺らすの刺戟となるであらう。また哲學者には、それが人生觀察の好資料の提供となるであらう。特に文藝が自ら稱ふる如く、人生の經驗の焦點を示すときに、最も觀察の助となるのであらう。

であらうと思ひます。それを宗教となり、藝術となり、（私は詩、生命など、云ひます）或は人生そのものとなり、勝手に呼ぶがよいのです。しかし、たゞかりに宗教と藝術とを我自身分割對立させ、其の間にいはゆる統一の途がありはせぬかと云ふ風に見たとしたら、それこそ其の宗教なり藝術なりは、兩方とも斷じて人生そのものでは無かつたので、合して大往生を遂ぐべき半死のかたわれであつたのです。

かう云うてしまへば、それまでですが、今少し宗教と藝術との概念を考へて見ますと、宗教は藝術を味はふことであり、ひどくなると利用することであるが分ります。もともと生命そのものであつた藝術に、權威の苔が生へ、依頼すると同時に依頼させるものが出來、集團が起り、政略が行はれ、完全に宗教の本質が出來あがるのであります。故に宗教と藝術は互に敵であり、宗教を破壊することが、藝術即ち生命そのものゝ要求であります。

□

田 中 達

藝術と云ふものは、ルーソウなどの申したやう

に、青年の情慾を刺激したり、人を懦弱にしたり、其の他種々の弊害を伴ひ易きものと存じます。今日の日本にあるやうな淺薄下品の藝術には、勿論この弊のあるのは當然です。しかし私は之がために、ルーソウのやうに全く藝術を排斥すべしとは言ひたくない。出來ることなら、之に宗教的精神を吹き込み、之を希臘の昔のものゝやうにした。また舊教や新教にも、曾て之を利用したことがあるやうにしたい。之が私の只今持つてゐる藝術對宗教の考です。

□

相 馬 御 風

「人生そのものとしての宗教と藝術とは、各々獨歩の地位を占むべきものか……」と云ふお訊ねですが、既に「人生そのものとして」と云ふ形容句をおつけになる以上は、それでも充分だと思ひます。生活そのものとして、何ものかよく獨歩の地位を占め得るものがありませう。私は一體、宗教とか藝術とか云ふやうなものを、これまで多くの人々がやつてきたやうに、固定した抽象概念として取扱ひたくない人間であります。私はあの人は、どう

んぜらるゝやうになつたとも見られます。しかし鎌倉時代に於いて、娛樂宗教に對照すべき人生哲學、人生宗教を唱道した親鸞の出現したことは、宗教の將來に暗示を與ふることと思ひます。人類生活の全開展に信賴するとき、娛樂や、現世利益や、それらよりも沈痛な大歡喜を與ふる宗教的生活が實現せらるゝと思ひます。それで此の宗教的生活は、人格的に傳承せらるゝものでありますが、それが藝術的表現に依つて客觀的根據を示すことは、今日及び將來の文化情態の必然的要求であると思ひます。それゆゑ私どもは、宗教といひ藝術と云ふ概念の邪魔を除くために、『人生を表現する』と云ふことを主張します。表現とは、叙述描寫に對しての言葉であります。

□ 廣 瀬 哲 士

「人生そのものとしての宗教と藝術とは、各々獨歩の地位を占むべきものか」といふことは、私にとつては問題ではありませぬ。汽車と電車といふやうなものならば各々獨歩の地位を占むるかも知れませぬが、人生にとつての宗教藝術は、決してそ

んなものではありませぬ。宗教といふ言葉、神といふ言葉、藝術といふ言葉などは、悉くあなたがたの頭の中から棄てゝおしまいなさい。さうなすつたら初めて、宗教があなたがたの命となつて現れます。神も藝術も、同じくあなたがたの力となつてあらはれます。

□ 川 出 麻 須 美

「人生そのものとしての宗教と藝術との關係」といふのが問題であります。が、「人生そのものとしての」は、「宗教」にも「藝術」にもかゝり、二語を制限してゐるものと見ます。また「人生そのもの」は、「人生に最も直接である」といふ意味で、眞の、最も適切に、「理想的人生そのもの」といふ意味でせう。てなければ、いはゆる客觀的、科學的立脚地から、いかなる現象も、人生そのものであると云はれないことはありますまい。

そこで思ふに、「人生そのもの」であるなら、唯一でなければならず、もし宗教なり藝術なりが、果して人生そのものであつたら、それらは「獨歩」するでもなく、「交渉」するでもなく、全く同じもの

文學士 三浦白水先生譯

最新刊

ニイチエの人格及哲學

■四六判クロス製
■定價金七拾錢
■郵税金六錢

フリードリッヒ・ニイチエは稀世の天才にして、近代的名言者也、

わが文壇、彼の名を識つてより、既に十有餘年、超人の説二價値の論あまねく人口に膾炙せりと雖も、邦文の書冊彼を論じ、彼を傳するもの未だ殆どこれあらず。著者メエビウス氏は、獨國病理學の大家にして、兼ねるに哲學及文藝の深奥なる造詣を以てせり。この書氏が該博なる智識を傾倒して、此偉大なる天才の人格を釋ね、思想を説けるもの、蓋しニイチエ研究書中のオーソリテイ也。文學士三浦白水氏、今其流暢なる譯筆を以て、この名著を紹介し、敢て江湖のニイチエ愛好者及び憎惡者にささぐ。

アンリ・ベルグソン教授原著
文學博士 桑木嚴翼先生序
文學士 錦田義富先生譯

櫻咲く頃
今や訂正五版發行

ベルグソンの哲學

■四六判クロス製
■定價七拾錢
■郵税金八錢

兌發

東京 京橋 銀座

警醒社書店

振替 東京 五番

云ふ宗教を信じて居たか」と云ふ事よりは、「あの人はどう云ふ信念を持つて居たか」と云ふ事を、個別的に考へる事を重んじます。また藝術について考へるにも、或る人の生んだ藝術品だけを主にして考へないで、その藝術品に現はされた生活味が、作家その人の生活のうちに流動してゐる状態を主として考へます。實を申すと、「宗教と藝術との關係」など云ふ問題そのものが、既に私には無用なのです。「宗教とは何ぞや」とか、「藝術とは何ぞや」と云ふやうな問題そのものが、既に無用なのです。私はいさゝした自我の實感を主にした經驗を互に語り合ふ事に、目下のところ何に對してよりも、痛切な要求を感じてゐます。その他の問題には、あまり興味ありません。

柳 宗 悦

ノヴァリス Novalis が *Alle absolute Empfindung ist religiös* と云つた言葉を、永遠の眞理と確信する自分は、凡ての眞の藝術は眞の宗教である事を斷言したい。また深い宗教的經驗の發露は、直ちに最も高い藝術的表現である事をも斷言した

い畫家ヴァン・ゴッホが、基督を目して、「藝術家中の最大藝術家」と云つた事は、否定し得ない事實である。

其の形式には差違こそあれ、宗教と藝術との兩者は、其の深さを増すにつれて、互に密に／＼接觸してくる。一切の豫言的敎文は、常に宗教的たると共に、偉大なる詩歌である。吾々は舊約聖書若しくはヴェーダの敎文を、たゞ信條としてのみ讀み去る事は出来ない。基督の言葉は、常に溢れるばかりの詩歌に漲つてゐる。これと等しく、一切の藝術家は、其の至極に於いて、常に宗教家たらざるを得ない。故に一切の偉大な藝術には、常に宗教的權威がある。近代に於いて、かのブレイク Blake の如き、ホイットマン Whitman の如き、またはロダン Rodin の如き。

再言すれば、藝術家として偉大なものに、一つとして宗教的でないものはない。恐らく將來の宗教は、在來の形式をすてゝ、多く藝術として現はれる日が來るにちがひない。そして今よりも更に、藝術の間から、新たな宗教の生れ出づる事を自分は確信してゐる。

THE FAITH OF THE INCARNATION:— HISTORIC AND IDEAL.

BY

CLAY MacCAULEY, A.M.

With the sub-title,—

Glimpses of the Beginnings, Development and Metamorphoses of Christianity.

This book is the product of a long life's study of Christianity as a factor in man's history, carried on wholly by the methods of historical science and rational philosophy. The author speaks of having "sought only the truth,"—"using methods always, ultimately, positive and constructive," with "the hope, constantly, of finding that which will tend to promote the real union and fellowship of 'all who profess and call themselves Christians.'" "More particularly, the book has been prepared," not for the professional scholar but for the ordinarily cultured inquirer who may wish to know what some of the most competent, sincere and reverent writers have concluded is true concerning the origin, the development and the present import of the Personality and the Gospel of Jesus Christ." The author thinks that doubtless his conclusions will "meet with much dissent; possibly they "will arouse antagonism," and with some be "received with disappointment and regret;" but in his "Preface" he asks from all readers "suspense of judgment until they shall have read the book through" and "considered well" what he has said.

The subject-matter of the volume consists of four main parts, with an "Introduction" which is largely personal, but, at the same time, is representative of the needs and experiences of hosts of earnest, sincere men and women at the present time.

"Part One" treats of the historical "Beginnings of Christianity." "Part Two" reviews the "Evolution and Metamorphoses of Christianity." "Part Three" tells of the "Emancipation and Modern Development of Christianity." And "Part Four" is a description of the "Modern Christology," with a review of the present significant religious-social movements in which the Christian Churches, generally, are finding a practical bond of union and a common reason for being, as followers of Jesus Christ.

定價金三圓五拾錢

郵稅

市內金四錢
臺灣支那

地方金十四錢
外國廿八錢

、 取 次 六 合 雜 誌 社

純正なる主義と清新なる趣味と生活社會の實情と

世界之日本

天下の青年悉く本誌に集まる

第一號 九月號 定價部一 錢一十 分年一 錢廿 分年一 錢廿

新政黨の策士 **木下謙一** 君の吹き **猛進居士** 振り

● **選舉權擴張の急務** 社説

▼ **我國に政治家無し** 細井肇 □ **木曾路の旅村島歸之**

● **男性的宗教** 早大教授 永井柳太郎 □ **三個の樞** 三河島の住人

▲ **大隈伯邸の半日** 鐵山居士 □ **秋の夜の月** 長橋大河

● **處分乎** 日本 萬朝報 記者 **茅原華山**

● **三政黨比較論** 指揮官のみの新政黨 立憲青年 大將と兵卒の國民黨 黨幹事長 時代思潮の權化政友會 悉く是れ骨董品ののみ **橋本徵馬**

● **文官任用令の改正を論ず** 伯爵 **大木遠吉**

▼ **水野次官と語る** 社長橋本徵馬 烈女官妓淪介 田中雪次

● **支那の富力** 高橋秀臣 東京の暗黒面 毘盧舍那

▼ **米價問題の前途** 吉田興山 世界の大勢 本誌記者 社會日誌 逸話奇聞

● **山本首相と袁世凱** 代議士 **早川鐵冶**

電燈問題 **側面觀** 欺かるゝ勿れ欺かるゝ勿れ 陋劣なる安藤電燈部長 社説

(中附二)

發行所

東京市神田區

世界之日本社

振替六二 東京八六

上田敏氏序
竹友藻風著

詩集

祈禱

定價 金五拾錢

七月發賣

■叙情詩十二篇を收む。

●神學部の開講

神學部は前期に引き續き、來る十月初めより左の通り開講すべし。その他の科目の設置は未定なり。又オイケンのものは其最新著にして、現に丸善書店に若干部あり、有志者は買ひ入れ置かるゝ方宜しからん。

時日……………毎週火金曜の午後四時——六時迄。

科目……………比較宗教史より見たる福音書。

オイケン著 Erkennen und Leben の講讀

擔當者

三並 良氏

統一基督教弘道會

教育部

發行所

東京芝區芝公園五號地二十

昂發行所

東洋大學講師 釋清潭先生新著

狐
禪
狸
詩

三六判美本

定價六十錢

郵稅八錢

今世何ぞそれ狐禪狸詩の多きや著者大獅子吼猛然として起ち狐禪の窠
狸詩の窟一蹶して之を壞る其の毫端に上りしもの實に此の一書なり今
や装成りて人間に横行す世の狐禪狸詩に太平なる者は讀むも詮なした
だそれ狐禪狸詩に不平なる者のみこれを読むべし

釋清潭先生著

釋清潭先生著

寒山詩新釋

定價五十錢
郵稅八錢

高僧名詩新釋

定價五十錢
郵稅六錢

大内青巒先生著

高島米峰先生著

禪の極致

定價六十錢
郵稅八錢

一休和尚傳

定價九十錢
郵稅八錢

堂聲鷄六町原川石小京東
三五三一京東替振社版出午丙六町原區川石小京東
六八六五一京東替振

堂聲

帝國文學

— 九 月 號 要 目 —

□ 苔 (小説)	□ ハウプトマンの「アトランティス」 (評論)	□ 藝術家の生活 (評論)	□ 小唄 (詩歌)	□ 守備兵の話 (小説ロチ)	□ 髪 (詩歌グウルモン)	□ やり過ぎ (小説チエーホフ)	□ 雲の姿 (詩歌)	□ 八月の劇壇 (評論)	□ 八月の文壇 (評論)	□ 最近の感想 (評論)	□ 長詩二篇 (詩歌)
眞山青果	片山孤村	石坂養平	永田龍雄	後藤末雄	小林愛雄	伊東六郎	山田檳榔	灰野庄平	石坂養平	山田檳榔	中川一政

振替 東京 郵便 二九 一 九 二 九 年 十 月 一 日
 共 計 一 萬 九 千 九 百 九 十 九 圓 一 角 六 分

銀 座 大 日 本 圖 書 株 式 會 社

修養世界

每部一冊 月稅一圓 九月(號) 二半ケ年 發行錢十六分

●佛教より見たる宇宙 法學士 鈴木充美

史勇猛の工夫
傳偉人の面影

横尾賢宗
花村小史

▼幼年犯罪者の取扱に就て 法學博士 豐嶋直道
▼消化物不消化物に就て 醫學博士 遠山椿吉

週訓講話

顧問 大内青巒

莫動着

社説

夢の話

文學博士 福來友吉

●會員募集
會費一ケ年金壹圓廿錢
會員には特典多し

●入會好機

▼張子の性と修養 宗學師 丸山小羊
▼誤まれる婦人の自覺 主幹 菅原洞禪

附錄 從容錄講話
陽明學講話

佐々木珍龍
長谷井超山

●日本の世界化か 日本化か 文學士 和田鼎

■偉人千古の宅
.....清水橋村
■質義應答
.....記者
■現代の思潮
.....記者

■修養の根柢
.....原田祖岳
■禪門各種の講
演振 ハラ 禪
■歌の徳
.....荒井涙光

發行所 東京 市 區 布 區 善 坊 町 修養世界社

ホイットマンの詩に——

「吾れは言ふ、全地球又は天の一切の星は、宗教の爲めに存す。」

吾れは云ふ、是等の國土の眞の永遠なる莊大こそは、彼等の宗教たらざる可からず。」

ブレークの詩に——

「生きとし生ける凡てのものは神聖なり、かくて生命は生命のうちに喜び唱へり。」

凡て、人は永遠のうちにあり。河も山も町も、また村も」

ロダンの言葉に——

「若し宗教にして存在せざらんには、余は自らそを見出さざる可からず。一言に蔽へば、眞の藝術家は最も宗教的人たる也。」



栗 原 基

小生宿昔の希望を果たし、富士登山を試み申し候。晴曇定まらず、六合目にて大雨に遇ひ、迅雷閃電脚下に轟き、疾風魔の翼の如くわれを掠め去らんずる勢ひ、すさまじくも物凄く感じ候。晴間を利用して、八合目に向ふ。その間わづかに十丁

の距離、呼應すべし。しかも胸突き八丁の險は、一步も忽せにできず、約二時間にして達するを得候。八合の石室に一泊、翌朝冷氣甚しく、雲霧に包まれて、頂上に達し候。頂上までは八丁、しかも一時間半を費やし、辛うじて登ることを得候。あゝ向上のこと、云ひ易くして行ひがたし。まさ

にこれ宗教生活の眞面目か。特に頂上に登れば、怪巖突兀として聳ゆるも、何等眼を喜ばしむるなし。宗教は必ずしも美的生活にあらず候。歸路、砂走の快疾走を試みて下山。山上にありて見ざりし秀峯は、富士の裾野より、また翌日汽車の窓より漸くこれを望むことを得申し候。文學はまさに斯くの如きものか。生に觸れるとか呼號して、あまりに現實暴露を逞うしては、決して文學も何もあつたものにあらずと存じ候。宗教と云ひ、文學と云ふ、共に人の靈的經驗の發露、かれにサブリミティあり、これにビュートイあり。早々不一。(七月二十九日)



阿 部 次 郎

御返事が遅くなつてすみません。

内ヶ崎作三郎著

近代人の信仰

四六判
六百ページ
定價金壹圓貳拾錢
郵税金拾貳錢

最新刊

今や世界の文明國には近代人なる新階級存在す。彼等はひとしく近代の學科、哲學、文學の影響の下にあり。彼等は既に舊信仰を棄てたり。されど無信仰たる能はず。彼等に煩悶あり、苦痛あり、憧憬あり、最後に新しい信仰なき能はず。著者自ら近代人に代りて新信仰を説く。新時代の思想に注目を怠らざる諸君の一讀を乞ふ。

●内ヶ崎君の「近代人の信仰」は氏がこの兩三年間に公にした論文集である。大體上近代の思想を理解し、新なる思想の上に古い信仰の新生命を求めやうとする近代神學家の思想を代表して居ることも云はれやう。そして多方面なる趣味と、同情の多い理解と、熱烈な信仰の要素とは、その文その想に一種云ひしれぬ味を賦與して居る。亦以て一種の思想問題研究と云ふべきである。(新日本)

●統一教會の牧師として日本現基督教界の新人たる内ヶ崎文學士の論集なり。宗教は過去一世紀の間旺なる物質的勢力に壓倒せられて僅かに餘蘊を保つの有様にすぎざりしもの廿世紀に至りて又

其復活の曙光を顯はせり。此世界的思潮に乗じて最も進歩せる精神生活を唱道し、科學、哲學、藝術の三者を合一して完全なる一大宗教を建設せんとするもの、これ即ち著者の目的にて、其一々の論文は皆信仰に燃えて、生彩の陸離たるを覺ゆ。

(東京日々)

●近代思想の新らしき氣分を攝取して、古き基督教の信仰を活かさんとする著者の主張を稱したるものなり、勿論裏面に十字架臭味を加へざるところ所謂著者一流のユニテリアニズムの特色なるか、(東京朝日)

●眞に篤信熱情の名文章である。(國民)

發行所

東京市橋區銀座二丁目

警 醒 社

振五 替五 東三 京番

れたのである。我々が概念を過重し、概念に囚はれるやうになつてから、所謂形式的の文明が進歩してきた。宗教と藝術との間に、峻嚴な差別が生じたのも、亦これであります。併し私は、別にこれを咀ふのでは無い、むしろ將來これらの者が、特殊な發達をして行く事を望む。たゞ此の傾向に對する反動として、世間には、藝術と宗教との融和若しくは歸一を、藝術及び宗教そのものゝ上に希望する人が少なく無いやうであるが、これは哲學があらゆる科學を統一せんとする努力と同様に、ただ概念に囚はれてゐる事を證明してゐると思ふ。

宗教と藝術との融和若しくは歸一を其の形式の上に、また將來の時代に期待するやうな必要は少しも無い。我々の中には——我々の人格は元來無差別で無ければならぬ——宗教と藝術とは常に渾一の状態で存在してゐる筈であります。宗教や、藝術や、哲學や、科學を引き離して、獨立の存在を與へやうとする努力は、我々の生活に種々の便宜を與へて呉れるであらうけれども、むしろ我々は、今の時機に於ては、其の便宜よりも、その害毒を恐るゝのである。我々はしばらく、其の便宜を犠

牲にしても、一旦その源に歸つて見やうとする努力の必要な事を認めたいのであります。

戸川秋骨

お尋ねの件、大問題で私共には解りません。また解つたところで、簡單にお答でましません。たゞ直覺した處を申せば、私は、宗教、藝術などゝ區別して考へたくありません。若し相違がありとすれば、同じものが或は實行に傾くとか、或は感情に趨くとかの點にあるのだと思ひます。宗教家とか藝術家とか云ふのが、私には變に思はれてなりませぬ。こんな區別をして考へるのが、抑も間違の基ではないのかと思ひます。人生即ち藝術でまた宗教ではありますまいか。

私はさう考へて初めて、十九世紀後半の新興の文學が、意味のあるものとなるのだと思ひます。すなはち新興の文學は、宗教でもあり、また文藝でもあるのです。正に文藝と宗教とが一つになつたものだと思ひます。たとへばトルストイの宗教は、即ちその藝術で、ニーチェの文藝は、即ち又その宗教であらうと考へられます。但しさう考へ

宗教的經驗は、文藝の重要な一内容となり得るものと存じます。文藝が象徴的になればなる程、それは全體として深い意味の宗教的色彩を帯びて来る筈だと存じます。そうして文藝の價値の究竟の根據は、何等かの意味で、人生の積極的價値を描寫する處にあるとすれば、凡ての生命ある文藝は、少なくとも潜在的に、これと同じ根から生れて、これと平行して行く宗教的意識を豫想するものと存じます。

宗教も律法の宗教から離れて、次第に神人合一の宗教、融會靈交の宗教となるに従つて、文藝的性質を帯びて來ると存じます。そうして斯の如き傾向の一つの流れは、靜觀冥想の宗教となつて究極すると存じます。

従つて宗教と文藝とは、随分深く相提携して行くことが出来る筈だと存じます。唯その爲めに、文藝が教訓的(淺い意味で)になつたり、宗教が形而上學的要求と倫理的要求とから離れて、主觀的自恣耽溺の宗教となつたりするならば、それは兩者の墮落だと存じます。そうして此の危険は、從來の宗教的文藝または文藝的宗教には、随分あつ

たやうに存じます。此の危険を防ぐものは、たゞ兩者の更に深い根本化にあるでせうと存じます。
右御返事まで、短文意を盡さず。不悉。(八月五日)

□ 折 竹 錫

宗教と藝術とは、元來、我々の中に同じものでなければならぬと思ふのであります。否、單に宗教と藝術とばかりでは無く、哲學も、あらゆる科學も、亦さうであらうと信じられる。なぜなら、これらのものは、いづれも我と客觀世界との間に或者を擧まうとする最も眞實な要求であるからです。これは極ふるい頃の人類の歴史中に、多少その俦を認める事が出來ます。併しながら、假令これらのものが、我々の中に同じ要求であつたにしても、現今の如く、各々特殊のものであるやうに發達して來たのには、亦相當な理由が認められる。即ち社會の形成及び言語の發達が、その主なる理由で無ければならぬ。社會が形成せられ、したがつて言語が發達してくるのは、言ひ換へれば、我々の中に於ける差別觀の發達であります。そうして此の差別觀が、現今の所謂文明を産み出してく

のが、甚しく空で貧弱で退嬰的なのに驚く。日本に於ける宗教運動のあがらないのは、國民が忙しくつて餘裕のないのにもよるけれど、この俳優がまづいからだ。人生實際の大舞臺から、かけ離れた芝居小屋にゐるからだ。人生の豐麗な部面に突入して、それを生々と華やかに舞臺の上に現はさなければいけない。苟くも安價な否定的態度をとつて、實際の靈と肉との生活から脱離して宗教を説かうとすれば、宗教は亡ぶのである。

耶蘇を詩人と云ふならば、ホオマアも、ソフオクレスも、ダンテも、沙翁も、ゲエテもみな偉大なる宗教家であるといふべきである。彼等は生きた永遠の人生を見て、それがどうなつて來たか、どうなつて行くかを表現したのである。マシウ・アアノルドは、現代の宗教と哲學とが、詩に置き換へられる日の到來を豫言したが、これは藝術と宗教とが渾一たるべき暗示と見なければならぬ。イブセンもメエテルリンクも、みな宗教と云へるが、所謂宗教味の勝つた近頃の作品には、ブリウーの戯曲『信仰』^{ラフオア}ズウデルマンの『ヨハン』ラアゲルレエフの『非基督』アンドレエフの『イスカリオテ

ユダ』フォガツアロの『聖者』ケネディの『家僕』等をはじめ、多くの傑作がある。なほ宗教と近代文藝との交渉を研究しやうとする方^{かた}には、昨秋英國フトナム社から出たモツシヤア教授(Dr. W. E. Mosler)の『The Promise of the Christ Age in Recent Literature』と云ふ書の一讀をすすめる。

高木壬太郎

上野公園にある西郷の銅像を仰ぎ見れば、何となく仁王を見るが如く覺え申候へども、彫塑者が本來佛師なりしことを思へば、成程とうなづかれ申し候。書畫も詩文も、作者の人格を匿すこと能はず、仙氣、霸氣、商氣、俗氣、おのづから其の作に顯はれ申し候。崇高堅實の宗教的信念なき作家の手に成る藝術に、何の崇高堅實なるものあるべきや。恵まれたる天才バイロンも、一たび理想を失へば、其の才能は徐々に萎縮して、遂に枯れて黄はめる葉の如くなり申し候。斯く見來つて、藝術の根本に、宗教的信念の必要なるを感じ申し候義に御座候。かつ當今の藝術家は、宗教と藝術とを全然峻別し、兩者何等の交渉なきやう申候へ

て見ると、今までの宗教が間違つて居たり、文藝が不満足であつたのだとも考へなければなりません。一枚の着物を奪はんとするものに、二枚をも辭せざる事が、眞の道であると共に、人の頭をなぐつて、虐待する事も結構であると考へなければなりません。こんな事は餘計な話ですが、とにかく私は、人生と云ふものが主眼で、それが直ちに藝術であり宗教であると考へて居ります。曖昧な云ひ方ですが、私には藝術即ち宗教で、すなはちそれがまた人生です。

□ 松 本 雲 舟

貴問に接して種々考へて見ましたが、結局私の感想は次のやうです。宗教と藝術とは、各々獨歩の地位を占むべきもので、殊更に交渉を求める必要はないと思ひます。妥協などは何事でもいけません。仲が悪くなつたら、飽くまで戦ふが可いです。最後まで戦つたら、兩極端が互に一致する事もありませう。唯一時の便宜のために仲直りをさせて、片手落ちのことをしたくない。宗教の奴隷になつた藝術、藝術の奴隷になつた宗教などは、

見つともないです。私は自立獨立の宗教と藝術とが、互に融和するなら、雙手をあげて歓迎しますが、それ以外に野合させる必要はないと思ひます。唯それに就いては、宗教的天才と藝術的天才を並有した一大人格を要します。現在の世界に於いて、さういふ一大人格は見當りませぬ。さういふ一大人格の出ないうちは、完全なる意味に於いて、宗教と藝術とは、融和することがない筈です。先づそれまでは、兩者がやたらに妥協しない事を望みます。

□ 小 林 愛 雄

私は人生と云ふ一つの流から湧き出る宗教と藝術とを離して考へたくない。否、さう考へるのは間違つてゐると思ふ。多くの聖典の中に詩があるのと同様に、多くの戯曲のうちにも、宗教があるのではないか。私は聖典を見てうたれると同じく、舞臺を見てもうたれる。耶蘇は詩人であり、牧師は俳優である。耶蘇の戯曲を舞臺で仕生かすか否かは、俳優その人の伎倆一つである。かう考へてくると、舊來の日本に於ける多くの牧師と云ふも



眞と美と生命

内ヶ崎 作三郎

一

これまでの藝術の目的は美の表現とその鑑賞とであつた。美は日月星辰の
より草花砂礫の小に至るまで、宇宙の森羅萬象のうちに存在する。しかしなが
ら思想の仲介なくしては、吾人は美を充分に味ふことはできぬ。無論美の印象
そのものだけでも、美の神秘を味ふに餘りあれども、美そのものゝ本體もしく
は源泉を推測し、或は創造する時に、美はやがて眞の發露であるといふ結論に
達しなければならぬ。たとへば渚に打ち寄せらるゝ小さな美しい丸い石に就い
て考へて見ても、その石は、その形状や、色彩だけにても充分吾人に美の印象
を與ふことはできる。しかしこの小石が幾萬年の間、波に弄ばれ、その幾多
の圭角が消磨して、終に現在の形をとるに至つたといふことを想像する時は、
この小さき石の背景に、時間空間の大きな運動が想ひ出さるゝのである。また吾
人は夜な夜な空を仰いで、百千の寶珠名玉の如き群星を見る時、言ふべからざ
る美と喜とを感じるものである。されど天文學の智識より推測して、太陽系の
絶大なること、その活動の猛烈なること、多くの星座の驚異、銀河の幽邈等を
聯想する時に、吾人は崇高の感に打たれざるを得ない。かくの如くにして、美

ども、眞に主義あり主張ある藝術家の主義主張は、必ず其の根柢に於いて、宗教と交渉するものに御座候。單に氣分情調を重んずると申し候ふとも、所謂氣分情調とは何ぞやと申す根本的性質に溯れば、自然神の本質すなはち、宗教問題に觸れ申すべく候。藝術と宗教とを全然區別する藝術家は、其の作の道德的目的を顧みざる事に候へども、斯かる作家の手に成れる模型は、泥土の塊たるに過ぎず、其の奏する樂は、喧囂なる音響たるに過ぎず、其の作れる詩歌文章は、佳言麗句の排列に過ぎず、其の人自身は、一塊の走屍行肉に過ぎざるべく、其の作物は、道德上何等善良なる感化を興へず、深甚の意義ある人生より見れば、無用有害のものにこれあり候。(八月八日)

厨川 白村

むかし藝術がまた人生問題や思想問題に、それほど緊密に觸接せず、むしろ其の遊戲的分子を多分に持つてゐた時代には、宗教と藝術とは各々別々の地歩を保ち、異つた立場に在つたものです。しかし前世紀の頃から現代にかけて、頻に「人生の

ための藝術」といふ事が、やかましく力説せられるやうになつてから、宗教と藝術とは、恰かも同じ道を辿つて、同じ處へ行かうとする二人の旅人のやうになりました。そして昔の人が宗教に求めた所のものを、現代の人は藝術に求めてゐるのだと思ひます。此の傾向は、將來益々著るしくなることだらうと私は信じてゐます。

中村 長之助

釋迦の如き、耶蘇のごときは、藝術の最高最大の產物である。彼等に優る作品いまだ出てしことなし。人生最深の生命と、最高の理想とは、宗教の與ふるところ、故に人生の精髓は宗教である。この見えざる宗教を具體化するは、藝術である、この具體化の最も偉大なるは、耶蘇である。釋迦である。宗教なき人生は、想像し得られず。而して藝術たらざる宗教も、また存じ得ない。政治も、實業も、教育も、哲學も、みなこれ宗教を具體化し、藝術化せんとする努力たるものである。

恩院、東西兩本願寺、高野山、比叡山、身延山、日光の如きみなこれを證明してゐる。英國リヴァプール市に於ては現に巨萬の資を投じて新に寺院を造營しつゝある。新なる藝術と握手して宗教的新趣味を象徵すること注目に値する。

二

彫刻も古代は主として、宗教的作品であつた。現代人がなほ渴仰して止まざる希臘の彫刻は、希臘の神話に現はれたる諸神であつた。中世に及んでは、キリスト、聖母、聖徒等の肖像が彫刻せられた。東洋に於ては、佛像、五百羅漢、婆羅門教の諸神、孔夫子、關羽、管相奩等が主要なる題目であつた。

音樂の發達は必ずしも、宗教と關係はないかも知れぬが、そが大なる發達を遂げたるは、宗教の助けを要したに違ひない。中世紀に於て教會建築が殆んどその頂上に達したる時、人はその莊嚴に打たれた。しかも望蜀の歎は、その莊麗に象徴的の響きを與へんことを欲したのである。即ち大風琴、合唱等が發明せらるゝに至つた。ビートルビン、メンデルソン、ヘンデル等の大天才はそのインスピレーションを主として、宗教的題目に見出したのである。

劇の起原は希臘の宗教であることは人の普ねく知る所である。歐洲の近代劇も、中世紀の教會劇に濫觴を有するはいふまでもないことである。

更らに中世紀の繪畫に至りては、悉く宗教畫と言つても、過言ではない。ラファエル、ミケロアンゼル、ジョットー、チチアン、テントーレット等の名匠の繪は、希臘の神話でなければ、キリスト教的

は眞に連なり、眞は崇高の念を喚び起さなければ止まぬ。

崇高の念とは何であるか。即ち宗教心の一表現ではないか。その一つの發露ではないか。その一面の活動ではないか。即ちこゝに宗教と藝術の默契が成立する。

古來エヂプト、アッシリア、印度、ペルシア、ギリシャ、支那、羅馬、猶太等の宗教發達史を顧みれば、宗教は常に藝術の發達を促した。また藝術は宗教の進歩を援助したのである。あらゆる藝術の中で、最も早く進歩したものは、建築であらう。古代にありても、中世にありても、或は或程度まで現代に於ても、最も莊麗にして、堅實なる建築は宗教的伽藍と殿堂とである。神聖なる藝術は時間と勢力と金力とのみあらず、合せて敬虔、至誠、純一なる努力と態度とを要する。かくの如き大建築は、眞の表現なる宗教的建築物に於てのみ實現せらるゝことができたのである。ナイル河畔に於て發掘せられたる古代の都會を點檢せよ。アゼンスのアコロポリスの上のアポロの廟を見よ。礪礪不毛なる猶太の丘陵の上に於てすらも、紀元前十世紀の頃に既に、ソロモン王の手によりて、大殿堂が經營せられたてはないか。印度の大建築は悉く宗教的建築であることは旅行者の知るところである。現代の歐米各國を訪るるも、輪奐の美を極むるものは何れも宗教的建築物である。伊太利に於ける羅馬の聖ペテロ大寺院、ミランの大寺院、ヴェニスの聖マルコ大寺院の如きはいふまでもなく、獨逸にてはケルンの大寺院、伯林の宮城前の大會堂の如き、巴里のノートルダム大寺院の如き、倫敦の聖ピーター大寺院、エリーの大寺院、キャンタベリー及びヨークの大寺院、エデンバラに於ける聖チャイルス大寺院、モスコーに於ける幾十の大伽藍、セント・ピータースブルグのカザンと聖アイザック大寺院の如きみな好個の例證である。日本に於ても誇るべき大建築は主として神社佛閣ではないか。法隆寺。智

の自由民權説は、その影響を宗教的信仰の上にさへ及ぼした、しかしこの時代に於ても生命の泉は枯れない。美の爲めの藝術は、今や生命の爲めの藝術とならんとしてゐる。否、或方面に於ては着々實現せられつゝある。今や眞面目な藝術家は、その生命に動かされ、その生命を充實し、その生命を發展する一つの順序と藝術を見做す人々があらはれて來た。また藝術と生活との調和、もしくは渾一を主張して、藝術即ち生活、生活即ち藝術たらしめんとする理想を抱き、その理想を實生活に現はさんと努力する人々もある。これは確かに藝術の進歩であらう。

しかしながら宗教思想に於ても亦、これと並行すべき進歩あることを承認しなければならぬ。神は最早や雲の上の巨人ではない。また完成したる創造の維持者でもない。今は神は宇宙の生命である。その一表現は間斷なき獨創的創造である。神の一面は動的である。これまではその靜的方面が高調せられたが、今ではその動的方面が力說せられて來たのである。これまでは神は主として、創造者として人類の頌榮と渴仰とを博した。今日に於ては、進歩したる宗教者は、流れて止まぬ神の精力の潮流のなかに投じて、順風に帆を擧げるが如き氣分を以て、實生活の間に努力し、宇宙生命を翼賛して大生命の活現の爲めに奮闘することに感謝の念を抱くやうになつた。藝術に進歩あるが如く、宗教に於ても進歩がある。嘗ては古き藝術と古き宗教の握手があつた。新らしき藝術は舊き宗教の伴侶たることを好まず、進歩的宗教は新しき藝術に於て甚だ頼もしかるべき味方を發見したのである。新しき宗教が新しき藝術と握手することは極めて自然のことである。

ながら宗教は何れかと言へば、退嬰的、保守的、懷古的に傾き易いものである。何となれば宗教は人類の最も神聖視する社會の制度、或は政治組織や祖先崇拜と纏綿して、容易に斷絶すべからざる深き關係を有するからである。それ故に小部分のキリスト教徒は、進歩的宗教思想を懷抱するに至つたが大部の者は依然として舊き思想と舊き制度とに甘んじてゐる。そこで一部の識者はこれに反抗して、教會を脱し、或は宗教に對して無關心の態度を裝ふに至つたのである。概して歐洲大陸人は極端から極端に走る傾むきがある。佛蘭西人は舊教に固執するか、然らずんば極端な物質論者となるのである。聖靈に満たさるゝにあらざれば、肉慾に惑溺せんとするのである。獨逸に於てもその傾向は著しい。ルーテルの宗教改革は、國家の保護を必要となしたるが故に、その宗教制度は餘りに多く國家的、若しくは官僚的色彩を帶ぶるに至つた。民立教會は成立するの餘地がない。進歩主義の大學教授も、その宗藉だけは國教の中に置くのである。而て、プロシアの國教會の信條は極めて頑固なものである。進歩的の藝術家、哲學者等が、それに對して謀叛を企つるは決して怪しむに足らぬ。露西亞に於ては、國民の大多數は今も尚ほ國教會の信者であつて、その迷信は驚くべきものがある。英國にては、英國々教會があるが、これは極めて包容的でまた寛大である。その他多くの民立教會があり、進歩的の教會がある。この點に於ては、英國は米國と共にキリスト教の進歩思想を實生活に表現する點に於て、世界に誇ることができる。

トルストイは耶穌の單純なる教訓に立ち歸ることを以て、宗教の極致とした。日本に於ては官吏や軍人や、教育家の間には、これだけの説に對してすら、反對論を持ち上げる者があるであらう。露西亞に於ても、國教會の立ち場から見れば、これは恐るべき異端である。もし露西亞の國教會がかゝる

宗教家をして言はしむれば、宗教は最早や、寺院と僧侶との支配下にあらずして、藝術家によつてすらも、その眞體を理解せらるゝに至つたとも言へるであらう。また藝術家をして言はしむれば、藝術の堂奥はやがて宗教の堂奥である。やゝ迂回したれども、吾人は齊しく宗教の殿堂に詣てたる者である。と歡喜の聲を擧げる人もあるであらう。或は藝術の極致は即ち宗教の極致、即ち生命と眞理との極致であるが故に、新藝術はそれ自身にて獨立することができる。敢て宗教の援助を要せずと信ずるものもあるであらう。

固より眞理に到達するの道は一筋にして止まない。オーガスチンの精神とミケランジェルのそれとは必ず默契するところがあつたであらう。ゲーテの心靈にはルーテルのそれと共鳴を感じるところがあつたであらう。かゝる偉大なる代表的人物を對照する時には、兩者の間に多くの類似點を見出すことができるであらう。それ故に眞實の宗教は、眞實の藝術と提携すること、現代に於ても決して不可能のことではない。否、當然かくあらねばならぬ。されど世には退歩的宗教あり、廢類的藝術あり、僞藝術あり、僞宗教がある。眞藝術があり、眞宗教がある。眞と眞とは提携することができる。或は僞と僞とは調和することができやう。眞藝術と僞宗教、眞宗教と僞藝術は伴侶たることはできぬ。

四

近代の歐洲の大文豪には多くは、非宗教家或は無信仰家、或は不可知論者が多いではないかと言ふ人がある。寔にさうである。しかしその理由は、怪しむに足らぬ。歐洲のキリスト教は、將に第二の宗教改革を経験せんとしてゐるのである。或部分に於ては既に實行せられつゝあるのである。しかし

てゐたことが明かである。

イブセンは宗教に就いては、何等の態度をも定めなかつた。しかしながら、彼は極めて多方面の人で、あらゆる問題に興味を有した。彼は劇を通して、近代社會の罪惡を指摘し、偽善、詭辨、不道德を叱責し、婦人の權利を主張し、多數者の暴逆に反抗したのである。彼は自己の理想に忠實なれよと教へたのである。これは果して無宗教者の態度であるか。信念なき者の態度であるか。何故に罪惡は憎むべきものであるか、何故に偽善と不道德は責むべきものであるか。イブセンはその何故かを説明は爲なかつた。しかしながら、彼の胸中に潜める心犀一點の靈火は、やがてこれ宗教的豫言者の義憤と共通のものではないか。憎むはやがて愛するの始めである。呪ふべきものは無關心者である。イブセンは生の力を感じた人である。彼の理想はやがて、彼以上の理想と接觸を保つてゐたに違ひない。イブセンは宗教的團體の人ではない。しかしながら、吾人は彼を無宗教の人と呼ぶことはできぬ。

ズーダーマンは好んで人生の暗黒面を描くと目せられてゐる。しかし彼は下層社會の現狀に對して同情禁ずる能はず、中流以上の人士をして埋もれ果てたる不幸なる人々に惻隱の心を表せしむるために敢てこの態度を持してゐるといはれる。彼が今春ノベル賞金を獲たるはこれに因すと傳へられてゐる。貧民階級に對する熱烈なる同情を有するズーダーマンは決して無關心者ではない。

更にバアナアド・シヨウに至つては、彼自ら宗教家を以て任じてはゐない。しかし彼の冷嘲、皮肉、辛辣なる批評のうちにも、彼の理想が現はれてゐる。彼は人生の現狀に對して、妥協することはできぬ。彼は俗衆に對して、彼の理想を實現せしめねば止まないものである。何故にバアナアド・シヨウはかくの如き努力を爲すのであるか。彼も亦生の力を痛切に感ずる一人である。彼がその實驗を哲學上の

單純なる信條を標榜したりとせば、トルストイは言ふまでもなく、マキシムゴルキイも、アンドレエ
ーフも、喜んで教會の中に踏み留つたかも知れぬ。

スカンデナビアの文豪は概ね、非宗教的である。ビオルンソンとイブセンはその代表者である。されどビオルンソンを理解する爲めには、十九世紀の中程、丁抹にグルントウイヒと稱する豫言者の運動が行はれたることを想ひ出さねばならぬ。此の豫言者は人類墮落説に反抗して、幾分か希望と光明に輝けるキリスト教を傳へたる宗教家である。彼は説教と音楽とを以て、丁抹と諾威の青年を風靡した。青年ビオルンソンは此の偉人の感化を受けたのである。彼はやがて獨逸の自由神學に興味を覺えた。そして諾威の教會の説く所は、極めて幼稚であつて、多くの誤謬を有することを發見した。彼は少年時代から無益な、頑迷な信仰個條を教へ込まれたことを、いたく憤慨した。彼は煩悶に煩悶を重ねて、遂に不可知論者となるに至つた。しかしながら彼は耶蘇の教訓と、實例とに従へるかの神に於ける生活は理想的宗教であるといふが如き態度は絶えず抱いてゐたらしい。彼が折り／＼試みた詩のなかに、純潔な宗教心があらはれてゐる。その「光の歌」といふ詩の一節に、

あらゆる源の源、光の泉、

あらゆる太陽に點火し、

あらゆる頭腦に種子蒔くものよ、

思想は光りてやがて滅えぬ。

多くの世界は開かれ、且つ鎖されぬ、

されど爾の光は永久に新しく流る。

あゝ過去、現在、未來をつらぬいて存する爾よ。」

これによりて見るも、ビオルンソンの心靈の奥底には、宇宙の生命に憧憬れたる天真の情調が潜ん

永遠に向上發展することを確信する。これは保守的自由主義の態度である。保守的教會より見れば、吾人の信仰は、基督教の信仰でないかのやうに見えるかも知れぬ。また科學者哲學者の側から見れば、吾人の宗教はやゝ保守的宗教味を帯びてゐると見られるかも知れぬ。吾人の主張は餘りに折衷主義であると思難する人があるかも知れぬ。しかし、吾人は極端より極端に走るを好まないものである。人生の態度は極めて複雑である。信仰、不信仰、保守若しくは進歩の二派を劃然區別することは困難である。保守の裡に自由の傾向あり、自由の裡に保守の精神が宿つてゐる。この中間的運動のない社會は、いたづらに國民の勢力を勞費する虞がある。聰明なる英國人は、進歩主義基督教の社會的實現に對して、暗示に富める先例を吾人に與へたのである。新英蘭土に於ける米國人も亦然うであつた。獨逸には故ヤーナー博士や、牧師トラウプの運動によりて、此の種類の運動が漸やく盛ならんとしてゐる。佛蘭西に於ても、巴里大學のブートロー博士を主として、バウル・サバティ、シャル・ワグナーの如き、此の種の運動に熱中してゐる。米國に於ては、チャンニング、エマーソン、バーカー、ロングフ、エロー、ローエル等の流れを掬む者がハーヴァード大學に據りて、一大勢力を造つてゐる。吾人は日本に在りて、是等の歐米に於ける基督教の進歩的運動と呼應せんことを期待する者である。

六

今日我が邦の文藝家のうちには、嘗て基督教主義の學校もしくは正統主義の教會に教育せられたる人々が少くない。これ等の人々は自己の良心を欺くこと能はずして、舊き信條を強ふる教會と團體との門を辭したのである。その動機にして誠實ならば、吾人は尊敬と同情とを表はすに吝ならざる者で

義論によりて表現する時に、往々にして矛盾あることを免れぬが、彼も亦彼以上の或力によつて動かされてゐることを疑ふことはできない。彼の風貌既に豫言者の的の俤を宿してゐる。彼のうちには清教徒の精神と、近代藝術が、不思議にも調和されてゐる。

是等の事實に照して見るも現代の藝術は、教會や寺院の信仰個條や、僧侶や牧師を中心としたる制度組織に對する反抗を示すけれど、その心の奥底に在りては、決して眞理と生命とに悖るものではない。進歩的宗教は今や漸やく、その第一歩を踏み出したばかりである。而て新藝術は反抗的態度を全く捨てずして、しかも建設の曙光は將に迫らんとしてゐる。この時に於て、吾人の欲する所のものは、宗教家、藝術家共に、誠實にして、飽くまでも眞面目な努力を繼續せんことである。彼等は相互に刺戟すべきである。相互に奨勵すべきである。提携すべきである。彼等は姉妹である。双生兒である。現代の日本は、兩者の努力によりて、更に新たな光明と希望とを見出すことができるであらう。

五

最後に吾人は、この機會に於て、日本の思想家及び若き藝術家に對する吾人の態度を告白して見たる。

吾人は自由主義の基督教を標榜する。キリストの教訓の眼目は敬神、愛人にある。無論、その他の多くのことが包含されてゐるが、便宜上、キリストの宗教の根本表現をこの二點に置くのである。而て神の定義に關しては、あらゆる時代の、最も卓越したる思索と實驗とを包容するものである。

耶蘇は人類の罪惡の爲めに死せる代理人にあらずして、吾々の生活の刺戟者である。吾人は人類の

る空前の現象であるかも知れぬ。東西古今の思想と、信仰と、疑惑と、非定と、肯定と、眞率と、不眞面目とが旋轉して大きな渦を卷いてゐる。多くの人々は思想の統一と中心を失ひ、或は煩悶し、自己を呪ひ、社會を咀ふ者もある。或は心身阻喪して、耽溺の生活に刹那の快樂を貪る者もある。如何にしてこの思想の迷宮から、吾人は安全に免れ出づることができやうか。吾人は靜かに、思想の潮流を色別し、その源泉を講究しなければならぬ。手近な近代思想を知ることが言ふまでもないことであるが、少しく遠く隔つてゐる中世の思想、古代思想をも理解せねばならぬ。希臘、羅馬、猶太の思想殊にこれ等のものが混合して生れたるキリスト教文明を正當に理解することが必要である。數ヶ月前來朝したる獨逸のヤコービ博士もこのことは熱心に勸告せられたと記憶する。兎に角西洋の近代の制度、藝術の背景としての基督教文明を理解することが必要である。吾人は必ずしも、基督教のみが絶對の宗教であることを主張する者ではない。かゝる問題から全然獨立して、歐洲の近代藝術を理解するには、一應基督教を研究することが必要である。でなければ歐洲の近代藝術を、日本の藝術家が徹底的に了解することは困難であらう。これ吾人が基督教の運動を以て、文朋史的の意義あるものと確信する所以である。

八

今や日本の藝術界は革新の運動に色めきわたつてゐる。劇の改革運動の如きは最も著しきものである。或人々はこれに對して、多くの時と金とをさへげて悔いないのである。蓋し劇そのものに大きな價值を認むるからである。劇に價值あらば、況して人生そのものに價值を認めなければならぬ。人生

ある。しかしながら、これ等の人々は、進歩主義の基督教團體の存在を或は知られなかつたかも知れない。もし教會なる團體は、無用の長物であるならば、いざ知らず、何等かの使命ありとせば、吾人はこれを捨て、超然たる態度をとることはできない。小數の識者はこれを捨てたりとするも、多數の愚者が集つて依然として、その經營に任ずるならば、教會は存在を繼續すると共に、何等かの發達を致すに違ひない。吾人の教會に對しては、不平もあり、不満もある。されど消極的態度をとりて、只これを顧みないといふだけでは、吾人の理想は永遠に實現せらるゝことはできない。これ吾人が保守的自由主義の態度をとりて、宗教運動に參與する所以である。

しからば、一體何故に基督教といふ名目に拘泥する必要ありやといふ疑問が起るであらう。吾人の基督教を信ずるは、佛教や儒教を無視するが爲めではない、吾人は佛教、儒教を尊敬する。しかし、日本人は餘りに多く儒教と佛教との感化を受けて、餘りに多くの餘弊を蒙つてゐる。これを矯正するには新來の宗教によつて刺戟を受くる必要がある。基督の人格と教訓とは、佛陀と孔子と彼等の教訓の有力なる餘數コムフラメントなるが故である。

基督教は生命の宗教である。力の宗教である。愛の宗教である。この宗教を理解することによりて、吾人が祖先より繼承し、且つ自ら意識し、實驗したる東洋思想は潑刺たる生命を發揮することができらるであらう。

七

今や日本の文明は一種の文藝復興期に遭遇しつゝあるのである。この運動は世界の文明史上に於け

精神生活より藝術と宗教へ

三

並

良

一

藝術と宗教とが、どんな關係にあるかと云ふとは、一寸見た所では問題になりさうにもない。何となれば昔からこの二ツが何時もどんな直接の關係を有つて居たかと云ふとは、歴史を考へて見ると直ぐ分る事柄であるからである。昔から宗教が藝術によつて、その思想や信仰を表現しなかつたとはない。また藝術がその本領を發揮するのに、宗教を藉りなかつた例はない。印度に於いてさうであり、希臘に於いてさうであり、基督教文明の行はるゝ處に於いてさうである。その他一々煩さく例を舉げる必要はあるまい。さう考へると、始めから關係があつたのである。それを今更その關係如何などい、面倒な問題を提供するにも及ばないやうである。所がそれがさうでない。

繪畫の方に、印象派など云ふものが起つたのは、何の爲めであらうか。宗教の方に自由派などの出來たのは何の要求によつたのであらうか。若しそれが偶然にあらず、宇宙間の大きなロジックによるものであるならば、僕等はこゝに如何なる眞理があるか、人心の如何なる切な要求があるかを考へて見ねばならぬ。僕はこゝで、藝術と宗教との關係をもう一度考へ直す要求が起つた事に、理由があると思ふ。

に價值を認める爲めには、その背景たる自然と實在との價值を認めなければならぬ。即ち劇の刷新すらも、宇宙の生命と、その發展とを信ずるでなければ、徹底的に行ふことはできぬではないか。「新しさ女」の運動も同様である。新しい女の背景である人生と、自然と、實在とに價值なきものならば、この運動の爲めに浮き身を窺し、或は獨身生活をなし、或は犠牲的の勞苦をなすが如きは、無駄骨折りではないか。實在そのものゝ價值を承認せずしては、新しい女の運動は、無意味とならざるを得ない。

義侠心ある日本人は、南清亡命の客に對して、同情を寄するのである。何故に孫、黃の事業と精神とは尙ぶべきものであるか。その背景たる實在そのものに價值を認めずして、吾人は徹底的に彼等を尊敬することはできぬのである。

宗教は即ち人生の根本問題を取り扱ふものである。これは決して閑事業ではない。これは決して鑑賞的態度を以て満足することのできぬものである。吾々が心のうちに大生命を自覺することである。大歡喜を實驗することである。大なる愛を實行することである。過去幾千年の間に現はれたる哲人の心靈と共鳴を覺ゆることである。自我にのみ生くるに止らずして、大我と共に生くることである。刹那に生くるのみにあらずして、永遠のうちに生くることである。これ宗教生活の根本義である。

が、果して自分と何の關係があらう。形式がどう整つて居た所で、それが自分の胸の深い／＼所から湧き出す欲望、憧憬、生の力と觸れる所がないならば、何の用をなさうか。否其の形式を一々自分で發見するのならば——認識上の問題は別として——自分に愉快であらう、意味もあらう。けれども吾人の考へ出した形式、さ、ち、んと極つた概念、それが吾人の精神的活動を支配しやう、いやでも應でも支配しやうと云ふことになる、それは反つて大なる壓迫である。自我の尊嚴を知つた今日の吾人には、到底耐へられない。況んや枯死した形式のなかへ、吾人の常に活動し、流動し、潑刺としてゐる精神は這入らないのである。形式や概念の外に残された、換言すればあ、い、て、さ、ぼ、りにされた活動は、到底不平に堪へないのである。

印象派の畫家が努力する所は、丁度こゝにあるのであらう。線によつて囚はれるのを厭ふのは、すなはち形式を打破しやうとするところである。この努力は概念的な教義の乾燥無味に耐へずして、之を打破せんが爲めに起つた宗教上の自由主義に比すべきものである。然し惜しむべし、この宗教的自由主義は、再びヘーゲルの論理主義に束縛せられた觀があつて、行きつまつてしまつた。けれども更に再び活路は開けて居る。兎に角舊形式は打破せらるゝとなつた。しかし舊形式の打破のみが印象派の畫家や、自由派の宗教家によつて試みられるのではないのは勿論である。これはただ一例を取つたのに過ぎない、藝術にも宗教にも、一般にこの傾向が現はれて居る。それが益々勢力を得て居るのは事實である。

近代に至るまで、世界の思想を支配したものは、何であるかと云ふと、それは希臘思想であつた。今日と雖もなほ全然その支配を脱出しては居ない。希臘思想は由來、藝術的であると云はれて居る。

それは何故かと云ふと、總べてのものをみな整つた形の内へ入れるからである。形と内容、これがその表象となつて居る。すなはちこの精神の大なる活動によつて、殆んど天下獨歩の觀ある希臘美術が生まれたのである。然しながら、彼の藝術的精神の支配する所となつたのは、決して彫刻や建築や、文學の事ばかりではない。國家的生活でも、論理でも、宗教でも、哲學でも、みな整つた形の中へ相當の内容を入れて、藝術的に造り上げやうとするのが、其の努力である。吾人は固より其處に、偉大なるものがある事を認むるに躊躇しない。否、今日と雖、吾人の思索は大にその影響を受けて居る。

世間には或は吾人と希臘との間に、直接何の關係があらうと云ふ者があるかも知れない。それは固よりさうである。吾人が歐洲思想に接近したのは、近頃になつて始まつた事件である。けれども印度だつて、支那だつて、吾人と昔から關係のあつた思想は、その思索的傾向から云ふと、矢張り希臘と同じものであつた。否な形式的と云ふ點は同じである。希臘のは實にそれが大成せられて居たのだ。

それならば其の形は一體何處に之を發見するとが出來やう。希臘思想では、その形は外界にあるとした。吾人の認識的努力は、この外界に存在する形を發見するところである。外界の存在は疑ふべからざる事實である。そこに如何なる形があるか、それを認識すれば、思索の任務は済むわけである。そこで思索とは、形の整ふと云ふことになつた。思索は形式である。形式は概念である。この形式や概念

とにある。美的鑑賞も藝術的製作も、規範に適合しなければならぬが、規範によつて産出せられ、又それによつて意識のうちに規定せられるものではない。美的法則の如何なるものなるやを考へ、これによつて美なるそして崇高なる自然、或は藝術品の印象を受くるに足る感情を、意識的に規定せんと欲することより笑ふべきとはない……また第二流の者、或は好事者ディレクターが勞作をなすに當たり、規則を前に掲げ、これによつて創作をなさんとせば、是れ藝術家たる天職を知らざる最も確實なる徵候である。大藝術家なるものは、この規則を知らない。彼れは故意にするのでなく、自然的必然によりて創作するが、それが規範に合して居る。そしてこの規範は彼れの製作品によりて初めて、彼れ自身にも亦た之を鑑賞する者にも意識せらるゝに至るものである』(二七四頁)と。

即ち藝術家と云ふものは故意でなく、自然的必然によつて、換言すれば「止むに止まれぬ心」から創作するのである。僕はこの點に於いて、ウィンデルバントの説に同意するとが出来る。けれども「止むに止まれぬ心」から出た創作が規範に合するとは、どんな意味であらうか。若しその意味が、人間の心靈的生活なるものは、機械的經過をなすものであつて、此の機械的經過が偶々吾人の規範となす所に合するとても解釋せられるやうなものならば、僕はこの解釋には同意するとが出来ない。元來精神的創造とは、そこにある規範を意識するのではない。若しさう云ふやうに解釋するならば、舊派の哲學と餘り違つたことはない。違ふことは違つても、五十歩百歩である。否藝術家の眼は、唯だ普通人の見る外界を見て居るのではない。その耳は普通人の聞く所の音のみを聞いて居るのではない。藝術家は他の眼を有し、他の耳を有して居る。或る日畫家コロが、森の裾の樹の下に坐して、舞つて居る水の女神ナイアデスを、しきりに寫生して居た。さうするとこれも同じく畫家であるその友人が、暫らくその

藝術と宗教との關係如何の問題が起るのは、双方共に舊形式が破壊されたからである。若し舊形式が、依然として權威を有して居るのであつたならば、こんな問題が今更提出せられる必要もあるまいし、よし提出せられたところで、それは前人既言の議論を繰り返すに過ぎずして、吾人には餘り興味のない問題である。ところが舊形式が破壊された後には、創造が生じつゝある。吾人の興味はこれが爲めに沸きたぎつて来る。問題もこれが爲めに生ずるのである。

舊派の劇はもはや何故、吾人の氣に入らないのであらうか。それは餘り形に嵌まつて居るからである。千篇一律で、『形に嵌まつてさへ居れば、劇になると思ふやうな死んだ精神の死んだ産物であるからである。そこで吾人は新興の劇に多大の興味を捧げる。これは必ずしも、吾人が好奇心いな好新心から出たわけではなくて、心のどん底から出る要求である。詩にしても、音樂にしても、繪畫にしても、彫刻にしてもさうである。印象派の畫家が線を厭つて、色と光と色調などを使つたのも、形式のなかに囚へられて、枯死するのが厭だからである。カンデンスキーの畫は、素人の眼から見ると、——或は素人の眼からでなくともさうかも知れないが——随分めちやくちやに見えるが、彼は之によつて畫中の動を説き、ロダンの彫刻に澤山に鑿の當たらぬ、自然その儘の部分を残して居るのと同じく、矢張形式を度外視して、自然から出る自由の生命を具體化せんとしたからであらう。これは徹底せる自由基督教の立場に在るものが、有神證據論や、三位一體論や、基督の性情論などに嫌らずして、新しき理想主義の根柢の上に何ものかを建設せんとして居る精神と一致する態度である。

獨逸現代の哲學者中に、鏘々たる名聲あるウキンデルバントが、その著“*Präthien*”のなかに次ぎのやうなとを云つて居る。曰く『美的鑑賞の本領も、並びに藝術的製作の本領も共に、直接性と非省察性

辨證を要しなくても、精神の活動を公平に看取した丈けでも分る。さうすると、吾人の問題となつて居る藝術と宗教との關係は、直接に色々の交渉もあらうけれども、その本源が精神生活にあるわけであるから、これよりも深きを得ない點に於いて一致して居る。兩者の關係は後からくつつけたのでなくて、本源的である。

若しもう一度、一言にしてこの一致點を云ふならば、それは藝術も宗教も、精神生活を本源にして居る點にある。しかし唯さう云つた計りてはまだ明瞭でない。精神生活とは狀態でない。また客觀的に存在して、動かないものでもない。精神生活そのものが創造である。吾人の精神的活動が、常に創造しつゝある、この創造によつて、存在するのである。故に若し吾人の創造が止むことがありとするならば、精神生活の存在も止むことになる。斯う云ふと、此の精神生活は、甚だ主觀的なものゝやうにも見える。或は吾人が唯心論を主張する者であるかのやうにも見える。けれども僕は主觀主義や、唯心論の主張者ではない。是れやがて僕が精神生活なるものは、吾人の創造が止むと存在しなくなると共に、此の創造が吾人の主觀のみによつて生ずるものでなく、また、客觀のみによつて生ずるものでないとする所以である。主觀が客觀に生き、客觀が主觀に生き、こゝに兩者の渾然たる生活が生まれる。これが創造である。故に一方が生きなかつたらば、他の一方が生かされる道理がない。こゝに創造の妙用がある。

五

個人と云ふものは、大海の一滴のやうなものである。然しながら、此の一滴が孤立して居るのでは

背後からそれを眺めて居たが、多少譏り氣味に「けれどコロゝ老人、貴君は何處からこの女神を取つて來ましたか」と尋ねた。するとコロゝは「彼處からです。彼等は私の眼の前で舞つて居ます。貴君にそれが見えませんか。どうです君、我等二人の相違はそこにあります」と云つたと云ふ話を、何かで讀んだことがある。精神的の眼と耳とは、かやうに普通の人の眼と耳とから違つて居る。所謂天より來る姿を見、聲を聞くのである。

九

藝術家の直觀や創造は、實に斯う云ふ點にあるが、それは省察や、主智主義など、あらゆる單なる意識より超越した所にあつて、そこに獨特の精神界がひらけて居る。こゝには獨特の連絡が出來て、獨特の生命が潑瀾として常に流動して居る。然しこの事は單に藝術にのみ限つたのではない。これは論理的、智識的、宗教的範圍に於いて皆さうである。若しさうでなかつたならば、論理や智識や宗教の獨立はなくなつて、たゞ官能界、形而下界の支配にのみ委せられるであらう。所が人間あつてよりの歴史は、どんなであるかと云ふと、一言にして之を掩へば、この形而下界と形而上界との勢力争ひだと云つて可い。一勝一敗はあるけれども、形而上界の勝利が、そしてその領分が段々擴張されて行く。固より吾人のこゝに云ふ形而上界は、昔の哲學者や宗教家が空想した天上界の事ではない。人間の精神界に、その歴史的發展に依つて表現するものである。さうすると宗教、論理、智識、藝術などゝ、各々孤立して居る筈はない。この精神生活は常に個人以外に、或は幾多の障害を排してまでも、獨立し行く自我保存を特性とするやうに、統一を追求するともまたその特性である。この事は冗長な

然るに吾人の見解によれば、宗教とは斯かる精神生活の全體を創造するとを以つて第一義とする。宗教とは斯かる絶對的精神生活が、人間界にも入り込んで居るとの意識を確立せしめるところである。若し此の意識がなかつたならば、眞の宗教は存在しない。儀式や、祭官や、説教はあらうが、それは表面的機械的の事實であつて、内在性はすこしもない。ところが宗教に内在性がなかつたならば、それは脱け殻に過ぎない。斯う云ふ譯であるから、宗教は精神生活の全體に亘つた創造そのものである。藝術はなくとも、この創造はあるとが出来る。然しながら、此の創造がなかつたならば、藝術はその大前提を缺くことになる。換言すれば藝術はなくとも、宗教は存在するとが出来るが、若し宗教がなかつたならば、藝術は存在するとが出来ない。固よりこれは、徹底的に極端なところまで押し詰めて考へたとて、現下の實際界にはさうはなつて居ない。けれども思索を専らにするものは、極端な所まで押し詰めて考へないと、徹底した思索にはならないから、一度はこゝまで考へて置く必要がある。

六

そこで藝術對宗教問題の結論を簡単に云ふと、兩者共に精神的創造であるけれども、宗教の方は全體に亘つて居る。そこにあらゆる創造の根柢があるだけに、藝術の創造的源泉と勢力とは、どうしても宗教を基礎としなければならぬ。若しさうしないと、藝術は孤立する。従つて盡さざる生命の源泉もなければ、勢力も忽ち涸れる。

此の見解を再び思索の出發點として、藝術對宗教の問題を考へると、考へ方こそ相違すれ、昔から

ない。一滴は大海の全體が、表現される一點である。この一點から全體が窺はれるのである。固より全體が一々細かに窺はれはしまい。それが漸々明白になつて行くのが、精神界の進歩である。一々細かくは分らないが、全體は斯う云ふ活動のものだと云ふただけは分る。この全體の性質は「我」と云ふ一點から窺はれる。それで我は孤立するにあらず、全體は我と共に、我は全體と共にありとの眞理が體驗せられる。さうなると吾人の創造する所は、全體或は換言すれば、實在のなかゝら湧いてくる所なのである。然しこゝにも誤解のないやうに云つて置くが、この實在は昔の哲學者が云つたやうに、吾人は發見さへすれば可い、否、吾人の考ふる所とそれと一致するのが、眞理であるとされたやうな純客觀のものではない。前文に云つたやうな意味で、それは創造する全體である。

藝術家とはすなはち、斯く内部に體驗しつゝ創造する所を、作物として表現する人である。創作と云ふ意味が、若し創めて作物とするところであるならば、創作の前に創造がなければならぬ。また創作がどれだけ創造を寫し得るかと云ふとは、手腕の問題になるであらう。けれども若し創造がなくて、唯だ製作するとのみするものがあつたならば、その藝術家は模寫をする者に過ぎない、巧妙なる職人に過ぎない。その作物には何等の心靈をも認めるとが出来ないであらう。また精神生活の促進者と云ふ事もできないであらう。さうすると、藝術家に取つて緊要なとは、其の心靈が實在の全體と如何に相觸れて活動するかと云ふ所にある。若しこゝに何ものをも體驗する所がなかつたならば、それは口の人、手の人で、創造的藝術家でもなんでもない。それに價值ありとしたところで、第二流以下である。



生活と宗教と藝術

内

藤

濯

私たちの生きてゐる此の時代は、あまりに煩瑣なる時代である。人間の生活と云ふ此の大きな地盤の上に立つてゐて、同じ血を通して居るべき筈の宗教と藝術とが、動もすれば互に角を突き合はして、優先權を争ふことに熱中するほど、あまりに煩瑣なる時代である。

ある一群の人々は云ふ——今日の時代は最早、いはゆる宗教の權威を思ふ時代ではなくして、ひとり藝術にのみ吾々の生命力を求むべき時代である——と。

また他の一群の人々は云ふ——藝術の威力がどんなに強くなつて行くにしても、情緒分内の働さが藝術である以上、意志の白熱、人格の歸趣を目標とする宗教の根本義には、到底觸れやうがない、だから藝術は依然として宗教の下風に立つべきものである——と。

私は斯かる聲を聞くごとに、その何れに對しても、心から寂しさを感じないわけに行かない。と云ふのは、さうした聲の裏にはいつも、他を排して自己の立脚地を堅くすると云ふやうな不純の態度が見え透いて居るばかりでなく、また他の一面に於いては、宗教とか藝術とか云ふものの觀念に累せられて、宗教全體の生命、藝術全體の生命を見すみす擧げずに濟ますやうな、云はゞ粗末な笑止な心の附き纏うて居る事を感じるからである。

双方が、殊に藝術が宗教に頼つて發展し來つた所以が理解される。昔は吾人が今日了解するやうな意識こそなかつたけれども、實際の精神生活は、やはり同じ實質を以て行はれて居たものに相違ない。だから藝術家はどうあつても宗教を離れてはならない。尤も僕の云ふ離れてはならないと云ふことは何時も宗教問題をその標題とせよと云ふ意味ではない。それはどうしても可い。精神の根柢に於いてと云ふ意味である。若し藝術家が宗教を離れたならば、その作品は淺薄ならざるを得ない、街道藝術になつてしまふ。反動の時代は止むを得ないが、それが落ち付くと、大作は必ず宗教を取り入れて生ずると云ふ事が、過去の歴史に徴して明かになる。現代歐洲の藝術家が多くこの方に復歸しつつあるのも、僕は矢張それが爲めであらうと思ふ。或は現行の宗教に反對するものがあつたにしろ、それは更に深き宗教を求むる爲めであるかも知れないことを忘れてはならない。

若し現代の日本に於いて、新しい藝術が勃興しなければならぬとするならば、技巧と手腕との修養も必要であらうけれども、宗教の精神が分らなかつたならば、到底大なる藝術は生まれない。恐らくは歐洲の藝術の精神だつて分るまい。

すら私たち自身の生命を吹き込むことだ。

たとへば今日の時代は、教會や寺院の門を潜る人よりも、劇場の扉を押す人の多い時代である。一卷のカテシズムを繙く人よりも、小説や戯曲の魅力に酔ふ人の多い時代である。それだからと云つて、若し今日の時代は宗教の時代で無しに、藝術全盛の時代だと云ひ切つてしまふならば、それは普通の意味で云ふ宗教なり藝術なりを頭に据ゑて下した觀察で、ほんとうに事實の真相に徹した言葉だとは思はれない。何故なら、眞に徹底した意味で藝術全盛時代と云ふ言葉の背後には、必ず「靈魂の覺醒」時代であるとか、若しくは所謂第一義的生活要求の熾烈なる時代であるとか、さう云ふやうな生々とした意味が藏されてゐる筈であるばかりでなく、やがて其處には豊かなる宗教力——徹底せる生活力——の躍動を感じうるだけの消息が含まれてゐる筈であるからだ。かう考へてくると、たゞ形式のみより見て、藝術全盛の時代と云ふ觀念を築く事に誤はないが、藝術の全生命に立脚して築きあげた觀念としては、直ちに宗教全盛の時代と云ふ觀念を豫想するのが至當である。さうで無しに、もし宗教力の權威失墜を豫想する傍、藝術の全盛を謳歌するやうなことになるれば、それは取りも直さず觀念に毒せられた人の聲で、私たちの全生命より溢れいてた聲としては、あまりに微かである、あまりに弱いのである。かゝる觀念をして眞に生命あらしめ、かゝる聲をして眞に力あらしめるのは、觀念を離脱せんとする心でもない、外より内を見る心でもない、内より外に動く心、たゞこれのみである。私が觀念の支配下にあつて、しかも其の爲めに囚はれずに居る事ができると云ふ態度は、歸するところ此の心より外にはない。

もし假りに宗教家の立脚地が、一宗一派の機關や政權のみであり、藝術家の立脚地が、技巧や表現のみであるとすれば、強ひてこゝで宗教と藝術との問題を考へる必要はない。しかしながら私は、兩者の立脚地が、さばかり皮相な點に据ゑられてゐるのでなくて、もつと／＼深いところに据ゑられてゐる筈だと思ふ。手取ばやく云つてしまへば、人生と云ふ大きな有機體の核心に据ゑられて、それと共に絶えず動き進んでゐる筈だと思ふ。だから假令、宗教が藝術を排するやうな事があつても、それは到底できがたい事で、他を排する事が、やがて自己の立脚地を動かす事になつてしまふ。或る幻影の爲めに人生を強ひて抽象化して、その抽象化したものを人生だと思ふ事になつてしまふ。

かう云ふ淺墓な宗教觀乃至藝術觀は、今日もなほ私たちの周圍に行はれてゐるが、もし宗教對藝術の争鬭と云ふ事實があるのなら、それはつまるところ觀念と觀念との無意味なる争で、宗教全體の生命と、藝術全體の生命とは、はじめから私たち人間の全生活のなかに溶け込んでゐるものだと思ふ。私が今日の時代を煩瑣なる時代だと云ふのは、單に宗教と藝術との場合ばかりでなく、すべての場合、觀念と觀念との争ひがあまりに甚しいからだ。

しかし私は必ずしも、私たち人間に觀念を築きあげる習性があるのを咄ふのではない、すてに私たちの衷に單純化の精神が植ゑつけられて居る限り、私たちはどんなに藻掻いても、到底觀念の支配を全く脱れ去る事はできない。けれども私どもの、常に心がけて居なくてはならない事は、たとひ觀念の支配下にあつても、其の爲めに束縛せられずに居ることだ。生命の創造成長を本位にして、觀念に

ものゝ本質から喚び起こされてゐたのでなくて、宗教に對する自らの誤解から生じたものであつた事が臆げながらも分かる。と云ふのは、宗教と云ひ藝術と云つても、私たち人間の不斷なる生活の創造を離れてはありやうが無いからだ。積極的の要求と努力とに依つて穿たれた人間生活の閃影を外にしていれば、ありやうが無いからだ。神——信仰——憧憬——向上、それらは凡べて、より深き生活に向つて生きんとする欲望の裡に動いて居なければならぬ、絶えずより深く、より廣き「我」を發見せんとする心のうちに含まれて居なければならぬ。要求本位の生活、これがやがて宗教生活の全體であり、創作家の生活の全體である。

私は人間の飽かざる創造力——廣義の——の反映を外にして、神の存在を思ふことができない。斯かる創造力のうちには、一の不純なる分子の介在をも許さなければ、氣力の消耗をも許さないし、遊戲三昧の心をもゆるさない。だから其處には、「斯くありたい」と云ふ願ひよりも、「斯くあらねばならぬ」と云ふ熾烈な心が主となつてゐる、まづしぐらな意力の働きがある、生活の信仰があり、憧憬がある。かくて宗教を欣求する者の心境と、藝術を創作する者の心境とは、いよ／＼益々融和合一の域に達する。

生活肯定の信仰が創造力の重なる要素であるならば、私たちは宗教をやがて「信仰の藝術」と云つても差支ないであらう。

宗教と云ふ言葉に結びついた因習的の意味を捨て去る事の出来ない者は、宗教と云へば直ぐに宗門を聯想する。それは丁度、戯曲と云つて劇場を聯想するやうなもので、宗教の空氣と宗門の空氣とが、

私の此の心よりして宗教と藝術との力に面するとき、もはや此の兩者を異なるものと思ふやうな餘裕はないのである。たゞ形式の上のみに於ける兩者の爭鬭を意味あるものと思ふやうな餘裕はないのである。

私は近い過去まで、藝術のみを自らの心の糧として生活を續けてきた。そして文藝上のいろ／＼な作物を讀んだり、いろ／＼な戯曲の演技を見たりして、自らの心をあらはに突き出されたやうに思つた事も屢々であつた。ところが何時のまにか、私の周圍には藝術を語る人よりも、宗教を談ずる人が多くなつてきた。さうして冷やかな眼で、自らの内部を覗いて見るとき、私の心は藝術よりも寧ろ宗教に傾いて居るのでは無いかと思ふ事さへあるやうになつてきた。それと同時に、久しく私の頭に絡みついてゐた宗教と云ふものゝ觀念が、次第に弛み解ほどけて、その中に含まれてゐる生命と、それまで僅かながらも藝術より亨けてきた生命とは、刻一刻ひとつに溶け合うて行くのを感じた。此の感じは現在までもなほ引き續いてゐて、絶えず私の内生活の動力となつて居る。現在に於ける私の生存は、この心境を離れては到底不可能であらう。

一體私は或る時期のあひだ、宗教と云ふものに對して或る反感を抱いてゐた。それは宗教的空氣の稀薄な私の周圍がさうさしたので、私は神とか信仰とか宗教生活とか云ふ事が、私たちに對して、隱遁的生活を迫るのてなければ、いはゆる欺かれた安心を強ふる外に意味のない言葉としか思つてゐなかつた。時代々々の文明と、其のなかに揉まれて繰り出された歡樂と悲哀、奮闘と蹉跌、さういふ色々な人生の事實を経緯にして織りだされた藝術の力の上に、私が専ら思慕の心を繋いでゐたのも、全く斯かる反感に先立たれてゐたからであつたのだ。けれども今になつて見ると、この反感が宗教その

現實主義を主張する藝術家の作物に、反つて絶望と暗黒とに陥る危険を睹してまでも、眞實を穿たんとするほど、熱烈なる意力が加へられて居る事を思はないわけに行かない。すこしても近代藝術の裡に含まれてゐる思想を玩味した者の直ぐに氣づく事だが、近代の藝術思想には、いはゆる現實執着の弊はありながら、一面には一種の生々した理想主義が込み込んでゐて、既成のいろ／＼な方式を繰返す事を耻辱とする代りに、何等かの理想を現實の土地に植ゑつけやうと努めて居る事はたしかだ。勿論この不斷の努力は、一の目的には達してゐない。けれども、たとへば彼のイブセンのやうに、あらゆる偶像の破壊を志して、事象と云ふ事象の底の底まで突き込んでゆく意力と勇氣とは、「求めよさらば與へられむ」とか、「飢ゑ渴ぐごとく義を慕ふものは幸なり」とか、「心の貧しきものは幸なり」とか云ふ基督の教訓と、歩調を一にするとは云へ、決して其の歩調を異にするものと思つてはならない。

勿論私は、イブセンの歩いた路を、全然肯定するのではない。彼には奥ふかい内生命の流動があつたにも拘はらず、知性の力が感性の力を凌いでゐた爲めに、思想の巨大なる努力も、私どもをして否定のかけに新しき人生を豫想せしめるのみで終つた事は私も認める。しかし「未來の探求者」としての彼が、意力の矯正と意識の徹底、この二方面よりして、社會改革の一路を邁進しやうと企てたことは、私たちの偉とするに足る態度ではなからうか、慕はしとするに足る心ではなからうか。斯う思ふとき、私は宗教藝術と云つたところで、必ずしもそれが神の顯現や使徒の生活や僧院生活などを、材料としなければならぬと云ふ理由はないと云ひたい。ゲツセマネの園に於ける基督の熱禱が其の材料になるなら、鐵工場の塵埃裡にあつて、鎚を揮つて赤熱した鐵塊をたゞ職工の努力もまた、十分その材料となすに足りると云ひたい。取り容れられる材料は假令どうであつても、それが生より遊離

必ずしも同一でない事は云ふまでもない。だから私には、宗教の空氣が宗門の専有物であるとは何うしても思へない。宗教はむしろ、私たちの營む日常生活の内外に動く大空氣で、都市の塵埃と爭鬭と擾亂と喧噪との渦中に於いては、殊に際だつた色調を漾すべきものだと思ふ。従つて宗教の滋味は、教役者の説教にのみ求むべきものでなくて、また藝術的作品を通して窺はれる場合が中々に多いことを知つて置がなくてはならない。

そこで問題になるのは、宗教藝術である。世間には、かの佛蘭西の中世紀に行はれた *Mysteres* だの云ふ禮拜劇、十七世紀の劇詩人ジャン・ラシイヌが、舊約書中の事實を土臺にして書いた『アタリイ』だの『エステル』だの云ふ聖劇、またはルウベンスやヴァン・ダイクなどの描いた所謂宗教畫、あゝ云ふやうに、神や基督や聖者の姿をあらはに取扱つた作物ばかりを宗教藝術だと思ひ込んで、さう云ふ種類の藝術の復活を希望してゐる人もあるやうだが、それは寧ろ宗教に囚はた考でなければ宗教をして藝術を利用せしめやうとする不純な考で、私はたゞいはゆる宗教上の事實や人物を作物の中に取容れると云ふ事だけが、宗教藝術殊に現代に於ける宗教藝術の烙印とは思はないと思ふ。宗教藝術存在の主要條件としては、先づ第一に作家それ自身の人生に對する眞劍なる態度が具はつて居なければならぬ、個性の誠實なる展開のうちに、生命の永遠なる歌調を聴取しうるだけの敏感が無くてはならない。もし斯かる態度を外にして、藝術の材料にのみ宗教の意義を求めよと云ふ人があるならば、それは藝術家に向つて、甚しい耻辱を加へる事になるのであらう。

私はこゝで、古くから持囃されてゐる所謂宗教藝術に、思ひの外に遊戲的乃至裝飾的分子が多くて、



驚異の殿堂

吉田 絃 二 郎

小ひさな村の片隅に、何時も懐しい樂の音が聞こえた。十二三人の若い人達が蕭かに讃美歌を唱うてゐた。私は幼な心にも、そのうたの音に聞きとれて、教會堂をつゝむ柳の並樹の蔭に幾度もさ迷うたのである。そして私は到頭教會に通ふことを知つた。私は起きる時も、寝る時も、本を讀む時も讃美歌を唱うた。私が下宿を變へたとき先の下宿の裏隣にゐた一婦人が、「あの書生さんの讃美歌が聞えなくなつたので何だか急に淋しくなつた」と下宿のおかみさんに話したといふことをば、私は二三ヶ月あとして聞いた。それくらゐ私は熱心な讃美歌の追慕者であつた。自分で靜かに唱ひながら、自分の唇から洩れる純一な諧調のなかに、溶け込むて行く私の敬虔な心は、泣きたいほど懐しい或者の力や驚異を想ふのであつた。神さまが何うだのキリストが何うだのといふことは、私には克く分らなかつた。しかし歌の快い諧調だけは私を教會に誘ふ充分の魔力を有つてゐた。他人の眼から見たらそのころの私は、宗教を信ずる人と見えたかも知れぬ。

しかしこの純な幼ない心持ちはながくは續かなかつた。私は追々と人の懐しいといふことを知つて來た。讃美歌のメロデラスなリズム以上に私の心に強い顫動を與へたものがあつた。それは異性に對する強い愛着の念であつた。處女の美のなから湧いて來る驚異に對する憧憬の念であつた。そのこ

しない事實であるならば、創作家の徹底的態度を俟つて、立派な宗教藝術となりうる可能性が十分にあると信ずる。近代のいはゆる問題小説乃至問題劇が、多くの場合、私たちの生活に鋭い或物を刻み込むのは、藝術が情緒分内の働きてあるとか、美の把握を目的とするものであるとか、最早さういふ斷片的の定義を下す場合でなくて、全人生乃至全自然の閃影が、やがて藝術となりつゝある事の證據になると同時に、宗教藝術と云ふ言葉の意味と、眞に徹底したる人生藝術と云ふ言葉の意味とが、次第に溶け合ひはじめた證據ではないかとまで、私は思つてゐる。

私はこゝで、私の貧しい感想の終を結ばなければならない。

宗教と藝術とは、これを外より見るとき、何處までも其の形を異にする。否、互に形式を異にすることが、むしろ當然である。私は兩者の形式的統一を思ふほど、無意味な事はないと思ふ。けれどもこれを内より見るとき、兩者はおのづから私たちの生活の中に溶け合つてゐるのであつて、更めて兩者の融和合一を企てる必要はない筈である。たゞ藝術の發展が、あまりに自由であり奔放である爲めに、世間には藝術が宗教の敵であるかの如く思つて居る人が少なくないやうであるが、それは初代の基督教徒が無神論者であるかの如く誹られたのと同小異で、現代の宗教問題に對するパウロ・サバチエーの觀察に倣つて云へば、今日傳習的の信仰に満足する事ができないで、みづから宗教の敵だと信ずる人々が、それぞれの立脚地を固めて行くうちには、宗教の眞意義が、一步步精練せられ、深められ、内化せられる事がないとは云へなからう。

私たちはもつと、宗教と藝術との生活化に心を潜めなくてはならない。生活の絶えまなき創造發見、この事がやがて、日々の生存の第一義でなくてはならない。(八月十二日)

日でも私はたゞ、教會といふものは、自分の先輩や友人と論争をして見たり、(時としては随分皮肉な言もいふが) 相互の顔を見るのが愉快だといふくらゐの心持ちが大分手傳つて、教會に行くやうになつて了つた。それで私は他人から見たら、宗教生活でもやつてゐるやうに思はれるかも知れぬが、自分の生活といふ立ち場からしては宗教生活なんていふものは特別に區別して、あり得る譯はないと思ふ。もしあり得るとするならば、それは宗教といふ觀念を無理に築き上げて、自分で自分の生活を囚縛せられてゐるものだと思ふ。

無論第三者から見ても、彼れの生活は宗教的だとは言へるであらう。しかし果してその宗教生活といふものが何んなものであるかは私にはまだ分らない。恰かも藝術なり或は藝術的生活といふことが、分らないやうに宗教或は宗教的生活といふことを、はつきり意識して生活することは、不可能であるばかりでなく随分アブノーマルな方法であるかとも思ふ。飽くまでも運命觀に陥り易い個性を有つた私にとつては、生活或は生存といふことすら時としてはまるで無價値な、しかも或る自然力の意地悪い企劃の實現に使用せらるゝ手段物であるかの如く考へらるゝのである。或人は私の運命論を目して「お前の考は臆病である。そんな手短かな解決が着くものか」といふ人もある。しかし私の運命觀は宿命論とは全然異ふのである。自分が生れること、自分が生活すること、自分が新たに未知の人を知るといふこと悉く運命である。しかしその間に自分の生命を擴張し、生活を創造するだけの自由も亦本然的に有つてゐる。私は自己生活の創造をも運命のなかにとり入れるのである。ベルグソンの生活力といふことは、私の運命の力と同一であるやうに感ずる。この私にとつては、運命といふこと或は運命の力といふことの外には、何物をも存在しないのである。ベルグソンの哲學を信ずる人は、「生活力

ろの私には、人を戀するといふことは、一種の罪惡であるかのやうに教へられてゐたのである。それで、人を戀しながら、しかもそれを私一人の胸に秘めて、日曜毎に聖壇の前に額づくことが、非常な偽善のやうに思はれてならなかつた。私は教會の樂の音に見出した驚異の境を捨て、戀愛の裡に見る力強い或るものをあさる人となつた。

その後私は幾度もまた、方々の教會を訪ねた。それでも、私に落ちついて宗教といふものを意識して味ふだけの氣分を湧かさせるだけの力を有つた教會はなかつた。私は深い懷疑に陥つた、私は人間の集團を憎むやうになつた。幾度も自殺といふことを考へるやうになつた。それでも私にたつた一つ忘れることのできぬ懐しいものがあつた、それは大自然の驚異であつた。私は運命論者となつて自然の凡べてのものを憎んだ。しかし戸山の原から、あの柏の森あたりをさ迷ふときだけは、心から自然を懐しいと思つた。あの森や、あの原をさ迷ふ間だけは、私にとつて最も生き甲斐のある時間のやうに思はれた。そのころの私にとつて、若し眞實の生活といふことが言へるならば、それはあの森のなかに入つて、驚異に裹まれながら想念に酔ふことのできた、あの數十分の時間であつた。その後私はまた不圖したことから教會の闕を跨いだ。しかし私はこれが眞實の宗教味だといつて、掴み出すことのできる何物をも經驗することはできなかつた。

私は始めから、何物をか得んが爲めに教會に行つたのではなかつたかも知れない。たゞ何とはなしに、何か或る力が潜んでゐる所のやうに思はれて、一種の淡い好奇心に驅られて行つたのである。今

凡べてのものは生きてゐる。凡べての存在のなかを流るゝ偉大なる生活力！

私は幾度もこんな感じを抱いたことはある。しかしながら、その生活力が何の爲めに流れてゐるのであらう、何の爲めに永遠の創造に向つて争闘してゐるのであらう。何かの目的があつて流れてゐるのであらうか、何の目的もなく、ただ創造そのものゝ裡に、無限なる自己の力と自己の生命を感じるが爲めに動いてゐるのであらうか。

私は「生活力」を直覺するとしても、まだその目的や方向を直覺してゐるのではない。恐らく盲目的に發展して行くのかも知れない。或は永遠の眼より見て有目的に動いてゐるかも知れない、私にはまだそんな問題を解決するだけの経験もなければ、力もない。私はたゞ「生活力」の本流なり踴躍なりを直覺すれば、それで充分である。私が曩に、私は眞實に「生活力」を自覺しないと云つたのは、生活力の本體そのものを攫むことができなかつたといふ意味であつて、「生活力」が存在してゐるといふことだけは私も信じてゐるのである。

私は極おぼろげだが「生活力」を直覺することはできる。しかしそれはたゞ一種の驚異として私の全心を裏むのである。私はこの世界のあらゆる事象のなかに絶えずうごめてゐる生活力に面するときたゞ驚異より外に、何物をも持つことができないのである。勿論その驚異は原始人のそれとは、性質を異にしてゐるにちがひない。しかし、あらゆる事象に現はれたる生活力に面して、私の全生活を動かすものはたゞ驚異の感のみである。そしてその驚異の感に對して私は時として自ら敬虔の念の湧き出づることを覺ゆることもある。その刹那が或は第三者にとりては宗教的だと見られるかも知れぬ。

の跳躍」を信ずる、しかも「生活力の跳躍」は決して形而上學的に或は形而上學そのものによりて、「生活力」さながらに感ずることはできない。ベルグソン自身が言つてゐる通りに、たゞ直覺を通してのみ感ずることができるのである。しかも直覺は人格そのものの、反映に過ぎざるが故に、直覺を通して意識せられたる「生活力」はまた各個性、また各人格そのものを表現とせる人格我、個性我の根本義に過ぎない。かく考へて來るならば、ベルグソン自身の「生活力」と、他の人々の所謂「生活力」との間には、随分異なつた氣分なり、見解なりが介在してゐるにちがひない。ベルグソンが一度、「生活力」を高調し、創造的進化を説くや、思想家の殆んど悉くが、生命の擴張を呼び、生命の創造を主張するやうに思はれるが、私にはまた眞實に「生活力の跳躍」を直覺することができないやうに思ふ。よしんば私が「生活力の跳躍」を直覺し得たりとなすも、それはベルグソンのそれと同じ緊張や、光りや、方向のものであるか、否かは疑問である。無論自然科學を通じて、或は刻々に發生し來るあらゆる事象の顯現を通して、或る靈しき生活力の跳躍が、存在の凡べてを通じて流れつゝあるといふことは誰でも感ずることであらう。しかしそれだけの意識を直覺によつて得るといふのであつたならば、それは餘りに貧弱な直覺である。ベルグソンが「生活力」を「直覺したといふ場合には、恰も或る宗教家が「見神の實驗」を得たといふくらゐな強烈さに於て信念や歡喜や或は光明が渾然として彼れの全意識のうちに燃焼したてであらう。それだけの経験や、人格や、または形而上學的な準備のない私が「生活力」或はその擴張を叫ぶ時に、随分ハイパボリカルな言葉を借りて、生命！生活力！自我發展！といふやうなことを叫んで見た所で、私のその刹那的な熱心が少し冷めかゝると、私の心の底から、何となしに物足らぬ淋しさが湧いて來て、前よりも一層暗い心持ちに鎖されることがある。

私が宗教に入る、仍ちこの驚異の感をより多く経験したいからである。私が野に耕す、仍ち驚異の感を味はんが爲めてある。私が戀愛の人となる、私が藝術に入る、仍ち驚異の感をより多く味識し得んが爲めてある。

私が生れる、この地球に生れる、現在の空間に、現在の時間に生活する、死ぬ、これ運命である、私が創造をする、私が批評する、これ運命である。或人は言ふ、「創造と批評は、自分が創造し、自分が批評するのであつて、運命といふ他の力によりて動かさるゝのではない」と。なるほど創造と批評、それは宇宙の生活力を分有する一個性の創造であり、批評であらう。しかしながら、その一個性は自ら創造と批評を放擲することができるか。或は可能であらう。しかしそれならば同時に彼れは死を有たなければならぬ。苟しくも彼れが生活力を要求する以上、彼れは批評と創造を自ら、爲さざるを得ないのである。運命の力に動かさるゝのではないか。

生活力の奔流に飛び込み、生活力と共に永遠の時の發展に入るといふが、飛び込まざるを得ず、流れなければならぬ理由は何處にあるのであらうか。生活力を説く人々が、生活力の流れと、自己の立ち場を異にして考へ、生活の流れが自己の生活以外に或は自我そのものと區別して存在するが如く考ふればこそ、彼等はその奔流に飛び込むとか、または一度その奔流に飛込みたる後に、更に岸邊に立つて奔流を眺むるなどいふやうに、考へるのであるが、私が生るゝ刹那、否な、生れない以前から私の生活力は、宇宙的生活力そのものゝなかに浸されて、私の生活の一秒と雖も、その生活力から離

しかし時としてまた私は非常に深い憎惡の念を抱くこともある。耐へがたき寂寞を感じる時もある。要するに自然にあらはされたる生活力に面するとき、私の心持ちはいろ／＼であるが、その凡べての感情なり、氣分なりに通ずる、一ツの強い刺衝は驚異といふ感じである。

驚異！驚異！

凡べて私の生活のあらゆる形式を裹むものも、私の生活のあらゆる進化の上にあらはるゝ力も驚異である。そして私にとつては驚異はやがて運命である。或人は言ふ、「自ら生活力の擴張によりて、自ら新らしき道を拓いて、自ら創造者となるべし」と、私もこの説に對しては全然同感である。しかし生命の擴張、新たなる創造といふことの更に後方において、私の生活の方向なり、進化なりを見てゐるものがある。それは即ち私の批評的生活である。無論批評即ち創造である。しかしながら批評は創造を先有實在としてのみ起り得る創造である。創造なき所に批評はない、しかし批評なき所に創造は存在し得る、たゞ批評なき創造が何れだけの價値を有つてゐるかは問題である。

私が驚異の感じを抱く一刹那は無批評であり、無創造であると言へるかも知れぬ。しかしそれは絶批評、絶創造と言つた方が適當であらう。批評と創造が同時に、しかも意識せられずして、最も白熱的に燃焼する場合、それが驚異に裹まれたる私の生活の刹那である。意識せられざる如くにして、しかも意識し、批評、創造なきが如くにして、しかも批評と創造とを有する驚異の時が、連續すれば連續するほど私の生活は光明であり、充實せらるゝのである。

私は驚異の生活を少しでもより多く、より長く味ひたひのである。

驚異！ 驚異！ 無智なる私の心はそれ以上の懐しい影に胸おどることを知らない。私はその刹那の印象を臘石に彫り附ける。殿堂に象徴する。そしてそのなかゝら人生そのものの姿を攫みたい。私はあはれなる殿堂建設者である。

如上、私の生活は矛盾と、寂莫と、失望とに充ちた生活である。しかし私は創造なき、批評なき生活のあまりに寂しさを知るが故に、或は創造や批評なしには生きてゐられないが故に、私は創造し批評するのである。随て、その批評その創造に對して、何等永久的または普遍的の價値を附けないのである。藝術、宗教に對しても、普遍永久の價値を附けないのである。随て私自身の立ち場から見ても、二者の區別を認めない。その創造なり批評なりの表現の形式によりて、第三者よりして或は宗教的であり、或は藝術的であると言ひ得るかも知れぬ。しかし私自身にとりては、私の生活の創造或は批評といふことの以外に出ないのである。

宗教と藝術が私自身にとりては區別の出來ないと同時に、一方に於て他人の宗教、他人の藝術は他く迄私のそれ等ではない。私のそれ等は他くせでも私一個のそれ等である。キリストの宗教、釋迦の宗教、ミケロアンゼロの藝術、トルストイの藝術、みな彼等一人一人の宗教であり、藝術であつて、私の宗教でも、藝術でもない。キリストの宗教は彼れ自身にとりての生活の創造であり、批評であつて、私自身のそれ等ではない。しかし若しこゝに宗教的生活を營む人があつて、キリストにインスピレーションを感じる人があつたならば、それは差し支へはないが、しかしその人自身にはその人自身の創造的宗教を味知しなければならぬ。その最後の到達點はキリストと同一であるにしても、それに

れたことはない。死そのものすら、生活力の一部となつて流れてゐるのである。かく考ふれば、私には生活力の流れに飛び込むとか、這上るとか、いふやうな自由は初めから賦へられてゐないのである。私はたゞ「生れる」といふ運命の第一歩から、「死ぬ」といふ運命の最終歩に至る間、たゞ運命の力のなかに生存し、創造し、批評するのみである。そこで私にとつては所謂生活力即ち運命力である。

私は何故に生れ、何故に死ぬかは知らない。只運命の力によりて生れ、運命の力によつて死ぬ。しかもその間、私は創造し、批評せずには居れないから、批評し創造するのである。私にとつて人生は餘りに寂しい、私は創造し、批評することによりてせめてもの慰安を得るのである。私は運命の力を感ずる、私は生命の力を感ずる、そしてその本體の何であるかを明かにすることはできない。たゞおぼろげに刹那的に感ずるのである。その刹那的な刺衝、刹那的な燃焼こそ驚異の感である。

私は人生の凡べての事象に對して、驚異を感ずる、そして一寸でもより、永く、一寸でもより、確かにその姿を攫みたいが爲めに、私の全生命を抛つた創造と批評とを要求するのである。私は幾度か小さな私の創造の殿堂を築いた。しかも失望の手斧を以て壊した。惨めなその形骸を見成つては幾度か泣いたであらう。それでも私はまた更に新たな殿堂の建設を企てずには居れなかつた。殿堂を打ち建てる鑿の音、手斧の響きが、私の生活の刹那刹那を意味あるものとして刻んで行く。

私は運命のうちにありて槌を振り上げてゐることを知る。しかし私は創造の争闘や、創造の努力や、批評の生活なしには生きてゐられぬほどの寂しさをも知つてゐる。

の方向にありては、虚偽といふものも、なければ、罪惡といふものもない。

私は水の流るゝやうにその刹那刹那に方向を定めて進む。こゝ私の生活の創造である。そして私は靜かにその音のさゝやきを聴きながら、私の生活に一つ／＼の意義を發見する、これ私の生活の批評である。私はこの意味に於て創造と批評の二つの特權を有つてゐる。しかしながら私が何んな方向を撰み、何んな谿川を流るゝだけの自由を有つてゐるにしても、私は永劫に亘りて、私の生活の創造の裏に潜んで私の生活の力の凡べてを索さ着けてゐる運命の力から離れることはできない。「高きより低きに流れよ！」といふ運命の力を追れることはできない。私は生の力を感じず、しかしそれは運命の力と言つた方が私の心持ちにびつたりと當て嵌まるやうに思ふ。

驚異！ 驚異！

驚異を通して見る私の人生はあまりに淋しい。それでも、その驚異を味ふことがせめてもの私の人生である。

私は驚異の爲めに殿堂を築き、更に新たなる驚異の爲めに舊き殿堂を壊ち、そして私は「これ私の生活の創造である」と叫んでゐる。

戀愛、戰爭、航空、耕作、宗教、藝術！みな私にとつては驚異の殿堂を築かんが爲めの多になつて一なる顯現に過ぎない。（八月十八日）

詣るの努力そのものは、その人自身の批評と創造から湧いたものでなければならぬ。私達は出来上つたキリストの宗教を捨てることはできる。しかし私自身の刹那から「我れ生きて而して我れ創造しつつあり」といふ心持ちを捨てたならば、その刹那私は生きてゐる價值のないものである。藝術にあつてもこれと齊しく、ゴルキイの藝術はゴルキイ自身にとりてのみ絶対意義があり、絶対價值があるものであつて、彼れの藝術は決して私にとりては絶対意義があり絶対價值があるものではない。私一人の藝術は私一人にとりて眞の意義、價值があるのであつて、私以外の人々に問ふ必要はないのである。もし宗教家や藝術家があつて、彼自身の宗教なり、藝術なりが、眞に彼れの生活の創造であり批評であることを信じ、それによりて自己の生活が充實されたと自覺するならば、彼れの宗教、彼れの藝術は彼れ自身にとつては絶対のものであつて、縱令世に解せられずとするも何の憂ふる所はない筈である。自己の宗教なり藝術なりの了解者を他に、或は後世に求むといふが如きは、まだ眞に自己の創造的生活を味はざるものである。

凡べて私の生活は運命力の大きな流の上に築かれた刹那刹那の波濤的生活である。その流れが或は飛沫となつて、或はうねりとなつて私の生活に現はれる。私はその刻々に驚異といふ靈しき心の燃焼を通して、運命力の本體を捉へやうとする。

私は自我本能の命ずるまゝに、自我の眞實と認むる所に、殆んど馬車馬的に創造の生活を營めば宜い。そして若しその生活が社會の道德なり、習慣なりと矛盾するならば、それは社會の道德なり、習慣なりが便宜的であり、功利的であるからである。自我の眞實なる發展の徑路、自我の眞實なる創造

で、印象主義の批評と、享樂主義の戯曲として名を馳せてゐるジュール・ルメエトル Jules Lemaitre である。

力づよい寫實の筆で、放浪者の生活を撥くことに長じてゐる露亞西のマキシム・ゴリキイ Maxim Gorki は飽くまで人格神の存在を否定すると云ふ意味からして、あらゆる宗教觀念の破壊を叫んだ後、次のやうな語氣を洩らしてゐる――

私は宗教感情といふ言葉を、かう定義したい。

宗教感情とは、人間と宇宙とを結合する調和關係の意識に伴ふ尊大にして而かも愉快なる感情である。この感情は、各個人につき纏うてゐる綜合性を目ざして憧れる心から生まれるもので、經驗が其の糧となり、任務と地位とに對する人間の意識を俟つて、先づ生活の數かぎりもない現象のうちに表現せられ、それから此の感情のために人間のうちに喚び起こされる内部の自由といふ愉快な感覺を俟つて、「感情の心」に其の形を變へるものである。感情の心は宗教的である、生活事實の限りなき變化、生活の神秘を探らんとして、人間の

心に湧きたつ憧憬の美しさ、自由と眞實と正義とを欲求する創造力、十全の域を指して、徐かではあるが確かに歩みゆく人間の足なみ――そこに將來人間が感情の心を酌みとるべき源の水がある。

膽の小さい人たちが何と云つても、人間の踏んでゆく道は、靈的十全の境に至りつく道である。

そして此の過程の意識は、私が宗教的氣分といふところのものを、精神の健全な人々の心を喚び覺まさなければならぬ。宗教的氣分と云ふのは、力の信仰と、勝利の希望と、生活の愛からして生まれる感情である、人間の核心と全宇宙の核心との間に横たはる聰明な調和に面する驚異の心からして生まれる感情である、創造的にして而かも複雑なる感情である。

私たちは今、心理的新徴候の形成に携はつてゐると思ふ。能力相互の間に矛盾なくして、一切の能力を調和よく開展して行くといふ意味から、十全だと呼ぶ一つの實在が、將來の世界に見える。

この實在の形式を可能ならしめんが爲めには、

宗教問題と新藝術家の群

S A N

六七年ほど前の事である。佛蘭西文藝界の新機運を促進することに努めてゐるメルキュウル・ド・フランス誌は、佛蘭西國內は云ふまでもなく、英吉利、獨逸、伊太利、露西亞などに於ける知名の學者、政治家、宗教家、藝術家に書を送り、宗教問題に關するそれぞれの意見を徴して、現代人の宗教觀念乃至宗教感情が、すでに壊滅に瀕してゐるか、それともなほ發展の一路を辿つてゐるか如何かを知らうとした。かうして各方面から集まつてきた回答は、約百五十通の多さに達したが、それらは一たび誌上に發表され後、主唱者のフレデリック・シャルバン氏に依つて、更めて一冊の書に纏められた。メルキュウル・ド・フランス社から出てゐる『宗教問題』La Question religieuse と云ふのが即ちそれで、いづれの回答も概して簡單なものではあるが、現代に於ける一般思想家の衷に動く宗教感の中心を知るのには却つて便宜である。こゝには其のうちから、目ぼしい藝術家の意見だけ

をかい摘んで、宗教對藝術の問題に關する何等かの暗示を享けて見たいと思ふ。

獨逸新派の詩人リヒャルド・デヘメル Richard Dehmel は云ふ――

宗教感情は決して人類のうちに氓びることとはできない。私たちが空の星に近よれない限り、いつまでも地上に存するであらう。けれども此の感情に源を發する宗教觀念は、たしかに變つてゆく、と云ふのは、丁度廣々とした青空のなかの雲のやうに、動もすればかき消える事があるやうに思はれるからだ。私は――これは私の希望だが――現今、觀念と云ふものは、丁度雲が再び海中へ落ちてくるやうに、感情のうちへ歸り始めてゐると思ふ、そして宗教の要素は他日、純詩歌の形式に依つてのみ、再び甦るであらうと思ふ。

――宗教の壊滅と發展とについては少しも知るところが無い――と云ふのは、佛國翰林院の一員

發見に依つて、徐々ではあるが確かに破壊されてゆく。さうした觀念は今その根を失つてゐるが、しかし合理的要素と現實感とが、比較を絶するほど力づくになる時までには、丁度生命のない陰影のやうに、想像に富んだ人々の腦裡に遲滞してゐるであらう。

しかしながら、果して幾ばくの人が、かういふ事情の下にあるであらうか。

大多數の人は、自己に沒交渉なるいろ／＼な權力のうちに、その意思と運命とを支持すべきものを探し求めてゐる。それらの人々にとつては、それが一つの要求であり必要である。遺傳の力が餘りに強すぎる、想像が餘りに働き過ぎる、そして意思が餘りに弱すぎる。

けれども、科學の力に服従してゐる人々の一軍は、その敵軍たる遺傳の犠牲者と、いろ／＼の神秘的表象とに對して、たえず二重の勝利を獲得するであらう。

第一の征服は、地平線を擴大してゆく知識と責任とが、陣營生活を不可能ならしむるに従つて、

陣營地を變へてゆく人と云ふ人の征服である。第二の勝利は、残れる人々の上に加へられる。いろ／＼の教義信條は、今日以後支へられかねて滅落する、そしてそれと同時に、宗教と現實との間に横はつてゐる距離が減ぜられる。この變化は徐々に行はれるが、變化の終局を見るのは、一切の宗教、一切の宗派が、一切の差別を棄て去つたと同じやうな状態になつて、一の永遠なる救済力を舉つて崇拜するやうになる後のことであらう。

新加特力教の立場からして、詩や小説を書いてゐる伊太利のアントニオ・フォガツツァロ Antonio Fogazzaro は云ふ――

まづ宗教感情について云はう、と云ふのは、歴史上および心理學上の意味からして、宗教感情は宗教觀念に先立つものであるからである。私の考を以つてすると、宗教感情はとても壊滅しがたいほど人性の根本となつてゐて、人類の起源以來、發展してきたものである事は確かである。十全にして至高なる精神美の權化たる超人的實在に對し

平等の地位を占むべき人々の間に、自由にして而かも寛りのある交渉が行はれなくてはならない——そして此の問題は、ソシアリズムに依つて解決がつく。

かういふ交渉は、衆人に對しても各個人に對しても、經驗の平等を創造する、人間相互間に於ける完全なる理解を可能ならしめる。そして將來、忿怒と嫉妬と貪慾とを剥ぎとつたいろ／＼の關係が創造せられるであらう、人は各々衆人の經驗を自由に用ふることができらるであらう、衆人をして各人の經驗から利益を收めしむるであらう。

私がこゝで經驗と云ふのは、私たちの知識の全量を意味する、科學と藝術との領域に於いて、私たちが創造の能力を揮つて到達した一切の結果を意味する、けだし此の領域は、私たちの靈性の働さうる最もけだかい領域である。

この經驗を攫むことは、人間に富を與ふる傍、また人間の心に價値の意識を喚び起す。その創造に依つて過去の時代人と争はんとし、來らんとする時代の人々の踏襲するに足るべき模範を創造

せんとする尊大にして不可抗の慾念を喚びさます。

そのとき、人生には「創造的過程」の空氣が漂ふであらう。雷に過去との統一感が得られるやうになるばかりでなく、また其の靈性の感化が未來に及ぶと云ふ明らかな考を等しく抱き得るやうになるであらう。私たちは、私たちの意識が無限まで増大せられうると云ふ事實を忘れてはならない。

だから私の云ふ意味に於ける宗教感情は、存在すべきものである、發達すべきものである、人間をして十全ならしむるものである。

既に故人となつたが、かのイブセンと共に、諾威の文壇に重きをなしてゐたビョルンソン Björnsterne Björnson は、斯う答へてゐる——

私は宗教觀念乃至宗教情緒が、壊滅に瀕してゐるとも思ふし、發展の路を進んでゐるとも思ふ。

世界の起源と發展、人類の發生と初期に關してこれまで懷かれてゐた觀念、すなはち宗教上の方式と云ふ方式を基礎にしてゐる觀念は、科學上の

ために妨げられないやうな一つの觀念を指して、足を運ぶのではない。前方にあつて私たちを招く宗教觀念は、教義信條が大部分を占めては居りながらも、人間の睿智と教義信條との關係が、方式を超越して神秘の裡に没入しつゝ、そこに愛と力と行爲となすに足る生命とを酌みとるやうな、いさゝとした信仰の關係となるとも云ふべき觀念である。

ついで露のドミトリイ・メレジコフスキイ Dmitry Merejkovsky の説を聴かう——

現代に於ける宗教觀念の壊滅は、たゞ皮相に過ぎない。革命の氣振を示す發展的過程の無上なる緊張、これが現代の相である。將來の宗教革命は、基督教の發生當時に於いて遂行された革命と、其の歩調を一にするものであらう。

一切の發展は、三つの客觀的時機を經過する、そして此の時機は、辯證的展開の三つの主觀的時機と相照應するものである。はじめには、原本的な完全な低級な合一があり、反對原則の混亂があ

り、ついで斯かる原則の分離が行はれ、差別が生まれ、最後にかゝる原則は究極の融合に達し、全く一體となつて、發展の高い標式を作りだす。かくて前提があり、對偶があり、綜合がある。

人類の宗教的革命的三時機は、かゝる辯證的乃至生物的開展の三時機と、符節を合するものである。

基督教以前のあらゆる宗教は、偶像禮拜を事とした多神教より、猶太の一神教に至るまで、みな此の發展の初期に屬する。さういふ宗教は、神と世界と、天と地と、靈魂と物質とを差別せずに、いはゞ低級の合一を認めてゐる。宇宙すなはち自然の客觀的實在を目して、唯一の絶對だと考へてゐる。主觀と客觀、内界と外界、個人と非個人との區別を認めない。これらの宗教のうちに無意識に据ゑられてゐる根柢は、「全體」の神格化である、「全體」と「神」との間に差別を挟まない萬有神論である、すなはち全體は神のうちに在り、神は全體のうちにありと云ふ思想である、そこには移動もなければ、意識も無く、動的過程もない。

て私たちの懐く意識、この實在を愛として考へ、睿智として考ふるときに湧きたつ憧憬の念は、宗教の起源に於いて人々の胸に萌した恐怖の念を超越して、これを小兒の心に起る畏怖の思ひに形を變へたのである。それなら斯ういふ感情が今もなほ發展してゐるかと思ふと、私は或る程度までさうだと思ふ、憧憬の心として、また畏怖の念として、一步步發展しつつあると思ふ。科學の進歩は、宗教の發展と內的に結びついてゐるもので、最近年間に、たゞ私たちを取巻いて居るばかりでなく、また私たちの心に浸み込んでゐる「不可識の世界」を拓いて、その新たな風光を浮き出さしたのである。眞實を求めんとする私たちの自らなる慾念を刺激し、私たちの無力を益々強く感ぜしめて、導くともなく私たちを再び匪線の方向へ導いてゆく、人類の源の方へ導いてゆく。私たちが身の毛もよだつほどの神秘を感じるのは、私たちの物質的存在に對する時でなくて、むしろ內在の「我」に對する刹那であるが、科學はかゝる神秘の印象を通じて、宗教感情を鮮明ならしむるもので

ある。内在の我——その至高なる要求は、宇宙と人生との合理的にして明確なる想念のうちに憩ふことである。

宗教觀念もまた必然的に、宗教感情と照應して發展する。宗教の神秘的要素が、私たちにとつて常に益々眞實なものゝやうに思はれ、而かもますます測りがたいものゝやうに思はれる以上、神學的方式の不足は、ますます明らかにになり、それと同時に、信仰の義務はますます熾烈になつてくる。と云ふのは、私たちの睿智と測りがたい現實との間に横はる關係のみが、ひとり可能であるからである。信ぜんとする意思是、私たちの先天性であつて、歸するところ心を專にしないわけに行かないからである。眞理に對する私たちの本分が、私たちの悟性と想像と心の本能とに強ひられる眞理に對し、了解する事こそできないが愛する事のできる眞理に對して、露はれずにやむと云ふ事は、どうも承認し難いからである。

私たちは、科學者の夢想してゐる宗教的觀念を指して、足を運ぶのではない、道德が超自然力の

第三期に進み入り、そこに靈の宗教を味ふだけの能力がなくてはならない。

前提と對偶とは、無上の綜合的眞理、折半した兩側面である。この兩者は互に他の一半と合一せんことを望むにつれて、それぞれ眞理を含んで居る。けれども若し其の一つが他を否定して、十全なる眞理を攫んだもののやうに自認するならば、それは一つの偽りである。これは確かに基督教の場合に起こりうる偽りである。

基督教はこれまで、動的の状態をつゞけてゐた限り、その創造と展開とに力めてゐた限り、いつも無上の顯現を指して憧れてゐた、神と世界とを統一する「默示録」を指してあこがれてゐた、たとひ凡ては一つなりとも「父よ、おん身はわがうちにあり、われはおん身のうちに在り」と云ふ此の究極の綜合を指して憧れてゐた。けれども、靜的狀態が勝を占めた爲めに、基督教の歩みが留まつて、生命のない獨斷の化石ができ上つたとき、たとひ解決されずには居るものの、對立せる兩原則の永久的解決を俟つべき矛盾は、還元する事ので

きない矛盾となり、對偶は變じて二律相反^{アンタニミ}となつて了つた。こゝで二律相反と云ふのは、修道者の肅括主義^{アセチスム}を意味する、超越神の名義を假りて現象界を棄てゝ了ふ態度を意味する。靈の爲めに肉を抑制するやうな心を意味する。「天」のために「地」を咀ふが如き氣分を意味する。さうして對偶は前提との合一を思ふところでは無く、却つてそれを蕩盡し、而かもそれを滅絶して了つた。眞理の一半たる神の子の宗教は、他の一半たる天父の宗教を否定し、そして自らを十全だと信じた爲めに、遂には一つの虚偽となつて了つた。そこで、征服されはしたものゝ、いまだ敗滅に歸してゐなかつた眞理の一半は、起つて他の一半に反抗し、抑制されはしたものゝ、いまだ絶滅して居なかつた前提は、起つて對偶と争ひ、地は天に對して、世界は神に對して、鎚を削る事となつた。この反抗はいはゆる邪教徒の復興で、十五世紀よりこのかた、現代に至るまで續いてきて、今日基督教に反對する教化事業のうちに渦まいてゐる、藝術、科學、哲學、その他革命の兆ある政治的社會生活のうちに

それは非個人的な唯一の絶對として見た天父のあらはれてある。特殊であり、主觀的であり、個人的である一切の實在は、天父のために吸ひ取られてゐる。

第二の時機は即ち基督教で、原始時代の全的合一の分裂と共に、そこに差別があらはれ、主と客と、個人と非個人とは、互に對立するやうになつた。絶對我と、個性と、基督を化身とする神の子の顯現が、すなはち基督教である。

基督教以前の宗教と云ふ宗教の考によると、神の王國は此の世界である、だから宇宙神の思想である。けれども基督の王國は、この世界ではない。現象界と超越界、地の世界と天の世界、物質界と精神界と云つたやうに、基督教に依つて初めて、世界は二つの階級に分かれたるやうになつた。「我と父は一なり」といふ此の二階級の至高なる融合が、すなはち基督教の規矩標準である。しかしながら、この融合合一は「わが神よ、我が神よ、何ぞ我を棄てたまひつるか」と云ふ此の終りの分離が遂行されて後、はじめて可能であつた。差別のあ

らゆる階級を過ぎたと云ふ此の條件があつて初めて、終局の全體把握は行はれうる。

第三すなはち終の時機は、今すてに其の兆を見るのであるが、とりも直さず靈の顯現であつて、これこそ將來、神の子と天父との顯現を合一するものであらう。

反基督教は前提である、基督教は對偶である、さうして、靈の宗教は綜合であらう。

第一聖約書は、世界に於ける神の顯現である。第二聖約書すなはち、神の子の聖約書は、人間に於ける神の顯現である、すなはち神人の顯現である。第三聖約書は、人類に於ける神の顯現である。すなはち神としての人類の顯現である。

天父の化身は、宇宙のうちに含まれてゐる。神の子の化身は、神語ゴーズのうちに含まれてゐる。それならば、靈の化身は神語と宇宙との至高なる合一境に含まれてゐるであらう、個體的にして而かも全的な唯一の實在——神としての人類——の裡に含まれてゐるであらう。

世界は第二期を脱し、神の子の宗教を離れて、

て、宗教は通神説とか隱密學とか云ふやうな名に蔽はれながら歸つてきた。……………がしかし、名稱は事象そのものに變化を來たさなかつた。

たとひ佛蘭西で教會堂が閉されてゐるにしても、それは宗教の衰頹を意味するのではなくて、むしろ形式の壞滅を意味する。鑄鐵を作りだした鑄型は、將來碎かれて行くであらう、さうして、各人の信仰告白が、それぞれ鑄鐵の持ちまへを占めるやうになれば、將來の唯一無二の宗教は、一つの臺の上に据ゑられて、其の周圍に凡べての國民が集まり得る事となるであらう。

宗教的發展が目的に向つて進む步調は、斯くの如くであるやうに思はれる。すなはち「教理もなく神學もなき」一元的の信仰表白である——だから宗教は、壞滅を経て發展の路に向ふ。

なほ以上のほかに、回答中にはエミール・エル
アレン Emile Verhaeren ルネ・バザン René Bazin
モオリス・バレス Maurice Barrèsなどを始め、美術家側には、モオリス・ドニイ Maurice Denis フ
エリイ J. Raillaill グラッセ E. Grasset などの名が見えて居り、音楽家側には、カミイユ・サン・サ
ンヌ Camille Saint-Saëns ヴァンサン・ダンディ Vincent D'Indy などの名が連ねられてゐて、こゝに紹介するに足る意見が無いではないが、あまり長くもなるし、それに諸家の意見全體を一まとめにした紹介なり批評なりを書く希望もあるので、それら凡べてを後日に譲つて、ひとまづ茲に筆を擱く。

普く渦まいてゐる。

現代世界の相たる無神論は、事實上に於いて神との争闘である。ヤコブは夢のうちで神と争つたが、神はヤコブの勝てないのを見て取つて、「夜明けんとすれば我を去らしめよ」と云つた。けれどもヤコブは、これに答へて、「汝われを祝せずば去らしめず」と云つた。この聖い争のために、神はあらゆる人間の子以上にヤコブを愛して、神と争ふ人と云ふ意味で、イスラエルの名をヤコブに與へた。これと同じやうに、現代の人類は、たとひ無意識ではあつても、夢の中で神と争つてゐる。そして此のたびは、争ひの相手かもはや天父ではなくて、むしろ神の子である、基督である。けれども此の事はやがて、たとひ奇異の感はあるとしても、基督と争ふ現代の無神論者が、現今の基督教徒以上に、基督に接近してゐる所以である。かれら無神論者は、基督の顔をも見ず名をも知らずして、しかも基督を争闘の渦中に引き入れてゐる。基督に接觸し、基督と合一して居るのである。基督は世界を制しかねて、斯う云ふであらう——「夜明

けんとすれば我を去らしめよ」と。すると世界はこれに應じて、「汝われを祝せずば去らしめず」と云ふであらう。斯くて基督は、新しき曙と、靈の顯現と、第三聖約書を提げたる世界に祝福を灑ぐであらう、そして人類に對して、「神の子」の新しき名を與へるであらう、人類神と云ふ新しき名を與へるであらう。

一切を其の核心まで刳り通さなければやまないと云つたやうな筆つきで、現代人の苦悶と絶叫とを舞臺上に浚けだした瑞典のアウトグスト・ストリンドベルグ *Auguste Strindberg* は、近代社會生活の凄まじい變革のために、宗教の觀念も感情も、一たび絶々になつた事を書いた後、次のやうな意味の觀察を下してゐる——

千八百九十年ごろ、新たな曙の色が、地平線に現はれてきた。かくて宗教感情は再び人間の心に滲みだしたが、其の形式は、もはや決して昔のまゝで無かつた。一方では古昔の智書が發掘され、また一方では、エダンタ教や佛教が歐洲に侵入し

きたんだ、恐ろしく高ぶつてきたんだ……でも何故あんなに小言を云ふのか一寸でも解れば、俺だつて何とか……とにかく俺は彼女に對して何うしたのだらう、何ひとつだつて仕向けた事も無いではないか……そんな事は何うでも、俺は今までに無かつたあんな惡口雜言を其のまゝにして置いてはならん……さうだ、きつと階上へ行つたに違ひないのだから、これから行つて……（遠ざかる馬車の音）えゝ？……（身を投げるがごとく窓に走りよりて戸をひらきながら）なに！……いや、そんな事ができるものか……あの女に何うして夫と小供が棄てゝ行かれやう！バチスタン！馬車に馬を！バチ……（はたと額を抑へて留まり）あゝ何うしたら可いだらう……もう遅い……あゝ、今夜彼奴共を部屋へ下らせたのは、彼女だつたのだ、そして自分で車を呼んできたのだ、馬鹿め……彼女は到頭……俺は……俺は息がつまる。（はげしく襟飾を取り去る）胸が切ない、襟飾を取り去つても駄目だ、呼吸をする事もできない、あゝ身體が熱い！俺はこれほど感情が鋭いとは思はなかつた！行つてしまつた……行つてしまつたのだ……が最早かうなつては串戯どころの騒ぎでない！（机に近き脇掛椅子に身を落す）何とした事だらう、して見ると、今の女は娘や夫を捨てゝ夢を見に行くんだな……（沈黙）——あゝ、この道具……これが彼女の握つてゐたペンだ……あれには彼女が置いて行つた時計がある……これには指環が残してある……彼女が俺を娘と一所に置きざりにして行くとは何うしても考へられない——では眞實に行つてしまつたのか知ら？でもそれは無法な仕打だ、でしがたい事だ！……（立ち上りて大跨に歩む）いや！歸つて來はしまひ、決して歸りはしまひ、手に合はない性質の女だから……俺には今はじめあの女が解りかけた。わかつて見れば俺はひとりになつてゐる。彼女は前からみんな見ぬいてゐた……俺はもう……（聲をあげて室の一隅なる椅子に腰を卸す）あゝ、この壁と壁！何で飾氣のな



反抗

(つじき)

内藤

濯譯

人物

主人フエリツクス (三十五歳)

妻 エリザベエト (二十五歳)

處

巴里

時

近代

第二景

主人 (冷やかに、かつ蔑むがごとき怒氣を含みて) 俺を嚇^{おど}かすつもりだな、でも娘は置いて行かなからう……
俺はあまり勘忍^{かんにん}が過ぎたのだ、さうだ、此方^{こつち}から嚇^{おど}しつけてやればよかつたのだ。彼女^{あれ}は俺が追驅^{おいつ}けて行くとても思つてゐるのだらうが……そんな馬鹿げた真似^{まね}ができるものか!——それはとにかく
彼女^{あれ}は此頃^{あれ}あれが晝飯^{ひるめ}の後で晝寝^{ひるね}をしてゐる間に、新聞の三面記事を読みすぎたのだ。だから彼
女^あは此のごろのやうに變^{へん}な様子ばかり見せてゐたのだ。どうせ女の事だから、急に神経が高ぶつて

のやうに思つてゐた。一寸のあひだ、わたしは思ひあこがれてゐる國々の娛樂を、いかにも大袈裟にし過ぎたと思つた……わたしは車の輪の響を聞くのが辛かつた、そして何か知ら心に隠さうとしてゐるやうな氣がした。わたしには妾の誇まで無くなつて、たゞ寂しさに胸が轟くばかりだつた。さう思つたとほり、何うかすると妾は身體を惡くしたのかも知れない、きつと今度の破綻のために逆上げたのだらう。でも以前は、身體を惡くしても信仰は少しも變らなかつたのだから、そんな事になつたのでは決して無い。妾は悶えきつてゐたのだ、心の底まで力を失くしてゐたのだ、氣が弱りきつて何うしてよいのか分からなくなつてゐたのだ……妾もやはり他の女たちと變らなくなつてゐたのか……取り返しをつかない者のやうになつたかと思ふと、それは最早一時だけの事でなくて、奥のふかい事になつてゐた。そして一分ごとに、百年の月日がいくども流れ過ぎた。と思ふと、わたしの月日は明日になり、明後日になり、八日の後になり、三ヶ月の後になつて、妾は望み求めた寂寞の奥底で、たゞひとり涙を流してゐた——そして弛みきつてゐた昔の生活を何だか懐しく思つたやうだつた。(物思はしげに眩つく荆棘が車の窓硝子をたゞいてゐた、通つてゆく森の樹立のうへには、空が輝いてゐた、さう、空は輝いてゐたけれども、その空は妾にはとても達けさうに思はれなかつた。妾には最早、その空を高く益になるやうに……効のあるやうに眺めるだけの眼がないやうだつた——何て恐い事だらう！人生の聖い息が妾を吹きめぐつて居ることは、能く分かつてゐたけれども妾には何の感じもなく其の音を聽いてゐた。その息がこの身體に沁み込んでも、妾はもうそれを感じずにゐた……世の中を忘れやうと一圖に渴き求める心も、もう感じられなくなつたし、また昔のやうに、けだいほど思ひを凝らすこともできなくなつた……この世の眞底で生さる爲めには、何

い室^{へや}なんだらう。俺はちつともこれまでそれに氣がつかないてゐた。(迷へるがごとき様子にて、聲低く途ざれとぎれに) 小さい家、冬の風、沈黙^{ちんもく}、いつも、孤獨^{こどく}——孤獨^{こどく}!……俺は何うだ……(身をそらせ)、おい誰か手を假してくれ!……俺は何うしたのか解りかねる……何ひとつ持つて居ないのに、まるで地獄だ。何だか俺は水に溺れてゐるやうだ! 何だか身體^{からだ}をもぎ取られたやうだ! エリザベト!……エリ……(狂人のごとく腕を擴げ、よろめきながら數歩をなし、戸口の傍なる肱掛椅子に倒れかゝる) 俺にはできない……だが大變に苦しい……ひどく……(氣絶す)

無言の場

戸口の上なる掛時計、午前一時を告ぐ。オルゴールの憂鬱なる樂聲。つゞいて可なり永き沈黙をはさみて、二時より二時半、二時半より三時、三時より三時半、三時半より遂に四時を告ぐ。主人は氣絶せるまゝにてあり。曉の色硝子窓を洩れ、蝸の光消ゆ。蠟皿おのづから碎け、火青白む。

奥の戸はげしく再び開かれ、妻は恐ろしきばかり色を蒼さめ、戦きながら入り来る。口には手布を當つ。夫の姿を見ずして、暖爐に近き大いなる肱掛椅子の方へ徐ろに歩を運ぶ。帽子を投げすて、兩手を額に當て、眼を据ゑて倒るゝがごとく坐し、低き聲にて讒語しはじむ。寒げに齒の根も合はず打ち戦く。

第三景

妻。(凍えたるが如く獨語す) 遅すぎた、妾^{わたし}にはもう魂^{たましひ}がない——夜の景色はどんなであらうかと、馬車の硝子窓^{がらすまど}ごしに外を眺めやうと思つたとき、妾の胸は自由に憧れ、悲しみで一抔^{いっはら}になつて、ひき立つては居ただけけれども、妾は何だか島流しにでもされるやうな冷たさに慄へて、自分の身體^{からだ}を鉛の鎖

になつて了つた——なぜ妾は逃げるのだらう？——此處だつても他の處だつても、眠るのには少しも變りがないでは無いか知ら？……でも何故こゝへ歸つて來たのだらう……あゝさうだつた……何處へ行くのか分からなかつたのだ、朝の寒さに堪まらなくなつて歸つてきたのだ、ほんとにさうだつた。(ながき沈黙)もう一つ何とかしなくてはならない事がある。娘を連れてゆくことなんだが……妾は難船した女のやうに娘に縋りついて生れ變つたらどんなだらう。どんな不愉快な事にでも、どんな厭な事にでも、耐へる事のできる頑丈な女に娘を育てたらどんなだらう。でもそれには、娘を連れて此處からさつさと出て行かなくてはならない、世間並の人たちのやうに、きつぱりと引き受けなくてはならない……(苦笑す)——まあ何てことだらう……妾には自分の行末の重荷で娘を困らせる資格があるのか知ら？……(言葉どよみて沈黙) そんな事はいけない——そんな事はしたくも無いし、出來もしない！——掟には従つてこそ掟が凌げる、このやうな氣苦勞はせずにもやう、死ぬる間際に身を咎めるやうな煙みたいな事はせずにもやう。わたしは妾の命をとつた不運な人からめられてゐる、生きてゐる女は死んだ男につかまつてゐる……妾のゐる所はたしかに此處だ！こゝには出て行けさうな道もない、わたしは此處に居なくてはならない——力が無いのに、これから大きい所もない寂しさをさして逃げて行くのは、つまらないほど卑怯なのかも知れない、妾はできるだけ心を入れて娘を育てやう、そして明日からもう一度もとの生涯にたち返らう。何もかも潰されてしまつた！試験に會つて敗をとつて了つたのだ！(沈黙)斯うなつては最早、苛立つ事も無ければ耻辱もない！碎かれた此の胸が開かずにもて欲しい、この胸が作られたのは、勇ましい人間を生み落すため、救ひの人を生み落すためでは無かつたか知ら？……自由の道連の情ふかい頭を靜めるためでは

ういふ風に事柄を眺めたらよいか、何うしていつまでも人間の嘲笑を聞かずにゐたらよいか、さういふ方法は最早思ひだせなくなつて了つた、もう斯うなつては何もかも駄目……（沈黙）あゝ、妾には神様が見える！でも最早遅い！身の代を拂ふにしたところで、土地を踏む以上は罪をうける。妾はあまり心をゆるし過ぎた。世間の人達のやうに、日々の糧の價を大きく考へすぎた。（眼を拭きながら）いえ、わたしの若い月日は此の墓のなかに埋められて、その若かつた頃の眼も今では無くなつてゐる。酔心地になるやうな事も、今ではもう出来さうにも無い。もう妾には「藝術」のあこがれも「無言」の慰めも解らなくなつた。あの人はまるで水を飲むやうに、妾の美しさと云ふ美しさを飲みつくして了つた。妾の心には氣力と云ふ氣力が皆盡されて了つた。短い生涯のうちの四年間、妾はあの人に負かされてゐたのだが、その間に精神の力は壓へつけられて、そのうへ氣力も減らされて了つた、もう斯うなつては取返しがつかない！妾は生きたいと云ふ事を鼻にかけたが、もうそれも出来ない。わたしは一度も遙かな光を見たことの無い女達と同じやうになつて了つた……もう仕方がない、妾はもうあの残酷な人をうるさいとは思はない、あの人が生きてゐても死んでゐても、打ちすへた妾の心は少しも變らなからう。わたしの魂を毒と闇とで充滿にしたのは、あの人のたえず莞爾した顔だつた……妾の心をつぶしたのは、あの人の使ふ勘定數字だつた。あの人がたとひ生きてゐやうと死んで行かうと、わたしは他のものにはなれない……斯んなになつたのより他には……わたしの世の中は今日から空虚なのだ……——妾は氣が狂つてもゐないし、身體を悪くしてもゐないんだけど、何だかはてしない退屈に取りつかれてゐるやう、そして其の退屈は女といふ女を妾と同じやうに罪に落して、つまるところ何時までも手を退かないのだらう——遂々なるやう

「そして、此の世の中に「詩」といふものがある限り、正直な人間に安全な月日が送れないことが、俺達ふたりにはつきり分かつた。

妻。(やさしく微笑して 半期決算の際に貴方を捨て、行くと申すなんて……とにかく常識があつての事ではなかつたのですねえ……)

主人。(喜ばしく) さうだ左様だ……ほんとにさうだよ……その言葉こそお前の心がすつかり癒くなつた證據だ。さ、手をあだし、仲直りをしやう——この氣持のいゝ現實に向き合つてゐて夢が何うなる！

——詩——さう……——急性の病氣さ——俺にだつて分るさ……これでも其の病氣に罹つた事があるんだから。(妻の手を取る。妻は少しくよろめく、明らかに疲勞のためなり——主人は心より可愛げに妻を見る——絶えず微笑せる妻は、困じはてたれども喜ばしきさま——主人は妻の手を接吻したる後、側を向きて目を瞬きながら) まあ可い、少し

は虐めたつて構はない！(もとの調子にて) ねえ俺は意地の悪い人間でなからう……(妻の手を接吻す。しばらく沈黙。妻は脇掛椅子の傍に立ちてあり——再び無言となれども、其のさま主人には見えす——妻は恐ろしき思ひにうち沈めるさま)。

妻。(主人のうへに身を傾け、重々しく靜かなる聲にて) ほんとにお氣の毒な方！……(深き憐憫と憂愁とをもて夫を見る)

——幕——

無かつたか知ら？でもそれは最早、益に立たなくなつたやうだ、この屋根の下に住んでゐるのがわたしの義務らしい、禮義らしい、威光らしい！（しばらくして）あゝ、何うでもないんだけど、それでも矢張胸がつぶれる！（立ち上りて）それでは！（姿見の前にて身容を整へ、旅行用の上衣をぬぎすて、再び第一景の初めのやうなる姿となる）あゝ！寒い青ざめた曉だこと！（周囲を見まはす）此の室を出て行つてから、何だか幾年も経つたやうだわ……（おのれと机との間を徐るに通り、ランプの傍に行きて、その火を明らめ、再び簿記帳をひらきて、更に甲斐絹の袖衣を着く）一生のうちの數時間は、別離と云ふ別離の時をつき鳴らしてゐるわ……さあ仕事を始めませう（開幕のときと同じき姿勢にて座につきペンを取る）

主人。（おのれに返り、呆然として妻を見やる）おまへが……お前が此處に！——でも夢では無いか知ら？……てはあの車は返してやつたのか、出ては行かなかつたんだね？……だつて……俺はもう少して死ぬところだつたよ。（ふと時を見る）午前四時……四時……（妻を見る——沈黙）あゝ分かつた！（せうら笑ひて）歸つて來ないのは馬鹿な女ばかりさ。（腕を組みて）どうだい獅子里だの匈牙利だの諾威は何うだね。いかにもさうだ、おまへは人間の義務をうちすて、空想の國へ行つてしまへると思つたのだ……想像の夢が仕事に當てはめられると思つたのだ……あんなに激昂した俺は實に譯が分らなかつた、俺は激昂せずに、『それなら戸が開いてるから、さつさと出て行け、やつて見ろ！……』とお前に云つた方がよかつたのだ。（妻は身をうごかす）何も云ふな、俺はおまへを想してやる……もう今度は出ては行かなからうな——俺はおまへに受けた煩ひを悔しいとは思はない、可い經驗になつたのだから。あんなに怒つて見ると、お前は俺の思つてゐたより必要な女である事が確かに分かつた、またお前にも、おまへが俺の會計方であるばかりでなく、俺の妻だと云ふことが確かに分かつた筈だ……

みどり葉を鳴らす風よ

わが靈を動かす君よ

さしなみを走らす風よ

わが靈に働らく君よ。

※

かげはわが靈の畑地を走り去り

見るまに山のいたゞきに登る。

光はうしほのおのづから湧くやうに

しづかにしのびの軍勢のやうに

忽ちそのうしろを追ひ

わが靈のすがたをかふるなり。

※

坂道の角をまがる時

木の間がぐれに赤白青黄などのいりまじる。

數多き洋館のいちどるく

日光をうけてかゞやけり

わが靈の眼にちらと反射して。

※

雀はわが心をつれて籠をまたぎ

井戸のかたはらの枇杷にのぼる

母は細き腕にてつるべをたぐり

やがてそれを深き桶にそぐ

血は蒼白き顔にのぼりゆき

呼吸ははげしく胸に躍る

雀はくるしみて鳴き

羽を振つてわが心を追ひ出す。

※

わが指さきのやさしき合歡の葉に觸れし時

合歡の靈はふと驚いてふるひわなゝき

かうべを垂れて死せるものゝ如くなれり

合歡の靈よ、わがこひしき少女よ

おん身のうちしをれたるさまを見んよりは

合歡の葉かげのうつる池に入りて死なんこそよ

けれ。

※

夏の夜の常盤公園——

本能と靈

佐藤 清

わが眼^めの海よ *

にござれる海、血ばしれる海

どんよりと動かざるわが眼^めの海よ

動くものとはくらくさ雲

かなしきかけ、罪のあもひで

わが靈^{れい}の空^{そら}はそのまゝこゝにうつり

暗るゝことなきかなしみに満てり。

*

わがこゝろにもあぢさゐの花が咲く

晝^{ひる}の雨、夜^{よる}の雨

むしあつさ雨、つめたき雨

みどりの雨、黄^きなる雨、あかい雨

紺青^{こんじょう}の雨、かちいろの雨

いろいろの雨のふるたびに

虹のやうにあぢさゐの花が咲く

わがこゝろにもあぢさゐの花が咲く。

*

やもめごころのやるせなさ

あのがこころのそのほかに

こころをもたぬやるせなさ

わかきみそらにめづらしく

やもめごころのそのほかに

ところをもたぬやるせなさ。

*

空^{そら}の色は海のおもてにうつり

岸の樹木はながれの上にたち

わが歩み來りし過去の道は

そのまゝ未來の鏡に映ず。

あそれとはぢ、かなしみとまどひ

罪と罰とはみなそこにあり。

*



金屋の夢

野口 せい子

山の風水をながして蚊帳を吹く我等のゆめも青に涼しき
百の花亂れて咲けり大空に行きて舞はまし夕やけの雲
空高く蜀黍の穂に立つ秋や晝の浴槽にあをぐ白雲
男泣きつよく正しき悲しみを胸にたたえてきりきりす鳴く
くるくと灯をめぐる蟲はかなしや甲斐なきことに泣く心あり
父の夢母の夢などよく續くはかなき涙うき彫に似る
新しき女ならねど縫針のうつむき勝ちの日は味氣なし
はしたなくまうけし傷に我が足の自我が泣きでて痛む指ささ
思はずてかかる苦行の日もつみぬ物のはづみに剝ぎし生爪
水の音家をめぐれば我夏の晝寢の夢を金屋に見る

十二時の鍾鳴れば星かげ空にかき消えて

暗き空はおもく音なき洪水のやうに垂れさがり

湖水は急に底をぬかれしやうに沈みゆく

しげりあふ萩のしづく、芝生のしづく

ふめば靴の底につめたくとほりつゝ

かしらはやゝ貧血を感じて髪にちからなし

とほくのほうに見ゆる杉の木立も

にわかにわが目の前にうかびいづ

いづくともなく動揺するほのじろき光よ

湖水のかなたになほ眠らざる電燈よ

音のみして容易に近づかざる汽車のあかりよ：

*

われらのゆくすへは知りがたく

はかりがたくたのみがたし

たゞわれらの知るところ

はかるところたのむところは

われら互の靈にほりあてしものばかり

たがひの靈のはなれざらんために

かたく肉をむすばんと願ふは本能

本能の命にさからふとき

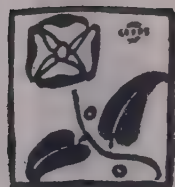
靈も肉とともに離れん

われらのゆくすへは知りがたく

はかりがたくたのみがたし

たゞ今はたゞわれらの靈のいきのうちに

のぞみと愛とよるこびをうくるなり。



黎明

— LES AUBES —
エミール・ゾルアーレン作

吉田 絃二郎 譯

第一幕

第一景 (つゞき)

この幕に現るゝ主なる人物。

群集——労働者、乞丐、百姓、兵卒、女、老人、子供等。

ジャック・エレニアン

一人の將軍

一人の士官

村の豫言者

一人の老人へ立ち停つてビエル・エレニアンを指しながら。あつ死人！そしてエレニアンが棺臺の後から痕いて！

他の一人。そしてまあこの群集は？

他の一人。村側の衆が、こぞツてオツピドマアニユに押し蒐けるさうな。

夏空の思ひ出

藤井夏人

とめどもなくひろびろと

はてしもなきおほぞらに

漂々と流るる雲のおもしろや

しかすがに、よりところなきあめつちの

うちそとをおもへば徒らに^{いやす}

こころもとなく寂しきおもひのするものかな。

地をながめ、空をながめ

さらさらとそよぐ白樺の葉に

ゆきなやむ夏の光りをながめては

あかしくも眩惑のおどろきにおびえたり。

むらさきの夢におもひつめたる戀ごころ、

やすらふ平安の陰だになければ

はからずも、御身が心の扉のかげを

せめてものねがひにわが家とはなしたるなり。

身ひとつに心まかせてあゆみしを

過ちとおもひてに工はあらざりしなり。

まして罪などとおもひし心なし。

事のはてのなりゆきは、見果てし夢の曉に

ただわがこのろのみぞしる。

はてしもなき大空に流るる雲のおもしろや。

一人の老人。私等にはてきませぬ。

一人の百姓。同じ死ぬんなら、まだ私等の家で死んだ方が。

(乞丐、老人、若干の百姓のみを残して、その他の人々はエレニアンに寝いて行く。葬ひの列が除かに隠れ行く)。

一人の老人。この存亡の刹那に、エレニアンこそ堅固な、豪毅な男といふ、たつた一人の男だ。結局、

彼れ等はエレニアンを歓迎するだらうよ。

他の男。エレニアンに寝いて行つた奴等は、恐らく殺されるだらうて。

他の男。(村の方を向いて)あれを見い。敵が戦争の原理を教へて呉れるわ。敵は彼れ等を取り圍む、彼れ

等を展開する、彼れ等を支配する、彼れ等に殺到する。(?)

他の男。それで一と度あの村が滅びれば、彼れ等は、町といふ町を破壊するだらう。

町の老人(他の人々より老ひたる)おう、あの町々！ あの町々！

そしてあの町々の騷擾とあの町々の叫び聲

そして彼れ等の凄ましい狂暴と、彼れ等の暴慢な態度

人類の同胞に對してのあの態度。

あゝあの町々！ そして大空に燃え上る彼れ等の憤恚、

そして彼等の最も恐るべき、最も獸性の、見世物、

そして彼等の舊い罪惡の株式市場、

そして彼等の忌々しい店舗、

そこには、黄金の葡萄の結節の一つ一つに、

他の一人。彼れ等はオツビドマアニユで觀迎されるとても考へてゐるのだらうか？（エレニアンを呼びかけて）

エレニアン！ エレニアン！

エレニアン。私を呼ぶのは誰だ？

その老人。オツビドマアニユは城壁のなかに閉ぢ籠ッて了ひました。それで平原の無宿者や、死人やらを、お城の中に送り込むことは允しますまいよ！

エレニアン。私は、私の家に歸るのだ。私は父親を失くしたのだ。私は自身、彼れを埋めたいのだ、彼れの神聖な遺骸の、掠奪と褻瀆とを防ぐ爲めに。

その老人。彼れ等は彈丸を浴せて、お前さまを追ひ歸すてがせうよ、彼れ等は防禦の加勢人でないと見てとつたが最期、誰だらうと叩き出して了ひますのぢや。

他の老人。彼れ等は橋梁といふ橋梁を爆發さしてゐますのぢや。壘壁といふ壘壁には逆立つた鋼毛のやうに、守備兵が突つ起つてゐますのぢや。

他の一人。既うあの市は、誰を追つ放り出すんだか、誰れだ彼れだといふ見境も失つてゐますのぢや。誰もあなたさまを、あなたさまと認めも致しますまいに。

他の一人。あちらにお出てなさるなんて、まるで、狂氣の沙汰でございまする。

他の一人。それでは、あなたさまのお生命を失くするやうなことになるまする。

他の一人。（切願的に）私等と一緒にお待ち下さい、私等と一緒に。あなたは私等を救ふて下さる筈でございませう。

エレニアン。私は誓つてオツビドマアニユに入城する。お前等疑ふならば、私に痕け。

(村の豫言者、しつきりなしに左右に歩きながら、豫言する)

その豫言者。 來ねばならなかつた、「その時」^{とき}が到頭^{たうとう}來た、

「その時」には長いこと、凡べての眼の反射鏡であつた町が、

——全世界の眼といふ眼を

反射してゐたあの不思議な反射鏡が、——

その追憶の光榮を微塵にするのぢや。

オツビドマアニユよ!

お前の波戸場、圓柱、橋梁、お前の凱旋門をもつて、

あれを見い、お前の傲慢に逆ふて

あの凡べての地平線が進軍してゐる!

オツビドマアニユよ!

お前の塔、紀念碑、鐘樓をもつて、遠くそして廣く、

あれを見い、お前の壁といふ壁に描^かかれた焰の血汐のなかに

葬^{とむ}ひの合圖と保證とを見い!

オツビドマアニユよ! 今は「その時」なのだ

百千の原因があるのぢや、恰度一ツの死骸に喰ひ込むだ百千のうぢ、蟲があるやうになあ。ところが仕合せなことには、何時の世にもキリストさまが、——最も遠い遠いところにだかな、——地平線の上においでなさるのぢや、

一人の百姓。 オツビドマアニユは聞まれてゐる、まだぐたんこの上にも聞まれやうとしてゐるのぢや。

その老人。 彼れ等が羅馬で爲たやうに、群集がアエンチンの丘を作つたのぢや。

他の男。 あの墮落した民族のお仲間入りをするなんて、まあ何てあさましいことだらう、

彼れ等の道徳と、彼れ等が吹聴する放縱とが

この大地の眞實の理性を脅かしてゐる。

今、大空の中の雷鳴の刹那に、

問題の決りをつけることは爲ないで、

今到頭平凡の力のなから力を索ね出さう爲めに、

散りくばらぐになつて倒れる、だどッぴろに廣がる、やがて廢滅して消える。？、

ためらはぬ光明といふ光明は最うないのか、

あゝ、最う公理といふ公理はないのか、

最う吾々には强健な手はないのか、

吾々のこの薄弱な意志の狼狽者の群を撻つやうな？

さあ、そこには最う男といふ男はないのか？

をしてゐる。偵察兵が斜面や城壁に登つて警戒してゐる。一人の將軍が、双眼鏡を手にして、地平線上を視察してゐる、彼れは靜かに現狀を注視してゐる。その時一人の傳令が駆け着ける、そしてこの騎兵隊を指揮してゐる一士官に一の命令書を傳達する士官（朗讀する）『何人たりとも市内へ通過せしむることを禁ず、但し護民官ジャック・エレニアンを除く。彼れに對しては鄭重なる恩典を盡されんことを切望す。公然の儀禮は無論相協はざるものとす。（花押）オツビトマアニュ代理官。』

（大通りからエレニアンが現はれる、その後から襤褸の男、婦人、労働者、百姓、それに老人等續いて登場。入城が面倒らしいのを見てとつた彼れは、つか／＼と自分一人でかの士官の側に進む）。

エレニアン。私の名は已に御存じの筈だ。オツビトマアニュは私が成長した町なのだ、苦悶した處なのだ、私の理想の爲めに戦ふた所なのだ、人間が耐え能ふ最大の戦に戦ふた所なのだ。私は難攻不落だと想ふた時にオツビトマアニュを愛したのだ、今日となつては、私は彼の女（オツビトマアニュ）の爲めに討死する人々の間に、その一人として私の立ち場を置きたいのだ。そして私はまた、そのやうなことを、こゝにゐる凡べての人々に向つても望むのだ、私が途中で邂逅つたかぎりの人々に望むのだ。私に痕いて來いと言つて、彼れ等を伴れて來たのは私だ。臆病風に吹きなやまされてゐた大水を、勇氣の方へと引き戻したのは私だつた。

士官。お前が誰だといふことは俺にも解つてゐる。だがさ、俺は命令に違反する譯には行かぬ。

あらゆる運命に隨へる事象が砂にまで零碎くだかれる刹那ときだ。

もし踟躕ためちうことがないならば、

今日こそ、

或る偉大な男おとこが彼れの手を突き出す刹那ときなのだ！

一人の老人。

あう、そしてそれは誰たれなのぢや、何なんと言つて彼れの名を呼びかけたら宜いいのぢや、そして私等わしちの間で誰たれが眞まつ先さききに、彼れに額ぬかつくのぢや！

その豫言者。

私等わしちが待つてゐるその男おとこは

それは／＼は偉大なのぢや、

お前等まへらの凡すべてが彼れに向つて起たち上あがらなければならぬ、恐らく

寔じつにこれこそ、

彼れであるといふことをお前等が知つたなら、さうせずには居をれまい。

一人の老人。彼れはまだ生れてゐない。

他の男。誰だつて彼れを想像することができるものか。

他の男。誰だつて彼れを言ひ觸ふらさない。

他の男。それではジャック・エレニアンか？

他の男。ジャック・エレニアンか？ 彼れは狂人きやうじんだよ！

第 一 景

暮が明かのと、騎兵の哨兵線かオツビドマアニニに通ずる門を阻止してゐる。兵卒等は、その河に架けられた橋梁の下を掘り覆す準備

その私ですら彼の女から訣れなければならぬのか、まるで獵り立てられた野獸のやうに！

一ツの命令！でもそれは人一人を滅すところの命令だ。君は人の悲哀が無限であるのに、守兵の限りある數を恃みにするのか？ 君は生命にかけても、同じ危険に結び合はされてゐるそれ等の

々を隔てやうといふのか？ 何うか、みんなの爲めに道を開いて下され。

士官。 ならぬ。

(エレニアンは父の遺骸に近寄つて、その頭と兩肩から覆を取り除く。)

エレニアン。 二十年の間、これはその城の軍人であつた。

彼れは全世界の上に立つて、君等の指揮官であつた、

彼れは極地に、砂漠に、または海上に戦つた。

三度彼れは涯から涯と歐羅巴を横切つた

狂躍つた軍旗と、金色の荒鷲と、大きな光明のものの凄雲のなかに！

君は彼れに向つて、オツピドマアニュの城門を鎖すのか！

士官。 みんなだ、お前と一緒の者は。

エレニアン。 うむ、それでは、最も純潔な最も簡明な、最も永劫的な律法の名によつて、私は、君を男

子として、君の名譽にかけてお願ひをするのだ。日ならずしてこの平原が荒廢し、腐爛し、血汐に

浸さるゝだらう。君等はたゞ一言云へば充分なのだ、それで私等の生命——私等は誰も生命に對し

て權利を有つてゐるが——その生命が救はれるのだ。人間が人間に負ふその救済を、武器に頼る君

等は、先づ第一に私等に負ふてゐるのだ。この義務は凡べての他の義務を壓し除けて了うのだ。軍

エレニアン。その命令といふのは？

士官。衛門の守備。(と言つて、町の門を指す。)

エレニアン。それでは何んだ、このオツビトマアニユは、

この恐ろしい存亡の刹那に

山のやうな呻哭と恐怖がその誇りの上に壓し冠さる刹那に

たゞ埒もない、小ひさな命令の言葉の爲めに、

その門口で鎖すのか

その扉口で鎖すのか

彼れ等の血、彼れ等の心情をば鎖すのか

オツビトマアニに運んで來る人々と、彼れ等のあらゆる愛のうちで、最も強烈な焔をば扉の外に

鎖すのか。

私は、幾度と夜の時を、あの濱沿ひに出て、

海を眺めた

そののなかに恐ろしい、そして自由な世界が壓し込められて、そして投げ出されるのを眺めた、

彼の女を愛する私、彼の女が悪いにせよ良ひにせよ、

己れから不思議と思ふまで彼の女を愛する私、眞個盲目的に彼の女を愛する私、

まるで、彼の女の子供でもあるやうに、しかも戀人でもあるやうに燃えてゐる私、

(群集を指し)

そして凡べて私に痕いて來たこれ等の人々、老人、子供、婦人、彼れ等はみな家に歸らねばならぬ、彼等はまた、なくてはならぬものなのだ。そしてあなたは、お父さん、あなたはあの墓場にお息みなさらなければなりません、そこには既うから私の二人の子供達が眠つてゐます。

(將軍は一言をも發せぬ。兵士の列が開く。ジャック・エレニアンと若干の勞働者が町に入る。しかしそれと同時に、士官の命令によつて、列が再び閉ぢられる。ピエル・エレニアンの屍、門衛、老人、百姓、婦人、子供等は突き出される。更に新たな軍隊が駈けて附けて援助を與へる。ジャック・エレニアンは驚いて、再び城外へ出てやうと試みる。「卑劣」「嘘ッ附き」「耻知らず」と叫ぶやうな彼れの聲が聞かれる。それでも喧騒が彼れの聲を消して了う。彼れは手荒に町のなかへ引き込まれる。そして咆へ狂ふた群集は平原の方へ驅逐せられる。)(第一幕了り)(譯者言ふ、文中(？)の記號あるは原文の意不明のところ)

■エルアーレンの主なる著作■

詩集

フランドル風物詩(一八八三)——僧侶(一八八五)——夕暮(一八八七)——

落魄(一八八八)——黒き炬火(一八九一)——路傍にて(——一八九一)——途

上顯現(——一八九一)——幻覺の田園(——一八九三)——妖はしき村々(一八九五)

——觸手あ都會(一八九五)明かなる時(一八九六)——生のおもかげ(一八九九)——

騷擾の力(一九〇二)さまざまなる光(一九〇六)——至上の節奏(一九一〇)

戯曲

黎明(四幕・一八九八)——僧院(四幕・一九〇〇)——フィリップ二世(三

幕・一九〇一)

雜著

眞夜中物語(散文・一八八五)——畫家ジョゼフ・エイマンス)批評・一八八

五)フェルナン・クノツプ論(一八八七)——

隊や暗號といふ名前さへ、知られなかつた時代もあつたてはないか。

士官。 歸れ、歸れ。

エレニアン。(彼れは彼れに痕いてゐる群集の方を眺め、兵士等を一瞥して、その數を算へる。そして彼れの父の遺骸に近寄る。)

あゝ氣の毒なことだが、彼れの葬式の神聖を、血をもつて瀆さねばならぬのか。

(この刹那に、今まで城壁の上から、この光景を眺めてゐた將軍は、つか／＼と士官の傍に近寄る。)

エレニアン。(群集に) 私はあらゆる手段を盡した、今ではたゞ一つの手段が遺つてゐるばかりだ。私等の味方は千人もゐよう、そして、彼れ等は、ほんの少數だ(兵士等を指して)。彼れ等の或者は、お前等の間に、父親やまた倅を有つてゐる。彼れ等は私等の味方である。彼れ等は私等を通して呉れるに違ひない。さあ婦人達を眞ッ先に進ませえ。まさか婦人を射撃は爲まい。

(單身にて進む、その間群集は列を整へる。兵士等に面して)

お前等を指揮する彼れは、お前等に罪惡を犯せと命令するのだ。彼れに背け。權利はお前等のものだ。

(既に將軍は士官の側に寄り添ふて、彼の士官を叱責する。「馬鹿ツ」「阿呆」といふ言葉が洩れて聞える。將軍は急いでエレニアンの前に進み、彼れに會釋する。)

將軍。 ジャック・エレニアン、お這入りなさい、オツピトマアニユへ。代理官はあなたを喜んでお迎へいたします。

エレニアン。 あゝ到頭！ 君等にとつて私が必要だといふことは、私は知つてゐた。私が、君等のなかへ入つて行くのは、畢竟、君等の利益の爲めなのだ。

のない平和の事實が、人間世界の何處にあらうか。憎惡の心から孤立した愛の心が、私たちの内部生活の何處にありうるか。われ／＼の生活からして、反抗と争闘との事實を斥けてしまふ事はやがて妥協と迎合を思ふ事に外ならない。平和と妥協とはまるで違ふ。すこしでも妥協的分子のあるところには、眞の平和も成り立たなければ、眞の愛も醸されない。

耶穌基督の教は愛の結晶であると云ふ。しかし基督の説き示した愛の心は、反抗と争闘との事實を否定し去るやうな抽象的な愛では決して無い。抽象的な愛の心から、『地に平和を出ださんために我きたれりと思ふことなかれ、刃を出ださんために來れり』と云ふやうな徹底した言葉は、生まれやう答が無いではないか。『われ世に勝てり』と云ふやうな嚴肅な絶糾は聞かれやう答が無いではないか。

靈肉の争闘は、現代人の大問題である。否、恐らく永久の大問題であらう。しかも此の重大な問題は、靈と肉との妥協によつて、到底解決を得ることはできない。究極の解決は、ます／＼此の争闘をつゞけて、靈と肉との眞の力を突き詰めれば、そこで初めて達せられるのではなからうか。争闘の眞義は、こゝにも因めく。

また私は、反抗と争闘との氣分を撥無する背後に、動もすれば無關心の態度のつき纏ふことを思はないわけに行かぬ。かのバアナアド、シヨウが、他に對して無關心の態度をとると云ふことは、他を憎むことより以上の罪惡だと云ふやうな語氣を洩らした事に思ひ及ぶとき、私は其處に一面の眞理の潜んでゐる事を感じずにはゐられない。われ／＼が他を憎むのは、憎まんが爲めに憎むのではない、愛せんが爲めに——もしくは愛の心あればこそ——憎

むのである。無關心なる態度には、自他に對する愛もなければ、憎しみもない。云はゞ寂滅の姿である。だから生存の意義は、なかば此の態度の爲めに凋れてしまふ。

たゞ觀念のみによつて、生存の意義を知ることが、さばかり困難でない。けれども、活動の世界に躍り入りながら、しかも其處に生存の意義を掴むことは、なか／＼に容易でない。容易でないのは、妥協の誘惑が聳々とわれ／＼に迫つてくるからだ。無關心の力が不思議にもわれ／＼に附き纏ふからだ。私が「反抗」の眞意義に徹せんことを願ひ、「争闘」の低らざる力を肯定せんとするのは、この誘惑とこの不思議なる力とを撥無して、「眞實」の一路を切り拓かんが爲めに外ならない。

宗教も、藝術も、政治も、社會も、すべて改革を要する時機は既に熟してゐる。けれども、一切の改革は、まづ生活態度の革命より始まらなくてはならない。私は反抗と争闘との氣分を撥無すべく、現代に於ける生活根柢の餘りに淺薄なるを痛感する。エナアジイの消耗は、いかなる場合に於いても罪惡である。

改革！改革！改革！私は一切事象の目ざましき轉向を目のあたり見んが爲めに、反抗と争闘との氣分を肯定する。（内藤）

自我の權威

吾人の自我には果して絶對的の權威があるか、それは甚だ疑はしい。吾人が歴史的自然的束縛を受けて居るとは、一寸考へたらば直ぐに分る。しかし若し自我と云ふものが無かつたならば、歴史でも自然でも、そんなものはありはしない。ありはしないと云ふのは、云ひ様が悪い。自分の自我に取つて、ありはしないので



時評

改革！改革！改革！

『反抗』と『争闘』とは、現代の生活を貫く著しき事實である。

それにしても、此の時代に生きてゐる人間は、何故かくまで反抗を續けなくてはならないのだらうか、何故かくまで争闘を欲しなくてはならないのだらうか。

私たちは、これまであまりに、事象の皮相を乃至斷片を事象そのものと思ひすぎてゐた。何事につけても、その底の底まで突き詰める努力は知らずに、云はば可い加減なところで片をつけて置くやうな習性をもち續けてきた。さうして其處に、際だつた不安をも不満をも感ぜずに、日を過ごしてきたやうだ。けれども、今まで事象の眞相だと思ひ込んでゐた事が、意外にもさうでなくて、たゞ其の皮相乃至斷片に過ぎなかつた事に一たび氣がついて見ると、もう一刻も猶豫してはゐられないのである。一刻も其のまゝにして置くわけには行かないのである。新しき偶像の破壊を目標とする『反抗』と『争闘』との事實は、斯くして心の内外に生まれざるを得ないのである。

偶像は破壊しなければならない、目に映らずして而かも生命な

き偶像は、特に破壊しなければならない。目に映らざる偶像とは事象の皮相乃至斷片を眞相だとする笑止な心である、概念を概念として取扱ふ空疎なる心である。私は斯うした心を一步步々眞實へ近づけ、全體の生命へ導き入れんが爲めに、何うしても『反抗』と『争闘』との力を認めないわけに行かない。

反抗の爲めの反抗は暴である、争闘の爲めの争闘は偽である。

けれども私は、人間の進歩と發展とを犠牲にしてまで、反抗と争闘との氣分を呪咀する必要はないと思ふのである。眞剣なる反抗と争闘との事實がなくて、どうして眞實なる愛の精神が擲げやう、どうして個人の自覺が望まれやう、どうして社會の進歩が求められやう。

私は近ごろ、なほ幾多の疑問を残して、しかも此の不安と動搖と紛糾との時代に處してゐる此の國の基督教界の一部から、はやくも「反抗的態度の拋棄」を奨説する聲を聞いて、心から寂しさを痛感しないわけに行かなかつた。

何ものかを求めんとして、いまだ求め得ざる心は不満がある。

不満の後に反抗がある。反抗の後に争闘がある。争闘の後には何等かの慰安があり、さらにまた新しき不満がある。しかも此の絶えず連續せる事實は、常により善きもの、より高きもの、より深きもの、より大いなるもの、より闊かなるものを求めてやまざる人間の切なる喘ぎのうちに、含まれて居るのでは無いか。人間の積極的努力のうちに、儼存すべき事實ではないか。

もし、反抗と争闘との氣分を咀ふのは、これ一に平和の威嚴を思ふからだと思ふたり、愛の滋味を思ふからだと思ふたりする人があるならば、それは大間違ひである。反抗や争闘の事實と連絡

のは勿論である。僕の自我の背景には、歴史が潜んで居る。また時代思潮なり、社會や集團の他の自我の影響も、多分に含まれて居る。併しながら、自我がもし、社會や歴史や他人を離れて、孤立的に生存し得ないにしても、その爲めに歴史や社會や他人の思想が、自我の要素となつて居るとするならば、それは大なる誤謬と云はねばならぬ。自我はそれ等のものを寄せ集めた組合せではない。恰度よろ／＼の食物をとつた胃の腑が、これを消化して、自己の肉體の滋養物とするやうに、自我は歴史を吸収し、社會及び時代の思想を吸収して、自己を養ふ滋養分とするに過ぎない。或る人の思想は僕を養ふであらう、併しその思想は、最早彼のものでない、僕自身の滋養素である。

何者と雖も歴史の束縛を受けないものはないが、特に宗教の如く、權威をもつて人民に臨むものにあつては、特別にその壓迫を受けて居る。歴史が自我を創つたと云ふ、併しそれは眞實であらうか、少くともさうあつてよいであらうか。吾々の自我が歴史の續續としての今日の社會狀態のうちに住んで居ると云ふことから云へば、吾々は勿論歴史と相離れ得ない。けれども現在に住める現在の自我としては、彼は過去の歴史的事件や習慣の力によつて自由にされるべきものでない。彼は歴史を取捨選擇しなければならぬのである。

さて基督教もしくは佛教の傳來の神觀や、儀式や、宗教生活の形式や、組織や、制度や、更に進んでは神觀や、基督觀やさういふ宗教的色彩は、何うしてもこれを保存しなければならぬであらうか。もしさうとするならば、最早吾々の心は、宗教にはつながらないかも知れない。吾々はそれを單なる歴史として見るとき

または生活の文飾^{あや}として見る時は、能ふ限り美はしき傳説や歴史をとり入れたたい、けれども現在の生活を支配する力とはしたくない。それを織りなす綾としたい。僕は基督を見るに神とせず、神の子ともせず、また高僧ともしない。彼は實に、自由に怒り、自由^{マン}に泣き、自由に笑ひ、自由に語り、自由に議論した一個の平民である。人である、凡夫である。さうでなければ、僕の衷心は基督と永遠に相背いてしまふであらう。神觀にしたところで、僕は神は愛なりとも、正義なりとも、その代りまた憎みであるとも、惡であるとも思つては居ない。こんな思想をも、今の宗教はこれを許し得るであらうか。

僕は社會の一員である、集團の一員である。その影響を蒙つて居ることも、既に述べた通りである。併しさればとて僕は、社會は自己であり、自己は社會であるとは、どうしても思はれない。自我は自我、社會は社會である。自我と社會とは同一でない。自我と社會とを一つに見るのは社會の總和を自我と見た誤謬から來て居る。自我は社會の總和でない。自我は社會のあらゆるものを一度消化して、その原型を全く破壊してしまつたものをもつて、養分として居るに過ぎない。然らば僕は社會や集團のために、自我の眞實を犠牲にすることは出来ないのである。何よりも尊いこの生命を傷けてはならないのである。茲に妥協の餘地は寸毫もない。たゞ僕はその時、社會または集團より自我の養分を吸収する様に、自分も亦與へねばならぬことを思ふ。併しそれは妥協してその社會の集團の一時的平穩を期するのでなく、潔く職つて――併し虚心に――自己の持つて居る生命の肉を裂き、血を注ぐことである。それはまた他人に教へんとする態度でなく、自己の生活

ある。けれどもまた自我の周囲がなかつたならば、今日の吾人の自我は發展しては居まい。こゝに於いて、自我はどうしても相關したもののである。然しながら相關的であることを意識する所に、少くなくとも、相關的を、換言すれば客觀と主觀を超越する態度が現はれて来る。これを絶對的と名づくべきかどうか、そのとに就て、僕はこゝに判斷を下したくはない。けれどもこれは確かに創造的である。客觀と主觀とが渾然として相合して、創造が現はれるのである。創造には悦びがある。子が生れて悦ばない者のないのは之を示して居る。けれどもこれに倍して、自我は創造するものなりと感ずる時に、この能力に無限の權威を認める。

然るに今までの基督教は、かゝる自我の權威を、餘り認めやうとはしない。それだから自意識の旺盛になつた現代の人々とは、否、少くとも現代の思想の潮流に棹さして居る人々とは、益々没交渉になつて来た。それも基督教の行はれて居る處では、何とか別に交渉の方法もあらうが、未だ基督教の行はれて居ない場處では、この交渉が出来なかつたならば、傳道などとは思ひも依らないことになる。幾百の宣教師があつても、牧師があつても、それは駄目である。洗禮を受けて信者になる者はあるかも知れない。けれどもその信者なるものと、他の偶像信者と、どれだけの區別があらう。恐らくは餘りあるまい。やはり御利益信者であらう。

けれども吾人は、もつと深く行きたい。昔の教義などは、要するにアリストテレスの哲學の御蔭を蒙つて居る煩瑣哲學の範圍を脱するとが出来ない。新教の教義だつてさうである。自由神學、或は新神學と稱ふるものだつて矢張多くはさうである。これはどうあつても、創造的自我の立場から組織するものによつて、代へ

なければならぬ。僕は自我の權威は、こゝまでも及ぶものであると思つて居る。斯う考へて来ると、今までの有神論、聖書論、基督教論、人間論、來世觀の如きは、何である。誠に兒戲に類したものである。青年會のモットー君の如きは、四百名の宣教師を日本に送る運動をして居るとか、輕井澤で宣教師が講習會を開いて居るとか云ふが、そんなとで日本に傳道が出来ると思ふのは、大間違ひである。日本に要する所は、僅少の人でいゝから、現代の思潮に徹底して居るものであつて欲しい。(三並)

歴史と集團と自我

集團と個性、もしくは社會と自我、或は歴史と生活、これらに實に吾々の時代の問題である。文藝家も宗教家も、ひとしく其の解決に努力しなければならぬ重大事である。僕は今ここに、それを評論する考はない。またその邊もない。たゞこの解決の如何によつては、宗教は遂に僕のやうなコスモポリタンを容れないことになり、文藝をも容れ得ないことになり、文藝はまた、宗教の門外に立たねばならぬ様なことになるだらうと云ふことを暗示しておきたいと思ふ。

吾々は集團を厭ふものではない、また社會を排するものでもない。眞實の生を未來の國におかず、理想郷を前途に眺めて、今はたゞそれに連する道行きに過ぎないとするのでなく、現在の生活それ自身が、生活の過程そのものが、吾々の眞の生であるとする限り、自分ひとり世を離れ、人を却けて、仙人の様な生活をするこの出来ないのは勿論である。また正當なことでもない。また吾々の自我と云ふものも、決して單純な、獨立自全な生命でない

いと考へて居る。これも甚だ結構である。然し僕をして云はしむれば、方法は餘りむづかしくはない。婦人に勇氣を求むるとである。若し婦人にして勇氣さへあれば、問題の解決は容易である。

即ち世間の婦人がノラのやうになるとである。同盟して不品行な良人の家を出さへすれば、それで解決はつく。即ち此の勇氣がなかつたならば、何時まで立つても、婦人と云ふものは、男子の下風に立つべきものと極つて、又如何ともするとは出来ない。然し今の婦人に此の勇氣があるかどうか、それは問題である。(柏葉)

予の交渉顛末書に就いて

八月の『開拓者』に、岡田哲藏氏が統一教會對青年合同盟問題を書いて居られる。氏の明快公平な筆致により、青年合同盟内部の事情が、如何にもと首肯せれるのである。只予は之によりて、小松同盟主事が、予の先に公にした交渉顛末を以つて、曲策なり誤謬なりと息まいて居る理由が解けた。岡田氏自身にも、我々の意志は充分徹底しなかつた、否、當方の意志を誤解したのだ。今其の項をくどくどと開陳したくはない、只予があゝ顛末を書いた心の用意をいつておく。予は統一教會と青年合同盟の交渉顛末を記すに當たり、主として公の意義を有つて居る文書に依ることにした而して其の連絡における意義を明瞭ならしめるため、多少の註釋を施した。文書以外の事項を書けばいくらでもある、併し今は其の事實を遺漏なく書留めるといふ所謂史家の職分ではないのだ。小松氏は、最後の會見における岡田平澤二氏に對する當方の挨拶を省略したのを、曲策だなど、言うて居るが、小松笹尾兩氏の面前で、平澤岡田兩氏の公平と盡力を稱揚するなど、云ふとは、多

少ならず言外に意味があるのだ。併し即ち之を會見中における他の事項と共に、一切割愛した。其の心事は諒されたい。更に予が公文書的交渉以前の、平澤氏との關係をも省略したのは、同一見地からである。平澤氏との交渉が、私的にして好意的のものであつたことは明かである。併し、かうした事項が、得て誤解し易いものだといふとは、已に最後の會見の一項においても明白にわかる。故に若し之等の件を書くとしたら、題を別にして書くべきである。それで同人中の誰かも會見中の所感を書いた筈だ。岡田氏はさすがに何故文書だけの交渉顛末だらうと疑を起されたが、小松氏はそれだけの事も思ひ浮ばなかつたらしい。

二つの團體が、或る事件について交渉したとする。後で問題が惹き起された時の爲めには、只責任者の作成した文書があるのみだ、こんなことは賢明なる方々に言ふまでもないことだ。併し一方の代表者が他の代表者に對し、其の事件に關して、名譽を傷けるやうな言辭を弄するといふとは、假令それが誤解からであるにせよ、表面はそれで許さるべきでない。これが一私人の關係ならまだしもだが、團體間の事件であつて見れば、只では済まされない。一體後で餘事についてどうのかうのいふなら、何のために文書がある、何のために覺悟が必要なのか。小松氏も他團體の代表者の名譽を、自己の名譽程に尊ぶ心があるならば、宜しく失言は失言とし、男らしく其の誌上において謝罪すべきであらう。それでないと、天人の前など、力味返つた事が、如何にも滑稽になつて、其の反動は小松氏自身の上に振りがくゝることにならう。敢て反省を促す所以である。(相原生)

に於て、自己のものである生命を、自然に放散することによつてである。そこに創造の生活がある。また創造の藝術がある。藝術はその創造の生活の表白である、燃焼せる生命の焔である。集團は藝術の敵でない、集團は藝術の耕すべき廣大なる領土である。

併し宗教の集團と個性との關係は、何うであらうか。所謂神の國もしくは教會は、神意を奉戴して、人民各自に愛と犠牲との生活を実行する理想郷である。もしこの理想にして實行せらるゝならば、そこに問題はないのであるが、事實は決してしかく簡單でない。古來教會ほど相闘ぎ相争つた集團は少ないであらう。彼等はその自己の信念に忠ならんが爲めに、異論者の生命を居ることをもつて、却つて神意に適ふものなりと考へたことすらある。かくの如く思想や個性の相異があつたとき、今日の吾々としては、如何なる態度をとるべきであらうか。

吾々は尙それ等の相違を認めながらも、妥協しなければならぬいだらうか、特に傳道の爲めに外に對するとき、その必要を認めるであらうか。蓋し宗教の團體は、普通一般の社會と云ふが如きものとは異なり、一種の信念の下に集つたものであるから、それに反する思想や、性格の色彩をもつたものを容るゝことは難いであらう。一定の主張と方針とをもつて居る集團は、異分子を容れることは困難であらう。この際吾々の探るべき道は明白である。もし吾々にしてその團體と思想や色彩を一にするならば、飽くまでも協力すべく、然らずんばその集團と別るゝまでのことである併しながら茲にも、自由なる宗教團體が生まれねばならぬ。苟くも生命の爲めに眞面目に努力し、奮闘して居るものならば、たゞ

その一點に於て相容れるものとならねばならぬ。そしてそこに、飽くまで個性の自由なる發展を遂げしめねばならぬ。併し宗教は果してそれを許し得るであらうか、どうか。

併し今の僕の心持から云ふならば、特別に宗教團體と云ふが如きものゝ存立を要求する必要はない。と云ふのは、社會の至るところで、自由な宗教生活を實行することが出来るからである。僕にあつては特に宗教生活と云ふものがない、生活の凡てが宗教であるからである。たゞ生きさへすれば可いからである。

今や僕は凡ての不安と困難とを排して、僕自身の内部の運命に従つて、自然の一員としての生活に入つて居る。不安があり、恐怖がある。そして寂寥と悲哀がある。けれども僕の心には、一種の緊張がある。

唐津にて——加藤

現代婦人の悩み

現代の婦人、否、妻君たるものは、何が爲めに煩悶して居るかと云ふと、良人の品行の爲めである、彼等が妾を蓄へ、藝者を買ふが爲めであると云ふ。尤も斯う云ふ行狀をするのには、上流社會に隨分澤山のお手本が出て居る。上の好む所、下これに習ふのであらう。否、所謂江戸趣味なるものは、斯う云ふ粹事が大部分を占めて居た。この江戸趣味は、江戸が東京と變ると共に、田舎武士の爲めに蹂躪されてしまつたが、之れと同時に、田舎武士をもまた軟化してしまつた。その後を受けて居る今日であるから、良妻賢母たる人々の煩悶が起るのも當然であらう。

然しこの儘に棄てゝは置かれまい、それで婦人に同情をする人々は、何とか婦人によき方法を教へて、彼等の力になつてやりた

いと思はれる。元來心身を二元視し得るとすれば、心が身に宿るのもプラトンが云へる如く「セーマ、ゾーマ」で既に妥協である。イデーはかく束縛されてゐるのである、一切の有限性は我々をして妥協を餘儀なくさせる、この中に自由飛躍の活路を開くのが我々の望みである。

集團即自我、自我即集團といふ心境は可能であらう。それは無差別観である、そう見れば集團のみか、宇宙と自我と渾然合一すべきである。然しかゝる差別の見方は、やゝもすればそれこそ思想の妥協である。我々は差別相を見て、高低を判斷し、それで向上せねばならぬ。

(三) 文藝對哲學の問題は、別項に簡單に一言しておいたから、更めて高評を得れば幸である。(岡田哲藏)

再び岡田哲藏氏に答ふ

先生、先日は失禮いたしました。「XYZ君に答ふ」の御一文はありがたく拜見いたしました。大抵ご推察なすつたでせうが、前號の批評は内藤氏と私とが、ちよつと惡戯を致したのです。それに對して先生のお答へを得ましたことは、太だ光榮とする所であります。先生のお答へは三ツになつてゐますが、第三のものは、時評欄で論じ盡すことはやゝ困難かとも思ひますから、何れ折を見て本欄上でお答へをいたすことに爲しました。

先生の第一のお答へは、「高級生活と低級生活と」いふことであります。そして兩者の區別が一個人の生活裡に、實在してゐると言はれたのであります。無論私も、時としては私自身の生活の裡に或は高低二様の生活を區別して見たいと思ふこともあり

が、まだ私ははつきりと區別するだけの餘裕をもつてゐません。それは私の生活が、それほど一面に於て思辨的でない證據かも知れませんが、私自身にとりては、私が「生活してゐる」といふ意識以外には、私の生活が高級であり、或は低級であるなどとは考へたくないものであります。尤も私の生活が、意識的であるが、無意識的であるか、或は内省的であるか放漫的であるか、或は徹底的であるか不徹底的であるかといふことは言へるだらうと思ひます。私にとりては生活それ自身は唯一無二の實在であり、また絶対のものであります。隨て高低の差別を附することはできません。たゞ私自身の生活に面して、私の全意識全情調が全的に顫動しつゝあるか、燃焼しつゝあるか、或は否かの問題が、私の生活にとりて重大な關係を有つてあります。それで私の生活が充實せられてある、或は充實せられてゐないといふことは言へると思ふのであります。假りに先生のやうに、哲學的思辨の生活を高級のものとしても、それは第一要件として生活の嚴肅な意義なり實在なりを根據としてゐなければ、その哲學的思辨は私にとりて何等の價値のないものであります。それで哲學そのものの生活を第一要件としてのみ存在するものであり、意義あるものであつて、哲學的思辨も、藝術的創作もたゞ生活創造の有意義の一表現に過ぎないのであります。

そこで「生活」といふ點から見ますならば、哲學者の思辨も、藝術家の作意も、車を挽く人の勞作も、何の逕延もありません。たゞそれらに自己現營の生活を、その刹那々に、何れほどまで徹底的に意識してゐるか、味はつてゐるか、それが彼れの生活をして、充實的であり、不充實的であると區別するものではありま

XYZ 君に答ふ

六合雜誌の八月號に、私の同志會に於ける短い演説を、XYZ 君が批評して下されたのは、同君に謝するところである。此の批評は概ね（一）高級生活と低級生活、（二）集團との妥協、（三）哲學と文藝との三段に分れて居る。

（一）私はある種の人の生活が全く高級で、ある他の人の生活が全く低級だと考へたのではない。一個人の生活に高低の差別が混じて居ると考へたのである。生活の諸現象を比較して、高低の差別を付け難いといふ見方なら、これに反對であるが、評者の如く差別が附けられると見らるゝならば、私と同意見である。勿論それは唯だ二段の別でない、階段はいくらもある。また差別の境は、明確になし難い點があらう。然し兩端を見れば差別の存在は明白である。「哲學者の思辨、文藝家の創作、宗教家の思想の様な生活状態を高級とし、動物と共通の欲望の生活を低級とす」と私はその時に云ふたのである。労働者や兵士が、かゝる高級生活に入る瞬間のあり得ることは勿論認める、乞食で哲學者であつたディオゲナスの如きもあつた。然し彼の思辨と乞食行爲とは、差別が多である。また XYZ 君は原始人的生活から出立云々といつて居らるゝが、個體は必然に種族の生活を反覆するもので、我々が嬰兒のときはそれであつた。然し成長すれば爲し得る限り、高級に上らねばならぬ。またそれが自然アリストクラティックになるのは當然である。また生活の爲の思索であつて、思索の爲の生活など同君はいはれたが、私の立場は之と反對で、殆ど思索の爲の生活と思ふ。生の極致を知と思ふのである。

（二）集團に就いていふことは、あの時は至つて不完全であつたが、評者のいはるゝ如く、集團にも種々の差別がある、哲學者にもその集團がある。現在にもあれば過去に亘つてもある。然し一般に云ふ集團とは、國家とか社會とかを意味する、そうすると中には、高級の人物も低級の人物もあつて、後者は特に多い、それで集團の精神といふ様なものは、勞ひその平均的のもので、高級の人から見れば、低いものであるものが普通である。我々が單獨で世に居られぬ限りは、此等の集團と何等かの關係を有せねばならぬ。一身を棄てゝこの集團の爲めに盡くすのも一種の生活で、また往々それは尊ぶべき生活である。然し自我を主張し、個性を發揮し、十分なる實現を計るときには、専心一方に深入するの要がある。學者の研究の如きはそれで、それは利害をも超越し、國家社會を超越する場合がある。然し自己は全く國家社會を離脱し得ぬから、そこは全然自由を求めて、之と衝突することなく、多少の妥協を要することがあると思ふのである。尤もそれが自己の至上と思ふ努力を不可能ならしめぬ程度でいふのである。例へばスピノザが猶太教を脱離し、大學の教授となることを拒んだが、生活の爲にレンズを磨くことは爲さねばならなかつた。彼は多少の時と努力とを社會に與へて、思辨の爲め生活を繋いだのである。彼は猶太教會や大學とは妥協は出来ぬ、それは彼の眞理追求に果を及ぼすからである、然し生活の爲には因習的方法をとつた、而して社會機關との連絡を保つた、此等を集團との妥協といつたのである、また思想の上でも、ソクラテスやブルーノットの如く、死を以て自ら守つた如きは立派であるが、カントやガレリオの如く、官憲の妨に強て反抗しなかつた様なもの、必ずしも咎めがた

低級の生活と思はれたのであらうが、かうなつて来れば、先生の生活意義はいよ／＼觀念的なものになつて来る嫌ひはないでせうか。なるほどスピノザやデイオゲネスはレンズを磨くこと、乞丐をすることを、高尚な努力だとは思はなかつたでせう。しかし彼等等は、賤しいと思はれた自己の生活の裡に、「我れ生活しつゝあり」といふ意識を自覺したにちがひありません。私の言ふ「生活」はそれなんです。その「我れ生活しつゝあり」といふことのみが、絶對のものであつて、その生活の形式は問はないのであります。しかも彼れ等の生活が偉大であつたといふことは、哲學者でありながら乞丐をしたといふのでもなく、哲學者的生活をしたといふことでもないのです。彼れ等が自己の「人生」を眞面目に考へ、眞面目に努力したといふことであります。それで私に言はしむれば、デイオゲネスといふ乞丐が彼れの生活を眞面目に味ふたのであり、スピノザといふ靴磨きが、彼れの人生を徹底的に突き止めやうとしたのである。そこに彼れ等の尊い努力があるのであります。集團と自己との一致といふことは、自己が集團の裡にありて、集團の一員として生活しつゝあるといふことは眞實であるが、その自己の生活を批評し或は創造せんとする努力は自己そのものに存するのである。私達は決して集團を逃避し或は繃繆的妥協をする必要はないのである。生きるものは、集團の渦巻きのなかであるが、味ふものは自我の靜かな觀照裡である。先生は生の極知は知であると言はれるが、その「知」のなかに、生を熱愛する情緒がなければならぬ。畢竟するに、先生が「知」をもつて生の極致とせらるゝ理由は、先生の生の熱愛が、徹底的のものであるが故に、先生は生の底の底を味はるゝ爲めに、「知」の權威を高調

せらるゝのであらう。先生自身にも決して「知」が生の極致ではあるまいと思ひます。先生は仍り「生の爲めに生」を熱愛して居られるのでありませう。その愛人のやうな「生の影」を握まんが爲めに先生は「知」を餘りに過大視してゐられるのではありますまいか。先生がさほど主張せらるゝ「知」に對してより以上に先生は「生」に對する愛情をもつてゐられることゝ信じます。ソクラテスは「知」を愛した、しかししをれば「人生」そのものを熱愛したる自然の結果であつたでせう。先生は自己の生活を熱愛する人でありませう、隨てその生活の影を捉ふるに最も適當な力であると思惟せらるゝ「知」を愛せらるゝことは、先生にとつては當然のことであらうませうが、それより根本的なものとなつて先生の思索的生活の凡べてを動かしてゐる、「生活愛着」の情調を先生は餘りに小ひさく看過してお出でになるのではないでせうか。

最後に「如何にせば最も光明ある、或は意義ある生活を送ることができるか」といふ懷惱は、久しく私の抱いてゐた努力でありました。しかし今日では、その光明だとか意義だとかいふものを、特別にあさり出して見やうといふやうな考へは殆んど失つて了ひました。たゞ如何にせば私の生活が、最も私の本然的な要求と一致するものであるかといふことを求めてゐるのであります。その本然的な私の要求が何であるかを私は説明することも、理解することもできません。しかしながら私の生活の凡べての刹那を通して、私を動かす或る力、または或る運命の何であるかを想はずには、私は一刻も生活することはできないのであります。或人はたゞ生活すれば、それで充分だといふ者がありますが、私は少くとも、私の生活を動かす或る力、(若し私自身であるならば、自然そのもの

すまいか。かう考へて見ますれば、成るほど先生の哲學的思辨は私達が眞面目に自己の生活を創造しやうとする時に、なくてはならぬ勞作ですが、それを有する生活が最高のものであるといふことは何うでせうか。それをさうだと決めて了う結果は、哲學即ち生活であり、生活は即ち思索の爲めの生活であるといふやうな、一種の觀念に墮するのではありますまいか、先生が「始んど思索の爲めの生活だと思ふ」と言はれるのは、この邊から胚胎したものでありますまいか。尙ほ重ねて申しますが、私にとりては「生活は唯一絶對のものでありまして、凡べての生活といふ生活は、絶對のものであります。隨てそれが衝動的であらうと、思索的であらうと、生活そのものには何等の逕庭もありません」。

先生の「哲學的生活」は先生にとりて、先生の個性にとりて、比較的に徹底的生活を味到するに都合の宜いものであるかも知れません。しかしそれは先生自身のみにとりてのことであるのですが、それですら、實際の場合には、先生の生活を哲學的であるとか、衝動的であるとか區別することはできません。もし先生の生活が哲學的であると意識せられた場合には、未だそれは燃焼しない生活であつて、先生にとつても充實した生活ではないでせう。

或人にとりては衝動的生活が眞の生活であり、充實した生活であるかも知れません、しかし彼れ自身が、自分の生活は衝動的である感情的であると意識した場合にはそれは、まだ眞實究極の生活ではないでせう。私等はたゞ心内の要求が命ずるまゝに生活すれば宜いのであつて、始めから高低の生活を區別して進むことはできないかと考へます。たゞ私達の緊張した生活といふものは、極めて刹那的のものであります。それで私達は更らに第二の緊張

した生活の爲めに第一の刹那的生活を批評もしなければなりません。その批評がない生活が始めて無意義な生活であります。この意味に於て思索は生活に必要であります。しかしながら、生活そのものは思索そのものを超越したものであります。思索の必要である理由は生活を如實に觀察すること、更に第二の生活の爲めに、或は新たな創造の爲めに自己の生活力を發展し行く所にあるのでせう。そして、かう考へたならば、思索的生活といふことは極めて必要條件でありながら、これのみを有する生活を（概的にせよ）高級とし、然らざるものを低級生活とすることは、まだ生活そのものの權威を充分承認しないこととなるのではありますまいか。兎に角「生活」そのもの或は生命そのものには、批評なくとも思索なくとも、生活又は生命そのものとしての尊嚴を有つてゐるのであります。もし思索的生活が高級であるとするならば、感情的或は衝動的生活も高級であると言へないことはないだらうと思ひます。

要するに先生は思索と生活とをやゝ二元的に考へられ、私は思索即ち生活であり、生活即ち思索であるといふやうに、生活そのものを絶對のものとしたのではありますまいか。

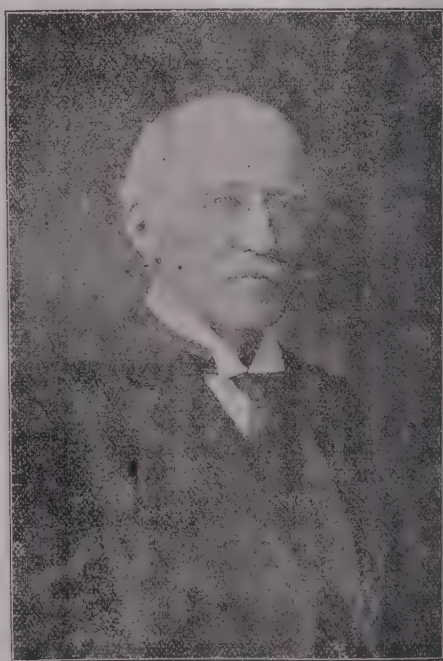
集團對個人の問題に於いても、私は、先生が思索と生活を二元的に考へて、思索を先として、生活を末としてゐられるやうな心持ちがいたします。先生自身が言はれる通り、先生は生活が當然の結果として漸次アリストクラティックになるものだといふことを承認してゐられるらしい。それで先生は生活といふことの意義をは成るだけ、高尚なものとなしたいが爲めに、思索的生活を最高のものとし、レンズを磨くことや、乞丐的生活を爲ることを

サンダアランド博士を迎ふ

嘗てエリオット、ビーボデーの兩博士を吾々に送りたる米國ユニテリアン派の教友は、更に一名士を送らんとする。即ち牧師ゼー・テイ・サンダアランド博士である。彼れは九月一日横濱に到着の豫定である。今年より、明年にかけて彼れは、

布哇、日本、支那、マニラ、セイロン、及び印度を訪ふの計畫である。蓋し明年もしくは明後年に亘りて、印度に於いて開かるべき世界一神教徒會(ウオールド・セイステイツク・コン・フアレンス)の準備の爲めである。この使命を果すと同時に彼れは數回の講演を試みる筈である。彼れはビルリンドス寄金の講演者として、米國ユニテリアン協會の代表者として、友誼的の使節として派遣せられたのである。

ゼー・テイ・サンダアランド博士は一八四二年二月英國ヨークンヤイアに生れた。幼年にして米國に來り、マデソン、シカゴ等の大學に學んだ。一八七〇年に浸禮教會の牧師となり、一八七一年にユニテリアン主義に改宗し、爾來今日に至るまで四十有餘年



一日の如く、ノースフィールド、シカゴ、オークランド、ロンドン、トロシイ、ハアドフォード、オッタワ等に於いて牧界に従事した。一九一一年に米國ユニテリアン教會の理事に任ぜられた。また米國に於ける自由基督教主義の運動の多くの方面に關係して活動し、一八九五年より一八九六年にかけて印度に派遣せられて教育、社會、宗教的方面を研究した。

彼れはまた多くの宗教文藝の雜誌を發刊した。著書また多くして、「合理的信仰」、「聖書の紀元と發達」、「印度に於ける自由宗教」、「宗教と進化論」、「マアテイノ一傳」、「ユニテリアン信仰の世界的傳道」、「印度に於ける飢饉の原因」その他數種の著作がある。

彼れがトロント市の牧界に従事したる際は、その傍、多くの會員を有するブラウニング會の長として、好評を博した。彼れの文章は流暢明晰にして一種の魔力を有する。彼れは印度及び東洋に關しては、既に根柢ある智識を有し、合衆國に於ける二個の神學校に於いて社會學及び印度宗教に就いての講演者であつた。

博士はその令嬢と共に、吾等の間に遠からず紹介せられるであらう。吾人は讀者諸君がこの遠來の宗教家を記憶して統一教會その他の所に於いて開かるべき講演に出席せられん事を切望する。

の)の本然的要求と、私の生活とを如一に観ることのできる境まで、私の生活を擴張して見たいのであります。少なくとも私の生活にはそれだけの緊張は潜んでゐるつもりであります。これは餘ほど先生が、至善の生活を求めてゐらるゝのと類似した點であるかとも思ひます、たゞ私の生活は、飽くまでも生活の爲めの生活であることを確信するのであります。

編輯の後に

▲編輯便りが重複するやうですが、餘白を借りて別項「編輯室より」の補ひに致します。本號には、原口竹次郎氏の「エレンカイの思想」、工藤直太郎氏の「家庭の新人」、内ヶ崎作三郎氏の「山陰、山陽の旅」、星島次郎氏の「内ヶ崎牧師を迎ふ」、磯部外紫子氏の「創作」など御寄稿していただきましたが、紙面の都合で後日に割愛することになりましたことは太だ遺憾とする所てあります。執筆諸氏の御諒察を切望いたします▲。

この一文が決して、先生に何一つ御満足と與へることのできないことを虞れてゐます。

恰度梧桐の潤葉を撃つ初秋の雨が寂しく降つてゐます。私の頭腦は今寂しい生活の蔭に喘ぎながら、次の刹那に來べき私の更に寂しい生活を想ふてゐます。(吉田)

寄贈雜誌

心理研究。青鞥帝國文學。新公論。車前草。東亞の光。創作婦人の友。新小説。世界の日本。世界ホーム。宗教の日本。詩歌。新日本。新佛教。東洋哲學。禪宗。宗教世界。禪。經世雜誌。新人。正教時報。開拓者。基督教世界。護教。基督教週報。早稻田講演。白樺。時事評論。實業之世界。道の友。丁酉倫理。神學の研究。哲學雜誌。六條學報。佛教史學。和融誌。國民時報。獨立評論。現代の洋畫。とりで。生活。劇と詩。立志。新眞婦人。The Pacific Unitarian. Unity. The Christian Register. The Outlook. Current Opinion.

新刊批評

▲生の要求と文學片上 伸著・南北社發行

私はこれを批評するに先き立つて、一言附け加へて置かなければならぬことがある。それはこの本を私が送つて載いたのは、恰度編輯の最中であつたので、私は太だ遺憾ながら巻頭の論文十篇ばかりを、やゝ熟讀することを得たといふことであります。尤もこの中に蒐められた論文の或ものは、その折り／＼に讀むだことがありましたが、今でははつきりとした記憶もありません。しかしながら、先づ大體に於て、著者の進まんとせられた方向なり、捉へんとせられた或るものを感じることができたかといふ自信を抱いてゐるのであります。即ち著者は徹頭徹尾、生の愛好者である。現實生の執着に燃えたる人である。著者は限りなき生命の廣がり、と、限りなき生命の發達を信ずる人である。刻々に變轉し行く生の現實に面して、著者は深く、強く、鋭く、廣く、確かに、生の現實味を捉へんとする人である。著者は限りなき生みの力を直感する人である。有限固定の物質の中に、無限の生命の躍動を直感する人である。著者は人生の暗闇を認める、しかしながら著者は、それを以て人生を呪ふべしとはなさない。著者は人生の矛盾を知つてゐる、しかしながら、それが爲めに人生を價值なしとは爲ないのである。

少なくとも近代文學の特長は、その頽廢的、自棄的、惡魔的傾向であつた。凡べての假面を剥ぎ去つた、現實暴露の悲哀は終に

現代の人々を驅つて、暗黒から更に暗黒に、絶望から更に絶望の境に吾々を追ひ遣つた。その結果はたゞ現實に即して、現實が與へ得る享樂、現實が分ち得る癡癡に、只現實の壓迫追迫を纏繞するの他はなかつた。吾々はたゞ動かすことのできぬ運命の力のなかに、引き摺られながら、しかもあり／＼と、その刹那々々、廢滅の血ににぢみ行く自分等の足跡を眺めなければならぬ苦痛の目が多かつた。そこには何の光明もなかつた。そこには何の期待もなかつた。自分等が生に面する時、そこには何時も力ない光の下に、滅び行く事象の長い行列が、黙したるまゝに永久の暗のなかに隠れるのであつた。或者はその絶望と恐怖とに耐えずして自ら酩酊の酒を飲んだ。或者は腐肉に喰ひ入る蛆のやうに、肉の香を求めてそこに自欺的な安住を食つた。たゞ僅かに取り遣された強者や、掣撻者のみが尙も／＼深く／＼人生の暗黒面を抉鑿しては、その額と、その腕とを、血みどろにさしてゐる。

著者は確かにその強き一人でなければならぬ。しかしながら著者は、たゞ暗くも、底へ底へと現實の暗路を辿るのではない。自分等は暗黒のなかに、更に暗黒のなかに突き入るといふことのみでは、眞實に自己の生活を創造し、批評し、眞實の生活意義を捉へることはできない。今日の藝術が、今日あるがまゝでは、到底自分等の生活に光明を與へ、生命を與ふことはできない。自分等は飽くまでも現實を批判しなければならぬ、剖いて見なければならぬ、しかしながら、それは人生に對する無關心から來たものであつてはならぬ、それは人生に對する敬虔と信愛と執着とから生れた批判でなければならぬ。自分等は何處までも謙遜と敬虔と信愛とをもつて人生を見たい。この純なる氣分をもつて、人生を

惟一館なより

■八月の惟一館は、何と云つても暑中休暇の眞最中なので、統一教會員の出入が少なかつた爲めに、やはり前月以來の寂しさが續いてゐた。しかしそれでも、日曜學校の授業は休みなしに行はれたし、それに半月あまり、中國をめぐつて居られた内ヶ崎牧師も、月のはじめには一まづ歸つて來られたので、いくら寂しいとは云つても、氣が減入つてしまふやうな事は露ほども無かつた。

■十日の日曜には、夜の集會を夏季慰安會と云つたやうなものにして、何か涼しさうな催しをやる豫定であつたが、どうも思はしく金が立ちかねるので、やはり普通の集會として、吉田絃二郎君がシヨウの戯曲『惡魔の弟子』の梗概を話した。芝浦の花火が祟つて、聴衆は餘り多くなかつたが、惡魔の弟子が實際には眞實の人であつたりするやうな、シヨウの辛辣な手腕には、話を聴いてゐるものがみな、脇を列り通されるやうに感じた。何と云つてもシヨウは豪い人間だ。

■十六日の土曜には、日曜學校の山本君や太田君などの骨折で、午後の六時すぎから、久しぶりに統一倶楽部の集會がひらかれた。太田君がやつた挨拶によると、避暑黨に對する非避暑黨の示威運動たらしめる爲めだ。煮え返るやうに暑い晩ではあつたが、例刻になると、統一教會員中の青年黨が十五人ばかり集まつた上に、いつも青年の味方になつて、いろ／＼と指導をして下さる岡田哲藏先生が、暑さをも厭はずに來て下さつたので、集まつた連中は心から喜ぶ。永樂亭の合の子辨當で晚餐がすむと、いろ／＼と感

話がはじまる。何事でも可い加減に解決をつけずに、突き込めるところまで突き込めと云ふのは内藤君である。それに應じて、吾々の周圍には、虚偽と知らずに虚偽をやつてゐる者が多い、そこらの假面をどし／＼剥ぎ取らねばならぬと云ふのは山本君である。生活の態度を革命するところに眞實がある、眞實のはてに驚異がある、驚異を外にして性の問題は無いと云ふのは吉田君である。ひとしきり感想の發表に花が咲くと、岡田先生はインテレクチュアリズムの立場から、現代青年の思想に對する意見を發表せる。そこで徹底といふ事やら、要求と云ふ事やら、性の問題やらについて、眞面目な質問がはじまる、批評がはじまる、慷慨が起くる、そしてそれが何時までもはてしが無い。あまり遅くなるので、心を残しながら散會したのは十時半ごろであつた。近頃になく愉快な、そして實のある會合であつた。

■内ヶ崎牧師は、中國地方から歸られてから、二つほど日曜を守つて、廿二日から故郷へ行かれた、月末には歸京せられる筈。役員會長の相原一郎介君は、月のはじめから甲州の山中に暑を避けられたが、近いうちには歸つて來られるであらう。

■教會員の小山東助氏は、このたび關西學院の講師になられて、九月の上旬に東京を去られる筈。また會員の荒井恒雄氏は、專攻の醫學研究のため、九月の十四日に東京を出發して、獨逸に向はれる事になった。二三年間、あちらの空氣を吸つてくると云つて居られる。(八月廿日記)

編輯室より

■秋が近づきました、瞑想の秋が近づきました。淵みゆく花と花とに、清らかな別れの歌を聴くのも、たましひの呼吸に、もの寂しい滑らかな調を聴くのも、すべてこれからであります。

■この號は御覽のとほり『宗教對藝術の問題』のために、誌面の大部分を提供しました。この小さな金に對して、いろ／＼と御助力さつた方々の御厚意を、更めて感謝します。宗教の空氣なり情調なりが、いはゆる宗教的表現と認められるところにのみ在るもので無い以上、私どもは此の問題が至つて眞面目な寛りのある解決を俟つべき問題である事を思はないわけに行きません。もつともつと行ける處までは、行き着いて見たいものです。

■たゞ一つ残念に思ひますことは、宗教の事に直接携はつて居られる諸氏の側からして、多く高見を伺ふことができなかった事であります。しかし私どもは、近き將來に於いて、この遺憾を補ふ機會に接したいと念じてをります。

■編輯の切の後、この問題に關する原稿がつぎつ

ぎに集まりました。伊庭孝氏の『宗教的表現と演劇と』をはじめ、同人相原一郎介氏の『宗教生活と藝術と』加藤一夫氏の『生命中心の宗教と藝術』などがそれです。誌面が狹隘である爲めに、本號に掲げることができなかったのは實に残念であります。次號の一部分を、なほ此の問題のために割いて、以上の諸稿を掲げさして頂く事にしました。なほ次號には、深田康算先生が、創作の心理に關する論文を書いて下さる筈であります。

■そのほか次號に掲げる筈になつてをりますものは、内ヶ崎、三並、内藤二名の論文、岡田哲藏氏の『悲哀の宗教的使命』吉田の饒壽戯曲『黎明』の續稿、佐藤清氏の對話『エビソオド』石田縱村氏の創作『草ちやんと私』などです。なほ次號よりは愈々、東京諸教會の説教批評を連載します。

■日今毎月十四日を原稿の切期日に定めます。また本誌への御寄稿は、當月以後、便宜上すべて『本郷區眞砂町十五番地内藤濯』宛に御とゞけ下さるやうにお願いいたします。たゞし廣告原稿、圖書雜誌などは、從來のとほり六合雜誌社宛に願ひます。

創造し、批評し、生活して行つたならば、そこに新しい要求を含んだ生活が生れるであらう。自分等は自ら要求しなければならぬ、扉を叩かねばならぬ。自分等自ら生命と光明とを要求しなければならぬ。著者はこんな見地からして、徹底的に殆んど宗教的な敬虔の念を持して、吾々の生活を批判しつゝあるのである。最後に著者が何故に人生に對して、そんなに深い光明や敬虔や、信愛を感じせらるゝかに就いては、尙ほ少し論及せらるゝの餘地があるやうに思ふ。それは兎もあれ、著者の新しき論壇に於ける權威は、今更ら贅言を要しない。本書によりて、我が邦の思想界が、人生批評の一權威を加へ得たることを喜ぶのである。(價一、二〇)(吉田)

▲神道神代の思想 田中治五平著 神代思想發行所

『神代の思想』といふが、内容は必ずしも神代とは限られてゐない。要するに外來の思想が未だ日本に輸入されなかつた時代の、日本人の神觀なり、宇宙觀なりを、哲學的に解剖し、批評したものである。即ち佛教や儒教の感化が、まだ日本に及ばなかつた時代の純粹な大和民族の宗教觀念の哲學的見解である。古代に於ける日本の宗教はいふまでもなく、神道である。本書は神道の歴史或は、傳説を通じて見たる古代日本人の宗教思想を、縦と横との二面より批判したるものと見做すべきである。全篇は序論、神格論、人格論、靈格論、神人の關係論、宇宙論、道德論の七章より成り、引例索證頗る努めたるものである。兎も角宗教が眞面目に、しかも合理的に思考せらるゝ今日、殊に我が邦唯一の宗教であつた神道が(無論神道は宗教に非ずなどいふ人もあるかも知れぬが、私は宗教だと思ふ)新しき人の新しき哲學的見地から、研究

されるといふことは、單り日本の思想界宗教界の爲めばかりでなく、廣くあらゆる國の思想家、宗教家にとりて、甚だ深い意義を有するものである。吾々は著者の眞率なる勞を多と爲なければならぬ。(價一、四〇)

▲家庭物語 松平雲舟編 婦人之友社發行

著者が嘗て、田舎の小さな日曜學校で、少年少女に試みた可愛らしい話や、英語の教科書に見た有益なお話を順序良く並べたものである。話の数は凡べて三十三あるが、ワシントン、ジュリアス、ダイオゲネス、ソクラテス、フランクリンやそれらに、教訓的の意味を含みながら、讀んで人を飽かせないお話である。少年少女の健全な讀みものとしてお薦めをいたします。(價〇、五〇)

▲狐禪狸詩釋 清潭著 丙午出版社發行

丙午出版社の大正文庫第六編として出版せられたるもの。喝兎、放蒼鷹、因指見月、松鳴不暇風、潤關谿長苔滑、萬丈巖前一點空の六篇、及び附録として舊雨一篇を添へたり。全篇を通じて感想的な詩論、詩語を以て充たされてゐる。菌切れの宜い文章と、きび／＼とした斷片的な批評が思はず人をして全巻を破讀せしめる。全體の氣分が一種の禪的な味を帯びてゐるのに、著者の清新な批評眼が、更らに強い新しい詩情を躍らせる。秋聲既に窓前を訪ふの時、悠々の情を味はんとする人々の好讀物たることを失はぬ。(價〇、六〇)

院長診察、月、水、木、金、午前、入院、診後應需、林、峰間、兩副
長、八目下當院ニ在勤

電 八八八(病院用)
(本 八九八(私宅用))

東洋内科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋附近

院長

醫學士 高田 畊 安

神奈川縣高座郡茅ヶ崎海濱從停車場半里

電、チガサキ二一番

南湖院

河野、高橋、兩副長、八目下當院ニ在勤、院長診察、土曜日午後
入院、診後應需

教會觀察記

——次號より連載——

私達は月々のあらゆる藝術的創作品に對して、權威ある批評を要求すると同時に、また月々の教壇に於ける説教や講演に對しても、同じ程度の價值を以て、眞面目な批評を要求するのであります。この切なる要求よりして、私達は最初の試みとして、都下の主なる基督教會の説教參聽記を、本誌上に掲げて見度いと思ふのであります。私達はつとめて眞率な態度を持して、教壇界の新らしき批評家たらんことを期するのであります。

何れの教會を、何時訪れるか、そんな豫定はいたしません。たゞ風の來るがく、風の去るが如く、氣の向くまゝに、あらゆる説壇教の前に聽くつもりであります。

内外教育評論社編著 (菊判六百二十頁)

增補 七版 文檢受験指針

▼全一冊——送料共金壹圓八錢▲

文檢試験委員數十家の談話と受験合格者

數十氏の受験談とよなりたる本書は受験

者より多大の歡迎を受け茲に増補新版を

發行するに至る。本書は受験志望者の必

ず一讀せざるべからざる好參考書なり。

發行所

東京本郷駒込千駄木町
振替東京一二七三〇番

稲毛詛風近藤新一共著 (菊判約五百頁) 再版

文檢修身教育 法制經濟問題解答

▼全壹冊——送料共金壹圓廿八錢▲

詛風稲毛金七著 (增補參版)

若き教育者の自覺と奮闘

▼四六版二百卅六頁——送料共金五拾六錢▲

内外教育評論社

毎 一 一 日
月 回 行

新 眞 婦 人

一 部 郵
税 共 十
一 錢 △
半 年 同
六 十 錢

目 要 號 月 九

新聞紙の婦人に對する態度

■ 日盛りの花

■ 兒童の本能

■ 八ッ岳山麓農場日記(二)

カシタンカ(飼犬の話)

■ 夫の不品行と妻の不品行

■ 貴問に答ふ

■ 負けたなあ

■ 『夫婦間の談話』と『夫の不品行を苦にせる御婦人方』と

■ 家庭の不和

寄生論

■ 日本女性史(五)

■ 私の家庭からドウして病魔を退治したか

■ かたらいの少女

女の五才能

西川 文子

小口 みち子

一 記 者

吉川 たみ子

瀬沼 夏葉

高島 米峯

山路 愛山

上 司 小 劍

小口 みち子

西川 文子

高野 重三

一 記 者

齋藤秀三郎氏夫人

川 浪 胡 風

鳥林 あぐり

(後附四)

社 人 婦 眞 新

〇〇二町林込駒區郷本京東
六五五四二京東替振

所 行 發

每月一回
一日發行

生活

第十一號
第九月

一部二十五錢
郵税二錢

挿 畫

首の習作……………アウギュスト、ロダン
煙草をのむ人……………ポール、セザンヌ

記 事

反逆(ジャン、クリストフ)5……………高村光太郎譯
結婚迄(2)……………岸田劉生
太陽崇拜……………福士幸次郎
ロダンの言葉……………木村莊八譯
ある夫婦(小説)……………岸田劉生
消 息……………惣 太 實

發行所 東京牛込區水道町五三番 日本洋畫協會出版部
振替 東京四三七三番

●地方書店に告ぐ

- 一、雜誌書籍の發送は東京の各書店と同時に爲す、
 - 一、發送、返品共に一切郵便に依る事、
 - 一、雜誌書籍代金勘定請求は、參ヶ月乃至半ヶ年毎に於て爲す、
 - 一、發送上其他に於て不都合を認められたる場合には直に御通知を乞ふ、
 - 一、代金を請求しても更に拂込なき時は直に發送を停止すべし、
 - 一、御送金は成る可く振替貯金を使用せられ度し、
- 大正二年九月

勞働問題の先驅者
友愛會の機關新聞

友愛新報

定價 郵部 十
價稅 部 一
部 一 共稅 郵部 十
金 部 金 前
三 五 十
錢 厘 錢

發行所

東京市芝區三
田四國町二番

友愛新報社

六合雜誌社

東亞之光

發

九

—

日

册

價前

二
一
貳

錢四

錢

士 移

五

○宗教哲學の一般的特色

森
林
太
郎

行發會協亞東

替一

□
○

庚辰

京番

京番

注意

一、本誌は前年迄は本會及び本誌に特別關係ある人には進呈致居候處今回内部の整理と共に每號無代進呈は何人にも致し不申事と相成候間御愛讀の方は此の際本年度よりの誌代御送附下され度候

二、本誌は一切前金にあらざれば發送致さず候

三、御送金はなるべく安全なる振替貯金に依られ度候

四、若し郵便爲替にて御送金の場合は芝區三田四國町二番地六合雜誌社と指定し拂渡局を三田芝園橋郵便局と指定せられ度候

五、本誌代金に對しては領收證を差出さず代金領收次第御注文通り發送可致候又前金切れの節は帶封に

(前金切)と押捺致候間早速御送金可被下候

六、本誌の廣告に關しては御照會次第詳細に御通知申上ぐべく候

七、本誌への御寄稿は凡べて、本郷區眞妙町十五番地

内藤濯宛に願上候

八、定價は内容の改善發達と共に七月號より下表の如く改定致候間御承知下され度候

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵稅共
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵稅共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵稅共
● 海外は郵稅一冊に付金六錢(清國を除く) ● 臨時號出版の際は規定以外に代金申受く			

本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通		一頁	金拾貳圓
普通		半頁	金六圓

●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候
●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候

大正二年八月三十日印刷納本
大正二年九月一日發行
(毎月一回一日發行)

定價貳拾錢
稅共

發行兼編輯人 鈴木 文治
印刷人 山本 與一
印刷所 株式會社 秀英 合

發行所

東京市芝區
三田四國町

統一基督教弘道會

賣捌所

東京堂◎同文館◎北隆館◎東海堂◎上田屋
◎警醒社◎教文館其他全國有名書店

新刊

ト ス ト イ
遺作

土岐哀果氏
譯

隱遁

全一冊四六版
美裝箱入
正價七十五錢
郵税内地八錢

懷疑と矛盾と不安と苦悶との八十年の過去から通れて、半夜竊かに僧院に隠れんとし、途上岡らずも荒
寥たる一寒色に斃れるまで、巨人トルストイの苦衷は、果してどんなであつたか。其の晩年の偉大な胸
中の秘密を死後に發見せられた偉人自身のベンの迹によつて知ることとは、實に何たる悲痛であらう。吾
人は肅然として此の遺作を心讀しなければならぬ。

●大好評
●忽再版
●矢口達氏譯

巖の處女

總クロース特製美本箱入
正價一圓十錢郵税内地八錢

●オスカア、ワイルド作
●本間久雄氏譯
●矢口達氏譯

新刊

架空の頽廢

袖珍新型美裝
正價金四十錢
郵税内地四錢

享樂主義耽美派の第一人者たるワイルドが、矯激なる論法と奇詭なる言辭とを擅にして「美のための藝
術—藝術のための藝術—」を、最も警拔明快に論斷主張した對話體の論文である。向日葵の花を着け、孔
雀の羽を振つて並樹大路を闊歩したる詩人、樂欲と歡樂に耽り、情熱の奔放に身を任せたる一世の鬼才
ワイルドの面目が紙面に躍動して居る。

發行所 東京 小石川町 新陽堂

振替 五五七 東京 〇番 賣捌 各書店

劇と詩改題

面目一新

内容充實

創造

九月號要目

改題 紀念 モンナヴンナ號

詩歌十數篇
體裁又極美
寫真數葉

- | | | | | | | |
|----------------|---------------------|--------------------|------------------------|------------------|-----------------|-------------------|
| ● 毒藥の壺
(感想) | ● 平和祭
(戯曲ハウプトマン) | ● 神
(小説アルソヒバセウ) | ● 永遠の道へ
(小説ウスハンスキイ) | ● 二十二本の針
(小説) | ● ボヘミアン
(小説) | ● 改題の辭その他
(感想) |
| 相馬 御風 | 泰 豐 吉 | 本間 久雄 | 米川 正夫 | 山 川 亮 | 山 崎 俊夫 | 清 浦 青鳥 |
| 島村 抱月 | 清 浦 青鳥 | 仲 木 眞一 | 中 村 吉藏 | 長 谷 川 天溪 | 島 村 民藏 | 丘 草 太郎 |

- | | | | | | | |
|------------------------|------------------------|-------------------------|-------------------------|----------------------|------------------------|-------------------------|
| ● 「モンナヴンナ」の思想面
(評論) | ● 「ヴンナ等が二つの戀愛」
(評論) | ● 「モンナヴンナ」の劇的價值
(翻譯) | ● 「内部」と「モンナヴンナ」
(評論) | ● モンナヴンナ觀劇追憶
(感想) | ● 獨佛の「モンナヴンナ」劇
(翻譯) | ● 「モンナヴンナ」の作者まで
(翻譯) |
|------------------------|------------------------|-------------------------|-------------------------|----------------------|------------------------|-------------------------|

東京堂書店

發賣所

東京市神田區
三田二

定價
卅錢
郵稅
二錢

Library of the
 PACIFIC UNITARIAN SCHOOL
 FOR THE MINISTRY
 Berkeley, California

六命雜誌



明治三十五年十月廿七日第三種郵便物認可
 大正二年十月一日發行(每月一回一日發行)

六合雜誌第三十三年第十號

號 月 十

(明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可)
六合雜誌第三拾三年第九號(大正二年九月一日)

日發行(每月一回一日發行)

本誌
【六合雜誌】

THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 393. October, 1913.

CONTENTS.

L'automne (<i>Frontispiece</i>)	A. Stevens.	
The Sixth International Congress of Liberal Religions in Paris.	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	2
The Last day of the Life of Lafcadio Hearn.....		
.....	Mrs. S. Koizumi.	16
Truth and Light in the Clod.....	A. Naitō.	23
Philosophy of Change.	W. Nomura.	30
Ellen Key and Feminism.	T. Haraguchi.	40
<i>Episode.</i>	K. Satō.	49
<hr/>		
Religious Life and Art.....	I. Aihara.	53
Religious Realization in the Drama.....	T. Iba.	59
Art and Religion for Life's sake	K. Katō.	62
<hr/>		
Two Kinds of Life	Prof. H. Minami.	66
The Creation of One's Destiny.....	G. Yoshida.	77
Sorrow and It's Significance in Religious Life		
.....	Prof. T. Okada.	85
<hr/>		
The Preface of "New-day" by Romain Rollan.....	A. Naitō.	101
<i>A poem</i>	K. Satō.	103
My <i>Kaku-chan</i> (<i>a novel</i>)	J. Ishida.	108
<i>A poem</i>	N. Fujii.	106
"Les Aubes" (<i>Emile Verhaeren</i>).....	G. Yoshida.	121
<hr/>		
Topics of To-day.....		135
Unity Hall Reports.....		136
Books of the Month		138

Published Monthly by the

TÔITSU KRISTOKYŪ KŌDŌKWAI,

2. Miya, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

始終神様に

近づいて

清い心を

持った者に

何の悪魔か

誘惑の手を擴げましょう。

朝夕ライオン歯磨を使つて

美しい歯を具へた口から

何で病の黴菌が入り込みましょう。

(入袋大用庭家)





九月十日の記

同

人 九五

文藝欄

『新しき日』の序

内藤 濯 譯 一〇二

秘密の花 (詩)

佐藤 清 一〇三

革ちやんと私 (小説)

石田 樅 村 一〇八

水繪の秋 (詩)

藤井 夏 人 一〇六

藝術座の第一聲

S T U 一〇〇

黎

明

(戯曲・エル・アレン作)

吉田 絃二郎 譯 一〇三

時評

東北に於ける治水策 (内ヶ崎) 兩陛下の鑛山行幸啓 (鈴木) 對支外交の教訓 (同上) 兇惡

なる犯罪の流行 (同上) 野次馬的國民性 (内ヶ崎) 確信と寛容 (三並)

■ 惟一館だより

一三三

■ 新刊批評

一三六

■ 編輯局より

一三八

六合雜誌第三十二卷第十號目次

秋

(口繪)

本

欄

アルフレッド・ステヴァンス

光は巴里より

内ヶ崎作三郎

二

小泉八雲臨終の記

小泉節子

一六

塵の中から

内藤濯

二三

流轉思想と東洋哲學

野村隈畔

三〇

エレンカイの思想

原口竹次郎

四〇

エピソード

佐藤清

四九

宗教生活と藝術

相原一郎介

五三

宗教的表現と演劇と

伊藤孝

五九

生命中心の宗教と藝術

加藤一夫

六二

二種の生命

三並良

六六

運命の飛鳥

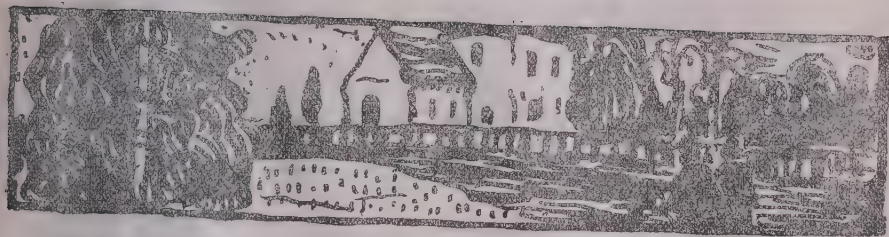
吉田絃二郎

七

悲哀の宗教的使命

岡田哲藏

八五





秋

New Arrivals

Armstrong—Art in Great Britain & Ireland	3.00—.08
Aston—Shinto	.50—.08
Bacon—Japanese Girls & Women	1.75—.08
Brandes—William Shakespeare	5.00—.16
Briggs—Fundamental Christian Faith	3.00—.12
Carlyle—Heroes & Hero Worship	1.50—.06
Cassell—French English Dictionary	1.75—.12
Godet—Commentary on St. John's Gospel 1 set 3 vols.	9.00—.24
Green—Handbook to the Grammar of the Greek	
Testament	3.75—.12
Hastings—Dictionary of the Bible	10.00—.24
Hourticq—Art in France	3.00—.08
Kernahan—Bedtime Stories	1.25—.12
Kikuchi—Japanese Education	2.50—.12
Menzies—History of Religion	2.50—.08
Moffatt—The Theology of the Gospel	1.25—.08
Loofs—What is the Truth about Jesus Christ	2.00—.08
Mckintosh—The Person of Jesus Christ	5.25—.12
Marshall—Economics of Industry	1.75—.08
Moore—Christian Thought since Kant	1.25—.08
Morley—Life of Gladstone 1 set 2 vols	5.00—.20
Morley—Life of Gladstone 1 set 3 vols	1.50—.12
Peabody—The Approach to the Social Question	1.00—.08
Peabody—Jesus Christ & the Social Question	.25—.06
Pitman—Key to Pitman's Shorthand Instructor	.75—.06
Royce—The Sources of Religious Insight	2.25—.08
Rigg—Art in Northern Italy	3.00—.08
Stopes—Plays of Old Japan, the 'Nō'	2.50—.08
Stowe—Uncle Tom's Cabin the Twentieth Century	
New Testament	.85—.08
Warkman—Christian Thought to the Reformation	1.25—.08
Weymouth—New Testament in Modern Speech	1.35—.08

六
合
雜
誌



第參百九拾參號

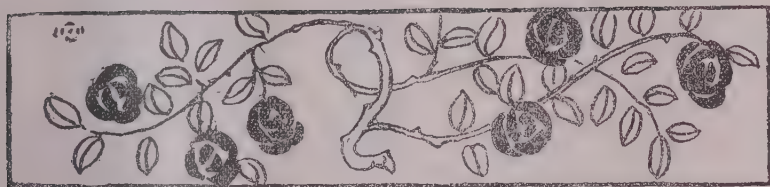


報道を掲げたる數冊の雜誌がある。それに基いて、歐米に於ける自由基督教最近の飛躍に就いて述ぶる所あるは、興味あることであると思ふ。

二

先づ大會の開かれたる佛蘭西には、少數ながらもユーグノー教徒の子孫があつて、かの大多數を占むる羅馬教徒の間に交りて、なほその旗幟を鮮明にしてゐる。また羅馬教徒中にも、近代主義者なるものがあつて、錚々たる思想家が尠くない。例へば、佛蘭西學院に於いて、宗教史を講じつゝあるロアジイ氏の如き、或は深遠なる學者ウータン氏の如き、または巴里大學のリベリヨール氏の如き皆然りである。しかしこれ等の近代主義者は、新教徒と事を共に爲るを好まない。彼等が大會に参加しなかつたことは、頗る遺憾とする所である。然れども巴里大學の名譽教授エミール・ブワトルウ博士を大會議長に推薦し得たることは、豫想外の成功であつた。彼は故と羅馬教徒として教育せられ、今猶ほ羅馬教會に屬すと雖ども、彼は進歩主義に對しては深き同情者である。彼はモンペリエ、ナンシイ及び巴里の諸大學に於て、哲學教授として名聲を博した。彼の近著「科學と宗教」は歐洲の各國語に翻譯されてゐる。全卷を貫く要旨は、近代思想の結果を受け容るゝと同時に、宗教より靈動を仰ぐことが出來るといふのである。彼が近頃、佛蘭西の學士會員に推舉せられたるは、思想家及び公人としての彼の人望あることを證明してゐる。頃者大英學術協會も、彼を外國會員として推した。

副會長としてはシャルル・ワグネル氏及びロバート・テイ氏がある。ワグネル氏はその著「簡易生活」



光は巴里より

内ヶ崎作三郎

——第六回自由宗教萬國會議の報告——

一

一千九百十年の夏八月であつた。獨逸柏林市シヤロテンブルグの將校集會所に於て、第五回自由宗教大會が開かれた。この大會はこれより先、ボストン、倫敦、アムステルダム、ゼネヴァ等に於て開かれたのであつたが、それは主としてユニテリアン派の人々の計畫であつた。然るに柏林大會は一躍して全世界の進歩的宗教者を網羅する大集團となつた。獨逸の各大學は、第一流の神學者をその代表者として送つた。英、佛、米も亦自由基督教の精英をすぐつて代表者となした。その大會は頗る深い印象を列席者の上に殘した。

第六回の大會は本年七月十六日より、一週間に亘りて巴里に於て開かれた。

米國より會する者二百、英國より一百、獨逸、伊太利、瑞西、丁抹、和蘭、白耳義、匈牙利等何れもその代表者を派遣した。その内容の豊富なることは、曩の柏林大會に比して多く遜色ない大會であつたらしい。今私の手許に該大會の

七月十六日の夜、各國の代議員は、巴里委員の歡迎を受ける爲めに農藝會館に集合した。嘗て伯林大會が將校集會所の慘憺たる戰爭畫の下に開かれたるに對して、何等不思議ある對照ではないか。

當夜の司會者は牧師シャルル・ワグネル氏であつた。彼は祖先傳來の信仰的傳説に敬意を拂へども、新しき時代は常に新しき問題とその困難とを有してゐる。新宗教は包括的にして形式に拘泥するものでない。基督教徒、回教徒、猶太教徒、その他種々の信仰を有する團體の間に、友情の念が存せねばならぬといふことを述べ、最後に吾人は諸君を佛蘭西の舊き郷土に、ジャンダルクと、ユグノーと、勳騎士と、人權論の國へ歡迎すると結んだ。牧師ロベルティは、オラトアールの教會を代表して祝辭を述べた。彼は彼の教會の立ち場を説明して、自由にして且つ保守であると言つた。思想の自由を信ずるや堅く、しかも基督の人格に對しては、深き愛着を有してゐるといふのであつた。續いて獨逸側からは、伯林のマックス・フイツシエル博士と、クレーマア氏がヘッシーを代表して立つた。其の他教師ワルバウン氏及びフランク・フォルトのフォールスタ博士等が齊しく立つて答辭を述べた。ワシントンの合衆國上院牧師ピアース氏は、米國のユニテリアン教徒を、シャツター博士は米國ユニヴァーサリスト教會を、ラビ・ステヴン・ワイズ氏は改革猶太教徒を代表して答辭を述べた。ラビ・ステヴン・ワイズ氏は、宗教の中心眞理は、「汝主たる神を愛すべし」、「彼等は劔を劔に代へ、予を剪枝刀に代へん」といふ二句に存すと結論した。彼はまた、將來に於いて大會がエルサレムに於て開かれんことを

を以て日本の讀書界にも知られてゐる。その他出席者の中のポーター・モリー氏は、嘗て巴里の新
 教神學校々長の任に在つた人であつて、文學、歴史、神學の方面に廣き研究を積んでゐる。彼は久し
 き以前に英國ユニテリアン運動の歴史を物したことがある。最近の著述中に「諸宗教の道德的一致」
 といふがある。ポール・スターフェル氏は、ボルドウ大學の文學科の科長である。ドレフー事件に於て
 は、彼れはこの不幸なる大尉の熱心なる辯護者であつた。その爲めに多くの敵をも作つたのである。彼
 は多年、自由新教の維持者であつた。バウル・イアサント・ロアヅン氏は昨年レ・ロア・ド・ロムの春、永逝したるベ
 ル・イアサントの子である。彼の父が神學上の論客でありし如く、彼は政治上の論客である。彼は「
 人間の法則」といふ獨立民主的の新聞紙の主筆である。彼は近頃大統領ポアンカレ氏を攻撃した。
 第三者はポアンカレもロアヅンも齊しく、佛蘭共和國の爲めに全力を盡しつゝあることを疑はな
 い。巴里の自由猶太教徒はラビ・ジェルマン・レヂイユー及び下院議員テオドル・ライナツシユに
 依りて代表せられた。彼等の屬するシナゴグ（會堂）は、土曜日の代りに日曜日に宗教的儀式を行
 つてゐる。彼等は基督教徒ではないが、正統的猶太教徒の守るところの多くの習慣を捨て、終つた。獨
 逸からは「基督教世界」の主筆、マールブルグ大學教授ラーデ博士が出席した。伊太利からは前總理大
 臣ルッツァー氏及び、近代主義者であつて現在國會議員たるムーソー氏が見えた。米國からは、ユ
 ニテリアン協會々長サミユエル・エリオット博士、チアーレス・ウンター博士、スタンフォード大學
 前總長ジヨルダン博士等が主なる代表者であつた。英國は牛津のカーペンター博士、牧師ロンダー・
 ウィリアム、テューダー・ジョンズ博士等が主なるものであつた。

讀んだ。ヴォルテールは往々にして、皮肉冷嘲を擅にしたれども、その根柢に於ては、誠實であり宗教的であることを失はなかつた。彼は神聖なる基督教を尊敬した。彼はその時代の腐敗せる教會から、神聖な基督教を峻別して考へた。モンペリエー大學の教授ドリヤツクはルツソーに關する論文を發表した。彼によればルツソーは自由基督教徒及び實際的理性の解釋者であつた。フランク・ブオー氏は、ジュリユーに關して、ワッレー氏はエドガール・キチーに關する論文を讀んだ。

同日午後ブートルウ教授は初めて、大會の議長席に着いた。彼は「バ斯卡ルによれる心情の理性」に就いて講演をなした。

教授は近代の宗教思想よりして理性を除外するの不可能なることを述べて、さて理性とは何ぞやとした。理性に二種ある。一は論理的に議論し、形式的に分析する。他の理性は更に完全にして靈活なるものにして、種々にある諸實在の内部の調和を觀察するものではあるまいか。バスカルが「心情は理性の知る能はざる特有なる理性を有す」といへるは、これを意味してゐるのであると思ふ、これは人生に於ける感情と理性との矛盾を指摘せるものでなくして、バスカルが二種の理性を信じたことを證明するのである。一は即ち形式的、分解的、機能的なる理性、他は更に深く、殆んど直覺的機能なる理性である。形式的理性は人間を研究するには未だ充分ではない。何となれば、人は絶えずそれ自身を超越しつゝあるが故である。コントは人類は神を要せずと主張したが、しかし人類に神の如き完全を賦與しなければならなかつた。即ち人にありて自然は、超自然を追求する一瞬間に過ぎないの

希望した。英國ユニテリアン協會を代表して、牧師ローバー氏は答辭を述べ、殊にユグノー徒が、英國に爲したる大貢獻を表彰した。マーテリノー博士の如きはユグノー教徒の子孫である。メーリルボンのモリソン牧師は、英國々教會の廣派プロテスタントを代表して、英國々教會の寛大なることを述べた。瑞西はゼテバのローチャット教授によりて、自耳義は牧師レー氏によりて、和蘭はライデンのクローテ・エーゲン教授によりて伊太利はフロレンスの牧師コンテ氏によつて代表せられた。その他セイロン錫倫の近代佛教徒を代表して、ジャヤテラカ氏、印度の自由回教徒を代表してカルツデン氏が立つた。

四

第二日は宗教的自由に對する佛蘭西の貢獻に關する論文の朗讀があつた。座長は自由猶太教徒にして、下員議員たるジーク・フリード君がこれを勤めた。最初にボストンのサムユール・エリオット博士は、佛蘭西に於ける宗教的自由の先驅者アルビゲンス及びワルデンスの二派、即ちウイックリツフ及びブルテル以前の新教主義者に就いて讃辭を呈した。第二の論文は牧師ロベルターのカルヴァン論であつた。カルヴァンその人は真正正銘の正統主義者であつたが、瑞西、佛蘭西、和蘭、亞米利加に於いて、彼の説を繼承したる團體は次第に自由主義の傾向を示して、その態度倍々鮮明となつた。即ちカルヴァン主義の犠牲者セルヴィタスの爲めに紀念碑を建設したるものは、新教徒のロビスピールと呼ばれたるこのカルヴァンの精神的子孫に他ならぬのである。教授ウイノーは十六世紀の自由基督教と、カステリオンの事業とに就いて述べた。教授ボーチー・モーリーはヴォルテールに關する論文を

リストフは宗教に關する民衆の新しく、且つ盛なる興味を反射してゐる。かゝる深き靈的情操を有する作者の出現は、佛蘭西將來の爲めに祝すべきである。

ジュリアン・ド・ナルフォン氏は、羅馬教會内の改革者モンタランベルに關する講演をなした。彼によれば、自由と教權は羅馬教會に最も良く調和せられてゐる。或る程度までの反抗は可なりとしても、教會そのものを害し、或は破壊の程度まで進行さしてはならぬ。このジュリアン氏は言ふまでもなく、羅馬教の近代主義者である。アムステルダム牧師ギラン氏は、昨年永眠したるペール・イアサントを賞讃した。その他多くの論文が發表せられたが、こゝにはそれ等は悉く省くことゝ爲した。

五

金曜日の朝ブウトルウ教授は、議長講演を試みた。その内容は曩に試みられたるバスカル論中の思想を更に擴大したるものであつた。即ち科學全盛の世紀にありては、一切の事物は研究の對象となる。死物は心理學者にも、社會學者にも等しく興味を有する。しかしながら宗教は常に靈活なる原理として、研究せられなければならぬ。吾等は吾等の周圍に在る世界の種々相と必要なる交通をなしつつ生活營まざれば宗教的生物としても、單に神とのみ交通を持續して、孤獨の生活のみに生くべきではない。吾等は吾等自身の爲めにのみ生くることは出來ぬ。或意味に於て、また或程度までは、凡べての人の爲めに生きなければならぬのである。宗教に於ける最高の困難は、苦闘する意志と、それに反抗する人生との種々相を調和することゝにある。

である。故に科學は安成したる計畫を發見することに非ずして、不斷の活動である。即ち睿智それ自身の作用に他ならない。科學と宗教とを結び附くるものは、多くの事物は理性を超越することを、哲學的に認識することである云々。

これに亞いてマールブルグ大學のボルンハウゼン教授は、十九世紀の佛蘭西文學に於ける宗教思想を論じた。文學が一國民の心靈を反映することは、作者が或る程度まで、彼の時代の共通なる思想を發表する爲めのみに非ずして、出版界の現代の境遇は、作者は彼に同情を寄せ、彼を支ふる讀者を持たなければならぬといふことを承認するからである。ルーテルとシュライマツヘルとが、各々彼等の時代を代表したるが如く、スタンダルは佛蘭西の革命的及び僧侶的勢力を代表した。ラムネー及びビルメーートルは、人生に於ける牽制力として、腕力を過重視した。グアミツシイに於てロマンテシズムはその絶頂に達した。この運動はこれに隨伴したる自由思想と共に、一千八百四十八年の革命後一掃せられた。この時より以後フローベエル及びゾラの作物に結實したる現實主義が始まつた。佛蘭西に於て、宗教に對する宗教の似而非科學的批評が、民衆の間に不信仰を傳播したる惡影響は驚くべきものである。しかしながらベクトペーや、ブルンチエールの如き辯證者が著はれて、反動の時代が來た。ルネー・バザンの作物を見れば、羅馬舊教は唯一の宗教であるが如く描かれてゐる。ビエル・ロテーの作物の神秘思想の中に、ベルグソン及びブウトルウの思想の新傾向の反映を認めることが出来る。しかしこの新思想の影響は、目下斷案を下すことは出来ない。一千九百六年に國家と教會の分離が行はれて、現實主義が屏息した。爾來社會は競うてロマン・ローランを歡迎した。この作者の傑作ジャン・ク

一種の幻影に過ぎない。近代科學の特色は、あらゆる手段を用ひて、かの殆んど攫取することの不可能であるかの如く見ゆる一切の形態すらも、その法則に服従せしめたる成功である。然らば科學と結合することを恐れて常に逡巡したるこの内部の領域に於いて遺る所は何であるか。一切の思想を奪ひ去られて、醇乎たる直覺の或一物のみが遺るのである。しかしながら、かゝる直覺の作用は何であるか、甚だ曖昧なるものではあるまいか。されど宗教的實驗に、その宗教的特色を與ふるものは、この思想があるからである。

さて理性と科學との支配を驅逐する眞實なる方法は有り得ないのである。人は彼自らを調和して行動せんと欲する生物である。彼は早晚彼の信仰と彼の智識の間に、何等かの結合點を發見せんことを要求する。彼は水も洩らざる密室のなかにのみ蟄居するに耐へないのである。バスカル曰く「吾人は思想によりて吾々自らを昂めなければならぬ」と。この内部の調和と、和合と、智的誠實とに對するこの要求とは、吾人の理性より生れ來るのである。而して理性を捨るといふことは、人としての威嚴を捨てることである。されど理性といふ語を發音するだけでは、理性の所在を明かにすることは出来ぬ。吾人をして事物の關係、交渉、反對等を判斷せしむるものは、理性である。しかしながらこの推理的の理性は果して一切の理性であるか。普通の言葉では推理力より全く異なるのである。充分なる定義を下せば、理性——靈活にして、完全なる理性——は、關係の一致及び實在物、生物及び具體的事物の間の内部の調和を識別する機能である。哲學、殊に純正哲學は單純なる理論的、形式的理解よ

さて宗教は近代生活に於いて、危機に立ちつゝあるものであると言はなければならぬ。一面に於て民衆は、人の自然的良心のうちに源泉を有せざる一切の教權を否定するに至る時は、信仰及び人生よりあらゆる宗教的なる因子を除外せんと努めつゝあるが如く見られる。然るにこれに反して、科學は驚くべき無限現象をば、機械的法則の單純なる遊戲と説明して、一切宗教の根本的假定を信ずる機能をば、心意より全然除外するやうに思はれる。しからば是等の境遇に對して、單に情性の勞力の爲めに何等の省察をも爲さずして、醉生夢死するを好まず、眞理と義務の觀念に隨順して、その理性を利用して、自ら決心せんと企つる所の人は、如何なる態度を持すべきか。多くの人々の心にとりて、この境遇に適應する最も適當にして、確實なる方法は、分離の一途である。彼等は、宗教をば自然と科學とよりして、出來得るだけ完全に分離するを目的としてゐる。宗教と科學とを衝突せしむる所以は、同時に接觸點が存するからである。もし宗教にして、自然と科學の範圍と毫も交渉する所なき別世界に於いて行動するとせば、兩者の衝突は見るべからざることである。この見解に隨へば、宗教は人生の最も深き内部の生命にのみ關係あるものと認むるのである。宗教は最早や人の理解力に訴ふることを爲ない。そはたゞ彼の意志及び生命の、最も深所なる原則にのみ關係する。即ち直接に見、且つ計畫するものゝ以外に信ずることを欲せざる科學が、等閑視する所に別天地の儼存することが明かである。この説は抽象的にして、理論的の見地よりすれば、便利なる教義である。しかしながら、それは實際に於いて維持することは極めて困難な教義である。無論安逸を貪り、無關心、智的怠惰の生活を送るものは顧るに足らぬ。吾人が心靈の一隅に積極的科學が穿入することの出來ぬと信ずるは、

さて神の概念は科學的概念だけでは物足らぬ。概念の神は必ずしも宗教的實現の神ではない。概念の神は有限にして決定せられてある。宗教的實驗の神は無限である。しかしそは盲目的無決定といふ意味ではない。神は一切の完全を包含するが故に無限なのである。宗教的靈魂の神は、單に科學的の定義のみでは物足らぬ。人間が交通することの出来る生物でなければならぬ。亞いて人は神の完全に參與しなければならぬ。即ち「御國を來らせ給へ、地上に御心をなさせ給へ」といふ祈の精神を發揮しなければならぬ。また神を良く理解する爲めには、寛容にして包括的な態度をとらなければならぬ。無限の善意は、眞理と完全の思想の一部分を作らなければならぬ。ヤコブ・ボヨルメーは、その「あけぼの」のうちに次の如く誌してゐる。

森の鳥を想へ。彼等はあらゆる聲音と、あらゆる仕振りにて、己がじや好むまに／＼、神をほめたゝふ。吾等は、神はこの多種多様なることによりて、憤を發して、この統一なき喧騒を静め給ふと想ふか。無限論は一切の生物を愛し給ふ。

六

これに續いて、此の朝の題目は「普通的宗教は望ましく、且つ可能なりや」であつた。ゲツチンゲン大學のオットー教授は、第一の論者であつた。彼はこの問題をば世界的言語に比した。エリザベス女王が嘗て、新教を、英國民に強ひたるが如く、または阿育王^{アッガ}が印度に佛教を強ひたるが如く、普遍的宗教が世界各國に強ふることが出来るであらうか。合理論の破壊的感化の面前に於いて多くの人々のうちには各宗教の間に不必要なる相異が破壊せられたる後は、人類が要求する、靈動と慰安とを與

り區別せられたるその靈活なる理性そのものゝ助けによりて、事物の具體的關係を探究するものである。されば吾人の目前にある問題に對して、若し吾人は常に實驗的、或は實際的の見地よりのみならず、または抽象的理論の見地よりのみならずして、適當なる意味に於ける哲學的見地より考察する時は、何事が生起するであらうか。

自然と科學とは、この見地より探究せらるゝ時は、人が自己を超越せんとすることを現はす。科學は永遠に發達すべき未知數である。決して終局に達したるものではない。かく定義すれば、宗教と科學、もしくは宗教と自然は兩立し得べきものである。何となれば、彼等は互に相交錯し、互に内部的に關係を有するからである。自然と科學は、万有をば感覺に現はされたるものゝ如くに表現する。宗教は万有をば、その存在の源泉と原理とに關係せしむるのである。活動するものにあらずして、活動者に關係せしむるものである。宗教は即ち吾人をして生の創造そのものに參與せしむるものである。科學と宗教とを調和せしむる爲めには、兩者共に必要である。宗教は本來靈的でなければならぬ。神の觀念を以て靈動されなければならぬ。宗教は、物質的利害を有する思想を以て、靈動されてはならぬ。何となれば宗教は完全を實現する爲めには現實の不満足ある事を斷言するからである。それに反して、科學は自然の事實そのものを現はすものにして、永遠にして絶對の形式を現はすものではないと考察せられなければならぬ。蓋し絶對は靈界にのみ存在して、自由と一なるものである。

うと主張した。傳道的信仰はその世界征服の希望を放擲し、更らに大なる統一のなかに自らを失はなければならぬといふことを是認してゐる。世界的大宗教ですらも、この大なる發達の宗派たるに過ぎないのである。近代人にとりて建設的事業は一切宗教のうちに新宗教を闡明することである。即ちそれは一神論の原則であつて、あらゆる宗教の生血ライフブラッドである。この大理想に及ばざるものは、宗教と稱せんよりは、寧ろ宗派と呼ぶべきである。比較宗教は他の一切の宗教を説明せずしては、一宗教を説明することの不可能であることを立證した。異教の凋落に生きながらへたる一神教は、異教の後を繼いだる基督教の凋落の後にも生存するであらう。かくして古代より儼存したりし唯一の自然的の宗教は、發達の法則に隨從して、最後の普遍的宗教となるのであらう。(つゞく)

ふるに充分なる本體のみが残ると思意する人々がある。その方法は或方面に於いて、行はれつゝある混成説である。しかしオットー教授は、人爲的宗教を建設せんとするこれ等の企畫に對して、大反對を試みた。かゝる努力は世界的宗教の代りに世界的妄狂を作るものであらう。かゝる傾向は宗教の方面よりも、寧ろ却つて無宗教の發達を助長するものであらう。

第二の論者はブラッセルスの伯爵ゴブレット・ダヴィエラであつた。彼は最初に教會以外に救済なしといふ羅馬教會の原則を批評して、これ以外に三種の解釋法にありと述べた。即ち第一は基督教が嘗て、羅馬帝國のあらゆる宗教を併吞したりし如く、一宗教が凡べての他の宗教を併吞し、その宗教のみが世界人類の間に遺ること、或は凡べての宗教の無上の原則が混合することである。伯爵は該大會に非常なる同情を寄せて、その他この種の世界的會合は無意識の間に世界的宗教を實現しつゝありと述べた。彼思へらく、種々なる宗教を分離する一切の障害は取り去らなければならぬ。然らば單純なる原則は凡べての宗派によりて採用せらるゝことが可能であらう。されど各派と各個人とに對して、その根本原則に好む所のものを附加するだけの自由を與へなければならぬ。

午後に至りて、この問題は更に討議せられた。テオドル・ライナツシユ氏は、往々にして歴史的、民族的考察は、世界的宗教の建設を妨ぐるものであると述べた。彼は自由改革的猶太教徒の立場よりして、實現すべからざる統一を夢みるよりは、各宗教の間に、調合融和の現出せんことを主張した。

倫敦の一神教會セイス・イツク・チャーチのフルター・フルシユ博士は、一神教こそ宗教的信念の最後終局の形式であるだら

た、子供等とカルタして遊んで居て下さい。如何に、私それを喜ぶ。私死にしましたの知らせ、要りません。若し人が尋ねましたならば、ハア、あれは先頃なくなりました。それでよいです。」

私はそのやうな哀れな話し、して下さるな、そのやうな事決してないです、と申しますと、ヘルンは「これは戯談でないです。心からの話し。眞面目の事です。」と力をこめて、申しまして、それから「仕方がない」と安心したやうに申しまして、静かにして居ました。

ところが數分、たちまして、痛みが消えました、「私行水をして見たい」と申しました。冷水でとの事で、湯殿に参りまして、水行水を致しました。

痛みはすつかり、よくなりまして、「奇妙です、私、今十分よきです。」と申しまして、「ママさん、病、私から行きました。ウイスキー少し如何ですか。」と申しますから、私は心臓にウイスキー、よくなからうと心配致しましたが、大丈夫と申して居ますから、「少し心配です。しかし、大層欲しいならば、水を割つて上げませう。」と申しまして、與へました。コップに、口をつけまして、「私もう死にません」と云つて、大層私を安心させました。この時、このやうな痛みが、數日前に初めてあつた事を話しました。それから「少し休みませう」と申しまして、書物を携へて寢床の上に横になりました。

そのうちに醫師が参られました。ヘルンは「私、どうしやう」などと申しまして、書物を置いて、客間に参りまして、醫師にあひますと、「御免なさい、病、行つて仕舞ました、」と云うて笑うて居ました、醫師は、診察して、別に悪い處は見えません、と申されまして、いつものやうに、戯談など云うて、色々話しをして居ました。



小泉八雲臨終の記

小 泉 節 子

三十七年九月十九日の午後三時頃、私が書齋に参りますと、胸に手をあて、靜かに、あちこち歩いて居ますから、「あなたお悪いのですか」と尋ねますと、私、新しい病氣を得ましたと申しました。「新しい病、どんなですか」と尋ねますと、心の病ですと申しました。私は「餘りに心痛めましたからせう。安らかにして居て下さい」と慰めまして、直ぐに、兼てかゝつて居ました木澤さんの處まで、二人曳の車で迎ひにやりました。ヘルンは常々自分の苦しむところを、私や子供に見せたくないと思つて居ましたから、私に心配に及ばぬから、あちらに行つて居るやうにと申しました。しかし、私は心配ですから、側に居ますと、机のところに参りまして、何か書き初めます。私は靜かに氣を落ちつけて居るやうにと勧めました。ヘルンはたゞ、私の思ふやうにさせて下さい、と申しまして、直ぐに書き終りました。「これは梅さんにあてた手紙です。何か困難な事件の起つた時に、よき智恵をあなたに貸しませう。この痛みも、もう大きいので、参りますならば、多分私、死にませう。其のあとで、私死にますとも、泣く、決していけません。小さい瓶、買ひませう。三錢或は四錢位です。私の骨、入れるの爲めに。そして、田舎の淋しい小寺に埋めて下さい。悲しむ、私喜ぶないです。あな

した、て咲きました、しかし……」と云つて、少し考へて居ましたが、「可愛相です、今に寒くなりま
す、驚いて洞みませう、」と申しました。花は二十七日一日だけ咲いて、夕にはら／＼と淋しく散つて
仕舞ました。この櫻は年々ヘルンに可愛がられて、賞められて居ましたから、それを思つて、御暇乞
を申しに咲いたのだと思はれます。

ヘルンは早起きの方でありました。しかし、私や子供の夢を破る、いけませんと云ふので、私が書
齋に参りますまで、火鉢の前にキッチンと坐りまして、靜かに煙草をふかしながら、待つて居るのが例
でありました。

あの長い煙管が好きでありまして、百本程もあります。一番古いのが、日本に参りました年ので、
それから積り積つたのです。一々彫刻があります。浦島、秋の夜のきぬた、茄子、鬼の念佛、枯枝に
鳥、拂子、茶道具、去年今夜の詩、などのは中でも好きであつたやうです。これでふかすのが面白か
つたやうです。多くの中から、手にふれた一本を抜き出して、必ず初めに一寸、吸口と雁首とを
見て、火をつけます。座布團の上に行儀よく坐つて、楽しさうに體を前後にゆるくゆりながら、ふか
して居るのでございます。

亡くなつた二十六日の朝、六時半頃に書齋に参りますと、もうさめて居まして、煙草をふかして居
ます。「お早うございます」と挨拶を致したが、何か考へて居るやうです。それから「昨夜大層珍らし
い夢を見ました」と話しました。私共は、いつも互に夢話を致しました。「どんな夢でしたか」と尋
ねますと、「大層遠い、遠い旅をしました。今此處にかうして煙草をふかして居ます。旅をしたのが本

ヘルンはもと／＼丈夫の質でありまして、醫師に診察して頂く事や、藥を服用する事は、子供のやうに厭がりました。私が注意しないと、自分は醫師にかゝりません、一寸氣分が悪い時に、私が御醫者様に云ふことを少し云ひおくれますと、「あなたが御醫者様忘れましたと、大層喜んで居たのに」などい申すのでございました。

ヘルンは書いて居る時でなければ、室内を歩きながら、或は廊下をあちらこちら歩きながら、考事をして居るのです。病氣の時でも、寢床の中に、長く横になつて居る事はできない人でした。

亡くなります二三日前の事でありました。書齋の庭にある櫻の一枝が、かへり咲きをいたしました。女中のおさき（焼津の乙吉の娘）が見つけて私に申し出ました。私のうちでは、一寸何でもないやうな事でも、よく皆が興に入りました。「今日藪に小さい筍が一つ頭をもたげました。アレ御覧なさい、黄な蝶が飛んで居ます。一雄が蟻の山を見つけました。蛙が戸に上つて來ました。夕焼がして居ます、段々色が美しく變つて行きます。こんな些細な事柄を、私のうちでは大事件のやうに取騒ぎまして一々ヘルンに申します。それを大層、喜びまして聞いてくれるのです。可笑しいやうですが、大切な樂みでありました。蛙だの、蝶だの、蟻、蜘蛛、蟬、筍、夕焼、などはババの一番のお友達でありました。

日本では、返り咲きのするのは不吉の知らせ、と申しますから、一寸氣にかゝりました。けれどもヘルンに申しますと、いつものやうに「有難う」と喜びまして、椽の端近くに出かけまして、「ハロ」と申しまして、花を眺めました。「春のやうに暖いから、櫻思ひました、ア、今私の世界となりま

ヘルンは蟲の音を聞くことが好きでありました。この秋、松蟲を飼つて居ました。九月の末の事ですから、松蟲が夕方近く切れ／＼に、少し聲を枯らして鳴いて居ますが、常になく物哀れに感じさせました。私は「あの音を何と聞きますか」と、ヘルンに尋ねますと、「あの小さいの蟲、よき音して、鳴いてくれました。私ナンボ喜びました。しかし、段々寒くなつて來ました。知つて居ますか、知つて居ませぬか、直に死なねばならぬと云ふ事を。氣の毒ですね、可愛相な蟲。」と淋しさに申しまして、「この頃の温い日に、草むらの中にそつと放してやりませう」と、私と約束致しました。

櫻の花の返り咲き、長い旅の夢、松蟲、は皆何かヘルンの死ぬ知らせであつたやうな氣が致しまして、これと思ふと、今も悲しさにたへません。

午後には満州軍の藤崎さんに、書物を送つて上げたいが、何がよからう、と書齋の本棚をさがしたりして、仕舞に藤崎さんへ手紙を一通書きました。夕食をたべました時には、常よりも機嫌がよく、戯談など云ひながら、大笑など致して居ました。「ババ、グッドババ」「スイト、チキン」と申し合つて、子供等と別れて、いつものやうに書齋の廊下を散歩して居ましたが、小一時間程して、私の側に淋しさうな顔して參りまして、小さい聲で、「ママさん、先日の病氣また歸りました。」と申しました。

私は一處に參りました。暫らくの間、胸に手をあて、室内を歩いて居ましたが、そつと寢床に休むやうに勧めまして、靜かに横にならせました。間もなく、もうこの世の人でありませんでした。少しも苦痛のないやうに、口のほとりに少し笑を含んで居りました。天命ならば致し方もありませんが、少し長く看病をしたりして、愈々駄目とあきらめのつくまで、居てほしかつたと思ひます。餘りあつて

當ですか、夢の世の中、など、申して居るのです。「西洋でもない、日本でもない、珍らしい處でした」と云つて、獨りて面白がつて居ました。

三人の子供達は、床につきます前に、必ず、「ババ、グッドナイト、プレザント、ドリーム」と申します。ババは「ザ、セーム、トウ、ユー。」又は日本語で「よき夢見ませう」と申すのが例でありました。

この朝です、一雄が學校へ參ります前に、側に參りまして「グッド、モーニング」と申しますと、ババは「プレザント、ドリーム」と答へましたので、一雄もつい「ザ、セーム、トウ、ユー」と申したさうです。

この日の午前十一時でした。廊下をあちこち散歩して居まして、書院の床に掛けてある繪をのぞいて見ました。これは「朝日」と申します題で、海岸の早朝の景色で、澤山の鳥が起きて、飛んで行くところがかいてありまして、夢のやうな繪でした。ヘルンは「美しい景色、私このやうな處に生きる、好みます。」と心を留めて居ました。

掛物をよく買ひましたが、自分からこれを掛けてくれ、あれを掛けよ、とは申しませんでした。たゞ私が、折々掛けかへて置きますのを見て、楽しんで居ました。御客様のやうになつて、見たりなどして喜びました。地味な趣味の人であつたと思ひます。御茶も好きで喜んで頂きました。私が致して居ますと、よく御客様になりました。一々細かな儀式は致しませんでした。大體の心はよく存じて、無理は致しませんでした。



塵の中から

(感想)

内 藤

濯

私たちは、どんな場合にも、收穫者の心をもつて居るよりは、むしろ種まく人の心を有つてゐたい。私たちの生命と云ふ生命は、刈り取るべきものではなくて、何時までも播きつけて行くべきものである。

前方に收穫の日を豫想しなければ、種が播かれなないと云ふことほど、腑甲斐ない事がまたとあらうか。未來を見つめると云ふ事は、必ずしも現在を忘れ去ることでは無い。現在の意味、現在の價值、現在の不安を知らずにゐて、たゞ「何ごとも未來だ！未來だ！」と云ふ人は、其の未來に行き着くと、また「未來だ！未來だ！」と繰返し云ふことを耻としない人だ。かういふ人は、たゞ收穫の日の幻影を夢みて居るばかりで、種子を播く術も知らなければ、播くべき種子も見つからずに居る人だ。私たちは、收穫の日が來るとか來ないとか、さうした事に焦慮するよりは、むしろ自由に、大膽に、率直に、たえず生命の種子を播くに足るだけの力を擱んで行かなくてはならない。

*

*

のない死に方だと今に思はれます。

*

*

*

*

*

*

小泉八雲先生逝いて、正に十年ならんとす。今昔の感に堪へず。茲に未亡人の眞率なる追懷記を掲載するを得たるは、同人の光榮とするところ。猶ほ邦文小泉八雲傳は、嘗て僕その任にあたりしも、英國遊學に際し、之を畏友學習院教授田部隆次氏に托しぬ。田部氏公務の餘暇に同先生の詳傳を脱稿し、遠かずして公にせられんとす。思ふに一大傳記文學として、推獎せらるゝに足るものならむ。この簡素にして、しかも情緒こまやかなる文字は、この傳記の一挿話なり。讀者諸君は刮目して、田部氏の小泉八雲傳の刊行を待望せられんことを望む。

内ヶ崎作三郎記

ど、無意味な事がまたあらうか。

自分の思想は、過去も現在も同一であると云つて、思想が變化しないと云ふことを、自分の思想の權威に裏書きする事だと思ひ込んで是不なる。すべてが絶えず變化して行く此の世界に、人間の思想ばかりが、どうして變化しない謂はれがあらう。變化の裏には、やがて進歩がある。たえずなく進歩する思想こそ、權威のある思想ではないか、生命のある思想ではないか。

自分の思想の權威を思ふ心からは、眞に權威のある聲は生まれない。

※

世間には、人間の努力といふ一事を、意識的活動にのみ認めて、いはゆる無意識的活動には、少しもそれを認めない人が多い。そして、意識的努力が、多くの場合、上すべりの努力、つぎはぎの努力に墮する事を知らずに居る。

無意識と云ふことを、文字通りに解釋して、意識の無い事と思ひ込むのは、外よりして内を見る心の由々しい錯誤である。私は「自分はあの事を無意識にやつてしまつた!」と云ふ言葉の背景に、意識を意識と感じないほど、常ならぬ意識の緊張があり、燃焼があつた事を思はずにはゐられない。意識に始まり、意識に終るのが、私たちが人間の生活である。意識活動の無上なる表出、それが纏て、無意識活動の表出でなければならない。

人間の努力と云ふ努力は、自ら其の意識を感じることでできる處にのみ現はれるもので無くて、努

「たゞ生きて行く」と云ふことに、どれだけの力がありうるか。「生命をして其の流れるまゝに流れしめる」と云ふ事だけに、どれほどの創造がありうるか。

勿論、「たゞ生きて行く」と云ふ状態は、至つて素直である。樹々の芽が、太陽の光線に導かれながら、伸びるだけ伸びて行くありさまと同じく、至つて素直であるばかりでなく、また至つて自由であり、至つて大膽である。ゆくすゑには暴風の襲ひ寄る日もあるであらうが、其の日の慘ましい破滅をさへ恐れずに、力よく伸びて行くだけそれだけ、至つて大膽である。けれども、此の伸びるだけ伸びて行く力は、果して何等の背景もなしに、樹々の幹に刻み込まれたのであらうか、呼び起こされたのであらうか。

私には何うもさうだとは思はれない。と云ふのは、どんなに大きな樹木でも、どんなに小さな樹木でも、素直に、自由に、大膽に、其の芽を吹いて行くだけの力を享けるまでには、必ず烈しい生みの苦しみをして來たに違ひないからだ。必ず暗黒の冬の重なり合ふ苦難を凌いで來たに違ひないからだ。私はできる事なら、「たゞ生きればよい」と云ふやうな、飽くまで自信に満ちた態度を、端的に擲んで見たい。けれども、かゝる態度を擲んで、其處に何等の悔をも憾みをも感ぜずに居る事ができるまでには、なほ排除すべき矛盾と障礙とが、私の内外に夥しく横たはつて居ることを痛感する。

生命をして其の流れるまゝに流れしめうる心境は、たまたまなく懐かしい。この心境を可能にし、的確にし、眞實になしうるものは、たゞ刻一刻の生活を効果あるものにして行くだけの努力より外にありやうがない。努力、争闘、開拓、それら積極的の生活態度を外にして、生命の流動を云々するほ

私は、どう考へてみても、どう行つてみても自我の威嚴のみを思ひ、個性の權力のみを求めるところには、たゞ表面だけの傲慢があるばかりで、自我の曙光もなく、個性の萌芽もないことを、痛感せずにはゐられない。眞の自我、眞の傲慢は、私たち人間が、飽くまで謙遜柔和な心を抱くところにこそ、閃くのではないか、織り出されるのではないか。

*

感性がどうの、知性がどうの、理性がどうのと云つてゐる間は、とても眞剣な生活は営まれない。今日、道を教へる人々の多くは、「感情に馳せるな」とか、「知性の力を知れ」とか云ふ事ばかりを業々しく力説して、全人格的活動の勢力を説くことには、あまりに冷淡であり、あまりに粗雑である。この冷淡と粗雑とを生むものは、感情生活とか、知識生活とか云ふものを、人間の全生活から、ぬき出して見る事ができるかの如く思ふ外面的の態度に外ならない。

感性とか、知性とか云ふ事は、私たち人間の生活を批評する言葉ではあつても、人間の生活そのものにはなり得ない。生命力の發見と云ふ一事を目標にした眞剣の生活には、感情を逞しうしてゐるとか、知性を働かして居るとか云ふやうな、差別觀の介在する筈はないのだ。私たちは、斯かる枝葉の差別を云々する前に、なぜ先づ全體の生活に躍り入る事ができないのであらうか、何故まづ生命の核心に徹する事ができないのであらうか。

私たちは、いくら知性がどうの、感性がどうのと云つたところで、それらが一つに溶け合つた全的生活を體得しないかぎり、それらはたゞ言葉の上の遊戲に過ぎなくなる事を覺らなくてはならな

力を努力と感ぜない白熱のモーメントに於いてこそ、初めて眞剣である事ができる。名曲の演奏に顔をほてらしてゐるピアノリストの心に、どうして「かく斯くの曲を弾いてゐる」と云ふやうな意識を浮べるだけの餘裕があらうぞ。しかも、斯かる無上の心境を開く鍵は、意識の油を燃やすだけ燃やし得た人にのみ、ひとり興へられて居る。

*

メエテルリンクの新作劇『マゲダラのマリヤ』に現はれる哲學者のシラススは、マゲダラのマリヤに對つて、「慰めると云ふ事は、悲哀の根を絶つことでは無くて、悲哀にうち克つ術を教へることだ」と云つて居る。當然の事を當然に云ひ表はした丈けだと云ひ切つて了ふ人もあらうけれども、私たちは他人の悲哀、苦惱、失意に對するとき、それらの根を絶つための助言ばかりを、さらけ出しては居ないだらうか。悲哀の事實を否定すれば、そこに歡喜の事實が生まれてくるとは思つて居ないだらうか。悲哀を否定しやうとする心は、やがて悲哀を更に痛切ならしむる心である。私には、まだどうも、悲哀にうち克つ術を他人に示すだけの用意が、できて居ないやうに思はれてならない。

*

「人間は、その偉大が自己の弱小を識るところにすら現はれるほど、偉大である」と云つたのは、哲人のバ斯卡ルであつた。何たる聰明な言葉であらう。近ごろ私は、「自我の權威、個性の尊嚴を主張せずにはゐられないと共に、自己の弱小を痛切に感ぜずにはゐられない」と云ふ聲を聽いて、二たびバスカルの言葉を思ひ出したのと同時に、虔ましい内省の時間を贏ち得たことを嬉しく思つた。

世間には、朝から晩まで、能ふかぎり時間多く働くことを、眞剣な勞働だと思つてゐる人が少なからずあるやうだ。そして神經衰弱者は、とかくさういふ人たちの間に多い。

家の模型は、いくら並べても家にはならない。生活の新しみは、生活の量に依つて維持されるのではなくて、生活の質によつて創り出される。私は一日のうち一時間でも可いから、自我と勞働の對象とが一つに溶け合つた働きをして行かなくてはならない。

*

むかしの人は、粗雑な世界觀から、さらに空疎な人世觀を抽象して、そこに人生といふ人生があると妄信してゐた。そして斯かる觀念の傷ましい廢墟を見せつけられた今の人は、肉と血と涙と汗の渦巻から、生命といふ生命を掴みだすだけの使命をおのづから荷うてゐる。このくらゐ嚴肅な使命が、どうして他にあり得やうぞ、どうして二度と荷はれやうぞ。

しかし私たちは、かゝる使命を荷うてゐるからと云つても、決してその事を誇りとしてはならない。と云ふのは、私たちに生命の力を慾求する心はあつても、その方を自分のものにするだけの力が、あまりに乏しく、あまりに弱いことを感ずるからだ。

もはや私たちは、破壊ばかりを事としてはゐられない。破壊の一面には、何等かの建設がして見たい、何等かの光明を浴びうるだけの心が欲しい。

い。

*

メエテルリンクは、動ともすると「大きな冷たい鐵の扉」を見せてける人である。小さなタンタジイルの跡を追うて、悲しい階段をいくつともなく登つて來た姉のイグレエヌも、とう／＼此の大きな扉にぶち突かつて、何ともする事ができなくなつて了つた。私たちは、事象といふ事象を、底へ底へと切りつめて行くとき、遂には一つの何とも知れぬ不可抗力にぶち突かつてしまふ。此の刹那、ほんとうに明るい眼を具へてゐる人は、そこに所謂「あきらめ」の感じを抱く。しかし私は、この感じを表白するのに、「自覺」の語をもつてしなれば、どうも満足することができない。

眞の「あきらめ」は、一切を放擲した態度、不可知を不可知とする心から生まれるのでは無くて、不可知の實在に對する驚異の心から生まれなくてはならない。

*

私たちは、愛の事實が、平和の心境にのみ生まれるもので無くて、争闘の心境にも力よく顯はれる事を忘れてはならない。憎惡の事實にすら、其の閃影がある事を忘れてはならない。大戯曲作家のバアナアド・ショウは、憎惡の心を目して、愛の心の第一歩だと云つて居るさうだが、この言葉くらゐ、似而非博愛家の心を刺すものは少ないであらう。

二者の間に、何等かの共鳴なしには、憎惡の心も、信愛の心も醸されやうがない。

*

現象世界にも本來運動は存在しない（ツエノー）ものであると云ふやうな、奇論の生じて來るのも當然である。ソクラテースがヘラクリトスの思想のあまりに神秘的であるを評して、彼の哲學を了解するには、デロス島の潜水者を要すると云つたのは、實に深い暗示を示して居る。單に彼の哲學がデープであると云ふのみでなく、それを了解するには、一種の超推理的方法を要すると云ふ様な意味が含まれて居るではないか。

言ふまでもなく其れは潜水的方法を要する。然るに理性を以て認識しやうとするから、遂に不可解に終るのである。希臘の哲學にも變化の思想はあつて、即ち性質的變化（*αλλοιως*）と空間的變化（*μεταφορα*）との觀念はあつたが、バルメニデースの有とアナクスマンドロスの質的變化とは、到底兩立しないものと考へた。併し何うしても、ヘラクリトスの流轉思想は否定出來ない事實であるから、之を調和するには、多くの有（*Ατομ*）は本質においては不變不動、永久絶對であるが、空間において自由に運動し、流轉すと考へざるを得なかつた（*Εμπεδοκλής*）。かくして有の質的變化を否定したのである。此の性質的變化と、不變不動の本質との形而上的渾一は、ベルグソン哲學者において初めて説明されたのである。而るに印度哲學は古代において既に完成して居つた。

二

ベルグソンの使用した潜水的方法とは即ち直觀法であるが、之より生じた流動の哲學は、いかなる特性を有して居るかを一言して置かう。（一萬物は流轉に由つて生じたものであるから、若し流轉が靜



流轉思想と東洋哲學

野村 隈 畔

萬物皆流ると云ふ思想は、古來最も神秘で且つ深遠なものと想像されて來た。東洋思想の根本は本來萬物流轉にあるのであるが、西洋に於いてはあまり多くない方で、あるにしても其れは東洋思想の影響に過ぎなかつた。西洋の學者は、常に萬物流轉の理を哲學的に考へ得なかつたのみならず、萬物流轉を説くものがあつても、殆んどそれを解し得る能力がなかつた。故に流轉の思想は、深遠なものはなくて不可解なものであつた。畢竟人智を絶したものであると考へられた。

例へば歷世哲學者の名稱を與へた、エフヒサスの人々は、勿論ヘラクリイトスの哲學を了解するとが出来なかつた。彼等は「朦朧陰鬱^{ドゥングレ}なヘラクリイトス」として敬遠主義をとつたのは強ち無理もないが、堂々たる哲學者ソクラテースを以てして、猶ほその眞意を解し得なかつたやうに見える。固よりソクラテースには、流轉思想は解らない筈である。彼は概念的認識を好んだから、靜止の状態は考へ得るが、絶えざる運動變化は何うしても解らない。されば靜止は不變不動の本體にあるのみでなく、

現在である。

永劫の現在とは時々刻々の一刹那一瞬間を言ふのではない。過去、現在、未來の三世を持続的創造力の中に融合した、状態である。故に實在はその本質において不可分割であるのみならず、又その過程においても不可分である。先づこの四點をよく注意すれば、流動哲學を了解するに大した誤謬に陥らないと思ふ。

さて以上の數點を了解した上で、翻つて東洋の哲學思想を瞥見すると、いかに東洋思想は本來直覺的であつたか、又流動的創造的色彩を有して居つたかと明かに解るのである。

三

流轉と永恒の思想が一つになつて現れた最も幼稚な素朴な考へは、輪廻 (Metempsychosis) の思想であつて、之れは東洋固有の哲學的根本思想である。人間の靈魂はその死後、他の生れんとする人體又は動物の體内に移り行き、その人體や動物が死ぬとき靈魂は更に他の人體又は動物に移入して、永遠無窮にその業報に従つて輪廻するのである。この思想は古代の埃及民族又は印度アルヤ民族の信仰であつた。ピタゴラスの輪廻思想は即ち埃及民族から學んだものである。印度にあつては吠陀から波羅門教に至り、更に佛教に入りて非常に進化して遂には煩瑣な分類をなすに至つたが、その持續の本性を發揮したのは大乘佛教を以て第一とする。

輪廻に關聯して必然に發生した重要思想は、權化又は化身 (Incarnation, Avatar) の信仰である。

止するとあれば、萬物忽然として消滅するに違ひない。萬物のない所に本體もない。變化の奥に靜止の實在があると思ふは大した誤りである。流轉そのものがそのまゝして、宇宙の絶對實在であつて、流轉を離れて萬象はない。流轉は即ち世界の母（創造者）である。（二）流轉は實在そのものであるから、或る既成の原因に由つて造られた結果ではない。又必然に他の結果を將成すべく束縛されては居ない。實在本來の衝動である。詳しく言へば、Vital impetus の自己實現的傾動である。外部より刺戟された現象ではなく、内部から突出し迸發した運動である。此の意味で流動そのものは自由で獨立で且つ創造的プロセスであると云ひ得るのである。（三）併し此の變化流轉は亂推不規則のものでなく、又ツェノーの云つた様に無限に分割し得べきものでもない。或は又一々の變化は正しく器械的因果法を應用し得るやうな、換言すれば、數學的計量法を認容し得るものでもない。そして又一方には無限の變化相を有し、他方には單一相を有する二元的否ジエトナスの如き兩面的怪物でも更にならない。實に流動的實在の本性は直覺の妙境であるから、離言絶語である。強ひて言へば不可分割の渾一體である。法性一味の如來藏心である。變化そのまゝ持久であり、持久そのまゝ創造である。變化相（萬象）そのまゝ統一相（眞如）であり、統一相そのまゝ亦變化相である。其儘統一性なる變化相は互に同質であると云ふ意味ではない。むしろ異質ではある。異質ではあるが互に容れざるものでなくて流通無礙のものである。斯かる融合即入の變化は決して因果法を以て説明するとは出来ない。超因果法即ちジャンプが旺んに行れて居るのである。（四）かくの如く流動變化と云ふものは繼續でも反覆でもない、瞬間も止まない創造的持久であるが故に、勿論過去とか未來とかの分界線はない。持久は永劫の

う。是れは客觀を二元的に見たのであるが、また主觀（即ち精神）をも此くの如く見るとが出来る。しかし主觀においては二元的でなくて一元的になるのである。即ちアーリマンは本來獨立のものでなく、オルマツダにおける極めて刹那の細微的懷疑から生じたものだと解する。此點は頗る佛教における馬鳴の「忽然念起」の説に酷似して居るが、だん／＼不可分割の思想を表現して來て居るは明かである。

四

支那思想の根本は易の生々存々の原理である。天地萬物は生存せむとする意志の發現である。故に萬物は皆悉くその生命の全うする。宇宙の意志は至誠にして偽りない。乾は元亨、貧しきに利して、至誠の精神は自ら疆うして止まぬ永劫の力であるから、よく萬物を生成し保育し覆載するに足るのである。而して人間は父と母との關係から生れて來た如く、凡べての生物は男性と女性との結合融和より發生する。即ち至誠にして生成の天は不可思議なる陰と陽との二氣を溶解して、永しへに新しいものを創造するのである。この生成の過程は實に神秘なもので人智の測り知る所でない。

故に孔子は「吾れ言ふとなからんと欲す。天何をか言はんや。四時行はれ百物生ず。天何をか言はんや」と嘆じて居る。支那に於いても、やはりゾロアスターの考への様に人間精神を二相具有として説いて居る。

然しゾロアスターの如く世界を全く異つた二神の争闘と見るは、進歩した思想には不可解のとてあ

單に人間や動物の靈魂が他の人體や生物に移るばかりでなく、宇宙の精靈や神の靈魂もやはり人體又は生物又は木石の如きものにすら移入して顯現すると考へた。即ち神の靈にも一種の輪廻がある。例へば埃及の神牛エービスはメンフヒスにおける創造の神プタ (Ptah) の權化であり、又印度の牧牛神で英雄なるクリシナやラマの諸神は、宇宙の保護神ビシヌ (Vishnu) の化身であるが如き。乃至總じてバラモン族は梵天の化身と信ぜられて居つた。

神の靈はいろ／＼の形體をなして現れ、諸々の通力と創造とを働かすのである。人體のみでなく古い大木や金石にも化身がある。即ち神靈は是等の中に宿つて居て絶えず靈動して居る。天然崇拜は此の思想から生じたものであらう。權化の思想は萬物を靈的又は動的に見た信仰である。

萬物を動的に見る思想は單に因果の法則に従つて循環的變化を爲す自然現象と見るのではなく、世界は一つの戰場又は競争場裡即ち價値の争闘であると見る。換言すれば流動は自然的變化でなくて意識的創造であるとするのである。故に世界は決して楽しいとや美しいとばかりではない。苦痛もあり悲哀もあり、殘酷なともあり、破壊もある。その中に自ら生命或は善は永遠に亘つて勝利を博しつつ、發展して行く。此思想はよく波斯アアルヤ民族の宗教に現れて居る。ツェント・アヴスタに現れたゾロアスターの考へに由ると、世界は善神と (Ormazda) 惡神 (Ahriman) との永久に續く戰場である。

オルマツダは創造の神で善と光明とを代表し、アーマンは破壊の神で惡と暗黒とを代表して居る。かくて世界は創造と破壊との永恒輪廻である。この輪廻の中に生きたむし勝たんとし強からむとする意志が燃えつゝあるのである。ニイチエの根本思想や (Hwigkeit) の觀念は之から來た者であら

かなる人でも此形氣を備へざるものは無いから、上智と雖もはやり人心を去ることは出来ない。又どんな人でも天の性命を具して居るから下愚と雖も必ず道心を有して居るのである。そして此二つは方寸の間に難はり居る故、もし之を治め正す所以を知らない時は、危きものは愈危く、微なるものは愈微となつて了ふ。此くの如く儒教では一心二相を信じて居た。

五

此の眞理を最も明白に最も哲學的に論じたものは、馬鳴の一心二門論である。萬象は一心の生滅門であると同時に眞如門である。一心は無明に由て三細六塵の萬象（生滅門）を顯はすが、淨熏習の力に依つて再び法性一味の一心（眞如門）に還り得るのである。而して眞如と生滅とは染熏と淨熏に依つて無始無終に種々相を現じ、種々相に應じて諸の作用を爲す。萬象あれども眞如の體を離れず、眞如そのまゝ萬象を現すること猶水と波との關係の如く、濕性一味の總相心は到底不可分割の渾一體であると考えた。此の眞理を了解せば、ベルグソンの所謂統一性即多數性、多數性即統一性の眞理は容易に解つて来る。ベルグソンの生命は統一でもなく多數でもなく、統一と多數との混合又は接觸でもない。統一即多數の渾一體である。されば生命の多數性は同一性質の實在が多くある意味でもなく、又異なる性質のものがそのまゝ變化せずにあると云ふ意味でもない。

統一とは云ふものゝ多數あつて後に生ずるのでなく統一と多數とは同時同所の一體である。

智愷は一心二門を解して、『夫れ一心法界は理に非ず、事に非ず。理に非ざるを以ての故に舉體萬象

る。創造と破壊とを根本的に對立せしむるは生成に矛盾する。

そこで印度教にあつては三神一體と云ふて、生成の神（ブラーマ）と維持の神（ヴィシュ）と破壊の神（シヴァ）とは、各々獨立のものでなくて、同一神の人格的三相であると見た。即ち世界には創造作用や保護作用や破壊作用等のいろ／＼の働きがあるが、同一生成過程の差別相であつて本來は不可分のもの融合渾一のものであると見たのである。かゝる思想は鄒波尼焦士（Upanishad）の哲學に於いて、唯一絶對の唯心的實在から世界を説明せんと企てた。即ち世界の森羅萬象は宇宙的自己アトマン（Atman）の熱烈なる生存意志（吾れ欲す）の顯現であると見た。此の普遍的自己は實に生さんとする生命力であつて、個人や宇宙萬象を通じて圓融無礙の生氣である。

斯かる自己顯現は梵の私慾又は無明から生じたものにもせよ。兎に角生きた榮えんとするベルグソンの所謂（Vital impetus）を本有して居るが爲めである。自己は世界創造の根原である。一切の作者、一切の欲者、一切の嗅者、一切の味者、一切の包括者、沈黙者、不殆者は、是れ即ち内心の我が自己である。是れ即ち梵である。シュローベンハウエルの哲學はこゝに淵源して居る。

オルマツダとアトリマンの二神はやはり精神の二相と解するとが出来る。此二相の作用は窮りなく流動し持續して世界を造り出すのである。儒教では堯舜以來人間の精神を二元的に見て來た。（論語堯曰篇）根本においては一體であるが必ず二つの相反した差別相を具有して居る。即ち人心と道心である。儒教の目的は此二つの中庸を精一するにあつた。朱子の解する所に依ると、人間の虚靈知覺は一であるが、形氣の私に従ふと性命の正に原づくに由て、人心と道心との差異が生じて來る。併しい

訶止觀の中に「此三千一念の心にあり。若し心なければ即ち止む。介爾も心あれば即ち三千を具す。亦一心前にあり一切法後にありと言はず。一切法前にあり一心後にありと言はず」と言つて居る。一念三千の説は唯心的流動哲學の精髓を發揮したものであつて、流動變化、不可分割、圓融無礙、生的動力、時間空間超越等の有らゆる形而上學的特性を打ちて一丸となした其深無量の思想である。この一念は直覺悟入に由て知るのである。自覺的方法と流動哲學とは東洋本來の思想である。唯今後大に研究すべきは「無明」の觀念であらうと思ふ。

全生命は飛躍のうちに在り エルアーレン

の事を起す。事に非ざるを以ての故に全體一味の理を成す。一味を成すを以ての故に性相平等なるを眞如門と名け、萬象を起すを以ての故に因果差別なるを生滅門と名く。

平等は差別に異らざる平等なるを以て眞如門の中に亦自ら體用因果を攝す。差別は平等に異らざる差別なるを以て、生滅門の中亦自體の性淨を示す。所以に二門の中各諸法を攝す。』と言つて居る。此の理は天臺の一念三千の説、華嚴の事理事々圓融無礙の論に由て遺憾なく發揮された。

凡そ世界の哲學の中で一念三千の思想ほど、美妙にして深遠なものはあるまい。實に東洋思想の蘭菊の美を擅にしたものである。一念の作用は三千どころでない、實に無限無量である。乍併無量相は渾然として一念の内に渾融して平等一味の全體を爲して居る。一心の眞如と萬象の生滅とが互に圓融無礙であるのみならず、各々性質の異り作用の異なる萬象それ自身の間も圓融無礙、渾一即入、到底數學的關係の説明し得る所ではない。一念三千は主觀的に説明し、事々無礙は客觀的に説明したのである。一念は實に三千世界の無始無終の流動である。三千世界とは、四聖六凡の十界はまた各々十界〔地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、(六凡)聲聞、緣覺、菩薩、佛陀(四聖)を具有(百界)し、而して各界は各々十の是如作用(性、體、相、力、作、因、緣、果、報、本末平等究竟)を有(千界)して、或は五陰世間に、或は衆生世間に、或は國土世間(三千界)に變化流轉する差別相を指して言つたものである。

傀儡師、首にかけたる人形相、佛出さうと鬼を出さうと

佛菩薩も衆生も同じく清淨の一心、生死も涅槃も亦この一心、一にして多、多にして一である。摩

10. Menschen (1900) ブラウニング夫人などを論評したるもの。

11. Das Jahrhundert des Kindes (1900) 児童教育等に就て論ぜるもの。

12. Die Wenigen und die Vielen. 社會主義と個人主義との關係について論ぜるもの。

13. Über Liebe und Ehe (1903) 戀愛結婚等に關して論じたるもの。

14. Missbrauchte Frauenkraft (1896) 婦人能力の妄用。

此外にも二三の著作があるが、右は其重なるものと見る事が出来る、余は今左に、余が最後に擧げた所の書、即ち「婦人能力の妄用」を邦語に譯し讀者に紹介しようと思ふ。

エレン・カイは前にも言つた様に、驚くべき思想家でも何でもない。然し秋風が吹いてゐる歐州今日の思想界に於て閨秀辯論家著述家の中に、人を求むるとならば、先づ吾々は第一に彼女を數の中に入れねばならぬ。そこで女の集りがあるとか、男の集りて女の話を聞かうといふ場合には、彼女は話を頼まれること屢々である。余が今紹介せんとする所のものも、千八百九十五年の九月に、丁抹國首都コーペンハーゲンに於て、或婦人會の席上で講演した所のものである。當時エレン・カイは、餘りさまりきつた事を言ふので、コーペンハーゲン迄、愈々出て來てこんな平凡な事を言ふ必要はどこにあるかなどと思はれはしないかと、心配して居つたさうである。それでもコーペンハーゲンの講演は、どうかかうか無事に済み、同じ講演を今度は、自分の本國なる瑞典の Göteborg、並びに Stockholmで遣つた所が、豈に圖らんや激烈に非難し攻撃せられたのである。エレン・カイは、之等の攻撃

エレンカイの思想

原口 竹次郎

エレン・カイの祖先には、政治家、軍人、裁判官、事業家等、實世間に出て奮闘した人が多かつた事、詩人音楽家等の如く空想の世界を楽しむ様な人が少なかつた事、エレン・カイが又のんきな空想家としてではなく、時事問題を促へて議論を戦はすものとして起つに至つた事は、前既に述べた所である。されば彼女が今日までに出した所のものには、美文韻文などいふものがなく、多くは論文集であるのである。今試みに左に其重なるものを掲げて見よう。

1. Wie Reaktionen entstehen. 之は言論の自由を論じたるもの。
2. Bilder aus der Fröhzeit und dem Mittelalter Schwedens. 瑞典の歴史上の人物を論評せるもの。
3. Ernst Ahlgren (1869). 之は Victoria Benedictson という女流著述家のことを書けるもの。
4. Anne Charlotte Leffler (1893). レフラー女史の傳。
5. Der Liebesglaube (1893?) キリスト教に對する意見を發表せるもの。
6. Frauenpsychologie und weibliche Logik (1896) 女性心理の解剖を企てたるもの。
7. Schwedens modernster Dichter, C. I. L. Alquist (1897) 詩人アルムクイストを論評せるもの。
8. Essays (1898) 女子の將來等に就て論じたるもの。
9. In Finnland und Russland (1899) 旅行記。

た。之等の事が動機となり、其思想が凝つてかの「婦人能力の妄用」となつたのである。之等の消息は余が左に述ぶる所によりて、次第に明かになつて行くであらう。

„Des Weibes Geschichte ist Liebe“

Pontus Wikner.

女の歴史は一言以て之を覆へば曰く愛なり——ウィクナー。

一、男子と全じ職業を得ることは、女子に取て利益なるか。

普通婦人解放論者の目的とする所は、婦人をして今日迄婦人が有つてゐた所の職業のみならず、彼等に男子と同じ職業を與へて、婦人が有つて居るありとあらゆる能力を發揮するにある所にあることは、皆人の知る所である。婦人解放論者は曰く、今日迄婦人が男子に比し、一段卑き位置を占むるに至つた譯は、從來の法律、習慣、道德なるものが、婦人に彼等をして其能力を發揮するの餘地を與へざりしに由ると。又曰く、從來婦人は誤まれる義務の觀念に囚はれて居つて、或特種の仕事をすることをして、己れの本分と心得て居つた。そして男子が又、其れに付け込んで法律などを設けて、其陋習を守らしめんとした。而して婦人がいゝ氣になつて、男子の言ふ事に従つてゐた。併し目が醒めた今日、最早之れ以上、右の如き陋習を守る必要がない。且つ婦人の特性は、も一つの方面(?)に於

に對して、始めは沈黙を守つて居つたのであるが、遂にやり切れなくなつて、女性心理並びに女性的論法 (Frauenpsychologie und weibliche Logik) と云ふ本を書いたのであるが、彼女に對する論難攻撃は之でも止まなかつたのである。攻撃の要點は第一、エレン・カイは、多年女權擴張論者の親玉と見做されて居つたのであるが、晩年になつて急に説を變じ、反動的思想の代表者となつたと云ふ事、第二、エレン・カイの思想は陳腐平凡である事、第三、エレン・カイの如き未婚の女は結婚のあまみなどを論じない方がよい。若しさういふ事をすれば、彼奴は男を知つて居るなどと異しまれる。實際異なれても仕方がない。いやエレン・カイには、一寸そんな所があるといふ事等であつた。而してそんな事を言つて攻撃したものゝ多くは、女權擴張論者であつた。エレン・カイは、第一、第二の點に就ては、餘り氣を揉まなかつた様であるが、女であるから第三の難點に就いては、尠なからず心を悩ました様である。併し今日ではエレン・カイにふしだらの行爲がなかつたといふ事は、何人も認めて居る。抑もエレン・カイが、婦人の能力が妄用せられて居る傾向があると叫ぶに至つた原因は、嘗て彼女の傳を書いたルイゼ・ニストレム・ハミルトン夫人 (Ellen Key; ein Lebensbild von Louise Nyström = Hamilton. 此書は、つゝ一二ヶ月前に、米國で翻譯せられたと、近著の英字雜誌に書いてあつた。英語の讀める人の爲めに一言しておく。) が言つた様に全く他にあつた。即ちエレン・カイは、始めから男と女とは、天分の差あることを意識して居つたからして、女として男のすべき事の領分に這入らしめることが、女權擴張論の主意ではないと言つて居つた。又彼女はいつか兄の留守中、其子供を預かつて居つて、家の事もやり其片手間に筆を取るといふ事の如何に難事なるかを知るに至つ

人間の苦勞は増加しはしないかを怖るゝ。

然らば婦人能力の妄用とは何であるかといふに、其れは外でもない。彼等が只男子と競争し、男子と同じ位置を得る爲めに、無理に自己の本能性を抑へて、男子の活動の領分に侵入してゐることである。言を換へて言へば、女子が、女子の女子たる所以の本分を、全うして居らぬといふ事である。

二、女子は社會に出て、男子の競争者たることを得るか。

女性が新たに活動の範圍を得、同時に直に自分の力を此方面に試めして見るといふ事は、甚だ結構な事である。其に亦是迄手を出したことの無い方面に、女が手を出して成功するとか、しないと云ふ事は別として、男の眞似をして違つて見るときに、始めて婦人が、自分にはどちらの仕事に向いてるかといふ事に氣が付くといふ様な利益もある。又女が男の領分に這入つて、男と力競べをなし、時に或は男を負かすに至らしめた事は、慥かに婦人運動の敵が金科玉條とするかの所謂男女性質の根本的相異 (die Wesensungleichheit zwischen der Natur des Mannes und der Natur des Weibes) に基く議論を覆すに、與つて力ありしこと疑ひを容れぬ。

實際男と女の精神の上には共通な點が澤山あるし、其の上に男に似た女がある如く、女に似た男もある。又男女の精神が互ひに相感應するといふ事も事實である。それで或程度迄は、男になれるし、女も亦いくらか男になれる。そして女子開放論者などは、此事實を土臺にして議論を進めて居る。併し之は大なる誤りである。而して女子開放論者の此議論は、歴史に對する無知に基因して居る。過去

て亂用せられた。此方面の亂用に關してはホーマー以後の詩人が、異口同音に其非を鳴らして居ると。

右の如き議論は其目的を達し、婦人運動は今日到る處に盛んになつた。而して其理想の方面に於ても現實的（物質的）の方面に於ても、成功に次ぐに成功を以てして居る。婦人解放論者は、婦人が自由により自己の能力を發揮し得る様に、又社會上、男子と同等の地位にある様に、又職業獲得の自由を得る様にと運動し、スカンデナヴィエンに於ては、之等の要求は殆んど皆叶つて、法律上の保障を受ける様になつて居る。成程まだ結婚せる婦人の其身體、財産、兒供に對する權力には、聊か缺けたる所がある。さりながら、少しでも考へのある所の人々には、二十世紀がまだ終らぬ中に、之等の權利が婦人に與へらるべきことを信じて疑はない。二十世紀の末葉になると、凡て權利關係に於ては女の市民（Bürgerin）は男の市民（Bürger）と同じく、妻は夫と同じく、父は母と同様に認めらるゝに至るであらう。權利關係の、斯の如き變化は、個人の發達の上から見ても、社會の利益と云ふ點から見ても、最も望ましきことである。（譯者曰ふ、エレン・カイが決して、世の婦人解放論者などに反對して居らぬこと、否却つて之に同情して居ることは此言を見ても分る。エレン・カイが之等の論者と違つてゐる所は、只彼女の見解が、之等論者の其れに一步を進めて居るといふ點である。）

併し吾々が一つ此處に考へて見ねばならぬのは、二十世紀の終りに於て、今言つた様に、男と女とが、同等の位置に置かれて見た所で、果して人間社會に、どれ程の幸福を持ち來すかと云ふ事である。自分は婦人能力の妄用といふことが、今日の如くに行はれて行つたならば、二十世紀の暮には、

成程さうであるが、身分のある婦人は、昔は、藝術等の方面に手を出すことをしなかつたから、そんな事になつたのであると。併し之も取るに足らぬ議論である。何となれば、成程或職業に手出しをすることは、身分の高い婦人たちには出来ぬこともあつたけれども、文學とか、音楽とか、繪畫等を學ぶことは、決して禁ぜられてゐなかつた。そして如何なる時代にも今日吾人の記憶に残つて居る様な、高名な女流藝術家があつた。而して此一事は婦人でも餘り社會の惡評なしに、藝術等に耽ることが出来たことを證據立てるのである。併し又、其等高名の人が誠に少なかつた所を見ると、女が之等の事に於て到底男子に及ばぬといふ證據にもなるのである。見よ、由緒ある家に生れた男の中には藝術などを以て活計を立てようなどの志は寸毫も持たなかつた、言はゞ藝術を片手間にやつた所の人で、隨分此方面に抽んでゐる人があるではないか。

女子が男子に比較して創造的精神に缺乏して居ることは、只單に音楽、繪畫等に於てのみならず、女子自身の領分たる子供の躰け、家政の整理等に於ても明かである。此方面に於ても、男子は常に新理想新主義を樹て、之等を改良するに當つて、適當の方法を考へ出してゐる。料理のことに關してすら、根本的の發見は多く男子に依てせられた。子供の育て方に於ても、充分に其眞意義を闡明した所のものは女でなくして、男例へばルソー——であつたではないか。

私に反對するものと言ふであらう。今迄の女は、家に在つて只もう其の日／＼の事に追はれて、教育の精神とか、理想といふ様なものに考察を廻らす時がなかつた。併し今日の女子は教育の普及權利の擴張等に依て、眼界が廣まつて來て居るから、之からは創造的精神を鼓舞して、之等の方面に新工

を顧みれば物質上に於ても、精神上に於ても、凡そ社會に出たものゝ上から見ると、婦人は男子の競争者ではなかつた。が論者は云ふであらう、婦人は、やつと此頃、世間に顔出しする様になつたばかりである。其れて今の婦人の事業を數十世紀の間、養ひ來つた男子の修養と比べるのは、甚だ酷である。男女の精神的素養などを比較するには、どうしても之から數世紀を経過した後のことでなければならぬ。其れには、成程幾分の眞理があるかも知れぬ。併し、其にしても、論者の議論は餘りに過去と云ふものを、蔑にしてゐると言はねばならぬ。試みに過去に於ける或一つの時代を想像して見よ。其時代に於ける下層の男と云つたら、祖先からの遺傳も良くなく、且つ周圍の境遇も誠に惡かつたのに反し、上流社會の婦人は自分の精神上的の發達を遂ぐるに、別に大した妨害あるを故障と見なかつた。然るに所謂超人 (Übermensch) といふものは、どちらに多かつたかと云ふに、下層社會の男子に多かつたのである。

論者は言ふであらう、婦人の中から所謂超人が出なかつた理由は、昔、教育の門が婦人に閉ざれて居つたからである。一體超人などいふものが教育に依て、出来るや否やは別として、論者の説は女子を社會に押し出さねばならぬと主張するものとしては、甚だ薄弱なるものと言はねばならぬ。何となれば、昔から世に出て成功した人の中には、全く教育を受けた事の無いのが随分居るのみならず、例へば藝術家の如きは、公の學校に於てよりは、個人的に或師匠より教へを受けたものが多くあつた。然り而して御師匠様につくといふ事は少し身分のある女には容易に出来ることであつたのである。而もなほ女の中からは卓越した藝術家が出なかつた。茲に於て乎、論者はいふであらう。それは

セフ・コーサンド 先生著。『基督教世界』主筆

加藤直士 先生譯

□ 新刊 □

東西思想の統一

四六判クロス
箱入

(定價八拾錢)

郵税八錢

筆を伏義氏の陰陽哲學に起し、西洋科學の二元論を説き、印度哲學と東洋宗教の評論を試み、儒教の仁と、佛教の慈悲と、基督教の愛との比較を試み、日本固有の武士道と、世界共通の犠牲の精神とを對照し、進んで人類救済に對する基督教の使命を論じ、最後に基督教と、現代日本の思想界との交渉を瞭かにして擱筆せり。譯者は著者の思想に對し、尤も深き理解と、同情とを有する加藤氏なれば、或意味に於ける共同事業なりと云ふべく、譯文の平明にして流麗なるは、今新らしく説かず。

東北帝國大學 青年會編纂

最新刊

内村先生講演集

菊判二百頁餘
定價五拾錢
郵税六錢

東大農科の青年會の請に應じて、札幌に於て講演せられたるものゝ總てなり。林檎の花咲き、すゝ蘭の香ゆかしき北國の地、數百の俊才を感動せしめたる先生獨特の講演！豐麗の内容、峻烈の辭句は言々人の肺腑を衝き、心靈を躍動せしめずんばやまず、今や優雅なる裝釘を施して、同好の人々に頒つ。

發兌 東京 銀座 警 醒 社 書 店 振替 東京 五番 三番

夫を試むるに至るであらうと。之は一應尤もな議論である。併しかく云ふ論者は中世紀千餘年間を通じて、歐羅巴中の僧院は、家庭の絆しを絶ち切つて出家した幾多の女を取り入れたことを忘れてゐる。而して之等の女が僧院にあつて、學問、藝術、文學等に、携はることに於て、生意氣だとか何とかいふ世間の批難攻撃もなかつた。否實際尼様たちは、そんな事を大にやつたのである。然るに昔から僧院から出た偉い人の名の中には詩人ロスウキタ (Roswitha) と、バルギッタ (Bingitta) を見るのみである。

又宗教的事業は寺院の内に於けるものと外に於けるものとに論なく、男子にも女子にも昔から其門戸を開放したのである。然れども、婦人の内から、大なる宗派の開祖も出なければ、有名なる宗教的著述も出なかつた。此方面で多少女が顔出しして居るのは、神占者、(Theosoph) として位のものである。女子が頭を擡げ掛けたと云はれる十九世紀に於ては、女子は僅かに二つの方面に於て男子と競争し得るのである其二つの方面とは慈善事業と再現的藝術 (reproduzierende Kunst) とである。こゝに再現的藝術とは作曲家や詩人が作つた詩や、譜を、歌や音楽に現はすのをいふ。此意味に於ける音楽者や、歌ひ女や、女優は慥かに男子と競争することが出来る。又慈善事業に於いては、女子は今日誰れの目にも、男子の壘を摩して居ることが分る。

けれども右述べた所は、十九世紀に於ける最大の女詩人エリザベス・ビー・ブラウニングが言ひ現はした女の本性を一層明かにするものである。ブラウニング夫人の句に “melt, like white pearls; in another's wine” とあるが、誠に能く女の本分を言ひ現はしてゐる。(つゞく)

當代青年の代表演說

大日本雄辯會編

剛健なる青年の必讀すべき無二の產物

▲帝國大學早稻田大學はじめ官私各學校の學生雄辯家が其勉勵と努力と精力とを傾倒したる代表的演說にして既に好評噴々たりしもの三十一篇を集めたり

青年思想界の最高權威!!

青年雄辯集

演說練習者の絶好模範!!

▲朗々として高讀せば悉くこれ名調子の演說たるべし。即ち携帯の至便を計りて三六版とし音讀の利を思ふてふりがなを附せり、綠蔭、水邊、現代青年消夏の好同伴也……………

理想ある青年の寸時も離し得ざる書籍

美裝總クロース入函

三五版五〇頁

定價九十九錢・郵稅六錢

大日本雄辯會發行

東京駒込
四下八

振替
口座
三九
〇三

帝國文學

目 要 號 月 十

田波御白追想錄

糠

雨

(小説)

鬼

(小説)

夜

の 髪

(小説)

守備兵の話

(ビエール、ロチ)

岡倉覺三先生その他

(評論)

藝術家の氣分

(紹介)

九月の文壇

九月の劇壇

藝術座第一回上演評

諸 家

後 藤 末 雄

伊 東 六 郎

山 崎 俊 夫

後 藤 末 雄

黒 田 鵬 心

石 坂 養 平

山 田 檳 榔

灰 野 庄 平

久 保 田 勝 彌

(中附二)

銀座 大日本圖書株式會社 振替 東京 二一 九 定價 半年 拾九錢 郵稅 一錢 共稅 一錢

村上專精先生序
久津見藏村兄跋

藤岡勝二兄跋
田中治六兄跋

高島米峰新著

噴火口

三六判 美裝

定價 八十錢

郵稅 八錢

著者心内に鬱積する熱火今や轟然として爆發しこゝに礫となり砂となり灰となりて四方に飛散すこれを慘狀と言ふべきかこれを偉觀と稱すべきか敢て讀者の批判に待たむと冀ふ嗚呼華嚴の瀧壺か淺間の噴火口か人生の激戰に疲れたる青年は本書に就いて慰安と活力とを求めよ

▲廣長舌
高島米峰著 (好評四版)

定價 七十錢
郵稅 八錢

▲理想的商業
高島米峰著 (好評二版)

定價 廿五錢
郵稅 二錢

▲一休和尚傳
高島米峰著 (好評五版)

定價 九十錢
郵稅 八錢

▲惡戰
高島米峰著 (好評四版)

定價 八十錢
郵稅 八錢

▲現代青年論
高島米峰著 (新刊)

定價 十五錢
郵稅 二錢

▲東洋史
高島米峰著 (好評十三版)

定價 十三錢
郵稅 二錢

堂聲鷄

六町原區川石小京東
三五三一京東替振

社版出午丙

六町原區川石小京東
六八六五一京東替振

基 督 教 世 界 週 刊

毎週木曜日發行
 半ケ年一圓廿錢
 一部金五錢
 一ケ年二圓卅錢

主幹兼主筆 加藤直士

●本誌は日本組合教會出版部の經營する所なれども、同時に我國進歩的基督教全體の機關たることを期す

●本誌は明治十六年の創刊に係り三十年の歴史を有する基督教界最古の週刊新聞なり

●本誌の編輯は加藤主筆の外、小崎弘道、宮川經輝、原田助、渡瀬常吉の四氏熱心其任に當る

●好評噴々たる本誌の特長は、基督教の立場より常に時事問題を評論し、且つ最新の智識を以て斯教永遠の眞理を闡明するに在り

●毎號主筆の社説と、教界先輩の説教と、内外名士の論説と新進思想家の研鑽と、清新なる文學と、内外宗教界の出來事及び教勢一斑を滿載す

●本誌は信仰修養の糧として傳道用冊子として、信者家庭の讀物として最も好適なる出版物なり

●百聞は一見に若かず、見本は御一報次第進呈すべし

(中附四)

大 中 阪 市 北 區 基 督 教 世 界 社

振 替 口 座 大 阪 番
 一 七 三 三

六 合 雜 誌

錢五拾圓壹册六 ■ 號 月 九 ■ 錢拾貳册一價定

■ 題 問 の 術 藝 對 教 宗 ■

■ 一 家 言

- 當面の問題 片上 仲
- 宗教と藝術との合致 石坂 養平
- 人生醇化の努力 大住 嘯風
- 藝術の獨立 茅原 華山
- 獨立と提携と 乙骨 三郎
- 氣分の内と外 岡安 部清
- 融合の中間 岡田 哲藏

相馬 御風 三井 甲之 高木 壬太郎
 阿部 次郎 川出 麻須美 松本 雲舟
 柳宗悦 廣瀬 哲士 戸川 秋骨
 武者小路 實篤 栗田 中基 折竹 愛雄
 厨川 白村 栗原 基 小林 愛雄

- 眞と美と生命 内ヶ崎 作三郎
- 精神生活より宗教と藝術へ 三並 良
- 生活と宗教と藝術と 内藤 濯
- 驚異の殿堂 吉田 絃二郎
- 宗教問題と歐洲の新藝術家の群 S A N
- 戯曲黎明 エルアレン作 吉田 絃二郎譯 ■ 戯曲反抗 ド・リイル・アダン作 内藤 濯譯
- 詩 佐藤 浩歌 ■ 野口 精子 ■ ガラリヤの朝(繪) 有田 四郎

神學之研究

目要號月十

論

說

評批と介紹

史的見地より見たる基督教

バラク書の歴史的背景

イエスの變貌に關する新説

歴史的背景
に關する新説

我國現代の精

神的要求と之

に對する基督

教の態度

杉小石岡武近守富露高
浦川田本藤屋永無木
義武三喜代良三德文壬
道治郎藏藏董郎磨治郎

新

介紹と要概

■ ベルグリン 哲学 概

ホルツマン 耶蘇

ダイスマンⅢ聖保羅論

著

其他二十餘種

行發月隔

一 部 二 十 金

發賣元

東京東區橋尾張町二丁目
振替口座東京五五三

敬 醒 社



エピソード

佐藤 清

ベツセ あなたの聖書の句を下さい、メーボ。

メーボ コリント後書第一章第六節……われら或はなやみをうくるも、爾曹がなぐさめと救のためなり、このなぐさめと救は、爾曹のうちにはたらきて、われらがうくるごとき苦みを爾曹にも同じく忍ばしむるなり……

ベツセ 何といふいとこてせう。

メーボ 私はかう思ひます、愛は苦しみです、苦みがなければ、ほんとの愛とは言へません。
ベツセ さうです、私もさう思ひます。

ブラサム 私にはわかりません。

メーボ それは私の経験です。

ベツセ ほんとうに愛すれば、その人のために苦しむことをいとはなくなります。

ブラサム それでは、其の人の物質上の缺乏のために苦しむといふのですか。

メーボ 物質上にも苦しむことがあります。私は精神上的の苦しみを経験したのです。その人の苦し

近現代藝術叢書

波多野文學博士 宮本文學士共譯

第壹編

新刊理想主義の哲學

新樣式の製本
定價金二圓五十錢
送料金十二錢
紙數六百五十頁

増訂再版出づ 譯書に宛てしオイケン氏の筆簡と増補す
讀書界の嚴正なる批評約五十頁を

第二編 文學士和辻哲郎氏著



Nietzsche

ニイテ研究

見よ本書の目次

序論 □ 本論第一、新價值樹立の原理 □ 權力意志 □ 認識としての權力意志 (研究の方法、意識、認識の成立、認識の論理及理性の起源、主観と客観、認識の形式 (時間と空間、因果の關係)、真理の概念 (眞實と虚偽、本體と現象)、結論、□ 自然としての權力意志 (無機界、有機界、人間、宇宙、價值、□ 人格としての權力意志 (人格の意義、社會、個人、群衆本能的の誤れる解釋、人格主義、□ 藝術としての權力意志 (生活と藝術との關係、藝術家、藝術鑑賞)。

本論第二、價值の破壊と建設 □ 宗教の批評 (宗教の起源、基督教の批評、基督教と猶太教との關係、基督及原始基督教、基督教と理想) 道德の批評 (善惡の問題 (道德的評價の意義、群衆本能的の評價、墮落せる道德的評價。良心及犯罪の問題 (行爲の價值、責任、良心、罪の意識、良心の苛責。道德的理想 (理想の意義、道德的理想の成長、禁慾的理想、道德的理想と人間の改善)。主義主義と愛他主義。道德の危險、□ 哲學の批評 (哲學の類變的傾向 (認識と本能、信念と眞理)。希臘哲學。近世哲學、□ 藝術の批評 (歐洲文明の類變 (實在に就ての在來の價值解釋の歸結、デカダンスの表現としての皆望的運動、近代の類變と強化の徴候)、□ 新しき價值標準 (階級、自由精神、未來の立法者、われらの德操)。

備考

新刊新樣式の製本優雅なる裝幀 定價金二圓五十錢 送料金拾貳錢
我學界ニイテを叫ぶこと久しくして、而も未だ一の彼に關する著書なかりき。深奥沈痛なる近代の獨逸文明が生みたる天才として、義を發揮し來れる、益々切實なる意義によりて初めて闡明せられたり

東京市日橋區馬場二丁目
東田老鶴 電話一五三三
內電 浪花
行刊 圓 替振 ● 五三三
● 六四

第二編 シュテラエル マツヘル 宗教論 (近刊) 文學士石原謙氏譯

【(ニイテ)】

いふ立派な書題、何といふ力ある色彩でせう。

ベツセ イエスがまきものをかゝりのものにお渡しになつた時、人々は皆、イエスのあのお顔を見つめたのです。

メーボ イエスのお顔は、ほんとうに私の光となり、なぐさめとなります。

ブラサム 私はいつもさう思ひます。私の心の生活の低いために、私の生れつきの顔が、どれ程そこなはれてゐるかと。又私はイエスのお顔を思ひ出すたびに、イエスの清いお心が、どんなにそのお顔の上に光つてゐたかと。

ベツセ あ、私もよくきたないことを思ひます、さもしいことを思ひます。そしてそのたびに、私の顔はどれ程醜くなるでせう。

メーボ 私はつかれました、あれ、光線が夕方の水蒸氣のために、青く見えます。

ブラサム 白帆は海に浸つてうごきません……お茶をもつて参りませう。

メーボ 私は少し横になります。

ベツセ あなたの目は光つてゐます、メーボ。あなたの目の底には、靈魂が苦しんでゐるのが見えます。

メーボ 私の靈魂は、私のからだをつからせます。

ベツセ あなたの顔はひかります、熱があるのではありませんか。

メーボ 私の靈魂は燃えてゐます。

と同じ苦しみを経験したのです。

ブラサム 私にはわかりません。戀は愛ではないのですか。

メーボ こゝに或る人があります、純潔な人です。或る悲しい境遇のために、世間から苦しめられてゐます。私はその人のことを考へると、その人の苦しみと同じ苦しみを経験します。私はその人を知らなかつたらと思ふことがある程苦しくなることがあります。

ベツセ 十字架といふのはそれで、誰れでも人を愛する人は、この十字架をもつてゐます。

メーボ 私はキリストの苦しみにあづかるといふのは、そんなことでないかと思ひます、

ベツセ あなたの聖書の句を下さい、ブラサム。

ブラサム 路加傳第四章第十六節……その育ちし所なるナザレに來り、いつもの如く、安息日に會堂に入りて、聖書を讀まんとて立ちければ、豫言者イザヤの書を與へしに、イエス其の書を展きて、かく録されたる所を見出せり イエス書をまき、そのかゝりの者に與へて座しければ會堂にをるものみな、目をとめて見なせり……

メーボ 私はそれを聞いてをりますと、イエスのけだかいお顔が、私の心のうちに光のやうにはつきりうつります。

ベツセ 四十日の誘惑にうち勝ちたまうて、曠野からナザレの村へ、お歸りになりましたイエスのお顔の神々しさは、どんなでしたらう。

メーボ まあ、こゝにサムメーの描いた「曠野より出て來りしキリスト」といふ繪があります、何と



宗教生活と藝術

相原 一郎 介

近頃我が國の文藝にたづさはつて居る人々の中に、人生の根底に徹せんとする眞面目な努力が生じて來た。此の事は其の動機は暫く問はず、其の態度において著しく宗教に接近したことを、先づ思はせる。生の第一義に徹せんとする要求から、凡ての材料を取扱つて試みた創作には、單なる享樂主義やデイレットタントの文藝に、類を異にして優つた價值がある。

尤も斯うした努力は、必然的に宗教生活に至るべきかといふに、必しもさうでない事は云ふ迄もない。たゞ其の人生に對する態度が眞剣であるから、宗教生活の前過程に見ると同様に、屹度幾多の疑惑と煩悶を伴ふに違ひない。此の疑惑懊惱の雲に閉された、光明の無い蘊釀的な氣分は、聽て一種のライデンシャフトに充ちた作物を生ずる源である。問題を提例し、未解決の思想を暗示するやうな文藝は、かうした氣分の中から盛に生れるのだ。生に徹せんとする跪きや、光明を仰がんとする努力は緊張した人生の眞面目な姿を見せつける。眞剣な努力が已に文藝家にあるならば、よしそれが未だ徹底しなくても、充分に力ある意義ある創作を生ずるとが出來ると私は思ふ。勿論眞面目な努力といふことは、徹底といふとを豫想した上にあるとだが、そこ迄到らなくとも、文藝の本領はありうるのだ。

ベッセ 靈魂の働きは顔に反射します。日の色は靈魂の鏡です。

ブラサム あれ、メーボ。あなたの顔は光ります、眞白に光ります。

メーボ 私は^{まぶた}瞼にあつい涙の滴を感じます。私の胸は破れさうになります。あれ、あの人が苦しんでゐます。

ベッセ しづかにいたしませう、しづかに……メーボ、さう苦しむとあなたは病氣になります。

ブラサム 他人のために、こんなに苦しむ人があるのですか。

ベッセ しづかにいたしませう、ブラサム。しづかに……メーボは疲れて眠りました。

ブラサム メーボは何といふ神々しい顔をしてゐてせう。顔には光があります。

ベッセ あれ、水平線は濃い緑にそまりました、白帆もしづんでしまひました。

ブラサム 何といふしづかな夕方でせう。

ベッセ 新らしい星が海にうつります。

ブラサム 風のすゞしいこと。

ありはせぬか。人の生活には、幾多の方面がある、假令藝術欲に支配されるといふものの、其の生活が複雑なれば複雑なるほど、其の藝術にも、光彩を添へて来る。近頃の文藝家の間に、人生に徹したいといふ哲學的要求の生じて來たといふことも、畢竟するに其の生活がより複雑になつた、いはゞ進歩した證據であるまいか。

併し此の生活の復複雑してゆくといふ爲めには、何か其の基調キイノートとなつてゆくものがあるべきではないか。生活の原動力となつて、常に我々を動してゆくものがあるべき筈だ。殊に藝術的創作といふ様なことは常に新しい緊張した氣分に充ちて居なければ、出來ないことだ。そこで宗教生活と藝術との關係を求めることになるが、先づ宗教の方から藝術に表はれてゆく道を考へて見たい。

偉大なる宗教家は、常に大なる詩人である。其の内生活が表白されるとき、其の天真流露な自己を以て、直に自然人生を觀る時、其の口を衝いて出づるものは、直ちに之れ無韻の詩である、歌である。渠は眞を掴むと共に、詩を捉へる。其の内生活には、自然人生の根柢から、諸調音をもつて奏て出づる生命の樂が響く。さうして其率直な表白は、歌となり詩とならざるをえない。若し斯うした宗教生活にある人にして、強烈なる藝術欲を感じ、創作力に豊富であるならば、其の生命の表白はやがて、大なる文藝の傑作である。これこそ天真の宗教文藝である。併し藝術家が宗教生活に入ることには、常に期待し得るが、宗教家は必ずしも常に藝術家でない。耶蘇にも釋迦にも、おのれ自ら筆をとつて、後世に遺した創作といふものはない。

斯かる偉大な例でなしに、普通の宗教生活にあるものから考へると、彼等に共通な熾烈な欲求は、

山巔に高嘯して居るものと、山麓の平地に蠢々として居るものとの眼界には、明かに差違がある。雲表の第一峰を踏んだものは、未だ山麓を離れないものと、同一の材料を取扱ふにしても、其の見方には違ひがある。同様に已に山麓を離れて羊腸たる山路を辿るものには、下層に沈淪執着して居るものに優つた價がある。然し此の態度をとつた人々が凡べて徹底すべきかと云ふに、疑惑と煩悶が必しも宗教生活へ導かないと同様、凡べて山巔の風光に接するとは限らない。恐くは山腹の孤峰に達して満足し、或は却つて千仞の谿谷に墮ち、陰鬱の氣に掩はるゝやうな事もあらう。定まつた主義とか哲學論に縋りついて、懷疑説や詭辯皮肉の思想に満足する者も生じるのだ。然もこれ皆一種の小徹底と見るべきである。

一體徹底するといふことは、文藝家本來の態度といふよりも、寧ろ哲學的思索に入つたものゝやうに思はれる。宇宙人生の根本義に徹したいといふ云はゞ哲學的要求に馳られたものではあるまいか。一面斯うした要求に馳られながら、藝術欲を充たして行く時には、幾多の問題を提供しうる文藝も生じるだらう。勿論これと呼んで、簡単に生活といふことも出来る。藝術家とか、哲學者とか、政治家といふ名稱は、只便宜上のものであるかも知れない。併し何人も其の生活が同様といふ譯には行かないのだ。或は藝術欲によつて、其の全生活を支配される人もあらうし、或は哲學欲によりて、生活を統一してる人もあらう。人は必ず一個の欲望要求によりてのみ支配されるとは限らないから、そこで哲學者にして政治家たり、科學者にして文藝家たる人もあるのだ。而して從來、文藝家とか哲學者とか、只一面の生活からのみ見られたのは、人の考方によると云ふよりも、むしろ文藝家の方に原因が

更に宗教生活の側から、藝術家の努力と云ふ一事を考へて見たい。藝術家には常に新しい氣分、創作的氣分に充ちたいといふ要求がある。近頃の文藝が、宗教に接近して來たといふ傾向のあるのも從來の行き詰まつた見方から脱却して、新方面を開展したいといふ努力の現れに外ならぬ。實際眞の創作は、新しい生命が常に、藝術家の内部に流れて居なければ出來ないことだ。此の内部から生命の發展がないから、出來るだけ神經を鋭くして、些細な刺戟をも味つて見たいといふことになるのではあるまいか。藝術家が動もすると、新をこれ逐うて走るといふのも、要するに此の創作的氣分を追ふのだ。そこで中年の戀だとか、生に對する誠實な態度であるというて、人妻に手を出して、其の事件を書いたりすることになる。

近頃また個性の發揮といふことが叫ばれる。他人は何うでも自分は自分の道を歩まうと云ふ聲がきこえる、これは確かに、新を逐うて走らんとする態度からの反省である、自覺である。併し其の個性とは果して何であるか、之れ果してしかく容易に發見し得べきものであらうか。只表面だけの淺薄な個性なら、其邊にざらにあるのだ。態々自覺や反省を叫ばなくとものことである。

また近來は政治的文藝や、生活を背景とした文學が現はれないのを歎する者が聞こえる。之も亦新方面を開拓し、自己の創作的生命を發見せんとする努力である。要するに近頃の文藝の傾向は、おのづから個性に目醒めんとするか、社會に生命を發見せんとするかといふ所に來て居るのだ。

宗教生活もまた此の二方面に觸れて、其の根抵に貫流する生命に徹することだ。矛盾が統一された調和の生活に入ることだ。然も其處に到達せんとする努力の中に、宗教生活の流が始まつて居る。之

藝術欲よりも、寧ろ倫理的要求であらう。斯うした要求の表現は、即ち傳道である、慈善である。宗教は宗教を信ずる人の實生活に漲つて居るべきものであるから、幾分餘裕のある藝術的要求よりも、倫理的に傾くのは當然であるまいか。尤も宗教生活も、あはたしい實生活から離れて、幾分の餘裕を發見すれば、純乎たる宗教それ自身の表白となることがある。儀式が即ちそれだ、説教といふことも、其の技巧と表出法に留意するやうになれば、是れ純然たる藝術だ。單にペンや筆に依る表白のみが、何も藝術と限つたことはあるまい。ペンや筆の背後に、人格があるのを要件とするなら、説教の背後には、言説以上的人格品性があるのだ。斯うした表白を、私は宗教の藝術化と呼びたい。

私は今、山中の一古刹に宿つて居る。朝な夕な老僧の勤行を傍觀して居る私は、之を以て宗教生活の主要な部分といふよりも、藝術だ宗教の藝術化だと心に叫びたくなる。天井の高い薄暗い殿堂の中心五彩燦然たる色衣を著た僧のこちたい儀式、人の靈魂を幽冥界に誘ふやうな香のけむり、悠長な諷誦木魚と鍔鉢の響、是等は祇園精舎の鐘ならずとも、觀るものに諸行無常の想を懷かしめ、彼等の幽遠な宗教生活を表現して居る。之に對してけば／＼しいペンキ塗の建物の中から、囁々たるオルガンの音に導かれて聞ゆる、活々した讚美歌の調は、直ちに基督教の内部生活を示して居る。いづれにしても、儀式は宗教の藝術化である、其の純なる内生活の表現である。己に表白であるから、成るべく人的美感に訴へ、其の印象を強くする事に力めるのも當然である。儀式は動もすれば、其の中心を忘れて、技巧の末に走る。中世紀に於いて、ドラマが教會で演ぜられ、神樂が今尚ほ民族的宗教の中に遺つて居るのを見れば、更に此の感を深うせざるをえない。

宗教的表現と演劇と

伊庭孝

上

宗教と演劇とが、多くの交渉點を有してゐる事は、歴史的に容易に論證し得る。それによれば、演劇は宗教的儀式から發足したものだといふのである。

演劇には二種類ある。人間なり超人間なりの行爲を、出來得る限り様式化したものと、意識的に様式から遁れようとする演劇とである。前者には宗教的儀式から發足したものもあるけれども、後者は全く無關係である。

様式的な劇の根本義は、行爲に對する意匠である。あらゆる千差萬別な行爲を、一定の規矩、尺度の單位を以て割りされるやうに切斷する事である。様式劇の動作は、其の單位等の公倍数である。即ち人間の行爲を單純化すると同時に、制限を與へてゐるのである。

宗教に於ては、人生に於ける、無信仰者から見れば無意匠と見える百般の出來事に、意匠をつけて見るのである。そして人間の將來の行爲も、宇宙の進化發展も、其の意匠によつて、倍數的に行はれていかなくは承知しない。

然るに人間の行爲でも、自然界の出來事でも、決して意匠通りに行はれるものではない。意匠以外の散文的な出來事が、即ち割り切れない半端な事件が、人間の人生觀を形成せしむる主要な素因にな

れ生の第一義を要求する文藝家の態度と相似て居るところだ。只藝術家は、創作的氣分そのものを目掛けて居る。併し若し大宗教家の大悟徹底的風光は帶びないまでも、既に決斷と否定の一關を關いて永遠の生命に乗り上げた時には、其の生活には常春の光が輝く、其の眼は内にも外にも開けて、多くのものを發見せざるをえない。本能や性慾は時と共に衰退する。併し此の生命に乗り當てたものは、益々旺なる許りである。政治文學にせよ、生活問題にせよ、此の生活に徹した識見に依らなければ、附焼刃の恨を免れまい。苦し藝術欲の旺んな人が、此の生活に入つたとすれば、彼の前には、政治社會の問題から、生活道德の問題に至るまで、夏野における朝露のやうに、燦として其の眼を牽く。外界の刺戟はやがて、渠其の人の内生活である。藝術家が新を逐ふといふことも、個性を發揮するといふ事も、此處に至つて初めて其の意義を完うする。獨り藝術といはない、宗教生活は人生活動の全體に表現しなければ止まないものである。

要するに藝術にたづさはる人々が、眞劔な態度を以つて人生を觀るといふ所に、宗教生活と密接な關係を生じて來べきことは豫想される。たゞ其の態度が必しも宗教に到るとは定まつて居ないから、宗教家の側からいへば、斯うした文藝の努力に絶えず著目する必要があるらう。殊に現今は只傾向であつて、徹底でないから、其の所産なる創作は、現代の眞面目な悶えと呻きとを現はして居る。かうしたカレントがある事に、宗教家が大に留意すべき事は言を俟たない。また宗教雜誌などが、別に批評などを加へないでも、時代の文藝でかうした傾向のあるものを、常に紹介するといふ事は、最も策の得たるものであると私は信ずる。(八月十五日、甲州の山中にて)

然し人生の非様式的な部分を様式的に改造し、若くはそれを採用しまいとするのは悪いといふのである。大膽に醜なるもの、惡なるもの、不規なるものに面していくのである。然しそれをする前には、豫め美醜といふやうな因習的な二元的な抽象的な概念は放擲してあらねばならぬ。

思想界に於ては、意匠的な宗教に瞞された者（瞞されたと覺つた者か）は、無神論、唯物論を唱へる。醜惡なるものに面しても、避易しない、煩悶しない。これは既に善惡といふ價值を超越してゐるからである、

演劇といふものは一生の一部分のあつてもなくともいゝ遊戲である。しかし演劇のうちの様式の劇の様式を、そのまゝ人生の行爲全體に應用するとしたら、人間は到底その緊張しきつた規矩に堪へ得ないであらう。（藝術といふ狭い範圍に於てすら非様式の演劇を生んだ位である。）

宗教といふものも、人生の一部分として、一定の時間、一定の場所だけで人間が宗教的の表現をなして殘餘の時間は俗惡な不規律な生活を送るものとしたら、極めて理窟に合つたものだともふ。宗教と云ひ、様式の藝術と云ひ弛緩した人間の神經に、刺戟と規矩とを與へる快美な道具である。日常生活に惡い事をして置いて、懺悔に行く天主教の宗教的生活などは面白い。土曜日の晩にニコライの禮拜に出席して、其足で北洲の耽溺も妙ではないか。

宗教の絶對的價值を哲學的に立證しようとし、全人類救済 Universal Salvation を信ずるなどは、大々的の愚の極で演劇は律動的でなくてはならぬと主張する人々、美術的でなくてはならぬといふ人々の愚と同じ事である。

る事がある。斯ういふ場合に、様式的なものは頗る馬鹿げて見える。演劇などは劇場とか、舞臺とかいふ狭い場所、限られた時間に行はれる、一種の遊戲だからいゝものゝ、宗教は人生全體を蔽うてゐる生真面目なものであるから、かういふ場合には極めて悲慘な矛盾を感じるのである。

様式の劇が宗教的儀式より發足したといふ事は皮相な事實であるが、様式の劇の精神と、宗教の精神とは、根本的な心理的な事實である。宗教に於ける神の觀念は、様式劇に於ける美の觀念で、美の觀念はやがて型を生んでゐる。神の觀念が道徳を生んでゐるのと同じである。因習的な藝術家、因習に従ふ事に於て無上の快樂を感じる藝術家、若くは因習を新たに作らんとする藝術家が、型といふものに安立してゐるやうに、宗教家は行爲に於て宗教の道徳的規矩を守らうと努めてゐる。たゞ舞臺は一時のもの、人生は長いもの全てのものなるが故に、宗教家は自然の力に敵對？しかねて、道徳的規矩を守り得ず、俳優の如く完全に意匠を實行し得ない丈の相違である。

様式の劇も、宗教も、共に人生の美しき一面を捕へ得た、偉大なる偏見である。

下

様式の劇に對してゐるのは、非様式の劇である。(必しも寫實とは云はない、)意識的な動作(故意に目的を以て、俳優の自然の心持を抑蔽し若くは無視する動作)を避けて、人間の心持のありのまゝをさらけ出さうとする藝術である。團十郎が所謂「腹藝」といふものはその一面である。エレオノラ・デュウゼの努めてゐたのがそれである。人生の中に實在してゐる様式を攝取するのは悪くない、

論の立たなくなると同様に、結局目的論も立たなくなる。

若しこの思想にして、誤謬がないとするならば、從來の宗教は、その有り來りのまゝの姿を、そのまゝに續けて行くことが出来ないのではなからうか。少なくとも、その態度を改變する必要に迫まられはしないだらうか。何となれば、かゝる生命を神として、それと合體することを生活の目的とするならば、愛の神、光の神、正義の神に歸依渴仰の涙を濺いだ世にも美はしく醇なる情味の大半は、失はれてしまふからである。

茲に於いて僕は思ふ、今後の宗教は、必ずしも神と云ふ對象を有する必要があるのではなからうかと。不完全な——多くの場合誤れる——神の觀念に、吾々の大なる生命を閉ぢ籠めるのは、決して宗教の本意でない、少なくとも吾々は、斯くの如き生活をもつて、堪ふべからざる束縛と感ずる。

吾々は自己の眞實に生さんことを欲する、自然人生のあらゆる刺戟によつて、惹起せらるゝ情調を如實に味ひ、吾が内心の至深より發する要求を、如實に實現せんことを欲する。併し世界は自分一人のものでなく、社會は多數人の集合であるから、そこに何等かの道徳がなければならぬ。併しその道徳も、コンヴェンショナルなものでなく、新しい眼で自然人生を見た新しい道徳を、自分で築いて行きたいものである。兎に角、かくして何者の束縛をも受くることなく、吾々の眞實と自由とに生きて行きたいものである。そして若し宇宙生命と個性とが、切つても切れない關係にある渾一體であるならば、個性の自由と眞實とは、取りも直さず宇宙生命の實相である。

對象としての神を要せざる宗教、眞實と自由との眞の人間生活、これが最も新しい宗教ではなから



生命中心の宗教と藝術

加藤 一夫

宗教の學者に従へば、宗教は神と人との關係であると云ふ、無限と有限との關係であると云ふ。そして宗教生活とは、神と人との合體せる生活であると云ふ。併しながら、その神とは抑も何であらうか。吾々は先づ、その神の内容とか、性質とかから、尋ねてかゝらねばならぬ。何となれば、吾々は最早、神は愛なりとか、光なりとか、正義なりと云ふが如き、寄木細工式の説明では、満足が出来ないからである。

基督教の自由思想家が、神をもつて宇宙生命と見、生の力と見、又ベルグソンの所謂、不斷永劫に流れゆく大生命と見る様になつて居るのは事實である。近代科學や思潮に觸れたものとして、それは正に當然なことであらう。併し假令、それにしても、その生命の如何なるものであるかは明瞭でない。これを直ちに、愛だとか正義だとか云ふ範疇に容れてしまふことが出来なくなる。たゞそれは大なる生命である、目標を目的として進んで行くが如き狹隘な生命でない。その生活にはたゞ過程があつて、そしてその過程そのものが實在^{リアル}であつて、行き着く先さが何處と定まつて居ない。かくて器械

れに至つては、必ずしも相一致しないのである。僕は嘗つては宗教と藝術とを握手せしめたいと云ふ願望を抱いたことがあつた。が今はその様なことは、問題でなくなつた、問題は一言で盡きる。曰く『たゞ生くればいい、最も自由に、最も眞實に、最も深刻に』それが宗教であらうがなからうが、僕の關するところではない。それが藝術となり得やうが得まいが、等しく僕の關するところではない。僕は宗教だとか、藝術だとか、哲學だとか云ふ籬を取り去つてしまいたいと思ふ。宗教家だとか、藝術家だとか、哲學者だとか云ふ様な種別を撤廢して了ひたいと思ふ。そしてたゞ茲に一個自由な人間と云ふものを創りたいと思ふ——宗教に累はされず、藝術に煩はされず、哲學に煩はされざる——宗教や藝術が主であつて、人間が從でない。人間が主であつて、彼等は從である。

これが宗教と藝術との實質についての僕の感想である。

前號の時評欄に掲げた「歴史と集團と自我」は、この一文の後を受くべきものである事を附記して置く。(編者)

人生は悲しい。けれども其の底は深い……フエルナン・グレエグ

うか。

この意味に於いて、僕は基督者クリスチャンとなるよりは、人マンとなりたい、自由人に、眞實人に。基督教もしなほ吾々に要求するならば、基督者——人とならねばならぬ。

近頃の文藝が、著しく宗教的になつたと云ふ。併し僕は思ふ。自然主義の最も盛なりし時と雖も、たゞ時代の思潮に驅られて、自然主義者となつたものでなく、眞實自己の衷心から、この運動に参加したものならば、悉く皆宗教的であつたと。たゞ彼等の宗教は、暗いものであつた、今日の藝術家の宗教は、稍明るくなつたまでのことである。それはたゞ明暗の相違に過ぎぬ。

何故なれば、彼は眞實に生のことを考へたからである。眞實に生を考へたればこそ、自然主義が生れたのである。そして眞面目に生のことを考へ、觀照し、且つ批評し、創造して行くことを即ち、新しい意味の宗教とその目ざすところを一つにして居るからである。

宗教と藝術とは、生命と云ふ一點に於いて、統一せられる。生命にふれない宗教は骨董である、生命に觸れない藝術は、無用の贅物である。今日の藝術家が、宗教的になつたと云ふのは、自我とか生命とか云ふことに目ざめて、如何にかして生命の眞實に生きやうとする欣求の念が、彼等の中に油然而として湧いて來たからである。これをもつて若し今日の宗教家が、藝術家をしてその門に降らしめたなどと自負するならば、それは大間違ひである。宗教を求むるのは、人の至情である、併しながら彼等の求むる宗教は、從來の既成宗教ではあり得ないのである。それは自由なる宗教である。

かくの如く宗教と文藝とは、その實質に於ては、生と云ふ一點に於いて相一致する。併しその表は

の中に飛び跳ねて居る金魚や鯉にも、生命があると思ふ。斯う考へるのは、云はずとも當然であると思つて居る。ところでこれが果して當然であるかどうか疑問である。

吾々には何故、草木や禽獸に生命があると思へるのであらうか。成長するからではないか、運動するからではないか、と答へる者があるかも知れない。然らば成長したり、運動すれば、それが何故に生命であらうか。運動するのが生命であるならば、電車にも、自動車にも、生命がある筈である。蓄音器にも生命がある筈である。

しかし哲學の發展を考へて見ても、矢張り同じやうなどがあつたと思ふ。希臘哲學の始祖と云はれて居るタールスは、天地萬有の靈妙不可思議なのに思念を潜めつゝ、海岸に坐し、茫然として打ち寄する波を凝視して居た。或は高く或は低く、來つて磯を占領したと見る間に、再び遠く去るのである。此の不思議なる活動を見た彼れは、海にいな水に生命ありと結論した。水は生命の淵源であると喝破した。若し之を哲學の發生と見るならば、哲學といふものも、矢張り生命を探索せんとして起つたものであるとは、歴史的に明白な事實である。然し何故に動く不思議なものに、生命ありと考へるのであらうか。

二

疑心は暗鬼を生ず、と云ふとは吾人が毎々聞く所である。そして吾人にその實證が示される。幽靈の正體が枯尾花であつたり、ぶら下つた瓢箪であつたなど云ふとは、何處の國にも同じやうに在る。



二種の生命

三 並 良

ある日學生が二三人遊びに来て、先生、生命と云ふものはどんなのですか。何か斯う明瞭に、自分の眼でも見えるやうに分かるわけには行かないものでせうか。卵か何かを擴大鏡の下に置いて、之を観察して居たならば、面倒がなく、具體的に分かりはしまいかと云つた。此の質問は、甚だ幼稚であるに相違ない。けれども斯う云ふ幼稚な考へ方をするものは、此學生に限つたとはあるまい、恐らくは世の大多數の者は、學者と云れる者でも、同じ考へ方をしては居まいかと思ふ。僕はこゝに、考へ方の大なる相違があると思ふ。

生命が外物にある、とは誰れでも先づ第一に考へるとである。庭の植木を見て居ても、あの松の緑は如何にも青々として居て心地がいい。松に千年の壽ありと昔の人が云つたのは、中々面白いと云つたものであると考へる、こゝに生命と云ふとが直ぐに想ひ起こされる。松ばかりではない。青々して居る草木には、生命があると考へる。庭を走つて居る犬にても、猫にても、生命があると思ふ。池

僕が斯んな餘計などを云つたのも、つまり吾人には、内にあるものを外に移す性質がある事を云は
んが爲めてあつた。即ち吾人は主觀的なものを、常に客觀的ならしめやうとする、換言すれば客觀化
の性質を有つて居るのである。

生命が外物にありと考へるのも、實は主觀的なものを、客觀化する性質の現はれてある。吾人々間
は、誰れでも自分の生きて居るを知つて居るであらう。渴すれば水が欲しい、飢えれば食物が欲し
い、切れば痛い。是れ何ものが、そんな事を云ふのであるか。吾人は之を生命と云ふ。嬉しいとがあ
れば悦び、悲しいとがあれば泣く、善いとをすれば愉快に思ひ、惡いとをすれば氣色が悪い。これは
何がさうするのであるか。吾人は之を矢張り生命と云ふのである。恐らくは人間と生れた程の者は、
斯う云ふ内觀をしないものはあるまい。これが恐らくは、吾人の第一實驗であるに相違ない。此の事
實は、殆んど自明である。自明であるから却つて、吾人の意識には上らない。否、全く意識に上らな
い譯ではないが、極めて漠然となつて居て、反つて此の内部の事實を外部に移し、客觀化の作用と
比論アナロギとに由つて、外界物に生命があるとが、第一に氣付くやうな現象になる。尤も一寸ここで、斷つ
て置かなければならないとは、僕が斯う云ふやうな議論をすると、何だか唯心論でも主張するやうで
あるが、決してさうではない。外界にあるものと、内界にあるものとが、もう一つ上て統一せられる
から、初めて精神的現象があるであらう。こゝではたゞ、發展の順序をのみ論じて居るのである。

故に若し、内部に生命がなかつたならば、どうして外部に生命があると云ふとが分からう。さう云
ふ筈はないのである。だから幼稚な時代には、人類でも個人でもみな實際生命のないもので、生命

然し吾人には何故暗鬼が生ずるが、何故幽霊が見えるかと云ふとが、甚だ興味のある問題である。固よりそれは疑心があるからである。幽霊と云ふとを考へるからである。若し疑心がなかつたならば、若し幽霊と云ふ考へがなかつたならば、暗鬼や幽霊を見るとはあるまい。即ち是れ等の例によつても、人間は自分の中にあるものを、外に移すの習慣があるとは明瞭である。哲學的の用語を以て之を云へば、吾人は常に客觀化をなすものである。

若し盲目者であつたらばどうであらう。彼れは幽霊の姿を見るであらうか。若し聾者であつたらば、どうであらう。彼れは幽霊の聲を聞くであらうか。恐らくは姿を見、聲を聞くとはあるまい。是れその姿や聲が、彼れ等の内部にないからである。然し見える眼を有し、聞える耳を持つて居る者は、色々なものを見聞するのである。然しその見聞はどう云ふ有様にするか。

吾人は常に外物を見聞する。僕は今ここで、生理學の理窟を云ひ度くはないのであるが、音響なり光線なりは、眼や耳に感覺を起さしめて、腦の中に音感なり視感なりを生ぜしむるのであるから、見たり聞いたりするものは眼や耳の底に感じさうなものである。けれどもさうでなくて、音響を發するものが、三間向ふにあれば、吾人はそこで語を聞き、五間離れて物體があれば、其處に立つのを見るのである。これも矢張り、吾人が内部にあるものを、外部に移す性質を有つて居るとを示すに足る事實であらうと思ふ。

部のあらゆる微かな震動ぶりから、實感實驗するのである。こゝに深みも存在する。若しこのことが自分によく意識せられたならば、他人のともよく分る。よく分るのみならず、こゝに共通のものがあるとも、直ぐに直感が出来る、即ち自他の間に共鳴が生ずる。若しさうなれば、直感が出来るのみならず、此の共通なるものは、宇宙の大我に於いて纏められて居るのであるとも結論が出来やう。基督教會で、昔から聖靈の交りと云つたのも、この心持の表現であると思ふ。

五

現代の考へ方は、みな上に云つたやうな方向に向つて進んで居る。哲學でも、文藝でも、みな此の方向へ進んで居るのはあるまいか。例へば小説などで、自己の告白が重んぜられて居るのは、これが爲めであらう。いな何も告白である必要はないが、内部の現實曝露が出来るやうに書くのも、同じ意味から出て居る。尤も内部の告白など云ふとは、心靈の發展若しくは歴史を、一日も忘れない基督教の立場から云ふと、固より新らしいのではない。既にボーロにも、アウグスチンにも、見るとが出来るのである。

けれども、もう一度前に歸つて、自己の實感する生命とは、如何なるものであるかの問題を考へてみたい。この生命そのものは、恐らくは自分で實感するより外はあるまい。固よりその働きの模様は、觀察が出来る。また觀察をする必要もある。若しこの觀察がなかつたならば、たとひ間違つたとしても、少しも分らないではないか。それでは眞もなければ、偽もない。善もなければ、惡もな

すべきものが出来る。故に小供と大人との區別は、分量の相違もあるけれども、尙ほそれよりも緊要なのは、本質上の相違である。

其の組織が立派に出来れば出来るほど、生命の偉大が現はれる。生命に奥行きが出来る。深みがあるのである。普通世人が淺薄だとか、深遠だとか云ふのは、この點に關係して居る。單に植物的生活をなして居るのは、原因結果の關係から、自然に現はれて来る生命である。吾人は之を生理的心理的生命とも云ふことが出来やう。然し彼の組織をなすに至つては、吾人はどうしても自動的の働きをなさざるを得ない。若し自動的の働きが出来ないのならば、自己など云ふのが、元來間違つて居る。止むに止まれぬ強壓を受けるのは、事實であるが、吾人は之を自己に採用して働いて居る。自動的の活動がなかつたならば、植物的生活のみが残る。本來の無一物と云ふのは、この心境であらう。しかし僕は、本來の無一物にはなり度くない。自ら大に生命を緊張して、大なる組織を造りたい。この組織のうちに、宇宙がはいるのである。否、自我の生命が擴張して、宇宙に合するのである。さうすると一方の生命は、如何なる場合に於いても自然に働いて居る。けれども他方の生命は、自ら働かざなければ成立しないものである。これ即ち、僕が生命に二種ありと云ふ所以である。

七

此の考へ方によると、何ものを見ても、内部から考へるやうになる。歴史でもさうである。歴史は唯だ事實を列記したものだと思つて居たが、今はさうは考へない。列記された事實は客である。これに

い。退歩もあるまいが、進歩もない。然し生命が働く時は、唯だ働くのみで、吾人は自分で之を實感して居る。實感して居て直ぐに幾多の他の意識となるであらう。その間は間髪を容れざる距離であらうが、確かに時間的に前後の關係があるに相違ない。固より此のとは個人の性質や習慣、練習などによつて差別があらう。

若し生命の個々の現象に就いて云ふならば、手動き、足動き、頭腦の働くのも、みな生命である。いや五臓、六腑、吾人の全身は瞬間と雖、靜止するとなく常に働いて居る。吾人の此の生命から推して考へると、植物も同じ作用を有つて居る。之を以つて吾人は、此の方面の生命を名づけて、植物的^{フエケタ}生活と云つて居る。吾人には方に、此の方面の生命が働きつゝあるのである。

六

しかるに小供と大人との區別は、どうして出来るのであらう。小さな苗が大木となつたやうに、小供が大人になつたのであらうか。それでは植物的成長である。けれども吾人には、その外に大切なものがある。總括して云へば、これは精神上の働きが發展したのである。例へば知識が殖えたと云つても、其の殖えたと云ふのは、どう云ふ意味であらうか。小供は文字を五十しか知らないが、大人はそれを千だけ知つて居ると云ふ意味であらうか。固より此の意味もある。けれども是ればかりではなくて、これよりも大切なものが此の外にある。それは精神が發展すればするほど、精神のうちに在る色々な材料は、平面に並べて置かれずに、組織的に組み立てられるのである。即ちこゝに本質的とも稱

八

然るに尙ほ不思議なのは、生命のうちに反抗が生ずるとである。若し自然に發展して、段々に成長して行くものであつたならば、何も反抗などは生じさうもないのである。機械の輪が一齒／＼に轉つて行くやうなものでなければならぬ。然るに人間は本能のみに満足するとが出来なくなる。有限に満足が出来なくなる。惡に満足が出来なくなる。斯う云ふ風に、反抗が續々起こつて、どうかして現狀打破を試みやうとする。吾人はさしあたり、それがどれだけ成功するかを問ふ必要はないこれ丈けで兎角、一種特別な現象がこゝにあると云ふと丈けは分かる。

ところが斯く現はれて來た生命が、實は歴史、藝術、哲學一言にして云ふと文明のうちに大きくなつて來る。その發展は、自己の法則によつて進んで居る。さうなると、生命は決して一個人の意志や、希望によつて左右するとの出来ない勢力になつてくる。然し、若し、吾人が斯う考へれば、既にその瞬間に吾人はこの生命のうちにあるべきを忘れて、之れと對立して居る。對立すべきではない。内部にあれば僕が毎々云ふ所である。

内部にあると、吾人は直接に、湧いて來る生命の泉を自分に有つて居る。生命の本源に居る。生きた力を直接に感ずる。此の生きた力は宇宙の根柢から、直接自分のうちに湧き出す力だと感ずる。これを宗教語で云ふならば神である。吾人が直接の感じから云ふならば、精神生活である。

は主がなければならない。歴史の變遷は、内部に働いて居る生命の發展である。吾人が瞑想して、古今の歴史を考へる時は、そのうちを流れて今に至つた生命が生きて來なければならぬ。歴史上の事實は、骸骨のやうなものである。こゝに生命が吹き込まれて、肉もあり、血も流れるやうになるべきである。畫や彫刻を見る時でも、同じとて、外面から之を眺めた丈では、色の配合や、石の凹凸が、肉眼に映ずるのみに過ぎないであらう。けれども吾人の靈の眼には、色彩によつて現はさうとした、その生きたものが復活して來る。色や石を通して、作者の生命と吾人の生命とが一致するのである。畫や彫刻などに靈があると云つたのも、この見方から云ふと、決して虚言ではない。

既にさう云ふやうに生命が、作物に働いて居るものならば、この働き方はどう云ふやうに行はれるものであらうか。生命は内部から發するものである。その現はれる場合にこそ、時間的であり、また空間的であるから、一部々々づゝからは現はれて來ない。然し生命その物は、纏まつた全體である。此の全體は部分々々から組み立てられて、全體となるのではない。全體が部分々々に考へられるのである。故に作物でも、初め既に全體が吾人の精神中に創造せられ、それが部分々々から製作せられるのである。若し部分々々のされぐゝを集めたやうな作物であつたならば、それに生命はない。所謂靈のない作物である。この事は吾人が手紙を書く時のことを思つて見ても分かる。用紙に向つた時すでに、一筆啓上から恐惶謹言までに云ふとは、一時に生まれて居る。それを吾々は段々に筆で現はして行くのである。——尤も用もなく無理に書く手紙は、別問題である。



運命の飛鳥

吉田 絃 二 郎

或る時は冬の夜に狼の遠音を聴くやうな思ひで、人生といふ不可思議な力の渦のなかに戦いてゐたこともあつた。或る時は臃ろげな春の夜を戀人の離に忍ぶやうな心持ちで、人生の靈しき樂の音に聽き入ることもあつた。或る時は人生は灰色であると想つても見た。或る時は緑色であるとも考へた。或る時は悲しい歌を唱うた。或る時は輝かしい歌を唱うた。

私の過去の小さな歌集のうちから、色々な彩に染められた人生の片影がこぼれて来る。
灰色の、緑色の、褐色の、小雨降る、そして輝かなあらゆる人生の影と影!!!

人生は灰色である? 緑色である?

愚な私は幾年の間、人生の眞實の色別に小ひさな胸を痛めたのである。人生とは何であらう?
人生は灰色であつた。人生は緑色であつた。しかも時としては、暗黒と光明ほどの異なる實在として現はるのであつた。そして私はその凡べての色彩を眞實のものであるとして、受け容れなければ

九

それ故に、極めて斷定的に云ふならば、僕には精神生活があれば神があり神があれば精神生活がある。然しこれは普通の生命の深みにある、僕が假りに第二の生命であるのを記憶せなければならぬ。現代の思潮は生、生命、生活と云ふとを大に高調して説くけれども、惜しいかな、それに二種あるのを忘れて居る。是れ實に悲しむべき誤解、迷誤の生ずる原因である。ゲーテはメフィストをして「彼れ之を理性と稱し、獨り之を用ひて、あらゆる動物よりも、より動物的たらんとす」と云はしめて居るが、生命の誤解は「彼れ之を生命と稱し、獨り之を用ひて、あらゆる動物よりも、より動物ならんとす」る弊に陥る恐れがある。

生
き
る
と
は
働
く
こ
と
だ
……
ペ
ル
ゲ
ソ
ン

めきに波打つを覺えた。

私は凡べての道德、凡べての習慣、凡べての傳説の上に、冷笑を加へながら、破壊せられ行く過去の權威を想うて、私の新しい生活を祝福した。

私は街に出て熱帶地の罌粟のやうな色の紅い酒を需めて歸つた。私はまた五月の野を想はせるやうな深碧の濃酒を懷にして歸つた。そして新しい私の生活の爲めに、一人の祝筵を開いた。

私は新人の生活！眞實刹那の生活！を叫んだ。そして右手の盃を掲げて新生活の健康を祈つた。

私の生活は馬車馬的に前むべき約束であつた。しかし私の生活は、昨日までの惰性を道れることはできなかつた。

私は幾日かを、たゞ過去の連續を斷たんが爲めに奮闘した。そして過去の或る者を破壊することができたと思つた時に、既に私は更らに新しい過去を、私の生活の足許に發見しなければならなかつたのである。

過去と現在と未來！過去に住し、現在に即し、未來に羽打たんとする私の思想は、太だしき錯誤に陥つてゐたのである。

過去、現在、未來を貫く一線の時の流れに、そしてその生命の跳躍に、劫初より無窮に入る凡べての刹那刹那は、悉く現實性の時である。凡べて眞實性と現實性とは如一の生命であり表現である。私が過去の或るものとして想ふ時、それは死せる幻影である。人類の歴史を想ふ時、それが過去に於い

ばならなかつた。

私が人生といふ時に、それは極めて漠然たるものであつた。人生といふものを客觀的に抽象して、私の今日までの生活の徑路の上に表現せられたるその刹那刹那の現象の總和から、歸納したる人生は、雑多な不純物と、矛盾と、倦怠とに満ちたるものであつた。私は私の心に意識することを覚えて以來、明日といふ期待を忘れることはできなかつた。私の意志が働いた前に、私を育て、呉れた人達は、明日の爲めに私に乳を與へた。私が小學に入る時、先輩は明日の爲めに、私に讀むことを教へた。私が軍隊に入る時、上官は明日の戦ひの爲めに戰術を教へた。斯うして私は明日の爲めに生きねばならぬ人間となつた。そして、その明日は永遠無窮の象徴であることを知つた時に、私は踏み止つて現在の私自身を省みなければならなかつた。

現在の自己、現在の生活。尙ほ一層徹底的に言へば、現在刹那の自己、或はその生の燃焼、これ等は等しく新しい自覺を持つた人々の間に、近頃最も強い興味を以て論ぜられつゝある問題である。現在の一刹那を如何に生活すべきかと、私等の當面の問題となつて現はれた。そこで刹那充實の思想が生れた。最も明かに、最も徹底的に、最も眞實に刹那刹那を生くといふことが、最善の生活であるといふことに一致した。

私は過去の生活——灰色であり、綠色であり、暗黒であり、光明であつた生活——の矛盾や倦怠に満たされてあつたに引きかへて、現在の生活、或は刹那的の生活が、如何ばかり希望があり、緊張があり深味があるものであらうと想ふ時に、私の臆病な胸がひたすらに現實の光明を追うて法悦のとき

しかしながら彼れは決して、過去の努力を顧ることを爲さない。何となれば彼れ自身のうちに彼れ自身の現在のうちに、彼れは過去と思惟せらるゝものをも具有してゐるからである。

私は歴史を或は過去を知る必要はない。記憶する必要はない。過去や歴史が自分外、自分の現在外に在ると思ふならば、その人は眞に過去と歴史とを有たぬ人である。

未來に對する私の考へも、過去に對する私の考へと同一である。過去が現在我を離れて、或は現在生活を離れて、存せざると等しく、未來も亦私の現在生活を離れては存在しないのである。私が未來を開拓する時に、未來は生れるが、私が開拓しない時に決して未來は存在しない。しかも私が未來を創造し得たりと想ふ刹那、それは決して未來ではなくして現在でなければならぬ。私達は先天的豫覺によりて、未來といふ時の無窮性を想像することができ。しかしそれは一種の感情であつて、眞實性を伴うたものではない。未來といふ言葉は、一の方向を象徴する暗示に過ぎない。

斯う考へて來れば、私達の生活は、たゞ現在そのものゝみが眞であり、また現在そのものゝみが生きてゐるのであるが、その現在は、所謂三界を併せ吞みたる生活でなければならぬ。こゝに於いて始めて時の持續といふことが意味あることとなるのではないだらうか。

これで先づ私の現在生活の意義が附いた。私は現在に於いて生き、現在に於いて味ひ、現在に於いて創造し、意識する。そして私が眞實に索めんとしつゝある生活の爲めて悶えるのである。

ての記録にのみ止るならば、それは死せるものであつて、私に何の交渉をも持たないのである。歴史に生命があるといふことは、その歴史に現實性を加味したる場合にのみ眞理である。私が生れる時、私が生活する時、私は過去の總和、過去の歴史の凡べての力を現實表現のうちに取り入れてゐるのである。しかし斯ういふことを言つたならば、私が如何にも過去や歴史の上に戀々としてゐる者のやうに想はれるかも知れない。それで私は過去、現在、未來といふものゝ存在を認めないと言つた方が、まだしも私の生活を生かす適當な表現法であらうと考へる。即ち私は、私の生活の後ろに過去といふ長い時間の繼續を引き摺りながら、未來といふ時間のなかに創造して行くのではない。凡べて過去といふものが、私から一寸でも離れたところに在るのであるならば、それは私にとつて何の關りもないものである。過去或は歴史といふものが私の現在、私それ自身のなかに現實性を有つて動いてゐる時に、過去と名づけられたる、私の昨日の努力なり、創造なりが、價值あるものとなるのである。それ故に縱令、過去といふ言葉を便宜上に用ふるとしても、それは私にとりて決して過去といふものではない。實際は過去と思惟せられた凡べての努力は、現在の内容として生きてゐなければならぬ。随て私は過去を振り願ひ、或は過去を追憶するの必要はない。若し私が過去を追憶するといふならば、それは現實我の内容——時空を超越したる——の凡べてを内省する刹那でなければならぬ。

一疋の蠶は桑の葉を食つて日々に成長して行く。私は創造しつゝ日々に新しい私を作つて行く。蠶が喰ひ盡した桑の葉の總量が、決して現在の蠶ではない。しかしながら、彼れは四眠に至るまでの彼れの生活の凡べてをも、現在の彼れが内容として取り容れてゐるのである。

現實に於ける私の生活は、また灰色であり、綠色であり、暗黒であり、光明である。

現實！ 汝が齎らすあらゆる生活の色相を私は受け容れやう。灰色の生活！ それも眞實の生活である。光明の生活！ それも私の眞實の生活であらう。私は凡べての色、凡べての相を眞實として受け容れやう。

暗黒の夜を翔る私は飛鳥である。時の永遠に亘りて放たれたる夜の鳥である。私の翅が碎かれぬ間、私は何處にか向つて羽叩きを爲なければならぬ。天上と天下と一つの星影さへもない。微風のそよぎさへもない。大地は眠つてゐる。天空は黙してゐる。黒い大地の一面を覆うて、人類の欲生衝動の人いさが、凄いほどの反映を暗の空に投げてゐる。無極より無極に翔る私の翅が、或は森頭の梢を擦る時に、私の心内の恐怖が青い光となつて、私の胸から迸つては、その森を照す。森の老木と、獵小舎が一樣に青い海のやうに顫へてゐた。私の翅が都會の尖塔をかすめる時、歡樂を欣求する私の心情は溢れて、私の胸を通して深紅の光耀を都會の上に放射した。

私は暗黒の空を走る光蟲である。その刹那刹那の變化に隨つて私の内心は殆んど本能的に光明と、暗黒と、灰色と、綠色の色光を放射する。そしてその刹那刹那に華照せられたる森と、水と、都會の種々相を意識する。

永遠の暗を貫いて創造の疾驅に運命づけられたる私は、三界抱一の刹那刹那に射光しつつ、翔らんが爲めに翔るのである。もし私が現在の翱翔に倦怠したる刹那、私の生活は倦怠である。もし私が翱

現實に生きたる生活！ 眞實を索めんとする私達の衝動的な生活！

私の若い血が戀人を想ふやうに顫へた。嘗て過去の追憶にのみ淋しい涙を灑いでゐた私の情調が、眩耀如實の生活の須彌壇を想うて、現實の前に敬虔なる交響樂を奏づるのであつた。

現實！ 刹那！ そしてその生命！

私はその生命の深所を攫まんが爲めに、聲を大にして、眞實の生命を喚んだ。私の創造の方向を思索した。

しかしながら過去を追求した私の心！ 未來に憧憬れた私の心！ 現實に執したる私の心！ そこに何れだけの異なつた世界を生み得たであらうか。

私は意識を有たない場合にも、生きてゐた。「ロメオとジュリエット」を夢に描いてゐたときも確に生きてゐた。シヨウペンハウエルの哲學を想ふ刹那も、私の生活は濁つた血の脈拍を聽いてゐた。

現實！ 現實！ 陽炎の如く走り、陽炎の如く閃く私の生活の現實味！ 私は仍り汝の生活に於いて、

言ひ知れぬ不安と、憧憬と、焦燥と、感傷とを感ぜずには居れない。たゞ私は過去に於いて覺えなかつた緊張と盲目的衝動との、自慰的安逸を發見した。

現實！ 現實！ 私は時として勇者の如く、汝に面して起つ。時として小羊の如く汝の前に泣く。



悲哀の宗教的使命 岡田哲藏

我等は、眼前雑多の事象に紛れて、深く想はねばこそよく忍ぶが、思を潜めて反省すれば、人生の悲哀が、ひし／＼と身に沁み渡るのである。

人生の悲哀の根柢は、萬有の悲哀に存する。自然はいかなれば、かくばかり生命を浪費するか。生まるべき可能性を具して出生せざる種は、如何に夥しきことであらう。佛者は「人身得難し」、そは盲龜の浮木に逢ふより難しと嘆じたが、假りに一個の我が世に出る爲めに要せられた一切の結合を考へたら、その織目の複雑に驚かざるを得ない。その織目の一つだに破れたらば、私の出生は無いのである。若し之を偶然に非ずとなし、我れ世に出てん爲めに有意的にそれを織り出すを要したとすれば、その苦心慘憺はとて測り難いであらう。我等はかく、一面には種の浪費に驚き、他面には出生の機會を怪しむの外は無い。

偶然に生を得ても、生物相食まねばそれを持続し得ないとは不思議である。

こゝに厭世觀は起らざるを得ない。生存の痛ましき競争は、社會制度の缺陷の爲めばかりでなく、それが生物界一般の現象である。東洋人は少くも之に疑を存したが、西洋にては全然人間本位であつて、肉の範圍は、一層自由に且つ廣

翔の翼を羽織りたる刹那、私の生活は死である。

暗のなかの翱翔、これ私の創造である。私が向はんとする所、私が遭遇する所のものは何であるかを知らない。たゞ私は三界抱一の現實に満身の力をこめて翼を張れば宜いのである。空には一つの星もない、地には一つの燭もない。一つの物の音もない。しかしながら、私の創造の刹那刹那に、私の心内の靈しき力は、青い光をもつて、森を照らし、灰色の光をもつて墓場を照すことを知つてゐる。私は永遠に暗を走る運命の飛鳥である。

秋が來た。一と群の頬白が、白い雲の隙から飛んで來た。そして毎日庭の栗の樹に秋の歌を齎してゐる。現實を求めて、現實の深所を攫み得ぬ私の心は、毎日、毎日、白い雲と、梢の頬白とを羨ましく思ふ。——三・九・一九——

知識は理性の花ではなくて、愛のいとしい妹である……メエテルリンク

哀である。

されど害悪あるが故に、救ひがあり、悲哀あるが故に慰安があり、宗教はかくして成る。全然の平和、全然の歡樂に宗教は無い。故に悲哀の宗教的使命は、一見して明なるが如く見ゆる。然し事理はそれ程に容易でない。

厭世的なる原始佛教は、いふまでもなく、悲哀あるが爲めに成立した。基督教も亂世に出て、教祖は「哀みの人」、「寂しき人」であつたが「悲む者は福なり」と習へて、福音を説いた。その「慰を得なければなり」との慰めは、主として來世の報償であつた。それが後世餘りに廉價なる樂天主義に墮して、向上奮闘の氣は銷磨し、悲哀の深き調はひびかず、樂みの淺き響と化した。これでは餘りに、安息日道德である。それでも基督教は、改悔を要求するに於いて嚴正であるが、樂天主義に一轉した淨土佛教に至つて、成佛は絶對他力で廉價の極となつた。然し佛教本來の性質を脱せず、尙ほ哀調の充ち渡れるは注意を要する。和讃の聲調を悲しく思ふのは、我等の心ではないか。

神は愛なり、人々相愛すべし、この二條を以てこよなき金句とし、以て基督教の特徴を誇る習であるが、個體に就いて考ふれば、神果して愛かとさへ反問する餘地がある。プロメテイアの如き反抗も、こゝに意義がある。この悲哀を正視せぬのは弊である。民衆の氣やすめ、淺薄なる俗教は、こゝより生み出される、所謂安心立命は幻夢である、一層惡しくなれば方便となる。

悲哀を正視する現代の文藝はかゝる點に於いて宗教に反行するのである。その見るところこそ、世

かつた。鳥を別かつて害鳥といひ、益鳥といふ。けれども鳥自らに何の損益があるか。たゞそれは人間の爲めのみである。君子庖厨を遠ざくといふも、動物虐待防止といふも、目先を欺くのみである。メーテルリンクの「青い鳥」に、立ち樹や動物の精を呼び起こしたら、恐ろしく人間に敵對をしたので、テイルテイルは叫んで、「彼等がこんなに悪いとは知らなかつた」といつて居る處がある。これは心無しに生物を苦しめて居る人間の反省の聲である。

生には喜悅もある、光明もある。然しそれさへいと短い。故に喜びの裏面は悲哀である、個體は容赦なく滅ぼされて、種族を永續させる。自ら欲望を満足すと思ふ間に、自らを滅ぼして種族を續けるのは、種族に欺かれるのであるとは、シヨッペンハワールの厭世觀の有力なる主張である。

東洋では、人世を泡沫夢幻と見た。基督教は之に反して、人の價値を重んじた。人格尊重はその特色であるとして推讃せられた。然し科學の進歩に伴ふ宇宙觀の變遷は、宇宙を絶大にして、人間を微小にした。これは東洋觀への復歸ではないであらうか。

文明の進歩は、人類の福利に貢獻したが、裏面には社會諸機關の發達で、人の生活は甚しく分裂し、全人格は發達享樂するに由なくて、些々たる分業に全生の力を没するものゝみ多くなつた。智識の進歩さへ、科學とその部門とに分裂して、全體の捕捉いよく難く、哲學は其の嘗て誇りし光榮を失ひ、宗教は幻滅の悲しみを見て居る。

個人の老、病、死、希望の欺き、親しさものゝ離合集散、昔ながらの習ではあるが、常に新なる悲

我等は安易なる慰めに耳を傾けて居られぬ、我等は悲哀を明に見ねばならぬ、そしてそれに關する我等の見地を一轉せねばならぬ。

此頃マーチノの說教集を見た、“Sorrow no Sin” “The Contentment of Sorrow” など題する說教がある。彼はいふ、中世の基督教は、世に於ける一切の事を想ふは罪である、故に悲み嘆くも罪であると考へた。然し過ぎて返らぬ、そのかみのやさしさなど顧みて、寂しみ想ふが如きは罪ではないと。かくて彼は、悲哀は宗教的の鍛鍊であると見るのである。

現今印度の詩人ラビンドラナト・タゴールは、先頃英國にて歡待せられ、この夏は巴里の自由宗教大會に臨みたる人、彼が最近ヒツバード誌の卷頭を飾つた “The Problem of Evil” の一篇、大體に於てマーチノなど同一意見である。

我等が悲哀によつて鍛鍊せらるゝは事實である、こゝに悲哀の宗教的使命は生れ出るのである。然し一に之を鍛鍊と見て、見解は徹底するであらうか。英國のガルスウオーシーが描いた短篇中に “Christian” と題する一篇がある。

彼は或日宗教家となつた舊き學友に邂逅して、之と談つたのである。基督教の教、形式よりは精神を尙ぶことは勿論である。さらば不幸の婚姻にて、妻の心が常に艱むとせば、尙ほその夫妻の形式を續くべきか、これは彼の問である。宗教家なる彼の友はいふ、「艱みは靈の救となる」と、彼問ふ、「さらば不幸の婚姻は一層基督教的にて、愛のみありて苦なきよりは神の目に高からん、艱みにして祝福なりとすれば、他人に艱を與ふるは如何」と、難問は明答を得ぬ、惡しき夫が、愛なくて日々基督教者

相の眞である。傳説を保有し、民衆を安んぜんとする宗教家の態度には、却つて虚偽があるに至つた。甚しき事理の轉倒ではないか。

古き神學者はいふ、人はもと平和喜樂の樂園にちかれたが、自由を亂用し、神命に叛き、宇宙の秩序亂れ、爲めに贖罪の要を見るに至つたと、古はこれが悲哀の説明とした充分であつたのである、今はそれが牽強附會の極みとなつた。

安慰を未來に望む空想天國説は、諸大宗教にも共通して存する。然しかゝる樂境は、果して望ましいであらうか、故ジエームス教授は嘗て、米國のシヨトクワに行つた、こゝは教育、衛生、清き快樂など、完備し盡くせる中等社會のバラダイスである。彼はこゝに入つて、人間の理想郷の實現を見た。然し一週日の後、常の社會に歸るや、思はず *What a relief!* と呼んだ。争鬭なき平安境から、競争の常の社會に歸つて、レリーフとは妙ではないか。この善惡悲喜混淆の多事の社會こそ、人の常住の處との感が、この刹那に彼に來つたのである。我等はバラダイス・ロストの世にあるが、バラダイス、リゲンドは果して望ましいであらうか。我等は天國を望む、然し今望む如き天國を得て、それが果して樂しからうか、それは堪へがたき倦厭とならぬであらうか。こゝに奇妙なるバラドックスがある。バーナード・ショウが描いた天國は、極めて *bore* な處である。天國の民は堪へ難くて、地獄に往來するのである。

事は高尚で己が子を愛して居る、外にいくらも女子のあるべきに、如何に事情は事情でも罪人の娘とはと不承知である、遂にピーター自らに問ふことになる、これは娘の母も青年の父も同意して問はせるのである、監獄の門をくゞつて罪人を訪へば、先づ驚いたのはその容貌である、それは力の顔である、戦場の様な凸凹がある、然し勝利ではないが、平和の顔である、彼ははや世に恐なき人である、彼は青年に聞いて先づ驚き、次に眞面目になつて談をきいた、そして其の答はかうである、「娘や、妻や、君の父の眼中に自分の意見が何か價があるとすれば、それは自分は事物を有の儘に見る爲である。自分は罪を犯し、罰を受けて居る、拂ふものを拂つて満足して居る。彼等は之に反して、視點を持たぬ、不承認といふのは、安全を求むるからだ。人は安全を求めて居ては駄目である、富める人は天國に入らぬ、大切なことは恐れずに、道を踐み行く事だ。『To have courage to live one's life』だ。要するに我々に起り来る何物にでも耐へられる時にのみ安全だ、たゞ勇が安全だ」と、要するに彼は青年の望に同意であつた。オリヴァーは獄を出て、顧る高い壁の中にこんな光や、空氣や、精神があると思はなんだ、戦は以前の如くある、然し武器は手にある、凡ての戸を開く鍵は、囚人がくれたと感じたのである。

ロイスは此一篇をリアリズムとシムボリズムの結合と稱揚し、プラグマティズムに荒され、盲目の個人主義の横行する文學界にも、かゝる深き問題に觸るゝ餘地ありといひ、進んで論結していふ。

「惡は滅びぬ、されどそれが美の力を示す、悲哀は理想化せられ、個人相互に社會集團に對する關係の深き意義に入り、運命を忍び、靈の力によりて悲みよりよきものを得るのである。故に悲哀は宗教

らしからぬ非行を爲すは、妻の苦を救ひて、爲めに靈の恵を減ずるよりは、一層基督教者らしき行となると論結せねばならぬ、矛盾も亦甚しいではないか。

ハートアードのロイス教授の *The Sources of Religious Insight*, (1912) 中の第六講を “*The Religious Mission of Sorrow*” と題する。余はこの題名をかりたると共に、教授の意見を學んだのである、教授はいふ、惡を説くには全哲學を要する、然し宗教に關係の無い害惡もある、それはたゞ絶滅せらるべきである、されどまた我等に内觀を興ふるものもある、然るに(一)世の惡がさまで大事でなくば、宗教は無用となる、(二)之に反し、惡は強く救の要があつても、その道は難く、惡が實在の本位に餘り深く根ざして居れば、宗教は失敗となる、このダイレムマがあると。かくて教授は一九一〇年のアトランチック、モンスリーに載せられた、*Cornelia A. P. Comer* 女史の “*The Preliminaries*” と題する短篇小説の梗概を談つて居る。

オリヴァーと云ふ氣高き青年が、ビーターといふ人の娘を慕つて居る、ビーターは委託物の費消で六年の懲役に處せられて居る。これは特殊の事情があつたのである。然し彼は罪を自白した、娘は父の情を知つて居る、然して之を敬して居る。「私と同じに父を敬まはぬ人には嫁せぬ」といふ。オリヴァーは之に同感を表して、罪人の娘を妻として世に立たうといふ。然しそれは獨斷は出来ぬ、まづ娘の母に問うた、彼女は虚榮の人である。罪人の妻たる苦に耐へぬ、結婚は苦き経験である、娘をもそれに逢はすに忍びぬ、故に反對を表する。次にオリヴァーは、自らの父に尋ねた。父は用心深い、心

創造的進化の説が、如何に現代人の心を牽いたかを思ひ見よ。創造の一語、如何にもなつかしい、多くの者は文字にひかれてたゞそれを用ゐて居る。されど創造の眞義は容易なものでない、いふは易く實は難い、エラン・ゲキタルは如何に活動しても、個體の多くは單に反覆ではないか、さう想へば、何處に眞の創造があらう、来るものも来るものも大概反覆ならば、プラトンの想像した如く、實物は盡く觀念の寫本であつて、然も多くは出來損じてである。

向上主義の信徒はいふ迄もない、謙遜を説き、柔順を教ゆる宗教家さへも、實は抱負もあらう、大志もあらう。然もその多くが、年と共に潰滅して、一切忘却の海に泡沫と消えるのは悲しいではないか。一時的の知名の士などには、時勢は何の容赦もなく殘酷である。特に創造的進化を信じて、何の創作もなく、宗教の核心を英雄崇拜と見て、何等の英雄も實現せざるに於ては、力の宗教に入りて、却つて深き悲哀に入るのである。さすれば諦めは更に重要なこととなるのである。

智の限りを盡してとは誰も望まぬものはあるまい、それが局限せらるゝ故に、信仰となるのである、信仰は諦めの悲哀を含むのである。

或る悟れるものは我等を笑うであらう、然して自らは世の悲喜を超越した境に入つたと思つて居るであらう、然しそれは鎮火山の状態ではないか、それが諦ではないか、しかも悲哀の活火はいつかまた暴發せぬであらうか。

今更らに存在の疑問に接觸すれば、茫然として迷ふ、神は何をかなす、自然は何の爲に存す、憐れ

的内觀を與へ、或る一境を想はせると。

悲しむ者は福なり、慰を得なければなりと、他力的にのみ見ず、自力的に勇を得ると見るところ、我等の心をひく。然し我等はロイスのいふ所から、も少し先に進んで見たい。

「貧しさものは福音を傳へらる」、「議者に隠して愚者に現はす」、「人の主とならて僕たれ」と、民衆に安慰を與ふる手段に専らであつた宗教の現代の立場は如何に、此等を價値の顛倒などいひて、愛でし時は過ぎつゝあるではないか。いふまでもなく、我等は微弱である、憑依の情は去り難い。我等は常に偉大なる自然の力に頼りてのみ立つて居る。拔山の勇も蓋世の智も、官能に僅な障礙を起せば施すに由がない、これは諦めの要を示すのである、そこに東洋的宗教觀の拔くべからざる眞がある。然し我等はある力を賦與せられて居る、それでよく忍ぶ、またそこから發展する、それは十分に發揮さすべき力である。さらでだに微弱の力を自ら制して何とする、弱きを知りて尙ほ撓まぬ、それが諦みの勇である。かくて奮進向上すればそこに何等かの光明がある、宗教は他の一面を現はして來る。さうなると基督教の如きは、人類が自ら描いた理想の姿、即ち基督觀念に近邇するのが主眼になる。古來の聖徒は皆それを勉めた、然して後來の我等の案内をなした。神學や傳説が時勢の變遷に遇つて、過去のものとなるとき、文藝が進んで自我が益々肯定せらるゝとき、殘るものは即ちこれである、基督教の中心思想は、英雄崇拜の一の姿となつて殘るであらう。



九月十日の記

八月末の或る晩、小さな雨が霧のやうに降つてくる池の端を、二人の男がいろ／＼な話をしながら歩いてゐた。そのとき、丈の高い方男が二いつか雑誌で、めい／＼其の日記を書き合ふことにしたら何うだらう一と云ひだしたのが元になつて、こんなものが編輯者の手許に集つてきた。日記は何處までも日記だ、面白いとか下らないとか云ふ問題を離れたところに、何かの意味があるべきである。



三 並 良

朝起きると直ぐに、今日は十日だなと思つた。十日は何でもないやうであるが、實は僕にとつて大に意味のある日である。長い／＼休暇が済んで、明日からは學校が始まると云ふ日であるからだ。

平常通り庭を一めぐりした。今日は秋日和と云ふのであらう。實に好い心地の天氣である。食事が済んで、いつもの通り二階に上つて、讀むべきものを讀んで、書くべきものを書いた。階下では、小兒等がみな學校へ行つたらしい、静かになつた。少

しく頭が努れたらしいから、庭へ出た。妻は洗濯物に粘をつけて居た。無花果の熟したのがありますよと云つた。僕は澤庵梅を倒にしてその上に乗つた。熟したのは一つかと思つたら、三つあつた。妻はそれを手に取つて、昨日のよりは熟して居ないらしいと云つた。妻は再び僕に、向ふの方の高い樹にも、熟したのがあるから取れと云つた。僕は澤庵梅を引ばつて行つて、その上に乗つたが、まだ丈が届かない。下女が踏臺を持つて來て、樽の上に乗せて呉れた。それでもまた届かない。妻はそれだから枝を切つて樹を低くしないと云つた。僕はステッキをもらつて、梢にあつた三個の熟したのを打ち落した。

人よと嘆ぜざるを得ぬ。されど我等は、容易なる慰を求めない、それは眞で無い、のみならず安心立命は全然進歩の停止である。我等は力の弱さを知る、されど外に頼るものはない、力の限を盡して、何等かの創造ありや、何等かの偉大は生れずやと、試むるの外はない。かく悟るのが、諦めである、それが悲哀の生む力の宗教である。

然し全力を盡くして、創造なく偉大なくば、我等の生は單に過去の反覆である。僅に過去を受けて、將來に取繼ぐ外に意義は無い、個體としてはかく觀ずれば全然諦めの宗教となる、即ち厭世教の眞を證明するのである。

之に反し力の宗教にして効果あらば、そこに淺薄ならぬ樂天教は生成する。前者にあつては、悲哀がその全を蔽ひ、後者にあつては、悲哀が一部を領して有意義の宗教的使命を果すのである。

奥ぶかい明るさを持つ心、そこに眞の悲哀の色調がある。

點が存在するといふ意味ならば間違です。譬へば茲に、甲乙丙丁等、別々な井がある。然も此等別々な井は、同一水脉から湧き出でて居る。人格と人格との一體といふ事が、水脉の同一といふ事を意味するのであれば、未だ不徹底です。甲乙丙丁等、別々な井が即一體です。

僕は井と水脉との關係を以て、最も適切に、神と人、及び人と人との關係を説明する者と考へて居た時がありました。然し此頃は、何だか水脉抜きにしても、差別に囚はれぬ消息が、幾分か味はれる様です。

禪宗では、コンプルシヨンを必要としますか。

どんな子供でも、生れた儘では、悟つて居りませぬ。

生理的見地を離れて見た人間は、始めから悟つて居るといへますか。

無論さうです。

自分は心の内から思つた——此の點に於て、基督教の原罪説にも、大に意味がある。又コンプルシヨンといふ事は、宗教上非常に重要な事であると。

禪宗の修行は、今少し簡單に行きませぬか。

唯座禪だけして居れば早く進み、或は本だけ讀む事にすれば早く片がつく様に思ふ人があります。然しながら、それは間違です。我々は座禪するだけで無く、炊事や掃除や、皆自分でやります。但しそれは決して苦行でありませぬ。

如何にもそうだ。今の修養論者は、實際生活から離れた修養

をやつて居るから、まさかの時の役に立たぬ。眞の修養は、現實生活其の者の中に於いて行はるべきだ。

三十分間も交談したらうと思ふ。別に之れといふ新しい感激を受けた譯では無いが、氣持のいい、すがすがしい印象を與へられた。

十一時研究室に出勤、オイケン Wahrheitgehalt der Religion を讀む。オイケン曰く、

Die Forderung des sub specie aeternitatis gilt nicht nur für das Erkennen, sondern an erster Stelle für das Ganze des Lebens, (S. 121)

如何にも會心の文字だ。

學校は明日から授業が始まるので、揭示場に行つて見ると、新來の學生諸君が、希望に充ちた目で、頻りに日課表を見て居る。波多野博士の近世宗教哲學史と、ケーベル博士のシヨルベンハウエル研究とは、僕も聴講し度いと思ふ。

今日の晚餐は、夏休を利用してアメリカに行つて、今朝歸朝された松本氏及外二名の御客様とで會食した。九時頃まで校豆を食ひながら、快談に耽つた。

野村善兵衛

チン／＼チン／＼と慌だしく鳴る置時計のベルの音に、睡夢を破られて、半睡半覺の心持になると、日課と云ふ觀念が、重苦しく頭腦を壓迫する。澁々ながら起き上つたのは、四時四十

地面に落ちたけれども、餘り疵は出来なかつた。今日は植木屋が生垣を直しに来て居るので、それを見に行つた。犬の出入りする大穴が空いて居るから、其處をよく塞いで呉れと云つた。植木屋は柿がなつて居ますねと云つた。いや今年は昨年ほどならないと僕は答へた。

それからまた二階へ行つた。正午過ぎには小供が歸つて賑やかになつた。午後には眠らうと思つて、獨逸書のむつかしいのを持つて横になつた。小供が下から郵便と云ふやうだから、郵便なら持つて来いと云つた。すると一番小さいのが驅けて来て、さう云つたのではない、梨の樹の上に蛇が居ると云ふのだと云ふ。大きいかと聞いたたら、可なりなのだと云ふ。そのうち、蛇なんか見て居る暇はないと云ふのは、妻の聲である。

二三時間経つて妻が、畑のなかにある柿の樹には、葉がないのに實が五六黄いろくなつて附いて居ると、さも不思議さうに云ふ。それでは見に行かうと云ふと、一番小さい小供も行くと言ふから、それを背負つて行つた。妻も後から來た。草が茫々としてゐて、何處からはいらうかと思つた。小供に蛇が居るぞと云つたら、背の上で小さくなつた。成程柿は黄いろくなつて居るので、小供に取つてやつた。歸りに妻が大きな足が出て居ると、負さつて居る小供をひやかした。畝の唐蜀黍を見て、大きいのを取らうとしたら、それは種にするのだと妻が云つた。少し庭をぶらついて居ると、郵便が來た。それは吉田君からの葉書だ。十日の日誌を忘れるなと書いてある。僕には何のこ

とだか分からない。何か重要な事だと思つて、夕食後、早速内藤君を訪ねたら、その譯が始めて分かつた。大分長話をして、十時頃に歸つた。

眠らうと思つたが、茶を飲んだ爲めかどうも眠られない。今もう十一日になつた。午前の二時だが、まだ眠れさうにない。それでこんなことを書いて居る。

今岡信一良

今朝は靜座會の歸途、谷中の兩忘庵に、文科大學の同期卒業生後藤瑞巖君を訪ねた。君が卒業後發心して、釋宗活師の門に入つた事は、豫ねて聞いて居たが、行つて見ると、果して君は圓頂鎧衣の人である。久瀾を叙して、君の宗教的實驗の一端を聞かん事を求めた。

禪宗では禮拜といふ事をしますか。

黄蘗といふ人は、額に禮拜疔が出来る程に、禮拜した人です。禪宗では佛を人格的に見ますか。

普通の意味では、人格的に見ません。佛とは眞正の自己に外ならぬからです。

人間同志は、互に別々な人格だと思つて居るが、然も其の間に一種の交通が行はれる。別々であつて、然も一體だからです。人間同志の間に於ける斯種の關係を、人格的だと云ふ意味に於て、佛と人との關係も、人格的だとは云はれませぬか。

別々な人格が一體だといふ事が、差別相を離れて、別に一致

ふことが、いたく口惜しくて耐らなかつた。飯を食ふための勞働だと思へば、猶ほ更らなさないやうな氣がした。最つと純な心持ちで、私が行かなければならぬ眞實の生活に無論私には瞭然とは分らぬが入る道はないのだらうか。二階に上つて見たら、室はまだ昨夜のまゝに散らかつてゐた。△△協會のY君とI君が夜遅くまでゐて、いぢくつてゐた落音機も、そのまゝになつてゐた。『舞臺がはれた後くらゐ淋しいことはないのねえ。』『今度は舞臺に上る前の日に、この室に来て、秋のローマンスを味つてよ』など言つてゐた二人の言葉の階律が、無残に荒された室の隅に、まだ漂うてゐるやうに想はれた。

朝の中にと思つてエルアーレンの「黎明」を譯しかけたが、今日は辛つと原稿紙で八ページしか進まなかつた。

十一時半からまた例の所に例のやうに出かける。今日は露西亞の小説の話を子供達に聴かせた。英語の時間を少し早やく切り上げて歸る。涼しくなつたので、今日から少し徒步主義の實行に取りかゝらうと思つて、銀座から宿まで歩いて見た。明治座で第二國民大會の演説會があつて、今日もまた何となく物騒な日であつた。道並の電柱や壁などに、殺伐な文句に充たされた號外が方々に張り附けてあつた。榮太樓の甘納豆を買つて歸るつもりだつたが、忘れて了つた。一時間餘りて宿に歸り着いた。今日は内藤さんか、野村さんが遊びに来るだらうと思つたが見えなかつた。唐津から送つて來た加藤さんの葉書を見て、獨りて可笑しくなつた。

夕方は「惡魔の弟子」を譯しかけて見たが、これもちつとも捗らなかつた。氣がいら／＼して仕方がないので、日が暮れて間もなく上野公園を、池の端に出た。湯島の天神さまの高臺に上つて見たが、仍り充たされない心の何處には、焦燥つた、投げ出したやうな倦怠の氣が、私を明るい所へ明るい所へと誘うてゐるのであつた。西黒門町の方へ下りて、廣小路を萬世橋の方へ出た。薄雲にかくれた月の影は、春の夜のやうな和光に顯へてゐた。私は自分で自分に拗ねて見たかつた。順田町から電車で歸らうと思つた私の心が、ふと大川端の夜を想はせた。私は江東橋行きの電車に乗つた。兩國手前て下りた私は、橋を歩いて川向ふに行つた。水に沿うた高樓の燭が、油のやうな流れの上に、餘情の深い光脚を投げてゐた。言問ひあたりに青い燭が一つ薄暗のなかに瞬いてゐた。私は最初の志を變へて、急にまた兩國の橋を戻つた。今日け橋の上に乞食があゐないかと考へた、何だか物足らぬやうな氣がした。濱町河岸を築地の方へぶらつき歩いた。夜釣りをする人達が河に沿うて、小ひさなカンテラを點してゐた。青い瓦斯の光を受けた白い顔が幾度も露路の暗から暗にかくれた。當て途もなく歩いてゐる間に、明治座の傍から私は人形町の賑かな街に出た。腹が空いて來たので、何か喰べ物を探したが、恰好な店が見つからなかつた。馬喰町の方へ夜の路を歩きながら、私は舊い江戸の額腹しつゝ、僅かに遺されてゐるローマンスの香を嗅ぐことを得たやうな氣がした。私は菊屋橋を渡つて取附きの「鴨南蠻」と書いた家に

分。床を疊み顔を洗つて、着物を着換へると、既に五時五分過ぎた。急いで家を出て、人氣少ない朝早い街を、新鮮な空氣を吸ひ乍ら、行く先きは日暮里の本行寺。

「お早う」

「お早う御座います」

と互に例の如く同じ音聲で、同じ態度で玄關の事務員に挨拶して、中に這入ると、既に數名の人々が來て居つた。

先生の坐壇の直ぐ前に靜かに坐つて、膝の上に兩手を組んで、布袋の如く腹をふくらかした。

今朝は先生いつもより遅く來られた。六時が鳴つてから。今までは、慣れないせいか、坐るのに足が痛くて、實に苦しかつたが、今朝は、知らない間に、「ソラ／＼眼を開いて下さい」と云ふ命令を聞いた。何となく愉快な氣がした。

七時頃歸つて、朝飯を食べて居ると、今日は日誌を書く日だなとフト考へ附いたので、何だか可厭な氣がした。併しまた、今日は友達の五君が來る日だと思ふと、三年も遇はなかつた家内にも遇ふやうな氣がして、何となく心がはずんで愉快である。

今日は何うしても、人に頼まれた原稿を書きあげやうと思つて、九時から熱心にペンを走らした。靜坐法をやり乍ら書かうと思ふが、足は直ぐ崩れて、胡坐をかき腹をへこまして了ふ。之では成らぬと、躍氣となつてかゝるが、忽ち倦怠を生じて論文は一向に書けない。時々あきて、ペンを持つたまゝ兩手を伸

ばして仰向きにふんぞりかへつた。斯様に一生懸命に原稿をかくのも、口では生命の欲求だと言ふが、どこのつまりは、胃の臍の問題に歸着するのだと思ふと、泌々情けなくなるが、之が又現在の人生だとも考へた。二十五頁ばかりの論文を、やつとのとて、四時半頃かき了つた。

暫く休んで六時頃、錢湯に行つた。裸體のまゝ權衡の上に乗つて、體量を計つて見ると、日頃靜坐をやつた効果かどうか知らぬが、風が吹いてもビクともせぬ無慮十三貫五百目には吃驚した。

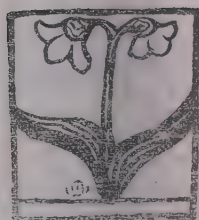
今夜は何だか氣がはき／＼しない。散歩もしたくないし、書も讀みたくない。新聞すら見るのが厭だ。風氣の爲めに時々噁をして寒さを感じる。

何だか早く寝たくなつたので、日誌をつけて、床に附いたのは十一時。

向ヶ岡の月が雲にかくれて、冷々する秋風の吹く小夜中を、號外賣りが物騒がしく叫んで走る。いやな晩だ。

吉田絃二郎

橡側の藤椅子に凭れたまゝで、しみ／＼と初秋の懷し味を想ふ日であつた。朝のうちに葉書四枚と封書二枚認めて、やつとこないだから氣にかゝてゐた責任が、果されたやうな氣がした。しかしそれがみんな事務上の用件なので、秋の快い朝を、かす／＼とした何の濕ひもない事務的のことの爲めに費すとい



『新しき日の序』

内 藤 濯 譯

— ロマン・ロランが『ジヤン・クリストフ』の終巻より —

生命は過ぎ移る。肉體と靈魂とは、まるで洪濤のやうに流れてゆく。年と年とは、老い朽ちてゆく樹の肉に刻みつけられる。形と形との全世界は、使ひ古るされてはまた新たまる。不滅の音楽！過ぎ移らないのは汝ばかりだ。そなたは内部の海だ、奥深いたましひだ。汝の澄んだ瞳には、生命の憂鬱な顔が、その影をうつさずにゐる。燃えるやうな、凍てつくやうな、焼けほてるやうな日と日との行列は、ちやうど天雲の群りのやうに、汝をはなれて遠く逃げてゆく、そして、不安の思ひに追ひまくられながら、一寸も續かうとしない。過ぎ移らないのは汝ばかりだ。汝はこの世界の外にあつて、自分だけで一つの世界を作つてゐる。汝にはそなたの太陽があり、掟があり、満潮があり、干潮がある。そなたには、星と星との平和がある。そしてその星と星とは、夜の虚空の畑に、ひかりの畝を跡づけてゆく——目に見えない牧手者のたしかな手に曳かれてゐる銀の犁のやうに。

上つた。羽織を抜いて私は足を投げ出しさま、「あゝ淋しいな」と思つた。山の手から、賑かな町、沈んだやうな大川端、青い燭、紅い燭、華かな店頭と、そんなものゝ與ふ一つ／＼の印象を、寂しい私の心に遺して、私は今、橋の袂の家に落ち着いてゐるのであつた。毎日同じやうな生活を繰り返すかへず懶さに、私は何か變化のある他の生活を求めなければならぬと思つた。私が元の家を出たのは十時過ぎであつた。十一時、宿に歸つた。そしてまた「淋しい私の生活」と叫びたくなつた。

内 藤 濯

けふは受持の授業の始まるのが、いつもより一時間ほど遅い日なので、すこしは寛りして出かけた。新人生徒の授業をはじめてから、まだざつと一週間ほどにしかならない爲めに、生徒の方でも堅くなつて居れば、こつちでも相應に骨が折れる。

十一時に授業が済む。歸りに神田の三才社に廻つて見る。新しく着いた本の中から、ドストエフスキイの『カラマゾフ兄弟』や、ベルグソンの『靈魂と肉體』といふのをはじめ、いろ／＼面白さうな論文を宛めてある『現代の物質主義』などを見せつけられて、買つて見たい氣が起こらないでも無かつた。

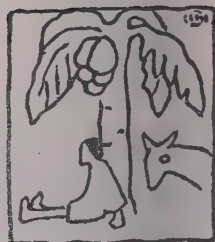
歸つて見ると、机のうへに、帝國文學の石坂君の名刺と葉書とが置いてある。はがきには帝國文學のための用事が書いてある。

午餐をすまして後、ロマン罗兰の『新らしき日』のはじめを

少し讀んで見る。どうしたら斯くまで廣いそして深い心境に浴け合ふ事ができるだらうと思つてゐるうちに、現在みづからの呼吸してゐる空氣が、思ひのほか終苦しいものだと思ふ事に氣がつく。私はどうしても、もつと／＼自分の世界を切り拓いて行かなければいけない。

夕景になつてから、挨拶のために石坂君を訪ねたが、生憎留守だつたので、本郷通を一めぐりして歸つてくると、まもなく三並氏がたづねて來られた。「吉田君から日記を書く事を忘れて下さるなど云ふ葉書が來たが、どういふ意味なのか」と氏に聞かれて、雜誌の同人で日記を書きあつめる計畫の日が、今日であつたことを思ひだす。生活態度の問題について、いろ／＼と話し合ふ。この間から、われ／＼の周圍で聞かれた「愛は神なり」といふ言葉は、「神は愛なり」といふ表白よりも、以上に生命があるではないかと云ふやうな話も立ちまじる。

『創造』の人見氏に頼まれた原稿をすこし書いてみる。生の創造に關する問題だが、書くことがむづかしいと云ふよりも、書いてゐるうちに、自分の生きてゐることが、不思議でならなくなる。呼吸が張り切れさうな氣分になつたので、すぐに筆を投げだしてしまふ。床についたのは十時すこし過ぎであつた。



秘密の花

佐

藤

清

*

わが靈のいと廣き園よ、

そこをかざるかをりたかきほこりの花、

いろもまばゆきねたみの花、

やゝいろあせしにくみの花、

わが目はこれらの花をいやしむにはあらねども、

ゆきてそのかげにいこはむ願ひつゆもたじ、

園のおくに色もなくしげりあひ、

雨のふらぬ日にもしづくを絶たず、

くらきかげのみをつねに地におとす秘密の花、

あはれ其の下草したぐさはあけくれ通ふわが足跡あしあとのために、

音樂！ うらゝかな音樂！ この下界げかいの太陽の獸的な光に疲らされた眼には、そなたの月のやうに明らむ光が、たゞらなく懐かしい。共同の水飼場みづかひば、水を飲みにくる人たちが、水底みぞそこの泥を踏みかへす水かひ場、生活の道を歩きはてし、この水かひ場から遠ざかつた靈魂は、そなたの胸に急ぎよつて、そなたの乳房ちぶさから、夢の涼しい流を吸ひだしてゐる。音樂！ 母なる乙女！ そなたは清らかな胎内たいないに、情念といふ情念を宿やどしてゐる。燈心草のやうな色をした汝の眼、氷山へいざんから流れてくる青ざめた水のやうな色をした汝の眼の湖に、そなたは善と惡とを包み隠してゐるが、それでもそなたは善ぜんの外にあり、惡あくの外にあるのだ。そなたのうちに身を避けてゐるものは、世紀せいきと世紀との外に生いきてゐる。そこに並びつゞく日と日とは、たゞのひと日に過ぎないであらう。そして一切を噛かみくたく死は、その齒を折つてしまふであらう。

私の傷ついた靈魂たましひを慰あやしてくれた音樂！ 私の靈魂を強くして、和なませて、そこに悦みびを充みたしてくれた音樂！——私の愛と幸福——私は汝の清らかな口に接吻くちづけする、私の顔はそなたの蜜のやうな髪の毛で隠されてゐる、私は火のやうな眼瞼まぶたを、そなたの蕭しめやかな掌たねにおしあてゝゐる。私たちは聲をひそめてゐる、私たちの眼は閉されてゐる。がしかし私には、そなたの眼のかき消えない光が見える、もの言はぬ汝の唇の微笑ほほえみを味あじうてゐる、私はそなたの心臓の上に身をちぢめて、はてしない生命の鼓動こどうを聴いてゐる。

朽ちはてし古き教會堂のうしろ、

クローバの青き女學校の庭のあたりは、

やはらかなりしわが靈魂の柱に、

今なほけしがたき鑿のきの香をとじむ、

あはれわが心より全く消えうせし記憶よ、

いかなればまたふたゝびさまゝの形をとりて、

それゝのなげきとためいきとくいとほちを我に與ふる。

※

行きつまりて破りがたき生活の道をきりひらかれんのぞみもいまはなし、

母もいもうとも口を開くことなれば、

我も言葉のいとぐちを見出すをりを失ひ、

口をひらくはやがてわがくるしみとなれり、

さらば我はまたかへらん家なき國に、

或る時はうたがひ、或時は恐れ、

或る時はやるせなき思におびえつゝ、

かの生立おみたちも氣質きだても時としてはその言葉さへも、

いひときがたき多くの人々のむれのなかに、

わがなみだのために、ためいきのために、
またけしがたき悔いのくるしみのために、
むごたらしくも踏みにぢられて萎しれたれども、
わがいこふべきたとひとつのかげよ、

秘密の花よ、やみの花よ、いろなき花よ、
わが園にかず／＼の花のたえざるかぎり、
いつまでもわがいこひの芝生となり、
わがすくひのかくれがともなりてあれかし。

※

わがうまれしまちにかへりくれば、

不規則なる家並いへなみ、きたなき共同便所、

道ゆく人々のなまり多きもの言ひぶり、

すべてわがこゝろに、はぢと不快の波をおこす、

かの堀割ほりみのよどみて流れもやらぬ濁水にごりみづは、

わがぬぐひがたき罪のむかしをささやき、

かの棟割長屋むねわりながやのなかば崩れ落ちたる壁の色は、

乞食こじきにもおとりしわが貧困の記念を示し、

おん身のやさしき胸のなかより、

ほとばしり来る靈の溫泉、

わが靈はそこに浸りて夢を見るなり。

*

野より立ちのぼる青き煙、

しづかにのぼりて空の色にとけあふ、

わがおん身をしたふ思も、

しづかにのぼりてその靈にとけあふなり。

*

かぐはしく熟れし葡萄の實、

わがこころのすみゝにかをるなり、

われはおん身の葡萄に酔ひ、

あたらしきよろこびに生くるなり、

おん身はわがぶどうの實の靈、

生命と神秘との泉なり。

かへりゆきていつまでもかへらざるべし、

行きつまりて破りがたき生活の道をさりひらかれんのぞみもいまはなし。

*

わがいとけなき心に、

夢と詩をあたへ、

そのさしにたてば、

いつも我に音楽をあたへし川よ、

今日はなにゆゑか電車のさしる音よりも、

いたましきひとしを我に與ふる。

*

いろ／＼の温度おんどをたもつ温泉いそゆのながれ、

わが靈のうちよりあふれ胸をあたいむ、

まぢわびしてがみみの封をひとりざくとき。

*

こどしき岩ヶ根のはざまより、

湧き出づるたのしき温泉いそゆ

人々はそこに浸りて夢を見るなり、

『卒業後は何處へ行くの?』と聞いたら、機械體操で堅めた——其癖太くもない——腕を軽く撫て乍ら、

『米國へ行つて苦學でもするのさ』と云つた。私は此言葉を聞いた時は、聊か意外に思つた。と云ふのは、草ちやんの家は、神奈川にあつて、人家が一寸疎らになつて、松並木が東海道らしい景色を見せる下臺に、柵を生垣にして立つて居る立派な構だつたからだ。それに、草ちやんの居間は、八疊敷の離れて、遊びに行く度氣のさいた御馳走を出されたもんだから、何うしても此の家の子には『苦學』はふさはしくないと思つて居た。

『牧師になるんだ』と云ふ彼の希望は、時々聞かされたし、また其の妹から命名されたんだとか云ふ『舶來の聲』で、讚美歌を歌ふのも聞かされた。けれども私には、草ちやんの性格が解らなかつた。さう、草ちやんには基督教徒特有のおだやかな愛嬌がない譯じやなかつた。が併し、人があかしがらうと、惡ふぎの種にしやうと、其廢事には一向お構ひなく、例の左頬の黒子の毛を長く延ばして、樂んで居るらしい所に、何とも評しやうのない不得要領な性格があらはれて居た。

『莊子を讀み給へ、莊子を。莊子を讀まなけや話せないね。でも君達には少し早過ぎるかも知れないな』とこれが草ちやんの口癖だつた。

或時、横濱の街を歩いて居て、とある暗い横町から飛出したいんばいふに、袖を引かれた折の私の非常な驚きを物語つた時など、草ちやんは冷かに笑つて『其廢にこはいかい! 僕なら幾らだへつて



草ちやんと私

石 田 樅 村

中學で草ちやんと知合になつたのは、七里ヶ濱へ遠足に行つた時が、抑々の始めだつた。海岸に平べつたくなつて、青い海を見て居ると、いつの間にか、沖の白帆が大波の背に隠れて見えなくなる。『波の戯れ』と云ふ西洋の名畫で見た人頭馬體の怪童が、雪よりも白い肌を持つた肉附のいゝ女を追廻すやうに、もく／＼と大波が頭を擡げて来る。と、ざあつと白い波が岸を目がけて逃げて来る。其颯波に崩されて、とある小川が海に注ぐ所は小さい砂の涯になつて居る。其處に私は、且君と並んで、腰を掛けて居た。

何も話す事もなく、だまつて草鞋を水に漬けて、青い空と波に見入つて居る時、且君の傍へ來たのが、草ちやんだつた。草ちやんは學校中で、一番機械體操がうまかつたので、私は且君に依つて紹介された時は、ほんとに光榮に思つた。且君は私の二級上、草ちやんはまた其の上だつた。且君の傍に座を占めた草ちやんの顔から、一番先に受けた印象は、左の頬に一吋二三分の一本の細長い毛を持つて居る小さい黒子だつた。

向ふへ行つてから、草ちやんは度々、繪葉書だの、手紙だのを送つて呉れたが、殆んど總てが、H君と私と一緒に宛てゝあつた。或時、手紙のかさが大き過ぎて、不足税を拂はせられたので、一寸注意してやると、其の次の返事には、紙幣の儘一弗入れてよこした事もあつた。

『やつこさん、余程働いて居るな』と云つて、H君は笑つた。

次の年の二月になつた。

或晩、H君が家へやつて來て

『何うもおかしいぜ、草ちやんが歸つて來たやうだ』と云つて、懷から一枚の葉書——其の宛名も連名だつた——を出した。見ると鉛筆の走り書きて

『僕の寢所を紹介する』と云ふ不得要領な一句は、たしかに草ちやんの手だ。差出人は書いてないが、かすかに讀まれた消印の『神奈川』で草ちやんに違ひないと定めた。

マントのH君と外套の私と、神奈川で電車を下りたのは、それから半時間後、道々草ちやんの噂をし乍ら、高臺を上つて下つて、柵の生垣を廻らした彼の家の勝手へ行つて、いさなり

『草ちやんが歸つたんですか』と聞いて見た。

草ちやんが歸つて居た。離座敷の柔い布團に横になつて居る草ちやんは、私共を見ると、頭を擡げて微笑んだ。見ると頭は不思議にも、三分ばかりの散切だ。おちついて話を聞くと、草ちやんは勞働過激の爲め、肺を犯されて歸つて來たが、頭が鬱陶敷いので、歸るとすぐ床屋を呼んで刈らしたんだ

すぐ聞いてやる』と云つた事もある。笑談じやうだんとは知りつゝも、牧師になると云つて居る人が、此こ麼んな事ことを云ふのかと思つた時、私は一種のショックを感かんぜずには居られなかつた。

或る正月の休みに、第一日をH君の家で、第二日を革ちやんの離座敷はなれざしきで、第三日を私の所で、三日の間散々遊び戯れた事もあつた位、私共はよそ目には親密しんみつだつた。が併しかし、それでも私には、革ちやんの性格が全く解つて居なかつた。

アメリカへ立つと云ふ前の晩、私の家へ來た時、懷の中に手札型の寫眞しやしんが五六枚入つて居るのを見て、

『紀念に一枚置いてつて呉れ給へ』と云つたのに、かぶりを振つて私にそれを呉れなかつた。そして家から出がけに

『明日送つて呉れなくていいぜ』と云つた。

出立しゆつたつの日は、校庭の櫻が五月雨に霞さみだれんで居た。

『君きみあ學校を缺席けつせきしない方がいゝよ。其のかはり僕は、君と二人分送つてやるから』とH君が云つて呉れたので

『さうか』と云つただけで、見送りするのを止めた程、私も革ちやんに對しては、熱烈な友情じゆうじやうを缺いて居た。

た。

『草ちゃん、僕も風邪ひいた時あ來ないぜ』と云ひ出すと、『あ、いゝとも、ほんとに君は大じにしくなくちやいけない。大低大丈夫と思ふが、歸りにはきつと深呼吸し給へ』などと云ひ乍らも、私に喰べさせ様と、母屋の方から運んで來る菓子をば、別に制しても呉れなかつた。

草ちゃんは遂々病院へ入つた。病院は私の學校へ行く道にあつたから、時々寄つて見た。病室は一號と云ふので、高臺にあつて日當りのいゝ部屋だつた。誰がかけて呉れたか、部屋の隅に横に張つた絲に、紙でこさへた英字が程よくぶら下つて居る。讀んで行くと LOVE、OF、GOD——多分例の女傳道者だらうと思つた。

『今素敵に面白い本を讀んでるよ。寄つて見給へ。バチルスは居ないよ。安心して寄つて見給へ』例の皮肉を聞かれて、枕元へ寄つて見ると、面白い本とは、一休和尚の傳記だつた。

『之が面白いのかい』と聞いたら、だまつて笑つて居た。

『僕はだぶよくなつたさうだから、二三日經つとまた家へ歸る。今度は彼方へやつて來て呉れ給へ。其からH君へ手紙でもやる時は、よろしく云つて呉れ給へ』歸りがけにかう云つて見送つて呉れる友の瘦せた頬を見ると、まだ黒子の毛が其の儘にしてあつた。

草ちゃんにいゝと知らせて、其の實は醫者が匙を投げたんださうだ。三四日經つと、死んだと云ふ

と云ふ。

突然の歸國、米國の様子、これらは私らの豫期した話題だったが、寢て居て革ちゃんとは、米國のべの字を云ふのもいやだと云つた。母屋から運ばれた菓子、今夜に限つて食はなければ悪いと云つた風な感じで、異常な勇氣を出して喰べたが、閉め切つた八疊に漲る火鉢の火の暖さに、バチルスバチルスの飛躍を思はせられて、妙に胸が苦しい。H君も卒業したら米國へ行くと云つたら、彼處所へ行くもんでないと瀕りに止めて、革ちゃんの話は、中學時代の回顧談になつた。

修學旅行で足尾へ行つた時見た其の町の風儀の悪い事を話し乍ら

『やつ僕が一緒について行かなかつたら、さつと袖を引かれたまゝ、家入中へ入つて仕舞つたんだぜ』と一人の級友を評して、いつもの様に冷かに笑つた。

H君の渡米談は虚言でなくて、卒業後すぐ實現された。革ちゃんが送れないから、今度は私が二人分送る約束で、棧橋に立つた時は、妙に悲しかつた。船が築港外へ進むまで、船側で振廻すH君のハシカチーフを見送つて居る目は、拭うてもく曇つた。それから革ちゃんを見舞ふのは、私ひとりになつた。

革ちゃん、姉の様に慕つて居た美しい女傳道者のある事は知つて居たが、或る日見舞に行つた時、誰さんも此の頃は彼處隅つこに座るよと云つて、足の方に當る部屋の一隅を指して皮肉に笑つ

『あなたにやつて呉れと云つて、聖書と其れから原稿の様なものを置いて行きましたから、後とりにいらつしやい』と云はれた。

二三日して行つて、其絶筆を見せて貰ひ乍ら、兄さんに臨終の話をいろ／＼聞いたが、牧師さんの言葉には間違がなかつた。

原稿を見て居たら、『人生は親めない神秘だ。君達に解つて堪るもんか』と云つて居る様なおも／＼が想像されて仕方がない。『添削して校友會雜誌へても』と書加へてあつたが、文章がまづいのか、語る事が神秘な爲めか、感想文が一向纏つて居ないので、雜誌には遂に出さなかつた。

其の時革ちゃんから貰つた古ぼけた聖書は、まだ本箱に持つて居る。(二、七、十)

知らせが、其兄さんからあつた。

秋雨がしとしと降る日、草ちゃんの柩は、終の生垣の間から出て、小さい教會へ運ばれた。草ちゃんにそっくりな妹などの手にした十字の花束や丸い花輪が、教壇の下の草ちゃんの寫眞を圍んで置かれた時、會衆によつて讚美歌が歌はれた。草ちゃんの好きな三百九番の歌聲が、小さい堂から溢れて、外の秋雨の點滴に和した時、皆と一緒に私も泣いた。

牧師さんは聲を細くして、草ちゃんの兄さんに聞いたと云ふ話をした時、私は驚かされた。

——足の方から段々冷いて來るのを悟つた草ちゃんはお婆さんにも、親達にも、兄弟達にも、夫々違つた遺言をした。さうして皆さんに天國で會ひませう。何か書いて行きませうかなどと云ふので、看護婦が足へ手を入れたら、果して血の氣がなかつた。『大丈夫ですよ』と看護婦は云つたものゝ、すぐ其處にあつた卷紙を打ちひろげて、頭の切れた筆に墨汁をつけて渡したら『盡人事俟天命矣、草』と書いて、眠る様に逝つて仕舞つたんだと——

牧師さんは、草ちゃんがまるで大偉人でもあつたかの様にほめたてたが、何うも不思議でならない。あの不得要領な草ちゃんが、何うして此麼風に要領を得過ぎた死方をしたのだらうと思つて、涙に曇つた眼をあげて、寫眞をじいつと見て居ると、死んだ人は大悟した様にちつとも動かない。

式が済んで歸りしなに、兄さんに呼ばれて行つて見ると

秋の夜はちらちらと、

ほかにゆれた川波すずしく柳もゆれる、

キッスラの描くよな夜の灯に柳もゆれる。

彼方の空にはしりし流星の尾の美しさに

おもはず心めざめておどろきたり。

夜の目の暗らさに行く人ごとは

ほかにぬすみてわが横顔をばちらと見てはゆく。

さまでにわが姿のおかしきや、はたあやしきや。

美しき秋の一夜の心迷ひに、

我を息はす世界はなきか。

*

世に賢き人ありて、

異教のともからを惡しざまに言ひふらし給へども、

言葉のみさかしきはおかしきに過ぐ。

少し省みて、地に委するばかりなる野の花の

惡の魂を愛し給はずや。

然らざれば彼のエリヤがエリコを呪ひし呪の如く

水 繪 の 秋

藤 井 夏 人

野の秋も悲し、街の秋も悲し、枯れたる屋根の草も淋し。

うすら弱きゆふ日のかげに、

ゆるゆると川水と夕雲流れ、

みそはぎの花はげにも過ぎし生いのちをかせに語る。

*

世にもし春はなくとも此の秋のなかりせば、

我はつひに生くるに忍びず、

秋の夕べこそは白き女の手によりて描かれたる

水繪の姿ともおぼゆれ。

草花はおもかげとのみ見ゆれども、

そをわが夏の日の夢かと思へば心後に残り、

野の秋も悲しく、街の秋も悲しく、

枯れたる屋根の草淋もし悲し。

※

きらさらとただひとつなる星のまたたきと、
むれをなさぬ白楊のほのかな影と、
夜の地に、うつるふたつの影さびし、
星と木立の影さびし。

*

君は星影ならねども、
我は木立ならねども、
かくてあなじ闇の夜の地に、
寂照の悲哀をかなしめり。

*

秋の日に、それとなく
子爵庭園のこゝちよさ、
露臺の陰のコスモスは
いまだ咲かねど、さきても悲し、
かたはれの秋の光りにちる花は悲し。

(一九一三・九・十五)

つねに呪はれて何日しかに御身自ら滅び給ふべし。

*

秋の夜が、靄にしじれて、
素足つめたく冷えるころ、
月のあちゆくかなしさに、
のきの光りのちるころを、
堀割の水の、暗にゆれ、
夢のほかげのうつるかな。

*

はやくのたまへひとことを、
われは無口の性にして勇氣乏しく、
よき秋の日の過ぎゆかむことをのみ氣遣へり。
よく語りたまふ御身ときくに
はやく急ぎてのたまはずや其の一言を。

*

暗き後の、地の水のしづけさ、
恐しき。
寂莫の後の地の恐しさ。



黎明

吉田 絃二郎 譯

——エミール・エルアーレン作——

この幕に現はるゝ人々

ジャツク、エレニアン

妻クレエル

息ジョルジュ

オツビド・マアニュの領事

第二幕

第一景

エレニアンの館。上手に扉あり。一と通りの家具備へ附けあり。奥の方に暖爐あり。色々な小道具など亂雑に散らかしたるまゝになり居る。卓子の上には、繕ひかけの着物、子供の玩具など載せてあり。椅子の上には書物が山のやうに積み重ねてあり。エレニアンの妻クレエルは、燈を點け終る。姑くつゐゐる。この時急に大通りに喝采の聲聞ゆ。エレニアン登場。彼れは腕を伸して、妻を抱擁する。

エレニアン。私等^{わしら}はあの子供^{こども}達の左^{ひだり}りの方^{ほう}へ、お父^{とう}さんを葬^{はうむ}つて來たのだ、私等^{わしら}の埋^{まい}葬^{さうち}地^ちを見^み卸^{おろ}しにしてゐるあの水松^{いぢも}樹^じの下^{した}なのだ。お父^{とう}さんはこの村^{むら}においてなすつた時^{とき}のやうにして今^{いま}では彼^{あそこ}處^こにお

藝術座第一聲

私が藝術座の第一回興行を観せていたのは十九日の初日であつた。それで舞台上の手順や、筋の運びなどにも多少無理な所もあるやうであつたが、私はそんな専門家的な批評をするのではなく、たゞ私が「内部」と「モンナ・グランナ」を通じて得た原作者の心持ちを味ふことが、何れだけできたであらうか、それが私にとりては最も意義のあることだと思ふ。

一般の見物にとりては、第一幕目の「内部」は最も深い印象と、比較的精確な暗示を興へることができたであらうと考へる。不可思議の人間の死、人間の運命といふやうなものが、殆んど見てゐるに堪へ切れないほどの、傷々しさをもつて私達に迫つて來るのである。三ツの窓を通して見る一ツの燭の下に、父と母と娘達がさも幸福な夜の静情を味つてゐる。夜の燈は無心の瞬きを續けてゐる。窓の外には星の影だも見えない。まやしげな夜の影が、垂れ下つた柳の葉毎に顔へてゐる。死と、恐怖との私語が一人の老人と、目知らぬ人との呼吸をも望ぎさうである。「テーブルの十三人目、まだ樹の果は熟れてゐない」といふやうな科白が、木蔭の暗から漏れる。窓の外に立つた二人の男は、かの窓のなかの幸福な家族を見ては、何うしてもこの家の娘の死を知らせる勇氣が出ない。村人に擔はれた小ひさな棺が一步、一步、彼の女の家に近附いて來る、窓のなかの人々の人生はまだ光明と幸福に漲つてゐる——窓の外の悲しい運命

が、室内へ急いでゐることも知らないで。

舞臺の裝置から行つて、室内の奥行きが餘りに淺い感じを與へたことも、有樂座の建物では止むを得ないことであつたらう。役の方から行つて、宮島文雄氏の「見知らぬ人」は先づ無難の出來であると言はなければなるまい。氏の藝はとり止めてこゝぞといふ所はないが、芝居氣がなくて、極めて自然的になして行く所が嬉しい。私は氏の將來を待つものである。中井哲氏の「老人」は最も困難な役である。氏の一言一句から、私はメテリリンクの言はんと欲する所を聴いたのである。氏の科白も亦自然的といふ心を忘れないで、牧師句調にならなかつたのが嬉しかつた。しかし兩氏のみに限らず一體に、その演聲の方面に於ては、まだ大に努力せられる、餘地がありはしまいかと思ひます。

モンナ・グランナの方は、流石に松井氏は場面を引き締める何かの力を有つてゐると思つた。氏が殆んど生一本の冷靜な態度で貫かうとする所は、成る程とうなづかれた。たゞ一つ氏が生一本で貫かうとする地味な氣分と、氏の殊に短かい科白、例へば「えゝ」といふやうな言葉との間には、尙ほ工夫せられる餘裕がありはしませんでせうか。笹本氏のコロンナ、鎌野氏のギドー、澤田氏のプリンチブルは熱心な研究的態度を多とせねばならぬ。兎も角登場の諸君の眞率な態度と、深い研究心とは藝術座將來の爲めに祝すべきである。舞臺裝飾に就いても少し書いて見たいと思ひましたが、餘白がないので失敬しました。

(絃二郎)

ご覧なさい。あなたの今度のご本は、彼方此方で讀まれたのですよ。

エレニアン（その手紙を見ながら）。讀んだらうとも、それで色々私の批評も行つてゐるにちがひない。彼等等は飢ゑ渴ける者のやうに、私の正義を追ひ求めてるにちがひない！

（彼れはその手紙を卓子の上に置く。窓を開く。一層近くクレエルに寄る）。

私は、お前と私のことばかり想うてゐたのだ、あのぢみな、あの家内だけの葬ひを終へるまでな。あの時にお前が私の側に居つて呉れれば宜かつたに、あの棺が地の底に沈んだ時にだよ！ 私の心情はそれは、さいなまれて、私の心情には閉ぢ込められた悲しみが充滿にな、私の胸のなかに壁を築き上げてゐたのだ。何故その時私はお前の手を握つてゐなかつたらう。さうしたのだつたら、私の哀傷の半ばをお前の手に預けたらうになあ！

（妻の手を握る）

お前は眞個に私の戀しい勇敢な妻だ。お前は私を知つて呉れてる。お前は私を了解して呉れてる。お前の前だけには、私が眞實、何んなものであらうと、悔怨といふものはない。假令ば、みじめな人間であらうと、滅多に穩和といふことを知らず、燃ゆるやうな傲慢と、柔弱とに充つてゐるやうとも。そして私がお前を愛すれば愛するほど、私の缺點が、精確に暴露されて來るのだがね。時に、子供は何處にゐるのだ？

クレエル（上手の室を指し）。妾達の室へ寢込んでゐます。

エレニアン。私は幾度お父さんを失望の淵に追ひ出したツけね！ 私の氣まぐれな心が、時々狂ひ出

慈みになつておいでだらうよ。お父さんのお體は、あれほど愛してゐらした藥草や樹木の根本生命と結び合つてゐてたらうよ。

クレエル。みんなはあなたを搜索してゐましたか？

(此の光景の間に、エレニアンは喪服を室内衣に着替へる、舞臺には家庭といふ氣分が深く現はれて来る。)

エレニアン。何うだか知らないよ。そこには私等の仲間がたゞ僅かゐるばかりだつたよ。歸りしなには、あの群集のなかを通つて來たが、新聞賣りが、アヴンティヌの大事件だなんて、呼んでるやうだよ。誰も彼れも、その新聞を手にしてゐた。或る男達は松火をかゝげて、唱つてゐた。遊園地や大通りに沿うた家といふ家は、爆烈彈に碎かれ、裂かれて、むざ／＼と壓し潰されてゐた。瓦礫が壁石の上一面に散らばつてゐた、瓦斯燈ひとつ點れてゐるんぢやなしさ。國民會堂で一人の探石職人が私の名を呼びかけた、後にも先きにも、たゞそれつきりだつたよ。彼れ等がお父さんをオツビドマアニユへ運ぶことを允して呉れた時——それも一と通りや、二た通りの困難で允されたのはなかつたが！——私は誰の手も借らずと、一人で彼れを葬むるといふ誓ひを立てたのだ。私はその誓ひを守つたのだ。

(机の上に紙幣の束があるのが見附けて。)

これは何だね？

クレエル。勘定の剩餘を送つて呉れたのです。

(彼の女の隠しから一枚の書き附けを取り出して。)

幻想の平原の荒涼たる丘の上にゐるやうな氣がした。夜、荒れ地の邊を徘徊したり、或はお父さんの野山をば氣の暴い兒馬に跨り駆けずり、廻つてゐるやうな氣がしてゐた。私は羊牧ひ、召使ひ、下女までも記憶えてゐた、私は學校の道、教會の道、それに會殿の鐘の音までそっくり昔のゝに記憶えてゐた。私は最う悲しくて耐らなかつた。私は最う懷しくて耐らなかつた。私は最一度お前を見たくて耐らなくなつた。お前とそれにあの子供を。(クレエルを抱くやうにして)何うぞ、お前の眼を見せて呉れ、お前の蒼白い、懷しい眼を、何よりも私を、最も愛して呉れるお前の眼を、そしてこの世界で最も麗しい光明あるお前の眼を私に見せて呉れ。(クレエルを覗きながら)。お前のその眼は何時も忠實でそして優雅くて、そして平和で、そして輝いてゐるのぢやないか、それに時々、お前のその眼を泣かせるやうな私は愚者ではないのか？

クレエル。あなたは随分非道い言を仰つしやるんですけれど、それでもあなたの亂暴なお言葉と、優しいお心とはまるでちがつてゐるんですもの。

エレニアン。あゝ、私は馴々しく人を愛することはできぬ性なのだ、がお前は、少しも變らず私を愛して呉れる、お前は私の恐ろしい生活、私の眞實の生活、私がこの大地の上に生活してゐる眞實の理由を知つてゐながらも。

クレエル。(たしなめるやうな軽い調子で)。あなたは克くそんなことを仰つしやいますのね！

エレニアン。あゝ幾度でもお前に話すよ。私はお前には随分残酷だらう。随分お前も手古摺つてゐるだらう、しかしお前に對しては私は絶対に眞實であるといふのが私の心情なんだからね。萬一私がお

すので、お父さんは克く私をお打ちなすつた。私は打たれながら泣き出したのだ、ひい／＼と聲を絞り出しては泣いたものだ、そしてまた、何か嬉しいことがあつた時もさうだつたが、散々お父さんに呼喚き散らしたものだ。あれが若しか今日の私だつたら、もし、私の子供があれほど、私の心を煩はしたら、私は縊り殺したかも知れぬ。

(此の館から遠くも隔らぬところで、爆烈彈の破裂する響がする。エレニアンとクレエルは窓のところに走り寄る。群集がエレニアン萬歳を唱へる)。

さあ、今だ。お前を愛するに最上の時は今だ。人と人とを、これほど密に結び附ける、危急存亡の時といふものは、またとはあり得まい。私は、吾々の戀愛の第一の月に、お前を見た時のやうな氣がする、私には、お前はあの時よりも最つと美しいやうな氣さへする。私はあの時と、恰度同じ強さの眞率をもつて、私の愛をお前にさへげる。あの時と同じ熱情と、あの時と同じ絶對とをもつて。

クレエル。妾だつて、仍り妾の心のたけを盡して、あなたを愛してゐます、あなたに仕へてゐます。

エレニアン。今度の葬ひ、勿論その葬ひで私の或る部分が失はれた、何だか知らぬが、私の生命の一部私の少年らしいものの一部が失はれたが、兎も角この葬ひは、私の燃え立つたほどのあの昔の生活を奪つて了つた、凡べてのものに對しても、凡べてのものからも、あの私の生活を捨てゝ了つた、お前から、私とお前から、オッビドマアニユのあらゆるものからも、遠く遠く隔つたところに、私のあの燃えてゐた生活を奪つて行つて了つた。私は一人で村のなかにゐるやうな氣がした、



時評

東北に於ける根本的

治水策

僕は七月の下旬に、仙臺北方の田舎に行つた。

二十七日の大暴風雨は東北一帯、殊に宮城、福島兩縣に非常な損害を與へた。多くの家屋は浸水の難に遭ひ、堤防は壞れ、田畑は流された。僕は常盤線の開通を待つて、九月四日歸京した。車の窓から水害地を眺めると、酸鼻の状態を極めてゐた。宮城縣の如きは、明治四十三年の洪水の爲めに、約百三十萬圓の治水費を支出したといふことである。然るに今年は更に百萬圓を支出せねばなるまいといふことである。さらぬだに富裕ならざる宮城縣民が、二三年毎にかゝる大難に遭遇するは、

寔に同情に耐へない。今度の災難は、天災であつて如何とも詮なきことであるが、東北人は果して、平常無事の際に方りて、人事の能ふ限りを盡してゐたか、否かは研究すべき問題である。

日本は世界に於て最も山脈に富みたる島國である。中央には分水嶺が屹立してゐるので、河流は短かく、その勾配は急である。それ故に一と度暴風雨來れば、河水汎濫し、しかも快晴數日に亘れば、水涸れて河底を露出するに至るのである。地勢上より見て、日本に於ては殊に二百十日前後に於て折々洪水を見るは止むを得ないことである。しかしながら人事を充分に盡せば、或はこの天災を豫防することは不可能だとは限らぬ。

第一深山幽谷に盛に植林することである。明治時代以後濫伐の結果古樹大木、大森林は次第に消滅するに至つた。故に土砂は遠慮會釋もなく、流れ來つて河底を高める。而してこれを浚渫しないために、汎濫の害益々大を加ふるのである。

第二には築堤の方法宜しきを得ない。洪水の威力は恐るべきものがあるであらう。されど應用科

前に何一つでも隠し立てをするやうだつたら、最うその時はお前は私の妻ぢやないのぢやないか。私はお前に嘘を言つて聞かせるくらゐならい、お前を泣かした方がまだしもだよ。

クレエル。もしも、あなたのお心がさうでなかつたら、妾だつてこれほどまでに、あなたを思ひはいたしませんわ。

エレニアン。それにまた、お前は私が如何にも大袈裟な男だといふことをよく知つてゐる。眞個、私は私の生命のたゞ僅か一部分をお前に譲つて置きながら、私は私自身とお前とを誑つてゐるといふことを、お前は良く知つてゐるのだ。

クレエル。まあ、あんなことを仰つしやつて、何でもあなたのご隨意になすつて宜いぢやありませんか。お苛責にならうと、壓制をなさらうと、そんなことは何うても宜いぢやありませんか？ あなたは妾のものなんです、あなたと妾達の子供はみんな妾の愛のものなんですもの。(つゞく)

が 國母陛下にも行啓あらせられたが、兩陛下には鑛主、重役等に拜謁を仰せ付けられた上、數々の御賜物を下された。實に我が國としては無前のことである。鑛主夫妻の光榮は固より、暗洞の中にあらがねを握る、賤の男賤の女等の光榮は折も幾許ぞ。吾人は言葉の出づる所を知らぬ、一種の感慨に打たれるのである。

久しい以前であつた。たしかヴェスビヤス火山が噴火して、附近に非常な災害を醸した折、逸早く伊國皇帝皇后兩陛下には、自働車を罹災地に乘入れて、親しく人民の疾苦を慰められたことがある。數週前にも、英國の兩陛下が、同じく鑛山を訪はれて、親しく鑛夫等と言葉を交されたと傳へられる。餘所國ながら、何たる美事だと思つて居る矢先、畏れ多くも我が 兩陛下には、足尾の鑛山を見舞ひ給うたのであつた。

親が子を愛し、子が親を懷ふは、それ人性の自然である。一國の皇室と人民との間にも亦、焉んぞ此種一味の溫情の通ふなくして止まんや。父子相懷ひ、君民相愛す。これ家國の幸慶にあらずし

て何ぞや。一家の根柢も、一國の基礎も、たゞ此溫情に依つて定まるのである。然るに時としては此上下の溫情が、輒もすれば中間の障壁に隔てられて、全く相通することなくして終ることがある。何たる恨事であるか。特に我國に於て、往此に恨事を経験するやうなこともあつたのであるが、此度の行幸啓は、實に破天荒であつて、從來の弊習を一掃し去つたのは、直に痛快である。

國民教育の普及は、勢ひ國民の自覺を促す、國民自覺の結果は權利の要求となる。權利の要求や可なり、しかも往々にして經濟問題と相結んで、階級鬭爭の基を開く。先進諸國に於て、既に其實例に乏しくないのである。たゞ上層の人、自ら進んで下級者の疾苦を痛ふ。是に於て溫情の泉は堰を切つて、蕩焉として相愛の海に浮ぶのである。社會内題に着目する者の見地よりしても、此度の行幸啓に現はれたる御鴻德は、忘るべからざるものである。(鈴木生)

對支外交の教訓

學の力を以て全力を盡さば、水に抵抗することは不可能なことではない。然るに大洪水後に復舊工事なるものがある。舊に復するだけのことであつて何もない。されば次の洪水の折には古き部分、即ち弱き部分の堤防は再び破壊するのである。しかしてまた復舊工事を行ふのである。かくして莫大なる治水費は、無意義に浪費せらるゝのである。これ即ち土木請負師に、誠實の念なくして、營利をのみこれ事とし、人民の幸福を思はず、一時的外觀の美のみを飾つて、内部の構造を粗略にする爲めが故である。しかして監督者當局も時としては、この疎漏を知りつゝも、知らぬ振りをすることがないとも限らぬ。かくして人民は塗炭の苦痛を嘗めるばかりである。即ち根本的治水策は、官紀を振肅して、地方の監督者をして、充分土木上の責任を監督せしむることである。止むを得ずんば、請負者等より相當の保證金を取り、一旦修復したる個所が次の洪水に於て再び決潰する時は、保證金を沒收する位の條件があつても差し支へないと思ふ。

人間の尊嚴なる所以は、智力を以て自然を征服し來つた點に存する。然るに今日の日本人は自然を征服するの智識も努力も充分と目することはできぬ。毎年毎年二百十日の厄日の爲めに惱まざるゝは實にあはれむべきことである。今日に於ては、日本人は協力して自然と戦ふべき時となつたのである。しかもこの爲めには人心の改革を先決問題と爲さなければならぬ。殊に東北人は先祖代々、冬の隋力の爲めに、精神活動の敏活を缺いてゐる。東北人が自然の恩恵に浴して物質的繁榮を得んとするには、先づ精神的に覺醒し、人心を一掃して新たに自立する道を講じなければならぬ。就中東北人は精神的刺戟を必要とするのである。年々歳々到る所の天變地異は、これ東北人の精神的覺醒を來すところの警聲ではないか。(内ヶ崎)

兩陛下の鑛山行幸啓

過般我が叡聖文武なる 國父陛下には、日光御用邸に御避暑中、一日駕を足尾銅山に枉げ給ひて親しく作業の狀態を御覽ぜられた。翌日更に又我

近に於ては如何であらうか。智力、體力の點に於ては、我等未だ誇るに足るべきものがない。品性、道徳、信念に於ては、吾人遂に忸怩たらざるを得ぬ。迷信は滔々として、上下を支配して居るではないか。道徳風教の頽廢は、殆んど底止するところを知らぬではないか。極端なる個人主義の風潮は、遂に一種の利己哲學を案出して、社會生活の根柢を危うからしめつゝあるではないか。實力は何處にある、國民の實力は今何處にある。

外交は實力の反影である。種のない手品は使へぬ。外交の振作と、國威の發揚とを期せんと欲せば、吾人は更に渾身の勇氣を揮つて、國民性の培養に努力せねばならぬ。而して吾人は就中最も、偉大なる信念の涵養を以て、急務中の急務と認める。偉大なる信念なくして、偉大なる國民性なく、偉大なる政治なく、外交はない。外交は單に政治家の仕事でない。國家百年の大計は、更に奥深いところに、根柢を有するのである。あゝ偉大なる信念と、偉大なる理想と、偉大なる氣魄よ、速かに來つて、我が國民をインスバイヤするにあらず

んば、我國家の將來が危い。

(鈴木生)

兇惡なる犯罪の流行

我等は毎朝、新聞の三面記事を読んで驚くのである。何が故に斯くも兇惡なる犯罪が頻々たるかと。妻にして夫を殺したものがあつた、夫にして妻を害したものがあつた。親にして子を殺し、子にして親を害す。甚しさに至つては、過般北越の某地方に於て、五十男の親が、娘二人を蒸桶に入れて蒸殺したといふ報道を讀んで、殆んど戰慄を禁じ得ないのであつた。

罪惡の歴史は、昔より今に至るまで、白頁として残つたためしはない。けれども近來に至つて、特に其殘忍酷薄を極むるを見る。我等は此血もななく、涙もなく、たゞ動物の如き犯罪の増加に對して、何等の暗示を受くことがないのであらうか。就中、最も吾人の一考に値ひするは、少年の犯罪者の増加といふことである。往年小松遞信次官を其官邸に斬つたのは、僅か十七歳の少年であつた。月島の主家三人殺も十七歳の少年であつた。二本

對米問題に失敗した日本の外交は、對支問題に關しても亦、大失敗をした。由來日本の外交は失敗の外交である。外交の成功といふやうな事は、近頃あまり耳にしたことはない。外務當局の軟弱無能なるに依るか、抑も亦他に理由あるか。

勿論、外務當局は、一面に於て其責に任せねばならぬ。一體、日本の外交官といふものに、大なる信念がない、大なる訓練がない、大なる氣魄がない。國と國との問題とはいへ、究竟するに國を代表する、個人同士の間の懸引であるが故に、其個人にして、信念なく、訓練なく、氣魄なしとせば、如何に外國語に長じても、如何に國際の法規慣例に通じても、如何に交際場裡の寵兒と謳はれても、夫れは實際、何の役にも立つものでない。外交談判は、たしかに膽力の闘ひ、氣合の闘ひである。膽力、氣合の闘ひに、信念、訓練、氣魄を缺いて、何うして勝を制することが出來やう。日本政府は、少しく外交官採用の方針を變へねばなるまいと思ふ。

併しながら、今日の外交は、最早マキャベリ

の時代とは違つて、手品を使ふやうなものでもない、平時平和の交際に於て、彼我の長短を知り盡して居る。少くとも知らんとして、あらゆる手段を盡して居る。實力の足らぬものが、如何に恫喝を試みても、ビクともするものでない。要は實力の問題であるが、實力とは外ならず、國民の實力其物を指すのである。

富力の問題は勿論ある、兵力の問題も勿論ある、併し問題は決して富力、兵力に限るのではない。國民の員數、其愛國心、公共心、智力、體力、乃至品性道德、及び宗教的信念も、勿論加へて觀察せねばならぬ。然らば則ち日本は果して、世界の一等國と誇稱し得らるゝまでに、實力整備充實せるものがあるのであらうか。

兵力の點に於ては、日本は世界有數と稱せられて居る。事實さうであらう。けれども財力の點に於ては、國家も國民も、お話にならぬではないか。人民の數に於ても穴勝ち少しといふ事は出來ぬ。愛國心、尙武心、若くは敵愾心の程度は如何であらう。これも列國に比して劣るとは思はぬが、最

なる國家的損失を招くことを確信せねばならぬ。一方より考ふれば、刺客彼れ自身と雖も他に、より良き道を選びたりとせば、自ら生命をながらへて社會と人類の爲めに貢獻することが出来たであらう。吾人はこの度の暗殺を以て、最後のものと見たいのである。暗殺の代りに正義公論の堂々として世に出でんことを希望するのである。江戸の祭には筵樽を擔ぎ廻る風習があつて、數歳の少年よりしてこれを見習ふのである。彼等が得意氣に「ヤッショイ」と、かけ聲してかけ廻るは、即ち野次馬の第一歩である。彼等長ずるに及べば、電車の燒き打ちをなす、何の辭するところかあらん。あはれむべき國民は迷信に支配せられ、善き事を見ず、善きことを聞かず、空しく形骸的宗教に歸依して、人格の尊嚴を知らず、滔々相率ゐて不幸なる運命を招く。民族の前途日暮れて途遠きの歎多しである。吾等と志を同じくする者は、諸君の家族、郷黨の間に、健全なる正信を傳道し、家族及び一郷の精神教育の任に方り、健全なる立憲的思想を理解するの國民を、教養せられんことを希

望する。(内ヶ略)

確信と寛容

九月の初め吾人は米國の同主義者サンダーランド博士を迎へた、同氏は東都の各地に講演し、大にその意見を發表したのであるが、これは云はゞ氏の副事業で、氏の米國ユニテリアン協會によつて東洋に派遣せられたのは、諸宗教の接觸を計畫せんとする豫備視察であると云ふのである。由來ユ教徒はこの種の計畫をして居る。歐米に於ては自由基督教及び其他の自由主義宗教者の世界大會を催し、本年の夏はその第六回が佛京巴里に開かれた。サンダーランド氏の視察は之を東洋の天地に實行するの如何を考へる爲めであらう。此の計畫は天下の宗教は皆な交友なり、と云ふユニテリアン主義から割り出された堂々たる行爲である。吾人もまた此の主義を取つて居るものである。従つて吾人は常に之を説いて居るから、今更改めて之を論ずる必要はない。

唯だ吾人の遺憾に思ふのは、この事から毎々誤

榎の五人殺は十八歳の少年其同一犯罪人が更に三人殺をやつたのは、其廿一歳の時であつた。最近に於て阿部政務局長を刺した岡田満は、十八歳の少年である。何れも其大膽不敵なるに舌を捲くの外はない。少年の犯罪といふこと、夫れ自身に於て、既に研究の價值は十分にある。況んや其殘忍酷薄の行爲を敢てするをや。心理的に、生理的に、また社會的に、研究調査の必要は大にあると思ふ。犯罪の捜査は、警吏其任に當るべし。犯罪撲滅は、これ社會の識者、先覺者の大なる任務ではないか。

(鈴木生)

野次馬的國民性

突如として支那問題が起つた。國論は沸騰した。阿部政務局長は暗殺された。外務省は包圍された。外務大臣邸宅は威嚇された。罪なき電車は石を投げられた。これが日本に於ける政治的輿論の沸騰する形式である。但し暗殺なる形式は姑く中絶して、人も吾も心密かにこれを祝してゐたのである。しか、今や再び暗殺熱が起つて來たのである。しか

も十八歳の青年が、これをなしたのであつて、一部の青年の間には極端なる方法を以て、政治的理想を實現せんとする希望を抱いてゐることを知ることが出来る。今は立憲政治を運用すべき時である。輿論公論によりて國家の大事件は解釋すべき時となつた。決して相互に殺戮してはならぬ。もしかゝる事があれば國法の擁護甚だ覺束なしと言はざるを得ない。それ國內にありて、互に殺戮すれば國家は消滅せざるを得ない。佛蘭西革命が多くの光輝ある生命を失ひたる結果は、終に人才空しの嘆を聞たのである。薩摩も西南戰爭によりて多くの人才を犠牲にした。水戸藩も浪人の活動や、武田耕雲の舉兵によりて、多くの人才を犠牲にした。今日は内亂の時代を既に、經過したるなれど折々暗殺のことありて、狹義の内亂を現出するは、痛歎の至りである。

外務省當局者の態度に不満あらば、宜しくこれを叱責すれば可なりである。その生命を奪ふといふことは無謀の企てにすぎないのである。もし日本が度々かゝることを繰り返す時には、終には大

惟一館なより

■九月の惟一館は、いろいろの方面で、目ざましい活動の氣振を示してきた。秋になると、人の心が妙にひきしまつてくる。その引き締まつたところからは、強い深い力の生みだされるのが當然だ。

■統一教會員の荒井醫學士は、月の十四日、午前八時半の急行列車で、獨乙へ立つて行かれた。それで教會では、六日の午後六時から、階下の一室で、同君のために送別會をひらいた。古いころの會員も兩三名顔をだされて、いろいろと話が花が咲いた。内藤三並、内ヶ崎、渡邊、安部諸氏の送別の言葉があつて後、荒井君の挨拶がある。そのなかには、随分と思ひ切つた告白めいた話も立ち交つてゐた。十時すぎ散會。

■前號に豫告してあつた通り、サシダアランド博士は、米國ゆにてりあん協會の代表者として、月のはじめに入京されたのが、統一教會では十四日の日曜に、晝夜とも同博士に講演を乞うた。朝の演題は『世界運動としての自由宗教』といふので、現代の世界各國に漲つてゐる進歩的宗教思想について、至つて細かな觀察を披露され、夜は『ロバート・ブラウニングの人生觀』といふ題下にこの近代詩人の胸に宿つた靈的生命から出發して、現代に於ける宗教的使命の極めて大きいものであることを暗示された。博士が老軀を提げれ、新宗教の運動のために、努力を盡くされつゝあることは、われらの心から感謝する所である。

■廿日の土曜には午後七時から同博士のために、迎接會がひらかれた。宗教界各方面の名士が五十名ちかく集まられたが、まづ安部磯雄氏は、弘道會を代表して、博士の使命についての紹介の言葉を述べられ、ついでマコーレー氏は、個人的關係から進んで、日本に於ける統一基督教運動に對する博士の徳を讃へられる。内ヶ崎作三郎氏は、統一教會を代表して、博士に歡迎の辭を捧げられた後、日本に於ける統一基督教徒の使命を、最も痛快に語られる最後にサンダーランド博士は、壇上に立つて、いろいろの希望を述べられ、別室で茶菓の饗應があつて、九時すぎ散會。

■廿一日の日曜には、禮拜後に、統一俱樂部がひらかれた。例の通り、永樂亭の合の子辨當で、午餐を共にして後、小山昇君の發案で、夏季休暇中の經驗なり感想なりを率直に語り合つた。三並氏の室内旅行談、マコーレー氏の輕井澤印象談、相原氏の富士登山談などが頗る振つた。

■内ヶ崎牧師の「超人の使命」「土木道德論」「一步の差」三並良氏の「久遠の憧憬」武田芳三郎氏の「宗教の靜音的側面」などは、最近の説教中、主なるものであつた。

■小山東助氏は、月の三日に東京を立つて、神戸の開西學院に赴任された。神戸の中和な空氣は、氏の健康を悪くして呉れるであらう。

■統一教會では、この月の十日から三日間、秋季特別講演會をやる。海老名、額賀、岡田、今岡、三並、内ヶ崎、安部の七氏が出演せらる筈だ。六合雜誌社の講演會も、近く開かれやう。

解が起るとである。それは天下の宗教は皆な交友であると言ふと、それから結論してどの宗教も皆は同じだと見るとである。従てどれを信じたと同じだと云ふとである。どれを信じたと同じだと云ふのが更に一轉して、或は同じと云ふとを辯明するに耽り、換言すれば形式論に流れて、實質を考へないやうになる。或は口にさう云つて實はどれも信じない者もある。これは此の論者の陥り易い弊害である。形式論は概念論の今日に容れられないやうに、最早吾人の精神を満足させるものではない。吾人は形式に盛る内容を必要とする。換言すれば何を信じて居るかを明瞭に意識しなければならぬ。こゝに吾人の確信が成立して居なければならぬ。若しこの確信がなくて天下の宗教は皆な交友なり、と云つて居たならば、吾人は他人によつて生きて居るもので、自分の生命はない。そんなものは何の用をもなさない。サンダーランド博士がユ教主義が他の基督教派に及ぼした影響を説いた時にも、この點は明かに發表されて居たやうに思つた。ユ教會が堂々として成立し居るか

ら、それを根據にして始めて大なる影響が他に及ぶのである。吾人はどうしても本源に強いものを必要とする。是れ自由主義は天下の大勢で、自然に諸宗派に遡入つて行くと安心せず、自ら一團體を形成して居る少くとも一理由であらうと思ふ。そして吾人は堅く信じ、寛い心を持ち、寛い心を有つて堅く信じたいものである。(三 並)

自今本誌への御寄稿は便宜上すべて

本郷區眞砂町十五番地内藤源

あてに願ひます。たゞし、廣告原稿、圖書雜誌は、やはり六合雜誌社宛に願ひます。

つて森に行く。そしてこの御者も森のなかで死ぬ。これが三つの死である。譯文もすらくと無理のない書き方、新秋の好い讀み物である。(海外文藝社發行價・〇・四五)

▲アナテマ

アンドレーエフ作・伊東六郎譯

露西亞象徵主義の作家中の一人であり、またその最も秀でたるアンドレーエフの戯曲である。全篇七幕といふ幕割からして一寸珍しい感がある。此の作は千九百九九年に出版せられたものであるが、當時露西亞の思想界に於いて、殆んど未曾有の大物議を惹き起したといふことである。その原因は藝術上からも來てゐるが、一方はその題材が宗教的であつた所からして來たといふことである。此の作中の主人公ダギツト・レイゼルといふ男は基督であつて、アナテマはサタンであるといふことである。そしてサタンのアナテマが散々基督のダギツド・レイゼルを苦しめて、遂に彼れを平凡人に化して了つて、勝利はサタンの有に歸するといふ筋である。殊に宗教界の方におすゝめする。(泰平館發行・價・〇・五五)

▲正教思潮

正教時報社編

正教派の人々が常に新しい立ち場からして、宗教を論ずることを忘れられないのは、吾々が大に快とする所である。本書は年四回出版のものに屬する雑誌である。内容としてはレーベデフ教授の「基督教の勝利」、スウェトロフ教授の「グラドストンの贖罪論」ヘトロフ教授の「三位一體の心理的解釋」、フ、テルナル氏の「基督教及基督教會」、ベルシエ氏の「他人の罪過」、ア、タブルム氏の「現

代學者の宗教觀」、ボグダセーウスキイ教授の「聖書難句解」、附録として「大主教ニコライ師永眠前後」等あり。何れも眞面目な研究や、表白である。

▲噴火口

高島米峯著・丙午出版社

著者は誌して、『舊著廣長舌及び惡戰に比し、愚論惡文更に一步を進め得たるものなることを確信す』と言つてゐる。前の二著を讀まぬ僕には、何れほどの進境があつたかは知らぬが、この書を讀んだだけでも著者その人の面目が躍如として、動いて來るやうに思はれる。著者はもと佛教の人、しかも佛臭からず、また俗臭からず、自ら超然として一世の批評家たらんことを期する人である。その言ふ所必ずしも悉く新しからず、また學究的ならずと雖も、著者は確かに實社界に入りて、實社會の或物を攫み得たる人でなくては、言ふことのできぬものを持つてゐる。平常の鬱積せる不平不満が、あらゆる方面の社會現象に對して、煩と、灰と、溶岩の批評を浴せかけるのである。讀んで確かに氣の晴々する本である。(價・〇・八〇)

▲通俗基督傳

山室軍平著・救世軍本營

救世軍の山室氏が、基督教といふものを、一般の人々に存み込ませやうが爲めに、平易な書き方でユダヤの國の昔から、耶穌の誕生、幼年時代、田舎大工の時代を初めとし、耶穌の一生に於ける主なる出來事を捉へ來りて、そが含む一つ一つの教訓なり、意義なりを説明せんと努めたるものである。(價・二・五)

新刊批評

▲東西思想の統一

ジョーセフ・コーサンド著・加藤直士譯

東西兩洋の思想が、一見太だしく區別あるが如くして、しかもその哲學的、宗教的思想の根本に於ては必ず相默契する所あるは近代の學者が齊しく證認する所であり、吾々も亦必ず然ることを信するものである。然るに因襲の久しき東西兩洋人の宗教或はその他の思想が、やゝもすれば、その根柢を異にして發達したるものなるかの如き、迷信に囚はれ、隨て相融和すべき宗教と宗教とが殆んど敵視して對立するやうな奇觀を呈するに到りたるは、寔に遺憾とすべきである。著者ジョーセフ・コーサンド氏の本書は、この點に注目したる極めて興味ある物である。東洋殊に支那印度より起つて、日本の武士道に及び、更に進んでは基督教の思想を解く、極めて懇切なり。嘗て同志社大學に於て、著者が講じたる研究がその大部を占めてゐるのであつて、その態度も極めて學究的のものである。譯文また頗る適切。殊に新しき宗教に興味ある人々に薦める。(警醒社發行・價〇・八〇)

▲青年雄辯集

大日本雄辯會編

嘗て雜誌「雄辯」に發表せられたる都下各大學々生の演說筆記三十一篇を收めたものである。論者が何れも若い人々のお揃ひであるので、その論の鋭鋒はなかく當るべからざるものである。

殊に論旨に至りても、一派の堂々たる雄辯たるに足るべきものがある。青年諸君の一讀を充分値するに足る。(價〇・九〇)

▲ニイチエの人格及哲學

三浦白水著・警醒社發行メエビ

ウス氏の「ニイチエの病理」を抄譯したるもの。

原著者は有名な病理學者で、ゲーテ、ショッペンハウエル、ルツォに關する同一の研究を發表して名ある人ださうだ。元來ニイチエは近代哲學が生み得たる一大天才である。その哲學は時として極端より極端に走る癖はあるが、彼れ獨特の領域は容易に、他人の侵すことを允さない獨創の哲學である。しかも彼は終に精神上の變調に陷つて復た起たずなつた。著者は病理學の方面より此の偉人を解剖せんと試みたるのである。精神的方面、心理學的方面に志す人にとりて好個の讀み物である。譯文平易。裝幀紙質共に雅。(價〇・六〇)

▲三つの死

トルストイ作・加能作次郎譯

トルストイの「火を忽にせよ、然らば曠がらん」、「愛ある所神あり」、「人はどれだけ土地を要するか」の三篇と、「三つの死」一篇とを集めたるもの。殊に「三つの死」はトルストイの作品中でも、最も傑れたるものゝ一つとして一般に認めらるゝだけあつてなかく面白。轉地療養に出かける馬車のなかの病婦人や、その若い御者、その御者に靴を譲つた老人。それが一人一人、露西亞の土から蒸れて來る性格を現はしてゐる。やがて婦人も死ぬ。老人も死ぬ。靴を貰つた若い御者は、老人のために十字架を作らうと思

院長診察、月、水、木、金、午前、入院、診後應需、林、峰間、兩副
長ハ目下當院ニ在勤

(電) 八八八(病院用)
(本) 八九八(私宅用)

東洋内科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋附近

院長

醫學士 高田 畊 安

神奈川縣高座郡茅ヶ崎海濱從停車場半里

電、チガサキ一一番

南湖院

河野、高橋、兩副長ハ目下當院ニ在勤、院長診察、土曜日午後
入院、診後應需

編輯室より

■例に依つて、編輯後の報告をいたします。本號の卷頭に掲げました内ヶ崎氏の『光は巴里より』は、御覽のとほり、この七月、佛京巴里にひらかれた萬國自由宗教徒大會の記録であります。同氏執筆の都合上、後半を次號にづゆる事にいたしました。現代に於ける最も進歩的宗教思想が、どういふ經路を辿つてゐるかはこの紹介によつて、おのづから明らになる事と思はれます。

■また『小泉八雲臨終の記』は、故ラフカディオ・ハアン氏の未亡人の筆になつたものでありますが、私どもは、この率直な記録をとほして、たやすくは擱めない死の教訓に、ゆくりなくも接し得たことを茲に書きつけて置かなくてはなりません。

■これまで絶えず本誌のために御助力下さつた岡田哲藏先生は、本月から本誌同人の一員として、御執筆下さる事となりました。これで同人十一を數ふる事になつたのでありますが、將來の本誌は、同先生の深い學識によつて、より一層の光彩を加へうる事と信じます。

■吉田絃二郎君は、軍隊の方から定期召集令が來ましたので、九月の二十六日に、長崎へ立つて行かれました。十一月の下旬には、東京へ立ち歸られる筈であります。ちよつと二ヶ月ほど留守になりますので、同氏の翻譯戯曲『黎明』は、次號に其の第二幕一景を掲げて、一まづ括りをつけて置く事にしました。歸京の上、二たび譯稿を起こされる筈であります。

■惟一館だよりに報告してあります通り、統一教會員の荒井恒

雄氏は、先づ醫學研究のため、獨逸へ立つて行かれましたが、向ふ二ヶ年の留學中、いろいろの見聞を本誌に通信せられる筈であります。たゞ專攻の學術ばかりでなく、文學藝術に對しても、深い趣味を有つて居られる人の事でありますから、折々の通信はきつと讀者諸君の興味を喚び起こすに足りると信じます。

■鈴木文治氏は、生活問題の背景と云つたやうな論文を本誌に書かれる筈でありましたが、いろいろの用事が混雜して、遂に執筆の閑を得られなかつたのであります。近いうちには、きつと責を果たされるのでありませう。

■神戸の關西學院に赴任せられました小山東助氏は、至つて氣持のよい寓居ができて喜んで居られるさうであります。次號あたりには久しぶりに、同氏の論文を載せる事ができるやうにしたいものだと思つてゐます。

■七月のはじめから、九州の方に行つて居られた加藤一夫氏は、この月の廿一日に、こちらへ歸つて來られました。當分、翻譯や創作で日を暮らすと云つて居られます。

■この號から、豫告に従つて、東京諸教會の説教批評を掲げる筈でありましたが、その方の係に差支ができました爲めに、残念ながら掲載をのびさなければならなくなりました。讀者諸君の御寛容を願ひます。

■次號には、また何かの問題を提供して見たいと思つてゐます。その問題がどういふ點に觸れるかは、豫じめ報告しかねますが、何に致せ出来るだけの事はやつて見るつもりであります。(九月廿三日)

内外教育評論社編輯部編纂 (十月十日製本出來)

〔後附二〕

故内外教育 評論主筆 木山熊次郎遺稿

四六判全一冊三百五十餘頁 定價金六拾錢 送料金八錢

内外教育評論創業者木山熊次郎氏逝ひて茲に三年、本社は其三週年忌に際し故人の遺文を集めて一冊となし、廣く天下の教育者諸氏にわかつたと欲す、木山氏の人格高潔、志氣剛健にして威武に屈せず權威に阿らず、我教育界の爲めに侃諤の論議を敢てし、その弊竇の革新に力めしと、教育者の眞同情者を以て任ぜしとは今改めて呶々の辯を要せず、本書は凡て四編よりなり、第一を修養の跡とし、第二を青年の爲めに、第三を教育論、第四を長編論文ハウストに現れたるゲートテの哲學思想とす。以て著者の美しき人格と青年に寄せし溫かき同情と、教育界の爲めに奮戦せし眞摯熱烈なる論評とその蘊蓄とを併せ窺ふを得べし。敢て天下の教育者に一讀を勧む。

發行所 東京 振替 本 東京 一 駒込 二 千代田 七 默木 〇 町番 内外教育評論社

●神學部の開講

神學部は前期に引き續き、來る十月初めより左の通り開講すべし。その他の科目の設置は未定なり。又オイケンのは其最新著にして、現に丸善書店に若干部あり、有志者は買ひ入れ置かるゝ方宜しからん。

●時●日……每週火、金曜の午後四時——六時迄。

●科●目……比較宗教史より見たる福音書。

オイケン著 Erkennen und Leben の講讀

●擔●當●者……三 並 良氏

統一基督教弘道會

教 育 部

勞働問題の解決の先驅者
友愛會の機關新聞

友愛新報

定價 郵部 十
價稅 郵部 一
部 共 稅 一
金 部 前 三
三 金 十
錢 厘 錢

發行所

東京市芝區三
田四國町二番

友愛新報社

四週年

文藝

創造

雜誌

紀念號

生 活 創 造 と 藝 術

岩野 沼 鳴 風 平 雄 仲 伸 風 湖
 石坂 久 養 詛 泡
 本間 坂 久 養 詛 泡
 片山 久 養 詛 泡
 相馬 山 久 養 詛 泡
 中村 御 星 湖

● 第四週年紀念號

詩歌 數十數
 挿畫 數十數

葉篇

● 毒 藥 の 壺 (感想)
 ● 沿 遠 の 路 (小説)
 ● 永 和 祭 (ウスペンスキー)
 ● 平 年 振 (パウプトマン戯曲完)
 ● 七 ナ 劇 の 評 及 び そ の 他 (アンドレエフ小説)
 ● 文 藝 創 造 と 生 活

松島 御 風
 八橋 有 春
 米川 正 夫
 奏磨 豐 吉
 播磨 青 鳥
 清浦 青 鳥

第 一 步

相馬御風著

之れ新生活の第一歩を踏み出さん
 とするものの最も正實なる要求の
 叫びなり最近の文壇に於ける問題
 の中心點と目さるる著者獨創の感
 想録「毒藥の壺」を初め著者最近の
 思想起白は悉く蒐めて此の一卷に
 あり「第一歩」一卷實に之れ現代思
 想界の一大烽火なり

體裁極美十六錢

内藤 久 濯
 福田 幸 次
 福部 次 郎
 安部 能 郎
 木村 莊 八
 清浦 青 鳥

諸家の新藝術論

東京堂書店

東京市神田区三田

發賣所

特種郵政 二錢稅 錢稅價

(後附四)

統一教會秋季講演會

(芝區三田四國町芝園橋停留所傍)

十月十日 (金)

午後六時半

十月十一日 (土)

午後六時半

十月十二日 (日) (禮拜說教)

午前十時

同日午後六時半

(師 講) 額賀鹿之助
三並作三郎

(師 講) 今岡信一良
海老名彈正郎

内ケ崎作三郎

(師 講) 岡田哲藏
安部磯雄
内ケ崎作三郎

秋漸く深くして靈火内に燃ゆ。願くは吾人をして眞面目に人生を講究せしめよ、六合雜誌愛讀者諸君の來聽を歓迎す、

雜誌『生活』社主催

生活（第十月號）
前月休刊、本月出來
内容は前月廣告通り

高村光太郎
木村莊八
岸田劉生
岡本歸一

油 繪 展 覽 會

右四氏の製作を展覽致します。皆さんが來て下さる事を望んで居ります。

十月	
自十六日	至二十二日
一週	自八時 至五時
神田區仲猿樂町 於 ヴィナス俱樂部 (三崎町停留所と水道橋の 中間、電車通)	

生 活 社 同 人

内ヶ崎作三郎 先生著

近代人の信仰

▲四六判クロス製

▲箱入、六百頁餘

一圓廿錢

郵税十二錢

新刊

近代文明は物質のみならず、又精神と心靈との方面に於ても、實に一大驚異である。科學の精確と、心靈の神秘と、文藝の眞摯と、宗教の擴張と、いづれも人文史上の轉機を語らざるゝ。著者近代思想の潮流に倅して、信仰の彼岸に到らんとす。近代の科學、哲學、文藝宗教に興味を有し、近代人の努力と、憧憬と、歡喜とに對して同情ある人士に取りて本書は有力なる刺戟と、暗示とを提供す。

蔭清風裡の佳伴として、敢て大方の近代人に薦む。

●内ヶ崎君の「近代人の信仰」は氏がこの兩三年間に公にした論文集である。大體上近代の思想を理解し、新なる思想の上に古い信仰の新生命を求めやうとする近代神學家の思想を代表して居ることも云はれやう。そして多方面なる趣味と、同情の多い理解と、熱烈な信仰の要素とは、その文その想に一種云ひしれぬ味を賦與して居る。亦以て一種の思想問題研究と云ふべきである。(新日本)

●統一教會の牧師として日本現基督教界の新人たる内ヶ崎文學士の論集なり。宗教は過去一世紀の間旺なる物質的勢力に壓倒せられて僅かに餘燼を保つの有様にすぎざりしもの廿世紀に至りて又

其復活の曙光を顯はせり。此世界的思潮に乗じて最も進歩せる精神生活を唱道し、科學、哲學、藝術の三者を合一して完全なる一大宗教を建設せんとするもの、これ即ち著者の目的にて、其一々の論文は皆信仰に燃えて、生彩の陸離たるを覺ゆ。

(東京日々)

●近代思想の新らしき氣分を攝取して、古き基督教の信仰を活かさんとする著者の主張を稱したるものなり、勿論裏面に十字架臭味を加へざるところ所謂著者一流のユニテリアニズムの特色なか、(東京朝日)

●眞に篤信熱情の名文章である。(國民)

發行所

東京 市張 橋區 二丁 座目

警

社 醒

振五 替五 東三 京番

注意

一、本誌は前年迄は本會及び本誌に特別關係ある人には進呈致居候處今回内部の整理と共に毎號無代進呈は何人にも致し不申事と相成候間御愛讀の方は此の際本年度よりの誌代御送附下され度候

二、本誌は一切前金にあらざれば發送致さず候

三、御送金はなるべく安全なる振替貯金に依られ度候

四、若し郵便爲替にて御送金の場合には芝區三田四國町

二番地六合雜誌社と指定し拂渡局を三田芝園橋郵便局と指定せられ度候

五、本誌代金に對しては領收證を差出さず代金領收次第御注文通り發送可致候又前金切れの節は帶封に

(前金切)と押捺致候間早速御送金可被下候

六、本誌の廣告に關しては御照會次第詳細に御通知申上ぐべく候

七、本誌への御寄稿は凡べて、本郷區眞砂町十五番地

内藤濯宛に願上候

八、定價は内容の改善發達と共に七月號より下表の如く改定致候間御承知下され度候

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵稅共
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵稅共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵稅共

●海外は郵稅一冊に付金六錢(清國を除く)
●臨時號出版の際には規定以外に代金申受ぐ

本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通		一頁	金拾貳圓
普通		半頁	金六圓

●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候
●二回以上連續掲出の際には特別割引可仕候

大正二年九月三十日印刷納本
大正二年十月一日發行 (毎月一回一日發行)

定價貳拾錢
稅共

發行兼編輯人 鈴木文治
印刷人 山本與一郎
印刷所 株式會社 秀英 合

發行所

東京市芝區
三田四國町

統一基督教弘道會

賣捌所

東京堂◎同文館◎北隆館◎東海堂◎上田屋
◎警醒社◎教文館其他全國有名書店

Library of the
FIC UNITARIAN SCHOOL
FOR THE MINISTRY
Berkeley, California

六令雜誌



明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可
大正二年十一月一日
行(每月一回一日發行)

六令雜誌第三十三年第十一號

十 一 月 號

(明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可)
六合雜誌第三拾三年第十號(大正二年十月一日發行)每月一回(一日發行)

文藝圖書一覽

文學博士森鷗外序 與謝野晶子著(上卷中卷)
文學博士上田敏序 中澤弘光彩畫(下卷二冊)

■新譯源氏物語 一冊特價
武園五拾錢

與謝野晶子著 藤島武二畫 歐洲漫遊短歌
長詩五百餘頁 壹圓五拾錢

■夏より秋へ 壹圓五拾錢

與謝野晶子著 藤島武二 中澤弘光畫

■春泥集 金壹圓

與謝野晶子著 和田英作畫

■佐保姫 金壹圓

與謝野晶子著 藤島武二裝

■一隅より 壹圓貳拾錢

正宗白鳥著 名取春仙裝

■生靈 金壹圓

島村抱月著 中澤弘光畫

■故郷(マグダ) 金九拾錢

西村天因作曲 永井重暉作譜

■薩摩琵琶歌 金拾錢

河東碧梧桐著 中村不折裝

■三千里(關東) 特價
貳圓五拾錢

河東碧梧桐著 特價
金參圓

柳川春葉著 緒崎英朋畫
杉浦非水裝 (全四冊)(上卷中卷)
下卷後編 一冊
金九拾五錢

■生さぬなか 金九拾五錢

柳川春葉著 緒崎英朋畫杉浦非水裝

■續生さぬなか 金九拾五錢

柳川春葉著 緒崎英朋畫杉浦非水裝

■女一代 各壹圓

柳川春葉著 緒崎英朋畫杉浦非水裝

■母 前編 金九拾五錢

柳川春葉著 緒崎英朋畫杉浦非水裝

■花賣女 壹圓貳拾錢

柳川春葉著 緒崎英朋畫杉浦非水裝

■富と愛 金壹圓

佐藤紅綠著 名取春仙裝

■礎 前編後編 各九拾五錢

菊地幽芳著 緒崎英朋畫杉浦非水裝

■秘中の秘 前編後編 各九拾五錢

菊地幽芳著 緒崎英朋畫杉浦非水裝

■月魄 前編後編 各壹圓

菊地幽芳著 緒崎英朋畫杉浦非水裝

東電振 京話替 町番東 平區町 河三 五〇八 丁九壹 五三七 番番

金尾文淵堂

(本誌貳拾錢)

THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 394. November, 1913.

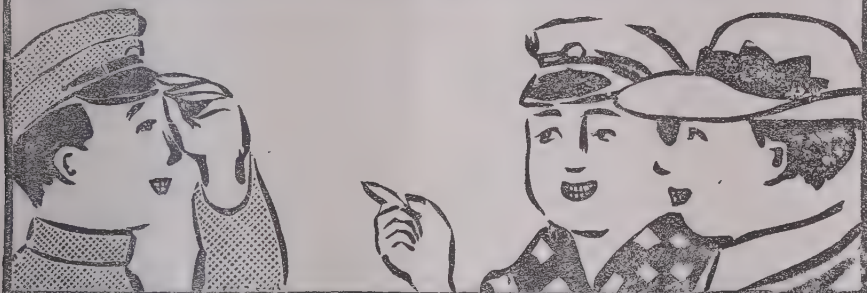
CONTENTS.

Abend in der Heide. (<i>Frontispiece.</i>)	Froboese.	
Change and Stagnation of Faith.	Prof. H. Minami.	2
Religion of Silence.	N. Noboru.	11
The Sixth International Congress of Liberal Religions in Paris.	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	16
On the Expansion of Suffrage.	S. Yeshino.	33
Fragmental Thoughts.....	U. Kaneno.	42
Sorrow of the Creation.	K. Katō.	47
Literature and Public Opinion.....	Lafcadio Hearn.	65
Dawn of our Life.....	Z. Nomura.	72
Modern Sorrow. (<i>F. Grierson.</i>)	K. Katō.	84
Fragmental Thoughts.....	A. Naitō.	87
<hr/>		
The Criticism on Mr. Y. Abe's "Yo ga Sekai."	K. Katō.	90
<hr/>		
Immortal Fire (<i>poems</i>)	K. Satō.	92
Poem.....	J. Ichida.	98
"Les Aubes" (<i>E. Verhaeren.</i>)	G. Yoshida.	99
Poems.	N. Fujii.	113
<hr/>		
Topics of To-day.....		117
Unity Hall Reports.		130
Books of the Month.		131

Published Monthly by the

TŌITSU KRISTOKYŌ KŌDŌKWAI,

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.



僕等^{ぼくたち}は皆^{みな}

ライオン^{ライオン}黨^{たう}だ

君^{きみ}もライオン^{ライオン}齒磨^{はみがき}を使^{つか}つてゐるのだら

う！

道理^{道理}で齒^はが白^{しろ}いや！

君^{きみ}！獨乙^{ドイツ}ぢや齒^はの悪^{わる}い子供^{こども}は一所^{しよ}に

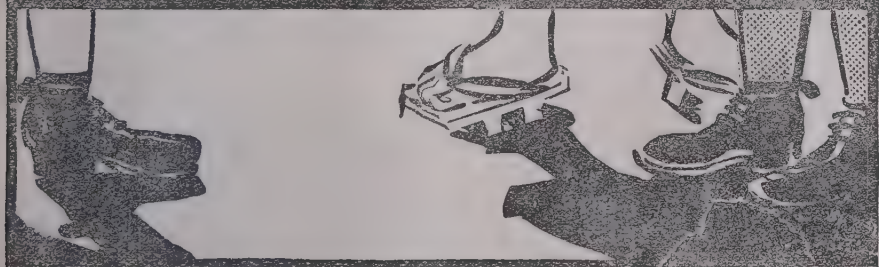
遊^{あそ}ばないよ云^いふぢやないか。

僕等^{ぼくたち}は皆^{みな}ライオン^{ライオン}齒磨^{はみがき}を使^{つか}つて、美^{うつく}し

い齒^はを持^もつた仲間^{なかま}だ、一所^{しよ}に遊^{あそ}ば

うや！

ライオン^{ライオン}齒磨^{はみがき} 浮石^{うしつ} 本舗^{ほんぽ} 東京^{とうきょう}大塚^{おおつか} 名古屋^{なごや} 小林^{こばやし}富次郎^{とみじろう}





『予の世界』を讀む(批評)……………かずを……………

きえざる火(詩)……………佐藤清……………

HATSUGOI(詩)……………石田樅村……………

黎明(戯曲・エルアーレン作)……………吉田絃二郎譯……………

落葉の底(詩)……………藤井夏人……………

時評

■學制の改革(三並) ■文壇に於ける生命の問題(加藤) ■顯官の犯罪(鈴木) ■宗教と教育
との協和(菊川) ■中華民國の承認(鈴木) ■公衆劇場の印象(内藤) ■早稻田大學創立三十
年祭(一記者)

■教會歴訪記(一)……………風走生……………

■十月の惟一館……………

■新刊批評……………

■編輯室より……………

六六雜誌第三十三卷第十一號目次

曠野のたそがれ(口繪・フロベゼ筆)

本 欄

信仰の流動と固定(評論)……………三 並 良……………三

沈黙の宗教(評論)……………昇 曙 夢……………二

光は巴里より(紹介)……………内ヶ崎作三郎……………一六

選舉權擴張論(評論)……………吉 野 作 造……………三

市より森へ(感想)……………金 子 白 夢……………四

創造の悲哀(評論)……………加 藤 一 夫……………七

文學と輿論(評論・小泉八雲氏遺稿)……………田 部 隆 次 譯……………五

新生命覺醒の機(評論)……………野 村 善 兵 衛……………七

近代的悲哀(評論)……………グ リ イ ア ス ン……………四

塵の中から(感想)……………内 藤 濯……………八



ABEND IN DER HEIDE



● 是等眞價は近新新聞雜誌に見可し ●

佐藤清氏譯

● ジャドソン傳

アリス、ファイオック嬢譯

菊判箱入二四六頁
定價九十錢 郵稅八錢

△ 草原の友

田中達氏譯

四六判全一冊
定價二十錢 送料四錢

● 基督教と新心理學

四六判美裝金字入四〇二頁
定價金八十五錢 郵稅金八錢

△ (刊近) 日曜學校幼稚園教科書

(教師用)

菊判表紙色彩二二四頁
定價七十錢 郵稅八錢

● 聖書及讚美歌

並上製各種

● 御申越次第見本御送付申上べく候へば
續々御注文御購求の程奉願上候

和洋書籍印刷出版販賣業
京橋區銀座座四丁目
擬替東京一五三七

誌 雜 合 六

號 月 一 十



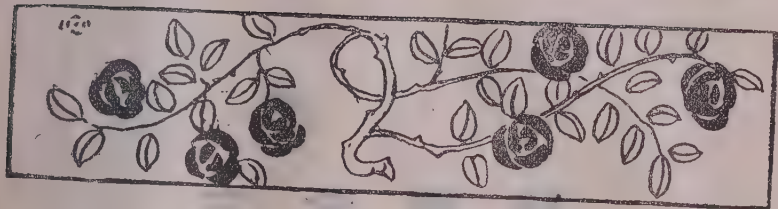
394



こゝに生命の運動があるとする。それは一莖の草、一本の樹、一疋の禽獸、一個の人間のやうな有形のものでも、學問、宗教のやうな抽象的な、無形のものでもない。それには必ず消長盛衰がある。恰も月の虚盈、潮の満干のやうなものである。この事は誰れの目にも、直ぐに氣づくものであつて、人間の感情は、古來常にこれが爲めに煩悶した。思索はこれが爲めに深遠にもなり、高遠にもなつた。

萬物の現象には、生あれば必ず滅あり、流轉極まりなしと云ふ思索は、吾人これを太古の思想界に於いて見るとが出来る。印度には既に釋迦よりも以前、婆羅門教のうちに、流轉輪廻の思想があつてこれを説いて居る。希臘では紀元前五百年の頃、エフエズス人のヘラクリットがあつて、「萬物流る」と喝破して居る。之を以つて觀る時は、生命には消長の二方面が常に附き纏うて、それが流轉して居るのである。こゝに現代の生命を説く哲學と、古代の流轉觀とに、甚だ相似た所があるのを看取せざるを得ないのである。

然しながら、吾人はこの問題に就いて、注意すべき二點があらうと思ふ。その一は、古人の觀察と今人の説との間には、見遁すべからざる大きな相違があることである。古人には進化思想がなかつたと云つてもいい程である。しかしながら今人は、此の思想によつて全然支配せられて居る。従つて古人の流轉思想には、進化と云ふことが混つて居ないが、今人の中には大いに、之れがはいつて居る。まづ彼の輪廻はどうであるかと云ふに、生物は常にうまれ變り、生き變つて居るけれども、これは常に一定の圓形の軌道の上に生ずる事實であるではないか。人間や牛や馬や蛇や鳥などに色々と生れ變



信仰の流動と固定

三 並 良

現代の思索の焦點となつて居るものは、何であるかと云へば、それは生であり、生活であり、生命である。われ等はみな生きて居る、だから生は直接我れ等と相合して離れない關係がある。これを離さんとすれば、血が流れるに違ひない、これを語れば、靈躍るの心地がする。これを以て生命の哲學を説く獨乙のオイケンヤ、佛のベルグソンは、恰も世界的の預言者であるが如き觀を呈して居る。日本の片田舎に寓居する村夫子も、オイケンを繙いて居る。イタリヤの宿屋の下女も、ベルグソンを語つて居る。これやがて世界の萬人がみな、生命の支持者であり、その憧憬者であるからである。とは云ひながら、生も之れを詳細に見るときは、大きな問題を有して居る。生とはたゞ生きさへすればいいと云ふのであるか。生には高低、深淺の區別が出来はしないか。これも大切な問題である。がこの事に就いては前號の本誌に「二種の生命」と題して論じたうちに、多少の辯明を試みた積りであるから、今は云はないとにする。また文明の諸現象即ち、學問、文藝、宗教、政治、國家など云ふとも、みな生の運動より出てざるものはない。然し僕はこの諸方面の事を、こゝに一々論じやうとするのではない。

り返すのだ、と説く心理學者などもある。兒童の時代を通過して、壯年、老年になつたとしても、此の事は止まないやうにも見える。例へば立食の饗應のある時などに、紳士たるものが身分をも忘れて、ナイフやフォークを以つて突刺するのは、餘り見つともよい圖ではないが、而かもそれが毎々演ぜられるのも、嘗つて動物時代に群をなして、食物を求めつゝ野や山を馳せ廻つた性質が、無意識に再現するのではあるまいかとも思はれる。況んや三千年この方の思想が、常に吾人を去らないで、再現するのは何も不思議ではあるまい。そのみならず、更に他の難解な問題が開展し來つて、吾人は大に之が爲めに悩まざるを得ないのである。

吾人の信仰の立場だつて、同じとである。萬物流轉しつゝ發展するのが、生命の本質であるとするならば、信仰だつて此の運命を通れ出づるとは出来まい。若しさうであるならば、吾人は信仰と云ふとを如何なる基礎の上に据ゑたら宜しからうか。是れ聽て信仰上の大問題であらう。否、或は信仰の死活問題ともなるであらうと思ふ。

是に於いて信仰は必要なものではあるが、之を一定したものと考へるのは甚だ窮屈であり、流轉的發展の理法にも背くわけであるから、さうはし度くないと論ずる人々も出て來る。これには大に道理がある。澤山の背景が味方をして居ると思ふ。

刻々の宇宙の靈動が、生の活動に觸れて居るにしてもこれがどう云ふやうに變化するか、或は發展するか、それは今から分つたものではない。然しながら吾人は宇宙の靈動が、吾人の心の深みに觸れ

るのが生物だとは考へられて居るが、之れが謂はゆる輪廻で、同じ事實を繰り返すのであつて、此の軌道の上には、進化發展も生じて居ないし、新らしい創造物も生じないのである。ヘラクリットの説だつて矢張さうである。彼れの觀る所を以つてすると、森羅萬象は唯一の根本たる「火の靈」より流れ出で、そして流れて止まざるものである。然し流れ／＼て再び元の「火の靈」に吸収せられ、そして再び流れ出で、同じことを無限に繰り返すのである。さうするところには、眞の向上發展と云ふやうなものも認めることが出来ない。これは印度思想も同じことである。

注意すべき他の一點とは、人間は流轉に満足が出来るかと云ふことである。否人間は決して此の流轉に満足しないのである。印度思想は此の流轉に苦痛を感じて、存在は苦なりと歎じたのである。解説を求めたのである。涅槃道を説いたのである。さうして諸宗教の救済觀も出来たのである。

吾人は何もこんなに、舊い思想を繰り返して云ふ必要もなかつたかも知れない。然し三つ兒の魂百まで、人類は如何に進歩しても、矢張り同じやうなことを繰り返すものである。動物學の大家ヘッケル教授は、人間が九ヶ月間、母體の内に居る間には、動物がアメーバーの昔より人間に至るまで、幾千いな幾萬年か、つて成し遂げた發展を、短かい間に繰り返すのだと云つて居る。それから人間として産れ出た後でも、十三四歳の間には、嘗つて動物として生活した状態の繰り返しをするものである。たとへば赤ん坊は如何に手を引きまはしてやつても、直ぐ握り拳をして肩の上に出したり、兒童は鞦韆をするのを樂しみ、殊に樹のぼりを好むなどは、みな祖先が樹上生活をしたとを、無意識に繰

の認識論が出来るであらうが、それは別問題であるから、こゝには論じないとする。

然らばこの共鳴し、靈動する所のものは何であるか。これは一言にして云へば、即ち精神の生命である。所謂精神生活である。前に云つた深い高い生命である。換言すれば、新種の生命である。この生命が如何なる有様に發展して来るかは、既に度々論じたところがあるから、繰返しては云はないが、斯くの如き精神生活が存在して居るのは事實である。此の生活は場合によると、他の勢力の爲めに壓倒せられたり、或は暗黒にせられたりするとはあるが、しかも絶滅せらるゝものではない。自己の連絡を以つて發展し、活動し、人間の好惡によつて左右せらるゝものでないとは、人類のうちに形成せられた文明によつて證せられて居る。或は各自の内的省察によつても分かる。是れ即ち精神生活には、獨立自存の性質があると云はるゝ所以である。

此の獨立自存せる精神生活は、各個人の自我の深みより、澎湃として無限なる宇宙の全體に瀾満して居るものである。これは宗教語で云ふ時は、神である。さうすると神とは、吾人各自の自我のうちに溶けこんで居るものと見なければなるまい。神とは吾人が自我のうちに溶けこんで居る新らしい生である。さうすると、之を客觀的に、彼岸に對立せしめて觀察しやうとした所で、これは總べての客觀的觀察が事物そのもの、物の眞實體を看取するところが出来ないと同じやうに、神の認識もまた遂に失敗に歸せざるを得ないのである。

概念に力がないと云ふのも、これから生じて来る。勿論概念は無益なものとは云へない。然し生命そのものではない。生命は概念よりも廣い。言葉の示す通り生きたものである。概念は只智識のもの

て居るとを否定するとは出来ない。こゝで生命に淺きものと、深きものとがでさる、云はゞ階層のやうなものが出来る。二種の生命の區別が立つのである。ヴナが最後に云つたやうに、今までの生活は悪い夢であつた、これから美くしい夢が始まる、と思ふ意識がある。この意識には天地のなかの心と、我が靈の深き奥に於ける琴線とが互に相觸れて、共鳴して居るに違ひないのである。この共鳴こそは、我が信仰である。信仰とは何を知り、何を信ずると云ふやうなものではあるまい。この信仰には實に尊嚴にして犯すべからざる權威がある。

僕も信仰とは直觀したならば、斯う云ふものであらうと思ふ。然しながら人間は幸か不幸か、自己をも客觀視する能力を有つて居る。いな客觀視するのを止めよ、と云つても、客觀視するものである。何人と雖、客觀視してはならないと命ずる權利は有つて居ない。固より客觀視するとき、共鳴は止むであらう、靈動は止まるであらう。然しそれは別問題であつて、共鳴や靈動が止むとしても、之を再び活動せしめて、そして客觀的に觀察すると出来るかも知れない。若しこのとが出来ないならば、自己省察など云ふとは、無意義な熟語に過ぎないものであらう。或は斯う云ふ順序で議論を進めるのは、誤つて居るのであらう。實は吾人は客觀視するのではあるまい。吾人は自己を客觀として、外部から自己を視て居たならば、眞に客觀物である外物を見るやうに、到底自己だつて分るものではない。吾人は活動しつゝ、此の活動を内部から窺いて見て居るものに相違ない。こゝに於いて眞に内部より我が動きつゝある有様が、明らかに分るのに相違ない。この心は之を宇宙に移して考へたならば、眞

として我が深みより湧き騰り來るであらうと思ふ。

斯う考へて見ると、信仰や宗教問題と流轉との關係が、明らかになつては來まいかと思ふ。宇宙其のものゝ流轉的發展によつて、信仰が變ると思ふのは、宗教を概念的のものと見るからであらう。信仰が前にも云つたやうに、生命の活動であるとするならば、概念は變つても、此の生命には變りがないはずである、のみならず、此の生命は發展するであらう。けれども發展するものが、前にあつたと同じ生命ならば、自分の本質は増しても、それが變化したとは云へまい。尤もこれは眞の生命を掴み得てから云ふべきであらう。

然れども更らに一步を進めて問ふべきとは、斯くの如き常に生ける精神生活は、ただ常に活動して居るだけで、何等の固定的なものを残さないであらうかと云ふ問題である。この問題の答解はたと抽象的な議論でなく、實際はどうであるかを檢して解決すべきものではあるまいかと思ふ。

さうすると、此の問題に答ふべき事柄は澤山にあらうけれども、その最も大切な着眼點よりすると僕は固定的なものが残ると思ふ。恰も大風一過して、その跡に清新な氣が残るやうなものである。精神的なる刻々の靈動は、その跡に何ものかを残し残して、遂にこれが偉大なるものになる。之を一言にして云へば人格である。こゝに人格が形成せられるのである。若し宗教に固定するものがありとするならば、それは人格によつて固定するものである。既に宗教が靈動であり、精神的生命でありとするならば、それが人生觀や世界觀や、さては教義などに固定したものが出來ると考へるのは、大なる

のである。廣い生命を知識的に狹めて、疑結せしめたものである。生命に導く手段にはならう、然し生命そのものではない。斯う考へると、神を概念的に考へたり、そして神を對岸に立たしめ、概念を寄せ集めて、その存在を辯明せんとする謂はゆる有神證據なるものは、不思議なものになつて来る。

こんな議論は吾人に於いては、何の用をもなさないのである。その無用なる證據は、有神證據論を充分に議論する哲學者が、必ずしも宗教に熱心なる人々でなかつたり或は有神證據論が如何にも力のあるやうに思ひ、これによつて確信を得る者が、初めから神を信じて居るものである事を見ても知れるであらう。殊に有神證據論は、宇宙の組織の巧妙なるを指示するものであるが、成程これには一理ある。然しこれは宇宙の一方面であつて、耶穌も神は善人にも惡人にも日を照らし、雨を降らしたまふと云つたやうに、宇宙には善惡相半ばするのを忘れてはならない。概念上で有神證據論が立つものならば、非有神證據論も、同一のロジックの強みを以つて成立するとが出来るのである。

同じやうに基督敎會などで重んじて來た敎義もさうである。これも矢張り概念の塊りであつて、宗教的生命そのものではない。宗教的生命は敎義の如きものよりは廣い、深いものである。生命そのものである。敎義は生命そのものでないから、敎義上の爭論を是れ事とする時は、信仰上の生活は空虚になる、眞の鍛練は出来ない。否、人をして遂に宗教に倦厭を生ぜしむるのである。

これを以つて吾人は、吾人の内部から、宇宙的にして統一的なる、従つて絶對的な獨立自存の精神生活、即ち神に参加し、こゝに共鳴して行くのが、眞の信仰的生活であらうと思ふ。若し吾人は之を背景とし、淵源として生活したならば、何ものも吾人に打ち勝つとの出来ない大きな勢力が、勃然



沈黙の宗教

昇 曙 夢

メエテルリンクは、或る作物の中で、沈黙を讃美して斯う言つてゐる。

『沈黙よ、敬虔なる沈黙の人々よ。彼等は世界到るところに散在してゐる。彼等は沈黙の裡に瞑想し沈黙の裡に活動し、而して各々自己の領土に住まつてゐる。朝刊の新聞は曾つて彼等の事を記録したことがない。彼等は地の鹽である。彼等が全く居ない邦、若くは居ても極めて少い邦は、堅實な道に立つてゐる邦とは言へない……』

メエテルリンクに於いて、沈黙は人間の精神界を革新すべき新宗教の偉大なるドグマである。『黙して待つならば、我等は恐らく「神の囁き」を聞き分けるかも知れない。』是れが白耳義詩人の根本の要求である。

此の要求に動かされて、近頃ロシヤの新しい神秘的デカダン派の間に、「沈黙の宗教」が起つたのは面白い現象である。此の新宗教の中心となつてゐる人物は、名をアレキサンドル・ミハイロウキチ・ドブロリユーボフと云つて、同じロシヤの神秘的デカダンの一人で、メレジュコフスキイの親友である。ドブロリユーボフは、長い間放浪の生活を送つて、敬虔な順禮の群に交つて諸國を遍歴しなが

矛盾である。自家撞着である。

信仰生活は、人格と云ふ固定資本——餘り俗な言葉ではあるが——をつくるのである。こゝに吾人の眞我が形成せられて行くのである。然しこのものが何處まで發展して行くか、恐らくは絶對的ならざる吾人には、之を知るとが出来まい。然し吾人には強い意識がある。それは内部に於いて絶對的なものと共鳴して居る、溶け合つて居ると云ふ意識である。何ものも之を奪ふとは出来ない、何ものもこの性質を變へるとは出来ない。吾人はその發展を惟うて之を悦び、之を楽しむのは、恰も我が子の成長を見て、その喜ばしさに勝へざるが如き感じがするのである。

そして精神生活が、あらゆる精神的作用を超越する如く、彼の人格なるものも、矢張りあらゆる精神作用を超越するものであつて、従つてあらゆる精神作用に、人格の性質が分與せられるのは當然のことである。之を思ふと、人格と云ふものが間違つた基礎に築き上げられずして、宇宙の根柢より築き上げられるべきとの甚だ大切なとは、多言を要せずして明瞭であらうと思ふ。

最後に教會に就いて一言して置きたい。教會も組織的團體である以上は、組織が適當に出来る必要があるのは言ふまでもない。けれどもその眼目は、前に云つたうな精神的活動を主とし、人格の養成が重であるのも、言ふまでもないことである。吾人が團體生活をなすのも、つまりこの人格が得たいからである。吾人が我が團體に多數の人々を得たいと云ふのも、互に協力してかゝる人格を養成し、そして之を世界的に擴張せんが爲めである。——僕が此の点を附記したのは、我等が同志の士の一人も多からんとを希望するからに外ならない。

藝術も説教もない。宗教が神と我との個人的關係である以上、其の内容は絶対に神秘であり、其の形式は絶対に沈黙であらねばならぬ。而して此沈黙の内容は、直ちに人格を透して、心より心に共鳴すべき性質のもので、之を傳ふるに於いて所謂以心傳心の外、何等の機關も無い筈である。こゝまで考へて來ると、私は世に宗教の何たるを知らずして、宗教を思議する者の多いのに、寧ろ驚かすには居られない。

沈黙の偉大なる神秘的價值に就いては、既に是までも度々繰返されたことで、別段新しいことではない。人間の道德的生活に於てすら、沈黙が重要な價值を持つてゐることは、多くの哲學者や文豪に依つて證明されてゐる。中にも神秘教徒や修道士の社會に於いては、沈黙は古から偉大なる修業と考へられてゐた。今でも沈黙は修道士の一つの誓約となつてゐる。ロシヤには既にエカテリナ二世（カザリン女王）の時に、沈黙を以て救ひの唯一の要件と考へてゐた一個の宗派があつた。此の派の教義や儀式に就いては、無論其の當時の人すら、何等知ることが出来なかつた。此の派に歸依する者は皆、「啞の儀式」といふのを受けて、其の瞬間から最早永久言葉を發することが出来なかつた。正教を國教としてゐるロシヤでは、斯種の宗派は正しく異端岐教として國法に問はるべきものである。で、政府は何うかして彼等の教義を知らうとして、いろ／＼な手段を講じた。之が爲めに或る官吏は其の教徒を殘酷な拷問にまで附して訊問した。が、如何なる拷問を以てしても、彼等の固い沈黙を破るには足らなかつた。

近くは十九世紀の後半期にも、ロシヤには此の沈黙の密教が起つた。此の教徒は七十年代の中頃

ら、『どん底』のルカ老人のやうに、新しい宗教を求めてゐたが、偶々ロシアの讀書社會に迎へられてゐるメエテルリンクの作物に接して、圖らずも新しい心の知己を得た。さうして今更のやうに、此の白耳義の神秘的詩人の思想に新しい暗示を得て、彼が沈黙の宗教を創始したのは、つひ數年前のことである。が、今ではロシアの若いインテリゲンチヤの間に、非常な勢力を占めてゐる。

これまで基督教、佛教、ニイチエ、トルストイ……と轉々して、新しい神を求めて居つたロシアの宗教的希求者等（ボゴイスカテリ）が、新たにメエテルリンクの神秘的思想に深い暗示を得て、其の教義を基礎として、自己の生活を改造し、創造せんとする努力に對して私は大なる意義を認めずには居られない。實際、死と云ふ嚴肅な事實に面して、人間の運命の有らゆる恐怖を意識しながら、沈黙を以て終始せんとする異常な精神的緊張は、既に藝術の範圍を超越して、宗教的三昧に入つたものである。

宗教は其の極致に於いて、常に神秘であり、沈黙である。宗派、教會、禮拜、傳道、説教——是等は宗教と何等關する所がない。若し是等をしも宗教と思ふ人があつたら、それは大なる誤謬である。宗教家は等の人爲的約束に縛られて居る間は、何時まで經つても、宗教的瞑想の極致に味到するとは出来ない。宗教的瞑想や沈黙は、決して口や筆や禮拜で傳へ得られるものでない。之を傳ふべく餘りに心的經驗の内容が深いからである。宗教が口や筆で傳へられる程度のものなら、それは未だ一個の藝術たるに過ぎない。藝術的内容が宗教的意識に移つた場合、有らゆる藝術的形式は消滅してしまふ。世に宗教を説く者は、未だ宗教を藝術的に取扱つてゐるものである。一旦大悟徹底した者には

半生の遊子は、長い／＼旅の印象を語る代りに、絶えず友に向つて、『兄弟！少時黙つてゐませう』と言ひ／＼したといふことである。メレジュコーフスキイは、其の時の印象を傳へて斯う言つてゐる。

『長い沈黙が來た、少くとも私に取つては幾分か苦痛であつた。其の時彼（ドブロリユーボフ）は長い睫毛を生やした眼を俯向けてゐた。してゐるうちに其のお粗末な顔が、内部から靜かな光で照されてゐるやうに、常になく美しくなつた。私は自分の前に聖者を見てゐるといふことを少しも疑はなかつた。』

ドブロリユーボフには、沈黙の宗教を傳へた多くの著書があつて、是等の著書は、彼の教徒の間に随分廣く讀まれてゐる。其の中の『我が永久の伴侶』といふ書の中に、沈黙の價值を述べて斯う言つてゐる。『沈黙は愚者に於いても美しいけれど、智者に於いては更に美しい。私は智者の間に一生を送つて、而も人の爲めに沈黙以上の何物をも見出さなかつた』。彼の著書は、概して斯うした古今東西の神秘家や哲學者等の格言より成立つてゐる。彼の世界觀乃至人生觀の基礎は、基督教よりは寧ろ佛教の汎神論的思想に近いものである。

裁判にまで引出されたが、被告は元來沈黙の宗教を奉じてゐる人々であるから、どんなに審問されても答辯の出やう筈がない。裁判官は型に依つて姓名、身分、職業、年齢と順に訊問して行つたが、一人だつて答へる者はなかつた。まるで裁判官の聲などは耳にも入らないといつた風に平然として空嘯いたまふ、死人のやうに黙つてゐた。此の有様に一層立腹の度を増した検事は、國法の基礎たる裁判を認めない者として、被告等を嚴刑に處することを主張した。裁判長が何も辯解は無いかと訊いても、被告等は依然として瞑想三昧に耽つて、一言も答へなかつた。で、止むを得ず裁判長は、流刑の宣告を下したといふ話がある。

是れは前世紀のことである。然るに二十世紀の今日、つひ先頃までは、惡魔主義サタニイズムを標榜してゐたロシアのデカダンやモダーン派が、『青い鳥』の著者の思想に動かされて、新たに沈黙の宗教を創始したといふ事は、確かに現代の奇蹟たるを失はない。私は此の事を時代の休徴として、少からぬ興味を以て眺めてゐる。

前世紀の密教と、新しい沈黙の宗教とが、其の動機に於てどれ程異つてゐるか、私は今茲でそれを比較しやうとするのではない、が、唯是れだけの事は言へる。たとへ出發點はどんなに異つてゐても兩者は結局同じ到着點に達するものであると。勿論メテルリンクも、ドブロリユーボフも、古の修道士等が實行したやうな絶對的の沈黙を要求して居るのではない。けれども兩者の差は、主義の相違でなく、其の主義を實生活の上に實現する程度の如何に在ると思ふ。

千九百五年、ドブロリユーボフが長い間の漂泊の後、舊友メレジュコフスキイを訪ねた時、此の

宗教は藝術のごとく、その起源を絶對者に有するものであつて、既に實現せられたる一目的を豫想する。宗教的情操は、審美的情操の如く、五官及び理性の一方に偏せる支配より吾等を解放する、斯くして限りある人間の意識は絶對と關係を有するに至るであらう。ゴッゲル博士は『原始基督教の批判的研究』と題する論文を讀んだ。基督教の成功は、神と親しく交れる耶蘇の實驗に負ふのである。されば四福音書の批判は内的宗教の進歩を妨ぐるが如く見ゆるも、その實、それを助長して、却つて耶蘇の人格に接近せしめ得るのである。

續いて巴里の教授ド・ファイユは『ノスチシズム失敗の原因』に關する論文を朗讀した。初代ノスチック教徒は宗教よりも寧ろ哲學に興味を有した。後に至つて彼等はその哲學を一つの宗教に變じ、一時は基督教の雄々しき競争者であつた。然るに智的頹廢は、次第に彼等の従前の哲學的熱誠を減ぜしめ、彼等の初期の禁欲主義は悲しむべき道德の弛緩に陥つた。その結果として、ノスチック教は哲學の方面に於ては、基督教と角闘する事を得ず、その道德の標準は基督教會のそれと比較することが出来なくなつてしまつた。かくしてこの運動は次第に衰へ、遂に全く堙滅に歸した。『進歩的宗教の社會的理想』に於て、和蘭のバッケル氏は論文を讀んだ。彼は社會主義の立場よりして、教會を促して獨立を得んとして争へる平民階級を扶けよと叫んだ。よしや社會主義運動の局外者であつても、近代の産業生活の状態より生ずる人類の苦痛に對して、その義務を負ふ責任があると彼は結んだ。第二の講演者はブライトンの會衆派教會の牧師ロンダア、ウイリアム氏であつた。彼は社會的害毒に對して、教會が一致協同してこれに對抗するの必要を高調した。現代の社會組織には戰慄すべき對照がある。



光は巴里より (承前)

内ヶ崎 作三郎

——第六回自由宗教萬國會議の報告——

引續いて『宗教思想と近代的精神』に關する討議が行はれた。先づブルツセルスの牧師ディッツニエルは、宗教は進化論の原則を受け納れねばならず、又、如何なる信條も信ずるに足らない、眞理はたゞ耶蘇の精神の中にのみ求めなければならぬと説いた。又心情の一つの態度としては、敬虔の實際的觀念は、神學研究の科學的方法と結合しなければならぬ。さて過去に於ける基督教倫理は、自己抑制の原理を過重し、その傾向は餘りに個人的であつた。然るに近代の良心はその時代の社會的要素に注目することを主張する。故に近代の教會は是等の必要に對して、何等特殊の信條を採用することなく、人間の精神を尊敬し、民主的、非僧侶的基礎の上に立たなければならぬ。これは彼れの論文の要點であつた。

ゼネヴァの教授チャールレス、ヴェルネルは、『宗教的性質と審美的情操との關係』に就いて述べた。

ミス・マリエル・デエメルは『藝術と祭祀』に關して美はしき文體をもて物されたる論文を讀んだ。世界の種々なる宗教的儀式は異れる國民の心靈の表現である。事物の終局的性質は宗教の儀式の中に反射して居る。希臘人は東洋より多くの神々を採用した。羅馬人は希臘の神々を採用した。羅馬帝の支配の下に世界が統一せらるゝに至つて、一つの宗教が要求せられた。そしてこの要求を充したものは基督教であつた。十五世紀に於て歐羅巴の各國民が各々獨立を獲得したる時に、基督教國の統一は消滅した。國境界線は新たに描かれた。而して宗教の古い信條は最早その用をなさざるものとなつた。さて一國民にとつて、その固有の宗教を有するは、精力の最大なる源泉である。あらゆる種類の信仰と信條とは、その下に存する非常に貴重なるものである。

全會議中に最も成功したる會合の一は、自由基督教婦人の萬國同盟の會合であつた。七月十七日、木曜日の午後の會合は開かれて、英米、佛蘭西、瑞西、獨逸、匈牙利、和蘭、加奈陀、和蘭、濠洲等の教會に活動しつゝある婦人及びその代表者が出席した。集會はハーバート・ミス夫人の座長と、ミス・エツチ・ブルツ・ハーフォード及びミス・エリザベス・マルクアンド等の書記役によつて見事に組織せられた。ハーバート・ミス夫人は最初に佛語にて、次に英語にて、『同盟の起原と發達』とを述べ、英國のユニテリアン婦人が各自所屬の教會の事業を扶け、自由宗教の進歩に貢獻する種々なる方法を説明した。ミス・ハーフォードは、萬國同盟及び英國婦人同盟の書記として、三年前伯林に於ける會合の報告を試みた。その會合に於ては、自由宗教を信ずる婦人の萬國同盟が創立せられ、各國に存する同主義の團體

富豪と極貧者は同じ町に住む。大都會には豪奢なる生活を營んで居るものがあるかと思へば農民勞働者は次第に飢餓に瀕しつゝある。吾々は一日も早くこれを除去しなければならぬ。宗教の目的は各個人をして、彼の中に潜在する能力を自覺せしめて、かゝる現象を撲滅せしむるにある。遂に正義は地上に於ける支配者とならねばならぬ。これ即ち進歩的基督教の主張でなければならぬ。瑞西のフォン・グレエルツ氏は自由基督教はその社會的義務を認識することによつてのみ存在を續くことが出来る。眞正なる社會主義者は眞正なる基督教徒である。あらゆる基督教徒は悉く社會主義者たるの時が來らねばならぬと論じた。巴里大學の教授シャルル・ギイドは『佛蘭西に於ける社會問題に關する新教徒の關係の發達』に就て述べた。千八百八十四年に『社會的基督教評論』が創刊せられた。而して社會生活の諸問題研究の爲めの會合も同時に創始せられた。社會問題に冷淡なるは基督教の精神に反するものである。基督教の福音はその初代に於て、貧しきものゝ善き音づれでありしが如く、常にしかあらねばならぬ。若し吾等にして眞心より日常の糧を今日も與へ給へと祈るならば、吾等は必要に迫まられて居る人々を扶くることを躊躇してはならない。かくて彼は人類をば平等の位置に置かざる黨派の味方となることは出來ないと揚言した。社會黨は常に必ずしも此のことをなさない。基督教徒は社會主義者になつてはならないとは云はないが、基督教徒たるが故に何人も社會主義者たらざるべからざる理由は毫もないと結んだ。これは前講演者に對する反駁であつたかの如くに思はれる。

翰を贈つた。その手紙の終りに次のことが記されてあつた。『吾々匈牙利のユニテリアン教徒は、殆んど三百五十年前に、あらゆる基督教徒の爲めに、良心の自由と平和の權利を得たることを誇る。世の多くの人々は自由基督教徒は十九世紀の所産の如く思へども、匈牙利に於ては、三年前に、吾等の英雄的指導者、聖者、信徒、また約教者たるフランセス・デエヴィッドの誕生四百年祭を記念した。彼は實に千五百五十八年に議會に於て、絶對的宗教の自由を揚言したのである。』

三

大會委員はオペラ座の管理者を促して、巴里に於ける萬國大會の週間中、マイエルベエルの有名な作曲『ユーグノー教徒』の特別演奏をなさしめた。七月十八日、金曜の夕、三百人以上の大會代表者及び出席者は、音樂の愛慕者の興味を惹き、且つ特に新教徒には深き印象を與ふる名曲に耳を傾くるの機會を得た。始めてオペラ座を見舞ひたるものは、劇場の莊嚴美麗に驚いた。大管絃樂、及び合唱のいみじき感動は大なる賞讃を博した。

七月十九日、土曜日の朝、オックスフォードのカーペンター博士座長の席に着いて、會議が行はれた。討議の題目は『道德生活の根柢』であつた。フライブルクの牧師パウル、エーゲルは第一の講演者であつた。道德は苟も智的、審美的、基礎の上に建設さるゝを得ない。人類の道德的未來は各個人が、その心の中に善の觀念として有する絶對の理想に基く。全能の善は特殊的德義の基礎である。されば無神論は道德的生活に對して確實なる支撐を與ふることが出来ない。第二講演者はセント・ルイのドッ

と連絡をとることが決議せられた。その後、會の進歩は遅々として振はないが、同盟に實際加盟したるものは米國、英國殖民地、丁抹、英國、獨乙、和蘭、匈牙利、伊太利、諾威及び瑞西等である。英國の委員は一種の友情組合ギルドオブフレンドシップなるものを設立した。それは、この自由主義運動の會員たる兩親の子女が勉學その他の目的の爲めに英國に來るときには、能ふ限りの世話をする事等がその主旨である。この集合の結果はこの運動を益々國際的に發達せしめて、正統派の女子青年會の範圍内に於いてなすが如き同じ事業を試みたいと云ふのがその要點であつた。次いでイヤサント、ロアズン夫人は巴里の自由主義の婦人を代表して歡迎の辭を述べた。續いて『婦人と自由宗教の進歩』と云ふ概括的題目の下に幾多の論文が朗讀された。合衆國及び加奈太の婦人同盟よりの代員たるミス、エリサベス、マールクアンドは米國に於ける同盟の事業に就て述べた。その同盟は廿年の歴史と一萬八千の會員を有し、毎年内外傳道用の目的の爲めに三萬二千圓の金を集める。そして米國に於けるユニテリアン主義の進歩に多大の貢獻を致して居る。加奈太はモントレエルのウエーラー夫人によつて代表せられ、該同盟が加奈太の廣漠たる領土に散在する自由主義の婦人の孤立したる團體を密接せしむるに貢獻せることを述べた。獨乙の自由宗教婦人同盟はその會長フロイライン・カルラ・バルスを代員とした。獨乙に於ける自由主義婦人は多くの困難の下に在ることが述べられた。

ゼネヴァのローシヤ夫人は同地に於ける政教の分離を述べ教會は信仰の異同を問はずして、あらゆる新教徒によりて改造せられたことを報告した。續いて和蘭、伊太利等の代表者の談話があつた。匈牙利のユニテリアン婦人は代員を送らざりしも、コロッスワールのフェレンツ監督夫人の手になれる書

ならぬ。かゝる瞬間は道徳的に價値を與ふる爲めに増加せられなければならない。

ボストンのドール博士は道徳に終局の根柢なしと云ふ議論に反對した。正邪に關する吾人の生得の感覺は、法律若くは習慣よりも更に強いものである。たゞ理性によつて明白にせられることが必要である。然らざれば誤謬なきを保し難い。品性は道徳的行爲及び生活に於ける最も重要なものゝ見えざる源泉である。道徳的個人は彼自らの善意より行動する。斯く單一なる行動は個人及び人類の未來に影響を及ぼす。

教授ウイルフレッド・モノッドは、正統派の基督教と自由主義の信徒との關係に就て述べた。傳説的信仰に密着する人々の中には、信仰の原則を研究する思想家は、基督教を實行するよりも寧ろこれを疑はんと欲する傾向をもつて居ると揚言する。往々にして神學は宗教と混同され。處女降誕の思想は基督の神性と混同される。基督の血は贖罪の教義と混同される。教授は又、正統派の人々の間に於ける聖書バイブルに關する滑稽にして、矛盾ある思想にも言及した。また、自由主義の宗教家の態度は、單に消極的の位置にあるをもつて、信仰の積極的教義を明かにする必要があると結論した。續いてバウル・イヤサント・ロアゾン氏は、恐らく大會中の最大雄辯を揮つた。彼は『自由信仰者と無信仰者との關係』に就て述べた。概して新教徒は十分に理解せられざるが故に、佛蘭西に於ては尊敬されない。新教徒は常に理性及び良心の絶對自由の味方として一勢力を揮つた。然るに自由思想家は往々にして、自由思想と否定とを混同した。人類は常に向上心を有するが故に、宗教問題に就ても何等かの積極的の肯

ドソン博士であつた。彼は人生をば發達の過程として認識するの必要を切言した。徳性は如何なる根柢にも依らずして、吾等が人間本來の性質により生ずるものであると云つて、彼は善の觀念の修正を提案した。生理的及び心意的訓練に對しては教育家及び宗教家は更に一層の注意を拂はなければならぬ。徳性の原則は統制せられたる生活の原則に外ならない。聖潔に關する保羅の概念は不完全たるを免れない。何となればそれは或點に於ては人格の一部分を破壊せんことを目的として居るからである。保羅が『この死の身體』と叫びたる情慾は決して破壊すべきものにあらずして單に調和せられ、正當に指導せらるべきものである。プラトンの理想は保羅の理想よりは高かつた。さもあらばあれ、基督教には大なる特色がある。それは即ち愛の教義を高調したるが爲めである。又生命は一度び組織せられたるのみでは不満足である、人智の進むに従つて間斷なき修正が繰返されなければならないと論じた。

博士テウドール・ジョンは近世哲學の立場よりして、この問題を取り扱はんと欲した。これをなす爲めには、論者は人類及び個人の性質から以つて始めなければならない。唯物的思想家の誤謬と、心意の養はれたる源泉は、心意の現在の内容の中に存することを忘れたところにある。若し個人の心意が一切萬象より分離して存するならば、その結果はニイチエの利己主義の如きものとなる。又同時に個性を閑却するは同様なる損失を招く。道德律の如き規範は人と神との中間に存するものである。これ等の法則は凡てに施して誤まらず、又凡ての爲めに善なるものである。人生に働らき及ぼす客觀的理想は森羅萬象上より更に大なる實在物を備へて居る。吾等の立場の義務は意識生活に於ける瞬間とならねば

督教の卓越を證明する爲めに、印度に於て進化したる大宗教の原則が輕んぜらるゝ必要がない。人類の異なる民族の進歩に對して、彼等がどれだけ奉仕したかを發見するのは學者の職分である、佛教の教訓には高尚なる道德的價值がある。之等のものは外國的のものなるが故に除外せらるべきものでない。世界的宗教に對する貢獻として重んじなければならぬ。各宗教には他の宗教と共有すべからざる多くのものがある。各宗教は各自固有の領域と、その指導者とを有する。されど人類を引き上ぐる博愛慈善の共同目的に於ては互に參與することが出来る。又相互を理解し、翫味する爲めに、相互が努力する必要がある。またあらゆる國民を通して共通の理想と愛の存することは喜ぶべきことである人類の大伽藍に於ては、各國民に對する聖所の備へられたを疑ふことは出来ない。

ゼネヴァのモンテツ博士は、『基督教と回教との關係』に就いて講演した。近年トリポリ及びバルカンの戰爭の爲めに、歐洲人の興味は著しく回教に向けらるゝに至つた。回教の智識を缺くことは歐洲人をして東洋の問題を理解せしむるの最大障害である。吾人は世界に斯くも廣く遠く普及したる一神教を尊敬せざるを得ない。回教には道德なく、神秘なく、世界的宗教となる力なしと云ふ三重の非難は誤れるものである。回教は野蠻民族の道德を改善した。又或る點に於ては、基督教にも劣らざる長所を有して居る。波斯及び印度に於て、回教の神秘主義は人民の生活と思想とに深き影響を及ぼした。又その各國に於て傳道的宗教として成功しつゝあるは、そが世界的宗教たる資格あることを説明するものである。又その聖徒の祭りに反對するところや、一神觀念の純潔なところは、正統派基督教の或者よりは、却つて自由基督教に接近して居る。

定を必要とする。家族及び社會生活の義務は常に重要な意義を有する。たゞ消極的の信仰を有する自由思想家は臨終の際には、恐らく何者をも言ふことが出来ないであらう。宗教は殉教の喜びを示した。近代の世界もこの事を看過してはならない。同時に自由宗教家は其所信を他に傳ふるの勇氣がなければならぬ。自由新教は若し人類に對してその宗教的情操を保たんとすれば、どうしても傳道的宗教とならねばならぬ。自由思想家に向つては更に高く」と云ひたい、自由新教徒に對しては更に前へ」と云ひたい。

四

その日の午後、繼續せられたる會議の研究題目は『東西兩洋の接觸』である。

オックスフォードのカーペンター博士は、自由基督教徒と印度教及び佛教等の信者との關係に論及した。近代の基督教徒は希臘哲學と接觸したる初代教會の基督教に等しき位置にある。ジャスチンは耶蘇をばバレスタインのソクラテスとして記したのである。又基督教及び異教の思想の間に、多くの類似が見えられた。今日吾人は印度の諸信仰の中に、精妙崇高なる原則を見出す。一宗教はそが創り得る最上のものによつて批判せらるべきものであつて、最悪なるものによつてせらるべきでない。印度の宗教を印度の農民によつて判斷するの不公平は、カラブリア（中世紀の南方伊太利人）の農夫によつて基督教を判斷するの不公平と變るところがない。バスカル、チャンニング、ケエバア（十五世紀に於けるマホメット教の改革者）の如き教師は、彼等の各々の信仰の眞實なる代表者である。基

五

北米合衆國ターフツ學院の教授ルイ・マツコウレスター氏は『過去及び現在に於ける宗教的自由主義の事業及び位置』と題する講演を試みた。一切の宗教的努力の目的は、人類をして宇宙の靈力を有せしむることである。この目的に對して一時代の信仰は時の進歩と共に衰微した。宗教的信念は桎梏の如き信仰より自由になつて、永遠に自らを新にしなければならない。續いて匈牙利のユニテリアン教會のローツキ博士は論じた。耶蘇は教義を有して居なかつた。又何等かくの如きものを希望せずして、只管、神に居る生命と稱せられるべき靈的狀態を承認したのである。この神聖なる福音の矛盾は初代基督教會の教義を生んだ。然るにその教義は人類を奴隸の如くに視た。それ故に耶蘇の原則にまて、人類を携へ歸ることが即ち自由基督教徒の使命である。伊太利議會の議員たるロモロー・ムリイは伊太利語の演説を試みた。宗教的統一は羅馬教會的の意義に於ては斷じて不可能である。何となれば自由は眞の統一に必要があるからである。近代生活は何者にも先んじて自由を要求する。社會的政治的、及び宗教的の何れの方面も皆然り。こは良心の要求である。人は宗教なくしては生くる能はざると等しく、自由なくしては生くるを得ない。教會は奉仕の統一を求めずして、神聖なる事どもの單一なる解決を目的としたるが故に失敗した。されど今や伊太利に於ては、舊教に反して自由に對する愛慕の精神は奮勃として湧出しつゝある。何時かは一切の束縛から離脱して、かつて世界に法律を提供したると等しく、自由宗教の中心となり、以つて世界に雄飛するの時が羅馬に來るであらう。

印度ラホールリーのヤルマルーデン君は、回教の自由派代表者として、この討論に加つた。回教の最悪なる敵は、その原則を知らざるが爲めの偏見である。回教信仰の中心はコーランの、凡ての國、凡ての民の神に讚美と光榮あれよと云ふ言語の中に表はれて居る。回教の根本原則は、神に従ひ人を憐れめと云ふことである。眞の宗教に必要なものは、儀式や教儀にあらずして聖なる生命である。回教は世界的宗教たるの資格がある。

エ・エル・ナッフ氏は、自由基督教の側に於て、傳道事業の猛烈なる發達を見んことを希望した。多くの宗教教師は聰明を缺いて居る、そしてその傳道の方略を誤つて居る。異なる民族の間に働くことの困難を味ひ得る様に教育せられたる人にとつては、十分なる活動の舞臺がある。かくて斯かる傳道には神學のみならず、人種學の智識も亦必要である。近代思想が次第に勢力を逞うしつつある日本及び他の國に於けるこの種の事業の爲めに、大に技量ある人を撰擇する必要がある。

ラビ・ゼルマン・レビュは、『神聖なる情緒』に就て述べた。この情緒は、吾々を至高のものに引きあげ、人性の中にある一切の純潔にして美なるものを^{インスピレイション}鼓吹するものである。それは古人のロゴス觀念の中に表はされて居る。それは今日存するところの眞理に對する探求によつて、又は一切の藝術及び宗教的靈動によつて示される。猶太人は救世主に對する希望をもつて、あらゆる苦痛の中にあつて彼等の神聖なる情緒を守つた。此の情緒は決して破らるべきものでない。何となれば、それは一切宗教の中核であり成長力であるからだ。情緒は人生に於ける最も肝要なるものである。故に、この問題に對するときは、批評も幾分の敬意を表さなければならぬ。

されど彼等は全然その手段を缺いて居る。彼はその助力を大會に請求したのである。

六

七月の廿日、日曜の朝、オラトアールの教會に於て禮拜式が行はれた。禮拜はロベルテイ、ウエノ、モノーの三牧師によつて司られた。説教の聖句はミカ書六章八節であつた。『人よ、彼さきに善きことの何なるを爾に告げたり。エボバの爾に求め給ふことは、たゞ正しきを行ひ、憐憫を愛し、謙遜して爾の神と共に歩むことにあらずや』この聖句は佛語及び英語によつて説明せられた。カストールの牧師アンドレエ・ベルトラム氏は『正義をなせ』と云ふ句に就て、佛語の説教を試みた。ドルトムンドの牧師トラウプは憐憫を愛せよに就て獨乙語の説教を試みた。ポストンのビスビー博士は『爾の神と謙遜して歩め』と云ふ句をとつて英語の説教をなした。

日曜の午後、一群の人々は新教歴史協會の圖書室を見舞うて、珍書、古文書を閲覽した。一行はやがて教授ボーチー・モリーに伴はれて殉教者の巴里をを巡禮した。ユークノー教徒が宗教的自由の爲めに血を流したる場所に一行は肅然として敬意を表した。

これと時を同うして、ベエル・ラ・シェーズの墓地に於て、ベエルイヤサントの石碑の除幕式が行はれた。フェルデナン・ブエッソン・ド・ブリンニー及びムッビーの諸氏はこの著明なる指導者に敬愛と敬意を表した。

日曜の夕刻、代員はファイエ・ド・ラーム教會に於て『國際的平和の可能なりや否や』を討論した。

次はミュンヘンの近代主義者なる教授シュニツレルの番となつた。今日の壓制的、帝國主義的舊教の中には、基督教に反する要素があると彼は斷言した。この問題に關して重要な寄與は教父テレルの友人にして、傳記者たるミス・モード・ペートルによつてなされた。若し羅馬教會にして永續せんと欲するならば、近代思想を全然除外してはならない。蓋し自由に對する希望は往々にして誇張されて居る多くの人は服従することを欲する。されども、世には要求すべからざる服従がある。然るに羅馬教會は其れをその信徒に要求する。軍隊的服従と、靈的服従との間には明白なる相違がある。後者は盲目的に黙々の間に求められ、若しくは與へらるゝことは出来ない。されども時としては靈的服従は軍隊的服従よりも嚴肅である。何となれば全生命を抱擁して生命の源泉にまで進み行くからである。巴里大學の教授エールハルトは『宗教的自由と國家』に關する論文を讀んだ。寛容の思想は近代の世界に於て全然勝利を博した。それは實際に於て未だ、實現せられざるところにも、その勝利がやがて近きにありと云ふ徴候がある。教會と國家の眞結合を要求する宗教家もあれど、それは政治的自由に反する。宗教と政治とは全然分離せざるを得ない。それは必ずしも純乎たる内的宗教に隠れ家を求むる傾向に讚するわけではないが、宗教が國家の束縛より自由ならざるを得ざる如く、組織的宗教の束縛より國家は自由でなければならぬ。されども、斯く云へばとて、人生の活動舞臺より宗教的人物の隱退を必要としない。人はたゞ宗教の靈動によつてのみ市民的本務及び社會的義務を果すことを得るのである。宗教のみが吾々の文明に靈を與へることが出来る。伊太利の還俗僧ステファノ氏は自由主義の宗教の傳道が伊太利に於て急務なることを語つた。伊太利には近代的理想を寄せつゝある數百の僧侶がある。

時である。歐洲の或る國々は、彼等の國民の大多數の宗教を無視して、我儘なる同盟を結んで居る。愛國心は甚だ六ヶ敷き原則であつて、最後にその國を過ぐるものが、往々にして、最も聲高く叫ぶものである。世界の希望はかゝつてもつて海牙の平和會議にある。續いてカーペンター博士は、實際的方面に暗示を提供した。即ち英獨教會同盟である。五年前アレン・ペーカア氏が組織者となつて、獨逸の牧師の一群が英國を訪れた。それに對する答禮として、英國の牧師の一群が獨逸を訪問した。その時、カイゼルは平和賛成の演説をなした。この同盟の英國部は部長としてカンタベリーの大監督を戴いて居る。そして幾千の會員は熱心に平和の爲めに働いて居る。かゝることは宜しく國際的であるべきである。斯くの如き世界的和親の開拓は、未來に於て戰爭を不可能となすであらう。次にマールブルグ大學のラーデ博士は如何なる教會に於てもその事業の最も必要なる部分は平和的事業であることを述べた。彼れは佛獨兩者の間の關係に就て、誤解を取り除かん爲めに多くの言を費した。最後にワグネル牧師は、ルーズベルトに關する逸話をもつて、その會を開いた。ルーズベルトが種々なる人々に會ふや、その勞働者たると、法律家たると、兵士たると、或は又牛飼ひたるとを問はず、彼は常に何人をも見事な人だと感心したと云ふ話である。自分も亦、獨乙人、アメリカ人、英吉利人、その他多くの外國人と此の會に見えたる時、如何に立派なる人々の、世界各國より集り來れるものかなと感嘆せずには居られなかつた。

翌月曜の朝、代員はシャアトレエの古跡を見物した。夕刻、最後の會議はホテル・ルツテシで開かれた。食事の後で興味ある多くの食卓演説が行はれた。夜遅く會が散じた。かくして宗教進歩の第六回

牧師ワグネル司會し、多くの有名なる議員は講壇援助者となつた。ワグネル牧師は戦争及び戦備は廿世紀に於ては時代錯誤である。吾等はその洞窟を電氣燈をもつて裝飾する穴居人の如きものである。基督教徒より要求せらるゝ善意は、その中に一切の人民を網羅すべきものである。然らば國際間の紛争は跡を絶つてあらう。續いて獨乙帝國議會の議員にして牧師たるハイチ氏は、人類の未來の幸福と繁榮とは各國民の友誼的關係に基く。自分と自分の友人のワグネル牧師は度々討論をなしたが、未だかつて撲り合ひをしたことがない。國際的關係に於ても、この理想は實現せられざるを得ない。勿論各國民には固有の利害があり、又たその固有の運命を造り出さなければならぬ。されども、個人の場合に於けるが如く、國民にとりても、力即ち權利と云ふことは出来ない。國民的愛他主義は個人的愛他主義の如く、必要にして賞讃さるべきものである。獨逸人は國民としては決して戦争を好まない殊に佛蘭西に對して之れを欲しない。されども兩國に僞愛國者の多いことは嘆ずべきことである。若し兩國が相互に理解することが出来れば、平和及び進歩の爲めに、大理想が成就するであらう。

スタンフォード大學の名譽總長ジョルダン博士は第二の講演者であつた。現代は科學、文明、商賣の時代である。されども歐洲に於ける三大國民は武裝競争を試みて居る。この方法は非科學的非文明的、非商賣的と云はねばならぬ。アメリカの大都會に住む異なる人種の間には存在するが如き、一種の親密なる協商が、之等の國の間にも成立せんことを希望する。次に牧師ウィルフレッド・モノツドはバルカン戦争に言及して、開戦の布告は世界の婦人に向つて喪服の着用の合圖であると云つたラスキンの言の眞實なるべきを承認した。今は天下の平民が、大組織をなして、武斷的政府に反抗すべき

選舉權擴張論

吉野 作造

つらく我が國に於ける政黨が從來、其の黨勢擴張の方法を見るに、多くは地方の利益問題を提げ來つて、之を餌として、地方の人民を釣るといふが如き有様であつた。各政黨共に、殆んど一として其の主義綱領を掲げ、輿論に訴へて、之を成就するが如きものはなかつたのである。たま／＼大正の政變は、所謂『二月革命』を起こして、桂内閣は瓦解し、遂に立憲同志會の成立を告ぐるに至るや、同志會は極力其の地盤擴張の爲めに、地方遊説を試みた。兎にも角にも、到る處に演説會を公開し、其の主張を陳辯して、輿論の批判を求めたのである。事態斯くの如くなるに及んでは、政友會も亦默視する能はずして、遊説員の部署を定め、新黨對抗の策に出たのである。事を隱微の間に決せず、正々の陣を張つて、旗鼓堂々の間に見ゆ、政治の公開——これたしかに憲政の一進歩として、慶賀するに躊躇しないのである。

併しながら、これは表面だけの事實で、其の内幕を見ると、實は正反對である。所謂御馳走政畧なるものが巧みに行はれて、暮夜饗宴遊樂、事は多く脂粉の香紛々たるの間に決せられてしまふ。これでは何の役にも立たない。勿論今の政治界に於いても、全く言論の勢力がないといふのではない。總選舉の際などに於いては、隨分言論の實力も認められて居る。けれども、これとても亦、多くは其の

世界大會は終りを告げたのである。

七

この會は何等一定せる思想や信仰を表白せんが爲めに設けられたものではない。けれども歐米の眞面目なる思想家の中に、清新なる宗教の實現に對する嚴肅なる努力の存することを看過してはならない。日本の宗教會議にも早晩かゝる自由なる、打ちとけたる宗教的運動が起らねばならない。

この會の連續的事業とも目すべき一神教徒の世界的巡廻運動は、恐らくは明後年上春、三四月の頃東京に於いて開かれるであらう。歐米の自由基督教各派、自由猶太教の精銳に加ふるに、土耳其の回教徒印度教徒、佛教徒等も來り會するであらう。日本にては歸一協會これと交渉し、日本に於ける各宗教家の進歩主義者を糾合して、茲に一大世界的宗教會議が實現せらるゝであらう。世界思想界の精華は、わが日の出の國の誇りとする櫻花と相映じて、一層の壯觀を呈するであらう。世界の思想は動いて止まない。吾等の宗教的信念及び事業は、時代と共に進むことを忘れてはならない。

このたびの光は巴里より流れ來つた。此の次の光は東京より出でんことを、吾等は切望するものである。——完——

日本に於いては、第一流の人物は、議會に集まらずして、寧ろ直接に政府を組織し得る部分に集まつて居る。無論、日本は今過渡時代にあるから、一概にいふことは出来ぬが、政友會の大を以てしても、内閣大臣の全部を自黨内部より出すことが出来なかつた。要するに日本に於ては、政治の中心點は議會を離れて居る。

そこで、議會は常に主動者の地位にあらずして、受動の地位に置かれてある。併し受動の地位にあるとは言へ、憲政の運用上、必要の機關であるからして、議會の同意を求めねばならぬ。是に於いてか、所謂議會操縱なるものが行はれるので、幾多の罪惡の根源は、則ちこゝに伏在するのである。勿論政界指導の任に當る人は、其の懷抱する政見に従つて、萬般の政務を處理するけれども、一方議會操縱の必要の爲めに、種々の公正を欠く手段の行はるゝは、避くべからざる所である。然も其の手段たるや、極めて巧みに運用するにあらずば、容易に政權を掌握すること能はざるが故に、苟くも當今の日本に於いて、政界の要路を占め、其の實權を握らんとするには、單に政治上の手腕識見あることを要するのみならず、また別に政界の暗流に通じて、樽俎接衝の妙味を解することが必要條件である。是に於いてか、政治は遂に一種の専門の職業とならざるを得ない。一度専門の職業となるや、其の事を共にするものが、互に連盟して、堅く城壁を築き、飽くまでも其の地位を頑守せんと努力するが故に、足一度其圏外に出てたるものは、たとひ前述の諸要件を備へたる俊英の士と雖も、復た政權に

時にのみ限られて、平時には全く用ひられない。否、總選舉の際といへども、最後の決着は言論の力にあらずして、畢竟金力である。それも少し許りの額ではなくて、少なくとも四五千圓、多くは五萬十萬といふ多額に達するといふに至つては、如何なる偉人といへども、金力の後援なくしては、當選を期し難いこととなる。言論、學問、識見、手腕は何の力にもならず、たゞ金力の如何によつて定まるといふが如きは、決して健全なる現象といふことが出來ぬ。而して其の結果はと言へば、言ふまでもなく、議會に人物が集まらぬといふことである。議會に人物が集まらぬといふは、すなはち議會が政府を監督するの力を有せぬといふことである。議會が政府を監督するの實力がないといふのは、畢竟するに、人民の意思によつて、政治が行へぬといふことである。

第一、多少の識見を有する者は、馬鹿々々しくて、政黨者流の仲間入をしやうとは思はないのである。言論や手腕あることが、政治家として何の重きをもなさぬからである。そこで政黨は人物欠乏といふことになる。人物が欠乏して居るから、いざ政黨内閣が出來たといふときにも、政黨内の人物を以ては、内閣を組織することが出來ぬ破目になる。山本氏、奥田氏等が、政友會に入黨といふことになつたのも、法律上の議論は別として、畢竟政黨——議會——に人物なきことを證明するものである。英國の立憲政治が、早く大に發達したのは、畢竟政黨——議會——に人物が集まつたからだ。佛國も亦然りである。米國の立憲政治が時々まごつくのも矢張議會に人物のない結果である。故に立憲政治の發達如何は、繫つて政黨及び議會に人物が集まるや否やにある。而して遺憾ながら、我が國選舉界の現狀は、第一流の人物を議會に送り得ぬ状態にあるのである。

三

普通選舉にすれば、如何なる利益があるかと尋ねる人があらう。予は直ちにこれに向つて答へたい。普通選舉によれば、候補者は最早金力を以て争ふことが出来なくなる。否でも應でも金力以外の要素すなはち言論、學問、識見を以て争はざるを得なくなる。これ憲政の一大進歩にあらざるかと。これは既に大選舉區制に於いて明かに認むることが出来る。況んや普通選舉になつては、選舉人が非常の多數になるから、中々金力が屆き兼ねる。従つて買収は止むのである。これは西洋先進國の實例によつて、明かに知ることが出来る。

既に金力の及ばざる所、これ則ち言論、識見、雄辯、操守、學識、人格の天地の開くる所である。其の結果は、左の二大利益がある。

(一) 當選を欲する者並に、後援の政黨が、大に人民の教育をすることとなる。

(二) 議會に人物が集まる。

人民教育の一事は、ひとり總選舉の時のみならず、平常より力を入れてかゝるのである。西洋の政黨などは、何處へ行つても大なる出版部を有して居て、種々の時事問題に就いて、平明に解説し、又意見を陳べたる小冊子を、幾十萬となく印刷して、極めて廉價を以て販賣し、以て其の普及を圖るに努むること、實に驚くばかりである。我々研究者なども、其の出版部へ行きさへすれば、獨り其の政黨の出版物のみならず、學者の著書、反對黨の著書なども集めて居るので、極めて便利を得るのであ

近づくを得ないのである。例へば清浦子、高島子、伊東子等の如き、海千山千といふ人々であるが、一度桂系を脱出すれば、再び廟堂に立つの機會を捉へることが出來ぬのである。山本伯の崛起の如き、實は偶然の機會を捕へたのである。これは決して健全なる現象ではない。かゝる現狀を打破して、見識あり、手腕ある人々をして、自由に内閣を組織せしめ得るやうにせねば、立憲政治の發達は、到底これを期待することが出來ぬのである。

彼の米國を見よ。現大統領ウエルソン氏の如きは、もとこれ一介の學究ではないか。然も其政治家としての經驗の如きも、短期間の知事たりしことあるに過ぎない。然るにも拘らずして、一度其の手腕あることを認めらるゝや、民主黨より大統領候補者に推され、見事勝利の月桂冠を贏ち得た。而して彼は就任後間もなく、自分の舊同僚たるウイヌコンシン大學教授レインシュ氏を抜いて、これに支那公使たるの榮譽と責任とを與へた。而してまた彼の萬國基督教青年會同盟總幹事モット博士に對しては、英國の大使たらんことを懇請したのである。以て如何に一切の情實を無視して、切に能才を擢用しつゝ、あるかを知ることが出来る。吾人は眞に健羨の情に堪へざるものである。

言論をして物言はしめよ、而して學問識見をして金力以上の權威たらしめよ。斯くの如くするにあらずんば、憲政の發達は空中架樓に終るであらう。而してこれを成就する所のもの、勿論、宗教家、教育家等の協力を要するのであるが、こゝに制度改正の一面よりいへば、予は遂に普通選舉論——選舉權擴張論——を提唱せざるを得ない。これたしかに一要素、否、一大要素であると信ずる。

い。要は選舉權の擴張といふことにあるので、例へば、從來直接國稅十圓以上の納稅者に權利を與へて居たものを、五圓以上に改めるとか、又はそれも直接稅のみならず、間接稅—消費稅にまでも及ぼすとかいふが如きも、勿論よろしいのである。而して今其の普通選舉に對する反對說の重なるものを列舉して見れば——

第一、普通選舉を行ふには、其の選舉權を行使するに適するまで、人民の程度を高めざるべからずとの説。

此の説はノンセンスである。例へば現在の制度に於いても、直接國稅十圓以上を納付する者は、果してよく其の選舉權の行使に堪へ得るものであるか。否、事實は全く之に反して居る。頻々として買収の行はるゝは何の狀ぞ。予を以て之を見れば、現在有權者の三分の二以上——少なくとも過半數はたしかに正當に權利を行使し得ぬ者である。則ち此の議論を貫かんが爲めには、遂に現在の制度を改正せざるべからざるに至るであらう。又十圓の制限も、之を直稅にのみ限るは不公平である。よろしく之を間接稅にも及ぼすべきで、之を直接に限るは、正に富豪に偏する者である。更に進んで、之を歐洲先進國の實例に徴するも、人民の程度高きに及んで、普通選舉制を採れる國は一もないのである。歐洲に於いて、普通選舉制度を採用した時代の人民は、今日の日本人よりも遙かに低い。否、今日と雖も、平均の教育程度は、日本の方が寧ろ高からう。たゞ日本に於いては、從來の教育方針なるものが、教育政治峻別の制度に出てたので、日本人は割合に政治の事には盲目であるが、一般文化の平均程度は、日本の方が高からうと思ふ。國民に政治的教育を施さずして、政治的智識なきが故に、之に

る。また夫れ々の新聞紙は、絶えず人民を教育して、自他の立場を、人民に了解せしめんと努めて居る。且つ毎年其の年頭に於て、政治上の出来事の年報を發行して居るが、これは學者に取つても參考となるもの多く、極めて有益なものである。若し夫れ總選舉の際の如きは、實に死物狂になつて、輿論の後援を得ることに努むるので、人民の教育されることは、實に非常なものである。

斯くなつては、最早金力などが、物の役に立つものでない。従つて苟くも自信ある者は進んで、政治の舞臺に出てんことを希ふに至るのである。そこで一種の激烈なる生存競争が行はれることになつて結局全體に於いては、議論の筋の立つた、識見手腕ある人が選出されるやうになるのである。よく世人は西洋の議會は、政府を壓迫するとか、下院が上院を壓迫するとかいふのであるが、これは決して偶然でないので、畢竟するに人物の問題である。下院に人物が集まれば、上院を壓迫し、議會に人物集まれば、政府を壓迫する、これ寧ろ必然の理である。だから上院に人物が集まれば、逆また下院を壓迫し、政府に人物が集まれば、議會を壓迫することもないとは言へぬのである。世人或は、英國に於いては下院が重きをなすところから、下院は皆さういふものと心得て居るが、佛國は寧ろ反對である。これ從來の傳説を破るものである。人物を議會に送ることが、如何に憲政の發達に關係するかは、今更喋々するを要しないのである。

四

普通選舉に對する反對説は、日本には中々に多い。予も亦固より、文字通に之を主張するのではな

激なるべき理由ある獨逸に於いても、所謂修正派の勢力は日に増しつゝあるのである。今年五月を以て没落したる濠洲聯邦の首相フイッシャーが、七八年前労働黨の首領として、内閣を組織したる時に世界に於いてはフイッシャーが、如何に急激突飛の變革をなすべきかと、注目を怠らなかつたが、事實は甚だ案外で、極めて着實穩健なる社會政策的政治を行つたに過ぎなかつた。勿論其の間に多少の失政はあつて、其の結果今年の五月自由黨に代られたのであるが、世界の操瓢者は、筆を揃へて、フイッシャーの内閣を以て、最近に於ける理想的の善政をなせりと賞讃したのである。だから普通選舉の結果、一般民衆の勢力が如何に政界の實權を占めたればとて、保守派の人々が不當に之を攻撃せざる限り、國運の進捗に差支なきのみならず、その以外の方面に於いて、寧ろ大なる利益なるを信ずる者である。

予は以上の理由を以て、憲政の進歩の爲めに、選舉權の擴張を希望するのである。

思案とは自己を征服するのだ……アミエル

選舉權を與へずといふが如きは、恰も動物を柵中に繋ぎながら、柵外の食物を取つて食へといふが如きである。歐洲に於いて普通選舉として、差支なしとせば、日本に於いても亦差支なしと認めて、何の不可なることがあらう。

第二、普通選舉にすれば、人民が社會主義などの煽動に乗つて、過激なる變革を喜ぶに至るとの説これは重に保守主義の人の恐るゝ所であるが、此の憂は一應尤もである。けれども人民に政治教育を施さねばこそ、かゝる憂もあれ、若し政治教育を充分に施すならば、かゝる憂は斷じてあるまいと信ずるのである。今日の日本に直ちに普通選舉を行へば、一時は弊害も起るであらう。併し各人各黨を競ふの結果、政治的教育が充分に行はるゝやうになれば、附和雷同の弊は次第に減ずることと思はれる。歐洲の歴史よく之を證明して居る。普通選舉を直ちに日本に移すことは出來ぬにしても、之を行ひさへすれば、何時でも輕卒に人民が附和雷同するものと見るは、吾人同胞を侮辱するものである。

五

今假りに百歩を讓つて、社會主義の如き急激者流が要路に立つたとせば、如何であるか。無論予は社會主義に對しては、正反對の意見を有するもので、従つて社會主義並に之に類する者が、政界に勢力を占むるが如きは、喜ばざる所であるが、議論上かく假定して見れば如何であらうか。予は彼等が實權を握れば握るほど、思想行動共に穩健になることを信ずるものである。否、これは事實の明示するところである。佛國の社會黨、瑞西の社會黨の極めて穩健なるは申すまでもなく、特に社會黨の過

現實の血の滲んで居る混亂の生活のたゞ中の渦まきの中にも、渦まきを辿り辿つて、精細に觀察し同情し、理解して見ると、そこにも言ふに言はれない程の微妙な人間の心理の經過の道行の中に、一種の靡ろなる神秘の光に觸れることがある。現在一枚のうちに漂うて居る「永劫」の味ひと云つたやうなものに觸れる。此の神秘の光を唯一のたゞよりとして、辿り／＼行く所に、何物にかぶつからずには居られない。大膽に其の第一步を運ぶと云ふ所に、靡ろながらも生命それ自らの光に觸接せずしては已まない。

勿論、あるがまゝの生活では、所詮無意味である。あるがまゝを否定し盡くさなくてはならぬ。併し否定し盡くすと云ふことが單なる超越ではなくして、現實生活に即して、現實生活を超越する一種の肯定の力である。肯定の力なしに、否定は出来ない。否定は肯定を生むのであるが、それと同時に、肯定が否定を生むのである。あるがまゝの現實の「深い姿」は、やがて否定より肯定に渡る一路に現はるゝ姿ではないか。現實の其の儘の姿ではないが、現實の「深い姿」である。眞相である。如の境である。其の深い姿は、現實を通り越した彼岸に、外的に標的としてあるのではなからうと思ふ。現實の血の出る戦ひの中に、永へに活躍し、生動して居るのでなくてはならぬ。而かも其の生命の深い深い流れが、吾等の生活中に流轉し來りて、おぼろながらも吾等の生活其ものゝ根調となつて響いて來るときに、吾等はそこに面々相對すると云ふやうな絶對境を味ふのである。

*

詩人ホイットマンが、其の詩集「草の葉」の中に、「我は岩石の中より、樹木の中より、深林の中よ



市より森へ

(斷片語)

金子 白夢

「我等今鏡を以て見る如く、見るところ朧ろなり。されど彼の時には、面を合せて相見ん。」と云ふ聖者パウロの言葉が、今自分には新しい意味を以て響いて居る。「朧ろ」なるものの中に、貴いものが耀いて居るやうに思ふ。赤裸々の真理そのものゝ中よりも、朧ろにかすむ薄明りと云つたやうなものの中に、深い生命の流れが仄かに匂うて居るやうに思ふ。所詮人は、赤裸々の真理そのものを、如實に掴むと云ふことは不可能ではなからうか。否、赤裸々の真理其のものと云つたやうな、空疎な概念的抽象的の死體の中には、冷たい真理の死灰は横はつて居るかも知れないが、真理其のものと生命はないではないが。真理の爲めの真理、概念の爲めの概念と云ふやうな、熱のない靈のないものは、我等の生活とは没交渉である。論理的概念が、抽象的論理としてある間は、生命に觸れたものでもなければ、事象の真相を透視したものでもない。況んや其の體得心證と云ふやうな境界は、更に遙に遠いのである。吾等の要する所のものは、血の躍つて居る論理である。生命のあるスペキュレーションである。單なる論理や、單なるスペキュレーションは、謂ふ所の戲論であつて、吾等とは無關係である

胸の底知れざる悲みの寂びしみのもだえを男性の胸に投げ出さねば、自らを救ふことが出来ない。女性自らを救ふ力は、やがて男性を救ふ力である。自力に即したる他力、ここに神秘の閃めきがある。一切の中に生くる神秘の生命は、女性の心を通して髪に現はれ、顔に現はれ、姿に現はれ、手にこぼれ、足に滴りて、露團々たる其の一と雫／＼が、男性の精神をして光明の世界に導く力である。

*

神秘の力を體得したる女性のみが、男性を救ふ力を有するとすれば其の神秘の力を體得する精神的態度がなくてはならぬ。モンナヴナナの所謂「美はしき夢」と云ふものは、眞實の意味に於いての「美はしき夢」であらうか。「運命」から出て、「愛と意志の勝利」に行くと云はれて居る此の劇の終局の一句が、此の人生の深い辿りを解決して居るとは、どうしても思はれぬ。自分の考へては、ヴナナは第一の運命より出て、更に第二の運命に囚へられたのではなからうか。「悪い夢」と云ふものと、「美はしき夢」と云ふものは、人生の表裏両面であると思ふ。悪夢の現實を離れて、美夢の理想を追ふと云ふ態度は、これまた一種のローマンチックの辿りではないか。現實理想の二元論ではないか。現實と理想とを不離不即の關係と見て、現實に即したる具體的の姿の中に、美はしき夢を見るにあらざれば、所詮は空疎な生活ではなからうか。「美はしき夢」は、單に「美はしき夢」としてのみあるべきであらうか。美はしいと云ふ暗い夢ではなからうか。

*

只の自覺は人を救ふのではなからうと思ふ。自覺は要するに道行きであると思ふ。自覺は「心證」

り歌を呼ぶ」と歌うて居るが吾等は一切の萬有の中より、神秘の姿を呼び出すべきではなからうか。メエテルリンクが、「女性は覆面したる者の兄弟だ」と云つて居るあたりに、深い意味がある様に思ふ。女性は要するに女性である。女性の女性たる所に神秘の覆面がある、差別相の神秘が生きて居る、差別相の中に輝いて居る平等の深い神秘だ。然り、女性ほど深い神秘はあるまいと思はれる程の深さである。而かも彼女は、其の神秘の深奥なるものに對しては、自意識がないではなからうか、否、自識するべく餘りに高い神秘ではあるまいか。意識を意識として意識することを自覺することが出来ないほど高い神秘の囁きがあるのではなからうか。例へば太古の深い森の中の深淵の面に、暗い樹間を透して蒼天の一閃光が漏れ來つて居るやうに、女性の胸には、高い神秘の光が輝いて、一種の柔かい優しい光を放つて居るではないか。

どう考へて見ても、女性は運命の世界から送られた、知ることの出来ない神秘そのものゝ姿のやうにしか思はれない。運命の世界から來た彼の女は、此の世界の十字街頭に立つて、世の人を再び光明の世界に導くのである。

*

女性の唯一の仕事は、男性を救ふことである。女性は男性の救主である。男性の胸の奥の閉された扉は、運命の神によりて彼女の手に與へられた黄金の鍵の外に、之を開くものはないのである。男の胸を開く。これほど神聖な仕事か世にあらうか。男性は他の何物によりても與へられたことのない深い貴いものを、女性の胸より得なくては救はれない。神は男を救ふべく、女を與へ給うた。女性は



創造の悲哀

加藤 一夫

私の貧しい書架の一隅に、アルフレッド・モオドの手になつた一冊のトルストイ傳がある。その書の巻頭には、千九百六年に撮つた彼れの一葉の寫眞がある。私は未だ嘗つてそれを驚異の心なしに眺めたことがない。獅子の様な鼻、深林の様な鬚、暗い洞穴の様に落ち込んだ眼、そして左右兩眉の間に刻まれた深い、太い、三條の皺。その眉間のあたうを凝乎と見つめて居ると、その奥に底知れぬ人格の生氣が、雲の様に湧いて居るのを覺える。それを通じて私は、彼れの偉大なる生命の靈動を見ることが出来るのである。そして生命の神秘に、茫然として驚嘆の眼を瞠るのである。

トルストイの思想は、最早今日では舊式に屬するものかも知れない。彼れの宗教には、獨斷があり彼れの哲學は偏狹であり、彼れの生活は多くの矛盾を藏して居るかも知れない。而かもそれが爲めに彼れの偉大は毫も煩はされない。斯くの如き偉大なる藝術を生んだ生命。斯くの如き深刻なる煩悶を續けた生命、斯くの如き熱烈なる愛着を人生に献げた心。彼れが生んだ一切の悲劇、彼れが及ぼした一切の感化。その大なる力と、その大なる生命とが、一個のレオ・トルストイの中に潜んで居て、そこ

若しくは、「體得」に至る一行路に過ぎない。自覺は人の靈魂をして、「神秘」の世界に導く使者に外ならぬ。自覺の蛇に嚙まれて、死する者も少なくはない。「自覺より體得へ」の一路を辿りて、其の實在の如實の光景を我が生活の中に現はし來つてこそ、美はしい夢は更に具體的のものとならねばならぬ。此の具體の光を身に浴びた實證の境地に立つたものにして初めて、解脱の風光を體する事が出来る。

*

一たび神秘の閃めきに觸れたものは、たとひそれが朧ろではあつても、朧ろの中に柔かい優しい力を感じて、「内深く外香ばしく」と云つた様な姿が、淵の如く湛へ、花の如く匂うて來なくてはならぬ泣きつゝ喜び、寂しみを味ひつゝ、永へに若いと云ふ様な氣分が、渾然として人格の中に漂うて、何とも云ふべからざる底光りのするやうな姿が現はれて來るのが自分等の生命である。自分は具體の「姿」の中に生きたい。柔かなほんのりと照る秋の日光に觸れて、震へて居るコスモスの花が、弱い弱い光にも、胸を痛めるやうな淋しさ、暗夜に深い森の大沈黙の中に立ち、何處ともなく響き來る無聲の大潮音に耳傾けて、神秘の樂に酔ひつゝ、而かも茲に宇宙の活ける大生命の脉搏を感じるやうな深い心を持つて居る女性が慕はしい。自分はさうした人の胸の中に、生命の流れを見出すのである。「心は萬境に隨つて轉ず。轉ずる所實に能く幽なり」と云ふやうな潑刺たる大生命を、かすかながらに自家心證底に悟得して、面々相對する境界を此の現在の生活に味ふ。行持行履。一切は此の見證底より來りて、此の相對界に具體的の絶對の姿を見る。這裡に至つて生活そのものが神を語つて居ると云ふべきである。

『たゞ生くればいい。自己の眞實に生くればいい』これは最近の私の主張であつた。併しその主張は不幸にして、私の表白の拙劣な爲めに、多くの誤解と非難とを受けた。或者は、私が固定せる理想を排したことに非難を加へた。或者は、私が神中心から生命中心に移つたのを危険視した。或者は、私のかの態度を社會人生から離れた一人よがりの天狗の様に誤解した。私は今、何故に斯くの如き主張をなすに至つたか、その徑路を明かにしなければならぬ。

先づ第一に、私は目ざめたのである。今まで送つて來た様な生活の、如何に價值なきものであるかを覺つたのである。『我が人生に意義あらしめよ。』もしくは『我が人生に意義を發見せしめよ』これが私の最初の要求であつた。かくて私は、人生の第一義として神を求めたのである。無限の神、永遠の神、實在の神、そして慈悲の神、博愛の神、私自身を生んだ神、私はたゞ斯かる神を信ずることによりてのみ、わが人生の意義を發見し得ると考へたのである。意義のある世界に生きて行けると考へたのである。私の若い純なる血は、講壇から説かれた正統派牧師の愛の神の説教に、どれだけ歡喜湧躍したか知れない。私の想像は黄金を鑲ばめ、寶玉をも飾られた天のエルサレムと、そこに在まし給ふ永遠の神と、慈悲の救主と、數知れぬ幾千幾億の聖徒の團欒とを仰ぐことが出來た。平和と休息と愉悅とが、即ちその王國であつた。そして王國の影を教會に見出して居た。けれどもその幻影はやがて儚ない夢の様に消えてしまつたのである。

其次に私はその神を自己の裏に求めた。自己ならざる神は、如何に無限でも、絶對でも、愛でも、光りでも、それは最早自己の衷情で一分をも充たすことが出來ないと感じたのである。何となれば、自

に靈妙偉大な活動が行はれるのである。私は彼れを思ふごとに、生命と云ふものに驚嘆せずには居られない。

けれども生命の驚異は、嘗にこれを偉人に求むるの必要はない。生命は常に驚異である。たとひそれは路傍に咲ける一莖の草花にもせよ、腐肉に湧く黴菌にもせよ、私たち人間社會の日常の些事に於ける平凡なる人々の生活にもせよ、私達は常にそこに神秘と驚異とを見出さないことはない。私達にとつては、驚異は最早特殊な傳奇的のことよりも、寧ろ眼前の事象に湧くのである。神秘は最早見えざるところによりも、寧ろ見ゆる世界の些事に潜むのである。殊にそれが生命と結び付けられたる時は、雲の如くに湧き、泉の如くに躍るのである。私達は私達の一生を通じて、毎日の如く、毎時の如く、不斷に思ひ、不斷に感じ、不斷に創造し、不斷に行つて居る。幾千年幾萬年の前もさうであつた。幾千幾萬年の後もさうであらう。併しそれを不思議だと感じた人は、從來さう多くはなかつたものであらう。けれども私達の眼は徐々にこの自己の内界に向つて開かれんとして居る。そして、催眠術や千里眼の不思議に驚くと同じく、私達の日常生活を生む普通の心理の神秘に驚かんとしてゐる。まことや神秘は最も近き自分自身の生命にある。

自我の神秘！生命の驚異！

私が今茲に書かんとして居る一文は、その源をこの驚異に發して居るのである。同時にまた私自らの創造しつゝある世界の一端の披瀝である。敬虔なる告白である。

くる時もあらうと云ふ、微かな希望によつてのみ生きて居たのである。私の神経は全然このとき壞れてしまつたのである。私の健康は全く此の時代から破られて了つたのである。思ひ出しても、その慘憺たる生活に涙がこぼれる。

然るに或る自私は、はたと感じた。

第一義は神でない。自我である。自我の生きることである。自我の眞實が満足し得る様に生きることである。神を求めたのも、要するに自我が生きたいからではなかつたか。第一義は神でない。それは自己の眞實に生ずることとなければならない。

自分は今まで、徒らに神を求めるが爲めに日を過ぎて來た。抽象的思辨や概念のものに、死せる神を追ふが爲めに、自分の尊い半生を費して了つた。自分の中には嘗て潑瀾たる生命が動いて居たその生命をこの徒らなる勞力の爲めに消耗されてしまつた。消耗されて了つた後も、時々その勢ひを回復して、生命が裏に幼芽の様に萌え出したことも屢々あつた。而かもそれはまた、かの徒勞なる努力の爲めに、再び元の墓場に押し込められて了つた。自分の眞實に求むるものは、神でない筈である自ら自身の眞實の生命そのものでなければならぬ。『たゞ生くればよい。眞實のまゝに生くればよい』かう云ひ出したのは、確かその頃のことであつたと思ふ。私はそれを他人から聞いたのではない、書物から學んだのでもない。それはたゞ、私自身の必至の要求が、自發的に自らを教へて呉れた一道の道路であつた。

己は依然として、無價値な、無力な、無生命な、そして缺點と罪惡とをもつて掩はれた哀れむべき幻影に過ぎないことを感ずるからである。たゞ神の『慈悲』によつて生きて行く自己の生活の如何に身窄らしきかを感じたからである。『吾自らが無限でなければならぬ、永遠でなければならぬ、實在でなければならぬ、即ち吾れ自らが神でなければならぬ』これやがて第二に來たつた私の衷情の要求であつた。かくて私には超越神的な正統派の神よりも、汎神論的な佛教の神が慕はしくなつたのであつた。神秘主義者の内觀の神が懐かしくてたまらなくなつた。

私は矢鱈に内省した、思索した、冥想した。過去の夢の様な信仰生活に於ける、二三の特殊な光耀の經驗に——その廢趾に——自己の永遠の姿を見出さうとした。自然に通ふ大なる生命と融合せんとを求めて、戀人を尋ねるが如くに私は、かの廣漠たる北海道の高原の夕や夜の靜寂を慕うて行つた。汚れたる人間の聲の聞こえざる、迷へる人間の心の波打たざる、たゞ其所には純潔なる大氣と、自然の大なる呼吸とが、靜かな聖者の胸に打つ鼓動の様に響いて居る羊蹄山の山上に、自己の小なる生命を、その大なる生命の中に見出さうとして、一夜を勤行の精進に勵んだこともあつた。神人全體の恍惚境エクスタシーは、その頃の私の唯一の憧れであつたのである。

けれどもそのやうな鮮かな經驗は私には得られなかつた。よしそれがあつた様に考へても、要するにそれは一時の幻影に過ぎなかつた。私は依然として有限の我であつた。無力弱小な我であつた。迷妄と暗黒の我であつた。思へば私はその頃程、暗い人生を送つた時はない。わが生活に何の意義がある。わが生きて行く力は何處に在る。私はたゞ惰性で生きて居るのである。何時かはこの縛もつの解

て私の新しい問題でなければならぬ。

哲學的、若しくは、神學的名辭をもつて、抽象的に、人性だとか、神性だとか、生命だとか、人生だとか、世界だとか、無限だとか、永遠だとか、考へて居た頭が、一度轉じられて、生命そのものゝ眞の姿に面接しやうと努めた時、自我そのものゝ眞實の姿を眼のあたりに眺めやうと努めた時、私はそこに、絶大なる驚異に打ちつかつた。

歴史と云ひ、人生と云ひ、國家と云ひ、社會と云ふ。これ皆生命の活躍する舞臺でないか。絶大の巨人ナポレオンは、全歐洲を蹂躪した。これ即ち生命の一顯現である。源平の二氏は勢力を争うて、彼の保元平治の哀れな憐ない歴史をとどめた。これ即ち生命の舞踊ではないか。今朝、隣りの店の番頭が、主人の金を持つて家出をした。これ即ち生命の一計畫でないか。活動寫眞の發明も、飛行機の發明も、日々に店頭を飾る新奇なる小間物や化粧品も、皆これ生命がその自己の要求を外的に表現したものである。私は嘗て一度も淺草の公園に行つて、そこに渾沌として渦捲いて居る生命の象徴を見ないことはない。併しながら生命は始めから飛行機の模型を自己の衷に藏して居たのではない。汽車の便利を知つて居たのではない。たゞ生命は不斷に成長する、不斷に發展する、不斷に新しいものを要求する。かくて彼れはその何等の形式のない、何等の色彩のない、何等の内容のない、たゞ一つの力から——生の力から——不斷に新しいものを創造する。不斷に新しい事件を演出する。

人生は一つの工場である。一つの劇場である。

不思議なる生の力！永遠に神秘なる一切のものを生む根源にして、而かもそれ自らは何者をも有つ

まづ第一に眞實でなければならぬ。眞實な聲に聞き従つて生きさへすれば、即ち眞實そのものに生きさへすれば、それでよいではないか。永遠だとか、無限だとか、絶對だとか、實在だとか云ふのは必ずしもこれを意識しなくともいい。随分私たちは今までも張りつめた價值ある生活を送つて來たこともあらう。たゞそれを、一種の概念を構成し得ない爲めに、われとわがその意識を没却して了つたに相違ない。『自分の様な劣機には、遂にかゝる永遠性を自覺することが出來ないかも知れないではないか』まあ、斯う諦らめたのである。押しつめられた息を茲に抜かしたのである。勿論、私はそれを私の探るべき最善の途であつたとは思つて居ない。併し私のその諦らめは普通の諦めてはなかつた。更に眞實なるものを見出したが故に、舊い努力を擲つたまでのことである。私はそれを悔んでは居ない。併しながら、其處に悲哀がなかつたであらうか。そこに寂寞はなかつたであらうか。何等の理想もなく、目標もなく、たゞ生きて行くと云ふ生活は、無限の寂寥を私の胸に打ち込まずに居られるであらうか。

然り悲哀は私の凡べてであつた。寂寞は私の世界をとり捲く大氣であつた。併しそこに新しい一つの力は漸く私の衷に湧いて來たのである。私はそこに、自分の生活を押し進めて行く一つの力を、自分の中に創造することが出來たのである。

併しながら、問題はそこに片付いたのではない。『たゞ生くればよい』と云ふ。然らばその生命とは何であるか。『自己の眞實に生くればよい』と云ふ。然らばその自我の眞實とは何であるか。これやが

か。茲に一個の生體を——假りに私と云ふものを——宇宙の他の物と關係なしに、孤獨的に、散在的に考ふることは可能であらうか、それともそれは、他の一切の生命とは切つても切れない一つの渾一的状態にあるものであらうか。持續的流動の一體であるのであらうか。それは中々容易に解決のつく問題でない。私達はたゞその様な不思議な力が、生命の根本的素因として存在して居ると云ふことだけを知つて居るのである。そしてその力は、無形式より形式を造り、無内容より内容を造る事を知つて居るのである。それが即ち創造である。彼れは先づ自己の生體内に於いて創造をして居る。それは最早私達の意識には上つて來ない無意識的の領分に於いて、幾多の創造をして居るのである。それからまた彼は、自己の生體以外の物質をもつて——物質を支配し、使用し、指導して——自己の眞實を表現するのである。即ち物の中に自己を創造するのである。かくて藝術品は成り、工藝品はなり、日常の器具がなり、もしくは社會的事業が成り、國家的組織がなるのである。

けれども生命の創造は、決してかゝる外部的表現ばかりに止まるのではない。何となれば之等外部的創作品は、この内部に於ける流動的の生命の一表現であつて、それは最早、それ以上には成長しないからである。それは最早、固定せる生命の一つの脱殻に過ぎないからである。生ける生命は、更に第二の創作品を造らねばならぬ。第三の創作品に着手しなければならぬ。けれども嚴密なる意味に於いて、生命の目的はたゞそれ等の創作を造ることではない。それ等はたゞ生命それ自身の價値の世界を創造する爲めの手段に過ぎない。生命の唯一目的は、それ自身の世界を、より善く、より美はしく、より深く、より高く、より大きくすることである。即ち自己の創造にある。自己の眞實に生くること

て居ない、無形式無内容の一種の力！

生命と云ふことは、直ちに創造と云ふことを意味する。何となれば創造は、生命活動の主要なる一形式であるからである。人生には勿論批評がある。又なくてはならない。理性の推論もある、感情の流動もある。併しながらそれ等は、凡べて創造のための手段でなければならぬ。雷に或る一物を製作すると云ふ意味でなしに、私達の自我の眞實の爲めに、價值の世界を創造する一つの手段でなければならぬ。かくて私は人生そのものをもつて、自我の「意義の世界」を創造する藝術そのものと見るやうになつたのである。藝術と稱するものも、遂にその一部門に屬すべきものである。宗教も亦、その一部門でなければならぬ。政治も、商業も、教育も、人生の一切事は、凡べて此の創造の藝術の一分派でなければならぬ。自己創造と云ふ藝術の一分野でなければならぬ。

生命は斷えず流動する。生命は不斷に發展する。生命は器械の如くそれを動かす力を外部に仰ぐ必要がない。生命には内部より自發的に成長し、欲求し、創造する一の生の力がある。それはその生體たる物質を支配することが出来る、使用することが出来る。若しくはそれを一個の統體となすところの統一的指導的、または促進的な内在力である。私達はこれを生の力と呼んで居る。若しくはこれを生活衝動バイタルインベタスと呼んで居る。それは哲學者、科學者または、藝術家等によつて、何と呼ぶもよいが、何れにしてもこの一種の力の何物たるを説明し得るものはない。何うして斯う云ふ力が一の生體に内在して居るか、何處からこんな力が私自身の中に湧いて來たか。そして此麼微妙な働きをするのである

ければならない。私達に於ける内部自發的の生の力も亦、日常の社會的事象や自然的現象と、相觸れ、相接し、相闘つて初めて、十分なる發展をなすことが出来るのである。そしてその經驗が即ち、私達の世界なのである。世界とは即ち、この内部力と外部現象との相關的一體の生活そのものである。だから世界は生物である。世界は常に成長する。而して私達はその世界を意義あるものたらしめんとする。その世界を美化し、善化し、醇化し、實在化せんとする。蓋しその境地は、この内部に於ける生の力と外部に於ける物質や現象との適合融會に存しなければならぬ。その一境を求めて、生の力は常に工夫し創造する。而かも内界と外界との照應は、しかく容易には成就しないのである。茲に所謂、生命の『産みの苦しみ』が、無限の苦痛と、悲哀と、寂寥とを、自我の意識に喚發するのである。

『生の力』と云ふ。併しながら、その生の力は私の中にもあれば、他人の中にもある。動物の中にも存すれば、植物の中にも存する。而してこの生の力は、各個々々によつて各々その趣きを異にして居る。ことに私達の如き人類に至つて、益々その趣きを異にする。ヒューマニテイ人情と云ふ言葉の如きは、特殊なる個人性を去つて、普通なる人類全體共通の性質を指すものであると云ふ。併しかくの如き性質は、たゞ私達の概念の上に浮べ得るばかりであつて、それが一個の生ける生命であるとは、甚だ難いことゝ云はねばならぬ。生命と云ふが如き、抽象的な概念的なものは存し得ない。生命とは常に個性である。Individualityである。私の生の力は、最初から或る一定の形式や内容を備へて居ない、併しながら、

にある。

私達にあつては、世界とは即ち私達の世界である。私たちを離れて純客觀の世界と云ふものが存するかどうかを私は知らない。たゞ私は、私たちに在りては斯かる世界は決して存在し得ないと云ふ事を知つて居る。私達が『世界』と云へば、それは即ち私達の認識したる世界のことである。私達の認識することの出来ないものは、私達には存在しないのである。だから私達の謂はゆる世界とは、私達の主觀と客觀とが、織りなしたる一個渾然たる世界なのである。かくして私達の認識の領分に入つてきた世界では、主觀を離れて客觀は有り得ない、また客觀を離れて主觀は存し得ない。かくて茲に一個の岩石が小さな谷間に横はつて居るとする。而かもその何げない岩ですら、若し眞によく私達の意識の領分に入つて來るときには、それは最早無意味な存在でない。吾に在つてそれは意味ある一つの存在である。吾が意味ある世界の一要素である。さて私達の短かい一生に於いて、多くの社會的事象や自然的現象は、その自己の意義を發見せられんが爲めに、時々刻々に私達に襲うて來るのである。それ等の意義を發見すことは、即ち生命の自己創造である。私はまさに生の力は内部自發的の力であつて、それが自己の世界を創造して行くのであると言つた。併しながら、その内在的な自發力も、それを刺戟し溫蒸するものがなければ、十分の發達を遂げることは出来ない。茲に一個の小さい椎の實がある。それにはすでに、かの大きな椎の木となり得る生の力が潜んで居る。けれどもその種子の芽を吹き出す爲めには、疊の上では駄目である。それには土の溫蒸と潤濕と、そして太陽の刺戟とがな

のことである。私が私として、生きて行かねばならぬこの一つの不思議な力の指し示す方向のことである。然り方向である。私はこの方向と云ふ言葉を最も懐しく思ふ。何となれば、生の力の指す方向は、決して一定の型に填められた機械的のものではなくて、極めて自由な、眞實な、生の奥底から自然に湧いて来る生ける方向であるからである。常に成長し、發達し、進歩する方向であるからである。閉されたる意識の解放であるからである。暗い牢獄より明るい自由な光線と空氣とを吸ふ喜びが自然に裏から發生するである。私が固定せる理想や目標を拒んだのは、斯くの如き理由がその根柢に横はつて居たのである。固定せるそれ等の殻の爲めに、この内部自發的の最も自由にして、最も眞實なる生命の活動を束縛されることで好まなかつたからである。勿論、眞實の聲を聽いて行くと云ふ生活は、困難なことに相違ない。また眞實の聲と云ふものが、必ず何時も聞かれ得るとは限られない。けれども私は尙この心持ちは、吾々をして眞摯な態度をもつて生活せしめ得ると云ふ事だけは何うしても疑ひ得ないのである。それ丈けても私たちにとつて大切なことだと考へるのである。

私は今、個性をもつて自我の眞實と云つた。併し個性が自我だとは云つたのでない。自我とは矢張り自己を意識した自覺でなければならない。若し自分以外に、他の自我が存在しなかつたならば、また若し自分以外に、他物が存在しなかつたならば、私達は永遠に自我に目ざめなかつたかも知れない。ロマシヨーフが若し一室の内に監禁されなかつたならば、あれ程の自覺に達しなかつたかも知れない。併しながら自我の自覺は勿論、外界の存在のみによつては惹起せられない。外界は等しく存在して居て

私の生の力は必ず私となるべき運命をもつて備へられて居る、それは決して他人とはなり得ないのである。そこには或る一定の特殊性が備はつて居る。それが幾多の境遇や經驗を経て、遂に或る特殊な色彩をもつて、或る特殊な途を通つて、或る特殊な生活を送つて行くのである。かくて私は或る色彩や内容や形式の一生を送るのである。而かもその形式や色彩や内容は、最初から生の力の所有したところのものでない。彼れはたゞ斯くの如くになるべき素因を有して居たに過ぎない。だから私達の生活は、已に定まれる形式の中を這つて行く、器械的の運動ではない。或る定まれる線路を走つて行く汽車の如きものでない、それは恰も浩蕩たる大河が茫漠たる原始原野を流れて行く様なものである。彼れ自ら途なきところに途を創つて行かねばならぬ。自由に、大膽に、臨機に、その生の力の根本素因の導くがまゝに、推しやるがまゝに、おのが途を開拓して行かねばならぬ。そこに創造の苦痛がある。そこに創造の悲哀がある。そこに創造の恐怖がある。而してまたそこに、創造の歡喜がある。私達をして悲哀と歡喜とをも綴り合はされたる創造の歌を誦しつゝ進ましめよ。

かゝる根本素因、これ即ち個性ではないか。この個性の流れ、一步その生活の途に足を踏み出だせば二歩は三步と、益々その個性の色彩を鮮明にするであらう、その力を強めて行くであらう。かくて個性は即ち運命である。私達はその力の外には、一步も出づることが出来ないのである。私達はそれに絶對の臣従を捧げねばならない。

かくて私が絶望的に叫んだ『たゞ生くばよい、自我の眞實に従つて生くればよい』と云つた言葉は私にとつては何時の間にか肯定的な積極的な主張となつたのである。自我の眞實とは即ち、この個性

は、その推移せる時勢に適應する途を知らずして、遂に衰れむべき破滅のどん底に陥つたてはないか。最も著明なる一例は、維新前後に於ける日本の社會狀態である。衰れむべき武士にして、急轉直下、痛ましき零落の淵に沈まなかつたものが果して幾許であらう。生の力は旋風の如くに、社會人類を過ぎ行かしめたのである。そして彼等は、その殘忍なる旋風の犠牲となつて屠られたのである。これ實に偉大なる外部的の運命ではないか。

蓋し生命は分化する。私達が生命を云ふのは、抽象的な概念でなくて、個性と云ふ具體的なものでなければならぬ。而してその個性の方向は、悉く別異である。彼等は皆、自己の道に進まんとする。個人意識が盛になればなる程、個性の色彩が鮮かになつて来る。茲に於いて或者は恐れるのである。斯くの如くんば徒らに利己主義者を造るに止まつて、遂に社會や集團は壞類するであらうと。かくて彼等は茲に、個人即社會説を唱へるのである。勿論、私と雖も、時代精神もしくは時勢と云ふ一つの生命の流れの存することを知つて居る。私達の思想や生活が、如何に時代や社會の感化を受けて居るか、と云ふことも知つて居る。けれども亦、それと同時に、現實の社會と云ふものが、如何に個人の眞實と云ふものを傷けて居るか、と云ふことをも知つて居る。私はどうしても、その社會をもつて自然だとは信じ得ない。自我のうちに過去の歴史を生かすやうに、自我のうちに社會を活かす事は出來やう、併し矢張り自我は自我である。社會は自我と云ふ生命の一養分に過ぎない。

たゞ併しながら、個性の分化が遠心力ならば、茲に求心力とも云ふべきものが、生命界に存して居るのは事實である。即ちそれは凡べての個性が等しく欲求するところの生さんと欲する意志である。

も、植物の生命には自覺がない、自覺どころか意識すらない。——普通の意味に於いて、——食蟲植物の如きものには、幾分意識の影が見られても、それは彼れに運動の可能——不十分なれども——が充されて居るからである。外界の刺戟と内界の自發自律性、この二つの要素があつて、自我の意識は生まれ來たのである。自我は生命の最高顯現でなければならぬ。

自我は欲求する。自我は感覺する。自我は情動する。自我は判斷する。然るに茲に自我の他に、他の自我があり、他の生の力がある。そしてまた、純粹化學的變化がある。そして自我はそこに衝突を感ずる。自我は生さんとする。而してそれ等の力は多くの場合、自我の生命を育てんとするよりは、殺さんとする。太陽の恩恵はある。食物の恩恵はある。自然の恩恵はある。けれども今日に於ては多くの場合、人爲的に社會的に生命の發達を阻碍する。社會と自我、これ實に今日の私達にとつて、最も重大懸案たらざるを得ない。

論者は云ふ。社會的の困難は小我を捨て、大我に歸らないからであると。謂ふところの小我とか大我とかは、果して何を意味するか、私には解らない。茲にはそれに就いて論ずる餘裕はないが、假りに大我をもつて私の所謂、自我の眞實と解釋して考へて見るに、私達の社會組織は、私たちに虚偽を迫るけれども、私たちの眞實は容易にこれを與へないことを知るのである。生の力は一方向に於いては強烈なる要求を自我の眞實の上に置くのである。而して他方には、社會と云ふ他の生の力をもつてこれを粉碎せんと欲するのである。また時代の趨勢と云ふものがある。滔々として社會國家に推し寄せて來て、茲に所謂、時勢なるものを急變せしむることがある。かくして前時代に於いて榮えたる人々

然れどもまた茲に痛ましいことは、たとひその自己の眞實を見出だすことが出来たとしても、自我の力の弱小なるが爲めに、かの旋風の中に在つて自我の意義の世界を打ち築くことを得ないで、徒らに被征服者の末路を見るものゝ多いことである。生命の旋風は、個人の境遇や情狀を斟酌することはない。悲嘆と寂寥は人生の常である。創造は悲哀である。

けれども亦、眞實に自我の權威を悟り、眞實に生命の活力に參して居るものは、その悲哀をも、以つて人生の生活味とすることが出来るであらう。眞實に生さんとする努力の爲めに滅亡する自己の運命にも、深き意義を見出だすであらう。かくて彼は決して人生の失敗者ではない。落伍者ではない。彼等は『意義ある人生』を築き得たのである。

願はくは自己の眞實を得んが爲めに、努力して見たい。その努力をもつて、自己の生活として見たい。かくて二重生活の矛盾より遁れて、純一なる生活を送つて見たい。その爲めに私達は日々夜々に寸時の猶豫もなく、油斷もなく、常に流動する吾が衷情の聲に聽いて——固定せる理想に聽くのではなく——不斷の工夫と、創造を行はねばならぬ。或る時はかの恐るべき生命の潮流と（生命の旋風は必ずしも常に正當ではない、多くの場合誤謬である）戦はねばならぬ。或る時はまた、同じ旋風に乘つて天馬空をかけるが如く、無限なる生命を疾走しなければならぬ。或る時は悲しき苦しき創造の涙をしぼれ。血の淬を流して憂愁の陰雲に閉されつゝ、或る時は春風飴蕩の百花の野原に、淡き悲しみを味ひつゝ、創造の歡喜を歌へ。或る時はまた豪宕不羈、人生の莊大なる戦場に於いて、刀折れ矢

眞實に生さんと欲する意志である。生さんが爲めには、自我は決して孤立し得ない。彼れは他我及び他の生力の刺戟を受けなければならない。又その生命を吸収しなければならない。物質をすら吸収して、自我を養ふ養分としなければならない。茲に於いて歴史も、社會も、萬象も、一切は自我と云ふ一點に集中されなければならない。分化と集中！これやがて生命の流れをして渦巻きとなさしむる所以である。旋風の如くに進ましむる所以である。かくて一つの大なる生命の旋風が、歴史を通じて過ぎ行くのである。

全體に生きよと云ふ聲は、近代思想界の一つの叫びであつた。生命の大河に跳び込んで、大いなる生命と共に流れよと云ふ聲も、大分私達の仲間に於いて聽かれた言葉である。私も亦、それに類したことを云つたことがある。併しながら、謂ふところの全體の生活、もしくは生命の大河に跳入すると云ふことは、果して何を意味するのであらうか。全體としての生命がもし、今私の云つた如く、旋風的行進を續けて行くものとするならば、その中に跳り入ると云ふことは、一面眞實自己の個性を見出してそれに進み、他面、一切のものを自己の養分とせんとする態度に於いて初めて、その意義を全うするのではなからうか。たゞその中に跳入すると云ふことは、折角目ざめた個人意識を再び没却して大洋を漂流する浮木の如き意義のない生活に終らしむるのではなからうか。彼れは時と共に榮えるかも知れない。併しその榮えは彼れのものではない。他人のものである。かくて彼は何等の意義をも、價値をも全體の生命のうちに打ち建つることを得ないであらう。

□ シャル・ワグネル原著
 □ 中村嘉壽譯

三版
 問題の名著
 單
 純
 生
 活

□ 四六型クロオス
 □ 定價 五十錢
 □ 郵税 六錢

佛國現代の有名なる宗教家にして文學者なるワグネル氏の著にして世に公けにせられてより僅に數年に過ぎざるに、普く諸國に翻譯せらるゝを見るに至れり、世は之を第二の「聖書」と賞揚したる近代の名著也。
 本書は實に日本に於ける譯書の嚆矢にして且つ唯一の正認譯書也。

□ バーナード・シヨウ著
 □ 伊庭孝譯

□ 新劇社第一回上演臺本 □

チヨコレエト兵隊

□ 四六型紙裝
 □ 定價 四十錢
 □ 郵税 六錢

非武士道的

三幕喜劇

支那戰爭と同時に世界の外交界を騒がしたるセルピヤ、ブルガリヤの前回の戰爭を題材とし皮肉なる非武士道的的精神を鼓吹したるもの、奇抜なる主人公、チヨコレエト兵隊あり、氣取屋の若士官あり、お人よしの老士官あり、世馴れたる下男あり、惡ずれたる下女あり、押柄なる奥様あり、高尙がりの令嬢あり、卷末にバルカン半島地圖を附し、且つバルカン諸國の沿革及びバルカン戰爭の原因を解説す。極めて有益の文字也。

『東京朝日』記者

杉村楚人冠先生新著

ひとみの旅

三六判美本

定價六十錢

郵税八錢

長い足、鋭い眼、明な頭、太いペン、而して此書成る。しかも山水の景を描かず、風月の樂を語らず、専ら現代を寫し、人間を論ず。曾て、洛陽の紙價を貴からしめたる『大英遊記』以來の名文にして、又曾て、發賣禁止の嚴命を蒙りたる『七花八裂』以來の奇著なり。

ベークマン原著

杉村縦横先生譯補

改訂
増補
強

肺
術

好評二十版

定價四十錢

郵税六錢

肺病を恐るゝものは讀め、肺病に罹れるものは讀め、歐米に於ける最新式の體力養成法を讀め、此書に六の特色あり。

第一、時間を要せざることを。

第二、費用を要せざることを。

第四、勞力を要せざることを。

第五、言文一致なることを。

第三、場所を要せざることを。

第六、總ふり假名付なることを。

故に男子は勿論、婦女小兒と雖も、容易に理解し容易に實行し、而して確實に其功を收め得べし。

〔中附二〕

堂聲鷄

町三五
原五三
川一
石一
小一
京一
東一

社版出午丙

町六八
原六六
川五一
石一
小一
京一
東一

當代青年の代表演說

大日本雄辯會編輯

剛健なる青年の必讀すべき無二の產物

▲帝國大學早稻田大學はじめ官私各學校の學生雄辯家が其勉勵と努力と精力とを傾倒したる代表的演說にして既に好評噴々たりしもの三十一篇をあつめたり……………

青年思想界の最高權威!!

青年雄辯集

演說練習者の絶好模範!!

▲朗々として高讀せば悉くこれ名調子の演說たるべし。即ち携帶の至便を計りて三六版とし音讀の利を思ふてふりかなを附せり、綠蔭、水邊、現代青年消夏の好侶伴也……………

理想ある青年の寸時も離し得ざる書籍

頁五十 五版六 入函スクロ 總裝美頗

定價九拾錢 ○郵稅八錢 新刊

大日本雄辯會發行

振替 口座 三番

東京 駒込 四下 阪八

内外教育評論社編輯所編纂

(本文菊判六百二十頁)

一冊定價

金壹圓

小包送料

金八錢

但請朝
權は郵
料金拾貳
錢

増補新版

文部檢定 中等教員 受験指針

漫然たる受験指針書に非ず本社記者が既往數年間檢定委員數十家を歴訪して得たる結果を分析總合して先づ受験に對する注意及委員諸氏の注文を述べ之に排するに最近合格者の眞面目なる實地經驗談を以てし「如何なる參考書を如何なる順序に讀むべき乎」「其參考書中受験に最も價値あるものは何々か」「其の研究法は如何にすべき乎」「實地は如何にして研究すべき乎」「時間は如何に利用すべき乎」「試験問題解答の實際如何」「口答試験の實際如何」「其他研究上受験上如何なる注意を要する乎」等受験に關する一切を闡明して殘す所なし。

本書載する所音樂手藝の二科を除ける全科日に及び附録として教員免許令、最近改正檢定試験細則、最近三箇年本豫備試験問題集及購讀の便を計れる參考書目錄を添えたり。眞にこれ受験者の一大羅針盤たり一大燈明臺たるべし。若し夫れ本書が指示する受験學風の弊、應て現教育界の弊の如何なるかは單に受験者のみならず一般教育者の亦悉知せざるべからざるものならん乎。

發行所 東京 東振 京替 本東 郷一 區二 込七 千三 駄三 木〇 町番 内外教育評論社

文學と輿論と

故小泉八雲

この論文は、明治三十一年の春、小泉八雲先生が文科大學で講義されたものを抄譯して置いたものである。此の頃、先生の著書は勿論、その講義筆記までも、悉く精讀した米國の一高官にあうて、談偶々日米問題に及んだとき、その人は先生の「文學と輿論」と題する講義を覚えて居るかと聞いた。自分が「然り」と答へたとき、その人は「如何なる卓見、如何なる洞察ぞ」叫んだのであつた。しかし、自分は「詩人の空想」と評し去る政治家外交家のあることを恐れる。講義筆記は今手許にないので、此の際改めて照らし合はすことができないが、大意は左の通りである。(田部隆次)

日本は知らないが、歐米ではどんな大政治家と雖も、輿論を眼中に置かないわけに行かない。中等社會は金力を代表して居るから、此の社會の輿論は殊に重んぜられる。英國ではさうである。此の輿論の正不正は問題にならない。此の輿論は或は戰爭に賛成し、或は反對し、或は改革に賛成し、或は反對する。又或は外交政策に大影響を與へる。フランスでも同じである。獨逸はロシアにつぐ帝國主義の國ではあるが、やはり此の輿論に大勢力がある。アメリカに到つては、輿論萬能の國である。

此の輿論は、その國民の智識を基として生ずる。或る問題に關する國民の智識が豊富であれば、其の輿論は正しからず、不足であれば不正な輿論ができる。不足な智識が原因で、邪推、不安、恐怖を起すのである。随つてその問題に關する解決が、不正になるのは明白である。國民も個人と同じく、偏見もあり、邪推もあり、惡徳もあり、奸策もある。何れも無智から起こつて來るのである。

外國に關する一國民の智識は、どうしてできると云へば、新聞からも來るが、しかし新聞は日常の

内ヶ崎作三郎 生著

近代人の信仰

▲四六判タロス製
▲箱入、六百頁餘
一圓廿錢
郵税十二錢

發行所

新刊
近代文明は物質のみならず、又精神と心靈との方面に於ても、實に一大驚異である。科學の精確と、心靈の神祕と、文藝の眞摯と、宗教の擴張と、いづれか人文史上の轉機を語らざる可む。著者近代思想の潮流に掉して、信仰の彼岸に到らんとす。近代の科學、哲學、文藝宗教に興味を有し、近代人の努力と、憧憬と、歡喜とに對して同情ある人士に取りて本書は有力なる刺戟と、暗示とを提供す。

蔭清風裡の佳伴として、敢て大方の近代人に薦む。

●内ヶ崎君の「近代人の信仰」は氏がこの兩三年間に公にした論文集である。大體上近代の思想を理解し、新なる思想の上に古い信仰の新生命を求めやうとする近代神學家の思想を代表して居るとも云はれやう。そして多方面なる趣味と、同情の多い理解と、熱烈な信仰の要素とは、その文その想に一種云ひしれぬ味を賦與して居る。亦以て一種の思想問題研究と云ふべきである。(新日本)

●統一教會の牧師として日本現基督教界の新人たる内ヶ崎文學士の論集なり。宗教は過去一世紀の間旺なる物質的勢力に壓倒せられて僅かに餘燼を保つの有様にすぎざりしもの廿世紀に至りて又

其復活の曙光を顯はせり。此世界的思潮に乗じて最も進歩せる精神生活を唱道し、科學、哲學、藝術の三者を合一して完全なる一大宗教を建設せんとするもの、これ即ち著者の目的にて、其一々の論文は皆信仰に燃えて、生彩の陸離たるを覺ゆ。

(東京日々)

●近代思想の新らしき氣分を攝取して、古き基督教の信仰を活かさんとする著者の主張を稱したるものなり、勿論裏面に十字架臭味を加へざること所謂著者一流のユニテリアニズムの特色なるか。(東京朝日)

眞に篤信熱情の名文章である。(國民)

東京尾 市張 橋二 區銀 座目
警 醒 社
振五 替五 東三 京番

れに、譲らなかつた。ロシアの風俗習慣、政治等に關する僅少の智識は、ロシアに關する謬見を訂すことにならないうで、かへつて之を助長するやうなものであつた、軍律の残忍な事、シベリヤ監獄の恐るべき事、これ等の事が、たえずくりかへされた。テニソンの壯年時代の詩、ことに「プリンスス」に於けるロシアに關する文句は、甚だ不穩なものであつた。しかし、それは變つて來た。フランス語、獨逸語、英語にロシアの文人の翻譯があらはれて來た。この種類の初めの著しき翻譯は、トルストイの「コサツクス」で、譯者はペテルスブルグ駐在のアメリカの外交官、スカイラー氏であつた。當時フランスの大小説家メリメは、既にゴ、ルやプーシユキンの傑作の一部分を譯して居た。これ等の翻譯は、非常な興味を以て迎へられた。その後ツルゲニエフ、ドストエフスキ、その他の大傑作が引つゞいて譯されたので、更に一層の興味が惹起された。ツルゲニエフは殊に、歐洲の識者の間にもてはされた。かれはロシアのありのまゝを寫した、ロシア人民の心をうつした。ツルゲニエフの小説は、世界のもの、十九世紀の「クラシツク」となつた。それを讀むことは、文學の修養に欠くべからざることゝなつた。引きつゞいてロシア小説の傑作は、世界中の凡べての國語に翻譯された。そればかりではない。ロシアの智力は不意に、科學の深遠なる各方面に表はれるやうになつた。近代の化學に於ける著しき發見「原子の波動」^{アトミックウェーブ}も、ロシア人の發見であつた。北方亞細亞の「フイジオグラフィ」に關する名著は、プリンス・クロボトキンによつてなされた。此の人は今もなほ著述や備忘録を書いて居る、自分は大に多くの例から、二つの例を記したに過ぎない。醫學に於いて、語學に於いてその他の科學に於いて、ロシア人の著述、思想の勢力影響は、博く認められるに到つたのである。し

事件を一通り報告するに過ぎない。眞の智識は文學即ち、詩歌小説から來るのである。統計や、眞面目な歴史や、旅行記から來ないで、その人民の文學、即ちその人民の感情の發表であるその文學から來るのである。

西洋諸國に於ける輿論は、少數の人々の教へや、少數の學者が原動力となつて作られるではない。輿論は理智から來るのではない。智力的のものではない。單に感情——それだけである。しかも英國の國務大臣はたえずそれに従はねばならない。そして此の輿論は、哲學科學の文學でなく、感情想像の文學でつくられる。科學や哲學の書物を讀む人々は數千人であるが、人情に訴へる詩歌や小説を讀んで、それによつて判斷智慧を動かして居る人は數百萬人である。

外國に關する英國の輿論が、かくの如く文學で養成される例を普く云ひたいが、今はその著しき例——ロシヤの例——を述べることに止めて置く。自分の子供の時には、英國人は、ロシヤの兵は甚だ強いと云ふやうな事の外には、ロシヤについて知るところは殆んどなかつた。尤も英國人の感嘆したやうな勇氣は、野蠻人にもあるから、ロシヤの軍隊は英國人には高尚な賞讃を價したわけではなかつた。實際十九世紀の半ばまでは英國に於いてロシヤ人は眞の人間としては考へられなかつた。即ちマカウレエの有名なる文章通りに十八世紀に考へられて居た通り、十九世紀にも考へられて居たのである。

英國の子供仲間では、一人でフランスの子供なら二三人位、相手に戦ふことができるが、ロシヤの子供なら二人はむづかしいと云はれて居た、ロシヤ人民に關する普通の輿論も、その淺薄なこと、こ

論に何の關係もない。多數の西洋人は、十九世紀の初めに、日本を知らなかつたと同じく、今日と雖も、日本を知ることとは極めて少い。日本人は戰爭に強きこと、鐵道と軍艦を有することを知つて居る。これ等は彼等の智識の殆んど全部である。歐洲の智力ある階級の人々は、さらに多くを知つて居る、しかし、彼等は輿論を指導することはできない。輿論は感情であつて、智力ではない。國民の輿論は頭腦からは入らない。輿論をつくり得べき階級は、たゞ一つ即ち文人の一隊あるのみである。外交官や國務大臣や學者は、これをつくることはできない。一人の大詩人、一人の大小説にして初めてできるのである。外國人や外國語では、どうしてもできない。必ず日本人が考へ日本人が書き、外國の思想や感情の影響を受けない日本の文學でなさねばならない。

此の道理をさらに少し説明しやう。日本に關する外人の著書の數は、數千を以つて數ふことができる。年々さらに數十種の日本に關する書物が出版になる。しかも日本に關して、歐米の讀書界は知るところがない。此等の書籍は西洋人が東洋人に對して抱く強き偏見（一つは固有の人種の感情、一つは宗教的感情から來た偏見）を少くする効果があつたとも云へない。ハックスレーは云つた。（ハックスレーは偉大なる戰士であつた）、「何人もそれと戰つて見るまでは、宗教的偏見の如何に強いものか分らない。」異教に關して、本來の西洋の迷信偏見と戰はうと試みた人は、必ず誹謗せらるゝにきまつて居る。誹謗せられないでも、全く無視せられるか、または反對せられるにきまつて居る。『東洋の聖書』^{オプゼイスト}を翻譯しやうとしたオックスフォードの計畫も、各方面に於いて非難された。今日でもあの翻譯は實際よりも、はるか高尚に見えるやうに取捨してあるとの非難がある。これ等は宗教上の偏見の

かし、ロシア人の智力に於いて、如何に科學者が尊むべき點を發見したとしても、一國民が博く外國に知られるのは智力によるのでは無い。博く知られるのは文學者——小説家によるのである。現在の西洋文學に於いて、少數のスカンディナヴィヤの小説家を除いては、その比を見ない簡單にして力ある文體で書いてあるそれ等の小説を讀んで、歐洲の國民はロシア人を異種の人民とは感じなくなつた。これ等の小説は、ロシアに於いて人間が愛し、感じ、苦しむことは、英國、フランス、獨逸と異なることなきことを證した。それだけではない、更に、ロシア人、大多數のロシア人民の有する性質、最大美德、即ち彼等の非常な忍耐、勇氣、忠義、及び大なる信仰について、教ふところがあつた。此等の小説にあらはれたロシアの人生の縮圖は、美はしいものではないが、(恐しく又慘ましいものも多いから)紙背を通じて、人情の美はしさが多く讀まれるのである。ツールゲニエフ及びその一派の描いた陰鬱なる人生は、その反對に光明を更らに美しく見せるのである。そして其の結果はどうであつたか。ロシア人に對する西洋の思想感情が、全然一變したのであつた。ロシア政府に對してとは云はない。政治上のロシアは依然としてロシアの暗黒面である。しかしロシア人民の特性は、よくロシア文學によつて學ばれた。これまでロシア全體に關する憎惡嫌惡の念は、同情好意の念と代つたのであつた。……

日本に關する西洋人の智識は如何であらう。殆んど何物もないと云つてよいのである。勿論歐洲各國に於いて、日本見物をも爲し、また日本に關する多少の智識ある數百の富人は居る。そんな旅行の結果として、日本に關する數千の書籍は出て居る。しかし、かゝる旅客や著述家は極めて少數で、與

かく云へば諸君は、西洋諸國の無學な人民の偏見や愚昧は、我等の關するところでないと言はれるであらう。しかし、今日は此等の愚昧無學なる數百萬の人々が國政を左右するのである。外國との關係に於いて、西洋諸國の政策を動かすのは、聰明なる少數の人々でなく無學なる多數の人々である。

さらに進んで、自分の主張するやうな日本文學のないことが、商業上の利益の爲めにも、間接に遺憾とすべきこと、思ふのである。商業貿易は、道德的職業ではない。……競争である、戦争である。

此の戦争において、競争者が互ひに相理解することが甚だ大切である。同情することが必要である。博く外國に於いて理解され同情を得るが如き日本文學は、日本の商業狀態を改善し、顧客を集める事において著しき効能があるのである。一方を理解しない商業は冒險である。……人は理解しないものを恐れるものである。この理解は文人の力てなされるのである。自分は此の頃日本の國情に關して知りたいと云ふ商人の手紙を見た。そして此等の商人の日本に關する知識は、月世界に關する智識より少ないことを知つた。十年間に僅か一冊でも傑作ができたなら、此等の商人ばかりでなく、數百萬人をして日本に關する眞にして善なるものを知らせることができやう。諸君が此の事を考へて大傑作をつくるのは、大戦争に勝つよりも、國家の爲めであることを思はれたい。……近日年少の英國の文人キップリング病につくや、全世界から數百萬の人、各國の帝王からも、見舞狀や電報を受けた。此の文人の爲した事は何であらう。僅かの小話と歌を作つたばかりであつた。しかも此等は、英人をして以前よりも互に相親密ならしめ、一層相理解するところあらしめたばかりでなく、他の國家にも英人を理解せしむるに至つたのである。かくの如き人はその國にとつては何よりも貴重である。……

九牛の一毛程の一例に過ぎない。現在に於いて、此等の偏見に抗しやうと試みる人は、決して公平に聞かれる機會を有しないのである。そればかりでなく、日本の文明、道德、商工業、又は宗教等について最負するものがあれば、その人は必ず、恐るゝ處か、求むる處あつて何等か御世辭を云ふべき利己主義の動機を有して居ると解せられるのである。それに反して、日本に對して不親切不公平なる中傷的愚言を發すれば、その人は必ず勇敢なる、正直なる、獨立の意見を有せる賢明なる人として、尊敬を受けるのである。これは何の理由によるのであらう。即ち日本に關して善く云ふ方と惡く云ふ方とあつて、共に外國人によつて云はれるからである。日本人の性質、思想、感情等に關して、如何な人でも、外人である以上は、よい方の影響ばかりを與ふる事はない。かへつてそれと反對の方面の影響を與ふる事がある。これは止むを得ない事である。そのうへ外人によつてなされた日本人の特色長所を發揮した種類の著書は、西洋の多數の讀者に達するが如き種類のものでない。たゞ少數の識者に讀まれるばかりである。旅行の書、論文、又は西洋人の感情と何等交渉のない方面の文學の翻譯によつて、多數の人民を動かさんとしても駄目である。これ等の衆俗を動かすには、今少し人心の根底——感情に訴ふるところのある詩歌小説でなければならぬ。ロシヤに關する著述が、外國人の手によつてなつたものばかりであつたら、英國人は今日と雖も、ロシヤの上流社會を野蠻人と考へたであらう。ロシヤ人も同じく、同胞人類であることを考へなかつたであらう。凡べての偏見は無智から生ずる。而して此の無智は、高尚なる感情に訴ふるやうな教訓で、最もよく啓發されるのである。高尚なる感情は、純文學によつて最もよき刺激をうけるのである。

の運命である。天の絶對法則である。雷雨の將に臻らんとするや、必ず暴風があり、電光の閃めきがある。山岳の將に爆發せんとするや、必ず鳴動地震がある。大なる泉の湧き出でむとするや、必ず大地の破裂がある。而して新しき民の生れんとするや、必ず悲慘悽愴なる煩悶があり、壓迫があり、革新があり、轉向がある。之れが自然の理法である。故に天は新しい生命を無限に創造發展せしめんが爲めに、陰陽の二氣を限りなく相揣摩せしむるのである。この揣摩より生ずる電光、雷鳴、風雨等の諸現象は、實に莊嚴雄大を極めて居る。

今や新しい泉は湧き出でむとして居る。新しい民はその見すばらしき皮殻を破つて生れやうと渾搔いてゐる。

必ずや大地震がなくてはならぬ。舊き民の震動顛覆がなくてはならぬ。大いなる眞理と勝利とは、大いなる革新から來る。舊い民の震動の結果は、或は豫想外に慘憺たるものであるかも知れぬ。併し我々は何うしても此の運命を避くるとは出來ない。吾人の新しい泉と新しい民に對する憧憬愛慕は、何者にも換へるとは出來ないのである。いかなる困難を冒しても、新しい生命の泉を掬まねばならぬ革新か、大に可である。死か、更に可である。古き倫理と宗教とが頽れたところに、新しい超人の生活が出来る。舊き思想逝きて初めて、生命の充ちた潑刺たる自由思想が來たる。

舊い民の殘骸結晶たる官閥や、黨閥や、學閥等を打破粉碎して、初めて新しい生民の復活的曙光が輝く。一切の舊きもの、一切の毫碌せるもの、病衰せるもの、一切の自由と獨立と向上とに反對するもの、宇宙の創造的生命に逆行せんとする凡べてのものが、死して而る後に、新しい國家社會が生れ出で



新生命覺醒の機

野村善兵衛

あゝ大いなる運命は遂に眼前に近づいた。警告の喇叭は耳を聳くばかりに天から響き渡つた。暴風か爆發か、革命か、震動か、電光か、雷雨か、はた滅燼か、それはアーネンする人々の自由に任せる。天上の星は何を暗示してゐるか、地下の呻きは何を囁きつゝあるか、それは占ふ人、聽く人の勝手である。然れども預感的時期の到來は、最早何うしても疑ふとは出来ない。運命の前徴は昭々たる眼前の大事實である。

更に確實にして疑ふべからざる事實がある。それは玉の如き一人の赤子を産まむが爲めに、母親は十ヶ月の長い／＼苦しみと、慘憺たる産褥の藻掻きと、不淨とを経過せねばならぬとである。まかり間違へば、母親は之が爲めにその生命を失ふとがある。母親の命は兎も角、折角光の國に生れ出でむとして、藻がきあこがれた赤子は、その呱呱の聲を發するの遑もなく、闇から闇に葬られて了ふ事すら無きにしても非ずである。これが所謂生の苦しみである。即ち Birth throes である。これが即ち自然

噫、エルサレムよ、エルサレムよ。預言者を殺し、爾に遣さるゝ者を石にて撃つものよ。母鶏の雛を翼の下に集むる如く、我れ汝の子供を集めむとせしこと幾度ぞや。されど爾曹は好まざりき。視よ爾曹の家は、荒地となりて遺されむ。――

斯くしく世界最大の個人主義者は、その神聖なる十字架の上に、勝利の血を染めたのであつた。されどこれ果して基督のみの預言であらうか。エルサレムの都をのみ警戒したものであらうか。彼れは個人主義の爲めに斯くの如く叫び、そして斯くの如く從容として死地に歸つたのである。而して吾が偉人も亦、斯くの如く個人主義の爲めに曠野の熱誠を絞りて叫び、斯くの如く我々同胞や日本の國家を警戒せぬであらうか。否、わが偉人は何うしても斯く叫び、斯く行動せざるを得ないである。之れが彼れの眞正なる個人主義である、自愛主義である。勇敢なるエゴイズムである。

モーゼや預言者の形骸的律法を金科玉條と信じ、姑息回徇弊害に堪へぬ因襲的習慣傳説に戀々たる盲從的阿諛的道德、羅馬カイセルの官僚的軍人的權威に屈服せる奴隸的道德、學者や、立法家や、祭司等の利己的術數に瞞着されつゝある偽善的道德に、燃ゆるが如き大革命の醗酵素的氣分を注入爆發し、新しい生命を擧み出した個人主義道德、エゴイズテックモラルの熱誠なる宣傳者建設者は、實に彼れクライストであつた。彼れは革命的氣分に燃え立つた野心滿々の個人主義者であつた。革命は彼れの使命、天父に對する最高の義務であつた。彼れは幾たびか煩悶し、幾たびか惑亂した。進み出てむとする青春の血は、思ふと物質的享樂的生活の渦湍に彼を誘はむとした。されど彼れは「人間に決してパンのみで生くるものでない」事を知つた。底止する所なき野心は、むしろ物質的革命の中心と

る。故に吾人は決して、運命の前兆を悲觀するものではない。眼前の事實を遁避せんとするものではない。否、自ら進んで奮闘せんと欲する。煩悶苦痛の益々大ならむとを欲する。暗黒の愈々暗黒ならんとを欲する。常闇なるゲヘナのどん底まで、轉げ落ちむ事を欲する。何となれば清い蓮華は山峯に生ぜずして、谿谷の泥水に生ずるからである。偉大なる自覺は、偉大なる煩悶苦痛から來るからである。而して新生命の復活は、舊生命の死の宣告に依つて煥發されるからである。

あゝ將に時機は近づいた。我々の憧れをかけた而かも恐ろしい時機は來た。我々のライフ・フォー스가持續するか、はた斷絶するかを試験する時である。日本民族が榮えるか衰へるかの一境に瀕した時である。カライルの警句を籍りていへば、洗禮の時機 the Baptism Days であると同時に、また臨終塗油式の日 the Extreme-unction day であるかも知れぬ。否、實に生の苦しみと死の悶えとの燒點である。死刑の宣告と復活の祝福とが、一緒に言ひ渡される時であるかも知れぬ。萬民の生命と憧憬とを一身に蒐めたる偉人が十字架に懸けられ、絞殺臺に乘せらるゝ喜ばしき日であるかも知れぬ。昊天の爆發と大地の震動とが、同時に出現する最大の紀念日であるかも知れぬ。あゝ怡ばしき日は來るであらう、吾は欣喜雀躍してこれを迎へる。

二

嘗つて英國無二の個人主義者オスカ・ワイルドに由りて、『世界歴史上最初の個人主義者にして、而かも地球上最大の個人主義者である』と讃嘆された基督は、その同胞に向つて斯く叫んだ。

三

當時の猶太民族は、未だ生活難を意識する程の悲境には居なかつた。外界の敵と云つた所で、既に羅馬帝國の統治權の下に屬して居たので、その暴政壓迫は未だ堪へがたい塗炭の苦みではなかつた。然るに基督は彼の如き世界無比の大革命をやつたのであつた。翻つて日本の現狀を達觀したら何うか生活狀態と云ひ、物質の壓迫と云ひ、外國に對する事情と云ひ、決して同日の論ではあるまい。否、少しく露骨に云へば、内訌外患一時に爆發せんとする最も重大なる時機にあるかも知れない。生活難の苦痛は、日に月に増進して行くではないか。弊政苛税はますます庶民の負擔を重くして、その膏血を搾り涸らさずんば止まないではないか。而して生民は依然として、偽善的國家主義に盲從し、幻影的日本主義に魅せられ、服従的奴隸的道德に安んじて居るではないか。否、力なく權威ない爲めに強ひて安んぜざるを得ない窮鼠の位置にあるではないか。日本の政府は思ひを爰に倣さずして、憂ひは却つて外寇にありと爲し、政略的行動を以て、米國や支那に對して居る。此くの如き現代の日本國民を救済するには、實にクライスト以上の確信と、大革命的氣分とを要すること勿論である。吾人は惟ふ、日本民族の憂ひは、國外より來らずして、却つて蕭牆の内に在りと。

今や日本民族は、三千年の歴史の爲めに、舊い習慣道德の爲めに、時世後れの國家主義の爲めに使用に堪へぬ傳來の骨董品たる殘骸的黨閥の爲めに躓かんとして居る。躓くものは禍である。されど躓きを來たす者は、禍更に々々大なる禍でなければならぬ。是に於いて乎、大なる革命を要する。剖剖

なり、燦爛たる榮華の國土に其の絶對權の笏を振はむと妄想した。されど彼れは百姓一揆の煽動者たらんには、あまりに雄大深遠なる理想を持して居つたのであつた。そして彼れはよく自己の生命の存するところ、自己の主義信念の主張する所を明かに認識し、之に向つて猛烈に大膽に前進したのである。彼れは自己の欲する所を實現し、自己の生命を無限に擴充せむが爲めには、いかなる反對も障礙も撃退せむとした、彼れが終生眞心^{まごころ}を以て主張した愛も、謙遜も、十字架も、畢竟彼れの内面的要求の表現であつた。自己の人格の完成であつた。勿論彼れは精神的革命、靈的戰爭には必然に慘憺たる物質的社會的騷擾の隨伴して來るゝを覺悟して居つた。此の如き犠牲を甘んじて受けなければ、決して眞の革命を斷行し、個人主義を徹底せしむることが出來ないと信じた。故に彼れは斷乎として極言した。我れは泰平を出さんが爲めに來たのではない。却つて刃を出さんが爲めに來たのだ。子をして親に背かせ、妻をして夫に背かせむが爲めに來たのだと云つたではないか。彼れは決して偽善的の愛や姑息の柔和を説かなかつた。彼れの愛は實に個人主義より來た愛である。内部生命の限りなき要求から迸り出た愛である。家族において、社會において、國家において、最も圓滿に、最も崇高に、自己を擴大し、深穿し、高調するの愛である。斯くの如くにして彼れは、猶太民族を愛した。外國の敵をも愛した。凡べての人類に個人主義の福音を傳へんとした。個人主義の爲めに猶太民族が滅亡を招致したのではない。却つて沒個人主義官僚主義の爲めに、アブラハム以來のエホヅアの恩寵に、永遠の別れをしたのである。この哀れな光景を目のあたり視た彼れは、母雞の雛を愛撫するが如く、エルサレムに於ける無辜の羊子を庇護せざるを得なかつたのではないか。

命を失はむよりは、むしろ喜んで政府を責めむとを欲する。彼れの所謂手足とは民族の向上發展を害毒する官僚的閥族や政治的黨族を意味したものでなからうか。

故に吾人は民族の生命を害はんよりは、むしろ喜んで官閥、黨閥、學閥等の殘骸を唾棄せんとを願ふ。而して彼れの所謂玩具または骨董品とは、××や××を皮肉つたものではあるまいか。所謂爾の生命に目覺めよとは個人主義を自覺するの謂てはなからうか。個人主義こそ眞に日本民族の生命を救済する唯一无二の新道德ではなからうか。

四

誤解するものがある。日本現代の杞憂は危險なる個人主義の跋扈であると。甚だ笑ふべきの愚論である。個人主義は何故に危險か。生命の抜け出た形骸的家族主義や、國家主義や、武力萬能主義は、何故に有難いか。歴史的傳說的習慣の弊竇に、自己の生命を恭しく没却するとか、何故に分別のある尊い行爲であるか。凡そ Topoi の状態にあるものと、awakening の状態にあるもの、所謂舊い人間と新しい人間、即ち凡俗と超人との懸隔の大なる、今日の如きは殆んど歴史上にあるまい。凡俗や老耄は、悉く古い思想を有し、古い言語を解し、舊い衣服を着け、舊い制度に服し、舊い國土を夢みてゐる。即ち彼等は舊きにおいて徹底して居る。而るに青年や超人は、極端に新しきにおいて徹底して居る。彼等は全く異なる思想を有し、異なる言語を喋べり、特異な行動を爲して居る。故に兩者の間に、感應直覺のないとは敢へて怪むに足らない。此かる事實は打撞ぶつつて碎けずんば解決のつかぬ問題である。

淋漓の快手術を要する。未だ新道德の福音は現れない。生命の泉は湧き出ない。甚しき没個人主義の爲めに、日本民族は將に死地に陥らむとして居る。嗚呼現代の急務は、唯民心を覺醒するにある。能動自製の創造的勞作的精神を煥發せしむるにある。眞正なるインデビデュアリズムの眞理を識らしむると同時に、之を徹底せしむるにある。即ち個人主義を生命化し、生活化するにある。換言すれば個人主義に依つて新しい家族、國家を建設し、新しい道德宗教を創始するにあるのだ。

わが權威ある偉人は、暗示深い預言を放つた。曰く、『日本民族の國家よ！爾は禍なる哉、そは蹟くことをすれば也。礙くことは必ず來らむ、されど礙さを來たす者は禍なる哉！若し爾の眼汝を礙かさば抜き出して之を棄てよ。兩眼ありて地獄の火に投げ入れられんよりは、片眼にて生命に入るは善き也。若し爾の手爾の足汝を礙かさば、斷りて之を棄てよ。兩手兩足ありて氓びんよりは、跛または不具にて生命に入るは善き也。若し爾の贅澤なる骨董品汝を礙かさば、弊履の如く之を海中に放棄せよ玩具の爲めに盡さざる苦楚を嘗むるよりは、むしろ裸體にて生命に入るは更に優れり。噫禍なる日本民族の國家よ。もし爾の生命を完うせんと欲せば、須らく爾の生命に目覺めて之を高調せよ』と。

斯くの如く叫んで彼れは、一切の舊思想、舊主義、舊制度、舊所持品を悉く放擲し、焼失せんとを要求した。そして根底から唯ワンシングを捕捉し來るとを要求した。彼れの警句は果して如何なる寓意を含蓄するか、固より測り知る所ではないが、吾人の推量は中らずと雖も、亦遠からずであると信じて憚らない。彼れの所謂眼とは政府を指して言つたものではないか。勿論國家は日本民族の國家であつて、決して所謂政府の國家ではない。故にもし政府が國家を礙かすことあらば、吾人は民族の生

である。そして深い／＼根柢から、新しい自己の道德、自己の宗教、自己の家族、自己の國家、自己の政治、自己の外交を創建せんと努力するのである。之れが眞の個人主義であるのだ。

五

未だ眞の個人主義を證悟體得せずして、自覺的生活、精神生活を爲すとは、所詮不可能の事に屬する。如何となれば、人間生活の有らゆる諸形式、即ち宗教的、道德的、藝術的、政治的、乃至經濟的生活は、悉く個人主義の實現形式に外ならないからである。換言すれば、人生とは畢竟するに、廣さにおいても、深さにおいても高さにおいても、限りなく伸びんとする *Ich will* (我れ欲す) の創造的表現、創造的象徴、創造的奮闘であるからである。個人主義は凡俗の思惟する如く、斷じて利己主義でも我慾主義でもなく、または肉的獸心を満足せしむるものでもない。飽くまで自己の主義理想を貫徹し發揮するの謂である。限りなく自己人格の内部要求に忠實なるの謂である。之れが眞の *Self-realization* である。是れが眞の全體的渾一的 *Beisichselbstsein des Geisteslebens* である。是れが眞の *Übermenschlicheleben* でなければならぬ。若し人間の生活より主義を去勢し、理想を剝奪したならば、人生の意義及び價值は何處に存するか。人生の創造力は、何處より流れ来るか。實に主義理想は、人間生活の創造的原動力ではないか。而して這般の主義及び理想に神聖なる存在的證明の印璽を押捺するものは、眞に *Ich will* ではないか。 *Ich will* は吾人のライフ・フォース即ち生活意志の自覺的發動である。故に「我れ欲す」と云ふ内部生命の衝動的要求は、個人主義の根本生命であると同時に、人生萬般の

かの凡俗は全く吾人の話す言葉を解しないのである。況んやその根本精神をやだ。吾人一度び一言を發し、一手を舉ぐれば、凡俗は擾々然として犇めく。實に愚劣極まつて居るではないか。そして大なる運命の眼前にあるを見るとが出来ないのである。

あゝ舊き民震動して、新しき泉の湧き出づる時はまさに近いた。吾が偉人は今や夢に入らむとする同胞に、新生命に再入する福音を宣べんが爲めに茲に立つた。彼れの確心と勇氣とは、大磐石の如くである。日本民族の最大危険は、實に無意味なる沒個人主義にある。故に唯一の救済策は、新個人主義の徹底にあるのだ。個人主義とは、政府の國家、閥族の國家に盲從するの謂ではない。長州民族や薩州民族の專横に阿諛して、莫大な貢物や忌はしい人身御供を献ずるの謂でもない。又は官吏の鑿くなき利己心を喜ばせんが爲めに、齷齪として黄金を朝鮮や滿洲の荒野に播き散らすの謂でもない。個人主義は實に民族の生命を無限に肯定し擴大するの謂である。國家は自己の國家、政治は自己の政治、制度や、道徳は、自己の客觀化象徵化であると自覺するの謂である。國家でも、黨閥でも、思想でも、領土でも、民族の生命を煩はし躓かすものは、片端から革新するの謂である。そして自己の主義理想を限りなく高く向上せしむるの謂である、超人ニイチエが嘗つて『汝の衷なる神、汝をして無神論者たらしめた。故に汝の不信仰は却つて汝の眞摯なる敬虔そのものではないか。汝の大なる正直が、汝をして善惡の彼岸に導き去つたのではないか』と言つた如く、眞の個人主義者は、内部生命の道徳性に由つて、舊い道徳宗教を破壊し、内部生命の家族性に由つて、現在の家族を改造し、内部生命の國家性に由つて、現在の國家を改善し、内部生命の擴充的要求から、寶物や骨董品を放却せむとするの

恒の牢獄から、自由闊達なる Ich wei の平原曠野に躍り出てねばならぬ。陰鬱なる國家主義の暗の壓迫から、閃々たる個人主義の電光に接觸せねばならぬ。一時的生命を有して居る多くの偶像（閥族や黨族）を忌憚なく破壊して、自我の權利を主張せねばならぬ。有らゆる客觀的腐敗物不淨物に、自我的 Ich wei の不可思議なる精神的消毒劑を隈なく撒布せねばならぬ。未だ個人主義の權威を認識せざるものは、偉大なる國民ではない。薩長族の國家や外交を見て怪しまざるものは、偉大なる國民ではない。朝鮮民族の内部心情に、直覺同感し能はざるものは、偉大なる國民ではない。進歩して止まざる世界の大勢に融合共流する能はざるものは、偉大なる民族ではない。あゝ新生命の復活は、個人主義の電光から輝き出づる、個人主義の電光のみ、萬物を清淨化し、潑刺たる生氣を吹き込む。

いかなればわが日本民族は、トーパーより覺醒しないか。何故に個人主義を自覺しないだらうか。之れ未だ彼等の苦痛が、どん底まで達しない爲めではないか。彼等の没個人主義的墮落が、まだ徹底しないためではないか。あゝ彼等をして、ゲヘナの谷底まで、自墮落のどん底まで行かしめよ。そして一切のものを棄て、清淨無垢の自覺を冲天まで推し上げしめよ。

審判者、權威者でなければならぬ。眞理でも、道德でも、神でも、國家でも、自我の絶對的署名たる *Ioh will* の璽ありて初めて、其の生命を有し、人生に於ける價值を有して來るのである。否定でも、肯定でも、歡樂でも、没落でも、此の璽に依つて初めてその意義を具有して來るのである。故に此の眞理を否定するものは即ち、自我の生命を否定するものである。而して日本民族は由來この眞理を否定したる世界最古の國民である。

個人主義の實現は、内部的主觀的衝動である。故にその態度は自由である、能動的である、創造的である。而るに個人主義の否定顛倒より、何が現れて來るか。それは言ふまでもなく、客觀的外來的強制である。*Ioh will* に對する *Du sollst* (汝すべし) である。自我の自由を束縛するものである。個人主義に對する所謂國家主義である。

「我れ欲す」が、一切のものに存在の權利を與ふるに反して、「汝すべし」は、眞正なる自我の額上に奴隸の焼印を押さんとし、自由なる生活意志の口元に、制御の轡を箠めんとするモンスターである。*Du sollst* の具體的象徴は、傳說的信仰である、便宜的道德である。教權的宗教である。政略的威壓的國家である。是等の殘骸は、悉く個人主義に對する反逆である。超人生活の否定である。*Ioh will* の絶對權威を否定したる國民が、*Du sollst* の暴君的虐待に屈從せる奴隸國民たる事は、疑ふべからざる事實である。而して今や從順なる驢馬の如く、重荷の上に重荷を負ひて、道德的國家的砂漠の中を驚行し來たれる民族の服從的奴隸的根性は、將にそのどん底に至らんとして居る。之れはつまり、そのどん底の境地から、反轉し跳躍し來らんとするの前程ではあるまいか。彼等は必ずや *Du sollst* の永

佛語の *disseuse* と云ふことは、現代の多くの詩人や、藝術家や、俳優や、音樂家などの感じた、併しその表白に於ては、決して成功しなかつたところの自發的啓示であつた。この態度なしには、近代的幻滅の詩歌は、單なる智的暗示に過ぎない。そして近代的音樂の悲哀は、情調的現實の感傷的類似以上に出づることを得ない。マダム・ベルナルドは吾々に示すに、如何に古典的藝風クラシカル・メソッドが、その能く測度されたる變化や、貴族的緘黙や、多様な態度をもつて、劇的技巧を發展さして行くかを以つてする。マダム・ギルベルトの藝術は自發的概念である。言葉で表はし得る最高の創造である。一切の戲曲的技巧は、經驗や摸倣より進化したと云つてよい。彼女は、恰も悲劇の附帶衣裝を剥ぎとりたる哀れなる變怪の、夜中に出現するが如くに跳び出した。而も彼女は、その二本の長き幽靈の如き腕をもつて、肖像の如き首の無頓着なる姿勢をもつて、疲れたるが如き眼の回轉をもつて、摸倣し難い、肩の一種獨特なる運動をもつて、詩と通俗との何れをも備へたる觀念や、情緒や情調や幻影の世界を暗示し、描寫する。彼女は、普通の言語や語句の以上に横たはつて居る日常の情緒や、感覺を喚起する。彼女の藝術は、決して猛烈なる熱情ではない。それは滑かな情緒である。それは幻滅の灰をもつて覆はれたる愛の火である。而もそれは芝居ではない。單に單純にして、純粹なる所作である。彼女は歌ひもしない、更に適切に言へば、歌ふ必要がない。彼女の容姿は言葉をもて表はすには餘りに深いものを語つて居る。彼女の聲は音樂的語法の世界を越えて横はつて居るものを發して居る。

前ラファエリット運動の中には、近代的悲哀の繪畫的叙述がある。メエテルリンクの戲曲の中には詩的情感がある。ワグネルのロオヘン格林やタンホイゼルの中には、その音樂的情操がある。凡て

近代的悲哀

フランシス・グレイアスン

近代的悲哀は、何よりも先づ、その所作ゼスチュアールを持つ。その動作は自然と、幻滅ゼスチュアールの所作である。疲労困憊の放擲の表相である。何たる忍従がその最も多き類型的形相の中に存在してゐるか。蓋し魅力を殺がれたる精神は倦怠アンニュイであるからである。疲労は非戯曲的であるからである。而してマダム・イアベテ・ギルベルトの藝も亦それである。彼女は通常なる方法をもつて、異常なる感情を表現する。彼女の藝術は近代的厭世主義及び幻滅の綜合である。過ぎ去つた空想の蠱惑的暗示と、消え失せた夢想の朧なる回想と、尖鋭なる現實味と、徹底せる單純とは、その中に含まれて居る。

悲哀の中世紀的態度は、信仰と忍従とのそれであつた。現代に於ける寂寥の特質は時としては發語をさへ煩ひとするに至る程の失心である。幻滅はたゞ詩と音樂と所作の三氣分によつてのみ表現される。中にも所作は靈魂を表はすに最も適はしき表現である。それ故に最も著明である。街路の片隅に於ける物乞ひの悲慘と嘆息は、何よりも先づ態度によつて示される。次に容貌の表情によつて、最後に言葉によつて而かも幻滅の自然的形式が無言の失心であるとしても、その力なき誇張と、感傷的な高調とをもつて無言劇ダンサーとは、趣きを異にして居る。無言劇の努力は、想像や感情の上に閉氣栓ダンバネを置く。マダム・ギルベルトの藝術の根本的要素は靜的である。彼女の舞台に立つやたゞ近代的の上表ガウンを着けて、お芝居的裝束をしない、そして又、お芝居の方則にも容姿にも缺けて居て、何等舞臺的幻影をもつくらない。



塵の中から (感想) 内 藤 濯

ある人が私に對して、未來世界の存在を信ずるかと訊いた。

私は沈黙をもつて、これに答へた。そして少しも寂しさを感じなかつた。

現在を離れて、過去を顧み、未來を思ふほど、私にとつて寂しい事はない。過去としての過去、未來としての未來は、私どもにとつては有つても無くても可いものである。現在に生ける過去の生命、現在に萌せる未來の生命、これが私にとつて唯一のものであり、また同時に最も尊いもので無ければならない。常に新なる現在の渦巻には、おのづから過去と未來との躍動がある。最も強く最も深く現在に生くること、これが體て眞に過去を謳歌する心ではないか、未來を探索する態度ではないか。

過去のみを讚美する人の心には、過去の骸が横たはつてゐる。未來のみを追求する人の心には、未來の幻影のみが食ひ込んでゐる。

*

此の一事が、最高の藝術の領分に動いて居る。そして多少は皆哲學的である。何となれば之等の藝術家は、近代の悲哀と幻滅とを、理想的努力と効果とをもつて表現するからである。そこに産出せられたる印象は、人生の表面に表はれたるものよりも、更に靈的なものであるからである。吾々は通常の存在や、情緒や、情操以上に携へ上げられ、携へ行かれる。吾々が詩人や畫家の大藝術と稱するものは、吾々をして止まりて考ふる暇をも與へずに、吾々を捕へ行く。それは實に靈的の意味に於て眞實である。バアン・ジョンスに於ては、美と希望である。ロセツティに於ては、美と憧憬である。メエテルリンクに於ては、美と絶望である。ワグナルに於ては、美と狂熱である。ラ・スッラルドや、ラ・モルフィチエの如きものゝ演出に於いて、マダム・ギルベルトは、吾々をして有りの儘の姿に面接せしむる。そこには明光リムライトがない。そこには低音がない。眩惑的動作がない。織りなされた想像がない。吾々は、遽に最も厭世的な詩人の悲嘆や、譯もなく愛撫された夢想の域を越えて、近代的幻滅の萎れたる薔薇をもて掩はれた希望の棺の前に立つ。泣く時は既に過ぎ去つた。而して所作は涙に代つた。そしてそれは藝術の成し能ふ凡てである。その最下層に於てはなく、その最後の舞臺に於て、たとひそれは現實的なりとするも、野獸的たるには餘りに沈黙的である。それは又近代生活の一面にのみ限られはしない。それはモンマルトルの皮肉なる絶望より、マドレヌの感傷的な絶望に至るまでの、廣大なる社會を抱含して居る。前者は輝ける社會的事實の率直なる告白である。後者は心靈の同じ悶絶の狀態の宗教的な秘密の告白である。この藝術は單に拉丁民族及び巴里人の發展ばかりではない。凡ての國民はこれを了解する。何となれば近代的悲哀の言葉や所作は、普遍的であるからである。(ABC譯)

私たちが「心から心」に語り合ふ一境の開拓から始まるのではなからうか。

*

私は否定が肯定を生むのではなくて、肯定が否定を生むのだと思ふ。それと同時に、否定力が否定を來たすのでは無くて、肯定力があのづから否定の事實を現はすべきだと思ふ。

*

献身犠牲の事實は、必ずしも自己の放擲を意味しない。私はむしろ、無限の擴大力に觸れることのできた「自我」の確立が在るところにこそ、眞の献身的事實が閃くのだと思ふ。

私たちは、自覺の閾を踏み越えた心境から生まれる献身的精神と、無自覺な献身的精神とを混同してはならない。

——一度も人と争つた事のない人は、有徳な人だと云へませうか。

——絶望して尼寺へ身を隠した女は、聖い女と云へませうか。

——人に對して憎しみを感ぜない人は、ほんとうに人を愛する事ができませうか。

或る日、或るところで、こんな事を云つてゐた人があつた。そして私は此の疑ひが、自分の心にも蟠つてゐる事を知つた。

*

ほんとうに萬人の迷惑にならない生活をするこゝのできる人は、たしかに最上至高の生活を營んでゐる人であるに違ひない。けれども世間の謂はゆる交際家たちは、他人の生活に對して無關心でゐたり、讓歩したりして、そこに「萬人の迷惑にならない生活」の確立があるやうに思ひ込んでゐる。これはたしかに表面的にのみ物を考へたがる人の由々しい誤謬で、さういふ人たちこそ、萬人に對して最も多く迷惑をかける人たちである。

私たちはこれまで、云ふべき事を云はずに済ました爲めに、意外にも他人の迷惑を惹き起こした事が無かつたであらうか。爲すべき事を爲さずに済ました爲めに、意外にも他人に厭な思ひをさせた事が無かつたであらうか。社會生活の眞實を害ふものは、歸するところ人情の假面でなければならぬ、無氣力の爲めに裏切られた人情でなければならぬ。

眞に「萬人の迷惑にならない生活」は、單なる犠牲や救済の行爲に成り立つのではなくて、やはり

と漠然といつても好むまいが、もし藝術を創作と鑑賞との二方面に分ければ、自分は创作者の創造力と鑑賞者の感受力との二つながらほしい……要するに天才ならぬものの免れぬ嘆きである。『容易に否定することの出来ない、物事をかちと思ひきめてしまへない自分の心持を、今少し振りのあるものから、あるものに向けたい……』から云つた様なことが隨所に出て来る。その落ち窪んだ眼に、靜かに自己を内省して、痛ましい創造の悲哀を感じて居る著者の姿があり、と見えて居る。

私達は此の書によつて、自己に對する態度と、人生に對する態度とに就いて教へらるゝ所が多い。そして實際今の時代では、私達はたゞ他人から態度を學び、もじくは生命の共鳴を感じしめらるゝより以上に、出づることゝ出來ないだらう。この意味に於いては、この書は十分にその使命をつくして居ると云へる。併しながら茲に私の望望の希望を語らしむるならば、今後著者は益々、自己の世界の擴張に向つて進まねばならぬ。一面自己を展開しやうとする望みと、一面自己を堅實にしやうとする望みとが、著者の心中に併存して居る。著者の美しき個性を形づくつて居るのは事實であるが、私の考では、今少し自己の展開の方へ力を注い

た方がよくはないかと思ふのである。

これを部分的に考へると、『田舎の友への手紙』や『幼稚なる感想』や『文壇の高層階級』等が最も私の興味を惹いた。『自然の色』等に於いて見る強烈なる自然の讃美や、自然の心に深入して行か

うとする態度にも、啓發せらるゝところがあつた。『田舎の友への手紙』の中に於いて論じた自然觀も、成程と首肯される。

『自然を損ふことは人間を損ふことである。自然の枯渴は人間の枯渴ではあるまいか……』などより、都會に於ける自然は、果物屋の店頭には美しく飾られたる藥物であるなど云ふところも面白い。祖師堂傍に居る癩病患者や乞食の觀察も、慥に人生の一面を示して遺憾がない。たゞ一つ私には未だ十分に了解し難かつたことは、

『何でも底につき當つてカンとかシュートが王笈を見たい心持かする。僕はこの點からたゞプロツツツスを眺めて居るのに物星らない。』エンデに達したい。僕は宗教的要求を棄てられない。』と云ふ一節である。謂ふところのエンデとは、それは靜的なものであらうか、動的なものであらうか、或は又因定的なものであらうか、これが行きついたと云ふ極地と云つた様なものであらうか。

私達はプロセスをのものをエンデといふ見られないのであらうか。私はどうしてもエンデが前方にあるよりも、自己の中にあるやうに思ふ。故にプロセスのものがエンデでなければならぬ様に思ふ。氏の考へよりも、恐らくエンデを前方に据ゑ居るのではな

からうと思ふが。

紙面がないから詳いこと曰ふはれない。私はこれぞ『子の世界』の讀後の印象を聞く。終りに私は著者に、本を贈つて下さつたお禮と、讀んで非常に啓發されるところの多かつた事の御禮を申しおおく。車中堂發行・價一、二〇。

『予の世界』を讀む

か　　ず　　を

安倍能成氏の『予の世界』は、巻頭の二文を除く外は、氏が最近の文集である。私達はこれによつて、何等纏りたる智識をも思想をも學ぶことは出来ない。——勿論それは、著者の目的とする所ではない——併しこれによりて人を與へられる。生命を傳達される。そしてその生命は、眞摯と、眞面目と、溫健と、堅實との生命である。そして眞實なる心をもてる凡べての人々の胸に、共鳴の波動を起させないで止まない旋律の流動である。能成氏は宗教家ではない。また豫言者ではない。その様な口調が一度たつて此の書の中に表はれたことがない。それで居て、世の中の人の生命は、氏によつて警戒せられ、助長せられ、教導せられずには居られない。

巻頭の一文は、氏が高等學校時代に書いた故藤村操氏の追悼文である。第二の日記は、矢張り同時代の琵琶島お籠り記である。

私は氏が何故にこの文章を本書に加へたかを知つて居る様な気がする。何故なれば、その頃の氏の若い醇なる心靈か、最も特殊なる個性をもつて、深き感化を周囲の人々に及ぼしつゝあつた親友の悲慘なる死によつて、眞の覺醒を促された様に見えるからである。そこに氏の新生活の第一歩があつた様に見えるからである。琵琶島日記は文章としては些と單調すぎる様である、冗長すぎる様である。併し吾々はその單調なる生活を通じて、その内界の事情を汲まねばならない。氏自らも云つて居る様に、此の時代は何者

をか求めて居た時代である。『何の爲めに此所へ來た。求めたものは得られたかと思つても一つも分らない、求めるものゝ何であるかも、自分には分らないのだから仕方がない』。その何者かを求めた心が、第三章以下の氏の世界を創造したとも云へやう。

此の書を通じて見る著書は、先づ第一に眞面目なる自己創造者である。生活と云へる創造の藝術をもつて、第一の事業とする生活の愛着者である。そしてそれが爲めに先づ、眞實に生きて行く力を、自己の中に見出さうとする生の探求者である。『我々は要求の事實化と云ふことを考へるよりも先づ、かくの如き要求を有したいと思ふ。かくの如く要求を孕み得る主觀の力を切に望んで居る——力強い要求は力強い個人格から生れねばならぬ。我々の切に求むるものは力強い要求を生む力強い個性である』と云つて居る『僕の問題は如何にして文壇に名を馳せようか、勢力を張らうか、支配しやうかといふのではない。如何にして自己の生活を満足な様にするか』と云ふ點にある』と云つて居る。そしてこの書の全篇は實にその自己の生活の満足を得んが爲めにどんなに苦心して居るかを示して居る。

それが爲めに氏は、最も多く自己を解脱して居る。そしてそれを批評して居る。批評して自己の眞實を創造しやうとして居る。『僕は近頃よく僕がもう少し藝術的であつて呉れう』と思ふ。た

すゞしき夕やみのなかにものやちもふ、

されどわが若き日はわくら葉の落つるやうに、

見ぐるしく蟲ばみて地に落ちん日も遠からじ、

ふたたびくりかへしがたき若き日よ、銀杏いちょうの日よ、

日にほろびゆくわが若き日よ、蟲ばめる葉よ、

われは今涙を呑みて押しつぶされし若き日に別わかをつけ、

若き銀杏いちょうにわかれをつけてまたすすみゆかむ、

いかにさびしくかなしくたのむかげはなくとも。

*

やさしき靈はわが前を過ぎゆけり、

わが靈はわが前を過ぎゆく靈に感じて、

すすり泣くやうにひとりふるひ、

はやて吹く船の上にすわりて、

わたりがたきかなたの岸をながめ、

そこを過ぎゆく靈に空しく思をおくる。

*

めさむればわが本能はととのひ、



きえざる火

佐藤

清

わが零落を今なほ示す女學校よ、

*

うつくしきくちびるはあざけりにみち、

やさしきひとくの目は輕蔑にみたり、

われ鎌をとりておびえつゝその間を行き、

ひもすがら大庭の芝生をくさざる、

をさなきもろてはあつき日と汗にもえ、

夕ざればあのれを失ひて庭にたふれぬ、

あはれわがはぢとかなしみの若き日よ、

わが若き日のために植ゑおきし若き銀杏よ、

七年を過ぎて今そのほとりにひとり立てば、

銀杏は猶みづ／＼しくやさしき葉をひろげ、

かつ消えかつながれて暗^{やみ}はやがてそこにあふれ、
まてどもまてどもわが靈の夜はいとくらし、
ほ—ほ：ほ—ほ：ほ—ほ：ほ—ほ

*

みづ／＼しきわかき生命^{いのち}のちからを
あしつぶす手をゆるめざるかたくなの力よ、
こころ臆しがちのわがさみしさを知りてか、
なつかしき名となりいかめしき文字^{もじ}となり、
あるひは目にも見えず口にも言ひがたき思となり、
みづ／＼しきわかき生命^{いのち}のちからを
あしつぶす手をゆるめざるかたくなの力よ、
命^{いのち}しばしゆるめよそのかたくなの手を、
若き生命^{いのち}は今あるかざりの力もて、起きあがらん、
しからずば汝も我と共にほろぶべし。

*

めさむればくらき夜^よをしめやかにふる雨のなかに、
いりまじる電車の深くうめくあらしのひびき、

わが靈はいとしづかなり、

光も風も木の葉も、

空の色も野のおもても、

いとしづかにふるひつゞあり、

やがてわが本能は星のひびきのやうにふるひ始め、

湖水のごとくにじづまりし、

わが靈はさざなみをうちてふるひはじむ。

*

そこともなく動搖するほのじろき光、

惡鬼の顔にあるくらやみをとかして、

わが靈の森の全面になげうてり、

ほーほーほーほーほーほーほーほーほーほー

石は夜の深うなるにつれてつめたく、

それをあらふながれは森のささやきにまじり、

路さへなさやみのわだなかをふるはせり、

ほーほーほーほーほーほーほーほーほーほー

星雲のこりなせるややあかるきあび、

いくたりの靈のたきぎにやしなはれて、
今猶さえず清きほのほとなり、

しづかにいとおごそかにもゆるなり、

あはれわが靈の火をやしなひしやさしき薪かきの靈よ、

今ははやもえつきてあともなければ、

今わが靈の火をもやしつゝあるものの、

火の種となり生命となり力となりしを思へば、

少しの灰をさへ残さでもえつきしかなしさよ、

見よまひるのともしびのやうに弱き光もて、

あるかなさかのやうには見ゆれども、

ここにさわりしものはことごとく鉛のやうに、

藁のやうに松脂まつやにのやうにとろけうする、

くすしき力をかくすわが靈のほのほを、

今現いまげんにやしなふ薪かきの靈を祝福せよ。

わが性の力は鳴りを收めてその音に耳を傾け、
はげしく伸縮する神経に刺^{はり}をさす音はわが心を奪ふ。

*

かかるくるしみを忍びて、

またあはれ日も知らず、

過ぎゆく汽車の窓より、

まぢ全體にわかれをつぐる、

この五時十分を君知るや。

ふるふる風が吹く *

ただ一ときの物がたりに、

その人をうたがふくらきかげになやむ日あり、

ただ一ことのゆきちがひに、

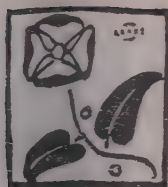
永くつゞくべき友情の流れをさまたぐる日あり、

われら互の靈を見る目さへひらかば、

かかるわざはひより容易に免かれ得べきものを。

*

いつもえそめしわが靈の火よ、



黎明

吉田 絃二郎 譯

——エミール・エルアールン作——

この幕に現はれる人々

ジャック・エレニアン

妻クレエル

オツビドマアニユの領事

第二幕の第一景（つゞき）

ニレニアン。あゝお前は眞實、私の妻だ！

六月の或るひと夜だつた、

随分と久しいことだが、懐しさうにお前は私に、お前の心靈をくれた、

私はその時お前に誓つた筈だ、この私の唇が、

決して二度とは接吻を爲ない

他の女の唇に、

他の女の柔胸に、と私は誓つたではないか？

HATSU-GOI

Kiyoku sumu nagare no uye ni
Akegata no usu-akari,
Are ! midzu-giwa ni shiroi hana
Suzushii kaze ni yureru aya,
Yuruganu midzu ni kage no matataki
Sono shizukesa ni sabishisa ni.

Hune ga yuku—minamo wo karoku,
Kusa-bue ga hoso-nagaku,
Minasoko ni tsuku aoi take
Yurugu yo ! asa no hashi no kage,
Hune ni imoto no kusa-bue ga naru,
Sawayaka ni, mata atatakaku.

Hito kikanu mune no tomo-nari
Kusa-bue no awai ne ni,
Hito minu mune no akai hana
Awai utsuri no omoshiro ya !
Hono aoi usu-ginu no ye ni
Waga yo no tabi no usu-akari.

— *J. Ishida.* —

しく叫びながら、戸の外を通りかゝる。エレニアンは窓のところに駈け寄る。外の叫び聲が聞える『取引所が燃えてるぜ！』武器庫が燃えてらあ！『漬が焼けてる！』火焔の反射光がこの室を華照する。』

エレニアン。 そしてもう、これが眞實にオッ ビッドマアニユを滅したら！

そしてもし、これ等の大篝火が、あの峯々の山頂から、

煙り立つ犠牲の血汐を空くしてうたたら？

オッ ビッドマアニユは、

その法典に蒐めたのだ、その律法に是認したのだ。

一と度は隠されてあつた罪惡といふ罪惡を、陰險な殺人といふ殺人を、

眞實の正義、眞實の善に背いた偽善と偷盜の凡べてを。

そして今その罪業を以て、腹一ツばいに飽き足つてゐる。

それでゐて酔ひどれては沈渣までも食さぼつてゐる。

そしてその沈渣でその下水の縁までも汚してゐる。

あらゆる魯鈍な罪惡、あらゆる穢れたる煩惱が、

その腰帶に垂れ下がつてゐる、夜も晝も。

そしてそれらのあらゆる乳房を萎縮させる飢ゑたる狼のやうに垂れ下がつてゐる。

それでもあの宮殿やこの小舎や、

もしあの輝やかな武器庫や、もしあの物凄い殿堂が倒潰れたら、

お前はあらゆる湖といふ湖、霧といふ霧の花であつた。

それをば私の燥急な手が、

私の境角た野原からもぎ奪つた、

そしてオッピドマアニユの眞ん中に植ゑ附けたのだ。

そして私はその土壤と、その流れと、その牧場の丘を、

お前の露はな眼のなかに、眺めながら、崇拜した。

そして私達は手から手に、心から心に、

私達の心のまゝに解放する愛に夢みて、

讚美しつゝ、寛恕しつゝ、小踊りしつゝ、何時までもこのまゝでゐやう。たとひ飽くことを知らぬ

その日その日が、その「時」を喰ひ盡くすにしても、

それでもまだ私達の運命が猶ほ私達を生かして呉れる間は。

死が焰のやうに私達の周囲を裏んでゐる、

夜が伏兵のやうに、そして夕暮が凶禍のやうに、降りて來た。

そしてご覧、あの無心の空を、

あんなに星が打つ衝かつては散つてゐる、

そして暖い焰のやうな灰が降つて來るわ！

(エレニアンの子供が彼れの父を抱くべく出て來る。父は殆んどこれに氣附きもせず、また彼れを忘却したやうに見える。群集が喧

起て、眞ッ直ぐに起て、

或る一人の男が来るまで起て、その男の信仰は私の信仰と同じものでなければならぬ、

その男は彼れ等のなかに灑ぐべき血を持つてゐる、

その信仰が彼れ等のなかに實を結ぶ爲めに、

そしてこの盲目な食れる世界が終に、

新しい神々の御意に造り變へられる爲めに！

クレエル。まあ！そんな恐怖しい目に逢つたり、そんな悲しい目に逢つたりしなければならないんでせ

うかね！

エレニアン。その恐怖や悲哀が何んなであらうと、お前は決してこぼしてはならぬぞ。私達は恐怖と、

懊惱と、新生に包まれた物凄い日に生きてゐるのだ。まだ誰にも知られなかつたものが主權者にな

るのだ。人間は彼れの頭腦の無限なる動搖を起して、過去のあらゆる過失の重みを振り落すのだ。

理想郷がその双翼を休めて、此の大地の上に理想郷が根付くのだ。私等を圍んでゐる敵軍がそれ

を知つてゐる。

クレエル。あなたは今朝、敵のことに就いて、何か新しいことでもお聞かなすつて？

エレニアン。まだ聞かない、たゞ隊長オルダンが昨日話したといふことだけ聞いたよ。此の男は幾週間

も幾週間も私に熱火と鐵火をくれてゐた男だ。この隊長は不可能なことを實現する人間の一人なの

だ。考へてご覧、この戦を、こゝで、位置も奪はれそして何の力もない首領となされる前に、彼れ

なさない塵埃のなかに滅えて了つたら、

この世界は深紅の焰花が翔るのを眺めては、または大風につれて、半途未來といふものに邂逅うては、大聲を擧げて叫ぶだらう。

しかしその市自身がその終焉に出逢ふにちがひない、靈魂は未來の事象に屬するが故に、

あれ等の事々物々は紅焰の波濤の底に沈むにちがひない。

私達の運命を結んだ捆包をば、

彼の女は尙ほその兩手に握つてゐる。

その運命をば狂暴な纖弱い手のなかに飼ひ馴らしてゐる。

馴らしてゐる、死に面して飼ひ馴らしてゐる。

明日の麗しい花苑を、

その扉を彼の女は廣く打ち開いてゐる。

その花苑が電の爲めに見る影もなく頽廢れてゐる、

そして死に絶えた事象々々に荒されてゐる。

それは不可能だつて、こんなことを言ふ男は狂人だ。

オッピドマアニユよ、彼の女の幸福な希望をもつて、

夜の暗に勝ち残つたる烽火の數を盡して、

もみな熱心なればこそです。

エレニアン。前置は省いて下さい。何をお話しに出でになつたのです、何を私に希望なさるので

す。

(領事に坐れといふ手振りをする)

領事。あすこの上に、あの墓場に居りますあなたの友人の立ち場は寔に心外の至りです。彼れ等は到底も烈しい襲撃に抵抗することはいたしません。昨日も代理官は彼れ等を慰撫するのに大分骨を折られました。何分人数から申しても、年若、氣丈夫と申す點から見ても申し分ないものですからね、是非とも彼等はオッピドマアニユの防禦にはなくてはならぬものなのです。今日までは、彼れ等はまだ謀叛人といふ譯には參りません。彼れ等是不満なのです、まあ言つて見れば同盟罷業を行つたといふまでのことなのです。それだけのことなのです。明日、あのあちらの方に擴がらうとしてゐますあの恐ろしい火の手を見ますれば、彼れ等は却つて變じて放火人となるかも知れませんが。憎惡はやがて亂行を伴ふものです、それでもし彼れ等が虐殺、掠奪でもいたすことになりません。れば、たゞ萬事休すでは済みません、それこそ耻辱のうちに萬事休したのです。

エレニアン。私は飽くまでも戦争を呪ふのです。この同じ國土の、人と人との間の戦は、異郷人との戦よりも、一層私の心を動かすのです。君等は、オッピドマアニユで戦争を起して、天と地を揺り動かしした。君等は人民の不幸といふものを創造つた。君等は人民に麵麴と、正義と威嚴とを拒んだ。君等は人民の軀と心のなかの專政君主となつた。君等はその人民の愚蒙と君等の不信と、君等

と私（わし）が討死（うちじ）をして、此（こ）の戦（いくさ）を斷つて了（しま）うのだ！外國の兵と吾々の兵の和解を實現するのだ！人間のあらゆる生活力と、人間の信仰のあらゆる潜勢力（せんせいりよく）を、その最高（さいこう）の目的（もくてき）の爲めに殺（ころ）して了（しま）うのだ！何（なん）と美しい夢（ゆめ）ではないか！

クレレル（優しく諷刺的に）何（なん）てまあくだらない夢（ゆめ）でせう！

エレニアン。希望（きぼう）といふものが斯（かく）んなにその双翼（つばさ）を擴（ひろ）げたからには、私達はその希望（きぼう）を拒（こ）む譯（わけ）には行（い）かぬ。今日（けふ）はありさうでもないと思（おも）つたことが、明日（あす）は完成（くわんせい）された事實（じじつ）として現（あら）はれるものだ。オルダンは大膽（おほぼ）ろげな憶測（おくそく）だけに、それほど頼（たの）つてゐるのだ、深い、しかし壓迫（おさく）せられた不滿（ふま）、内密（うちひそ）の默契（くわい）と内密（うちひそ）の結合（けつごう）だけに、それほど頼（たの）つてゐるのだ。軍隊（ぐんたい）は戰鬪（せんとう）を拒（こ）むのだ。彼等（かれら）は疲勞（つかう）れ切（き）つてゐる。彼等（かれら）は解散（かいさん）する。正義（せいぎ）の觀念（くわんねん）が天空（たかや）に漂（た）うてゐる。そこには誰言（たれい）ふとなく呼應（こたう）の聲（こゑ）が聞（き）える。火花（ひばな）は既に火床（ひどこ）に準備（じゆんぷ）されてゐるのだ。私はたゞ風（かぜ）が吹（ふ）いて來（き）てその薪（まき）と藁（わら）に燃（も）え附（つ）かせるのを待（まち）つてゐるばかりだ。

（エレニアンは大通りに於ける呟（ささや）きに耳（みみ）を欂（こ）てる。誰（たれ）か扉（かど）を叩（たた）く音がする。オツビドマアニュの領事（りやうじ）が室（むろ）に入（い）つて來（き）る。）

領事（りやうじ）。ジャック・エレニアン、私は、あなたがあなたの大義務（たいぎふ）を完（ま）つてくれんことを願（ねが）ひに、オツビドマアニュの代理官（だいりくわん）を代表（だいひょう）してお伺（うかが）ひいたした譯（わけ）なのです。吾々（われ）相互（ぎやうご）の思想（しゆきやう）は隨分（ずいぶん）と隔（へだ）つてゐるやうですが、この市（まち）を救済（きうさい）するといふ問題（もんだい）になりますれば、吾々（われ）相互（ぎやうご）の了解（りやうかい）は確實（かくだん）なことも考（かん）へます。私があなたにお話（はな）しをするといふことは、私が言（い）つて見（み）れば此（こ）の市民（しみん）の將來（しやうらい）の指導者（しどうしや）に對（たい）してお話（はな）しをするといふも同様（どうがう）であります。方法（はうほう）こそ異（こと）なれど互（たがひ）に此（こ）の市民（しみん）を愛（あい）してゐればこそです、しか

或は、潔白で、君自身の力で強硬だといふことに。

しかし君にこんなことを話するのぢやなかつたね——。

君はまた直ぐと故に還つてまた曲りくねつた不義の蜘蛛の巢を編むに決つてゐるよ。

不信、不義は神聖なものだらう

君等の仲間にとつてはねえ。それが君等を

支へ、君等を追ひ、君等を結び附けるのだ、

不埒な、最も恐ろしい不名譽のうちになあ。

領事。 それではあなたは少しの信用もお持ちなさらないのですね？

エレニアン。 ちつとも。

領事。 それでは、私はお暇を。(へ立ち上つて歸り仕度をする。)

エレニアン。 ご随意に……

(領事は躊躇する。二歩あるいて、彼れの決心を變へる。)

領事。 宜しい、吾々の言葉が吾々の實行に打ち勝つといふことは禍の基でせうよ。要するに吾々はた

だオッ ビドマア ニュの爲めに全力を注がねばならぬ筈です。

エレニアン。 君が此の室に入つて來られた時、私も仍りその心で君を迎へた。

領事。 あなたのやうな、事務家で且つ聰明な方は、何れほどまでに吾々がオッ ビドマア ニュの名と威

の敏捷と、君等の虚偽と、君等の諷刺と、君等の侮蔑とによつて、君等の事業を成就した。君等は耻づべき、責むべき人間だ。

領事。あなたは最少し心の冷靜な最少し晴明な、最少し高い判断を持つてゐられる方だと私は信じてゐました。

エレニアン。私は君の前で思索し、判断する時も、敵前で思索し判断する時も、變らぬつもりだ。私は憎む、しかし、君をお氣の毒だとも思ふ。

領事。（立ち上りつゝ）。これは亂暴な。

エレニアン。私に同情心がある、それに私の心が世辭なしだからだ。

領事。何といふ非道いことを仰つしやるのでせう。

エレニアン。そこだよ！ かしもし君に私の眞情を打ち明けるにしたところで、それが何うして町々の怒りや、村の恐怖を根絶させることができやう？

私の記憶は忠實だ。その記憶はちやんと武裝してゐるのぢや。

草薙鎌のやうに深く切り込むことのできる、いろいろな記念物でなあ。

その記憶は君や君の兵士達が行つた虐殺を算へ上げるのだ、

その記憶は君が持つてゐるその心靈を知つてゐるのだ、そして君に反抗するのだ。

君が正直で、信實で、正道で、

するのです。

あなたはたゞご覧になるのです、あなたはたゞお咄しになるのです、オッビドマアニユの罪惡の方面だけを。

エレニアン。君の光榮は全然滅びて了つたよ、地に屈伏して了つたよ。

オッビドマアニユの名劍をもつて正義を斬り殺して了つたよ。

今日では他の光榮が私の周圍に集うて來た、

他の光榮が私の胸のなかに萌え出て來た、

圓滿な强健な、純潔な彩の光榮が。

そしてこの光榮は清新な、深刻な正義と、隠れたる英雄心と、白熱的執拗と、必然的、利那的の熱動との上に建てられた光榮なのだ、これは君の光榮ほど光耀してはゐないが、一層それよりも確實なのだ。全世界はそれを期待してゐるのだ。吾々兩人が、君は恐怖をもつて、私は熱愛をもつてその光榮は避けがたい、しかも差し迫つたものだといふことを感ずるのだ、君が私を訪ねたのも私が、恰度戰敗者でも取り扱ふやうに、遠慮もなく君を取り扱ふその大勇氣が私に湧いて來るのも、みんな、この新しい光榮を感じればこそだ。君のご隨意になさい、君と君の境遇が允すかぎりご隨意になさい、何れにしても君は、この瞬間、私の承認、私の拒絶のまゝの捕虜なのだ。

領事。そりやあ考へちがひです……

化を押し擴げたかといふことを、誰よりもよくご存じの筈です。

オッピドマアニユの歴史は代理官と

領事の歴史でせう、彼れ等は燃え立つ金色の大空の直下に、

血をもつて輝かされた深紅の大地を飛び超えて、人の世界の果までも、

彼れ等の魔力の手をもつてその軍勢を引きつれてゐます。

時も時、吾々の周圍には、限りもない煩瑣が降つて来るぢやありませんか。

市民とそれの指導者達がお互に

戦場で敵對するといふ有様。そしてまた敵の彼奴等も、

彼方に、吾々を脅威し、吾々を包圍してゐる彼奴等も

嘗ては、吾々の飽くことを知らぬ軍旗、

深紅とそして凱旋の軍旗が、

彼れ等の雪の平原の上に、風のまに／＼翻へつてゐたのを昔の日が知つてゐる筈です。

オッピドマアニユはあらゆる人々の眼に花々しく輝いてゐます。

オッピドマアニユはその追憶よりも廣大なのです。

海と、大地と、風と、太陽が養うた追憶よりも廣大なのです。

戦争の罪惡と、そして戦争の有徳の行爲は、オッピドマアニユの光榮をそれ／＼に全然別様のものに

らお咄し下されと申すのでございます。オッピドマアニュを信する者は必ず英雄になります。吾々の人民は隠れたる復活の可能性を有つてゐるのです。

エレニアン。 萬一彼れ等が、あれから降りて來たとしたら、何ういふ待遇を受けますかね？

領事。 兵卒等は、我が軍隊で適當な階級に復職いたさせます、その他の人民は各自の家庭と家族とに歸つて行くことにいたさせます。もしまた、彼れ等が出奔しまして以來、その家庭内に貧乏が入り込みましたのであつたなら、それ相當の救済によつて、補助する事にいたします。其の他のことに關しては、あなたの思召し次第、何なりとお命じ下さい。誠實なあなたの仰せになる事でありますから、何に致せ。吾々は萬事あなたにお任せいたします。

エレニアン。 君は屹度その事に就いて誓ふかね！

領事。 これにございます。(彼れに書面を渡す) お讀み下さい。(エレニアンはそれを讀む、満足の色が面にあらはれる。)

エレニアン。 最一言訊かねばならぬが。私が先きに、あの村々の百姓達と、あの市々の老人や無宿者を引き連れて行つた時に、何の理由によつて、彼れ等は市の城壁から、敵の方へ追ひまくられて了つたのかね！

領事。 あれは眞個の誤謬でございます。あのことに就いては、あなたはお聞きになつた筈です。が。

エレニアン。 それで誰が、私の父を彼れの仲間の間に埋葬することを許可したのだ！

領事。 私がいたしましたので。

エレニアン。否！

私と同様に、君も克く知つてゐる筈だ、君は私の助勢なしには、何一つ爲出かすこ

とはできぬのだ。私の兩手のなかに、私はオッビドマアニユの深い精神的勢力を擧げてゐるのだ。

領事。

あなたは一帝國の癡亡が何を意味してゐるか、それをお忘れになつたのです。ありとあらゆる

古代の威力、ありとあらゆる時代の習慣が、それを支へてゐるのです。それに吾々は軍隊を有つてゐます。

エレニアン。

軍隊？

寧ろ、隊長達と言つた方が宜い。兵士達はいざとなれば所詮躊躇するか、または

裏切るかに決つてゐる。彼れ等は既に人民の味方とならうとしてゐる間際なのだ。彼れ等は私に

とつては、希望であり、君等にとつては恐怖である。もし彼れ等がみな君等に服従したなら、もし

君等があゝの人民等と兵卒等がぐるになつて企てる大叛亂を恐れなかつたら、君等は既にこのアヴン

チイヌを砲撃したにちがひない。

(沈黙。)

さよう、君は私に頼みに來たんでしたね、さうでしたね、彼處に登つて呉れつて、あの山に、あの

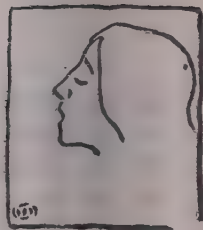
墓場に、そしてあの踏み附けにされてゐた人々の許に行つて、また彼れ等を奴隸にしてゐた君等の

なかに山を降つて來させて呉れといふのでしたね。あゝ！ 私の使命も随分危険な、生命懸けの仕

事だな！

領事。それはお考へちがひです。代理官は斯う申すのでございます。それはお互に私怨を捨て、一

心同體にならなければならぬほど、外部からの大危険が襲うて來たといふことを、あなたのお口か



落葉の底

藤井夏人

*

彼方^{あな}の森の裾^{すそ}ちかく、いく夜なかよふわがころ、
夜々に嘆^{なげ}けど光りを知らず、

たどる徑^{みち}すらに記憶はあらねども

夢にしたしむひびきあり。

森の秘密こそはげにや永遠の沈黙なり。

茫然としてそよとも揺^ゆれぬ闇の夜の空^{そら}に

ただずむ秘密の魔のすがた。

さはれわが緑^{みどり}りの色の夢の音^ねに

つらなる命^{いのち}のひびきぞあれば

よしや光りはあらずとも、森の秘密へそそがれて、

かよふころの音色^{おんいろ}あり。

エレニアン。うむ、お歸りなさい、代理官にお話しなさい、私はアヴンチイヌへ參ります。

(エレニアンは、窓口にすゝんで、なほ大通りに立つて居る群集に向つて叫ぶ。『私の家から、今ひとり出て行く男があるから、何とも云はないで通してやれ、かれは彼れの義務を果たしに來たのだ……今夜、墓場で、彼處で』

—— 第二幕第一景をはり ——

前號に掲げました佐藤清氏の詩「秘密の花」と、藤井夏人氏の詩「水繪の秋」には、次のやうな誤植があつたのでした。これは全く校正者の疎漏から生じたもので、まことに濟まない事を致しました。

一〇五頁の四行目、とじむはとじむに一〇六頁の九行目、びじしはびじきに一一六頁の末行、草淋もしは草も淋しに一一八頁の十六行目、暗き後には暗き夜に十七行目、寂莫の後の地は寂莫の夜の池に一一九頁にある夜の地は、二ヶ所ともに夜の池と訂正しおきます。

異國の都の宵のそら

いり日のあとの青い空。

白きやかたの大理石、露台のほとりつつましく
鞆音くらねかるくすすみ出しをんなごころの憂きすがた。

今はゼノバに移りすめども

バルセロナのかはたれどきの思入り、

ロオヌの河のながれてそそぐ彼のあたり

リオンの海はかなしかる。

破れはてしイスパニの戀はいまなほ忘れざり。

青いやかたの裏庭に

かくるる丘の秋の日に

語りし戀は夢とぞ消えし、花とちりにし。

*

わがふるさは北の國の山がひの

花さく晝ひるの短きところ

光りは弱くななめにて

だ、あの赤にもなかれぬ。

闇の中にも白き素肌に觸れしかな。

かくていつまで涯しなく

闇のひびきにふところ。

*

さるにてもこころゆくばかりの雨にさふらはずや。

秋のゆべに何といふ雨にさふらはずや。

窓をばへだててほのかに見えし庭木立、

そがえだに眸をすゑて夢見る小鳥、

葉蔭のしづくにさざめなくかな。

冷やけき秋のゆふべに小鳥は鳴けども

わが窓に赤きひかりも見えずひとりさみしき物おもひ。

せめてとりいだす笛のねに

ほの暗き思ひての秋のあめ、

草場にぬれた過ぎし夢、しとしととたどる過ぎし夢、

あはれ秋のゆふべに何といふ

心いたみの雨にさふらはずや。

*



時評

學制の改革

維新の改革に功を奏したる我が日本は、何事につけても、改革せずんば偉業をなす能はず、と云ふやうな氣分になつて居るやうだ。果して幾ばくの弊害があるかと、未だその効果が見えて來ないのではないかと。或は弊害があるにしても、その由つて來る所は何れにあるか、などの問題を充分究めずして、氣分の上から漠然と改革を叫ぶに至ることがあるやうである。

我が邦の大學教育は、餘り多くの歳月を費やすから、その短縮を計らなければならぬと唱へる者がある。それは誠に理由のある話である。大學を卒へる爲めに、平均二十七歳何ヶ月を數ふる國が何處にあらう。これでは餘りに年を取り過ぎやう。然し小學を十二歳で卒へ、それから算中に五年、高等學校に三年、大學に三年乃至四年居るとしたならば、二十三歳、乃至二十四歳で、大學の卒業が出来る筈である。然るにそれ以上かゝらなければ、卒業が出来ないのは、諸種の學校に入學試験と云ふ關門があつて、就學を困難ならしむるからである。高等學校や、大學の年限を短縮

したからと云つて、短縮の利益を受くるものは、比較的少數な、その學校の學生にのみ限るわけである。既に入學して居るものが、一年や半年早くならうが、遅くならうが、大した關係はなからう。それ以上の問題は、高等學校や、大學に入學せんとする多數の學生をまごつかせないやうにせしむることである。然るに志願者の七割も八割もは、如何なることがあつても、入學が出来ないとなれば、そこでそれ等の人々は是非ともと云つて、二度でも三度でも入學試験を受ける。すればこゝに二年や三年、しかも大切な時代の二年や三年が、無益に夢の如く過ぎ去る事になりはしまい。か。そしてこんな運命に居るものは、幸に入學した二割三割の學生よりも、數に於いて遙かに多いではないか。

しかも落第者は決して劣等者とは云へないのである。試験而かも一度の一寸した試験ほど、學生の眞の腦力を計るに足りないものはない。否、百歩を譲つて、試験で眞の腦力が分かるとしても既に、敗者の人員に定數があるとすれば、いくら學力の優等なものも、揃つて居たところで、やはり七割か八割の落第を出ださざるを得ないのである。僕は今の學生の七八割と云ふ大多數が、劣等な頭腦の者であると信ずるほど、學生諸君に對して、悲觀を懷くものでない。否、教育の方法益々その宜しきを得て來れば來る程、愈々優等生が落第するやうになる。そして此の多數の學生が大迷惑をするのである。

斯う考へて見ると、學制の改革は、修學年限の短縮など云ふ姑息の療治よりも、多數の學校を増設して、志あり且つ能力ある學

*

なつかしく過ぎし日のおもひてを
夢の夢としかぞへきて

美しき桐の小箱こばこにをさめけり。

うつくしき事のたぐひをおしなべて

夢よりうまゐるものとせば

すぎし日の夢とてわがたからなり。

されども移りゆく日の痛みにふれては

悲しとも、知るやさみ、このすさみゆく心をいかにせむ。

*

柔かき秋のひかりにそとふれて

ふるえるコスモスの花のごと

弱よわい弱い光りにも、

胸をいたむる淋しさを

もろ手に抱くわがなげき。

落葉の底に埋もれゆく

うしろ姿を誰かしる？

(一九一三・一〇・二〇午後二時)

るとき、そこに創造の必要を感じ、成長の過程を意識して、さてはまた生命の神秘に驚かざるを得ないからである。併しながら、これを言葉に出して唱へるのも餘程考へものである。十月の『創造』の眞生活號で片上伸氏も云つた通り眞實に生命を痛感し、創造の歡喜や悲哀を味つても居ないものゝ誰れも彼れもが、聲を揃へて創造呼ばはりをして、生命論を主張するやうでは、それ等の言葉の眞の生命を殺してしまふ。靈魂のない佛も同然なものに爲してしまふ。『白樺』の武軍小路氏などは、餘程以前より生長や創造の歡喜に燃えて居る様な感想を書いて居た。それを讀んで居ても、格別變だとは思はないで、眞實生命を直感して居る氏の生活や藝術などには、一種の尊敬を感じざるを得なかつた。然るに近頃、大分この雜誌の感化を受けたものらしい——若しくは共鳴——人々のうちには随分思ひ切つた言論を吐いて、自分のみが生命を痛感して居て、他人は殆んどその特權に預り得ないかの如くに怒號し、さも得意らしく他人を輕蔑するとか、自分はムク／＼と成長して居るとか云ふ様なことを、臆面もなく囁べりたてゝ居る。私はもとより他の内生活に立ち入ることは出来ない。その人の意識を私自らに實驗することは出来ない。だから私は、その人の生命を貧寒だとも潤濕がないとも何とも云はない。併しながら、たゞ一つ私の希望を語らしむるならば、私はそれ等の人々は、たゞ斯くの如き元氣のいふことばかり云はないで、今少し内省的になつたらどうかと思ふのである。創造とは、たゞ物の中に自己を擴張するばかりでない。外に出すことばかりが創造でない。出す

前には入れねばならぬ。出す前には養はねばならぬ。そしてそれは皆創造である。私達はあの様な元氣のいふ聲をきいて居て、何だかまだ眞實に満足し得ない缺陷をその中に見出さずには居られない。それ等の人々の生命とは、抑も何であらうか。それ等の人々の肯定し、主張する自我の權威の根柢は、何處にあるのだらうか。一向そんなことはそれ等の人々の言論からは感じられない。あれ程にまで生命の力を痛感して、慄へて居るのなら、少くとも生命の神秘に驚異の胸を躍らすべきでなからうかと私は思ふ。そして再び生命そのものに就いて、もつと内省的な考察が向けられねばならぬ筈だと私は思ふ。併し私は不幸にしてそれ等の人々の思想が、未だ茲に至つて居るのを見ない。

自我の覺醒は、ほんの覺醒であつた。從來の囚はれた束縛に對する反抗としての覺醒であつた。而してそれには未だ、自我の權威に對する哲學的根柢が與へられて居なかつた。少なくとも多くの人々に於いてさうであつた。併し、兎に角に覺めたる自我は、自己の世界に進んで行つた。そこに多くの障害はあり、苦痛はあつた同時にまた創造の歡喜があり、成長の意識があつた。そして私達はまだ再び生命そのものに面接した。今や再び、眞面目に生命に就いて考ふべき時が來たのである。そして自我の眞權威は茲に定められやうとして居るのである。その時が來たのである。

柳宗悅氏は眞面目なる學者的藝術家である。氏が夙に藝術及び宗教を科學に結びつけて、茲に新なる氏の世界を創造せんとして居ることは、今まで發表した氏の大きな努力になれる論文によつ

生をどし／＼收容するにある。學生は學校の時間表に現はれざる處に於いて、如何に時間なり、金錢なり、腦力なりの浪費をして居るかを考ふべきである。けれどもそれは、經濟が許さないと云ふ者があるかも知れないが、學校を増設するのに、どれだけの金が入らう。軍艦を一艘造るのに比べたらば、實に少くないものである。つまり増設しやうとする勇氣と熱心がないから出来ないのである。

また現在は高等學校の入學は九月で、尋中は三月に終り、そこに約半年間の無益な時間があると云ふものがある。若し尋中が三月に終り、高等學校が四月に始まり、そして高等學校から大學へ移る時に、約半年の餘裕があつたら、より良からうと思ふ人がある。けれどもさう一方が終れば、直ぐ他方が始まると云ふやうな、少しも、休ませない方法は考へものである。餘りに餘裕を與へないのは、人間をこせつかせてしまう。さらぬだに烏人心根だと云はれて居るものを益々烏人心根らしめるに相違ない。自然だつてさうではないか。つい一週間位のあいだ咲いて居る花でも、花を開く爲めには他の一年を費やして居るではないから。他からは休むやうに見える間に、實は準備をなすつゝあるのである。休暇は無益のやうに見えるが、實は平常押しこんだものが、此の間にゆつくり消化するのである。餘り急ぎ過ぎて無暗に押し込んだらば、下痢を起こすに過ぎない結果になる。

今の學校教育で、學生の人格を養成する事が出来るかどうかは問題である。然し當局者の方からは、之を無視するとは出来まい

けれども馬車馬的に通過する學校でそんなところが今より以上に望まれやうか。年限の短かい所で、それが今よりもよりよく出来やうか。今までのとを以て満足しないものは、改革案を此の方面から見ても危い案だと思はざるを得ないのである。凡そ一の學校にはその校風などもあらうが、短縮されたる馬車馬的の學校では、人格養成などはとても出来がたいものである。

普通の人にはさう深遠な學理は入らない、と云ふ者もあるが、これも近視眼者の云ふとである。醫科大學の卒業生たる醫學士と内務省の試験を受けた開業醫とでも——除外例はあつても——普通開業の初めは同じやうに見えるが、年が経つに従つて、一方は進歩するが、一方は初めと殆んど變らない。素養を積んだ者は、積んだ丈けの効能が現はれるものである。

されば世間に傳はつて居る學制の改革案なるものは、どの點から考へても、淺薄極まるものである。もつと根本的な改革案を工夫しなければ、大に青年を過まり、また國家百年の計を過まるものである。かう思ふとき、吾人は實に寒心に堪へないのである

(三並)

文壇に於ける生命の問題

近頃の思想界の趨勢は、自覺とか、覺醒とか、自我とか云つた様なことから漸く移つて、生命とか、創造とか、成長とか云ふことが切りに唱へらるゝに至つた。蓋しそれは自然の數であらう。一度自我に目ざめて、自我自らの世界を築いて進んで行かうとす

て其處に生命の潤ほしを享けて居ることを意識すると同時に、また生命力そのものゝ尊嚴を思はずには居られない……』と云つて居るが、私には何だかまだ、それでは物足りない様な氣がするのである。不思議な生の力、せめてはその正體を突きとめられないまでも、一切の自我を打ち任せ得る丈の確然たる根據をその中に認めた。

それからまた氏は、生命を伸びゆくまゝ伸びしめよ、生命力の命ずるまゝに只生きよ、と云ふことは、理想的ではあるが、その様に滑らかな生命の流動は、中々容易に得られない。新緑の木の芽が萌え出るのは、自由な生命の流動ではあるが、そこに至るまでは冬の暗澹たる壓迫があることを忘れてはならないと云つて居る。『ただ生きよ』と云ふことは、私がよく云つたことである。併しその意味は内藤氏の了解するのとは稍異つた形式をとつて居る。

私が云つたのは、たゞその結果の滑らかな流動ばかりのことではなかつた。冬の壓迫に對する反抗——若しくは防衛——をも含んで居たのである。努力をも含んで居たのである。それ等の壓迫と戦ふプロヴセスそのまゝが創造の生活であると云つたのである。而してそれは實に、誠に貧寒ではあるが、自己の生命に對する信愛から生れた當然の生命の方針であつたのである。自我の眞實は、一種の運命である。その運命に服従して、そこに自由の生活をする。この服従の自由の生活をもつて、わが生活の方針と定めると云ふことであつたのである。けれども只天才ならざる私は、また超人ならざる私は、その生活の實に苦しい淋しいことを知つて

居るのである、

阿部氏の難惑には、創造に對する明瞭なる判斷が下されてあつた。創造は『潜在の發掘』であると云つたのは、私の所謂『形となつて居ない形、知識となつて居ない知識』と同じ様なことであらうか、私はその『潜在の發掘』と云ふことを今少し説明して、生命の根柢を明示してもらひたかつた。

片上氏が『創造』と云ふ言葉の濫用を難じ、何處までも眞實に、内省的に、自己の眞實の生活に進んで行かうとする態度は、實に奥ゆかしい感じを起させる『肩ひぢを張つて居る様な氣持を與へる創造論や個性論ほど貧しい寂しい而かも亦滑稽な感じをさせられるものはない』と云はれたあたりも實に同感である。そしてまた創造とは、調和あり統一ある生命の中心の力が、不斷に延びて行く持續的進行であるとせられたのも道理である。併しそれがすなほな無理のないものでなければならぬと斷ぜられたのは、何うであらうか。蓋し私達は、裏に生の力を感じて居ても、外には社會的、運命的、または自然的の多くの障害があつて、中々さう容易には創造の生活をつゞけては行かれない。そこに難澁があり、苦闘がある。私達は何時もこの苦難と闘つて行かねばならないのは無からうか。たゞそれを持続的にやつて行ける力がほしいのである。その力の泉を常にもつて居たいのである。

私はまだ二三の諸氏の生命論に對して感想を述べたいけれども紙面がないからこれで止めねばならぬ。

これを要するに私も亦、眞實この創造の原動力たるべき生命そ

でも知られる。『白樺』の九月號及び十月號に發表された生命論は現在のこの思想界の要求に對して、最も適切な提供である。學者の生命論は乾燥無味、砂を噛むやうである。文士の生命論は、餘りにその内容が乏しい。獨り氏の論文は、その何れをも補つて居る。私達はこれによつて格別新しい議論を學ばなかつたかも知れない。併し私達の常に考へて居たことを、科學的智識によつて裏書されたと言ふ喜びは、どうしても拭ふことは出来ない。私達は大いにこれに向つて感謝しなければならぬ。たゞ一つ私は氏に對して嫌らなく思ふのは、氏は常に科學的又は哲學的の議論を闘はすばかりであつて、たとへば、氏の生命觀を氏の人生に實行して、そこに如何なる生活經驗をなして居るかを聞かないことである。私達の要求は、生命の哲學的根柢と共に、更にそれよりも以上に自我の眞實なる生活そのものである。その爲めに私達は創造するのである。その爲めに私達は努力するのである。そして他人のその經驗は、生きた一つの力となつて、私達に迫まつて來るのである。柳氏にして若し單なる學究たるに甘んぜんとするならば即ち止む、併し私は氏をしてさうはさせたくはないと思ふ。私は氏の生活經驗をききたい。武車小路氏等の書く感想の様なものをききたい。

『創造』の眞生活號には、文壇の諸氏の『生の創造と藝術』に關する論文や感想が集められてある。私はこれを読んで、眞生活號と稱するには、餘りに内容が空疎でないかと思はざるを得なかつた。總じて云へば、皆、生命とか自我とか云ふものゝ眞の姿に觸

れやうとはしないで、成るべくそれには面を背けやうとする様に思はれた。私は日本の文藝界に、今少し哲學的要素の加はらんとを切に希望する。少くともその時になつて居る。

併しながら私は、それを悉く駄目だなど云ふやうな剛慢には陥りたくない。眞面目な眞生活欣求の士が、少からずあることを心強く感ぜざるを得ない。數ある中でも特に私は、内藤濯氏の評論と、阿部次郎氏、片上伸氏、石坂養平氏等の感想を嬉しく思つた。何れにも皆、眞實の氣分が濃厚に表はれて居たからである。私はそれ等に就いて、一二の感想を語つて見たい。

内藤氏は云つて居る――

『生命の創造、流動、躍進、成長を實感し得る心ほど、私にとつて慕はしい心はない。涙を覺えるまで懐しく思ふ心はない。けれども私たち人間は、何等の動力もなしに、準備もなしに、背景もなしに、たゞ端的に生命の創造圈内に躍り入ることが出来るであらうか。一切をうち任せて其處に何等の悔恨をも感じないほど、強みのある自我を把握する事が出来るであらうか』と

そしてその背景をもつて、『生命の信仰と愛慕』とにありとなして居る。私もこれには至極同感である。私達の眞實に生くところの力は、たゞこの生命を信ずる背景にある。それ故に私は、常にその生命を信じたいばかりに生命を探索して居る。けれども氏が生命の信仰と愛慕の理由として、私たちの小さい朽ち果つべき五尺の體軀の中に潜んで居る生の力の爲めだとなし、『自分の生活と云ふ生活が、何時盡きるとも分かち難い現在に浮んで、そし

宗教と教育との協和

昨年春、明治史末の意義深長なる一事件として、三教の合同があつた事は、猶ほ記憶に新しいところである。彼の會合の含有せし意義は、三教者一堂に會同協和の精神に充ちたといふ事よりも、寧ろ政府の宗教に對する態度の一變、隨つて教育と宗教の接近といふとであつた。尤も彼の會同に對し、教育界に多少反對の聲が無いでもなかつたが、已に政府として彼の態度を明白にした以上、且つ彼のとき引續き開かれた教育家宗教家聯合の會合に、有力な教育家の出席が多かつた事に徴しても、教育界と宗教界との協和が、幾分實現されかゝつたと云うてよい。然るに其の後行政整理の結果として、宗教局は文部省に移され、愈々教育と宗教との接近を加へた觀がある。近く文相はそれ／＼三教者を招請して、一堂の中に懇談する所があるさうであるが、吾人はそれが爲に好結果を兩者の間に持ち來すべき事を疑はない。

併し今回開かるべき教育當局者と宗教家の會合は、昨年より別種の意味において興味がある。第一、前回は三教者を一堂の中に會合せしめた點に、深大な意義があつた。これは謂ふまでもなく從來動ともすれば相反目しがちな三教者を、政府の手によつて會見せしめたといふとである。之に對しては、一部佛教徒間に反對もあつた様だが、兎に角大多數の佛教者は、襟度の廣闊なることを示した。然るに更に回を重ねて、政府當局と宗教家が會見懇談せんとするには、三教各々政府との關係を異にして居るが故に、

三教各別に會見するのが寧ろ當然であらう。即ち今回は會同にあらずして招待といふのもけだし此の邊に深穴な意味がある様に思はれる。朝日新聞の如き有力な新聞が、尙ほ此の點について、三教者に對し差別的待遇を與ふるのだから、云つて居るのは、吾人を以つて見れば、甚しき偏見である。

すでに今度の會合を目して、如上の性質を帶ぶるものと解するのが、最も合理的であるとすれば、教育當局者と宗教家は、各自充分に懇談的態度に出で、會見の意義を實現すべきである。幸ひ基督教は、教育當局者と談ずべく多くの問題を有つて居る。殊に基督教は現代青年の思潮に最も密接に觸れ、いはゞ教育者の養育するものゝ内實を熟知して居る點に於いて勝つて居る。教育當局者は、彼等と相懇談する際、最も此の點において得る處あるに違ひない。現代の教育が、青年の中心に觸れず、兎に角上二りの感があるのは、惡するに充分彼等に就いて知らざるが爲めである。近ごろ新任の某高等學校長が、青年を教育するのには、先づ彼等を解さなければならぬといふ點からして、切りとオイケンヤベルグソン、乃至は青年雜誌等をあさつて居ると聞いたが、遅時ながら教育者としては、寧ろ此の位の眞摯な態度があるべきだと思ふ。教育當局者は宜しく此の會同をして、單に形式的外交的辭令の交換位に止らしめず、飽くまで國民教育のため貢獻する機會となさねばなるまい。

それについて吾人は更に基督教側に向つて一言したい。從來我が國民教育と宗教、殊に基督教との間には、甚しい阻隔誤解があつ

のものを如實に痛感したのである。その爲めに私達は努力をしなければならぬ。今は互に協力して、その生命の泉を掘り當つべきときではあるまいか。(加藤)

顯官の犯罪

吾等は最近に於いて、三人の顯官の犯罪沙汰なるものを見た。

一は前神奈川縣知事周布公平男の謂はゆる金屏風事件、一は前愛知縣知事深野一造氏の收賄事件、而して、尙ほ他の一は、前警保局長古賀廉造氏の民國貨幣偽造事件である。

吾等には何れも全く思ひ掛けぬ所であつた。然も其の何れもが、廉耻心に關係あるものなるに至つては、吾等殆んど言の出づる所を知らぬ。周布男の如きは、八九年の長い間、横濱に知事たりし人、而して其の長い間の官舎生活は、官舎の品その物をも、自己の私有物視せしむるに至つたのであらうといふ人がある。心理的に觀察してさもあるかと思はるゝのである。深野知事の如きは、評するの辭がない。收賄の原因たるや遊廓敷地問題である。苟くも矯風の思想ある牧民官ならば、移轉の運動の起る時に於いて、適宜の處置をすべきではなかつたか、獨り事ここに出でざるのみならず、其の醜運動者の上前をはねたりといふに至つては、醜の醜なるものと言はざるを得ぬ。吾人は久しい以前より、かゝる噂を耳にしてゐた。今や法律上の事實として吾人の眼前に現はれることを、悲しまざるを得ない。古賀氏のことに至つては、眞に意外の意外とするとところである。氏は

法學博士にして且つは刑法通を以つて知らるゝ人、偽造事件其の物が果して如何なる犯罪を構成するかを、知らなかつた道理はない。況んや當時警保局長の現職にありし人、吾人は實によもやと思ふのである。第一審は決定したが、控訴中である。結果を待ちての後にあらざれば、兎角の批評を下すを得ない。たゞ吾人は思ふ。以上三例の事實は、吾人に對して果して何事を語るものであるか。多言を要せずして知る、是れ則ち現代思潮の底流たる愛憎思想、唯物思想の案外強烈なる事を暗示するものなることを。

政治家になるにも、素手ではなれぬ。學問をするにも、空拳を如何せんやである、住むに食ふに寝ぬるに、無くてならぬものがないければならぬ。學者は之を稱して資本主義的傾向といふ。此の近世資本主義的傾向の爲めに、現代の文明が、如何なる程度まで其の進歩其靈化を阻まれて居るか知れぬと思ふ。吾人は此の思潮が、現代人心の根柢を流れつゝあると思ふ。吾人は此の底流をば如何なる方面に向つて、如何に導くべきか、これ實に現代に於ける重大なる問題である。

いづれにもあれ、官界の要路にあつた人々が、相次いでかゝる事件に遭遇されるやうになつたのは、一面に於いて、官界の權威を失墜すること大なると共に、更に他の一面に於いては、世の青年子弟を毒すること甚しからうと思ふ。現代は實に非常なる時である。吾人は切に時代の識者に向つて、一層の戒慎を要求せざるを得ない。(鈴木)

類ならんのみ。

共和にもあれ、専制にもあれ、乃至立憲にもあれ、政體の如何は吾人に取つて問題でない。けれどもたゞ民意を基礎とせざる政治は、如何なる政體、如何なる國家たるを問はずして、今日以後の文明國に於いては、成立せざることを確信する者である。要するに支那の共和政治は、僅かに試験期に入れるのみである。其の如何なる成績を持ち來すべきかは、之を時の経過に待たねばならぬ。況んや其の所謂代議院たるものが、或は武力の聲におびやかされ或は黃白の光に眩惑して、敢て袁を仰ぐ能はざる、猫の前の鼠の如くなるに於てをや。吾人はたゞ靜かに萬有の流動を觀、人心の推移を見つゝ、大なる天啓を讀まんとする者である。(鈴木)

公衆劇團の印象

このごろの藝術界で、其の中味は姑らく問題外として、ともかくも目ざましく感じられるのは、新しき劇團の續出であらう。數ある劇團のうちで、島村抱月氏を中心とする藝術座は、その成立が幾度かの波瀾を経たことゝ、演技者諸氏の若々しい努力とによつて、一般の興味を惹きつけたが、この月の一日から、帝國劇場で旗上興行をやつた公衆劇壇は、演技者がこれまで多くの舞臺を踏んできた人たちである事と、數ヶ月に渡つた烈しい練習の歴史とによつて、これもまた夥しい觀客を蒐める事ができた。

私は公衆劇團の演技を見て、藝術座あたりの技藝員諸氏が、どこまでも内から舞臺を生かさうとするだけの努力を示して居るの

に對して、この劇團の俳優たちは、まづ技巧の中心點を見極めて置いて、それに中味を當てはめやうとするのでは無いかと思つた。河合氏の扮したエレクトラには、たしかに人を魅するやうな聲調の力があつた、壓迫を感じしめるほど力強い姿勢があつた、ながい臺詞を難なく繰りだして行けるだけの變化と緊張とがあつた。けれども、それらは凡べて技巧の光に過ぎなかつた、舞臺に馴れてゐると云ふ特權からして生み出される力に過ぎなかつた。さうして觀客に向つては、作者ホラヤンスタアルの象徴力が、内容の上に成り立つて居るのではなくて、むしろ形式の上に繰り込まれて居るのに過ぎないと思はせるだけ夫れだけ、一般の技藝に云はゞ内化力が缺けてはゐなかつたか。

意外にも何等かの意味を擲ませられたのは、「エレクトラ」の前に演ぜられた『茶を作る家』であつた。勿論この脚本には、私たちの心を奥の奥から引き起すほどの深さも力も缺けてゐるが、至つて素直な、すつきりした自然な作であるとは、たしかに云へると思ふ。殊に苦界に身を沈めた妹の眞情を見せつけられて、「僕は今まで人の皮相ばかりを見て、徒らに人を罵り、人をおとしめてゐたが、社會はわれ／＼の信ずるほど單純なものではない」と云ふ一教育家を點出したところには、たとひ他人は何と云つても、私たちの日常の問題に觸れるところがあつたと云はなければならぬ。私は今こゝで、登場者それ／＼の演技を細かく批評するだけの時間を有つてゐない。けれども私は、この劇が少なくとも日本の現代社會に對する問題劇として、相當の價值を表現し得たも

た。三教合同後、中央に於いてはこれが一掃された観があるけれども地方に於ては傳道集會或は兒童日曜學校の方面で尙ほ教育者側からの反對と障害を受けた場合が往々にあるらしい。斯かる事件が起くるのは、畢竟中央教育當局者の本意が、未だ地方まで徹底しない所にも因るのは勿論であるが、中央教育當局者が、斯種の事實を實際餘り知らないからであるまいか。この外、また世間存在す大頑固偏狭なる宗教家のために、些々たる事を提へられて、遂に一虚を映へ萬犬實を傳ふるの次第ともなつた事がある。この點については兩者の賢明な判斷と、沈著な態度に俟つより外はないが、前者の場合に取つては、宜しく教會側から、斯る事實の例を慎重詳細に調査して、當局者の反省を求むべきである。兩者間に意志の疏通があつた今日では、お互に胸襟を開き、萬事を語り合ふの態度とならなければ駄目である。併し基督教の側では、只自分達の不便を訴へた丈で、協和の實は上らない。教會の方には、今日でも尙ほ居留地民的氣分から充分に脱してゐないものもある。或種の教育家などに、未だ基督教會に對して、充分な安心をもつて隨心事を得ざらしめるのは、恐らく此處に原因があると思ふ。また何も教育者許りではない、國民の大部分に尙ほ疑懼の念を懷かしめるのも、此の故であるまいか。古い言ひ草であるが、基督教の精神をよく體現する日本國民としての生活に之を實現したければならぬ。個人としては勿論、教會としても。そして今は最早其の時期が來つて居るのである。吾人は兩者が百尺竿頭尙ほ一步を進めて協和協力の實を擧げん事を邦家の爲めに祈らざるを得ない。(菊

(川)

中華民國の承認

中華民國は遂に、諸國の承認するところとなつた。假大統領袁世凱氏は、其の多年の宿望を達して遂に大統領の桂冠を戴き得た。中國も或はこれより小康を得るであらうが、支那の人民に對して共和政を布くことは、實に大なる冒險であると思はれるのである。

吾人は支那に就いて多くを知らぬ。殊に政治上のいきさつに就いては、殆んど何事も知らぬ。従つて其の政權推移の經過に對しては、批評するの資格はないが、併し純專制政治より急轉直下、一躍して純共和政體に入つた事は、たしかに文明史上の一大事象である、たゞ支那に於いて果して、共和政體が運用しされるか否かと問題である。

共和政體の運用には、先づ人民の覺醒を前提とする、政治的知識の修得が、先決問題である。現代の支那人に、此の覺醒と政治的智識とがあるであらうか。支那人は由來貧賤な民として知られて居るのではないか。支那の官吏は、金力を以て官を買ひ、其の任官中に於て、收斂を事として以て私財を作るとして知られて居るではないか。而して其の政治の實際たるや、賄賂公行し、或は巧言令色、或は權謀術數、或は恫喝脅嚇、以てたゞ眼前の政治的波瀾と共に、一上一下するを以て能事として居るのではないか。斯くの如くにしてよく共和を談ず、夫れ恐らくは様に依つて胡盧を描くの

教會歴訪記

(一)

實業界及び工業界に於ける 早稻田の貢獻は、之を將來に卜せねばならない。將來この方面に於ける活動は、驚くべきものがあらうと察せらる。何となれば、商科と理工科は、既に少なからざる卒業生を社會に送りたるに止まらず、現に多くの學生を養うてゐるからである。

吾人は早稻田大學の祝典に敬意を表して、且つ將來の發展を祈る。大隈伯は政治家として失敗したけれども、早稻田健兒の總長としては、明治大正の元勳中の誰しも及ぶ能はざる位置を占めてゐる。高田博士の經營の才に至りては、現今の日本に得易からざるの器である。同博士にして五十年祭まで、學長の職にあらんには

早稻田の發展は更に更に目覺ましいものがあらう。

さばれ早稻田大學も、やはり時勢の兒である。明治渾沌期の長所も短所も、併はせ有してゐる。その輪廓は描かれたが、その充實は將來のことに屬する。早稻田は學問の活用を標語として、多くの敏腕家を出した。未だ人理想を把持して、奮闘する士を多く出さない。この點に於いては、同志社のごとき誇るべき或物を有してゐる。早稻田にして更に功名心を學界に逞しうせんとせば、この大理想の上に立たねばならない、然らずんば沙の上に築かれたる家に終ることがないとは云へない。

吾人は祝すると共に、規すのである。(一記者)

ある。

十月十二日の日曜日、午前十時、飯田町の同仁教會を訪問して牧師松尾音次郎氏の『肉體の死後』といふ説教を聴いた。十一時になつて、漸く壇上に松尾氏を見ることができた。説教時間約三十分、集會者男女おの／＼十二三名。堂内があまりに寂しい。そして儀式があまりに形式的である。

松尾氏説教して曰はく――

肉體の死後、靈魂が永久に存在するといふ信仰は、古代よりの信仰であつて、現代の發達した科學も、いまだ此の信仰を、證明する事も否定する事もできない。しかし、宗教は信仰の立場から靈魂の不滅を固く信ずるものである。私もまた其の不滅を信じて

併し今日は、靈魂の不滅といふとを、信仰上から或は哲學的に立證するのではない。全く別な方面即ち、實際生活の方面から説いて見やうと思ふのであると述べて、先づ氏の態度を明白に示した。然らば如何にして實際的方面から、靈魂の不滅を證するかといふに、それには一つの原則がある。古人が『朝に道を聴いて夕に死すとも可なり』と云つたやうに、我々が自己の生活を遺憾なく發揮し、完成した時には、もう外には何等の望みもない。自分はこれで充分満足である。今夜、否、すぐさま死んでも、何の悔いも惜みもないと思ふのである。是れが根本の原則である。即ち我

のだと云ふに躊躇しないのと同時に、人間の外面的態度が、やがて惨ましい廢滅を來たすものである事を痛感せずには居られなかつた。

「エレクトラ」に次いで演ぜられた「女がた」と云ふ喜劇は、森鷗外先生の作と銘うつてあつたが、それが本當なら、先生は甚しく考のない事をされたものだと思ふほど、私たちの同胞は低級であらうか、賤劣であらうか。あれが諷刺を目的とした作なら、私たちは諷刺なるものゝ力を全く否定しないわけに行かない。私はこの作が森先生の御手になつたので無い事を信じた。 (内藤)

早稻田大學創立三十年祭 を祝して

今日東京に於いて、私立大學は早稻田と慶應とを二重鎮とする。他に多くの學苑があるけれども、その内容と實質とに於いて、二者を凌ぐものはない。

慶應は嘗て五十年祭を挙げたと記憶する。早稻田は此の度三十九年祭を施行した。僕等の理想としては、教育のごとき堅實にして地球なるべき事業が、お祭り騒ぎをすることには、餘り賛成は出來ぬ。しかし何もかも官營万能の日本に於いては、民間の教育事業が、局外者の理解する能はざる多くの困難を有する。私學が時に一種のデモンステレーションをなすのは、自己防禦の方法とし

て缺くべからざるものであらう。而して三十年前の創立當時を追懷すれば、數十の學生と、數名の教師と破屋とがあつたのみである。人は即ち一萬餘の卒業生を有し、一切の附屬學校の生徒を合算すれば、城北の大學府に學ぶもの正に八千。誰か今昔の嘆に堪へんやである。況んや理工科の設備なりて、綜合大學の意義漸く發揮せられんとする時に當りて、一大祝典を舉ぐるのは、決して無意味のことではない。

吾人は早稻田大學の前身者たる東京專門學校の遭遇したる迫害と誤解と、それに處して宜しきをえたる當局者の態度を賞讃せざるをえない。當局者は自ら奉ずること薄く、宗教的敵身を以てその經營に任じたのであつた。彼等は涙をもつて蒔いたのである。今、喜びを以て刈るのは、天地の理法の體現ではないか。

早稻田大學は、學問の獨立と、その活用と、模範的國民の造就とを以て理想として。早稻田の學苑は、自由の精神の磅礴たる處である。官學の容るゝ能はざる多くの學者を招致したるは、早稻田の光譽である。日本の立憲政治は、極めて幼稚である。されども若し、早稻田出身の少壯記者が、健筆を揮つて憲政設立を呼ばなかつたならば、その進歩は更に遅々たるものがあつたであらう。今日の政治的輿論の幾分は、早稻田の影響に歸して差支ないであらう。

坪内博士と大西博士とを中心としたる早稻田の文科も、多くの作家と思想家とを出だした。且つ器用なる多くの文士を輩出したことに小説と劇に對する貢獻は、特筆すべきものがある。

若し肉體の死後、靈魂が猶ほ不滅であるといふことが、歴史上にその名を存し、何等かの影響を遺したことを意味すとすれば、完全な生活を爲した人のみでなく、極めて不完全な缺點の多い生活をも爲した人にも、やはり靈魂の不滅がある。例へば基督と共にピラト、釋迦と共に提婆、孔子と共に桓魋、正成と共に尊氏も、

今猶ほ生存しつゝありといふ事になるであらう。現實生活に忙しい現代に、かゝる靈魂不滅を説く必要が何處にあらうか。かゝる言説が、意氣地なき青年の敗れたる虛榮心に、虚偽の慰安を與へなければ幸である。(風走生)

九州の旅より

昨日午前八時半、新橋をたちて、今日午前九時半、下の關の埠頭にたちました。馬關海峡は帆船林立、西南日本の繁華をほこり顔にしてゐます。門司よりまた汽車に揺られ、午後一時半、當地につきました。昨日來招魂祭にて、謂はゆる「ドンタク」日だとの事、商家は店頭に金屏風をたて、御馳走を備へ、假装せる群衆がいくつともなく練り歩く。博多より福岡にかけて、昨今日は眞に享樂の巷です。私は初めて九州に入つたのですが、九州に期待する所が多かつた爲め、京都式の享樂生活をみせびらかされて大に失望しました。今にして國民性を改造せざんば、大和民族の將來は誠に危いかなです。今夕の私共の演説會へは、聴衆があるかどうか心許ないのです。(十月廿三日午後四時、福岡にて、

(内ヶ崎生)

々がこの現實の生活を最も充實に圓滿に、且つ清く美しく有益に生活する時は、必ず我といふ實在が、肉體の死後も猶ほ永久に存在するところが確實である。かくの如く夕べに死しても憾みなき最善無二の生活に由つて、靈魂の不滅が證明されるのである。

右に述べた原則を、もつと具體的に説明すると、靈魂の不滅は三つの事實に由つて信じられる。則ち(一)子孫を産んで、教育するに由つて、(二)或は他人の子弟を薰陶するに由つて、(三)または偉大なる事業を爲すに由つて、人は肉體の死後、自我的存在を未來永遠に保存生成すると出来る。この三つの事を調和的に圓滿ならしむる生活は、最も充實した生活で、「我」の靈魂はかかる生活に由つて、不滅となるのである。だから人は是非止むを得ない場合の外は、妻を持つて子供を生産せねばならぬ。そして産み放してなく、必ず之れを養育し教導して、自分の精神を吹き込まねばならぬ。だから私は、獨身生活には全く反對である。次ぎに子供を持たない人は、他人の子弟を教育薰陶して、之れにも自分の精神を充分に吹き入れて、自己の存在を未來に保持せねばならぬ。次には社會の爲めに、偉大有益な事業を爲して、自己の靈魂と共に、その感化を後世に傳へねばならぬ。かくの如き生活をしてこそ、靈魂の不滅は實際的に現はるゝのであると云つて、説教を結ばれた。

自分は松尾氏の説教の内容に就いては、別に反對もなく、不審もない。何となれば、こんな話は小學時代から幾度となく聞かされた所であつて、今教會でまた繰り返して聞くのが、何だか變に

思はれたからである。教會が小學校の修身書に書いてあることを宗教的の色味をつけて説くとすれば、そこに一種の面白味はあるが、併し何故に宗教的色味をつける必要があるかを問はずには居られない。宗教は何故に靈魂の不滅をやかましく説くのであらう。靈魂の不滅がなければ、宗教もなくなるからであらうか。松尾氏の如く、無理な説明をしてまでも、靈魂の不滅を信ずる必要があるだらうか。科學が靈魂の不滅を否定し得ないからと云つて、何もその不滅を故らに主張する必要はあまいと思ふ。

最も圓滿な最も充實した生活を爲す者のみ、その「我」の存在を未來に保つとすれば、靈魂の不滅には例外があることになる。なぜなれば、かかる生活は、極めて少數の人にのみ出来る事であるからである。大多數の人々は、到底その靈魂を永遠に不滅ならしむることは出来ない。衆生を冷ねく平等に救済せんとする宗教には、かかる不公平なる事はあり得ない筈である。否、忌憚なく言へば、靈魂の不滅は到底不可能である。と云ふのは、未だ嘗て完全な生活を爲した人はないからである。『夕に死すとも可なり』といふが如き生活は、何人にも出来るものでない。もしかく言ふ人がありとすれば、それは全體として、充實に生活を爲したといふ意味でなく、唯今死んでも何も惜しくないといふ、一種あきらめの安心を得たものに過ぎない。何となれば人間はいつまでも生活し得ないし、また無限に活動し得ないからである。またいかなる聖人と雖も、自己の感化が未來後世に及ぶとは思はないであらう。

新刊批評

■白澤子の獵人 三木露風著・東雲堂發行

北原白秋氏と相對して、詩壇の鍵を握つてゐる三木露風氏が、最近三年間の收穫を蒐めた一卷である。巻頭にある「雪の上の鐘」といふ一篇多味つて見ても直ぐ分かる事だが、露風氏の詩には、白秋氏の詩に味はれるやうな濃厚な氣分、色と響と香りとが一つになつて蕩け入るやうな氣分こそ無いが、飽くまでデリケートな感覺を細かいリズムに托して行くところに、獨特の詩境が拓かれてゐる。「……されども響く鐘の美しさ、晴れし涙の涼やかさ、靜かに、靜かに、うち揺らぐ……」といふやうな蕭やかな心持が隨所に清く現はれてゐる。たしかに近ごろ懐しい詩集の一つである。

(價一・〇〇)

■ジャドソン傳 佐藤清譯・教文館發行

本書は基督教興文協會の發行によるものである。同協會の目的は、日本の基督教信者及び、未だ基督教を信ぜざる人々の爲めに、適當なる基督教文學を發行することにあるのださうである。ジャドソンは、米國ボストンの郊外アルデンに生れたる多感なる詩人肌の青年でもある。彼は一時は佛蘭西より來たれる懷疑思想のために感化せられて、自然神教の信者となつたが、その友の死亡と共に、驟然心靈の覺醒に達して、終に傳道事業に着手せんと欲

し、遂に東洋の外國傳道に身を獻ぐるに至つた熱情家である。かくて印度や緬甸等に於て、非常なる困難と戦ひつゝ、勇敢なる獻身的事業に従事して、偉大なる事業を後世に遺し、後の東洋傳道の端を開いた傳導者である。吾々は彼の傳記を読んで、試み犧牲の愛の生活の如何に力づく美はしきものなるかを知るのであらう。その實際の生活の活力を與ふる爲めには、好個の書籍であらう。この種の書籍が、今日の日本の青年の心にどれだけ觸れるかと云ふことは問題であるが、彼の事業の根柢に流れたる精神のみは、何時までも堪びないであらう。(價・九〇)

■ルクサンブル 石川剛譯・大倉書店發行

これは一高の佛語教授石川剛氏が、佛國留學の當時、ルクサンブル公園の翼椅子に依つて、小供の横獨樂を見ながら書いた短篇もの數十篇を譯出したものである。ビエル・ロチだの、モオバツサンだの、アルトル・フランスだの、ドオデエだのいふ名前が並んでゐる割合には、そこらの教科書に編み込んである無事な作が多くて、いさゝか淡泊に過ぎる嫌がないでもないが、巴里仕込らしい輕快な筆つきは、十分現はされてゐるやうに思ふ。日本の公園が、この書を讀くべく、あまりに貧弱である事は遺憾である。

(價・六五)

■祈禱 竹友漢風著・親山書店發行

竹友君から、夏休みの終りに近い頃、清楚なる「祈禱」一卷の詩集を寄せられた。見るからに氣持のよい小冊子である。三十べ

十月の惟一館

●秋期特別講演會 統一教會では、月の十日から十二日に渡つて、毎日午後六時半から、秋の特別講演會をひらいた。毎夜平均二百名近くの人々が、澄みきつた秋の氣に導かれながら、禮拜堂に集まられた。この會の結果、われわれは新に三十九名ほど同志の人を得たのである。演題と講師は次の通りであつた。

第一夜(十日)——宗教にかへれ(額賀鹿之助氏) 生活問題と宗教

(安部磯雄氏) 自由基督教の發達(内ヶ崎作三郎氏)

第二夜(十一日)——ボサンケーの個人運命論(岡田哲藏氏) 民族

の根本病弊(海老名彈正氏) 自由基督教の本領(内ヶ崎作三郎氏)

第三夜(十二日)——消極より積極へ(今岡信一氏) 信仰の流動と

固定(三並良氏) 自由基督教の使命(内ヶ崎作三郎氏)

●婦人講演會 が十二日の午後二時半から催された。金子白夢

氏は『女性の神秘』と題して、女性が男性の救済者となりうる心

境を説示し、金森通倫氏は『家庭の婦人』といふ題の下に、ある

賢夫人の實驗を物語つて、來會者に心からの感激を與へられた。

百名近くの婦人聴衆のうちから、五名ほど統一教會に屬して基督

教の道を進んで見たいと申込まれた。

●人會式 教會の内規に従つて、同じ日の禮拜説教時間に、入

會式がとり行はれた。入會者四名、轉會者三名。

●こどもの會 五日の日曜には、午後一時半から、統一日曜學

校創立滿二年を紀念するために、こどもの會がひらかれた。日曜

學校生徒の唱歌と對話、先生がたの手品や音楽やお話があつて、みな大よろこび。來朝中のサンダーランド博士も特に來會されて、獎勵のお話をして下さつた。出席者約二百名、至つて賑やかな集りであつた。

●第廿回通俗講演會 例によつて十五日の午後六時半から開かれた。内ヶ崎作三郎氏の「人間の本身」金森通倫氏の「金持になる道」といふ二つの講演があつた後、浪華節や講談などの餘興があつた。雨が降つた爲めに、來會者は百五十人位であつたが、それでも至つて温かみのある會であつた。

●基督教同志會 十三日の夜、階下の圖書室で例會がひらかれた。鹿子木貞信氏の「精神文明と基督教」といふ講演がすむと、例によつて質問や意見の發表が續出して、大に賑合ふ。名古屋から上京された金子卯吉氏も出席されたが、同氏の發議で、この會は將來、名古屋の同志會と交を結んで、互に消息を通じ合ふ事になつた。

●新讃歌集の制定 統一教會では、今度新に讃美歌集を制定して、十九日の日曜から使用し始めた。此の時代に生きてゐる人の心持と共に鳴するやうな歌が盛られてゐる。

●基督教要領講義 と云ふものが、毎日曜の午前九時半から、内ヶ崎氏によつて始められた。主として求道者の參考に供する爲めである。なほ内ヶ崎氏は、廿一日から九州地方へ講演に出かけて、廿八日に歸つて來られた。

●大長節祝賀會 三十一日は 新帝陛下の御誕生祝日に當たるので、教會では何か催しをやると思つてゐる。

らぬ。著者は織美に長じて未だ雄壯の分子を發揮せず、願くは更に自愛せよ。(價・五〇) U 生評

■少年の智慧

堀口熊二譯・長風社發行

トルストイの小話二十一を譯出したるもの。巨匠の作るところは、微小なるものにも名人の面影を宿す。流石に杜翁なればこそ、かゝる平凡なる談話のうちに、永遠の眞理を寓することができたのである。嬰兒の如くにして始めて天國に入ることが出来る。少年の智慧が壯年老年に正當に解釋せらるゝ時に、理想の社會は現出するであらう。この一卷は單に少年の伴侶に止まらないのである。又好譯である。(價・四五)

■基督の徒

第一號・本郷區駒込東片町七三、其社

六合雜誌の誌友富永徳廣氏の新に發行したる月刊雜誌である。富永氏は篤學の士である。その傳道方法も極めて眞摯である。本郷東片町の駒込基督會は、同氏の理想を實現するものにして、堅實に發達しつゝある。「基督の徒」は、同教會の機關とも目すべく、又富永氏の傳道用の小冊子とも考へられる。いづれにしても、かゝる雜誌は大に歡迎すべきものである。富永氏の思想は進歩的なれども、何處までも敬虔の精神を發揮せらるゝこと與床し。(價一部七)

次號批評

■創造的進化 金子・桂井二氏譯

■アンナカレニナ 相馬御風氏譯

■オイケンの哲學 稻毛詛風氏著

——次號紹介——

一ジに二十五篇の短詩を印刷した中々凝りたるものである。いづれゆつくり讀んで、印象をしるさうと郷里まで携へたが、味はつて讀む暇がなかつた。九月歸京後はいつもの通り、疾風の様な忙しい生活の中にはいつた。

これらの詩は、讀むよりも著者の優しい聲で歌つて貰はねば、鈍い僕の頭には深い印象がのこらぬ。昨年の夏、御影の加藤直士君の家で、竹友君が海風の吹き込む椽先で、藤村が誰かの詩を朗唱されてゐたのを聞いた。その聲だ。それで朗唱して貰はねば、「祈禱」の内容はひし／＼と自分の胸には響かぬ。しかしどれをみても厭味のない、すぐにしてなだらかなる調子を認むることが出来る。

僕は「窓」と題するものが、一番よく解つた感がある。

わが窓はさびし

眺めやる愁の牧場には、

迷へる羊のかげもみえず、

裾野にはたえず雨降り。

あはれみたまへ、かゝる夜もすがら、

わが青き祈禱は窓をつたひ、

霧ふかきカナルの上になびきつゝ

大空の清き泉にあへぎゆくを。

晴れたる日、

わが果樹園の樹に露はしたゝり、

静かなる無花果樹のかげには、
物思へるナタナエルの姿もあらむ。

わが静かなる微笑も、なげきも

すべてかの窓にあつまるなり、

貧しき部屋の窓なれど、

主さへいま行き過ぎたまふ。

「眠れる人のうへに」も、辭は短かくして意は長い。

眠れる人のうへに

静かなる祈禱の雨はふりそゞろ

わが部屋に、心のうへに、

むせびつゝ水はしたゝる……………

うす青の窓のかなたは、

月光の海の底に

漾へる森、なびく樹立、

静寂の國……………

いかなれば外はしづかに晴れ渡り、

いかなればわが部屋にのみ雨は降るらむ。

全體に象徴的情調が勝つてゐる。味ひつゝ繰り返し／＼讀むべきものである。しかし詩人はまた他の多くの方面を持たねばな

最新刊

早稻田大學教授 金子筑水氏序
 稻毛詛風氏著

(現代思想界之明星)

オイケンの哲學

▼四六判上製美本箱入正價金壹圓郵稅八錢▼

オイケンは現代思想界の明星也。從て苟も思想界に住し精神事業に従事するものにして彼を知らずんば未だ到底哲學●宗教●道德●藝術●教育●文明●歴史乃至生活を論ずるの資格なし。我國亦滔々たる世界の趨勢に動かされオイケンに接して茲に三年然かも多くは無責任なる斷屑碎片を傳ふるに過ぎず。幸にして既に三種の翻譯を獲たれども亦共に難解にして容易く一般の要望に酬ゆる能はざりき。著者茲に見る所あり難解深遠廣汎なる大哲の思想の野に驀進して其の核心を攪み一流の體と文章とを以て最も簡明平易に叙述し彼の原書乃至譯書を讀破し得ざるものに對しては勿論哲學的素養なき一般讀者に對しても容易くその要訣を解し得る如く叙述せんとして遂に本書を成すに至れり。苟も現代思潮の生命に觸れ生き甲斐ある生活を生さんとするものにとつて本書は正に夏日の電雲たらずんばあらず。敢て諸賢の清鑒を待つ。

西澤文學士譯

●歐洲文藝界の逸話

全壹冊 正價金壹圓貳拾錢
 郵稅金八錢

發行所 東京 市替 神戶 田口 區座 表京 神保 町七 六貳 大館

編輯室より

■この號もとにかく無事に出来あがりました。原稿が意外に多く集まりました爲めに、左の諸篇の掲載を次號以下に延ばさねばならなくなりました事は、編輯者の深く遺憾とするところであります。

生活問題と宗教

安部磯雄氏

精神文明と基督教

鹿子木員信氏

統一の要求と信仰

鈴木龍司氏

ベルグソンと新藝術

壺川 潔氏

日没 (創作)

加藤 一夫氏

■たえず本誌のために御助力下さる金子白夢氏は、十月のはじめ、組合教會の總會を機として、名古屋から上京せられました。五日の日曜の夜は、統一教會の教壇に立たれて、「觸光の感」といふ講話をして下さったのですが、氏獨特の飽くまで神秘のかをりを濡れきつた表白には、聴いてゐるものが皆、限らない肅やかさを覺えました。この講話は、來春の此の誌上に、同氏の美しい筆によつて更めて發表されざる筈であります。

■いろいろな差支のために、豫告を實行する事ができずにゐました「教會歴訪記」は、いよいよ本號から少しづつ掲げる事になりました。次號には市中教會の中心たる一教會の教壇に對する批評を發表する事に手筈を定めてあるのですが、この批評が眞摯を

もつて其の生命とするものである事は、更めて申すまでもありません。

■内ヶ崎氏は近く、カアペンタアの「基督教論」の譯書を、市内の某書店から出版せられる筈であります。またトルストイの遺稿として文藝界の評判になつてゐる戯曲「闇に輝くひかり」は、同人加藤一夫氏の譯筆によつて、本月中に文明堂から出版せられる事になつてゐますが、兩書ともに、讀者諸君の御注意を希望したいのであります。

■岡田哲藏氏は、十月の中旬から下旬にかけて、一週間ばかり東北地方に旅行されました。次號か正月號には、宗教に觸れたるシヨオの劇について、細かい研究を發表される筈であります。

■吉田絃二郎氏は、目下長崎の砲兵隊で、軍務に骨身を碎いて居られます。この月の末には、こちらへ歸つて來られる筈であります。同氏翻譯の戯曲「黎明」は、本號に掲載しました分で、一まづ括りをつける事になりました。同氏の歸つて來られるのを待つて、新しい心で新しい正月號の編輯に取りかゝる積りであります。

■このごろ、各方面の讀者諸君から、いろいろと本誌に對して、讚辭や忠言を寄せられることは、同人のひとしく感謝するところであります。出來るだけの事は、やつてゐる積りでありますが、とかく至らぬがちでありますので、お氣づきの事は、どしどし御申し越しを願ひたいのであります。

振替口座東京
二一〇七七番

●神學部の開講

神學部は前期に引き續き、來る十月初めより左の通り開講すべし。その他の科目の設置は未定なり。又オイケンのもとは其最新著にして、現に丸善書店に若干部あり、有志者は買ひ入れ置かるゝ方宜しからん。

●●時日……毎週月、金曜の午後四時——六時迄。

●●科目……比較宗教史より見たる福音書。

オイケン著 Erkennen und Leben の講讀

●●擔當者 三 並 良氏

統一基督教弘道會

教 育 部

勞働問題の解決の先驅者
友愛會の機關新聞

友愛新報

第 十 五 號

定	價	一	部	金	三	錢
郵	稅	一	部	金	五	厘
十	部	稅	共	金	三	錢

發行所

東京市芝區芝公園第十五號地

友愛新報社

杜翁の名著は何か

最新版

闇に輝く光

レオ・トルストイ遺著
加藤一夫 譯著 (安倍能成序) ■口繪杜翁及夫人

●十一月五日發賣

■四六判約三百卅頁
■クローズ製函入美本
■紙質舶來上等
■定價約八十五錢
■送料金 八錢

數多き杜翁の遺著のうちにも特に吾人の興味を惹くものは『闇に輝く光』である。蓋し杜翁の藝術の偉大は、その生活の偉大である。而して本書は實に翁自身の偉大なる人格を以て主人公とせる深刻なる煩悶と、眞摯なる努力と、眞實なる生活に對する不可抗の憧憬と、而して其所に惹起せらるゝ悲惨なる葛藤との、最も大膽にして、最も率直なる戯曲的告白である。今や眞摯なる吾國の思想界は漸く覺めて、自己の眞實に生きんと欲するもの、自己の世界の創造に生きんとするもの、漸くその多きを加ふる時、蓋し本書の如きはそれ等の人々の眞生活に寄與することの最も多きは信じて疑はざるところである。

●トルストイ翁著
加藤直士譯

我宗教

第十二版

定價七十五錢
送料八錢

文 明 堂

東京 市南 田賀 區九

發行所

振七 替九 東九 京番

注意

一、本誌は前年迄は本會及び本誌に特別關係ある人には進呈致居候處今回内部の整理と共に每號無代進呈は何人にも致し不申事と相成候間御愛讀の方は此の際本年度よりの誌代御送附下され度候

二、本誌は一切前金にあらざれば發送致さず候

三、御送金はなるべく安全なる振替貯金に依られ度候

四、若し郵便爲替にて御送金の場合には芝罘三田四國町

二番地六合雜誌社と指定し拂渡局を三田芝罘橋郵便

局と指定せられ度候

五、本誌代金に對しては領收證を差出さず代金領收次第御注文通り發送可致候又前金切れの節は帶封に

(前金切)と押捺致候間早速御送金可被下候

六、本誌の廣告に關しては御照會次第詳細に御通知申

上ぐべく候

七、本誌への御寄稿は凡べて、本郷區眞砂町十五番地

内藤瀧宛に願上候

八、定價は内容の改善發達と共に七月號より下表の如

く改定致候間御承知下され度候

く改定致候間御承知下され度候

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵税共
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵税共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵税共
●海外は郵税一冊に付金六錢(清國を除く) ●臨時號出版の際は規定以外に代金申受く			

本誌廣告料

特等	普通	普通
表紙二三四面	一頁	一頁
一頁	金貳拾圓	金拾貳圓
半頁	金六圓	
●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候 ●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候		

大正二年十月三十日印刷納本
大正二年十一月一日發行 (毎月一回一日發行)

定價 貳拾錢
稅共

發行兼編輯人 鈴木 文治
印刷人 山本 與一郎
印刷所 英合
東京市京橋區西堀町二十七番地
株主 秀英 合

發行所

東京市芝區
三田四國町

統一基督敎弘道會

賣捌所

東京堂◎同文館◎北隆館◎東海堂◎上田屋
◎警醒社◎敎文館其他全國有名書店

Library of the
PACIFIC UNITARIAN SCHOOL
FOR THE MINISTRY
Berkeley, California

明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可
大正二年十二月一日發行(每月一回一日發行)

六合雜誌第三十三年第十二號

六合雜誌



號 月 二 十

舞臺協會公演

來十一月

廿八日(金)
廿九日(土)
三十日(日)

於帝國劇場

每夕午後六時開演

チヨーチ・バーナード・シヨール氏作
舞臺協會翻譯

惡魔の弟子

——三幕——

井ルヘルム・フォン・シヨルツ氏作
森鷗外博士譯

負けたる人

——一幕——

觀劇料

特等一圓八十錢
一等一圓五十錢
二等一圓
三等五十錢
四等廿五錢

俳優

加藤精一

川井源藏

金井謹之助

横井唯治

小牧淑

佐々木積

森英治郎

和泉房江

林千歲

宮部靜子

其他

舞臺協會事務所

下府荏原郡上大崎町字長者丸二七三

新年號の六合雜誌

■創作一篇

石田 樅村

■雪あかり(歌)

野口 精子

■歸つてから(小説)

加藤 一夫

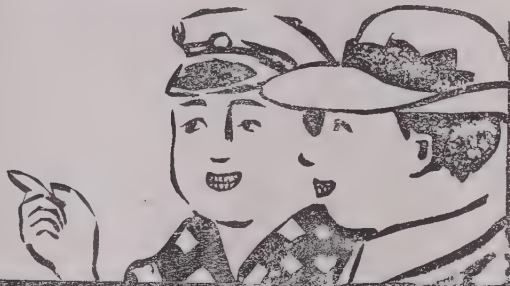
■創作一篇

吉田 絃二郎

■戯曲サンルイ(ロマン・ロオラン作)

内 藤 濯 譯

その他、時評に、教會歴訪記に、本誌獨特の光彩を放つところあるべし。



僕等^{ぼくたち}は皆

ライオン^{ライオン}黨^{たう}だ

君^{きみ}もライオン^{ライオン}齒磨^{はみがき}を使^{つか}つてゐるのだら

う！

道理^{どうり}で齒^はが白^{しろ}いや！

君^{きみ}！ 獨^{ドイツ}乙^乙ぢや齒^はの惡^{わる}い子^こ供^{ども}は一^{しよ}所^所に

遊^{あそ}ばないこ云^いふぢやないか。

僕等^{ぼくたち}は皆^{みな}ライオン^{ライオン}齒磨^{はみがき}を使^{つか}つて、美^{うつく}し

い齒^はを持^もつた仲^{なか}間^まだ、一^{しよ}所^所に遊^{あそ}ば
うや！

ライオン^{ライオン}齒磨^{はみがき} 本^{ほん}舗^ぽ 東^{とう}京^{きやう}大^{だい}阪^{はん} 名^な古^こ屋^や 小^こ林^{りん}富^ふ次^じ郎^{らう}



THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 395. December. 1913.

CONTENTS.

Stille Nacht (<i>Frontispiece</i>).....	Adolf Hengeler.	
<hr/>		
Devolution of Forerunners.....	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	2
Poems.....	K. Satō.	15
Spiritual Civilization and Christianity	K. Kanokogi.	18
Life and Form.	J. Abe.	25
Fragmental Thoughts.	A. Naitō.	31
Unity of Spiritual Life.	R. Suzuki.	41
Sorrowful Theme of Life.....	K. Katō.	49
Life of Prof. Rudolf Eucken.....	Prof. H. Minami.	58
Impression of "In the Depth,, represented by "Free Theatre of Japan,,.....	K. Katō.	71
Sketch of Some Problem-Drama	H. Nakano.	77
Criticism on Periodicals for November.	Sub-editors	79
<hr/>		
Silence. (dialogue).....	K. Satō.	82
Poem.....	S. Taketomo.	85
Sunset and Wanderer. (novel)	K. Katō.	86
<hr/>		
Letters from our Subscribers.....		97
Copies of To-day.....		102
Books of the Month		120
Unity Hall Reports.....		124

Published Monthly by the

TŌITSU KRISTOKYŪ KŪDŪKWAI,

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.



十一月の詔諭(批評).....K.....N.....九

沈黙(對話).....佐藤清.....八

埃及のとまり(詩・サマン作).....竹友藻風.....八五

日没と旅人(小説).....加藤一夫.....八六

誌友から(書柬).....九七

時評

『オイケンの哲學』を読む.....三並良.....一〇一

米墨繫争事件.....鈴木文治.....一〇四

宗教大會の印象.....菊川四郎.....一〇六

救済事業の根本問題.....鈴木文治.....一〇八

文相の宗教家招待.....KS生.....一一〇

富士見町教會を訪ふ記(批評).....加藤一夫.....一一四

■新刊批評.....■惟一館記事.....



六合雜誌 第三十三卷第十二號目次

しづかな夜 (口繪) アドルフ・ヘンゲレル筆

本 欄

先進者の退化 (評論) 内ヶ崎作三郎 二

悲しき斷片 (詩) 佐藤 清 一五

精神的文明と基督教 (評論) 鹿子木員信 一八

生命と形式と (評論) 安部 磯雄 二五

塵の中から (感想) 内藤 濯 四

統一の要求と信仰 (評論) 鈴木 龍司 四

生活の悲調 (評論) 加藤 一夫 四九

オイケンの踏みたる道 (紹介) 三 並 良 五八

『夜の宿』の印象 (感想) か ず を 七

問題劇梗概 (紹介) 中野 柏葉 七





夜 な か づ し

—作 ル レ ゲ レ ヘ—

*One who does not read is like a windowless house ;
There seems no way for light to shine into it !*

JUST ARRIVED

Barton, W. E.—His Friends30	.04
Barton, Soares & Strong—His Life30	.04
Pazin, Rene—The Marriage of Mademoiselle	2.50	.08
Bosworth, E. J.—Christ in Everyday Life.....	1.00	.08
Bosworth, E. J.—New Studies in Acts	1.00	.08
Breasted—History of the Ancient Egyptians	2.50	.12
Brown—The Social Message of the Modern Pulpit	1.00	.08
Campbell—The New Theology	1.00	.08
Connolly—Sonnie Boy's People	2.50	.08
Cartissoz, Royal—Art & Common Sense	3.50	.12
Dogs, Chadwick & Smith & Etc.—An Exposition of the Bible	20.00	
Field, Anegene—Christmas Tales & Christmas Verse	3.00	.12
Flinck—Romantic Love & Personal Beauty	4.00	.12
Flinck—Friendship50	.08
Gilbert—What Children Study & Why.....	3.00	.12
Griffis—The Religions of Japan	4.00	.08
Haven—Bible Lessons for Little Beginners No. II	1.50	.08
Hewlett, Maurice—Bendish.....	2.70	.12
Horn, C. S.—The Life that is Easy	1.00	.08
Horn, C. S.—International Critical Commentary Ezra & Nehemiah	6.00	.12
Kent—The Heroes & Crises of Early Hebrew History	2.00	.08
Kent—Founders & Rulers of United Israel	2.00	.08
Kent—The Kings & Prophets of Israel & Judah	2.00	.08
Kent—Makers & Teachers of Judaism	2.00	.08
Kent—The Life & Teaching Jesus.....	2.50	.08
Kent—The Origin & Permanent Value of the Old Testament	1.00	.08
King, Henry C.—Rational Living	1.00	.08
Schosh & Kron—The Little Yankee	1.50	.08
Leroy—Philippine Life in Town & Country	2.40	.08
Loisy—The Gospel & the Church	1.00	.08
Lynde, Francis—The Honorable Senator Sagebrush.....	2.70	.08
Mathews, S.—The Gospel & the Modern Man	1.00	.08
Mathewson—Pitching in a Pinch	2.00	.08
Moffatt—Introduction to the Literature of the New Testament	5.00	.12

GINZA

KYO-BUN-KWAN

TOKYO

六 合 雜 誌

十 二 月 號



395

の屋根が、一段と高く聳えて居る、私は幼時、錦繪で長崎の町の圖を見たことがあつたが、舊幕時代に於いて江戸長崎と並び稱せられた島帝國の此の名港に親しく來つて、山水人事の大觀を恣にすることの出来るのは、この日が初めてであつた。

私は端なくも、目前に横はつて居る多くの蒸汽船の形や、帆柱や、煙突などを眺めて居るうちに、元龜元年、蕃船が初めて此の港に碇泊した歴史上の一紀元を思ひ出さざるを得なかつた。そのとき僅か五百戸の漁村に過ぎなかつた地は、やがて五千戸を數ふる一良港となつた。その斯くの如き長崎の發達は、蕃船が瀕繁に來泊して、切りに貿易を求めた爲めであつたのである。時の領主は大村家の家老、長崎甚左工門賴純であつた。賴純は領主大村純忠に具申して、町の地割をなし、近在の商人を招いて家屋を建築し、また諸國より來るべき商人等の爲めに、旅館を設け、六町の新しい町を造つたのである。私の宿泊せる旅館の所在地なる萬歲町は、その昔、島原町と云つて、最初のその六町のうちの一つであつたのである。その後も蕃船は強いて入津したが、天正年中に、大村・龍造寺の兩家が戰爭を始め、賴純は長崎の地を抵當に入れ、巨額の軍資を葡萄牙人より借り入れて、一時の急を救うた。さて期限に及んでも、賴純はこれを返却することが出来なかつた。そして彼は何處かへ逐電してしまつた。そこで葡萄牙人は、大村純忠に迫つて、長崎の地を天主教會に附與せられんことを求めた。純忠は餘儀なくこれを許した。この時より長崎は天主教會の所領となり、ゼスイット派の宣教師は、寺院を建立し、市民の政治にまで干渉して、專横を極むるに至つた。



先進者の退化

内ヶ崎 作三郎

十月の末であつた。小春日の夕日影が、長崎灣の水を美はしく彩つて、細い入江の兩岸に起伏してゐる山々に、薄黄の光りを投げかけたとき、私は孤影飄然として、西上町の本蓮寺と云ふ大きな法華寺の石段を拾うて、見晴らしのいい庭の一隅に立つた。一二時間ほど前、長崎停車場に降りて、ちらと港の景色を眺め、石敷の坂路を車に揺られて、萬歳町の旅館に着くまで、もう私の心には、多少鮮やかな印象が刻まれてゐたのであつた。坂の多いこと、石の敷いてあること、その他色々の印象は、私をして嘗つて南歐の名港ネーブルスの海岸を辿つたときのことを思ひ起さしめた。ネエブルスには羅馬教の古い會堂が多いが、長崎には神社と佛閣が多いのである、私の辿り着いた本蓮寺は、港に面した丘陵の中腹に建てられて居る大伽藍である。折しも秋の空は清々しいまでに晴れわたつて、一灣の風光は繪のやうに美はしい。大小の船舶は列を亂して碇泊し、遠く三菱造船所を望むと、遠からず進水せんとする巨艦霧島が、船渠に横はつて居た。弓手の方の恵比須町には、ゴシック風の天主教會

南角には、長崎日々新聞社がある、その屋並には、宣教師の住宅らしいものがある。英國國教會の宣教師らしい一老人が、靜かに門を出でて、一人知れず祈念を凝らして居るかの様に徐々と歩を運んで居た。また東南隅には小さい病院があつて、何處となくありし昔を忍ばしむるものがあつた。キャンフェルやシーボールド等は、嘗てこの小さい居留地に潜んで、日本の研究もやれば、青年子弟の教育も試みたであらう。私は更に居留地の一部分をも見物した。そこは出島町の何百倍にも當るほど廣い然し私にはこの廣い現在の居留地よりは、狭い小さいその當時の方が、一層の意義と生命とを藏して居る様に思はれた。

長崎は今でも、二萬五千の戸數と、十七萬の人口を有して居る九州第一の都會である。けれども最早長崎は、その繁華に於いて、江戸に續いた尊崇を受けることは出来ない。東京に次ぐものには、大坂がある、名古屋がある、神戸がある。かつて長崎は幕府時代に於いて、西洋文明東漸の門戸であつた。今や歐米の思想は、九州と云ふ玄關を過ぎ、中國と云ふ廊下を通り、大坂と云ふ食堂の傍を抜け京都と云ふ茶の間を横目に見ながら、東京と云ふ奥座敷に入り込んでしまつた。而して、門前は雀羅を立てるまでに至らずとも、今や長崎は往日の繁華に比すれば、甚しく見劣りがせらるゝのである。郵船會社の歐洲航路の船舶が、門司を引きあげて、この港に碇泊するに至つたことも事實である。南清が大に發達すれば、長崎の發達もこれに伴ふことが出来るであらう、されど大體に於いて長崎は、氣の抜けた麥酒のやうな所である。桃源のやうなところである。本蓮寺の墓地で仕事をして居た職人の語つたやうに、長崎はよい處で、職人風情の辨當にも、小鯛のお菜がつくと云ふ様に、物價の比較

けれども私は今茲に、歴史家として長崎の出来事を繰返さうとするのではない。たと長崎の港灣を展望して居る際に、私の心に浮んだ過ぎ去つた長崎のバノラマを描いて見たのである。現に私の立つて居る本蓮寺の地には、サンジュアンの大寺院が聳えて居て、浦上村をも所領として、中々勢を張つて居たものである。島原の亂後、耶蘇教禁制のことが行はれるに及んで、幕府は大に神社佛閣を新設した。かくして出来得る限り、外教の餘勢を撲滅しやうと努めたのである。今、大鼓の音にあはせて南無妙法蓮華經の題目の唱へられて居るところは、嘗つては屋上の十字架に、朝日てり、夕日かゞやき、拉丁語の讃歌朗々として、撞き出す鐘の音と共に、天のみくらに立ち昇つた所であるかと思ふと色々の感想に打たれざるを得ない。

兎角するうちに、短かき秋の日は次第に傾きそめた。私は車力を急がして、先づ附近の天主教會を訪れた。門番の老人に訊くと、午後は二時から四時までの間でなければ、内部の縦覧を許さないとのことであつた。門前に客待する車力の語るところによると、教會の内部の裝飾が中々立派なものであるとのことである。私は更に車力に依頼して、出島の跡を見物することにした。今は出島と云ふ島はない。出島は大きな埋立地の一部分となつてしまつた。けれども流石に出島町とて、ありし昔の町の跡丈けは保存されて居る。私はその町を一週した。奥行きは三四十間、間口は二町そこそこの、この猫の額の様な小島が、日本新文明の搖籃であつたかと思へば、何となく懐かしい思ひがした。町の西

疊を敷いて、連日盛宴を張り、あらゆる人々を饗應する風がある。名物燈籠流しの如きは、餘りに多くの金を浪費するが故に、當局者にて之れを禁ずるに至つた程である。見よ、かつて島帝國の西端の門となつて、文明の風を誘ひ入れた地は、一朝にして最も保守的精神の跋扈するところとなつた。櫻花まさに艶を競ひ、妍を争はんとするとき、無情の風來つて落花狼籍の慘狀を呈出せしめたやうなものである。所謂、九仞の功を一簣に缺いたものである。かくして長崎人士は、因循姑息の民となつた。たゞ従順な市民となつた、加ふるに風光明媚にして氣候常に溫和、自然の恩恵は餘りに豊であつて、人間の努力が却つて鈍つてゐる観がある。もし長崎人士にて、爰に生命の動くあり、理想の輝くものがあつたならば、外部の不利と戦つて、一方の血路を開くことが出来たであらうに、その事がないのは、まことに嘆すべきである。而してこれは保守思想の勝利が、長崎市民の上に捧げ得たる凱旋の冠である、後悔の冠である。冠は冠だが、錆びて見苦しい冠である。

三

私はその前日の午後、熊本より佐賀に着いたのであつた。停車場から市の中央の旅館に趣く途中私は一二軒の書店に寄つて、佐賀藩の歴史を探したが、至つて粗末な案内記を見出したのに過ぎなかつた。書店の主人は私に、『葉隠論語』なる一冊の書をすゝめた。私はそれを買ひとつて、行李の中に收めた。旅館に着くと間もなく、知人の訪問をうけたので、茶菓を命ずると、カステラとパンの合ひの子の様なマルポーロと云ふ洋菓子をお重に入れて持つて來た。知人に聞くと、それはこの地の名

的安價な土地であるかも知れない。けれども、長崎の頽勢は今や如何ともし難いであらう。

長崎が大に發達すべくして、發達することの出来なくなつたのには、色々な原因があらう。門司の急激な進歩が長崎の既得權を侵害したことは長崎の唯一の顧客を失をしめたかも知れない。また長崎は天領であつた結果、士族の階級がなくて、素町民の階級があつたのみであるからして、圓轉滑脱なる才人が時々輩出したけれども、主義を有し節操を尊ぶ氣風は、遂に樹立することが出来なかつた。これ等は何れも、長崎衰微の原因であらう。けれども私をして正直に云はしむれば、進歩的長崎の退歩は、保守思想の勝利に基くのであると斷言したい。

長崎に於ける天主教會の態度は、必ずしも理想的のものでなかつたかも知れない。然し天主教徒を誤解し迫害し、遂に彼等をして窮鼠却つて猫を噛むの境遇に陥らしめたのは、徳川幕府の施政方針その宜しきを得なかつた故であると云はねばならぬ。而してその結果は、その馬鹿らしき保守的政策となつてあらはれた。天主教の教會堂のあつたところには、各宗の寺院が建立された。是等の切支丹寺の本尊は、五ヶ所の佛教寺院に埋められた。馬込郷の西坂には、益田四郎を主として、三千餘人の首を埋めたところの首塚がある。また神社の崇敬が、非常に奨励せられた。毎年十月の七八九の三日間にわたつて仰山なる祭禮を行ふ諏訪神社がある。市民は巨萬の財を擲つて、踊りや屋臺を奉納する。

この時には、富豪はその庭園を解放して公衆の縦覧に供すると云ふことである。これは切支丹宗門改めの意味よりして、當局者が奨励した方法であるらしい。また長崎には、支那流の祖先崇拜が奨励された。だから墓地の壯麗を極むること、全國に冠たるものがある。孟蘭盆には富豪は祖先の墓地に

して縣廳の前に出て、それから舊城門のほとりに辿り着いた。舊城趾は數萬坪の廣い地面であるが、平地にあるところから、その跡は官廳、學校、監獄等に利用されてゐる。城内をくぐり、草を踏みわけて、奥ふかく進んで行くと、幅のひろい城濠がある、破蓮の葉や莖が、水面を覆うて居る。折りしも秋の夕日は赫々と西空を染め、物音もない廢墟の靜寂と對照して、一種の詩的情緒が心のうちに湧き起るのを禁ずることが出来なかつた。日本の多くの城は山によつてゐて、平地に在るものは割合に少ない。特に佐賀城の如く北方に一脈の連山を控へて居るばかりで、三方は限りなき平面に臨んで居る城は甚だ少ない。そこで私は偶然にも、『葉隱論語』の中毒をうけたる佐賀藩より、進歩的人物の勃起した理由が、多少續めた様な氣がした。英主閑叟公は、恐らくはこの平原的氣分を十分に懷いた人であらう。若し閑叟公が、今は跡かたもないが、その昔屹然として聳えたるべき天主閣上から斯くの如き莊嚴なる日沒を眺めた時、彼が青春の血は覺えず湧いて、天空海濶の氣象を抱き得たかも知れない。又佐賀にとつて幸福なことは、長崎港に接近して居ると云ふことである。夕日の沈み行くところは、新文明の朝日の出島であつたのである。佐賀藩は天保十一年に已に、兵學や蘭學の研究の爲めに弘道館内別局を設け、弘化三年には、西洋砲術をもそれに加へた。天保五年には、醫學校を設立し、寛永二年には、藩醫を長崎に送つて、種痘を傳へしめた。安政二年には漢法醫をして蘭法を兼ねしめた。カステーラやマルボロの傳はつたのも、恐らくこの頃であらう。

物であると云ふことであつた。カステーラが佐賀の一名物だと云ふこともその時に知つた。私の小供の時分、仙臺地方では、カステーラのことを「佐賀」と稱んだことを記憶する。明治の初年には、東京にカステーラがなく、長崎もしくは佐賀から輸入したらしい。佐賀製のカステーラは、佐賀カステーラとても命名せられ、それが一轉してたゞ「佐賀」と云はれる様になつたのかも知れない。成程さう云へば、途中車上から見た菓子屋の立看板に、昔風にカステーラと漆で太く書いたのも見當つたやうであつた。

さて『葉隠論語』とは、如何なる書物であるかと云へば、これは鍋島藩二百年の武士道鼓吹の金科玉條を集輯したものである。この書によれば、鍋島藩主以外に、君子なるものは絶対にない、釋迦も、孔子も、鍋島藩士の關するところではない。また武士は毎日毎夜、死ぬことを忘れてはならないと説いてある。随分頑迷固陋な説を集めたものである。佐賀藩には、弘道館と云ふ藩塾があつた。この學校の經典は、即ちこの『葉隠論語』であつた。佐賀人があの様な肥沃な土地と溫暖な氣候との天恵の中にあつて、安逸に流れず、剛毅朴訥の精神に充ちて、九州に在つては鹿児島と相對して一種特別なる藩風を建設したのは、またこの武士道的經典の流風餘韻を目することが出来ない譯ではない。けれども若し佐賀が天下の大勢と共に移らず、依然として葉隠論語のみを天下唯一の經典と株守したならば恐らくは佐賀は所謂藩長土肥の四分の一を占領して、第二流の藩閥を作ることが殆んど不可能なことであつたと想像するに難くない。

その夕、私は松原神社の傍を通つて、公園の一隅に建造中である鍋島閑叟公の銅像を仰ぎ見、左折

また佐賀の氣風も、葉隠論語の權威は失つたけれども、未だそれに代るべき積極的建設的新道徳が勢力を得てゐない。また最初の新教徒を出したる地に於いて、基督教の勢力は極めて微々たるものである。これ果して何に因るのであらう。蓋し佐賀の有爲の人物は、多くは東京に移住した。そして佐賀の英才は、日本の各地に散在するに至つた。是等もその一源因であらう。然しながら、長崎を新文明の門とすれば、佐賀はその玄關であつた、その新文明の風が、何の容赦もなく奥坐敷にまで吹き込んで行つたことは、已に述べた通りである。これも亦、先進者の退化を證する第二の例證ではあるまいか。

佐賀市は十一月十日をもつて、閑叟公銅像の除幕式の盛典を舉げた。近代の一雄藩の名君に對してまことに適當なる記念である。然し佐賀の市民は、閑叟公を記念すると共に彼の精神を現代に復活することを忘れてはならない。見よ衣冠束帶の閑叟公は毅然として西方を望んで居るではないか。西方は即ち長崎である。新文明の入口である。私は佐賀の市民諸君に對つて、この秘密を忘れざらん事を希望したい。

榮枯盛衰、成敗利鈍、治亂興亡と云ふが如き言葉は、抑も何を意味するであらう。要するに先進者が退化して、後進者にその名をなさしむると云ふ事實を語るものではないか。吾等は東西古今の歴史を讀んで、この教訓を學んだものである。されど親しく日本近世史の活劇を演じたる土地に臨んで、この教訓を味へば、風物人事に悉く意義がある。一木一草、一帆一檣、悉く活躍し來つて、私の爲めに真理の秘密を啓示せざるはない。

日本に於ける最初の新教徒は、佐賀藩の隠居役三千五百石を食んだ村田若狹であつた。村田家は龍造寺家の裔であつて、鍋島家の權力が龍造寺家を壓制するに及んで、村田姓を名乗るに至つたのだ。鍋島藩は村田家を優遇して、何等の用務もないのに、高祿を食ましめた。若狹は英姿颯爽たる偉丈夫であつて、進歩的精神に富める有爲の武士であつた。彼の部下の一人が、長崎港上警備の際、偶々海中より一冊の蘭書を拾ひ出した。そしてそれを佐賀に持ち歸つて若狹に示した。これこそ即ち、和蘭語の聖書であつた。そこで若狹は人に托して上海より漢譯の聖書を求めて、獨學でこれを研究した。折りしもあれ、フルベッキ博士が長崎に來つて學校を開いたので、彼は使者を遣はして聖書に關する質問をなし、遂に信仰を得て、自ら態々長崎に出張して、博士より秘密に受洗するに至つたのである。かゝる特志者は、現時に於いても得やすくはない。切支丹宗禁制の當時に於いて、聖書を獨學して信仰を獲得したる村田若狹の頭腦の朋敏にして、萬事を徹底的に解決するの見識を有してゐたことは、想見するに難くない。而かもかゝる英傑をして崛起せしめ得たる佐賀藩の背景及びその空氣が如何に進歩的であつたかと云ふことを感ぜずには居られない。

この積極的にして進歩的な思想や學術の勝利は、やがて大隈伯、大木喬任、副島種臣、江藤新平、島義勇、佐野常民、松田正久等の輩出となつた。その時代に於ける佐賀藩の進歩的精神は、是等の人物となつて表はれ、また進歩的風習は、マルボーロとカステラーとなつて残つたのである。

けれども今日佐賀に來るものにして、この歴史的背景を忘るゝときは、恐らくは何等の感興をも見出すことを得ないであらう。そこには殖産工業の見るべきものはない、たゞ農産物を誇るのみである。

我國に初めて儒教の輸入せられた時、儒教は先進者であつた。百般の支那文明は、儒教と共に傳來したのである。佛教の輸入せられた時、佛教は矢張り先進者であつた。大陸文明ことに印度文明は、佛教思想及び制度と纏綿して傳來したのである。三百年前天主教が齋らされたとき、彼は即ち先進者であつた。西洋の文明は主として、この形式を通じて傳來したのである。五十年前、基督教新教が齋された時、彼は即ち教育機關や、慈善事業や、感化事業等を傳へたる先進者であつた。されども是等の先進者が依然として先進者の位置を保ち得るや否やは、大なる問題である。儒教も現代の大勢を指導するに足らず、佛教もこの點に於いては儒教と伯仲の間に在る。而かもその制度組織の複雑なるに至つては、更に改革を困難ならしむる點がある。天主教の大組織や、熱心なる傳道や、教育及び特種なる儀式禮拜等は、將來多くの日本人を惹きつけることであらう、されどもその教儀は、果して現代の複雑なる日本の思想に對して、何等の權威を有するであらう。基督教新教に至つても同一である。そのミッシヨンスクールは、嘗つて最も進歩したる方法によつて、最も進歩したる思想を傳へたものであつた。その女學校は、當時の女子教育の模範をもつて許されて居た、否、日本に於ける女子教育の誘導者であつた。然るに今日に於いては、基督教以外の官公私立の諸學校の發達進歩の著しさに比して、基督教主義の學校の進歩の如何に遅々たるかを嘆かざるを得ない。その多くは官立學校と競争する能はず、私學の優なるものとは到底同日の談にあらざるが如き狀況にある。これ皆、先進者の退化を語るものでないか。

五

近頃政府當局者は、宗教家を招待して、彼等によつて國民の教化の幾分を實現せんと企てた。政府當局者が宗教家を利用せんとするのは敢て差支ない、宗教家たるものも亦、その大道を實現せんが爲めに、國家や政府を方便に利用するに於いて敢て差支はない。要はたゞ妥協を禁物とすればよいのである。政府は佛教に對して、過去五十年の間非常な冷遇を與へた、而して基督教に對しては、三百年間の迫害と侮辱とを加へた。今日政府が肝入りとなつて、宗教家の社會的位置を幾分が高めんとする計畫は決して無意義でない。たゞ宗教家が三教者招待もしくは、宗教大會をもつて、我事成れるが如くに思惟するならば、それこそ大なる迷信である。政府は宗教家の爲めに一方の途を開拓して呉れた宗教家はそれ以上を政府に望んでほならない。要は各自の實力に應じて努力すればよいのである。

宗教家中には、宗教と教育とを一層密接ならしめんことを希望するものもあつた。併し吾等は、今日の教育的宗教に對して、消極的行爲を示してくれば十分であると思ふのである。即ち或る宗教を信ずる教員、もしくは生徒に對する中傷、迫害、誤解等の消滅することを得ば足るのである。蓋し日本の如く、三教及び儒教の鼎立して、適從する所を知らざる間に於いては、國民的宗教改革の大運動が起つて、從來の宗教中の最優者が勝利を占むるか、或は從來の宗教が更に一層高く大なるものに統一せられたる曉でなければ、教育との提携は却つて有害となるかも知れないからである。何よりも先づ宗教改革は斷行しなければならない。



悲しき断片

佐

藤

清

*

かよわきわが目はかなしみ、
その力のふたたびかへらざるをなげく、
されど見よ宇宙のことくくやみとなりてゆくを。
かよわきわが目はよろこび、
その力のふたたびかへり来るをたのしむ、
されど見よ宇宙のことくく光となりてゆくを。

*

旅に出づる日の新しきころ、
仲あしき人にもわが顔にあるよろこびの光を分かち、
言葉もていひがたき思をよせし人には、

六

先進者の退化は努力、修養、苦心、健闘の足らざるが爲めである。儒教も佛教も餘りに早く日本の上流社會の優遇をうけたるが故に、根柢を深くおろすことが出来なかつた。耶蘇主義の學校は、嘗て先進者たりしが故に、油斷して改善の道を講ぜざるが爲め遂に今日の如き狀況に陥つたのである。易に曰く「君子は自彊息まず」と、これ即ち天道ある。神の道である。基督曰く、「神は今日に至るまで働き給ふ、我も亦働くなり」と。吾等もしこの精神を失はずんば、永遠に先進者たるの光榮を擔ふてあらう。されど先進者たるものは、光榮と共に多くの苦痛を負はねばならぬ。先進者は時として、孤獨に甘んじなければならぬ。その周圍には、多くの落伍者が生ずるであらう。その前途には、多くの障礙が横はるであらう。されど先進者は斷じて進まなければならぬ。天地の眞理は常に進歩しつゝある。神それ自身は常に進歩流動しつゝある大生命である。眞に宗教を信ずる事とは、この進歩の大道を歩むことである。この大道を歩んで悔いざることである。これを以つて感謝するの生活である。われ等は永遠に先進者たるの權利を擁護しなければならない。

*

いとつよき心もこよひはかなし、
この岡にただひとりなればいとかなし、
をさなき日よりならはしとせるいのりも、
うちたえし今はこよひはかなし。

*

船の上にてわが答を待ち設けし微笑よ、
そして答へざりし微笑よ、
わたしは今あのかたちよくふくらみし微笑を思ひ起こして、
ひそかに答へざりし微笑をあはれむ。

せちなる思をあらはす短き言葉を分ち、
涙ぐみつつ時にはうちわらひつつ、
生活のきわだてる斷片のさかづきを味ふ、
旅にいづる日の新しきころ。

*

いつまでも旅のころにてあらまほし、
旅にあるわがころはいつもあたらし、
いつまでもなつかしき人を胸にゑがき、
地をめぐりてそれにあこがれつつ、
世を終ふるまで旅のころにてあらまほし、
人生は終るときなく、
目に映ずるものはただ悲しき斷片なり。

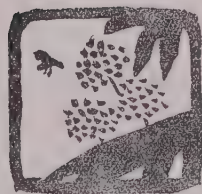
*

鍵盤の上にて思はずふれし指さき、
香水のしたたる夢はわが指さきにつたはれり。

では、十八世紀の後期より十九世紀の初期に榮えた藝術的哲學的理想主義が、現實に打ち當つて、破壊し崩壊し、人心は行く處を知らず、取りとめのない様になつて了つた。その結果として、個人の煩悶懊惱と共に、個人の信念、個人の生活の根柢をなしてゐる人生觀世界觀そのものが、支離滅裂に崩れ行いて、道德的理想と宗教との衝突ともなり、科學的理想は、實際的理想と衝突するに至つた。すなはち基本的價值と基本的價值とが互に相衝突するに至つたのである。既に根柢に於いて、かくの如き狀態である以上、これらの基本的價值から各々その價值を受けてゐる個々の價值が、また同じやうな運命に陥るに至つたのは、けだし自然の數である。たとへば教育にしても、國家にしても、これら人間の活動は、全然行き悩んで了つた。現代の教育家は、青年を何に教育すべきかは知らない。國家もこれと同然である。國家とは少なくとも或る理想を實現するための國家である。然るに國家を治むべき理想標準は明かになつてゐない。此の行詰りと、それに隨つて生じる煩悶懊惱とは、基督教においても同様である。基督教は何であるかといふことすら、已に明白でない、従つて基督教が、今日のところで何を爲すべきかと云ふ事を知らないのも當然である。

二

如何にして此の泥濘の地獄から脱出し、吾人の行詰れる前途を切り開くべきか。これが吾人にその解決を迫る問題である。此の問題を解決する唯一の方法としては、これ等の價值あるもの、尊きもの即ち、文明を形作る文明の根本に溯りて、文明とは何ぞや、其の意義如何を尋ねるにあるであらう。



精神的文明と基督教

鹿子木員信

現代の人心、殊に考へる現代人の心を、最も強烈に彩るものは、何であるかと云ふと、それは煩悶して居るといふ事實である、現代心の特色は悩んでゐると云ふことである。そして其の原因は、行きなやみ行き詰つてゐると云ふに存してゐる。吾人の周囲には、數しれぬ問題が提供されてゐる。十九世紀に於ける力の開展は、古き人生に新しい分子を持つて來た。そして十九世紀は、十八世紀の繼續者實現者として、新らしき文明の價値を實現し、齎したのである。これ等文明の新要素の各々は吾人を捉へ、吾人の注意を捕へんとする。茲に吾々は其の何れに適歸せんかといふに迷ふのである。時として自分は宛もダントの所謂泥濘地獄——其處には無數の靈魂が、泥濘の中に頸ばかり出して踳いてゐる——その泥濘地獄の中にある様な感じがする。何處に人生の價値を求むべきか、抑も如何なる理想を以て我が前途を照らすべきであらうかと、惑はざるを得ないのである。

斯くして嘗つて明煌々として仰がれてきた理想は、破れて了つた。日本では武士道が頽れた、獨乙

精神の國に高めてゐるのである。今、精神的王國、吾人の規範的意識と文明との關係を譬へて見ると宛も光線とレンズと其焦點の如くである。レンズは吾人の規範的意識である、このレンズを透して大空に漲り輝く太陽の光は、一點に集中せられて、茲に焦點を作るのである。丁度その様に吾人の規範的意識即ち、廣義の良心は、精神的王國よりその力を受けて、或は道德の路に依り、或は藝術、科學に依りて、その力を此の自然の國を透して導き、遂にこれを一點に集中して、そこに焦點を作る。この焦點が即ち、文明の統一的顯現である。然らば宗教は抑も、精神的文明の何處に信ずべきであらうか。

三

右に述べた如く、種々な形に現はれる吾人の規範的意識が、智識道德、藝術等、特殊の顯現の羈絆きづなを超脱して、直接吾人の全意識に働くときに、宗教は起るのである。精神的威力が吾人の意志に働いて、茲に道德的文明が起り、智に働いて科學學問即ち、智的文明の起るに對し、精神的威力が直接吾人の全意識に横溢し、之れを占する時に、宗教は起る。故に若し精神的威力が吾人の智的方面を動かして、而して吾人の智的生活が吾人の全意識を壓倒し去るに及びては、茲に此の智的生活はまた、宗教的色彩を帶ぶるに至るのである。その最も著しい例は、ジョルダノ、ブルノーであつた、スピノザであつた。智的文明にせよ、美的文明にせよ、精神の力が此の文明に溢れ、其の溢れた力が吾人の精神的生命を壓倒し充實し了せた時に、宗教は現はれるのである。

之を逆にして、吾人の經驗的意識を中心として見る時に、宗教は否定を通じて肯定に至る生命の過

先づ眞善美の理想の依つて来る源泉を省み、之れに照らして各個の價値の位置を明かにし、また其れ等價値相互の關係を明白にせねばならぬ。即ち先づ文明の批判分拆を企てなければならぬ。文明を思ひ顧み、省察するといふ事が、此の窮境を救ふ唯一の道であると私は信ずる。

斯く文明を分拆せんとして、吾人は此の文明の依つて起る吾人の精神意識に著眼しなければならぬ。簡単に言へば、文明とは吾々の意識の陶冶である、鍛練である。人間の精神が外界に向つて其の威力を揮ふとき、其處に物質的文明は起り、同じき吾人精神の最高の意識が、吾人精神の知的方面に働いて、そこに科學の領域は開かれる。同様に吾人の最高意識が吾人の意力を鍛練し、自らの理想に服従せしむる時に、善即ち道德的文明は生れ、同じき精神の力が吾人の情緒を陶冶して、茲に美的文明の花を咲かしめるのである。而して智的、道德的、または美的文明の流を辿りて、その源に達する時、吾人は其處に最高の規範的意識即ち、理性の儼存するを發見するのであらう。かくして文明とは理性即ち萬人を超越して、而かも萬人の衷に儼存し、以つて理想たり標準たる精神的威力の實現となり、また其の結晶となる。客觀的に云へば、文明とは、精神的威力の此の現實の世界、自然の國に於ける征服であり確立である。

かくて一切の文明を統一綜合するものは、吾人が最高の規範的意識である。この規範的意識が即ち人間の直接に經驗し得る精神の王國である。これを宗教的に云へば神の王國である。これを形而上學的氣分をもつて云ひ表はせば、吾人の最高の意識、規範的意識は、實にその力を深き神の國に汲んでゐるのである。丁度雪山が其の巔を雲の中に突き込んでゐるやうに、我等の規範的意識は、その頭を

また基督教は平和主義だと云ふけれども、基督教の根本思想に、さういふ思想は主義として存してゐない。敵を愛せよとの言葉の中には、已に敵を豫想し對敵行動を認めてゐるでは無いか。基督教を一定の社會的倫理的思想の中に叩き込まんとする企は、必ず失敗に終るであらう。

基督教とは一定の精神的經驗である。神の國は言にあるに^{こゝろ}あらず、力にあるとはポーロの告白である。基督教は一定の精神的經驗の典型である。然らば其の典型は精神的文明と如何なる關係を有つてゐるか。精神的文明の背景の上に、如何なる價值を有つてゐるであらうか。私は基督教の經驗は、最もよく宗教的經驗を體現してゐるものであると思ふ、今茲にパウロや、アウグステンの宗教的經驗を陳述するの要はない。神、人となるといふ化身の思想、復活の思想否經驗、地獄を通して彼方に神の國を見、幽暗の地、涙の谷、死の蔭を透して、あなた光の國に到るの經驗は、如何に基督教がその經驗に深く宗教の根本義、意識の全線に亘つて、否定を敢てするの勇氣と否定を透して肯定の新らしき國を築くの力を體現してゐるかを語るものである。基督教者は此の事實を忘れてはならぬ。恐らく此の事實が基督教の下す最後の深い根であらう。かくして精神的文明と基督教の關係は明らかである。精神的文明の最も深い源泉の一つとして、基督教はその存在の最後の權利と權威を有つものである。然らば基督教は精神的文明に對し、如何なる態度を取るべきであるか。或る宗教家は云ふ、基督教は宜しく此等の精神的文明を弊履の如く棄て去るべしと、其の最も著しいのがトルストイである。併しながら、一旦獲得した精神的文明を省みないで、只直接的宗教經驗のみによつて、果して精神の威力神の國の全般に亘つて、その深さ、廣さを知る事が出来やうか。私は否と答へざるを得ぬ。他の一般

程である。自分の眼前に横はつて居る自然、即ち聖者の謂ふ肉を破りて、それ以上の靈の國を求むる時に、そこに宗教が現はれる。現在現存の状態を突破して、より高き生命に進むとき、自然的、既存的存在に對し、「否」を叫んで新らしき國を望む所に、宗教は生れるのである。凡べての宗教は悉く、苟もそれが宗教である限り、皆等しく此の生命の經過を通る可きものである。

四

かくて何れの宗教が、最も尊い價值を有つてゐるか。即ち歴史的既存の宗教の宗教的優劣を尋ねる時に當つて、吾人に評價の標準を與ふるものは、實に之れである。此の宗教の根本義である。一つの宗教をして宗教たらしめる此の生命の過程である。即ち此の宗教の根本義を最も多く體現、發揮してゐる宗教が、宗教としては最も優れた宗教である。かくて吾人は基督教の問題に近づくのである。

基督教は何であるか。ドグマでないとは、多くの人の言ふ所である。茲に深長な意味がある。基督教がドグマでないといふ事は、基督教は或る意味に於ける思想でないといふとである。基督教はドグマでないと云ふ事は、同時に又社會的思想でもなければ社會に對する一定の態度でもない。一定の倫理思想でも無いと云ふ事を意味してゐる。若し基督教が一定の社會政策や、倫理思想で言ひ盡くし得るものならば、基督教は已に宗教ではないのである。例へばよく基督教は一夫一婦な一夫一婦でなければならぬと斷言するが、必しもさうは謂はれない。基督教的君主の中で、最も基督教的であつたと云はれるカール大王などは、現に多くの婦人を娶つてゐる。基督教は嘗つて奴隸制度に反對しなかつた



生命と形式

安部 磯雄

私等にとつて最も大切なものは、自由である。自由のないものは奴隷である。奴隷の生涯は果して生き甲斐のある生涯と云へるであらうか。自由のない人生は地獄である。

今日、私等の間に於ける紛争と煩悶とは、皆この自由の妨げに起因して居るのである。一家の中に悲哀があり不平があれば、それは直ちにその中の何人か、束縛されて居ると云ふことを意味する。一國に政争があれば、それは直ちに或る黨派もしくは権力者が、他を壓制して居ることを意味する。人間が若し常に進歩して居るものならば、この束縛や壓制の糾を斷じて、自由に向つて進んで居ると云ふことは、歴史の證明する事實である。

自由とは何であるか、蓋し生命のない所には、自由もなければ、束縛もない。生命のない石や硝子には自由がない、また束縛もない、人に自由があると云ふことは、即ち人に生命があると云ふ事である。

的精神的文明と斷つては、基督教的經驗は遂に一個の主觀の戯となつて了ふであらう。

そこで基督教のとるべき道は、一方絶えず水晶の如き精神的文明の高さを攀づる事である。即ち美的道德的乃至は智的文明を、その背後に若しくはその足下に置くことである。而して他方に於いては直接的宗教經驗を以て、自らの全意識を陶冶し鍛鍊して、精神的威力の大なる源、大なる貯水池たらしめ、かくて人生最後の目的に進む事であると思ふ。以上は單に私の掲げた題目の梗概に過ぎない。その中には多くの大問題か錯綜して潜んで居る。これは尙ほ、より深い考察を以て闡明されねばならぬ。

現代の人々よ、わかい人々よ、今度は君たちの番だ！ 僕
たちの身體を一つの踏臺にして進んで行け。そして僕
たちよりもつと偉大になれ、幸福になれ。

——ロマン・ローラン——

あるのも事實である。たとへば四福音書には、基督の教訓を綴つてあるが、その中に基督の言葉ならざるものも随分ある。故に吾々の信仰は聖書ではない、歴史的の基督そのものでなければならぬ。かう云ふ聲が聞こえて來た。そして茲に基督教の第二の革命があつた。

今日では、四福音書のどれだけが基督の言葉であつて、どれだけが後世の挿入であるかと云ふことが略わかつて居る。従つて純粹の基督の教訓と云ふものもわかつて居る。けれども亦、今日に於いては更に今一步進んで居る。即ち、基督の言葉は果して誤謬のない、唯一の權威と稱し得るかどうかと云ふことである。換言すれば基督をもつて理想的人物と斷言し得るかどうかと云ふことである。世間には基督をもつてさう云ふ理想的人物と信じ得ないものも多いのである。基督は果して絶対理想の人であらうか、將來基督以上の人物は生まれないだらうか、少くとも社會共通の精神が、基督以上に至ることは出来ないであらうか。吾々自らをして更に尙ほ發達せしめて、基督以上のものとなさねばならないのではなからうか。と云ふことである。實際、今日の社會共通の精神の或るものが、基督以上であることは認めざるを得ないのである。

生命が内に潜んで居る限り、もうこれでよいと云ふことはない。茲でよいと云ふときは、生命が既に死んだ時である。私達はどうしても基督に止つてはをられない、それ以上に進んで行かねばならぬ。

それは歴史に於いてさうである、私達の經驗に於いてさうである。私達の教育の過程に就いて考へて見ても同じである。私達は小さい時分に小學校に行く、その時分には小學校の先生よりも偉い人がない様に思ふ、だから先生に反抗するなどと云ふことは決してあり得ない、併し中學校に入ると、も

束縛とは何であるか、蓋しそれは形式である。而して吾々がこの形式の爲めに束縛されて居るのは、争はれない事實である。ルーテルをして宗教改革の決心をなさしめたる言葉は、實に『義人は信仰によつて生くべし』と云ふことであつた。信仰は即ち精神である、生命である、然るに當時の舊教は、信仰と形式とを混同して居た、宗教とは教會に出席することであつた、晚餐を守ることであつた。甚しきは何なる罪も、金をもつて赦罪券を買ふことによつて、赦されるとせられて居た。ルーテルはこの形式一點ばりの生命なき形體の宗教には堪へられなかつた、かくて彼の心に浮んで來たことは、この『義人は信仰によつて生くべし』と云ふ言葉であつた。

—

生命さへあれば、舊き形式を脱ぎつゝ進んで行ける、それは、恰も蠶が皮を脱いで成長するのと同じである。しかも蠶の皮を脱ぐのは、一度ばかりではない、幾度もいく度もその皮を脱ぐのである。かくの如くにして生命は次第に成長して行くのである。それ故に基督教の革命の如きも、ルーテルの革命のみをもつて終るべきでない。彼は、宗教は法王でない、良心に従つて聖書を讀まなければならぬと云つた。併し十七八世紀頃になると、人の考へは更に一段の進歩をした。彼等には最早、聖書を見鷄呑みにして、一切を神の言葉だと信ずることが出来なくなつた、聖書の中にも誤謬があることを見出さずには居られなくなつた。茲に於いてまた一皮脱がねばならないやうになつたのである。一體聖書に神の言葉と見るべきものゝ存するは勿論であるが、同時にまた神の言葉と見るべからざるものゝ

長の爲めに、それ以上の喜びがある、慰めがある。

政治上の破壊は、時として大きな形をもつて行はれる、たまには血を流すことさへある。併しそれとても必しも悲しむべきではない、と云ふのは舊い形式に堪へられない新生命の表現であるからである、わが國では近頃立憲の思想が漸く目ざめて來て、憲政擁護などと云ふ運動が起つて來た、これなども從來の政治に満足しなくなつたからであつて、大に喜ぶべきこと、云はねばならぬ。

これを倫理の方面に就いて考へて見ても、私達は舊道德には満足することの出来ないものである。私達の願ふところは新しいものである。新しい道德を要求する叫びは、私達の間にもさこえて居る。然るにその新道德が今日の日本に危険でないかと考へて居るものも少なくない、そしてこれを妨壓せんとさへして居る。併しさう云ふ人はよく考へて見るがいゝ、私達の歴史は三千年近くも續いて來たのであるが、その間に於いて、幾度その形式の衣を脱ぎ代へたか知れないではないか。それでも歴史の特殊性は依然失はれずに居るのである。基督は新しい生命であつた。彼は時代の形式に反抗するに躊躇しなかつた、猶太人の宗教を一々批評し訂正し、そして舊思想、舊道德を破壊した。彼は隨分思ひ切つたことを云つたものである。

『吾が來りしは地に泰平を出さんことにあらず、却つて刃を地に出さんとなり、それわが來るは、子をその父に背かせ、女をその母に背かせ、媳をその姑に背かせんがためなり……』

蓋しこの言葉には非常な意味がある。親も子も争はない位なら、天下は如何に泰平であつても、進歩は決して有り得ない、日本の家庭に於いて、尙ほ未だ根本的な大波瀾がないのは、まだ、進歩が

う大分變つて居る、自分の生命が進んで居る限り、先生と云ふ形式も進んで居なければならぬ。もしそれが進歩してゐないならば反抗する、更に進んで大學時代になると、今度は教師を批評することが出来る。かくの如くして、私達は斷えず形式に反抗して、これを打破しつゝ進むのである。私の如きは過去三十年間の信仰生活を顧みて、やはり同じ經驗を見出すものである。初めのうちはその信仰に對して、何等の不平も反抗もなかつた、たゞ歡喜に溢れて居るばかりであつた。然るに段々と進んで行くにつれて、考が自由になつた、そして斷えず舊い形式や信仰に反抗しつゝ進んで來た。政治などもまた同じである、人類が進歩すれば進歩するほど壓制を厭ふやうになる、そして常に反抗があり、革命がある、そしてかうして社會や國家が進んで行くのである。

三

故に、人類の爲めに最も良いことは、常に形式を打破して進むことである。それを危険なことのやうに考へるものもあるが、決してさうでない。形式の打破は、即ち生命の成長を證するものであつて、大に喜ばねばならぬことである。たゞ破壊と云ふことばかりを考へて見るならば、それは悲しいことであらう。併しそれによつて生命が進むのだと思ふならば、決して悲しむべきことではない。母は子供の爲めに衣服を作る、併し七つの頃の子供は、日に日にずん／＼と成長する、故に母は常に新なる衣服をその子供に作つてやらねばならぬ。英語の所謂、衣服よりも子供が *Out grown* するのである。併し母親はそれを悲しむであらうか。經濟から云へば困るかも知れない、併し母の心には、子供の威

併しながら私はかく云つたからとて、形式を輕んずるのではない。私はこの一點の誤解なからんとを希望する。

形式は生命を束縛する。併し形式があつてはいけなないと云ふのではない、何の用をもなさないと云ふのではない。形式を用のないものとするものは、一の忘恩者である。何故なれば私達は形式なくしては立つて行かれないからである。鶏の雛は卵をつまらないものとするかも知れない、併し卵は過去に於いて雛を護つたものである。私達は舊式の宗教を好まない、併しかつてはそれに育てられたものである、そしてそれに育てられたことをもつて、私達の損となしてはならない、そのために非常な利益を蒙つて居るのは云ふまでもない。たとへばこの雜誌に關係のある統一教會の基督教の如きものは、餘程進歩したものである。併しながら最初からこの教會に入つて來たものが、果して益を得るであらうかどうかと云ふことは疑問である。何となれば統一教會は、たとへば大學院のやうなものである。他の教會で生命の發達し過ぎたものか、その形式に不満を抱いて居るものか、他の教會を卒業したとも云はれるものか、さういふ人たちの來るべきところであるからである。もし然らずして、最初からこの教會に來るものがあるならば、その人は適當の訓練を経ずして、直ちに高き課程を踐まねばならぬのであるから、餘程困難でなければならぬ。これは何を意味するであらう、過去に脱ぎ捨てたものが悪いのでなく、矢張り今日の役に立つて居ると云ふことを意味するのである。故に形式も決して

鈍いと云ふことを證據だてゝ居る。若い人の倫理が進歩すれば、もう少しその争闘が烈しくならねばならない筈である。要するに、思想でも行爲でも、或る一つのを捉へられて、動きがとれないやうでは、發達が止まつた證據である。牢獄につながれた者は、人間ではなくて、器械である、舊思想に捉へられたものは、舊思想の傀儡に過ぎない。此の意味に於いて私は、自然主義に對しても深い同情をもつて居る。何となれば自然主義の目ざしたところは、即ちこの捉はれから遁れやうとすることであつたからである。何者にも捉へられずに、生命の自然に従つて生けると云ふことに悪いところがあつては堪まらない、自然主義に多少の弊害が伴うたのは、たゞその表はれが或る一方にのみ向つたからであつたのである。併しそれも無理ではない、一寸考へて見ても、日本では家庭に於いても、學校に於いても、男女の自由な交際と云ふものがないので、自然主義者がこの束縛に向つて突貫を試みたのは、自然の理である。たゞ日本の自然主義者の反抗が、此の一面にのみ限られて居たやうなのは物足りない、自然主義はこれを政治にも社會問題にも及ばされなければならぬ。たとへば勞働者が資本主に壓制されて居るなどは、決して自然ではないのである。今日の教育者が生徒に對する態度は何うであるか、彼等は決して生徒に對して親切でない、生徒をもつて自分の弟であるとも考へない。また校長の教師に對する態度はどうであるか、學校は恰も工場のやうなものである。校長は社長で、教師はその雇はれ人である。こゝにも自然主義の肉迫して行かなければならぬ領分がある。ストライキの起くるのは、慥かに生命力の發達の一現象である。自然が不自然に勝たんとする努力である。決して悲しむべきことではない。

とも出来なかつたが、今はそんなことはあり得ない。それと同様に藝術が宗教や倫理を顧みないのは、決して正しくはない。宗教も文藝も、倫理も、政治も、凡ては生命の道づれてなければならぬ、一人だけ先きに立つて行くのは、生命の調和を害するものである。展覽會に裸體畫や裸體の彫刻が多いと云ふことは、今の藝術家の反省しなければならないことである。藝術が單にもし藝術の爲めならば即ち止むが、藝術がもし人生の爲めのものならば、藝術家は宜しくその畫を描くにあつて、觀者はこれによつて果して如何の感を抱くであらうかと云ふことを考へなければならぬ。希臘の藝術には、裸體繪や彫刻が多い、併しながらあれば、希臘の體育によつて練り上げられた肉體美を示すものである。私達はこれに向つても、決して惡感を懷かずして、却つてその肉體の美にうたれるものである。今日わが國のモデルにして、果してよしかくの如き資格を備へたものがあるであらうか。今の日本人にしてよく人に見せ得る部分は、たゞその半身だけである、全體をモデルにするならば、實に醜である。私達が展覽會に行つて、風呂屋に行つた様な氣持をしなければならぬのなら、それは實に困つたものである。生命の發達は、人間の一部分の不釣合な發達ではいけないからである。

生命は人生に於いて、最も偉大なる事實である。生命の前には、何者も跪かなければならない。生命を充實して政治を行へば、同家社會は安寧と幸福とを得て益々進歩する、生命が充實して倫理道德を行へば、男女の問題も、勞働者と資本主との關係も、教師と生徒との關係も、これを立派に理想化することが出来る。この意味に於いて、形式を斷ちさらねばならぬ自覺の生じたときは幸ひである。私はそのとき、ポーロと共に『義人は信仰によつて生くべし』と叫んで進まばねばならない。

斥すべきではない。感謝すべきものである。また私達は舊い形式を壊して、新しい生活に入つて居ると思つて居るが、實は今も尙ほ、また新しい形式を造つて居るのである、今少し生命が發達すれば、捨ねばならぬ形式を、今もつて居るのである。そして其の形式を今は適當だと思つて居るのである。

今一つ私は自分の立場を明にしておきたいことは、如何に自由になり束縛を離れやうとしても、人間は色々の方面をもつて居るのであるから、それを全體として一樣に進まなければならぬと云ふことである。衣服の或るものが不自由になつたからと云つて、衣服そのものを捨てねばならぬと云ふ道理はない。

自然主義はよいことである。しかし文藝の自然主義が、男女の關係に對する見解を謬つたと云ふことは、彼等がたゞ文藝的觀察をしたばかりで、宗教や倫理や政治の如き、人生の他の部分を顧みなかつたからである。人生は一樣に進まねばならぬ。或るものだけが進んだところで、それは何にもならない、却つて害になるのである。

五

この雜誌が宗教と藝術との問題を提供したときに、藝術を倫理や宗教とは關係なしに、獨立しなければならぬと論ずるものがあつたが、人間が諸方面である限り、一方ばかり成長し發達したならば、それは完全な人と云ふことの出来ない一種の怪物である。生命は部分的でない、全體でなければならぬ。無論宗教が藝術を壓迫することはよくない、ピュリタンの盛んな頃には、教會に繪を掲げるこ

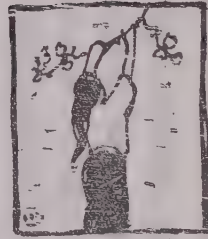
たれとも教へずに、たとへば偽らざる生命の欣求者たれと教ふるのみである。私は此の時代の生活といふ生活の内に流るゝ基督の生命を探索しうる人の態度を懐しく思つても、ロオマンズの基督、傳説の基督の見すばらしき模倣者となる事はどうしてもできない。私にとつては常に新しき現在が何よりも先づ尊いものであるからである。

*

私たちの生活を毒するものゝ一つは、安價な樂天主義である、安價な厭世主義である。

安價な樂天主義によつて生きてゐる人は、歡びにこそ人生の價があると云ふ。そしてこれに對して鸚鵡がへしに答へる人は、悲しみにこそ人生の強みがあると云ふ。安價な厭世主義者の群である。けれども、さういふ人たちは、いづれも歡びと云ふ概念、悲しみと云ふ概念に眼を眩まされて、ほんとうの歡びを味はずに居るのではなからうか。生きた悲しみに浸されずに居るのではなからうか。

私は歡びとか悲しみとか云ふやうな意味の鮮やかな言葉で、人生の價や強みが定められるほど、私たちの人生が單純であるとは何うしても思はれない。従つて樂觀的な生活が至上であるとか、悲觀的な生活に樂天的生活より以上の深みがあるとか云ふやうな、手取ばやい安價な判斷に満足してゐる事は何うしてもできない。ほんとうに深い人生味は、どうしても「歡びの悲しみに迫られ、「悲しみの歡び」に満たさるゝ心境から湧きだすものであるやうに思はれてならない。涙にぬれた微笑、歡聲にからまる短調の旋律から生み出されるやうに思はれてならない。基督はたしかに「悲哀の人」であつた、しかし彼が決して歡びを知らない「悲哀の人」であり得なかつたのは、樂天的態度や厭世的態度が、生



塵の中から

(感想)

内

藤

濯

*

私の思ひ慕ふ基督は、二千年の昔、ガリレヤに生きてゐたまゝの基督では無くて、常に新なる現在に生き、そして新なる現在を無限に促進する基督でありたい。歴史と云ふ美しい垂幕のために暈されながら、はるかな過去の舞臺に立つてゐるまゝの基督ではなくて、この爛熟せる文明の渦中に、絶えず新なる軌道を敷きのばして行く基督でありたい。ロオマンズの霞に縊なされた基督は、私の生活の裝飾となる事はできても、私の生命の導調となることはできない。現代生活の背景となる事はできても、現代生活の舞臺を支配することはできない。現在の生活を否定しなければ、基督の足跡を蹈む事ができないと云ふ人は、舞臺裝飾のみに力を入れさへすれば、それで劇の完全な演技が提供されると云ふのと同じ錯誤に墮してゐるのである。二千年前の世界に開展せられた基督の生命が、そのまゝ二千年後の此の世界に開展せらるべきものであるかの如く思つて、一圖に「基督にならへ」と叫ぶ人の心ほど、私をして空疎を感じしめるものはない。

この時代に生きてゐる私の衷に潜むべき基督は、私に對して宗教家たれとも教へなければ、豫言者

沈黙の力が生れるやうに思ふ人とは、共に一種の守一癖に墮した人である。

*

ある日あるところで「宗教は吾々に不満を與へる」と云つた人があつた。

この言葉を聞いた人たちの間には「そんな亂暴な言葉づかひがあるものか」と、目に角を立て、罵つた人もあつた。「それでは宗教の價がなくなる」と呟いた人もあつた。

しかし私は、この言葉に「宗教は人間に安心立命の基礎を與へる」と云ふ事よりも、以上に人を欺かない意味の含まれてゐる事を感じずには居られなかつた。思ひの外に生々した懐しい心の動いて居ることを感じないわけに行かなかつた。私たちにとつては、欺かれた安心、ごまかしの立命よりも、生活を刻一刻に新しくして行くに足るだけの促進力、一瞬間たりとも生命の停滯を許さうとしないだけの力が、何よりも大切なもので無くてはならないからである。

いつまでも安心が得られないと云ふことは、もはや私たちに取つては苦痛でなくて、それがむしろ一つの生きた安心でなければならぬ。神に救はれると云ふ事を方便とするやうな宗教は、もはや何ものを私に與へるところがない。氣ばらしの道具とすべく、宗教はあまりに尊いものであるからである。

*

或るひとりの職工が、至つて高い煙突を百尺の高さまで登つて行つたとき、工場長はすこしもそれを危まずにゐた。けれどもまた或る日、おなじ煙突を二百尺の高さまで登りつめた職工の姿を見たと

命の眞剣なる探求者としての態度に裏書きするもので無い事を深く信じてゐたからでは無かつたか。

歡びも悲しみも、共に私たち人間の内部から絞り出される美しい自然の表白に外ならない。私たちは歡ぶにしても悲しむにしても、あの／＼の生活に眞剣でありうればそれで可いではないが、眞に「我」を欺かない生活態度を把握しうれば、それで可いではないか。

眞の意味で、悲しみを知らぬ樂天者はあり得ない、歡びを望まぬ厭世者もまた在り得ない。

*

「唇が眠ると直ぐに靈魂が眼を覺ます」からと云つても、「言葉が時のものであつて、沈黙が永遠のものである」からと云つても、いまだ嘗つて其の唇を覺ました事のない人、いまだ嘗つて自らの言葉の強みと弱みとを痛感した事のない人が、必ず眞に「靈の目ざめ」を感じてゐる人だと云へるであらうか眞に沈黙の永遠性を掴むことのできた人だと云へるであらうか。

無論私たちは、唇を覺ますことよりも、靈を覺ますことに努めなくてはならない、言葉を生かす前には、まづ沈黙の尊嚴にうたれて見なくてはならない。しかし私たちが、かうして微かながらも「靈の目ざめ」にあこがれ、沈黙の力を知りうるやうになつてゐるのは、覺束なくも唇をひらく術を知つてゐるからでは無いか、言葉を連ねるだけの力を有つてゐるからでは無いか。

沈黙の力を知ると云ふことは、やがて言葉の表現力の強大と弱小とを合はせ知ると云ふ一點から始まらなければならぬ。表現と饒舌とは違ふ、沈黙と麻痺とは違ふ。しきりにハイバアボリカルな言葉を操つて、それで自分の思想を表白する事ができたやうに思ふ人と、口を噤んでゐる事ばかりから

ある人が或る人を評して、「あの男は何でも彼でも一本調子にやるからいけない」と云つた。私は此の言葉を聽いて、「一本調子に物事をやつて行くことが何て悪いのだらう」と疑はないわけに行かなかつた。そして此の疑は今もなほ解けずにゐる。

一本調子に行ふのを悪いと云ふ事が、もし他人の氣を悪くさせるからと云ふやうな、相對的な見方に基くのであるとするなら、私はむしろ、一本調子にやつて行けるだけの素地を有つてゐる人を懷しく思ふと云ひたい。何故なら、どこまでも一本調子にやつて行く人の爲めに、氣を悪くさせられるやうな人は、十のうち九まで、物事を二またにも三またにも掛けてやつて居ながら、それを世渡りの道だと心得てゐると云つてよいほどの人であるからである、それだけまた、至つて齒ぎれの悪い人であるからである。

ほんとうに一本調子に生きて行ける人は、飽くまで純一な生活態度を擲むことのできた人では無からうか、それだけ其の人の生活に、眞實の閃めきがあるのでは無からうか、幸福の調があるのでは無からうか。

*

獻身犠牲の事實を、たゞ自己を否定する事と等しい位にしか思つてゐないのが、現代の愛他主義者である。單なる自己否定は、やがて他の否定を豫想する、だから其の終極には、「私が死ぬから、あなたも死ぬね!」と云ふくらゐの事實しか表はれない。一方で個人の自覺を説きながら、他の一方で獻身犠牲の精神を呼びおこさうとしたのは、明らかに基督の心であつた。彼が自己否定の美しさを説示す

き、工場長は胸を轟かせながら、「氣をつけろ！危ないから……」と呼ばはつた。ところが職工は二百尺ほどの高みにありながら、至つて澄んだ聲で、「なあに御心配なさるな、百尺のところから落ちても二百尺のところから落ちて、死ぬのは同じ事でさあ……」と答へた。私はこの聲を放たしめた職工の心に、職工長の不安を碎くに足るだけの力が波うつてゐた事を思はずにはゐられない、そしてみづから動もすれば、職工の心に閃めいた人間の絶對性が掴めないで、甲斐もない不安を繰り返してゐる事を淺ましく思はないわけに行かない。

人間のすべての弱味は、外的にばかり物を見たがる間違つた態度から生み出される。なぜ私たちは思ひ切つて、私たちの内部に動いてゐる絶對性のみを、生活と云ふ生活の導調とする事ができないのであらうか。そして何故、約束のみによつて成り立つた外的の道徳を忘れて了つて、純一な「内的道徳」を築きあげる事ができないのであらうか。

*

自分を眞價以上に高く見せつけやうとする心と、強ひて自分の眞價を包み隠して、遜つた態度を装はうとする心とは、いづれも同じ程度に誤まつた心である。かういふ心には、人を壓迫したり遠ざからしめたりする不純な力はあつても、人の心を底の底から自然に喚び起こすだけの力は、到底あり得ない。私たち人間が、互に他を輕々しくさげすんで見たり、知らず識らず他を過らせたりするのは、みな斯ういふ不純な心の意外に惡どい妖はして無くてはならない。

*

統一の要求と信仰

鈴木龍司

宗教的機能を、感情とか、意志とか、知識とかいふ局部的なものとする見解は、既に舊きものとして排斥せられてゐる。宗教は人心至奥の要求に基くものなるが故に、人性全體に満足を與へなければならぬ、感情にもあらず、意志にもあらず、知識にもあらず、その未だ分化せずして渾然たる状態にある心力に呼應するものなりとは、甚だいはれある見解である。これ等の見解に従へば、宗教は必然的に哲學的道德的に打ち建つることをなさず、人性に於ける統一の要求及び實驗的方面に、根據を求めんとするやうにならなければならぬ。彼等に於いては、神の啓示を重んずること勿論であるが、また教祖の人格模範に重きを置くこと多く、その實驗的真味に、まつしぐらに突入せむとする、所謂人格的宗教は、こゝに起つて、永遠の存在、無限の光耀の要求に合し、生ける神、生ける靈との同時存在を経験しなければ措かない。

人性に於ける統一の要求——これが宗教に於いては、實に偉大なる作用をなすものである。多に於ける一、複雑の中の統一が、宗教のエッセンスだといつてもいい位である。今これを基督教に見れば基督それ自らは實に、最も純一なる「一」と、最も豊富なる「多」との人格の實現に外ならぬ。單に例を基督にのみ取る必要はない、日蓮でも、親鸞でも、たゞ當時の混亂したる思想界を我が一身に統一したと云ふばかりでなく、一代佛教の精髓を、或は南無阿彌陀佛の六字に要約し、又は妙法蓮華經の五

る前に、まづ自己の強烈なる肯定を要求したのは、眞の自己否定が、自己肯定の確立に依つてのみ成し遂げられる事を信じてゐたからでは無かつたか。自己の否定面と肯定面とを離して考へる事は、一つの方便ではあり得ても、眞實探求の態度とはなり得ない。

私は涙を覺えるまで献身犠牲の事實を讚美する、けれどもそれを私自身の事實とする前に、自分の弱小を何うしたらよいか、献身と犠牲との前に表はれる否定の事實を、どうして肯定したらよいか——この基點を何うして忘れる事ができやうぞ、何うして忽せにする事ができやうぞ。

争闘のリズムは至上のハアモニイである……ロマン・ロラン

ことが出来る、實にかくの如き苦痛は、心の活動の最も高潮に達したものである。吾人は苦悶煩悶に於いて、最も強大なる力を感ずる、これを一面よりいへば、新らしき生みの苦しみとも稱すべきであらう。この神聖なる力は、聖靈に復歸せんとするの努力、即ち心的勢力の擴大である。かく憐みと罪禍とを持ちて、而かも神の子なりといふ神秘的にして偉大なる自覺は、道德的といふも足らず、精神的といふも不充分である。己が身は全く神に捧げ、我はたゞ神の道を行くといふよろこび、そこには大いなる包容力がある。

基督に於けるこの喜びは、彼以前の哲學者預言者たちの未だ曾つて經驗せざるところであつた。何者をも排除せず、何者をも穢さず、人類の人類として有すべき普遍的分子は、一切その中に含有し、而かもその各々は充分なる發達を遂げて居る。肉體の自己は小なりと雖もその内容はすべてその處を得、その活力は潑瀾として、彼の教ふるところ命ずるところは、皆積極的にして建設的であつた。彼は決して排他的ではなかつた、彼の争ふのは、たゞこの世の誤れる信仰に對してのみであつた、彼には反抗なく否定なく、何者も彼の教と矛盾するものは存在しなかつた。使徒達の欲しなかつたのに拘らず、小なるものを我に來らしめよと言ひ、彼を捕へんとして來れるものに對しても、ペテロ劍を收めよと命じた。彼の心は凡べてを含んでゐるのである、寛容的なる一般の方則に合致して居るのである。萬物の中何物でも排除するが如き心は、未だ未熟なるものといはざるを得ない。基督の心は、一面から見れば、極めて單純であつたけれども、その裏には大いに豊富なる内容を含んで居つたのである。

字に約め、而かもその内には無限の内容を含ませたるが如き、皆その間の消息を闡明するものである。

基督の場合に於いて、神より來たれる一大人格は、人間の間に生活し、罪あるものを愛し、罪の贖として死し、而してまた復活したのである。彼の力にかくして生き、彼の精靈はかくして永遠に吾が裏にある。その人格は甚だしく豊富にして、而かも極めて單純である。非常に尊嚴ではあるが、而かも謙虛己を空しうしてゐる。至つて平易なるやうではあるが、深く考ふれば、いひ知らぬ靈感靈動が我等の上に輝く。いかなる研究、いかなる經驗も未だ曾つて完全に彼を知り盡くせりといふものを聞かない。誠に彼に於いては、偉大なる精力と思想とは、つねに動き、強烈なる意思と努力とは、絶えず働いて居るのである。彼にはよろこびと、かなしみがあり、寂しさと動搖があり、試練と勝利があり、誘惑と克己があり充實と謙遜とがある。いと小さきものなりといふ一面には又、天國も我がものなりとの自信がある。特に注意すべきは、純一なる直感力の極めて偉大なることであつて、彼はこの世の終焉を見て、哲學者の當然陷るべき悲觀にも傾かず、而かも苦しみを忘れやうとして、卑怯なる樂天説にも走らず、苦しみの中に神聖なるよろこびを味ひたる彼の態度、彼はたゞ彼に於いてのみ、彼を學び、彼に於いて生くるものにのみ、彼を解すべしといはれる程、複雑である。基督の裏にはまた、最も強き人類の悲哀と、神秘的の深淵があつた、苦痛と罪惡、これ等は極めて悲しきものであるが、之あるに拘らず、否、却つてこれあるが故に、これを通じて勝利があり、凱歌の聲を聞く

勿論である。しかるに基督に表はれたる宗教的意識の如きは、この見地からすれば、極めてその眞を得たものといふことが出来る。一派の學者、たとへばケヤードの如き人が、この人格に於いて初めて絶對の眞理が實現せられたといふのも、無理ならぬことである。それは彼の人格に於いて、未だ曾て見ないほど豊富なる多様の統一が、完全に保たれたからである。基督の場合はそれである。

吾人はこれより少しく、基督教徒中聖者と稱せらるゝ人々の實際的修行に徴して、これ等の要求がいかなる程度まで充たされつゝあるかを見なければならぬ。十字架のジョンの如きは、彼自らの教理を見ても、内的生命を見ても、殆んど多様の分子を缺いてゐるやうに思はれる。しかしながら、一たび彼の修行的方面を窺ふならば、立ち所にその誤解であつたことに氣が付く。なるほど彼が、その形式的教理に於いて、一切のものの皆分裂すと云つたのは事實である。また心の傾向が極めて單純であつたことを表白する點も確かである。けれども彼は、實行的方面に於いてこの缺を補うて居る。教理の缺陷を實行的方面に於いて補ふ例は、宗教家の傳記を見る時に、大いに興味ある問題である。これ或は宗教家が哲學者と異なる所以とも見られるのであるが、一見矛盾に充ちてゐるやうな信仰が、なほ且つその人の生命を支配し、力を與へつゝあるのは、眞にライフのいかなるものかを知る人に取りて面白い題目ではあるまいか。精神的の人は、生活そのものが教理である。彼等は生活そのものゝ中に自ら喜悅を見出さねばならぬ。ジョンの如きは、この例に洩れない。ジョンに取りては、生活の中よりこゝに、これを缺いては、生くることが出来なかつたのである。彼は一切のことによるこゝを見出

る。これを一面から見れば、神がその靈を以て、之を我傍に表はせるものとなすことが出来る。基督の生命は、すべての生命の法則たるべきものである。彼は凡べての生物のうちに初めて生れたるものであつた。一切の物、天上のものも、地上のものも彼に於いて初めて現はれてゐる、一切萬有は彼を通じて存在してゐる。彼は萬有の前に在り、萬有は彼に於いて保たれてゐる、こゝに於てか一切は彼に集められ「一」なる基督は「多」に於ける「多」であつた。

ギリシアの神秘主義者も、或る意味に於いて、我が宗教に似通へるところがあるが、たゞ單純を求めて、多様に於ける純一、複雑に於ける統一の宗教的要求と比較するに、なほ及ばざるが如きものがある。プロチヌスの如きは、明かにかくの如き多様を否定して居る。彼は曰く「人の心力は、感覺の印象に始まり、想像的、辯證的、直覺的等諸種の理性意志感情等の能力を有するが、その作用をなすこと多ければ多きほど、その各自は個有の形を失ひ、遂に入聖の状態に至つて、一切の意志、觀念、意識愛情等はすべて消失し、人はその本性に進むにつれ、漸次一に近づき、遂には純粹なる一となるそれは愛にあらず、意志にあらず、自覺にあらず、觀念にあらず、たゞ一である」と。

すべてを空了して、そこに安住を求ることができないのは、現代人に取りていふまでもない現象である。もし宗教にして、たゞ單純に歸るをよしとするものであり、單調で部分のない全體であるとするならば、到底吾人に満足を與へることは出来ない。従つてかくの如き宗教は、眞理なりとすることも出来ない。同様に單なる多様、全體なる部分、統一なき亂雜の完全なる宗教意識を満足せしめざるは

刻なる多様であると同時に、最も完全なる人性の統一中に見出だされなければならぬ。これ即ち基督教にいふ恩寵より出づる *Multiplicity in Unity* である。

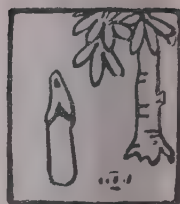
吾人は翻つてこれを自らの場合に於いて見なければならぬ。わが宗教的意識は、すなはち統一に對する不斷の渴望である。わが心は世の紛糾に堪へえない、わが力は錯綜したる種々の刺激に憊憊せんとする。嫉妬排撃、相擁せんとする衷心の要求は抱きながらも、悲しいかな、人は西に東に相隔たらんとのみ藻掻くのである。この世の寂寥、この世の蕪雜、知識徒らに高くして迷はいよく深い。そもく人は何處に統一を求めんとするのであらう。自らを人に與へて、一となる事ができるのならば余は我が身を赤裸々にして、人に與へもしやう。萬卷の經典を讀破して統一を得ることが難くないのならば、その努力も敢へて惜しむところではない。靜坐默想がその助縁となるならば、一切を抛つてそれに没頭するのも、また中々に快いではないか。近代人は既に、事の「多」なるに苦しんでゐるのである。

統一の要求を満たすには、唯ひとつの契機がある。信仰が即ちそれである。先人教祖の血を啜り肉を裂きて經驗し給うた結論へ、まつしぐらに進み入つて、それを無上命令として信奉することである。そこには何等の餘裕あるを許さない、口實あるを許さない、たゞ我は信ずと云へば足りる、それは突き詰めに突きつめて、抜き差しが出来なくなつた一境である。全心全靈は、たゞ「我は信ず」と云ふ一語に統一される。斯うなると、たとひ地獄に落ちて、後悔しないのである。地獄は一定すみかと判

だした。眞の多様と云ふことは、もろ／＼の事柄を最もよく醇化して理解しこれを味ふことである。ジョンは一切の事物、精神的ならぬ人々の眼から見れば、極めてつまらぬ事と思はれるものにも、よろこびを見出だしたといふ事であるが、これは感受性の鋭いものでなければ、出来がたい事である。神を味ふ濃やかな心が無ければ、できがたい事である。これら多様のよろこびは、聖者の生涯に特有なるものであると同時に、又まさしく耶蘇基督によつて統一された。彼は常に云つて居る——すべて今缺けたるものは、汝(キリスト)を忘るゝことなり。あはれ常に衷にあらはれいます汝を忘るゝとは、そも何事ぞ」と。

かくの如き感情は、常に彼の心に動いてゐた、そして彼の心は、また絶えずこれを希望し、その目的の爲めに努力する事を怠らなかつたのである。聖者テレサの言行を見ても、また尙ほ一層濃やかな多様の分子が含まれてゐるやうに思はれる。が、統一の要求が最も簡明に云ひ表はされたものは、聖者ロヨウによつて稱道せられたる「教國に服従するより生ずる平和」である。中世紀に於ける彼等修道僧は、長者の命を神の掟なりとして、絶對的に服従した。しかしながら其の内容は、決して盲従ではなく、眞の多様を許したる必然的統一であつた。また聖者ベルナルドは、斯う云つてゐる——「恩寵によりて始められしものは、同じく恩寵の自由意志によりて完成せらるべし。この経過は、相合して離れず、繼續的と云はんよりはむしろ同時に起こるものなり。一切の行爲は、一面に於いては恩寵、一面に於いては自由意志と云ふが如きものにあらず、兩々相合して、一體に起こる」と。

一切の希望、恐怖、悲哀、感謝、冀美、愛、憎、その他一切の心的多様は、かくの如くして最も深



生活の悲調

加藤 一夫

人生は如何に悲しいものにせよ、また如何に苦しいものにせよ、一度この世に生れた以上、私達はどうしても生きねばならぬ。私達の衷には、絶對の權威をもつて、『生きよ』と命令するものがある。併しながら私達は最早、たゞ盲目的に無自覺的に生きることが出来ない。私達は私達の生活に價値を發見しなければならぬ、私達の人生を意義あるものとなさねばならない。人生とは意義ある生活、もしくは世界を創造することに外ならないからである。私は前號に於いて、その意義ある生活の根柢を超越的な神に求め、汎神の内在的な神に求めて失敗し、遂に生命そのものゝ信仰に求めたことを語つたけれども、而かもその生命そのものゝ實在的價値に就いて、説明するとの極めて不充分であつたとを感ぜずには居られない。私達の全我を捧げて、全人生を委すに足るべき生命の信仰は、その生命が萬物を生み、萬物を保ち、萬物を育てる實在でなければならぬ。私達は皆、その實在の一顯現であつて、私達相互の間に於ける個性の別異は、充分にこれを意識しながらも、而かもその相互の關係は、大海に於ける千波萬波の如く、内部的もしくは先天的に相關聯し、相交感するところの渾一體で

明するのである。不統一であると眞に覺悟ができたときに、不思議にもそこに統一が湧き出るのである。あらゆる教主宗祖は、この間に我等が救主として現はれ來たつた。基督者の場合に於いて見るならば基督は即ち神の啓示として如上の示現をなしたものである。されば斯くの如く彼を信じ、また斯くの如く如實に彼に仕へることは、忠實なる基督者のつとめである。これを區別し、解釋し、分拆し、批評し、神學化し、條件つきにて信ずるが如きは、眞の宗教を理解したものとは云はれない。

宗教とは無條件の服従である、人類を救はんとする神の意志に子供の如く信賴して、自らは眞の罪人なりとの自覺に頭を下げ、何等誇るべきものを持たずして、たゞ謙遜と感謝とに生活することである。かくして有限なる我が肉體は、無限人格の發揮として人格より人格に入り來る永遠の存在、盡くすることなき光耀に合し、現在を通じて永久に生くる靈なる神との同時存在を経験する事ができるのである。(二、九、二九)

人格の不滅、そこに樂天主義の隠れ家がある……ギユイヨオ

て居る様なものである。その間に何等の交渉もなければ、了解もない。自分の最も眞面目に考へて居ることも、他人には寢言の様なものであり、自分には最も深き眞實も、他人には愚かな戯れの様に見えることもある。そしてそこに冷たい輕蔑の眼の一閃より外に、何等の報いも得られないのである。

他人同士の間ならばまだしも、それが血をわけ肉を分かつた親と子と、兄と弟との間にもこれがあり、神の合はせ給ふ一體だと云ふ夫婦の間にもこれがあり、思想や生命を授受する師弟の間にもさへもこれがある。かくて私達は實に孤獨な淋しい生活を送らねばならないのである。人と人との間は、切つても切れぬ關係があるなど云ふどころではなく、全く砂粒と砂粒の様に切れ切れのものである。

嘗に交渉がないと云ふ程のことならばまだしもである。私達の眼は常に他人の小さい缺點にそゝがれ、私達の筆は他人の思想の小さい缺陷を指摘するに忙はしく、私達の手は他人を陷擠して快を感じ、常に憎惡し、嫉妬し、戰闘するのである。何と云ふ殘忍であらう、何と云ふ冷酷であらう。私達の間には、何等の交感がない、私達はみな獨りぼつちである、私達は各々散在せる持續のない點である。

まことに之は現實の世界と云ふものである。私達はこの世界に住んで、無限の悲哀と寂莫とを感じ、併しながら、現實は必ずしも、生命の眞相ではない。生命は常に正道をばかり踏んで居るのではない、生命は屢々邪道に踏み迷ふことがある、誤謬を繰り返すことがある。私達の個性の沒交渉は、生命の誤謬に因由するものである。

個人主義は眞に自覺したものゝ生活方式でなければならぬ。併し眞に自覺したものとは、必ずし

なければならぬ。かくの如き事實を意識することによつてのみ、私達の生活の根柢は確立し、私達の人生はその價值を發見するのである。私が再びこの文章を綴るに至つた所以は、前號に於ける論文の不備の幾分を補はんが爲めである。

私達は自分の裏に、生の力が潑瀾として生動するのを自覺して居る。同時にまた、他人の裏にも、動物の中にも、植物の中にも、あらゆる生物の中に生の力が活躍して居つて、その各々の個性もしくは個體を形作つて居ることを直覺して居るのである。併しながらその幾つもの生の力が、同一生命の異なる顯現であると云ふことは、中々容易に信じられるものでない。而かも私達の眞要求は、この生命の渾一體と云ふことである。そのことが信じられて初めて生命に對する信仰が起こり、生活に對する愛慕や熱情が生まれるのである。

生命は果して渾一的なものであらうか。私達は果してその根柢に於いて先天的の關係を有して居るものであらうか。私達はそれを否定しないまでも、信ずることは頗る難いのである。何となれば、私達は謂はゆる私達の人生と云ふものに於いて、多くの個人の存することを知つて居る、そしてそれ等の人々と日々に相接し、相語つて居ることを知つて居る。けれども私達が眞に了解し合ひ、睦み合ふことの出来るのは、その中の極めた僅少な人々に限られて居て、その餘の人々とは、全然沒交渉であると云つてもいい位、別個の世界に住んで居るからである。かくて私達は常に人生を視るに寂しい枯野の様な感じをもつてする。多くの人の存在して居るのは、恰も寂しい野原に、枯れた松の樹の立つ

て、益々多く人生から眞實を剝奪してしまひ、虚偽に虚偽を重ねしめるのである。

虚偽は恐るべき人生の中傷者である、中間者である。そして私達相互から、理解と交渉と親密とを奪つてしまふものである。何等の交渉のない、結目のない、別々のものとしてしまふものである。けれども、一度、他人を欺き自己を欺く虚偽の皮を脱いで、低人フダジンの赤裸な姿をもつて、面と面と相接するならば、そこに初めて、一味不可分割の連絡の存することを意識するであらう。虚偽を剝ぐことによつて、レエネは許婚せるセルギユスを捨て、ブランチリと結婚し、レエネと許婚せるセルギユスは、ルウカと眞の戀愛を成就した。虚偽が剝がると共に、彼等の生と生とが相結ばれて行く有様は、流石非凡なシヨオの才によつて、私達の眼の前に活動寫眞の様に回轉されるのである。最初は互に了解しないでも、自己の眞實を大膽に表白したるが爲めに、——たとひその間に幾許の誤解や争闘があつたにしても——却つて何者の力も切斷し得ない靈的結合を致さしむる多くの例は、私達の日々に目する事實である。一見甚だしく相懸隔せるが如き個性を有せる人々の間に、分かつべからざる默契の存してゐることも、私達の屢々目撃する通りである。

私達をして眞實であらしめよ、そして私達の衷情をして發露せしめよ。弘達はそこに先天的の關聯を見出だし得るであらう。

私達の間には、自然と集團グルウプと云ふものが生ずるものである。そしてその集團の成員の間には、おのづから不可分割なる生命の擴がりグルウプと云ふものが出來るものである。私達は勿論、その集團に於いても

も自分々と云ふ生活ではない。自己の眞實に——即ち個性に——生き得ないで、他人や、主君や、社會や、國家や、制度等の如き暴君に虐げられる生活は、どこまでも排斥しなければならないのは云ふまでもないが、その自分と云ふものは、必ずしも表面に表はれた、他人と區別せらるべき自分ではない。否、寧ろ眞の自我とは特殊なる私達の生活を創造すべき根柢の人、アンダー・マン(低人)でなければならぬ。私達にして若しその衷情の聲に聽いて、低人の生活を送るならば、そしてその爲めには、自分とか他人とかの區別をすら、没却して顧みない熱心と誠意があるならば、それこそ眞に自己に生くる道であつて、萬人は皆、自己の個性を樂しみ、而かも初めてそこに個人と個人との間に横はれる溝渠を避け、相互の先天的交感を意識することが出来るであらう。

蓋し私達の間の溝渠は、第一には、自分とか他人とかを——その表面的な——區別する利己的な想念に生まれ、第二には、この自己の眞實と云ふ低人の思想や感情を自由に語り、自由に表白し、自由に行ふことをしないで、虚偽の上に虚偽を塗り重ね行く生活をするところに起るものである。私達は一體、餘りに臆病すぎるのである、傲慢だと思はれないかと思つては低人の思想や感情を語り得ないのである。他人の機嫌を損ねはしないだらうかと思つては、善い加減な偽を云つて、お茶を濁しておくのである。自分のつまらないことを見抜かれるのではなからうかと心配して、黙して居るのである。勿論それは對者にも、一半の罪はある、彼等には毫も打ちとけた、虚心坦懷と云つた様な心持がなくて、たゞ徒らに冷かな批評の眼をもつて、その言動者に對するが故に、言動者の心を氷の如く氷結せしめ、若しくは奴隸の如く卑怯に陥らしめるのである。斯くの如くに、臆病と冷酷とが相結ん

周圍に適應すると云ふよりも寧ろ、周圍と抗爭することを敢へてする場合もある。生命はその自己の眞の成長の爲めには適應もするが、抗爭もし、征服もするのである、時には、適應して居る至極安全な生活の途をもふり捨て、新なる危険な生活を始めることもあるのである。私達にして云ふならば、茲に一人の官吏があるとすると、彼は毎日腰に辨當を提げて官廳に通つて、その所謂官吏的空氣にアダプトして居るならば、自分の經濟的生活の安固を獲得し得ることの容易なるを知りながら、より高き自覺的生活の爲めに、その安固なる生活をすら打ち捨ててしまふ様なことがある。茲に私達は一つの根本的な生活衝動を見ないであらうか。たゞに適應するばかりでない、それ以上に自ら進んで新しい生活を創達しやうとする、不盡の衝動を見ないであらうか。

進化はこの根本衝動を離れては解釋されない。單に外部的なる適應のみをもつては十分に達し得ない。この衝動があつてこそ、生命はかのアミーバーの如き下等な状態から人間にまで進化して來たのである。アミーバーより人間に迄、その間には幾度かの失敗があつた、幾條かの線に沿うて向上せんとした、そして或る所まで行つては行き詰まつてしまつた、けれども遂に、一條の通路を見出して人間になつた。そのアミーバーから人間にまでの進化の跡は、實にこの根本衝動そのものでないか。この衝動、もしくは生の力こそ、萬物を貫いて生きて居る實在である。

故に私達の生命はその實在の一顯現である。私達の個性は即ち、そのまゝ大なる生命である。その生命は個性を離れては存在しない。私達は實在である。

かう考へて來て、私達は益々自分の生命を信愛せざるを得ない。そして表面上しかく相異なり相隔

自己を意識して居る、自己の眞實に生きて居る。私達の個性は十分にそこにも發揮されて居る。而かも私達の思想や生活は、その集團を離れて獨自に生活するならば、決して其の様なものにはなるまいと思はれる様な、集團としての一色彩を有するものとなるのである。その時の私達の生命は、自分一個のものではない、相ひき相連らなつて居る渾一的なものである。時代思潮と云ふ様なものも、此の種の生命の状態であらう。生命は縦に時間的の持續であると供に、横に空間的にも不可分割の幅を有するものである。

私達は自分の中に、常に現状に満足せずして、より高く、より深く、より美はしく、より強い生活をしやうとする生活衝動の存することを知つて居る。この生活衝動もしくは生の力は、それ自らに無限の力を有して、無限に向上發展し、無限に新しい世界を創造する様に見える。生の力は何等の形ある内容を有しないが、而も無盡の寶庫である。不思議な寶庫である。

科學者は生命の進化を説明するに、自然淘汰及び適應をもつてしたが、私達の眼が一度この内部不可思議な生の力に注がるゝに及んだとき、進化は單に適應の一事をもつて説明することが不可能である様に思はれるに至つた。何となればこの生の力は、常に無限の向上的態度をもつて常に新しい世界を創造するからである。彼は自己の創造の爲めには、周圍に適應しなければならぬことを知つて居る。けれども創造は、たゞ適應にばかり因由するものでない。彼は寧ろ周圍をして彼に適應せしめずんば止まないことがある。彼は時としては、生命の危険を冒してまでも、自己の眞實を表現しやうとする。

謬は、この理想的状態と現實とを混同したところにある。そして彼等は現實の世界その儘を、一致と平和と幸福の歡喜とを以つて充されて居るかの如くに説いたのである。けれどもそれは、一つの幻影に過ぎない。何となれば世界の人が、凡べて小さい自我を捨て、かの内部に於ける低人アンダマンの赤裸なる生活をすると言ふことは、今のところ容易に望み得られないからである。百人のうち九十九人までは、冷たい眼をもつて他人を眺める人である。私達がもし自己の眞實に生きやうとしても、この一種の色眼鏡をもつて人を見る彼等には、永遠に了解されないのである。私達の創造生活は、この生命の誤謬の爲めに、パンに飢ゑしめられ、同情に缺乏し、そして常に冷たい泥氣をもつて害せられるのである。人生の實相はどうしても悲哀である。寂寥である。眞に人生に觸れたものでなければ、この悲哀の眞意は解しられない。

けれども私達の悲哀は最早、悲哀そのものであると云はれない。人生の核心に觸れたとき、そこに悲哀は裏に泉の様に湧かうとも、眞個に人生を味つて居ると云ふ靜かな歡びは消すよしもない。生命の信仰と生活の愛撫とを根柢にもつて居る人々には、この人生の悲哀は、岩と岩との間をくぐり抜けて來た岩清水の様に、生みの苦しみと云ふ岩間からしぼり出された歡喜の滴りに融かされた悲哀である。その眼の涙は最早、濁つた汚れた涙ではない、月の光りにてらされた澄みわたつた朝露の様なのである。

思へば悲しい人生である。寂しい人生である。けれどもそれが人生の味である。私はこの悲哀の味ひをもつて、自分の生命の糧とすることを得るのである。——十一月十五日——

つて居るが如くに見える私達も、先天的に不可分割なる一渾一體であると云ふことも信じ得られる。

現在いまのところ、生命に對して私はこんな信仰をもつて居る。併しながら、私は所謂、宗教家の信仰の決定と云ふものを茲に置いたわけではない。生命と云ふものを此處ものと決めてしまふのは、私には餘りに心淋しく感じられるのである。廣大無限な生命は、貧弱な私の智識や直覺のよく觸れ得るところでないと思ふからである。生命をこんな貧弱なものとするのは、勿體ない様な氣がするからである。また私自身の生命探求を、こんなところで切りあげるのは、眞理に對して不忠實であると思ふからである。それは物足りない氣がするからである。そしてまた、今までも幾度か幾度かあつた様に、私の智識や感情の状態によつて、何時、生命に對する見方をかへなければならぬかも知れないからである。けれども、今のところ、私は、この生命の信仰に創造生活の根柢を置かうと思ふのである。そしてその生活を愛撫しやうと思ふのである。

然り、生活の愛撫と生命の信仰！それは茲から生ずる、けれども亦、私達は事實に忠實でなければならぬ。生活を愛撫すると云ふことは直ちに人生の歡喜を意味しない。人生の樂天を語らない。私は依然として創造の悲哀を感じずには居られないのである。人生の寂寥を感じずには居られないのである。

生命が渾一體であると云ふことは、生命がその正當な道を踏んだ時のことである。けれども現實の人生の實相は、決してそれを實現して居ないのである。今迄の宗教家やロマンティックな思想の誤

たものは、スウキンバルンやセルマ・ラーゲルレツフであつて、二人共に詩人であるが、月桂冠は何れの詩人にも授けられずして獨乙の哲學者に與へられたのである。この事は固より、オイケンの哲學の然らしめた所であるけれども、彼れと北歐の日耳曼民族との關係は、決して昨今のとはない。彼れは常に此の民族に對して同情を寄せて居た。千八百九十九年にフィンランドが露國の壓迫を受けた時に、各國より露國皇帝に上書をしたが、その獨乙文起草者は博士であつた。之が爲めフィンランドの詩人ルードウキヒ・ルネベルクは、詩を作つて熱心に彼れに感謝した。この事は瑞典の今に至るまで忘れざる所である。のみならずオイケンと哲學的傾向を等しうし、而かもその謳歌者であるヴィターリスノルストレームは、ゴーテンブルク大學の哲學教授であり、且つストックホルムの學士會院の議員である。之れを以つてノルストレームは極めて熱心にオイケンを推薦した。これ等の緣故もまた、彼れが月桂冠を得た基礎になつたのであらう。オイケンの前後に、文學上の功績で賞金を得たものにはシユリイ・フリユドナム、モムゼン、ビョルンソン、ミストラル、キツプリング、ハイゼ等の人々がある。

オイケンは、獨乙の北海に面せる東フリースラントのアウリヒに於いて、千八百四十六年一月五日に生れた。幼にして父とたゞ一人の兄とを失ひ、慈母の手ひとつで教育された。慈母と云ふのは、自由主義の牧師の娘で、非常に敬虔の念に深き婦人であつた。博士が宗教的傾向を有するのは、この慈母の感化が大いに與つて力があつたのだとは、彼れの自ら語る所である。彼れはその故郷のアウリヒに於いて、普通教育を受けたが、その高等學校に哲學者クラウゼーの門弟なる神學者、ロイテルと云ふ人が居た。此の人の感化をもまた彼れは受けたのである。後、オイケンがクラウゼーの百年祭に當



オイケンの踏みたる道

三 並 良

現在獨乙エナ大學の哲學教授たるオイケン博士の名聲は、今や實に天下に嘖々たるものである。その著述は殆んど歐洲の各國語に翻譯せられざるはない。既に我が邦語に譯出せられたものも三四冊あつて、而かも一兩年を出てざる間に、大體は悉く翻譯されてしまふ勢である。その名望もまた大なるかなと叫ばざるを得ない。これには固より幾多當然の理由もあるが、博士の名聲が特に近年に至つて擧つたのは、博士が、千九百八年、有名なる「ノーベル賞金」を得てからのやうに思はれる。ノーベル（一八三三——一八九六）とは、瑞典の化學者で、ダイナマイトの發明者である。彼れは遺言して、毎年五種の賞金を出し、委員の決定する當選者には、各々十二萬二千五百圓餘の賞金を與ふるとにした。その中三種は理學、化學、醫學の範圍に於ける最も緊要なる發見に關し、第四種は文學上の著述に對するものであつて、最も理想的傾向を有する者に授與するとなつて居る。第五種は世界の平和に關する功績者に與へるのである。賞金は前のやうに定めてあるが、色々の費用が入るので、それを引き去つて、普通約七萬五千圓程を與へると云ふのである。

オイケン博士は、第四種に相當して賞を得たのであるが、當時オイケンと共に、委員の評議に上つ

咀ふべきものではない。彼れがいろんな放縱になるやうな感化を興へたと云ふ人があるけれども、それは彼れの負ふべき責任でも何でもない。オイケンの説によると、ニイチエーが謳歌せらるゝ原因は彼れの徹底的な個人主義にある。一體、個人主義的なのは獨乙人の特質であつて、ニイチエーは之を説き、その反響を得たのである。

其の後千八百七十四年に至り、エナ大學の教授であつたクーノー、フィツセルが、ハイデルベルク大學に招聘せられた爲め、オイケンはその後任者としてエナ大學の哲學教授に任ぜられ、爾來依然として今日に至つて居るのである。

エナは田舎の一小都會である。従つてエナ大學も大なる大學ではない。然しながら精神的には偉大なるものがある。その創立は宗教革命時代であるが、それ以來だけの大家碩家がこの大學で教鞭を執つたか枚舉に遑がない。また幾許の偉人が此の大學より輩出したか、その數は實に夥しいものである。殊に隣りには詩聖の集まれるワイマルがある。そして此の兩市は、昔から切つても切れない關係を有つて居る。實にこの兩市からは、豊富な過去の光彩が、陸離として溢れ出て、その名譽を語つて居る。また此の兩市には獨乙のクラシツク時代の詩歌の香が漂うて居る。詩聖シルレルとゲーテの名は、永久に此の兩市と結びついて居る。

現在のエナ大學は、その三百五十年祭の記念として去る千九百八年に出來上つた新築である。然しながら此の數へ盡くし難い記念物を有する校舎は、少しも華美を誇る所がない。獨乙魂を現はして、極めて質素である。裝飾と云へば、廊下に掛けてある油畫で、これは千八百十五年の獨乙學生の出軍

たり記念演説をなしたのも偶然ではないのである。

初めオイケンは大いに數學に興味を有し、之を専攻し初めやうかと考へたともあつたが、復た直ちに哲學に代へたのである。大學生としては初めゲツチンゲンに學び、多數の英國留學生とも交を結んだ。同大學には、當時日の出の勢ひであつたロツチエ教授が居たが、之れには餘り敬服せず、その説は餘りに冷淡にして、またあまりに細工が多すぎると考へた。然るにロツチエの同僚であつたタイヒミユルレルの指導によつて彼れは初めてアリストテレスを研究した。彼れが博士の學位を得たのは、同じくゲツチンゲンであつたが、これは哲學によつてではなく、古代語學及び古代哲學に就いてゐた。それから伯林に轉じ、こゝではトレンデレンブルク教授と親交し、大にその感化を受けたと云ふのである。

伯林では五年の間、高等學校の教授となつて居たが千八百七十一年の秋、バーゼル大學に聘せられて哲學の正員教授となつた。さうするとこれは、オイケン博士が二十五歳の時であるから、非常に早い任命と云はなければならない。丁度此の時ニイチエーもまた、バーゼル大學の教授であつた。(彼れの教授であつたのは、千八百六十九年より七十九年迄であつた)そしてオイケンとニイチエーとは共に撰ばれて、古代語學の博士の試験の委員にもなつた。口答試験の場合に於いて、若し受験者が答解に窮して來ると、ニイチエーの方でも、追々焦燥あせて來て、遂に堪へされず「僕思ふに、君は斯う考へるのだらう」とか、或は「君は斯う考へるのではないか」などと云つて、受験生の答ふべき所を自分で先づ云つて見せたものである。オイケンの説によると、ニイチエーの學生に與へた大なる影響は決して

明瞭にして、その連絡の整然たる何等の脱漏なく、その言ひ表し方は、さすがに詩人の素質を示して模範的に完備して居た。然るにオイケン^{クラッシュ}は之れと全く異り、講壇に上るには少し伏目勝ちであつた。講義は獨^{モノ}言^ゴ的^テで、言葉に思想勞作の苦心の痕を止め、反省的であつたが、一種獨特な吸引力を有して居た。講義の間には一度ならず、二度も三度も、何ものかを求むる如く、手を以つて額と房々として垂れて居る頭髮を撫てた。けれども丁度この事が彼れの講義に特殊の刺戟を與へた。是れ實に思想が聽衆の前に於いて本源的に發展する過程であつた。聰明なる心靈の深みより突出し來る思想の劇^{ドラマチック}的實演であつた。そしてその發表の直接なる、思はず知らず、此の教ゆる者と教はる者とを一致せしめて前へ／＼と進ましむる精神勞作の内部へ引き入れた。」

これは三十年計りも以前の講義ぶりであるが、今日といへども依然として變つては居ない。その房々した頭髮も鬚髯も雪白になつて居る。顔には精神的の威嚴が備つて居る。その聽講生もますます／＼増加した。僕が三年以前にエナに行いた頃には、新築大學の最大講堂第一番が、オイケン教授の教場となつて居た。七十名計りの學生が居り、その中には十數名の婦人も混つて居た。然し一般學生に對する講義になると四百名からの聽講生があると云ふのである。

オイケン教授の著書は、前にも云つたやうに殆んど歐洲各國の語に翻譯されて居るが、手紙の往復も世界的に頻繁である。教授は之を自分の机の上に置いて、多忙の時間を割愛して一々返事を自筆して居る。此の間も僕に出す返事が、一週間ほど遅れたと云ふので、非常に氣の毒がつて來た。しかし文書の往復ばかりでない。訪問客も各國から來るらしい。僕が一晩教授から晚餐に招かれて行つた時

を書いたもので、畫家ホードレルは、中央に居る學生のモデルとして、オイケン教授の末子を使つて居る。その外玄關にはロダン作のミナルヴァがあり、中庭には何かの銅像がある位のものである。而かも新築で此の位であるから以前の建物はほど想像せられる。然し此の講壇には、シルレルは固よりロマンチックの首唱者であつたシュレーゲル兄弟の如き、また哲學者として最もロマンチック派に近かつたシエルリングの如き、フイヒターの如き、或は肉となつた思想と稱へられたヘーゲルの如きが立つたのである。此の質素なる裡に、偉大崇高なるものを包むのは、是れ實に獨乙の特色であり、光榮であらう。而して現今此の講壇には、特に世界に英名を轟かして居る二碩學が立つて居る。而かもその二大家が全然反對の立脚地にあるのも、一大偉觀と云はざるを得ない。二大家とは即ち、科學者のヘッケルと、哲學者のオイケンである。

オイケン教授は、前にも述べたやうに、千八百七十四年からエナ大學の講壇に立つて居る。その間約四十年、二十八歳の青年も今は六十七歳の老人となつて居る。けれども矍鑠として壯年の人に異ならない活氣を、その講義ぶりにも見せて居る。彼れの人格は益々大成して、その容貌には預言者の光輝があるとさへ云はれて居る。その講義は獨乙は勿論、世界各國の青年や學者を引きつけるだけの勢力を年々増加して居る。その講義ぶりに就いて、約三十年以前即ち、千八百八十四年にオイケン教授の講義を聞いたネトリツカ博士が、同じく永くの間エナ大學の教授であつた有名な新カント派の哲學者オットーリイブマンに比較して次のやうに云つて居る。「リイブマンは悠々として迫らず、片手をズボンのポケットに入れ、足を堅く踏んで講堂に出て來た。その講演は沈着にして流暢、思想は極めて

て居る。

米國に於ては、西歐と東洋の文明の逢合が、獨乙に於てよりも著しく現はれ、遂かに思想界の注意を促して居る。單に日本人のみならず、支那人、暹羅人、印度人の如きも、米國には澤山に代表され、毎々人生の大問題に就いて互に論じやつて居る。そして調和の必要なるとも益々感じられて居るが、此の調和の至難なるとも考へて居る。なぜと云ふに、こゝに互に接觸するものは、根本的に相違して居る生活類型ではないか。吾々歐洲人には強い生活の欲求がある、信賴せる生の肯定がある、有らゆる不都合を除く爲めに、勢力を擴張し、生活を內的にもまた向上せしめんとする希望を有して居る。然るに亞細人は寧ろ、全一と久遠の秩序の中に安息し、之に由つてあらゆる日常の葛藤と困難より解脱せんとを求める。歐洲ではより多く活動的であるが、亞州ではより多く瞑想的である。また東亞の美術は、殊にボストン府に於いて、非常に澤山見るとが出来るが、之を見ても、その生活類型の如何に相違して居るか分かる。これは簡單に一方が他方を排斥し去るとは困難である。けれどもまた互に影響する所なく、相關せずして居るとも出来ない。之を以つて此の點に就いても、大問題が起こつて居る。そして眞面目なる人々を動かして居る、これは實に全人類に關する大事件である。吾人獨乙人たるものも一層此の問題を研究しなければならない。

吾人はオイケンの生活に就いて、少しく知る所を述べたのであるが、今から少しく筆を轉じて、その哲學の極めて大意を述べて見たいと思ふ。

オイケンの哲學は新理想主義とも云はれたり、または生の哲學とも稱へられて居る。或は之を總括して、現代的、理想的生活哲學と呼んで居る人もある。彼れは實に理想主義の改革者である。そして精神生活を基礎とし、目的として、こゝに理想主義を据ゑんとする者である。現今の獨逸に於いては勿論オイケンと同じやうに、新理想主義を稱ふる思想家に乏しくない。ヴァンデルバントやリツケル

などは實によく此の光景を現はして居た。時刻に行つて見ると、既に多くの人々が集つて居り、夫人は盛裝して客を迎へて居た。客は燕尾服の者もあれば、フロクコート、或は背廣、思ひ々々の姿である。また客の種類はと云ふと、世界各国より來て居る。即ち米國からは二人の新聞記者が來て居る。亞弗利加はトランスヴァル生れの若きボーア人も居れば、亞細亞は即ち僕が代表して居る。若し夫れ歐洲に至つては、魯國、瑞西、瑞典もあり、獨逸は各地方の人々が居り、英人も二三人はあつた、その中には嘗て國務大臣をした某氏も居た。是れ等の人々が一堂に集つたので、如何にオイケン教授の名聲が世界各國に傳つて居り、また人々より敬慕せられて居るかと云ふとも分かる。教授は五大洲を代表した人々が居るが、惜しいとにはオースタリアの者が居ないと笑つて語られたが、今ではオイケン哲學を英語の世界に紹介したギブソンが、メーホルン大學の教授をして居るから、定めてオイケン哲學を同地に弘めて居るだらうと思ふ。

米國そのものに至つては、オイケンは所謂交換教授として、その地に渡り、昨年の九月末から今年の三月末まで約半年の間に、或はハーバート大學、或はニューヨーク大學に於いて、自家の哲學、その倫理觀や、宗教觀を講じて非常なる印象を米國人に與へたらしい。またオイケン教授に於いても米國の思潮、その努力のある所、或はその危險の存する所を解して歸つたらしい。教授はエナに歸つて後、「米國の哲學的印象」と題する講演をなし、その大要を記したものを教授より僕にも送つて來たが、それを讀んでも此の事が知れる。殊に之を讀むと、教授が米國に於いて東西兩洋の文明が相會して居るのに注意したとは、我れ等の感興を引かざるを得ない。此の事に就いて教授は次のやうに云つ

等もはいつて居る。さうして見ると問題は、果して物質と離れた、本源的な、そして自由な精神生活なるものがありや否やと云ふ一點に集つて来る。此の問題の解決は決して容易などではない。

自然主義に従へば、この解決は極めて簡單で濟む。事物の自然的經過に任し、階性の法則が自ら實現する所を以て満足すればいいのである。けれども吾人は果して之れに満足するかが出来るか、否な一個人たる吾人には、それが出来るとしても、人類には此事が出来るか、問題である。是れオイケン教授が「大思想家の人生觀」や「現代の精神的潮流」を著はして問ふ所以である。固より教授の思想は、該博であるけれども、その據る所は希臘以來の西洋の思潮である。故に東洋人たる吾人は、之を古來の東洋思潮にも照らして考へたならば、大に有益な研究が出来てあらうと思ふ。

若し自然の儘に放任するならば、野獸主義にもならう。寂滅爲樂をも稱ふるであらう。けれども歴史ある文明世界は生じて來まい。否現代の文明は揃つて放任せられたる自然に反抗するに相違ない。斯う云ふ譯があるから、オイケン教授の努力は、單に哲學上の抽象的概念を取つて議論するに止らず一般の人生を見んとするのである。眼を現在の人間社會に向け、共通的精神の隠れたる生活や、現代に行はるゝ勞作や、一般運動の方向などを知らんとするのである。従つてその哲學は今までに謂ふ所の哲學よりは餘程廣いものになる。然り是れ等の諸方面を観察すると、何れに於いても自然を超越する精神の活動の存在を認めざるはない。このものがオイケンの所謂精神生活である。

さうするとどうしても、精神生活と自然生活の争闘が生ぜざるを得ない。然らば此の事はどうして出來得べきであらうか。それは丁度吾人が身體的には自然の法則に束縛せられて居るけれども、思索

トの如き、或はシュミットやコーヘンの如き、或はリールやリツプスの如き、みなさうである。然るにオイケンとは、哲學の部分的研究に満足して居る者ではない、常に哲學と生活の全體との連絡を、極めて有力に、充分に且つ根本的に維持するものである。是れ彼れが特に現代の青年を——理想に由つて動かざるを得ない青年——を引きつける一種の力を有つて居る所以である。

オイケンの哲學の極めて大要を云はんとせば、その認識論は別として、二つの主眼とすべきものがある。即ち彼れの理想主義、人格世界の生活系若しくは活動主義である。今少しく此の二點に就いて述べて見やう。

理想主義と云つても、オイケンの稱ふる所のものは、舊派のものとは違つて新らしいものである。

故に彼れのは新理想主義と呼ばれて居る。オイケンは彼れの新理想主義を以つて、舊理想主義に代らしめんとすると共に、一方に於いては之を自然主義に對立せしめて居る。思ふに現代は科學萬能と信じて居る。然るに此の科學は自然を以つてその研究の根柢として居る。然らば自然とは何であるか。

自然とは物質と力である。此の二つが色々な關係をなすが爲めに、有らゆる過程が生ずる。其れが森羅萬象である。然らば精神は如何なる地位に在るものであるか。此の自然に對立するのであるか。生命や思索は此の自然とは別物であるか。昔はさうだと考へて居たともあつたが、今の科學はさうは考へない。如何なる現象でも、物質と力との機械的作用によつて説明せられざるものはないと思つて居る。吾人は如何なる精神作用と稱せらるゝ物を見ても、それは皆物質に束縛せられないものはない、昔から純粹に精神的なるものとされて居る神といふ概念にした處で、自然から取つて來た分子は、幾

舊理想主義を對立せしめ、そして新の一字を冠せしめ、且つそれが自然主義とも相容れざる所以である。

如何に理想主義と云ひ、精神生活と云ふにしても、若しそれがたゞ言葉の上に止まつて居たならば空論に過ぎない。腦中に書き出された幽靈に過ぎない。オイケンは之を實證せんが爲めに、人格世界の生活系を説いて居る。或は之を活動主義とも稱へて居る。

人間は初め自然的の心靈生活をする者であるけれども、それより段々に進んで、精神的の本質を形成するものである。オイケン教授は之を「本質形成」と云つて居る。その事實なるとは、彼の文明の歴史が實證する所である。そして此の本質形成は實に吾人自身の行爲である。即ち吾人は皆な此の本質を形成して、自我を得なければならぬ。此の自我は即ち人格と名づけらるゝものであつて、これは初めより完全に與へられたものではない。吾人は自ら奮つて之を形成する任務を有つて居るものである。

されば人格の形成は、オイケン哲學の第二の要點であるが、これは云はゞその新理想主義の實際的方面とも云へやう。吾人は眞に之を實現すれば則ち精神に自由あり、本性あることを知り、所謂獨立自存の出来るものとなるが實驗せられるのである。

之を以つて人間の精神的生活は努力の生活である。活動主義の生活である。若し少しにても緊張が弛むとあれば、これだけ退歩せざるを得ないことになる。是れオイケン教授が「精神的生生活内容の爲めの戦」を説き、且つ同じ表題の大著もある所以である。こゝに彼れの哲學の焦點がありとすれば、彼

は一種特別な勢力を有つて居て、前者を壓倒すると同じである。例へば吾人は時間と空間とに束縛せられて居る。然し思索では此の兩者に超越すると出来る。眞理とは何ものであるか。是れその効力は時間に制限せらるゝ所なきものでなければならぬ。空間でもさうである。吾人の社會的存在は空間に制限せられて居る。然しながら思索では此の制限を破り、山川、河海、宗族や民族を超越して、統一せる人類に屬するものとなると出来る。即ち吾人は有らゆるものを永劫の形式のうちに觀察せんとする者である。

斯う云ふやうに云ふと、思索は何か生活を離れた主智的なものゝやうに見へるが、決してさうではない。思索は生活である。生活の全體を背景として活動して居るものである。そして再び思索が中心となつて生活が導かれて行くのである。是れ宗教なり、道德なり、法なり、或は勞作そのものなりが、益々精神的になる所以である。オイケン¹は次のやうに云つて居る。「吾人は非官能的範疇を以つて世界を包圍する者である。最も非官能的なる學術即ち數學は、吾人をして始めて有形界を法則によつて捕捉し、之を概括し得るの力を與ふるものである。到る處生活の進歩がある。内的なるものは周圍に對して獨立を得て來る。そして之を變化せしむる勢力を振ふ」

是れに由つて之を觀ると、どうしても吾人々類の生活のうちには、自然の生活とは異つた活動が起つて居るのを認めざるを得ない。そして此の生活は自然にも反抗し、唯だ智識の作用でもなく、そして人間が全力を擧げて、これだと定めてその方に轉向して突進するの必要がある。是れオイケンの理想主義に、彼の自然がその儘に進歩すれば理想境に達せらるゝとしたり、また主智的であつたりする

院長診察、月、水、木、金、午前、入院、診後應需、林、峰間、兩副
長ハ目下當院ニ在勤

(電) 八八八(病院用)
(本) 八九八(私宅用)

東洋内科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋附近

院長

醫學士 高田 畊 安

神奈川縣高座郡茅ヶ崎海濱從停車場半里

電、チガサキ一一番

南湖院

河野、高橋、兩副長ハ目下當院ニ在勤、院長診察、土曜日午後
入院、診後應需

れの哲學も戰闘的である。オットー・ブラウンと云い學者が、オイケンの哲學を名づけて、劇的生活哲學 (eine dramatische Lebensphilosophie) と云つたのにも、大なる理由がある。

是に於いて唯だ思索に耽るとが、人間の目的ではないことになる。思索も固より大なる勞作に相違ないが、自然を離れて獨立した精神生活は、再び自然に歸つて、こゝに發見する所のものを、自分の地位にまで引き上げる活動をしなければならない。是れオイケンの哲學が行爲の範圍に移らざるを得ざる所以である。オイケン教授は「求めよ、試みよ、競争せよ、冒險せよ」と云つて居るが、吾人は之をなして新しき創造を生活のうちに加へなければならない。そゝに人生の價值も目的もあるのである。

概要

將、政治家、哲學者、科學者、詩人、畫家、評論家の性行を傳ふ
□本辭典は、基督教の發達、並びに教會の歴史を記し、其に伴ひて變遷したる教理、慣習、儀禮等を詳記し、豫言者、使徒殉教者、高僧、改革者、傳道者、牧師の傳記を掲ぐ。
□本辭典は、現今世界にある各派の性質由來を記述し、基督教の諸運動、諸團體、及び其主腦となる人物を悉く紹介して、あます處なし。

されば基督教大辭典は、即ち基督教百科全書にして、基督教に關する事項は勿論、之と間接交渉ある文學、哲學、政治、法律、郷土、歴史、美術に關する事項も網羅したるが故に、一冊子を以て克く圖書館の働きを爲すもの也

誰れの爲めに缺くべからざる乎

すべての讀書家の爲めに。……學校其他の教育團體の爲めに。……歴史家又は史書愛好家の爲めに。
基督教傳道者の爲めに。……佛教家、神道家の爲めに。……文士、又は文學愛好家の爲めに。
法律家の爲めに。……實業家の爲めに。……教育家の爲めに。
哲學研究家の爲めに。……美術家の爲に。……語學者の爲めに。
本辭典一卷を備うる時は、「聖書緒論」「聖書歴史」「基督教發達史」「教會史」「聖書古物學」「聖書地理學」「聖書神學」「聖書辭典」「組織神學」「西洋哲學史」「歐洲文學士」「思想史」「改革者傳」「科學者傳」「宗教家傳」「哲學者傳」「詩人傳」「評論家傳」等を蒐めたるに均しき實質を提供す。

■教界空前の珍寶新裝成つて、諸君の招きを今やおそしと竣つ。

「大辭典發行所」

東京京橋尾張町

振替東京五五三

敬言醒社書店

第一回特價提供開始

□神學博士 高木壬太郎先生著

四六二倍判△一千六百頁△長八寸九分△幅六寸五分
六號三段組△說明事項三千百有餘△插圖百四十三個

(版再正訂)

基督教大辭典

(呈進本見)

□定價
□送料

十五圓
申込順

特價拾貳圓

期限
年內

(稅郵)

△△△
△市內
△臺樺
△地
△四
六十五錢
五十五錢
三十二錢

時[△]の力は醜なる双よ。刻々に此好機會を殺ぎ去らむとすれば也。繰返して言ふ、大辭典の特價は大正二年十二月卅一口、を以て滿ちんとすれば也。諸君! 「けふになりて菊作らうと思ひけり」の悔いを遺たまふ勿れ。損をして徳を取れといふ諺あり、僅か十二圓也。洋服一着の半ばにも若かざる價ならずや。

記載

□本辭典は 基督敎唯一の經典たる「聖書」中の辭句を註解し、聖書中の地名、人名固有名詞を詳解し、又聖書中の日本語の觀念を以てしては解し難き術語をも、容易に了解し得るやうに努めたり

事項

□本辭典は 基督敎の教義を詳かに記述す
□本辭典は 基督敎によりて起れる動亂、改革、事務等の歴史を述べ、基督敎に交渉ある帝王、武



『夜の宿』の印象

か　ず　を

近ごろ見た新劇のうちでも、自由劇場によつて演ぜられた『夜の宿』ほど、私の氣分に、くぐり合つたものはない。うす暗い、陰鬱な、じめ／＼した北方露西亞の地下室の朝や夕。人生のどん底が遺憾なく此處に表はれて、人間は犬か馬かのやうに起き臥しをなし、犬か狼のやうに唸つたり吼えたりしてゐるのである。恐ろしい人生である、痛ましい人生である。けれども私は、これを見てゐて別にいやな感じを起こさないで、却つて眞實自分の悲しみを識つて呉れる知己に出逢つた様な一種の涙を誘はれる様な淋しい喜びを感じずには居

られなかつた。私はこの劇の作者と共に、またこの劇の多くの鑑賞者と共に、思ふ存分この悲しい人生を泣いて見たい、そして人生の眞實を創造する力を見つきたい。人間の心は此處にまでもなるものかと云ふ恐ろしさ凄さは、此の劇に於てよりも却つてエレクトラに於いて、私の心は強く響いた。此の劇では、私は寧ろ人生の淋しさや悲しさを感じると共に、希望と力との光明の方面を強く感じたのは不思議であらうか。私の第一に感じたことは、茲では人間が獣のやうに吼えて居る事である。けれどもその吼え合つて居る鬭争の下から、

内ヶ崎作三郎先著

近代人の信仰

▲四六判クロス製
▲箱入、六百頁餘
一圓廿錢
郵税十二錢

新刊

近代文明は物質のみならず、又精神と心靈との方面に於ても、實に一大驚異である。科學の精確と、心靈の神秘と、文藝の眞摯と、宗教の擴張と、いづれか人文史との轉機を語らざらむ。著者近代思想の潮流に倣して、信仰の彼岸に到らんとす。近代の科學、哲學、文藝宗教に興味を有し、近代人の努力と、憧憬と、歡喜とに對して同情ある人士に取りて本書は有力なる刺戟と、暗示とを提供す。

蔭清風裡の佳伴として、敢て大方の近代人に薦む。

●内ヶ崎君の「近代人の信仰」は氏がこの兩三年間に公にした論文集である。大體上近代の思想を理解し、新なる思想の上に古い信仰の新生命を求めやうとする近代神學家の思想を代表して居るとも云はれやう。そして多方面なる思想と、感情の多い理解と、無類な信仰の要素とは、その文その想に一種云ひしれぬ味を賦與して居る。亦以て一種の思想問題研究と云ふべきである。(新日本)

●統一教會の牧師として日本現基督教界の新人たる内ヶ崎文學士の論集なり。宗教は過去一世紀の間旺なる物質的勢力に壓倒せられて僅かに餘燼を保つの有様にすぎざりしもの廿世紀に至りて又

其復活の曙光を顯はせり。此世界的思潮に乗じて最も進歩せる精神生活を唱道し、科學、哲學、藝術の三者を合一して完全なる一大宗教を建設せんとするもの、これ即ち著者の目的にて、其一々の論文は皆信仰に歸えて、生彩の陸離たるを覺ゆ。

(東京日々)

●近代思想の新らしき氣分を攝取して、古き基督教の信仰を活かさんとする著者の主張を稱したるものなり、勿論裏面に十字架臭味を加へざるところ所謂著者一流のユニテリアニズムの特色なるか。(東京朝日)

●眞に篤信熱情の名文章である。(國民)

發行所

東京市橋區二丁目
京橋二丁目
銀座
座目

警

醒

社

振五

替五

東三

京番

一體人生は何が故に尊いのであらうか。智識や富や權力の如きものをもつて、住み心地のいゝ家に住み、何不自由のない榮華な生活をなし、安樂と放姿とに溺れた生活をなすことであらうか。蓋し人生の尊卑は、客觀的の標準をもつて定めることは出来ない。それはたゞ主觀的に色づけられた自分の生活によつてのみ、その眞價を發揮するのである。こんなどん底にでも、意義を創造して居るサチンや帽子屋は、立派な人間でなければならぬ、だからサチンは、ルカ爺が去り、ワシカとナタシヤやワシリイサとの間の悲惨な戀の運命が、^{クライマックス}頂點にまで成長した後の一層、淋しい悲しい、併し覺醒と緊張とを感じしめる四幕目の悲壯な酒宴の場で、自己獨特の人生觀を語り、人間に最高の讚美を捧げて居る。『凡べてのものは人間の中に在るのだ、人間の爲めに在るのだ、人間、素敵なものだ、實に高尚な音がするね、にい——ん——げん、

人間は尊敬すべきものだ、憐れむべきものでない』こんなどん底に居ても、かく程にまで自我の尊貴に目ざめたものは幸である。人生の根柢も終局も、人生そのものの價值も實に茲に存するではないか。飯を腹一杯食つたものも、知識を頭一杯につめたものも、この眞理を十分に體得しないから、眞の生活が送られないのではないか。苟くも眞面目な人生の創造者は、皆この事を體得せんが爲めに進んで居るのではないか、これを實現せんが爲めに生きて居るのではないか。愚かなものは、眞理は此處に在り彼處にありと、あらぬ方をのみ探しまわつて居るのである、そして彼等はサチンに劣ること幾許であるか知れない。

こんなどん底にでも、美しい夢を見るナスチカが居る。ルカ老人のお説教に聽きとれる醇なるナタシヤが居る。そして老人の忠告に^{すなは}率直に聽き従

直ぐに平和の顔が表はれて來ると云ふ事實である。彼等は世間の普通の人のやうに、お世辭や義理をしない、けれども自分獨りで、我儘勝手に振るまつて居るらしい利己的な生活の背後にも、病人を勞はつてやる偽らざる愛情が働いて居るのである。葬式をする爲めに金を集めてやらうと云ふ心が出て來るのである。お互の間にも相當の友情と理解が行はれるのである。それだけ醇な、虚偽のない眞の人情と生活とが表はれて居るのである。私は偽りの多い、利益づくめの世間の交際より、茲に行はれる赤裸の生活に、どれだけ有難い感じを起されたか知れない。

全く絶望的に見える此のどん底の生活にも、尙ほ生さんと欲する意欲は消されて居ない。彼等は成程怠けものである、たゞ安きことのみ求むる懶惰者である、けれどもそれは、多くの場合、運命

の手に餘義なくされた結果である、彼等は此處にさへ自分の人生を創造しやうとつとめて居る、而かも意義ある人生を創造して居る。働かさへすればいいと云ふ無意識的生活は、茲では最も卑しめられて居る。『働かさへすりやいゝのなら、人間は馬に敵はねえ、馬は終日車を曳いて疲れねえや』とワシカは警句を吐く、人間の働くのは、腹一杯飯を食ひたいからだ、そんな奴は俺等は厭えだ、サチンは氣焔を吐いて居る。そして二三ヶ月前に此處へおちぶれて來た錠前屋は、妻に死なれて藁すべ一つ頼りすぎるものがなくなつたことを感じて絶望したが、やがては『何處にでも人間は居る、そして皆善人だ』と云ふことが解つて來る。こんなわけで、彼等はこの人生のどん底ですら、生活の意義を尊重し、且つこれを見出して居る、創造して居る。

れは現代に於けるナザレのエスとなつて、諸處を遍歴する巡禮者となつたのである。そして今日の宗教家の如く、新思想を語らず、講壇から怒號しないけれども、こんなどん底からさへ尊い眞珠を拾ひ集める實際の宗教家、救主となつたのである。彼は醜然としてこの夜の宿にやつて來た、そしてこれ等の獸物と同じに食ひ、同じに語つた。併し一日また彼れが飄然として去つた後は、サチンをして『銅に硫酸が作用する様にあの爺さんは俺に働いた』と自白せしめ、この宿を一變さしたと感嘆せしむる丈の力を持つて居た。何と云ふなつかしい爺さんであらう。今の世に萬人の宗教家があるより、十人のルカ爺さんが居るならば、世の中は斯うも悲惨でなからう。イエスが若し今日生れたとするならば、彼れはこのルカ爺さんの更に聴いそして覺悟に富んだものであらう。

ルカ爺さんは、社會や人生の表面だけを見て、そこに善惡の區別を立てる様な淺薄な爺ではなかつた。彼はどん底の中にも、惡人と善人とを見わけることが出來た。盜棒のワシカも、ナタンヤも、ナスチカも、サチンも、役者も皆、老人によつてその尊いものを繰り出された一人である。彼はまた勿論眞實を求めた、併し彼は眞實と正義の國とを混同する様な道學者ではなかつた。彼れは正義の國の理想を追ひ求めて居る人々を嘲ける人であつた。彼の眞實は嘘をも抱含し得る眞實であつた。眞實々と云ふ帽子屋に向つて、『どんな病氣にでも、眞實と云ふ藥がさくと思つてはいけない』眞實といふ藥の爲めに、却つてわるくなる病氣があると云つた、そして自分も亦よく作り話をした。彼れの眞實とは實に、彼れが去つた後に、硫酸に作用された銅の様に働きかけられたサチンによつて、最もよく註釋された。『眞實たあ人間そのもの

つて、新しい生活を始めやうとする酒精中毒の役者や、泥棒のワシカが居るのである。何と云ふ美はしい世界でないか、そして何と云ふ痛ましい世界でないか。

現在のところ、この世界の人間は、獸物も同然である。併しそれは人間の本性ではなくて、寧ろ境遇や社會と云ふ、如何ともすることの出来ない冷酷な運命の生んだ庶子であると云ふことが示されて居る。それ丈けそこに人生に對する希望があると共に、痛ましい現状を見せつけられる。泥棒のワシカは、何も初めから泥棒を好んだ譯ではない、併し泥棒を親に持つた彼れは、世間から善人の扱ひを受けとる資格を有つて居なかつた、彼は生れながらにして、正しい生活に入る門戸を永遠に閉ざされて居たのである。敏捷な智慧と力とをもつて居る彼の運命は、世間の注文通りになつてやるより外はなかつたのである。そして時に滅入り

込んでしまふ様な生活に押し込まれたのである。帽子屋は妻の不貞の爲めに家と財産からこのどん底に、サチンは妹の爲めに逆上して殺人を犯したのを墮落の第一歩に、みんな斯うした運命の爲めに、この恐ろしい獸のやうな生活に追ひやられたのである。痛ましい運命の力よ。そして恐ろしい人間の心よ。人間の本性は獸ではなかつた。

それを見ぬいたのはレカ老人である。私達は彼の前身を知らない、多分暗い半生をその背景に持つて居るらしいこの爺は、恐ろしい聰明な心をもつて居た、常に『新しいものを尋ね、善いものを探して行く』生命の追求者であつた。そして七十幾年の歲月は、人生と云ふものゝ甘いも辛いも一切を彼の心に了解した。彼れは人生の皮相ばかりを見ないで、人生の内部の内部を見た、彼れは人間が自ら作つた道德の鳥籠に附ぢ込められないで、自由な眞實な自己の道德を作つた。そして彼



問題劇梗概（一） 中野 柏葉

一 闇にかぐやく光 （五幕） トルストイ作

資産家ニコライ・イワノキツチには、妻もあれば子供もある。その娘のルーバーは、年若いボーリス伯爵と、結婚することになった。ところがニコライの抱いてゐる思想は、家庭の平和を破つたり、子供等の心を分裂させたり、憎惡の念を起こさせたり、幸福を破壊せしめたりする。けれども、ニコライの説きたいと願ふ所は愛である、純潔な眞心な人道である。彼れの見の所によると、現在行はれてゐる基督教は、耶穌基督の敵である。彼れの承認する所は、山上の垂訓のみである。彼れは此の教訓の通りに生活し、人間といふ人間がみな、その示す通りに生活することを願つて居る。彼れは總べてを人類に與へやうと決心して居る、その自由も、そのパンも、その子供のパンまでも——否たゞ、パンばかりでなく、その自我をも與へやうと決心してゐる。彼れは斯くするのが耶穌の教訓の内容の全躰であると信じて居る。人はみな自己を獻ぐる爲めに、全心全力を盡くさなければならぬのである。

彼れは斯くの如く行動し、その全財産を擧げて百姓共に與へ、自ら百姓となつて耕さうと決心して居る。然るにそれは決心だけであつて、まだそれを實行するには至らない。その家族は彼れに反對し、彼れの説く所を過激なりとして、その資産を妻の所有に書き直さしめた。彼れの説は二人の人間を不幸に陥れる。一人は年若な僧侶であるが、彼れは正統的信仰の教會に遁れ、最後の瞬間に於いて、やつと其の存在を救うた。若きボーリス伯爵は終に斃れた。そこで彼れはニコライの説を實行して、兵役に服するとを拒む。その救は人間を殺戮する術を學ぶのを好まないからである。そこで彼れは發狂者として、精神病院に、禁錮せられる。ニコライも妻子を捨てやうと思ふ。けれどもさう思ふまで、實行は出來ない、たゞ「僧侶は再び教會へ歸つた。自分はボーリスを不幸に陥れた。ルーバーは他の男と結婚した。結局自分の方が迷つて居るのではあるまいか。我が父よ、自分が汝を信ずるのが迷ひではあるまいか。いや、神よ我れを助け給へ」と叫ぶのみである。

ゝことよ』あゝ今日眞實を追求する新思想家にして、また眞實を説く宗教家にして、果してよくそのサチンの如く、眞實とは人間そのもののゝことなるを體得して居るもの幾許であらう。眞實とは人であることを知つたとき、そこに初めて自由と價值がある。この劇の最高最深のねらひどころは、この一點ではなからうか。

私達は夜の宿の様な悲しい痛ましい淋しい人生に住んで居るのだ、併し私は作者の様な偉大な心によつて、かくも了解されたことを喜ばずには居られない。そして私は作者と一緒に、人生を泣くことに慰めを得ることが出来る。——作者の心持はどうであらうと。そして茲に一つの力と望みとを發見し得ることをも喜ばねばならぬ、さうだ、涙を流しつゝ淋しく笑はう。そして生きやう。

——十一月二日夜——

……全體、人間たあ何だ。おめえでもねえ、おれでもねえ、あいつ等でもねえ。でなくて、おめえだのおれだの、あいつ等だの、ルカおいだの、ナポレオンだの、モハメツドだの、……みんな一緒にしたのが人間だ：：分かつたかい。

——『夜の宿』のサチン——

十一月の評論

此の月の雜誌で、私の讀んだ主なるものは、早稲田文學と白樺と帝國文學と假面位なものに過ぎない。今その中から二三の印象を書いて見やうと思ふ。

早稲田文學の卷頭には中澤臨川氏の「新道德論」がある。新道德の特徴は、新自我主義と新努力主義と新樂天主義との三つにありとなし、ニイチエやベルグソンやオイケンの思想から、進んでロマン・ロランのジャン・クリストフの紹介をして居る。私は勿論これを読んで、氏の所謂、無意識の間に凡ての今人の脉搏に共流する生命を感じるものであるが、新道德論としては尙、餘りに抽象的であるやうな氣がする。私達がこれによつて得るところは、新道德の原則とするものを示されたばかりで、而かもその原則としては別段耳新しいことでもない。今や私達は尙一步を進めて、眞に私達の所謂新しい道德や信仰や思想の上に、自己の新世界を創造せんことを望んで居るのである。で私は思った、臨川氏もやはり、ロマン・ロランがジャン・クリストフの終卷序文に書いたと云ふ『汝、青年よ、汝今日の人も。我等を越して進め、汝の脚下に我等を蹈め、そして奮起せよ、汝は我等より偉大で、より幸福であれ』と云ふ、その蹈み越さるべき階級に屬する人ではないかと。私達は氏から常に有益な紹介をきく事を喜んで居る、そしてこれ

は是非氏の様な人に、何時までもお願ひして置きたいと思ふ。併し私達は未だ、氏自身で築上げた世界を示されない。私は氏のトルストイ論からして、常に尊敬の眼をもつて氏を見て居るものゝ一人である。そして今度この論文を讀んで、氏は新時代の青年が新世界を創造する爲めの雄き路臺になつて下さるんだと云ふことを益々深く感ぜざるを得なかつた。

同じ早稲田文學に稻毛氏の「眞實なる生活」と云ふ評論があつた。氏は不斷の新を求める生活の必要を自覺しながら、その『求新病』の病毒を防止せんが爲めに、深い誠實なる即ち眞實なる生活をしなければならぬことを論じ、その眞實とは即ち、最深最奥なる全我的要求の満足であると説いて居る。氏の評論は甚だ地味な書き方であつて、従つて之れと云つて人の目を惹くやうなところがないが、しかも私は氏の眞摯な態度が氣に入つた。眞實なる生活に生きねばならぬと云ひながらも、その眞實なる生活は深い生活だと説くに過ぎない氏の議論には或人は甚だ憚らなく思ふかも知れない、併し私は却つてそれを喜んで居る、何となれば私達の自我の眞實と云ふものは、或る一定の形式や姿や内容を備へたものでなくて、絶對に自由な轉成でなければならぬと云ふ、私自身の持論に符合して居るからである。けれども亦私は近頃何だか

これで第四幕が終る。第五幕は書割りが在るばかりである。それによるとニコライは、ボーリスの母のために刺し殺される。

二 痴人と死と

(一幕) ホフマンスタール作

死が樂人となつて、貴族のクラウヂオに現はれる。クラウヂオはまだ眞に生活をしないからと云つて、猶豫を求める。然るに死は少しも心を動かさずに、その提琴を手に執つた。さうして樂を奏すると、先づ現はるゝ者はクラウヂオの母である。母は一生涯の間、その子の爲めに勤勞したものである。次に現はれたのは、クラウヂオの情人で、その次は暗殺されて斃れた其の友人である。かういふ人たちはみな、クラウヂオに向つて、彼れ等の生活が彼れ一人の生活が彼れ一人の生活の爲めに費やされたことを示す。そこでクラウヂオは翻然として、自分の愚てあつたことを了解する。のみならず今、死に向つて生を求むる愚かさを了解する。この事を覺つた彼れは、死して死の脚下に斃れる。嚴かな生命の掠奪者は頭をふり、そして彼れ等はみな、説明し得べからざるものを説明せんとし、書かれざるものを讀まんとし、永久の闇黒中に路を求めんとする不思議なる存在者だとする。

三 ヨハ子

(五幕) ノズウデルマン作

バブテスマのヨハネは、眼前に迫る運命を傳へやうとして、砂漠からエルサレムへ上洛する。そして國民の憎しみの的となつてゐるヘロデ王家と衝突する。ヘロデ王の妃に、不品行なヘロヂア

スがある。踰越祭のとき、神殿に詣で、それを汚さうとすると、國民は先づヨハネが第一石を玉妃に投ずるのを待つて、ヘロデとヘロヂアスと其の息女のサロメとを、石でうち殺さうとした。ところがヨハネは、彼のガリラヤ人より、有力にして人間を動かす「愛」なる言葉が語られたことを傳へ聞いた。これを思うてヨハネは、既に擧げた石を「我れをも——汝をも愛せよと命ずるその人の名に於いて」と呼びつゝ、再び棄てた。ヘロデは危険なるヨハネを獄屋に投ぜしめる。けれども彼れを殺さうとはしない。然るに彼れはヘロヂアスの連れ子サロメを罪惡的に愛して居た。此のサロメが或る日王の前に舞ふ時、王に媚びてヨハネの首を乞うた。此の如くしてヨハネは斷頭臺の露と消えた。然るに此の時すでに、救世主はエルサレムに入城してゐた。

る。そして私と云ふものを眞に立派なものとしたいならば、その意味に於ける表現にまでも、種々の努力と創造が要するのである。そして私と共に創造も成長するのである、表現も成長するのである。この意味に於いて、生活と藝術とはやはり、一致さるべきものであると私は思ふのである。

同じ雑誌にある内藤濯氏の『生命を究めゆく心』に就いては、私は他でも一寸感想を書いたから、茲では重ねて多く云ふまいと思ふ。氏はこれによつて、メテオリンクを論じ、イプセンを論じて居るが、要するに私達の眞面目なる新生活に對する態度に就いて、注意深く考察したものである。私達は氏が態度論から實際生活に進みたいと思つて居るところに就いて、氏の評論にはまだ飽き足らなく思ふところがあるが、併しまた顧つて考へて見れば、實際生活に就いては、私達自らの世界だけを開展することが出来るばかりであつて、或は評論には向かない仕事であるかも知れない、眞實の意味に於ける評論は、態度の革新より以上には語り得ないものであるかも知れない。さうとするならば、此の評論の如きは、立派にその任務を果たして居るものと云はねばならぬ。創造生活の力を求めることが、新生活の第一歩でなければならぬと云ふことは、根柢なき創造生活の主張者に對しては、實に頂門の一針であつた。何となれば眞の創造的生活は、その確然たる根柢を得たるときに於いてのみ、創造の力を得るものであるからだ。私は氏がなほ進んで、その根柢に向つて深く思ひを致される時を

待ちたいと思つてゐる。(以上、加藤一夫)

『新創』には、阿部次郎氏の『沈潜のころ』がある。自己の「成長」に對する意識が、成長の誓みに朗かなる歡びを與へながらも、「自己の天分と力と成長とを不斷の意識として、反覆念を押して喜んでゐることは、必しも自己を大きくする所以でない」と云ふ見方からして、無意識の偉大と、内省の徹底味と、謙遜の強みと、肯定と否定との融合點とを力説してあるところに、私は心から同感を誘はれたのと同時にまた、阿部氏自身の人格の底から湧き上つた「主張のつよみ」を感じないわけに行かなかつた。「謙遜とは無力なる者の自己縮小感ではない、無意識の奥に底力を持たぬ者が自己の懶惰を正當とする申譯ではない」と云ひ、「謙遜とは獨立せる人格が自己の缺點を自認することである」と云つてあるあたりに、殊に徹底した理解の閃めきがあつた。近ごろの文壇に於いて、私達の最も片腹痛く思ふものは、安價なる自己肯定者の態度である、しきりに努力と創造との概念に耽溺しつゝある人々の心である。それらの人々は、阿部氏の此の主張に對して、深く省みる所がなくてはならなからう。

『新人』開拓者『基督教世界』なども、注意して讀んで見たが、特に教へられる所のあるものは、一つも見當たらなかつた。今日の宗教界は、どう考へてみても、ハイパーポリカルな表白に煩はされてゐる。(この項、ないとう)

最早それだけでは満足が出来ない様な氣がする。私達はその眞實なる生活を私達の實生活に於いて實際に生活しなければ承知が出来ない様な氣がする。私達の世界を創造なければ承知が出来ないやうな氣がする。そこで私はまた暫らく創作をやらうと思つて居る。同時にまた評論に於いても、さうした生活と融け合つた評論をしたり聴いたりし度いと思つて居る。

『帝國文學』にある石坂養平氏の『鑑賞と創造と表現と』は、餘程

手の入つた眞面目な評論である。近頃餘りに多く創造を呼ぶ空疎な評論が出るが、一體、鑑賞や表現を離れて創造と云ふものがあるかどうかと云ふ疑念が、この評論を起こした動機らしく見える。そして氏は、藝術家の心理を解して、鑑賞—創造—表現と云ふ三段の作用が、順序的に行はれると云ひ、鑑賞に介意しないで創造々と云ふものゝ愚を笑ひ、更に進んで、創造が直ちに藝術になるかどうかと云ふことを論じて居る。此の議論は随分六ヶ敷い美學的名辭や發表をもつてせられて居るので、私の様な美學に暗いものには、少し解りかねたところもある様だが、要するに氏は生活即藝術の思想を排して、創造が直ちに藝術とはなり得ない、何となれば創造は單に藝術家ばかりのやることではない、宗教家でも、哲學者でも随分同じ充實した生活を送つて居るのに、藝術が出来ないではないか、故に創造と表現との間には、融合があると云ふよりは、溝渠があると云ふのが、氏の議論らしかつた。

創造が鑑賞や表現を離れては存し得ないと云ふことは、私も同

感である。併し私は藝術家の心理が、常に必ずしも鑑賞と創造と表現との順序的な階段を経なければならぬとは思はれない。見ることも、また聴くことが、創造の爲めに必要であつても、それは必ずしも或る創造の直接與件とはならない、何氣なく見たり感じたりすることも、創造の材料となるが、その間には時間的又は事件的の間隙が、かなりに廣いこともある。従つてその鑑賞が直ちに創造の先行とはならないで、却つて他の創造的思想の爲めに用ひらるゝ材料となることもある。また氏は、創造してから始めて表現があるので、創造——もしくは生活——が直ちに表現ではないと云つて居られるが、そんなことがあり得るだらうか。私達にあつては、創造とは即ち表現である。表現なくしては創造ではない。形のない質ばかりの物質がない様に、表現と云ふ形式のない創造と云ふ内容——もしくは質と云ふものゝある道理がない。氏の創造といふことは、たゞ概念の上のことではなからうか。

氏は宗教家や哲學者の創造生活に表現はないと云はれるが、私はさうは思はない。彼等には彼等の表現がある。彼等の生活そのものが表現である。だから私は創造とその生活を、それ自身表現であると思ふのである。たゞその表現とは必ずしも一いろの形式によらなければならぬことはない。説教も一種の表現である、哲學もさうである。藝術的作品もそれである。創作に於ける技巧には、生活に於ける創造より以外のものがあると云はれるが、私の考へから云へば、創作に於ける技巧そのものさへ、創造生活の一創造である。それによつて私と云ふものゝ眞實の姿が現はれて來

エレン ジュチヴェール、まあ何故そんな恐い目をするの。何とか一言でもいいから言つて頂戴な。

ジュチ エレン、お前は私をどうするつもりなんだ。語れ、語れつて、全體何を語れといふんだ。お前こそお前の腹の中のことを隠さずに言つてくれ。おれの腹の中はみんな言つてしまつたのだ。この上お前に言ひやうはないぢやないか。お前こそ何か私に隠してゐる、言ふまいとしてゐる。

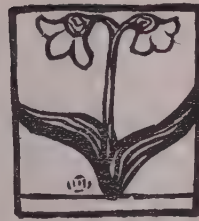
エレン あれ、ジュチヴェール、私の何が氣に入らなくつてそんないやな顔をするの。そしていつまでも私とは口をきかないつもりなの。私ほんとうに悲しくつて悲しくつてしやうがなくなつたわ。

ジュチ お前はまた泣き始めたな。お前が泣く時は大概涙が出ないけれど、今日は不思議に涙が出るよ。黒い大きい腫の底から、水晶のやうな滴が湧いて來て、それが長い睫にきらりとまつて、それから静かに白いすべくした頬を流れてゆく。私はその涙を見ると、何とも言へない氣持になる。エレン、もう少し涙を流してくれ。

エレン ジュチヴェール、お前は人が泣いてるのを見て、そんなさげすむやうな目つきをして……もう荷物は出來たの。何をそんなにさがしてゐらつしやるの。帽子ならあすこにあるぢやありませんか。……まあ何故さう黙つてゐらしやるのだらう。あゝあゝ……

ジュチ お前はおれをどうするつもりなんだ。その索でもつておれを縛るつもりなのか。お前は幾本も幾本もそんな索をもつてさ。ほんとに氣味が悪い、立つ間際まぎわになつて。

エレン ジュチヴェール、ジュチヴェール、もう一日たつのは延ばして頂戴な。私はこの儘ではどうしてもわかれることは出來ないから。こんなにして、まるで啞のやうに黙つて、石のやうに冷たいお



沈黙

佐藤 清

ジュ子ヴェール エレン アニー

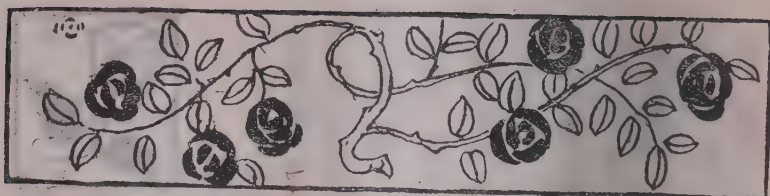
エレン これでもうお別れですか、ジュ子ヴェール、何て徴候の悪い別れでせう。

ジュ子 もうこれでお別さ、おれは早く他人のそこへ行きたくなつたのだ。どうせ私の心がわかるものがないなら、ないとあきらめをつけてゐる他人の間にゐる方が餘程ましなもの。

エレン ジュ子ヴェール、ジュ子ヴェール、何故さう黙つてゐらしやるの、一ヶ月も二ヶ月も三ヶ月も黙つてゐて、別れる時になつても黙つてゐらしやるつもりなの。

ジュ子 黙つてゐる？私が黙つてゐる？こんなにおしやべりをしてるのがわからないのか、お前には。エレン ジュ子ヴェール、お前は私のたつたひとりの兄さんぢやありませんか。私がたよりにしてゐるたゞ一つの杖、たゞ一つの綱ぢやありませんか。それに……

ジュ子 それに何だ。黙つてゐるか。私があんなにお前に訴へたのがわからなかつたのか、この三ヶ月の間。お前こそ黙つてゐたぢやないか。エレン、私のこの胸に手をあてゝ聴いてごらん、私の魂は痙攣を起すほどに語つてゐるぢやないか。



埃及のとまり

竹友藻風

永遠とこの寂靜しやくじやう音絶おとえて夜は紺青こんじやうに燃ゆるかな…
 上の衣にまとはりつ、額を石に枕して、
 清き心の徐世夫きよせふいま祈禱いのりを終へてまどろみぬ。
 かたはら近く寄り添へる驢馬は親しき友のごと。

女怪の像さうの足もとにやをらつかるゝ身をよせて、
 色青白く、慎ましき處女ぢよめ瞳をとづるとき、
 あやめも知らぬ暗闇を妙にくすしきほのあかり、
 双手のなかに眠りたるいとし耶蘇よりうかびたる。

真砂まじの原は渺茫みやうぼうと神秘の色にひらかれぬ。
 この時こゝに萬象もんざうは闐寂てんじやくとして聲もなく
 被衣かひのなかにをさなごの息の通も聞ゆらむ。

風さへ吹かね…焚火より動かぬ煙たちのほり、
 ひとすじながく大空の青さがなかに消ゆるころ…
 永遠の女性どおごそかに星宿の座を證あかしする。

アルベニル、サマン——『黄金駒馬』

前の顔を見ながら別れてしまふなんて。今夜だけとまつて、そしてあしたあたちなさいな。

ジュ子 お前はさつきの索をどこへ隠した？あや、お前は私をもう縛つてしまつたな。私はもうどこへも行けなくなつちやつた。エレン、お前はこんな強い索を何處から持つて來たんだ。そして何のために私をこんなに厳しくしばつたりするんだ。おれを殺す氣ではないだらうな。

エレン ジュチヴエール、ジュチヴエール、いでせう、あしたの朝までに何か一言でもいいから仰有つて、それからお出かけなさい、ね、ジュチヴエール。

ジュ子 あゝ此の索をほどいてくれ。ほどいてくれ。エレン、お前はおれをどうするつもりなんだ。お前は何時の間にそんな細い腕でおれをこんなにひどく縛つたんだ。苦しい、苦しい、あい、お前はおれの聲がささえないのか。

エレン ジュチヴエール、お前はほんとうに顔色がわるいの。そんな顔色をして、長い旅なんか出来るもんぢやないわ。もう少しゆつくりして、氣を落ち着けてからでも遅くないんだもの。……それにいつまでもく黙つてゐらしやるのね。

ジュ子 こんな索にしばられておれが動けないなんて……切つて見せるぞ。あい、エレン切つて見せるぞ。

アニー お嬢様、若旦那様、もう時間でございます。鐘が八つ鳴りますよ。馬車が門に待つてゐます。

エレン アニー、あのね、馬車はかへしておくれ。ジュチヴエールは工合がわるいからね、明日か明後日でないと立たないんだから。

アニー さうでございますか、それではさう申しつけます。

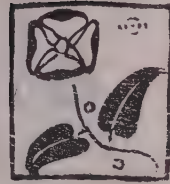
エレン ジュチヴエール、食堂で一緒にコーヒでも飲みませう。それから一寸醫者を呼んで來ますが

に來た頃から山樺の古木がこんもりと立ち寒がつて居て、道には大きな落の葉が一面に生へて居た。道に迷つたのはそれからであつた……』

彼はそれから正しい道に行き着かうとして什麼にやきもさしたか知れない。而も悶けば悶くほど、道は益々もつれて行くのであつた、落の葉の繁みの間から辛うじて見わけられた細い道が灌木のしげみに消えて行つた頃からは、もう彼は何方に行つていゝか解らなかつた。大古からこの方一度だつて人跡の刻まれたことのない荆棘の叢が彼の行手に待つて居たのである。彼は幾度もとの道に歸つて別の新しい道を撰んだか知れなかつた。そして或時は目まひのする様な恐ろしい絶壁の縁に立つた。或時は墓穴の様に暗い恐ろしい洞穴の口に辿りついたこともあつた。そしてやつと道らしい道を探りあてゝ來たのは今の道であつた。彼は思つた。

『全く俺はもう何處へも行くことが出来なかつたのだ。勿論、俺はその幾つかの道のうちの二ツ三ツは行きつまるまでは行かなかつた。併しどうしてあの様な道を何處までも歩かれやう、あんな藪だらけの、あんな岩だらけの、あんなに細い、あんなに險しい、あんなに淋しい、道を行つて何處に出られやう、弱い生物を脅して、飽くことのない食欲を充さうとする殘忍な熊の棲息處にでも導かれるまでのことだ。死のアビスに自ら跳び込んで行く様なものだ……あゝ、もう日が暮れた。俺は一體どうしたらいいんだ』

彼の立つて居る直ぐ上方の柏の樹の枝で、不意に寒古鳥がカッコオ／＼と陰鬱な夜の森な、惡靈を招ぶ梟の様に、凄いうら悲しい聲で鳴き出した。旅人は思はず身ふるひした。



日没と旅人

加藤 一夫

日はとつぷりと暮れてしまつた。大空を一面に眞紅の波に焦して居た夕映の雲も消えはてゝ、國境の山頂には身の毛もよだつ嚴肅な沈黙が神秘の翼を張り、眼界のひらけた釧路や十勝の方面には重疊たる山脈が端でしなく連なつて、偉大な自然の威力が小さな旅人の胸を打つた。うら淋しい冷たい夕べの風が、地獄の底から來た惡魔の私語の様に、さら／＼と木の葉を揺ぶつた。俯向き勝ちに物思ひに沈みながら、疲れた脚を曳きずつて居た旅人は、その惡魔の呪の矢にでも射られたやうに、はたと立ち停まつて、恐る／＼周圍を見まはした。

旅人の胸には昏惑した血潮が、渾沌の中の深淵のやうに、どよめき騒ぐのであつた。

『あゝ……あ……』

思はず嘆息をついて、かう獨言を云つた旅人の眼には、おち／＼した黝の様な不安がもがいて居た

『あゝ……あ……もう日も暮れてしまつた。俺は一體、今晚どこに寝るんだらう』

旅人は疲れた身體を杖にもたせながら、一日の行程をふりかへつて見るのであつた。『あの河の岸

して休んで居た宣教師は彼をとめた。

『まあ休みなさいませんか？大そう暑いですねえ。』

そゝが始めて、二人の間には色々の談話がより交はされた。

『あなたは何處へ行かれますか？』

宣教師の訛には、終りにわざとらしい力が加はつて居た。何處に行くかなど、訊かれる毎に旅人の心は刺される様な不安を感じずには居られなかつた。

『別に何處と云ふ的もないのです。私はたゞ歩るいて居るのです。何處かに宜い土地がないかと思つて、毎日歩るいて居るのです』

『それぢや此嶋へ渡つてから、まだ、左程、時が経ちませんですね？』

『さうです。來てから、まだ二月に足りません、併し毎日かうして歩るいて居るばかり、何にも宜いものにはぶつかりません。段々、金もなくなるし、知人は居ませんし、眞個にもう厭になりましたよ。』

『あなたは妻や子がありますか。そしてその、それを一緒に伴れて來ましたか』

『妻も子もあります。併し伴れては來ませんでした。皆、妻の里へ一時預かつてもらふことに致してあります』

『何故あなたはそんなことまでして、此島へやつて來たんです？』

老宣教師の心情には溫かい慈悲の血が、ふくつらとした春の日の光線のように波打つて居た。旅人の荒んだ神経は降りそゞその愛の光りに潤はされた。こんな人には什麼ひみつを語つてもよい、自分

「ふた彼の鳥が鳴く、あの唄はれた鳥が……あの宣教師の所謂、呪はれた鳥が……。さうだ、彼の鳥は俺の靈魂かも知れない、俺の靈魂が、呪はれた歌を彼處で歌うて居るのかも知れない……」

二

旅人は、數日前に道づれになつた一人の老宣教師のことを思ひ出したのである。その宣教師と云ふのは、廿年程前に日本へやつて來て、特に自分から好いて、この北海道の傳道を始めたアメリカ人である。勞働者の様な汚れた着物を着て、破れた、不恰好な、大きな軍人靴を穿いて、北海道の南の端から北の端まで、どんな邊鄙な處へでも、テク／＼と歩いて行く、内地で失敗して、新しい運命をこの土地に探しに來た移住民の羣や、樂をして、ぼろい儲けをしてやらうとして居る野心家輩の間に有りがたい神様の恵みと、この世の榮えの空無なることを説きまはつて居る。彼は途て行き逢ふ程の人には、誰にでも挨拶をして、誰にでも福音を説く、荷車を曳いて居る人に逢へば、車の後から力を添へてやる、木の片や石塊なんかと途の真中にころがつて居るのが目にとまらうものなら決してそれを取り除けずにあきはしない。その心持ちは子供の心よりも美しく、その生活の形式は原始時代の人を思はせる位の人である。土地のものは最初は多少馬鹿にしてゐたのであるが、今では誰一人として、この老宣教師の徳をたゞへないものはない、誰一人として彼の名を知らないものはない。

旅人はその時、背には小さな荷物を負ひ、頭には大きな菅笠を被り、そして、脚には黒い脚絆を着けて、太い杖をたよりに、まだ工事中の鐵道線路に沿うて歩いて居た。すると途の片側に腰をおろ

『まことに何うも慚愧に堪へませんが、いつそ終りまで話しませう、不運はこればかりでは濟まなかつたのです』かう云つて旅人は尙もそれからの自分の身の上ばなしを訴ふるが如くに宣教師に話した。下宿をたゝんでから、彼は小さな家の間借りをした。そして何か職業を見付けやうと思つて、各方面を探して見た。けれど、もう世の年路を越した我儘者に提供してくれる職業と云ふものは一つもなかつた、彼は遂に半年も一年も居食ひをしなければならなかつた。少しばかり残つた財産や道具や妻の衣裳などは悉く賣り拂つてしまはなければならなかつた。

『私は随分色々なことを計畫して見ました。併し愈々やつて見ると云ふ段になると何だかまた失敗しそうな氣がして、中々容易に手をつけることが出来ません。第一、私には色々の困難や苦痛と戦つて行く氣力がありません。それで、毎日々々たゞ、ぶら／＼と氣を腐らせて、火鉢の前に坐りながら愚にもつかぬことを考へたり、計畫をしたりばかりして居ました。

此變わけで、私の發展する道は、もう一つもないのです。發展するどころぢやありません、生きて行くことさへ出来ないのです。私は日本の文學者等が、切りに『行きつまつた人生』だなど云つて居るのを見まして、それはほんの文學者一流の形容詞かなんかであらうと思つて居ましたが、近頃になつて初めて、その意味がわかりました。實際、人生は行きつまつて居ます、何をしやうとしたつてそこには大きな邪魔ものがあるんです、もしくは他の人がお先きに失敬して居るんです。さうでなかつたら、お金が足りないんです。……人生は實際、行きつまつて居ます。……私は新しい道を拓きに北海道へやつて來たのです。……』

の心の奥底にしまつてある什麻ことでも話してよいと旅人は思つた。

二人はそこから道づれになつた。道で彼れは話した。それはかう云ふことであつた。

彼は田舎では可なり大きな、そして可なり名高い百姓の舊家に生まれた。土地の百姓共が土を掘ちくつて居るうちに、彼は東京へ勉強に出たが、根が怠け者の彼は學校なんかには少しも通はずに、寄席や芝居にばかり熱中した。そんな風だつたので彼は、まあどうにかこうにか或る法律學校を卒業したけれど彼の唯一の希望であつた辯護士の試験には何時も失敗した。そこで彼は、遂々幾分自暴氣味になつて辯護士は思ひ切り、學生時代に夢中になつて聴き覺えた浪速節を語つて、僅かに自分の胸の鬱氣を晴らさうとした。けれどそれとても最初から群小輩を抜んでると云ふことは中々困難であつた。それが怠さにそれも結局、おはりまで遣り通すことが出来ないで、彼は遂に、郷里に残つて居る僅ばかりの不動産を賣つて、或る都市で旅人宿を始めた。そこは以前彼が或る辯護士の宅に居て勉強して居た縁故から、自然とその邊には幾分の知合もあるし、また、此の商賣が一番樂で骨が折れないからよいと、例の怠け根性に、あほられたのであつた。宿屋は最初、中々景氣よく榮えて行く様に見えるが、或日土地の警官がやつて來て、彼が二三の社會主義者と親しくして居たと云ふことから、丁度あの△△事件が勃發した時なので、彼もその黨與の一人と見られて、非道にも家宅搜索の大騷動をやつて、女中の禪までも揮うて見ると云ふ様なことがあつてからと云ふものは、急に客足がとまつてしまつた。そして到頭、宿屋の維持が出來なくなつて彼は東京に出た。東京で小さな下宿を始めたが、又もやそれも無殘にも失敗してしまつた。

前の肉體から、お前の精神から、お前の靈魂から、お前の凡てから、あらん限りの力を振り起せ……振り起せ……振り起せ……と命令する様である。併し、その力はもう、今の彼には残つて居ないことを旅人は感ぜずには居られなかつた。そして一層のなやみが旅人の心を閉すのであつた。

三

旅人は今、この高原の暮れ行く日に、恐れ戦きながら、その所謂、呪はれた鳥の歌を聞いた。あの時までは何の關係もなかつた、その鳥の聲が、今はもう旅人の胸の血をかき亂さないでは止まないのである。

『過去があつて、未來のない鳥！追憶の涙をもつて、絶望の歌を歌ふ呪はれた鳥！俺の靈魂といふ鳥の痛ましい姿を、俺は今、始めて見たのだ。俺の人生はもう行きつまつて居るのだ。俺にはもう未來がない、死と云ふ荆棘の中に、俺の道は消えてしまつて居る。丁度途に迷つた今のやうに……』
疲れた旅人は、こんな思ひに自分を忘れて居た。もう一步も足を運ぶ勇氣が彼の裏には湧いて來なかつた。ダルな眼の球のなかに、力のない心が、追ひ使はれた牡牛の様に喘ぎ疲れて居た。そして、何物の色も彼から消えてしまひ、何物の音も彼の耳には響かなかつた。彼はたゞ嘆きであり、嘆きは彼の凡てであつた。

バサッ／＼と云ふ音が、不意に旅人の鼓膜を打つた。おびえて居る彼の神経は、恐怖をもつて縮みあがつた。呼吸をこらして、柏の樹立の間を眺めたり、耳を敏て、あたりを聴いて見たりしたが

二人は、五升芋や豆を植ゑてある、乾燥したつた畑を通つて、柏の樹立が際限もなく立ち並んで居る高臺に入つた。道は樹立の間を一直線に走つて居る、ダンゼライオンや、テイモシイや、蘇やその他、名も知らぬ草花が、道の兩側に叢り繁つて居て、生々とした夏草の生命の呼吸が芳烈な香ひを放ち、蒸しあつた森の濕氣は、弱い神經を腐らすほど鼻を打つた。蝶は柔らかな翅で、そうつと空氣をあほりながら花を追ひ、蛇は二人の足音に驚いて、ブーン／＼と呻りながら、前方へ／＼と飛んで行つた。そして樹の上では、時々、哀れつばい寒古鳥の鳴き聲がさこえるのであつた。その時、宣教師は急に言葉をかへて、

『鳥のうちで、あの鳥ほど愚かなものはありませんねえ……』と言つた。

旅人は不審さうな顔を擧げて、宣教師に問うた。

『一體それは什麼わけて……』

『さうです。あの鳥は常住、過去！過去！と啼きます。あの鳥には過去があつて、未來がないのです。何時も過去の思ひ出に涙をしぼつて、あんなに悲しい、あんなに淋しい、そして、あんなに恐ろしい呪はれた歌を歌つて居るんです……』

詠のある西洋人の言葉は、旅人の胸を鋭い刃でもつて刺し貫いた。蛇の様に、旅人の心の中に蟠まつて衷に湧いて居る血潮や、力や、希望を吸ひとつて了ふ追憶の涙と、過去の怠惰な生活の餘燼とが何時までも／＼こびり着いて居て、食ふに困る今日でさへ、身を墮して什麼こともやつて見やうと云ふ氣も起つて來ない彼の心靈に對つて、宣教師の今の言葉は、電の様に閃めいた、それは丁度『あ

旅人は何時でもそこまで考へて來ると、自分にその力のないことを直覺する。そして殆んど絶望に近い苦悶を覺える。『俺にはその力がない、そしてあの執拗な憬れは、俺にその力を要求する。……さうだ、あれは雨のしよぼ／＼と降る、薄暗い陰氣な春の日であつた。』

彼は亦、それから妻と一緒に叔父のところへ世話になつて居たときのことを思ひ出した。破産してからと云ふものは、何をしやうとしても駄目なので、俺はその頃五圓の金も自分で儲けたことがなかつた一圓の金も自分の財布に納めて居たことがなかつた。毎朝々々何かいゝ勤め口がと思つて、時事新報の案内欄を見て居たけれども、自分の求める様な職業を一つもなかつた。あつてもそれは、先方て用ひて呉れないものばかりであつた。

『何をしやうか、どうしたらいいのかと思つて俺の氣は腐れて居たのだ。ある雨のふる日であつた。妻は叔父の家の家具を買ふ爲めにとて預かつた幾許かの金を、自分の坐つて居る火鉢の傍へ置いて行つた。俺は猫の眼を恐れる鼠の様に、おづ／＼とあたりを見まはしながら、その財布の中の金を出して、自分の手に載せていぢつて見た……俺の眼には涙が瀧の様に溢れおちるのであつた。自分の身は何うなつてもいい、親を苦しめますのも仕方がない、併し自分の爲めに忠實に盡してくれる妻をこんなにしておくと云ふことは俺には耐へられない、そして俺は無能なのだ、人生は行きつまつて居るのだ……かう思つて俺は實に立つても坐つても居られなかつたのだ。そして最後に俺はどうと此處へやつて來たのだ。併し此處だつて内地と何の違つたことがあらう。俺は今、道に窮して居るのだ……』

段々と夜が深まつて行つて、三ヶ月の淡い影が空に映つた。冷たい風はまた、一としさり柏の葉を

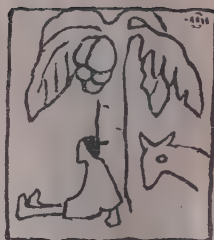
恐ろしい熊が来るのではないらしい。寒古鳥が枝の上で動いたのであつた。

『……まあよかつた。……熊ではなかつたのだ。俺の生命も助かつたのだ……こんなときに、誰かゝ来て呉れ、ばいゝがなあ……今の音が人の近よつて来る足音であつてくれたなら……』

誰か人が来る、その人は白い顎鬚を長くのばして、それを冷たい夕べの風になぶらせながら、手に杖をついて居る老人に相違ない、そしてその老人は、山番に來て居る自分の小屋に、自分を伴れて行くのだと、旅人は獨て空想した。

『老人は俺を教へるに相違ない、月の光に輝された蒼白い手を徐ろにあげて、老人は云ふだらう、——目を舉げて見なされ、何と云ふ廣い野原でないか。此處はまだ開拓かれて居ない原野なんだ。此處とて人の造つた道を探して、樂な旅行をしやうとするのは、余りにお前さんの氣が好すぎると云ふものだ。實際お前さんは臆病者だ、弱虫だ、遠慮なく申せば怠けものだ。道は自分でつくつて行かにやならん。』

その時、俺は思ふだらう、
 成程、人生は廣い、丁度この原野のやうに。そして自分は決して出來あがつた道を、安樂に歩いて行かうとしたのでもない。併しこの廣い人生には、固い殻があるのだ。ダイナマイトの様な恐ろしい暴發力をもつて居るものにもよらなければ、決して破壊することの出來ない岩が邪魔をして居るのだ。併したとひ人生は岩の様な外圍をもつてかこまれて居やうとも、それを打ち破る力さへあればいいのだ、たゞ俺にはその力がない、力がない……』



誌友から

子白夢

*

御手紙うれしく拜見しました。滯京中いま一度しみとのお話する折が欲しかつたのですが、それが得られずに歸名したのが残念です。……田舎にばかり引きこもつてゐる僕のやうなものが、中央の目の廻るやうな思想の渦巻の中に、しばしなり觸れたので、びつくりして仕舞ひました。靜かに考へてくると、中央の思想界も、單に渦巻が烈しいと云ふだけで、何等の歸一もなく、統一もなく、權威もないやうに思はれて、しまひには情けなくなつたやうな氣分もしました。仰しやるとほり、今數年このまゝにして居つたら、宗教界は死滅するでは無からうかとも思はれます。この間に何物か生れなくては駄目です。兄等の非常なる御力を要するわけです。僕等も田舎には居るものゝ、此の儘にしては居られないやうな氣もするのです。まあ一つ御互に深き力あるものに觸れなくては駄目ですね。……六合雜誌の一月號には、きつと何か書きます、「觸光の感」にしませうか。……(十一月六日、名古屋にて金

別封原稿さし上げますから、御一覽の上、御取捨を願ひます。本月分の六合雜誌も面白く拜見いたしました。何と云ふことはなく新しい力——と云ふよりは新しいストラッグル——をその中に感じました。加藤氏の論文見たいもの、面白く讀みました。正月號のために、一篇の劇を差上げたいと思つてゐます。モーゼスを中心にしたものですが、そのうち御一覽を願ひたいと存じます。西灘も此のごろは日和つゞきですが、時々少々の風があります。私どもの方は、全く田園生活と云つた風です。それでも神戸には、藝術座などが來たりしますので、東京の空氣にも、すこしは觸れることが出来るやうにも思ひます。小山さんも御丈夫で、講演や何やで御多忙のやうです。(十一月五日、神戸市外西灘にて、佐藤清)

*

動かして、悲しい、淋しいそしてうらめしい樂を奏した。併し旅人の空想した老人はやつて來ない、旅人の狂へる神經は、再びまた彼を驅つて、あてもなくあなたを歩るさまはらした。けれども綿の様に疲れた彼の肉體は、もう彼の歩行を許さなかつた。旅人は遂に運命の力に抗ふことが出來なかつた。旅人は遂におとなしく運命にきいた。

『あゝ運命よ、俺は今お前に降服する。俺は今、お前の冷酷な翼に育まれて、多分、熊の胃の腑に永久の寢床を得るであらう。茲に至つたのは勿論俺が悪いのだ。俺の罪だ。併し俺はお前の手から何時自由にされたことがあるか、第一、俺が此蠻男に生れたのはお前の仕業だ、生れて來たと云ふのは尙ほ更大きなお前の仕事だ。俺の人生は俺が造つたのだ、而もそれはお前のした仕事なのだ、眞面目か、いたずらか、惡意か、それは知らんが兎に角お前の仕業なんだ。俺は今日からお前の國に住まはう。そしてお前に臣従の禮をとらう。そして、よく見て居るがよい。あれはお前に服従することによつてお前を征服して見るせから、自分の自由の世界を建て、見せるから、俺は何處までも執拗なのだ……あゝ、まゝよ。俺はもう寢やう、夏草をしとねに、花の香りを夢に、冷たい風を歌に。俺はもう寢やう……』

旅人はそのまゝそこへ倒れてしまつた。そして倒れるや否や、子供の様に眠つてしまつた。彼の周圍を淡い月の光りと、數かぎりもない星の光りが、入り亂れ立ち代つて沈鬱な舞踏を踊りつづけた。風は葉に和して柏の葉に樂を奏した。もう呪はれた寒古鳥の歌はさこえないけれども、遠いところに凄い狼の呻り聲がさこえる、そして旅人は何をも知らずに、ぐつすりと寢込んで居る。

ゐるやうな態度だけは飽くまでも斥けたい。内ヶ崎氏の「光は巴里より」を讀んで、紹介の勞を感謝するものは、たゞ僕のみでない。吉野氏の「選舉權擴張論」は、堅實な政治論として推稱に値する。金子白夢氏の「市より森へ」には、現實に絡まつたローマンス、平凡のうちに潜む神秘のかをりが、清くしめやかに表はされてゐるけれども、現實のためのローマンスが主になつて、現實ならざる現實の味が客になつてゐる事を物足らず思つた。それでも僕は氏が、僕等と遠からぬ世界に生きてゐる人である事を感じずにゐる譯に行かなかつた。加藤一夫氏の「創造の悲哀」は、いろいろの意味で、僕に新しい思索の機會を與へてくれた論文であつた。飽くまで虚偽を語るまい、できるだけ眞實を表白したいと焦つて居る氏の態度は、隨所に鋭くあらはれて居ると云ふに躊躇しない。しかし、自我とか生命とか云ふ問題が主になつて了つて、創造の悲哀と云ふ一點に餘り多く觸れてない事は、いさゝか遺憾であつた。のみならず、前半の内省的なのに反して、後半が概括的叙述的に墮して居る事は、更にさらに遺憾であつた。創造の悲哀は、一たび生命力の壓迫に眼を覺ましたものゝ、必ず經過せねばならぬ關門である、僕等の生活に動もすれば停滯があり動亂があるのは、皆この悲哀あるが爲めて無ければならない。僕は加藤氏が更に此の一點に明らかな全的理解を進められん事を希望したい。小泉八雲氏の遺稿「文學と輿論」を讀んで、僕は故人に對する記憶を新にしたのと同時に、今日多數者の文學に對する理解が、十五年以前に述べられた此の言説の半ばにも達してゐない事を尙がゆく

思つた。野村氏の「新生命覺醒の機」は、内的革命の意氣に貫かれた文字である。僕は野村氏が少數者の思潮を一身に背負つて立つた態度の花々しさを讃嘆せざるを得ない。君の「塵の中から」は、まるで申しわけに書いたと云つたやうな姿だ。しかし斯うして折々の感想を書き並べるのは、よい思ひつきである、續いてどしどしやりたまへ。文藝ものは、前號あたりに比べると、いさゝか振つてゐないやうに思ふ。佐藤氏の「きえざる火」は、文字の裝飾をすてゝ、至つてすなほなりズムを出してある所が懐しくて堪まらない。單なる情調の發表でなしに、氏自身の生活そのものと思はれるほどの尊いものが刻み込まれてゐる點は、殊に懐かしさをそゝられる。石田氏の HATSUGOI にも、アルペル・サマンあたりの詩に見えるやうな、美しい温い情調が織り込まれてゐる。斯ういふ風に詩を羅馬字で書き表はすと云ふ事は、いつも君と話してゐるやうに、日本人の心にリズムの意識を覺ます點から見ても、意味のある試みだと云はなければならない。この詩のやうに韻を踏んである場合は、なほ更に其の必要を感ずる。吉田氏の翻譯戯曲「黎明」は、譯筆に次第に落ちつきが見えてきた、いつまでかゝつても可いから、終りまで譯し遂げて欲しいものだ。

時評についての感想は、わざと差し控へる。「教會歴訪記」が掲げられ始めた事は、何より愉快である。今日の教會が、批評的精神の指導乃至刺戟が殆んど皆無であるために、どれだけ其の進歩を促されずにゐるか云ふ一點を思ふならば、六合雜誌は其の地位上、忌憚なく此の方面の批評に努める所がなければならなから

どうも忙しいやうな、ひまなやうで、朝は九時か十時に起きるが、夜は十二時過ぎねば歸らぬ始末、御無沙汰した。日記の整理をしてから、近日落着々第、大々的通信を起稿するつもり、當地の景況は、その時にお知らせする。

さてベルリンは誠にいゝ處だが、どうも勉強は出来さうもないので、近日瑞西ロサンヌの大學へ行くことにした。ジエチエヴ湖畔の有名な勝地、一年も仙人になりますさうと思つてゐる、おまけに同地は全然フランス語ださうで少々困るが、さて一年もゐたら、一寸パルレー、ヴー、フランセエ位はやれるだらう。(十月廿一日、伯林にて、荒井恒雄)

……今月號には、組賃たかき羅馬字にて、拙詩御掲載の光榮を得しめられ、感謝この事に御座候。多分小生の書き落しに候ひしならん、一番しまひから二行目の *Hono aoi uss-ginu no ye ni* の「青い」と「薄衣」との間に、「其の」sono と云ふ言葉がはいらねば、字數わるく相成なり候間、甚だ恐縮に候へども、十二月號の何處かに餘白生ずるやうな事これあり候はゞ、日本文字にても構ひません故、一寸御訂正なしおき下され度く願ひ上げ候。來月號の原稿澤山こゝあり候趣、小生さし控へ申し候。敬具。(十一月十三日、千駄木にて、石田樺村)

*

今朝、六合雜誌の十一月號が届いた。役所から歸つてから今までに、大體讀み下してみた。もういつもなら床に就く時間だが、

雜誌を送つて下さつた御禮のつもりで、讀みながら捉へ得た印象を書き送る事にする。全く懸値のないところを書くのだから、その積りで見てくれたまへ。

口繪の「噴野のたそがれ」は、何處となく新しみのある作には違ひないが、翻譯劇の背景のやうだと云ふ感じに邪麗されて、まとまつた感じが得られない。作者のフロベエゼと云ふのは、何處の人なんだ。「シイザア」劇の大詰には、うまく當てはまるとも云へるほどの圖案である。三並氏の「信仰の流動と固定」を讀んで、まづ氏の表白の仕方が此のごろ大分碎けてきた事に氣がついた。そして氏が從來取つて來られた觀察的態度に、多少の角度がついて來た事が何より嬉しい。述べてある事には取り立てゝ云ふほどの不服もないが、もつと銳角的に突き込んだ味があつても可からう。それには云ふまでもなく、觀察の實驗化と云つたやうな態度も必要であらうし、多少の illustration も無くてはなるまい。昇曙夢氏の「沈黙の宗教」は、今度の號で面白く讀んだものゝ一つであつた。メエテルリンクの『沈黙論』に共鳴を感じて、沈黙の宗教を説きだしたドブローリユーボフの心持には、十分同感されるが、宗教が沈黙のみに踏み留まつて、すべての表白を撥ねのけると云ふ事は、それが形式の末のみに迫つて、内生命を第二義のものとすると同じ程度の誤謬ではないだらうか。尤も沈黙と云ふことがそれ自らで、一つの力強い表白となり得るほどのものであるならば、それでも可いだらうが、僕は此のごろの青年が斯ういふ傾向を誤解して「たゞ黙つてゐればいゝ」と云ふ背後に、氣力の消耗を隠して

揮と云ふやうな言葉は、近頃ハイカッタ連中の流行語のやうにも見受けられる。けれども、恐らく兄等が唱へらるゝ處の其の言葉が、そんな淺薄な處から出て居るのではなからへと思ふ。

思想の表現は、言語の遊戲であると、心得て居る連中の、まだ有勢な現今の日本に在つて、兄等の努力が容易に認められぬのも無理はない。が併し現代の所謂文人と稱する者と、並に舊い哲學者と云ふ儕の中には、實際思索の努力を重ね、深い經驗と感銘もないのに、或はベルグソンを説き、オイケンを論ずる徒輩も少くはないやうだ。時代民心の指導者と目せらるゝ兄等の自重を要する所以は此處にある。

何れの方面から云つても、日本人はもつと苦勞しなくちや駄目だ。さもなければ、浪漫的な夢から、容易に醒めはしない。此の實際兄等の努力は、必ず徒爾ならざるを信ずる。

内ヶ崎氏の懇切叮嚀、然かも生命ある歐米思潮の紹介、三並、岡田兩氏の哲學的根底を有せる解説或は主張、其の他内藤、吉田、加藤野村等諸氏の血筆、鈴木氏の實際問題に觸れたる論說等は、號を重ねるにつれて、我等が心境に一種の蘊^もきを感じしめるものがある。餘り並べると空世辭^{そご}になるから、之れで止める。幸に御健闘あらんことを。禮を缺いだ所あらば、御恕下さい。(十一月十四日、病床にて、下町CK生)

新年號原稿ノ切

十二月七日

う。

下らない事を書きならべて濟まなかつた。僕一人の希望を云ふならば、誌面全體がもつと純なものになつて欲しい。そして同人諸君が、衷心の要求をもつと構はず浚け出されたら、さらに面白いものが出来あがるに違ひないと思ふ。これで今度はおしまひにする。(十一月一日、澁谷にて、K.H.)

*

六合雜誌同人諸兄——

斯く記すからには、既に僕が兄等と境を異にして居る門外漢——形の上の——であることは、察せらるゝこととせう。

僕は幼少の頃、佛門に入つて得度致し、今に其の籍は某宗某派に置いてある。併し僕の信仰は勿論、日々の生活は、一も佛教徒たる事を表示しては居ない。

其處で僕は、兄等の處へ、信仰を求め救ひを乞はんが爲めに、參じやうと云ふのではない。僕に執つては、佛教と云ふ一つの團體が、何うならうと、基督教と云ふ大きな教會が破壊されやうと、そんなことは何等の痛痒をも感じない、況んや統一基督教會の盛衰如何の如き、問題にはならない。

併し只僕の要望する處は、世界の人類、あらゆる男と女が、總べての家庭が、將た國民が、歩一步嚴肅なる精神生活に向つて、進みさへすればいゝのだ。今の場合、日本の人民全體とまでは行かずもせめて東京の市民丈けでも、もつと目醒めてくれねば困る。

此の點から云へば、佛教の團體も、基督教の教會も、其の他一

切の宗教團體は、缺くべからざるものかも知れぬ。然る云ふ意味合から、僕は兄等が近頃盡くさるゝ事業の一々に就いて、甚大の敬意と感謝の意とを捧ぐるものである。決して御世辭ではない。殊に六合雜誌の紙面に於いて、兄等の努力をより一層多く認むるのである。

僕は幼少より書を好むこと甚しく、然かも家貧にして新刊物を購ふ能はず、常に古本古雜誌等に依つて、僅かに意を滿たして居つた。

南船北馬漂浪の途上、我が帝都を訪れては購ふ古本の中には、時をり古い『六合雜誌』もあつた、其の中には佐治實然、神田佐一郎など云ふ人々の署名が屢々見えた。而して當時の六合雜誌は、悲むべし僕の心田に一滴の濕^{しづ}ひをも與ふことなく、途上に捨てざるの止むなき次第であつた。蓋し當時の僕が、幼稚であつたのかも知れぬ。兎に角爾來僕は六合雜誌と云へば、無味乾燥のものと思ひ込んで居た。ところが此の正月頃から、此の惑は少し方向を變へて來た。そして最近では每號一種の懷しみと敬慕の念とを持つて拜讀して居る。

同人諸兄——僕は今茲に、諸兄に對する細々しい品評は止める、が今の調でダシ／＼新しい方面へ、突進せられんことを望む。

僕等の知人でも、兄等の努力を認めて居る者もあり、また無い者である、中には兄等の努力を、徒らに現代かぶれをして來たと、評してる者もある、けれども僕は決してさうは思はない。成程兄等が此の頃、頻りに唱へられる自我の擴張、生の飛躍、個性の發

がその讀書界を相手にするのと、吾等が讀書界を相手にするのは、少しく此心が違ひはしまいかと思はれる。それに此の前編の叙述には——著者も一寸斷つては居るが、——その外甚だ重複した點が多くはないかと思ふ。

前編の第五章の「オイケン哲學の特色及び價值」の如きに於いては、實際よく其の特色が描出してある。即ち歴史及文明史を背景とするが爲めに、規模廣大にして押し出しの強大であるところがその一（この點は獨逸などでは、彼れが餘りに歴史々と稱へて、それを重んじ過ぎると非難する者もある）理想主義でありながら、反理想主義的思想を十分に理解し尊重して居ることがその二。意識の内容を基礎として、哲學を建設して居ることが其の三。謂はゆる論理的、所謂體系的の哲學でない事がその四。宗教的氣分の横溢がその五。獨創的包括的であるが爲めに、従つてまた不整合、未完成である事が其の六。生命本位乃至創造本位の思想である事がその七。生活の内面化の力説が其の八である。けれども人各々見る所はあらう

が、僕には斯く未だオイケン哲學の内容を云はざる前に、これ等の特色があるぞと示されては、何だか自分の判斷を無視されるやうないやな壓迫の感じがする。勿論これ等の諸點は、再び本論と稱すべき後編に於いて、更に論じられて居るから、やはり重複にもなる。若し重複さす位ならば、結論として彼の特色が擧げてもらいたい。さうすると讀者の判斷力を尊重するになりはしまいかと思ふ。

後半即ち後編に於いては、オイケン哲學の大體が纏めて論じてある。尤も著者も斷つて居るやうに、未だ論じ及ばざる要點が少なくはない。然しながらそれよりも、この論じ方も、僕には前にオイケン哲學の特色項下に云つたと同じ感じがする。云はゞ歸納的でなく、演繹的である此の説方は、オイケン自身が論述する仕方とも違つて居る——勿論僕は論旨が違ふと云ふのではない。

オイケンとは、哲學と生活とを分離したものとは見ない。彼れはその近著「認識と生活」中にも云



時評

『オイケンの哲學』を讀む

オイケンは現代の寵兒である。現今の獨逸には、幾多有名なる哲學者があつて、しかもそれがオイケンに劣つてゐるわけでもあるまいが、此のごろは歐米の諸國ばかりでなく、わが國の思想界でも、オイケンの哲學のみひとり頻りに紹介される觀がある。そして其の著述もまた、しきりに翻譯されつゝある。これは我が思想界が何ものかを渴望してゐる故でもあらうが、それと同時にまた、オイケンが何ものかを與へる爲めでもあらう。獨逸や英國では、しきりに彼れの哲學を紹介する著者も出來て居るのに、我邦ではまだ、片々たる論文やその或る著書の翻譯があるに過ぎない

とき、**●●●**稻毛詛風氏が『オイケンの哲學』一卷を編んで、此の缺陷を充たされるとになつたのは、實に悦ぶべきとである。

三百二十ページの本書は、その百三十八頁に至るまで即ち殆んど其の半分を占める前編に於いて、オイケンの外廓とも稱すべき「現代思潮の中心生命」「獨逸哲學界の現状」「思想界に於けるオイケンの位置」などを八章に分かつて、重に獨逸の哲學がオイケンまで發展した歴史や、オイケン自身の發展が述べてある。此の企はすことに用意周到と云はざるを得ない。著者は此の部分に於いて、オイケンが如何に、カント、フヒテール、ヘーゲルなどの思想に負ふ所があるか、或はこれ等と如何なる點に於いて相違する所があるかなど、このことを論じて居る。然しながら此の種の企に普通あり勝ちなる如く、稻毛君の周到なる叙述もまた、たゞ此の發展を疾馳して通過するのであるから、哲學史を知つて居るものには、了解が出来るが、餘りその事を知らないものには、甚だ難解であるかも知れないと思ふ。此の點に就いては、歐洲人

は、其の後紛糾に紛糾を重ねつゝあつたが、昨今やうやく危急に迫つたと傳へられる。米國が威力を挾んでの懸合も、墨國の容るゝ所とならず、米國は最早其の體面上よりするも、干戈に訴ふるの外はなからうといふ。我が國よりは居留民保護の爲めに、軍艦出雲の派遣をも見るに至つた。抑も本事件の経過や如何。

蓋し米墨擊争の原因たる、墨國の内亂に對する米國の干渉に基づくのである。墨國に於いては、一昨年に至るまで過去二十五年間、大統領ディアズ氏の——共和政治の名の下に——事實上の專制犯裁の政治が行はれた。ディアズ氏の政策は着々として成功し、人民の衆望を博したのであつた。けれども一面に於いては、ラテン・アメリカンの常として、國內に野心家の陰謀絶えず、一面に於いては外資輸入の財政策の結果、合衆國として、或は鑛山に、或は鐵道に、經濟上拔くべからざる勢力を扶殖せしむるに至つたのである。是に於いて乎、米國人の專横は其の極に達し、墨國民の反感を抱く者益々多く、ディアズ氏また昨非を悟りて、

寧ろ親英主義に傾き、英國をして、米國を抜いて、經濟上に於ける優越權を認むるに至りたれば、氏は轉じて米國政府より睨まるゝことゝなつた。其の英米間の經濟戦争は、即ち石油鑛に其衝突點を見出したので、米のスタンダード會社と、英のビアス・エンド・ソン會社とが、激烈なる競争の結果、ビ會社の勝利に歸するや、米國は益々デロ氏の反旗を翻すあるや、氏は巧みに款を米國に通じ、米國を以て策源地とし、米國より資金と彈藥との供給を受け、大動亂を作すに至つたのであるが、此形勢を見て取つたディアズ氏は尙未だ餘裕ありしに拘らずして、兜を軍門に抜いて國外に去り、大統領の椅子をマ氏に譲つたのである。併しながら、動亂は茲に至つて全く終熄したのではない。劔に依つて起てる者は劔に依つて亡ぶ。マ氏も亦權花一朝の榮、あはれ現大統領フェルタ氏一味の者の爲めに、脆くも兇刃に斃れて、政府はフェルタ氏の有に歸した。フェルタ氏固より米に快らず、米は依然として其利權を回收するに由がな

つて居るやうに、「哲學は生活の傍に立つて、冷然として之を觀察するものではない。彼れは全然實在の獨立自存に向ふ運動、生活の潑刺たる本源に飲むとを共にする者である。」此のとは哲學のみの要求ではなくて、生活そのものの要求である。

然るに從來世界觀も宗教も、現代の科學も、實在の獨立自存、生活の纏つた全軀を——即ち人類の痛切なる要求を得せしむるものでない。之を以てオイケン は過去や現在を批評し、而して更に新らしきものを建設し、そして此の要求に答へんとするのである。彼れは實に新人生觀の建築者である。是れオイケン哲學が特に現代に迎へられる所以である。勿論彼れの哲學を單に祖述する如きは彼れ及び彼れの哲學の求むる所ではない。此のうちに就いては、稻毛氏もまた、明かに論斷を下して居る。

著者がその勞力と時間とを惜まずして、此の一卷を編んだのは、我が學界、いな一般の爲めに悦ぶべきとである。

事によるとオイケン博士は來春櫻花爛漫たる頃

渡來するかも知れない。博士は秋になつて二三度僕に送つた手紙に、こんなとも書いてあつた。年末までに僕は何とか極つたとの書いてある手紙を受取るであらうと、それを待つて居る。然らば本著の如きはその先驅と稱するにも足るであらうと思はれる。

ついでに云つて置くが、オイケン博士の「新人生觀の基線」は、その第二版が近頃できた。博士は直ぐに郵送してくれて、それが五六日前に届いた。それを讀んで見ると、殆んど新著と見られるまでに筆が加へてある。尙ほその新著 *Nur Sammlung der Geister* も、近々出版されるから、出來次第送ると云ふとであるが、それは未だ届かない。オイケンが年六十七元氣盛にして壯者を凌ぐのは、實に爽快な心地がする。彼れの生活——彼れの生命の哲學——此の兩者は、彼れの元氣と因果的連絡があるらしい。(三並)

米墨擊爭事件

北亞米利加に於ける合衆國と墨國との繫爭問題

■文相の基督教者招待のあつた翌日、築地の精養軒で、日本宗教大會が開かれた。昨年は内務省の計畫がひどく騒がれたので、宗教大會も喧しくいはれたが、今年は僅かに昨年反對した一部の佛教徒が又々聲を上げ、朝日や萬朝紙上でけちをつけたくらゐ、出席者は何となく打解けた心持を有たせられた。

■大會前、本多日生氏等五名の佛教各管長の連名で、大會で決議すべき教育宗教の提携主張が印刷されて廻された。議案となつたら、いづれ一騒動もち上るだらうと思つたが、坐長の坂谷市長が如才なく重要問題として、此の建議案は次回まで延期すると葬つたので何事もなかつた。

■祝辭となつて、神道の柴田禮一、佛教の土宜法龍、基督教の小崎弘道三氏が相次いで演壇に立つたが、三氏共に嘗つてシカゴ宗教大會の出席者であるとは何の因縁だ。柴田氏のは、聲が低くて傾聽されず、土宜師のは長すぎたのと、餘り自宗の教義を説いたので、却つて佛教側から簡單とか通佛教をやれとか彌次られたのは、氣の毒であつ

た。小崎氏は元來低聲であるか、此日のは要所々々に力を入れて、案外の雄辯であつた。殊に理路整然として斯かる會合でいふべき諸點を盡くして居つた。聴衆が傾聽と拍手を惜まなかつたのは寧ろ當然である。

■井上哲次郎博士の演説は、小島氏の説を凡べて是認して、之を繰返したに過ぎない。中に教育と宗教の混合を主張する一部佛教家の謬見を排すると共に、最近の實例を舉げて、政治家の腐敗を攻撃し、宗教家の制裁を叫んだのは、痛快として喝采を受けた。坂谷市長の演説、自分の閱歷より我が國現代の文明を批評して、五十年にして宗教政治の關係の一變を説いたのは面白い。殊に宗教局の移轉、宗教大會の開催を以て、大勢の然らしむるところ宗教家は此の大勢に對して、如何に處すべきかと結んだのは、確に會衆の心に訴へるものがあつた。宗教大會は基督教徒の跋扈を來たすのみなどといふ宣言をした佛教徒談話會の如きは、此の大勢に抗するものであらう。

■食卓演説では、床次總裁のは、簡單に今日の盛

い。然るにこゝに又々マデロ氏の遺髪を繼げるカランザ氏一派の動亂を企つるあるや、米は得たり賢しと、カ氏に通じて之を聲援し、一方フエルタ政府に抗議して、フエルタ氏の正式大統領たることの承認を拒絶するに至つた。然れども墨國民の敵愾心は愈々隆にして、米國の抗議に恐れず、特使を追ひ返すといふ騒ぎになつたので、米國も今や引くに引かれず、進むに進まれず、列強の顔色を伺ひながら、手を焼いて居る形である。

抑も米國此度の舉措たる、これを外交上より見て拙劣を極むるのみならず、人道上より見るも大なる疑問であると思ふ。蓋し米國は常に所謂全米主義を固執し、事あれば則ちモンロー主義を振かざして、米大陸の南北に亘りて其勢力を張らんとしつゝあるのである。殊にバナマ運河の開鑿以來、バナマと本國との間を聯絡せんが爲めに、銳意劃策に努むること久しいものである。これが爲めに、或は經濟上より、或は武力上より、陰に陽に中米の事に干渉して、事毎に勢力を張らんとして居たのである。此度の撃争事件たる、要するに

此根本方針に基づくものにして、たゞ墨國民の腰骨の意外に強硬なるに、聊か周章の氣味たるのみである。これ即ち自國の便益の爲めに、他國の獨立權を無視せるもの、況んやスタンダード會社の運動の爲めに、極端なる干渉を開始せるものなりと傳へらるゝに於ては、吾人は今更ながら、資本主義の魔力の強大なるに驚くと共に、正義人道なるものゝ廉價なるに驚かざるを得ない。ウイルソン大統領は、フエルタ氏を墨國正式大統領として認むる能はざる理由として、『正義の手段に依らざる選舉の方法は之を承認する能はず』と宣言したといふが、誰れか烏の雌雄を知らんやである。

米墨撃争の事件は、直接に吾人と係はるところがない。けれども吾人は切實に感ずる、正義の實行には強大なる實力の伴ふことを要すると。經濟力の壓迫に對する充分なる準備を要する。個人に於て然り、國體の間に於て然り、國際の間に於て殊に然り。(鈴木)

宗教大會の印象

に従事することは、美事たるに相違ないが、何故に更に其根源に溯つて、結核患者を出さざる方法を講じないか。末流を澄まさんとすれば、先づ其源泉を清めざるべからず、結果の發生を阻止せんとするには、先づ原因を杜絶するを要する。根本の問題を解決せずに、たゞ結果のみを救済しやうとするのは、丁度大火を防ぐのに、家屋の構造を改めることなしに、蒸汽ポンプを増すと異なる所はない。吾人は當局の眼光の更に一層徹底的ならんことを、要望せざるを得ないのである。徹底的とは何ぞやと言はゞ、一般國民衛生の問題である。

一例を擧げて言はゞ、我國に於ける工場衛生の狀態は如何であるか。精確なる數字は今茲に擧げることとは出来ないが、我國の女工の毎年結核に斃るゝもの數萬人に達するのである。彼等は工場法の擁護なきが故に、殆んど極端まで其精力を費やさせられるのである。想うても見よ、十一二歳の少女にして、よく毎日十二時間の勞働に堪へ得るであらうか、徹夜業に堪へ得るであらうか。堪へ得

るは暫時の間である、約一年も經過する時には、肉落ち骨枯れ、顔色憔悴して、全く勞働能力を失つて仕舞ふのである。空氣清淨、氣候溫暖の所に於ても、長時間の勞働の繼續には、よく堪へ得るものでない。況んや塵埃雲の如く舞ひ、汽機の音響耳を聳するが如き所に於てをや。況んや賃銀の支給は、僅かに最低の生活を支ふるに足るのみにして、營養不良、體質虛弱なるに於てをや。方今女工の數約五十萬、年々歸郷するもの約八萬、而して彼等の多くは病菌に塗みれ、勞働能力を失ふとすれば、彼等の散布するバチルスのみを以てしても、優に一國を亡ぼすにも足るべし。況んや、其他の場所に於ても、隨所病菌の伏在するものあるをや。然も職工の結核病に斃るゝ者、獨り女工のみではない、幼年工、少年工に之を見るべく、又成年男工にも之を見るべし、彼等が其今日の生命を持續せんが爲めに、明日明後日の生命を犠牲として、工場内に奮闘する所、而して遂に一度倒れて復た起つ能はざるに至る所、吾人は親しく其の幾多の實例を目撃して、眞に涙なきを得ないの

會を祝したのであつたが、昨年の教育會開催當時の困難を思つて、感慨を深からしむるものがあつた。神道の麻生某氏は、先づ誠の心より始めよと、出發點から考へ直す。大石正巳氏が頻りに政府當局者の出席なきことを攻撃し、支那傳道上の便利の如き、大に對支外交の如何に依るとしたのは、多少煽動的口吻であつた。ケルン氏の雄辯は、通譯がなかつたらばと思はしめ、江原翁は知識と並行する信仰を主張した。最後に井上博士が再び立つて、明後年の開催の世界宗教大會を豫告し、懷でなく頭で賛成して呉れと云つたのは、愛嬌であつた。

■佛教の一部高僧連は、一隅に席を占めて精進料理であつたが、他は凡べて西洋料理にサイデーである。或人戯れて曰く、文相招待會の初日は日本料理、次は精進、第三には西洋料理なり。而して最後は三者凡べて西洋料理に歸一せりと。兎に角別に之れといふ宣言や決議もなかつたが、出席者に一種融通の愉快なる感想があり、我が國精神界のため、各自の立脚地に於いて努力すべしといふ

覺悟が、知らず識らず強められたやうに思ふ。我が國人は宗派根性に於いては案外に淡泊である。吾人は無用の反目衝突を避け、有益なる協力に立つて、共同の社會的害惡に向はなければならぬ。さりとて各人は其の主張を曲げるものでない。言ふべき時は、どうし／＼主張もし、攻撃もするのである。(菊川生)

救濟事業の根本問題

新聞紙の傳ふる所に彼れば、内務省に於いては、近き將來に於いて、全國二十萬人以上の都市に對して、結核療養所を設立すべき計劃あり、今期議會に於て豫算を提出すべしといふことである。近年結核患者の増加著しく、其死亡率は全死亡率の四割以上に上る。殊に小學校教員の結核患者甚だ多くして、兒童に對する感染力に關して戰慄すべきものありと傳へらるゝ今日、吾人は固より其時宜に適せる舉なることを、認むるに躊躇しない。

たゞ併し茲に根本問題がある。結核患者の救療

頭地を抜かざるべからず。今や國家教育の機關發達整頓し、世間一般の知識往年に比し、敏捷の進歩を成せるを以て、各派教師は此の際充分に學識を練磨し、世運の進歩に先立たざるべからず。故に各派に於いて、教師の檢定條規を定むるに當りては、能く此の點に留意し、教師の補任を謹みて、從來の弊に陷るべからず。現に教師たる者にして、學識不充分の者あるに於いては、勉めて之が學殖を涵養せしむるの途を講じ、以て國家の進運に貢獻するの計を立つべし。

三教派の教師には、其の性格操行の優良にして凡人を超越し、高德能く人の師表たるに足るものを要す。然るに現教師中、往々如何はしき人物も有るやに聞く。果して事實ならば、教派の不面目は勿論、一般宗教家の品位を傷け、社會を毒傷する頗る大なり。故に各派教師任補には、嚴に選叙を慎しみ、徳性に留意せんとを希望す。現教師を不適當と認むる者は、毫も假借なく、之を淘汰せん事を欲す。

四近時宗教界に於ける紛擾内訌を耳にすること、愈よ多きを加ふるが如し。斯の如きは宗教界の耻辱なるは勿論、害を社會行政に及ぼすと亦多し。各位は能く其の部下を戒め、自家の本分に顧み、奮勵勵勉以て國民の思想を健全に導き、國家永遠の幸福を圖るに貢獻する覺悟あらしめ、紛擾内訌を醸成するなきやう勉められんことを望む。

五慈善救済の事業は、宗教家の常に留意して、之に従事するを怠らざるは寔に喜ぶ所なり。各位は出來得る限り、部内の教師をして、此の事業に従事せしめ、各位も之が普及を期せられんと

を望む。目下當局に於いても、此等の事業を経営施設する各教宗派より、事業の狀況につきて、報告を徴するの途を開かんことを欲し、報告例の調査中に屬せり。

之に對しては、神道各派を代表して、實任教管長柴田禮一氏が答辭を述べた外、別段目立つた話柄もなかつた。

佛教家の場合では、天台宗の不二門坐主が、答辭を述べた後、顯本法華宗管長本多日生師が立つて、質問的演説を試みた。其の要を記せば――

今回の招待會は、昨年内務省にて催したる三教會同と全然關係なきものにして、全く別商の意味なりと文相が言明したりと傳ふものがあるが、果して斯くの如き事を言明されしや否や。次に宗教局が文部省に移管の當時、大臣が地方官に對し、宗教は人道の上に立ち、教育は國家を基礎とす云々とありしとして、基督教傳道者の一部には、大臣の此の訓示は、基督教の立場に裏書を與へたるものにして、基督教は世界的人道の上に立ち國家的ならざるは之を以ても知るべく、是れ我徒年來の主張を容れたるものなるを説きつゝあり、然れども思ふに、宗教は如何に世界の立脚地にありといへ、其の現はるゝに當つては、凡て國家の範圍に入らざるを得ず。斯かる非國家的宗教に口實を與ふるの理なきにあらずや。又宗教と教育とは、密接なる關係あること勿論なるが、其の宗教心の養成は、殊に少年期において重要なりとす。然るに我が小中學の教育にあつては、教員自ら僧侶を呼ぶに坊主の呼稱を以

である。彼等はたゞ生産機械である、彼等はたゞ賃銀奴隸である、眼に見えぬ鎖に引ずられ、眼に見えぬ筭に打たれて、『生活』の峻坂を喘ぎ上る憫れむべきパンの囚人である。

工場法は疾くに議會を通過した。夫れも所謂骨抜き鰯である。其骨抜きの工場すら容易に施行の期を見ない。農商務省はこれが施行の資金を得べく、歳計に計上して居るといふ。併し果して大藏省に於て之を承引すべきか否かは、疑問であるといふ。従つて議會に提出さるべきか否かも勿論大なる疑問である。海軍は擴張さるべしといひ、陸軍は増師さるべしといふ。然かも一國の生産の原動力の虐待さるゝこと斯くの如しとせば、千百の結核療養所も畢竟何かせむ。

一事が萬事である。不良少年の矯正の爲めに感化院を設け、免囚の爲めに其保護所を設け、失業者求職者の爲めに職業紹介所を設け、何れも文明の美事たるに相違ないけれども、更に根本の問題はないか。寧ろ救濟事業其物を無用ならしむるの途はないか。根源清からざれば、末流澄まず、切

に識者の熟慮を望むものである。(鈴木)

文相の宗教家招待

奥田文相が、十一月一日、神道家十三名を官邸に、二日、佛教家五拾餘名を植物園に、四日、基督教者十名を官邸に招待して、夫れ々々懇談する所があつた事は、已に新聞其の他に於いて、明かであるが、尙ほ吾人の所聞を加へて、茲に報道して置く。

文相が神佛二教の代表者に對して試みた演説はいづれも略ぼ同一で要點は左の如きものである。

「宗教は信仰を基とするものなれば、教育とは其の本質を異にすれど、世人を教化し、世道人心を扶持する作用に至りては、表裏相須つて缺く可らざるものなると共に、宗教々々に關する事は、從來文部省の所管なりしを以て、旁々之を一省の下に管理するの自然便宜なるを認めて、今回の改正を行へり。尤も行政上大體の方針は變更せず、然れども漸次必要に應じて、法規の整備をはかり、或は事務の取扱上、多少の變更を要するところあるべし。

二各教派の教師は、布教傳道の任に當り、直接に世人教化の責に任ずるものなり。従つて相當の學識を具へ、世人に比し學力一

象となしつゝあり。而して國民教育の任に當る教師が、生徒を引率して神社參拜の際には、往々此の世間普通思想に従つて、宗教的禮拜を強ふるが如し。斯の如きは吾徒の大に困難を感じる所なるを以て、神社宗教の區別觀を充分教育者間に徹底せしめられたし。或はまた往年 陛下尊影の禮拜は宗教的禮拜に非ずと時の大本文部大臣が告示されたる如き訓示を與へ、以て國民並に基督教徒に、安んじて歸する所を示されんとを望む。

二、小學其の他の教師たるもの、基督教徒たるの故を以て、其の職を免ぜらるゝこと往々にして之れ有り、斯くの如きは固より、中央當局者の意志ならざるべきも、事實上其の例少なからざるを以て、充分の取締あらんとを望む。また基督教信徒の子弟若しくは日曜學校の生徒が、小學校教室に於いて、特に其の信仰を迫害さるゝ如き處置を受くるとあり。斯くの如きも文部當局の意志の十分徹底せざるに因るべきを以て、此の際特に注意せられたし。

三、また勅令に依つて、學校内に於ける宗教的儀式的執行を禁じられたるも、宗教教育を最も有効ならしめんとすれば、吾人の教育機關に於いては、適宜其の儀式に依るを宜しとす。學識あると共に、性格あり信仰あるの教育者を養成すべしとは、大臣の訓示中にもある所にして、斯くの如きは只平生宗教的儀式的の自由なる結果として生ずべきのみ。故に宗教教育を目的とする學校に對しては、儀式的の自由を與へられたし。

四、基督教會の財産を鞏固安全に維持する爲めには、法人の設立を要す。然るに現今、個々の教會が必要上其の手續をなすも事頗る煩雜にして且つ容易に許可を見ざる狀あり。相成るべく法人設立の便を與へられたし。

五、在獄囚人にして、基督教によりて改心せんとするもの少なからず、しかも監獄教誨師としては基督教教師の任にあるもの皆無なり。兩者のため宜しく門戸を開かれんとを望む。

此の他海老名彈正氏は、奥田文相の地方官會議に於ける演説を評し、教育は國家に立ち、宗教は人類を目的とすと云ふ説は、年來吾人の稱道するところなり。されど世界的なるが故に、國家と相反するの理なし。文相が教育會にて試みられたる一大一婦論も亦、吾人の多年主張するところなり。吾人が之を説くや、嘗つて、國賊を以て目せられし事すらあり。然かも我が國道德の頹廢は、實に茲に基くもの多しとす。青年の腐敗を數するに先だち、宜しく顯官教育當局者において、此の點に注意せざるべからず。而も今や文相によりて、此の明白なる道德の主張を見る。賞讃せざるを得ず。更に方今、青年の思想紛亂し、道德的權威を認むること能はざるもの多し。健全なる道德は、現代の要求にして、また我が基督教は健全なる道德の行はれ認めらるゝ社會に非れば、入り難し。國民教育といはず、凡べての教育において、有効なる道德的教育の行はれんとを望む。吾人また微力を以て國民教化の任に當たらん云々。

文相またこれに答ふる所があつた。斯くて主

つてする等、少年宗教心の萌芽を除去するの觀あり。之に對しては適當なる處置を講ぜられんことを望む。云々。

▲文相の答辯 今回の招待會が全く三教合同を撤回したるものなりと言明せしや否やを記憶せず。また三教合同なるものゝ性質に就いては、余の知らざる所に屬す。只此の回の企は、宗教局移管に就いての挨拶を爲さんとするに過ぎず。次に地方官會議における余の演説に關しては、之れ事實なるが故に、一言辯明するの價値あり。宗教は世界的なるも、何れの宗教にしても、我が國に傳道する以上は、我が國體と一致し、國民道德と契合すべきものなりと信ず、若し萬一國體と背反する行動あり、國民道德を混亂する如きとあらば、假借することなく嚴重に取締るとは勿論のとなり。

次に曹洞宗の弘津説三氏は、次の如き希望演説を試みた。

明治維新來、百般の制度整ひしに係らず、獨り宗教に關する制度の不備なるは、國家にも宗教にも不都合の點少なからず。また各宗に於いて、部下教師の選叙、宗教界の紛擾内訌に關し、只今大臣よりの注意もありし事なれど、一宗管長が其の事務を行ふに當りても、制度確立なきため、權威を有せざる也。此故に速に完全なる宗教制度を布かれんことを望む。尙ほ佛教家の救済事業に對しては、中央政府に於ては意志の疏通あれど、地方にては往々行政當局者の冷淡を感ずることあり。中央政府の意向の一貫を望む。云々。

基督教代表者の出席者は、左の諸氏である。

天主公教

呂平

ハリストス正教

石川喜三郎

日本基督

井深梶之助

日本組合

小崎弘道、海老名彈正

日本聖會

元田作之進、吉澤直江

日本メソヂスト

平岩恒保

日本浸禮

千葉勇五郎

基督

石川角五郎

日本基督の植村正久氏も招待者の中にあつたが、氏は丁度臺灣へ旅行中で、出席を辭された。文相が基督教者に對する演説は、神佛二教家に對してしたものゝ中、第三四を除きたる他と略ぼ同様である。之に對し井深氏は、年長者の故を以て他を代表して答辯と希望とを述べた。その後、別席で、海老名、小崎、平岩等の諸氏交々立つて、意見と希望とを吐いた。其の希望を列記すれば、大體左の如きものである。

一、政府にては、宗教と神社とは全く別個のものにして、神社は國家功勞者の紀念尊崇を目的とする建物たるに過ぎずとなす。然るに社會國民の一般は、實際之を以て宗教的禮拜の對

かつた。教會には素より何等の裝飾もない、繪もない、けれども矢張り何處かシンメリとしたところがあつて、古いお宮の殿堂の中にも入つて居る程の静かさがあつた。ストーブはもう燃えて居る。やがて信者が段々と増えて来て、會堂は見る／＼中に一杯になつて、後れてやつて來た廿名内外の人たちは、二階の方へ追ひやられて居た。

時間が來た。併し植村先生の顔は見えない。會報を見ると、今日の説教者は柏井氏になつて居る、併しその柏井氏も見えない。けれども集會の時間は違へなかつた。フロックコートを着た一人の青年牧師、多分この教會の高倉副牧師であらうが、壇上にあがつて、その司會の下にサーヴィスが始められた。

四百六十番の讚美歌を初めに、會員一同で主の祈りをなし、詩篇を朗讀し、讚美歌を歌ひ、聖書を朗讀し、それからまた祈禱、献金、讚美歌と云ふ順序に、かなり長い禮拜式が行はれた。これが二十人や三十人の集りのところでやらうものな

ら、可成り怠屈でいやな氣がしたに違ひないが、私の心持ちは妙に滑らかに、すなほに、皆と一緒
にこの面倒くさいサーヴィスをも面倒とは思はず
に、やつて行かれた。何とも云へないが、一種の
甘い氣持をさそはれた。

やがてこのサーヴィスの間にやつて來られた柏井氏の説教が行はれた。

氏の説教は約翰傳十二章の八章を主題として、氏一流の悠容せまらざる態度で、少しも大きな聲を
するのでなく、手を振るのでもなく、叱咤するのでもなく、四國言葉の丸出しと思はれる關西ア
グセントの感話の様なものであつた。それで居
て、實に何とも云へない一種の津々たる宗教味
を、人の心に吹き込むことの出来るのは、氏獨特
の長所と云はねばならぬ。私は一體植村氏の説教
よりも、柏井氏の説教を好いて居た。植村氏のに
は餘程ドクマ的思辯が禍ひをして、白粉をコッテ
リと塗つた厚化粧の様などころがあるが、柏井氏
の方は淡泊りして居る。その平淡々たるところが
好きである。私は今日茲に來て、柏井氏の説教を

懇談して、三時頃散會した。基督教家の方では、非常に打ちとけた心持のよい會合であつたと、皆云うてゐた。

文相の三教者招待は、同一日に三教者を合同するといふ事でなかつたので、比較的主客打ち解けた懇談が出来たらしい。これを昨年の三教者會同に比すると、昨年は大臣よりの訓示あるゆゑ、出頭せよと言ひながら、其の言辭は反つて簡單丁寧な

るものであつたが、本年は表面高話拜聴の招待と持ちかけて、其の實は官僚的訓示が甚しかつた。しかも神道はまたしも、佛教は昨年駄々張つた東本願寺まで出席して、神妙に之を聽いて居るなど妙な對照だ。基督教では、流石に教師の人格や派内の騒動は持ち出さなかつたが、却つて基督教側から神社問題や德育問題を擔ぎ出し、殊に教育當局者教師の反省まで突込んだ。(R S 生)

富士見町教會を訪ふ記

——教會歴訪記の二——

十一月二日の第一日曜日。私は久しぶりに、日本に於ける基督教會の信望を一身にあつめて居ると云つてもよい植村先生の説教を聴くべく、富士見町教會を訪うた。私の行つたのは十時に少し前で、會堂内には男女が平均に七八十名位づゝ、席に着いて居た。ドアを開けて中へ入らうとする

物を渡した。受けとつて見ると、富士見町教會々報と云ふもので、今日の禮拜式のプログラムや、この週間に行はるべき教會の諸集會やその他一週間に於ける會員の動靜などを記してある。多分この教會の週報であらう。私はまづ、流石に日本一の大教會だけあつて、如何にそのオーガニゼーションの整頓して居るかを感心せずには居られな

ローが哥林前書一章で云つた『ユダヤ人は休徴を求め、ギリシヤ人は智慧を覓む、我等は十字架に釘つけられしキリストを宣ふ』と云ひ『神の愚かは人よりも慧し』などと云へる辛辣なる諷刺を語り、徒らに反動するものや、批評するものを責め、基督の前に單純で、謙遜でなければならぬことを語つた。兎に角かうした感想を語つて行く内に、氏の力説しやうとしたのは、常に在まさない基督、吾々は常に基督の在ますに足る丈けの生活をしなければならぬと云ふことであつたのは、言ふまでもない。

『基督は決して他の弟子にも、マリヤの如くせよと云つたのではない。たゞ他人のやつたことを批評したり嫉妬することを、諷められたのである。或人は他人の善行を見て、直ぐその通りの眞似をする。或る人は反動する、併し競争する氣になるものは少ない、競争は或る程度まで必要である。……貧しきものは常に在り云々は、貧しきものはどうでもよいと云ふのではない。併し貧民に同情して居ると云ふことを以つて、基督に對する眞心を忘れてはならないと云ふことである。たゞこの場合、基督と晚餐を共にするのは、常でないことである。その時の様な心持ちでもつて、常に在る時の事にも、應用せよと云ふこと

である。』

大體かう云つた風の氏の説教を聽いてゐて、私には何だか一種の優しい、美くしい、所謂クリスチヤン・キヤラクターの香りをかぐ様に思つた。今日の如く、自我の肯定せらるゝ時に、かうした美しい生活をさかされるのは、いゝ氣持になるものである。併し見やうによつては、極端なる自我の肯定だつて、矢張りこの臣從の生活に外ならないのである。自我の眞實に對する絶對の臣從であるのである。それで居て、今日の自我肯定者と基督信者との生活が、斯くも懸隔して居るとは、實に不思議である。私はそれを基督に仕へると云ふこの根本的觀念の生んだ結果だと思ふのである。

柏井氏の説教の根柢をなして居るものは、基督と云ふものである。そして氏の基督觀は、開闢の初より在ましたと云ふロゴス觀の上に立つて居る様に見える。この問題は昔から今に至るまで、決して解決されたことはない。柏井氏は云ふ、基督は永遠に在まし給ふけれども亦、常に在まし給ふ

さくのを却つて喜んだ。此の説教の大意は、下の如くであつた。

『天地が失せる時はあつても、キリストの失せるときはない。

彼は單にユダヤに生まれた歴史的人物であつたと云ふばかりでなく、世の初めより、終りに至るまで、道として神と共に在り、その道は即ち神であるとは、吾々の信仰の根柢である。併しながら基督が永遠に在まし給ふと云ふことは、基督が常に吾々と偕に在すと云ふことでない。基督が永遠に在ますとは、ピラミッドがかの埃及の曠野に千古に聳えて居ると云ふのとは趣が違ふ。キリストには常に新しい現在がある。

彼は吾々と共に戰場に望み、萬軍を指揮して敵に勝たしめる。彼れはまた吾々に堪へ難き迫害に逢はさない。吾々は彼によつて、休息の時を備へられて居る。併し今のところ吾々には、戦争の絶える時がない。生活難と戦つて、やつとそれに勝つたかと思へば、やがてまたそこに當に對する戦がある。そしてかうした異つた戦に伴つて、基督の在すところも、常に異ならねばならぬ。即ち基督の在すところは、ピラミッドの如く一所に止まるのではなくて、吾々の境遇に従つて動くのである。異なつて來るのである。

また基督は罪人から離れはしないが、併し罪の眞中には在まさない。罪に召領された、傲慢な輕はづみな、罪を感じない人とは、階に在まさない。國家でも家庭でも、精神的理想に支配されて居る處には、基督が在ますけれども、惡に對する戦闘の

準備のない國家や家庭には、基督は在まさない。

故に基督が常に在ますのではない。吾々は基督が常に在ますことの出來るところを慕ひ求めなければならぬ。神の意志は千古にわたつて、變じ給はないとは云へ、その意志たるや、極めて潑刺たるものである。吾々にしてそれを知らうとするには、明敏なる智慧と生ける靈魂とを要するのである。……』

かう語つて柏井氏は、尚バタニアのマリアのところ^二に於ける逾越節の前日に於ける晚餐のことを語つて、キリストの脚にナルダの香油を澆いだマリアと、それを咎めたユダとを比較した。

『マリアも賢い女であつた。併しユダも亦賢い男であつた。たゞその賢い様が違ふ。マリアは直覺的に、何だか今日の晚餐は普通の時の晚餐とは違つて居ることを知つた。キリストの胸の中の憂ひをも、直覺的に悟ることが出來た。そこで感恩の至情を表はすべき最後の日が來たと云ふつもりで、かの價高きナルダの油をその脚に澆いだ。マリアのは同情から出た智慧である。基督に對する眞心から出た智慧である。併しユダの賢いのは、そんな同情や基督に對する注意からでない、それはい別に賢いのであつた。……』

柏井氏の感想は、この賢と愚との問題に向つて行つた。基督教は一面人を惻巧にする教であると共に、一面人を愚にするものであると云つて、ボ

なければならぬ。併し私達はもうその基督をもつて居ないのである。基督は死んでしまつて存在しないのである。故にその基督に眞心からする同情をさへげることが出来ないのである。けれども吾々には、別のキリストがなければならぬ。路傍に食を乞うて居る乞食が即ち、今日のキリストである。私達の恩人はそのキリストである。私達の戀人はそのキリストである。即ち私達は人間に眞

心をさへげなければならぬのである。また自身に眞心をさへげなければならぬのである。眞に他人とハートの交感を有つたならば、それがキリストと交通することである、吾々のキリストとは、即ち二千年前のキリストでもなければ、永遠に在りて常に在まないと云ふやうな神秘不可思議なものでもない。そこらに石の如く轉がつて居る人である。(加藤一夫)

~~~~~  
愛は深くなればなるほど賢くなる……メ エテルリンク  
~~~~~


のではないと。かうした言ひ方は、一寸きくと非常に神秘的で、深奥である様に見える。けれども少し深く考へると、その中に色々の矛盾や困難を藏して居ることは云ふまでもない。キリストはピラミッドの如く存するのではなく、吾々の境遇によつて居るところを異にし、また在さざることがあると云ふのは面白い、併しその場合キリストと云ふのは、一躰何であらうか。そんな不思議な存在には、如何にキリストだつて成り得るであらうか。その意味は蓋し、吾々の心持の如何によつて、基督を自分の生活意識の中に生かすことも出来れば、殺すことも出来ると云ふことではなからうか。もしさうであるとするならば、吾々と共に戦ふキリストと云ふのは、實は吾々自身の觀念であつて、眞に戦ふものは、矢張り吾自らなのではなからうか。

私達はキリストを自分の生活々動の中に生かすことは出来る。昔、斯うした場合にかうしたキリストは、——その心持ち、もしくは斯の如き行爲をなした人格の實質^{エッセンス}を考へて見て今の場合どうす

るであらうかと考へて見る事が出来る。そしてそこに現代の基督が生まれて来る。けれどもその基督は、人々の個性や境遇によつて、色々に變つたものでなければならぬ。そして私達の心は、その基督には、マリアがさへげたと同じ心持ちでもつて、同じ臣徒を献げるには餘りに荒んで居る。そのキリストは手に釘うたれても血が出ない、首をさられても傷いとは感じない。精神的に交通すると云ふ様なことも出来ない。一體今までの基督者は皆、この出来もしない交通をせよと教へられて來たのである。そして自分も出来たと思つて居たのである。けれどもそれはたゞのイリュージョンに過ぎない。私はどんな巧妙な議論をきかされても、決してそれには服し得ないであらう。その交通を實感した上でなければ……。

故に私は、今後の基督敎は基督に初められた宗教であると云ふ以上、基督を模範とする——それも極めて自由な意味に於いて——以上の位置は基督に與へられないと思ふのである。ペタニアの話は美しい話である、然りそれは、永遠に傳へられ

したものかとも思はれて居るやうであるが、決してさうでない。嚴密に言つて、本書には主人公と云ふものがない。この上下千四百五頁の中には、たゞ生ける人生が展げられて居るのみである。上は貴族の豪奢より、下は農奴の生活に至るまで、政治も、社會問題も、人生問題も、生活問題も、戀愛問題も、何一つとして觸れて居ないものはない。苟くも眞面目に生活のことを考へ、眞實の人生を創造しやうとして居るものなら、飽くことを知らざる耽讀を、本書から強ひられるほど、人生のまことの相が、最もエフエクティヴに表白されて居る。チュチエルパツキイ家の華かな舞踏會、歡樂の花の香氣は、惜氣もなく男女の生命から立ち騰つて行き、玆に若き伯爵と純潔なる公爵の令嬢との生がその高潮に達せんとして、而かも偶然なる他の一人の夫人が、モスコウにやつて來たことの爲めに、運命の全局は一變して、生命さへ危まれるやうな令嬢の病氣となり、そしてまた陰鬱な寂しい公爵家の空氣となつた。そしてその時から始まつたアンナと伯爵の戀仲の發展、令嬢を眞實眞心から戀ひ慕つて居たレウインの百姓生活、社會主義を奉じて長居住居をして居るレウインの兄ニコライ。私達はどんなにそれを見まいとしても、感じまいとしても、淺ましい人生の運命を見ないでは居られない、生の深淵を眺めないでは居られない、幾多の問題を提供されないでは居られない。而かもそれは空虚な概念的なそんな問題でなくて、切實な生そのものゝ多くの問題である。本書は決して問題小説ではない、それよりもつと深い、もつと廣い大きい人生の偉大なるシンボルである。私は今までにも可なり多くのトルストイものを讀んだが、その中

でも此の小説が一番大きいものである様に思はれる。否、凡べての作家を通じて、最も偉大なるものゝ一つであると言はずには居られない様な氣がする。私はまだ全篇を見ないけれども、而も最も深き誠實な心をもつて、これを我が國の讀書界に薦めることが出来る。相馬氏の翻譯もまた流麗である。この大事業に對しては、大なる敬意を同氏に表さなければならぬ。(上下二卷、價各一、五〇)

▲闇に輝く光 (加藤一夫譯・文明堂發行)

涙を覺えるほどまで、血を見るほどまで、人生の事實といふ事實を突き詰めてきつめて、そのはてに生活の徹底境をつきとめたのは、ヤスヤナ、ボリヤナの五人トルストイの生活と其の藝術である。この書は、かれの遺稿の中から發見された有名な最終の戯曲を、「生命の力に奴隸の如くに仕へて、自主の如く世に生き」やうと努めてゐる同人加藤一夫君が翻譯したもので、私は斯くの如く意味ある戯曲が我が國に移植されたのを喜ぶと同時に、加藤君が世に出だした第一書として、至つてその當を得たものである事を喜びとしたいのである。この劇の主人公ニコラス・イワノキッチ・サリンチツエフが、基督の山上の垂訓を堅く信じて、一面には現在の教會に反抗し、また一面には何うしてとも財産の壓迫を斥けやうとするところには、たとひそれが『まだ百年もかゝるだらう』と思はれるほどの營みであるにしても、私は譯者と共に、生活の眞實面と積極面とを力強く感じないわけに行かない。マリイヤアレキサンドラの會話に、をり／＼こなれない言葉が立ち交る

新刊批評

▲創造的進化 (金子馬治・桂井當之助共譯)

藝術界たると、哲學界たると、宗教界たるとを問はず、新しき思想の潮流は、めざましき力と強みとを以て、刻一刻、ヤング・ゼレ・ションの心ふかく流れ込んでゆく。そして久しく、理想の幻滅と、物質の壓迫と、眞理の模索とに苦しみ疲れてゐた人々は、圖らずも佛蘭西の爛熟した文明の渦中から生み出されたベルグソンの哲學によつて、新しき生命の流動と呼吸とを、生活といふ生活の底から掴みだすことができるやうになつたのと同時にまた仄かながらも、新しき文明の導調まで覓ね占ふ事ができるやうになつた。この書は更めて云ふまでもなく、ベルグソンの代表作として名だかい *Evolution créatrice* を邦語に譯出したもので、「意識の直接與件論」以來、ベルグソンによつて切り拓かれてきた朗らかな生命中心の思想は、さらに廣い内容と鋭い角度とをもつて此の一書に開展せられてゐる。ある評家は、新進の作家 ロマン・ロランの勞作「ジャン・クリストフ」が、近く巴里の藝術界に大きな驚嘆をひき起こした一事の背景に、ベルグソン哲學の豊かな光被がある事を力説して、かのフロアベルの心から生み出された現實的傾向が、テエヌの哲學思想から強い刺激を蒙らされたやうに、新時代の藝術は正にベルグソンの思想によつて呼び起さるべきだと云つた。この觀察が果して正當であるかどうか、俄に判

斷を下すことは容易でないが、しきりに創造本位の生活が高調され、不斷の要求によつて動く生命の力が説示されつゝある我が國現時の文壇乃至思想界にとつては、この一書の翻譯は十分の意義と價值とを有つと云ふに躊躇しない。英譯と獨逸譯とが、この譯書のテキストとなつた爲めに、原文のゆたかな詩味と諧調とを窺ふよしこそないが、徹頭徹尾、鋭い理解と流麗な譯筆とで貫かれてゐるために、ありきたりの此の種の翻譯につき纏うてゐた文字の上の缺陷は至つて心よく拭ひ去られてゐる。今年の思想界にとつては、最も大きな、そして最も意義の深い收穫である。(早稻田大學出版部發行・價二、二〇)

▲アンナ・カレニナ (相馬御風譯・早稻田大學出版部發行)

編輯のメ切が來たけれども、まだ通讀することができない。讀みだして見て、中々さうたやすく讀過する事のできないほど、重要な書物であると云ふ事が分かつたからである。この書を讀んで感ずる事は、まづ第一に如何にトルストイと云ふ人物の偉大であつたかと云ふ事である。その感受性の敏活で深刻なこと、その觀察の廣汎なこと、その同情の深厚なこと、それらは此の書に刻み込まれて、これを世界の文學に於いて稀に見る大作とし、また傑作とした。ある人は此の書をもつて、結婚問題を取扱つたのだと云ふ。併し私はさうは思ひたくない。無論、結婚問題に對して眞面目な考が行き渡つて居ることは居るが、而かも本書の全斑は、そんな問題と云ふやうな一小部分に閉ぢ込められるやうな貧弱なものでない。また此の書は或る一部の人から、アンナを主人公に

▲ 督教の宇宙觀及び人生觀 (白石喜之助著・教文館發行)

發行)

著者は近世の科學、哲學の立場よりして、基督教の根本思想——その宇宙觀及び人生觀を説明せんとの試みを本書によつてなしたのである。内容は十一章に分ち「人間の眞想、古今人生の二觀、人生の解釋、煩悶苦惱の原因、宇宙の本體、宇宙と神の關係、人類の起源、宗教の進化、宗教の神髓、倫理と宗教」に就て論じてある。著者が多讀多識なることは、引用極めて該博なるに由て充分に認められる。思ふに近世の科學や哲學が如何に基督教と交渉するやは、充分此の一冊の書に纏めて、明瞭に記述せられてあると思ふ。然しながら僕は、此の書を読んで、多少の疑を呼び起さざるを得なかつた。即ち著者の云ふ所が、果して最近の思潮に觸れて居るか、どうかと云ふことである。著者の云ふやうな考へ方は、恐らくは合理主義の行き方であらう。合理主義が基督教の教義に反對したので、基督教者は多く之に反對したが、而かも彼れ自身の論法も純然たる合理論的であつた。また科學が科學に由て基督教を倒さんとしたので、基督教者は科學に由て基督教を證明しやうとした。さうすると吾人には更に一步を進めよとの警告が、此の歴史的發展に現はれ居るやうに思ふ。一言にして云へば、白石君流の考へ方は物の表面觀ではなからうかと思ふ。もつと生活或は生の内部にはいつて、そこの活動を觀取しなければならんのではあるまいか。否外界を内界化するのではあるまいか。この點が獨めなければ、近代の科學も哲學も吾人とは没交

渉のやうな氣がする。著者が考へて未だ此の最近の思潮に達せざりしとは、この該博なる引用書中にオイケンやベルグソンを漏らして居るのでも分りはすまいか。妄評多罪(三並)

寄贈雜誌

新小説	帝國文學	白樺
假面	創造	生活と藝術
青鞨	新眞婦人	新人
開拓者	新佛教	基督教世界
心理研究	新公論	車前草
東亞之光	創作	世界の日本
詩歌	新日本	東洋哲學
禪宗	正教時報	護教
早稻田講演	丁酉倫理	實業之世界
神學の研究	哲學雜誌	六條學報
佛教史學	和融誌	國民時報
獨立評論	第三帝國	とりて
立志	婦人の友	基督教週報
雄辯	美の廢墟	

やうに思はれないでもないが、全體として成功した翻譯と云つて差支ないと思ふ。(價・八五)

▲劇論と劇評 (中村吉藏著・岡村書店發行)

歐洲劇の紹介者として、また劇評家として舞臺監督者として名ある中村春雨氏が、この兩三年間、方々の新聞雜誌で々にした劇論と劇評とを輯めた一巻である。往々道具立の複雑に煩はされて批評の透徹を缺いた憾みがないでもないが、「マーテルリンクとハウプトマン」のごときは、至つて手の入つた面かも見識ある評論として、十分推稱する價值がある。わが國現在の劇壇は、この書に依つて教へられるところが少なくないであらう。(價・七五)

▲オイケンの哲學 (稻毛詛風著・大同館發行)

この書については、時評欄で三並氏が批評をかいいて居られるので、こゝには評を省いておく。(價・一〇〇)

▲スエデンボルグ (鈴木大拙著・丙午出版社發行)

本書は彼の有名なる神秘家スエデンボルグの傳記や、思想や、信仰等を叙述せるものにして、簡單よくその要を摘み、靈界の神秘を彷彿せしむ。(價・五〇)

▲ひとみの旅 (杉村楚人冠著・丙午出版社發行)

かつて朝日新聞に掲載されたる内地旅行記なり。現代文明の一面面觀としては、まことに面白し、著者一流の機警なる觀察と皮

肉とは、絃にもあらはれたり。ひとみの旅とは、花見の旅とか、月見の旅とか云ふ呑氣な旅でなく、文明的なせはしない旅だと云ふことを、ほめかしたもののらしい。(價・六〇)

▲クロムエル傳中卷 (昨上賢造譯・警醒社發行)

カーライルのクロムエル傳の翻譯である。原書の價值は、今更こと／＼しく云はずもがな。本編には愛爾蘭土出征の當時より、一六五一年より三年にわたれる小議會までのことを記して居る。敬虔にして強者なるクロムエルの眞髓は、カーライルの健筆によつて描かれ、強く／＼吾人の心肝に徹せしめずんば止まないものがある。(價・六〇)

▲幼稚園日曜學校教科書教師用 (ス・マツキム著・教文館發行)

本書は六歳以下の子供に教ふべき日曜學校の教科書として、編輯したものであると、序文に書いてある。「神によつて造られた人の心は、同じ神によつてつくられた法律によつて支配される。子供の心は、その法律に従つて發達して、その發達の階段に適する數のみをうけ入れる」と書いてある。それは至極尤もだが、不幸にして吾人は、本書が未だその適當なる數へてないことを感ぜずには居られない。舊約や新約の物語を、無理にそんな小さい子供の頭につめこむ必要が何處にあるのであらうか。一體六つ以下の子供に、神だとか獻身だとか云ふことを教へる必要があるだらうか。これは大に研究しなければならぬと思ふ。(價・七〇)

犬養毅氏題字三宅雪嶺大島正德兩氏序

國內外教育
評論主筆
木熊次郎遺稿

四六判全一冊三百五十餘頁 定價金六拾錢 送料金八錢

增補新版

文部檢定
中等教員
受驗指針

金壹圓送料八錢

發行所 東京 芝罘 區 駒込 千駄木 町 四七〇 內 外 教 育 評 論 社

惟一館だより

■十一月九日の日曜日、統一教會は、多摩川べりに秋の遠足會をやつた。空が一面に曇つて降りだしさうな天氣であつた爲めに、來會者は四十幾人ぐらゐに過ぎなかつたが、それでも始めから終りまで、愉快々々でつきとほした。平常は至つて鹿爪らしい事ばかり云つてゐる運中が、多摩川の遊園地では、人一倍あばれ廻つた事實もあつた。『夜の宿』のサチンや、『マクベス』の女主人公などの眞似を連發して、皆を驚かした人もあつた。かへりに澁谷に着くまでの電車は、新しくできた讚美歌のうたひ通してあつた。

■木曜日の夜の靈交會は、いつも四十名位の出席者があつて、非常に賑やかである。

■クリスマスが近づいたので、教會の幹部は其の準備に忙殺されてゐる。この月廿五日の夜六時半から祝會をひらく筈で、對話や音楽や手品などの外に、新しい劇の試演までやると稱してゐる。クリスマスは由來、惟一館の評判のものである。きつと美しい清い、そして長閑な夜がくるだらう。

■通俗講演會の例會は、十五日の夜に開かれて、三百餘名の聴衆を迎へた。六合雜誌の講演會も近く開かれるであらう。

■十一月の主なる説教には、内ヶ崎牧師の「秋の讚美」「改革の第一歩」をはじめ、三並良氏の「思索より勞作へ」原田長治氏の「最高の努力」等があつた。このごろ朝の禮拜説教には、いつもより以上の聴衆がある。

編輯室より

今年度の本誌も、この號で無事に編輯を終りました。編輯室の机にもたれて、過ぎ去つた一年を思ひ返して見ますと、いろ／＼の記憶が、まるで繪巻物のやうに繰り展げられるのを感じます。

メエテルリンクの研究、基督教青年會當局者との論戰、婦人間、題の討究、宗教對藝術の問題、生活態度の告白、これらは過去一年間の本誌が、その折々に集めることのできた收穫でありました。編輯者はそれらの收穫を今、目前にうちひろげて、そこに人しらぬ歡びを覺えないわけに行きません。そしてまたそれと同時に、その收穫の背景としての勞作に、思ひのほか至らぬところの多かつた事を感じずにゐるわけに行きません。

しかし、勞作の結果かどうかであるにしても、一年の歩みは終に一つの標本に行きついたのです。更に新なる一年、編輯者は此のさらに新なる一年の歩みを思ふとき、さらに人しらぬ胸のといろきを感じるのであります。

編輯同人等はこゝで、過去一年の間、たえず同情と助力とを寄せられた方々に對して、つゝしんでお禮を申しあげたいのであります。そして來るべき一年の道程のために、新たに旅裝を整へたいと思ふのであります。

正月號は、別項の豫告どほりの中味で編輯する手筈であります。どんなものが出來あがるか、まだ見當がつかかねるのであります。本誌の特色は飽くまで其のなかに刻み込んで見る覺悟であります。(十一月廿三日記)

大正二年
六合雜誌
總目錄

(自第三百八拾五號至第三百九拾四號)

帝國文學

定郵 價 金 稅 一 十 錢 錢 二 月 號 半 郵 年 九 稅 十 錢 共

自我の凝視と跳躍(評論)	山田 檳 榔
蚊 魂(小説)	上野 竈 太郎
死亡廣告(小説ハムスウシ)	西 澤 富 則
舞臺藝術としての『夜の宿』(三十二枚の長論文)	灰 野 庄 平
父(小論ビ、ヨルンソン)	馬 場 六 津 夫
創造生活の第一歩(評論)	加 藤 一 夫
守備兵の話(小説ロチ)	後 藤 未 雄
秋の消息(歌)	酒 井 賢
もゝいろ眞珠(歌)	永 田 龍 雄
シヨウの新御伽劇(紹介)	石 本 笙
十一月の文壇	綾 川 武 治
井上會の野外劇を觀て	山 宮 允
和辻哲郎氏の『ニイチュ研究』	石 坂 養 平

銀 座 大 日 本 圖 書 株 式 會 社 振 替 口 座 東 京 九

主我的生活と社會的不平と	安部 磯雄	四	五三六
現代英文學の宗教的情調	内ヶ崎作三郎	五	五六八
直覺と理性(上)	村善兵衛	五	五八三
智慧	竹友 藻風	五	五九〇
權利擁護論	安部 磯雄	五	六一八
社會奉仕	ビーボデイ	五	六四四
生命中心の宗教	加藤 一夫	五	六四八
エレン・カイとギルマン夫人の論戰	欄よし子	五	六五一
ファウストと人生問題	三並 良	五	六五六
新救世主論	三並 良	六	六八六
直覺と理性(下)	野村 善兵衛	六	六九五
自我不滅の論理	桑田 常藏	六	七〇一
新實在論	三島 衛	六	七〇九
ジエームスの人間不滅論(下)	白石 喜之助	六	七一二
文明史眼に映ずる加州排日問題	内ヶ崎作三郎	六	七一八
ヤアトオ博士と獨逸の宗教界	三並 良	六	七二九
愛國的精神の宗教化	和原 一郎介	六	七四六
エレン・カイとギルマン夫人	欄よし子	六	七五六
宗教の擴張	ビーボデイ	六	七六〇
近世資本主義の趨勢	鈴木 文治	六	七六八
新生活の第一歩	内 藤 濯	七	八〇二
超人道德論	野村 善兵衛	七	八一九
自我と信仰と神	稻毛 詛風	七	八三五

都會詩人ブロックを論ず	昇 曙夢	七	八二七
生命の源、文化の泉	内ヶ崎作三郎	七	八三七
フランス現代婦人の人生觀	壺 川 潔	七	八四六
佛耶兩教の婦人觀	三並 良	七	八五〇
婦人問題の根本的解決	安部 磯雄	七	八六四
經濟上より見たる婦人問題	鈴木 文治	七	八七一
人生の律動	内ヶ崎作三郎	八	九三〇
第一步の後	内 藤 濯	八	九三七
耶穌と保羅との女性觀	内ヶ崎作三郎	八	九四五
女子の立場より見たる婦人問題	川中 久子	八	九五三
トラウブ論	三並 良	八	九六九
宗教對藝術の問題	片 上 伸	九	一〇六四
當面の問題	石坂 養平	九	一〇六六
宗教と藝術との合致	大住 嘯風	九	一〇七二
人生醇化の努力	茅原 華山	九	一〇七五
藝術の獨立	乙 骨 三 郎	九	一〇七八
獨立と提携と	安部 清藏	九	一〇八二
氣分の内と外	岡田 哲藏	九	一〇八七
融合の中間	一家言	九	一一〇九
武者小路實篤	三井甲之	廣瀬哲士	川出 麻須美
田中達	相馬御風	柳宗悅	栗原基
折竹錫	戸川秋骨	松本雲舟	小林愛雄
			高木 壬太

繪

メエテルリンクの肖像と筆蹟	(解説 内 藤)	一
アンリ・ベルグソン	(解説 内 藤)	二
ラファエルの『詩神』	(解説 内 藤)	三
バイボデイ博士	(解説 内 藤)	四
リヒャルド・ワグネル	(解説 内 藤)	五
ヤアトオの肖像	(解説 三 並)	六
着港前	有田 四郎筆	七
落日の後	有田 四郎筆	八
ガリレアの朝	有田 四郎筆	九
秋	ア・ステヴァンス筆	一〇
曠野のたそがれ	フロベエゼ筆	一一
しづかな夜	ヘンゲレル筆	一二

評 論

メエテルリンクの宗教観	岡 田 哲 藏	月 號	頁
内在の美(メエテルリンク)	折 竹 蓼 峰	一	二八
埋れたる宮より(メエテルリンク)	加 藤 一 夫	一	四二
メエテルリンクの『靈魂の覺醒』	金子 白 夢	一	五六
メエテルリンクの運命觀	野 村 善 兵 衛	一	一一一
信仰萬能論	今 岡 信 一 良	一	一二九
近代獨逸文學と世界觀	三 並 良	一	一三七

明治より大正へ	相 原 一 郎 介	一	一四八
主觀と客觀と	安 部 磯 雄	一	一五七
救済事業と國家	小 河 滋 二 郎	一	一六三
わが信仰生活の新紀元	星 島 二 郎	一	一七〇
バルカン戦争の文明史的意義	内 ヶ 崎 作 三 郎	二	二一六
米國に於ける宗教觀察	新 渡 戸 稻 造	二	二二〇
新渡戸博士の米國宗教觀を評す	ギューリック	二	二三九
オイケン對基督教	三 並 良	二	二五八
政治の刷新か心靈の改革か	内 ヶ 崎 作 三 郎	三	三三六
新日本文明の導調	浮 田 和 民	三	三四六
神秘のこゝろ	金 子 白 夢	三	三五五
笈博士の古神道を評す	加 藤 玄 智	三	三五七
ペルグソン對シヨベンハワー(上)	ヤコビイ	三	三六四
政治と宗教と社會と	安 部 磯 雄	三	三九一
自由人の崇拜	岡 田 哲 藏	三	四一〇
ジエームスの人間不滅論(上)	白 石 喜 之 助	三	四二二
ダモンチオの歌劇と新神秘主義	内 ヶ 崎 作 三 郎	四	四五四
ベルグソン對シヨベンハワー(下)	ヤコビイ	四	四六二
最近の哲學と個性問題	野 村 隼 畔	四	四九八
ジエームスの人間不滅論(中)	白 石 喜 之 助	四	五〇六
新教主義の任務	オイケン	四	五一七
人格の宗教	姉 崎 正 治	四	五二七
生の爲めの藝術	ゆ ふ し ぼ	四	五三二

クレ・マツカワ・レ・氏生年誕生紀念	記	者	五	六四三
南國より武蔵野まで(ト)	坂本正雄	六	七二六	
眞實の境	加藤一夫	六	七五二	
大利根の岸より	内ヶ崎生	六	七五五	
海外思潮	ゆふしほ	六	七七五	
初夏關西行の記	うちがさき	六	七九四	
大思想家の婦人觀(上)	うちがさき	七	八五九	
獨逸學界の近韻	三並良	七	八八〇	
佛蘭西に於ける新しき人々の問題	S A N	七	八八二	
横濱の埠頭にて	内ヶ崎作三郎	七	九一二	
大思想家の婦人觀(下)	うちがさき	八	九六一	
僧院生活の記録	相原介一	八	九八三	
獨逸最近の宗教界	みなみ	八	九九一	
佛蘭西だより	S A N	八	九九三	
誌友から		八	一〇三四	
サンダアランド博士を迎ふ	記	者	九	一一九
小泉八雲臨終の記	小泉節子	一〇	一二二	
座の中から(一)	内藤濯	一〇	一二九	
九月十日の記	同	人	一〇	一二九
藝術座の第一聲	絃二	郎	一〇	一三六
市より森へ	金子白夢	一一	一三七六	
座の中から(二)	内藤濯	一一	一四二二	
『予の世界』を読む	かず	を	一一	一四四

文藝

教會歴訪記(一)	風走	生	一一	一四六
座の中から(三)	内藤濯	一二	一五〇	
『夜の宿』の印象	かず	を	一二	一五三九
問題劇梗概	中野柏葉	一二	一五四五	
十一月の評論界	K N	人	一二	一五四七
誌友から	誌友	友	一二	一五六五
富士見町教會を訪ふ記	加藤一夫	一二	一五八二	
マレエヌ姫第一幕(メエテルリンク)	内藤濯	一三	一六〇	
マリイ・マドレエヌ(メエテルリンク)	吉田絃二郎	一三	一六三	
いのちの聲(歌)	野口精子	一三	一六七	
冬のうた(アダ・ネグリ)	竹友藻風	一三	一四七	
すみたる空(歌)	伊藤寥々	一三	一六二	
かたみ(アルベエル・サマン)	竹友藻風	一二	二二九	
マレエヌ姫第二幕	内藤濯	一二	二四一	
マリイ・マドレエヌ	吉田絃二郎	一三	二七〇	
雪割草(詩)	青山霞村	一三	三一	
雪の幻想(創作)	加藤一夫	一二	三二〇	
黄金杯(歌)	野口せい	一三	三四五	
おもかげ(歌)	伊藤寥々	一三	三六三	
マレエヌ姫第三幕	内藤濯	一三	三七四	
旅人と百姓(レオ・トルストイ)	磯部外紫子	一三	三九七	

郎 厨川白村——中村長之助

眞と美と生命……………	内ヶ崎作三郎……………	九・一〇一
精神生活より宗教と藝術へ……………	三並良……………	九・一一五
生活と宗教と藝術……………	内藤濯……………	九・一二五
驚異の殿堂……………	吉田絃二郎……………	九・一三三
宗教問題と新藝術家の群……………	S A N……………	九・一四四
光は巴里より(上)……………	内ヶ崎作三郎……………	一〇・一九八
流轉思想と東洋哲學……………	野村隈畔……………	一〇・一二六
エレンカイの思想……………	原口竹次郎……………	一〇・一三六
宗教生活と藝術……………	相原一郎介……………	一〇・一二九
宗教的表現と演劇……………	伊庭孝……………	一〇・一五五
生命中心の宗教と藝術……………	加藤一夫……………	一〇・一五八
二種の生命……………	三並良……………	一〇・一六二
運命の飛鳥……………	吉田絃二郎……………	一〇・一七三
悲哀の宗教的使命……………	岡田哲藏……………	一〇・一八一
信仰の流動と固定……………	三並良……………	一一・一三六
沈黙の宗教……………	昇曙夢……………	一一・一四五
光は巴里より(下)……………	内ヶ崎作三郎……………	一一・一五〇
選衆權擴張論……………	吉野作造……………	一一・一五七
創造の悲哀……………	加藤一夫……………	一一・一八一
文學と輿論……………	故小泉八雲……………	一一・一三九
新生命覺醒の機……………	野村善兵衛……………	一一・一四〇
近代的悲哀……………	グリアアスン……………	一一・一四一

先進者の退化……………

精神的文明と基督教……………	内ヶ崎作三郎……………	一二・一四七
生命と形式と……………	鹿子木員信……………	一二・一四八
統一の要求と信仰……………	安部磯雄……………	一二・一四九
生活の悲調……………	鈴木龍司……………	一二・一五〇
オイケンの踏みたる道……………	加藤一夫……………	一二・一五一
	三並良……………	一二・一五二

雜

メエテルリンクの印象(一)……………	S A N……………	月 頁
メエテルリンクの印象(二)……………	絃二郎……………	一二・一五
メエテルリンクの作物と研究資料……………		一二・一五
『信仰生活の新紀元』の後に……………	安部清藏……………	一二・一七八
貧民窟の年の暮……………	鈴木文治……………	一二・一八〇
新春の雑誌と宗教……………	S O B……………	一二・二〇七
ベルグソン教授より……………	記……………	一二・二一〇
二月の思想界……………	記……………	一二・二一七
海外思潮……………	記……………	一二・二五五
日記より……………	加藤一夫……………	一二・二五五
メモランダム……………	R T O……………	一二・二六二
海外思潮……………	記……………	一二・二六六
人事相談所に来る人々……………	鈴木文治……………	一二・二六六
米國人のベルグソン評……………	ゆふしほ……………	一二・二七〇
南國より武藏野まで(上)……………	坂本正雄……………	一二・二七三

●新舊超越の態度（内藤）●大正元年の最大文字（野村）●今泉眞幸氏の静座觀について（今岡）●靈界の整理（相原）●立憲政治の退化（鈴木）●新生活の意義（吉田）●何故に新を求むるか（三並）●新を求めざる心（加藤）●慈善事業と人種改善論（鈴木）●基督者の國民的努力（坂本）●噉ふべき所謂獨創（坂本）●博覽會の價值（三並）●ハミルトン・メイビイ氏（原口）……一九〇

●求めてやまざる心（内藤）●現世と來世（野村）●分析的精神（坂本）●權威なき時代の影（絃二郎）●教育と宗教の衝突（鈴木）……二三

●基督教會の一研究問題（今岡）●大正維新の聲と教界（相原）●新しき人と新しき政治と（鈴木）●宗教の生活化（加藤）●新しきもの（柏葉）●宗教的空氣（内藤）●ビーボテイ博士を迎ふ（内ヶ崎）●憲政の曙光（花瘦）……三……四三九

●中心生命の意義（内藤）●主義か死か（野村）●道會の立脚地について介石氏に問ふ（今岡）……四……五五七

●統一基督教會と青年會同盟との交渉顛末（相原）●學生青年會同盟無用論（今岡）●符號本位の信仰（内藤）●福音主義者の矛盾（内ヶ崎）●青年會の職分（鈴木）●排日問題の根本解決（ふみはる）……五……六六八

●全體を捉へんとする努力（内藤）●本願寺改革運動（菊川）●排日案の通過（鈴木）●福音主義問題と吾人（ふみはる）●青年會と統一教會とに望む（星島）●歐米自由基督教徒の活動（内ヶ

崎）……六……七八一

●疑問の基督教青年會同盟（三並）●小松同盟主事に告ぐ（相原）●抽象的信仰か偶像禮拜か（内藤）●宗教界に求むるところ（SAN）●文部省と宗教政策（菊川）●ビーボデー博士を送る（内ヶ崎）……七……九一五

●宗教的生活と宗教生活（内藤）●基督教と資本主義（鈴木）●徹底したる宗教政策（菊川）●基督教同志會講演會評（XYZ）……八……一〇四六

●改革！改革！改革！（内藤）●自我の權威（三並）●歴史と集團と自我（加藤）●現代婦人の悩み（中野）●予の交渉顛末書に就いて（相原）●XYZ君に答ふ（岡田）●再び岡田哲藏氏に答ふ（吉田）……九……一八〇

●東北に於ける治水策（内ヶ崎）●兩陛下の鑛山行幸啓（鈴木）●對文外交の教訓（鈴木）●兇惡なる犯罪の流行（鈴木）●野次馬的國民性（内ヶ崎）●確信と寛容（三並）……一〇……一三二三

●學制の改革（三並）●文壇に於ける生命の問題（加藤）●顯官の犯罪（鈴木）●宗教と教育との協和（菊川）●中華民國の承認（鈴木）●公衆劇場の印象（内藤）●早稻田大學創立卅年祭（一記者）……一一……一四五一

●『オイケンの哲學』をよむ（三並）●米墨戰爭事件（鈴木）●宗教大會の印象（菊川）●救済事業の根本問題（鈴木）●文相の宗教家招待（KS）……一二……一五七〇

■惟一館記事……每號■新刊批評……每號

夜のうた(詩).....	加藤 一夫.....	三	四〇八
洛外集(歌).....	青山霞村.....	三	四二〇
犬吠岬より(創作).....	吉田 絃二郎.....	三	四二八
いのちの朝に(歌).....	伊藤 寥々.....	四	四六一
マレエヌ姫第四幕.....	内 藤 濯.....	四	四七四
夜のこゝろ(歌).....	野口 せい.....	四	五〇七
アダジオ(詩).....	壺 川 潔.....	四	五一六
わかれ(創作).....	吉田 絃二郎.....	四	五四五
櫻咲くころ(歌).....	伊藤 寥々.....	五	五八二
マレエヌ姫第五幕.....	内 藤 濯.....	五	五九四
大破壊前の十五分(戯曲).....	吉田 絃二郎.....	五	六六三
行樂(歌).....	伊藤 寥々.....	六	七〇三
呪ひ(歌).....	石田 謙次.....	六	七一一
沈黙の勝利(劇エッセイ・シル・シュレ).....	内 藤 濯.....	六	七三七
睡蓮夢(小品).....	吉田 絃二郎.....	六	七三七
反抗(戯曲)・リ・エ・ド・リイル・アダシ.....	内 藤 濯.....	七	八八六
銀影歌(歌).....	野口 せい.....	七	八九三
西灘より(詩).....	佐 藤 清.....	七	八九四
べらごにあ(創作).....	加藤 一夫.....	七	八九六
白薔薇(歌).....	伊藤 寥々.....	七	九一一
標子念(小品).....	吉田 絃二郎.....	七	九一三
雲潮(詩).....	佐 藤 清.....	八	九四二
靈魂の花(詩).....	藤井 夏人.....	八	九六七

反抗(戯曲).....	内 藤 濯.....	八	九九五
青蚊帳(歌).....	青山霞村.....	八	一〇一五
使命.....	野村 善兵衛.....	八	一〇一六
黎明(戯曲)・エル・アレン.....	吉田 絃二郎.....	八	一〇二七
反抗.....	内 藤 濯.....	九	一五四
本能と靈(詩).....	佐 藤 清.....	九	一六二
金屋の夢(歌).....	野口 せい.....	九	一六五
夏空の思ひ出(詩).....	藤井 夏人.....	九	一六六
黎明.....	吉田 絃二郎.....	九	一六七
『新しき日』の序.....	内 藤 濯.....	一〇	一九七
秘密の花(詩).....	佐 藤 清.....	一〇	一九九
革ちやんと私(小説).....	石田 樞村.....	一〇	二〇四
水絵の秋(詩).....	藤井 夏人.....	一〇	二一二
黎明.....	吉田 絃二郎.....	一〇	二一七
きえざる火(詩).....	佐 藤 清.....	一一	二四六
HATSUGOI(詩).....	石田 樞村.....	一一	二四三
黎明.....	吉田 絃二郎.....	一一	二四三
落葉の底(詩).....	藤井 夏人.....	一一	二四七
沈黙(對話).....	佐 藤 清.....	一二	二五〇
埃及のとまり(サマン).....	竹友 藻風.....	一二	二五三
日没と旅人.....	加藤 一夫.....	一二	二五四

時 評

東亞之光

每月一回發行 第拾貳月號 一冊貳拾錢 貳圓拾錢 郵錢一錢 五錢 厘共

◎我國に於ける宗教と教育

文學博士 井上哲次郎

◎臺灣視察談

文學博士 井上哲次郎

◎梅若傳説の流れ

文學士 志田義秀

◎現代文明の精神と國民教育

文學士 三澤 紉

◎明治時代に於ける論理學史瞥見

文學士 淀野耀淳

◎逝けるラボックの自然美論

文學士 津金 馨

◎花藥欄

文學博士 近重眞澄

◎聖盃の性格描寫

文學士 齋藤 勇

◎私印廢止論

文學博士 黑板勝美

◎ラウフェル氏支那石器論を讀む

鳥居龍藏

◎日本宗教大會講演

一、文學博士 井上哲次郎 二、法學博士 男爵 阪谷芳郎 三、床次竹二
郎 四、大石正巳 五、江原素六

○春の小草 醫學博士 三浦守治 ○詩の斷片と落想と 生田春月 ○「赤

蜻蛉」英詩 文學士 松浦一 ○北陸西陸回遊詩 鐵石大澤眞吉

◎海外思潮

酒精欲求の原因其下六、歡樂欲求説 七、麻醉説

八、人間の進歩と休養 九、人爲的休養と酒精 十、問題の解決

東亞協會發行

東京 小石川 八

振替 一〇 口七 座七 東七 京番

●神學部の開講

神學部は前期に引き續き、既に十月初めより左の通り開講せり。その他の科目の設置は未定なり。又オイケンのものは其最新著にして、現に丸善書店に若干部あり、有志者は買ひ入れ置かるべし。

●●時日……每週月、金曜の午後四時——六時迄。

科目……比較宗教史より見たる福音書。

オイケン著 Erkennen und Leben の講讀

擔當者 三 並 良氏

統一基督教弘道會

教育部

每月二回、一、

十五日發行

者 驅 先 の 決 解 題 問 働 勞
聞 新 關 機 の 會 愛 友

友愛新報

二十二月一號發行第七十號

錢	三	金	部	一	價	定
厘	五	金	部	一	稅	郵
錢	十	三	金	前	共	稅
						郵
						部
						十

發行所

東京市芝區新堀町三十一番地

友愛新報社

本邦唯一の神學專門雜誌

神學之研究

第一定價四十錢 十二月號要目 一年一圓三十五錢

時代の要求と不易の福音

教授 稻垣陽一郎

論說 紹介

耶蘇は神か人か
ハレ大學教授 ローフス
惡とは何なりや
オベリン大學長 キー
基督教の改造點
牛津大學教授 デネー

自然宗教と文化宗教の
心理的基礎の比較研究

京都大學講師 米田庄太郎

モーセはヤウエ宗教の
開祖なりや

聖公會神學院
教授 落合吉之助

新著 梗概

ヘーレン教授著 聖書とバビロンの神觀念
牛津大學教授 逸經及偽經全集
グンケル教授著 比較宗教研究と新約聖書

基督教倫理の神國てふ思想

マスター
オブ
アーツ
若月麻須美

〔後附四〕

東京京橋尾張町 警醒社書店發賣 振替東京五五三

杜翁の著名は何か

最新版

闇に輝く光

レオ・トルストイ遺著 (安倍能成序) ■口繪杜翁及夫人
加藤 一夫 譯

▲愈々發賣!!!▼

數多き杜翁の遺著のうちにも特に吾人の興味を惹くものは『闇に輝く光』である。蓋し杜翁の藝術の偉大は、その生活の偉大である。而して本書は實に翁自身の偉大なる人格を以て主人公とせる深刻なる煩悶と、眞摯なる努力と、眞實なる生活に對する不可抗の憧憬と、而して其所に惹起せらるゝ悲慘なる葛藤との、最も大膽にして、最も率直なる戯曲的告白である。今や眞摯なる吾國の思想界は漸く覺めて、自己の眞實に生きんと欲するもの、自己の世界の創造に生きんとするもの、漸くその多きを加ふる時、蓋し本書の如きはそれ等の人々の眞生活に寄與することの最も多きは信じて疑はざるところである。

■四六判約三百卅頁
□クロース製函入美本
■紙質舶來上等
□定價金八十五錢
■送料金八錢

●トルストイ翁著
加藤直士譯

我宗教

第十二版

定價七十五錢
送料八錢

振七 替九 東九 京番

文 明 堂

東河 京臺 市南 神甲 田賀 區九

發行所

注意

一、本誌は前年迄は本會及び本誌に特別關係ある人には進呈致居候處今同内部の整理と共に每號無代進呈は何人にも致し不申事と相成候間御愛讀の方は此の際本年度よりの誌代御送附下され度候

二、本誌は一切前金にあらざれば發送致さず候

三、御送金はなるべく安全なる振替貯金に依られ度候

四、若し郵便爲替にて御送金の場合は芝區三田四國町

二番地六合雜誌社と指定し拂渡局を三田芝園橋郵便

局と指定せられ度候

五、本誌代金に對しては領收證を差出さず代金領收次第御注文通り發送可致候又前金切れの節は帶封に

(前金切)と押捺致候間早速御送金可被下候

六、本誌の廣告に關しては御照會次第詳細に御通知申

上ぐべく候

七、本誌への御寄稿は凡べて、本郷區眞砂町十五番地

内藤濯宛に願上候

八、定價は内容の改善發達と共に七月號より下表の如

く改定致候間御承知下され度候

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵稅共
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵稅共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵稅共
●海外は郵稅一冊に付金六錢(清國を除く) ●臨時號出版の際は規定以外に代金申受く			

本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通	一頁	金拾貳圓	
普通	半頁	金六圓	
●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候 ●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候			

大正三年十一月三十日印刷納本
大正三年十二月一日發行 (毎月一回一日發行)

定價 貳拾錢
稅共

發行兼編輯人 鈴木文治
印刷人 山本與一郎
印刷所 英合
株式會社 秀

發行所

東京市芝區
三田四國町

統一基督教弘道會
〒振替東京〇〇〇三番

賣捌所

東京堂◎同文館◎北隆館◎東海堂◎上田屋
◎警醒社◎教文館其他全國有名書店

早稻田大學
教授文學士

内ヶ崎作三郎先生新著

▲長原止水君裝幀

ロイド政治

四六版五百五拾餘頁
總クローヌ函入
肖像其他寫真數葉
定價 金壹圓參拾錢
内地小包料金拾貳錢
普通郵送費拾八錢

世の政界の中心人物

新時代は新人物を要求す、今やあらゆる社會に於て新人物を要求するに急なりと雖も政治社會は既に斯の如き偉人を現代大藏尚書ロイドデヴォールに於て發見し、彼の發見は、このラヂウムの夫れに優ること數十等、彼は「内政改革」の主張者にして實行者たり、彼は正に政界刷新の一大曉鐘、その聲音は般々として四海を壓す、彼の獅子吼は世界萬人の耳に徹す、三寸の舌刀も渾身の勇氣は彼の生命也、彼は英國政界の大流行兒にして彼の在るところ政雲卷舒す、彼は素とウエルス山間の一寒村に孤々の聲をあげたる一貧童、年齒の將に五十、其半生苦楚の歴史の歴史は寔に數奇を極む、主書「寒村より大臣街へ」の主人公を傳ふ、一乃ち好箇の立志傳たるべく、他面乃ち英國最近政界の波瀾史たるべし、時は進んで政治の季節に入、特に政治に志す者、政治に與ふる者斯書を得て、即ち一大光明に接するの感あらむ。

屈山 小室重弘先生著 訂正九版

實験雄辯學

菊 刊 洋 裝
定價 拾五錢
郵 稅 六 錢

文明社會の戰は言論を武器として、輸贏を決せざるべからず、辯舌は竟に社會戰爭の上に於て劣敗者たるを免かれず、本書は著者なれば唯に雄辯術のみならず、談論の秘訣雄辯の妙用を講述せられたる故に學生諸君は勿論、苟も大正の國民たる者は一本を座右に備へ自己の運命を向上發展せられよ。

明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可
六合雜誌第三拾三年第十二號(大正二年十二月一日發行)(每月一回一日發行)

〔本誌〕
定價一冊貳拾錢

●發兌元 東京市橋區中橋小廣路番七三 前川文榮閣 ●